



読書四十年



玉井哲雄





読書四十年



玉井哲雄



目次

2024年

前田愛「都市空間のなかの文学」（ちくま学芸文庫）

鈴木和成「ランボー、砂漠に行く アフリカ書簡の謎」（岩波書店）

ポール・ニザン, 花輪莞爾 訳「アデン・アラビア」（角川文庫）

野矢茂樹「言語哲学がはじまる」（岩波新書）

九段理江「東京都同情塔」（芥川賞）

野矢茂樹「心という難問」（集英社）

Agatha Christie, "The Mysterious Affair at Styles," ("Agatha Christie Ultimate Collectionn" Kindle version)

Arthur Conan Doyle, "A Study in Scarlet" ("The Complete Sherlock Homes" Kindle version)

村上春樹「デヴィッド・ストーン・マーティンの素晴らしい世界」（文藝春秋社）

中野博文「暴力とポピュリズムのアメリカ史」（岩波新書）

Arthur Conan Doyle, "The Sign of Four" ("The Complete Sherlock Homes" Kindle version)

中屋健一 責任編集「世界の歴史 11 新大陸と太平洋」（中央公論社）

柳瀬博一「カワセミ都市トーキョー 「幻の鳥」はなぜ高級住宅街で暮らすのか」（平凡社新書）

柳瀬博一「国道16号線ー「日本」を創った道ー」（新潮文庫 電子版）

野口悠紀雄「どうすれば日本経済は復活できるのか」(SB
新書 電子版)

Chris Miller, "Chip War: The Fight for the World's Most
Critical Technology" (Kindle version)

Walter Isaacson. "Steve Jobs: The Exclusive Biography"
(Kindle version)

Steven Pinker. "Enlightenment Now: The Case for Reason,
Science, Humanism, and Progress" (Kindle version)

Arthur Conan Doyle, "The Adventures of Sherlock Holmes"
("The Complete Sherlock Homes," Kindle version)

渋沢栄一「論語と算盤」(国書刊行会, 電子版)

朝比奈秋「サンショウウオの四十九日」(芥川賞) /

松永K三蔵「バリ山行」(芥川賞) (芥川賞) /

養老孟司, 奥本大三郎「ファールと日本人」(かや書
房)

村上春樹「ノルウェイの森」(講談社文庫 電子版)

野口悠紀雄「アメリカはなぜ日本より豊かなのか？」(幻
冬舎新書 電子版)

Sharon Bertsch McGrayne, "The theory that would not die"
(Yale University Press, Kindle version)

シェイクスピア, 三神勲 訳「リア王」(河出書房 世界文
学全集 1)

池谷裕二「夢を叶えるために脳はある 「私という現象」、
高校生と脳を語り尽くす(講談社)

David Spiegelhalter, "The Art of Statistics: Learning from
Data" (Pelican Books)

2023年

國分功一郎「スピノザ 読む人の肖像」(岩波新書)

田島正樹「スピノザという暗号」(青弓社)

小野善康「成熟社会の経済学 ― 長期不況をどう克服する
か」(岩波新書)

[井戸川射子「この世の喜びよ」\(芥川賞\)](#)
[佐藤厚志「荒野の家族」\(芥川賞\)](#)
[石牟礼道子「食べごしらえ おままごと」\(中公文庫\)](#)
[砂川文次「ブラックボックス」\(芥川賞\)](#)
[中畑正志「アリストテレスの哲学」\(岩波新書\)](#)
[義江彰夫「神仏習合」\(岩波新書\)](#)
[瀧井一博「大久保利通 「知」を結ぶ指導者」\(新潮選書\)](#)
[江戸川乱歩「芋虫」\(Kindle版 江戸川乱歩作品集\)](#)
[井上清「日本の歴史 20 明治維新」\(中央公論社\)](#)
[市川沙央「ハンチバック」\(芥川賞\)](#)
[Carlo Rovelli, "Hegoland: Making Sense of the Quantum Revolution," \(Kindle version\)](#)
[伊澤理江「黒い海」\(講談社\)](#)
[泉鏡花「露宿」\(Kindle版 泉鏡花全集\)](#)
[大岡昇平「レイテ戦記 上・中・下」\(中公文庫\)](#)
[Michio Kaku, "Quantum Supremacy: How the Quantum Computer Revolution Will Change Everything" \(Doubleday, Kindle Version\)](#)
[今井むつみ, 秋田喜美「言語の本質」\(中公新書\)](#)
[泉鏡花「二、三羽一十二、三羽」\(Kindle版 泉鏡花全集\)](#)
[横光利一「微笑」\(Kindle版 横光利一全集\)](#)
[Stephen Wolfram, "What Is ChatGPT Doing ... and Why Does It Work?" \(Kindle version\)>](#)
[泉鏡花「春昼・春昼後刻」\(Kindle版 泉鏡花全集\)](#)
[石牟礼道子「天の魚 一続・苦海浄土」\(講談社文庫 Kindle版\)](#)
[夢野久作「ドグラ・マグラ」\(夢野久作全集 Kindle版\)](#)
[Francis Fukuyama "Liberalism and Its Discontents" \(Kindle version\)](#)

2022年

堀川恵子「暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ」(講談社)

坂口安吾「日本文化私観」

堀川恵子「教誨師」(講談社文庫)

堀川恵子「裁かれた命 ー死刑囚から届いた手紙ー」(講談社文庫)

田中久美子「言語とフラクタル」(東京大学出版会)

呉座勇一「頼朝と義時 武家政権の誕生」(講談社現代新書)

中野剛志「変異する資本主義」(ダイヤモンド社)

笠原十九司「日中戦争全史(上・下)」高文研

斎藤幸平「人新世の「資本論」」集英社新書

三浦雅士「青春の終焉」(講談社学術文庫)

山崎正和「不機嫌の時代」(講談社学術文庫)

小林武彦「生物はなぜ死ぬのか」(講談社現代新書)

Chris Bernhardt, Quantum Computing for Everyone (MIT Press)

堀川恵子「原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年」(文春文庫)

立花隆「死はこわくない」(文藝春秋社)

大江健三郎「自分の木の下で」(朝日新聞社)

Adam Becker, What Is Real?: The Unfinished Quest for the Meaning of Quantum Physics

真木悠介「時間の比較社会学」(岩波書店)

アルマ・マラー, 石井宏 訳「グスタフ・マラー 愛と
苦悩の回想」(中公文庫)

杉浦明平「天下太平に生きる 江戸のはみだし者」

柳田国男「桃太郎の誕生」(「日本の文学 26 柳田国男,
斎藤茂吉, 折口信夫」中央公論社)

高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」(芥川
賞)

真木悠介「気流の鳴る音 交響するコミュン」(ちくま学
芸文庫 Kindle版)

Margaret Millar, "Vanish in an Instant," (Kindle Version)

渡辺靖「アメリカとは何か 自画像と世界観をめぐる相剋」
(岩波新書)

須藤 靖「不自然な宇宙 宇宙はひとつだけなのか?」(ブル
ーボックス Kindle版)

多和田葉子「球形時間」(Kindle版)

Brian Greene, "Until the End of Time: Mind, Matter, and Our
Search for Meaning in an Evolving Universe," (Kindle
version)

源河亨「「美味しい」とは何か」(中公新書)

チャーホフ, 神西清 訳「ヴーニャ伯父さん」(「世界の文
学 27 チャーホフ」)

チャーホフ, 神西清 訳「三人姉妹」(「世界の文学 27 チ
ャーホフ」)

高水裕一「時間は逆戻りするのか 宇宙から量子まで、可能性のすべて」(講談社ブルーバックス Kindle版)

チェーホフ, 神西清 訳「桜の園」(「世界の文学 27 チェーホフ」)

チェーホフ, 神西清 訳「かもめ」(「世界の文学 27 チェーホフ」)

Daniel A. Fleisch, "A Student's Guide to the Schrödinger Equation" (Kindle Version)

黒川清「考えよ, 問いかけよ ― 「出る杭人材」が日本を変える」(毎日新聞出版)

2021年

江戸川乱歩「陰獣」(Kindle版 江戸川乱歩作品集)

マルセル・プルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第七篇 見出された時 I,II」(集英社文庫)

藤野裕子「民衆暴力―揆・暴動・虐殺の日本近代」(中公新書)

渡辺照宏「仏教 第二版」(岩波新書, Kindle版)

江戸川乱歩「パノラマ島綺譚」(Kindle版 江戸川乱歩作品集)

渡辺照宏「日本の仏教」(岩波新書)

芥川龍之介「糸女覚え書」(芥川龍之介全集 Kindle版)

アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記 (第10巻上・下)」(集英社)

David A.Sinclair, "Lifespan Why We Age - and Why We Don't Have To"

Paul Nurse, "What Is Life?: Understand Biology In Five Steps"

トーマス・マン, 川村二郎 訳「ブッデンブローグ家の
人々」(河出書房新社「世界文学全集」第47巻)

山本七平「近代の創造 ―渋谷栄一の思想と行動―」(PHP
研究所)

大栗博司「重力とは何か ―アインシュタインから超弦理論
へ, 宇宙の謎に迫る―」(幻冬舎新書)

Don Norman, "The design of everyday things: Revised and
expanded edition," Basic Books (Kindle version), 2013.

石沢麻依「貝に続く場所にて」(芥川賞)

李琴峰「彼岸花の咲く島」(芥川賞)

Delia Owens, "Where the Crawdads Sing" (Kindle version)

J. D. Salinger, "The Catcher in the Rye" (Kindle版)

中村隆英「明治大正史 上・下」(東京大学出版会)

小泉武夫「酒の話」(講談社現代新書)

堀川恵子「永山則夫 封印された鑑定記録」(講談社文庫)

2020年

Anthony Horowitz, Magpie Murders (Kindle Version)

ジュール・ヴェルヌ, 波多野完治 訳「十五少年漂流記」
(新潮文庫)

[芥川龍之介「アグニの神，上海游記，長江游記，桃太郎」
\(芥川龍之介全集 Kindle版\)](#)

[Anthony Horowitz, "The Sentence is Death" \(Kindle Version\)](#)
[マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて
第三篇 ゲルマントの方 I,II」 \(集英社文庫\)](#)

[Anthony Horowitz, "The Word is Murder" \(Kindle Version\)](#)

[Steven Pinker, "Enlightenment Now: The Case for Reason,
Science, Humanism, and Progress" \(Kindle Version\)](#)

[アンリ・ファールブル，奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫
記 \(第6巻上・下\) 」 \(集英社\)](#)

[折口信夫「死者の書」「山越し阿弥陀像の画因」 \(Kindle
版 折口信夫全集\)](#)

[Brian Kernighan, "Understanding the Digital World: What
You Need to Know about Computers, the Internet, Privacy,
and Security"](#)

[ジョン・ネイスン，前沢浩子 訳「ニッポン放浪記ージョ
ン・ネイスン回想録」 \(岩波書店\)](#)

[アンリ・ファールブル，奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫
記 \(第7巻上・下\) 」 \(集英社\)](#)

[森田真生「数学する身体」 \(新潮社\)](#)

[大野透「律令国家と隋唐文明」 \(岩波新書\)](#)

[Mark Twain, "The Adventures of Huckleberry Finn" \(Kindle
version\)](#)

[岡潔「春宵十話」 \(光文社文庫, Kindle版\)](#)

[芥川龍之介「秋」「東洋の春」「尾生の信」\(芥川龍之介全集 Kindle版\)](#)

[芥川龍之介「芭蕉雜記」「続芭蕉雜記」「文芸的なあまりに文芸的な」「続文芸的なあまりに文芸的な」「西方の人」「続西方の人」\(芥川龍之介全集 Kindle版\)](#)

[マルセル・ブルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第四篇 ソドムとゴモラ I,II」\(集英社文庫\)](#)

[高山羽根子「首里の馬」\(芥川賞\)](#)

[遠野遥「破局」\(芥川賞\)](#)

[太宰治「右大臣実朝」\(太宰治大全 Kindle版\)](#)

[アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記 \(第8巻上・下\)」\(集英社\)](#)

[マルセル・ブルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第五篇 囚われの女 I,II」\(集英社文庫\)](#)

[Walter Isaacson, "Leonardo Da Vinci" \(Kindle Version\)](#)

[サガン, 朝吹登水子 訳「悲しみよ こんにちは」\(新潮文庫\)](#)

[柏木弘雄「勝鬘経をよむ\(上・下\)」\(NHK「宗教の時間」テキスト\)](#)

[マルセル・ブルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第六篇 逃げ去る女」\(集英社文庫\)](#)

[渡辺照宏「お経の話」\(岩波新書\)](#)

[アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記 \(第9巻上・下\)」\(集英社\)](#)

2019年

呉座勇一「応仁の乱」(中公新書)

小川剛生「兼好法師 徒然草に記されなかった真実」(中公新書)

Yuval Noah Harari, "Sapiens: A Brief History of Humankind" (Kindle版)

Henry James, "Daisy Miller," (Greatest Short Works of Henry James, Barnes & Noble Books, New York)

上田岳弘「ニムロッド」(芥川賞)

増本康平「老いと記憶 加齢で得るもの, 失うもの」(中公新書)

Yuval Noah Harari, "Homo Deus: A Brief History of Tomorrow" (Kindle版)

「町屋良平「1R (いちらうんど) 1分34秒」(芥川賞)

三浦篤「エドゥアール・マネ 西洋絵画史の革命」(角川選書)

ドナルド・キーン, 角地幸男 訳「正岡子規」(新潮社)

Yuval Noah Harari, "21 Lessons for the 21st Century"

亀井哲治郎, ほか編「笹の舟 美酒を求めて四十年」(笹舟会)

河野裕昭「写真集 大吟醸」(「写真集 大吟醸」を出版する会)

アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記 (第4巻上・下)」(集英社)

マルセル・ブルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて
第一篇スワン家の方へ I,II」 (集英社文庫)

折口信夫「大嘗祭の本義」 (Kindle版 折口信夫全集)

鹿島茂「馬車が買いたい!ー19世紀パリ・イマジネール」 白
水社

アンリ・ファール, 奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫
記 (第5巻上・下)」 (集英社)

吉村昭「生麦事件」(新潮社)

マルセル・ブルースト, 鈴木道彦訳「失われた時を求めて
第二篇 花咲く乙女たちのかげに I,II」 (集英社文庫)

小熊英二「日本社会のしくみ 雇用・教育・福祉の歴史社会
学」 (講談社新書)

小川洋子「博士の愛した数式」(新潮文庫) Kindle版

Jared Diamond, "Upheaval: Turning Points for Nations in
Crisis" (Kindle版)

2018年

金井美恵子「カストロの尻」 (新潮社)

深井晃子「きものとジャポニズム 西洋の眼が見た日本の美
意識」 (平凡社)

王銘琬「棋士とAIーアルファ碁から始まった未来」 (岩
波新書)

アンリ・ファール, 奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫
記 (第1巻下)」 (集英社)

Nathaniel Popper, "Digital Gold - Bitcoin and the inside story of the misfits and millionaires trying to reinvent money"

司馬遼太郎「街道をゆく（22, 23）南蛮のみち（I,II）」
（朝日文庫）

吉田類「酒は人の上に人を造らず」（中公新書）

佐藤正午「鳩の撃退法（上・下）」（小学館文庫）

佐藤正午「月の満ち欠け」（岩波書店）

アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記（第2巻上・下）」（集英社）

先崎彰容「未完の西郷隆盛：日本人はなぜ論じ続けるのか」
（新潮選書）

星野博美「みんな彗星を見ていた 私的キリシタン探訪記」
（文芸春秋社）

樋口満「体力の正体は筋肉」（集英社新書）

若桑みどり「クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国（上・下）」（集英社文庫）

アンリ・ファールブル, 奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記（第3巻上・下）」（集英社）

山下範久「教養としてのワインの世界史」（ちくま文庫）

谷脇康彦「サイバーセキュリティ」（岩波新書）

渡辺正峰「脳の意識 機械の意識 - 脳神経科学の挑戦」（中公新書）

熊野純彦「マルクス資本論の哲学」（岩波新書）

渡辺京二「バテレンの世紀」（新潮社）

2017年

立花隆「武満徹・音楽創造への旅」(文芸春秋)

山下澄人「しんせかい」(芥川賞)

Steven Pinker, "The Better Angels of Our Nature," Viking Books

伊庭斉志「進化計算と深層学習」(オーム社)

浅島誠「生物の「安定」と「不安定」ー生命のダイナミクスを探る」(NHKブックス)

竹内郁雄「プログラミング道への招待」(丸善出版)

小笠原啓「東芝 粉飾の原点ー内部告発が暴いた闇」(日経BP社)

橋玲「言ってはいけない 残酷すぎる真実」(新潮新書)

吉川 洋「人口と日本経済 - 長寿、イノベーション、経済成長」(中公新書)

青柳いづみこ「ショパン・コンクールー最高峰の舞台を読み解く」(中公新書)

遠藤乾「欧州複合危機ー苦悶するEU,揺れる世界」(中公新書)

本川達雄「ウニはすごい バッタもすごいーデザインの生物学」(中公新書)

朝井まかて「眩(くらら)」(新潮社)

鶴見良行「ナマコの眼」(ちくま学芸文庫)

朝井まかて「落陽」(祥伝社)

山本一成「人工知能はどのようにして「名人」を超えたのか?」（ダイヤモンド社）

アンリ・ファールブル、奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記（第1巻上）」（集英社）

蒼田亜紀子「土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙」（山川出版社）

長谷川郁夫「吉田健一」（新潮社）

高階秀爾「近代絵画史（上・下）」（中公新書）

蒼田亜紀子「土偶のリアル―発見・発掘から蒐集・国宝誕生まで」（山川出版社）

谷口義明「宇宙を読む」（中公新書）

吉田健一「ヨオロッパの世紀末」（筑摩叢書）

吉田健一「旅の時間」（講談社学芸文庫）

2016年

谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」（日本の文学「谷崎潤一郎（三）」（中央公論社）

横光利一「春は馬車に乗って」日本の文学「横光利一」中央公論社）

横光利一「機械」（日本の文学「横光利一」中央公論社）

谷崎潤一郎「卅」（日本の文学「谷崎潤一郎(三)」（中央公論社）

木谷有希子「異類婚姻譚」（芥川賞）

泉鏡花「高野聖」（Kindle版「泉鏡花全集」）

滝口悠生「死んでいない者」（芥川賞）

谷崎潤一郎「武州公秘話」（日本の文学「谷崎潤一郎（三）」中央公論社）

坂口安吾「因碁修行」（Kindle版 坂口安吾全集）

江戸川乱歩「二銭銅貨」「黒蜥蜴」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

福沢諭吉「学問のすすめ」（Kindle版 福沢諭吉作品集）

蜷川真夫「ネットの炎上力」（文春新書）

田中辰雄・山口真一「ネット炎上の研究」（勁草書房）

ドナルド・キーン, 角地幸男 訳「石川啄木」（新潮社）

筧捷彦 編著「目指せ！プログラミング世界一：大学対抗プログラミングコンテスト ICPCへの挑戦」（近代科学社）

井上ひさし「泣き虫なまいき石川啄木」（Shincho Online Books, 新潮社）

石川啄木「一握の砂」（Kindle版 石川啄木全集）

甘利俊一「脳・心・人工知能」（講談社ブルーバックス）

石川啄木「悲しき玩具」（Kindle版 石川啄木全集）

江戸川乱歩「D坂の殺人事件」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

村川沙耶香「コンビニ人間」（芥川賞）

紫式部, 与謝野晶子 訳「全訳 源氏物語」（Kindle版）

大野晋, 丸谷才一「光る源氏の物語（上・下）」（中央公論社）

池谷裕二 監修「脳と心のしくみ」（新星出版社）

池谷裕二「単純な脳，複雑な「私」」（講談社ブルーバックス）

池谷裕二「進化しすぎた脳」（講談社ブルーバックス）

池谷裕二「脳はなにかと言いつける」（新潮文庫）

2015年

Howard Goodall, "The Story of Music," Chatto & Windus
2013

村井純，砂原秀樹，ヴィントン・グレイ・サーフ，「角川
インターネット講座（1）インターネットの基礎 情報革命
を支えるインフラストラクチャー」（KADOKAWA）

加藤典洋「アメリカの影」講談社文芸文庫

小野正嗣「九年前の祈り」（芥川賞）

伊藤正男「脳の不思議」（岩波科学ライブラリー）

吉川浩満「理不尽な進化—遺伝子と運のあいだ」（朝日出
版社）

長尾真 監修「角川インターネット講座（3）デジタル時代の
知識創造 変容する著作権」（KADOKAWA）

Jeff Sutherland, "SCRUM — The Art of Doing Twice the
Work in Half the Time," Crown Business

東山彰良「流（りゅう）」（講談社）

又吉直樹「火花」（芥川賞）

柳田国男「酒の飲みようの変遷」（Kindle版 柳田国男大全
集）

小熊英二「生きて帰ってきた男ーある日本兵の戦争と戦後」(岩波新書)

羽田圭介「スクラップ・アンド・ビルド」(芥川賞)

有島武郎「生まれいずる悩み」(Kindle版 有島武郎全集)

P. F. ドラッカー, 上田惇生+佐々木実智男+林正+田代正美 訳「すでに起こった未来」(ダイヤモンド社)

太田和夫, 黒澤馨, 渡辺治「情報セキュリティの科学 マジック・プロトコルへの招待」(講談社ブルーバックス)

Thomas Piketty, "Capital in the Twenty-First Century," translated by Arthur Goldhammer, The Belknap Press of Harvard University

佐々木健一「タイトルの魔力 作品・人名・商品のなまえ学」(中公新書)

橋本治「性のタブーのない日本」(集英社新書)

高階秀爾「日本人にとって美しさとは何か」(筑摩書房)

谷崎潤一郎「鍵」(日本の文学「谷崎潤一郎(三)」(中央公論社)

2014年

湯浅学「ボブ・ディラン ロックの精霊」(岩波新書)

岸田孝一「ソフトウェア・グラフィティ」(中央公論事業出版)

原武史「レッドアローとスターハウスーもうひとつの戦後思想史」(新潮社)

小山田浩子「穴」(芥川賞)

黒田夏子「abさんご」(2013年上期芥川賞)

赤坂真理「東京プリズン」(河出書房新社)

谷島宣之「ソフトを他人に作らせる日本, 自分で作る米国
ー「経営と技術」から見た近代化の諸問題」(日経BP社)

Matthew Goodman, "Eighty Days: Nellie Bly and Elizabeth
Bisland's History Making Race Around the World"

ロバート・ホワイティング, 松井みどり 訳「東京アンダー
ワールド」(角川書店)

徳田秋声「徴」

水町雅子「Q & A 番号法」(有斐閣)

和田誠, 村上春樹「ポートレート・イン・ジャズ」(新潮
文庫)

岡田暁生, フィリップ・ストレンジ「すごいジャズには理
由(わけ)があるー音楽学者とジャズ・ピアニストの対
話」(アルテスパブリッシング)

半田滋「日本は戦争をするのかー集団的自衛権と自衛
隊」(岩波新書)

赤澤威「ネアンデルタール・ミッション 発掘から復活へ
フィールドからの挑戦」(岩波書店)

柴崎友香「春の庭」(芥川賞)

中山康樹「ロックの歴史」(講談社現代新書)

加藤陽子「それでも, 日本人は「戦争」を選んだ」(朝日
出版社)

白井聡「永続敗戦論 戦後日本の核心」(太田出版)

Tom M. Mitchell, "Machine Learning," McGraw-Hill

渡辺佑基「ペンギンが教えてくれた物理のはなし」(河出
ブックス)

加藤典洋「敗戦後論」(ちくま文庫)

Robert Louis Stevenson, "Treasure Island"

村上春樹 編・訳「セロニアス・モンクのいた風景」(新潮
社)

木畑洋一「二〇世紀の歴史」(岩波新書)

谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のおんな」(新潮文庫)

福井健策「誰が「知」を独占するのか - デジタルアーカ
イブ戦争」(集英社新書)

2013年

アーサー・I・ミラー, 阪本芳久 訳「ブラックホールを見
つけた男」(草思社)

丸山真男「『文明論之概略』を読む(上・中・下)」(岩
波新書)

ピーター・バラカン「ラジオのこちら側で」(岩波新書)

丸山真男「日本の思想」(岩波新書)

Steve Hamilton, "The Lock Artist"

孫崎亨「日本の国境問題－尖閣・竹島・北方領土」(ちく
ま新書)

Thomas Levenson, "Newton and the Counterfeiter"

大島堅一「原発のコスト－エネルギー変換への視点」(岩
波新書)

池田清「海軍と日本」(中公新書)

長谷部恭男「憲法とは何か」(岩波新書)

斎藤兆史「教養の力 東大駒場で学ぶこと」(集英社新書)

海部美知「ビッグデータの覇者たち」(講談社現代新書)

西内啓「統計学が最強の学問である」(ダイヤモンド社)

藤野可織「爪と目」(芥川賞)

マーク・ピーターセン「実践 日本人の英語」(岩波新書)

James Gleick, "The Information: A History, A Theory, A Flood"

George Dyson, "Turing's Cathedral"

渋谷陽一, 松村雄策「渋谷対談(赤盤)」(ロッキング・オン)

渋谷陽一, 松村雄策「渋谷対談(青盤)」(ロッキング・オン)

藤森照信, 山口晃「日本建築集中講義」(淡交社)

Jared Diamond, "The World Until Yesterday: What Can We Learn from Traditional Societies?"

2012年

青柳いづみこ「グレン・グールド 未来のピアニスト」(筑摩書房)

宮沢賢治, 谷川徹三 編「童話集 風の又三郎 他十八篇」(岩波文庫)

瀬山士郎「はじめての現代数学」(早川書房)

立石泰則「さよなら!僕らのソニー」(文春新書)

田中慎弥「共食い」(芥川賞, 文芸春秋2月号)

円城塔「道化師の蝶」(芥川賞, 文芸春秋2月号)

蓮實重彦「映画論講義」(東京大学出版会)

安西祐一郎「心と脳 - 認知科学入門」(岩波新書)

坂村健「不完全な時代 - 科学と感情の間で」(角川Oneテーマ21)

Steven Pinker, "How the Mind Works"

朝日新聞特別報道部「プロメテウスの罠ー明かされなかった福島原発事故の真実」(学研)

松本哉「寺田寅彦は忘れた頃にやって来る」(集英社新書)

朝日新聞特別報道部「プロメテウスの罠2ー検証！ 福島原発事故の真実」(学研)

サイモン・シン, 青木薫 訳, 「フェルマーの最終定理」(新潮社)

ピーター・バラカン「ぼくが愛するロック名盤240」(講談社+アルファ文庫)

大栗博司「重力とは何か アインシュタインから超弦理論へ, 宇宙の謎に迫る」(幻冬舎新書)

Richard North Patterson, "Eyes of a Child"

高野明彦, 吉見俊哉, 三浦伸也「311情報学 - メディアは何をどう伝えたか」(岩波書店)

江藤淳「南洲残影」(文芸春秋)

福井健策「著作権の世紀」(集英社新書)

福井健策「著作権とは何か」(集英社新書)

福井健策「ネットの自由vs.著作権」(光文社新書)

増田俊也「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」
(新潮社)

野崎昭弘「離散数学「数え上げ理論」」(講談社ブルーバックス)

関川夏央「二葉亭四迷の明治四十一年」(文春文庫)

宇賀克也, 長谷部恭男 編「情報法」(有斐閣)

福沢諭吉「文明論之概略」(岩波文庫)

2011年

Oliver Sacks, "Musicophilia: Tales of Music and the Brain"

柳田国男「海上の道」(岩波文庫)

朝吹真理子「きことわ」(芥川賞)

西村賢太「苦役列車」(芥川賞)

田中久美子「記号と再帰 - 記号論の形式・プログラムの必然」(東京大学出版会)

黒岩比佐子「パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い」(講談社)

藤岡靖洋「コルトレーン ジャズの殉教者」(岩波新書)

佐木隆三「小説大逆事件」(文芸春秋社)

渡辺浩「日本政治思想史[十七～十九世紀]」(東京大学出版会)

柳田国男「不幸なる芸術・笑いの本願」(岩波文庫)

鬼頭宏一「文明としての江戸システム」（講談社「日本の歴史19」）

野本響子「いいね！フェイスブック」（朝日新書）

高木貞治「近世数学史談」（岩波文庫）

渡辺京二「黒船前夜 ロシア・アイヌ・日本の三国志」 洋泉社

齋藤希史「漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界」（NHKブックス）

大和田尚孝「システムはなぜダウンするのか 知っておきたいシステム障害，信頼性の基礎知識」（日経BP社）

芳賀徹「平賀源内」（朝日選書）

水村美苗「日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で」 筑摩書房

西沢和彦「税と社会保障の抜本改革」（日本経済新聞社）

バタイユ，中条章平 訳「マダム・エドワルダ，目玉の話」（光文社古典新訳文庫）

グリニス・リドリー，矢野真千子 訳「サイのクララの大旅行 幻獣18世紀ヨーロッパを行く」（東洋書林）

Graham Greene, "Brighton Rock," Vintage Classics

芳賀徹「渡辺崋山 優しい旅びと」（朝日選書）

津村節子「紅梅」（文芸春秋）

黒田日出男「江戸図屏風の謎を解く」（角川選書）

朽木ゆり子「ハウス・オブ・ヤマナカ」（新潮社）

日比野秀男 解説「渡辺崋山」（新潮日本美術文庫 20）

宮沢賢治，谷川徹三 編「童話集 銀河鉄道の夜 他十四篇」
（岩波文庫）

佐藤道信「＜日本美術＞ 誕生 近代日本の「ことば」と戦
略」（講談社選書メチエ）

菊地成孔，大谷能生「M/D マイルス・デューイ・デイヴィ
スIII世研究（上・下）」（河出文庫）

菊地成孔，大谷能生「東京大学のアルバート・アイラー 東
大ジャズ講義録・歴史編」（文春文庫）

菊地成孔，大谷能生「東京大学のアルバート・アイラー 東
大ジャズ講義録・キーワード編」（文春文庫）

2010年

村上春樹「意味がなければスウィングはない」（文春文
庫）

三島由紀夫「小説家の休暇」（新潮文庫）

シドニー・デッカー，芳賀繁 監訳「ヒューマンエラーは裁
けるか 安全で公正な文化を築くには」（東京大学出版会）

泉鏡花「草迷宮」（岩波文庫）

大貫隆「聖書の読み方」（岩波新書）

今野浩「すべて僕に任せてください 東工大モーレッツ天才助
教授の悲劇」（新潮社）

Jhumpa Lahiri, “Unaccustomed Earth”

ダーウィン，渡辺正隆 訳「種の起源（上下）」（光文社古
典新訳文庫）

Kazuo Ishiguro, “When We Were Orphans”

蓮實重彦「映像の詩学」（ちくま学芸文庫）

外岡英俊「情報のさばき方 新聞記者の実戦ヒント」朝日新書

石田英敬「自分と未来のつくり方ー情報産業社会を生きる」（岩波ジュニア新書）

John le Carre, “The Constant Gardener”

古田亮「俵谷宗達 琳派の祖の真実」（平凡社新書）

トーマス・マン, 高橋義孝 訳「魔の山 I,II」（新潮社版 世界文学全集 29）

奥泉光「シューマンの指」（講談社）

野間秀樹「ハングルの誕生 音から文字を創る」（平凡社新書）

中沢新一「カイエ・ソバージュⅤ 対称性人類学」（講談社選書メチエ）

レヴィ・ストロース, 川田順造 訳「悲しき熱帯」（中央公論社「世界の名著71」）

柳田国男「遠野物語」（岩波文庫）

狩野博幸, 河鍋楠美「反骨の画家河鍋暁斎」（新潮社 とんぼの本）

徳田雄洋「デジタル社会はなぜ生きにくい」（岩波新書）

竹内 啓「偶然とは何かーその積極的意味」（岩波新書）

村山斉「宇宙は何でできているのかー素粒子物理学で解く宇宙の謎」（幻冬舎新書）

大室幹雄「ふくろうと蝸牛－柳田国男の響きあう風景」
（筑摩書房）

2009年

淀川長治，蓮實重彦，山田宏一「映画千夜一夜（上・下）」（中公文庫）

堤未果「ルポ 貧困大国アメリカ」（岩波新書）

蓮實重彦，山田宏一「傷だらけの映画史」（中公文庫）

吉田健一「金沢・酒宴」（講談社文芸文庫）

寺澤盾「英語の歴史－過去から未来への物語」（中公新書）

末延芳晴「森鷗外と日清・日露戦争」（平凡社）

隈研吾「自然な建築」（岩波新書）

湯浅誠「反貧困－「すべり台社会」からの脱出」（岩波新書）

西田宗千佳「クラウド・コンピューティング ウェブ2.0の先にくるもの」（朝日新書）

レイモン・ラディゲ，新庄嘉章 訳「肉体の悪魔」（新潮社「世界文学全集44」）

橋本治「小林秀雄の恵み」（新潮社）

ゲーデル著，林晋，八杉満利子 訳・解説「不完全性定理」（岩波文庫）

Malcolm Gladwell, "Blink," Penguin Books

浜矩子「グローバル恐慌－金融暴走時代の果てに」（岩波新書）

ラシーヌ, 内藤濯 訳「アンドロマク」(岩波文庫)

星野英一「民法のすすめ」(岩波新書)

夏目漱石「道草」(岩波漱石全集 10)

碧海純一「法と社会―新しい法学入門」(中公新書)

田中修「都会の花と木 四季を彩る植物のはなし」(中公新書)

並木誠土「絵画の変―日本美術の絢爛たる開花」(中公新書)

Steven Pinker, “Words and Rules: The ingredients of language”

夏目漱石「明暗」(岩波漱石全集 11)

Steven Pinker, “The Stuff of Thought”

今尾哲也「歌舞伎の歴史」(岩波新書)

岡田暁生「音楽の聴き方―聴く型と趣味を語る言葉」(中公新書)

宮本常一「塩の道」(講談社学術文庫)

水村美苗「続 明暗」(ちくま文庫)

ベディエ編, 佐藤輝夫 訳「トリスタン・イゾー物語」(岩波文庫)

小熊英二「1968」(新曜社)

辰巳浜子「料理歳時記」(中公文庫)

2008年

平川祐弘「和魂洋才の系譜 内と外からの明治日本(上・下)」(平凡社ライブラリー)

柄谷行人「倫理21」（平凡社ライブラリー）

梨村源次郎「優雅な大人のための欧州浪漫紀行」（幻冬舎
ルネッサンス）

柄谷行人「隠喩としての建築」（講談社学術文庫）

「日本の文学3 森鷗外（二）」（中央公論社）

太田浩一「哲学者たり，理学者たり 物理学者のいた街」
（東京大学出版会）

石川淳「おとしばなし集」（集英社文庫）

カント，中山元 訳「永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3
編」（光文社古典新訳文庫）

中沢新一「カイエ・ソバージュIV 神の発明」（講談社選書
メチエ）

大平雅巳「西洋陶磁入門」（岩波新書）

岡崎裕史「ウチのシステムはなぜ使えない SEとユーザの失
敗学」（光文社新書）

川上未映子「乳と卵」（芥川賞）

磯辺勝「江戸俳画紀行 蕪村の花見，一茶の正月」（中公新
書）

隈研吾「負ける建築」（岩波書店）

ジョナサン・ハー，田中靖 訳「消えたカラヴァッジョ」
（岩波書店）

畑村洋太郎「失敗学のすすめ」（講談社文庫）

石川淳「新釈雨月物語 新釈春雨物語」（ちくま文庫）

キース・デブリン, 山下篤子 訳「数学する遺伝子」(早川書房)

Christopher Benfey, "The Great Wave: Gilded age misfits, Japanese eccentrics and the opening of old Japan," Random House.

宮下規久朗「刺青とヌードの美術史 江戸から近代へ」(NHKブックス)

大岡信「詩人・菅原道真 うつしの美学」(岩波現代文庫)

ヒュー・ジョンソン, 小林章夫 訳「ワイン物語 (上・中・下)」(平凡社ライブラリー)

辻惟雄「岩佐又兵衛 浮世絵をつくった男の謎」(文春新書)

夏目漱石「行人」(岩波漱石全集第8巻)

潮木守一「フンボルト理念の終焉? 現代大学の新次元」東信堂

Joe R. Lansdale, "The Bottoms"

辻静雄「ワインの本」(新潮文庫)

夏目漱石「心」(岩波漱石全集第9巻)

M. マクルーハン, E. カーペンター編著, 大前正臣, 後藤和彦 訳, 「マクルーハン理論 電子メディアの可能性」(平凡社ライブラリー)

Peter L. Bernstein, "Against the Gods: The remarkable story of risk," (John Wiley & Sons)

玉井虎雄「餓える地球：人口爆発と食糧危機」（日経新書）

太田浩一「ほかほかのパン」（東京大学出版会）

エドウィン・フィッシャー，佐野利勝 訳「音楽を愛する友へ」（新潮文庫）

Benoit Mandelbrot & Richard L. Hudson, "The (Mis) Behavior of Markets: A fractal view of risk, ruin & reward," (Basic Books)

磯田光一「思想としての東京 近代文学史論ノート」（国文社）

2007年

大室幹雄「囲碁の民話学」（岩波現代文庫）

黒田草臣「名匠と名品の陶芸史」（講談社選書メチエ）

森まゆみ「円朝ざんまい」（平凡社）

池内了「物理学と神」（集英社新書）

青山七恵「ひとり日和」（芥川賞）

森まゆみ「鷗外の坂」（新潮文庫）

内田樹「寝ながら学べる構造主義」（文春新書）

Jhumpa Lahiri, "The Namesake"

小林信彦「名人，志ん生，そして志ん朝」（文春文庫）

ロラン・バルト，宗左近 訳「表徴の帝国」（ちくま学芸文庫）

加藤徹「貝と羊の中国人」（新潮新書）

半藤一利「日本海軍の興亡 戦いに生きた男たちのドラマ」
(PHP文庫)

石川淳「森鷗外」(ちくま学芸文庫)

長谷川眞理子「生き物をめぐる4つの『なぜ』」(集英社
新書)

野崎明弘「不完全性定理 数学的体系のあゆみ」(ちくま学
芸文庫)

伊藤宗行「「数」の日本史」(日経ビジネス文庫)

奥本大三郎「虫の宇宙誌」(集英社文庫)

福岡伸一「生物と無生物のあいだ」(講談社現代新書)

奥本大三郎「博物学の巨人アンリ・ファール」(集英社
新書)

坂村健「ユビキタスとは何かー情報・技術・人間」(岩波
新書)

Douglas Hofstadter, "I am a Strange Loop," Basic Books

諏訪哲史「アサッテの人」(芥川賞)

中島岳志「パール判事ー東京裁判批判と絶対平和主義」
(白水社)

福岡伸一「プリオン説はほんとうか？ タンパク質病原体説
をめぐるミステリー」(講談社ブルーバックス)

「日本の文学2 森鷗外(一)」(中央公論社)

中島岳志「中村屋のボースーインド独立運動と近代日本の
アジア主義」(白水社)

Robert Goddard, "Out of the Sun"

堀田善衛「インドで考えたこと」(岩波新書)

椎名誠「インドでわしも考えた」(集英社文庫)

中島岳志「インドの時代 豊かさと苦悩の幕開け」(新潮社)

九鬼周造「「いき」の構造」(岩波文庫)

中沢新一「カイエ・ソバージュIII 愛と経済のロゴス」(講談社選書メチエ)

2006年

立花隆「天皇と東大(上・下)」(文芸春秋)

岡田暁生「西洋音楽史－「クラシック」の黄昏」(中公新書)

岡田暁生「オペラの運命－十九世紀を魅了した「一夜の夢」」(中公新書)

中島義道「ウィーン愛憎 ヨーロッパ精神との格闘」(中公新書)

梅田望夫「ウェブ進化論－本当の大変化はこれから始まる」(ちくま新書)

辻惟雄「日本美術の歴史」(東大出版)

渡辺京二「逝きし世の面影」(平凡社ライブラリー)

Paul Hudak, "The Haskell School of Expression: Learning Functional Programming Through Multimedia"

ライブニッツ, 清水富雄, 他訳「モナドロジー, 形而上学叙説」(中公クラシックス)

Brian Greene, "The Fabric of the Cosmos: Space, time and the texture

内井惣七「空間の謎・時間の謎－宇宙の始まりに迫る物理学と哲学」（中公新書）

佐野眞一「阿片王 満州の夜と霧」（新潮社）

吉田司「王道楽土の戦争（戦前・戦中篇）（戦後60年篇）」（NHKブックス）

今泉みね「名ごりの夢－蘭医桂川家に生まれて」（東洋文庫）

三島由紀夫「暁の寺」（新潮文庫）

三島由紀夫「天人五衰」（新潮文庫）

Duncan J. Watts, "Six Degrees: The science of a connected age," Norton

Jared Diamond, "Collapse: How Societies Choose to Fall or Succeed," Viking

アレクセーエフ, 長谷川四郎 訳, 「デルスウ・ウザーラ－沿海州探検旅行」（東洋文庫）Succeed,"

鹿島茂, 井上章一「ぼくたち, Hを勉強しています」（朝日文庫）

種村季弘「江戸東京<<奇想>>徘徊記」（朝日文庫）

2005年

Craig Holden, "Four Corners of Night"

鈴木博之「都市のかなしみ－建築百年のかたち」（中央公論新社）

中山典之「昭和囲碁風雲録（上・下）」（岩波書店）

Dan Brown, “The Da Vinci Code”

中村桂子「ゲノムが語る生命—新しい知の創出」（集英社新書）

中沢新一「僕の叔父さん網野善彦」（集英社新書）

野村進「救急精神病棟」（講談社）

V.S.ラマチャンドラン, サンドラ・ブレイクスリー, 山下篤子訳「脳のなかの幽霊」（角川書店）

中沢新一「人類最古の哲学」（講談社選書メチエ）

デヴィッド・スノウドン, 藤井留美訳「100歳の美しい脳」（DHC）

中沢新一「熊から王へ」（講談社選書メチエ）

岡野宏文, 豊崎由美「百年の誤読」（ぴあ）

Brian Greene, “The Elegant Universe”

田中優子「樋口一葉「いやだ」と云ふ」（集英社新書）

ドナルド・キーン, 足立康 訳「果てしなく美しい日本」（講談社学術文庫）

辻惟雄「奇想の系譜」（ちくま学芸文庫）

辻惟雄「奇想の図譜」（ちくま学芸文庫）

Truman Capote, “The Grass Harp”

岡田温司「マグダラのマリア—エロスとアガペーの聖女」（中公新書）

中村文則「土の中の子供」（芥川賞）

若桑みどり「マニエリスム芸術論」（ちくま学芸文庫）

佐藤卓己「八月十五日の神話 ―終戦記念日のメディア学」
（ちくま新書）

青柳いずみこ「ピアニストが見たピアニスト」（白水社）

遠藤秀紀「パンダの死体はよみがえる」（ちくま新書）

Doug Lee, "Concurrent Programming in Java, 2nd Edition,"
Addison-Wesley

ミシェル・ウェルベック, 野崎歓 訳「素粒子」（筑摩書
房）

小熊英二「<民主>と<愛国>」（新曜社）

石毛直道, 森枝卓士「考える胃袋―食文化探検紀行」（集
英社新書）

三島由紀夫「春の雪」（新潮文庫）

三島由紀夫「奔馬」（新潮文庫）

佐藤卓己「キングの時代―国民大衆雑誌の公共性」（岩波
書店）

2004年

Edward Rutherfurd, "London the Novel"

陣内秀信「ヴェネツィア 水上の迷宮都市」（講談社現代新
書）

小松英雄「徒然草拔書」（講談社学術文庫）

田崎真也「飲んで識るイタリアワイン」（柴田書店）

西川治「イタリア半島「食」の彷徨」（小学館文庫）

金原ひとみ「蛇にピアス」

綿矢りさ「蹴りたい背中」（芥川賞）

Ian McEwan, "Amsterdam"

大貫隆「イエスという経験」(岩波書店)

須賀敦子「トリエステの坂道」(白水社)

三浦篤「まなざしのレッスン」(東京大学出版会)

村上春樹「ダンス・ダンス・ダンス」(講談社文庫)

岡本薫「著作権の考え方」(岩波新書)

Richard Fortey, "Life, a natural history of the first four billion years of life on earth"

丸山茂徳, 磯崎行雄「生命と地球の歴史」(岩波新書)

榊原悟「江戸の絵を愉しむー視覚のトリックー」(岩波新書)

桐野夏生「OUT」(講談社文庫)

山本洋三「栄光学園物語」(鎌倉春秋社)

渡辺正雄「文化としての近代科学 歴史的・学際的視点から」(講談社学術文庫)

Steven Pinker, "The Blank Slate"

夏目漱石「彼岸過迄」(岩波漱石全集)

藤田真一「蕪村」(岩波新書)

Matt Ridley, "nature via nurture"

司馬遼太郎「街道をゆく34 大徳寺散歩 中津・宇佐のみち」(朝日文庫)

多木浩二「ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読」(岩波現代文庫)

小山清男「遠近法ー絵画の奥行きを読む」(朝日選書)

鐸木能光「デジカメ写真は撮ったまま使うな！」（岩波アクティブ新書）

潮木守一「世界の大学危機」（中公新書）

森本哲郎「詩人与謝蕪村の世界」（講談社学術文庫）

佐藤卓己「言論統制」（中公新書）

中井浩一「徹底検証大学法人化」（中公新書ラクレ）

中井久夫「治療文化論 精神医学的再構築の試み」（岩波現代文庫）

2003年

清水徹「書物について その形而下学と形而上学」（岩波書店）

柴田俊隆「カラスの早起き、スズメの寝坊 文化鳥類学のおもしろさ」（新潮選書）

茂木健一郎「心を生み出す脳のシステム 「私」というミステリー」（NHK出版）

徳大寺有恒「一台のクルマがあれば人生を変えるのに充分だ」（平凡社）

岸俊光「ペリーの白旗」（毎日新聞社）

Jared Diamond, "The Third Chimpanzee: The Evolution and Future of the Human Animal"

松井茂記「インターネットの憲法学」（岩波書店）

黒崎政男「デジタルを哲学する 時代のテンポに翻弄される<私>」（PHP文庫）

ツヴェタン・トドロフ「日常礼賛」（白水社）

ツヴェタン・トドロフ「個の礼賛」（白水社）
萩原朔太郎「郷愁の詩人 与謝蕪村」（岩波文庫）
宮本武蔵「五輪書」（岩波文庫）
Steven Levy, “Hackers”
砂原秀樹, 他「ネットワークアプリケーション」（岩波書店）
坪内祐三「新書百冊」（新潮新書）
竹内洋「教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化」
（中公新書）
丸谷才一「輝く日の宮」（講談社）
吉村萬壺「ハリガネムシ」（芥川賞）
森まゆみ「「即興詩人」のイタリア」（講談社）
藤原正彦「遥かなるケンブリッジ - 数学者のイギリス」
（新潮文庫）
須賀敦子「ミラノ霧の風景」（白水ブックス）
黒岩徹「イギリス式生活術」（岩波新書）
角山栄「シンデレラの時計」（平凡社ライブラリー）
今野浩「金融工学への挑戦」（中公新書）
Roger Lowenstein, “When genius failed”
和辻哲郎「イタリア古寺巡礼」（岩波文庫）
南川高志「海のかなたのローマ帝国」（岩波書店）
高階秀爾「フィレンツェ」（中公新書）

2002年

高島俊男「本が好き，悪口言うのはもっと好き」（大和書房）

尾藤正英「日本文化の歴史」（岩波新書）

John Grisham, "The Rainmaker"

吉本隆明「読書の方法」（光文社）

長嶋有「猛スピードで母は」（芥川賞）

長谷川真理子「オスとメス = 性の不思議」（講談社現代新書）

田中優子「江戸百夢」（朝日新聞社）

山形孝夫「死者と生者のラスト・サパー」（朝日新聞社）

Matt Ridley, "The Origins of Virtue," Penguin Books

田中長徳「デジカメだからできるビジネス写真入門」（岩波アクティブ新書）

司馬遼太郎「街道をゆく35 オランダ紀行」（朝日文芸文庫）

小林英樹「ゴッホの遺言」（情報センター出版局）

小林頼子「フェルメールの世界」（NHKブックス）

倉部誠「物語オランダ人」（文春新書）

朽木ゆり子「盗まれたフェルメール」（新潮選書）

Matt Ridley, "Genome: The Autobiography of a Species in 23 Chapters," Perennial

若桑みどり「絵画を読む イコノロジー入門」（NHKブックス）

Tracy Chevalier, "Girl with a Pearl Earring," Plume

森内俊雄「真名仮名の記」(講談社)

村上春樹, 柴田元幸「翻訳夜話」(文春新書)

今野浩「特許ビジネスはどこへ行くのか IT社会の落とし穴」(岩波書店)

小林忠「江戸浮世絵を読む」(ちくま新書)

中井浩一「「勝ち組」大学ランキング どうなる東大一人勝ち」(中公新書ラクレ)

読売新聞社大阪本社編「潰れる大学, 潰れない大学」(中公新書ラクレ)

Steven Levy, "Cripto," Penguin Books

斎藤美奈子「文章読本さん江」(筑摩書房)

速水融「歴史人口学で見た日本」(文春新書)

吉田修「パークライフ」(芥川賞)

Jane Jacobs, "The Nature of Economics," Vintage Books

伊佐千尋「邯鄲の夢」(文芸春秋)

日経コンピュータ編「システム障害はなぜ起きたか みずほの教訓」(日経BP出版センター)

川本三郎「本のちょっとした話」(新書館)

Dave Pelz, "Dave Pelz's Short Game Bible," Broadway

矢野直明「情報編集の技術」(岩波アクティブ新書)

Frederick P. Brooks, Jr., "Mythical Man-Months," Addison-Wesley

アラン・ライトマン, 浅倉久志 訳「アインシュタインの夢」(ハヤカワepi文庫)

森口繁一「数理つれづれ」(岩波書店)

中山康樹「超ブルーノート入門 - ジャズの究極・1500番
台のすすめ」(集英

河合祥一郎「ハムレットは太っていた」(白水社)

Dennis Lehane, "Darkness, take my hand," Harper Torch

白石隆「海の帝国」(中公新書)

Dennis Lehane, "Mystic River," Harper Torch

酒井邦嘉「言語の脳科学」(中公新書)

坂村健「ユビキタス・コンピュータ革命 - 次世代社会の
世界標準」(角川Oneテーマ21)

2001年

猪瀬直樹「ピカレスク 太宰治伝」(小学館)

坪内祐三「文庫本を狙え！」(晶文社)

宮沢篤, 武田政樹, 柳原孝安「コンピュータゲームのテク
ノロジー」(岩波書店)

里見真三「賢者の食欲」(文芸春秋)

Jared Diamond, "Guns, Germs, and Steel: the Fates of
Human Societies"

堀江敏幸「熊の敷石」(芥川賞)

青来有一「聖水」(芥川賞)

Jhumpa Lahiri, "Interpreter of Maladies"

獅子文六「食味歳時記」(中公文庫)

池田清彦「構造主義科学論の冒険」(講談社学術文庫)

岩波書店編集部編「座談の愉しみ（上・下）」（岩波書店）

荒俣宏「大東亞科學綺譚」（ちくま文庫）

佐藤信夫「わざとらしさのレトリック－言述のすがた」（講談社学術文庫）

網野善彦「歴史を考えるヒント」（新潮社）

Raymond Floyd, “The Elements of Scoring”

山室恭子「歴史小説の懐」（朝日新聞社）

網野善彦「異形の王権」（平凡社ライブラリー）

長尾真「「わかる」とは何か」（岩波新書）

Anne Tyler, “Breathing Lessons”

立花隆「僕が読んだ面白い本、ダメな本 そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術」（文芸春秋）

谷崎潤一郎「幼少時代」（岩波文庫）

三好万季「四人はなぜ死んだのか」（文春文庫）

森本哲郎「ウィーン」（文春文庫）

A. C. グレーリング, 岩坂彰 訳「ウィトゲンシュタイン」（講談社選書メチエ）

ジョン・ダワー「敗北を抱きしめて（上・下）」（岩波書店）

Richard North Patterson, “Degree of Guilt”

夏目漱石「門」（岩波漱石全集6）

ドナルド・キーン「能・文楽・歌舞伎」（講談社学術文庫）

川上弘美「センセイの鞆」(平凡社)

藤森照信「天下無双の建築学入門」(ちくま新書)

杉本秀太郎「花ごよみ」(講談社学術文庫)

越智貢, 土屋俊, 水谷雅彦 編「情報倫理学」(ナカニシヤ出版)

田崎真也「本格焼酎を愉しむ」(光文社新書)

渡部直己「不敬文学論序説」(太田出版)

北村龍行「「借金棒引き」の経済学 - 現代の徳政令」(集英社新書)

堀江敏幸「おばらばん」(青土社)

仲畑貴志「この骨董がアナタです。」(講談社)

安岡章太郎「歴史への感情旅行」(新潮文庫)

Apostolos Doxiadis, "Uncle Petros and Goldbach's Conjecture"

長沼行太郎「思考のための文章読本」(ちくま新書)

平松剛「光の教会 安藤忠雄の現場」(建築資料研究社)

宮本常一「民俗学の旅」(講談社学術文庫)

2000年

出口裕弘「辰野隆 日仏の円形広場」(新潮社)

浅野, 大森, 川口, 山内編「東京大学は変わる 教養教育のチャレンジ」(東京大学出版)

J.K. ローリング「ハリー・ポッターと賢者の石」(静山社)

角山栄「茶の世界史」(中公新書)

丸山眞男「忠誠と反逆」(ちくま学芸文庫)

玄月「蔭の棲みか」(芥川賞)

藤野千夜「夏の約束」(芥川賞)

野口悠紀雄「「超」知的生産とパソコン」(アスキー)

見田宗介「現代社会の理論 - 情報化・消費化社会の現在
と未来-」(岩波新書)

佐藤信夫「レトリック感覚」(講談社学術文庫)

坪内祐三「靖国」(新潮社)

佐藤信夫「レトリック認識」(講談社学術文庫)

清水義範「おもしろくても理科」(講談社文庫)

俵浩三「牧野植物図鑑の謎」(平凡社新書)

野矢茂樹「論理学」(東京大学出版会)

山田孝雄「櫻史」(講談社学術文庫)

清水義範「もっとおもしろくても理科」(講談社文庫)

司馬遼太郎「愛蘭土紀行I,II」(朝日文芸文庫)

鈴木良平「アイルランド問題とは何か」(丸善ライブラリ
ー)

小柳公代「パスカルの隠し絵」(中公新書)

柳瀬尚紀「ジェイムス・ジョイスの謎を解く」(岩波新
書)

John Grisham, "The Testament"

瀬戸賢一「メタファー思考」(講談社現代新書)

夏目漱石「坑夫」(漱石全集 岩波書店)

森博達「日本書紀の謎を解く」(中公新書)

町田康「きれぎれ」（芥川賞）

松浦寿輝「花腐し」（芥川賞）

加島祥造「タオー老子」（筑摩書房）

Peter Pettinger, “Bill Evans: How my heart sings”

Bob Brier, “The Murder of Tutankamen,” Berkley

山藤章二「似顔絵」（岩波新書）

佐藤信夫「レトリックの意味論」（講談社学術文庫）

スティーヴン・ピンカー「言語を生み出す本能」（NHKブックス）

夏目漱石「虞美人草」（漱石全集 岩波書店）

丸谷才一「闊歩する漱石」（講談社）

稲垣足穂「A感覚とV感覚」（中央公論社「日本の文学34」）

Patricia Cornwell, “The Body Farm”

サイモン・シン, 青木薫 訳, 「フェルマーの最終定理」（新潮社）

Kent Beck, “eXtreme Programming eXplained”

Thomas Harris, “Hannibal”

鶴ヶ谷真一「書を読んで羊を失う」（白水社）

天童荒太「永遠の仔（上・下）」（幻冬社）

山村修「気晴らしの発見」（大和書房）

夏目漱石「それから」（漱石全集 岩波書店）

佐藤文隆「物理学の世紀」（集英社新書）

Susan Blackmore, “The Meme Machine,” Oxford

1999年

G.ガルシア・マルケス, 鼓直 訳, 「百年の孤独」 (新潮社)

芥川龍之介「蜜柑」「杜子春」 (中央公論「日本の文学29」)

林望「イギリスはおいしい」 (文春文庫)

林望「イギリスは愉快だ」 (文春文庫)

ノーマン・マクレイ, 渡辺正, 芦田みどり 訳「フォン・ノイマンの生涯」 (朝日選書)

林望「ホルムヘットの謎」 (文春文庫)

小泉堅吉郎「英語のなかの複数と冠詞」 (ジャパントイムズ)

中野雄「丸山眞男 音楽の対話」 (文春新書)

平野啓一郎「日蝕」 (芥川賞)

大野晋「日本語練習帳」 (岩波新書)

野矢茂樹「無限論の教室」 (講談社現代新書)

田崎真也「ワイン生活」 (新潮選書)

ウィリアム・パウンドストーン, 松浦俊輔 訳「囚人のジレンマ フォン・ノイマンのゲームの理論」 (青土社)

大貫隆「グノーシスの神話」 (岩波書店)

司馬遼太郎「街道をゆく24 近江散歩, 奈良散歩」 (朝日文芸文庫)

猪瀬直樹「続日本国の研究」 (文芸春秋)

Mitch Albom, "tuesdays with Morrie," Doubleday

マーク・ピーターセン「心にとどく英語」(岩波新書)
オリバー・サックス, 高見・金沢 訳, 「妻を帽子とまちがえた男」(晶文社)
佐々木良一「インターネットセキュリティ入門」(岩波新書)
野村進「アジア 新しい物語」(文芸春秋)
司馬遼太郎「燃えよ剣」(ポケット文春)
下條信輔「<意識>とは何だろうか」(講談社現代新書)
栗原康「共生の生態学」(岩波新書)
子母澤寛「新撰組始末記」(中公文庫)
宮部みゆき「本所深川ふしぎ草子」(新潮文庫)
佐藤良明「J-POP進化論」(平凡社新書)
夏目漱石「野分」(岩波漱石全集3)
エドウィン・ライシャワー, 田村完誓 訳, 「円仁唐代中国への旅『入唐求法巡礼記』の研究」(講談社学術文庫)
酒見賢一「語り手の事情」(文芸春秋)
瀬戸川猛資「夢の研究」(創元ライブラリ)
宮部みゆき「火車」(新潮文庫)
阿久悠「愛すべき名歌たち - 私的歌謡曲史 - 」(岩波新書)
瀬戸川猛資「夜明けの睡魔」(創元ライブラリ)
G. K. チェスタトン, 橋本福夫 訳「ブラウン神父の純智」(新潮文庫)
丹羽敏雄「数学は世界を解明できるか」(中公新書)

司馬遼太郎「街道をゆく（15） 北海道の諸道」（朝日文芸文庫）

Reginald Hill, "A Pinch of Snuff"

池波正太郎「散歩のとき何か食べたくなって」（新潮文庫）

鹿島茂「パリの王様たち ユゴー・デュマ・バルザック, 三大文豪大物くらべ」（文春文庫）

Stephen King, "The Green Mile," Plume

夏目漱石「三四郎」（岩波漱石全集5）

小泉八雲著, 平川祐弘編「明治日本の面影」（講談社学術文庫）

山田風太郎「八犬伝」（朝日文庫）

高橋克彦「写楽殺人事件」（講談社文庫）

角山栄「時計の社会史」（中公新書）

矢野誠一「三遊亭圓朝の明治」（文春新書）

佐藤信夫「レトリックの記号論」（講談社学術文庫）

1998年

加地伸行「儒教とは何か」（中公新書）

渡辺保「黙阿弥の明治維新」（新潮社）

多田富雄「生命の意味論」（新潮社）

恒吉僚子「人間形成の日米比較」（中公新書）

渡辺裕「音楽機械劇場」（新書館）

横地清「数学の文化史 敦煌から斑鳩へ」（森北出版）

渡辺洋三「法とは何か 新版」（岩波新書）

中島秀人「ロバート・フック ニュートンに消された男」
(朝日選書)

Kazuo Ishiguro, "The Remains of the Day"

張競「中華料理の文化史」(ちくま新書)

Stephen Jay Gould, "Questioning the Millennium"

最相葉月「絶対音感」(小学館)

Richard P.Gabriel, "Patterns of Software - Tales from the
Software Community"

小林康夫, 船曳建夫 編「新・知の技法」(東京大学出版
会)

タイモン・スクリーチ, 高山宏 訳, 「春画」(講談社選書
メチエ)

久野靖「UNIXによる計算機科学入門」(丸善)

John Grisham, "The Runaway Jury"

渡辺照宏「不動明王」(朝日選書)

猪瀬直樹「マガジン青春譜」(小学館)

北杜夫「茂吉晩年」(岩波書店)

藤沢周「ブエノスアイレスの午前零時」(芥川賞)

花村萬月「ゲルマニウムの夜」(芥川賞)

村井純「インターネットII」(岩波新書)

Truman Capote, "In Cold Blood"

魯迅「呐喊序」「孔乙己」「故郷」「祝福」「酒楼にて」
「藤野先生」

椎名誠「活字博物誌」(岩波新書)

丸山真男「加藤周一「翻訳と日本の近代」(岩波新書)

吉田直哉「脳内イメージと映像」(文春文庫)

佐野真一「渋沢家三代」(文春文庫)

長田弘「記憶のつくり方」(晶文社)

山内昌之「イスラームと国際政治―歴史から読む」(岩波新書)

1997年

稲垣真美「ワインの常識」(岩波新書)

宮本常一「忘れられた日本人」(岩波文庫)

高階秀爾「日本美術を見る眼 東と西の出会い」(岩波同時代ライブラリー)

山内昌之「近代イスラームの挑戦(世界の歴史20)」(中央公論社)

吉永良正「『複雑系』とは何か」(講談社現代新書)

佐野真一「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」(文芸春秋)

山川健一「マッキントッシュ・ハイ」(幻冬舎)

佐々木力「科学論入門」(岩波新書)

渡辺武信「住まい方の実践」(中公新書)

猪瀬直樹「日本国の研究」(文芸春秋社)

マックス・ヴェーバー, 脇圭平 訳「職業としての政治」(岩波文庫)

柳美里「家族シネマ」

辻仁成「海峡の光」(芥川賞)

中上健次「千年の愉楽」(河出文庫)

市川伸一「考えることの科学 推論の認知心理学への招待」
(中公新書)

藤沢周平「蝉しぐれ」(文春文庫)

Robert Parker, "Paper Doll"

Thomas Gilovich, "How we know what isn't so," The Free Press

野村進「コリアン世界の旅」(講談社)

佐伯胖「新・コンピュータと教育」(岩波新書)

礪波護, 武田幸男「世界の歴史6 隋唐帝国と古代朝鮮」
(中央公論社)

松岡譲「敦煌物語」(講談社学術文庫)

東山健吾「敦煌三大石窟」(講談社選書メチエ)

東山, 松本, 野町「敦煌ものがたり」(とんぼの本)

山之内靖「マックス・ヴェーバー入門」(岩波新書)

加地伸行「現代中国学」(中公新書)

小林康夫, 船曳建夫 編「知の技法」(東京大学出版会)

湯川秀樹「物理講義」(講談社学術文庫)

司馬遼太郎「街道をゆく25 中国・閩(びん)みち」(朝日
文芸文庫)

野崎昭弘「逆説論理学」(中公新書)

野崎昭弘「詭弁論理学」(中公新書)

高橋哲雄「ミステリーの社会学」(中公新書)

立花隆「脳を究めるー脳研究最前線」(朝日新聞社)

小林康夫, 船曳建夫 編「知の論理」(東京大学出版)

小林康夫, 船曳建夫 編「知のモラル」 (東京大学出版)

藤沢周平「玄鳥」 (文春文庫)

伊原弘, 梅村坦, 「世界の歴史7 宋と中央ユーラシア」
(中央公論社)

松尾剛次「中世都市鎌倉を歩く」 (中公新書)

1996年

瀬名秀明「パラサイト・イヴ」 (角川書店)

大江健三郎「「救い主」が殴られるまで」 (新潮社)

武田雅哉「蒼頡たちの宴」 (筑摩書房)

小浜逸郎「オウムと全共闘」 (草思社)

バートランド・ラッセル, 平野智治 訳, 「数理哲学序説」
(岩波文庫)

中山信弘「マルチメディアと著作権」 (岩波新書)

又吉栄善「豚の報い」 (芥川賞)

Dick Francis, "Decider"

池内 紀「ぼくのドイツ文学講義」 (岩波新書)

淮陰生「完本 一月一話 読書こぼればなし」 (岩波書店)

武田雅哉「猪八戒の大冒険」 (三省堂)

丸谷才一, 井上ひさし 責任監修「短編小説傑作選 戦後50
年の作家たち」 (文芸春秋)

John Grisham, "The Chamber"

藤原伊織「テロリストのパラソル」 (講談社)

丸谷才一, 山崎正和「二十世紀を読む」 (中央公論社)

司馬遼太郎「街道をゆく42 三浦半島記」 (朝日新聞社)

北杜夫「茂吉彷徨」(岩波書店)

立花隆「インターネット探検」(講談社)

近藤誠「患者よ、がんと闘うな」(文芸春秋)

カルヴァン・ウォルフレン, 篠原勝 訳「人間を幸福にしない日本というシステム」(毎日新聞社)

野口悠紀雄「「超」勉強法」(講談社)

佐々淳行「連合赤軍「あさま山荘」事件」(文芸春秋)

司馬遼太郎「街道をゆく20 中国・蜀と雲南のみち」(朝日文庫)

司馬遼太郎「街道をゆく19 中国・江南のみち」(朝日文庫)

川上弘美「蛇を踏む」(芥川賞)

杉山正明「クビライの挑戦 モンゴル海上帝国への道」(朝日選書)

武田雅哉「桃源郷の機械学」(作品社)

名和小太郎「サイバースペースの著作権」(中公新書)

塩野七生「ローマ人の物語I」(新潮社)

高階秀爾「日本近代美術史論」(講談社学術文庫)

江崎誠致「呉清源」(新潮社)

司馬遼太郎「街道をゆく37 本郷界限」(朝日文庫)

司馬遼太郎「街道をゆく36 本所深川散歩・神田界限」(朝日文庫)

樺山紘一「世界の歴史16 ルネッサンスと地中海」(中央公論社)

佐藤俊樹「ノイマンの夢・近代の欲望―情報化社会を解体する」（講談社選書メチエ）

下條信輔「サブリミナル・マインド 潜在的人間観のゆくえ」（中公新書）

マックス・ウェーバー, 尾高邦雄 訳「職業としての学問」
（岩波文庫）

渡辺保「歌舞伎 過剰な記号の森」（ちくま学芸文庫）

1995年

武田泰淳「司馬遷 史記の世界」（文芸春秋）

多田富雄「免疫の意味論」（青土社）

吉川幸次郎, 三好達治「新唐詩選」（岩波新書）

吉川幸次郎, 桑原武夫「新唐詩選続篇」（岩波新書）

吉田直哉「癌細胞はこう語った 秘伝・吉田富三」（文春文庫）

野口武彦「忠臣蔵 赤穂事件・史実の肉声」（ちくま新書）

平川祐弘「小泉八雲 西洋脱出の夢」（講談社学術文庫）

Bob Greene, "Hang Time"

川合慧「コンピューティング科学」（東大出版会）

Nick Bantock, "Griffin & Sabine," Chronicle Books

Daniel Keyes, "Flowers for Algernon"

杉原厚吉「理科系のための英作文法」（中公新書）

石川九楊「書とはどういう芸術か 筆触の美学」（中公新書）

ダレル・ハフ, 高木秀玄 訳「統計でウソをつく法」 (講談社ブルーバックス)

J.L.ボルヘス, 鼓直 訳「伝奇集」 (岩波文庫)

亀井俊介「サーカスが来た！」 (東京大学出版会)

山形孝夫「聖書の起源」 (講談社現代新書)

Winston Groom, "Forrest Gump," Pocket Books

井上章一「狂気と王権」 (紀伊國屋書店)

Patricia HighSmith, "The Talented Mr. Ripley"

幸田文「父・こんなこと」 (新潮文庫)

ジャン・ジャック・ルソオ, 青柳瑞穂 訳「孤独な散歩者の夢想」 (大日本雄弁会講談社)

Nick Bantock, "Sabine's Notebook," Chronicle Books

Nick Bantock, "The Golden Mean," Chronicle Books

高辻知義「ワーグナー」 (岩波新書)

G. K. Chesterton, "The Scandal of Father Brown"

ヨースタイン・ゴルデル, 池田香代子 訳「ソフィーの世界」 (NHK出版)

木下恂「ソフトウェアの法則 コンピュータの利用技術とは」 (中公新書)

猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」 (文芸春秋)

村井純「インターネット」 (岩波新書)

柳田邦男「犠牲 サクリファイス」 (文芸春秋)

今野浩「カーマーカー特許とソフトウェア」 (中公新書)

立花隆「ぼくはこんな本を読んできた」 (文芸春秋)

エドワード W. サイド, 大橋洋一 訳「知識人とは何か」
(平凡社)

1994年

荒俣宏「大博物学時代」

司馬遼太郎「八人との対話」(文芸春秋)

森本哲郎「生き方の研究」(新潮選書)

野口悠紀雄「「超」整理法」(中公新書)

木村泉「フープロ作文術」(岩波新書)

森本哲郎「続生き方の研究」(新潮選書)

立花隆「マザーネイチャーズ・トーク」(新潮社)

芦原義信「東京の美学―混沌と秩序」(岩波新書)

奥泉光「石の来歴」(芥川賞)

田中琢, 佐原真「考古学の散歩道」

B.ラッセル, 市井三郎 訳「西洋哲学史1」(みすず書房)

出口保夫「ロンドン塔 光と影の九百年」(中公新書)

Gregory McDonald, "Fletch"

Ed McBain, "Sadie when she died"

John Grisham, "The Client"

吉田満「戦艦大和ノ最期」

養老孟司「脳の見方」

真木悠介「自我の起源」

小林峻一, 加藤昭「闇の男 野坂参三その百年」(文芸春秋
社)

金子史朗「ポンペイの滅んだ日」(原書房)

堀田善衛「ミシェル 城館の人 III 精神の祝祭」

Ruth Rundell, "A Judgement in Stone"

秋山裕一「日本酒」

高村薫「リヴィエラを撃て」

立花隆「生，死，神秘体験」（書籍情報社）

田中克彦「言語学とは何か」

M. Spivey, "Z Notation"

西垣通「マルチメディア」（岩波新書）

F.T.A. ホフマン, 石丸静雄 訳「ホフマン物語」

小泉武夫「酒肴奇譚 語部釀児乃酒肴譚」

堺屋太一「満足化社会の方程式」

萩谷昌巳「ソフトウェア科学のための論理学」

佐和隆光「平成不況の政治経済学—成熟化社会の条件」

大岡昇平「幼年」

夏目漱石「漾虚集」

武市正人「プログラミング言語」（岩波ソフトウェア科学講座）

笙野頼子「タイムスリップ・コンビナート」（芥川賞）

室井光弘「おどるでく」（芥川賞）

Patricia Highsmith, "The Tremor of Forgery"

辺見庸「もの食う人びと」（共同通信社）

夏目漱石「草枕」（岩波漱石全集）

Agatha Christie, "Sleeping Murder"

青山圭秀「アガスティアの葉」

夏目漱石「二百十日」（岩波漱石全集）

ドナルド・キーン, 土屋政雄 訳「日本文学の歴史1」（中央公論社）

林健太郎「昭和史と私」

John D. MacDonald, "The Green Ripper"

立花隆「臨死体験（上・下）」

I. Hayes ed., "Specification Case Studies, 2nd Edition"

森本哲郎「中国幻視行」

中村隆英「昭和史I, II」

吉川幸次郎「人間詩話」

1993年

黒田玲子「生命世界の非対称ー自然はなぜアンバランスが好きか」（中公新書）

小泉武夫「日本酒ルネッサンスー民族の酒の浪漫を求めて」（中公新書）

山室恭子「黄金太閤 夢を演じた天下びと」（中公新書）

名和小太郎「技術標準対知的所有権ー技術開発と市場競争を支えるもの」

荒俣宏「目玉と脳の冒険」（ちくま文庫）

養老孟司「唯脳論」（青土社）

丸谷才一「女ざかり」（文芸春秋社）

宮崎義一「複合不況」（中公新書）

多和田葉子「犬婿入り」（芥川賞）

野口悠紀雄「バブルの経済学」（日経新聞社）

高橋三雄「パソコンソフト入門」(岩波新書)

立花隆・利根川進「精神と物質」(文芸春秋社)

レックス・スタウト, 佐倉潤吾 訳「腰ぬけ連盟」(ハヤカ
ワ文庫)

養老孟司「からだの見方」(ちくま文庫)

フレドリック・ブラウン, 青田勝 訳「シカゴ・ブルース」
(創元推理文庫)

池田清彦「分類という思想」(新潮選書)

佐々淳行「東大落城」(文芸春秋社)

並木美喜雄「量子力学入門ー現代科学のミステリー」(岩
波新書)

木田元「ハイデガーの思想」(岩波新書)

H. R. F. キーティング, 長野きよみ 訳「海外ミステリ名作
100選」(早川書房)

荒俣宏「パラノイア創造史」(ちくま文庫)

清水義範「江勢物語」(角川文庫)

清水義範「アキレスと亀」(角川文庫)

荒俣宏「図像探偵」(光文社文庫)

G. スタイナー, 生松敬三 訳「ハイデガー」(岩波同時代
ライブラリー)

Michael Crichton, "Jurassic Park"

Ed Yourdon, "Decline & Fall of the American Programmer"

Robert James Waller, "The Bridges of Madison County"

猪瀬直樹「黒船の世紀」

林京子「道/やすらかに今はねむり給え」（講談社文芸文庫）

塚本哲也「エリザベート パプスブルグ家最後の皇女」（文芸春秋社）

Wordsworth, "Introduction to Z"

筒井康隆「本の森の狩人」（岩波新書）

M. Mitchell Waldrop, "Complexity - The emerging science at the edge of and chaos"

大場みな子「二百年」（講談社）

Amanda Cross, "Death in a Tenured Position"

Robert X. Cringele, "Accidental Empires"

スティーヴン・J.グールド, 渡辺政隆 訳「ワンダフルライフ」（早川書房）

佐野真一「遠い「山びこ」」（文芸春秋社）

立石泰則「覇者の誤算（上・下）」（日本経済新聞社）

北杜夫「青年茂吉」「赤光」「あらたま」時代」（岩波書店）

小塩節「トーマス・マンとドイツの時代」（中公新書）

北杜夫「壮年茂吉」（岩波書店）

メリメ, 杉捷夫「カルメン」（岩波文庫）

大庭みな子「津田梅子」（朝日文庫）

Stephen Hawking, "Black Holes and Baby Universe and Other Essays"

藤森照信「日本の近代建築（上）（下）」（岩波新書）

藤森照信「建築探偵の冒険」(筑摩書房)

藤森照信「建築探偵日記」(王国社)

中川信弘「ソフトウェアの保護(新版)」(有斐閣)

柳父章「翻訳語成立事情」(岩波新書)

吉田政幸「分類からの出発ープラトンからコンピュータへ」(中公新書)

藤森照信「建築探偵神出鬼没」(朝日新聞社)

John Grisham, "The Pelican Brief"

Bertrand Meyer, "Object-Oriented Software Construction,"
Prentice Hall International Series in Computer Science.

司馬遼太郎「「明治」という国家」(日本放送出版協会)

John Grisham, "The Firm"

木村陽二郎「ナチュラリストの系譜ー近代生物学の成立史」(中公新書)

1992年

中尾佐助「花と木の文化史」(岩波新書)

石川淳「新釈古事記」(ちくま文庫)

西郷信綱「古事記の世界」(岩波新書)

Robert van Gulik, "Poets and Murder"

松村栄子「至高聖所」(芥川賞)

コリン・ウィルソン, 中村保男 訳「アウトサイダー」(集英社文庫)

Robert van Gulik, "Murder at the lake"

C.A.R. Hoare, "Communicating Sequential Processes"
(Prentice-Hall International Series in Computer Science)

安藤博「日米情報摩擦」(岩波新書)

中村紘子「ピアニストという蛮族がいる」(文芸春秋社)

菊池誠「日本の半導体四〇年」(中公新書)

藤田恒夫「腸は考える」(岩波新書)

ロバート・ファン・フォーリック, 松平いを子 訳「中国鉄釘殺人」(三省堂)

足田輝一「樹の文化誌」(朝日選書)

中野好夫「世界史の十二の出来事」(ちくま文庫)

丸谷才一「鳥の歌」(福武文庫)

立花隆「アメリカ性革命報告」(文春文庫)

藤川隆男「オーストラリア 歴史の旅」(朝日選書)

中野美代子「孫悟空の誕生 サルの民話学と「西遊記」」
(福武文庫)

立花隆「サル学の現在」(平凡社)

日本ペンクラブ編, 越智道雄 選「オーストラリア読本」
(福武文庫)

「朝日ジャーナル最終号」

村上春樹「ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック」
(中公文庫)

ドナルド・キーン, 中矢義一 訳「音楽の出会いとよろこび」(中公文庫)

Stephen J. Gould, "The Mismeasure of Man"

Robin Milner, "Communication and Control"

須賀敦子「コルシア書店の仲間たち」(文芸春秋社)

田中直毅「最後の十年 日本経済の構想」(日本経済新聞社)

Philip K. Dick, "The Man in the High Castle"

堀田善衛「ミシェル 城館の人(2) 自然・理性・運命」(集英社)

ロバート・A・ハインライン, 福島正実 訳「夏への扉」

コリン・ウィルソン, 中村保男 訳「右脳の冒険」(平河出版社)

中上健次「枯木灘」(河出書房新社)

黒川利明「ソフトウェアの話」(岩波新書)

Steven Levy, "Artificial Life - the quest for a new creation"

Elmore Leonard, "Maximum Bob"

丸谷オー, 山崎正和「見わたせば柳さくら」(中央公論社)

D.エリボン, 田村俣 訳「ミシェル・フーコー伝」(新潮社)

本川達雄「ゾウの時間ネズミの時間」(中公新書)

伊藤喜良「日本の歴史8 南北朝の動乱」(集英社)

吉本隆明「書物の解体学」(中公文庫)

金子郁容「ボランティア もうひとつの情報社会」(岩波新書)

小原二郎「日本人と木の文化 インテリアの源流」(朝日選書)

1991年

P.D.James, "A Taste for Death"

大江健三郎「人生の親戚」(新潮社)

小川洋子「妊娠カレンダー」(芥川賞)

堀田善衛「ミシェル城館の人」(集英社)

D.Knuth, 有沢誠 訳「クヌース先生のドキュメント纂法」
(共立出版)

大岡昇平「堺港攘夷始末」(中央公論社)

森鷗外「堺事件」

フレッド・ウェー・ショクスキ, 青木栄一 訳「日米半導体
戦争 チップウォー」(経済界)

Elmore Leonard, "La Brava"

David Halberstam, "The Next Century"

中尾佐助「分類の発想 思考のルールを作る」(朝日選書)

コリン・ウィルソン, 中村保男 訳「フランケンシュタイン
の城」(平河出版社)

宮脇壇「それでも建てたい家」

Colin Wilson, "The Misfits - A study of sexual outsiders -"

宮脇壇「住まいとほどよくつきあう」

佐々木高明「日本の歴史1 日本史誕生」(集英社)

上前淳一郎「複合大噴火」(文芸春秋)

田中優子「近世アジア漂流」(朝日新聞社)

石田晴久「コンピュータ・ネットワーク」(岩波新書)

丸谷才一「樹影譚」(文春文庫)

田中琢「日本の歴史2 倭人争乱」(集英社)

John Le Carre, "The Russia House"

Bjarne Stroustrup, "C++"

S.フィッツジェラルド, 村上春樹 訳「マイ・ロスト・シティ」(中公文庫)

D.ワインバーグ, 木村泉 訳「コンサルタントの秘密ー技術
アドバイスの人間学」(共立出版)

辺見庸「自動起床装置」(芥川賞)

萩野アンナ「背負い水」(芥川賞)

天野彰「居住のソフトウェア」(講談社現代新書)

Tom DeMarco and Timothy Lister, "Peopleware"

藤沢秀行「勝負と芸 - わが囲碁の道」(岩波新書)

クリフォード・ストール, 池央耿 訳「カッコウはコンピュ
ータに卵を産む」(草思社)

西垣通「デジタル・ナルシス」(岩波書店)

上田篤「日本人とすまい」(岩波新書)

Lewis Carrol, annotated by Martin Gardner, "Alice's
Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass"

磯山雅「J.S.バッハ」(講談社現代新書)

吉村武彦「日本の歴史3 古代王権の展開」(集英社)

1990年

柳田邦男「「死の医学」への序章」

原奈 「私が殺した少女」 (早川書房)

M. Gardner, "Mathematical Carnival"

大岡玲「表層生活」 (芥川賞)

瀧澤美恵子「ネコババのいる町で」 (芥川賞)

平川祐弘「西洋の衝撃と日本」 (講談社学術文庫)

V.E.フランクフル「夜と霧」 (みすず書房)

筒井康隆「文学部唯野教授」 (岩波書店)

ウンベルト・エーコ, 河島英昭 訳「薔薇の名前」 (東京創元社)

辺見じゅん「収容所からきた遺書」 (文芸春秋)

立花隆「同時代を撃つPart3」 (講談社)

西垣通「秘術としてのAI思考」 (ちくまライブラリー)

佐伯胖「コンピュータと教育」 (岩波新書)

Elmore Leonard, "Bandits"

石川好「カリフォルニア・ストーリー」 (中公新書)

石川好「ストロベリー・ボーイ」 (文芸春秋)

清水義範「グローイング・ダウン」 (講談社文庫)

ドナルド・キーン「日本の作家」 (中公文庫)

猪瀬直樹「ふるさとを創った男」 (日本放送出版協会)

辻原登「村の名前」 (芥川賞)

深田祐介「新西洋事情」 (新潮文庫)

ブイグ, 野谷文昭 訳「蜘蛛女のキス」 (集英社)

P. D. James, "Cover Her Face"

吉村昭「冷たい夏, 熱い夏」 (新潮文庫)

Elmore Leonard, "Killshot"

竹内靖雄「経済倫理学のすすめ」(中公新書)

丸谷才一「横しぐれ」(講談社文芸文庫)

筒井康隆「短篇小説講義」(岩波新書)

マーク・ピーターセン「続・日本人の英語」(岩波新書)

大野・丸谷・大岡・井上「日本語相談2」(朝日新聞社)

大野・丸谷・大岡・井上「日本語相談3」(朝日新聞社)

中上健次「讃歌」(文芸春秋)

エド・レジス, 大貫昌子 訳「アインシュタインの部屋
(上・下)」(工作舎)

猪瀬直樹「欲望のメディア」(小学館)

森毅「数学の歴史」(講談社文庫)

Ruth Rendell, "A Demon in my View"

1989年

猪瀬直樹「土地の神話」(小学館)

ラッセル・スパー, 左近允尚敏 訳「戦艦大和の運命—英国
人ジャーナリストの見た日本海軍」(新潮社)

吉村昭「戦艦武蔵」(新潮文庫)

Dick Francis, "The Danger"

Dick Francis, "Break In"

南木佳士「ダイヤモンド・ダスト」(芥川賞)

李良枝「由熙」(芥川賞)

吉村昭「零式戦闘機」(新潮文庫)

立花隆「脳死再論」(中央公論社)

柳田邦男「零式戦闘機」(文春文庫)

高階秀爾「ルネッサンスの光と闇ー芸術と精神風土」(中公文庫)

吉川弘之, 立花隆「ロボットが街を歩く日」(三田出版会)

中村紘子「チャイコフスキー・コンクール ピアニストが聴く現代」(中央公論社)

立花隆「同時代を撃つ Part2」(講談社)

ダンテ, 谷口江里也 訳「神曲(抄)」(JICC)

Robert Parker, "Crimson Joy"

石川好「ストロベリー・ロード(上・下)」(早川書房)

Elmore Leonard, "52 Pick-Up"

S. W. Hawking, "A Breif History of Time," Bantam Books

ワインバーガー, 木村泉 訳「ライトついてますか」(共立出版)

Robert Parker, "Promised Land"

鹿島茂「レ・ミゼラブル 百六景」(文芸春秋)

Jon Bentley, "Programming Pearls"

高階秀爾「世紀末の美神たち」(集英社)

James Gleik, "Chaos - Making a New Science"

下田博次「リクルート 新集団主義の研究」(毎日新聞社)

ラルフ・W・モス, 丸山工作 訳「朝からキャビアを」(岩波書店)

司馬遼太郎「ロシアについて」(文春文庫)

フィリップ・ロス, 中野好夫・常盤新平 訳「素晴らしいアメリカ野球」(集英社文庫)

筒井康隆「ダンヌンツィオに夢中」(中央公論社)

小林信彦「唐獅子株式会社」(新潮文庫)

Bob Greene, "Cheese Burgers"

Bob Greene, 西野薫 訳「ボブグリーンの父親日記」(中公文庫)

井上ひさし「吉里吉里人(上・中・下)」(新潮文庫)

Dashiell Hammett, "The Maltese Falcon"

筒井康隆「夢の木坂分岐点」(新潮社)

柳田邦男「ガン回廊の炎」(講談社)

大野晋, 丸谷才一「光る源氏の物語(上・下)」(中央公論社)

遠山彰「法隆寺金堂炎上」(朝日新聞社)

遠藤周作「海と毒薬」(中央公論社「日本の文学 72」)

1988年

I. ディナーセン, 横山貞子 訳「夢見る人びと」(晶文社)

塩野七生「わが友マキャヴェッリ」(中央公論社)

D. キーン「続百代の過客(上)」(朝日選書)

河合隼雄「宗教と科学の接点」(岩波書店)

大野晋, 丸谷才一「日本語で一番大事なもの」(中央公論社)

中勘助「銀の匙」(岩波文庫)

D. キーン「続百代の過客(下)」(朝日選書)

池澤夏樹「スティル・ライフ」(芥川賞)

三浦清宏「長男の出家」(芥川賞)

澁澤龍彦「高丘親王航海記」(文芸春秋)

石牟礼道子「苦海浄土ーわが水俣病」(講談社文庫)

D.キーン「私の好きなレコード」(中公文庫)

猪瀬直樹「天皇の影法師」(新潮文庫)

清水義範「国語問題必勝法」(講談社)

木村泉「フープロ徹底入門」(岩波新書)

大江健三郎「懐かしい年への手紙」(講談社)

川喜田二郎「続発想法」(中公新書)

小出五郎「脳 1400グラムの宇宙」(朝日選書)

吉田直哉「透きとおった迷宮」(文芸春秋)

J. McInerney, "Bright Lights, Big City"

大江健三郎, 井上ひさし, 筒井康隆「ユートピア探し, 物語探し」(岩波書店)

筒井康隆「美藝公」(文春文庫)

梅棹忠夫「情報の文明学」(中公叢書)

柳田邦男「マッハの恐怖」(新潮文庫)

マーク・ピーターセン「日本人の英語」(岩波新書)

柳田邦男「続 マッハの恐怖」(新潮文庫)

R.ファインマン, 大貫昌子 訳「困ります, ファインマンさん」(岩波書店)

新井満「尋ね人の時間」(芥川賞)

柳田邦男「マリコ」(新潮文庫)

夏目漱石「吾輩は猫である」(中央公論「日本の文学 12」)

船橋洋一「通貨烈々」(朝日新聞社)

夏目漱石「坊ちゃん」(中央公論「日本の文学 12」)

大江健三郎「新しい文学のために」(岩波新書)

長屋宏「アレルギー」(中公新書)

清水義範「蕎麦ときしめん」(講談社)

立花隆「同時代を撃つ」(講談社)

大岡昇平「小説家夏目漱石」(筑摩書房)

清水義範「永遠のジャック& ベティ」(講談社)

John Irving, "The World According to Garp"

渡辺武信「住まい方の演出」(中公新書)

國井利泰「パックス・ジャポニカ」(プレジデント社)

渡辺武信「住まい方の思想」(中公新書)

谷崎潤一郎「陰翳礼賛」(中公文庫)

1987年

立花隆「脳死」(中央公論社)

Elmore Leonard, "Glitz"

D.キーン「碧い眼の太郎冠者」(中公文庫)

Tom Clancy, "The Hunt of Red October"

坂本賢三「先端技術のゆくえ」(岩波新書)

吉田秀和「セザンヌ物語 I,II」(中央公論社)

夏目漱石「それから」(中央公論「日本の文学 13」)

海老沢泰「F1地上の夢」(朝日新聞社)

猪瀬直樹「ミカドの肖像」(小学館)

佐和隆光「文化としての技術」(岩波書店)

T. Winograd and F. Flores, "Understanding Computers and Cognition" ("心にのこる1冊", 「科学」, 岩波書店, Vol.76, No.5, May 2006, pp.541-542.)

田中優子「江戸の想像力ー18世紀のメディアと表徴」(筑摩書房)

司馬遼太郎「菜の花の沖 (一) ～ (六)」(文春文庫)

児玉幸多「日本の歴史16 元禄時代」(中公文庫)

奈良本辰也「日本の歴史17 町人の実力」(中公文庫)

山下竹二「株式市場の科学」(中公新書)

下田博次「霞ヶ関のハイテク国家戦略」(PHP)

神坂次郎「縛られた巨人」(新潮社)

椎名誠「活字のサーカス」(岩波新書)

野田正彰「コンピュータ新人類の研究」(文芸春秋)

船橋洋一「日米経済摩擦」(岩波新書)

本間千代子「父のいる食卓」(文芸春秋)

司馬遼太郎「アメリカ素描」(読売新聞社)

1986年

エイミス「酒について」(講談社文庫)

森本哲郎「読書の旅 愛書家に捧ぐ」(講談社)

D.キーン, 金関寿夫 訳「百代の過客 日記にみる日本人 (上・下)」(朝日選書)

山崎正和「室町記」(朝日選書)

R.ファインマン「ご冗談でしょう、ファインマンさん」
(岩波書店)

梅原猛「水底の歌（上・下）」（新潮文庫）

日本経済新聞社編「ゼミナール日本経済入門」（日本経済新聞社）

ディナーセン「アフリカの日々」（晶文社）

中野好夫「司馬江漢考」（新潮社）

John Irving, "Hotel New Hampshire"

吉田直哉「夢うつつの図鑑」（文芸春秋）

今西錦司「ダーウィン論ー土着思想からのレジスタンス」
(中公新書)

丸谷才一「挨拶はむづかしい」（朝日新聞社）

丸谷才一「雁のたより」（朝日文庫）

森鷗外「渋江抽斎」（中央公論社「日本の文学3」）

丸谷才一「食通知ったかぶり」（文春文庫）

山崎正和「鷗外 闘う家長」（新潮文庫）

丸谷才一「裏声で歌へ君が代」（新潮社）

長谷川慶太郎「日本はこう変わるーデフレ時代の開幕と経営戦略」（徳間書店）

D. キーン, 吉田健一 訳「日本の文学」（中公文庫）

杉山隆男「メディアの興亡」（文芸春秋）

書評などで掲載されたもの

ダグラス・R・ホフスタッター／野崎昭弘, はやしはじめ, 柳瀬尚紀 訳「ゲーデル, エッシャー, バッハー あるいは

不思議の環」(白揚社, 1985)

東京大学出版会『UP』編集部 編, 「東大教師が新入生
にすすめる本」, 東京大学出版会, 2012年, p.16.

トーマス・マン, 高橋義孝 訳「魔の山 I,II」(新潮社版 世
界文学全集 29)

「青春の一冊」(東大新聞2010年7月27日)

東京大学新聞社編, 「東大教師 青春の一冊」, 信山
社, 2013, pp. 168-170. に再録

T. Winograd and F. Flores, "Understanding Computers and
Cognition"

心にのこる1冊, 「科学」, 岩波書店, Vol. 76, No. 5,
May 2006, pp.541-542. 「科学」編集部編, 「科学者
の本棚」, 岩波書店, 2011, pp.155-158. に再録.

Frederick P. Brooks, Jr., "Mythical Man-Months," Addison-
Wesley

"20世紀の名著名論 : Frederick P. Brooks, Jr.: The
Mythical Man-Month: Essays on Software
Engineering, 情報処理, Vol. 43, No. 12(2002),
p.1394.

Richard P. Gabriel, Patterns of Software: Tales from the
Software Community, Oxford University Press, 1996.

"書評 "Patterns of Software: Tales from Software
Community""', コンピュータソフトウェア, Vol.17,
No.1 (2000), pp.95-96.

今野浩「カーマーカー特許とソフトウェア」(中公新書)
(書評「今野浩著:カーマーカー特許とソフトウェア
ー数学は特許になるかー」, オペレーションズ・リサ
ーチ, Vol. 41, No.6 (1996), p. 355.)

武市正人「プログラミング言語」(岩波ソフトウェア科学
講座)

ぶっくす「武市正人 著: プログラミング言語」, bit,
Vol. 27, No.6(1995), pp. 130-131.)

A. Bahrami, "Designing artificial intelligence based
software," Sigma Press, Wilmslow, UK (1988) 271pp

Bookreview "Orthodox AI techniques with well chosen
examples," Information and Software Technology,
Vol.31, No.8 (October), 1989, p.453.

Enid Mumford & W. Bruce MacDonald, XSEL's Progress: the
Journey of an Expert System, John Wiley & Sons, 1989.

書評「XSEL's Progress: The Journey of an Expert
System」, 日経AI別冊, 1990年1月, pp.166-169.

K. D. ワイズ, K. チェン, R. E. ヨークリー著, 有澤誠, 有
澤博 訳「マイクロコンピュータの将来」

書評「マイコン将来像の具体的考察」エコノミスト,
毎日新聞社, 1981年8月4日号, pp.107-108.

読書四十年

2024年

前田愛「都市空間のなかの文学」（ちくま学芸文庫）

この本をどういうきっかけで買ったのをすっかり忘れてしまったが、おおかた新聞で誰かが取り上げたのを読んだのだろう。前田愛という女性のような名前の文芸評論家の存在すら知らなかったが、1987年に亡くなった故人である。この本は1982年に出版され、1992年に文庫化された。ぼくが持っているのは、2020年に出た第12刷で、そのころ買ったのだろう。

この書の意図は、本人があとがきに次のように書いている。

「都市と文学という主題のもとに、日本の近代文学全般を眺めわたすプログラムを思いついたのは、前年（1976年）の5月に評伝『成島柳北』を書きあげた直後のことだったと思う。柳北の『柳橋新誌』に描かれた明治維新を間にはさむ都市景観の変貌にすくなく興味を魅かれたのである。（中略）

さいきんの都市論の盛行から見れば信じられない位だが、1975年前後は、都市と文学を結びつける発想がようやく知の世界の周縁に姿をあらわしはじめたばかりだった。」

しかし、このような前田の意図とは独立に、単に個々の作品の評論として読んで面白い。とくに自分が読んだことのある作品の場合は、ひとしおである。ただ、文庫で650ページある大作であるが、直接評論の対象として取り上げられている作品の数は、それほど多

くない。数えてみると14作品である。読んだことがあるのは「舞姫」「たけくらべ」「彼岸過迄」「門」「エーゲ海に捧ぐ」だけである。古井由吉の「杳子」も読んだかもしれないが、記録しておらず、記憶も怪しい。

具体的な都市が登場するのは、森鷗外の「舞姫」を扱った「BERLIN 1888」と横光利一の上海を扱った「SHANGHAI 1925」だが、文庫本解説の小森陽一によればこの両者は「本書の頂点をなす」ものである。

評論の対象となるのは、このような都市に関わることだけではない。たとえば二葉亭四迷の「浮雲」を取り上げた「二階の下宿」では、「お二階」という言葉に注意が寄せられる。「<お>という接頭語が加わっただけで、<二階>という言葉がもたなかった微妙な意味のかげりを帯びはじめる」という指摘には、膝を打った。ただちに<お離れ>という言葉も連想されたが、前田はそれについては言及していない。このような家屋の構造とその影響を受ける中に暮らすの人々の行動や相互関係のような視点も、「空間」という意味で本書では取り上げられている。

近代文学が対象といっても、話は江戸末期から始まる。最初に取り上げられているのは、為永春水の『春色梅児誉美』であるが、その前に江戸の大絵図を参照し、江戸の都市空間の特徴が語られる。さらに式亭三馬の『浮世床』や十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を取り上げ、江戸という都市の管理体制や、居住者の意識に触れている。『梅児誉美』が取り上げられるのは、江戸の郊外を描いているという位置づけによる。隅田川堤が飛鳥山や御殿山などと併せて江戸の<公園>として制度化されていたというが、その様子が『江戸名所図会』を介して紹介される。それが次の「開化のパノラマ」の

章で、明治初年のベストセラーという『東京新繁盛記』に繋がっていく。そのすぐ後に小林清親による『東京名所図』が出ている。

戦後に関しては、安倍公房や池田満寿夫は読んでいるが、多くのページが割かれている黒井千次や後藤明生は読んだことがない。すでに書いたように古井由吉も、名前はよく知っているがほとんど読んでいない。本書は近代文学を万遍なく書こうとするものではないが、ぼくの日本文学の読書に偏りがあるのかもしれないという気にさせられる。

カバーの口絵としてEscherの"Tetrahedral Planetoid"という絵が使われ、「空間のテクスト テクストの空間」という長い序章では、写像や位相空間の近傍といった概念が導入されるが、その後はあまり数学的な話は出てこない。「空間」がキーワードなので、トポロジーといったイメージを利用したかったということだろうか。

解説の小森が次のように書いて、かなり持ち上げている。

「知のマラソンランナーにとって、一冊の書物は、その時に定めた一つのコースのゴールであり、ゴールに達するまでの記録である。ゴールからふりかえれば、「都市空間のなかの文学」は、都市空間の記号学と、小説をはじめとする文学の記号学を統一した、栄えある記録を近代日本の批評史に刻み込んだ、といえよう。」

鈴木和成「ランボー、砂漠を行く アフリカ書簡の謎」（岩波書店）

昨年、書棚を整理して、この本を見つけた。2000年に出たもので、出てすぐに新聞の書評が何かで見て、買ったまま積読していたよう

だ。ただ、買ったことは記憶している。また、洋書のペーパーバックを入れている本棚を見たら、フランス語版のランボー全詩集があった。1970年に出た版らしいが、もちろんただ買っただけである。しかし、全詩集と言ってもペーパーバックで250ページの1冊である。誰かの日本語訳も買っていないかと見てみたが、見つからないのでアマゾンで検索して、中原中也訳で原文との対訳形式のKindle版があったので購入した。購入と言っても¥449である。

そのランボーは、二十歳で詩をやめてしまう。その後の足跡を追うのが、本書である。この本の帯には、次のような文句が付けられている。

「ランボーは詩と「訣別」したのか？ アデン、ハラル、カイロ・・・自らの「魔」を追って砂漠を彷徨する詩人の魂の軌跡を膨大な書簡から読み解く、想30年にわたる長編評伝」

ランボーの詩集は「地獄の季節」と「イリュミナシオン」しか出版されていないが、貿易商としてアラビアのアデンに1880年に行ってから、家族宛てにまた取引の同業者宛てに、多くの手紙を残している。それらはランボー研究者の手によって収集され全集に収録されているが、鈴木はその書簡を読み込んで、本書を書いている。その立場は「詩人自身は、彼が書いた詩篇、その後にアラビアやアフリカで書いた書簡との間にさしたる違いを認めず、同じ手紙のようなものと考えていたのではないか？」(p.20)というものである。しかし、小林秀雄は、詩を放棄したランボー、貿易商としてのランボーが残した書簡は「彼が往来した沙漠のように無味乾燥」としているという（小林『地獄の季節』1983, p.121, これはWikipediaからの孫引き。原典は見えない。）。

貿易商人のランボーは、武器をエチオピア王のメネリックに売るという怪しげで危険なことに手を出している。実際に実行されたのは1886年で、しかも共同事業主のラバチュが病気になってフランスに帰ってしまい（その後パリで死んでしまう）、たった一人でラクダ100頭と人足35人の大キャラバンを仕立てて、エチオピアの港タジュラーから500キロ離れたショアという王がいる都まで運ぶという信じられない事業を行う。積荷は、2000丁の雷管式銃と75000個の弾薬筒、2か月分の水や食糧、その他の装備という大掛かりなものである。道中は炎暑で日陰で50度から55度。途中で盗賊に襲われるという危険が大いにあったが、ランボーの1日10キロ進むという計算では50日で着く予定が、4か月かかって何とかたどり着く。しかし、商売として大成功かというところほどの収入は得られず、借金やラバチュの未亡人などとの間に、やっかいな金銭問題の争いが残るという結果になる。ランボーには奴隷売買にも関与しているようなことを匂わせる言動すら、あるという。著者はさすがにそれを事実として肯定していないが、10年も祖国を離れてその間一度もヨーロッパに戻っていなかったもので、疑おうとすればいろいろ出てくるのだろう。

ポール・ニザン、花輪莞爾 訳「アデン・アラビア」（角川文庫）

鈴村のランボー本を読んだので、このニザンの本の存在を思い出した。文庫本を買った記憶があったので、書棚を探したらすぐに見つかった。昭和48年8月10日出版の初版であり、まさに1968年のパリの「五月革命」に端を発した世界の学生運動の最中である。東大の学生運動が始まった年でもあり、いかにも学生だったぼくが、買いそうなタイミングといえる。しかもそのまま積読になっていて、56年後に読んだというのは感慨深い。

「アデン・アラビア」といえば、誰しもその冒頭の文

「ぼくは二十歳だった。それが人生でもっともすばらしい年齢だなどと、ぼくはだれにも言わせはしない。」

を引用する。ニザンは1926年の21歳のときにアデンに出発した。ランボーがアデンに行き、アフリカのハラルとの間を行き来したのは1881年からの10年間だから、ニザンがアデンに行ったのはその40年以上後である。ただし、「アデン・アラビア」を書いて出版したのは、1931年で26歳のときである。今回偶然に気がついたのは、ぼくがこの「アデン・アラビア」の文庫本を買ったのが、二十歳のときだったことである。それを56年後、76歳になってからようやく読んだという構図となる。

ニザンがランボーを意識していたのはもちろんで、このエッセイの初めの方で、次のように言及されている。

「神は、相かわらず全収入にふさわしい形で、昔ながらの商売を続けていた。よき神々の誕生であり、「ノートル・の軽業師」と見られたい詩人たちをネタにかせぐ聖者どもの出現なのだ。大いなる純潔、逃げ口上、怠惰だ。詩人たちは、改宗相談の事務所を開いている。ランボオは、その最後の擁護の努力にもかかわらず。サンーシュルビス寺院の香部屋のほうにひっぱり出されていた。」(p.23)

これには訳注が付いていて、

「反抗の詩人ランボオも、この時期、よきキリスト教徒という見当違いの評価をうけていた。」

とある。

なお、訳注にはユニークなものがあり、たとえば哲学者の教師についての記述

「すべてが巧くゆくでしょう、魂と学問において、私はすべてを回復しているのです。それから聴講席にむかってペコペコする。この金持男の金があるいは侵害しかねぬ審理に対する、なんとあけすけな恐怖があったことか。」(p.13)

に対して、

「名誉、富などに恵まれていない日本の大学教師に比して、フランスのこの地位は、きわめて恵まれていることを、ここでは指摘しておくべきかもしれない。」

という注を付けている。

この作品の文章は晦渋で、文庫本で160ページしかないのに、読むのにえらく時間がかかった。ある程度は翻訳の問題かとも思ったが、おそらく原文も判りにくいものではないかと想像される。冒頭の人口に膾炙した文章以降に読み進んで、最後まで読んだ人がどれほどいるのだろうか。文章は判りにくい、その主張は明確である。既存の国家、資本主義と資本家、教育体制や学校、植民地主義、さらにヨーロッパ文化への批判、反抗である。ニザンはエコール・ノルマル（国立高等師範学校）に在学する超エリートだった。エコール・ノルマルでサルトルと同級生だったことも、よく知られる。そのような将来の支配層になる立場から、現在の支配階級を批判するということが、1968年の東大闘争の中で広く受け入れられたのだろう。しかも、1940年にダンケルクで35歳で戦死し、その後忘れられていたニザンが、1960年にサルトルの序文付きでこの「アデン・アラビア」が再刊されて本国で注目されたという経緯が

ら、その前からサルトルが日本でもブームになっていたこともあり、ニザンの翻訳が日本でも出版された。晶文社が「ポール・ニザン著作集」を出していて、ぼくはその第3巻の「アントワーヌ・ブロワイエ」を持っているが、これも1968年出版である。こちらは小説でずっと読みやすいと思うが、やはり読み終えた記憶はない。

野矢茂樹「言語哲学がはじまる」（岩波新書）

野矢さんはぼくより7歳下だが、定年退職してからも精力的に活動している。この本は昨年10月に出たばかりだが、さっそく買って読んでみた。その前に出た「心という難問」の方は、買って少しは読んだが、積読になっている。

考えてみたら、今年に入って週1冊のペースで4冊読んだが、いずれも紙の本で電子版ではないのは最近のぼくとしては珍しい。Kindleで読みかけの本が4-5冊あるが、いずれも英語の本で、みんな長いからなかなか進まない。この新書もアマゾンではKindle版があったが、紙の本と値段が同じなので紙版にした。なるべくモノを増やさない方がよいのだが、やはり紙の本のよさは捨てがたい。

言語とは何かを問うのが言語哲学ということだが、19世紀末から20世紀にかけて、「言語論的転回」と呼ばれる哲学における革命的な変化が起きたといい、それを主導した3人として、フレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインを挙げ、その思考の後を追う。フレーゲの著作は読んだことがないが、論理学で命題論理や述語論理を勉強すると出てくるので、人物として知っている。ラッセルは『数理哲学序説』は読んだし、『西洋哲学史』も部分的には読んだが、ラッセルの業績の内からすればごく一部でしかない。ウィトゲンシュタインについて書いた本は何冊か読んでいるが、当人の『論理哲学論考』や『哲学探求』は読んだことがない。野矢さんは『論考』の

訳書を出しており、『探求』についての本も書いていて、ウィトゲンシュタインは専門らしい。

言語哲学は難解ということもあってか、あるいは野矢さんのいつもスタイルと言えるかもしれないが、文章は「ですます」調であるだけでなく、意図的に講義というか座談のような語りかける口調を取っている。ときどきは質問を出して、読者に考えさせたり、逆に想定している聞き手からの質問を先取りして、それに答える形で説明を付加している。このような工夫で文章は読みやすいが、その分自分の頭に入ったのかこころもとないと感じることがある。

固有名の意味は、その指示対象であるとするのは、自然な考え方である。しかし、一般名は難しい。これも指示対象と言えそうな気がするが、一般名が指すものは世界に実在しない。もし、それは心の中にあるというのなら、異なる人間が同じものを心の中に持つことが保証できないから、人と人との間のコミュニケーションはどうして成立するのだろうか。

しかし、語の意味が決まってから文の意味が定まるとする「要素主義」はフレーゲによって否定され、ウィトゲンシュタインもそれを引き継いでさらに展開した。その辺は「語の意味から出発するのではなく、文の意味から出発する」や「語は文との関係においてのみ意味を持つ」といった2章「文の意味の優位性」に出てくる小見出しが、示している。それは現代の大規模言語モデルにも活かしている考え方と言えよう。

フレーゲは意味に「指示対象」と「意義」という2つの側面があるとした（第3章）。それは外延と内包に対応するとすれば理解しやすい。しかし、ラッセルの立場は第4章のタイトル「指示だけで突き進む」が示すように、「意義」の側面は認めなかった。ウィトゲ

ンシュタインもその点では、ラッセルを引き継いでいるという。ラッセルの場合、文の指示対象とは命題である。しかし、ウィトゲンシュタインはそれを批判したとp.170辺りに書いているが、その批判の内容が今一つよく分からない。

「フレーゲの教えるところによれば、「文は名である」。それに対してラッセルは「文は複合物に対応する」と述べた。どちらもまちがっている。「文は複合物の名である」と言うのであれば、それはいっそう誤りである。ひとは事実を名指すことはできない。」

とウィトゲンシュタインは言ったというが、なんのこっちゃ分からない。ただ、その次の第5章で、ウィトゲンシュタインの理論がやや詳しく紹介されて、そこでフレーゲが「語は文との関係においてのみ意味が決まる」としたのに対し、ウィトゲンシュタインは文ではなく言語全体に拡張した「全体主義的言語観」を提出したという。それで何となくわかった気にさせられる。

九段理江「東京都同情塔」（芥川賞）

女性の建築家が主人公である。それも「成功した建築家」という設定である。それだけでもやや珍しい。著者は建築のことをかなりよく調べており、もしかすると大学で建築科だったのかと思わせる。しかし、著者の経歴や学歴はかなり注意深く伏せられているようで、出版社の新潮社による著者紹介でも「1990年、埼玉生れ」としか書かれていない。同じような疑問を持つ人は多いようで、Googleで「九段理江」を検索すると、検索文字列候補の上位に「九段理江大学」というのが出てくる。それをそのまま検索してみると、それに答える人のページが現れて、「九段理江さんの出身大学と高校に関する情報は見つかりませんでした。」となっている。「東京工業

大学工学部卒業」という情報が見つかり、やっぱり思ったがこれは同時期デビューし、やはり芥川賞候補になった「石田夏穂」というほぼ同い年の別の作家のことらしい。

最初は建築家の牧名沙羅が語り手として、語られる。それが大分進んだところで、途中に幸福学者のマサキ・セトの著作「ホモ・ミゼラビリス 同情されるべき人々 完全版」への序文が挿入される。このホモ・ミゼラビリスとは受刑者の人道主義的な言い換えで、それを提唱しているのがマサキ・セトであり、牧名が参加しようとしている設計コンペの対象が、マサキ・セトの著作に影響されて「シンパイシータワートーキョー」と名づけられた新しい刑務所である。牧名はこの建物の名前を「東京都同情塔」と呼び変える。

東京都同情塔と名づけたもとは牧名本人ではなく、表参道の靴店で働く拓人という若くて顔が美しい男である。マサキ・セトの序文の後、拓人を語り手とする物語に切り替わる。この構成はそれなりの工夫だろうが、牧名の独白のまことに奔放な想像力と、言葉へのこだわりで徹した語りに魅了されたぼくは、この辺から若干感興を削がれた気がした。

生成AIがたびたび言及される。授賞インタビューで「全体の5%は生成AIを利用して書いた」と九段が言ったため、「AIを使って書いた小説が芥川賞を獲った」というような噂がSNS上で飛び交ったらしい。小説の中でAI-builtと名付けられた生成AIが登場し、その部分で実際の生成AIが利用されているのだが、AIに言葉や思考が侵食されていくことを表したかったということのようだ。

最後はまた牧名沙羅の語りに戻る。そして頭からコンクリートを流し込まれ、像になっていく。

選者は概ね高く評価しているが、とくに平野啓一郎は

「新しい才能による圧倒的な受賞作だった」

と激賞している。前に高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」の感想を書いたときに

「『文藝春秋』で芥川賞の作品を読むときは、選考委員の選評も必ず読むことになるが、ほとんどの委員がすべての候補作について多かれ少なかれ論評を加えている。考えてみるとこれらの文章は誰を対象に書かれているのか、よく分からない。『文藝春秋』の読者は受賞作しか読んでいないので、その他の候補作に対する評は、ほとんどちんぷんかんぷんである。しかし、選考委員としては、このようにすべての候補作を比較検討して、結果を出しましたという表明であり、課せられた任務上当然のことなのかもしれない。」

と書いた。しかし、前回の市川の「ハンチバック」の時に、受賞作以外の作品もみなかなり評価が高いので、全体の水準が上がっているのかという感想を持った。同じことが今回も言え、受賞作以外もかなり高評価の選評が並ぶ。また、他の候補作もみな、掲載されたのが「文藝」「すばる」「群像」「文学界」という構図は同じである。

野矢茂樹「心という難問」（集英社）

「言語哲学がはじまる」を読んだので、それより前に買ってあったこの本を読んだ。しかし、前者が新書で270ページだったのに対し、この本はハードカバーで（サイズは14.1 x 3 x 19.4 cm）で394ページあるという点でも対照的である。文体も平易ではあるが普通

の「である」調で、とくに座談形式にするといった工夫は取られていない。

タイトルに「心」とあるが、本文では「心とはなにか」というような議論はほとんどなされない。この手の本にはやや珍しくきちんとした索引が付いているが、その索引がもし十分に網羅的なものとする、最初に「心」が本文に登場するのはp.198であり、しかも

そして私は、相貌においてこそ「心」と呼びうるものが見出され、相貌においてこそ「他者性」の核心が存していると論じたい。

という言い方で、ここで「心」を定義しようというわけではない。

では「心」ではなく「意識」がテーマかというところ、これも索引を手がかりとする限り、「意識」は冒頭のp.4に出たあとは、p.300までまったく出てこない。しかし、本文の前に置かれた「はじめに」では、「意識」が次のように使われている、

「知覚し感覚する経験は意識経験であるように思われる。私はかつてそれを「意識の繭」と呼んだ。その繭に閉じ込められ、意識経験の外にあるはずの世界に触れることができず、私と同様に意識の繭に閉じ込められているだろう他者の姿を見失った。私はなんとかしてその繭を食い破ろうともがいた。しかし、その必要はなかったのだ。繭は食い破られるまでもなかった。意識の繭など存在はしない。私は、本書においてようやく世界と他者と出会うことができた。」

また、最初に出てくるp.4以降の数ページは、「それを「意識」という言葉で言い表してよいのか」「私たちは「意識」という言葉が何

を意味するのか、よく分かったうえでこの言葉を用いているわけではない」「ここで用いられた「意識」という言葉はたんに無意味でしかないと私は考えている」といった具合で、「意識」という言葉を意図的に遠ざけている。

その上で、本書は知覚に対する古典的な問題を改めて提起する。すなわち、知覚されるものは実在するのか。実在するとする素朴実在論は、どうして哲学的に懐疑されるのか。デカルト以来の二元論はどこに問題があるか。それに対して一元論は、どこに問題があるか。とくに他人の知覚は知りようがないという事実、どう対処するか。これらの問題に答えるのが本書であると明確に宣言する。そして、本書のユニークなスタイルとして、あらかじめどのように論旨を進めるのかという見取り図を示し、それに沿って議論していくという形を取って、読者を導いていく。

このような哲学的問題に対して、本書が用意している議論は、「眺望論」と「相貌論」である。野矢がいう「眺望論」の基本的な考え方は、「無視点把握」と「有視点把握」を区別するということである。何度も引き合いに出される例は、吾妻橋に立ってスカイツリーを見るという視覚認識である。これが見る地点と視線の方向を定めた有視点把握である。これに対し、「無視点把握」とはたとえば地図による把握である。無視点把握に客観性があるとしても、有視点把握は個人の意識だから客観性がないとする懐疑論に対して、誰でも同じ眺望点に立てば同じ眺望が得られるという客観性を野矢は主張する。有視点把握と無視点把握は相互に依存しあっているとす

る。

相貌とは、「どういう意味のもとに見るかによって異なりうる知覚の側面を「相貌」と呼ぶ」と定義される(p.177)。たとえば木を見

て、「木」という概念を持っていればそれを木と認識できる。それが相貌である。眺望論では見誤りや錯覚という現象が捉えられない。それは知覚を取り巻く時間の流れやさまざまな可能性を考えていないからである。このような知覚を取り巻く時間性や可能性を「物語」と呼び、物語に応じて異なった意味づけを与えられる知覚の側面を相貌と呼ぶとする。この議論の中で錯覚の有名な例として老婆にも若い女性にも見えるという図が引用されるが（図11, p.199), この図は昔からよく見ているのにもかかわらず、今回は何度見ても若い女性には見えるが老婆には見えなかった。

哲学やこの手の本は、誰々がこういったという論証が長々と述べられることが普通である。それは自分の考えが歴史的にどう位置づけられるものかを示すために必要なことかもしれないが、往々にしてうるさく感じるし、どこまでが他人の考えでどこから自分の考えなのか分らなくなることすらある。その点、野矢は自分の考えを述べることに徹しており、人の説への言及は最小限にとどめている。繰り返し登場するのは大森荘蔵ぐらいである。

意識や心を扱った本は、過去にもいろいろ読んでいる。たとえば下條信輔「<意識>とは何だろうか」（講談社現代新書）。酒井「言語の脳科学」、茂木健一郎「心を生み出す脳のシステム「私」というミステリー」、渡辺正峰「脳の意識 機械の意識 — 脳神経科学の挑戦」(中公新書)など。あと有名なところではDaniel Clement Dennett IIIがいるが、彼の本は2-3冊持っているものの、ちゃんと読み切ったことがない。茂木や渡辺の本では、「クオリア」という怪しげでよく分からない概念が、中心的な位置づけで出てくるが、さすがにこの野矢の本では、それは出てこない。逆にそれで、茂木や渡辺が重きを置くクオリアが、それほど重大なものではないのだろうという妙な納得が得られた。

Agatha Christie, "The Mysterious Affair at Styles," ("Agatha Christie Ultimate Collectionn" Kindle version)

最近、翻訳でアガサ・クリスティーの伝記が出た（ルーシー・ワースリー（著）、大友香奈子（翻訳）「アガサ・クリスティー とらえどころのないミステリの女王」2023/12/19）。それで例によって原本をKindleで見つけて、早速購入した。そのときに、AGATHA CHRISTIE CollectionというやはりKindle版が100円が出ていたので、ついでに購入した。それで過去にChristieの本をどれほど読んでいるか調べようとした。確か高校生ぐらいで翻訳は何冊か読んでいるはずだが、記録していない。英文の方は書棚を探したら、3冊出てきたが、どれもきれいなままで読んだ形跡がない。出版年は1967, 1974, 1992, とまちまちだ。1967年のものは学生時代を買っていることになるが、後の2冊は海外出張のときに米国や英国の空港の本屋で買って、そのまま読んでいないのだろう。

これはChristieの処女作である。Hercule Poirotものの第1作だが、Hastingsも最初から登場する。というか、Hastingsが語り手というスタイルがここから始まっている。書誌を確かめるためにこの作品をAmazonで調べたら、なんと[アダルト]という分類になっていて、

アダルト商品につき18歳未満の方は購入できません。商品は外から見えないよう厳重に梱包してお届けします。

という注意書きまでついている。どうも"Affair"という語に単純に反応しているらしい。しかし、1920年に出たこれほど著名な書にこのような扱いをするとは、アマゾンもいい加減なものである。

Wikipediaによれば、

「クリスティは1916年に本作を書き上げ、複数の出版社へ原稿を送ったが採用されなかった。彼女自身、応募の事実を忘れた頃にボドリー・ヘッド社のジョン・レーンに見出され、最後の章を書き直して1920年に出版された。当初は、新人作家としてはまずまずの2千部程度売れただけであったが、その後着実に評価を挙げてミステリの古典として認められるようになった。」

Arthur Conan Doyle, "A Study in Scarlet" ("The Complete Sherlock Homes" Kindle version)

この間、Poirotものを読んだので、その流れでSherlock Homesものを読んでみた。Kindle端末を買った初期に、Homesの全集を手に入れたが、そのまま読むではいなかった。並行して、Prime VideoでイギリスのBBC制作のSherlockというシリーズものを観ている。これは時代を現代に移した翻案もので、PCや携帯やタクシーが頻繁に使われる。

2部構成になっていて、第1部はロンドンを舞台にホームズが推理を働かせる話だが、第2部はいきなりアメリカの西部が舞台となつて、その落差に戸惑わされる。実はロンドンで起きた殺人事件の被害者と犯人がアメリカから来ているという話で、その西部劇調のストーリー展開も、違和感を抑えて読めば、それなりにうまく描かれている。西部劇と言っても場所はソルトレークで、モルモン教団の勃興期という舞台設定である。そこで不思議なくらいモルモン教やBrigham Youngが批判の対象となっている。これはなぜなのか、コナン・ドイルとモルモンの関係についてChatGPTに訊いてみた。最初はとくに関係は見つからないという返事だったが、"A Study in

Scarlet"を挙げて、これを見るとかなりの知識と批判を持っていたのではないかと訊いたら、すぐに修正してきて

In "A Study in Scarlet," Holmes investigates a murder that leads him to confront a group of Mormons in Utah. The story delves into the history and practices of the Mormon settlement in Salt Lake City. Conan Doyle's portrayal of the Mormons in the novel has been a subject of discussion and sometimes criticism, as it reflects the perceptions and biases prevalent in the Victorian era. While the depiction of the Mormons in the novel might not be entirely accurate or unbiased by today's standards, it does provide a glimpse into the cultural and religious attitudes of the time. It's important to approach such portrayals with an understanding of the historical context in which they were written.

と言ってきた。

この間読んだStylesはPoirotものの第1作だが、この"A Study in Scarlet"はHomesものの第1作である。前者が後者のまねをしているわけだが、本作でHomesもWatsonも登場する。Watsonの登場のさせ方は、Hasingsの場合より鮮やかである。

村上春樹「デヴィッド・ストーン・マーティンの素晴らしい世界」（文藝春秋社）

村上春樹の小説はあまり読んでいないが、音楽について書いたエッセイは面白いので、愛読している。デヴィッド・ストーン・マーティンというのは知らなかったが、ジャズ・レコードのジャケットのデザインで優れたものを多く残しているデザイナーということで、本書は村上が保有するそれらのレコード・ジャケット188枚を紹介するものである。もちろんジャケットの図はすべて載っている。こ

の本はKindle版も出ているが、やはりなんといっても紙の本のよさはこの手の本では明かだ。

本書ではDSMと略記されるデヴィッド・ストーン・マーティンは、クラシックからフォークソング、トラディショナル、など幅広いジャンルのジャケットをデザインしているそうだが、村上が集めているのはもっぱらジャズで、とくに1940年代後半から1950年代に、ノーマン・グランツの興したクレフというレーベルで制作したものが中心となっている。

村上はもちろん、ジャケットについてだけでなく中身の音楽についても評論している。何しろ古いジャズが中心なので、チャーリー・パーカー、スタン・ゲッツ、オスカー・ピーターソン、バド・パウエル、アート・テイタム、カウント・ベイシー、ビリー・ホリデイといった有名なミュージシャンも多く出てくるが、演奏はおろか名前も知らないものも多い。村上自身が「今となっては・・・」というものも、当然のことながら結構ある。

読書としてはあっという間に読み終えて物足りない感じもあるが、手作りのものとしての本のよさを堪能した。

中野博文「暴力とポピュリズムのアメリカ史」（岩波新書）

朝日の書評で取り上げられ、それをみてすぐ購入した。その後、日経の書評にも載った。アメリカにはミリシアというものがあり長い歴史を持っているが、政府が設置した軍の部隊で、現在は州軍という位置づけになっている。ところが20世紀の終わりごろ、極右過激派がやはりミリシアという名で活動し、それが2021年の1.6を起こした。どうしてミリシアとしてこのような2つのものが生まれたのか、という話である。出たばかりの本で、米国大統領選のある今年

に実にタイムリーだと思ったが、ちょっと期待外れだった。ミリシアを中心に見た米国史ということで知らないことも多く、その点では面白かった。中学生のときに、中央公論社の「世界の歴史」の1冊「11 新大陸と太平洋（中屋健一 責任編集）」を面白く読んだ、ことを思い出した。

期待外れと言ったが、第1章の「現代アメリカの暴力文化」は、1.6のアメリカ議会の襲撃事件を描き、読み返してみると大変要領よく事件を記述している。そして、「現代アメリカの暴力とポピュリズムを理解したうえで、それらの起源をミリシアと関連させて論じたい」という意図はよく理解でき、その後の章に期待させる。その後の章がその期待を裏切るというわけでは決してないが、21世紀のアメリカのポピュリズムが社会を蝕んでいるのはなぜか、という問題意識によく答えるものとなっているかという点、ちょっと違うという印象を持ってしまう。

4章の南北戦争までは当初のプラン通り進んでおり、とくに問題を感じない。その流れで第5章の「超大国のミリシア」で20世紀のアメリカが書かれているのだが、確かにそこで「右派ポピュリズムの代表者として登場し、大統領になったのがロナルド・レーガンである。」とか「しかし、右派ポピュリズムが推す人物を大統領にすれば、連邦政府の州への介入は避けられる。

もし、右派のポピュリズムと敵対する民主党が大統領選挙に当選したときは、備えが必要になる。連邦政府の警察や正規軍が市民生活に不当な介入をしないため、自衛組織を準備せねばならないのである。このように考えた右派ポピュリストによって、1990年代、第1章で述べた民間ミリシア団体の創設運動が進められた。」と形としては最初に戻って、話がつながってはいる。ただ、第1章の問題提起と比べると、やや物足りなさを感じざるをえなかった。

「おわりに」の章で、改めて合衆国憲法修正第2条の現状が取り上げられる。そもそもミリシアの存在は、修正第2条に規定されている。そこでは「よく規律されたミリシアは、自由な国家の安全のために必要であるので、人民が武器を保有し保持する権利を侵してはならない。」と述べている。これによってミリシアと市民との関係が規定されていると言うが、現在では米国で頻発する銃の乱射事件のあと、必ず出てくる銃規制の運動に反対する根拠として参照されるがこの修正2条である。「おわりに」ではこの修正2条に関して、2008年連邦最高裁が下した歴史的な判断について述べられている。ワシントン特別区対ヘラー裁判の判決で、「銃を保有する権利は、市民が自衛のために銃を所有するためのものであるとし、それまでの判例で「銃の保有はミリシアを創るために認められたもの」としてきた解釈を根本的に変更したという。共和党系の最高裁判事を増やした結果、この判決が5対4で出された。このことはミリシアと関連づけて改めて指摘されてみると、その重要さがよくわかる。

謝辞の対象に、駒場で同僚だった遠藤泰生の名前があった。

Arthur Conan Doyle, "The Sign of Four" ("The Complete Sherlock Homes" Kindle version)

Sherlock Homesものの第2作である。前作がロンドンを舞台にしながら、原因となった事件は米国で起きたという想定だったが、この作品はやはりロンドンを舞台にしながら、きっかけはインドで起きており、植民地とはいえ外国で起きた事件であるという点で、共通点がある。しかし、そこで出てくるインドやインド人の描き方は、ビクトリア時代らしく帝国主義的で、現代の目から見れば偏向している。

インドでインド人3人とともに財宝が運び込まれることを知った Jonathan Smallは、財宝の運び人を殺害し、その財宝を要塞の廃墟に隠したが、見張りの通報で殺人が露見しする。4人は終身刑となり、インド洋上のAndaman Islandsの刑務所に送られた。Smallは財宝の隠し場所の地図を書き、それに4人が署名していたが、これをCaptain Morstanに明かして出獄させてもらうようにもちかける。Captain Morstanの上司のMajor Sholtoが腹黒い人物で、財宝を横取りし独り占めする。

Sholtoよりあとから英国に帰ったMorstanはSholtoを探すか、分け前を取り返せないうちに死んでしまう。しかし、Sholtoの息子たちが良心的で、父親の死に際して真相を知り、娘のMaryに匿名で少しずつ宝石を贈る。その謎めいたいきさつについて、MaryがHolmes相談を持ちかけたことでHomesの事件解決に向けた活動が開始される。

Homesは書斎にいて安楽椅子に座りながらパイプをふかして推理にふけるというイメージがあるが、この作品ではハードボイルド並みに行動的で、エンジン付きのボートをテムズ川上でぶっ飛ばして、犯人を追いかける。その際、自分は銃を携行し、Watsonにも銃を用意させる。しかし事件が起こる前は退屈しきっており、それでコカインとモルヒネを常用している。Homesものは、現在も世界中で青少年少女向きに翻案されたものが読まれているだろうが、そういうものでは当然このような描写は省かれているだろう。

バランスとしては最終の第10章の"The End of the Islander"が異様に長い。この章は逮捕されたJonathan Smallによる長い告白からなっているが、そこでインドにおける事件の顛末からテムズ川での逃走劇まで、一部始終が語られるので長くなるわけだ。

昔の日本の教科書などでは、「セポイの反乱」と呼ばれたインド側による英国統治に対する反抗事件が登場する。セポイという呼び方から人名か地名の固有名詞かと思っていたが、本書でsepoyと表記されて普通名詞であることに気づいた。辞書によれば「（もと英国インド軍の）インド人兵」ということである。これが起きたのは1857年から1858年の間ということで、本書の発端となる事件が起きたのもそのころという設定である。その混乱の中でSmallは財宝を手に入れることになるが、それを隠した混乱が収まったら取り出して分けることを、関係した4人で誓って誓約を文書として、それに署名したということが表題になっている。4人のうちSmallだけが白人の英国人で他の3人はインド人である。インド人はときどきblack man, black fellow, black-facedと呼ばれる。米国における黒人のように一貫して使われる呼称ではないらしいが、差別的なニュアンスはありそうだ。ただ、Smallの他の3人の署名者に対する扱いには、差別的なところがない。

軍隊の階級の名称は、難しい。Homesに相談を寄せたのはCaptain Morstanの娘Maryだが、captainというのはイギリス陸軍では大尉らしい。その上官がMajor Sholtoでこれは少佐のようだ。しかし、米国と英国でも違うし、同じ英国でも陸軍と海軍は違う。

本書の最後で、Watsonは依頼人のMary Morstanと結婚することになる。Maryが登場したときから、Watsonは心を惹かれるが、Homesは関心を示さない。別にMaryにだけでなく、女に関心がないという設定になっている。ChatGPTでHomesはgayかと訊いてみたら、もっともらしい答えが返ってきた。

Sherlock Holmes' sexuality is not clearly defined. However, some modern adaptations have explored the idea of Holmes being portrayed as gay or bisexual. Ultimately, Sherlock Holmes'

sexuality has been and continues to be a topic of speculation and interpretation among fans and creators.

中屋健一 責任編集「世界の歴史 11 新大陸と太平洋」（中央公論社）

中野博文「暴力とポピュリズムのアメリカ史」はミリシアという視点から見たアメリカ史だったが、それで中学生の時に読んだこの本のことを思い出した。この中央公論社の「世界の歴史」の第1回配本「古代文明の発見」が出版されたのは、昭和35年（つまり1960年）11月で、ぼくが中学1年のときである。このシリーズをオヤジが買ってくれたので、ぼくは一生懸命読んだ。中屋健一によるこの巻は第11回配本で、昭和36年10月に出ている。月1冊のペースできちんと出版されたようだ。

とくにこのアメリカの誕生の歴史は印象が強く残っており、東大に入って駒場の中屋健一のゼミに顔を出した記憶がある。それだけぼくにとっては中屋はスターのような存在に見えた。ゼミは中屋の顔を見るために最初に出ただけだったような気がするが、とてもダンディーだと感じた。しかし、60年以上前に出た歴史書を今読むというのは、面白い経験である。書かれたのはキューバ危機の前である。その後の米国の歴史には、当時とても想像できないようなことが起こってきた。さらに書かれた以前のこともについて、新しく発見された事実もあろうし、見方や解釈が大きく変わったこともあろう。

中学生のぼくが夢中で読んだ理由の一つは、「大いなる西部の発展」に出てくる、ワイアット・アープ、バット・マスターソン、ジェシー・ジェームス、ビリー・ザ・キッド、あるいはその前の「西部開拓と奴隷問題」に出てくるデイビー・クロケットなどの映画や

TV二」出てくるヒーローたちの存在が大きかっただろう。ジョン・ウェインの映画「アラモ」の初公開日は1960/12/24, ということなので、日本で公開されたときにすぐに多分親父に連れて行ってもらって観たが、それもきっと1961年だろうから、まさに本書が出た年である。

この旧版のあと、樺山紘一、礪波護、山内昌之が編集した新版が1996.11-1999.5に出ていて、ぼくは駒場にいたときにこれを予約注文して買っていた。山内さんは駒場の同僚で、旧版を中学時代に愛読したことを、彼に話したことがある。その新版全30巻をこの機会に確認したら、何と巻2と巻23が抜けている。旧版は熱心に読んだが、この新版はあまり読んでいない証拠である。しかし、生協に置いてある紙のカバーを未読の本にはみな付けていたので、それで気がつかなかったせいもある。それで孝子が得意なメルカリで、この巻2と巻23を見つけて、孝子に購入の手続きをしてもらった。巻23はすぐに来て状態もよかったが、巻2はかなり時間がかかった上、開いてみたら一部に鉛筆とマーカーによるかなり目立つ書き込みがある。巻23は個人が出品者だったが、巻2は「もったいない本舗」という古書店が出品していたものだった。孝子が書き込みがあることを出品者に伝えたら、返金に応じて本は返さなくてよい、ということになった。そういうプロセスが定形化しているらしい。

新版は旧版のほぼ2倍の巻数があり、この中屋の本に相当するものも「21 フランスとアメリカの革命」と「23 アメリカ合衆国の膨張」の2巻がだいたい該当する。旧版ではイギリスがアメリカ大陸に作った植民地の話から始められるが、新版では北アメリカ大陸に先住民が住むようになったのは2万5千年前からで、ヨーロッパ人が訪れた16, 17世紀には、南北アメリカ大陸に居住するインディアン（ネイティブ・アメリカン）が合わせて1500万人、現在の合衆国の

領土内にも100万以上が住んでいたと推定される、という話から始まる。

今回読み返してみて気づいたことの一つは、多くの図版が使われていることが特徴の一つだが、どれにも出典がまったく示されていないことだ。絵や写真の作者も、どこから取った図かも分からない。この時代の著作権処理は、相当ずさんだったに違いない。それと比べると、図版のカラー化を謳っている新版では、すべて出典が明記されている。なお、新版は毎巻、帯で「書下ろし オールカラー」を売りにしている。

付録として座談会の記録が付いている。中屋健一と監修者の池島慎平と編集参与の尾鍋輝彦によるものだが、この3人は東大史学科で西洋史を専攻した同級生だという。この付録も、中学時代に精読した記憶がある。最初に池島がアメリカに行った時に、中屋にどこに行ったらよいか相談し、ウィリアムズバーグがよいと勧められ、そこを訪れてよかったという話がある。中学生のぼくはもちろんアメリカに行ったことがなかったし、ピッツバーグ、シカゴ、など出てくる地名にもおよそ馴染みがなかったはずだ。しかし、その後はウィリアムズバーグにも行った。そのほか出てくる地名の中に行ったことがある場所もかなり多いし、行ってなくてもどのあたりかおよそ見当がつく。

座談会で池島は、ウィリアムズバーグのバスターミナルの便所に「ラズ・オンリー」と書かれていたことを報告している。その一方で、ウィリアムズバーグの「町を通る馬車は黒ん坊の御者が乗っている」というような表現を平気でしている。池島は文藝春秋社編集局長という肩書だが、どうしてライバル企業の中央公論社の看板企画を中心になって監修したのだろう。中央公論はこの「世界の歴

史」が当たったので、その後「世界の文学」「日本の文学」「日本の歴史」というシリーズを続けざまに出して成功した。

中屋が大学を卒業したころは、アメリカ史では大学のポストがなくて、新聞社に勤めたという。それでも論文などを書いていたので、その後、東大に職を得たということである。

柳瀬博一「カワセミ都市トーキョー「幻の鳥」はなぜ高級住宅街で暮らすのか」（平凡社新書）

著者は生物学者でも写真家でもなく、慶応の経済を出て日経ビジネスの記者をやっていたが、2018年に東工大のリベラルアーツ研究教育院の教授になったという人である。日本ユニシスにいた森澤好臣さんは、2002年に北海道情報大学に教授として移られ、そこで鳥の写真を撮られるようになって、それを使った卓上カレンダーを毎年お嬢さんのデザインの協力のもとに制作され、送ってくださる。それを見るのは楽しみである。北海道から2012年に我孫子に戻られてからもその趣味を続けておられて、撮影場所は千葉近辺が中心になったが、同好の士のネットワークがあるようで、どこにどんな鳥が来ているという情報が伝わって撮影に向かわれるらしい。その森澤さんのカレンダーでカワセミを見たことはないような気がしていたが、メールで聞いてみたら、

カワセミは、手賀沼や周辺の探鳥地でよく見かけるので、見かける度に撮影はしていますがカレンダーにあまり登場させていません。

とのことだった。

柳瀬がカワセミを観察しだしたきっかけは、コロナだという。コロナのせいで遠くに出かけられなくなり、家の近くを散歩するようになってカワセミの存在に気づいた。だからその観察の歴史は浅いし、カワセミについての知識の蓄積も少ない。なので、読み始めた最初は素人による気軽な体験記かと思った。ところが最後まで読んでみると、結構考えさせるところがあった。とくに最終章の第6章「新しい野生」と「古い野生」がつながる」はまとめの章として、1950年代後半から1980年代にかけて、高度成長に伴う公害と家庭排水によって徹底的に汚染され、魚もエビもカニもいなくなった東京の水辺に、どうしてまたどのようにしてカワセミが戻ってきたのか、独自の考察に基づく仮説を出しているが、それがかなり説得力を持つ。柳瀬には「国道16号線「日本」を創った道」という著があり、都市論という意味で本書につながるものらしい。

東京にカワセミが戻っていることが最初に発見されたのは、皇居と白金自然教育園だという。そして東京のカワセミの繁殖に関する代表的な論文の一つが、黒田清子による皇居と赤坂御所事例に関するものだという。どこかで見た名前だと思ったが、元皇族の上皇明仁、上皇后美智子の長女その人である（そのことは本書では明示されていない）。山階鳥類研究所のフェローであり、研究者としての優れた業績であるようだ。

ぼくがカワセミを見た鮮明な記憶があるのは、2000年代にCSKの社長・会長だった青園さんが組織したCSK情報システム財団の理事会が、ときおり京都東山の対龍山荘で開かれたが、そのいずれかのときに、対龍山荘の庭園内の池にカワセミが来ていたのを目撃した。

柳瀬博一「国道16号線―「日本」を創った道―」（新潮文庫 電子書籍）

カワセミの話が面白かったので、その前の作品であるこれを読んでみた。カワセミよりだいぶ前の作品かと思ったが、単行本は2020/11/1に出ており、すぐに文庫化されて文庫版が出たのは2023/04/26である。文庫版では改訂がされているらしく、使われているデータが新しくなっている。

「日本の歴史の中心には、有史以来現代に到るまで1本の道が走っている。『国道16号線』だ。」

という大胆な宣言で本書は始まる。1967年に運転免許を取ったばかりにとっても、国道16号線はなじみ深い。当時は横横も東名もなかった。第3京浜と横浜新道はすでにあったが、横浜や東京方面に行くには、国道16号を通るのが自然だった。逗子からは六浦、金沢八景を通って16号に出る。そのころからこの道は渋滞が激しかった。道としては新しいが、それが通るエリアは、古代から現代に至るまで日本の文明と文化、政治と経済のかたちを規定してきた、というのが本書の主張である。

その主張を印象づけるものとして、4枚の地図を掲げている。それぞれは

1. 現代における国道16号線近辺の「大学」。時代は2018年。
2. 中世の「城」。900年代末期から1500年代末期まで。
3. 縄文時代の「遺跡や貝塚」。1万数千年前から2500年前まで。
4. 旧石器時代の「遺跡」。3万数千年前から1万5000年前まで。

これらが16号線上にプロットされて、確かに旧石器時代以来、この沿線が歴史的に大きな役割を果たしてきたことを訴えている

(p.67). もちろん、著者自身が

実際には、都心やさらに16号線沿いの外側にも遺跡や古城、大学は存在する。あくまで16号線エリアに「遺跡」や「城」跡や「大学」が多くあることを見てもらうのが目的なので、その点にご留意いただきたい

と断っているように、多分に恣意的に作られた図ではある。しかし、なかなか巧みな導入である。

16号沿線がこのように歴史上重要な位置を占め続けてきた理由として、柳瀬は「小流域地形」によるものだとする。小流域とは「山と谷と湿原と水辺」がワンセットになったもので、それが16号線沿線にびっしりと連なっているという。その小流域地形を観察できる最適な場所として、三浦の「小網代の森」が挙げられる。柳瀬が小流域地形について知識と観察経験を得たのは、慶応大学時代に岸由二に師事したからである。小網代の森が開発で破壊されそうになったが、岸が反対運動を組織して、それによりこの自然が保たれた。小流域地形については、カワセミの本でもカワセミが生息している場所が現在の高級住宅地と一致しているという形で、たびたび言及されていた。ぼくは小網代の森に一度行ったことがある。2015年11月2日で、前のLexusを買ったばかりのときに、孝子と出かけた。

野口悠紀雄「どうすれば日本経済は復活できるのか」(SB新書 電子版)

藤崎さんが野口悠紀雄著の「円安が日本を滅ぼす(日本の成長を阻害しているものは何か?)」(中央公論社)を読んで結構納得したが、みんなも読んで意見交換をするのはどうか、という提案をした。それでその本をアマゾンで見emたら、同じ野口の表題が似て

いるこの本が、電子版で出ていたので先に まずこれを買って読んでみた。

まず、2000年の沖縄サミットのときには、G8で国民一人当たりのGDPがトップだったのが、2023年の広島サミットの時点ではG7の中で一人当たりのGDPが最下位になっていることを指摘し、その原因は何かと問う。その理由は、日本ではアメリカのように企業の新陳代謝が起きておらず、産業構造が古いからだとする。さらにそのような状況を招いたのは、円安を誘導してきた金融政策および産業政策だという。

製造業は、人減らしを行なったので1人当たりの売上高は上がったが、付加価値の売上高に対する比率が低下し、そのため賃金を上げられなかった。賃金は本質的には労使交渉によって決まるものではなく、付加価値によって制約される。一方、非製造業では、人を増やしたため資本装備率が低下し、賃金が上げられなかった。

結局、日本の衰退を加速させる原因は、経済政策の誤りだとする。日銀の低金利政策によって円安が進み、国内の物価が上昇し、国民生活が圧迫されている。日本企業は低金利でないと生き延びられない状態になってしまった。そして生産性が低下し、国際競争力を失った。それにもかかわらず、政府は次の選挙のことしか考えず、「産業政策」の実態は特定企業への補助金で、その対象となるのは衰退産業である。この衰退の道から脱却するには、経済政策の基本を変え、低金利とばらまきをやめなければならない。さらにリモート医療や生成のような新しい技術を積極的に取り入れる必要がある。これらの改革を行うには、国民の自覚が一番求められる。この意見は岩下さんの「国民のマインドセットの変革」が必要という意見に通じるものである。

Chris Miller, "Chip War: The Fight for the World's Most Critical Technology" (Kindle version)

1991年に、フレッド・ウェー・ショクスキ、青木栄一 訳「日米半導体戦争 チップウォー」（経済界）という本を翻訳で読んでいる。1992年には菊池誠「日本の半導体四〇年」（中公新書）を読んだ。1980年頃、bitに連載されて本になった北正満「IBMの挑戦」「IBMとの攻防」（共立出版）とか、瀬見洋「日米半導体戦争（正・続）」（日刊工業新聞社）などを読んだ。この1980年代前半はまだ米国が強かったが、後半から90年代にかけては、まさに日米半導体戦争という状況になった。さらにその後、日本の半導体産業は、台湾、中国、韓国に抜かれ、すっかり落ち込んだ。ずいぶん変わったものである。

本書は、Shockleyによるトランジスターの理論と発明から説き起こし、半導体の産業の発展の歴史をあますところなく語る。KilbyはTIで集積回路を発明したが、独りよがりな傲慢なShockleyと対照的に、人柄がよかったらしい。Shockleyが設立したShockley Semiconductor Laboratoryから、Gordon MooreやRobert Noyceを含む8人が反乱を起こし、独立してFairchildを作ったのが1957年である。そのMooreとNoyceらは、さらに後の1968にIntelを設立している。

このような歴史をここで順に追っていたら、きりがいいしあまり意味もない。とにかく、Fairchildは軍に頼っていた分野を家庭製品に拡げ、大量消費市場を相手にすることで成功する。そこにNECや東芝などの日本の半導体産業が入ってくる。この日本との戦いについては、これまでもいろいろ読んできたが、日本の半導体の品質のよさを、本書はかなり冷静に評価している。

その後のTSMCの勃興と市場支配の経緯はあまりよく知らなかったが、本書のハイライトである。設立者のMorris Changは、本書の重要な主人公である。Morrisは中国本土の出身で、香港で育ち、米国に渡ってHarvard, MIT, Stanfordで教育を受けた。台湾に行ったのは、1968年が初めてだったという。TSMCは世界最大の半導体受託製造企業、すなわちfoundryである。Foundryの概念は、チップの設計と製造を分離し、設計者は外部にいてfoundryはもっぱら外から持ち込まれた設計に基づいて、製造を行うというものである。

写真蝕刻(Photolithography)の装置は、ニコンとキャノンが圧倒的なシェアを持っていた時代があった。いまや、極端紫外線(Extreme UltraViolet radiation; EUV)を使う時代で、その技術はオランダのASMLが握っているということだ。EUVとは100nmから10nmという世界である。

Walter Isaacson, "Steve Jobs: The Exclusive Biography" (Kindle version)

長い本だ。といっても568ページだから、メチャクチャに長いわけではない。しかし、白内障手術後快調に見えていたのが、最近少しずつ歪みを生じてきて読みにくくなってきたせいで、よけい時間がかかった。

この著者のダヴィンチは面白く読んだが、なんと今度は時代を大きく飛び越して、現代のジョブスの伝記を書いた。アインシュタインやフランクリンの伝記も書いているらしいが、比較的最近出たのは、Elon Muskである。とてもそこまではつき合う気がしない。

しかし、このJobsの伝記はよくできている。Jobsが死んだのは2011年だが、この本はその直後に出版されている。著者の前書きによる

と、IsaacsonがJobsから伝記を書かないかという話を受けたのは、2004年だったという。そのときは、JobsはAppleで次々と新製品を出しているときで、まだこれからさまざまなことが起こる人生だろうから、早すぎると断ったという。その後もJobsから要請があって断ることを繰り返していたが、2009年に妻のLauren Powellから、伝記を書くなら今だと言われたという。そのときJobsは、2回目のガンの手術を受ける直前だった。そのことは世間に対して秘密とされたが、Isaacsonはそのときに、この本を書くことを決意する。

手術は奇跡的に成功し、Jobsはさらに2年生き延びるが、その死に至る過程が詳しく記録されて、本書の特徴となっている。もちろん、伝記として生い立ちから書き始められ、Jobsを始めとする多くの人物に取材し、その波乱万丈の人生と、天才の半面にあるきわめて特異な性格を、余すところなく描き出す。当人の説明では、SteveからもLaurenからも、遠慮せず悪いこともすべて書いてほしいと言われたとのことで、それが事実だとしたら確かにその約束を十分に利用して、赤裸々な物語としている。

Jobsの特性の一つとして、"reality distorsion field"という用語がたびたび使われる。これは古くからのJobsの同僚の間でよく交わされたセリフらしいが、Jobsばしばしば現実を捻じ曲げたことを言い、それに基づいた主張を展開するという彼らの経験に基づいた話のようである。実際、その具体例は本書でもよく登場するし、実際にこういう人物を相手にするのはたまらない、という感想を抱かせる。しかもそのような思い込みによる主張は、翌日にはまったく逆転するということも、しばしば起こるらしい。

この本はしばらく前に買ったのだが、読み始めたきっかけはNHKのドキュメンタリーでジョブズが取り上げられたのを見たからであ

る。それは2023年6月17日に放送された「日本に憧れ 日本に学ぶ 〜スティーブ・ジョブズ ものづくりの原点」だったようだ。ジョブズが川瀬巴水などの新版画を収集しており、またソニーの盛田に敬意を持ちそのウォークマンなどの製品を評価していたことが、初めに紹介される。さらに、ジョブズを追い出した張本人のスカラーが出てきて、ジョブズが日本の美意識に感化されていたことを語る。

さらにその後、Prime Videoで「スティーブ・ジョブズ 自由の精神 2011」 "Steve Jobs: Billion Dollar Hippy"というドキュメンタリーを見た。2011年というJobsが死んだ年に出されたドキュメンタリーで、長さも49分と短いが、やはりJohn Sculleyが出てくる。SculleyはJobsを追い出したが、Jobsから見るとSculleyの時代にAppleはなにも創造的な製品を産み出せない会社になってしまったということになる。しかし、最初はJobsの方が惚れ込んでSculleyを迎え、2人はまるで恋人同士のような時代があった。Jobsが死んだあとでは、Sculleyもそのすごさを認めない訳にはいかなかったのだろう。

Jobsがそのすごさを発揮するのは、Appleを追い出された後である。Apple IIを作ったのはStephen Gary Wozniakであったが、Jobsの才は、それを製品化し企業として生産し販売するところに現れた。その後、Macintoshの開発では、Xerox PARCで産み出された技術を、製品化するということがJobsの先見の明が生かしたが、開発チームの運営にごたごたがあり、製品としても大きな反響を呼んだわりには売れ行きはよくなかった。Appleを追い出されたあとは、まずNeXTという会社を設立し、UnixベースのOSでMacintoshと同じようにユーザ・フレンドリーなインタフェースを持つコンピュータを開発するが、これもあまり売れずに終わる。さらにAlan Kayにより、George Lucasの映画スタジオのコンピュータ部門を紹介される。そ

れがきっかけでその部門をJobsが買収することになり、Pixarという会社名を付け、そこがToy Storyを作ってヒットする。

Appleに戻る経緯は少しややこしいが、いろいろな人からの説得があり、iCEOとして戻ることになる。iはinterimの意味で、一時的なつもりだった、ということになる。しかし、iMacのデザインで世間を驚かし、Appleが活性化する。そのデザインの中心人物がJony Iveで、その後のiPod, iPhone, iPadの成功の多くは、Iveによるデザインに負うところが大きい。

しかし、Jobsの能力が示されるのは、そのようなプロダクトだけではない。iPodに連携しiTunesをアプリとして出すが、iTunes上で曲を1曲ずつ売るというビジネスを、大手のレコード会社を説得して認めさせてしまう。音楽業界もNapster以来のただコピー文化に対応するために、Jobsの案に乗らざるをえない、という事情があった。

もう一つ、Jobsのセンスが発揮されたのがApple Storeである。ショッピング・モールに店内のデザインや調度に贅を尽くしたコンピュータの小売店を開くという発想は、他の人間には考えられなかった。それをまずVirginiaのTyson's Cornerにオープンし、その成功をもとに、New York 5番街を始めとして全世界に出店していく。

Jobsの一生は、劇的な要素に満ちている。人間としてとてもつき合いたくない人物だが、その異常さこそが実りを生んだのだろう。

Steven Pinker. "Enlightenment Now: The Case for Reason, Science, Humanism, and Progress" (Kindle version)

この本とChip WarとSteve Jobsを並行して読んでいて、どれも長いし（本書は576ページ）英語だし、とにかく時間がかかったが、相継いで読み終えた。しかし、いつもながらPinkerの筆力には感嘆させられる。

今の時代、これだけ真正面から啓蒙主義、啓蒙時代を称賛するのは、ある意味で勇気のいることである。しかし、Pinkerは、今の時代だからこそ改めて啓蒙を強調したいということである。副題にあるように「理性、科学、ヒューマニズム、進歩」の意義と価値を、高らかに歌い上げるというのが、本書の趣旨である。

啓蒙主義は18世紀に起こったとされるが、それに先行する17世紀の科学革命が道を切り開いたと見ることができる。歴史家David Woottonを引用して、たとえば1600年の教養ある英国人は、魔女が嵐を起こして船を沈めることを信じ、ユニコーンの角を見たことがあると言う。今やっている大河ドラマは紫式部が主人公だが、安部晴明が出てくる。そうではなくても、源氏物語にたびたび出てくる方違えなどの迷信は、そんな時代に生まれなくてよかったと感じさせる。しかし、啓蒙主義が生まれた直後から、反啓蒙主義(counter-enlightenment)が起こる。旧来の勢力でこれを押し出すのは、宗教と国家主義ないし愛国主義である。さらに反科学の思想がこれに同調する。

インテリは「進歩」を嫌い、悲観主義や懐疑主義の方向に傾く。とくにPinkerが批判するのはFriedrich Nietzscheであり、Michel Foucaultである。

本書が出たのは2018年のトランプ政権の最中であるが、書かれたものの多くはまだ大統領選挙の最中であつた。以下のような告白がある。

進歩についての章を書いていたとき、各章の終わりに「しかし、これらの進歩はもしドナルド・トランプが勝利したら脅かされる」という警告を付けるように、という素稿の読者からの圧力を受けて、それに逆らうのに苦勞した。

その後、トランプは2020年の選挙で敗れ、さらに今年2024年は、またバイデンとの戦いを今度は有利に進めていたが、民主党が候補者をバイデンからハリスに変えてから、やや劣勢になっている。

Arthur Conan Doyle, "The Adventures of Sherlock Holmes" ("The Complete Sherlock Homes" Kindle version)

多く的人是シャーロック・ホームズものを子供時代に読むのだろうが、ぼくはあまり読んだ記憶がない。その中では、この短編集に収められている"The Red-Headed League"は、「赤毛連盟」という題で中学生のときに読んで、感心した記憶がある。しかし、その本は手元にないし保有していた記憶もないので、おそらく学校の図書室で借りたものではないかと思う。それにしては、本書の他の作品は記憶にない。

これまで読んだ2篇は長篇だったが、これは短編集である。おそらくSherlock Holmesの人気は、この作品集によって定まったのだろう。もともとはThe Strandという雑誌に1891年から1892年にかけて1編ずつ掲載されたものということで、全12編からなる。作品の並べ順は雑誌に発表された順そのままらしく、物語の時間はかなり行きつ戻りつする。たとえば、すでに前の作品でWatsonは結婚してBaker Street を去ってHomesと同居していない。しかし、この作品集では、Homesと暮らしていた時代に設定された話も後の方で出てくる。

相かわらず，外国が絡む話が多い．"A Scandal in Bohemia"はボヘミアの王の話である．"The Five Orange Pips"は米国のKKKの話である．KKKがどんな団体であるかについてはほとんど語られず，秘密結社らしいことは示されるが，黒人をリンチするというような行動については言及されない．扱いとしては，"A Study in Scarlet"に描かれるモルモン教団と同じような感じである．"The Adventure of the Noble Bachelor"では，米国の大金持ちの娘が，英国の貴族と結婚するためにロンドンに来る．

読む方としては，1回1回が適度な分量で，好ましい．全12編というのも，本として適度なサイズだと思う．どの話でもHomesはタバコを燻らして沈思黙考しているばかりでなく，ときにきわめて行動的になる．場合によっては変装や演技を織り交ぜて，隠れた事実を暴き出す．

渋沢栄一 「論語と算盤」（国書刊行会，電子版）

NHKの大河ドラマで渋沢栄一が取り上げられたのは2021年で，今から3シーズン前である．また，今年の7月3日に新券が発行されたが，新しい1万円札の顔が渋沢栄一なので，この本が改めて宣伝されている．この本は，渋沢の講演をなどを集めて編集されたもので，1980年に出版されてその後文庫化もされ，またこのような電子版も出された．新券の発行に合わせて，現代語訳も数種類が出されてその宣伝で本書を知ったのだが，さすがに本文に関しては現代語訳は必要ない．ただ，引用される論語などの古典は，訳があった方がありがたいかもしれないが，昔買って読んでいない吉川幸次郎の「論語（上・下）」を引きながら読めば，勉強になる．この吉川の本はずっと積読できたが，下巻に詳しい索引が付いていて，論語の引用を調べるのに便利なことを改めて知った．

「論語と算盤」の方は、作り方がそもそも講演などの短文の寄せ集めで、編集者の「あとがき」にあるように重複も結構あり、本としての完成度は低い。福沢の名前はときどき出てくるが、「福翁自伝」の面白さと比べれば、内容もはるかに劣る。記録的に価値がありそうな証言もほとんどなく、多くの話は訓話的なもので、面白味に欠ける。

渋沢は思想的にはきわめて保守的であり、天皇のもとに国体を守るという意識が強く、たとえば幸徳秋水に触れるところでは、「かの幸徳一輩が抱いていた危険思想のごときは、明かにその（世界的害毒の）一つであるとい言い得るのである。」と何らためらいもなく言い放つ。一方で、タイトルの「算盤」が表すように、实际的で合理的な精神を持っていたことは確かだろう。だからこそ実業で成功したに違いない。儒教でもとくに、キリスト教や仏教に比べ、奇蹟がまったく出てこない点を評価しているのは、渋沢の合理性を示している。

こはあるいは余が一家言たるの嫌があるかも知れぬが、ことに孔子に対して信頼の程度を高めさせるところは、奇蹟が一つもないという点である、キリストにせよ、釈迦にせよ、奇蹟が沢山にある(p.167)。

前に山本七平「近代の創造 ― 渋沢栄一 の思想と行動 ―」を読んだことがあるが、評伝としては中途半端なものだった。本書を読んでも渋沢の偉大さはあまり伝わってこない。しかし、幕末から昭和まで91年の生涯で500社以上の会社、経済団体、教育機関を設立し、「日本資本主義の父」と言われるだけの足跡を残したのは、確かだろう。

朝比奈秋「サンショウウオの四十九日」（芥川賞）

最近の芥川賞受賞者は、いわゆる四大文芸誌に投稿を繰り返し、運よく新人賞を取ればさらに作品を発表する機会が増えて、それらの中で芥川賞候補作に選ばれて道が開ける、というパターンが多い。ところがこの朝比奈秋という作家はもともと消化器系の医者で、頭の中で話が湧き上がってくるのでそれを書いてみて、どうもこれは純文学と呼ばれるジャンルのものに近いらしいと気づき、それまで読んだことのない純文学作品を初めて読んでみた。それが芥川賞受賞作の田中慎弥と西村賢太の小説で、そのあと純文学系の新人賞に応募してみた、という経緯を経て芥川賞を獲ってしまった、という人である。

杏と瞬という結合性双生児の話である。それもベトちゃんドクちゃんのように外見のかなりの部分が分かれているのではなく、「身体だけでなく頭も顔もくっついていて、くっつく位置は場所によって少しずれたりしている」という設定である。その上で、どちらも独立した意識をもち、かつ相手の考えていることが、言葉を通さずに理解できる、という仮想的な組み立てとなっている。この二人が交互に独白するという形で話は進んでいき、その上で、死ぬときは同時に死ぬのかといった生と死の問題や、意識とか個性とはなにかという問題が、巧みに扱われる。

この2人の父親が、胎児内胎児という恐ろしく奇異な設定の下に生まれたことになっている。杏と瞬の祖母の身体から生まれた男の子が、だんだん痩せていくので胃カメラで検査したら、胃が何かに押されている。そこでレントゲンを撮ると、赤ん坊の右脇腹の辺りに胎児の骨が写っている。それが胎児内胎児と判明し、半年後に取り出されたのが2人の父親である。そちらの方が最初に生まれた子よりよく育っていて、もとの子供の方は、杏と瞬にとっては伯父さんと呼ばれることになる。しかし、結合性双生児の話だけでも十分に

特異なのに、なんでこんな設定を加えたのか、よく分からない。評者の平野啓一郎もそう感じたらしく、

「胎児内胎児」と「結合双生児」という二つの特異な設定が、相乗効果よりも寧ろ相殺している憾みがあった。

としている。

その「伯父」はこの物語の初めの方で病気で衰弱して亡くなり、その葬儀に一家で出かけるというのが重要なストーリーの展開となっている。さらに四十九日にも集まるのだが、それが表題の一部に反映している。表題の「サンショウウオ」の方は陰陽図から来ていて、双生児を象徴した陰陽図を、2匹のサンショウウオが絡んだ形と見なすことから来ている。

最後はどのように決着をつけるのだろうかと思っていたら、瞬が扁桃腺を腫らして半分意識がないような状態になるが、そこから意識が戻ってくる。その辺りの書きぶりが巧みで、話として決着が付くわけではないが、なんとなく終わりに来たという気にさせられる。

松永K三蔵「バリ山行」（芥川賞）

朝比奈の作品は奇想天外な話だったが、この松永の作品は対照的に、リアリズムに徹した筋立てであり文章である。しかし、会社のできごとにしても山行の話にしても、きわめて巧みに作られていて、芥川賞の作品でこれほど読むことの楽しみを感じさせるものは、珍しい。とても感心した。

アプリのヤマップが出てきて、この話のある意味では主人公の「妻鹿（めが）」という山男の行動を捉える手段として重要な役割を果たす。それが出てくる際の場面は、

——バリ。バリってなんですか？ 私がそれを訊こうとしたとき多聞さんが前方から下がってきた。「ね、妻鹿さん！アプリ、ヤマップやってないんですか？」

「俺はヤマレコ」

「あ、わたし、ヤマレコもやっています！アカウント教えてくださいよ、妻鹿さんのルートみたいです！」

である。ぼくはよりそな中小企業振興財団と日刊工業新聞社が主催する「中小企業優秀新技術・新製品賞」専門審査委員会の委員長を、2009年から2021年まで12年間勤めたが、2013年の第26回るとき、この「ヤマップ」を優秀賞の1つに選定している。そのときぼくが書いた推薦文は、

負傷・遭難などの思わぬ事故がハイキングや登山あるいは川下りなどのアウトドア・スポーツの最中に生じた場合、肝心な携帯電話がつかないということはよく聞く話である。日本全国で携帯の電波が届く範囲は都市部に限られ、山間地は電波到達範囲外がほとんどである。しかし、事故でなくてもそのような野外で地図情報・位置情報が必要となる場合は多い。本製品は、携帯・スマホに必ず備えられているGPSと、独自の地図データを使って、電波が届かない地域でも、地図上の現在地、ルート、その他の情報を提供するものであり、有用性が高いと評価される。また、用途は屋外でのレクリエーションに限らず、都市部においても震災などで不案内な場所に避難し、あるいは徒歩帰宅を余儀なくされた場合で、通信障害で電波が使えないときにも役に立つ。

GPSを使うアプリはほかにも多いが、携帯の電波が届かないことを前提に、あらかじめ保存してある地図情報と組み合わせ、登山などに有用な情報をきめ細かく提供する点に独創性が

ある。地図データは国土地理院のものをうい、それに山小屋などの情報を付加している。地図の種類の方さと、ユーザ間のネットワークの組織化で最新情報を取り込む体制を作っている点も、ユニークな点と言える。そのネットワークでは、写真やコメントを共有する仕組みもある。

小説の中の会話からすると、他にも類似アプリがその後出ていて使われているらしいが、ヤマップもその名前が最初に出てくるところからしても、健在らしい。妻鹿はアカウントを人に教えないが、山ガールの「多聞さん」がアカウント名から類推して突き止め、それを語り手の波多がときどき見ることで妻鹿の山行を密かにフォローする。そのようなコミュニケーション機能は、当初のヤマップのときから売りの一つだった。

引用した会話の中に出てきて、表題にもなっている「バリ」というのは、バリエーションの意味で、通常の登山道を外れる独自のルートのことという。妻鹿は一人でそういうバリを探求しているが、波多が頼み込んで同行させてもらう。その山行の描写がこの作品のハイライトだが、かなり長いページがそれに割かれる。並行して工事会社である波多たちの会社の経営方針が変わり、ある元請け会社の下請けに徹することになり、それがきっかけで業績が悪化し、リストラが始まろうとしている。妻鹿はリストラの有力候補らしい、という話が絡まる。

作者はこのような業界に勤めた経験があるのか、会社や業界の描き方がうまく、登場人物は波多の奥さんを除けばすべて同じ会社に勤めるの人であるが、その人物の描き方もうまい。

養老孟司, 奥本大三郎「ファールと日本人」 (かや書房)

奥本大三郎訳のファーブル昆虫記を全巻読んだので、養老孟司とのこの対談は面白く読んだ。手軽に作られた本で、読むのもあっという間だったが、それでも、なるほどと思うことがところどころあった。

奥本も養老も子供のころから昆虫少年で、膨大なコレクションを持っているらしい。奥本がたびたびそれを自分の死後どう処理するかを気にしているのに対して、養老は考えていない、「順送りでお互いさま」と言っている。前に奥本大三郎「虫の宇宙誌」を読んだとき、次のような感想を書いた。

僕は昆虫少年ではなかった。幼稚園の頃だったか、家で昆虫採集の道具一式を買ってもらって、セミや蝶の標本のようなものを作ったことはあったが、それ以来のめり込んだことはない。しかし、本書で分かったが、戦前から日本の家庭では、男の子の教育用に昆虫採集の道具をそろえるということは、かなり広く行われていたらしい。これはどうも外国（中国やヨーロッパ）ではあまりないことのようにだ。

日本で植物も昆虫も減っていることが繰り返し語られる。レイチェル・カーソンの「沈黙の春」はDDTによって鳥がいなくなれることを警告したが、イギリスの生物学者イヴ・グールソンが「サイレント・アース」という本を出して、その日本語訳が出ている。それは主にネオニコチノイド系の農薬で、昆虫がいなくなっている世界について警告しているのだという。確かに子供のころと比べると、まずハエがいなくなった。それと比べると家の庭では力はまだいるという印象があるが、ゴルフ場に行くと力がまったくいないのにはいつも驚かされる。ゴルフ場だけでなく、公園にもいない。養老の引用によると、グールソンは1990年から2020年の間、ドイツの自然保

護区で毎年虫を取ってきたが、その30年間で虫の数が7割から9割減ったという。

養老孟司は栄光の4期生で、ぼくのちょうど10期上であるから、86か87歳だろう。それで本書でも次のような発言がある。

養老

イエズス会系の学校は、世界中でいい教育をするという評価がありますね。だから、僕も初めての外国人に会って、「おまえ、英語をどこで習った？」と聞かれて、「ジェズイット（イエズス会）だ」と答えると、納得して黙ってくれる。僕はイエズス会を教育母体とするミッションスクールを出ていますから。（p.105）

村上春樹「ノルウェイの森」（講談社文庫 電子版）

ビートルズの「ノルウェイの森」の原題が、"Norwegian Wood"であることに今頃気がついた。Woodsではないので、「森」のイメージではない。Lennon-Macartneyの曲だが、作ったのは明らかにJohn Lennonである。その原詩は、Johnの浮気の相手の女性の部屋を暗示しているらしい。つまり壁や床や家具に使われている木材が、ノルウェイ産ということのようだ。村上春樹はそんなことは百も承知の上で、この日本のレコード会社が付けた題を借用したのだろう。

何度も書いたように、これまで村上春樹の小説は、ほとんど読んだことがない。これまで読んだ小説らしいものは、「ダンス・ダンス・ダンス」だけである。だから何か読んでみようとは思っていた。それで、ビートルズの曲に関する発見が直接のきっかけというわけではないが、文庫の電子版があったので買って読んでみた。こ

れは1987年に刊行されたもので、そのとき村上は36歳である。小説の冒頭でも

僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。（中略）飛行機が着陸を完了すると禁煙のサインが消え、天井のスピーカーから小さな音でBGM流れ始めた。それはどこかのオーケストラが演奏するビートルズの「ノルウェイの森」だった。

となっていて、村上の実年齢時間に同期させている。小説の主人公の「ワタナベ君」は、この物語の始まりは大学に入学したばかりの18歳である。それが1968年と設定されていて、村上自身が早稲田大学に入った年である。村上は1949年1月生まれで、ぼくとちょうど1年下になるが、1浪しているので学年は2年下になる。だから出てくる社会的な現象には、こちらとしてもきわめて馴染みがある。ただ、1968年は学生運動が吹き荒れた年であるのに、政治的な話は一切出てこない。

やはり、村上の得意な音楽でこの小説に登場するのは、ぼくも親しんだものばかりである。ビートルズ以外では、バド・パウエル、セロニアス・モンク、ジョン・コルトレーン、ジム・モリソン、マイルス・デイヴィス、マーラー、ラヴェルなど。また、文学ではトルーマン・カポーティ、ジョン・アップダイク、スコット・フィッツジェラルド、レイモンド・チャンドラー。さらに、第4章から6章にかけて、ぼくの青春の愛読書と言える「魔の山」が何度も出て来るのには驚いた。

露骨な性描写の場面が多い。村上は1935年生まれの大江健三郎を意識しているに違いないが、露骨な性描写という点では、まさに大江健三郎を継承している。この小説が、総計で1000万部も売れたとい

うのには驚いたが、その人気の一端はセックスに関する描写や会話にあるのだろう。そういえば大江の「性的人間」が本として言及される場面がある(p.101)。

直子と緑という、精神を多少病んだ女性がワタナベの相手として出てくる。緑は精神を病んでいるとまでは言えないが、相当に変わっている。ほかに、直子の療養している施設で一緒に暮らすレイコという女性がいて、彼女ももとは患者だったが今は職員のような立場である。このレイコは少し年上であるが、直子が死んだあと、ワタナベはレイコとも一度セックスをするなりゆきとなる。

酒を飲む場面も多い。ビール、ワイン、ウィスキー、日本酒など。しかし、銘柄や味にはほとんど触れず、ワインについて蘊蓄をたれたりしないのにはさすがさを感じる。20歳の主人公だから当たり前かもしれないが、シーバス・リーガルだけが銘柄として一カ所にだけ出てくる。

この作品について、村上自身が「100パーセントの恋愛小説」というキャッチコピーを付けているというが、恋愛小説というより性愛小説という感じがする。ただ、単純なポルノ小説というわけではなく、ある種の叙情性がある。

野口悠紀雄「アメリカはなぜ日本より豊かなのか？」（幻冬舎新書 電子版）

8/30の藤崎Zoom会するとき、この本が朝日新聞の広告に出ていたの
で、メンバーでおそらく朝日新聞など取っている人はいないだろう
と思って、紹介した。すぐに岡本さんと松田さんが注文したとの連絡
があったので、紹介した手前ぼくも買って読まなければという気

なり、アマゾンで電子版を見つけて購入した。日経新聞には翌日広告が載った。

この間読んだ野口の「どうすれば日本経済は復活できるのか」と同じような主張が繰り返されるが、この間、株価の上昇と大暴落や米国大統領選民主党候補がバイデンからハリスに変わったなど、大きな変化があった。本書はそれらの最新の動向を抑えている。

全体の内容は、タイトルが示すとおりである。野口は若いときにアメリカに留学して、その豊かさを目の当たりにし、日本との差を痛感した。その後、日本も豊かになったが、いまだに日米間には豊かさにかかなりの差があるとする。

その日米格差の例証として、日米給与格差が約2倍であることをまず挙げる。ソフトウェア・エンジニアの給与は、アメリカは日本の4倍だという。さらに金融専門家の初任給は、アメリカは日本の7.5倍だとする。今年の春闘で5%を超える賃上げがあったと「日本復活」と大騒ぎしているが、定昇を除いたベースアップ率は3%台で、格差解消にはとてもつながらない。

なぜこのような差ができてしまったのか、野口は抽象的に言えば「アメリカの豊かさの源泉は、異質なものへの寛容と多様性の容認」にあるという。寛容こそが、古代ローマ以来、覇権国の条件だと指摘する。確かに昔のアメリカは何でも見せてくれ、何でも教えてくれた印象がある。また、異質の容認という点ではコロナ・ワクチンを開発したカリコー・カタリンに代表されるように、移民による発明や企業化に成功した例が多い。そのような可能性を与える国であることが、アメリカの強みである。

超低金利政策で、見かけの企業利益が増加した。生産性を上げたり新技術や新製品を開発するという努力をせずに企業は収益が確保できたので、それが産業の不活性化を招いたとする。それに関連して、野口は次の2点を指摘する。第一に、原材料の輸入価格は上昇するが、それを販売価格に上乗せして転嫁できた。第二に資金調達コストが低下して、収益率の低い投資も行われ、それで生産性が低下した。この2点は野口の立論の上で重要なポイントらしく何度も繰り返されるが、他の論点と異なりその根拠となるデータや証拠が示されない。それがやや不思議である。

Sharon Bertsch McGrayne, "The theory that would not die"(Yale University Press, Kindle version)

Thomas Bayesは1701年生まれで1761年に死んだ、18世紀の人だ。イギリスの長老派(Presbyterian)の牧師で、イギリス国教会でもなければカトリックでもない。

Bayesの理論は、次の条件付き確率方程式でほぼ言い尽くされている。

$$P(A|B)=\frac{P(B|A)P(A)}{P(B)}$$

ここで、Bという現象が起きているときに、その原因がAであることを、この条件付き確率の高さから推定する、というのがそのアイデアである。P(B)はAが起きる前の事象Bの生起確率という意味で、事前確率と呼ばれる。P(B|A)はAが起きた後のBの確率という意味で、事後確率と解釈される。P(A|B)は、事象Aに関するある結果（データ）が得られたとき、P(A|B)の乗算によって事象Bの確率が事前確率から事後確率へと更新されるという意味で尤度と呼ばれる。

本書では、このような数式は一切出てこない（ただ、Laplaceのところで、 $P(C|E)=\frac{P(E|C)}{\sum P(E|C')}$ という式が出てくるのが唯一の例外である）。しかし、多くの言葉でベイズの着想とその後の発展、および数学的な統計学との争いの歴史が語られる。

Bayesの方法は、最初の信念（事前確率）を客観的な観測で得られた事実によって修正することを繰り返して、信念の精度を徐々に上げていくというものである。しかし、最初に与える推測値というものが、まず批判の対象になる。さらに推測の根拠がない場合は、すべての原因を数え上げ、それらを等確率とする、という考え方が、より厳しい批判の対象となる。

Bayesのアイディアはエッセイとして書かれたが（他の人との共作という可能性があるらしいが、共作者は特定できないらしい）、生前には出版されなかった。しかし、Bayesの死後、Bayesの年下の知人でやはり長老派の牧師であるRichard Priceに、Thomasの親戚が彼の残した数学関連の論文を見てくれるように頼んだ。Priceにも数学の素養があり、Bayesの事象から原因を推測するという手法の価値を理解し、必要な校訂を加えた原稿を王立協会（Royal Society）に送って出版を依頼した。それで本書の著者McGrayneは、現在の習慣からすれば、Bayesの法則はBayes-Priceの法則と呼ばれるべきという。

Bayesと独立に同じような発想を持ったのが、すでに名前を出したあのLaplaceである。力学・天文学で大きな足跡を残したPierre-Simon Laplace、その人である。Laplaceは天文学上の問題、たとえば木星は公転速度を徐々に上げている一方、土星は速度を落としている、という観測があるが、観測値のデータにばらつきがある。それらからもっとも正確なものの推定する、という問題に対して、確率的な推論方法を研究して、Bayesと同様な手法に思い到ったとい

う。1773年にそれをアカデミーでそれを読み上げ、翌年の1774年に論文として出版された。その後、1781年にRichard Priceがパリに来て、Laplaceをよく知るCondorcetにBayesの発見について教え、それを聞いたLaplaceが直ちにその意義を認めた。先ほど挙げた式は、Laplaceが明示的に書いたものではないが、McGrayneが現代の読者のために今ならこう書くところだと、解説用に示したものである。

1810年にLaplaceは中心極限定理を発表しているが、これは科学における、また統計学における偉大な発見の一つとされる。Laplaceが著名となった蔭でBayesは、忘れられていった。

その後の歴史はBayes派と頻度派(frequentist)との戦いだったが、長く前者は劣勢で、科学的な客観性がない、という非難を浴びてきた。後者の中心人物が、Karl PearsonとRonald Fisherである。本書ではこの両派の戦いに多くのページを割いている。本書はBayes理論を称揚する立場で書かれているが、そこからするとFisherは悪役である。彼の生涯は論争に明け暮れたらしいが、とくに徹底的な批判の対象としたのがBayes派である。Fisherは性格的に大変傲慢で、eugenicsの信奉者で推進者だった。アンチ・ベイズ派としてFisherとPearsonとNeymanが著名らしいが、この3人もお互い同士で対立しあい、論争を繰り返したらしい。

学生の頃、朝香鉄一先生に統計数学を習ったが、そこで検定や推定という概念を勉強した際に、Fisherの名前が出てきた。何より、数理の図書室にはFisherの全集があり、まったく読んだわけではないが、偉大な学者なのだろうと思った印象がある。その後、ソフトウェア工学の世界でも実験的、あるいは実証的なソフトウェア工学が隆盛になったとき、p値による検定といった論文がおびただしく出てきた。そのFisherがこんな性格の人物とは知らなかった。

第2次大戦前はBayes理論はタブーになっていたというが、戦争中にEnigma解読にTuringが用いた方法は、実質Bayseの手法だったらしい。また、Shanonの通信理論でもBayesが使われている。雑音のある通信から正しい信号を取り出すのは、暗号化と復号化と同じ方法が使えるからである。bitやソフトウェアという用語を作ったとされるJohn Tukeyもこの話の流れで登場するが、Tukeyはその後の冷戦時代に暗号や諜報活動の裏方として活躍したらしい。さらに、Nixon対Kennedyの大統領選挙結果の予測をNBCテレビが派手に扱ったとき、TukeyがBayesを使って正しく予測したことで知られるらしい。またFederalistというプロジェクトで、Bayesが用いられて成果を出したことがある。米国建国時代の史料でFederalist文書というものがある。85編の新聞記事で、著者はAlexander Hamilton, John Jay, James Madisonの3人だが、署名がなく誰がどの記事を書いたのか特定できない。歴史家がさまざまな方法を使って、そのほとんどを特定してきたが、12編については一致を見なかった。それをハーバード大学のFrederick MostellerがDavid WallaceとともにBayesを使って解析した。そのプロジェクトの当初、Mostellerが相談した相手の中に、Tukeyもいた。

Bayes派は日陰の時代も長かったが、コンピュータが発達して楽に計算ができるようになると、いろいろな応用で結果を出すようになった。とくに確率分布を生成するのにMarkov chain Monte Carlo (MCMC)が使われるようになってから、ソフトウェア・パッケージが流通して使用が拡大したようである。

著者のSharon Bertsch McGrayneは、科学についての著作がいくつかあるライターらしい。だから、技術的なところの詳細については、あまり知識がないのかもしれない。たとえば、一貫してPCのことを

microcomputerと書いているのが、ちょっと変だ。ただ、資料はよく追いかけていて、よくこれだけの物語を書いたものだと思う。

シェイクスピア、三神勲 訳「リア王」（河出書房 世界文学全集 1）

新聞で「リア王」の公演に関する記事があった。多分

「2024/9/16(月・祝)～2024/10/3(木)K A A T 神奈川芸術劇場プロデュース」というものだったろうか？ それでまず、"William Shakespeare: The Complete Works (Illustrated)"の Kindle 版を購入した。Amazon以前のBook of the month時代にこの紙版を買っているが、全然読んでいない。それで"King Lear"を読んでみようとしたが、さすがにそう簡単には読めるものでないので、まず翻訳をみてみようとして、学生時代に読んだものを引っ張り出した。シェイクスピアの翻訳ものはそれほど持っておらず、まず中央公論社の「世界の文学 1」に福田恒存訳があるが、そこには「リア王」は入っていない。そのあとこの河書房の世界文学全集を買っているのだが、これは三神勲というあまり聞いたことのない人の訳である。

以前、TVでBBCが製作したShakespeareの全演劇シリーズがあり、日本でもNHKで放送された。BBCで放送されたのは、3 December 1978 to 27 April 1985. これをどこかでストリーム配信していないかと探したが、DVDの37巻の全集しか見つからず、それを買うとなると40万円以上かかる。

ストーリーはさすがに記憶にあるし、黒澤明の「乱」がこれを下敷きとしているので、映画を見たのが昔でも、TVで放映されたものも見ていたので、記憶が更新されてもいる。しかし、今回読んでみて、コーディリアを含めて皆死んでしまうという話だったのには、

ああそうだったのかと少し驚いた。確かに「乱」でも最後は、リア王に当たる英虎も、コーディリアに当たる三郎も死んでしまう。

池谷裕二「夢を叶えるために脳はある」「私という現象」、高校生と脳を語り尽くす（講談社）

池谷の本は何冊も読んでいるが、これまで読んだうちの「進化しすぎた脳」と「単純な脳、複雑な「私」」が、この本と同じように高校生に語るというスタイルだったことに後から気がついた。それもこれもあとから気づいたのだが、本書が相手にしている高校生は、栄光生なのである。それで思い出したが、加藤陽子の「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」も高校生相手の話を元にしていて、それがやはり栄光生だった。しかし、本の文章がどの程度リアルに実際のやりとりを反映しているかは分からないが（本書の「はじめに」に「講義を忠実に再現したものではない」と断っている）、これを読む限りは、これらの高校生の発言はみな感心するほど鋭い。事前に池谷の本をかなり読み込んでいるのだろうし、池谷による脚色の効果も相当に強そうだ。

本書は670ページもある。そのボリュームと高校生に語るというスタイルから、密度が低い大味の本かと想像してしまうが、読んでみると驚くほど中身が濃い。初めの方で、池谷が「夢と現実はどう違うか」とか「わたしって誰」とか哲学的な問いを投げかける。まるで高校生を煙に巻くための問答のように見えるが、最後にとくに第3日目にそれらが回収されるので、周到に用意された構成であることが分かる。本書は見かけによらず野矢茂樹「心という難問」と近い分野を対象にしている。アプローチはまったく異なるが、

池谷は人工知能という分野を現在の深層学習をベースとするものと等価なものとみなしているらしく

「人工知能」という単語は、どちらかというともメディアの用語で、僕ら研究者はあまり使わない。正式には「機械学習」という。(p.77)

と言って、1956年のダートマス会議で John McCarthyがAIという用語を創り広めたという歴史を無視している。

これは3日間の授業の記録ということになっているが、1日目、2日目もそれなりに面白いが、3日目が白眉である。脳を持つ生物は、何のために脳を持つのか。さらにそもそも何で生命が存在するのか、という問いにまで遡る。それに対する池谷の答えは、驚くべきものである。生命があった方が、宇宙が速く老化するという。宇宙は熱力学の第2法則により、エントロピーを増大させている。生命は局所的にはエントロピーを減少させているように見えるが、その分、外界のエントロピーを増大させて系全体のエントロピーが生命が存在しない場合より、速く増大する。宇宙はこのように熱的平衡に向かっているが、ここからの池谷のロジックには付いていけないが、その速度を速めることがよいことだという価値判断がなぜか入れられる。

あえて擬人的に表現すると、熱力学的な平衡死に達することが宇宙の目的だとすれば、エントロピーを増大させることを宇宙が望んでいる。

この擬人的表現というのが、どのような意味なのか、ピンとこない。しかし、その後の議論では、宇宙が平衡死の目的に進むこと助けることが、まるで「善」であるかのように進められるのには違和感がある。

これは1日目の話題だが、脳と脳とをつなげて、視覚や言語を介さずに他人の感覚を脳から直接受け取るという話がある。そこでこの間の芥川賞の「サンショウウオの四十九日」にも登場した、結合双生児のタチアナとクリスタのことが出てくる。

池谷は、意外と文学の素養がある。たとえば古今和歌集の「世の中は夢か現か 現とも 夢とも知らず ありてなければ」という歌を、睡眠と覚醒、夢と現実というテーマにからめて、巧みに引用する(p.219)。また、AIがシェイクスピアのソネットを真似て書いた作品が紹介されるが、それはソネット155番と題されていて、その全文が紹介される(p.341)。

知覚について驚いたのは「黄色は脳が生み出した幻覚」という話である。ヒトの網膜は3色のセンサーを持っているが、たとえばチョウは4色のセンサーを持っている。シャコにはなんと12色のセンサーがあるという。それで人はなぜ黄色を認識できるのか、という問いは、これを訊かれた高校生たちと同じように、絵の具の赤と緑を混ぜると黄色になるのと同じ原理だと思っていた。確かに太陽光をプリズムで分解すると、赤と緑の間に黄色がある。つまり黄色という波長は存在する。だから脳が赤と緑の波長の平均を取るという操作をしているのだろうか、と池谷は訊く。しかし、それが正しい説明でないことは、紫を例に取ればわかる。紫は赤と青を重ねて作れるが、光のスペクトル上で紫は、赤と青の間にあるのではなく、青の外側にある(p.446)。赤と青を混ぜて作られるような色を、非スペクトル色というそうだ。この場合、それがmagentaで、スペクトル色のvioletとは区別されるということだ。そういう基本的なことも知らなかった。

最後に参加した高校生10名に質問や感想を言わせている。そこにも池谷による脚色が相当に入っていると思われるが、それを割り引いたとしても、みんななかなかよいことを言っている。このうちの何人が、これをきっかけに研究者の道を目指していくことになるかは分からないが（過去の講義の対象となった高校生からは、池谷の研究室で研究している者が生まれているらしい）、こういう講義に参加する機会を得られたことは幸福だと思うし、それを実行している池谷は、教育者としても優れていると思う。

David Spiegelhalter, "The Art of Statistics: Learning from Data" (Pelican Books)

McGrayneの"The theory that would not die"とこの本を並行して読んでいて、あい続けて読了した。McGrayneは科学ライターだったが、Spiegelhalterはケンブリッジ大学の教授で、統計科学者である。本書はSpiegelhalterが一般読者向けに書いた本で、とても読みやすいが内容のレベルは高い。この本の特徴は、実際に起きた事件や集められたデータを使って、統計学が具体的な問題にどう答えられるか、という立場から書かれている点である。まず、取り上げられるのはHarold Shipmanという215人を殺した殺人犯の事件である。Shipmanは医者で、1975年から1998年にかけて、患者に大量のアヘンを注射して、少なくとも215人を殺害し、他にさらに45人を殺した可能性がある。ここで出される最初の疑問は、「Harold Shipmanはどんな人々を殺し、いつ殺害したのか」である。この事件の裁判のために、多くの統計学者が呼び出されたが、Spiegelhalterもその一人だった。このような興味深い事例が多く取り上げられ、統計学を社会に広く適用するための方法を述べ、その際に陥りやすい過ちについて、鋭く警告しているのが本書の最大の特徴である。

ジャーナリストが陥る誤ち，というか誤解を招く報道の仕方の一つに，薬品や習慣の及ぼす影響の表現がある．たとえばベーコン・サンドイッチを食べると大腸がんになりやすいという報道があった．もとのデータは，ベーコンを（毎日）食べる人のグループは，食べないグループと比べての大腸がん発生リスクが，18%高いというものである．この18%というのはオッズ比である．イギリスの賭け事でよく使われるオッズというものは，われわれにはあまり馴染みがないが，この本を読んでちゃんと理解した．オッズとはある事象が起こる可能性と起こらない可能性の比である．100人のうち6人が大腸がんになり，94人がならないとすると，オッズは6/94となり，あるいは6対94と言われる．日本の競馬などで使われるオッズは「勝馬投票券が的中した場合の概算払戻率のこと」であって意味合いが異なるが，賭けに当たった場合の儲けの率を表すという意味では，同じになるのだろう．それでベーコン・サンドイッチの話だが，比率が1.18だというのを，報道はガンになる確率が18%増すとした．これは明かに誤解を招く言い方である，という話である．

ほかにはよく知られる出生児の男女比率の話も，何度か取り上げられる．古くて有名なデータに，アン女王の主治医となったJohn Arbuthnotがロンドンの1629年から1710年までの82年間の出生データを調べたものがある(p.255, Figure10.1)．現在では性比は105と言われている．すなわち女20人に対し，男21人が生まれるという．これが統計的な検定の話として導入され，帰無仮説の話につながる．

タイタニック号の遭難に関するデータが取り上げられるが，これは歴史的に1回起きた事件である．そのようなデータと統計がどうつながるのかと最初思ったが，乗客乗員約2,200人のうち，生還者は約700人で，そのデータから生き残る人を予測するという設問を立てる．なるほどそういうことも統計の守備範囲かと納得させられた．

Bayesの話は第11章の"Learning from Experience the Bayesian Way"で扱われる。そこでまず、ベイズの方法は複雑なデータを活用するのに、適した新しい可能性を切り拓くという大きな利点があることが告げられる。一方で、本書でこれまで扱ってきた推定、信頼区間、P値、仮説検定、などのすべてが、無用になるという。

McGrayneの本で、Bayes派とアンチBayes派との間の長い闘いの歴史を知ったが、この章でもその歴史が振り返られる。そしてやはりSpiegelhalter自身の立場を鮮明にする必要があるとして、「私は研究者として歩みを始めるに際し、主観的なベイズ派の統計的推論の洗礼を浴びたが、それが現在の私にも納得の行く方法だと思っている。」と言っている(p.307)。

2023年

國分功一郎「スピノザー――読む人の肖像」（岩波新書）

國分功一郎は総合文化研究科の出身だが、2006年3月に博士課程を単位取得退学し、2009年5月に博士論文「スピノザの方法」で学位を得ている。総合文化研究科准教授となったのが2020年4月、教授になったのが2022年4月で、ぼくとは重なりがない。

岩波は2022年12月から「スピノザ全集」の刊行を開始した。「日本初の本格的全集」と銘打って力を入れているが、2022年10月に出たこの新書は、あたかも全集の出版に合わせたかのようなタイミングである。しかし、著者による後書きには「この本は依頼されてから既に10年以上の月日が流れてしまった」と書かれているので、必ずしも全集の出版に合わせたとは言えないのかもしれないが、岩波の戦略として意識されていることは確かだろう。しかし、著者の國分は全集の編集者として名前は出ていないので、独立した企画として進められてきたものかと思われる。

新書と言っても400ページ以上ある力作である。「エチカ」を中心に、「知性改善論」「短論文」「神学・政治論」「ヘブライ語文法綱要」「国家論」とスピノザの主要著作すべてを取り上げ、真正面から論じている。

以前にライプニッツの「モナドロジー、形而上学叙説」を読んだときに「立論に大変苦勞している自由意志の問題、神がすべてを知っているならすべては必然か、とか、なぜ世界に悪があるのか、不幸があるのか、というような問題は、神の存在という呪縛を逃れれば何のことはない」と現代の眼では思ってしまうが、ライプニッツは神

の存在を疑うことはないらしい。」と書いたが、ライプニッツと同時代のスピノザも、同じ問題に直面している。本書の序章はまずライプニッツの話から始まるが、ライプニッツがパリにいて、ルイ14世にエジプト遠征を勧めるという政治的な策略に努めていたとき、スピノザとライプニッツをともに知るチルンハウスがスピノザに、きわめて学殖が高い男に会ったが（それがライプニッツ）、スピノザが出版を考えている「エチカ」を彼に見せたらどうか、という手紙を送ったという話である。実は、スピノザはそれ以前からライプニッツを知っており、手紙のやりとりもし、会ったこともあるらしい。ただ、ライプニッツの方は政治活動上の思惑からかスピノザと会ったことは認めていないという。

本書でもやはり「神の存在証明」が初めの方の重要なテーマである。スピノザが生前実名で出版した唯一の書物が、「デカルトの哲学原理」であるが、スピノザはデカルトの論述の問題点を鋭く見つけ、その大胆な改善案を出しているという。デカルトは「省察」において神の存在証明を与えているが、スピノザもそれを受けて、しかし異なる論法によって神の存在証明を行っている。

スピノザの「エチカ」はユークリッド幾何学原論のスタイルで書かれているという。すなわち、公理を前提として定理が示され、それが「証明」される、という叙述が重ねられていく。デカルトが証明には分析的方法と総合的方法とがあると言っているというが、両者の違いは「結果を分析あるいは分解して原因に至るのが分析的方法」であり「総合的方法では、原因あるいは原理を提示した上で、そこに諸々の結果を組み合わせて証明が行われていく」というのが、國分による説明である(p.48)。現代の言い方では前者は帰納的、後者は演繹的というところだろうが、おそらくニュアンスに違いがある。

スピノザはこの2つの方法のうち「総合的な方法」つまり演繹的な方法こそ取るべきであるということで、「エチカ」を幾何学原論のスタイルで書いているらしい。

教養学部報第645号（5月8日発行）に藤岡俊博という人が、この本の書評を書いている。駒場のフランス哲学・ヨーロッパ思想史の研究者らしいが、面識はない。しかし、國分の文章は大変分かりやすいのに、この藤岡の書評は、とても難解である。たとえば

「『スピノザの方法』は、ドゥルーズ『差異と反復』の引用ならざる引用である「時代の雰囲気」という言葉に、その反時代的な同時代性と同時代的な反時代性を託していた。対して本書は、「読むことそれ自体を哲学上の問題として取り上げる思潮」のなかで著者が自己形成してきたことの「時代的制約」に言及する。制約とは、本書に課された束縛や限界を意味するどころか、むしろ時代の必然性のなかで自己の力を発揮する自由の表現にほかならない。」

という具合である。

田島正樹「スピノザという暗号」（青弓社）

この本をなぜ買ったのか覚えていないが、2001年6月に初版が出た本で、持っているのは2003年5月の初版第2刷である。大方、新聞の書評で見て買ったまま積読していたものだろう。しかし、國分の本を買って読んだときは、この本を持っていることは意識していた。

田島正樹は國分と同じように東大の教養学部出身だが、東北芸術工科大学教授を経て、2010年千葉大学文学部教授という経歴のようで、駒場に勤めたことはないらしい。1950年生まれで1974年生まれ

の國分より2回り上でぼくと同世代である。國分は「スピノザ 読む人の肖像」を出すにあたって、当然本書を意識したはずだが、巻末の文献表にも挙げられていないし、本文でもまったく触れられていない。

本書も最初はライプニッツとの比較の議論から始まる。たとえば

「私見によれば、ライプニッツとスピノザは、一見するところよりもずっと大きな共通点があるのだが、ライプニッツの方がいわば玄人好みの哲学者であることは確かだろう。ライプニッツの学説は、一見したところ荒唐無稽に思われたものが、読めば読むほど深みを帯びてくるといった体のもので、細部に立ち入るにしたがって、ますますわれわれはその鋭さに舌を巻くことになるのである。したがって、哲学的素養のある人がライプニッツに深く魅せられるのは、きわめて自然なことである。これに対して、スピノザの難しさは一見したところのさらに先にある。すなわち、一見したところも決してやさしくはないが、より大きな困難は、深く立ち入るにつれて見えてくるように思われる「粗雑さ・荒っぽさ」によって、われわれの勇気がくじかれてしまう危険なのである。」(p.10)

國分の本にも書いてあったが、スピノザはスペインにいたユダヤ教徒の蔑称「マラーノ」の子孫である。マラーノたちはイベリア半島でレコンキスタが進むとともに、カトリックに改宗するか外国に逃れることを余儀なくされた。16世紀末にスピノザの祖父の代がフランスのナントに移り住んだが、その後、スピノザの父の代から、アムステルダムに移住する。スピノザは1632年にアムステルダムで生まれたが、同じ年にデルフトで、フェルメールが生まれたということをこの田島の本で知った。レンブラントは1606年生まれなので、

26歳年上だが、同時代人であり、実際、スピノザが生まれた家の目と鼻の先に住んでいたそうである。

本書で、そうなのかと思い知ったのは、「スピノザは心理学を生物学に還元し、感情を生物体としての健康の指標のように見ているようである。」(p.25)というところである。ダーウィン以前のこの時代に、哲学の問題に生物学の方からアプローチするというのは、かなり珍しいのではないだろうか。しかし、やはり以前に買っていてほとんど読んでいない Antonio Damasio, "Looking for Spinoza: Joy, Sorrow, and the Feeling Brain," 2003/12/1 では、脳科学者のDamasioが

"Spinoza is thoroughly relevant to any discussion of human emotion, and feeling---an ensemble Spinoza called effects---as a central aspect of humanity. Joy and sorrow were two prominent concepts in his attempts to comprehend human beings and suggest ways in which their lives could be lived better."

と書いている。

小野善康「成熟社会の経済学 ― 長期不況をどう克服するか」(岩波新書)

2012年に出た本で、11年もほってあったのを、たまたま本棚で見つけて読んでみた。著者は東工大の社会工学科を出た後、東大の経済学部で博士号を取り、東工大の教授を経て阪大の教授になっている。菅直人元首相の経済政策のブレーンだったことがあり、そのせいか自民党政権下ではあまり名前を聞かない。

「失われた20年」の時点で出た本だが、失われた30年の現在でも不況は続いており、著者の主張は相変わらず有効のようにみえる。そ

の主張は、日本は発展途上社会から成熟社会に変化したのに、経済政策がそれに対応していないから長期不況になっている、というものである。発展途上社会なら、需要と供給が一時的にアンバランスになっても、新古典派経済学が言うように長期的には均衡状態に戻るので、無駄を排し生産性を上げて、もとのように一生懸命働けば経済は回復する。しかし、物やサービスの需要が不足する成熟社会では、増産しても売れ残り、効率化を進めても失業が増えてしまうとする。それならケインジアンのように政府が需要を作り出せばよいかというと、小野としてはそれを増税してやれと主張しているが、ケインジアンは増税すると景気を冷ますと批判するという。

成熟社会の経済政策は供給重視ではだめで需要重視で考えるべきだという主張は、ケインジアンに近い。しかし、著者は金をばらまくのではだめだと言う。財政をやりくりして、一方で吸収した金を他方につぎこんでも、経済全体では差し引きゼロで拡大しない。減税も同じで、税金が減額した分、消費に回るかもしれないが、税収が減った分、財政支出は減らさざるをえないので、給付金や政府関連事業で収入を得ていた人は所得が減る。

財政出動の効果を議論するとき、出てくるのが「乗数効果」である。しかし、著者は乗数効果というのは幻想だという。税金を集めるのにマイナスの乗数効果が働くから、効果は相殺されるという。このことは経済学の教科書にも書かれていると言うが、正直なところあまりよく分からない。と思ったが、税金を取られればその分支出が減り、それが支出の対象となるものやサービスの生産者の収入を減らす、という効果が伝搬すると考えれば、確かに負の乗数効果になるだろう。

井戸川射子「この世の喜びよ」（芥川賞）

表題に惹かれて読んだ。バッハのカンタータ「主よ、人の望みの喜びよ」を連想させるが、それらしいところはまったく出てこない。最後の文が

「あなたに何かを伝えられる喜びよ、あなたの胸を体いっぱい
の水が圧する。」

で、ここで初めて表題を暗示する句が出てくるのだが、ここまで待たされたのに腑に落ちる感じがしない。

主人公はショッピングセンターの喪服売場で働く中年女性で、娘が二人おり現在はどちらも成人になっているが、子供時代の回想が現在の描写に入り交じって語られる。これまでコンビニで働く女性を主人公とする村田沙耶香「コンビニ人間」のような芥川賞受賞作品があったし、スーパーマーケットが出てくる作品もあったと思う。本作はショッピングセンターなので、主人公が働く喪服売場のほかに、ゲームセンターやフードコートなどが出てくる。そしてフードセンターによく出入りする女の子やゲームセンターで働く若い男などが、主な登場人物である。話の基本的な流れは、文中で「あなた」と呼ばれる主人公とフードセンターによく来る女の子の交流なのだが、そこで交わされる感情の機微は、ぼくには必ずしもピンとくるものではなかった。引用した最後の文章における「あなた」は、それまでの語り手ではなく、もしかしたら女の子の方を指しているのだろうか？

佐藤厚志「荒野の家族」（芥川賞）

東日本大震災を真正面から扱っている。「真正面から」と書いたのは、同じ震災を扱った2021年夏の芥川賞受賞作、石沢麻依「貝に続く場所にて」と比べざるをえないからである。石沢の作品は、リア

リズムの濃い小説ではなく、非現実的で語り手の空想で組み立てられた話だった。それと対照的に、本作は徹底してリアリズムで語られる。ただ、震災そのものがリアルに語られるのではなく、遺されたものの生活を描くことで現実性が強調される。やはり現実の震災の強烈さを前にすると、こういうアプローチを取らざるをえないのか、と思ったものである。今回の芥川賞選者の評をみると、一人として石沢の作品に言及していないが、明かにみなそれを意識している。とくに松浦寿輝が

「本作をめぐって「真っ直ぐ」「真面目」「真剣」「真正面から」「ど真ん中の直球勝負」などという言葉が飛び交ったものだが、そのどの評言にも含まれる「真」の一字に対する違和感を、わたしは払拭し去ることができなかった。」

と言っているのは、図らずも評者が皆この去年の受賞作にとらわれたことを物語っていると思う。

主人公は造園業を個人で営む男だが、その肉体労働の描写は中上健次の「枯木灘」などを連想させるところがある。そういう点でも選者に好意的に迎えられたところがあるかもしれない。

石牟礼道子「食べごしらえ おままごと」（中公文庫）

石牟礼道子がこんな本も出しているとは、知らなかった。1994年に出た本で、石牟礼の晩年とはいえ亡くなったのは2018年だから、最晩年というわけではない。

口絵として16ページにわたる石牟礼が作った料理の写真が、載っている。「ぶえんずし」とか「ひいな団子」とか「笛ふき鯛の煮つけ」とか、いずれも自然豊かな素材を活かした、しかし決して素朴

ではなく彩りや器が工夫された洗練されたもので、しかも美味しそうである。昔読んで感心した辰巳浜子「料理歳時記」と、類似するところがある。どちらも季節にしたがって、作られる料理、得られる素材が並べられて、また古きよき日本の生活文化を蘇らせるという点に、共通点がある。その意味では幸田文「父・こんなこと」も連想された。本書の冒頭が「貧乏ということは、気位が高い人間のことだと思い込んでいたのは、父をみて育ったからだ、わたしは思っている。」という文であるのは、幸田文を連想させないではおかしい。

「十五日正月」の項には、生まれて5日目に死んでしまった弟の話がある。その忌中ではあるが、子供たちのために十五日正月はちゃんとやると父が言いだして、三升炊きの大釜で米をといでいるところに、五つになったばかりの私が手をのばすという場面がある。

「あら、お雛さまかと思うたら、道子の手かえ。おまいさまもといでみるか」

で始まる場面は、とても5歳の子供の記憶とは思えないが、「苦海浄土」でも発揮された石牟礼の、創作なのか記憶なのか記録なのか、それらが入り混じったしかし独自の世界を作り上げる能力は、ここでも健在である。とくに驚くべきは、生き生きした会話文である。方言を交えてその場の雰囲気や蘇らせながら、その方言を知らない読者にも意味が分かるように巧みに構成された文章は、記憶を写したものでないことは明かながら、質の高い文学作品になっている。

砂川文次「ブラックボックス」（芥川賞）

これは昨年春の芥川賞作品で、文芸春秋の2022年3月号を買ってちょっと読んだのだが、あまり面白いと思わずそのままにしているうちに秋の芥川賞が出て、その高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」はすぐに読んだ。そして、続いて今年の春の2篇も読んでから、そういえば去年の春のこの作品を忘れていたと思い、改めて読んでみた。

主人公のサクマの自転車によるメッセンジャーという仕事ぶりがたんと描かれる前半と、そのサクマが感情の暴発により受刑して獄の中で送られる日々を描く後半とに別れる。前半でのサクマは冷静な判断を持ちながら周囲の状況に対処しているように描かれているのに、刑務所での回想では、刑務所で過ごす間も、あるいはそれ以前からも、ときどき感情が切れる現象を起こし、それが暴力事件と刑罰につながっているということが明かされて、読んでいる方としても戸惑う。また前半には出てこなかった同棲している女性も、後半回想を交えて登場し、それもやや違和感を感じさせる。

中畑正志「アリストテレスの哲学」（岩波新書）

岩波の「アリストテレス全集」を持っているが、書棚に並べているだけで全然読んでいない。持っているのは1968年-1973年に刊行された旧版で、2013年から新版が出ている。ただ、ぼくが持っているのは旧版ではあるが初版本ではなく、1990年代に出ている第4刷である。おそらく、東大に移ってから生協で買ったのだろう。中畑正志はこの新版の全集の編者の1人である。積読の全集を読むきっかけになるかと、この新書が出てすぐ買って、読んでみた。

中畑によれば、現代のさまざまな哲学状況において、アリストテレスは盛んに引き合いに出され議論の中心になっている。ところが哲

学の専門研究の外に出たとたん、とくに日本ではアリストテレスの存在は霞んでしまっている。アリストテレスの生きた時代は、日本ではまだ弥生時代で、中国の史書にも日本に関する記事はまったく見当たらないときである。それでも師のプラトンならよく読まれている。実際、ぼくも若いときはプラトンはかなり読んだが、アリストテレスは岩波の全集を買っただけ、という状況は、中畑の言うとおりである。

本書は「はじめに」と「あとがき」のほか、本文が全6章の構成だが、各章の冒頭に「問い」という扉がおかれている。これが本書が取る立場を、明快にするのにきわめたよく工夫されたものとなっている。その「問い」というのは、たとえば第I章では、

「アリストテレスが活躍したのは、紀元前四世紀だ。哲学者のなかではビッグネームかもしれないし、「万学の祖」と呼ばれているらしいから、歴史のうえでは偉かったのかもしれない。でも「万学の祖」と言ってもそれはまだ学問が十分に発達していない時代だからできたことなんじゃないか。とにかく、これだけさまざまな学問が発達したのだから、そんな昔をふりかえるのは、歴史好きの好事家以外には必要ないことだろう。」

というようなものである。また、それに呼応して、章題の多くが疑問文となっていて、たとえば倫理学を扱うII章のタイトルは、「なぜ倫理学は月並みなのか」であり、その上で副題として「幸福・徳・共同態」が与えられている。

とくに第I章でアリストテレスの哲学の中畑によって捉えれた「核心」が、端的に表されているのがアリストテレスをよく知らない自分には、蒙を啓かれた気がした。

「われわれの経験する世界は多種多様でありながら、それぞれの仕方で認識することが可能であり、また人間はそのような世界に応答できる認知能力をそなえている。さらにこの世界は、人間の知的な進展に呼応してそのあり方が開示されるような、知的な深さをもっている。したがって探求を通じてわれわれは世界を知的に理解することへ至ることができる。その探求の全体がアリストテレスの哲学である。」(p.12)

そしてアリストテレスはその知的探求の方法論についてきわめて意識的であったとし、そのための一般的枠組みとそれぞれの主題に即した個別的方法論を用意したとする。われわれにとってもっとも馴染みがあると言えるアリストテレスが創始した論理学は、その一般的枠組の主要な部分を占める。しかし、アリストテレスの偉大なところは、そのような論理的方法のみを追究したのではなく、経験的事象に習熟することを重視したことにあるようだ。とくに生物の生態や構造についてアリストテレスが行なった観察やデータの収集は、現在の生物学者からも高く評価されているという。

こういう具合で、第III章の自然学までは、比較的素直に読める。しかし、第IV章の「魂」を扱うところから、なかなかついていけなくなる。「魂」は現代の心理学が対象とするような「心」ではなく、「生きることの原理」なのだという。さらに予想されたようにそれ以上に難解なのは、第V章の形而上学である。アリストテレスにとっては、神とは不動の第一動者という抽象的なものだったらしい。それが中世のスコラ哲学と結びついたのだろう。しかし、この「神」は、ギリシア神話の神とはもちろん、キリスト教やユダヤ教の神とはずいぶん違うものだろう。

義江彰夫「神仏習合」(岩波新書)

明治時代の廃仏毀釈は、今から考えるとひどい文化的破壊行為で、なんでそんなことが起こったのだろうと思っていた。ただし、江戸期の国学の隆盛のように、日本の歴史は中国を始めとする外国の文化を受け入れる力と、反発するナショナリズムが交錯して進んできたので、その振れが大きく出た事例の一つなのかもしれない。そういう興味のもと新しく出たこの新書を買ってみたのだが、読み始めてしばらく著者が駒場で教授だった人で、多少の面識もあったことを思い出した。確か、赴任して最初に出た教授会で、義江さんの方からぼくにあいさつに来られて、それがぼくと同姓同名の玉井と勘違いしてのことだったという記憶がある。

「新しく出たこの新書」と書いたが、読み終わって気がついたことは、これが決して新しい本ではなくて1996年に第1刷が出たものであることだ。買ったのは2021年に出た第23刷であるが、改版されているわけではない。1996年といえば、ぼくが駒場に赴任した2年後である。

本書は8世紀終わりごろに、伊勢の多度山の神が重い罪業を悔やみ、神の身を離れて仏道に皈依したいと人に移り託宣を下したという話から始まる。同じような話が常陸の鹿島大神や山城の賀茂大神や若狭彦大神にもある。そしてその動きは神宮寺設立に繋がっていく。義江によれば、これは地方豪族層の願いが現れたものだという。

瀧井一博「大久保利通 「知」 を結ぶ指導者」 （新潮選書）

以前、中村隆英「明治大正史 上・下」の感想として、

「とくに大久保利通の超人的な働きぶりに感心したことが印象に残っている。大久保利通の能力は恐るべきものだったと思う

が、西郷隆盛と比べてまったく人気がない、大河ドラマの主人公になったこともないし、司馬遼太郎にしてもほかの小説家にしても、作品に取り上げたという話を聞かない。今の大河ドラマは渋沢栄一だが、そこでも大久保利通は登場するものの、どちらかと言えば悪役である。実際、渋沢栄一は大久保利通が嫌いだったらしい。」

と書いたことがある。ということで、大久保利通に関してはかねてから関心があったのだが、本書が昨年に出たので早速買って読んでみた。

大久保の政治スタイルは果断で時に非情であり、独裁者というイメージがあるが、そのイメージを打破したいというのが瀧井の意図である。その意図に沿って「「知」を結ぶ指導者」という副題が付けられ、各章のタイトルが「理の人」「建てる人」「断つ人」「結ぶ人」となっている。

大変丁寧に書かれていて改めて勉強になったが、紹介される史料の扱いには少し違和感を感じた。参照される史料は、常に現代語訳で示される。それはよいとして、さらにそのあと、もう少しかみ砕いた説明が付される。読んでいると同じことが二重に引用されている感じで、どちらか一方でよいか、あるいは片方は原文とした方がよいのではないだろうか。しかし、こちらが求める「原文」というのも、もとの表記そのままでは読めないだろうから、何らかの訓読体を期待するとすれば、やはり五十歩百歩というところかもしれないが。

倒幕に至るまでは、西郷と大久保が妥協せず強い決意で進めたことが、なかなかしたたかな徳川慶喜の行動を上回って成功したのだということが分かる。一方、維新後の政治制度などの改革について

は、大久保の考え方は漸進的であり、木戸孝允などの方がラジカルだったということを初めて知った。とくに廃藩置県は大久保の功績だと思っていたが、版籍奉還の木戸の建白に基づいて進められ、大久保は当初は言葉を失うほど驚いたという。しかし、その後は木戸と大久保が協力して薩長土肥四藩連盟の藩政奉還の建白書が作られ、その過程を通じて大久保は木戸に対する敬意を深めたという。

しかし、版籍奉還だけでなくさらに廃藩置県が実行に移されたのは、大久保が画策して木戸と西郷を政府のトップに据え、そのもとで決断されたという。大久保はむしろ廃藩まではまだ早いと思っていたらしい。

大久保は明治11年に暗殺されてしまう。不平士族の恨みを買ったわけだが、その前年に西南戦争で死んだ西郷隆盛と同じような軌跡を歩んだと言えるだろう。一方は明治政府に対して反乱を起こし、他方は明治政権の中枢にいて、西南戦争だけでなく江藤新平の佐賀の乱を鎮圧するなどの行動を取ってきたわけだが、武士による支配体制を一変させたのだから全国の士族たちが抱いた不平不満のエネルギーは膨大なものだったろう。その不平を吸い上げる指導者として西郷は担がれ、倒幕を共に成し遂げた大久保はそれを鎮圧した。しかし、恨みはテロという形で大久保にも及んだ。

江戸川乱歩「芋虫」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

日経の日曜版だったと思うが、江戸川乱歩のことが出ていて、「芋虫」という作品を脚本化して地方で公演活動をしているという紹介があった。しかし、前から不思議なのだが、日経の電子版では日曜版の記事が検索できない。仕方なく、紙の新聞を苦労して探し出したが、それは2023年6月11日のThe Syleというページで、特集の夕

イトルが"Rampo is Alive"というものである。なお、その紙版には「NIKKEI The STYLEの一部記事が電子版でもお読みいただけます。」と書いてあるのだがまだ電子化されていないのか、この日の分は見つからない（その後、この電子版にアクセスできるようになった）。

この作品が発表されたのは1929年の「新青年」1月号で、前に読んだ「陰獣」が1928年にやはり「新青年」に連載されたものだったから、それに繋がるものである。エログロという点では共通するが、現代では使えないような言葉を身体障害者に対して使っているところが、特異である。しかし、発表当時は別の意味で伏字を使わざるをえず、さらに後には発禁となったという。それは戦争で四肢と聴覚と発話能力を失った男を主人公として反軍国主義的であり、さらに金鵄勲章を侮蔑するような箇所があったためという

.

井上清「日本の歴史 20 明治維新」（中央公論社）

本棚にあったのは、1971年に中公バックスとして出たものの第3版で、1972年に出されたものだが、その年に買ったとすると会社に入った年である。記憶ではこの本で大久保利通の獅子奮迅の活躍ぶりを知って感心したように思うが、どうも別の本のようなのである。大久保利通は当然たびたび登場するが、その独裁的な資質はやはり井上清には肌が合わないらしく、あまり褒めるような書き方をしていない。しかし、次のように評価しているところもある。明治8年の台湾遠征計画に関して、

「難局に当たってみじんも責任を回避しようとせず、いつでもみずから進んで全責任を負う大久保の政治的責任感の強さは、

かれの政策に共鳴すると否とを問わず、またかれの人がらに親しむと反撥するとかかわらず、何人もみとめないわけにはいかないであろう。大久保にかぎらず、西郷でも木戸でも板垣や副島でも、維新第一線の政治家は、それぞれの立場を異にしても、自分の主義・原則に忠実で、自分のしたこと、言ったことに最後まで責任をもつという点では、さすがに新国家建設の指導者であった。」(p.408)

という。

岩波新書の井上の「日本の歴史」は中3か高1のときに読んだが、その唯物史観にもとづく書きぶりが印象に残っている。本書でも、たとえば次のような書きぶりに、それが現れている。

「公理・条理にかない、天下の人心に合致するとは、歴史の進歩にそうしているということである。」(p.14)

このように「歴史が進歩する」という観点からすると、個人の嗜好や行動が歴史を動かすことには否定的になりそうだが、この書では個人が意外に生き生きと描かれていて、読み物としての面白さを与えている。また、当然の傾向として支配勢力に批判的で、民衆の権力に対する抵抗運動を評価することになるが、それはたとえば次のようなところに典型的に現れてくる。

(幕末の奥羽諸藩の抵抗が成功しなかったのは) 現地の民衆が自分たちの藩主・領主に味方せず、かえって政府軍を支持したことが、政府軍の勝利の最大の条件となった(p.113),

また西南戦争前の時代における各地の農民一揆の動向に、かなりのページを割いている。

市川沙央「ハンチバック」（芥川賞）

受賞前から評判になっていた作品だが、確かに強いインパクトがある。ハンチバックとはせむしのことで、作者の市川自身が先天性ミオパチーという病気の患者で、また本作の主人公も同じ病をもつ患者と設定されている。この病気は乳幼児期から筋力低下が始まり持続し、それが心肺機能の低下につながるというという難病である。この作品は市川が初めて書いた純文学小説で、文学界新人賞をまず取り、続いて芥川賞を取ったが、受賞者インタビューの記事によれば、最初から芥川賞を狙って書いたという。文章の書き手としてはライトノベルを長く書いて来て経験は豊富らしい。

昔から、見世物には奇形と猥褻性がつきものである。奇形を見世物として鑑賞するのは倫理的に問題だが、この場合は作者自身が自分を対象として、きわどい表現を大ぴらに使っているので、読者もおたおたしながらも付いていける。主人公がコタツ記事を書いて稼ぐバイトをしているという設定で、コタツ記事とは作品中の説明によると「取材をせず、ほとんどネット上の情報のつぎはぎで粗製乱造されたPV稼ぎの記事をいいます」ということで、小説の冒頭はいきなりその記事の一つが意図的にHTMLタグ付きで導入されるが、その内容は「ハプバ（ハプニングバー）」潜入記でアダルト系の煽情的な描写が、展開される。

Carlo Rovelli, "Helgoland: Making Sense of the Quantum Revolution," (KIndle version)

ひよんなことからJTТАの集まりでぼくが量子コンピュータについて、話をすることになった。それでこれまで量子論に関して読んだ本を振り返ってみたら、まだ読んでいない本の中にこれがあるのに気づいて、わりと短い本なので読んでみた。

Helgolandとは北海に浮かぶ島で、Heisenbergが1925年の23歳の時に、アレルギー症状の回復のためもあって夏を過ごし、そこで行列による量子力学の基本方程式の着想を得たところである。Niels Bohrの原子モデルを説明する運動方程式の着想をHeisenbergが得たのは、このときだった。

著者のCarlo Rovelliはイタリアの理論物理学者で、一般向けの本もたくさん書いている。Helgolandとは北海に浮かぶ島で、Heisenbergが23歳の時にアレルギー症状の回復のためもあって夏を過ごし、そこで行列による量子力学の基本方程式の着想を得たところである。そこから話を始めて、HeisenbergとSchrödingerの量子力学の解釈の違いをさまざまに論じる。

Heisenbergの着想は、Max Bornとその弟子のPascual Jordanとともに探求された。計算が数学的に難しかったが、Heisenbergの同級生で高慢なWolfgang Pauliの協力によって、何とか解けた。並行してそれに取り組んでいたPaul Diracも独立に別の数学的方法で同じ解を得た。

一方で、Erwin Schrödingerは波動方程式を考案した。電子などの粒子の運動が波動の性質も持つことはde Broglieによって示されていたし、電磁気学や音響学で波動関数を扱うことは、物理学では馴染みがあった。Schrödingerが作り出した波動関数の形は、電子波の動きをよく説明し、Bohrのエネルギー水準と適合した。しかし、波動関数 ψ が物理的に何を表しているのかが、説明できなかった。そこでまたBornが登場して、粒子が空間上の位置に現れる確率を表すものと解釈すればよいことを示し、それが学界で受け入れられた。BornとJordanは、Heisenbergの理論とSchrödingerの理論が、数学的に等価であることも示した。

ここで確率が入ってくることが、問題をややこしくする。確率というが、実際の現象は決定的に起こる。それでどこかで、確率の結果が確定しなければならない。関連して量子力学の観測問題が発生する。波動関数自体は確定的な方程式で定まるが、その確率はどこかで収縮して、結果を確定しなければならない。それが観測によって初めて確定するのだとする解釈は、大変分かりにくい。しかし、観測で結果が変わる実験結果は、このRovelliの本でも具体的に例示されていて、ぼくはその図を量子コンピュータの解説のスライドで流用させてもらった。

Schrödingerの猫に代表される観測問題の不思議さは、本書でも重要なテーマである。Schrödingerがこの猫の話を出したのは、彼自身はこのような確率的な解釈に反対する立場だったことを示す。それ以降これまでも多くの解釈仮説が提案されてきたが、Rovelliの立場は、「関係主義」ということである。1つの解釈の立場に、主観主義というのがあるらしい。つまり観測者という主体が、結果を決めているということである。それに対して、「関係主義」は観測者と観測物との関係が、結果を決めているということらしい。それを十分に理解したわけではないが、少なくともRovelliの説明を読むかぎりでは、合理的な感じがする。

伊澤理江「黒い海」（講談社）

新聞の本の広告で、大宅壮一賞をこの本が取ったと宣伝していた。賞の取材記事には、次のような記述がある。

「贈呈式では選考委員でノンフィクション作家の後藤正治さんが登壇。伊澤さんが、関係者に何度も手紙を書き、足を運ぶ取

材手法を評価した。「いわば手作りの味。小さな事実を積み上げて真実に迫る，ノンフィクションの王道をいく作品」

ということである。堀川恵子は1979年生まれだが，伊澤理恵は1989年生まれで，ちょうど10歳下である。

2008年6月23日，犬吠埼沖で第58寿和丸という漁船が転覆，沈没した。3人が救助されたが，17人は行方不明のままである。伊澤は事故当時はこれを知らなかったが，11年後の2019年に別の取材でいわき市に行った時，偶然この話を聞いて取材を始める。生還者が3人いるので，事故の状況は聞くことができる。それが衝突のようなものが2度あり，2度目の後，あっという間に沈んだということで共通している。また，海面に異常な量の油が流れ出ているが，これらの事実は事故が波によって起こされたという想定とは合わない。しかし，事件後出された事故調査報告書では，原因は波だとされている。

直後から潜水艦とぶつかったのではないかという憶測も，あったらしい。そのような報道も一部で出た。それで，伊澤は事故原因を最初に調査した横浜地方海難審判理事所の所長だった喜多を探して，なんとか所在を突き止める。ところが喜多は，取材に対しその事故は記憶にないとの答えに終始する。17人も死んだ事故たというのに。しかし，電話に対しては木で鼻をくくったような対応だったので，伊澤は手紙を書いて送り，そのあと家を訪問する。そのときは「きょうのところは勘弁してください。」と言われて引き下がるが，さらに運輸安全委員会が作成した事故調査報告書をつけた手紙を再度出す。それに対し，1か月経ってから，喜多から電話がくる。それでともかく会うことになる。それでも最初は記憶にないと言い続けるが，最後の方で油の流出状況からみて，船底に穴が開い

たのではないか、という。伊澤は喜多が覚えていないというのは守秘義務に配慮したせいで、本当はよく記憶しているのではないか、それを「個人的な見解」として語っているのではないか、と考える。さらに、事故の調査を直接担当した「調査官」を何とか探し出して取材を試みるが、「守秘義務」一点張りで意味のある結果が返ってこない。

ということで、調査は不自然に真実を隠蔽していることを疑わせることに、伊澤は取材の結果から思っていた。潜水艦との衝突があったとしたら、日本の自衛隊か、米軍か、あるいは中国やその他の国のものか。公開資料請求などを重ねて追究するが、確定的な結果は得られない。しかし、誰でも連想するように、えひめ丸がハワイ近海の太平洋上で米軍の潜水艦に衝突され沈没するという事件があった。それが第58寿和丸の事故の7年前の、2001年2月である。本書ではおそらく意図的に、このえひめ丸の事件については、全体の2/3を過ぎたp.200の第9章「黒い海」まで触れられていない。しかし、この第9章で詳述されるように、えひめ丸では8人の遺体が発見され、1人は行方不明のままである。えひめ丸のケースでも、まずものにぶつかったような音がした後、すぐに2度目の衝撃が来た。その2度の衝撃から沈没まで、たったの5分だった。沈むまでに2回の衝突音があったというのが、第58寿和丸の場合とよく似ている。伊澤が調べてみると、潜水艦と民間船舶との衝突事件の例はかなり多くある。それで伊澤は、もと海上自衛隊の潜水艦司令官だったという小林正男という人物を見つけ、取材を行う。その結果、潜水艦との衝突だったとして、可能性のあるシナリオは、ぶつかりそうだから潜れとなって、それでセイルがまずぶつかり、ぶつかったので急速潜航しようとして船尾が跳ね上がって2度目の衝突が起こる、ということが考えられるという仮説を聞くことができた。

しかし、潜水艦だっとしてそれがどこの国のものかについては、自衛隊のものでは絶対ないと小林は言う。潜水艦司令官だった立場から、もしそのようなことがあれば、必ず小林が知るはずだという。米軍との間は情報共有が緊密にあると伊澤は思っていたが、小林によればそうではないという。だから米軍の可能性を示すような事柄は、小林からも引き出せない。

ということで、米軍潜水艦との衝突が事故の原因ではないかという疑いを強くにじませながら、本書は終わる。この取材の対象として強い印象を与える存在は、第58寿和丸を保有していた酢屋商店の社長野崎哲である。野崎は真相を自分でも究明せんと当時航行していた可能性のある潜水艦のリストを作成するなどの活動とともに、遺族への周到な配慮をし、会社を立て直そうとする。しかし、主力の漁船を失っただけでなく、その後の東日本大震災で、2008年の事故で生き延びた漁船のうち2隻を失うという大きな打撃を受ける。東日本大震災時の原発事故では、もちろん漁業者として風評被害を含め痛手をこうむる。その中でも野崎は前を向き、漁業を再開させているという。

泉鏡花「露宿」（Kindle版 泉鏡花全集）

9/1は関東大震災の100周年ということで、防火訓練など政府主催のイベントがいろいろ開かれたようだが、新聞にもいくつか特集記事があり、朝日新聞では当日の状況を記録した作家たちの文章などが載せられていた。その中に、この泉鏡花の「露宿」があり、その存在すら知らなかったがKindle版の全集に入っていたので、早速読んでみた。

鏡花は当時、麴町にいたようで、家から脱出して近傍の空き地などで夜を過ごす様が、さすがに印象的な筆致で描かれている。たとえば、

「（――小稿・・・まだ持ち出しの荷も解かず、框をすぐの小間で・・・こゝを草する時・・・）」

などという現場感にあふれる描写もある。また、避難先でいろいろな人に出会い言葉を交わす。その中には吉井勇などもいるが、近所の職人やおかみさんが主である。鏡花がそのような近所づきあいをしていたことが分かる。

大岡昇平「レイテ戦記 上・中・下」（中公文庫）

40年越しでようやく読み終えた。上巻を買ったのが1982年に出た第8版で、買ったのもその頃だろうからそれから40年が経っている。そしてこの上巻を読むのを、途中で何度も挫折している。去年改めて読み始め、何とか上巻を読み終えて昨年の8月に中巻、下巻を購入している。それから1年が経っているが、上巻に40年かけたのと比べればむしろ速かったといえる。

大岡はこれを1967年から1969年にかけて雑誌「中央公論」に連載し、1971年に中央公論社で全3巻が刊行されたという。1948年に出た「俘虜記」や1952年の「野火」よりはだいぶ後である。しかし、日米からの資料が広く手に入り、一方で生存する当事者がかなりまだ残っていたという意味で、よい時期だったのだろう。

資料を厳密に読み込んで、執拗なまでに正確な記録を残そうとしている。日本の資料だけでなく、米国の資料も細かく参照している。そのため日本側か米国側か、どちらの視点から記述されているのか

戸惑うことがある。「連隊」を日本軍については「聯隊」と記述するなど、いろいろ工夫はこらされていて注意深く読めば混乱しないように書かれてはいるのだが、なにしろこちはら師団，旅団，連隊の区別も不確かで、「司令官」と「参謀長」の役割区分もあやしい。

大岡は自身が召集されてフィリピンのミンドロ島に行き，そこで俘虜になった。中巻のどこかで大岡が地上から米軍の飛行機が通るのを見上げる場面があったが，何度読み返してその記述に行き当らない。しかし，もしそれが見つかったとしても，本書の中で大岡本人が登場するのはそれが唯一の場面で，「レイテ戦記」を書いた動機は「俘虜記」などに書かれた本人の体験のはずだが，本書ではそれについては寡黙を保っている。

Michio Kaku, "Quantum Supremacy: How the Quantum Computer Revolution Will Change Everything" (Doubleday, Kindle Version)

JTTAの集まりで，ひょんなことから量子コンピュータについてぼくが解説することになった。その準備を考えているときに，この本が新刊で出たので，早速Kindle版を買って読み始めた。著者は理論物理学者として著名であるだけでなく，たくさんの一般向けの啓蒙書を書いていて，それらがベストセラーになっている。それだけに大変読みやすく，それでいて内容のレベルも高い。以前の日記（2020年1月12日）に，次のように書いたことがある。

「米国で活躍しているの日本人に Michio Kaku と Michiko Kakutani がいて，紛らわしい。前者は物理学者の男性，後者は NYT などに書評を書いている女性だが，あの不動点定理の角谷静夫の娘である。」

しかし、この著者の本はやはりKindle版で"The Future of the Mind: The Scientific Quest to Understand, Enhance, and Empower the Mind"を買ったことがあるが、まだ読んでいない。この"Quantum Supremacy"の方は、紙の本で300ページぐらいであり長くはないし、やはりベストセラー作家らしく平易な文体でさらさら読めるが、それでも読み切るのに2週間以上かかった。さすがに理論物理学者だから科学的にいい加減なことは書いていないが、数式は一切使わず、quantum supremacy（量子超越性）をほぼ前提であるかのように話を進め、とくに後半は世界の食糧問題、脱炭素化、ガンの克服、新薬生成などに量子コンピュータがいかに有効に働きそうかというバラ色の話を続け、読んでみると「ほんまかいな」という気にさせられるところがある。

今井むつみ、秋田喜美「言語の本質」（中公新書）

新聞の書評などで高い評価を得ている本である。著者の1人の秋田喜美をUPの企画委員会で一緒だった秋田喜代美と混同していた。秋田喜美（きみ）は名古屋大学の准教授で、しかも男である。しかし、秋田喜代美は当時は教育学部所属ということぐらいしか認識がなかったが、ネットで調べると専門は、発達心理学、教育心理学ということで、秋田喜美は本書の著者紹介によれば専門は「認知・心理言語学」ということだから、名前だけでなく研究分野もきわめて近い。

本書は今井と秋田の共著となっているが、主な著者は今井らしく、著者あとがきに

「無謀とも思える旅につきあって本書をともに執筆してくださった名古屋大学准教授の秋田喜美氏にも心よりのお礼を申し上げますたい・」

と共著者に謝辞を述べるという異例なところがある。さらにこの「あとがき」で驚いたのは、古川康一さんが

「「今井さんの研究は記号接地問題だね」。私に「記号接地問題」ということばを教えてくれたのは、慶応義塾大学環境情報学部教授の故古川康一教授だった。」

という形で登場し、謝辞の対象となっていることである。今井はできたばかりのSFCに助手として就職したところだったという。

今井は幼児の言語習得の過程の研究から、秋田は言語学の立場から、オノマトペに関心を持ってきた。オノマトペの研究は結局言語とは何かに行き着くことから、本書のタイトルも「言語の本質」と大きく出ている。「記号接地問題」が大きなテーマとしてまず打ち出される理由は、言語の身体性と抽象性がどのように絡み合うかという問題意識からで、オノマトペは身体性から出ているが、言語が作られる過程で、またそれをヒトが学習する過程で、抽象性を獲得し、システム化して言語に組み入れられる。それを追う研究は、「なぜヒトだけが言語を持つか」という問題意識につながる。

泉鏡花「二、三羽一十二、三羽」（Kindle版 泉鏡花全集）

今年は鏡花の生誕150周年ということらしく、新聞に鏡花に関する記事がときどき出る。この間はそれがきっかけで「露宿」を読んだが、この雀についての作品を読んだきっかけも、新聞記事である。2023年9月23日付けの朝日新聞に、「泉鏡花、生誕150年 稚きものを慈しむまなざし（東雅夫）」というのが載った。そこにこれが紹介されていた。

庭に来る雀の観察記で、随筆風のものである。文体も「露宿」と同様に口語体で、若い頃の鏡花のような凝った文体ではなく平易である。最後の方で、作者がひそかに「スズメの蠟燭」と呼んでいる「ごんごんまめ」という草を探して、以前にそれをみかけた邸のあたりをうろついて、藪垣の中に見つけ、取ろうと手を伸ばすが届かない。そこに太った男が現れて落とし物なら拾ってあげようかと申し出る。それをきっかけに家に招じ入れられ、茶を馳走になる。そこに美人がいて、作者の浴衣にほころびを見つけて繕ってもらうことになる。その間、客人だけ裸にするのも気まずいので、亭主もその美人の女性も裸になるという奇想天外な展開になるところは、小説的であり鏡花らしさも感じられる。

横光利一「微笑」(Kindle版 横光利一全集)

またまた、新聞記事をきっかけに過去の文学作品を読んだ。今度は日経で、「写真で見る文学周遊」というシリーズで、この作品を取り上げている(2023年10月7日夕刊)。横須賀が写真の対象で、主人公が横須賀の海軍で殺人光線の研究をしている青年数学者という設定なので、横須賀港に停泊している自衛隊や米軍の空母や潜水艦などの写真が載せられており、三笠の写真もある。

横光は戦後は戦争中の戦争協力を非難されたというが、この作品はその最晩年の1948年に「人間」1月号に発表されている。横光は1947年12月に死んでいるから、死後の発表である。横光自身が「梶」という名前で登場し、しかし梶の作品として「旅愁」があることを他の登場人物が語るのも、あからさまに当人であることが示される。梶の友人の高田から、弟子の青年へ色紙を書いてほしいと頼まれて、それを引き受けると高田が「栖方」という21歳の帝大生で数学博士を連れて、家を訪ねてくる。栖方はその天才ぶりから横

須賀の海軍へ研究生として引き抜かれ、特殊な光線武器の開発に携わる一方、常に海軍や憲兵に見張られている。高田も梶も俳人で、栖方も趣味として俳句を始めていて、一緒に横須賀にいる別の男の家で開催される句会に参加することになる。表題の「微笑」とは栖方の見せる表情を指し、梶はそれに魅力を感じている。しかし、栖方がアインシュタインの理論の欠陥を見つけたなどの言動に疑いも抱き、高田も栖方が狂人であるとの噂を梶に伝える。

栖方が高田と訪ねてくる場面の、門から玄関に来るまでの靴音を梶が部屋にいて聞いているところなど、横光が昔「新感覚派」と言われたことを彷彿とさせるものがある。栖方にはモデルがいるようで、かなり事実に沿ったストーリーになっているようだ。しかし、小説としての意図が何なのか、ピンとこないところもある。

Stephen Wolfram, "What Is ChatGPT Doing ... and Why Does It Work?" (Kindle version)

Mathematicaを作った天才Wolframが、ChatGPTについて本を書いたということ自体が、驚きである。しかも、予想外にChatGPTを高く評価している。

Wolframはロンドン生まれのドイツ系ユダヤ人で、1978年に17歳でOxford大学に入ったが、卒業せずに1980年に米国に行き、Caltechに入って1980年にPhDを取得した。まさに早熟の天才である。初めは素粒子論を研究していたが、1980年代半ばからセルオートマトンのシミュレーションの研究に転じる。Caltechにいた間にMathematicaの原型を開発していたが、1987年にWolfram Researchという会社を作り、そこから1988年にMathematicaを最初に発売する。

本書の目的は、ChatGPTが何をやっているか、そしてどうしてこれほどうまく行くのか、を明かにすることにある。何をやっているかといえば、ある時点までのテキストを見て、それに続く適切なテキストを生成するということの繰返しである。「適切な」というのは、過去の膨大なテキストの蓄積から類推される、一番もっともらしいもの、ということになる。しかし、一番もっともらしいという基準を常に統計的な確率最大なものとしてしまうと、平板な文章になってしまう。それで魔法(voodoo)を使って、ときどき確率ランクが下のものを選ぶ。その混ぜ具合を制御するパラメータとして「温度」が使われる。

Wolfram には "A New Kind of Science" という著作があって、ぼくもそのハードカバーの部厚い本（1264ページ）を持っており、主なところは以前に読んだ。その中に "computational irreducibility" という概念が書かれていて、1つの章が当てられているが、この概念が本書でもたびたび出てくる。計算の非還元性とは、計算の複雑性が高くても簡単な計算に還元できない性質のことを言う。通常の計算の理論における複雑性と同じように思えるが、Wolfram はセル・オートマトンの計算プロセスの中に、多くが繰返しなどの単純なパターンなのに、とても複雑に枝分かれしてパターンとして捉えられないものがあることを見つけ、それを計算の非還元性と呼んだ。そしてそのような性質を持つシステムは、訓練によって精度を上げるのが難しいとする。しかし、たとえばエッセイを書くということは計算的に難しい問題だとこれまで考えられてきたが、ChatGPT の存在が示唆するように、これらは案外易しい問題なのではないかという。

Wolfram による Wolfram 言語というものがある。これは記号ベースのプログラミング言語で、Mathematica で使われているコマンド言語

だからMathematicaを使うときにぼくも使ったわけだが、30年以上にわたって拡張が進められたきた。さらにあまりよく知らなかったが、Wolfram|Alphaという質問応答システムが作られていて、それは自然言語による質問を受け付ける。自然言語が解釈されてWolfram言語に翻訳され、結果が返される。一見GhatGPTが問い合わせに答えるのに似た動作に見えるが、自然言語風なものはインタフェースで、形式的な記述に翻訳できるものだけが理解される。しかし、ChatGPTが苦手とする論理的な推論・判断ができるという強みがある。本書の巻末に、"Wolfram|Alpha as the Way to Bring Computational Knowledge Superpowers to ChatGPT"という付録があり、ChatGPTがおかしな返答をする例を挙げ、それがWolfram|Alphaではどうなるかを示している。

藤崎さんとのメールのやり取りで話題になったのが、"What is 3 to the power 73?"である。6.7585199e+34が正解らしいが、ChatGPTはWolframの本に載っている実行例では、Wolfram|Alphaの結果と桁数も有効数字もまったく違う。今のChatGPT（GPT3.5版）では、3.3e+31と言っていて、桁数はかなり近づいたが、有効数字がまったく違う。そのほか、楕円の周の長さとか、中米の国の大きさの比較とかの例は、本書に挙げられている実行例では、かなりひどい結果になっている。GPT3.5版では多少の良化は見られるものの、Wolframが言うように個々のバグを修正していったのではきりが無い、というのが現状のようだ。だからWolframがChatGPTとWolframのシステムを組み合わせるのがよい、という主張は説得力がある。

泉鏡花「春昼・春昼後刻」（Kindle版 泉鏡花全集

「露宿」の感想に鏡花の家のことを書いたが、新聞に泉鏡花の麴町の家をデジタル再現したという記事があったので、逗子の家はどん

な家だったのだろうと、ネット検索してみたら、「泉鏡花生誕140年記念特集 鏡花ゆかりの逗子をめぐる旅」という記事が見つかった。今年は生誕150周年だから、10年前のもので逗子市立図書館報が出している季刊マーメイドという出版物である。なお、季刊マーメイドは郷土マーメイドと名前を変え、今も続いているようだ。それによると鏡花は逗子に2度住んだようで、最初は明治35年8月～9月で、場所は現在の桜山五丁目付近、次が明治38年～明治42年で、田越橋近くの現在の逗子五丁目付近だという。その記事で鏡花の「春昼」という作品は逗子にいた頃のもので、岩殿寺が舞台となっていると知った。それでKindle版の全集で読んでみた。

始めは語り手の「散策士」によるエッセイ風の文章かと思った。しかし、岩殿寺が舞台となり、その和尚（作品では終始「出家」と呼ばれる）による「客人」（岩殿寺に逗留した男）が玉脇みをという女性について話し始めると、急にロマン小説の世界になる。なお、岩殿寺はこの小説では「いわとのでら」とルビを振られている。登場人物の散策士と出家は最後まで名前が明かされないが、ヒロインはいきなり氏名が明記される。しかし、「春昼後刻」に入ってから名前が消え、「美女」と書かれ「たおやめ」とルビが振られるようになる。

話は最後の方で子供の獅子舞が出てくるあたりからかなり杜撰になって、結局獅子舞の小さい方が海で溺れて死んでしまうが、翌日鳴鶴ヶ崎で引き上げられたとき、玉脇みをとともに上げられ、その乳房にくっついていたという。前半で「客人」が彼女の恋焦がれて海で死んでしまうストーリーと一応呼応させているが、話の流れとしてはかなり無理がある。

出てくる地名に、聞き慣れないものが多い。まず岩殿寺のあるところは、久能谷（くのや）と呼ばれているが、これは現在の久木を指すらしい。また、そこは檀原の山裾とされるが、この「檀原」という地名は現在使われていないだろう。最後に溺死体が上る鳴鶴ヶ崎というのもし知らなかったが、逗子と葉山の間の岬で、現在は「鳴鶴公園」となっているらしい。また、終わりに「松翠深く蒼浪遙けき逗子より」という後書きのような短文が載っているが、そこに「田越の蘆間の星の空、池田の里の小雨の蛍、いずれも名所に数へなん。」という表現がある。この「池田」は今の「池田通り」に繋がるものと思われるが、正確にどのあたりをいうのかよく分からない。その後に、「近頃土地の名物に浪子饅頭というものあり」という文句があり、「不如帰」よりあとの時代の作品であることが分かる。後、逗子駅も何度か出てくる。しかし、「駅」とは呼ばれず「停車場」と表記され、「ステーション」とルビが振られる。その停車場の新築開きというの大きなイベントで、規模を大きくし建て直した駅舎の落成式が行われ、そこに舞台がかかって東京から俳優が来るという設定になっている。それで時期が特定できるだろう。

徳富蘆花が逗子に住んだのは1897年（明治30年）から1900年（明治33年）までで、鏡花が逗子に住んだときより、10年近く前だが、その間逗子を舞台とする「不如帰」を1900年に出版している。

石牟礼道子「天の魚 ー続・苦海浄土ー」（講談社文庫 Kindle版）

表題に「続・苦海浄土」とあるように、話は1971年大晦日における、東京チッソ本社での座り込みに始まり、その後の一連の抗議運動を「苦海浄土」より大幅な紙数を使って詳述する（文庫本で444ページ、「苦海浄土」は文庫で330ページ）。といっても石牟礼ら

しく、ドキュメンタリーというタイプではなく、やはり文学作品である。「苦海浄土」が出たのは1969年で、その5年後にこの「天の魚」が出ている。

「苦海浄土」を読んだのは、1988年である。美季子が生まれた年で、会社を辞める1年前だ。そのきっかけは丸谷オ一的「遊び時間」に収められた「うつくしか潮」だったと、感想に書いている。改めて「遊び時間」を見つけ出して読んでみると、そもそも丸谷自身がこの書を花崎皋平の評論で知って、そこに「苦海浄土」の「天の魚」からの引用があり、「その美しさに感嘆した」のでその本を読んでそれを紹介する文章を書いたのが、このエッセイである。

「天の魚」は今回ぼくが読んだ本のタイトルにもなっているが、もともとは「苦海浄土」の第4章のタイトルで、それが再利用されているのである。丸谷に言わせるとこの本（「苦海浄土」）の中で最も美しい部分が花崎によって引用されているという。また、「彼女は酔いどれて語る老漁師の言葉を、単に機械的に書き写しただけではあるまい。」と鋭く指摘してはいるが、まさか渡辺京二が聞き出したように「だって、あの人が心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの」とまでは、考えていなかったろう。

「苦海浄土」では「ゆき女きき書き」や「天の魚」のような被害者・患者からの聞き書きというスタイルを取っているが、この「続・苦海浄土」では、石牟礼が座り込みなどの抗議行動に直接参加して、現場の当事者として見聞きしたことを書いている。しかし、

「大人の加勢人たちがかけつけて来た。かけつけられない人びとも、電話のむこうで報告のリレーを受けもった。それぞれが手分けして夜を徹し、抗議文書が出来あがる。連署者たちの名

簿が一夜のうちに二百名近くになった。「抗議書は緊急でございますので当方でつくらせていただき、このような文案にいたしました。まことに唐突でぶしつけではございますが、出来れば、御賛意いただきたくて、御電話申し上げる次第でございます」とわたくしは懇願しつつける。ひとりの尊敬する著名氏からは、「あなたはそういうことをせずに、じっと辛抱して書くべきですよ作品を。多勢の人間の、役にも立たない抗議文書より、ひとりの人間の思いをこらした文学が、どんなに効果を発するか、あなたも知らないわけではないでしょう」との御忠告である。」（第七章 供護者たち）

というようなことも言われる。

被害者たちの間には、派閥ができる。本書で挙げられている派閥の名前は、訴訟派、一任派、自主交渉派、和解派、さらにもとの訴訟派に対して第二次訴訟派、と出てくるが、本書はその違いがよく分かるようには書かれていない。とにかく石牟礼が座り込みなどの行動を共にするのは「自主交渉派」で、これらの派閥の中ではもっとも先鋭で闘争的のようである。また、共産党や総評などが後から運動に加わってきているが、それらの党派的な勢力とは一線を画している。そして県民会議・弁護士との絶縁するという宣言が、収録されている。

夢野久作「ドグラ・マグラ」（夢野久作全集 Kindle版）

誰だか忘れたが、女性の作家（中野翠だったかもしれない）が自らの過去を振り返るようなエッセイの中で、若い頃この本を読んで衝撃を受けたということを新聞に書いていた。それで、前にKindle版の全集を買ってあったことを思い出し、読んでみた。しかし、気軽

に読み始めたが、長いので驚いた。文庫版では、上336ページ、下384ページというボリュームである。ただ、長いだけでなく技巧を凝らして多彩なスタイルの要素を詰め込んでいて、飽きさせない。

最初は「私」という一人称の独白で始まる。この「私」は記憶を失くしていて、自分が誰だか分からない。舞台は九州帝国大学と特定されている。そこの若林鏡太郎と正木敬之という教授が「私」を巡る主要人物である。若林は法医学者で、正木は精神病学者だが、二人は九州大学の同級生でライバルでもある。両者にとって「私」が過去を思い出すことが、きわめて重要であるという設定になっている。正木は「狂人の解放治療」と名づけた画期的な治療法を開発し、「私」はその実験材料となっている。その正木は1か月前に急死したということを、「私」は聞かされる。しかし、「私」は凄惨な犯罪事件に関係しており、若林は法医学者の立場から事件の調査に関与しているが、同時に正木が急死して後任が未定の精神病科の後事を委託されている。正木の研究によれば、人間の遺伝心理を応用すれば、一瞬にして人を発狂させ犯罪に導くことができる、ということで若林の法医学と結びついてくる。

このように犯罪事件の犯人は誰か、「私」の記憶は蘇るか、「私」の正体は何者か、という謎を追うというミステリが骨格のテーマではあるが、「遺伝心理」というかなりもっともらしい学説が提起され、100年前の作品ながら、作者はその当時の最新と思われる生命科学、遺伝学、心理学をかなり勉強していて、科学的な知識が巧みに活かされている。とくに驚くのは、DNAが知られていない時代に、各細胞に遺伝的な記憶が保存されていて、それが蘇るという想像をしている。

「そうしてその振じれ狂うた性慾の変態的習性と、その形容を絶した痛烈な記憶とを、その全身の細胞の一粒一粒毎に、張り裂けるほど充実感銘させていた事と思う」

その前に、神経細胞が互いに情報を伝達するという知識が書かれている。

「そうして人間のための唯物器官を形成する三十兆の細胞群が、隅から隅まで一粒残らず、脳髄を中心とした神経細胞の糸を引き合っている事実を確かめるや否や、死人の脳髄を両手に捧げて、一気に往来へ飛び出した。」

正木の遺言書と正木が撮った3次元の映像というものが出てくる。そこで実験の対象者として「呉一郎」という人物が登場する。これがこれまで独白をしていた「私」らしいが、それが同一人物なのか、双生児など別人なのか、あるいは正木の想像上の存在なのか、最後まで明らかにされない。しかし、呉一郎が従妹の婚約者「呉モヨ子」との結婚式の前日に、彼女を殺してしまうというのが、犯罪事件の一つである。その婚約者はまた、一郎と同じ九大の精神病院に入院している患者ともされるが、こちらも呉モヨ子と同一人物かどうかは、不明なままである。その呉家に伝わる家族の歴史と、中国からもたらされて一家が保持してきた絵巻物が話の重要な道具立てになっている。

多彩な文体を駆使していると書いたが、たとえば正木の遺書（「解放治療の実験結果報告」）、「キチガイ地獄外道祭文」，「絵巻物由来記」などに、夢野の文章技術が存分に発揮されている。

最後は何も解決せぬままに終わる。ちょっと物足りなさも感じるが、これも仕方がないかという気も起こさせる。このように奇想天

外なストーリーと文体で作られており、読んでいる方としては話がこんがらがってよく分からない感じもするが、書いている方も結末をつけるのに困ったのではないかと、いう気もする。しかし頭から読み返してみると、最初から結構周到に組み立てられていて、行き当たりばったりで書いたわけではないらしいことが分かる。

「ドグラ・マグラ」は映画化されている。それも比較的最近で、1988年に監督松本俊夫で製作・公開されている。Prime Videoで観ることができた。映画としてあまり面白いとはいえないが、長い原作を手際よくまとめていてそれなりの映像を作っている。

Francis Fukuyama "Liberalism and Its Discontents" (Kindle version)

The End of History and the Last Man, (Free Press, 1992)（「歴史の終わり」）。で著名なFrancis Fukuyamaの最新作である。よく読まれたらしい旧作は読んでいないが、この本は短いので割とすぐに読めた。

本書は序文で宣言されているように、古典的なリベラリズムを擁護する狙いで書かれている。古典的なリベラリズムという用語に手あかがついているとしたら、「人間的なリベラリズム」と言ってもよいという。しかし、そのリベラリズムが現在は多様な批判を浴びている状況をまず認識し、その批判の内容を正確に捉えてそれに反論していく。以下、感想というよりは、読み返して理解するために作った概要を書くが、結構長くなった。

まずリベラリズムとは何かを明確にしなければならない。フクヤマは、それは17世紀後半に最初に登場した原理で、政府の力を法で、究極的には憲法で制約し、その法の下にある個人の権利を保護する

仕組みを作るものとする。現在の米国でリベラリズムといえば、中道左翼の主義を指し、またヨーロッパでは中道右翼を指すのが普通だが、フクヤマはそれらいずれにも与しないとする。

そのようなリベラリズムは、右のポピュリストから批判されてきたばかりではなく、左からも多様な批判を浴びてきた。そのような批判の手始めとして、まずリベラリズムに対するネオリベラリズムが比べられる。これはシカゴ学派に代表されるような経済学の立場である。あるいはレーガン・サッチャーに代表される政治的な立場でもある。そこで取られたのが規制緩和と民生化の政策である。しかし、規制緩和を金融業界に進めると、レーマン・ブラザーズの破綻のような壊滅的なことが起こった。貿易の自由化は東アジアの経済勃興や、世界的な貧困の劇的な減少というよい結果をもたらしたが、米国などの労働者は中国などの労働市場と戦うことになって苦境をもたらした。また、世界的に貧富の差が拡大し、その結果難民が増加し、それが流入した地域にはポピュリストの反応が鋭敏になってBrexitやトランプ政権を産み出した。

ネオリベラリズムに関連し、あるいはそれに代って、所有権、消費者利益、自発的秩序などを中心に置く経済理論や政策論がさまざまに主張されたが、その流れでHayekにも言及される。それぞれにある程度の意味はあっても、同時に深刻な問題をもたらしたとフクヤマは言う。古典経済学以来、経済学では人間は合理的な存在で自分にとっての利便性の最大化を常に図るものとされてきた。そこに大きな問題点があるという。人は利己的に行動することもあるが、社会的な存在であり、誇り、怒り、うしろめたさ、恥、などの感情に大きく動かされる。したがって、個人の利便性という尺度には、物質的な要素以外のものが多く含まれる。経済学におけるネオリベラリズムの問題は、誤った仮定から生まれたものではなく、仮定は

往々にして正しいが、それから極端に所有権や消費者利益の過剰な尊重に進んで、国の役割や社会の連帯についてはすべて軽視してしまったことに問題がある。

The sovereign selfと題された第4章は、ちょっと難しい。これは経済のネオリベラリズムと逆に、左からのリベラリズム批判に対応した章である。現代のidentity politicsに警告するという立場から議論が行われる。個人の自律や選択をとくに重視する立場は、西欧だけでなくヒンズー教でも重視されるが、キリスト教の世界では、ルターの宗教改革に始まり、RousseauやKantに繋がる。その後、Hobbes, LockeやJeffersonがなどの自然権の主張に受け継がれた。現代ではこれを直接継承する哲学者はいないが、ハーバード大学のJohn Rawlsは正義が善に先行するという主張でKantに繋がる。

続いて左からの批判に移る。フランクフルト派の批判理論(critical theory)が紹介され、たとえばマルクーゼに代表される思想に触れられる。そこでは、古典的なリベラリズムは、資本の論理に都合よく組み立てられており、また西欧で作られた概念で他の地域のことは考慮されていないと主張される。リベラリズムは資本主義と結びついて植民地主義を産んだとされる。しかし、歴史的にはリベラルな国が植民地支配をしてきたかもしれないが、すべての人類は平等とするリベラルな考え方が、リンカーンの奴隷解放を産み出したとも言える、というのがフクヤマの意見である。

批判理論はidentity politicsと結びついて、合理主義への批判を展開してきた。たとえばSteven Pinkerはそれに立ち向かって、Enlightment Nowなどの著作を精力的に書いている（この本を現在読んでいるが、長いのでなかなか終わらない）。リベラリズムは当初から、現代の自然科学と結びついていた。一方、自然科学は原爆

の開発に象徴されるように、支配権力と密着し、またそれに利用されてきた。批判理論の立場では、何が真実で正しいかは相対的なものであり主観的であって、その主観性は権力者に握られがちであるとする。ソシュールが元とされる構造主義、というよりむしろデリダ以来の脱構築は、ポストモダニズムとして啓蒙主義以来のリベリズムを批判する。とくにMichel Foucaultが思想界に大きな影響を与えた。

これらの言説にはもっともなところがあるが、Foucaultのように自然科学を陰謀論に結びつけて否定するのは行き過ぎである。その陰謀論的な批判は、今はむしろ保守的な右翼の方に取り込まれている。ぼくはFoucaultの本は何冊か持っているが、いずれも読み通していないどころか、読んでいる部分の方が少ない。しかし、伝記は読んだ（1992年に読んだ D.エリボン、田村俣 訳「ミシェル・フーコー伝」）。フクヤマはしかし、このようなFoucaultに代表される考え方には反対する。そしてidentity politicsは間違っているとして、人類の平等性に基づくリベリズムに立ち返るべきだと主張する。

言論の自由は自由な民主主義の根幹にあるが、左右から攻撃されている。これには言論を力で支配してはならないという面と、政府も個人もひとのプライバシーを侵してはならないという面とがある。権威主義の国のロシアや中国は強い言論統制を行なっているが、技術の発達に伴い、新聞や放送などの従来のメディアではない媒体の支配力が政治的な力を生み出している。その典型の一つは、イタリアのBerlusconi（ベルスコニ）である。インターネットは嘘や意図的に歪められた情報の普及を助長するが、それへの対策が言論の統制であってはならないとフクヤマは主張する。

第8章では、リベラリズムに代わるものがあるかという観点から議論が行われる。右は宗教や愛国心がリベラリズムの下では消えるから、むしろ権威主義の方がよいという。左は権威主義には反対するが、それに代わるものとしては、むしろ無政府主義に心情的に近づいているという。どちらも現実的でないから、結局Churchillが民主主義について言った言葉が、リベラリズムにも当てはまるとする。

"No one pretends that democracy is perfect or all-wise. Indeed it has been said that democracy is the worst form of Government except for all those other forms that have been tried from time to time."

リベラリズムは国家のアイデンティティを確立するのに向いていない、とされる。人間が平等であるという理念は、国家という境界にかかわらず成立するし、すべきである。しかし、国家が武力を独占する単位として有効であり、国家を超える組織のEUはさまざまな不協和音を起こしているし、国際連合は多くの問題で無力な現状では、やはり国家という単位が必要である。しかし、国家の範囲は民族、文化、言語といったものでは規定できない。現在リベラルな国家も、歴史的にみれば非リベラルな経緯で作られてきた。しかし、リベラルな国家は、リベラルであったがゆえに、革新技术、文化、経済成長による豊かさを育てることができた。それに対し、中国は反リベラルでありながら、現在、技術、経済において成功を示している。リベラルな国家は、今後このような動向にどう対応していくかが問われる。

リベラルな社会の原則と題する最終章は、古典的なリベラリズムが不満や反対を生み出している現状に対し、リベラリズムを維持するにはどうすればよいかをまとめている。とくにリベラリズムに関し

て常に先頭に立ってきた米国に焦点を当てて、どうすべきかを以下のような数点を挙げて、論じている。

1. 政府の必要性を認識すること。政府への盲目的ではない信頼性を確立すること。政府の大きさや権限の範囲ではなく、その質が問題である。GDPの大きさばかりでなく、その平等な分配が重要である
2. 連邦主義(federalism)を重視し、権力を可能な限り下位のレベルに下ろすことが必要である。しかし、憲法上の権利のように国家レベルで決定すべき事項はもちろんある。
3. 言論の自由を守らなければならない。同時に個人のプライバシーの範囲を尊重しなければならない。
4. 個人の権利は文化集団の権利より上位に置かれなければならない。
5. 人の自律性は無制限ではない。

そして、最後の一般的な原則として、古代ギリシア哲学のmeden agan（中庸，節度）を挙げている。

2022年

堀川恵子「暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ」（講談社）

この本が第48回大佛次郎賞を受賞したことが、堀川恵子という作家を知るきっかけになったことは、すでに書いた。朝日新聞に載った授賞記事が面白い。まず、朝日の読書欄担当記者の福田宏樹が、次のように書いている。

「すべての著作が面白い、希代の書き手である。原爆や死刑、宗教といった重い主題を扱いながら、堀川作品はどれも読み始めたらやめられない。知られざる事実を掘り起こす取材力と、物語を巧みに運ぶ技術には既に定評がある。」

また、大佛次郎賞の現在の選考委員は、後藤正治、斎藤美奈子、田中優子、辻原登、船橋洋一であるが、皆べた褒めである。なかでも斎藤美奈子の次の評にとくに惹かれて、買って読む気になった。

「良質な戦争映画を観るようだ 文芸評論家・斎藤美奈子氏
堀川恵子さんには、エンターテインメント作家としての才能がじつはあるんじゃないかと思う。もちろん膨大な資料の探索と丹念な取材の裏付けがあつての話だけれども、どんな素材も見事に料理し、ドラマチックな物語に仕上げてしまう。

戦時中、日本軍最大の輸送基地だった広島宇品の宇品港を舞台に、ロジスティクスの面から陸軍の無謀な戦いぶりを描いた本書も例外ではない。自前の船を持たず、民間のチャーター船で兵站

を担っていたという恐るべき陸軍の実態。現場を知らない中枢部に苛立ちながらも従わざるを得ない船舶司令部。ことに田尻昌次と佐伯文郎、自身の判断と命令の板挟みになる二人の司令官の懊悩は良質な戦争映画を観るようだ。

選考会では全員大絶賛であった。作品の質と奥行きとスケールを考えれば当然だろう。当然すぎてつまらないほどだ。なので別の候補作も推してみたところ、あえなく一蹴された。堀川さんはすでに三つ星の書き手であり、何を読んでも裏切られない。結果に異論はないものの、たまには裏切ってもらいたい。」

最初に

「本書は、宇品に生きた三人の軍人が残した未公開資料などを発掘、分析し、知られざる宇品五十有余年の変遷をよみがえらせる。」

とある。3人というが、田尻昌次、佐伯文郎の二人が中心である。いずれも宇品にあった陸軍船舶輸送司令部の司令官を務めた人物である。3人目の上月良夫は田尻と佐伯の間の司令官で、勤めたのは半年だけであり、記述はp.198中の中の2行で終わる。それで本書の構成も、前半は田尻が主人公で、後半は佐伯が主人公という形である。

まず、田尻昌次の自叙伝を発掘したことが、永田則夫のときの精神鑑定の録音テープの移譲を受けたことに、匹敵するとまではいかにしても、類似する堀川の手柄であろう。しかし、田尻は昭和15

年3月に論旨免職となって表舞台から消え去ってしまう。当人は戦後も生き延び、昭和44年に85歳で亡くなっている。

序章に「誰よりもこの国の船舶事情を知り尽くし、開戦に反対して罷免された軍人がいた」(p.10)とあり、第1章で堀川が2016年に防衛研究所で原という軍事史の研究家から、田尻の名前を初めて聞くところから話が始まる。そこで、原が「田尻さんは、開戦に反対だったんじゃないかなあ。」ともらす(p.19)。しかし、その後にそのような話は出てこない。開戦前に罷免されたのは確かだが、罷免の理由は開戦に反対したからではなく、船腹の不足を訴えたからで、不足だから開戦できないと言ったわけではない。むしろ、七了口奇襲戦での活躍などを見ると、軍人として当然かもしれないが作戦遂行に全力を尽くしている。

後半の佐伯文郎は、広島に原爆が落とされた後の対応という点にとくに焦点が当てられている。そもそも広島が原爆投下の対象となったのは、「重要な軍隊の乗船基地」であったからというのが、米国における原爆投下候補地を検討する「目標検討委員会」の資料に載っているという。それが宇品のことである。実際の爆心地は広島市の中心部で、宇品は少し離れている。その結果、佐伯等の船舶輸送司令部は被害に遭わず、救助や修復に活動できた。それを佐伯が冷静に的確に指揮したという話である。

軍の輸送や補給に日本の場合は船舶が重要な役割を占めることは明らかだが、陸軍の場合それを行うのが、海軍ではなく陸軍内の船舶司令部という組織だったことが、本書でまず教えられることである。太平洋戦争が始まると、ルーズベルトはただちに「無制限作戦」を発令して、武装していない日本の輸送船にいっさいの警告なしに攻撃を行って撃沈するように命じた。これは国際法違反だったが、その結果、7200隻以上の輸送船が沈められ出征した船員の二人に一人が戦死した。

典型的な例は第9章で語られるガダルカナルである。1942年8月7日に米軍は1万人以上の大兵力でガダルカナルに上陸し、日本が2日前に完成させた飛行場を占拠する。日本側もラバウルから一木支隊部隊を投入するが、米軍の圧倒的な火力のためにほぼ全滅する。その後、6隻の輸送船団を巡洋艦、駆逐艦、戦闘機が護衛して突入し、砂浜に沿って投錨して積載物を揚陸する。そこで護衛の海軍は帰ってしまうが、そこにアメリカの戦闘機の大編隊が来て、徹底的に攻撃される。それでも一部の軍需物資は運び込みに成功した。それだけではまだ圧倒的に不足なので、第2弾の輸送船団突入が図られる。しかし、優秀船が揃えられず、輸送のために上陸した兵が島に取り残され、食料の運び込み自体に失敗し、攻撃を受けて死ななかったものたちも餓死してしまう。

ガダルカナルだけでなく、太平洋戦争では戦死よりも餓死者の方が多く出たということである。要するに、田尻が危惧したような輸

送，兵站に戦略的に大きな失敗があったということだ。

坂口安吾「日本文化私観」

最近，誰だったかが新聞かTVでこの作品について言及しているのを見た．ネットで検索すると「コロナ禍の今こそ、坂口安吾の「痛烈な日本文化観」に学ぶべき理由『日本文化私観』（坂口安吾）で読み解く」 秋山進（プリンシプル・コンサルティング・グループ株式会社 代表取締役）というのが見つかったので，これをネットニュースか何かで見たのかもしれない．Kindle版の坂口安吾全集があるので，探して読んでみた．

戦中の1942年に発表されたもので，Wikipediaによれば「墮落論と並び称される坂口安吾によるエッセイの代表作」だそうである．思い切って刺激的なことを言っているので，受けたのだろう．たとえば，

「伝統の美だの日本本来の姿などというものよりも、より便利な生活が必要なのである。京都の寺や奈良の仏像が 滅しても困らない が、電車が動かなくては困るのだ。我々に大切なのは「生活の必要」だけで、古代文化が全滅しても、生活は亡びず、生活自体が亡びない限り、我々の独自性は健康なのである。」

「タウトは『方丈記』を愛したが、実際、タウトという人の思想はその程度のものでしかなかった。」

「龍安寺の石庭で休息したいとは思わないが、嵐山劇場のインチキ・レビューを眺めながら物思いに耽りたいとは時に思う。」

「法隆寺も平等院も焼けてしまって一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺をとりこわして停車場をつくるがいい。」

戦後、実際に法隆寺の壁画や金閣寺が焼けたわけだが、その事実もこの坂口の作品がある意味予見的だということで、評価につながったのかもしれない。Wikipediaによれば、金閣寺焼失に際し『国宝焼亡結構論』を書いているそうだが、それはこのKindle版の全集には載っていない。

堀川恵子「教誨師」（講談社文庫）

教誨師とは死刑囚に月に一度ほど面接し対話し、死刑執行に立ち会うという役割を務める宗教者で、仏教の僧やキリスト教の神父・牧師がその役を担う。本書の主人公は教誨師を半世紀にわたって務めた浄土真宗の僧、渡邊普相で二ノ橋にある當光寺の住職である。渡邊はもともと広島出身で、原爆に遭い重傷を負っている。広島をベースとする堀川と同郷で、家も近いというが、それを知ったのは堀川が初めて寺を訪れてから数か月後のことだとしている。

「不毛な世間話の産物で、渡邊と私が、同じ広島県出身者であることが分かった。よくよく話を聞くと、互いの生家は車で四〇分足らずのところにあるようだ。」(p,16)

となっている。本当だろうか。普相が原爆に遭った経験は、本書でも重要な位置づけを与えられているので、堀川が普相にたどり着いたのも広島線の線からではないのかと疑われるが、著者がこう書いていて別にその部分に作為を凝らす必要もなさそうなので、信じればよいことではあろう。

堀川の調べによると、昭和40年代後半以降、教誨師が自分の体験を書いた書物の出版がピタリと止まっているという。法務省の通達で、教誨師は拘置所内で知りえた情報を口外してはならないと定められている。ある時期から拘置所の管理体制が強化されてこの通達が厳守されるようになり、その結果昭和48年に出版された『教誨百年』を最後にそのような出版物は出ていないという。

そのような状況の下で、堀川は渡邊のもとに足繁く通い、いろいろな話を聞きだす。1年経ってからは、それを世に出すのは渡邊が死んでからという条件のもと、話をテープに録音することも許される。さらに、渡邊自身が書き留めておいた「教誨日誌」も託される。それをもとに、渡邊が死んだ後に書かれたのがこの作品である。

たくさんの死刑囚の話が出てくるので、全体としてはやや散漫な印象も受けるが、堀川が貴重な話を探り当て、それを手際よく説明する力は他の作品と同じで、さすがと思わせる。

堀川恵子「裁かれた命 一死刑囚から届いた手紙一」（講談社文庫）

去年，堀川恵子の本を4冊買ったが，これで全部読んだことになる．その中で，この「裁かれた命」にもっとも感心した．

1966年5月に国分寺で強盗殺人事件が発生した．この事件の捜査に警視庁から応援で派遣されたのが，帝銀事件で名を上げた平塚八兵衛である．さらに平塚は帝銀事件後，吉展ちゃん事件を解決に導いて「オ二の八兵衛」と呼ばれる伝説の刑事となった．しかし，この強盗殺人事件の解決の糸口は，当時まだ31歳の若き捜査検事だった土本武司が見つけた．殺害現場に落ちていたスポーツ新聞のことを思い出し，捜査本部に訊くとすでに倉庫に保管したというので，鑑識に回すように指示を出した．その新聞から指紋が見つかり，それがその3年前に同じ八王子管内で女風呂を覗いた疑いで補導された当時19歳の少年，長谷川武のものと一致した．長谷川はすぐに逮捕され，あっさり自供した．

半年後，東京地裁八王子支部で死刑判決が言い渡された．土本にとってそれが最初で生涯一度だけの死刑求刑事件だった．判決の1か月後に長谷川から土本に宛てて葉書が届いた．それから死刑執行まで都合9通の手紙が土本に届くことになるが，その最初のものである．土本はそれをすべて保存していた．堀川が土本に接触したのは，取材していた別の死刑事件について，話を聞くためだった．

堀川の調査の結果、長谷川の裁判記録が検察庁八王子支部が名前を変えた立川支部に保管されていることが分かる。そこで資料請求をすると、プライバシー保護を理由に一切閲覧できないと拒否される。しかし、刑事訴訟法53条第1項に「何人も被告事件の終結後、訴訟記録を閲覧できる」とある。そもそも憲法第82条に「裁判の対審及び判決は、公開法廷でこれを行う」とある。

ここからいつものように堀川は粘りを発揮する。立川支部の事務官が「裁判に直接関わった者であれば閲覧を許すことがある」と言ったのを捉えて、捜査検察官であった土本に閲覧請求をしてもらえば、閲覧の可能性があるのではないかと考えた。実際、土本が請求すると、役人の抵抗はあったものの最終的には一審から最高裁までの判決文と、弁護士と長谷川による趣意書のコピーまで入手できた。

一審の裁判官の一人、泉山と連絡が取れて直接取材ができる。泉山は長谷川に前科がなかったことを改めて確認して、やや驚く。その後、死刑判決の傾向は変わり、被害者が複数でなければまず死刑にはならなくなる。

次に登場するのが、控訴審で国選弁護人を務めた小林健治である。長谷川本人は控訴の意思がなかったが、母親に納得させるために控訴する。国選弁護人のなり手がなかったところで、東京高裁の裁判官を辞めて弁護士になったばかりの小林の事務所に東京弁護士会か

ら引き受け手のいない裁判の国選弁護人を依頼する電話がある。それを受けたのが秘書をしていた長女の節子である。小林健治は亡くなっていたので、堀川の取材対象はこの節子になる。その節子が長谷川が小林に宛てた47通の手紙を保管していたのである。

表題にある「死刑囚から届いた手紙」とは、主にこの検事土本宛の手紙と弁護士小林宛の手紙を指す。その手紙の内容は、収監が長くなるにつれ「日に日に澄んでゆくように（土本には）思えた」(p.297)。

本書では声高には語られないが、その主題は死刑制度への疑問にある。長谷川は冤罪ではないが、その手紙を読むとこのような心境に至った人間を、法治制度の名のもとに国家が殺してもよいのだろうかと感じざるをえない。意外なことに土本は司法修習生のときに、死刑を廃止するための方策について論文を書いたことがあるという。ただ、本人もその論文がどこにあるか分からないというのを、さすがに堀川は探し出してくる。土本は「死刑存置の代表格」と見なされてきたというので(p.291)、このような論文を若いときに書いているというのが意外なのだが、長谷川に恩赦を与えるということ画策して失敗するなど、長谷川から来た手紙に心情としてはかなり動かされていて、そのことが本書が暗に提出している死刑制度への疑問に、つながっていく。

田中久美子「言語とフラクタル」（東京大学出版会）

出版されたのは奥付によれば2021年5月28日であるが、それと同時に寄贈を受けた。以前にSEAのフォーラムで田中さんに話をしても

らったらどうかと考え誘ったことがあり、当時本を書いているのでそれが完成したら、という返事を得ていた。しかしそれが5年ほど前のことで、なかなか本が出たという話も聞かないなと思っていたところ、ようやくこれが出たので声をかけてみた。内諾をえて2022年の2/15に開催することになり、講師紹介と司会をしてほしいとSEA側から言われたので、腰を据えて読むことにした。

力作である。前作の「記号と再帰 記号論の形式・プログラムの必然」も、同じ内容で英文の著作が先行して出ているが（Kumiko Tanaka-Ishii, *Semiotics of Programming*, Cambridge University Press, March 2010）、本書も英語版の "Kumiko Tanaka-Ishii, *Statistical Universals of Language -- Mathematical Chance vs. Human Choice*, Springer, 2021" が若干先行して刊行されたことも同じである。前作の日本語版は第32回サントリー学芸賞と第19回大川出版賞を受賞しているが、それもあってか今でもよく売れているらしく、東京大学出版会から「新装版」が2017年に出されている。ぼくは2007年から2012年まで、東京大学出版会の企画委員を務めて、毎月の企画委員会でこれから出版が予定される本の企画を議論して当否を決めるのに参加した。その企画委員会で改訂版の企画はたびたび出されたが、新装版という企画は聞いたことがなかった。よほど評判がよかったに違いない。本書もやはり東大出版会から出ていて、第75回毎日出版文化賞を受賞している。

SEAでの講演の報告をぼくが書いてSEAMailに載せたが、以下はそこに書いたものを利用して、本の紹介をしたい。

本書のキーワードの一つは、「統計的言語普遍」である。計算言語学の立場は、コーパスを統計的に分析してそこで普遍的に成り立つ法則を明らかにし、またそのような「法則」を満たす言語生成のモデルを作ることにある。統計的言語普遍の古典的な例は、Zipfの法則である。文書中に現れる単語の頻度を計測し、単語 w に対しその頻度を f として、すべての単語を頻度順に並べたときの順位を r とする。そうすると、 η, a を適当なパラメータとして、

$$f = ar^{-\eta}$$

となるというのが、Zipf則である。ぼくは学生のとくに、森口繁一先生の授業で初めてこの話を聞き、驚いた記憶がある。1968年か69年だと思う。順位などという量が統計的に扱われること自体にまず驚いた。Zipfがこれを論文として発表したのは1949年ということなので、森口先生が紹介されたときには、すでに20年が経っていたようだ。

この法則は、自然言語一般に広く成り立つだけでなく、プログラムでもプログラミング言語によらず成り立つ。ただ、自然言語の場合、文書中に一度しか現れない孤語が多くて、 f と r をグラフ上にプロットすると裾野が長く延びる形となる。また、コーパスの一部を

とっても同じような冪分布になるので、単語の分布は自己相似的と
いうことができる。

このような冪法則は、いろいろなところに現れる。たとえば上位
20%の金持ちが80%の富を持つという形で知られるParetoの法則
は、富の分布が冪分布に従う現象だと説明される。また、「小さな
世界」と呼ばれるような知り合い関係で構成される社会ネットワー
クの各頂点の次数（接続する他の頂点の数）の頻度分布が、冪分布
に従うことが知られており、そのようなネットワークはスケールフ
リーと呼ばれている。スケールフリーのネットワークは、次数が大
きい頂点ほど高い確率で新しい頂点と接続するという性質を持ち、
インターネットなどの巨大ネットワークの成り立ちと構造を説明す
るとされる。これは金持ちの話で言えば、金持ちはますます金持ち
になるということである。スケールフリーの話は本書のp.33に出て
くるが、Paretoの法則や小さな世界との関係はとくに述べられてい
ないので、その部分はSEAMailの原稿でぼくがサービスとして捕捉し
た。

SEAのフォーラムの演題は、「全体論的視点からプログラムを眺め
る」となっていた。本書でも言語へのアプローチとして「全体論
的」なものと「構成論的」なものを対比させている。かつての自然
言語処理の方式は、形態素解析→構文解析→意味解析と階層的に進
む、構成論的なものであった。しかし、深層学習がそれを「転回」
させ、事態を一変させた。その特徴は系列系列変換に代表されるよ

うな包括的处理であり、その意味で全体論的な視点に立っていると言える。言語学の父、構造主義の父、記号論の父であるソシュールは、「言語は全体論的システムである」と言っているので、ある意味では正統的な流れと言えるかもしれない。なお、田中さんにはソシュールの有名な「一般言語学講義」の翻訳という業績もある。影浦峡氏との共同による新訳として、2007年に東京大学出版会から出されている（影浦峡, 田中久美子 訳「ソシュール 一般言語学講義：コンスタンタンのノート」）。

しかし、プログラミング言語は構成的に設計されており、プログラミングは構成的に構築するものである。前に書いた「記号と再帰」の書評でも触れたように、ソフトウェア工学における1970年代の「構造的プログラミング」と1960年代のフランスを中心とする構造主義とは縁がない。構造主義はソシュールを祖とすることからも分かるように、還元論的な構造的プログラミングとは立場が異なる。

本書のもう一つのキーワードは「複雑系」である。構造主義でいう「構造」は形式的には記述されず、「リゾーム」のようなアナロジーで語られる。それでは科学にならないが、自然科学に類を求めるとすれば「複雑系」ではないかという。複雑系は物理学でいえば統計物理から生まれているが、さらに生物物理学や経済物理学に対象と方法が広がっている。田中さんは言語に複雑系の科学の方法を持ち込むというアプローチをとる。記号の系列である言語に対し統計的に見えてくる普遍を捉えて、それで自然言語とランダムな記号列

との違いや、自然言語とプログラミング言語の差異や、個別の言語の特徴を明らかにしようとするものである。

言語の話に戻すと、Zipfの法則は単語（や文字）の頻度分布に関するものだが、言語にとっては頻度だけでなく、その並び方、つまり系列がもちろん重要である。それに関しては「塊現象」、すなわち事象にはかたまって発生し、またしばらく間を置く、という断続現象があり、さまざま状況でこれが観測される。たとえば気象では雨が続くかと思うとまた途切れる、株式相場ではある株の値が動くに関連する株も動く、大地震の後には余震群が来る、といった現象である。言語でもある単語が現れるとそれがしばらく続いて現れる、という塊現象が見られる。

塊現象の解析方法はいくつかあるが、Taylor則に基づく解析は有用である。Taylor則とは、範囲 $\backslash(l\backslash)$ 内の事象の生起回数の標準偏差 σ が平均 μ に対して次のように冪乗に比例するというものである。

$$\sigma \propto \mu^{\alpha}$$

α をTaylor指数というが、経験的に $0.5 \leq \alpha \leq 1.0$ となることが知られている。生物、気象、金融市場、社会学などで知られていたが、言語の研究例はほとんどなかったのを、田中さんたちが実証的に研究した。単語が完全に独立分布の場合 $\alpha = 0.5$ となるが、塊現象があると α が増大する。

さまざまな文書のTaylor指数をプロットすると、書き言葉では0.5に近くなるが、話し言葉では0.63と増大し、幼児の発話では0.68とさらに増え、プログラムでは0.79となった。これはプログラムと自然言語の構造的差異を示す、一つの例と思われると田中は言う。プログラムの解析に深層学習を適用する研究例は増えているが、プログラムや論理などの還元論的な系を、構成論的ではなく全体論的な深層学習によってどのように扱うのが妥当かについては、まだ検討の余地があるということである。

呉座勇一「頼朝と義時 武家政権の誕生」（講談社現代新書）

「応仁の乱」で当てた呉座だが、なぜか同じ中公新書でなく講談社新書としてこれを出した。「応仁の乱」以前は無名だった呉座だが、今回はベストセラーの著者として名が売れているだけでなく、題材も今年のNHK大河ドラマそのもので、当たることは間違いなさそうな情勢である。しかし、それにしても本書はそれほど宣伝されてもいないし、何十万部売れたというようなニュースも聞かない。そのわけを匂わせる記述が、本書のあとがきにある。

「しかし、本書執筆の最中、私の愚行により、「鎌倉殿の13人」の時代考証を降板することになった。多くの方の心を傷つけ、多くの関係者にご迷惑をかけた以上、本書の刊行を断念することも考えた。」

この事実を知らなかったなのでネットで検索すると、次のような記事が見つかった。

「NHKは23日、来年のNHK大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の時代考証を担当する一人、歴史学者の呉座勇一さん（40）が降板すると明らかにした。呉座さんのツイッター投稿に不適切な内容があり、呉座さんが降板を申し出て、NHKが了承したという。」（日経 2021年3月23日）

これだけでは何が起こったのかよく分からないが、ネットの他の記事を見ると、発端はフェミニストとしての批評活動でも知られる北村紗衣（英文学）との論争で、呉座のTwitterアカウントのフォロワーにしか見えない場所で何度も北村を揶揄していた事実が明らかになり、「女性蔑視だ」との非難が殺到し炎上状態となったらしい。呉座はその後、北村に対して非を認め謝罪したという。

頼朝と言えば、美季子が小学校のときに清泉小学校の宿題で作った紙粘土の頼朝像が思い出される。それに美季子は「まじめな頼朝」という題を付けていた。特別委員会の連中に家に来てもらってホームパーティをやったとき、池田さんがこれを見て面白がっていたことを思い出す。それがいつだったのか、孝子が付けている料理メモによって、1998年5月17日だったことが分かった。それをもとに自分の日記を探したら、確かにその日付である。

もう一つの思い出は、高校1年のときの夏休みの宿題で「平家物語」を原文で通読し、感想文を書くというものがあったが、その感

想文の題を「源頼朝について（「平家物語」を読んで）」としていることである。1963年の夏に書いているはずだ。その作文はまだ手元にある。宿題と言っても本当に全文を読んだ生徒がどのくらいいたのか怪しいものだという気がするが、ぼくは岩波古典文学大系の「平家物語」を買って、全文を真面目に読んだ。そのうえで頼朝について書いたのはちょっとひねった選択だったようにも思われる。平家物語の中では、頼朝は中心人物として描かれているわけではない。作文の中ではやや意外なことに、頼朝が生捕りにされた重衡に対応する態度や、宗盛に対面する場面などから、頼朝の人のよさを感じていることである。「平家物語」は都の貴族の立場から書かれているので、頼朝が貴族を尊敬するような態度を取ることに作者が共感して、頼朝を情のある人として描いているのではないか、と言っている。一方で義経や範頼に対しての容赦のない苛烈な措置については、「重衡などに対する時と比べてみると、まるで別人のようである」と書いている。そして最後に次のようにまとめている。

「このように着々と自分の態勢を固めてしまう頼朝を、この作者はただ驚いて見ているようである。平家の人々のみやびやかで優な様子や、哀れな最期に感心しても、このような現実的な頼朝などは分からないのであろう。しかしそういう頼朝が、新しい武士の時代を築いていったのだろう。」

呉座の本では、さすがに「平家物語」は史料としておらず（ただp.41で取り上げられているが、それも「『平家物語』は物語であり、虚構を多く含む」という注釈付き）、「源平盛衰記」も「義経

記」もほとんど引用されない（しかし、p.55に「『源平盛衰記』によれば」という部分がある）。中心は「吾妻鏡」や真名本「曾我物語」だが、「吾妻鏡」は北条氏が鎌倉幕府の実権を握った時代に成立した歴史書なので、北条の正当性を示すような脚色がいろいろあるという。

頼朝の存命中からそうであるが、鎌倉の御家人同士の権力争いは激しい。陰謀と内乱が頻繁に起きている。その中では義時は比較的目立つような行動には出ていない。それより政子の方が権力をふるっていたようだ。それは元將軍の妻や現將軍の母という立場から来るものかもしれないが、性格もあるだろう。しかし、自分の息子である頼家を幽閉して死に追いやるなど、苛酷でもある。

義時の有能ぶりは今一つ分らないところもあるが、承久の乱でいち早く対応して勝利に導いたことが、その後の北条による鎌倉幕府の存続に大きな役割を果たしたことは、確かだろう。

中野剛志「変異する資本主義」（ダイヤモンド社）

藤崎Zoom会で、次に岡本さんがこの本を紹介するというので、買って読んでみた。岡本さんの話は明後日の3/29に予定されているので、そもそも岡本さんがなぜこの本を読むに至ったのか、まだ聞いていない。2021年11月16日に出た新刊はややはやである。一方でこの手の本の宿命と言えるが、出たそばから世界は変わる、ロシアによ

るウクライナ侵攻前に出されているわけで、ロシアのことは多少出てはくるが、もちろん侵攻を予見するものではない。

一つの主張は新自由主義に決別して積極財政をすべきという点である。その意味で、現在のバイデン政策は評価されている。バイデン政策が画期的だとする中で、経済学にパラダイムシフトが起きているという。それで一時マスコミでもてはやされたMMT (Modern Monetary Theory) 「現代貨幣理論」に基づく話かと思ったが、本書ではMMTのことはまったく出てこない。どうやら経済学ではMMTはすでにまったく否定された過去のことであるらしい。MMTの主張は、「政府の銀行」である中央銀行が「主権通貨を発行」しさえすれば、政府による財政支出は積極的、または自動的にファイナンスされるから、積極財政にはまったく問題がない。主権通貨発行に基づく財政支出は、経済が完全雇用水準に達するまで、過剰なインフレーションなどのマイナスの影響をともしることなく拡大できる、というものであった。

経済政策では著者はバイデンを評価しているが、第5章の「覇権戦争」では「リベラリズム」と「リアリズム」を対比させて、中国が台頭したのは米国の戦略がリベラリズムで、民主主義や貿易の自由を進めれば平和で安定した国際秩序が実現するという信念に基づいていたため、それを利用して中国が経済成長に成功し、軍事費を増大し続けて米中のパワーバランスを崩したという。したがって、直接そうは言っていないが、バイデンの政治戦略は評価していないよう

に見える。少なくとも、クリントン政権、ブッシュ政権、オバマ政権がリベラルを基調としたが、「リベラル覇権戦略」は失敗に終わったとする。本書はウクライナ侵略を予見してはいないと言ったが、次のような1節がある。

「オバマ政権は、ウクライナにおいて親露派のヤヌコヴィッチ政権に対する抗議運動が起きた際、親米政権の樹立を企て、抗議運動を支援した。これがロシアを刺激し、ロシアはクリミアを奪取した。アメリカはロシアに経済制裁を科したが、ロシアはこれに対抗するため中国に接近した。ロシアと中国が手を結んだことで、ユーラシア大陸における中国のパワーはいっそう強化されることになった。」(p.189-190)

確かに冷戦後リベラル戦略を取れば、中国や他の専制的な国も経済的に豊かになり、それによって民主的な方向に進むという期待は、まったく裏切られた。しかし、1989年の天安門事件のときに、どちらに歴史が動くかという分水嶺があった。あるいは、ロシアもゴルバチョフやエリツィンのときは民主化を期待させたし、アラブの春のときはイスラム諸国の民主化の芽があった。いずれも専制主義の方向に押し戻されてしまったが、今後振り子が逆に揺れる時が来るかもしれないと期待するのは甘すぎるだろうか。

笠原十九司「日中戦争全史（上・下）」高文研

確か新聞の書評でこの本の存在を知った。これを読んでいるときにロシアによるウクライナ侵略が起きたが、日本が満州事変、北支事

変、日支事変で中国に対してやってきたことは、ロシアがウクライナにやっていることとよく似ている。理屈の通らないいいがかりとでっちあげの工作で侵略を始め、国際連盟で非難され（それで日本は脱退してしまうが）、石油などの資源の禁輸といった制裁を受ける（そしてそれが太平洋戦争の引き金になる）、というパターンが同一である。当時の日本はヨーロッパ帝国主義がアフリカ、中近東、インド、中国を侵略し、遅れてアメリカが例えばハワイやフィリピンを侵略したのと同じだという意識だったかもしれないが、そのような古いタイプの帝国主義的な発想が、21世紀のプーチンに継承されているのは驚くべきことであると同時に、結局歴史は繰り返すのか、という失望感に襲われる。

日本が満州事変とか日支事変と呼んで「戦争」と呼ばなかったのは、宣戦布告をせずに侵攻しているからで、それによってハーグ陸戦条約で禁止している毒ガス・細菌兵器の使用を、実際に行ったことと関係している。日本は1907年のハーグ陸戦条約は批准したが、その後1925年に調印された「毒ガス・細菌兵器の使用禁止に関するジュネーブ議定書」は、調印はしたものの批准しなかった（下、p.42）。また、1929年に「捕虜の待遇に関する条約」ジュネーブ条約が締結された。1907年のハーグ陸戦条約で「捕虜は人道を持って取り扱われるべし」という規定があるが、それを国際法として確立したのがこのジュネーブ条約である。日本は調印したものの、軍部の反対で批准しなかった。その理由は、日本軍の兵士が「捕虜は保護される」ことを知って、進んで投降し捕虜になることを危惧したから

だという。「生きて虜囚の辱めを受けず」という日本軍部の指導と合わないということである（上， p.105-106）。

ロシアもこのたびのウクライナ侵攻を「特別軍事行動」などと呼んで戦争と呼ばないのは、同じような目的だろう。ウクライナが化学兵器を開発していると報道に流しているのは、自分でそれを使用しても、やったのはウクライナだと主張するための予防線のようなのだ。幸い今のところは、まだ実際の使用にまでは至っていないようだが、キエフ周辺から撤退した後に残された残虐行為の跡は、化学兵器や細菌兵器の使用と変わらぬ非人道的な行動が行われたことを裏付ける。

孝子と美季子を連れて武漢に行ったとき、オフクロが武漢三鎮では日本はずいぶん悪いことをしたんだと言った。三鎮とは武昌・漢陽・漢口のことで、今ではすべて武漢市に組み込まれている。1938年10月の武漢攻略作戦で日本軍の戦死者6800。戦傷者25000。中国兵の戦死者は約20万人。中国側の記録では、日本軍の死傷者4万人余、中国軍の戦死傷者は40万人前後でそれぞれ約2倍になっている(下， p.41)。ペン部隊として林芙美子らが派遣され、武漢陥落戦勝祝賀会などが大々的に開かれた。そのような国内の状況下で、オフクロは悪いことをしたという知識をどこから得たのだろうか。戦後のことでなく、その当時にそのような情報を得たのだろうと思う。今のロシアでは、プロパガンダで多くの国民がウクライナ侵攻を正当なものと思い込まされているようだが、テレビのニュースで

戦争反対のポスターを掲げた勇気あるディレクターがいたように、伝わる場所には正しい情報が伝わるものと言えるかもしれない。しかし、オフクロは他の言動から見ても、不思議なくらいリベラルな発想を持っていたと思う。

本書を通じて強調されているのは、日中戦争において陸軍よりむしろ海軍の方が拡大主義を取り、戦争を先の見通しなしに泥沼化させたという点である。その点は「あとがき」にさらに明確に述べられている。

「...盧溝橋事件の前年の1936年に日中戦争を発動しようとして陸軍に働きかけたのは海軍であったし、華北を戦場に限定して北支事変として開始された日中戦争を、大山事件という上海海軍特別陸戦隊の大山勇夫中尉を犠牲にした謀略事件を仕掛けて一挙に上海へと戦場を拡大させ、宣戦布告もなしに中国の首都南京に渡洋爆撃を加えて日中戦争を全面戦争化させたのも海軍であった。そして日中戦争からアジア太平洋戦争へと移行していく過程で海軍が果たした役割は陸軍より大きく、決定的であった。なによりも海軍航空隊は、1937年8月14日の杭州・広徳への渡洋爆撃から始まって、1941年9月までの4年間にわたり、毎日のように中国の都市や港湾、鉄道や駅・列車・船舶、飛行場や軍事施設などにたいする爆撃をおこない、それは爆撃機と戦闘機の増産にともなって空爆は年ごとに激しくなり、ついには本書で詳述したように、抗日戦争期の中国国民政府の首都重慶にたいする長期にわたる大規模な無差別爆撃をおこない、重慶の市街を徹底的に破壊し、多数の市民を殺害したのである。」

文章は粗いが、まさにロシアによるウクライナ侵略を連想させる記述である。そしてこれまで日中戦争における海軍の役割と責任が究明されてこなかった理由をいくつか挙げている。その中に、日本国内では戦前から海軍は陸軍に比べてスマートで、「国際的・開明的」であるというイメージがあったことが挙げられている。それが戦後の東京裁判で海軍が組織的に行った海軍首脳の免責工作につながり、海軍善玉説が流布されたという。そして、山本五十六・井上成美・近藤信竹ら海軍首脳は、本心では「日本はアメリカと戦ってはならぬ」と思いながら「やむをえず」対米開戦に入ったというが、そのやむをえずというのが陸軍との予算獲得競争に負けないためという「身内の論理」によっていたと著者はいう(下, p.209).

陸軍の方で著者によって再三やり玉に挙げられるのは、ノモンハン戦争をしかけた服部卓四郎と辻政信で、膨大な数の兵士を死なせておきながら、自分たちは参謀本部にいて前線の悲惨な状況を直接には知りもせず、ノモンハンの失敗の責任をとる形でいったん他の職に転じたのちに、参謀本部の作戦課長と作戦班長にそれぞれ就任する。その後、服部卓四郎と辻政信は、ソ連の強さを認識したために南進派に転じ、大陸打通作戦を強行してまた多大の犠牲者を出したが、作戦命令は大本営の命令、すなわち天皇の命令という形になったので、天皇の戦争責任を免責した東京裁判でも裁かれることがなかった(下, p.93)。それどころが服部は戦後、外地部隊の引き上げ業務を担当し、さらに戦史研究の研究者として余生を送った。辻は戦犯として逮捕されるのを逃れるため地下に潜行し、東京裁判終了

後に密かに帰国。逃走中の記録「潜行三千里」を出版してそれがベストセラーとなり、さらに「ノモンハン」を出版。参議院議員、衆議院議員を歴任する。その辺はぼくにも記憶がある。まったくよくもぬけぬけと、という感じである。

斎藤幸平「人新世の「資本論」」集英社新書

しばらく前に評判になった書だが、中野剛志「変異する資本主義」を読んだので、関連で思い出し買って読んでみた。帯に「40万部突破」と出ているが、このような本が新書として出て40万部も売れるとすると、日本の読者層のレベルも高いという気がする。

主張はきわめて明快であり、それを平易ながら論理的な語り口でしっかりと書き込んでいる。

Anthropoceneとは、人類が地球の地質や生態系に与えた影響に注目して提案された地質時代における現代を含む区分である。オゾンホールの研究でノーベル化学賞を受賞したパウル・クルツツェンらが、2000年にAnthropoceneを提唱した。和訳名は人新世のほかに新人世や人類新世があるらしいが、本書では人新世（ひとしんせい）を採用しているが湯桶読みで違和感がある。その特徴は地球温暖化などの気候変動、大量絶滅による生物多様性の喪失、人工物質の増大、化石燃料の燃焼や核実験による堆積物の変化などで、その原因は人類の活動である。その始まりは12,000年前の農耕革命とするものから、1960年代以降という意見まで幅がある。

斎藤幸平は1987年生まれと若いですが、いまだ珍しいマルキストであり、ベルリン・フンボルト大学で哲学博士を取得している。2018年に "Karl Marx's Ecosocialism: Capital, Nature, and the Unfinished Critique of Political Economy," Monthly Review Press, 2017 でドイツチャー記念賞を受賞した。当時31歳で歴代最年少受賞だそう。この本は日本では『大洪水の前に』と題して翻訳が出されているが、世界5か国で刊行されているという。

人が引き起こしている気候変動は、放置すれば地球の危機だが、その危機を回避するには資本主義と決別しなければならないという主張である。資本主義の先進国が技術によって危機を回避できると考えるのは、これまで環境負荷を外部化することでみかけの解決に成功してきたように見えるからで、その負荷は空間的な転嫁、つまり周辺部に負荷を押しつけるか、時間的な転嫁、つまり後の世代に押しつけるかしている。

解決策としてグリーン・ニューディールが主張されているが、そのような気候ケインズ主義は地球の限界にぶつかって破綻する。斎藤の主張は経済成長を促進しながら気候変動問題を本質的に解決することは不可能だということである。ではどうすればよいか。

斎藤の持ち出す政策は「潤沢な脱成長経済」である。その根拠として持ち出すのがマルクスである。マルクスの生前には『資本論』は第1巻しか出ず、第2巻、第3巻はエンゲルスが編集してマルクスの

死後に出した。第1巻が出たのが1867年で、その16年後にマルクスは死んでいる。なぜ『資本論』の刊行が遅れたかというと、マルクスが晩年に生産至上主義から決別してエコロジー研究と共同体研究を進めたからだという。同時に、ヨーロッパ中心主義からも離れた。斎藤は、その晩年のマルクスの仕事を深く研究したようだ。

「潤沢な」という形容詞については、「人工的希少性の領域を減らし、消費主義・物質主義から決別した「ラディカルな潤沢さ」」(p.266)という間接的な説明はあるが、それ以上のあまり詳しい説明はない。「脱成長」にはいろいろ批判がありそうだが、それについては斎藤もかなり応えようとしている。一つの論点は、南北問題解決のためには、経済成長が鍵だとするものである。しかし、政治経済学者のケイト・ラフースが主流派経済学を批判して、脱成長を支持するようになったことを紹介し、既存の先進国をモデルとして途上国の開発援助を行い、社会的閾値を満たそうとすることは、地球全体で見れば破滅への道を歩むことになるという。その前に社会的閾値の話があり、社会的な土台と呼ぶ水や所得や教育などのベースと、環境的な上限(planetary boundary)との間に世界中の人々が入るような経済システムを作れば、地球は持続可能となり破滅は避けられる。しかし、現在の先進国はこのplanetary boundaryをはるかに超える社会になっている。

だからラフースやダニエル・オニール（環境経済学者でバウンダリーを定量的に研究している）も脱成長を真剣に検討すべきだとして

いる。ただ、斎藤に言わせるとどちらも資本主義システムそのものに立ち入らないのが問題だという。その点、斎藤はかなり過激で、資本主義ではグローバルな公正は実現できないという。

日本で脱成長が不人気なのは、高度成長の恩恵を受けてあとは逃げ切るだけの団塊世代が脱成長という「綺麗事」を吹聴している、というイメージが強いからだという(p.120)。資本主義システムを維持しながら脱成長を目指すと、「失われた30年」のような結果となる。そうでなくて自由、平等で公正な脱成長を目指すべきだというのだが、それにはどうすればよいのか。そこで斎藤が持ち出すのはやはりマルクスである。マルクスは生産手段だけでなく、地球を「コモン」として管理するという思想に、晩年至っているというのが斎藤の主張である。晩期のマルクスはエコロジカルな資本主義批判をしているというのである。それは斎藤も参加してるマルクスの草稿やノートを大量に含む新たな全集の編纂作業MEGAを通して、得られた知見という。

コモンで連想されるのは、昔読んだ戒能通孝の「小繋事件：三代にわたる入会権紛争」（岩波新書）である。あまりにも昔のことなので、実際に読んだのか、オヤジが読んでいたことを記憶しているだけなのか、怪しいほどである。

16世紀と18世紀にイングランドでコモンズの囲い込みが行われ、それによって資本主義が離陸した。たとえば水力はコモンで潤沢だっ

たが、化石燃料になって希少性が働き、資本に独占されるようになった。斎藤はコモンを再建することで、潤沢さを取り戻せると主張する。たとえば電力は、住民が管理することでコモン化できる。そこではもちろん持続可能なエネルギーによる発電が、想定されている。その理屈としては、原子力や火力発電では閉鎖的な技術が使われるが、太陽光や風力の利用では「開放的な技術」が使われるので独占ができず、コモンに馴染むという、やや強引なロジックが使われる。しかし、コモンのシステムはこのような電力や水だけでなく、生産手段にも適用でき、具体的にはワークーズ・コープとしてすでに実現されているという。

そしてトマ・ピケティも現在、資本主義の超克を求め、従来の累進課税による折衷的な政策の主張を捨て、社会主義に転向したということも紹介されている(p.287)。

最後に実践的な具体例として、バルセロナにおけるエコロジカルな都市改革の運動が紹介される。バルセロナは2020年1月に気候非常事態宣言を発表し、様々な取り組みを行っているという。

三浦雅士「青春の終焉」（講談社学術文庫）

UPの4月号に、いつものように「東大教師が新入生んすすめる本」の特集がある。その中で、真木悠介「時間の比較社会学」と三浦雅士「青春の終焉」は、読んでみてもいいかなと思った。前者はアマゾンで普通に売っているが、後者は古本しか出ていない。この際、

図書館を使ってみるのもよいかと思い、散歩がてら逗子図書館に赴いた。そこで検索にちょっと手間取ったが、とにかく見つけてこの本を借りてみた。初めての経験である。しかし、貸出期間が通常は2週間、延長は1週間まで、となっていて、500ページあるこの本を読み切るのは楽ではない。けれども、自分で買った本と違いいつでも読めるというわけにはいかずに、そうかといって読み終わらずに返すのもシャクという妙な義務感に押される、読書になった。

はしがきに

「しかし、小林秀雄が「これを機会に、自分の青春は完全に失はれたぐらゐの事は、とくと合点したいものだと思ふ」と書き記したほかならぬ1960年代を最後に、青春という言葉はその輝きを急速に失ってゆく。学生反乱の年として知られる1968年、おそらくその最後の輝き、爆発するような輝きを残して、この言葉は消えていった。なぜか。」(p.10)

とある。

さらに、

「かつて『朝日ジャーナル』という週刊誌があった。」1959年に創刊され、1992年に休刊された。1960年代、70年代、80年代を生き抜いたわけだが、光り輝いていたのは、疑いもなく、60年代、それもとりわけ68年、69年、70年の、学生反乱の季節だった。」(p.17)

とあるので、これは読まねばと思った。

朝日ジャーナルについては、"雑誌について"(SEAMAIL, Vol.7, No.1 (1992), pp.8-9)という小文を書いたことがある。たとえば次のようなことを書いている。

「2年前に父が死に、それ以来、母が一人で住んできた逗子の古い家を、取り壊して建て直すことにした。この古い家には学生時代からの自分の持ち物も、かなり残っている。その整理に結構時間がかかった。その中に、いったん処分しようとして外へ出しながら、思い直して置いておくことにした、朝日ジャーナルの1968年前後の束があった。それが今年の2月の話だが、その直後に廃刊というニュースが他の週刊誌にながれ、だいぶ遅れて朝日新聞もそれを認めた。妙なめぐり合わせだと思ったものである。」

まさに68年、69年、70年の「光り輝いていた」時期のものを持っていたわけだ。この文章では処分しようとして思いとどまったことを書いているが、さすがにその後、捨てた。

すでに上の引用でも小林秀雄が出てくるが、その後も頻出する。

「三島由紀夫も中村光夫も、その渦に巻きこまれるように生きたわけだが、この近代日本の流行語を、そのなかで生きることのできるひとつの座標系に、すなわち批評の基準、人生の基準にまで擬装したのもまたひとりの文学者だった。いうまでもなく、小林秀雄である。」(p,39)

「大岡昇平が『作家は行動する』に違和感を持ったのは当然である。江藤淳がそこで意図したことは、小林秀雄を批判し、そ

れを乗り越えることにほかならなかったからである。新進気鋭の批評家として、これはあたりまえのことである。」(p.52)

ところが、巻末に丸谷才一が文庫本への解説を「ある危険な本の読後に」と題して書いていて、そこに次のような記述があって、小林秀雄がやたら登場する理由が分かった。

「...三浦雅士が『青春の終焉』という長篇評論をはじめると、小林秀雄の名がむやみに出てくる。硯友社に触れても、故郷を論じても、引き合ひに出される。もしも西洋の本と同じ調子で巻末に索引をつけたら、この項が一番長くなるのではないか。実は、そんなことに驚いた私が迂闊なので、もともとこの本は小林秀雄論なのだから、さうなるのは当たり前なのだ。そして、なぜ『青春の終焉』が小林秀雄論なのかといへば、これは表向きは近代日本といふものを主題としてゐて、しかも青春が近代日本の合言葉みたいな格好だからだらう。三浦がわれわれの近代といふ不憫なものの歴史をたどらうとしたら、たまたまその時代を懸命に生きた不幸な男がゐたのである。」

丸谷才一が死んだのは 2012年（平成24年）10月13日だが、本書の原本は2001年に講談社より刊行され、講談社学術文庫としては、2012年4月10日に出ているので、丸谷が死ぬ直前の文章である。絶筆と言えるかもしれない。三浦の本文で丸谷はかなり褒められているので、丸谷もこの解説を上機嫌で書いているらしいことは、その「ある危険な本の読後に」というタイトルからも感じられる、三浦の丸谷評は、たとえば次によつてである、

「太宰治が落語家であるとすれば、丸谷才一もまた別の意味で落語家であるといわなければならない。前者が古典落語を換骨奪胎することに意を用いた、すなわち演奏に関心を集中させたとすれば、後者は新作落語の可能性を切り開いた。」(p.239)

「『たった一人の反乱』(1972)より『男のポケット』(1976)のほうが社会的影響力は大きかったかもしれない。(…)口語と文語のあわいを縫うように進む文章の芸を発展させた。」(p.242)

この本は返さなければならないという読書だったので、読んでいる最中にある程度まめに文章を書き写しておいた。すでに引用したp39に「いうまでもなく」が出てくるが、これはその後、頻出する。

「為政者にとっては、その場が中央であり、遠方が地方である。これがそのまま文明と野蛮という分割になったことはいうまでもない。」(p.337)

「江戸戯作、とりわけ読本が、中国白話文学の強い影響を受けていることはいうまでもない。」(p.340)

さて、「青春」とか「青年」というのは、明治の初期に作られた言葉で、1960年代終わりにその終焉を迎えた、というのが三浦の主張である。その明治期の濫觴については、はしがきに次のように書かれている。

「青春も青年も英語ではユースだが、そのユースに青年という訳語が与えられたのは、1880年、東京基督教青年会が発足した段階においてである。はじめヤング・メンの訳語として登場した青年という言葉は、1885年、徳富蘇峰が『第十九世紀日本ノ青年及其教育』を上梓するにおよんで燎原の火のように日本全国を嘗めつくした。」(p.10)

しかしその後、この青春という語の始まりについて語られるのはずいぶん後で、馬琴の話をさんざんした後に

「馬琴が没したのは1848年。それからほぼ三十年後の1880年、小崎弘道たちはYNCAを訳して基督教青年会の名称を得た。」(p.281)

実に300ページ近く先である。

何で馬琴が出てくるかというと、

「馬琴の読本はすべて青春の書である。」(p.272)

「『八犬伝』が青春の書の色彩を明瞭に帯びるのは、八犬士のひとり犬塚信乃の成長の物語が始まる第十七回以降ということになるだろう。」(p.272)

というだけでなく、「齡（よはひ）は尚（いまだ）青年(うらわか)く」という用例や、「主人はいまなお青年にて」という用例があって、後者にはルビがないので、「うらわかき」と読むのかもしれないが、「せいねん」とも読めるかもしれないという。

青春とか青年という言葉がいつ造られて、どのように受け入れられ、また終焉したのか、という話だとすれば社会学のテーマかと思われるが、三浦によるこの書は徹底して文学の話である。これを「東大教師が新入生すすめる本」ですすめているのは伊達聖伸という駒場のフランス語の教授だが、面識はない。しかし、いまどきの新入生が、ここに取り上げられているような作家や作品に興味を持つだろうか。少なくとも初めの方で出てくる作品の一部を高校時代までに少しでも読んでいなければ、およそ面白味を感じないだろう。出てくるのは小説だけではない。平野謙、中村光夫、江藤淳という文芸評論家の系列がある。ぼくは高校時代、これらの評論家のものは少しだけだが読んでいた。といってもオヤジの本に手を出したという程度だが、オヤジは結構文学好きで、この手の評論まで割と読んでいた。それをちょこちょこ拾い読みした。とくに記憶にあるのは平野謙の「島崎藤村」で、藤村をかなり悪者として描いていたと思う。この三浦の本の中で引用で出てくるものだけを見ても、これらの評論家が頭角を現すのは、それまでの作家や評論家を手厳しく批判することが常套手段らしい。すでに引用したp.52のところでも、「江藤淳がそこで意図したことは、小林秀雄を批判し、それを乗り越えることにほかならなかったからである。新進気鋭の批評家として、これはあたりまえのことである。」とあるが、それに連なる三浦も、かなりこの「あたりまえ」を実践しているところがある。

さてその青春が1960年代終わりに終焉したという議論だが、全共闘に代表される急進的な革命運動の終わりとともに、「青春」も終焉したというのがおよその趣旨である。たとえば、以下のような記述がある。

「青年および青春という現象が、ブルジョア階級の勃興と拡大に見合うものとしてあったことは、一目瞭然だったのである。青春の光と影は、じつは資本主義の光と影にほかならなかった。資本主義は階級闘争とともに拡大したのであり、青年はどこにおいても階級闘争の第一の担い手だった。それは、青年および青春が、ブルジョア階級の、それも男子にのみ許された特権だったことと少しも矛盾しない。貧者を憐れむには余裕が必要だったのである。」(はしがき p.12)

「革命とは最初から最後まで急進派のものなのである。もしも、青年の特徴がその急進性にあるのだとすれば、革命および革命運動とは、徹頭徹尾、青年のもの、そして青春のものなのである」(p.449)

ぼくが割と読んできた小説家については、次のような言及がある。

「大江健三郎はおそらく青春に殉じた最後の小説家であるだろう。」(p.478)

しかし、ちょっと意外なことに石川淳は、『堯舜』の落ちついて「率直に言ってあまり面白いものではない」と切って捨てている。

三浦は基本的に文学以外には目を向けないので、歌謡曲などは出てこない。ぼくは森田公一とトップギャランの「青春時代」を連想したが、あれは1976年に出たようで、三浦の捉える「青春の終焉」という時代感覚では終焉の終りごろになるかもしれない。また、五木寛之の『青春の門』も出てこないが、1969年6月から『週刊現代』に1994年4月の第8部まで断続的に連載され、さらに2017年より23年ぶりに連載を再開したそうだ。それより前に、五木は「青年は荒野をめざす」を出しており、それは1967年3月から10月まで連載されたものらしい。ザ・フォーク・クルセダーズが同名の曲を出したのが1968年で、その作詞も五木寛之である。

山崎正和「不機嫌の時代」（講談社学術文庫）

「青春の終焉」でこの本について触れていたし、丸谷オ一による文庫への解説でやはりこの書を取り上げて高く評価していたので、読む気になった。やはり逗子図書館で借りてきた。

第2章のIが「「私」と「公」の乖離」という表題で、鴎外の「半日」および漱石の「道草」を取り上げている。そこでの山崎の主張は、明治の知識人が感情の解放を意識した結果、以前、たとえば渋江抽斎の家庭にはあった「公」の部分がなくなり、「公」の場へ逃げ出すことができなくなって、家庭内で精神的な葛藤の解決が難しくなり、「不機嫌」な気分が持続するというものである。これは理屈としてはもっともらしくも感じられるが、あまり理解しやすい論理ではない。

「こころ」では、「有名な「先生」の遺書の、あの唐突な明治精神への言及」に触れられる。そして

「天皇に殉死した将軍の感情は、近代国家の「公」への参与とは正反対のものであって、むしろその「公」が容赦なく破壊した「私」の悲哀の表現であった。そして「先生」の遺書が「明治の精神」といふとき、それが近代国家を造った「公」の精神ではなく、逆にそれに追いつめられた「私」の感情を指していることは明らかである。」(p.118)

とやや強引に断定している。

「遊郭を主要な原型とする日本の社交の場は、少なくとも近世以降は純然たる私的な世界であった。」(p.136)

と論じた後で、

「...人間関係のなかからこの微妙な緊張をすら奪ひ去り、社交の性格を西洋のそれとは完全にあひ容れないものにしてしまったのが、皮肉にも日本の近代化であった。」(p.137)

という。

「青春の終焉」は500ページあったが、この本は文庫で280ページである。しかし、これも逗子図書館の2週間の貸出期間中には読み終わらず、1週間延長した。最後は火曜の返却日の前日の月曜にゴルフで熊谷に行く長い電車の旅に持ち込んで、そこで読み終えた（実はこの熊谷行きはぼくの思い違いで、行くべき先は市原だったのだ

が、思わぬ副作用で最後の第4章の約70ページを集中して読んだ。
最近ではこのように読書に集中するのは珍しい)。

取り上げられる作家は、志賀直哉、荷風、漱石、鷗外である。時代は明治の日露戦争後から大正の初めにかけてである。三浦は明らかに本書に触発されて「青春の終焉」を書いているが、それを意識してか時代を大きく前後に引き伸ばし、取り上げる作家の数もはるかに多くした。しかし、「不機嫌」という1つのテーマで文学史を横断的に捉えるという手法を、「青春」というテーマに置き換えたものと見ることができ、明治末から大正という時代が「青春」の核であったとも言える。

最後の節「不機嫌と実存の不安」で、視野を世界に広げて実存哲学との関連が論じられる。キルケゴールに始まり、ハイデッガー、ヤスパース、カミュという系列との関係である。三浦の本でもサルトルや実存主義の話がかなり出てきたが、ぼくには一時代前の話という気がしていた。学生時代にサルトルも少しは読んだかもしれないが、ほとんど頭に残っていない。読んだとしたら「世界の文学」に入っていた「嘔吐」ぐらいしか考えられないが、その挿絵は印象に残っているものの、作品自体はせいぜい拾い読みをした程度だろう。しかし、この山崎の「不機嫌と実存の不安」という節の簡にして要を得た説明で、「実存主義」が分かったような気になる。

小林武彦「生物はなぜ死ぬのか」(講談社現代新書)

新書で200ページ強の小冊だが、内容は濃い。2022年4月22日付けの出版ニュースによれば、2021年度に15万部売れ、新書大賞2位を得たそうである。集英社新書の斎藤幸平「人新世の「資本論」」と同じく、日本の読者層のレベルの高さがうかがえる。

著者の小林は生物学者で、出身は九州大学だが、現在は東大の定量生物科学研究所の教授である。その間米国国立衛生学研究所など米国での研究歴が長いらしい。本書では生物はなぜ誕生したか、DNAとRNAとリボゾームの仕組み、といった現代の生物学の知識を、平易にしかしさほど手抜きせず、きちんと解説している。そして生物の誕生と進化だけでなく、その死も進化論的に、つまり死という機構を獲得したものが結果として存続し繁栄した、という枠組みで統一的に説明される。結論として言えば、生物は多様性を確保するために死ぬのだということである。死も進化によって選択されたわけである。

論理の基本的な筋道は理解できるが、個体の死と種の絶滅があまり区別せずに議論されているように思うところがある。確かに種の多様性を保つには、個体は生殖により次世代を造れば死んだほうがよいのかもしれないが。

最先端の生命科学から見た、新たな死生観というのが本書の売りである。つまりサイエンスの啓蒙書であるとともに、現在の長寿社会

に住むわれわれに寿命や死の問題を考えさせる，という狙いがある．しかし，次のようなより厳しい警告もある．

「私は，何も対策を取らなければ，残念ですが日本などの先進国の人口減少が引き金となり，人類は今から100年ももたないと思っています．非常に近い将来，絶滅的な危機を迎える可能性はあると思います．未来への投資は簡単ではありませんが，手遅れにならないうちに真剣に取り組むべきです．」(p.166)

第4章では，ヒトはどのように死ぬかと題して，ヒトの寿命や老化の問題が扱われる．内容的には藤崎Zoom会でぼくが紹介したDavid A. Sinclair, "Lifespan Why We Age - and Why We Don't Have To"と重なる．DNA合成酵素の「正確性」や「良い加減の不正確性」が老化に影響するという．まず細胞が老化すると体も老化するという関係になる．細胞のうち，心筋と神経細胞は入れ替わらない．だから壊れてしまえばそれきりである．他の細胞は幹細胞によって新しくなる．しかし，幹細胞自体が老化して，細胞の生産性が低下する．また，入れ替えのためには，老化した細胞がアポトーシスによってか免疫細胞に食べられて除去される必要があるが，加齢によってこの除去のプロセスが順調に進まなくなると，まわりにサイトカインをまき散らして炎症反応を引き起こし，臓器の機能を低下させる．

さらに最終章では「生物はなぜ死ぬのか」というまとめの章だが，ここにもアンチエイジングの話題が出てくる．テロメアの短小化の話，寿命にかかわる遺伝子のGPR1, FOB1, SIR2の話などで，これら

もSinclairの本に出てきたと思うが、やはり簡単には理解できない。
さらに別の本で勉強する必要がありそうだ。

Chris Bernhardt, Quantum Computing for Everyone (MIT Press)

たまたまこの本を読んでいてほぼ読み終わる頃に、藤崎Zoom会で磯部さんから量子コンピュータについて誰か解説してくれないかという要望が出され、藤崎さんとぼくが担当することになった。この本は一般向けの解説書だが数式をかなりまともに取り扱っており、それなりのレベルにある。

量子コンピューティングの基本に、量子ビット qubit がある。量子の状態は 0と1の2値ではなく、0と1の間の値の無限の重ね合わせ (superposition)であるが、観測すると0か1のどちらかになる。さらにもつれ(entanglement)が重要な概念である。もつれとはあるqubitを観測すると、別のqubitの状態が影響を受けるというものである。その影響は瞬時に起き、アインシュタインの特殊相対性理論と矛盾するように見える。実際、アインシュタインはボーアのいわゆるコペンハーゲン解釈に反対したが、その後出されたBellの不等式、すなわち古典力学の解釈とコペンハーゲン流の解釈とでは結果が異なることを示す不等式が、精緻な実験の結果によりコペンハーゲン解釈に軍配を上げることになった。しかし、Bellが巧みに考えた方法は、量子アルゴリズムの設計に有効で、暗号送信に応用できる。

Qubitは電子のスピンまたは光子の偏光(polarization)で表される。本書は数学的な扱いが主で、量子コンピュータの物理的な実現法についてはあまり重点が置かれていない。しかし、量子ビットを扱う回路については、かなり詳しく説明されている。さらに、最後の章でIBMやGoogleなどの量子コンピュータ開発の現状も述べられている。2019年に出た本なので最新情報というわけではないが、これをもとに最新の状況を検索するのには便利である。

堀川恵子「原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年」（文春文庫）

堀川の本を短い期間に5冊読んだことになる。前半は佐伯敏子という人が自身が原爆に遭った後、無縁仏となった遺骨が集められた原爆供養塔を一人で掃除し、残されている氏名、住所などのデータを整備し、供養を続けてきた生涯をたどる。後半は、佐伯敏子がやっていた遺族を探して遺骨を返還するという作業を引き継いで、堀川自身が行った探索作業の経緯が語られる。

原爆の記録はいろいろ残されてはいるのだろうが、それらをこれまであまり読んでいない。しかし、本書を読んだだけでもきわめて厳粛な気持ちにさせられる。

原爆供養塔は爆心地の中州にあった慈仙寺の境内の一角にあり、被爆直後から遺体・遺骨が集められ、その後原爆供養塔となって七万人もの遺骨が無縁仏として収められている。佐伯敏子は兄二人、姉

三人の家族で、その後8歳下の妹ができる。ただ、父が働き盛りに亡くなって、奉公に出たりして苦労した。昭和20年8月時点では結婚しており、夫は出征して中国に行っていて、4歳になる長男と夫の実家にいたが、義父母との生活がうまくいかなかったので、旅館をきりもりして生活力のある実母が引き取って一緒に暮らしていた。敏子の息子はしばらく夫の両親のところにはいたが、戦局が逼迫してきたので敏子の三姉が住む広島市中心からやや離れた己斐（こい）峠を越えたところに疎開させていた。8月5日にその息子を見に三姉のところに出かけ、そのまま帰る予定だったが息子が大泣きし、結局三姉のところに一泊することになった。

翌朝、帰ろうとするところを姉に仕事を言いつけられてまだ出られないうちに、運命の原爆が落とされる。それから己斐峠を降りていくと、広島市内から避難してくる多くの人の列に出会う。みな裸になって、血で汚れ火ぶくれになっている。その中に次兄がいた。次兄の話では母の旅館は全壊し、火の手が回っているという。次兄は三姉の家まで行けば何とかなるだろうとそこで別れ、敏子は母の家に行こうとするが、その付近は火勢が強くて近づけない。長兄の妻には会えたが、長兄は自分が大けがをしているのに近所の人たちを救い出し、獅子奮迅の活躍をしてきたという。その長兄も虫の息である。

あまりにも痛ましい話なので少し詳しく経緯を追ったが、その年の暮れまでに敏子の周りの家族や親戚が、次々と13人、息を引き取っ

た。8月7日には肩と足に軽いけがをしているだけで見つかった妹の照子も、原爆症の強い症状が出て8月19日に亡くなった。9月には母の頭蓋骨と半分溶けた眼鏡が見つかった。長兄も次兄も順に死んだ。敏子自身も原爆症に苦しめられる。一時は回復に向かうが、昭和29年に三男を出産すると、弱った産後の身体に卵巣がん、子宮がん、腸がんが続けて発生し、医者は夫にもう長いことないと、告げる（夫は戦地から戻ってきていた）。しかし、奇跡的に生き延びる。

本書の冒頭は2013年に堀川が15年ぶりに佐伯敏子に会った場面から始まる。堀川が最初に佐伯に会ったのは1993年で、佐伯の活動の歴史の中ではずいぶん遅い時期になる。本書の単行本が出たのは2015年5月である。その翌年の5月に、オバマが米国大統領として初めて広島を訪れた。その年の9月に堀川は佐伯が暮らす施設を訪ねているが、その様子が「文庫版あとがき」に描かれて感動的である。佐伯は食事が摂れなくなっていて、施設から病院に回されていた。そこで堀川は入院先に向かう。ベッドに横たわる佐伯は声も出せないが、堀川が30分ほどしゃべっていると、堀川の方に必死で手を伸ばそうとする。その数日後、訃報が届く。97歳の生涯だった。

立花隆「死はこわくない」（文藝春秋社）

立花隆は昨年2021年6月に死んだ。この本は2015年12月に出ており、ぼくが買ったのも2016年4月だから、刊行後間もないときである。しかし、ずっと読まずにいて、立花が死んでからさらに1年経

って読んだことになる。立花がこれを出したときは75歳で今のぼくの歳の1歳上でほとんど同じだが、亡くなったときは80歳である。立花の両親はどちらも95歳まで存命だったというから、それと比べると若く死んでしまった。

別々に書かれた3つの小品を、まとめて1冊にしたものである。全体でもボリュームは小さく、大きな活字で印刷されていて200ページに満たない。第1章が本のタイトルとなっている「死はこわくない」で、ジャーナリストが立花に取材して週刊文春に連載したもの、第2章は「看護学生に語る「生と死」」で共立女子大とその短大の看護学科の学生に講演したもの、第3章は「脳についてわかったすごいこと」で『文藝春秋』に載ったもの、という構成である。

第1章はがん、心臓という2度の大手術を乗り越えて、だんだん死が怖くなくなってきたという感想を、得意の臨死体験についての研究と交えて語っている。意外なことに、立花は高校から大学にかけて、何度か自殺したいと思ったことがあるという。死の恐怖に関して、死ぬ際に脳内でどんなことが起こるか、それはおそらく苦痛ではなくて夢に入るようなものだから、こわくないというような議論があるが、あまり議論されないのはこの世からいなくなることへの未練や、自分が愛した人、仕事、知識がいとおしい、という気持ちだが、とくに立花だったら凡人以上にたくさんあるのではないかと想像されるのに、その辺はこの取材者が突っ込んでいないからか、立花が感じていないのか、ほとんど話に出てこない。とくに立花の脳

に蓄積されたもの、さらに潜在的な創造力が失くなってしまうのはもったいないとはたからみれば思うが、そういうことは本人の口からは出てこない。

看護学生に語った内容は、さすがに立花らしく本屋で「看護国試必修対策テキスト」を買って事前に面白く読んだり、『「燃え尽きない」がん看護』という本も一緒に買って、これはよい本だと勧めたりしている。キューブラー・ロスの書いていることや尊厳死の問題などに触れ、これから人の死に向き合っていく看護師の卵たちに対して、触発するするところが大いにあっただろうと思わせる内容である。

最後の脳研究の最前線の話は、一緒に取材し「臨死体験 死ぬとき心はどうなるのか」というNHKスペシャルを作った岡田朋敏というディレクターとの対談である。意識とは何かというのが脳科学の最大の謎だとして、取材を通して得られた最前線の状況を二人で話す。

このように手軽に作られた本だが、立花が死んだ今となっては、貴重なもののようと思われる。

大江健三郎「自分の木の下で」（朝日新聞社）

孝子が昔買っていた本である。なぜ買ったのかと訊いたら、美季子や甥の宏ちゃんに読ませようと思ったというのだが、結局どちらも読まなかったらしい。だけど孝子は読んだという。

全部で16の断章からなるが、その最初が「なぜ子供は学校に行かねばならないのか」というタイトルで、それが本の帯にも使われている。それが孝子が本書を買った直接の要因だろう。大江がノーベル賞を受賞したのは1994年で、本書が出たのは2001年だからノーベル賞作家の新作という売り込みに乗ったという面もあるだろう。

最近自分の書棚を整理した。自分の書斎には、西が作ってくれた作り付けのしっかりした書棚がある。4×6段で1つ1つの段が高さも奥行きも大きい。そのため、すべての段が奥と手前の二重置きで、それでも段の上部にかなりの空間ができるので、そこに多くの本を雑然と横置きしていた。この他にも、この書斎だけで本箱が別に2つあり、さらに寝室、2階の踊り場、3階の物置スペース、オフクロの部屋、そして庭の書庫に本棚がある。この状態で、あの本はどこにあるのかと探すのは、ときとして一苦勞であり、往々にして見つからないということも起きる。それでまず、この書斎の大きな書棚だけを整理しようと思った。方針としては、1) 何らかの基準で整理して並べること、2) すべて縦置きにし背表紙が見えるようにすること、とした。手間はかかったが、何とか思ったように整理できた。ただ、二重置きは解消できないので、背表紙が見えるようにしたと言っても、奥側に並べた本は直接は見えない。整理の際、オヤジの持っていた本などをだいぶ処分した。その結果、日本文学、外国文学、ノンフィクション、歴史、哲学、科学・技術、社会科学などに分けられた。そして、著者別に並べてみると、とくに多いの

が、立花隆と大江健三郎だった。だからというわけではないが、立花隆の晩年の本を読んだ後に、少し前のこれを読んできた。

これは子供の読者を対象としたエッセイからなる。子供に向けて書いていると言っても、自分でも書いているように想定されている対象にはばらつきがあって、小学校上級生から大学受験生まで幅が広い。話は大江の小説に繰り返し出てくる四国の子供時代の思い出から、「個人的な体験」以来の「光」の話が主な材料である。タイトルとなっている「自分の木の下」というのは祖母に聞いた次の話である。

「谷間の人にはそれぞれ「自分の木」ときめられている樹木が森の高みにある。人の魂は、その「自分の木」の根方一根もと、ということですから谷間に降りてきて人間としての身体に入る。死ぬ時には、身体がなくなるだけで、魂はその木のところに戻ってゆくのだ・・・森の中に入ってたまたま「自分の木」の下に立っていると、年をとってしまった自分に会うことがある。そういう時、とくに子供はその人に対してどう振る舞ったらいいかわからないから、自分の木に近づかないほうがいいのだ、というのが祖母の教訓でした。」(p.21)

挿絵は奥さんの大江ゆかりが描いているが、なかなかよい。

終わりに近い挿話の「「うわさ」への抵抗力」という節に、驚くべきことが書いてある。

「みなさん方も「うわさ」とか「告げ口」とかいう子供社会のいやなことが、大人になればなくなるだろう、と楽観しているはずはありません。私はジャーナリズムで尊敬されている人から、そういうことを続けられてきましたが、結局それを批評だと思えることができませんでした。」(p.146)

大江は他でもこのことを書いているのだろうが、ぼくはこれまであまりよく知らなかった。調べてみると、このジャーナリストというのは本多勝一で、本多による大江批判はかなり執拗だったらしい。しかし、この子供向けの本でそのことを吐露しているのはやや異様で、大江にもかなりこたえていたころだったのかもしれない。

そういえば、ジョン・ネイスン「ニッポン放浪記—ジョン・ネイスン回想録」に大江がノーベル賞を取ったので、ネイスンもスウェーデンに行き、大江と会ったが微妙な気持ちのすれちがいがあったことが書いてあった。これはこの「読書三十年」の中でネイスンの本の感想として書いているが、大江を巡る人間関係には、いろいろな側面があるのかもしれない。

Adam Becker, What Is Real?: The Unfinished Quest for the Meaning of Quantum Physics

量子物理学の意味を尋ねた本である。著者のAdam Beckerは米国人で、1986年生まれだからまだ若手の天体物理学者である。問題は量子の世界で成立する現象が、われわれの知覚する通常のスケールの世界では成立しない、逆にいえば古典力学以来の通常の世界で成立する性質が、量子のスケールでは成立しない点にある。しか

し、世界はすべて素粒子でできている。どこかに量子物理学と古典物理学を区切る境界があるのだろうか。

有名なシュレーディンガーの猫の思考実験の話がある。猫と青酸カリの入ったガラスの小瓶を箱に入れる。小瓶の外にハンマーがあり、ハンマーはガイガー・カウンターと接続されており、ガイガー・カウンターは放射性金属から放射線が出ると、それを検知してハンマーが落ちてガラス瓶を割るようになっている。箱を一定時間放置した後、箱を開けた時に猫は死んでいるか生きているか。

問題は粒子の運動が二者択一の分かれ道に来たとき、観測されて初めて結果が決まるという量子物理学上の奇妙な性質にある。箱に入って見えない状態のときに「実際は」どうなっているのか、という質問自体が無意味だというのが主流のボーア等のコペンハーゲン派の解釈である。それに異議を唱えたのが、この経緯が示すようにシュレーディンガーだが、さらにアインシュタインもボーアに何度も論争を挑んでいる。アインシュタインはコペンハーゲン派の解釈を精神安定剤の哲学と呼んでいる。有名な「神はサイコロを振らない」という言葉も、その論争の中で生まれた。物理学者の世界ではボーア派の説が圧倒的に受け入れられ、コペンハーゲン解釈が正統的なものと認められてきた。もっとも何をもってコペンハーゲン解釈というかについては、あまり明確な定義がないらしい。一方で、フォン・ノイマンによるコペンハーゲン解釈が唯一の正しい解釈だという証明があるらしい。証明ができる以上、その定義は明確なも

のであるはずだ．とにかく，量子物理学は世界が何であるについては答えない．しかし，シュレーディンガー方程式を始めとする量子物理学の理論は，物理現象を正しくとらえ実測や実験とよく適合する．

コペンハーゲン解釈は主流派というだけでなく，それに疑問を持つような人物は，研究社会から疎外されてきた．大学や研究所の人事において，基礎物理学 fundamental physics のような分野を研究して，世界の意味を明らかにしようという志向をもつ研究者は冷遇されてきたという．一つの要因は第2次大戦後の米国における原子力研究が軍事・産業面から実用性を強く追い求めたことにあるが，もう一つは，このコペンハーゲン解釈のように，計算ができて結果が合えばよい，意味を云々する必要はない，という風潮によるものらしい．

論点はいくつかあるようだが，一つは計測の持つ意味で，計測しないと結果が分からない，計測によって結果が変わる，という直感的にはわかりにくいことがある．計測の主体は誰なのか，人だとすると人がいないところでは世界はどうなるのか，という素朴な疑問が生じる．もう一つは局所性の問題である．ある場所で起きた現象が，他に物理的な影響を与えるのには一定の時間がかかるはずである．アインシュタインはこの点を突いて，局所性を確認するための思考実験を提案した．その後，それを実際に試す実験が行われた

が、大方の予想に反して局所性は否定され、離れたところに瞬時に影響が及ぶことが認められた。

アインシュタインの他にも、コペンハーゲン解釈に反対する研究者は、学界から冷遇を受けながら何人か出ている。たとえばJohn Bell, David Bohm, John Clauser, アインシュタインの弟子のHugh Everett. 本書はそれらの人物を取り上げてその動向を追うが、本の導入部によって想像されるような、これらの学説によりコペンハーゲン解釈が打倒されたという結論に至るわけではない。もっとも有望なように扱われているのはEverettの多元宇宙論(multiverse)説だが、本書もそれが結論とはしておらず、本の最後に来て何が「真実」かは不明確なままに残される。

真木悠介「時間の比較社会学」（岩波書店）

真木悠介は見田宗介のペンネームである。見田は本名での著作の方がむしろ多いが、2つの名前をどう使い分けているのかは、分からない。

見田は今年の4月1日に亡くなった。本書の第1章は「＜死の恐怖＞および＜生の虚無＞」と題されており、偶然とはいえ立花隆が亡くなってから、その著「死はこわくない」を読んだのに通ずる読書体験である。物持ちのよいぼくは、大学生の時のノートを捨てないで残している。その中に、見田宗介の社会学の講義ノートがあるはずだと探してみたら、なんと出てきた。ただ、表紙に「社会学」とあ

るだけで年月日も教員名も書いてない。社会学は折原浩も担当していたと思うが、記憶にあるのは見田の方で、おそらくこのノートは見田宗介の「社会学」の講義を受講したときのものだと思う。しかし、個々の記述の日付も書いていない。ノートの取り方も未熟なものだった。

例によってWikipediaからの引用だが、見田は

「1960年に東京大学文学部社会学科を卒業。1965年に同大学院博士課程単位取得退学後、東京大学教養学部専任講師に任官。1967年東京大学教養学部助教授に就任。その後、メキシコ留学を経て、1982年教授、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部教授。」

ぼくは1966年に東大に入学したので、見田の講義を受講したときはまだ専任講師になったばかりで助教授になる前のときらしい。そして1994年にぼくが東大駒場に任官したときは、確かにまだ見田は在任していた。言葉を交わしたことはないが教授会で顔を見た。

そういえば線形代数を習った斎藤正彦も、われわれが受けた授業が多分、最初のものだった。実際、東大出版会から出ているあの教科書「線形代数入門」の初版は1966年3月に出ている、われわれがそれを教科書として使った最初の学生だった。うっかりして気づかずにいたが、斎藤正彦先生は2020年12月31日に亡くなっている。

本書は三浦雅士「青春の終焉」の項に書いたように、UPの「東大教師が新入生にすすめる本」で存在を知って、それと同じように逗子図書館で借りてきて読んだ。逗子図書館の本を借りたのは3冊目だが、いずれも期間延長の処理をした。この真木悠介の本は300ページと長くないが、それでも延長し返却日前日にやっと読み終えた。しかし、期限があるというのは読書の目安としてよい意味もある。この日は返すだけで新しい本は借りなかったが、初めて本棚をざっと眺め、ついで検索で自分の本を調べてみたら、出てくるのはもう一人の玉井哲雄の本が多く、ぼくの本は「ソフトウェア工学の基礎」の旧版と「新知の技法」だけだった。そこで後で、「リクエスト」という機能を使って、自分の本を「私は著者なのでこれをリクエストするのはマナー違反かもしれないが」と断りつつリクエストしてみた。

前置きが長くなったが、本書の目標と構成は、序章に明快に示されている。

「時間を＜二ヒリズムの元凶＞たらしめる二つの基礎感覚として、＜虚無化してゆく不可逆性としての時間了解＞および＜抽象的に無限化されてゆく時間関心＞を析出してきた。この第一の要因の存在しない社会をウォーフの報告する北アフリカのホピ族の文化で見、第二の要因の存在しない社会をケニアのカムバ族出身でケンブリッジで博士号を得た牧師のムビティの著作で見る。そして次のような仮説を立てる。虚無化してゆく不可逆性としての時間の観念は、萌芽的にはオリエント、とりわけヘブライズムといった、最古の反自然主義的な文化と社会の中

で発生し、展開してきたものではないか。抽象的に無限化される等質的な量としての時間の観念は、萌芽的にはインダスその他の高度にはヘレニズムのような都市化された、（集合体（ゲゼルシャフト）的な）社会形態の中で発生し、展開してきたのではないか。」

この序章を含めた全体の構成は、次のようである。

序章 時間意識と社会構造

第1章 原始共同体の時間意識

第2章 古代日本の時間意識

第3章 時間意識の四つの形態

第4章 近代社会の時間意識―（1）時間への疎外

第5章 近代社会の時間意識―（2）時間の物象化

結章 ニヒリズムからの解放

第1章では、アフリカ、アメリカなどの原始社会における時間の意識が議論される。もちろん見田自身が文化人類学的な調査を行ったわけではなくて、過去の研究がふんだんに参照されるのだが、独特の文体と表現で、説得力をもった議論が展開される。ここではゲマインシャフトが共同態と訳され、集合態と訳されるゲゼルシャフトとの対比で、狩猟や農業の共同作業で共有される時間の意識が捉えられている。それがゲゼルシャフトになることにより、異なる時間意識を調整するための標準化が図られることになる。

第2章の古代日本に関しては、万葉集に現れる時間意識が、古今、新古今の時代と比べられる。ここでも既存の研究成果に大きく依存するが、やはり見田の独創性が自ずと出てくるところが面白い。

第3章で言う時間意識の四つの形態が正確に何だったのか、本を返してしまった今では思い出せないが、不可逆で直進的に進むという時間感覚と円環するという時間感覚との組み合わせとして議論されていたような気がする。直進性のイメージの元は生まれて死に至るまでの人や動物の一生であり、円環性のイメージの元は一日の昼夜と1年の季節の交替である。こういうと平凡な議論に聞こえるかもしれないが、見田の議論は「虚無化してゆく不可逆性」とか「抽象的に無限化されうる等質的な量としての時間」とかの言葉使いが示すように、過去のさまざまな文化の社会科学的な分析を踏まえた上で、文学的・哲学的でもある。

第4章、第5章では近代社会の時間意識が論じられるが、デカルト、ルソー、からマルクスなどの議論がこれもふんだんに参照される。とくにこれもすでに他の人が言っていることではあろうが、資本主義の時代に貨幣が時間と同様な標準化・抽象化の尺度となり、時間を「稼ぐ」とか「節約する」とか「貯める」という表現が一般化したことが、指摘される。それが時間の疎外と物象化である。

近代社会の時間意識としては、当然のように、ブルーストが出てくる。第4章は3つの節からなるが、その第1節が「＜失われた時＞ー

カルヴァンの地獄」，第2節が「＜見出されたとき＞－自我の神話」で，それらの中でブルーストがたびたび引用される．とくに，「花咲く乙女たちのかげに」の中の＜三本の木＞の挿話が印象的に使われている．ぼくにとっては，2018年から3年かけて集英社文庫版の「失われた時を求めて」全巻を読んだことは記憶に新しいが，この集英社文庫版には「主な情景（シーン）の索引というのがついていて（多分，単行本にもあったのだろう），それを引くと＜三本の木＞の場面はすぐ見つかる．

「あとがき」の冒頭に本書のねらいが改めて書かれている．

「時間の問題は，これまで哲学者，文学者，宗教家の仕事であるとされてきた．あるいは他方では，物理学者の仕事とされている．これらの接近法にたいして，時間の問題を社会科学の主題とすることに，どのようないみがあるのか．」

今，Brian GreeneのUntil the End of Time: Mind, Matter, and Our Search for Meaning in an Evolving Universeを並行して読んでいるが，逆にそちらでも有限の命にたいして時間の永遠性が議論されている．

アルマ・マラー「グスタフ・マラー 愛と苦悩の回想」 中公文庫

書棚を整理した結果，思わぬ本を発見して読んでみることもある．一つの例が杉浦民平「天下太平に生きる」で，江戸末期に生きた

様々な人物が取り上げられているが、その中に江馬細香がいる。それで昔、中村真一郎「頼山陽とその時代」の文庫本を買って、結局読み止しにしていたことを思い出した。それを文庫本を置いている書棚で探すために、前後上下に重複して置かれている本を出し入れしていたら、このアルマ・マラーの本が出てきた。それをちょっと読み始めてみたら、面白くてやめられなくなった。

この本はアルマが、これを書き留めておかないと自分の記憶から消えてしまうことを恐れて書いたもので、自分の生前に出版されることは意図していなかった。しかし、ナチの世になって、通りにあったロダンによるグスタフの胸像は台座から外され、グスタフ・マラーの名前が取られた大通りも改名されて、「今の第三帝国に生き、何らかの役割を演じている人たちについて、私の経験したことを公表するのになんのためらう理由もない」ことになったので、1939年にオランダから出版されたということである。序文には次のような一節がある。

「マラーがウィーンに輝かしく君臨していた間に、彼がこの町のためにどんなに尽くしたかは、その頃そこにて、それを評価することのできた人以外にはわからない。今日、ドイツは彼の音楽を追放し、彼の生活と作曲活動の足跡は丁寧に消されている。」(序文1939年夏 p.8)

確かに本書には、登場する多くの人物だけでなく、グスタフやアルマ自身にも具合の悪いことも赤裸々に語られている。訳者あとがき

にもあるように、「20世紀のオーストリアが生んだ一つの文学」，それも最上質のものである．といって作り話ではなく，訳者が書いているように自分の日記に基づいて書かれた事実に即した記録である．細かい事実の食い違いはあるようだが，明確な視点から構成された流れがあり，表現も豊かである．

われわれはマーラーを交響曲の作曲家として知っているが，生前はむしろオペラの指揮者として有名だったことが分かる．たとえば，次のような一節がある．

「モーツァルトのオペラの上演は，単にウィーンのみならず世界のどこでも，マーラー以前はすたれていた．」(p.45)

「ここでのマーラーの評価は，オペラの大監督ではあるが道楽に化物のような交響曲を作曲し，よせばよいのに他人の迷惑もかえりみずそれを演奏しようとしている男，ということになっていた．」(p78)

ウィーンにおけるマーラーの名声とオペラシーズンにおける活動の様子は，100年以上前のことながら，現在の世界各地の都市におけるオペラ公演のあり方や，演目のレパートリーまで含めてほとんど同じように見える．というより，マーラーがそのような形態を作り定着させたのだろう．もちろん，マーラーがいたのはウィーンで，イタリア・オペラは並行して同じような活動をしていたのだろう．ただ，マーラーは，1907年にメトロポリタンからの招聘を受け，それ以降毎年，米国を訪れて公演し，最後に死を迎える1911年もニュ

ーヨークにいてそこで具合が悪くなって、アルマとアルマの母と主治医に連れ添われて何とかヨーロッパに帰り着いて死ぬ。このメトロポリタンの様子を読むと、オペラが世界的に受容されてきた過程が感じられる。

物語は1901年にアルマ・シントラーがグスタフ・マーラーに出会うところから始まり、1911年にマーラーが死ぬまでのちょうど10年間で終わる。出会った時のアルマは22歳、グスタフは40歳で歳の差が18ある。アルマは美人で背も高く、家は裕福で教養も豊かで作曲の才能も見せていた。グスタフは田舎出身のユダヤ人で、二人は密かに婚約をするが、早世した父の後、母と結婚した継父のモルは反対する。それでも二人は結婚するが、マーラーはアルマの作曲活動をやめさせる。二人の結婚生活は波乱に富んでおり、子供が幼くて病死したり、グスタフが精神的に不安定で奇矯な行動をとったりということなどあり、普通の意味では幸福な生活とは言えないが、10年間にわたり互いに愛し合っていたのは確かなようだ。

本書には、音楽家はもちろん、その他にも多くの著名人が登場する。まず作曲家ではリヒャルト・シュトラウスである。

「シュトラウスが何度も幕の前に引っ張り出されて、少し遅れてから意気揚々と引き上げてきたので、私たちはその間待たされていた。

「ねえパウリーネ、どうだい大成功だったろう」

彼は話しかける相手をまちがえた。これを聞いた彼女は山猫の

ように襲いかかった。

「この泥棒め、消えてなくなれ。一緒にはいかない。胸がむかむかするわ」(p.57)

パウリーネというのはシュトラウスの妻で、「泥棒」と言っているのはその日、初演された「火の欠乏」の音楽がワグナーを盗んだまやかしものだと言っているのである。シュトラウスはこの後も何度か出てくるが、意外なほど冴えない役回りで描かれる。

オペラ作家ではほかに、ブッチーニが出てくる。

「ブッチーニが来て最後のリハーサルに立ち会ったが、別に口は出さなかった。マーラーと彼との間には共通なものは何もなかった。」(p.73)（もとは「お蝶夫人」のことと書いているが、訳注によれば「ラ・ボエーム」の記憶違いだろうという。）

マーラーはオペラ指揮者としてこれだけ活躍したのに、作曲家としてはシュトラウスのようにオペラを作らなかったのはなぜなのだろう。

作曲家が他に大勢出てくる中で、ツェムリンスキーは最初に登場し、そのあとも時々顔を出す。アルマはマーラーに会ったころツェムリンスキーと恋仲にあったという。本書ではそれは明確には書かれていないが、たとえば次のような言及がある。

「夏の間にはツェムリンスキーが私たちを訪ねて来た。（冬の間には私は少し一緒に弾いたことがある。彼をマーラーを神のよう

に尊敬しており、マーラーの方でも次第に彼を好きになった。」(p.132)

「私は二十歳の時、ツェムリンスキーについて作曲を習った。そして彼によってその弟子のシェーンベルクに引き合わされた。」(p. 147)

ツェムリンスキーといえば、2004年にミラノでCarloに誘われて、"Eine Florentinische Tragödie"を観たことを思い出す。タクシーがなかなか見つからずに少し遅れたので、最初はホールでテレビに映し出された映像を観ていた。正直なところ、このとき初めてツェムリンスキーという作曲家の名前を知った。この日はプッチーニの「ジャンニススキキ」との2本立てで、フィレンツェを舞台とした小オペラ、という企画だった。

上の引用に出てきたシェーンベルクも、しばしば登場する。ウィーンではシェーンベルクはあまり好かれていなかったが、マーラーは有望な若手として引き立てていたらしい。他には、フーゴ・ヴォルフ (p.318)やプゾーニ (p.350)も登場する。

音楽家以外では、画家や学者が出てくる。まず、クリムトだが、継父のモルは実父のシンドラーと同じく画家で、クリムトとともに分離派を興したという。以下は分離派の活動にマーラーが関係した事例である。

「1902年5月、《分離派》の画家たちがマックス・クリンガーを記念する私的な祝祭行事を起案した。（中略）次にモルはマ

ーラーのもとに来て、この催しの開会式に指揮をして欲しいと依頼した。マーラーは快く引き受けた。彼はベートーベンの第九交響曲の合唱をアンサンブル用に編曲し、《オペラ》のオーケストラのメンバーを使って稽古した。（中略）彼（クリンガー）は感激し、涙がその頬をゆっくり伝わって落ちた。」
(p.72)

このあたりには、クリムトの名前は直接には出てこないが、Wikipediaによれば、クリムトはアルマに恋をしており、二人は終生友達だったという。

それから驚いたことにフロイト本人が出てくる。

「彼は自分の送ってきた生活の中に、神経病的なもののあることを自覚し、突然、ジークムント・フロイトに相談しようと思い立った。彼がフロイトに自分の異様な状態と不安感とを説明すると、フロイトは鮮やかに彼の精神を鎮静させてくれた。（中略）彼の結論は以下のようなだった。「私は君の奥さんを知っている。あの人は父親に似た人間しかえらばないし、愛さないのだ。あなたの年齢、あなたはひじょうに恐れているようだが、実はあの人にとっては魅力のある年齢だ。だから心配することなどない。一方、あなたは自分の母親を愛している。それで、あらゆる女のうちに自分の母親のイメージを求めている。あなたのお母さんは、生活に疲れ、やつれ果てていた。あなたは無意識のうちに、自分の奥さんを同じ目に会わせたいと望んでいるのだ」」(p.313)

いかにもフロイトの言いそうなことだが、アルマはどちらも当たっていると解釈している。初めの頃、マーラーはアルマの名前をお母

さんのマリーに変えようとし、またアルマの顔がもっと悩みを持っている方がよい、と言ったという。それに対し、アルマの母は「だいじょうぶよーいまにそうなるから」と言ったそう。

アルマはマーラーの死んだあと、グロピウスと結婚しているが、本書の終わりの方で「Xという建築家」(p.307)として出てくる。アルマ自身、若い建築家にちやほやされたことで自信が表面に浮かび上がってきたことにより魅力が増したらしく、マーラーから今までにないほど愛し求められるようになったと書いている。「若い建築家」は「あなたなしには生きられない。少しでもその気があればすべてを捨てて自分のもとに来てほしい。」という熱烈な手紙が来るが、手紙の宛先がマーラーになっていたという。間違えたのか、意図的だったのか、分からないと書いている。

アルマはマーラーの死後すぐにグロピウスと結婚したわけではなく、画家のココシュカと3年間情事関係にあった。1915年にグロピウスと結婚し、さらに1920年に離婚して今度は詩人のフランツ・ヴェルフエルと結婚する。ヴェルフエルはユダヤ人だったのでヨーロッパにいたのが危険となり、二人はスペイン経由で米国に逃れる。ヴェルフエルは逃亡生活で心臓を悪くし1945年に死ぬが、アルマは1964年、85歳まで生き延びる。これらはWikipediaで得た知識である。

昔買ってほとんど読んでいない本に、W. H. ジョンストン「ウィーン精神」がある。IとIIの2巻本だが、Iしかないところを見ると、Iを

読んでいないのでIIは買ってもしないらしい。しかし、Iだけでも5800円もする立派な装丁の本で、1986年にみすず書房から出ている。それを引っ張り出して、「8. 音楽家と音楽批評家」の「恵まなかった四人の作曲家」の節を読んでみた。その四人とはブルックナー、ヴォルフ、マーラー、シェーンベルクである。マーラーはもちろん、他の3人もこのアルマが書いた本では重要な登場人物である。

杉浦明平「天下太平に生きる 江戸のはみだし者」

この本は、本棚を整理した効果で発見した。いつどういう経緯で買ったのか憶えていないが、1984年に出版されたもので、その初版第1刷である。しかし、これまでまったく読んだ形跡がない。

はみだし者として、楠本イネ、江馬細香、司馬江漢などを取り上げて評したものだが、江馬細香を読んで中村真一郎の「頼山陽とその時代」を思い出した。これは昔文庫版を買ったのだが、少しだけ読んでほっておいたものである。「上中下」の3巻本だったはずだが、文庫本の本箱を探すと「中」だけ出てきて「上」がない。

「下」はもともと買っていなかったような記憶がある。「上」はあるはずと探すか、出てこない。それを夕方にまた意を決して探し始めたら、今度はすぐに出てきた。それで「上」の「五 女弟子たち」という章にある、細香について書かれた部分を読んだ。この文庫本は1976年に出ているので、独身時代に買ったらしい。

本書にも当然のことながら、中村真一郎の本のことが出てくる。江馬細香に関しては触れられていないが、松崎慊堂について次のような記述がある。

「中村の山陽の本は、こと慊堂にかんするかぎり相当におそまつ、杜撰という以外にはない。」(p.207)

作家としての実績は中村の方が杉浦よりはるかに上だが、1913年生まれの中村は1918年生まれの中村を、見下すところがあったのかもしれない。

これまで杉浦明平の本を読んだことがなかったが、中学のときから「1月・1万ページ」でその名を知っていた。今でも持っている岩波新書の「私の読書法」にその文章があるが、この新書の発行は1963年で、おそらく高校1年のときに買って読んだのだろう。しかし、それ以前に誰かの書いたもので杉浦の「1月・1万ページ」という伝説的な話を知っていたような気がする。

この本は、Iの楠本イネ、江馬細香、司馬江漢辺りの項目は確かに「江戸のはみだし者」というテーマに沿って書かれているが、その後は全集の月報などさまざまな媒体に、編集者からの依頼によって寄稿された小文を集めたもので、雑な作り方といえる。昔のことだからそのような雑文を自分で切り抜きとして保存していたようだが、そこから筑摩書房の編集者に頼んで選んでもらい1冊の本としたらしい。それをぼくは、丁寧に全ページ読んだわけである。今と違うと思うもう一つのことは、過去の史実や史料を検索する手段が

豊富でなかったらしいことで、多くを記憶に頼っており、一部は不確かなまま書いている。

柳田国男「桃太郎の誕生」（「日本の文学 26 柳田国男，斎藤茂吉，折口信夫」中央公論社）

やはり書棚整理の効果で昔読んだ本を手にとって見たのが、「安野光雅対談 ロジックの詩人たち」で、その中の吉田直哉との柳田国男についての対談を、読み返してみた。そこで「桃太郎の誕生」が取り上げられているのだが、Kindle版の柳田国男全集には入っていない。というか、青空文庫でまだ作業中のリストに入っているのである。しかし、中央公論社の「日本の文学」に入っていたので、読んでみた。

いつも思うが、柳田の文章は一見論理的でありながら、その論理が普通でなく、まさに「ロジックの詩人」という感を与える。たとえば次のような一節がある。

「たとえば老嫗夜譚に採録している雀の仇討ちなどは、実は我々の猿蟹合戦と比べてどちらが転用だということが容易に言えないほどに、自然なる話の運び方を示している。（中略、話の粗筋が紹介される）この話に対する我々の興味は、第一に蟹が討ち入りの連中に加わっていることである。普通の猿蟹合戦では、蟹は一役を分担しているだけであるが、ここの雀はかえって戦闘員を統括しているのである。」(p.180)

「ここの雀」といきなり出てくるので面食らうが、猿蟹合戦と雀の仇討ちの話を比べているので、この話では蟹の役割を雀が担っているということに気づかないと、ロジックというより文章としておかしいのではないかと最初は思ってしまう。

また、次のような言い方がある。

「今日のいわゆる神話学は、言わば今集まって来た民間説話の中に、交わって伝わっている神話的分子を取り扱っているので、必ずしも神話でもない昔話を研究の対象として、これが神話であると強弁しようというのではないが、たまたま二者の分界を明らかにすることを怠った結果、何だか異様な言葉の用い方、たとえば国の歴史を神話と言って見たり、そうかと思うと桃太郎やかちかち山の類までを、神話の体系にさし加えたりする者を生じたのである。」

意味が分からない訳ではないが、このような断定的な文体が柳田の特徴である。その主張の根拠が必ずしも明確に示されていると思えないところがあるが、柳田の該博な知識と研究の蓄積に基づいてこう言われると、お説ごもつともと言わざるを得ない感じがする。とにかく、端々に自信に満ちた表現が出てくる。とくに海外の昔話研究と比較する文脈で、それが感じられる。

たとえばヨーロッパのグリム童話などの研究をと日本の状況を比較して、

「桃太郎の鬼ヶ島征伐などという昔話は、すでにお互いの家の子供すらも、その管理を辞退するほどのたわいもないものではあるが、なおそれがひとり日本現代の一つの問題であるのみでなく、実際はやはりまた世界開闢以来の忘るべかざる事件として、考察されるべきものであった。」

「説話が近い頃まで信じられていた国々はあるが、それも白人が近よって来たころから、一時にことごとく娯楽用のものになろうとしている。こんないろいろの標本が揃っていた国は、日本以外に決してそう多くはないということは、やがて世人が心づく時が来るであろう。」

という。

五大お伽話という言葉が出てくるが、それが何を指すのか誰でも知っていることとしているようで、明示されていない。調べてみると「桃太郎」「猿蟹合戦」「舌切りすずめ」「花咲じじい」「かちかち山」の5つらしい。たしかにぼくも、子供のときにいずれも読んだし、今でも読まれているのだろう。しかし、「金太郎」が入っていないのには理由が察しられるが、「浦島太郎」はなぜ入っていないのだろうか。おそらく分類し系統づけると、自然にそのような結果になるのだろうか。

もちろん柳田が収集の対象としているのはわれわれが子供時代に読んだような書かれたものではなく、民間にお話として伝承されているものである。それらを集めて、どのように変化したのか、つまり古い形がどの部分で、後から加えられたり変えられたりしたがどこ

か、また、時間的な変化の過程はどうだったのかを分析するという意図が初めに示されるが、この「桃太郎の誕生」という作品がその結果なのか、作業のもくろみを書いたものか、後に続く民俗学者に指針を示したもののなのか、あまりよく分からない。

この作品は昭和8年、58歳の時のものである。柳田はなお、昭和37年、87歳まで生きた。

高瀬隼子「おいしいごはんが食べられますように」（芥川賞）

日本の文芸誌というものは、不思議な存在である。月刊誌として、

- 新潮（1904年創刊）
- 文藝界（1933年創刊）
- 群像（1946年創刊）
- すばる（1970年創刊）

があり、季刊誌として

- 文藝（1933年創刊、季刊誌）

がある。月刊誌の4誌は毎月同じ頃に発売され、その広告が新聞に4つ並べて掲載される。形式もみな同じで4誌間でなんらかの協定が結ばれているのではないかと思わせる。そして、いったいどんな人がこれらを買って読み、どんな人が作品を書いて、どんな選考および編集過程を経て掲載されるのだろうか。読む側、書く側が4誌の

間のどれをどんな好みで選ぶのだろうか、ぼくはこれらの文芸誌を買ったことがまずないが、わずかに残っているのが1988年5月の群像500号記念号で、「群像短篇名作選」と銘打ったものである。同じような「新潮」の記念号も買った記憶があるが、それは書棚には残っていない。

今回の芥川賞受賞者の高野も、10年間いずれかの雑誌の新人賞に応募して、落ち続けたという。しかし、2019年に「犬のかたちをしているもの」ですばる文学賞を受賞して作家としてデビューしたとのことである。今回の受賞作は群像1月号に載ったものである

「文藝春秋」で芥川賞の作品を読むときは、選考委員の選評も必ず読むことになるが、ほとんどの委員がすべての候補作について多かれ少なかれ論評を加えている。考えてみるとこれらの文章は誰を対象に書かれているのか、よく分からない。「文藝春秋」の読者は受賞作しか読んでいないので、その他の候補作に対する評は、ほとんどちんぷんかんぷんである。しかし、選考委員としては、このようにすべての候補作を比較検討して、結果を出しましたという表明であり、課せられた任務上当然のことなのかもしれない。

会社における人間関係をリアルに描いている。作者高瀬自身が会社で今も働いているそうで、直接モデルとして描かれてはいないにしても、会社における日常が材料にはなっているはずだから、同僚はどんな気持ちなのか、不思議な気がする。

同じ会社で働く、二谷という男と押尾と芦川という女が主人公である。描写は二谷と押尾という二人の視点から交互になされるが、一見、神の視点で描かれているかのようなのだが、「二谷は」と書かれているときは二谷の視点で、押尾の視点の場合は「わたしは」なのだが、他者から「押尾さん」と呼ばれることなどから視点の位置が分かるような仕掛けになっている。芦川は常に二谷か押尾の視点から見られているので、一貫して「芦川さん」と呼ばれる。この仕掛けはなかなか巧みで、これまで一人称か三人称で書かれた小説でなければ、視点を複数にするには書簡体を使うとか交換日記の形態をとるとかが常套手段だったが、新しい方法のように思われる。

タイトルからはグルメ本のような内容が想像されるが、主人公の二谷は食事に関心がなく、コンビニで売っているようなものを食べることが効率的でよいと思っている人物である。それに対し、芦川は週末に二谷アパートまで来て手料理を作るが、二谷はそれをうるさく思っている。この設定がやや不思議である、ストーリーとしては、押尾と二谷が芦川に対していじめに当たることを、しかも共謀して実行し、その結果、押尾は会社を辞めることになり、二谷は必ずしも「その結果」ではないかもしれないが、社内の異動で別のところに転勤になる。しかし、二谷は結局、芦川と結婚することになりそうだと思っている、という設定もちょっと奇異に思える

真木悠介「気流の鳴る音 交響するコミュニケーション」（ちくま学芸文庫 Kindle版）

見田宗介が今年の4月に亡くなってから、新聞などその名前を目にする機会が増えた。この本自身に誰かが言及していたのかどうか確かでないが、とにかく新聞に見田か真木かの本に触れた文章があって、それを見てしばらく時間をおいてからAmazonで著者名で検索したら、これが出てきた。Kindle版だったのですぐに購入した。

こ

れまで真木悠介名の作品は、「自我の起源」「時間の比較社会学」と読んできたが、本書のあとがきによれば、「時間の比較社会学」が出たのが1981年、「自我の起源」が1992年で、いずれも本書の1977年より後という関係にあるようだ。

本書は全体で180ページ足らずの小品で、その前半というかほとんどを占める初めの140ページぐらいが、メキシコ北部に住むヤキ族のドン・ファンという名の老人の生きる世界を、人類学者カスタネダが紹介した4冊の本の内容を材料としたものである。その点で、「時間の比較社会学」での文化人類学者の研究成果を活用した論述と、同工である。しかし、やはり見田の著作らしく単なる紹介ではなく、独特の見方と表現で書かれている。この場合、まずドン・ファンの語りがあり、それを紹介するカスタネダの作品があり、それをさらに換骨奪胎した真木の文章になっているので、どこまでが誰の言動なのかかなりあいまいである。そもそもドン・ファンはヤキ族の呪術師だが、その話はかなり哲学的で、土着の物語や知恵という体系の外にあるたとえば世界の宗教や西洋思想や東洋哲学などの

影響を受けているのではないか、と思わせるところがある。しかし、その辺はもしかしたらカスタネダによる作為が入っているのかもしれないし、見田による解釈が入っているのかもしれない。一方で、狩猟採集で生活している人々らしい自然との関わり方を示すところもあり、その辺りは「デルスウ・ウザーラ」を連想させたりする。

ドン・ファンやドン・ヘナロがカスタネダを幽霊と呼ぶのは、道を歩いていて魂が「目的地」にあってここにはないから、という話の後で、真木は言う。

「南方で死刑の判決を受けたB・C級戦犯の手記などをみると、収容所を引出されて判決の場に向かう途上ではまったく目に入らなかった道や小川が、判決の帰途にはかぎりなく美しく、なつかしいものとして見えてくるというような記述に、しばしばぶつかる。（中略）いうまでもなく真に明晰な意識にとっては、われわれはすべて死刑囚であり、人類の総体もまた死刑囚である。」(p.114)

こういう感想も、真木（見田）が亡くなった今となると、格別のメッセージ性を持つものとして聞こえる。

Margaret Millar, "Vanish in an Instant," (Kindle Version)

新聞で誰かがこの本を紹介していた。調べてみたら日経の書評欄の「半歩遅れの読書術」で、江國香織がこの翻訳本「雲の墓標」を取

り上げて絶賛していた（2022年6月25日）。それまで、この作家の存在すら知らなかったが、カナダ出身で夫も推理作家のRoss Macdonaldである。原書は1952年に出ているからちょうど70年前である。しかし、おそらくその時代に読むよりも現在の日本で読んだ方が、生活に現れる空港、車、酒などがピンとくるのではないだろうか。

文章が素晴らしい。難しい語は使わずに、巧みな比喻と会話で、情景が鮮やかに伝わる。最初のうちは感情移入できそうな好ましさのある登場人物が一人も登場しないが、そのうちに弁護士のMeechamがやはり主人公であることが分かる。さらに登場はしていたがとくに詳しい描写がなかったAliceという女性が、常套的ではあるが恋人役であることが分かる。しかし、そこに至るプロセスは意図的に省かれていて、いきなり恋人同士という関係がMeechamが久しぶりに自分のオフィスに戻ったときに、秘書から来客がいて部屋で待っていると知らされた場面で分かる。

結末のトリックは、それほど感心するようなものではない。しかし、プロットより文章力で読ませるという作品である。全体の長さが240ページというのも、その後の多くの米国市場で売れているミステリの半分ぐらいの長さで好ましい。

**渡辺靖「アメリカとは何か 自画像と世界観をめぐる相剋」
（岩波新書）**

藤崎Zoom会で、藤崎さんが「米国の分断の現状とこれから」という話をしてくれたが、大変参考になる話だった。それに合わせたかのように岩波新書からこれが出たので、早速購入して読んだ。帯に「何故、トランプは不死身なのか。米国は大丈夫なのか？」とあるが、まさにそれが本書のテーマである。

ペイリオコンという言葉を知った。

「トランプの政治的立場を体系的に整理するのは容易ではないが、「ペイリオコンサーバティブ(paleoconservative)」(原保守主義=ペイリオコン)に近いと思われる。その特徴は1950年代の米国を黄金時代と見なす点にある。すなわち(公民権運動が隆盛となる前の)50年代の米国には白人とキリスト教を中心とした社会秩序があり、第2次世界大戦後の繁栄に支えられた分厚いミドルクラスが存在していた。」(p.20)

という。

また、リバタリアンという言葉も知った。

「自由市場・最小国家・社会的寛容を重んじ、人種や民族、宗教、ジェンダー、ナショナリズム、ポピュリズムなどの集合的な属性や力学によって個人の自由(社会的自由)が制約されることや、増税や規制強化、保護貿易などによって経済的自由が棄損されることを嫌う。つまり、社会的にはリベラル、経済的には保守で、グローバルなヒト・モノ・カネの流れを肯定的の捉える。」(p.22)

ポピュリズムはアメリカだけの現象ではなく、たとえばヨーロッパにも顕著な動向が現れている。アメリカの場合、ペイリオコンは右派ポピュリズムの典型だろうが、バーニー・サンダース人気に見られるような左派ポピュリズムもある。とくにミレニアル世代（1981-95年生まれ）やその下のZ世代（1996-2010年生まれ）が支持している。この右派ポピュリズムと左派ポピュリズムは、それぞれ共和党内と民主党内の主流派に対して、グローバリズムへの不信、保護主義や孤立主義に傾きがち、という妙な共通点があると著者はいう。

しかし、本書を読んでもその帯にある「何故、トランプは不死身なのか。米国は大丈夫なのか？」の答えは、得られないようだ。トランプは2022年の中間選挙で思惑通りの結果が得られなかったが、まだ次の大統領になることを諦めていないようだし、米国の国際政治、国際経済における地位は揺らいでいる。トランプが次の大統領選に出られないか、出ても支持が広がらないとしても、民主党はバイデンに代る若手で魅力のある政治家が出ないことには、「米国は大丈夫なのか？」という疑問は大きく残る。

須藤 靖「不自然な宇宙 宇宙はひとつだけなのか？」(ブルーバックス Kindle版)

須藤さんは東大の物理の教師で、東大出版会の企画委員会で一緒だった。UPに「注文の多い雑文」を不定期に連載していて、長く続いている。専門は宇宙物理で、岡村さんに近い。

この本は、「宇宙に果てがあるか」，「宇宙人はいるか」，「宇宙に始まりや終わりがあるか」というような素朴な疑問に，真面目に答えようとしたものである。それらに対する著者のとりあえずの答えは，「宇宙には果てがない」，「この宇宙のどこかには地球と同様，生命，さらに知的生命が必ず存在するだろう」，「宇宙は今から138億年前に誕生したと考えられている。この宇宙は無限に広がった空間と，有限な過去と無限に続く未来を持つ時間とから成り立っている」ということが，最初に示される。それから宇宙膨張，ビッグバンモデル，インフレーションモデル，マルチバース，などが開設される。地球外生命の可能性の議論に関連した話で驚いたのは，太陽系以外に恒星の周りを巡る惑星が発見されたのは，1995年と書いてあることだ(p.195)。そんな最近のことなのだ。

多和田葉子「球形時間」(Kindle版)

多和田葉子が朝日新聞に「白鶴亮翹」という小説を連載し，9月にそれが終了してそれに関するインタビュー記事も出た。連載は一度も読まなかったが，芥川賞を取った「犬婿入り」は当時（1993年）読んだ。しかし，それ以来この作家の名前は新聞などで目にするし，ドイツ在住で日本語とドイツ語による作品があるという知識もあったが，芥川賞受賞作以外の作品は読んだことがなかったので，この際，何か読んでみるかとAmazonで探し，Kindle版があるこれを購入して読んでみた。

昔，「犬婿入り」について

「非現実的な話ながら、多摩の公団住宅の街の感じ、人々の生態が見事なリアリティを見せる。「犬婿」のお伽噺がその中で話の展開の中心になってくると、何か違和感を感じてしまう。」

という感想を書いているが、2002年に出たこの小説についても、似たような感想を持った。高校を舞台として、女子高生のサヤ、男子高生のカツオ、教師のソノダヤスオなどが出てくる。そのクラスの描写や教師と教頭などの学校の上層との関係などは、妙なリアリティがある。しかし、後半になるとどんどん空想的な世界になり、それも登場人物の誰かの妄想らしいが、その「誰か」があいまいになってくる。

「球形時間」というのは「休憩時間」に引っかけているのだろうが、一直線ではない時間ということも意味しているのだろう。しかし、本文にはこの言葉は出てこない。

Brian Greene, "Until the End of Time: Mind, Matter, and Our Search for Meaning in an Evolving Universe," (Kindle version)

久しぶりにBrian Greeneを読んだ。これまで読んだ本と同じように、これも長い。しかし、これまで意識していなかったが、Brian Greeneもユダヤ人であることを、本書の中にそう書いてあることで確認した。Steven PinkerにしてもYuval Harariにしても、天才的な人はみなユダヤ人という感じである。しかも、発想がたがいによく似ている。

須藤さんの本と重なるテーマではあるが、それよりずっと長い。時間に終わりがあるかという問題を、物理学の立場から議論しているが、宇宙の時間だけでなく人間やGreene個人の人生の終わりについても論じていて、それはこのところ読んでいる「死」や「寿命」に関する本と、重なる部分もある。

それにしても現代の物理学の視野に入る時間は、まったく気の遠くなるようなものである。第9章"Duration and Impermanence: From the Sublime to the Final Thought"で、宇宙の歴史をエンパイア・ステート・ビルディングにたとえている。そこでは各階はその下の階の10倍の時間経過を持つとする。1階はビッグバンから10年という時間である。この構造では12階から13階まで登ることは、ビッグバンから1兆年後の世界から、10兆年後の世界に移ることになる。現在のビッグバンから138億年後の世界は、10階から数歩上ったところである。太陽は50億年間、水素の核融合によって自身の質量が重力によって潰されるのを耐えてきたが、そのバランスがもつのは、あと50億年である。そのときには、太陽がおそろしく膨張する。そして質量の一部が宇宙に飛散して、太陽の質量が小さくなる。そうになると惑星の軌道は太陽から離れていく。惑星の運命は離れていくスピードと太陽の膨張のスピードとの兼ね合いで決まる。水星はその競争に負け太陽に吸収される。しかし、金星、地球、火星は生き残るが、地球の表面温度は数千度に上る。水素核融合でヘリウムができるが、それが蓄積して太陽の中心の温度がさらに上がるとヘリウム核融合が起き、炭素と酸素が生成される。太陽はまた縮小す

る。太陽の質量がさほど大きくないため、このプロセスはここで停まって炭素と酸素が核融合を起こすには至らない。太陽はやがて白色矮星になる。10階をちょっと超えたところで、太陽は黒くなり消えていく。

11階に達する前のどこかで、ビッグリップが起きる。宇宙のすべて物質がばらばらに引き裂かれる。これは一つの仮説だが、その成否にはダーク・エネルギーの正体によるらしい。とにかくこういう調子で、現代宇宙物理学は想像もつかないような時間と空間について、さまざまな理論と仮説が出されているらしい、

源河亨「「美味しい」とは何か」（中公新書）

新聞の書評で見て、買って割とすぐ読んだ。おいしい、まずい、の判断について論じている。それはある意味、美醜の判断という美学に属する。1985年生まれ of 著者は慶応で博士（哲学）を取得している。それでこの本は、食に関する評価を例として、美学とはどういうものかを紹介するものだという。

帯に「ラーメンは芸術か？」とあって、どうみても著者とは思えない外国人が、ラーメンを食べている写真がそこに載っている。食や料理を語るなら、他のなんでもよさそうだが、本書ではどういうわけか例として取り上げられるのは、もっぱらラーメンである、

味は味覚のみで感じるのではなく、臭覚、視覚、触覚、聴覚が統合的に効いてくる、とか食の評価はもっぱら主観的なものとは言えず、主観性と客観性の両者の側面がある、といった主張はもっともだし、それなりに説得力はある。ただ、こちらが期待するほどには十分には展開されない。「知識と楽しみ」と「おいしさの言語化」の章で書かれている内容もかなりもっともではあるが、やはり物足りなさを感じる。最後の章は「芸術としての料理」と題されているが、これが本書の眼目という印象を与えるにもかかわらず、あまり大したことを言っていない。

「まえがき」に本書の特徴の一つは、さまざまな現代の研究を参照することだとして、生理学、心理学、脳科学、言語学などを参照している。それは確かに実践されているが、進化生物学がこの例示にないことが意外であり、実際、本文でもごくわずかに進化論的な説明に触れられているに過ぎない。しかし、そもそも「おいしい」という感覚は、食べて生きるのに役立つものと、害になるものとを区別するために作られてきたもののはずである。

チャーホフ、神西清 訳「ヴーニャ伯父さん」（「世界の文学 27 チャーホフ」）

「ドライブ・マイ・カー」という映画をPrime Videoで観た。これはカンヌ映画祭で脚本賞、国際映画批評家連盟賞など、ゴールデングローブ賞では非英語映画賞（旧外国語映画賞）、アカデミー賞では邦画初となる作品賞を含む4部門にノミネートされ、国際長編映画

賞を受賞した作品である。その中でチェーホフの「ワーニャ伯父さん」が使われている（この「世界の文学」に入っている神西清訳では「ヴーニャ伯父さん」）。これは原作の村上春樹の短編ではなく、監督で戯曲も書いている濱口竜介による創作だという。映画に特別に感心したわけではないが、この「ワーニャ伯父さん」の使い方が印象的だったので、古い本を引っ張り出して読んでみた。

この「チェーホフ集」には四大劇と14篇の短編・中編小説が収められている。若いときに「桜の園」といくつかの小説を読んだ記憶があるが、50年以上前の話である。駒場の学生時代はロシア語を第二外国語として選び、チェーホフの小説も教材として買ったと思うが、ロシア語はまったく身につかなかった。

戯曲を読み慣れないせいか、始めのうちは登場人物が把握できなく、扉にある人物一覧表を何度も見返した。それが大体頭に入ると筋と場面を追うことがしやすくなり、どくに第三幕には引き込まれた。暗く苦しい人生が描かれるが、最後はソーニャの「でももう少しよ。ヴーニャ伯父さん、もう少しの辛抱よ。・・・やがて息がつけるんだわ！」という科白で終わる。このもう少しというのは、死が訪れて楽になるという意味なので、救いではない。解説によれば、チェーホフが若いときに書いた原作では、ヴーニャ伯父さんは自殺するらしいが、晩年にこのような形に書き換えたという。自殺せずに自然の死が訪れるのを我慢して待つというのは、救いではないにしてもやや前向きに変わったということのようだ。

神西清の訳は、今から見れば多少古めかしい言葉使いもあるが、きわめて自然である。このまま日本の舞台にかけられたのだろうか。

チーホフ、神西清 訳「三人姉妹」 （「世界の文学 27 チーホフ」）

「ヴーニャ伯父さん」は面白いというわけではなかったが、戯曲を読んで鑑賞するという点では心に残るものがあった。それで、今の「私の履歴書」を書いている清水建設の会長の宮本洋一という人が、日比谷高校時代に「桜の園」の公演をしたということを読んで、では次に「桜の園」を読もうとしたのだが、読み始めてしばらくしてから、読んでいるのは「桜の園」ではなく「三人姉妹」だったことに気づいた。それもよいとして、読み終えた。

これも苦しい人生が描かれる。三人の姉妹いずれも幸福ではない。しかし、途中でいろいろな登場人物が、未来はもっとよくなるだろうという観測を述べる。同じように微かな希望を持ちながら生きていかなければ、という言葉で、結婚を決めた相手の男爵トゥーゼンバフが決闘で死んでしまったイリーナを始め、三人とも口にする。そこに、「ヴーニャ伯父さん」よりはささやかながら希望がある、ということだろうか。

高水裕一「時間は逆戻りするのか 宇宙から量子まで、可能性のすべて」 （講談社ブルーバックス Kindle版）

須藤さんの「不自然な宇宙 宇宙はひとつだけなのか？」を買ったときに、一緒に買った。多分、この高木の本を書評かなんかで気づいて、Kindle版を購入したときに、須藤さんの本の存在に気づいて同時に買ったのだと思う。

著者は1980年生まれで、まだ若手の研究者である。早稲田出身で現在、筑波大学計算科学研究センター研究員。ケンブリッジのHawkingのところに海外特別研究員として3年滞在し、Hawking最後の弟子ということが売りにになっている。一般読者向けということ意識して、サービスしすぎというところがある。

まず、時間とは何かという問題は人類がいろいろ考えてきたが、それには

- 物理学における時間
- 認知学における時間
- 生物学における時間
- 心理学における時間

があるとする。ほかにも「哲学における時間」があるが、これは科学の領域を超えるので扱わないことにするという。これは少々意外で、「時間とは何か」をまず考えたのは哲学者だろうし、これまでの時間に関する著作も、哲学畑がもっとも多いのではと思われる。

哲学というよりは文学だが、高校時代の愛読書「魔の山」に「時間とは何か」という哲学的な問いが、繰り返し現れたのを覚えてい

る。高橋義孝訳の「新潮社世界文学全集版」をまだ持っているが、そこからこれを言っている個所を探すのは面倒だと思った。それで電子版を探したら、Kindle版の「魔の山 完全版」佐藤晃一訳というのが991円で売っていたので、つい買ってしまった。それで早速検索したら、数力所見つけたが中でももっとも重要と思われるのは、第6章の冒頭である。これは全2巻の新潮版では第II巻の冒頭なので、手で探してもすぐに見つけられたはずである。高橋義孝訳で、最初の部分を引くと次のようである。

「時間とは何か。一個の秘密である一実体がなく、しかも全能である。現象世界の一条件であり、一つの運動であって、空間内の物体の存在とその運動に結びつけられ、混ざりあわされている。しかし運動がなければ、時間はないのであろうか。さあ尋ねられるがいい。時間は空間の機能のひとつあろうか。それとも逆であらうか。あるいは同じものであろうか。」(II, p.3)

「魔の山」が出版されたのは1924年で、アインシュタインの1905年の特殊相対性理論の発表より十分後である。トーマス・マンはそれについて知識があったであらうか。時間が運動であることはアリストテレスが言ったようで、この高木の本でも言及されている。

「紀元前4世紀に、偉大な哲学者にして科学者でもあったアリストテレスが、著書『自然学』において、時間について次のように述べました。――時間とは、運動の前後における数である――つまり、運動の変化の尺度として、時間をとらえたのです。時間にはなんらかの実体があるわけではなく、物体などの

運動によって初めて存在が認められる、いわば運動のパラメーターのようなものであると理解したのです。」(p.23)

本書ではもちろん、物理学における時間が中心に扱われる。まず、1) 空間が3次元なのに時間はなぜ1次元なのか、2) 時間には方向性があるが逆には進まないのはなぜか、3) 時間には大きさが定められているか、という3つの根本的な疑問が提出される。

まず、アインシュタインによって空間と時間は一体化されて、時空多様体を作っているとされた。しかし、それでも空間が3次元で時間が1次元というバランスは変わらない。時間を2次元や3次元とする世界は考えられるが、あるとしても2次元目以上は1次元目と比べて極めて微小なものだろうという。空間が1次元や2次元の世界は空想できるが、現実とは離れている。また、4次元以上とすると、恒星の周りを巡る惑星の軌道が安定しなくなるという。

時間の大きさが伸び縮みすることは、アインシュタインの特殊相対性理論で明らかにされた。さらに一般相対性理論では重力で空間が歪むという関係が示された。

問題は時間が逆進しうるかという2番目の問いである。それが本書のタイトルが示すように、この本のテーマである。物理学の基本方程式はみな、時間の向きに対して対称性を持っている。その中で、時間の一方向性を基礎づけていると思われるのは、エントロピーであり熱力学第2法則である。ところが量子コンピュータの世界で

は、カオスから秩序へという時間の逆転現象が起きたという実験結果がレソビク等によって示されたという。そのことは第5章に書かれているが、それを読んでもあまりよく分からない。G. B. Lesovik, I. A. Sadovskyy, M. V. Suslov, A. V. Lebedev & V. M. Vinokur, "Arrow of time and its reversal on the IBM quantum computer," Scientific Reports volume 9, Article number: 4396 (2019) にあるらしい。

チェーホフ，神西清 訳「桜の園」（「世界の文学 27 チェーホフ」）

「桜の園」だけはこの「世界の文学」で昔読んだような気がするが、内容はまったく記憶していなかった。TVで芝居の中継を観たような気もするが、それも不確かである。三人姉妹がこの桜の園の住民であってもおかしくないような、同じような世界である。どちらも別荘のある田舎にいる地主階級の話で、没落していて辛い人生を送っている。田舎をやめてモスクワなりパリなりの都会に、登場人物の一部が移ろうとしていることも共通している。

四大劇の中でも「桜の園」が一番有名だが、日本ではいまだによく上演されているだろう。しかし、たとえば「ヴーニャ伯父さん」におけるピストルの発砲騒ぎのような劇的な事件が起こるわけでもなく、登場人物間の関係も入り組んではない。最後に桜の幹に斧を打ち込む音が聞こえるという終わり方が印象的なため、有名になっているのだろうか。

チェーホフ、神西清 訳「かもめ」（「世界の文学 27 チェーホフ」）

1963年にソ連のテレシコワが最初の女性宇宙飛行士になったとき、「ヤー チャイカ（私はかもめ）」と交信してきたことが有名になった。しかし、今に至るまで、このチェーホフの戯曲でニーナが再三「私はかもめ」という科白を繰り返していることを知らなかった。ただ、Wikipediaの日本版を見ると、「旧ソ連や現在のロシアでは、宇宙活動中の全ての飛行士が個人識別用のコールサインを付与され、テレシコワは「チャイカ」（Чайка、カモメの意）が与えられた」とある。さらに「日本ではチェーホフの戯曲『かもめ』で登場人物のニーナが繰り返し言う台詞「私はカモメ」と結びつけて紹介された。」とあって、テレシコワやソ連の宇宙開発の担当者がチェーホフを意識したわけではないような書きっぷりである。

第一幕でコスチャが自分で書いた戯曲を湖を背景とする野外劇場で上演する準備をしているが、その劇の主役が恋人のニーナである。ニーナはなかなか登場しないが、この若い二人が「かもめ」という劇の主人公かと思わせる。しかし、その後の話の展開では、どちらも不幸な人生を送る。ニーナは著名な作家トリゴーリンに惹かれ、モスクワに戻るトリゴーリンを追ってモスクワで女優になろうとする。ニーナはトリゴーリンと一緒に子供まで設けるが、しかしトリゴーリンに捨てられ、子供も死んでしまって売れない女優として地方を回っている。コスチャは精神的に不安定で自殺未遂やトリゴーリンへの決闘の申し込みなどをした挙句、新進作家として売れ

出すときもあるが、最後は銃で自殺してしまう。かもめは第二幕でコスチャが銃で撃ち落としたのを、ソーリン家の支配人のシャムラーエフが剥製にするというエピソードで登場するが、失意のニーナが手紙を出すときは、いつも「かもめ」と署名しており、それが第四幕で「私はかもめ」という科白を繰り返すことに繋がっている。

「かもめ」は四大劇の中で最初に作られ、初演は失敗したが2年後の再演で成功してチェーホフの劇作家としての地位を確立した作品らしい。全体に暗い話だが、劇的な起伏は「桜の園」よりはある。

Daniel A. Fleisch, "A Student's Guide to the Schrödinger Equation" (Kindle Version)

Student's guideというだけあって、日本の教科書と比べると馬鹿丁寧というほどの親切な書きぶりで、数式の変形やその説明にも間を飛ばさず、手間をかけている。それでも全体は200ページちょっとで、大きな本ではない。

Chris Bernhardtの "Quantum Computing for Everyone"では、複素ベクトル空間の代わりに実数空間が使われ、また空間は3次元でなく2次元に縮小されていたが、本書では複素空間で3次元が使われて、きちんと理解したつもりになった。第1章が「ベクトルと関数」でDirac Notationが導入される。これはこれまでの本にも出てきたが、よりはっきり頭に入った。第2章が「演算子と固有関数」でエルミート演算子と射影演算子が導入される。3章がいよいよ「シュレー

ディンガー方程式」で4章が「シュレーディンガー方程式の解法」である。フーリエ展開やフーリエ解析が導入され、時間と空間との変数分離と、固有関数への展開によって解が得られることが説明される。

法政の創生科学科で「応用解析」という授業を2015年の秋学期にやったことがあるが、その内容の一部をフーリエ解析とした。教科書として大石進一「フーリエ解析」（岩波書店）を使ったが、なかなかよい本だった。ぼく自身がそれまであまりフーリエ解析を勉強したことがなかったので、勉強しながら教えるというところがあった。そのようなベースがあるから、この第4章までは速いペースで読めた。しかし、第5章の「特殊ポテンシャルに対する解」になると、読むスピードが俄然落ちた。別に内容が難しいわけではないが、式の展開を手抜きなしに行い、しかも説明が馬鹿丁寧である。面倒になって式の変形を飛ばし気味に読んだが、それでも結構長い説明を最後まで追って読んだ。これで各章末の問題も解けば完璧な学習になるところだが、それはさぼった。しかし、Webに解答が示されているというからまことに学生に対して親切である。親切と言えば、「他の本にはこういう式の変形や説明が多い」という表現もよく出てきて、類似の教科書を広く調べて、それらに接している学生への手引きも与えているのも、実に念がいつている。

黒川清「考えよ、問いかけよ ― 「出る杭人材」が日本を変える」（毎日新聞出版）

藤崎Zoom会で、「失われた30年」がだいぶ前から話題になっており、とくに岩下さんは特定非営利活動法人「日本コーポレート・ガバナンス・ネットワーク」というところが主催した「失われた30年」についての公募論文に応募した。その論文は規定で3000字以内との制限があったが、実際にはそれよりはるかに長いものを書かれてわれわれに供された。それをもとに、われわれは何回かの議論をZoom上で行った。そこでZoom会のメンバーの一人の松田さんが、この黒川さんの本を紹介され、それを読んだ岩下さんが、まさに自分の言いたいことだと共感を示された。それで次回のZoomn会までに皆がこれを読んできて、議論しようということになった。それでぼくも早速買って、読んだ。

日本を変えなければならない、それには「出る杭人材」が社会で活躍できるようにしなければならない、という主張は明快であり、共感できる。以前、三菱総研や野村総研OBが集まるJTTAという会合で、カーボンゼロの目標に対しては当面原子力利用が有効なのではないかという意見をぼくが出したことがある。それはメンバーの電力業界に詳しい新沼さんが脱炭素の話をしたあとだったが、新沼さんから「当方が問題視する点は、原子力利用の是非より”政府判断のプロセス”に原因がありまして」として詳しい論点が挙げられたことがあった。この黒川清の本を読むと、国会事故調査委員会委員長として報告書を作り、7つの提言をしたのに、それがほとんど実行されていないとして、舌鋒鋭く政府、政治家、東電などの関係機関・

関係者を批判しているのに強く感銘を受け、新沼さんが言っていたのがこのことなんだろうと、目を開かれた思いがした。

藤崎Zoom会の方には、全体としてこの黒川さんの主張に大いに感心したが、多少の疑問を感じたところがあったという報告をした。その前に、藤崎さんが黒川さんは東大医学部教授、学術会議会長、内閣特別顧問などを歴任してきたわけだが、その頃は「出る杭」を大切にすることについて、何をやっていたのかという疑問を出した。ぼくが言ったのは、それとは違う観点からの指摘である。彼が東大医学部在職中の1969年に米国に行き、それから11年米国の大学にいた後、また東大に戻ったという経歴について問題視した。1969年は1月に安田講堂事件があったときで、医学部はこの東大紛争の原因となった直接の当事者だった。出かけたのは安田講堂事件のあとのようだが、少なくともその準備に1-2年かけたはずだから、東大があのような状況にあった最中にそこを脱出し、十分ほとぼりが冷めた頃に帰国して東大教授に納まったという経緯を単純にみると、巧みに立ち回ったという印象をぬぐえない。この本ではその点についてまったく触れていないのも、首を傾げさせる。

2021年

江戸川乱歩「陰獣」(Kindle版 江戸川乱歩作品集)

新聞に、「猟奇と妖美の江戸川乱歩」という本の広告が出ていた。双葉文庫の1冊ということで新刊らしいが、著作権の切れた作品のアンソロジーである。それで「Kindle版 江戸川乱歩作品集」を久しぶりに取り出し、目次をつらつら眺めてみた。おどろおどろしい題名の作品が並んでいる。その中で「陰獣」はかなり有名なもののように思われたので、読んでみることにした。前に少し江戸川乱歩を読んだのは2016年で、5年も前であることに驚いた。

これは1928年（昭和3年）の作品で、横溝正史が編集者だった「新青年」に3回に分けて掲載された中編である。この評判がよく、乱歩は探偵小説作家としての地位を確立したらしい。この作品には乱歩本人による簡単な解説が付いている。それによると、題名の「陰獣」は、猫のような魔性の「陰気なけもの」という意味だったという。しかし、発表直後から「淫獣」と誤解された。サディズム・マゾヒズムが出てくるので（乱歩の文中では「惨虐色情(者)」「被虐色情(者)」という言葉が使われている）、そのような「誤解」は意図したもののようにも見え、それがこの小説が大評判となったという一因でもありそうである。乱歩には「探偵小説四十年」という回想録があるらしいが、この「Kindle版 江戸川乱歩作品集」にはそれが収録されていない。しかし、Wikipediaによるそれからの引用によ

ると、「陰獣」がセクシュアルな意味で受け取られることが多く、変態的な犯罪が発生するたびに、新聞記事などでしばしば「陰獣」という見出しが用いられるようになったため、「私はそれを見るたびに、実にいやな思いをしたものだ」と不快の念を示していたそうだ。

この作品に登場する二人の探偵作家のうち、「寒川」は甲賀三郎、「大江春泥」は乱歩自身をモデルにしているという。また春泥の著作として、乱歩の著作を元にした小説名がセルフパロディの形で作中に複数登場している。この探偵小説家が小説の中に現れて、その作品もストーリーの一部を構成するという構造は、最近読んだAnthony Horowitzの3冊の小説でも巧みに使われていたが、乱歩は同じことを100年前の昭和の初めの日本でやっていたわけで、それ以前にも誰かが同じようなアイディアを使っていたのかもしれないが、そうだとしても乱歩の偉大を感じさせることである。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第七篇 見出された時 I,II」（集英社文庫）

読み始めたのは2019年の春ごろである。同じころにファール昆虫記の第4巻を読み始めている。ファールの方の最1巻は2017年に読み始めている。

Iの「はじめに」に訳者が書いていることによると、ここに出てくるタンソンヴィル滞在の場面は、第一篇の「スワン家の方へ」の初め

の方に伏線が張られているという。第1巻の36ページ（この文庫版でのページ数による位置）で語り手は「タンソンヴィルのサン・ルー夫人の田舎の家」にふれ、「タンソンヴィルのサン・ルー夫人の家で過ごす生活」を思い出している（自分は憶えていないが）。とすると、それ以降の巻で描かれたここまでの話は、第1巻のその時点ではすべて過去のことになる。ところがその「スワン家の方へ」が出版された1913年には、まだこの巻の主要なテーマである世界大戦は始まっていない。

現在の場面はゲルマント大公夫人邸における昼のパーティーなのだが、そのゲルマント大公夫人というのが、これまで登場していたゲルマント公爵夫人の従兄妹の大公夫人ではなく、その人物はすでに死んでいて、以前のヴェルデュラン夫人がその位置に収まっているというのがびっくりである。

「見出された時」では、「私」がこれから小説を書こうとする決心をすることがテーマである。しかし、そこに時間という概念が大きく関わる。「失われた時を求めて」では、タイトルからしても時間が大きなテーマであるが、これまで具体的な「時」を表現することは、避けられてきた。描写される情景ごとの時はいつのことなのか、「私」は何歳なのか、ママンとかスワンとかゲルマント公爵夫人は何歳なのか、などについては、物語の流れから想像するしかない。ただ、「見出された時」はその前の「逃げ去る女」からかなり長い年月が経過している。「私」は2度の療養生活を経ていて、前

の巻からおそらく10年か20年ぐらい経っている。そして戦争中であることが示されて、絶対的な時間軸も与えられている。これまでもドレーフェス事件などの扱いで、時代背景が示されてはいるが、ここで第1次世界大戦中であることで、よりシャープな位置づけが与えられた。そのプルースト自身の生涯とも時間軸が同期している。プルーストは1922年に51歳で死んでいるが、その時点では第四篇までしか出版されていない。

「見出された時」というのは、全体の題名「失われた時を求めて」に呼応するものだが、「私」が最初の「マドレーヌの体験」のような感覚を見つけ出し、それらを核として芸術の創作ができるという自信を得るというのが、この巻のテーマと言える。その一方で、自分に残された時間が足りないのではないか、という懸念も感じているが、とにかく「私」がこれから小説を書いていく、という未来が展望される。

訳者によるIIの前書きに、

「私たちは語り手が書いた作品を知らない。彼が書いたと言っている草稿の内容も分からない。しかし、その作品が「失われた時を求めて」のようなものになったろうということは、容易に想像される」

と書いている。そうなのだろうか。語り手が書いた作品が「失われた時を求めて」に他ならないという、自己言及的な構造が意図され

ているのではないだろうか。つまり、この小説全体が「小説を書く」ということを主題として作られているのではないだろうか。

IIの巻末エッセイが、加藤周一による「戦争とブルースト」と題したものであることに驚いた。この文庫本がいつ出たかという、訳者のあとがきの日付が2007年2月になっており、奥付の発行日の記載は第1刷が2007年3月である。加藤周一が亡くなったのは2008年12月である。1919年生まれで89歳だったから、亡くなる前年のほとんど遺稿というべきものかもしれない。しかし、その内容は素晴らしい。Iでシャルリュス氏が戦争に関して、独仏の戦争スローガンを並べてそれがよく似ていることを指摘して、「ブルーストがシャルリュス氏に代弁させたかぎりでの反戦主義」を評価している。その加藤周一が駒場のキャンパスに車椅子で来ていたのを多分その亡くなった年に目撃している。周りに駒場の教員が何人かアテンドしており、何かのイベントに招待したものだろう。車椅子に乗っているものの、顔の色艶はよく、元気そうに見えたの。このエッセイを書いたのは、あの時の前後だったのではないかと想像される。

ただ、その加藤が書いている中に、

「知識人の大多数も戦争支持の合唱に加わる。戦前に反対を唱えた社会主義者も立場を変える（第2インターナショナル）。トーマス・マンもシャルル・ペギーも、ウェルギリウスのように「戦いと人々を唄」った季節、フランスもドイツも、もはや「戦争を越えて」発言したロマン・ロランのような人物が住めるところではなかった。」

とあるのが気になった。以前、東大新聞に頼まれて「青春の一冊」という文章を書いたときに、トーマス・マンの「魔の山」を青春の一冊として取り上げた。その最後に次のように書いた。

「物語の最後ではハンス・カストルプが戦争に行くという劇的な場面転換が起こる。ここで読者は、ハンスがダボスに入ってから後、第一次世界大戦が勃発していたことを知る。ハンスの精神の彷徨も、20世紀のヨーロッパという時代の流れから孤立したものではなかったのである。」

これを書いたときは、トーマス・マンが戦争に対してどのような立場を取っていたのかについて知識がなく、ただ一兵卒としてハンス・カストルプが隊列にあることを描くことにより、気持ちとしては反戦ではないかと想像していたが、違うのかもしれない。

なお、Iのエッセイは辻原登で、「熊野でブルーストを読む」という題である。自分が書いた短編小説「母，断章」を紹介するが、それがブルーストばりというかパクリとも言えるような小説らしい。そういえば辻原が芥川賞を取った作品の題名は「村の名前」である。

「スワン家の方へ」の第3部が「土地の名・名」であることを使っているのだろう。もっとも1990年にこれが芥川賞を取った時に読んでいるのだが、内容はほとんど覚えていない。当時書いた感想は、「丸谷オーが激賞しているが、それほどの感激はなかった。」というだけのそっけないものである。

訳者あとがきで初めて知ったのは、鈴木が個人全訳に取りかかる決断をしたのが1980年代に入ってからで、本格的に取りかかったのが

1990年代になってからだということである。これには驚いた。というのは前にも書いたように、ぼくが最初に読んだブルーストは鈴木道彦訳の「囚われの女」で、1970年のことだったからである。中央公論社の「世界の文学」1冊で1966年に出版されたものだが、鈴木はこの文学全集のためにスポットでこれを訳したらしい。その後、前にも書いたようにさまざまな全集に収められた「失われた時を求めて」の各篇をバラバラに買ったが、井上究一郎訳が多かった。全巻の個人訳を最初に行ったのが井上だそうで、完成したのは1988年なのだろう。全巻の個人訳が2種類もあるというのは、日本の出版界の力量を示すものかもしれない。それ以外の共訳もいくつか出ている。

藤野裕子「民衆暴力―一揆・暴動・虐殺の日本近代」（中公新書）

昨年の8月に出た本で、新聞の書評などで評価が高だけでなく、年末の「今年の3冊」などの欄で複数の人が挙げていたので、暮れにAmazonで買った。

近代における一揆、暴動、虐殺などの民衆による暴力事件を、とくに新政府反対一揆、秩父事件、日比谷焼き討ち事件、関東大震災の朝鮮人虐殺、に焦点を当てて、分析している。

その前に、江戸時代の百姓一揆や幕末の世直し一揆が概観される。ちょっと驚くのは、百姓一揆の種類には合法的な訴願と非合法的な

徒党・強訴・逃散があるが、その実行には作法があり、多くは暴力的でなかったということである。ただ、幕末の世直し一揆になると、打ちこわしなどの暴力的なものになる。

明治以降の、事件として取り上げられる4つのもののうち、新政府反対一揆は、期間が10年ぐらいにわたり、場所もさまざまで、廃藩置県、徴兵令、学制、賤民廃止令、地租改正などへの反対運動を、まとめて呼んでいるものである。後の3つは個別の事件だが、これまで史実としての知識はあっても、背景、経過、結果などについての詳しいことは知らなかったもので、本書で知ったことは多い。

新政府反対一揆の中に、賤民廃止令への反対運動があり、被差別部落の家々に放火し、住民を殺傷したという。一般に民衆による政府への抗議行動は「進歩的」な1960～70年代の歴史研究では高く評価されたというが、このように抗議や暴力は支配者に向けられたものばかりではなく、弱者にも向けられていたことは考えさせられる事実である。

秩父事件は秩父地方の農民が、1884年に借金の据え置き、学校の休校や減税を求めて蜂起し、高利貸しへの放火や郡役所、裁判所、警察署などへの襲撃を起こした事件である。自由民権運動が高まりを見せた時期で、一部は自由党との関りがある人物たちが「秩父国民党」と称して暴動を起こした。その性格は自由民権運動的な部分もある一方、近世の世直し一揆に類似するところもあるらしい。

日比谷焼き討ち事件は、日露戦争の講和条約に不満を持って日比谷公園に集まった民衆による暴動であったという知識はあったが、2晩で警察署2か所、分署6カ所、派出所・交番所214カ所が襲撃され放火されたという事件であったとは、知らなかった。講和条約締結に反対するというから、国粹主義の色が濃いものだと思っていたが、これまでの歴史研究では大正デモクラシーの出発点と位置づけられたきた、というのも意外だった。講和条約の破棄を求める国民大会が日比谷公園に招集され、警視庁は開催禁止を決定して、参加者と対立した。大会終了後警察と人々との間に衝突が起こり、派出所などへの襲撃と放火があちこちに飛び火した。

講和条約に反対する気運のもとに、もう戦争は嫌だという厭戦気分があったというのも意外である。もちろん、条約反対の論を張った新聞は、戦争継続を主張したようだが、倅二人が戦争で死んだのに賠償金も取れないような結果は馬鹿馬鹿しい、というような投書を書き載せたりしている。厭戦気分と講和反対による戦争継続の要求がどう結びつくのかについては、著者もあまり説得力のある説明をしていない。ただ、暴動参加者の多くは東京の日雇い労働者や工場労働者で、社会的にはきわめて低く見られる存在であり、将来への希望を持てない境遇にあったという鬱憤が、交番などの焼き討ちに結びついたという。

関東大震災に際しての朝鮮人虐殺については、歴史的な史実としての知識は多少あったが、これほど多くの人々が惨たらしく殺された

ということは、はっきりとは知らなかった。しかし、殺された人数については調査によって230人から6600人まで、まちまちだという。とにかく酷い虐殺が数百人から数千人に対し行われたのは確かである。しかし、これにも歴史修正主義者たちが、存在を否定したり矮小化したりしているらしい。そもそも殺された人の数がはっきりしないのは、事件の直後から事実を隠そうとする国家権力の意図が働いた結果のようだ。

背景としては、1910年の韓国併合に端を発する朝鮮における抵抗運動が、三・一運動という形を取ったのが1919年で、それに対する日本側の弾圧が苛烈を極めたということがある。弾圧に対する反抗の恐れから、国内でも「不逞鮮人」という言い方でテロの危険があるという言辞が飛び交っていたらしい。しかも三・一運動後の朝鮮統治の経験者が、関東大震災時の治安を担っていたという。その経緯から、朝鮮人虐殺は民衆の間から自然発生したデマに発するわけではなく、官憲側から意図的に発信された情報が広がったことや、軍隊が手を下して朝鮮人を銃殺した、ということまであったという。

それで思い起こされるのは、小池都知事の行動である。例年9月1日に墨田区横網町公園で営まれる関東大震災で虐殺された朝鮮人犠牲者追悼式に、2016年まで都知事が追悼文を送ってきたが、2017年から昨年までずっと、追悼文の不送付が続けられている。これは小池の体質をよく表しているものだろう。その行動は、2017年の衆院選で小池が作った新党「希望の党」が失速したことにも繋がるだろ

う。このとき、前原誠司を新代表に選出したばかりの民進党が、小池人気にすがって希望の党への合流を図ったが、小池は「安保、改憲を考慮して一致しない人は公認しない」と言い、方向が違う人は「排除します」と言った。それで勢いのあった希望の党は、選挙で大敗したが、これも小池百合子の体質を露呈したオウンゴールであった。これによってそれまで方向が定まらなかった枝野が、立憲民主党を作ることになったのは、むしろよかったと当時ぼくは思った。ただ、もし小池があんなオウンゴールを犯さずに選挙で自民党に勝っていたら、ずいぶん違う現在になっていたかもしれない。

渡辺照宏「仏教 第二版」（岩波新書，Kindle版）

初版は1956年に出ているが、この第二版は1974年に出ている。まえがきによれば「初版を廃棄し、新しい構想のもとに第二版を起稿し、ここに脱稿した。題名は同じであるが、内容はすべて書き改めた。」とある。その初版か第二版の岩波新書を持っているような気がしていたが、本棚に見つからないので買っていないのだろうし、読んでもいないのだろうと思い、Amazonで見つけたKindle版を購入した。

すでに「お経の話」を読んでいるので、かなりの部分は素直に頭に入った。初めに仏教がどのようにインドから中国に入ってきたか、玄奘やインドから来た僧侶を通して語られる。また、ヨーロッパにおけるインド研究を振り返り、そこでサンスクリット語や仏典がど

のように研究されたかが述べられる。またパーリ語の仏典やチベット仏教についても概観される。「お経の話」にも書いてあったが、あれだけ大量の漢訳を実施し漢訳大蔵経を整備した中国では、原書のサンスクリット経典をみな捨ててしまっていて、ほとんど残っていないというのには驚かされる。残っているのはむしろチベットとかセイロンなどで、日本にも量は少ないが法隆寺などに古いサンスクリット原典があるという。

仏教とは仏陀が説いた宗教であり、仏陀とは完全な境地に到達した人のことで、そのような人物がこの世に現れるのはめったにないが、当時のインドでは出現が期待されていた。その点では救世主が待ち望まれていたところに生まれたキリストという存在と似ているが、キリストは神とされ、仏陀は人間であるところが違う。歴史的には、シャーキャムニが実際に出現した仏陀となる。そのような当時のインドの状況が、インダス文明、バラモン教、ドラヴィダ文明、ジーナ教などに関連づけてまず解説される。

続いて、仏陀の生涯が語られる。シャーキャムニの伝記の資料はきわめて多いが、そのうちのいずれが史実でいずれが伝説かを見分けるのは難しいという。生まれた時、場所、家族などはかなり確かに分かっている。シャーキャ族の王族でカピラヴァストゥという都城の王シュッドーダナの息子として生まれた。ただ生誕の地はカトマンドゥの西にあるルンミンディだそうだ。これが仏伝でいうルンピニである。17歳のころ結婚したが、妃は3人いたという。29歳と推

定される時に出家し、修業を始める。6年苦行して、苦行は解脱に達する道ではないと悟り、苦行を中止した。そしてその後ブッダガヤーと呼ばれることになる場所で、ピッパラという、その後、菩提樹と呼ばれる樹の元で座禅して、仏陀となった。そこで得た法を人々に説くべきか迷っているとき、ブラフマン（梵天）という神が現れて法を説くように勧めた。最初の説法はサールナート（鹿野苑）で行われた。それが初転法輪である。初転法輪では前半に中道を説き、後半では四聖諦を説く。次いでペナレスで5人の弟子を得。教団が成立する。その後、入滅までの45年間、布教を続ける。最後はクシナガラで涅槃に入る。

その後の章では、弟子たちのことと在家と出家の関係、聖典の成立過程、ジャータカ（前世の物語）、パーラミター、ヨーガ、ストゥーパ、大日如来、ボサツたち、明王、などが「仏陀の理想をめざして―ボサツの道」と「仏陀の慈悲を求めて―信仰の道」と題する2つの章で、取り上げられる。ただ、この2つの章は、やや雑然といろいろなことを詰め込んだ、という印象もある。

渡辺照宏は1977年（この第二版が出て3年後）に死んでしまったようだが、日本の仏教学者として偉大な人だったと思われる。

江戸川乱歩「パノラマ島綺譚」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

Wikipediaに、

「横溝は『パノラマ島奇譚』と『陰獣』とを、「乱歩文学の両巨峰である」と信じて疑わない」とし、「その作家の持っている最高のものを描き出してこそ、雑誌記者の本懐であろう。私は『パノラマ島奇譚』と『陰獣』で、二度も雑誌記者冥利に尽きる思いを味あわせてもらったのである」と本作を振り返っている。」とあったので、読んでみる気になった。

瓜二つの他人に入れ替わるというプロットはいかにも非現実的だが、小説全体はよく構成されている。これは人工的なユートピアを建設する物語である。ディズニーランドよりどれほど前か？ アナハイムのディズニーランドができたのは1955年らしいが、Walt Disneyは1930年代から40年代にかけて、娘たちと各地の遊園地を巡って、構想を得たらしい。しかし、この作品が出た1926-27年という時代には、そのような施設が実際に作られることになるとは、誰も想像がつかないだろう。ここに出てくる人工的な「理想郷」ないし「無可有郷」は、ディズニーランドのように子供向きではなく、健康的な娯楽設備でもないが、発想には似たところがある。この人工的なユートピアは、エロティシズムの妄想を実現したという部分があって、そこが乱歩らしいと言えば乱歩らしい。

他の人間は騙されるが、死んで土葬されていた菰田源三郎が生き返ったということを疑ったのが、源三郎の妻千代子であるという設定は、ごく自然である。ほぼ完成した楽園がある島に主人公の廣介が千代子を連れて行くのが後半だが、そこから作品としての緊張感も

高まり、文章の質も上がる。最後の終わらせ方は科学的に合理的とは言えないが、ストーリーとしてはまあこんなものかと思わせる。

渡辺照宏「日本の仏教」（岩波新書）

この本は学生の時に読んだような記憶があるが、手元に残っているものは1984年に出た第33刷で、かなり新しいので学生時代に読んだものとは思えない。もしかしたらオヤジが晩年に買ったものかもしれない。一方、学生時代に読んだことを明確に記憶しているのは渡辺の「外国語の学び方」であるが、持っているのは1962年に出た第4刷で、第4刷といっても第1刷と同じ年の1カ月半後に出ている。よほど評判がよかったのだろう。1962年といえは自分はまだ中学3年生だが、自分で買って読んだらしい。

日本の仏教は当然外来思想であるが、インドで生まれたものが中国を通して日本に入ってきているという構造がある。渡辺は寺の出身の学者として、サンスクリットのテキストも研究し、もちろん漢訳經典も読み込み、仏教の源流を大事にする考え方を持ち、日本で歪められた理解や思想を批判的に評価する。一方で、日本における仏教の長所も認識し、優れた仏教者が歴史上何人も生まれてきたことも評価している。その評価の高低は本書を通じてかなり明確に表現されている。

外来思想の輸入という点では、まず中国語にしてから、唐や宋に行った日本からの留学僧のうち、中国語の会話が自由にできた者はご

くわずかだったという。中国の正史に語学力についての記載のある日本僧が二人いるそうだが、どちらも読み書きには高い能力を示したが、会話はできず筆談だったという。空海は自由に会話ができただけらしいが、それは例外的なようだ。他では道元が宋に渡る前に会話を学んだという。

一方、少しではあるがサンスクリット語を理解し、その原典を研究した日本人僧も何人かいる。空海も唐でサンスクリット（悉曇）を学んだというが、平安期には安然が「悉曇藏」8巻を著わした。

昔のことになるが、この「読書三十年」の始まりの1986年に、キーンの「百代の過客」に関して、次のように書いている。

「NHK特集で、中国の五台山を訪れたドキュメンタリーをやっていた。唐代に日本から渡った僧、靈仙の足跡を辿るという構成を取っている。靈仙は空海、最澄とともに遣唐使として入唐したが、他の二人が一、二年で帰国したのに対して、そのまま留まり、仏典の漢訳(!)の功績により、三蔵法師という最高位の称号を得たという。その後、仏教迫害などにより長安から五台山に移り、金閣寺、靈境寺で修行したが、謎の理由により扼殺されたという話である。テレビでは、現在その跡も分らなくなっている靈境寺を探し、それを見つけるというミステリ仕立てで、面白く見せる。」

これがなぜ「百代の過客」の感想に書かれているかというと、キーンが円仁の「入唐求法巡礼行記」を最初の日記として取り上げてい

るからである。ただ、この「日本の仏教」では、円仁は出てくるが
靈仙は出てこない。

しかし、評価されるのは言語能力に優れた学究的な僧ばかりではない。というより、厳格な戒律を守り、本格的な仏教を確立した人ほど、民衆に近づき民衆の利益を増進するような社会事業を実践したとして、それらの人々を高く評価する。例として、道昭、行基、空海、重源、空也、一遍、栄西、道元、叡尊、忍性、鉄眼などの名前を挙げている。さらに研究や実践の面では本格的なものを求めて身につけながら、そのような学徳を超越して、純粹な生活に浸りきった人たちの例として、桃水と良寛を挙げ、高く評価している。

一方で、かなり強く批判されているのが日蓮で、その自意識過剰、独善性・排他性が問題視される、日蓮宗から派生した創価学会などの新興宗教も、日蓮と同じ問題点を継承しながら、日蓮自身は不遇でその国家主義を実現できなかったのに対し、時代が異なることで立場に違いが出てきていると警告する。その日蓮が激しく論難した法然も、あまり高くは評価されていない。親鸞については現世利益を否定し呪術を排斥したという点では評価しているが、いい加減な修行しかしていない点で、日蓮と共に

「わずかに信者の仕送りによって余命を支えながら、口先だけの指導をしていた親鸞や日蓮が仏教者の典型であるとは少なくとも私には納得できない。」(p.42)

と手厳しい。

日本仏教の特性として、呪術祈祷、死者儀礼、形式主義などを挙げている。死者儀礼における用語や行事で言えば、「廻向」とは本来は自分の善行の功績を他人に譲り渡すという意味(p.106)であった。転じて、読経の功德から死者のために読経することを廻向というようになったが、日本ではもっぱらその意味で使われている。火葬は仏教の導入によって行われるようになった。法要の七七忌、百か日、一周忌、三周忌、十三回忌、二十三回忌は、みな日本的なものだが、その起源にはある種の合理性もありインドや中国の風習と重なる部分もある。「盂蘭盆会」はインドの一般信仰を仏教的に再構成したものが、輸入された。「施餓鬼」は別起源のものだが、日本では一緒になった。「彼岸」はインドにも中国にも先例がない。

「法名、戒名」は仏教の信仰に入ったという印というのが中国や日本の風習であった。それが、近世のキリシタン改めの制により、死者に与えるものとなった。「位牌」も同様に近世の習慣である。死者を「ホトケ」と呼ぶのは仏教からみておかしいが、これも近世に一般化した。葬式法要を寺社が財源とするようになったのは、天皇や貴族の庇護に頼ることができなくなった鎌倉時代以降のことである。

なお、法華經に関し、次のような一節がある

「・・・「法華經」の特異性は「法華經」自体の極端な賛美である。「法華經」の本文の中に、この經は「諸經の中の王」だ

と書いてあるのであるから、常識ではわりきれない。「法華經」という名の經典を賛美するとすれば、それ以前にすでにその名の經典が存在していなければならないはずである。」

これは自己言及の問題である。プルーストの「見出された時」の訳者前書きについての感想でやはり「自己言及」の問題について触れたが、はからずもここでまた似たような感想を覚えた。

芥川龍之介「糸女覚え書」（芥川龍之介全集 Kindle版）

日経の「文学周遊」というコラムに、「芥川龍之介「糸女覚え書」大阪・玉造総じて自害は切支丹宗門の禁ずるところに御座候」という記事が載っていた。芥川のこの作品は、中学生の時に読んだ講談社版の「現代日本文学全集 芥川龍之介集」に入っていて、目次に丸が打ってあるから（中学生のぼくは、読んだものに印を付けていた）当時読んだらしい。しかし、どんな話だったかも憶えていなかった。短い作品で、わざわざこのノートの1項目として取り上げるほどのものではないが、記録として残しておく。

これがどの程度史実に基づく話なのか分からないが、何かの資料に基づいているのだろう。日経の文学周遊に

「芥川は聡明で美人という通俗的ヒロイン像をいたずらになぞらない。キリスト教をはじめとする南蛮文化ののみ込みのよさ。その反作用か、周囲を見下すようなとげとげしさが顔を出す。「賢女ぶらるることを第一となさ」るので「とにかく気のつ

まるばかり」。侍女の愚痴を借りて、やや陰のある人物像を造形する。」

とあるのは、なかなかよいまとめである。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第10巻上・下）」（集英社）

ついに全10巻を読み終わった。この集英社版では全20巻である。第1巻上を読んだのが2017年だから、丸4年かかったことになる。定年後らしい読書といえるだろうか。1月に読み終えた「失われた時を求めて」と並行して読んで、同じころに読了した。

奥本があとがきで翻訳を思い立った理由として、過去の訳を読んでみると訳者が「虫屋」ではないな、と感じたことがときどきあったからだという。「虫屋」とは虫好きのアマチュアという意味で、奥本は子供のころからそういう虫好きであり、長じてフランス文学者になったので、ファールの翻訳者として適任ということになる。ぼくはまったくの虫屋ではないが、そういう人間でも読んで楽しめた。ファールの進化論嫌いには辟易するところもあるが、その情熱、弛まぬ観察と実験力、文章力にはつくづく感心した。また奥本の翻訳にも頭が下がった。だから、丁寧な訳注も細大漏らさず読んだ。それで、訳者あとがきに奥本が次のように書いているのは、よく分かる気がする。

「完訳を成し遂げて嬉しいか、と訊かれれば、それがあんまり嬉しくない。「昆虫記」翻訳の日常が無くなって、会社を定年になった勤め人のような心境である。」

上下巻で24章の構成になっているが、第22章の「応用科学」の最後に「了」の字があり、原著の第10巻はそこで終わっている。ファールブルの生前に出版されたのはそこまでだが、本書にはあと2章が追加されている。これは第11巻としてファールブルが書いていた原稿を、弟子のルグロが整理して「完全版昆虫記」に収録したものだという。その第23章は「ツチボタル」、第24章は「キャベツのアオムシ」である。この第10巻が出たのが1907年で、ファールブル84歳の時である。生前に出たこの巻も他の巻と同様に売れず、同じ年に後に弟子となるルグロが初めてアルマスを訪問しているが、ファールブルのあまりの困窮ぶりに驚いているという。

80歳を超えたファールブルは、目がよく見えないとか、夜行性の昆虫の観察はあまりできないとか、体力の限界をかこつ言を洩らしながら、相変わらず様々な工夫を凝らした上で、読み物として面白いものを書く。さすがに晩年ということで、回顧的な話がいろいろ出てくる。とくに、第19章「幼年時代の思い出」から最後の第22章「応用化学～さあ働こう」までの4章は、幼年時代から始まって、文部大臣のヴィクトール・デュリュイが訪ねてきて勲章を授与されるという晴れがましい一件に至るまで、自伝的な内容になっている。しかし、通して読んでくると、そのように過去を振り返る話も好ましく感じられる。

第10巻の最初に取り上げられる昆虫はミノタウロスセンチコガネで、地中深く穴を掘って巣穴とする特徴があるが、その巣穴を掘って確かめるのに、ファーブル一家が総出で協力する。とくに当時7-8歳だった四男ポールが、柔軟な身体を活かして1メートル50センチも掘り進め、巣穴の底に達する。ほかには「上」ではタマゾウムシ、ヒロムネウスバカミキリ、ウシエンマコガネなどが、「下」ではキンイロオサムシ、ミヤマクロバエなどが取り上げられる。これらは生態的に面白いので研究対象になっているが、一方ではファーブルの体力の衰えに伴って、家の内外で見つけやすいもの、家族に採集や観察を手伝ってもらいやすいもの、という選択理由もあるらしい。

長寿を全うしたファーブルは、よい人生を送ったとつくづく実感させられる。

David A.Sinclair, "Lifespan Why We Age - and Why We Don't Have To"

藤崎Zoom会で順に交代で話題提供することとなり、ぼくは当時読んでいたこの本を紹介すると宣言した。米国で出版される本は、例によってページ数が多いが、発表予定日には余裕のある時点で読み終わった。ただ、一般向けに易しく書かれた本ではあるが、遺伝子や分子生物学の基本的知識がこちらにないため、分かったようで分からない感じもあった。それでまだ駒場在職中に同僚の生物学教室の連中が出した教科書「理系総合のための生命科学」をパラパラ読ん

でいたのだが、たとえばこのSinclairの本のキーワードの一つである「エピゲノム」について、索引から引いても最後の方に1か所出てくるだけである。それで気がついたのだが、自分を買って持っていたのは2007年に出た第1版だが、その後改版が重ねられて最新は2020年に出た第5版であることが分かった。それで早速それをAmazonで買った。

著者のDavid A.Sinclairは、1969年生まれのオーストラリア人だが、ハーバード大学で教授をしている。お祖母さんはユダヤ系のハンガリー人で、1956年のハンガリー動乱のときに亡命して、息子すなわち著者の父親とともにオーストラリアに渡った。出自はフォン・ノイマンと通じるが、ノイマンは1930年代に米国に渡っていて、1957年2月に死んでいるから、時代としてはずれている。しかし、ハンガリー出身のユダヤ人に天才が多い、という系譜を感じさせる。

この本の主張は、「老化は病気である。治療が可能であり、また治療すべきである。治療によって、老化を遅らせ、止める、逆に戻すことができる。単に寿命を延ばすだけでなく、「健康寿命」、すなわち病や不具合なしで人生を延ばせる。」というものである。これだけ見るとトンデモ本の類かと思わせる。しかし、Sinclairは老齡学の分野で赫赫たる研究実績を挙げており、本書のそこかしこでもそれを誇る言説がある。

一貫しているのは、老化には根本的な原因があり、それを治療すれば健康寿命が大きく延びるということである。米国の老化に関わる予算は圧倒的にアルツハイマーに偏っているが、アルツハイマー、糖尿病、認知症、心臓病、骨粗しょう症、ガンなどにもぐら叩き的に対応してはだめで、老化現象を普遍的に説明する要因に対処しなければならないとする。その要因とは、「遺伝情報の喪失」である。

遺伝情報にはデジタル情報とアナログ情報の2種類がある。ゲノムがデジタルなのに対し、エピゲノムはアナログである。エピゲノムはDNA遺伝子の発現を制御する。このエピゲノムの正体の説明が本書ではあいまいで、それで前述の「理系総合のための生命科学第5版」やウィキペディアなどを見て少しは理解したつもりだが、まだピンとこないところもある。断片的に書くと、

- エピゲノムは「クロマチン」に蓄えられる。クロマチンは真核細胞内に存在するDNAとヒストンというタンパク質との複合体
- DNAは小さなタンパクの球であるヒストンの周りに巻き付けられている。
- ヒストンがアセチル化、リン酸化、メチル化などの化学修飾を受けることにより、どの遺伝子が発現し、また発現しないかという制御がなされる。
- ゲノムはコンピュータのようなもので、エピゲノムはソフトウェアのようなもの

- エピゲノムは時間的に変化する

といったところ。

長寿遺伝子と呼びうるものがいくつかあるが、Sinclair自身の研究もあるSirtuin（サーチュイン）遺伝子は、本書の中でも重要な位置づけを占める。この遺伝子は発現すると、サーチュインというタンパクを合成する。そして、飢餓やカロリー制限によって活性化される。つまり人類だけでなく哺乳類を含めた多くの生物の生存戦略に起源がある。赤ワインに多く含まれるレスベラトロール（ポリフェノールの一種）によっても活性化されるので、世で言われる赤ワイン善玉説は、ここから来ているらしい。その効果は、ヒストンからアセチル・タグを取り除くことにより、DNAのパッケージを変えるエピゲノムとしての働きによる。ネズミを使った実験で、サーチュインが活性化すると、DNAの修復の改善、記憶の向上、運動持久力の強化、肥満防止、などが起こることが知られているということである。

最後に著者が実践していることを紹介したら、やはりZoom会の参加者から一番の関心を招いた。それは次の通り。ただし、以下は、必ずしもすべて科学的に効果が実証されているものではないと、著者は警告している。

- 毎朝、1gのNMN、1gのレスベラトロール(resveratrol)、1gのメトフォルミン(metformin)を服用

- NMN (Nicotinamide mononucleotide) : サーチユインの補因子 (触媒活性を補助するもの)
- レズベラトロール : 赤ワイン, チョコレートやココア, アーモンドなどに含まれるポリフェノールの一種
- メトフォルミン : インシュリンの効果を良くすることで血糖値を下げる
- 1日分のビタミンDとK2および83mgのアスピリンを摂る
- 砂糖, パン, パスタをまずほとんど食べない.
- 40歳からデザートを食べるのをやめた. 味見以外は.

Paul Nurse, "What Is Life?: Understand Biology In Five Steps"

岩波新書で E.シュレーディンガーの「生命とは何か」(岡小天, 鎮目恭夫 訳)を読んだのは, 1963年で, 高1のときらしい. 同じタイトルの本書でも, シュレーディンガーの本のことは当然触れられていて, 厚顔にもタイトルはそれから盗んだと白状している. シュレーディンガーは, 熱力学第2法則にもかかわらず生命が代々受け継がれ秩序を保つ根拠を遺伝に求めているが, 本書では遺伝の仕組みを解明するだけでは生命とは何かという問題の答えは出てこない, という立場から書かれているという.

本書はとても短く, 簡潔である. タイトルが示すように全5章の構成で,

1. 細胞：生物学の原子
2. 遺伝子：時間のテスト
3. 自然淘汰による進化
4. 化学としての生命：カオスから秩序へ
5. 情報としての生命：全体として働き

となっている。全部で100ページ強しかない。

著者のPaul Nurseという人は、元王立協会 (the Royal Society) 会長で、2001年にノーベル生理学・医学賞を受けている。しかし、本書には次のような記述がある。

"I grew up in a working-class family; my father worked in a factory and my mother was a cleaner. My brothers and sister all left school when they were fifteen, so I was the only one who stayed on at school and, later, went on to university. I had a happy and well-supported, if somewhat old-fashioned, childhood. My parents were rather older than those of my friends, and I used to quip that it was like being brought up by my grandparents."

階級社会のイギリスでは、このような出身で大学の研究者になり、果ては王立協会の会長にまでなるのは珍しいだろう。しかし、さらに驚くのは、その後の次のような記述である。

"Many years later I applied for a 'Green Card' so I could take up residence in the USA and start my new job as President of the Rockefeller University, in New York. To my surprise, my application was rejected. The US Department of Homeland Security said it was because the version of the birth certificate I

had used all my life did not list the names of my parents. Irritated, I wrote off for the full version of my birth certificate. The shock came when I opened the envelope containing that new certificate. What it showed was that my parents were not my parents - they really were my grandparents. My mother was actually my sister. It turned out that she had got pregnant at seventeen and, since illegitimacy was considered rather shameful at that time, she had been sent to her aunt's home in Norwich, which is where I was born. When we returned to London, my grandmother, wanting to protect her daughter, pretended to be my mother, and brought me up. The great irony on discovering all this was that although I am a geneticist, I did not know my own genetics! In fact, because everyone who might have known has since died, I still don't know who my father is: there is just a dash on my birth certificate where his name should be."(pp.32-33)

この本を読んだのは、この間読んだ David A.Sinclair, "Lifespan Why We Age" から、生物学を改めて勉強しなければ、と思ったからである。そう思って「理系総合のための生命科学」の最新の第5版を購入したことはすでに書いたが、そのときにいろいろ検索してこの本の存在を知った。

トーマス・マン、川村二郎 訳「ブッデنبローグ家の人々」（河出書房新社「世界文学全集」第47巻）

昔読んだ新潮社版「世界文学全集」の「魔の山 I」に挿入されている月報に、北杜夫が「『魔の山』の思い出」という文章を寄せている。「魔の山」はぼくが東大にいた時の2010年に、東大新聞から「青春の一冊」の執筆を頼まれて、その一冊として取り上げた。こ

れはその後2013年に出版された「東大教師 青春の一冊」（信山社）にも採録されている。東大新聞に書いたときに全体を再読しており、この北杜夫の文章も思い出している。そこに旧制高校時代に初めて読んで、その後大学生になってから、さらに作家になってからも繰り返し読んだが、先年船に乗って半年ほどの航海をしたとき、「魔の山」を持って行って、一語一語、隅から隅まで読み通し、その面白さに改めて驚嘆した、と書いている。その北杜夫が書いた「楡家の人々」が「ブッデنبローグ家の人々」を下敷きにしていることは、よく知られている。

北杜夫が船による長期の航海で「魔の山」を読んだ話と、加藤周一が「読書術」で貨物船での航海中に読書するのがもっとも能率がよいと書いている話とは、ぼくの頭の中で結びついていて、どちらも1963-64年頃、読んでいるからだろう。加藤周一が北杜夫の話を聞いて書いたのかと思ったが、見直してみると加藤の本が1962年に出ていて、北の文章が載っている月報は1963年8月のものだから、少なくとも活字になったのは加藤の方が先である。

さて、川村訳の「ブッデنبローグ家の人々」のぼくが持っている版は1969年に出たものだが、神田神保町の「金子書店」というシールが貼られているので、古本を買ったものらしい。ただゾッキ本なのか、本としてはきれいである。これはこれまで何度か読もうとしたことがあったが、その度に挫折してきた。「失われた時を求め

て」を読み終わったので、同じように青春時代に読もうとした本という意味でこれを引っ張り出し、かなり時間をかけて読んだ。

ブッデنبローグ家の4代にわたる人々を描いているが、最初から最後まで通して登場し、言ってみれば主役の座を与えられているのは、ジャンの長女のトーニーである。しかし、彼女の人生はあまり明るいものではない。10代の夏、ある若者に恋をするが、父親のジャンからの許しは出ず、ジャンが勧める政略的な結婚を受け入れる。しかし、その結婚は夫の事業の失敗で破綻する。家に戻ったトーニーは、一家を継いでいる兄トーマスの勧める男と再婚するが、この結婚も相手の浮気で失敗に終わる。それでもブッデنبローグ家の歴史を引き継いでいることに誇りを感じて生きていくが、兄の事業も低迷し、下の兄クリスティアンはもともとずぼらで頼りにならず、一家は没落していく。そして最後はトーマスの息子で物語の始まりのヨハン・ブッデنبローグから数えると4代目のヨハン（ハノー）は、チフスで10代で死んでしまう。

この小説が出版されたのは1901年で、トーマス・マンが26歳のときである。プルーストの「スワン家の方へ」が出たのは1913年で12年後だが、1871年生まれのパルーストは、そのとき42歳である。マンは1975年生まれだから、プルーストと同時代人だが4歳若い。プルーストの世界ではブルジョアも出てくるが、貴族が中心である。マンの方は、もっぱらブルジョアの話だが、ドイツとフランスという国の違いも大きいだろう。とにかく、プルーストよりはるかに短

いとはいえ、20世紀初めの長大なフランスとドイツの小説を、続けて読んだ。

山本七平「近代の創造 ―渋沢栄一―の思想と行動―」（PHP研究所）

今年のNHKの大河ドラマの主人公は、渋沢栄一である。2024年度には1万円札の顔が渋沢になるということで、ちょっとしたブームである。山本七平のこの本は、1987年に出てすぐに買ったまま、積読になっていた。その間、山本は1991年に亡くなっている。渋沢ブームでその伝記の類は再刊されているようだが、この山本の本はそういう様子がない。

今年の3月2日の日記に、次のようなことを書いている。

「今年のNHK大河ドラマは渋沢栄一が主人公だが、タイにいた時に渋沢栄一の子孫がいたことを思い出した。昔のタイの日本人学校同窓会の名簿を見てみたら、お父さんが渋沢正一でアジア経済研究所勤め、子供は渋沢寿一でぼくより4学年下のようである。正一はネットで調べると、大正8年～昭和56年12月8日(1919-1981)、日本製鉄副社長、父、渋沢正雄。渋沢寿一は、
「澁澤 寿一（しぶさわ じゅいち、1952年 - ）は、日本の農学者、東京農業大学大学院修了の農学博士。NPO法人樹木環境ネットワーク協会（東京都新宿区）専務理事。明治初期に第一国立銀行を経営するなど、財界の大御所として活躍し、社会事業や教育にも尽力した渋沢栄一の曾孫である。石川島自動車製作所社長渋沢正雄の孫。正雅の長男・渋沢正一と植村甲午郎の

娘・和子の長男。国際協力事業団専門家としてパラグアイ国立農業試験場に派遣される。帰国後は長崎オランダ村、ハウステンボスの企画、建設、運営に携わる。渋谷事務所（東京都新宿区）代表として、日本・アジアの環境や地域、人づくり活動を実践してきた。」とある（Wikipedia）。だから、われわれがバンコックにいた時は、3歳から5歳ぐらいだったことになる。オフクロたちは「じゅじゅちゃん」と呼んでいた。農大で博士を取ったとは驚いた。農大でのオヤジとの接点はなかったのだろうか。」

なお、渋谷正雄は渋谷栄一の三男で、渋谷篤二、渋谷武之助の弟、渋谷秀雄の兄ということなので、渋谷栄一の直系の子孫だったわけだ。

この山本の本は500ページもあるが、明治6年の第一国立銀行設立のところで終わっている。渋谷自身が「雨夜譚」をはじめかなりの量の回想記を出しており、またそれを利用した伝記・評伝も膨大な量が出版されている。古いところでは幸田露伴の「澁澤栄一傳」が有名ならしい。山本のこの本も「雨夜譚」などから相当量の引用をしている。ただ、その引用は現代の読者にはあまり親切な仕方ではない。渋谷は江戸時代の教育を受けた人だから、その文章は「古文書のよみかた」に出てくるような文体と表記である。

大栗博司「重力とは何か -アインシュタインから超弦理論へ、宇宙の謎に迫る-」（幻冬舎新書）

大変丁寧に書かれた新書である。駒場のときは理物を目指したこともある自分としては、このような道に進む可能性もあったと思うと、やや複雑な気持ちになる。

.

「はじめに」に構成が、明確に述べられている。それだけでなく、章のタイトルが巧みにつけられていて、目次を見ただけで構成がよく分かる。それを引き写しておく、次の通り。

第1章 重力の七不思議

第2章 伸び縮みする時間と空間 — 特殊相対論の世界

第3章 重力はなぜ生じるのか — 一般相対論の世界

第4章 ブラックホールと宇宙の始まり — アインシュタイン理論の限界

第5章 猫は生きているのか 死んでいるのか — 量子力学の世界

第6章 宇宙玉ねぎの芯に迫る — 超弦理論の登場

第7章 ブラックホールに投げ込まれた本の運命 — 重力のホログラフィー原理

第8章 この世界の最も奥深い真実 — 超弦理論の可能性

本書は、あとがきにあるように「重力の七不思議から説き起こし、相対性理論と量子力学の大切なところをきちんと押さえ、さらに超弦理論の最新の発展やホログラフィー原理までを解説するという野心的なもの」である。しかも、「説明を簡単にするためにごまかさない」という自負を持って書かれている。今、この感想を書いているのは、読み終わってからだいぶ時間が経った後なので、肝心なこ

とはかなり忘れている．ということは，読んだときの理解も浅いものだったということだろう．結局，相対性理論も量子力学もブラックホールも，これまでいろいろ読んではきたが，ちゃんとは理解しないまま人生を終えることになりそうだ．それでもこのような本によってその一部を垣間見ることができたのは，ありがたいことだろう．

Don Norman, "The design of everyday things: Revised and expanded edition," Basic Books (Kindle version), 2013.

「ソフトウェア工学の基礎」の改訂版を今書いているが，そのインタフェース設計の節を書くために，このKindle版の本を購入して読んでみた．有名な旧版は1988年に出ているが，その25年後のこの改訂版が出ていたことを知らなかった．そもそも旧版についても植田さんが「情報」の教科書で引用していたことなどから間接的に知っていただけで，読んでいなかった．安村通晃さんたちが翻訳をしていることも，改めて知った．

「ソフトウェア工学の基礎」の17年ぶりの改訂版を書いているときに，この25年ぶりの改訂版を読んだのは，いろいろな意味で参考になった．実際に「第9章 設計技法」の「9.3 インタフェース設計」で，活用しただけでなく，旧版と改訂版を比べて書くという視点を意識する機会となった．

本の原稿にも書いたが、心理学者のJames J. Gibsonが造ったアフォーダンス(affordance)という語と概念は、この本の初版が出た1988年の時点ではすでにかなり知られてはいたが、Normanのこの本でさらに有名になった。アフォーダンスは動物が周囲の環境にある「もの」や他の動植物を知覚して、それが何をできるか、何に使えるかと認識するに際して、事物の方から動物に与える(afford)「意味」あるいは「価値」である。たとえば地面はものを置いたり支えたり、その上を歩いたり走ったりできるが、それが地面の持つアフォーダンスであるとする。その概念を人工的な設計物に適用して、たとえばドアの前面に横長のバーが付いていればドアは手前に引いて開ける、四角いプレートが付いていればそこを押して開ける、というアフォーダンスがあるという説明を、Normanがした。これはインタフェース設計の考え方として説得力があったのでよく知られるようになったが、その後、言葉の使い方が適切ではなかったとして、2013年版ではアフォーダンスはどのような動作が可能かを意味するものであり、人がその可能な動作を知るための「しるし」（たとえばドアの取っ手の形状）をアフォーダンスと呼ぶべきではないという注意を加えた。それではそのような「しるし」は何と呼べばよいかというと、NormanはFerdinand de Saussureの能記(signifier)という語をそこで導入している。ただ、インタフェース設計という観点からすると、どう操作するものかが外から直感的に分かることが重要なので、「誤った」アフォーダンスの使い方のほうが、意味がありそうである。それを「能記」と呼んだのでは、ピンと来ないかもしれない。

石沢麻依「貝に続く場所にて」（芥川賞）

この夏の芥川賞は2作の受賞ということで、久しぶりに「文芸春秋」を買って読んでみた。東日本大震災をテーマとし、場所はドイツのゲッティンゲンで、コロナ禍の現在という時点で書かれているが、それから想像されるようなドキュメンタリー風のリアリズムの濃い小説ではなく、非現実的で語り手の空想で組み立てられた話である。

津波で行方不明になったままの野宮という男が、語り手の住むゲッティンゲンを訪ねてくるので、駅に迎えに行くというところから話が始まる。野宮と「私」は東北地方の大学で同じ研究室にいたが、とくに親しかったわけではないらしい。時間的には震災の9年後という設定で、2020年らしい。だから駅に現れて言葉を交わし、その後、ゲッティンゲンに借りた家に暮らし始めてからも何度か接触がある野宮は、現実存在する人間ではない。初めは野宮だけがそういう人物として設定されているのかと思ったが、そのうちに出てくる登場人物や犬までも、みな野宮と同じような存在らしく思えてきた。

受賞者インタビュー記事の中で、ゲッティンゲンに行方不明の人物がやってくるという設定の理由づけを考えているとき、寺田寅彦の本が目にとまり、寺田寅彦がゲッティンゲンにいたことがあり、そこから夏目漱石に書簡を出していることが分かり、それがヒントになったという。巻末の参考文献に寺田寅彦の随筆とその書簡が挙げ

られており、さらにさらに高辻玲子という人の「ゲッティンゲンの余光 寺田寅彦と高辻亮一のドイツ留学」という本が挙げられている。さらに登場人物に「寺田氏」というのも出てくる。

李琴峰「彼岸花の咲く島」（芥川賞）

作者は1989年台湾生まれで、台湾大学卒業後に来日し、日本語で小説を書いた。

これは女の子2人、男の子1人を主人公とする青春小説である。しかし、ある面で石沢の小説と共通するのは、非現実的で作者の空想で作られ出された世界の話、という点である。

場所は沖縄付近を思わせる島で、そこでは日本語に似ているが少し違う「二ホン語」と「女語」が使われている。3人の中でも女の子の一人が中心人物だが、彼女は島の人間ではなく、どこからか流れ着いた者で、過去の記憶は失っている。彼女がしゃべるのは「ひのもとことば」で（記憶を失っていると言っても言葉は部分的に憶えているなど、記憶がまだらしい）、これは「女語」に近いということになっている。名前も分からないので「宇実」と呼ばれるようになる。漢字も知らないなので、なるべく易しい字を当て嵌めている。とにかくこのような「言語」の創作がこの作品の大きな魅力を作っていて、それは日本語を母国語としない作者の、きわめて意識的な小説の作り方だろう。

この島は、ノロという巫女集団が支配している。海の向こうにニライカナイという日本らしい国があり、宇美はそこから流れ着いたらしい。流れ着いたというよりは、難民を暗示させるような戦争か政治的紛争の結果、海に流されてたまたま生きながらえ、この島に漂着したらしい。ノロ集団のトップは大ノロである。大ノロによって宇美はノロになるべく訓練を受ける道を選べば、島に残ってよいと裁定される。なぜ女のノロが支配しているのか。なぜ歴史の物語を受け継ぐのが女だけなのか、という謎で結構物語を持たせている。最後にそれが解き明かされるが、それが拍子抜けだという評者がいた。小川洋子である。彼女は次のように言う。

「『彼岸花が咲く島』。前半の三人の少年少女たちのパワーに満ちた言語が交錯するあたり、小説世界を構築する意欲に満ちていて素晴らしい。このまま進んで、灰谷健次郎の訳したマイケル・ドリスの『朝の少女』のように終わったりしたらせつないなあ、などと思っていたら、後からびっくり仰天。語られる島の歴史が、あまりにマン・ヘイター的なのだ。」

男のぼくとして、必ずしもそこに不満を覚えたわけではないが、やはり作品全体を島の歴史の謎で持たしてきたにしては、結末が物足りない気はした。

Delia Owens, "Where the Crawdads Sing" (Kindle version)

そもそも、crawdadというのがザリガニのこととは知らなかったし、ザリガニはどんな鳴き声で鳴くのだろうか。American lobsterとcrawdad はまた違うものらしいが、アメリカ・ザリガニというどうしてもそちらを連想してしまう。

著者は米国の野生生物学者の女性で、これまで自然に関するノンフィクションの本は3冊出しているが、これが初めて書いた小説だという。本書は「ザリガニの鳴くところ」という題で翻訳されていて、2021年本屋大賞翻訳小説部門で第1位を取ったそうだ。このKindle版の原書は、その本屋大賞のニュースが出るだいぶ前に買っていたのだが、ニュースが出て思い出し、読み始めた。案外時間がかかった。

何かもとになる話があったのかもしれないが、かなり信じられないような設定である。舞台はノース・カロライナの湿地帯である。小説の書き出しが、

"Marsh is not swamp."

である。英和辞典でmarshを引くと、「沼地, 沼沢（地）, 湿地（bog, swamp）.[株式会社研究社 新英和大辞典第6版]」となっている。そこでswampを引くと、「沼沢地, 低湿地（bog, marsh）」。これではどう違うかが分からない。しかし、辞書のこの後のswampの説明に、「《通例水に浸っている低地で, 改良工事のない限り農耕に適さない》」とある。

別の辞書ではmarshの方に「雨の多い季節以外は水がないことがある」とあって、ぼんやりと違いが分かる。さらに本に次のような文がある。

"Then within the marsh, here and there, true swamp crawls into low-lying bogs, hidden in clammy forests. Swamp water is still and dark, having swallowed the light in its muddy throat."

とにかく、そのようなmarshで両親、5人兄弟と掘っ立て小屋で暮らしていた末娘のKyaが主人公である。ある日、母親が飲んだくれで暴力的な父親を逃れて、家を出て行ってしまふ。続いて、兄や姉たちも順々にいなくなってしまう。Kyaに一番近い、といっても7歳年上の兄Jodieが最後に残るが、結局、彼もいなくなる。Kyaは暴力的な父とともに残される。父はもともと不在がちだが、長いことどこかに行ってしまう。Kyaは機嫌のよいときの父が教えてくれたボートの操縦と釣りで、何とか生きていく。母親が失踪したのは1952年で、Kyaはそのとき6歳である。それと並行して1969年に発見されたChase Andrewsの溺死体をめぐる事件とが、それ以降交錯して語られる。

このmarshの自然や、その中で学校にも行かない野生児のKyaが生き延びただけでなく、沼でボートを操って釣りをしていたときに知り合った少し年上の男の子Tateから、文字を習い、詩や博物学に目覚めていく過程が、自然学者のDelia Owensの面目が発揮されて、巧みに描かれている。一方、この小説はミステリー仕立てになっている

て、Chaseは事故死したのか殺害されたのか、という謎を巡り、警察とChaseと偶然につき合いがあったKyaとの間で、緊張関係が生じた後、Kyaは逮捕される。Tateが都会の大学に行っている間、KyaにChaseが言い寄ったのだが、母親などの家の反対で別れたという経緯があった。しかし、裁判で弁護士が活躍して無罪となる。

最後にどんでん返しがあるが、ミステリーとしてはまあまあの水準ではあるものの、特段すごいものではない。しかし、marshという舞台と、Kyaという少女の造形は確かに魅力的である。

J. D. Salinger, "The Catcher in the Rye" (Kindle版)

TVのPrime Videoで「ライ麦畑の反逆児 ひとりぼっちのサリンジャー 2017」という映画を観た。この原作はケネス・スラウエンスキー『サリンジャー 生涯91年の真実』（晶文社刊）ということだが、それは入手していない。しかし、この映画で内容は十分に想像がつく。サリンジャーが91歳まで長生きしていたとは知らなかった。

"The Catcher in the Rye"は学生時代にペーパーバックで読んだはずなのに、なぜかその本が見つからない。Nine StoriesとFranny and Zooeyは本棚で見つかったのだが。昔のメモを見ると、これを読んだのが1970年のこととしてある。その根拠は今見つからないペーパーバックの刊行年か、自分の書き込みによるものかと思われるが、Nine Storiesの方に「1970.2.16 3.19読了」と書き込みがある。Nine

Storiesの方はThe Catcher in the Ryeより後に読んでいるはずなので、The Catcherを1970年に読んだというメモの方が怪しい。

庄司薫の「赤頭巾ちゃん気をつけて」が芥川賞を取ったのが1969年で、ぼくはそれを文藝春秋で読んだが、そのときにThe Catcher in the Ryeとよく似ているなと思った記憶がある。その記憶が正しいければ、Salingerの方を、1969年以前に読んでいるはずだ。

この本が見つからなくなってから、何度かAmazonで検索したが、出てこなかった。Salingerの意思で出版が停止されていたらしい。Salingerが死んで、著作権が遺族か誰かに移り、Kindle版がこうして出ていることに、最近気づいた。それで購入してさっそく読んだ。前に読んでから50年以上経つので、当然ほとんど忘れている。そもそも、タイトルの意味もまったく覚えていなかったが、Robert Burnsの詩に“If a body meet a body coming through the rye”というのがあり、それを主人公のHolden Caulfieldが覚え間違えたのか、意図的に変えたのか、meetをcatchに変えて使っているものである。その間違いは妹のPhoebeに指摘される、というストーリーになっている。

しかし、これほど世界でベストセラーになっただけのことはあり、青春小説としての魅力に溢れている。Holdenは東部の名門高校を放校になるが、そこにいたるまでも、それが決まった後も、自滅的な道を歩む。学校の先生との交渉にしても、女の子とのつき合いにし

ても、もっとうまくやれるところをぶち壊すようなことを言ってしまう。まだ17なのに酒や薬に手を出す。それでも人間として優しさもっていることを、Salingerはそれとなく伝える。

父親は弁護士で家は裕福だが、父親も母親も小説の中ではあまり登場せず、Holdenはあまり愛情を感じていないようである。しかし、対照的に兄弟に対しては深い愛情が示される。年の離れた兄は、ハリウッドで脚本家になっている。この兄はそれほど出てこないが、それなりに親しみを込めて語られている。弟のAllieは死んでしまっているが、とても美しい思い出が何度も語られる。妹のPhoebeはまだ子供で、小説の中でも登場するのが後の方だが、その終盤にきわめて大きな存在として描かれている。破滅的な道を歩む主人公に、どのような救いが来るのかがこの物語のポイントだが、それはPhoebeからもたらされる。彼女の描き方が、この小説の大きな魅力を作っていると言ってもよい。

中村隆英「明治大正史 上・下」（東京大学出版会）

中村の「昭和史」は、出てすぐの1994年に読んでいる。それが僕が東大に移った年だが、この中村という人も東大教養学部の統計学教室教授を長く勤めていたことを、この本の編者によるあとがきを読むまでは、気がついていなかった。1986年に定年退官しているので、重なるところはまったくないが、中村の経歴を見ると、1944年に東京都立第一商業学校、1948年に東京都立工業専門学校電気科を卒業した後、1952年に東京大学経済学部経済学科を卒業したとあ

る。都立一商は以前に住んでいた代官山コーポラスのすぐ近くである。商業学校を出た後、今度は工業学校に入り、さらに東大の経済を出たというのは、やはり戦中戦後の混乱期に青年時代を送ったということだろうか。

大佛次郎賞を得た「昭和史」と違って、この「明治大正史」は著者の死後に残された講義の口述記録から、弟子の原朗と阿部武司が編集して作られたもので、そのためところどころ重複があるなど、本としての完成度は高くない。ただその分、著者の肉声を聴くという趣がある。「昭和史」を読んだときは、中村が経済学者だということとはあまり認識しておらず、むしろ歴史家と思っていたと思う。本書も経済史というよりは政治史の色彩が強い。しかし、意外に多くのページが割かれているのは文化史の側面である。「上」の初めの方から司馬遼太郎の小説について言及されるのにやや驚いたが、このような歴史小説を材料にするだけでなく、河竹黙阿弥、三遊亭圓朝に始まり、九代目団十郎、五代目菊五郎など、文学や芝居の話がずいぶん取り上げられ、さらに少しではあるが美術や音楽についても触れられている。

昔、中央公論社の「世界の歴史」はオヤジが予約購入してくれたので定期的に各巻が届き、完結時には全巻が揃っていた。それを全部読んだわけではないが、多くの巻を高校時代に愛読した。その後出た「日本の歴史」の方は、ときどき思いついて買ったので、一部しかないし、形態も当初のハードカバーから文庫版などいろいろであ

る。その中で、手元にある巻20の井上清「明治維新」は中公バックスというペーパーバック版で、昭和47年11月10日という日付が入った第3版である。つまり大学院を出て、会社に入った年ということになる。これは読んだ記憶があり、とくに大久保利通の超人的な働きぶりに感心したことが印象に残っている。大久保利通の能力は恐るべきものだったと思うが、西郷隆盛と比べてまったく人気がない、大河ドラマの主人公になったこともないし、司馬遼太郎にしてもほかの小説家にしても、作品に取り上げたという話を聞かない。今の大河ドラマは渋沢栄一だが、そこでも大久保利通は登場するものの、どちらかと言えば悪役である。実際、渋沢栄一は大久保利通が嫌いだったらしい。

この中村の本でも、大久保利通はもちろん出てくるが、あまり大きく取り上げられていない印象がある。しかし、索引を見ると、さすがに「上」では西郷隆盛と同じくらい参照力所があり、伊藤博文よりむしろ多い。ただ、伊藤博文は「下」でも多くの参照があり、上下合わせると一番多くなる。中村は、伊藤博文、原敬、吉田茂を、明治以来の傑出した政治家の5本の指に必ず入るという言い方をしている。そしてあとの二人を誰にするかは、人によって違おうだろうという。それにしても、伊藤も原も大久保も暗殺されている。伊藤は朝鮮で殺されたが、明治以降の国内でも、まだ江戸時代までのような政治的紛争を個人の武力で解決するという手段が、かなり残っていたということになるだろうか。もちろん、その後の5.15や2.26

や、日清・日露以降の戦争、は江戸時代のめったにない斬り合いとは人殺しのスケールが違うが、

小泉武夫「酒の話」（講談社現代新書）

新聞の本の広告で小泉武夫の「日本酒の世界」という本が講談社学術文庫から出ているのを知って、どうせ古い本の焼き直しだろうとは思いつつ、Amazonで検索し、そのときにこの「酒の話」という本が新書で出ているのをAmazonの関連する本という宣伝で知ったので、この2冊を同時に購入した。ところが「日本酒の世界」の方は1992年に中公新書で出た「日本酒ルネッサンス」を改題し加筆修正したものとあって、それは前に買って読んでおり、この読書ノートにも感想を書いていたことが分かり、がっかりした。こちらの「酒の話」はさらに古く1982年12月に初刷が出た本だが、ロングセラーで今回買ったこの本の奥付では第30刷となっている。

古い本ではあるが、面白く読んだ。さすがに小泉は、専門の発酵学の知識を駆使するだけでなく、語りがうまく読ませるコツをつかんでいる。時期としては吟醸酒が市場に出てき始めたころの本だが、一応、吟醸酒やそれに使われる酒米の話も出てくる。取り上げられるのは日本酒だけでなく、ワイン、ビール、ウィスキー、ブランデー、紹興酒、ウォッカ、ジン、ラム、焼酎、泡盛などの世界の酒も、それなりに触れられている。日本におけるウィスキーの水割りという飲み方とか、日本の中華料理店でもっともよく飲まれているのがビールであることなどについて、皮肉たっぷりに語られる。脂

っこい中華に、水が主体のビールがいかに関わらないか、などの言辞である。

堀川恵子「永山則夫 封印された鑑定記録」（講談社文庫）

大佛次郎賞を取ったという記事を朝日新聞で見ると、堀川恵子という書き手の存在を知らなかった。新聞の書評や出版物の広告はかなりよく見ているはずなのに。しかもこの作家はこれまで、

- 第35回講談社ノンフィクション賞『死刑の基準「永山裁判」が遺したもの』
- 第10回新潮ドキュメント賞『裁かれた命 死刑囚から届いた手紙』
- 第4回いける本大賞『永山則夫 封印された鑑定記録』
- 第1回城山三郎賞（角川文化振興財団）『教誨師』
- 第15回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞・草の根民主主義部門大賞、第47回大宅壮一ノンフィクション賞『原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年』
- 第23回AICT演劇評論賞（国際演劇評論家協会日本センター）『戦禍に生きた演劇人たち 演出家・八田元夫と「桜隊」の悲劇』
- 第23回司馬遼太郎賞『狼の義 新 犬養木堂伝』
- 第48回大佛次郎賞『暁の宇品 陸軍船舶司令官たちのヒロシマ』

と、出す本，出す本が賞を受けているというすごい人である．それをこれまでなぜか，見逃していた．それで早速アマゾンで，単行本の「暁の宇品」と文庫になっている3冊を注文したが，それらがばらばらに届いた中で，最初に来たのがこれだったので早速読んだ．

永山則夫が4人を殺害したという事件が起きたのは，1968年である．意識していなかったが，これまでソフトウェア工学が誕生した年だとエッセイや本に自分は次のように書いてきた年だ．

「1968年は波乱の年であった．1月にチェコで「プラハの春」と呼ばれたドブチェクによる政治体制の自由化運動が始まったが，8月にはソ連につぶされた．4月にマーチン・ルーサー・キングが暗殺された．6月にロバート・ケネディが暗殺された．おりしもベトナム戦争のさなかで，米国ではコロンビア大学で戦争反対の学生が大学本部を占拠するなどの運動が拡大し，パリでは5月革命とも呼ばれる学生を中心とした反体制運動が過激化した．日本でも大学の旧体制解体を唱えて，東大では3月に安田講堂の占拠，7月に全共闘の結成があり，日大では5月に全共闘が組織された．東芝府中工場の3億円強奪事件が起こったのもこの年である．また明治維新は1868年であったから，奇しくも維新後100年という節目の年でもあった．」

永山事件も，これに加えるべきところである．1948年1月生まれのぼくは，1968年はちょうど20歳だった．永山則夫は1949年6月生まれで，事件を起こしたときはまだ19歳だった．上に並べたような時

代背景は、当然永山事件にも影響を与えている。とくに直接の影響が感じられるのは、地裁における裁判の状況で、永山に反体制という視点から共感した支援者団体ができ、裁判所前で騒ぎ、永山も法廷内で裁判長に抗議し、退廷を命じられるということが起こる（p.409）。しかしこのあたりの描写は、他の部分では明快な堀川の説明が、ややあいまいなように思われる。

とにかく堀川の手柄は、永山の日記を読み返して精神鑑定の問診を受けているときに、「テープを前にして」という表現があることに気づき、そのテープの存在を探し求めて精神鑑定を行った石川医師にたどり着き、石川がいずれ処分するつもりでいたテープ49本を、すべて託してもらったことにある。そこまでの経緯だけで十分スリリングであるが、石川鑑定書自体も他に例を見ないほど、量的に多く、内容も徹底的なものだということを発見する。精神鑑定は石川の前に別の専門家が行っていたが、それは鑑定にかけた期間も短く、通り一遍のものだった。この石川鑑定書の扱いが一審の死刑判決と二審の無期懲役判決で異なり、それによって判決結果の違いが生じるが、最高裁での差し戻し判決ではこの鑑定書について触れていない。一方、石川はこのあと、他の犯罪事件の精神鑑定の依頼をすべて断り、研究者としての道もやめて精神臨床医として生涯を送る。

堀川は取材が徹底しているだけでなく、ストーリーテリングの才能があって、この長い話を一気に読ませる力がある。

2020年

Anthony Horowitz, Magpie Murders (Kindle Version)

年末になると、「このミス」を始めとしたランキングが発表される。今年の結果を見たら、海外部門は2年連続でアンソニー・ホロヴィッツが1位になったという。それで思い出したが、去年の1位だったこの本のKindle版を、買ったまま読んでいなかった。それで暮れに読み始めた。

途中まで典型的なWhodunitの形をとる。舞台はイギリスの田舎町で、殺人が起こる。年寄りの個性的な探偵とその助手が登場する。殺されたのは町一番の金持ちで邸宅に住む貴族であり、周囲の町の住人すべてに殺人の動機がありそうに見える。登場人物はみな、簡潔な文章で、しかし鮮やかに描き出される。

ところが、ページ数にしてちょうど半分のところまで来ると、それまでの話は終局に近づいていたはずなのに、それが解決しないまま、一転して別の話が始まる。それまでは神の視点で語られていたのが、ここからはその推理小説を出版する出版社の編集者が語り手として登場し、彼女の視点から一人称で記述されていく。そこでようやく冒頭の形式がおかしかったことに気づく。タイトルページの後、目次に続いて本書の紹介のような文章がある。そしてまたMagpie Murdersというタイトルページが出るのだが、それにAtticus

Pund Mysteryというシリーズの1冊と思わせる副題がついていて、著者はAlan Conwayとなっている。そして後半はSuzan Ryelandという編集者が語り手だが、前半の著者であるAlan Conwayが死んだこと、そして前半の推理小説の最後の部分の原稿が失われていること、が告げられる。そこからConwayが死んだのは他殺か自殺か事故か、他殺としたら犯人は誰か、失われた原稿はどうなっていて、そこでの犯人は誰だったのか、という新たな謎解きで話が展開する。

この手の込んだ仕掛けは、大きな効果を生み出す。まず、前半の探偵のAtticus Pundは、話の初めからガンで余命いくばくもないことになっている。実際、後半では死んでしまったことが明かされるが、探偵が死んでしまうような推理小説は前代未聞である。これまでHorowitzの本を読んだことがなかったから、Atticus Pundという探偵もののシリーズが、Horowitzによってこれまでに書かれていたのだろうと思込められていたが、それ自体が架空で、ConwayがここでPundを死なせてしまうのは、大人気のこのシリーズをそろそろ終わりにしたいとの意図だったという話になっている。小説中の作家Conwayは本当は探偵小説などを書きたくはないのだが、売れる小説を世に出すために奥さんの勧めで書いてみたら、それが当たって学校教師を辞め作家になったものの、不本意にもその路線から抜け出すことができないでいる、という設定である。このように推理小説でありながら、推理小説論にもなるという構造を活かして、前半の小説についてたとえば登場人物の名前をどう付けているかとか、ア

ナグラムなどの言葉の遊びがどう仕掛けられているかといった、普通では書けないような種明かしも作品中に出てくる。

結局、失われたと思われた原稿の残りも出てきて、作家のConwayが死んだ謎も解明される。大変凝った構造ながら、ごく自然に物語の展開を追うことができるように書き上げたHorowitzの筆力は、大したものである。コナン・ドイルやアガサ・クリスティなどが小説中にも直接言及され、Horowitzが過去のそのような遺産をよく研究していることが分かるが、その伝統へのオマージュという性格を持ちながら、新たに独創的な物語を作り上げたという点が評価に値するだろう。

ジュール・ヴェルヌ，波多野完治 訳「十五少年漂流記」 （新潮文庫）

暮れに一人で昼食のために街に出た時、スマホも本も持って来なかったことに気づいた。何か料理を注文をしてそれが出てくるまでの間、読むものが何もないというのは恐怖である。それで本屋に寄った。逗子にも本屋というものはほとんど残っていない。池田通りと銀座通りの交差点近くの椿書房は、ビルの建て替えで一度閉じていた店を再開しているが、売り場面積は極めて小さく、雑誌と文庫ぐらいしか置いていない。とにかくそこに入って、なるべく薄い文庫本を探すことした結果、本書が目についた。少年ものだが、これまで読んだことがなかった。

原書は1888年に出たものだという。日本では1896年に森田思軒訳「十五少年漂流記」が出て、それ以来100年以上にわたり読み継がれている。しかし原題は直訳すれば「2か年の休暇」というもので、森田訳は英訳からの重訳らしいがその底本は不明らしい。波多野完治は1950年に渡米してワシントンの議会図書館で英訳本を見つけ、さらにハーバードの図書館に原著があることを知る。そのコピーも手に入れ、1951年に新訳を出したという。しかし、この波多野訳もかなり英訳に依ったもののようで、さらに児童文学の専門家の塚原亮一の助力が大きかったと言っている。面白いことに、日本ではこのようによく読まれている本だが、フランスでも英米でもあまり成功せず、忘れられた作品だという。「フランダースの犬」など明治以来日本で読まれている児童文学には、原作地や舞台となっている場所では忘れられているものが結構あるようだ。

話は、ニュージーランドのオークランドの学校の生徒たちが、夏休みでニュージーランド一周の船旅に出る前日の夜に船に乗り込んだが、船員たちは上陸して休んでいるときに艀綱が外れ、船が沖に流されることから始まる。そこへ嵐が来て帆柱は折れ、もともと航海術など持ち合わせない少年たちの力では、船が制御不能になる。大きく東に流されて、無人島に流れ着く。乗船している少年たちは8歳から13歳までの14人で、別に黒人のボーイが一人いる。島は南アメリカに近い太平洋上にあるらしいが、付近に島影や陸地らしきものは見えない。

それから2年，少年たちは工夫して生き延びる．作品中にも何度か参照される「ロビンソン・クルーソー」が明らかに下敷きになっている．2年で脱出に成功するのは最初から定められた約束事のようにだが，それが謀反を起こして商船を強奪し，船主夫妻や船長，一等航海士を殺した悪漢の水夫たちのボートが，島に漂着することをきっかけにしているのはやや意外だった．そこから少年たちが悪漢を銃などでやっつけ，悪漢たちが乗ってきた壊れたボートを修理し，近くの群島を目指して海に漕ぎ出したところで，折よくオーストラリアに向かう汽船に出会って救助される．悪漢に工夫して立ち向かい勝つところなどは，いかにも少年向きの冒険物語として作られている感じがする．

波多野完治の「文章心理学入門」は，多分高校の時に読んだと思うが本箱には見つからない．と思ったら，二重に置いてある文庫本の棚から，昭和39年6月30日の18刷が出てきた．高校2年生のときだ．これは通読したはずである．

芥川龍之介「アグニの神，上海游記，長江游記，桃太郎」 (芥川龍之介全集 Kindle版)

年末の30日にNHKで「ストレンジャー～上海の芥川龍之介～」というドラマが放送された．1921年に大阪毎日新聞の特派員として上海を訪れた芥川を，ドラマ化したものである．その時代の上海をセットで作ったのかと思ったら，ほとんどはロケで撮ったという．映像がきわめて美しい．

元となっているものの一つは「上海游記」である。また、「アグニの神」は芥川の幻想のような形で織り込まれている。それで関連する作品をKindle版で探して読んでみた。

中学2年生の頃に、「日本現代文学全集・講談社版 56 芥川龍之介集」を買って読んでいる。昭和35年発行のものである。文学全集の一冊といってもA5判で約500ページあって、芥川の主要な作品はほぼ収められている。その目次に、読んだ作品は鉛筆で小さな丸を付けているが、ほとんどすべてに丸がついている。「アグニの神」も入っていて丸がついているが、まったく記憶にはなかった。「上海游記」「長江游記」「桃太郎」は今回、Kindle版（青空文庫）で初めて読んだ。ただ、「上海游記」は出版されたときは「江南游記」と合わせて一冊になっていて、NHKドラマではおそらく「江南游記」の内容も利用されているのだろうが、Kindle版の全集にはそれが収められていない。講談社文芸文庫から「上海游記・江南游記」が出ているが、アマゾンで見ると中古で4,600円より、となっている。後で青空文庫のサイトを見てみたら、「江南游記」は「作業中の作品」リストに載っていた。

芥川は生涯、欧米を訪れていない。海外に出かけたのも、この中国旅行だけらしい。ただ、4か月いたので滞在期間は短くはない。1921年の3月にまず上海に行き、そのあと江南、長江、武漢、北京などを訪れて、7月に帰国している、上海を通じて初めてヨーロッパに接したことになるが、その気持ちは屈折している。たとえば、

第12章は「西洋」と題されている。この章は問答形式で書かれているが、次のようなところがある。フランス公園などの西洋式公園について、

「だが格別日本よりも、進歩しているとは思わないね。唯此処の公園は、西洋式だと云うだけじゃないか？ 何も西洋式になりさえすれば、進歩したと云う訣でもあるまいし。」

そして、最後に

「問。すると君は上海の西洋には、全然興味を感じないのかい？ 答。いや、大いに感じているのだ。上海は君の云う通り、兎に角一面では西洋だからね。善かれ悪かれ西洋を見るのは、面白い事に違いないじゃないか？ 唯此処の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり場違いのような気がするのだ。」

このように問答形式にしていること自体に、屈折したものを感じる。さらに、芥川は英語の読み書きについては秀才だったろうが、会話はどうだったろうか。たとえば、

「私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしゃべるのが、愉快なような心もちになった。次手にもう一つ断って置くが、私が彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからじゃない。」

と書いている。前に、堀田善衛の「インドで考えたこと」の感想の中で、

「おかしいのは、堀田はフランス語は当然得意なのだろうと思っていたが、「これ（北ヴェトナムの代表団との話合い）には甚だ難渋した。私のフランス語は、喋るようにはまったく出来ていないからである。仕方がない、蛮勇をふるって冠詞はぜんぶはずしてしまい、女性、男性ぬきの奇々怪々なるフランス語で打合せをした。」(p.117) というところ。」

と書いたことを思い出した。さらに中国語については、

「だから私は車屋さえ見れば、忽悪魔払いの呪文のように、不要不要を連発した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣欣然と、この言葉を車屋へ抛りつけたか、その間の消息がわからない読者は、きっと一度も外国語を習った経験がないに違いない。」

と書いている。

毎日新聞からの派遣ということもあるのだろうが、上海で何人か政治家、革命家に会っている。主なところは章炳麟（孫文とともに革命を起こした人物）、鄭孝胥（清帝国の遺臣）、李人傑（東京大学出身の社会主義者）である。しかし、いずれの会見記も、あまり内容がない。まずそれぞれの人物の背景説明が、最小限のものでしか

ない。やはり芥川は文人で、政治・経済への関心は薄いということだろう。たとえば

「勿論私も臆面なしに、新借款団の成立以後、日本に対する支那の輿論はとか何とか、柄にもない事を弁じ立てた。一と云うと甚不真面目らしいが、その時は何も出たらめに、そんな事を饒舌っていたのではない。私自身では大真面目に、自説を披露していたのである。が、今になって考えて見ると、どうもその時の私は、多少正気ではなかったらしい。尤もこの逆上の原因は、私の軽薄な根性の外にも、確に現代の支那その物が、一半の責を負うべきものである。もし嘘だと思ったら、誰でも支那へ行って見るが好い。必一月という内には、妙に政治を論じたい気がして来る。あれは現代の支那の空気が、二十年来の政治問題を孕んでいるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帯を経めぐる間、容易にこの熱がさめなかった。そうして誰も頼まないのに、芸術なぞよりは数段下等な政治の事ばかり考えていた。」

この「芸術なぞよりは数段下等な政治」という句に、はからずも本音が表れている。そして芥川が弁じたてたという自説は、この「游記」には述べられていない。

この1921年という年は、中国共産党が結成された年である。「游記」で李人傑と呼ばれているのは、「李漢傑」のこのように、共

産党結成の集まりは彼の家で行われたとされており、NHKのドラマではその場面が使われている。ただ、その結成の会合がなされたのは7月で、芥川すでに上海を離れているので、「上海游記」にはそのことは書かれていない。

1921年（大正10年）は、1937年の盧溝橋事件を起点とする日中戦争よりはかなり前だが、1915年の対華21カ条要求よりは後である。「游記」の中で「排日」という語が出てくるのは、次の1か所である。

「確か雅叙園の局票には、隅に毋忘国恥と、排日の気焰を挙げていたが、此処のには幸いそんな句は見えない。」（「南国の美人（上）」）

ただ、「桃太郎」がドラマで使われているのは、日本の中国侵略との連想からだろう。ドラマでは、章炳麟が桃太郎が嫌いだと言ったとして織り込まれている。

またドラマでは、「上海游記」にはない男娼のルールーというのが登場し、それを演じた中国人の俳優のよさもあって、ストーリーの中心の位置を占めていた。さらに、芥川が日本において付きまとわれている女の話も、ドラマの脚本家が巧みに挿入したもののようだが、これは芥川のいずれかの作品にヒントがあるのだろうか。あるいは何らかの実話に基づいているのだろうか。

「上海游記」は作品として失敗作だろう。新聞に載せる旅行記なので、芥川作品としては比較的長いが（皮肉なことに、最近の芥川賞作品はみな中編で、芥川のほとんどの作品よりはるかに長い）、やはり芥川には持続力がないようで、問答形式や書簡形式を混ぜたりしているのは、変化をつけるための工夫というよりは、苦し紛れという感じすらする。芥川はとくにこの旅行以降次第に心身の健康を乱したようだが、その兆候は「上海游記」に、またさらにはっきりと「長江游記」に表れている。全体に不機嫌であり、「支那」に対しての感情的な悪口が目立つ。

Anthony Horowitz, "The Sentence is Death" (Kindle Version)

去年の「このミス」によって、その1年前に買ったMagpie Murdersのことを思い出して読んで、それが面白かったので去年の「このミス」トップだと思ってこれを買って読んだのだが、実はこれはその後に出たもので、まだ翻訳されてもないらしいことが読んだ後でわかった。

Magpie Murdersでは、小説の世界とそれを書いて出版する世界とを並行させるという手法を見事に使ったわけだが、同じ方法をまた使うわけにもいかないから、この小説ではそのような鮮やかな仕掛けは出てこない。それだけにかえて正統的なWhodunitとなっているともいえる。今度の探偵はDaniel Hawthorneという名前で、やはり変わり者である。しかし、これが去年の「このミス」トップの"The

Word Is Murder"で登場した探偵で、本作はそのHawthorneものの2作目ということらしい。ワトソン役は著者のAnthony Horowitz本人が務めるという体裁で、本書の語り手でもある。だから名前もHawthorneからTony、つまりAnthonyと呼ばれている。さらにHorowitzがテレビ局用のミステリーもののシリーズFoyle's Warの脚本を書き、奥さんのJill Greenがプロデューサーとして番組制作をしているその撮影現場が冒頭に出てくるだけでなく、物語全体の進行もこのドラマ制作に終始関わってくる。Foyle's Warというのは実際に制作放送されたヒットシリーズであり、奥さんのJill Greenも本名である。前の探偵Pondは1回で死んでしまったが、このHawthorneシリーズはHorowitzと奥さんなどが実名で出てくるところが、仕掛けといえは仕掛けらしい。

やはり殺人事件が起き、また関連する別の人物が、列車にひかれて死ぬが、それが突き落とされた他殺なのか、自殺なのか事故なのか分からない、という謎の構造は、前回とよく似ている。ワトソン役の語り手が、自分ではそれを解決したと思うが、実は犯人は別にいるという展開はシャーロックホームズを踏襲しているが、作品の中でもシャーロックホームズへの言及は何度もある。Horowitz自身もコナンドイル財団の正式な委託を受けて、The House of Silk (2011)とMoriarty (2014)というシャーロックホームズものの作品も出しているという。

相変わらず登場人物の描き方の手際はよく、筋の展開も、もちろん作り物という臭いは強いが、それを約束事として楽しめばよいと思えば、まあ受け入れられる。ただ、どの人物も自分に都合が悪いことを、いったんは抵抗しながらも結局はペラペラしゃべるのは、あまりに非現実的、という感じはする。

日系の女流作家Akira Annoというのが重要な登場人物の一人だが、日本人から見ると女でAkiraはおかしい。しかし、小説の登場人物として出てくる日本人の名前が、おかしいと思うことはときどきある。たとえば、Philip K. Dick, "The Man in the High Castle" がそうだった。

YorkshireにHawthorneと語り手が出かけたとき、Mike Carlyleという男が出てくる。Hawthorneの昔の知り合いらしく呼びかけてくるが、Hawthorne知らないと言い張る。どうもHawthorneは昔Yorkshireで何かあり、その過去に触れたくないらしい。そのあとの人物について語り手は多少調べたりするが、その謎は解決しないまま終わる。これはHawthorneシリーズがまだ続くことを意味し、続編への伏線なのだろう。実際、この作品の中で、語り手は出版社とHawthorneを主人公とした物語を3冊出す契約をしている、という設定になっている。

**マルセル・ブルースト、鈴木道彦訳「失われた時を求めて
第三篇 ゲルマントの方 I,II」（集英社文庫）**

去年「スワン家の方へ」の感想を書いたとき、「この文庫の1の解説を松浦寿輝（ひさき）が、2の解説を工藤庸子が書いている。」と書いたが、よく見たら各巻の巻末にあるのは「解説」ではなくて「エッセイ」と題されているものだった。「ゲルマントの方」のIの「エッセイ」は、鈴木和成が書いている。「ゲルマントという主題」と題して、この小説には一つの主題の裏に別の重要な主題が隠され、主題が二重、三重になって同時進行することが述べられている。また、プルーストにおける恋愛はその対象が身代わり可能で、「すべての恋人が他の人の代役としてあらわれてくる」というのは、なるほどと感心させられる。

しかしそれより驚くのは、四方田犬彦という人がIIの巻末に」を書いている「エッセイ」である。こちらは「わが友ブロック」という題だが、いきなり

「金山大吉の家のやつらはねえ、そりゃあの事件については巧妙にけっしてふれようとしないけれど、朝鮮人ですからねえ、むしろ心の底では北朝鮮派ですよ。朝鮮人のいんちきをあばくためにはこれをもっと活用しなければならない。」

と始まるので面食らわされる。こう引用するだけでもはばかれる気がする。すぐに種明かしがされ、これはプルーストの中のドレーフェス事件をめぐる一節をほんのわずかに書き替えたパロディーだという。「差別をする側の修辞と論理は、洋の東西を問わずほとん

ど同じだ」ということを示すために作ったのだという。そしてヨーロッパにおけるユダヤ人問題が議論される。

そして次のような考えを述べるのだが、これにはなるほどそうかもしれないと思わせるところがある。

「「失われた時を求めて」という長編小説について、わたしはどうしてもある大胆な考えを抱いてしまわざるをえない。ひょっとしたらこれは、同性愛者でありユダヤ系でもあった作者が、もし自分とほとんど等身大の人物が同時代にいて、同性愛者でもなく、またユダヤ人でもなかったとしたらと仮定して執筆した作品ではなかっただろうか。」

このエッセイのタイトルになっているブロックは重要な登場人物でユダヤ人だが、出てくるどの場面でもよく描かれていない。品が悪く意地も悪い、というキャラクターである。そもそもブロックがどうして「私」の親友となったのか、どういう出会いがあり、親友という以上は語り手はよい面を感じたことがあったはずだが、それが何なのか、どこにも書かれていない。あるいは読み落としているのだろうか。その意味ではサン・ルーにしても、こちらは親友だというのはよく分かるが、どうして知り合ったのかあまり印象に残っていない。二人とも「花咲く乙女たちのかげに」で登場したはずであるが。

Anthony Horowitz, "The Word is Murder" (Kindle Version)

読む順序が逆になったが、これがHawthorneものの第一作である。やはりこちらの方が第二作より出来がよい。

しかし、Magpie Murdersでも、このThe Word is Murderでも、また次のThe Sentence is Deathでも、最後に語り手が犯人から攻撃を受けて重傷を負うというパターンが繰り返されるのは、どういうわけなのだろうか。

この話でもHorowitz本人が出てくるだけでなく、実際の自分の仕事や生活に関わる話が出てくる。どこまでがフィクションでどこまでが実際の話なのか、判然としない。たとえばテレビシリーズFoyle's Warについては16年にわたって22話を作っており、今はもう制作していないという話が出てくる。ただ、次の本The Sentence is Deathでは冒頭のシーンがFoyle's Warの新しいシリーズの撮影現場になっていて、22話で終わったわけではなく続きが作られたことが分かる。また、Steven Spielberg と Peter Jackson が登場する。それはTintinの脚本をHorowitzが書いて、Spielberg とJacksonが映画化するという企画の相談のためである。JacksonはTolkienのRingやHobbitを映画化した人である。実際、Spielberg とJacksonは2011年にThe Adventures of Tintinという映画を作っており、その続編の脚本をHorowitzが書いて、Spielberg とJacksonが映画化するという話が事実

あったようだ。ただ、何らかの事情でその話は立ち消えか、少なくとも中断の状態にあるらしい。

本書の特徴はこのように作者を登場人物として用いて、自分の書いている小説についての議論を、小説の中で展開しているところにある。とくに最終の第24章では、この本は事実を元にして書いているので、これまで自分が書いてきたフィクションとは書き方が違うということを述べている。しかし、その「事実を元にして書いている」ということ自体がフィクションであるわけで、読者としてはそのような虚構の上での虚構というしかけを楽しめばよいことになる。テレビ番組制作で活躍してきたHorwitzは、実に多才である。

Steven Pinker, "Enlightenment Now: The Case for Reason, Science, Humanism, and Progress" (Kindle Version)

この本は2018年に出ているのだが、例によって翻訳が出版されるまで気がつかず、Kindle版の購入が遅れた。さらに前作のThe Better Angels of Our Natureも長かったが（推定844 ページ）、これも負けずに長く（推定576 ページ）、読むのに時間がかかった。時間がかかったのは長さだけではなく、文章に難しいところがあるせいでもある。Pinkerの文体は決して難解ではなく、その論理の展開はもちろんきわめて明快である。しかし、さすがに言語学者だけあって語彙が豊かであり、こちらが知らない言葉や言い回しがよく出てくる。Kindle端末をなくしてからはおっぱらiPadで読んでいるが、

Kindle Readerを使えば別にKindle端末と機能的に変わらない。最初のうち、多分ソフトウェアに問題があって単語を長押しして辞書を引いたときに、そこからさらに「全文表示」を押してもうまく表示されないことがしばらく続いたが、あるとき突然その症状が直った。また、辞書に該当語なしの場合も、WikipediaやGoogleが自動的に検索可能になるので、大体の場合は何とかそれらしい意味にたどり着ける。便利な世の中になったものだ。

内容はタイトルが表すとおりである。理性、科学、ヒューマニズム、進歩という意味での「啓蒙主義」が、現在こそいかに重要かということを、Pinkerの持つ思考力、文献検索力と読み込む力、弛まぬ表現力を駆使して、これでもかこれでもかと論じ切った労作である。

しかし、すごい本である。前作に続けてよくこんな本が書けるものだ。日本人にはとてもこのような本を書くエネルギー、執着力、粘り強さがないと言ってしまうのは、単純に過ぎるかもしれない。本の長さで言えば小熊英二も負けていないし、精神の向かい方も似ているところはある。しかし、Pinkerもやはりユダヤ系であることを考えると、ユダヤ人の知的能力には驚嘆せざるをえない。自分の専門分野の計算機科学やソフトウェア工学でも、ユダヤ系の学者の研究の強靱さと層の厚さをつくづく実感してきた。最近、2003-04に在外研究でヨーロッパに5か月滞在した時の記録を「ロンドン・ミラノ滞在記」としてまとめたが、そこでも登場するユダヤ系研究者

の存在感が強烈である。PinkerはHarariの本をあまり直接には引用しないが、この両者が互いに影響し合っているのは明らかだ。とくに本書では無神論、あるいは宗教の害が明示的に論じられているが、その主張はHarariとほぼ重なる。この本への称賛の声が出版社による宣伝として冒頭に載せられているが、そこにHarariも一文を寄せている。しかし、本書の中でHarariを参照しているのは、13章のテロリズムについてのところだけで、意外と少ない。逆にHarariの本でもPinkerを思ったほど引用していない、21 Lessonsでは0、Homo Deusでは1か所、Homo Sapienceではわずかに注で1か所という具合である。

その宗教観について、Harariの本の書評で佐藤優がとんちんかんなことを言っていることは前に書いたが、このPinkerの書評にも同じようなものを見つけた。日経の2/1の書評欄である。

21世紀の啓蒙（上・下） スティーブン・ピンカー著 将来の世代に向けた楽観論 2020/2/1付

少子高齢化の加速や所得格差の拡大などによって、多くの国で社会がどんどん不安定になっている。政治家はポピュリズム（大衆迎合主義）へと走って国内外の分断をあおり、国際経済のブロック化と相まって、世界は破綻へと進んでいる。

そうした見方が多くの支持を集める時代に、この本は「わたしたちは史上最良の時代を生きている」と説く。医学の進歩で

人々は健康になり、危惧された食糧不足にもならず、犯罪は減少し、貧困も劇的に減ったと強調する。単なる希望的観測ではないことを証明するため、さまざまなデータを示す。

著者はカナダ出身の心理学者で、ハーバード大やスタンフォード大で教えてきた。楽観論の背景にあるのは、知識を身につけ、理性的にものを考えていけば、あらゆる困難を克服できるという信念だ。宗教改革や産業革命を経て、近代国家の基盤となった啓蒙主義を現代によみがえらせようとしており、これからの世界を担う世代に向けて書かれている。

宗教よりも科学を尊ぶべきだとの主張は宗教的な縛りが少ない日本の読者には違和感がないだろう。ただ、イスラム教を非科学的な思考の一例とするなど、著者は無意識にキリスト教的なものの考えに立脚していると感じさせる面もある。橋明美・坂田雪子訳。（草思社・各2500円）

署名がないので記者が書いているのだろうか。どこをどう読めば「著者は無意識にキリスト教的なものの考えに立脚していると感じさせる」という感想が出てくるものか、まったく不可解である。あれだけ十字軍、宗教戦争、異端審問、魔女狩りなど、キリスト教の影響によりいかに非人道的なことが行われてきたかということが繰り返し述べられているのに。しかも、60%のアメリカ人が自分は宗教を信じていると答える国において（カナダ人は46%、フランス人

は37%、スウェーデン人は29%、第23章、p.436）、こういう指摘をすることにいかに勇気がいるか、ということを想像しないのだろうか。ただし、このような感想が生まれる心理には、佐藤優と相通じるものがありそうだ。佐藤は自身の宗教心から言っているらしいところは、違いうだろうが。

前作のThe Better Angels of Our Natureが出たのは2012年で、まだオバマ大統領の時代である。この本は2018年に出て、その間にトランプが登場した。本書を準備中の期間に予稿を読んだ人から、進歩を論じた各章の最後に、「しかし、これらの進歩は、もしドナルド・トランプが勝ったら阻害されるだろう」との注意書きを付けるように、忠告されたという(p.334)。しかし、Pinkerはそれに動じず、TrumpやBrexitやヨーロッパなどで起きたポピュリズムの動きのさなかで、本書を出版した。それは本書に寄せられている推薦文の中で、ワシントンポストの多分書評として載ったCaroline Wintererの文章にあるように、ある意味で絶好のタイミングだったとも言える。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第6巻上・下）」（集英社）

全10巻の昆虫記もいよいよ後半に入った。奥本の翻訳はいよいよ冴えをましている。原語ではどのような言葉が使われているのか分からないし、分かったところでそのニュアンスはとても感じ取れないが、擬態語をうまく使っているのに感心する。たとえば

「たくさんの毛虫の行列が巣から出てきて、下の砂の上をもくもくと歩いている。」（下，p.252）

このすぐあとには、より平凡ではあるが「ぎくしゃくと」や「ぶるぶると」などが続出する。

訳注も相変わらず丁寧である。たとえばマツノキョウレツケムシに天気の予知能力があるという話のところで、低気圧とは何かから始まり、当時からどんな気圧計が使われてきたかや、気圧の単位として使われた水銀柱の高さ（ミリメートル）とヘクトパスカルの関係まで書いてある。どこかに湿度計の解説もあったと思う。

最初はまた糞虫が取り上げられる。アシナガタマオシコガネとツキガタダイコクコガネである。どちらも子育てに父親の虫が協力するところが、昆虫では珍しいという。それからモンシデムシというのが出てきて、これはモグラとかトリとかネズミとかヘビの死骸が出ると、直ちに出勤して地中に埋める。似たように死骸に群がるヒラタシデムシやカツオブシムシはそれを食べつくして無害化するが、アシナガタマオシコガネとツキガタダイコクコガネはそれを地中に埋めて孵化した子供の餌にするのだという。いずれにせよ、糞虫やシデムシのおかげで、野原は見た目もきれいにまた清潔に保たれるのだそうで、このことは前の巻でも触れられていたが、具体的にシデムシが取り上げられたのはこの巻が初めてである。庭や野山に動

物の死骸を見ることがないのは不思議だと思っていたが、こういう虫たちがいることを初めて知った。

このあとは、キリギリスの仲間とコオロギの仲間が続けて取り上げられる。とくに細かく観察されるのは、鳴く仕組みである。セミについても音を出す装置が調べられていたが、キリギリスは前翅の左右をこすって音を出す。前翅の左と右は対称でまったく同じ形状をしているのに、例外なく左が弓の役割、右が弦の役割をし、左が右の上に重なる。ファールはこの右と左の役割を変えようと、幼虫のときから手を加えて重なり方が逆になるようにいろいろ工夫するが、いざとなると結局元に戻ってしまう。

もう一つ詳しく語られるのは、交尾の方法である。キリギリスやコオロギの仲間では、雄は精子の入った精包という大きな乳白色の塊を排出して、雌の産卵管の根元にくっつける。それで卵が受精するのだが、そのあと雌は精包を時間をかけてすべて食べつくすのだそうだ。

しかし、この巻で第18章から23章にかけての6章を費やして詳しく論じられるのは、マツノギョウレツケムシというガの幼虫である。これは松の葉を食い荒らす害虫の一種だが、日本のマツクイムシとは別種である。奥本の訳注には書かれていないが、そもそもマツクイムシとはマツノマダラカミキリというカミキリムシで、しかも松に被害を与えるのは、この虫に寄生するマツノザイセンチュウとい

う別の虫だそうである。寄生するというより、マツノマダラカミキリの体に付いて、松から松に運んでもらうらしい。ファールブルに出てくるマツノギョウレツケムシは松葉を食って被害を与えるが、マツノザイセンチュウは木の幹を食い荒らすらしい。

マツノギョウレツケムシは日本にはいないらしいが、松葉だけを食料とし、また松葉の茂みに巣を作ってそこで蛹となり羽化する、という特殊な虫らしい。ファールブルがとくにこの虫について多くのページを割いているのは、一つにはその集団行動が面白いからである。この虫は夜行性で、夜歩き回る時に行列を作る。行列の先頭に立つ虫は偶然決まるらしいが、道を探ってどこに行くかを決めるのは、もっぱらこの先頭の虫（本書では「隊長」と呼ばれる）で、後の虫は前の虫のお尻にひたすら付いて歩く。そのときに、どの虫も細い糸を出すのでそれで道が作られる。それが巣に戻るときに役立つ。

前の毛虫に付いて歩くという習性により、たまに何かの理由で行列が2つに分かれたりしても、そこで新しくできた行列の先頭が隊長役を務めるだけで、それぞれの行列が独立して動いていく。そこで数理的な思考をするファールブルは、先頭が行列の最後尾にくっついたらどうなるかと考える。自然環境では起こらないようなので、ファールブルは人為的に周回路を作ろうとする。しかしそれが偶然できる。鉢の上の縁の周りを行列が進みだしたので、それをファールブルが観察していると、先頭がぐるっと1周して終わりに付いた。そう

して円が閉じられると、毛虫たちは食事もとらずに同じ道を歩き続け、何と7日間歩き続けて8日目ようやく鉢の外側に降りてきて巣に戻ったという。この話は昆虫記の中でもやはり有名らしく、サン・レオンにあるファールブルの生家は現在博物館になっているそうだが、そこに銅像が建てられていて、それはファールブルがマツノギョウレツケムシが鉢の縁を周回しているところを観察しているのを、像にしたものである。

もう一つ、マツノギョウレツケムシに関しては、その毒についても多くが語られる。毛虫の触ると痒くなったり腫れ上がったりすることがあるが、実はそのような毒を持つ毛虫はあまり多くないという。それでファールブルは自分の腕を使って、いろいろ実験をする。まず、毛が針のように皮膚を刺して毒を注入するわけではなく、毛の先についた化学物質に触れることで炎症が生じることを確かめる。次にその化学物質は、毛虫の蛹や巣の中のものを処理して溶解した液から、濃縮して取り出すことができることを確かめる。またそれが食べたものの未消化成分ではなく、毛虫の体内で作られた老廃物であることを確かめる。続いて、もしそうだとすると、別にマツノギョウレツケムシでなくてもさまざまな昆虫の体内から排出される老廃物に、そのような成分が含まれているのではないかとして、溶解、濃縮、塗布という手順をいろいろ試す。実験は「成功」するが、そのたびにファールブルは自分の腕に1週間程度のただれと痛みを抱え、その後も皮膚に跡が残る。

進化論に反対するファールは生物の長い歴史を知らないのかと思っていたが、さすがにたとえば石炭紀という時代があって、そのころの昆虫が化石として残っているといった知識は持っている（たとえば上, p.295）。そういう古代の昆虫と現代の昆虫との関係をどう捉えていたのかは、あまり語っていない。

折口信夫「死者の書」「山越し阿弥陀像の画因」（Kindle版 折口信夫全集）

昨年、「大嘗祭の本義」を読んだときに、それ以前に「死者の書」を読みかけてやめたと書いている。今回読む気になったのは、日経新聞の日曜版でThe Styleという少し上質の紙を使い、中身もなかなか工夫されているものがあるが、その3/29版から4/12までの3回にわたって、「「死者の書」の謎を探る」という記事が載ったのを読んだからである。1か月という掲載期間を過ぎたので、少なくともこの第1回の分が今は見えず、その内容を追えないが。

これは折口の作品の中でも、もっともよく知られているものだろう。文章としても物語としても、とてもよくできている。「死者」は大津皇子がモデルになっている。冒頭で死者が目覚める場面は鮮やかな印象を与えるが、この作品が1939年に雑誌「日本評論」の一月号、二月号、三月号に最初に掲載された時は、この場面が初めに置かれたのではなかった。それが1943年に単行本として出版されたときに、章を入れ替え増補改訂したとのことである。

大津皇子の話や「万葉集」と「懷風藻」に収録されている辞世は、多分高校の国語の教科書で読んでいて強い印象を残している。しかし、謀反人として処刑された罪人の歌や詩が、公的に編集された歌集や詩集に入っているのはやや不思議である。後世に編集された時点では、無実の罪であったとされて、さらに文学的な脚色がいろいろ加えられていたのだろうか。あるいは、菅原道真に代表されるように、恨みを残して死んだ者が生霊として祟ることを恐れて、それを宥めるために採録したのだろうか。研究者は、これらの歌や詩自体が後世の創作ではないか、と疑っているらしい。

しかし、「死者の書」という題名と冒頭の場面が強いインパクトを与えるものの、この死者として皇子が登場するのは最初の方だけで、後の物語は南家藤原郎女というヒロインを中心に進む。この郎女は当麻寺の中将姫伝説が下敷きになっている。彼女の観る幻想の中に、大津皇子らしき姿が出てくる。そのイメージは二上山の上に現れる山越し阿弥陀像と重ねられる。郎女は人知れず奈良の家を出て夜中に徘徊し、当麻の万法蔵院にたどり着く。しかし、女性の身で寺の域内に入り込んだことで、女人結界を犯したという罪に問われ、庵室に自ら蟄居して罪を購う道を選ぶ。そこで、蓮糸を紡ぎ染色し、布を織って曼荼羅を作るという作業にお付きの若い女性たちと励む。

日経の記事を探そうとウェブを検索したら、出てきたのは松岡正剛の「千夜千冊」という膨大な書評集だった。「死者の書」は0143夜

という早い時期に書かれていて（この第何夜というのに執筆時期の順序がどの程度関係するかはよく分からないが）、「この作品が日本の近代文学史上の最高成果に値する位置に輝いていることを言わねばならない。この一作だけをもってしても折口の名は永遠であってよい。」という最高峰の褒め方がされている。

また、中央公論社の「日本の文学」では、折口信夫は柳田国男および斎藤茂吉と3人で1巻とされているが、その解説を大岡昇平が書いている。この3人の組み合わせには、折口と柳田は民俗学という共通点がある、折口と斎藤は和歌という共通点がある。大岡はこの解説で

「とくに「死者の書」（昭和十八年）は国文学・民俗学における研究の上に立って、古代人の心と信仰を形象化したものであり、日本の小説史において、類のないものとなった。その真価は時代が経つに従って、輝きを増しているのである。」

と手放しに褒めている。さらにこの解説で面白いのは、折口の駆け出しの頃の柳田及び斎藤それぞれから受けた扱いについての記述である。柳田が主宰する「郷土研究」に折口が「髯籠の話」を投稿したが、翌年になるまで掲載されず、しかも同じ題材を扱った柳田自身の論文（尾芝古樟という別名ではあるが）をその前の号に載せる、という扱いだったという。また茂吉の「アララギ」に折口が短歌百首を投稿し掲載されたが、茂吉は「釈超空に与う」という批判的な文を書いたという。大岡はそれまでの柳田と斎藤の解説でもか

なり辛口なことを書いていて、折口に対するものとはかなり論調が違う。

ぼくは「死者の書」を読んで、横光利一の「日輪」を連想した。

「日輪」は1923年の作品だから「死者の書」10年早い。同じ古代を扱っているといっても、「日輪」は卑弥呼の時代だからだいぶ前になるし、民俗学・歴史学への知識という点では横光は折口にはるかに及ばないだろうから、この2つを比べること自体が適切ではないかもしれない。文学としての質という点でも、「死者の書」の方がずっと上だろう。しかし、中学か高校の時「日輪」を読んで結構感激したという思い出は、忘れがたい。

思い出といえば、当麻寺は大学3年のとき、杉田茂樹と京都・奈良に旅行した際に、行こうとしたことがある。杉田の提案で近鉄に乗ったのだが、うっかり急行に乗ったために行き過ぎてしまい、訪れるのを断念した。それ以来、長谷寺や室生寺には行ったことがあるが、當麻寺には行きそびれている。

なお、「山越し阿弥陀像の画因」は「死者の書」が1943年に単行本として出されたときに、同時に収録されたものだそうだ。「死者の書」の作者による解説という面がある作品だが、思ったよりページ数があって、タイトル通り日本独自の画のテーマらしい「山越し阿弥陀像」がどのように作られてきたものか、考察している。面白いのは「死者の書」と比較しての明らかな文体の違いで、当たり前と

はいえるが、やはり「死者の書」は小説として強く意識して創作されたものであることが分かる。

Brian Kernighan, "Understanding the Digital World: What You Need to Know about Computers, the Internet, Privacy, and Security" (Kindle Version)

この本も、最近翻訳が出て新聞で結構宣伝されているので存在を知った。元となる本書は2017年に出ているが、気がついていなかった。Brian Kernighanは懐かしい名前だが、1942年1月生まれで、同じ1月生まれのぼくよりちょうど6歳年上だ。もっとずっと年上かと思っていたが、まだ元気そうであり、このような一般向けの本を出して活躍しているらしいことは喜ばしい。

Kernighanの名前は、何とんでも木村泉さんが「プログラム書法」というタイトルを付けて翻訳出版した *The Elements of Programming Style* で有名になったし、ぼくもそれで知った。P. J. Plaugerと共著の原著が出たのが1974年で、翻訳は1976年に出ている（第2版は1978年でその翻訳は1982年）。同じくPlaugerとの共著で木村さんが訳した *Software Tools* は1976年の出版で、訳本のタイトルは「ソフトウェア作法」である。さらにベストセラーとなったDennis M. Ritchieとの共著 *The C Programming Language* は、1978年に出ている。いずれもKernighanがまだ30代の時の作品なのだ。

「プログラム書法」や「ソフトウェア作法」は会社にいたころ読んでいるので、多分会社で購入した本のように、自分の本棚を探しても見つからなかった。本棚にあったのは、それより10年や20年以上後の、

- Alfred Aho, Brian W. Kernighan and Peter J. Weinberger, *The AWK Programming Language* (1988).
- Brian W. Kernighan and Bob Pike, *The Practice of Programming* (1999).

の2冊だけだ。このうちAWKは筑波大学の時代に授業でも使ったのでちゃんと読んでいるが、Practiceの方はあまり読んだ気配がない。

さて、本書はKernighanがプリンストン大学で行ってきた講義に基づいている。対象は文系学生で、社会科学や人文科学を専攻するエリート学生である。全13章という構成は、大学の講義に基づいて作られた本として、洋の東西を問わず標準的だろう。そのような学生たちにコンピュータ科学の素養を身に付けてもらいたいという著者の思いは、随所に現れている。

全体の構成は、計算機科学の核となるハードウェア、ソフトウェア、通信の3つの概念とそれらの関係を述べるという正統的なものである。それぞれについて、もちろん文系対象なので記述は平易ではあるが、ごまかしはなくてまともなことが書かれている。たとえばCPUの説明では、Toyという簡単なアセンブラー風言語を導入し

て、CPUの動作を解説している。また、ソフトウェアの章では、アルゴリズムや計算量の話もちゃんと出てきて、さらにJavaScriptによるプログラミングも具体的に導入されている。

自分も駒場で「情報科学概論II」という文系向きの授業を藤垣さんと植田さんとの3人の共同で行ったので、それと比べて興味深く読んだ。ぼくが2012年に岩波から出した「ソフトウェア社会のゆくえ」の一部はこの授業がもととなっており、法政に行ってから、相手は創生科学科という一応は理系の学生ではあったが、「理系ジェネラリスト」の養成を標榜している学科で、とくに「社会と知能」という科目では本書とかなり狙いが重なる内容の講義をした。

構成のバランスを見ると、第I部のハードウェア編が47ページ、第II部のソフトウェア編が66ページ、第III部の通信編が102ページで通信編にかなりの重きが置かれている。通信の話の中には、もちろん携帯電話やインターネットの仕組みについての技術的な内容も含まれているが、セキュリティーやプライバシーの問題に多くのページを割いている。そもそも序文の中でいきなりEdward Snowdenが出てきて、米国NSA(National Security Agency)が電話や電子メールやインターネット・アクセスを常時監視していることを暴露した、という話を取り上げられる。Snowdenについては本文でも何度か言及されるが、Kernighanの立場は総じて政府による監視体制に批判的である。また、インターネット利用の際に注意すべき点がいろいろ挙げられていて、クッキーについてもぼく自身がよく知らなかったが、

自分で訪れたサイトへクッキーが付くのは分かるが、そうでないところにも大量に付けられているということだ。それには画像データやスクリプトのリンクを利用する。そのリンクをユーザがクリックしなくても、リンク先のクッキーがブラウザに付いて、情報がリンク先に届く。そのためにimgタグが埋め込まれているが、幅1ピクセル、高さ1ピクセル、と指定されていて、画像としては見えなくしている。これでユーザは膨大なクッキーを持つことになる。学生に数えさせたところ、それぞれが数千のクッキーを持っていたという。というわけで、第11章のData and Informationと第12章のPrivacy and Securityが、もっとも力の込められた章になっている。

木村泉さんは2019年10月に亡くなられたらしい。広瀬健さんと同じ1935年生まれということで、Kernighanの方が訳者の木村さんよりも7歳若い。木村さんは笹舟会のメンバーだったが、会の記録を見ると2008年6月の例会を最後に、参加されていない。

ジョン・ネイスン, 前沢浩子 訳「ニッポン放浪記—ジョン・ネイスン回想録」(岩波書店)

多分、新聞の書評で見て買ったのだと思うが、しばらく存在を忘れていた。ふと書棚にあるのに目をとめ、読み出してみたら面白く、引き込まれた。

ジョン・ネイスンという名前は、この本を読むまで知らなかった。日本文学の研究者で、ドナルド・キーンやサイデン・ステッカーよ

り15歳下ということである。人格者のキーンと違い破天荒な人柄で、それだけにこの回顧録にはドラマチックな面白さがある、そもそも日本文学の研究者として翻訳や大学での教育だけをやっていただけではなく、作家としてもいろいろ本を出し、映画監督としても賞を取るようなドキュメンタリー映画を多く作っている。交友範囲も三島由紀夫、大江健三郎、安部公房などの日本の作家にとどまらず、勝新太郎やハーバード・ビジネススクールのマイケル・ポーターなど、多彩である。

そもそもはニューヨークのユダヤ系アメリカ人の家に、生まれ育った。父親の気まぐれで高校時代はアリゾナ州ツーソンに住むが、大学はハーバードに入る。そして人と違うことをしたいと日本語と日本文学を学ぶ。当時、ハーバードではライシャワーが日本史を教えていた。

卒業して1961年の夏に、日本に来る。在日米国大使になっていたライシャワーからも勧められ、英会話学校ELECと津田塾の教師という職も得て、東京で暮らし始める。来日して1年目に、教えていた津田塾の学生の一人から、高校時代の友達という芸大の美術の学生を紹介される。それが「まゆみ」で、付き合いを始める。父親は国会図書館の副館長で、仏教学が専門という。紆余曲折を経て、二人は結婚する。その結婚式のことを語るところで、その17年後に別れることになる、とあっさり書いている。

ネイスンが英訳した日本文学は、それほど多くはない。初期の代表的な作品は、三島の「午後の曳航」、大江の「個人的な体験」。三島とは親密な付き合いがあり、「午後の曳航」のあと「絹と明察」を訳すことを期待されるが、あまり関心がわかず、結局大江に乗り換えた形になる。

しかし、そのあと水谷八重子が唐人お吉を演じる新派の芝居にハリス役で出たりした後に、まゆみと共にアメリカに帰る。ベトナム戦争の最中で、徴兵猶予を更新するにはアメリカの大学に籍を置く必要があると言われ、コロンビア大学の大学院生になったためである。アメリカでは映画を撮りだし、ある程度成功する。最初はず脚本書きを依頼される。ベトナム戦争の米軍脱走兵をベ平連が支援する話で、監督は勅使河原宏である、もともとは「個人的な体験」を映画化する構想で、その監督を勅使河原にという話だったが、それがボツになった代わりということである。それから日本を舞台にしたドキュメンタリー映画を、自ら監督となって3本作る。1本目が仕出し弁当屋の一家の話で、朝倉摂の紹介である。2本目が宮城の大家族農家を対象にしたもの。タイトルは「田んぼの歌」で武満徹が曲を付けている。3本目が勝新太郎である。勝の奔放ぶりにはネイスンも振り回される。

これらの撮影のためにネイスンたちは日本に来たのだが、まゆみは最初から乗り気ではなかった。男の子が二人生まれていて、彼らに日本を体験させることを考えてついてきていたのだが、まゆみたち

は先に米国に帰り、その後、それまでさんざん予告されていたように、離婚になる。ただ、直接の原因は書かれていない。どちらか、あるいは両方の浮気とか、家庭内暴力といったことが邪推されるが、離婚後も交流があるようで平和的な別れだったのかもしれない。日本人の妻が日本に帰りたくなり、米国で仕事をしている夫と意見が合わなくなったのなら分かるが、逆に妻の方がアーティストとして米国で居場所を得、夫の方が日本で仕事をすることが多い、というすれ違い状況がある。ネイスンはダイアンというやはりユダヤ系の米国人女性と再婚する。そしてダイアンとの間にも二人の子供が生まれる。その最初の子供、エミリーが生まれた時、まゆみはシルクスクリーンを使った自分の作品をプレゼントしている。p.259にはまゆみとまゆみとジョンとの間の二人の息子と、ダイアンと一緒に写った写真が載っている。

ネイスンは知人と二人で映画製作会社を興してかなり成功していたが、いくつかの事業的な失敗があって1993年にその会社が立ちいかなくなった。そこで事業をたたんで、1994年にカリフォルニア大学サンタバーバラ校にできた日本文化研究学科の新しい講座の募集に応募し、採用される。14年ぶりの大学復帰である。そのとたんに、大江健三郎のノーベル賞受賞のニュースが飛び込んてくる。ネイスンも出版社の仲間と共に、授賞式を見るためにストックホルムに行く。このときの大江とのやりとりが微妙である。スウェーデンの出版社が主催した大江のための昼食会に、招待される。その入口で、大江に挨拶しようとしたネイスンは、視線を外され無視される。し

かし、昼食後、庭の芝生でコーヒーが出されて椅子に座って飲んでいるとき、誰かに後ろから両手で肩をつかまれるが、それが大江である。

これを機会に大江の小説を次々に翻訳するつもりがあったが、結局「新しい人よ目ざめよ」1冊で終わる。1997年にはコロンビア大学でドナルド・キーンの前会長の元、大江とネイスンが対談する。その年の夏、一家で日本に行ったとき、大江が家族を自宅に招待する。そこで光とネイスンの息子（ダイアンとの間の子供）トービーとの間の、ほほえましいやり取りも起こる。しかし、その後の2003年に、大江の方から40年間の友情関係を突然断ち切られ、説明を求めるネイスンの手紙にも返事をくれなかったという。

この本は、ドナルド・キーンの多くの本がそうなのように、日本の読者を想定して著者がまず英語で書き、その和訳を日本の出版社が出版したのかと思っていた。しかし、そうでないことが後でわかった。まず、

Living Carelessly in Tokyo and Elsewhere: A Memoir (Free Press)

という本が2008/3/18に米国で出版されている。岩波からこの和訳本が出たのは2017年11月で、9年半も後である。それでこの日本版では「エピローグ 漱石に導かれて」という新しい章が加えられている。これが結構重要な章である。日本文学者としては晩年になってから漱石の「明暗」を初めて読んだというのは驚きだが、それをた

またま読んで感心し、翻訳を出すことを考える。すでに英訳はあったのだが、新訳を1年かけて作り、出版する。ネイスンのA Memoir のもともとの最終章である第14章「日本との距離」は、

「友人関係も長続きさせる努力をせずに、長い間にひとりまたひとりと疎遠になってしまった。そして最後まで完全に自分の国にすることができなかった日本とのつながりが、とうとうばらばらになってしまった。」

という想いが吐露されて、淋しいものになっているが、この新しいエピローグは、「明暗」の英訳をきっかけに文通が始まった水村早苗との対談をハイライトとする、早稲田大学での2日間のワークショップというイベントで終わる。そして

「私はふたたび日本を愛し始めていた。」

という言葉でしめくられる。

「午後の曳航」も「個人的な体験」も「明暗」も、また水村の「続明暗」も、どれも好きな小説で、それがこのような形で登場するのは思いがけないところがあったが、それだけに楽しめる読書だった。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第7巻上・下）」（集英社）

ファーブル昆虫記も順調に読み進んで、7巻まで来た。この奥本による完訳本はとても親切だが、各巻がフランスで最初に出版された年がいつなのか、多分どこかに書いてあるはずだが、ぱっとすぐには見つからない。この巻で印象的な「オオクジャクヤママユの夜」は、奥本によれば1893年頃の5月6日だろうという。だから出版されたのは1890年代後半だろう。ウェブで見た限りで分かったことは、第1巻の発刊が1878年55歳の時、第10巻が1905年で82歳の時らしい。そして1915年に91歳で亡くなっている。こう書いた後、最終巻の10巻下を見てみたら年表があって、第7巻の刊行年は1901年であることが分かった。

この巻では、まずオオヒョウタンゴミムシが取り上げられ、とくにそれが死んだふりをするという性質が考察される。オオヒョウタンゴミムシに限らず、虫の中には何かの拍子でまったく動かなくなるものがある。ファーブルの観察によれば、その状態は20分ぐらい続くが、長いときは1時間を超える。これは死んだふりをして敵の目をごまかそうとしているというのが世間の解釈だが、ファーブルに言わせるとそんなことはありえない。たとえば鳥がこの虫を食おうとした場合、死んだふりをして喜んで食べてしまうだろう。ファーブルははっきり書いていないが、たとえば木の上で敵に遭遇した時、こうして麻痺状態になって地面に落ちれば鳥から逃れられる、という効果があるらしい。

これをきっかけにファールは、虫は死を知っているかという哲学的な問いを出す。そして虫は死を知らず、だから虫は自殺をしないという結論を出す。たとえばサソリは火に囲まれたりすると、自分に毒針を刺して自殺するという話があるが、それはサソリが死に物狂いで暴れたのを、毒を刺したと見誤ったのだろう、と言うのである。

第4章に昆虫の化石の話が出てくる。アンチ進化論のファールも、恐竜は知っているし虫の化石も見ている。したがって古代には現代にいない昆虫がいたということは認識している。そして「種は絶滅していく」と言う(上, p.100)。それでは新しい種はどうして生まれると思っていたのだろうか。これまで生物の種が創造主によって創造されるという言い方は決してしてこなかったが、本巻には次のような表現がある。「ひとつの至高の秩序が物質を支配している」(上, p.328) たった1行だけだが、これは重要な表現かもしれない。

上巻ではいろいろなゾウムシが取り上げられるが、種の絶滅と誕生の歴史の中では、ゾウムシは「初期型」とファールは言う。当時知られていた化石の分析からは、そのような推測がされたい。しかし、奥本の訳注によれば、

「実際にはゾウムシの仲間は、被子植物が出現した白亜紀以降に種数を増やした一群で、鞘翅目のなかでも新しく出現したも

のである。」

そうだ（上, p.114）.

次に、ポプラハマキチョッキリなどの葉巻虫が取り上げられる。これらが葉を器用に巻いてそこに卵を産みつけ、幼虫はその中で保護されて周囲を食べて育つという行動は、驚くべきものがある。その仲間には和名でオトシブミという優雅な名前を付けられているものもある。幼虫のために葉を巻いて造る“樽”（揺籃）を落文に見立てたものという。確かに子育てのためのこのような例を見ると、ダーウィン流に突然変異と自然淘汰でこういう行動が獲得されるとは、素朴には信じにくい気もしないでもない。

下巻ではミノムシなど、自分で鞘のような衣服を作って着る虫が取り上げられる。子供のころ、庭でよくミノムシを見ただけでなく、採って蓑をはがしてみたりしたような気がする。ファールブルも蓑虫の蓑をはがして観察しているが、それは幼虫がどのようにそれを作るかを観察するという実験的な目的だった。それに引きかえ、子供の自分はやや残酷な好奇心からやったはずだ。

しかし、最近はミノムシを身近に見ないようだ。単に見逃しているだけかもしれないが、奥本によれば

「日本では、このヤドリバエの寄生によるミノムシの激減は、1995年以降、九州を中心に急激に広がった。」（下, p.283）

という。なお、この訳注では寺田寅彦の「蓑虫と蜘蛛」という随筆が長く引用されていて、その部分だけでも楽しい読み物になっている。

初めに印象的だと書いた「オオクジャクヤママユの夜」は、下巻第23章に出てくる。このガの繭を研究室の机の上に置いておいたら、そこで羽化したので、釣鐘型の金網の中に入れた。その夜、この大型のガが20頭ほど、研究室の中を飛び回っているのが発見された。それ以外にも家の中の台所や子供部屋にさらに20頭ぐらいが来ている。金網の中にいるガは雌で、それを目当てにたくさんの雄が外から来たのである。この後、ファールは籠の位置を変えたりして観察した後、昼に行動するチャオビカレハで詳しく観察する。そして雄がやってくるのは、雌が出す発散物を捉える嗅覚によるものと推論する。さらにムネアカセンチコガネがスナジイモタケの匂いを感じ取るという行動も、これに関連する虫の優れた嗅覚力だとする。ファールはフェロモンの存在を予見していたわけだが、フェロモンの正体が明らかになったのは、1959年ドイツの生化学者ブーテナントによるという（下、p.358、訳注）。フェロモンという言葉は、このブーテナントとカールゾンによって同じ1959年に造られたものだそう。

森田真生「数学する身体」（新潮社）

第15回小林秀雄賞を受賞したというので多分この本のことを知り、法政にいた2016年に買って本棚に並べてあったのを、「ニッポン放

浪記」と同様に見つけて読んでみた。著者は30歳の「独立研究者」、つまり大学や研究機関に所属していない、という人らしい。東大の文系の学生だったが、数学科に転向したという。

なかなか魅力的なタイトルだが、「身体」についてはそれほど思想が展開されるわけではない。ものを数える道具として数が作られたが、それが人の手の指という身体に結びついて産み出されたという話から始まるが、それ自体は格別目新しいことではない。そのような便利な道具として生まれた数や図形が、やがてそれ自体が研究の対象となり数学ができた。また、道具としての数字は内面化され、身体化されるという。この辺りが「数学する身体」という概念に直結する話だと思うが、それもその後、それほど展開されていかない。その後からは、数学史のおさらいになる。

この数学史の部分はずいぶん簡潔だが、しかし短い中で要領よくポイントを説明し、著者の力量を示す。古代ギリシャで「証明」に重要な役割が与えられた。ヨーロッパにアラビアで発展したギリシア由来の数学が戻ってくるのは中世で、12世紀のイタリアである。そして記号化された代数が発展する。さらにデカルトにより幾何学が代数化される。続いてニュートン、ライプニッツにより無限が扱われるようになる。

19世紀の解析学の厳密化は、数学を物理的・幾何学的直観に代わる基礎の上に築くものであった。ガウスやヤコビやクンマーにより数

式と計算に基づく数学は発展したが、計算の複雑化とともにリーマンやデデキントを筆頭とする概念と論理の時代に推移した。概念を重視するのに並行して、集合論が整備されて数学の基礎の言語となることが期待された。しかし、ラッセルによる集合論のパラドクスが数学に危機をもたらした。それを解決すべくヒルベルトによって目論まれた「数学」を数学する企みは、ゲーデルによって挫折が明らかにされる。

ここまで猛スピードで振り返られた数学の歴史は、本書にとってはアラン・チューリングを登場させるための準備だった。チューリングについてはそれまでになく丁寧に語られる。その理由は計算する機械という概念の導入により、こころと機械の問題を議論しているからである。「数学する身体」からすると、身体を外部化した機械を考えることは、大いに繋がりを持ちうるということらしい。ここまでが「計算する機械」と題する第2章の内容である。

次の第3章は、岡潔を追う。チューリングについてはこちらもある程度知識があるが、岡潔についてはあまり知識がない。とくにその数学的業績の多変数関数論に関しては、何が難しいのか、岡の発見がどれほどすごいものなのか、見当がつかない。岡潔の著作も読んだことがほとんどないが、わずかに高校生の時に小林秀雄との対談「人間の建設」は買って読んだことがあるくらいである。

森田は大学に入って間もない頃、古書店で岡の「日本のこころ」を手にした。それを読んで数学を学ぶ決心をしたという。本書の第3章「風景の始原」から第4章「零の場所」を通して語られるのは、岡潔の評伝といってよい。結局、本書全体が、アラン・チューリングと岡潔の評伝とも言えるので、「数学する身体」というタイトルからこちらが期待するものは、肩透かしを食った感じがしないでもない。ただ、岡が情緒という言葉を好んで使ったことや、数学をすることは百姓が農作物を育てることに近い、と言ったことなどが、「身体」に繋がるということらしい。

肩透かしを食ったという感想も持ったが、小林秀雄賞を取るだけあって、文章は優れているし、よく知らなかった岡潔のことを教えてもらったので、悪い読書ではなかった。持っている本の帯には、「小林秀雄賞受賞」というような宣伝文句が書かれていないから、受賞する前に出た本を買っているのだろう。しかし、自分が高校の時に岡潔と小林秀雄の対談を読んでいることと、第3章の扉に小林秀雄の文が引用されていることは、不思議な符合である。その引かれている文は次である。

「「万葉」の歌人等は、あの山の線や色合ひや質量に従って、自分たちの感覚や思想を調整したのであろう。」

大野透「律令国家と隋唐文明」（岩波新書）

3月21日の新聞書評で、日経と朝日の両方でこの本が取り上げられていた。それにつられて買って見たが、延べの日にちにすると結構な時間をかけて読んだ。それほど熱中して読んだわけではない、ということが言えるだろう。

中国に隋、続いて唐と統一王朝が成立し、倭はまず600年に第1回の遣隋使を送る。日本の時代としては推古のときに当たる。以降、8世紀から9世紀初めぐらいまでが本書が扱う歴史の期間である。

隋唐の律令に倣って、浄御原令が作られたが、それは現存しておらず、内容が分からないらしい。ただ、それを引き継いで作られた大宝令は、ある程度内容が推測できる。律は社会規範を規定する刑法的なものであり、令は社会制度を規定する行政法的なものらしい。大宝律令も伝存していないので、養老律令の注釈書の「令集解」から推定されているという。養老律は一部のみ残存するが、養老令はほとんどが残っているという。これらが制定された時代背景は、朝鮮半島で百済が唐に滅ぼされ、派兵していた倭も白村江で敗戦した。そのため国家的な危機との認識があり、中央集権体制を確立して唐や新羅の勢力に対抗するという意味があった。日本国という国号が定まったのも、この頃という。

この時代の歴史の特徴は、史料の少なさである。国内と中国の史料で残っているものは限られる。それでもときおり新発見があるらしい。たとえば2011年に西安で出土した百済人貴族の墓誌に「日本」

の語が見えるという。まれにそういうことはあっても、基本的には限定された史料を考古学など他の分野から得られた知見と突き合わせ、微に入り細をうがって分析するのが史学なのだろう。それで非常によく出てくる表現は、誰その氏の説によればこうである、というものである。つまり史料の直接の引用では新規性がないので、その解釈を引用するわけである。

後半は律令などの制度的な改革だけでなく、唐文化の導入による文化的な革新がさまざまに行われたことが描かれる。それを牽引したのが帰化人と吉備真備などの帰国した遣唐使である。帰化人は文書作成、医療、技術などに大きな影響をもたらした。吉備真備等の遣唐使は、膨大な典籍を系統的に収集して将来した。それには礼、歴などが含まれる。また仏教の経典も重要だが、とくに鑑真和上の来日でもたらされたものが大きい。また、音楽、服装なども唐風化し、天皇の文武や聖武などの漢風諡もこのころ造られた。神武も推古もこのころ後付けで造られたものである。このような動きは、明治の西洋化による近代化と相通じる。

結局、本書の重要なテーマは、「律令制を礼を含んだ広い意味での中国化ととらえれば」(p.191)という表現に代表される。そこで、

「唐の文化が日本の歴史に与えた影響は、おそらく決定的なものであったと思う」(p.195)

ということが、結論となるようだ。

Mark Twain, "The Adventures of Huckleberry Finn" (Kindle version)

2014年にTreasure Islandを読んだとき、次のように書いている。

「学生のとときに買ったペーパーバックで、何度か読もうとしながら読まずにきたものが2冊ある。いや、積読のペーパーバックはもっとあるに違いないが、ときおり気にかかるという点と、どちらも少年向きの有名な本という共通点から、いつしか意識の上で常に一括りにしてきた。それがこの Treasure Island と Huckleberry Finn である。」

それから6年経って、Huckleberry Finnをようやく読んだ。ペーパーバックで400ページあるし、英語が読みにくいので時間がかかった。ペーパーバックは1972年に出た版だから、学生最後の年か、会社に入ってから買ったものらしい。しかし、今回読んだのはKindle版である。

朝日新聞にハックルベリー・フィンの魅力を印象的に取り上げた文章があったと思って調べてみたら、次のものだった。

「[日曜に想う] めぐり合う一冊、待ち受ける景色」 編集委員・福島申二 2019年10月27日

「どこで聞いたか読んだか忘れたが、愉快的話だったので覚えている。アメリカの老富豪があるとき「全財産をはたいてもかなえない望みはありますか」と聞かれて、答えたそうだ。「大

好きな『ハックルベリー・フィンの冒険』をまだ読んでいない状態に戻してほしい」 想像するに、富豪は多感な時期に夢中で読んだのだろう。」

ずいぶんいい加減な引用で、もしかしたらこれを書いた福島申二という人の作り話ではないかと疑わせるが、確かめようもない。福島申二は、2007年4月ー2016年3月の天声人語子らしい。9年間にわたって天声人語を担当したというのは、戦後では荒垣秀雄、辰濃和男に次ぐ長さだ。最近の天声人語は質が落ちていると思うが、福島申二はもう少しましな時代の人なんだろう。朝日新聞は「天声人語書き写しノート」というものを臆面もなく販売しているが、今の天声人語のような文章を人に書き写させるというのは、どういう了見なのだろうか。

最近、柴田元幸による新訳が、出ている。

「ハックルベリー・フィンの冒けん」 2017/12/19

マーク・トウェイン, 柴田 元幸 訳研究社)

最近と言ってもすでに2年以上前だ。この新訳本の宣伝に先ほどの福島の文章が使われたような気がしたが、順序が逆のようだ。

Mark Twainが技巧を凝らした黒人の会話言語や南部訛りの表現は、米国人なら苦もなく読み取れるのだろうが、こちらはときどき途方に暮れる。ただ、普通の米国人には分かるように表現・表記されて

いるのだろうとは想像がつく．ところどころ表現が分からなくても，ストーリーを追うことはできる．そしてほら話を含めたストーリーの作り方は，つくづくうまいものだと感心する．ただ，KingとDukeという詐欺師の話は，あまりにしつこく長く感じられる．またTom Sawyerが鉄仮面などの冒険物語に毒されて，何でもお話のように再現したいという筋立てもそれなり面白いが，やはりしつこさを感じる．

その意味では，子供の時に読んだときも少し違和感があったのが，Tom Sawyerの位置づけである．このハックの話では最初に出てきてから，ずいぶん経って最後にまた出てくる．ハックルベリーの話より前にトム・ソウヤーの話が本で出ている，という前提は子供でも理解できたが，それは読んだことがなかった．当時読んでいなかっただけでなく，その後も読んでいない．大体，世の中ではハックルベリー-の本の方がはるかに評価が高く，今でも読み継がれているが，トム・ソウヤーはそうでもないだろう．The Adventures of Tom Sawyerが出たのが1876年で，the Adventures of Huckleberry Finnは1884年に出ている．

Mark Twain と言えば，駒場の1年生の英語の授業でThe Autobiography of Mark Twainが教科書だった．北星堂から出ていた注付き対訳本が使われていて，物持ちがよいぼくはその教科書をまだ持っている．その編注者が亀井俊介であることに今回初めて気がついたが，ぼくにとっては大きな発見である．ということは，この

授業の担当も亀井だった可能性が高いが、教師の名前はすっかり忘れていた。ただ、亀井が当時東大教養学部の助教授だったことは確かなようだ。その授業で強く記憶していることがある。授業のスタイルは典型的なもので、学生を順に割り当てて、訳を付けさせるというものだった。学生が発表した後、教師が間違いを指摘したりコメントを加える。あるときその教師が述べた原文の解釈に疑問を持ったので、手を挙げて別のこれこれという意味ではないでしょうか、と言った。そしたら驚くべきことに、あっさり「あ、そうだね。それが正しい。」と受け入れられたのだ。ぼくは自分の言ったことが受け入れられたことよりも、東大の英語の教師（当時は教授か助教授か、専任か非常勤かといったことも認識していなかったし、そういう区分すら意識していなかったと思う）が、理科1類の1年生の解釈を、それが正しいと受け入れてくれたことに感激した。それがもし亀井俊介だとすれば、さらに驚くべきことだ。ぼくは後年、東大に勤めてから亀井の「サーカスが来た！」を読んで、面白いと思った。今、そのときの感想文を読み返してみたら、読んだのが1995年で駒場に勤め始めた翌年だが、

「能登路雅子という、やはり東大で教えを受けたという女性研究者が解説を書いている」

と書いている。このときはまだ能登路さんを知らなかったらしいが、後年にはカラオケに一緒に行ったりした人である。

岡潔「春宵十話」（光文社文庫，Kindle版）

森田の本で岡潔が大きく取り上げられていたので、読んでみる気になった。アマゾンで検索すると、「春宵十話」と「日本のこころ」のKindle版があったので、両方を購入した。それで両者の最初の文章を読んでみたら「人の情緒と教育」という同じものだったので、変だなと思いながらまずよく知られている「春宵十話」から読むことにした。後でよく見てみたら、「日本のこころ」は「春宵十話」を含みさらに別の文章を併録したものなので、両方を買う必要はなかったわけである。と書いてから、これも間違いであることに気づいた。「春宵十話」は1つのエッセイのタイトルであるが、それをまとめた単行本のタイトルでもある。そして同じエッセイが「日本のこころ」という別の単行本にも採録されているのである。

前半は森田の本でも引用されているような、どのようにして自らの数学上の発見に至ったかという話が描かれ、大変興味深い。また、農耕と数学研究を並行させる生活の姿も、面白い。最初は「春宵十話」という一つのまとまった本を読んでいると思っていたので、このような深みのある文章と後の方の文化勲章をもらったときの話とか、相撲やプロ野球を語る気楽な文章との落差に戸惑いを感じたが、これらは書かれた時期も意図もまるで違うものであることに遅まきながら気づいた。

岡は1901年生まれで、西暦の年が自分の年齢と連動するので、もっぱら西暦を使っているという。自分より50年近く年上になるが、それでも好きな力士が房錦、柏戸だというのや、巨人ファンだが川上

の采配が気に入らないとか書いているのをみると、やはり同時代人という気もする。

数学だけでなく、文学、美術、音楽、仏教についても多様に語られる。好きな作家は芥川と漱石だという。他には芭蕉に強い思い入れがあるらしい。芭蕉は芥川を通して関心を持ったということのようだ。とにかくそのような文化的な素養があることも、一般の読者にアピールし、あるいは文化勲章を授けられるということに寄与したかもしれない。

芥川龍之介「秋」「東洋の春」「尾生の信」（芥川龍之介全集 Kindle版）

岡潔の本で芥川が何度か言及されているので、読んでみた。

「秋」は中学生のときも読んでいたが、後の2つは初めて読んだ。発表年を見ると

- 「尾生の信」大正8年12月
- 「東洋の春」大正9年3月
- 「秋」大正9年3月

で芥川としては中期になる。

「秋」はまとまった中編小説だが、後の2つはそれよりはるかに短かくて、スケッチのようなものである。「東洋の秋」は日比谷公園

で公園の掃き掃除をしている二人の男を見て、寒山拾得だと言うという空想を描いている。「尾生の信」は中国の春秋時代、魯の尾生という男が、橋の下で女と会う約束をして待っているうちに、大雨となって増水したが、そのまま待ちつづけておぼれ死んだという「史記」蘇秦伝などの故事を、ほとんどそのまま描いたものである。「が、女は未だに来ない。」という句をリフレインさせてやや韻文的な効果を与えている。

「秋」は芥川らしい巧みな小説である。中学の時に読んだ記憶も、おぼろげながら浮かんできた。ただ、岡潔が何で芥川のこの作品をとくに取り上げていたのか調べようとしたが、単純なテキスト検索ではなぜか見つからなくなってしまった。

芥川龍之介「芭蕉雑記」「続芭蕉雑記」「文芸的なあまりに文芸的な」「続文芸的なあまりに文芸的な」「西方の人」「続西方の人」（芥川龍之介全集 Kindle版）

これらは芥川後期のエッセイである。芥川が自殺したのは昭和2年7月24日だから、芭蕉雑記を除けば、みなその直前の発表で、遺稿のようなものである。

- 「芭蕉雑記」大正12年-13年
- 「続芭蕉雑記」昭和2年7月
- 「文芸的なあまりに文芸的な」昭和2年4月-8月
- 「続文芸的なあまりに文芸的な」昭和2年9月

- 「西方の人」昭和2年7月20日
- 「続西方の人」昭和2年7月23日遺稿

これらに共通するキーワードで気になるのが「売文」と「ジャアナリスト」である。そう思い込んだが、青空文庫で検索したところでは、「売文」は「文芸的なあまりに文芸的な」でだけ、「ジャアナリスト」は「文芸的なあまりに文芸的な」、「西方の人」と「続西方の人」でだけに出てくるようだ。しかし、「文芸的な」に出てくるのは、こんな具合である。

「僕は実にかう云ふ点ではジャアナリストであると思つてゐる。従つて職業的ジャアナリストを兄弟であると思つてゐる。」

この言い方の裏には「作家の方がジャーナリストよりは社会的地位が上」という通念が、潜んでいるようにみえる。しかし、文章を書くことを生業としているという点で、所詮同じという感想のように感じられる。今だったら、「ジャーナリスト」というよりは「ノンフィクション作家」と呼ばれる職業を、意識しているのかもしれない。しかし、「上海游記」ではいかに芥川がジャーナリストとしてのセンスに欠けるか、という印象をぼくは強く持った。とくに章炳麟、鄭孝胥、李人傑へのインタビューを記事にしたあたりである。

このジャーナリストあるいはノンフィクション作家という問題に、「売文」というキーワードが関係してくる。同じ「文芸的な」に

「僕等も売文と云ふことさへなければ、何か商売を見つけるかも知れない。僕等の経験や見聞もその為に或は広まるであらう。僕は時々売文だけでは活計を立てることの出来なかつた昔に多少の羨しさを感じてゐる。」

というところがある。ここに挙げた死ぬ前の一連のエッセイも、人気作家として雑誌から文章を求められてそれに応じて書いたという感じがある。そしてそういう自分に、嫌気がさしてきたことが、自死につながったのではないだろうか。

「文芸的なあまりに文芸的な」は谷崎との「小説の筋の芸術性」をめぐる論争が、発端となっている。昭和2年2月に催された「新潮」座談会で、芥川が谷崎の作品「日本に於けるクリップン事件」その他を批評して「話の筋というものが芸術的なものかどうか、非常に疑問だ」、「筋の面白さが作品そのものの芸術的価値を強めるということはない」などの発言をしたという。これを読んだ谷崎が「筋の面白さを除外するのは、小説という形式がもつ特権を捨ててしまふことである」と「改造」誌上（3月号）で反論した。これを受けた芥川が同じ「改造」4月号に書いたのがこのエッセイである。その後、自死によって終わる8月号まで連載が続いた。「続文芸的な」は死後の9月号に載った。芥川作品としては長いが、あまり脈絡なく思いついたことを書いて連載したという感じである。その点は成り立ちが「上海游记」に近いと言えよう。

しかし、「話の筋」を作ることこだわってきた芥川が、それを否定するというのは自己否定であり、短絡的に言えばそれが自殺を招いたと言えるかもしれない。志賀直哉を大変高く評価しているのはともかくとして、意外なことに私小説の徳田秋声をかなり評価しているようだ。中学のときに読んだ講談社「日本文学全集」の「芥川龍之介集」の解説で中村真一郎が書いているが、大正10年前後から文壇の中からさまざまな批判が出てきたと指摘されている。そして

「大正12年になると、彼の親しい友人たち、菊地、久米のような人たちも、「何故もっと素直に自分を書かないのだ。」とか、「芥川は自分を真面（まとも）に出せないのだ。」とか、「結局、ポーズをもっているのか。」というような不満を、公然と表明するようになる。」

と書いている。それに対して、芥川自身は当初は告白などごめんこうむると言っていたのが、「保吉もの」や「大導寺信輔の半生」のような自叙伝に近いものを書くようになる。そこには何か哀れを誘うものがある。

「西方の人」はキリストのことを書いている。「芭蕉雑記」と同じように短章を連ねたスタイルだが、どちらも「文芸的な」よりはまとまりがあり、新約聖書や芭蕉の作品をよく読みこんでいることが分かる。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第四篇 ソドムとゴモラ I,II」（集英社文庫）

テーマのソドムはシャルリュス男爵の性向が中心に描かれる。最初にチョッキの仕立て職人ジュピアンとの邂逅の場面は，前の巻の「ゲルマントの方」で予告されていたものであるが，印象的に語られる。ゴモラの方はアルベルチャーヌに対する疑いであるが，その伏線は「スワン家の方へ」のモンジューヴァンの場面に，すでに張られていたのである。

「私」とアルベルチャーヌとの関係は，よくわからない。アルベルチャーヌを愛してはいないようなのに，一方で強烈な嫉妬心を起こす。それで，最後にアルベルチャーヌとは結婚しない，別れるという決心をし，それをママンにも宣言したのに，アルベルチャーヌのヴァントウイユ嬢とのゴモラの関係がいよいよ疑わしくなったらとたんに，突然，アルベルチャーヌをバルベックからパリに連れて行き一緒に暮らすことにし，ゴモラの関係を疑う相手には会えないようにするため，断固とした行動をとる。

シャルリュス男爵とジュピアンの邂逅の場面の後は，ゲルマント大公夫人の夜会の場面が延々と続く。そこで久しぶりにスワンが出てくる。スワンは年老いて病み衰えている。巻を通してドレーフェス事件が，重要なテーマである。ドレーフェス派と反対派がかなりはっきり区別して描かれる。スワンはもちろんだレーフェス派である。

またこれも久しぶりにヴェルデュラン家のサロンが登場する。一方でオデットのサロンも人を集めている。アルベルチーヌとはパリで会っているが、「私」がまた夏を過ごしにバルベックに行くと、アルベルチーヌも後から来る。バルベックにはヴェルデュラン夫妻も滞在していて、私とアルベルチーヌもときどきそのサロンに行くが、貴族のシャルリュス男爵もそこに加わるようになる。アルベルチーヌをパリに連れて行くと言ったのは、このバルベック滞在の後の話である。

これでようやく、学生の時に読んだ「囚われの女」を再読する準備が整った。

高山羽根子「首里の馬」（芥川賞）

芥川賞作品を読むのは、昨年の春以来である。つまり2回分はバスしている。

この作品には意外に感心した。

沖縄を舞台として、老女性の民俗学研究者が個人的に収集管理している資料館における資料の管理作業の話と、国外にいる回答者に日本語でオンラインでクイズを出してそのやりとりを記録するという仕事の話と、宮古馬が突然庭に現れてそれを飼うことになるという話と、いずれも奇想天外な話ながら妙にリアリティのある文章によって、読み手を引き込むように語られていく。3つの話には直接の

関連性がないが、どれも未名子という主人公であり語り手である若い女性が経験することであることで、繋がっている。語り口が巧妙なだけでなく、沖縄の歴史や文化を織り込んで、知的な興味もそそる。

それにしても、最初は「大きな一匹の生き物らしき毛の塊」が、庭にうずくまっているのを朝発見するという形で導入されたものが宮古馬で、一度公園の管理事務所に引き取ってもらったが、それを盗み出してまた飼い始め、そのうちそれに乗って街に出歩くというのはずいぶん強引な話だ。未名子に乗馬経験があるわけでもなく、手綱とか鞍を付けたという記述もない。この小説はまるでリアリティのない話をリアルに語ることに特徴があるが、その流れに乗ると細部に本当らしさをつい求めてしまう。たとえばオンライン・クイズの話では、それに使われる機器や通信システムがかなりリアルに描写されているので、そこからの連想からこのような感想も湧く。

なお、首里城が焼失したのは2019年10月で、タイトルに「首里」を含むこの小説が発表されたのは、「新潮」の今年の3月号である。タイトルを決めるのに影響はあっただろう。

遠野遥「破局」（芥川賞）

「首里の馬」は面白く読んだが、対照的にこちらの「破局」の方はぼくには全然面白くなかった。しかし、意外なことに選考委員の評価はおおむね高い。平野啓一郎「私が推したのは「破局」だっ

た。・・・新しい才能に目を瞞らされた作品だった。」，小川洋子「「破局」に二重丸をつけて臨んだ，・・・もしかしたら，恐ろしいほどに普遍的な小説なのかもしれない。」，山田詠美「この作者はきっと，手練に見えない手練になる。」，川上弘美「表現しようとしていることと，言葉の間に，美しい相関関係があり，その相関関係は一つの完成した数式で表せる。」，堀江敏幸「ゴールまでの距離感がしっかりしている作品だった。」というような評価を与えている。他の委員も含めて否定的なコメントはほとんどなく，ただ主人公が嫌味な男だという点は一致しているようである。

作者の遠野は1991年生まれで慶大法学部卒。大学4年で就活も終わって時間ができたので，何かやってみようと小説を3編書いて文芸誌に応募したが，すべて一次審査で落ちたという。しかし2019年に文藝賞を受賞してデビュー。2作目の「破局」がいきなり芥川賞候補作となり，受賞したという経歴である。

「破局」の主人公も「塾」とか「日吉」とか「三田」というキーワードで慶応在学中であることが明かされ，「私が法学部だと言うと，かしこい，と灯は言った。灯は商学部だった。」により，エリートであることが示される。公務員志望で，公務員試験の筆記試験に合格し，面接も終えてほぼ決まりそうな状況という設定である。女性関係も，最初は小学校で一緒だったという麻衣子とつき合っているが，麻衣子が政治家志望で忙しいというところで，1年生の灯という子に切り替える。どちらともセックス関係があり，普通の男

の学生からみると、恵まれた状況にある。ラグビーをやっていることが重要なテーマだが、慶応のラグビー部というわけではないらしく、出身の公立高校でラグビーをやっていたが、その監督から見込まれて高校のコーチ役をやっている。

このような設定の上で、最後に「破局」が来る。いつも練習の後に家に誘って肉を食べさせてくれる監督からある日誘われず、入ったファーストフードの店でラグビー部の高校生から嫌われていることを偶然知り、以前に麻衣子との関係があったことを知っている灯には、灯とつきあってからも一晩麻衣子と関係を持ったことを知られて逃げ出され、その灯を追いかけていく途中で若い男に邪魔されてその男を殴り倒してしまい、通行人により警察に通報されて捕まる。確かにこう流れを追えば、「ゴールまでの距離感がしっかりしている」という評も肯けないことはない。

1年半前の芥川賞の町屋良平「1R（いちらうんど）1分34秒」に、似ているところがあると思った。ボクシングとラグビーという違いはあるが、どちらも若い男が一人称で自分のスポーツ中心の生活を語る。どちらの主人公も周りとはそつなくつき合っているようだが、町屋の場合のコーチ「ウメキチ」と遠野の場合の監督「佐々木」との関係が、外面的には従順なようでいながら、内面的には屈折している、というところも妙に類似する。文体も近い感じだ。

太宰治「右大臣実朝」（太宰治大全 Kindle版）

Dマガジンというアプリでときどき週刊誌を見るが、とくによく読むのは日本版Newsweekである。8/11・18号の特集は「人生を変えた55冊」というよくある夏休み向けの読書特集だが、本を選んでいるのが普通の読書人ではなく、多分若者に受けるようなぼくはほとんど名前を知らない人たち11人である。日本版なので日本語の本が選ばれている。その中に爆笑問題の太田光がいて、挙げている本の中に、次の2冊があった。

- 太宰治「右大臣実朝」
- Kurt Vonnegut, Jr. The Sirens of Titan (の翻訳版)

太宰は以前に全集のKindle版をダウンロードしているので、この作品を見つけた。Vonnegutは読んだことがないが、やはりKindle版を購入した。それでまず太宰を読んだ。

太宰がこういう歴史小説を書いていることを、まず知らなかった。1943年の戦時中に出ている。以前に読んだ猪瀬直樹「ピカレスク 太宰治伝」を見てみると、p.372-376辺りにこの作品の成立事情が書かれている。昭和17年夏に錦城出版社の大坪草二郎が、鶴岡八幡宮社務所の発行する「鶴岡」という雑誌の臨時増刊を太宰の元に持ち込む。それが実朝生誕750周年の特集号で、それをもとに書き下ろしの執筆をもちかける。太宰はそれに応じ、7か月で書き上げ。錦城出版社から昭和18年9月に出版された。

奥野健男の「太宰治論」を見ると（この本はオヤジの残した文庫本で、自分では読んでいないが本棚から探し出した）、最後に年譜がかなり詳しく付いていて、昭和18年のところに次のような記述がある。

「9月「右大臣実朝」を錦城出版社より刊行。

「私は三度も点呼を受けさせられ、そのたんびに竹槍突撃の猛訓練などがあり、暁天動員だの何だの、その暇に小説を書いて発表すると、それが情報局ににらまれているとかいうデマが飛んで、昭和十八年に「右大臣実朝」という三百枚の小説を発表したら、「右大臣（ユダヤジン）実朝」というふざけ切った読み方をして、太宰は実朝をユダヤ人として取り扱っている、などと何が何やら、ただ意地悪く私を非国民あつかいにして弾劾しようとしている卑劣な「忠臣」もあった。私の或る四十枚の小説は発表直後、はじめから終わりまで全文削除を命じられた。また或る二百枚以上の新作の小説は出版不許可になったこともあった。しかし、私は小説を書く事は、やめなかった。もうこうなったら、最後までねばって小説を書いて行かねば、ウソだと思った。それはもう理屈ではなかった。百姓の糞意地である」（十五年間）」

ここで引用されている「十五年」というのは、太宰自身が自分の過去を振り返って書いたものである。その前に「東京八景」というやはり自伝的なものを書いていて、それに続く時代の回顧らしい。

子供のころから、鶴ヶ岡八幡を訪れると大銀杏の樹の裏側に公暁が隠れていて、そこから飛び出して実朝を殺したという話を聞かされた。ただ歴史書でその経緯を読んだ記憶がない。この小説は各段にまず吾妻鏡からの引用があり、それに続いて太宰による現代語による記述がある。太宰が書いているのはもちろん現代語訳ではなくフィクションであるが、吾妻鏡の引用部分に対応し、それに他の史料と作家としての想像力で膨らませたものとなっている。この吾妻鏡からの引用を頭に置くというスタイル自身が、考えられた技巧である。作家というものは、与えられた材料をどのように料理するかという手の内を、あえて見せている。編集者によるお膳立てに乗りながら、こういう作品を書いた太宰の小説家として力量が感じられる。それにしても、太田光はどういうきっかけでこれを読んだのだろうか。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第8巻上・下）」（集英社）

ファール昆虫記もとうとう8巻まで来た。この手のものは死ぬまでに読んでおこうという気持ちが、多少はある。しかし死んだら何も残らないので、何の意味があるかと問われれば答えに窮する。多くの読書家が晩年に同じような気持ちを持ったのではないだろうか。読書家という言葉を使ったが、自分は「読書家」とは言えないだろう。まあ、本を読む人というほどのつもりである。

取り上げられる虫は、訳者が工夫して付けている口絵から引くと、ハナムグリ、マメゾウムシ、サシガメ、コハナバチ、ワタムシというところである。それぞれの虫の観察や実験によって分かった行動が、いつものように面白く語られるが、共通するテーマもある。一つは複雑な生活環(life cycle)である。たとえばハナムグリは春にリウなどの花のもとにやってくるが、酷暑の季節には砂に潜って夏眠する。7, 8月に腐植土を掘ると、孵化したての幼虫と羽化直前の蛹の殻が見つかる。これは別に親より先に子が生まれるわけではなく、今年羽化した成虫は越冬して来年繁殖する。すなわち生活環が2年間にわたっているのである。またコハナバチには春の世代と夏の世代とがあり、春の世代には雌だけしかいない。夏の世代には雌雄両性がいるが、その雄は交尾した後すぐに死に、雌は越冬して単為生殖で夏の世代を産む。

もう一つの重要なテーマは、植物連鎖である。植物が太陽のエネルギーを有機化合物に集約する。それをまず微小な動物が集めて消費し変換する。それをさらに鳥などが食べ、さらに大型の動物の食料になる。微小な栄養物質を蓄えているものにアブラムシがある。アブラムシの仲間ではテレピントにつくワタムシはその典型で、他の虫では消化できないテレピントの葉を食べて大繁殖する。そのワタムシをマエダテバチなどのハチが貪り食う。ハチが去った後にはイモムシ（メイガの幼虫）が来て食べ尽くす。

ワタムシは虫癭を作ってその中に卵や幼虫を守っているが、ハチやイモムシはそこに入り込む。また、虫癭の継ぎ目に卵を産んで幼虫が寄生し、中から食べてしまう蛆虫もいる。

アリの中にアブラムシの乳搾りをするものがいることは有名な話である。そのような乳搾りができない虫も、垂れ流される甘露に群がる。さらに手っ取り早いのは、アブラムシを食ってしまうことである。

エンドウゾウムシのように、栽培植物に卵を産んで幼虫の食料とするものがいる。農業者にとっては害虫になるが、このような虫と人間との関係には、歴史と地理が関わる。たとえばインゲンはフランスには外から来たので、フランスに昔からいるマメゾウムシはインゲンにつかない。ファーブルはインゲンマメゾウムシを手に入れ観察するが、この虫は新鮮な柔らかいインゲンの豆は食べず、乾燥して固くなった豆を食べる。だから畑ではなく倉庫で被害が出るという。

ファーブルは数学も好きで、卵や巣の幾何学を取り上げ、その美しさを語る。一般に鳥の卵には美しいものが多いが、昆虫の卵にはそれほどものがないという。その中で、カメムシの卵の美しさは特筆に値するとする。巣では地下に作るスズメバチの巣の造形が、面白い。

第6巻で死骸を処分する虫たちとしてカツオブシムシやヒラタシデムシの話が出てきて、ぼくは知らなかったのが驚いたが、本巻ではそれらに加えキンバエやニクバエが登場し、死骸の肉を溶かしてスープにして消化するという。それらのお陰で自然界が清潔に保たれ、栄養分が循環していく。同じように驚かされるのは、シンジュコブスジコガネがキツネの腸で消化できないウサギの毛をキツネの糞から取り出して食べるという話で、ファールは観察と推論により、その事実を掘り起こす。ほかにはカツオブシムシの残した蛇皮を食べるイガという話もある。

最後の2章はナガコガネグモとナルボンヌコモリグモというクモの話である。クモは昆虫ではないが同じ節足動物で、その生態も興味深い。ナルボンヌコモリグモの観察はとてもすごいと思うが、奥野によればさすがのファールも歳で視力が落ちて、徹夜の体力もないため見逃したり誤った推測をしているという。確かに本巻が出た頃は、80歳を超えているのである。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第五篇 囚われの女 I,II」（集英社文庫）

面白いことにファールとブルーストの翻訳本を、ちょうど同じようなペースで読んでいる。ファールは小学館版全20巻の内16巻まで読み終わった。全体の8割である。ブルーストは集英社文庫版全13巻の内、これで10巻まで読んだことになるが、これも約8割である。

前にも書いたように、ブルーストを最初に読んだのが「囚われの女」で、中央公論社の「世界の文学」の1冊だったが、なぜかこれにずこぶる感心した。だから今回期待して読んだのだが、思ったほどの感激はなかった。同じ鈴木道彦訳なので、多少の手直しはあったとしても中身は基本的に同じはずである。若い頃が多感な受容力が残っていないということだろうか。しかし、そのときはこの長い「失われた時を求めて」のここに至るまでの流れも知らず、その独特の文章にも慣れないまま、いきなりこれを読んでどうしてそんなに気に入ったのか、むしろそれが不思議である。

アルベルチーナをパリに連れてきて、自分の家に閉じ込めてからの話である。それにしても「私」のアルベルチーナに対する感情はとても理解しにくい。たとえば、

「第一、私はもうほとんど彼女を美しいとも思わなくなり、いっしょにいると退屈して、自分が彼女を愛していないことをはっきり感じていた」(p.24)

「私は突然、そして一瞬のあいだだけ、このつまらない娘に燃えるような思いを感じることができた。」(p.109)

のように、とても否定的で意地の悪いことを書いている。それは前の巻の終わりの方から続いている感情である。一方で、嫉妬心は非常に強い。その嫉妬から家に幽閉しているのであり、アルベルチーナが出かけるときも、アンドレをいつも監視役につけているのであ

る。これまでは嫉妬の対象はサン＝ルーなどの男だったが、前巻からゴモラの疑いで女が主になる。ところがそのような嫉妬が起こるときだけ、愛情というかいとしさが湧き起こるらしい。そうでなくて安心できるような状況だと、退屈してしまう。あげくに何度もほのめかされてきたが、巻の最後でアルベルチーナが逃げ去る。

「私」はアルベルチーナに対しての嫉妬に苦しむが、それに関連して彼女が嘘をつくこと、あるいは嘘をついているのではないかという疑いに苦しむ。アルベルチーナの嘘を「私」が疑うことには、みな根拠があるような書き方をしているが、一方で読者にはこれが「私」の一方的な思い込みではないのか、という印象を与えるような書き方をしているとも言える。しかし、「私」の方はアルベルチーナ以上にたくさんの嘘を実際についている。それで読む側としては、「私」の勝手にとてもついていけないという気にもなる。

前巻の「ソドムとゴモラ」でヴェルデュラン夫妻が久しぶりに出てきたが、そのサロンに大貴族のシャルリュスも出入りするようになる。そのシャルリュスは若手ヴァイオリニストのモレルを囲っているが、このシャルリュスとモレルおよびヴェルデュラン家との関係が、この巻の一つの中心テーマである。シャルリュスはヴェルデュラン家を利用してモレルの演奏会を開き、そこにナポリ王妃などの大貴族を招待するが、ヴェルデュラン夫妻にそれらの招待客を紹介すらない。それに怒ったヴェルデュランたちは、シャルリュスとモレルの仲を裂く行動に出る。ヴェルデュランのような成り上がり

のブルジョアとゲルマント公爵夫人に代表される大貴族との関係は、この小説全体を通して扱われるテーマだが、どちらかと言えば貴族を持ち上げてブルジョアを馬鹿にしたような書き方がこれまで感じられた。しかし、どちらにも皮肉の眼が向けられている感じも出てくる。その間にあって、「私」の両親はブルジョアらしいが「私」は貴族たちに気に入られている。アルベルチーヌは庶民らしいが、ボンタン夫人の姪でボンタン夫人というのはある程度の地位にあるらしい。

Kindleで出ているMarcel Proust: Œuvres complètes - Les 40 titres et annexes (annotés et illustrés) (French Edition)[Kindle 版]を6/8に買った。何と99円である。プルーストほど難解でなくてもフランス語の小説などぼくのフランス語の能力ではとても手が出ないので、単に手に入れたというに過ぎないが、それにしても著作権切れとデジタル化の効力は驚くべきものがある。

「囚われの女」はプルーストの死後に出版されており、その校訂にはいろいろ問題があるらしい。そのせいかどうか分からないが、ときどき文章の脈絡がおかしいと感じるときがある。たとえば「コンブレの司祭も、天才的人物ではなかったがなすべきことは心得ている人だった。」(Iのp.31) というあたりは、ぼくには前後関係がよく分からない。

Iの巻末エッセイは加賀乙彦，IIの巻末エッセイは姜尚中である．とくに姜さんの文章が面白い．その冒頭はこうである．

「「朝鮮人」（チョーセン人）と聞く度に今でもわたしは戦慄を覚えることがある」

まるで四方田犬彦という人が「ゲルマントの方II」の巻末に書いた「エッセイ」を受けているようだが，内容はまるで違う．四方田の方はユダヤ人を朝鮮人に置き換えて差別意識をパロディー化したものだったが，こちらは姜さん自身の体験と，鈴木信太郎訳の「悪の華」（鈴木信太郎が鈴木道彦の父親だということも初めて知った），および鈴木道彦の連載「越境の時」とをからめた重い話である．姜さんはチョーセン人として過ごした自分の軌跡と戦後史を重ね合わせた作品を「越境」と題して出版予定だという（この文庫が出たのは2007年だが，今に至るまでこの姜さんの本が出版されたという気配がない．）．ところが「越境」という語がたまたま重なっただけでなく，鈴木道彦は金子鎮宇こと李鎮宇と金岡安弘こと金嬉老の事件を通して，「在日朝鮮人＜問題＞」に関わってきたのだという．

姜さんとは情報学環で同僚ではあったが，親しく口をきいたことはない．彼が書いたものもこれまで読んだことがなく，なんでこんなに売れっ子なのか分からない，という状態だった．この文章で改めて見直した．

Walter Isaacson, "Leonardo Da Vinci" (Kindle Version)

紙版だと625ページある。翻訳だと上下合わせて750ページぐらいある。長いが飽きさせない。内容的にはとくにひねったところはなく、ダヴィンチの生涯を経年的に追う。すべての絵画が取り上げられ、水理学、解剖学、などの科学の分野における仕事は、膨大な手稿を丹念に読み込むことでカバーされる。

作者は美術の専門家ではなく科学史家でもない。この本の前はSteve Jobsの伝記を出している。Einsteinの伝記もあるらしい。イタリア語は読めるのだろうか。そうでなくてはこんな本は書けないだろうが。

ダヴィンチの絵のすごさは、ヴェロッキオに弟子入りしていたころに歴然としていたことは有名である。代表的なキリストの洗礼の絵の、左にいる天使がダヴィンチによるもので、ヴェロッキオによるもう一人の天使と比べてはるかに美しく描かれていることは、ヴァザーリ以来よく言われていることである。そこですでに技法としてのスフマート、すなわちものの境界を線を引いて表すのではなく、色の積み重ねとグラデーションで表現するという方法を体得していることが分かる。

この例に限らず、ダヴィンチの絵はすべて絵の具をうすい層に何層にも重ねて描いているので、おそろしく手間がかかっている。それ

を実現するには根気と完璧を追究する精神が必要である。それと同じような精神力が、人体解剖や流体の観察や工学機器の設計や劇やページの制作など、ダヴィンチが手を下したあらゆることに注がれている。一方で、それが理由となって、多くの作品や著述の企画が完成せず、途中で放棄される結果にもなる。

ダヴィンチは画家であり科学者であり工学者だった。その時代に科学者や工学者という言葉はないか、あっても現在とは異なる意味だろうが、ダヴィンチが発見したものが100年後、200年後、さらに500年後の現代に再発見されている例がいろいろ挙げられている。たとえば流体が波動であることを理解し、ホイヘンスに先立つこと2世紀で、回折現象を説明している。あるいはベルヌーイに先立つこと200年で流体が速く流れればその圧力は下がるという原理を発見している。「太陽は動かない」ということもノートに大書している。コペルニクスに数十年、ガリレオに100年先立つ。また、月は自ら光を出していないということも言っている。

極めつけは心臓の大動脈弁(aortic valve)の動作についての洞察である。大動脈弁が閉まる原理を流体力学の考察から発見したのだが、その細部にわたる解明は1960年代に正しいものであることが再発見されたのだそうだ。

ダヴィンチが解剖にこれほどの情熱を注いだのは、初めの目的は画家として人の動作や表情を描くためだったかもしれないが、すぐに

科学者としての真理追究が目的になったという。空がなぜ青いかというような光学的な疑問とその解明なども、同じように絵から出発して進んだ科学の眼だろう。驚異的な動体視力をもっていたらしいが、幾何学の能力も備えていた。ただ、代数というか計算は不得意だったらしい。解剖学や光学の著述の計画を持ちながら完成しなかったが、膨大な手稿が残されたことは（一部失われたものもあるらしい）、後世への大きな贈物だろう。

サガン、朝吹登水子 訳「悲しみよ こんにちは」(新潮文庫)

だいぶ前に録ってあった1957年の映画「悲しみよ こんにちは」のビデオを見た。フランス映画だと思って見始めたが、イギリス・アメリカの共同制作で、セシルがジーン・セバーグ、アンヌがデボラ・カー、父のレイモンがデヴィッド・ニーヴンという配役だった。映画としてよくできていると思ったので、学生時代に読んだ新潮文庫版を引っ張り出してきて読んでみた。今は河野万里子という人が出した新訳が同じ新潮文庫から出ている。2008年に出たらしい。この朝吹訳の新潮文庫版は、初版が1955年に出ている。フランスでの出版の1年後という速さだ。ぼくが持っているのは1969年の第54刷で、日本でもよく売れたらしい。

サガンのこの処女作が出版されたのは1954年で、彼女が18歳の時である。1952年にサガンはソルボンヌ大学に入学しているが、そのころからこれを書き出したという。本文中にも小説が売れてサガンが有名人になることを予見するような文章がある。

「私は父に、これから文学士号をとる勉強をし、知識人たちと交際し、有名になり、うんざりするような女になるのだと説明した。」(p.83)

訳者の朝吹もこれが売れて潤ったことであろう。この朝吹登水子を大叔母とする朝吹真理子が「きことわ」で芥川賞を取ったのは2011年だった。

映画は原作をかなり忠実に再現していることが分かる。昔読んだことは忘れていたので、小説の方が映画をもとに書き下ろされている(novelize)のかという錯覚を覚えるほどである。最後のセシルの仕掛けが成功してアンヌの事故に至るところは、原作では想定されている時間経過が大きく短縮されているが、映画としてはこの方が展開に緊迫感を与えて成功していると思われる。監督のOtto Premingerは「帰らざる河」や「バニー・レークは行方不明」を撮った人である。配役もジーン・セバーグだけでなく、デボラ・カーもデヴィッド・ニーヴンもよくはまっている。さらにエルザ役のミレーヌ・ドモンジョがとても魅力的なだけでなく、知性には欠けるが人の好い役柄に、これまた適役に思える。

このように若い時に読んだ本を読み直すのも、老年の楽しみである。

柏木弘雄「勝鬘経をよむ（上・下）」（NHK「宗教の時間」テキスト）

これは1998年に買ってそのまま積読だったが、この間たまたま本棚にあるのが目に留まり、それから読み始めた。これをいつどこで買ったかをかなりよく憶えているが、1998年4月の京都である。京都でICSEがあり、その期間中に脱け出してどこかの寺に行ったが、そこで買ったと思う。別に京都の寺でなくてもどこでも買えたはずのものだが、やはり周りの雰囲気感に感化されたのだろう。当時の日記を見ると、訪れた寺は金地院しか書かれていないが、そこだろうか。あるいは国立京都博物館にも行っていて、そこで「蓮如と本願寺」展をやっていることも書いているので、そっちで買ったのかもしれない。

これはNHKのラジオ放送のテキストで、「上」が4月から9月までの上半期、「下」が10月から翌年3月までの下半期に対応している。だから全12講である。

仏教の経典などこれまで読んだことがない。仏教に関連した本は、中学3年の時に倉田百三の「出家とその弟子」を読み、続いて親鸞の「歎異抄」を読んだ。それよりだいぶ後になって、渡辺照宏の「日本の仏教」を読んで、これには感心した。渡辺照宏はさらにずっと後に「不動明王」を読んでいるが、それがこの「勝鬘経をよむ」を買った1998年なのは、偶然だろうか？ とにかくそういう訳で、仏教についての知識はキリスト教についての知識にすら及ばない。しかし、日常生活では長勝寺に墓参りに行くし、家には立派な仏壇がある。

勝鬘經は大乗仏教の重要な經典である。そのこともこれを読むまでほとんど認識していなかったが、たとえば次のような解説がある。

「釈尊にはじまった仏教は、釈尊滅後約百年以後には諸部派に分かれ、出家者中心、僧院中心の部派仏教として継続発展していくのですが、紀元前後にはそれと並行して大乗仏教が成立し、「維摩經」「法華經」などの初期大乗の經典が登場し、やがて遅れてこの勝鬘經などが成立しました。」（下、p.31）

勝鬘というのは、「インド北西部に君臨した大国コーサラの国王プラセーナジットと王妃マツリーカーの娘で、隣国アヨーディヤーの王のもとに嫁いでいた勝鬘（シュリーマラー）夫人」のことである。コーサラ国王夫妻はすでに仏教に帰依しており、娘にもその教えにめぐり合わせたいと仏の功德を讃嘆した親書を送る。それがきっかけで仏に巡り合った勝鬘夫人は、自らの仏道精進への決意を明らかにし、そのあと大乗仏教のさまざまな教えを滔々と演説する。その演説を記録したものが勝鬘經である。

著者の柏木弘雄はこの本では肩書が松阪大学女子短期大学学長となっているが、仏教学者でとくに大乗仏教を専門とするらしい。經文の紹介は丁寧で分かりやすい。しかし、後半の如来蔵説などはもとものが難解で、かなり説明に苦心している。

とにかく20年以上前に買った本を、改めて通読できたのはよかった。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第六篇 逃げ去る女」（集英社文庫）

いよいよ終わりに近づいてきた。この第六篇は第五篇と同様にブルーストの死後に出版されたものだが，テクストにブルーストが手書きで全体を清書したノートと，別に第五篇と第六篇のタイプを作らせたものがあり，そのタイプ版はブルーストが死ぬまで修正を加えていたという。ところがそれらの原稿の間に異同があり，研究者を悩ませているらしい。

「囚われの女」から「私」の思考や行動に付いていけないものを感じるところがあったが，「逃げ去る女」に来ては，話が破綻しているのではないかとすら思えるものがある。

まず，アルベルチーナが逃げ去った後，「私」は大いに動揺する。それなら自分で取り戻しに行けばよいのに，なぜかサン・ルーにそれを頼む。そのサン・ルーの描き方が，あれほど仲のよい親友だったのに，これまでと打って変わっている。まず「私」はサン・ルーにアルベルチーナの写真を見せる。「私」はアルベルチーナとサン・ルーの間を疑って嫉妬したことがあったはずなのに，写真で初めて顔を知ったことになり，それで「これなの？君が愛している娘さんって？」と言ってあっけにとられている(p.54)。さらにサン・ルーが知らせを持って来るのを階段に出て待っているときに，サン・ルーが「私」に気づかずに，気に入らない召使を餌にするには，召使が伯母に依頼されてどこかに届ける品物を，隠してしまう

とか汚してしまえばよいと言っているのを聞いてしまう。このような意地の悪さ，倫理性の欠如は，これまでのサン・ルーの描き方と相容れない。

さらに不可解なのは，アルベルチーヌが突然乗馬中の事故で死んでしまうことだが，その知らせは電報で来たというだけで，まず事実なのかどうか不確かである。それで「私」はボンタン夫人のところに飛んで行って亡骸に対面し，どうしてそんなことになったのかを周りに訊き，通夜なり葬儀なりに列席し，遺品を確かめるというような行動に出るのが自然だが，まったく何もしない。だから読者としても本当に死んだのか，心もとない思いが続く。そのような行動をする代わりに，「私」はアルベルチーヌがゴモラの振舞いをした証拠を求めて，なぜかバルベックのホテルの給仕長のエメに調べさせる。その報告では，アルベルチーヌへの疑いが濃厚となる。しかし，死んだ後でそのような証拠を集めて，どのような意味があるのだろうか。ストーリーとしては実は死んでいなかった，というような展開になるのかと思ったが，そうはならない。結局，後半はアルベルチーヌのことを段々忘れていく，というか愛の感情が失われていくという話で，ずいぶん冷たいものだというのが感想である。

ブルーストもこのあたりの展開に気が咎めるところがあったのか，次のように書いている

「それにしても、もはや何物でもなくなった女が、彼女の六年前の行動のばれたことを知らずにいるからといって私たちが残念がるのは、結局のところ、一世紀後の読者が死んだ私たちのことをまだ好意的に話題にしていたほしいと願うのに比べて、はるかに滑稽なことなのだろうか？」(p.220)

この中で「一世紀後の読者」について触れているところは、まさに1世紀後の読者としては、思わずどきりとさせられる。

この巻では、ジルベルトが再び数多く登場する。最後にはサン・ルーと結婚する。しかし、結婚した後、タンソンヴィルにいるジルベルトに「私」は会いに行き、まるで夫婦のような生活をしているのがよく分からない。よく分からないと言えば、サン・ルーはこの巻でソドムであることが明らかにされ、ジルベルトと結婚した後もモレルと関係したりしている。

巻末エッセイは堀江敏幸である。作家らしい、次のような感想を書いている。

「私にとって、プルーストを読む喜びは、話者が書きはじめる前のぬかるみをわがことのように引き受け、おなじ箇所と同じように足を取られるという、苦しみの追体験と直結している。」

渡辺照宏「お経の話」(岩波新書)

学生時代に渡辺照宏の書いた岩波新書をいくつか読んだと思っていたが、どうやら「外国語の学び方」と「日本の仏教」だけだったらしい。手元にあるこの「お経の話」は1971年発行の第7刷だが、読んだ形跡もないし記憶もない。ぼくが買った本ではなくオヤジのものかもしれない。

「勝鬘経をよむ」を読んだので、これを読む気になった。まず第8章「勝鬘経」を読んだが、13ページと短い。しかし、要領のよい解説である、それから最初に戻って通読した。

全体は2部に分かれている。第1部がお経全体についての解説で、3章からなる。第1章「お経の成立」、第2章「現状の仏教聖典」、第3章「お経の形式と実例」で、仏教について無知な自分には勉強になる。第2部が大乗仏教の個々の経典を概説したもので、7つ（7種類）の経典が取り上げられる。般若経、華嚴経、維摩経、勝鬘経、法華経、浄土教経典、密教経典。

仏教はキリスト教より500年前に興っているが、かなり類似するところがあると改めて感じた。どちらもユダヤ教とインド教（バラモン教）という既成の宗教文化の中から生まれ、その影響を強く受けている。ブッダ（シャーキャムニ）とキリストは歴史上の実在する人間で、多くの弟子が付き従った。それぞれは自分で著作をしなかったが、口頭で説いたことを弟子や後世の人間が聖書や経典としてまとめた。両者は争いと貧困・病苦の蔓延する世にあり、それに苦

しむ人々に救いをもたらすことを目的とした。倫理的な教え、とくに利他の精神は基本的に共通するものだろう。また、キリスト教は誕生の地エルサレムではなくヨーロッパで、仏教も誕生の地のインドよりむしろ中国・日本や他のアジア諸国で広まった。

仏教の経典は膨大な量があるが、サンスクリットの前典は失われても漢訳の大蔵経として多くが保存されている。それらの多くにチベット語訳版もある。他にパーリ語の聖典がある。パーリ語のものはセイロンで保存されてきて、古い形を残している部分があるが、渡辺が強調するのは、パーリ語聖典が古代仏教の形をもっともよく残すものとは限らない、ということである。

仏陀のことはいろいろな形で伝えられてお経となっているが、一部は詩句の形を取り「偈」として唱えられてきた。しかし、偈に限らず漢文を音読みする「お経」は、現代のわれわれにはチンプンカンプンである。

「僧侶も信者も自分の所属する宗派や宗教団体で想定した「お経」以外は読まないし、また日常読んでいる本文について理解しようと努めないことも多い。」

「現在の日本の仏教は多くの宗派にわかれていて、宗派ごとに聖典が異なり、よその宗派の聖典にはあまり関心を示さない。」(p.1)

ぼくは「信者」ではないが、親の墓は鎌倉の日蓮宗長勝寺にあり、だからその檀家ということに一応なる。そこで聞くお経の多くは漢文の音読みだが、一部には日蓮や多分その弟子による日本語のものもある。オフクロや美重子叔母は基本的なものらしいお経は暗記していて僧侶に和して唱えていたが、われわれの代ではそのような教養は途絶えてしまった。

平安・奈良の時代の読書人は、仏教聖典を漢訳で読んで理解し詩文を作るときの材料にしたが、その力は時代ともに衰えた。それでも明治の逍遙、露伴、漱石、鷗外などは漢訳聖典をよく読んでいたという。旧約聖書はヘブライ語、新約聖書はギリシア語で書かれているが、仏教聖典やキリスト教聖書が個人の言語習得、一般の翻訳技術やグーテンベルグ以来の印刷術に与えた影響は大きい。カトリックの神父が外国語をすぐにマスターするのは、聖書があるからだと言った。仏教聖典を漢訳した情熱と能力にも、驚嘆すべきものがある。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第9巻上・下）」（集英社）

年末になったが、とにかく第9巻を読み終えた。

第8巻の最後の2章がクモに充てられていたが、第9巻では最初の16章がすべてクモの話である。そして第17章から第23章まではすべてサソリの話で、昆虫は最後の2章のカイガラムシだけだが、これも

昆虫と言ってもかなり変わった形態で、とくにハマカイガラムシは普通、木の実と間違えられるという。

奥本の解説によると、クモも昆虫もサソリも節足動物である。節足動物門は鋏角亜門（クモやサソリなど）、多足亜門（ムカデやヤスデなど）、甲殻亜門（フジツボやエビなど）、六脚亜門（昆虫）の4つに大別されるという。

奥本による訳注でとくに感心したのが、第5章「アズチグモ」にある芥川龍之介の短編「女」を紹介しているところである。「女」という題名だが雌蜘蛛の話である。奥本は訳注でこの芥川の短編の「三分の一ほど」を引用している。それでさっそく例のKindle版芥川集で探して、全文を読んでみた。さすがに芥川らしい文章である。

その内容は明らかにファールブルの昆虫記、とくに通称「カニグモ」といわれるアズチグモの章を参考にしているらしい。奥本の考察は、芥川はその元の文章を、いつどうやって知ったかに及ぶ。日本で初めて「昆虫記」が刊行されたのは1922年で、大杉栄の翻訳であったことはよく知られるが、芥川が「女」を書いた1920年より後である。しかし、それより前の1919年に英義雄訳の「蜘蛛の生活」が刊行されている。これはファールブル昆虫記を虫の種類ごとに分けて作られた抜粋英訳本から、クモの巻を取り上げて重訳したものだそう。芥川がファールブルの原書を読んだのか、英訳本を読んだのか

か、英の和訳を読んだのか、分からないとしながらも、前年に日本で出た「蜘蛛の生活」から着想を得たのではないか、というのが奥本の推測である。

クモの巣に関して、対数螺旋という用語が出てくる。第10章「コガネグモの幾何学」に「このような性質から、クモの網が「対数螺旋」でできていることがわかる。」と書かれている。対数螺旋は中心からの距離が、角度に比例するもので、螺旋間の間隔が対数的に増加する。それに対し、Wikipediaには次のように書かれている。

「同じ渦巻きでもクモの網に見られる横糸の渦巻きはアルキメデスの螺旋である。（対数螺旋では）中心から伸ばした半直線と螺旋は無限回交わるが、隣り合う交点について、原点との距離の比は一定で $e^{2\pi b}$ である。対して、距離の差が一定であるような螺旋がアルキメデスの螺旋である。」（Wikipedia 日本語版のみ）

この問題は奥本も触れていないが、多分対数螺旋でなくアルキメデスの螺旋であるというのが正しいだろう。自然界ではたとえばサザエとかアワビの殻が、基本的に対数螺旋の形態を取っている。しかし、ファールブルが持つ数学に対する愛情が大きいことは、「対数螺旋」をきっかけに第13章「数学の思い出」、第14章「小さな机の思い出」と昔の思い出が綴られるところからもよく分かる。

サソリは猛毒のイメージが強いが、奥本によればサソリは全部で1000種ぐらい知られている中で、人間に致命的な毒を持つものは20種ぐらいだという。また、ファールが繰り返し書いているのは、サソリがいかに臆病かということである。餌としてバッタやコオロギをサソリをいれた金網の下にいくつか入れておいても、サソリの方が逃げてしまう。それは餌としてサソリの好みでないということもあるが、そもそもサソリは少食だという。何か月も何も食べずにいても平気らしい。一方で繁殖期には、交配後、雄は雌に食べられてしまうことがあるという。ウスバカマキリが交尾後、雌が雄を食べてしまう話は、ファール昆虫記で有名になったらしいが、奥本に言わせるとこれは飼育下という狭い場所における特殊な環境のせいだという批判が、その後いろいろ出たという。だからサソリについても、奥本は自然状態では同じことが起こるかどうかについて、疑念を呈している。

ファールはしかし、そのような臆病なサソリをけしかけて、いろいろな虫と人為的に決闘させる。そういう実験を始めるとファールはしつこく、ナルボンヌコモリグモ、カマキリ、ケラ、コバネギス、スカラベ、サイカブト、オオクジャクヤママユ、ムカデなどをいろいろな条件を変えて対決させる。いずれもサソリが勝つが、毒が効くまでにかかる時間には違いがある。ただ成虫に対しては大体すぐ効くが、幼虫に対してはまったく効かないことがよくあり、無事成虫になってさらに次の世代を産むことが多いという。

2019年

呉座勇一「応仁の乱」（中公新書）

この本が大ベストセラーになったのは、実に不思議だ。2016年10月25日に初版が出ている。評判になっているのは知っていたが、とくに応仁の乱に関心もなかったので、手を出さずにいた。だから買ったのは遅く、第30版なのだが、それが2017年11月30日となっていて、1年のうちに30版とはすごい。帯には「40万部突破」と書いてある。

2017年5月27日付けと思われる産経ニュースのウェブ上のインタビュー記事によると、著者の呉座自身が「ある程度歴史に詳しい読者を想定して書いた真面目な本が、こんなに売れるとは全く予想外」と言っている。「奇をてらったタイトルを付け、とにかく単純化して分かりやすく書くという昨今の新書のトレンドとは正反対の内容。そういう本が売れたのは、非常にうれしい」とも言っている。確かにそうだ。日本の読者層の質の高さを改めて感じさせる出来事と言えよう。

確かに読んでみると、「楽に読める」という類の本ではない。新書と言ってもページ数も300頁あり、出てくる人名の数もおびただしくて、簡単には頭に入らない。しかし、そこにはいろいろな工夫があって、少しページをおいて登場した人物や事件については、カッ

コ書きで前出のページが参照される。それをまめに拾って読み返すと、だんだん話に繋がりがついてくる。

著者の工夫は興福寺の二人の高僧、経覚と尋尊の日記に焦点を当てて、そこから応仁の乱を照らし出そうとすることである。京都を舞台とする応仁の乱だが、その影響は京に近い奈良だけでなく、近畿地方全体に及んでいる。昨年(2019年)の12月の初めに奈良に行って興福寺を訪れたので、書き出しの

「奈良というと何を思い浮かべるだろうか、「鹿」という人もいるかもしれないが、東大寺の大仏を真っ先に想起する人が多いのではないだろうか。しかしながら、中世においては奈良とは興福寺のことであった。」

という文章は腑に落ちる。さらに奈良ホテルに4泊したが、嘉吉の変のところで、

「鬼蘭山とは、現在の奈良ホテルの敷地になっている丘陵のことである」(p.55)

という記述が出てくる。その後、経覚は鬼蘭山に城を築き、そこに移住する。しかし、筒井方に攻められて、経覚は自ら火をつけて逃げる。その後も、鬼蘭山はやはり戦場として登場したと思う。

興福寺においては大乘院と一条院が門跡であり、「両門跡」と称した。その両門跡の支配を巡って摂関家が分裂し、近衛家が一条院、九条家が大乘院という棲み分けが成立した後、近衛家から鷹司家が

分立，また九条家から一条家と二条家が分立という経緯があったという。経覚は九条家出身で大乘院門主となる。その後，経覚が失脚した後に，一条家の尋尊が大乘院に入り門主となる。しかし，経覚もしぶとくて四度も復活する。奈良ホテルに隣接して大乘院庭園があってそこに入ってみたが，そのときは大乘院というのも名前としてしか認識していなかった。

応仁の乱が始まったのは1467年で1477年に一応終わる。本書はその前後もカバーしているが，時代は基本的に15世紀後半である。この間うち，続けて読んだキリシタンの時代は，ちょうどその1世紀後のことになる。その時代の史実の多くは，宣教師たちが残した克明な記録に負っている。その1世紀前のこの時代について，二人の僧が残した詳細な記録がこれだけ役立つことは，面白いことである。

小川剛生「兼好法師 徒然草に記されなかった真実」（中公新書）

「徒然草」は，高1か高2のときに読んだ。家にあった戦前に出版された古典文学全集のような双書の一冊で，現代語訳ではなく原文だったが，注は付いていた。それで全段を読んだと思う。

この本は「応仁の乱」に続き中公新書から出た中世を扱った歴史書だが，時代は応仁の乱より1世紀ほど前になる。本書が出たのは2017年11月だから「応仁の乱」の1年後である。「応仁の乱」が当

たったので柳の下のドジョウを狙った企画という訳ではないと思うが、出版側としては励みになったのは確かだろう。

帯に「今から五百年前、「吉田兼好」は捏造された」とある。そして、第一章の冒頭で兼好を含む吉田家（卜部氏の中で吉田神社の神主を兼ねた流）の系図が示され、それに基づき兼好はまず後二条天皇の六位蔵人になり、任期6年が満ちて辞退、その労をもって従五位下に叙され、左兵衛佐に任じた、というのが定説になっている、ということが紹介される。それで帯にある「捏造」というのは、この定説が誤っておりこの履歴は偽造されたものであるということらしいのだが、その後、最後の第七章になるまで、その話は一切出てこない。それであの帯の文句は読者を惹きつけるための方便かと思ひ始めた頃になって、最後の章を読むと、15世紀にいた吉田家の吉田兼俱という人物が、官位の昇進と家格の上昇を狙って家系図を偽造し、当時知名度が増していた兼好を取り込み、その履歴も六位蔵人から従五位下にと詐称したという自説が示される。

それまでの第2章から第6章までは、この説を提示するための準備という訳でもない。もちろん兼好の事績を語るのだが、それぞれが独立性の強い話である。たとえば、第2章では金沢文庫の称名寺に残された仏典の書写の裏にある手紙の中で、兼好に関するものについての話が語られる。昔は紙が貴重だったから、手紙の裏が利用されたのだが、歴史家にとってはもとの手紙の方が貴重な史料である。その中に、金沢流の北条氏の第三代当主金沢貞顕が称名寺の長老鈿

阿に宛てた書状が数多くあり、その中に兼好の名が出てくるものがあるという。また、兼好の母らしき人が兼好の姉らしき人に宛てた亡夫の供養の段取りを頼む書状もあるという。この貞顕は六波羅探題として京都に長くおり、兼好はその家来として仕えたいらしい。兼好自身も金沢にある時期住んでいたようである。

第3章では、兼好が京都に住んでいた時の土地売買の証書が材料である。兼好が所持していた土地を売った時の記録で、兼好研究では貴重な史料らしい。第4章では内裏に出入りする兼好のことが語られる。第5章では、太平記に出てくる高師直が艶書を兼好に代筆させたという話が題材である。これはすでに虚構であるとされている。一方、太政大臣洞院公賢の日記には、兼好が師直の使者として師直が着るべき装束を尋ねに来たという記述が出てくるそうだ。第6章では歌人としての兼好が語られ、その家集が題材となっている。

こうしてみると、徒然草そのものは全体がよく残っているが、その他の兼好に関する史料は意外に少ないらしいことが分かる。

Yuval Noah Harari, "Sapiens: A Brief History of Humankind" (Kindle版)

同じ著者のHomo Deusを周囲で話題にする人が多いので、前に買ってあったこちらをまず読んだ。長いが、7万年のホモ・サピエンスの歴史を400ページぐらいで書いてしまうのだから、確かにbrief

historyである。しかし、読み応えは十分にあった。久しぶりに読書の醍醐味を味わった気がする。Steven Pinker, "The Better Angels of Our Nature"以来の大作の読書になるが、内容的にもこのPinkerの本と重なるところがある。とくに第18章の"A Permanent Revolution"の中の"Peace in Our Time"という節以降は、ほぼ全面的にPinkerの主張するところと重なる。それ以外にもJared DiamondやThomas Pikettyなどこれまで読んだものと重なる部分はいろいろあるが、Harariの知識は該博で、それらの歴史、人類学、進化生物学、情報科学、経済学などの成果が縦横無尽に活用されている。

この人はイスラエルに住むユダヤ人で、この本は最初ヘブライ語で書かれ2011年に出版され、英語版が2014年に出て大ベストセラーになったという。翻訳者の名前は出ていないから、自分で英語にしたのだろう。オックスフォード出身で英語には問題がないらしい。実際、この本の英語はきわめて読みやすいが、ところどころ気の利いた語や言い回しが出てくるのは、こちらの語彙不足を示すものである。

サピエンス全体の歴史ということで、通常の歴史学の対象をはるかに超えているが、さすがに原人にまでは遡らない。しかし、時代が重なるネアンデルタールについては、かなり記述がある。ホモサピエンスがネアンデルタールを絶滅に追いやったのか、それとも交配で吸収したのか。前者の説が支配的だったが、DNAの分析により現代人にも一部ネアンデルタールのDNAが混じっているそうで、後者

も部分的には正しいらしい。とにかく、ネアンデルタールとの折衝も含めた、ホモサピエンス7万年の歴史が対象である。

ネアンデルタールに克った理由としてHarariが挙げるのは、架空の存在を創りだす認知能力である。このお蔭で創り出した話やシンボルを共有して連携をとることができるようになり、狩りやネアンデルタールなどの他の種との争いにも有利となったとする。この認知革命が最初の革命だとすると、次の革命は農業革命である。農業は個々人を幸せにするよりその生活を苦くしたとはよく言われることだが、集団としての人類には食料の備蓄や組織力という点で大きな武器を与えた。並行して文字が発明され、記録が行われることにより、国家規模の組織化が可能となった。この辺りはJared Diamondなどと特別異なる認識ではない。

その後、世界は統合の方向に進む。分断されていた文明が、帝国やそれに類した勢力に統合されていく。統合を促すのは3つの力、すなわち経済＝金、政治＝帝国、そして宗教である。そこで金、帝国、宗教について、それぞれかなりのページを使っていろいろな話が展開されるが、どれも面白い。とくに宗教については、採集狩猟の時代のアニミズム、その後の多神教、続いて一神教とマニ教などの二神教、との歴史が記述される。これらは宗教の歴史として広く研究されてきたものだろうが、とくに二神教については教えられることが多い。一神教の問題は、唯一神が全能全智なら、なぜこの世に悪があるかということをやうまく説明できないことである。善悪の

二神が相克する世界は、その点をうまく説明できる。しかし、結局二神教は一神教に負けて現代ではほとんど勢力がない。

自身がユダヤ人のHarariはユダヤ教について、ユダヤという小さな1つの民族に限られた宗教で、世界宗教になりえなかったと簡単に切って捨てる(p.217)。ユダヤ教の扱いが小さい理由は、本書がもともヘブライ語で書かれたという経緯やイスラエルにおける歴史教育が偏ったものであるという指摘ともに、すでに前の章で説明されている(p.186)。著者自身が代わりにかなりの思い入れがあるのは、仏教である。HarariはVipassanāという仏教系の瞑想を実践しているという（そのことは本書ではなく、Home Deusの方の謝辞に述べられている）。本書は歴史を語ってきた後、やや意外なことに幸福論を展開する(第19章)。そこで瞑想について高い意義づけを与えている。

もう一つユニークに感じるのは、動物虐待に対する憤りである。Pinkerの"Better Angels"でも動物の権利保護と動物虐待の防止運動についてかなり多くのページが割かれていて、そういうものかと思った。Harariは牛や豚がどのような酷い目に会わされているか、強く訴える。子牛が生まれてすぐ母牛から離され、文字通り身動きもままならない囲いに閉じ込められて太らされ、平均4ヶ月で殺されていくことが、写真付きで説明されるのを読むと、さすがに人間の勝手さを思わざるをえない(p.95)。現在、世界には10億頭の羊、10億頭の豚、10億頭以上の牛、そして250億頭の鶏がいるそうだ。も

し、種の成功の尺度をその繁殖数で測るなら、これらは大成功の種と言える。しかし、それらの種の個体にとっての一生は、まことに悲惨だとHarariは言う。Harariは完全な菜食主義者なので、その主張と行動は整合している。この動物に対する見方は、人間至上主義が行き過ぎ、他の動物に対して神の地位を得ているとの主張と繋がるものである。

最終章は"The End of Homo Sapiens"と題し、生命工学、AI、シンギュラリティ、フランケンシュタインのような人造人間などの話が展開され、まさにHome Deusにつながる議論で終わる。

Henry James, "Daisy Miller," (Greatest Short Works of Henry James, Barnes & Noble Books, New York)

この間、NHK/BSで放送されたのを録画しておいた映画の"Daisy Miller"を見た。監督はピーター・ボグダノヴィッチで1974年の作品だが、当時の日本では封切られなかったらしい。IMDBの評を見ると、多くが主演女優のCybill Shepherdのことを書いていて、7-8割がたがけなしているが、しかし、中にはまさにDaisy Millerにぴったりのという評もある。この女優は若くて美しく、魅力に溢れていてDaisy Millerらしさを感じさせる。ただ、監督による演出なのか、本人の意図なのか、セリフを異常に早くしゃべる点に不自然さを感じる。このことを言っている評も多い。また、ボグダノヴィッチは「ペーパー・ムーン」などを撮った有名監督だが、成功を支えた前の奥さん

を捨ててCybill Shepherdと結婚したという経歴があるそうで、そのためにもこの女優がけなされるのかもしれない。

若い頃、中村真一郎をわりとよく読んだが、中村の書くものの中に、ヘンリー・ジェイムズがよく出てきた。それでヘンリー・ジェイムズを近しく感じていた。また、その兄のウィリアム・ジェイムズの「心理学」も岩波文庫版を高校生の頃買っているが、ちゃんと読んではいない。しかし、ヘンリー・ジェイムズをこれまで読んだかということ、記憶にない。本棚を探して見ると講談社版世界文学全集の1冊の「鳩の翼」（青木次生訳）があるが、1ページも読んでいない。これは1974年に発刊されているから、これを買ったのは多分その年に読んだ中村真一郎「この百年の小説」の影響だろう。

もう1冊見つかったのが、このDaisy Millerの入ったGreatest Short Worksである。これはThe Book of the Monthで買ったに違いないが、やはりまったく読んでいなかった。Washington SquareとかThe Turn of the Screwとかの有名短編が入っていて、1992年に出版されたものである。AmazonのKindle Shopを探したら、Henry James: The Complete Novelsというのが値段0円が出ていたので、それをダウンロードした。これで短編、長編の主なものは手に入ったことになろう。しかし、面白いことにKindle版のDaisy MillerやThe Turn of the Screwなどは、単独で400円以上の値が付いている。

Henry Jamesは1843年生まれで1916年没だから、鴎外や漱石より20年以上年上である。同じ1843年生まれの日本人をネットで探してみたら、新島襄が出てきた。このDaisy Millerという作品は、1878年に出ている。坪内逍遙の「小説神髓」（1885）すらまだ出ていないときである。

しかし、140年前の小説でも、その英語はそんなに難しくない。最初にDaisy Millerが登場するときの形容が、"a beautiful young lady"とやけに平凡である。その後も、"this pretty American girl"などと変哲もない。表現に凝るのは心理描写であって、人の容貌や表情、服装や装飾品や風景などについてではないようだ。

読んでみて、映画は原作のかなり忠実な再現であることが分かった。話の展開も会話も、ほとんど変形されていない。Henry James原作の映画化は結構数があるらしいが、映画の歴史に残るような名作はあまりないらしい。

上田岳弘「ニムロッド」（芥川賞）

2017年春の芥川賞作品の山下澄人「しんせかい」にあきれて、芥川賞が出る文芸春秋を買って読むという習慣をやめて2年経つ。今回久しぶりに芥川賞の載った文芸春秋を買ったのも、他に載っている記事に面白そうなものが多かったからである。「勤労統計不正 厚労省「ブラック官庁」の研究」「ゴーン絶体絶命」「トランプVS.習近平「悪」はどっちだ」「AI「無脳論」 養老孟司」「レーダー

照射事件全真相「韓国軍艦と北朝鮮」緊迫の13分間」「二・二六事件「新資料発見」84年目の真実」など。全部読んだわけではないが、いずれもタイトルほど大したことはない。やはり芥川賞作品を読むことになる。今回は2作が入賞で、その1つ目。

最初に主人公の名前が、メールのやりとりに際してNakamotoと出てきたところで、おやおやと思った。果たしてビットコインの話になるのだが、この語り手＝主人公の名前が偶然ナカモト・サトシであることや、それとビットコインの関係は、だいぶ先にいって明かされる。

「ニムロッドは僕を見つめたまま、口の端を左右に引いて笑みを浮かべる。そして、
「君がサトシ・ナカモトだからさ」といわくありがちに言った。
僕と同姓同名のサトシ・ナカモト。ビットコインの創設者、謎の日本人であるとされる彼の正体を誰も知らない。」

というのだが、この名前が偶然一致したというような設定は、余計なことだと思う。

その友達が仁室で、あだ名がニムロッドというのも作爲的な命名である。ニムロッドは創世記に出てくるが、日本語訳では文語訳、口語訳でも「ニムロド」と表記される。「ニムロッド」という発音は英語読みの影響だろう。というより、ビットコインと並ぶもう一つの題材が駄目な飛行機のコレクションなのだが、その一つにニムロッドがあり、これはイギリスの空軍機ということなので英語読みに

なるのだろう。ただ、バベルの塔のイメージも重要な位置づけを与えられているので、バベルの統治者だったニムロッドが題名の由来らしい。この伝で行くと、もう一人の登場人物である田久保紀子という名前も何かのいわくがあるのかもしれないが、それが何かは分からなかった。

この間、ソフトウェア技術者協会のフォーラムで、「ブロックチェーンは社会基盤となるか 一現場の第一線で活躍するエンジニアを交えて」と題してNTTデータの赤羽さんという人が話をするというので出てみた。そこで質問の際に、今度の芥川賞を取った「ニムロッド」を読んだ人がいるか聞いてみたが、誰もいなかった。そこで、その主人公がサトシ・ナカモトという名前で、IT企業でサーバーのメンテナンスが仕事だが、社長から言われて空いているサーバーを使ってビットコインの発掘をやっている、というストーリーを皆に教えた。

ビットコインだけでなく、IT企業でのサーバーのメンテナンスという働きぶりだけからも、初めのうちは興味深く読んだ。ただ、途中でやや飽きて、文芸春秋版で76ページという長さを長く感じた。しかし、芥川賞作品としては平均的な長さかもしれない。もう一つの芥川賞の「1R1分34秒」も77ページで、申し合わせたようにほぼ同じ長さである。

増本康平「老いと記憶 加齢で得るもの、失うもの」（中公新書）

また中公新書だが、今度はちょっと身につまされる題名から買ってみたものだ。しかし、驚くのはこの著者は1977年生まれで40歳そこそこであることだ。まだ自分の問題とは思っていないだろう。神戸大学の准教授で、認知心理学、とくに記憶が専門という。「はじめに」に次のような一節がある。

「私は三十五歳の時からシニアカレッジで毎年、「記憶機能の加齢」について高齢者を対象とした講義をしています。その講義をお世話していただいている方に「若い先生が高齢者の記憶について話している姿が新鮮で面白い」と笑われたことがありました。確かに記憶の問題をまさに体験している高齢者に対し、その二分の一ほどしか生きていない私が高齢期の記憶について講義をするわけですから、釈迦に説法の感があります。」

記憶にはいろいろな種類があることを述べた第1章では、「記憶力の低下では日常の物忘れは説明できない」というのが重要なメッセージである。著者による実験では、大学生と高齢者とを日常生活場面での課題を与えて忘れるかどうかを比較すると、高齢者の方がむしろ忘れの率が低かったという。また、記憶の種類で言えば、ワーキングメモリやエピソード記憶は年齢と共に低下するが、意味記憶（言語的知識）は加齢で低下せず、むしろ上昇するという。

2章でもっともだと思うのは、「携帯電話は有効な記憶補助ツール」ということである。スマホをそれほど使いこなしてはいないが、インターネットの検索で助けられることは日常きわめて多い。3章では、世上でもてはやされる脳トレは、有効かどうか怪しいと

というのが著者の意見である。第4章では認知症予防が取り上げられる。適度な運動がよいとか、人とのつながりが大切、といった常識的なことしか書かれていない。第5章は高齢期における幸福論である。もっともというところも多少あるが、最初にしたように40そこそこの人に言われたくない、という気も起きる。

「応仁の乱」や「兼好法師」と比べて、ページ数も200ぐらいで短く、その上、1ページの文字量が圧倒的に少なく、量的に薄い本である。そのぶん、活字が大きくなっているのは、高齢者向けを意図したのか、結果的にそうなったのか。

Yuval Noah Harari, "Homo Deus: A Brief History of Tomorrow" (Kindle版)

Homo Sapiensは紙の本に換算すると400ページだったが、これは500ページある。ただ、その長さを感じさせず、実に刺激的な読書体験を与える。周囲のいろいろな人がこの本のことについて語っていたのが、宜なるかなという気がする。

最初の7章は、Homo Sapiensの最後の方の繰り返しである。人類は飢え、病気、戦争という災難を、21世紀が始まるまでに大きく減らすことに成功した。これは人間主義=ヒューマニズムの力である。その人間主義がさらに向かうところは、ヒトを神にすることである。しかし、そのようなヒューマニズムは、大きな問題を新たに生み出す。このような話だが、しかし同じことを語るにも、新しい材

料をつぎ込み、語り口も工夫して飽きさせない。その能力だけでも驚嘆すべきものがある。

たまたま買った文芸春秋3月号に、佐藤優が本書の書評を書いている。そこに、次のような部分がある。まず、ハラリが3つの重要な問いを提起していることを紹介する。

1. 生き物は本当にアルゴリズムにすぎないのか？ そして、生命は本当にデータ処理にすぎないのか？
2. 知能と意識のどちらのほうが価値があるのか？
3. 意識は持たないものの高度な知能を供えたアルゴリズムが、私たちが自分自身を知るよりもよく私たちのことを知るようになったとき、社会や政治や日常生活はどうなるのか？

その後を引用すると

「最後の三つの問に対して、評者はこう答える。

1. 生物をアルゴリズムに還元することはできない。生命にはデータ処理だけでは解析できない残余の部分がある。
2. 知能と意識では、意識の方が価値が高い。
3. 意識は持たないものの高度な記憶力とデータ処理能力を備えたアルゴリズムが生まれたとしても、私たちが自分自身を知るよりもよく知ることができるのは部分にとどまる。アルゴリズムが、特定の人すべてのをとらえることはできない。

ハラリ氏の答えも、評者と近い内容と思う。その背景には、超越者に対する信仰がある。ハラリ氏が主観的に神を信じているか否かについて、評者は情報を持ち合わせていない。ただし、

「ホモ・デウス」で展開されている論理の背後には、歴史は特定の目的に向かって進み、それは人間の外部にある目には見えないが確実に存在する力によるものであるというユダヤ教とキリスト教に通底する神理解がある。キリスト教徒であり、しかも基礎教育がプロテスタント神学である評者には、ハラリ氏の思考が手に取るようにわかる。」

しかし、これほど作者の意図からかけ離れた理解も、珍しいのではないだろうか。佐藤がキリスト教徒だからこうとでも言わないと自分の中で消化できないのかもしれない。また、Harariがユダヤ人だから唯一神を尊重するものとの思い込みがあるのかも知れない。とくにキリスト教から見ると、ユダヤ教は生みの親になることからある種の敬意を払わずにはいられないという複雑心理があるのかもしれない。しかし、Harariの無神論の立場はかなり徹底している。そもそも前作のSapiensから一貫して、ホモサピエンスの成功の第一要因は現実にはない話を作ってそれを共有するところにあるとし、その典型例が宗教なのである、

キリスト教徒やイスラム教徒にとっては冒瀆的に聞こえるのではないかと思うが、Harariは宗教の例として、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、ヒンズー教以外に、仏教、儒教、共産主義、ナチズム、リベラリズム、を挙げているのである(p.211)。神や宗教は人間が社会を動かしていく上で必要に応じて作ったものだという立場が、気持ちよいくらい徹底されている。

また歴史学者としてのHarariにとって、「歴史は特定の目的に向かって進み、それは人間の外部にある目には見えないが確実に存在する力によるものである」という佐藤の見方は、およそ対極にあるものと思われる。そういう佐藤に「ハラリ氏の思考が手に取るようにわかる」と言われるのは不本意に違いない。とくに第1章の"The New Human Agenda"で、歴史に学ぶ意味は、何か歴史の法則を見つけて、状況に応じそれを適用し未来を予測することではない、と強調している。歴史を振り返ると、いろいろな可能性があった。現在の状況は多分に偶然に左右されているから、ここに至るまでにたくさんの異なる道筋がありえた。そのような多様な可能性を考えることが歴史を学ぶ意味だとしている。

最後の3つの問に対する佐藤優の答えは、常識的である。しかし、これでこの本が挙げている問題提起に答えつつもりになってしまうのは、あさはかだろう。とくに第3の問に対し、そういうことはないと言うだけでは、Harariが言うdataism, data religionの持つ意味の重大さを理解していないことになるだろう。

しかし、ぼくにはこのHarariの問題提起に、別の意味でよく分からないところがある。それは意識を持った知性と意識を持たない知性という区分である。Harariは知性はアルゴリズムだという。そして感情も進化の要請から生まれたアルゴリズムだという(p.96)。それでは意識はアルゴリズムではないのだろうか。意識についてはいろいろ書いているが、現代の科学でももっとも手に負えないものだ

している。しかし、自分の感情というものがあるから、それを貫く自己の意識ができるのではないだろうか。一方、自由意志というものは、進化論的も、認知科学的も、脳科学的にも存在しないと言う。それは一応説得力があるのだが、しかし意識と意志は紙一重とも言えるので、どこに線を引くかという問題ではないだろうか。とにかく意識とは何かの解明が進まないことには、意識を持った知性と意識を持たない知性との違いという議論はあいまいに思える。

いずれにせよ、ホモデウスとしてHarariが描く未来の中心は、遺伝子工学とナノ電子工学が結びついた人間の改造とAIのネットワークである。その点は、言及されているKurzweilのSingularityのイメージと近い。それがデータ至上主義の世界である。ただ、その結果として人類は超エリートの層と無用階級(useless class)に二分されると言うところが、楽観的なKurzweilと違う。

本書の後、Harariは"21 Lessons for the 21 Century"という本を出していて、それもKindle版を買っているが、そこで何を言っているのか。後のお楽しみとしよう。

なお、Wikipediaによると、Harariの「夫」はItzik Yahavで、彼の活動のマネージャーでもあるという。確かにこの本の謝辞に、Itzikは私の伴侶(spouse)かつマネージャーであり、私のInternet-of-All-Thingsの役割を果たしているとある。Internet-of-All-Thingsとは本書

にたびたび出てくる概念で、Internet-of-Thingsをもじって、自分のことを自分以上にすべて知る存在である。

「町屋良平「1R（いちらうんど）1分34秒」（芥川賞）」

ボクシングの話である。ボクシングを題材にするものは、「傷だらけの栄光」とか「ロッキー」とか「ミリオンダラー・ベイビー」とか映画に多いものがあるし、漫画はもちろん「あしたのジョー」などたくさんある。しかし、文学ではどうか。直木賞向きの作品はいろいろあるかもしれないが、すぐには思い浮かばない。さらに芥川賞向きは珍しくはないか。すぐ連想されるのは石原慎太郎の「太陽の季節」ぐらいだ。

書きようによっては、根性スポーツものや挫折の後の栄光みたいな物語になってもおかしくない。実際、場面としてはそのような展開を予期させるようなところがある。しかし、巧みに、というべきかそのような方向に落ち込まない。まず、試合前に相手の選手のビデオやSNS情報などを集めて、空想の上で親友になる、というところが面白い。iPhoneで映画を撮っている「友達」とか、トレーナーとそれに交代した新しいトレーナー「ウメキチ」とか、ボクシングの体験希望に来てすぐにセックスフレンドとなる女の子とか、バイト先のボクシング好きの店長とか、周りに出てくる人間はみなこの主人公の「ぼく」に優しくて、また「ぼく」のよい面を評価している。それに対して「ぼく」の心理は屈折していて、周りからの好意を素直には受け取れない。たとえば、ウメキチが弁当を作って持つ

てきてくれるが、初めのうちはそれを公園のゴミ箱に捨ててしまう。人に対する屈折した気持ちを直接相手に言うわけではなく、むしろこの小説はそのような自分の気持ちの独白で成り立っている。

文体が工夫されている。ボクシングのリズムが意識されているのだろう。たとえば、青志くんとの試合の描写。

「アッパーもあるのかよ。と認識したときはもう遅い。ぼくが愚直に右フックを振った、読まれていた、わき腹に左のフックを食い、空いた隙間に入った右アッパーが、青志くんのこの日一番のパンチだった。軸を最大限まで細くとり、きわめて鋭角な斜め縦軸を回るアッパーがまっすぐ顎をもちあげて、ぼくの後頭部がロープを打った。マウスピースがこぼれて、それを追いかけるように右膝、つぎにマットについたのが右の頬だったのだから、レフェリーはカウントフォーで動かないぼくにストップを告げた。」

原文は縦書きで、句読点は点と丸だが、その句読点の打ち方にも工夫がある。

三浦篤「エドゥアール・マネ 西洋絵画史の革命」（角川選書）

中学高校時代の栄光学園の図画の教師に、小笠原という先生がいた。というか今もそうだろうが、図画の教師は学校全体に一人だけで、中学の全学年と高1の選択授業を受け持たれていた。ぼくは高1の選択も取ったので、4年間お世話になったことになる。この先生

はかなり型破りの人で、授業中にときどき脱線してお話が始まるとそれが長くなる。その話が実に面白かったが、今ではその内容はみな忘れてしまった。しかし、覚えているのは小笠原先生がマネを好きだったことで、授業でも画集を見せてくれたりしたが、高1の時だったか授業の一環ではなく自由参加だったと思うが、ブリヂストン美術館にみんなを連れて行ってくれたことがある。今、調べてみると、ブリヂストン美術館に収められているマネ作品は「自画像」1点だが、とにかくマネや印象派の本物の作品に触れる機会を作ってくれた。高3の卒業式の時にぼくは答辞を述べたが、小笠原先生がその内容をととても褒めてくれたのが、他の先生以上に嬉しかったのを覚えている。多分他の先生はとくに褒めたりしてくれなかったかもしれないが。

三浦篤の本はこれまで「まなざしのレッスン」を読んだことがある。駒場の教師だが会ったことはない。Wikipediaによると、1993年東京大学教養学部助教授、2006年同総合文化研究科教授とあるから、1994年に赴任したぼくと時期はほぼ重なるのに。高階秀爾の弟子だということが、このマネの本を読んで分かった。

「はじめに」にあるように、この本はマネという画家の評伝や作品論というよりは、その絵画の歴史的意味や後世の画家に与えた影響という面に力点を置いている。3部構成で、第1部は「過去からマネへ」と題し、ティツィアーノなどのイタリア絵画、ベラスケスやゴヤなどのスペイン絵画、ルーベンスやハルスなどのフランドル・オ

ランダ絵画からの影響を述べる。単なる影響ではなく、引用・借用という形でマネの作品に現れるという。第2部は「マネと現在」で、オスマンの改造計画が進行中のパリにおいて、マネが家やアトリエをどのような場所に置き、また移動させていったかが跡づけられる。また、音楽会、気球、鉄道、万国博覧会、カフェ、競馬場、などの近代都市のさまざまな場面がどう作品に取り上げられているかが観察される。そして第3部が「マネから未来へ」で、ある意味で本書のもっともユニークな視点が示される。取り上げられるのはまずドガとモネ、それからセザンヌとゴーガン、そしてピカソ、さらに現代アートとして、デュシャン、ウォーホール、森村泰昌や現代写真との関連が論じられる。

多少意外に感じたのは、マネの絵としては割と有名な「すみれの花束をつけたベルト・モリゾ」は作品として取り上げられていないだけでなく、弟と結婚した印象派の画家でもあるベルト・モリゾのことはほとんど触れられていないことである。もう一つ、ジャポニズムについては、第11章「20世紀美術」でボナールに関連して初めて言葉として出てくることである。もちろん作品「エミール・ゾラの肖像」で画中画として相撲取り「大鳴門灘右正門」の浮世絵が描かれていることを述べたところで、日本美術の影響に触れられてはいるが、きわめて僅かである。

しかし、全体としてもともとマネについての知識は乏しかったので、勉強になった。ロンドンのコートールドで『フォーリー・ベルジ

エールのバー』は見たことがあるが、他の絵はほとんど複製でしか見たことがない。機会があればまたオルセーなどにも行ってみたいものだ。

ドナルド・キーン、角地幸男 訳「正岡子規」（新潮社）

今年の2月24日にドナルド・キーンが亡くなった。享年96歳だから、天寿を全うしたと言えよう。ぼくはキーンを書くものが好きで、この読書ノートに付けたものだけで数えても、10冊ほどになる。しかし、もちろんまだ読んでいないものも多いので、亡くなったのを機会にアマゾンで検索したら、とりあえず手に入りやすいものとしてこれが出てきたので購入した。2016年にキーンの「石川啄木」を読んでいるが、あれは同じ年に出た本なので、出版されてすぐに読んだようだ。「正岡子規」の方は2012年に出ていて、「石川啄木」よりむしろ先に出たものだ。

しかし、確かに両者に共通点はある。どちらも明治の人で、日本に古くからある詩歌の形式に革命をもたらした。ともに短命で、子規は35歳、啄木は26歳で死んだ。子規の方が20歳ほど年上で、だから活躍した時期には10年ぐらいの開きがある。

「石川啄木」を引っ張り出して、子規に言及しているところを見ると、意外なことが書いてある。

「小樽を発つ直前、啄木は「ホトトギス」の最新号を読んだ。啄木はその内容について印象を何も書いていないし、「ホトト

ギス」の指導的立場にあった正岡子規の名前，ないしは短歌にも日記で触れていない。これは，意外である。俳句と短歌を近代世界に取り込むことで新たな詩形式として救った詩人子規は，啄木にとって大いに関心を持って然るべき存在だった。啄木は子規の革命的な改革をこれ以上考慮する必要がないほど完成した勝利と考えていたかもしれない。」(p.129)

なお，どちらの本も，この手のものには珍しく網羅的な索引が付いているので，このような検索も簡単にできる。ついでに索引を利用して気になったことを挙げておくと，中村不折についてである。索引によれば不折は11カ所に出てくるので，かなり重要人物である。不折は新聞「新日本」に載る子規の記事に挿絵を描いた。その不折について，キーンは

「中村不折は，今日ではほとんど忘れられている。」(p.116)

と書いている。忘れられているというのは間違いないかもしれないが，Wikipediaを見るとまず「夏目漱石『吾輩は猫である』の挿絵画家として知られている」と書いてある。キーンはもちろんそのことを知っているに違いないが，なぜか11カ所にも登場する不折に関して，この事実が書かれていない。

子規の「墨汁一滴」と「病狀六尺」の岩波文庫版は，親父が持っていたのを拾い読みしたことはあるが，ごく一部でしかない。親父は若い時から晩年に至るまで俳句をやっていた。若い時の俳句の師は水原秋櫻子で，秋櫻子は高浜虚子の弟子らしいから，親父にとっての子規は，かなり重要な存在だったろう。しかし，ぼくは拾い読みした「墨汁一滴」と「病狀六尺」以外に子規のものはほとんど読ん

だことがない。俳句や短歌も教科書に載っているようなものしか知らない。それでも子規を身近に感じるのは、子供のときに読んだ「夏目漱石」の伝記の影響が大きいかもしれない。その伝記はまだ家にある。子供時代の本で捨てなかったものを美季子に渡したので、美季子の部屋の本棚にまだいろいろ残っている。多分、美季子はほとんど読んでいないだろうが。

その本は講談社版「世界伝記全集」の1冊で、作者は福田清人である。昭和32年に出ているから、ぼくが小学校4年の時に読んだはずだ。小学生向きとはいえ300ページ近いかなり本格的な評伝で、この中で「虞美人草」の次の一節が美文の例としてそのまま引かれている。

「春はものの匂になりやすき京の町を、七条から一条まで横に貫ぬいて、煙る柳の間から、温き水打つ白き布を、高野川の磧に数え尽くして、長々と北にうねる路を、おおかたは二里余りも来たら、山は自から左右に逼って、脚下に奔る潺湲の響も、折れるほどに曲るほどに、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る雪に寒かろうと、見上げる峰の裾を縫うて、暗き陰に走る一条の路に、爪上りなる向うから大原女が来る。牛が来る。京の春は牛の尿の尽きざるほどに、長くかつ静かである。」

これには感激した。この本は、ほとんどすべての漢字にルビが振られているから意味がわからないところがあっても読めるし、文体のリズム感は小学4年生でも味わえる。このころの本は、大人向けの文庫本などでもルビが振ってあったが、あれはよいことだと思う。それはともかく、この本の中に「心の友正岡子規」という章があり、漱石と子規は寄席で会って以来きわめて親しくなったというところから、その後、松山の中学教師の時代に一時期漱石の下宿に子規と一緒に住んだこと、そしてロンドンにいるときに、子規の死を知らせる虚子からの手紙が届くところなど、子規に関する記述がかなり多くあったのが、印象に残った。それで、子供の時から正岡子規の書いたものを読んでいなくても、その存在が身近に感じられるのだろう。

ただ、多くの日本人にも、子規の存在は大きいはずだ。今でも新聞に俳句欄、短歌欄があって多くの投稿があるし、町や会社に俳句塾や句会がある。NHKテレビでも俳句と短歌の番組がそれぞれあるのは、いずれも子規の功績だろう。

死ぬ前の5年間寝たきりで、カリエスの痛みが片時も去らず、モルヒネもあまり効かない状況で、詩歌と散文との制作活動をずっと持続させ、弟子たちを指導してきた精神力には、改めて驚嘆せざるをえない。死の3日前まで「病状六尺」の連載を新聞「日本」に書き続け、死の前日に辞世の句となる3句を作ったのである。

「石川啄木」と同じように、キーンは本書を英語で書き、それを角地が日本語にしている。その際、子規の文章の引用をまず原文で載せ、ほとんどが文語なのでいちいちそれを口語にして後につけている。文語と言っても明治時代のものであるから、口語訳とはあまり大きな差異がないので、ページのムダ遣いに感じたが、現代の若い読者向けには必要な親切心なのかもしれない。文語でなくても、たとえば漱石の「坊ちゃん」ですら現代語訳が出ている時代だ。ぼくの時代は旧かな旧漢字だったが。

Yuval Noah Harari, "21 Lessons for the 21st Century" (Kindle版)

Harariの3冊目の著書である。2018年8月に出版されており、TrumpやBrexit後であるところが、読む側から言ってまず関心と呼ぶところである。とくに本書は1冊目のHomo Sapiensが過去の歴史、2冊目のHomo Deusが未来の歴史であるのに対して、現在から近未来の問題を扱うという位置づけであるからなおさらである。

20世紀には、リベラリズムがファシズムや共産主義に勝利した。しかし、21世紀になって、リベラリズムに対する幻滅感が生じている。その結果がTrumpやBrexitやポピュリズムの台頭である。Harariはその原因の一つが、情報工学(infotech)と生命工学(biotech)が結びついた技術革命にあると言う。このような技術は政治家にも有権者にも理解ができない。理解ができないところで金融システムでは、たとえばブロックチェーンにより、税制の根本的な変更を余儀なく

されている。しかし、infotech+biotech革命は、経済や社会を変えるだけでなく人間の心と体を変えるという大きな変革をもたらす。しかも、この変革は科学者、技術者によって起こされていて、政治家は無力である。トランプの選挙キャンペーンではメキシコ国境を越えてくる難民が仕事を奪うことが強調されても、アルゴリズムが仕事を奪うということはまったく言わない。

リベラリズムは大きな成功を収めたが、環境破壊と技術崩壊という大きな問題に明確な解答を与えていない。そのリベラリズムへの不信感の間隙を突いて、過去のナショナリズムや宗教基盤の政治勢力が息を吹き返そうとしている。本書のかなりの部分は、そのような懐古的発想への批判に充てられている。その舌鋒は、これまで以上に鋭い。とくに母国イスラエル、あるいはシオニズムに対して容赦ない批判を浴びせる。本書のもう一つの特徴は、Harari自身の個人的な生い立ちやこのような発想を得るに至った経緯が述べられていることである。Harariはポーランド系のユダヤ人だが、自身はイスラエルで生まれ育っている。彼の祖母が1934年にその両親と二人の姉妹と共に、ポーランドからエルサレムに移住したという。つまり、Harariは20世紀後半のイスラエルで教育を受けており、10代の初めまではシオニズムの強い感化の下にあった。しかし、13歳の時の独立記念日に、そこで暗唱される愛国詩に祖国に身を捧げた兵士は墓にあっても永遠に称えられるとあるのに対し、「待てよ、墓に入ったら、そのような称賛の声は聞こえないのではないか」と思ったと言う。ユダヤ民族の歴史はせいぜい3000年。地球の45億年や宇

宙の138億年の歴史と比べたら、とても「永遠」とは言えないと思ったそうだ。こう言ったからといってたまたまパレスチナ人の読者がいたら喜ぶのは早い、と釘を刺している。同じことがパレスチナ人にもどの民族にも言えるからである。しかし、ここまで言ったらイスラエルの国内で刺されたりしないだろうかと、こっちが心配になるほど、イスラエルのナショナリズムに批判の矢を浴びせる。同じようにお話としての宗教も、鋭く批判される。

一方で、歯切れが悪いと感じるところもある。それは移民の問題である。第9章でとくにヨーロッパへの移民の流入の問題が取り上げられる。Harariは国単位のナショナリズムに対してEUの体制を評価していると思われるが、この移民の問題がEUを崩壊に導くかもしれないと言う。しかし、皮肉なことにヨーロッパが豊かな多文化システムを作り上げることに成功したことが、アフリカや中東から多くの移民を引き寄せる原因となった。

この問題を考えるには、まず移民が成立するための条件を整理する必要があるが、それは3つあるとする。

1. ホスト国が移民を受け入れる。
2. 移民者はホスト国の少なくとも核となる規範と価値を受容する。それが自己の規範や価値をある程度諦めることになっても。

3. 移民者が十分な程度に同化したら、いずれはホスト国の平等で完全なメンバーとなる.

さらに4番目の条件として、これら3つの条件が満たされているかどうかの判定ができることが必要である.

そしてこの4つをさらに詳しく説明し、それぞれを分けて考えることが重要だとする. とてもよい整理ではあるが、それで具体的な問題にどう対処したらよいのか、とくに例示もされないのewithちょっと物足りなさを感じる.

これまでの Homo Sapiens と Homo Deus のどちらでも、人間の幸福とは何かという問題が議論されたが、本書でも第20章「意味 人生は物語ではない」で幸福論がかなり長く議論される. そして最後の第21章でHarari自身が生きる意味を考えるのに役立つものとして実践している瞑想について、これまでの本よりはるかに詳しく説明される. 第20章はとても長く、またそれまでの章における批判的な論考のように歯切れがよくないので、やや退屈にも感じたが、第21章の個人的な経験に基づくものであることが分かると、それなりの説得力を感じもする.

藤崎さんがNHKのBSで、HarariのHomo SapiensとHomo Deusを映像番組として製作したものがよくできていると教えてくれた. 確かによくまとめられており、NHKが独自に取材したインタビューや映像もあって、面白い. もちろんHarari自身が登場してコメントする.

Homo Deusの最後に、NHK側がこれからの人間はどうすべきかと質問したのに対し、「月並みかもしれないが、もっとも大事なのは自分が何者であるかを理解することだ。自分の内なる考えを深く理解することに時間を使うべきだ。」と答える。これにはちょっと驚いた。Homo Deusの第7章の"The Humanist Revolution"では、過去数世紀で世界を席卷した人間主義は、あらゆる問題に対してまず自らの内なる声を聞けと言うことを強調するとする。Harariはそれ自体を直接批判してはいないが、何が真に自分の内なる声なのかを判別することの難しさや、個人の主観と社会にとっての客観的価値との整合性などの問題を上げている。また、かなりユニークな見方だと思うが、そのような人間中心主義の別派として、社会主義的人間主義と進化論的人間主義があるとする。前者の代表は共産主義であり後者の代表はナチズムである。この二つに対し正統的な人間主義はリベラリズム的人間主義で、20世紀はそれが2つの別派に一応勝利したが、21世紀の現在はそのリベラルな人間主義に破綻が生じているという主張の流れからすれば、「自分の内なる考えを理解する」という結論はやや意外に思える。これを見た時にはHarariがNHKに譲歩して、比較的無難な意見を述べたのかと思った。

しかし、本書でも「宇宙の真理、人生の意味、自己のアイデンティティを知りたいければ、自分自身で観察し、苦しみ、探求するしかない」と言っているが、それは「自分の内なる考えを理解する」とことと同じことを言っているのかもしれない。結局、Harariもヒューマ

ニズム、リベラリズムの限界を意識しながらも、それに代わる枠組みはないと考えているのかと思われる。

亀井哲治郎，ほか編「笹の舟 美酒を求めて四十年」（笹舟会）

5/25に笹舟会の解散パーティーがあり，そこで亀井さんが中心となって編集した本書が，参加者に配られた．費用は笹舟会の残った資金で贖われた．企画から1年で出版にこぎつけた亀井さんたちの労力は並々ならぬものだったろう．ぼくも「笹周と笹舟会の思い出」という一文を寄せている．

本書の中心は，佐藤總夫が評論社から上梓する予定だった「文化の香り 大吟醸」の原稿である．この本の企画は亀井さんが評論社にいたときに出して認められたもので，その時期は1987年秋というからずいぶん前のことになる，だが，佐藤さんのあまりの遅筆で実現しないまま，佐藤さんが2002年3月に亡くなられたために幻の書に終わった．その原稿の一部が亀井さんの手元に残ったので，それを彼が校訂して本書に収めた．しかし，残されている佐藤さんの目次案から見ると，ごく一部にしか過ぎない．それでも求道的な酒の探求者だった佐藤さんの面目躍如という感が，そこかしこでする．目次案はかなり綿密であり，資料も相当集められていたはずだから，酒蔵などに送っていた書簡（その一部が本書に収録されている）から見ると筆まめと思われる佐藤さんにして，これを完成させるのはそれほど困難なことではなかったのではないかと惜しい気がする．

まだ有効な笹舟会のメーリングリストに、この本の編集者への感謝と感想を書いたメールを送ったが、そこに

「ところで「文化の香り 大吟醸」目次案にある第三話「米から酒が生まれるまで」や第四話「吟醸酒造りの先覚者たち」は、この構成案に従って、どなたか有志が書いてみられたらどうでしょうか。読んでみたいです。」

と書いた。それに対し、亀井さんから

「第四話「吟醸酒造りの先覚者たち」は、佐藤さんの“第一稿”が存在します。かなりの分量です。それぞれの先覚者の代表的な論文もあります。じつは、わが家に“佐藤原稿”に関する段ボール箱が2個あるのですが、そのどちらかに、もしかしたら第三話の書きかけ（手書き）か第一稿の一部があるかもしれません。いずれ整理して、探してみます。

今回は、分量の点もあって（これが一番大きな理由です）、基本的に“第一稿”は収録しなかったもので、その意味ではちょっと「惜しかった」とも言えそうです。第一話の第10節「誤りのもと、あれこれ」も第一稿があります。これはけっこう面白いですよ。

興味のある方に（ただし、笹舟会の元会員限定で）、それらのコピーを差し上げる、ということも考えられます。」

という返事が来た。

佐藤さんの文章に並んで多くの分量が収録されているのが、河野裕昭さんの「杜氏の里紀行」である。これは河野さんが写真集「大吟

醸」を1995年に出した後、中野にある「酒仙の会」の会報に27回連載した全国の杜氏を訪ね歩いた紀行文である。これが結構な力作で、1回当たりの分量は多くはないが、河野さんが撮った写真と共に、各地の杜氏組合の記録などが掘り起こされて、ちょっとした歴史書になっている。写真家河野さんだけでなく、歴史家河野さんという横顔を知って、改めて見直した。河野さんが訪ねた杜氏の里には、丹波、越後、出雲、南部などがある。しかし、これらの杜氏が活躍した時代のピークは1970年代で、いずれもその後は杜氏の数、酒の生産量ともに減少の一途だったらしい。一方で吟醸酒のブームが1970年代に起こったこともあり、酒の品質は総じて上昇しているということになる。

佐藤總夫さんについては銘柄を当てる咧酒でパーフェクトな結果を出して、一躍有名になったという伝説がある、それについての記録の所在が分かれば教えてほしいと亀井さんを含め笹舟会のメーリングリストに問いかけたが、誰からも回答がなかった。ということはやはり伝説ということなのだろうか。

河野裕昭「写真集 大吟醸」（「写真集 大吟醸」を出版する会）

佐藤さんの「文化の香り 大吟醸」は、文章は佐藤さん、写真は河野さんという分担で企画されていた。しかし、佐藤さんの文章がなかなか完成しないので、河野さんの写真集だけでも先に出そうということになり、そのために「「写真集 大吟醸」を出版する会」が1995

年初めに結成された。ぼくもその発起人の一人になっている。ぼくが肝臓病のため7年間笹舟会を休会して、1993年に復帰したわりとすぐ後である。

写真集は1995年に出版され、自分も出版する会のメンバーとして2冊を保有している。これは素晴らしい写真集である。ただ、これまで写真を眺めたことはあっても、それぞれをじっくり見たとは言えず、挿入されているキャプションや説明にもほとんど注意を払ってこなかった。「笹の舟」を通して読んだことをきっかけに、この写真集も改めて時間をかけて見てみた。

取り上げられている酒蔵は、菊姫、四季桜、豊の秋、上喜元、菊の城、香露、西の関、繁枿、華鳩の九蔵である。河野さんは酒の仕込みのシーズンに、何年間もこれらの蔵に通い、その仕込みの工程を丹念に撮影した。とくに有名になったのは麴が破精（はぜ）込んだ米の写真で、それまで誰もこのような写真を撮ったことがなかった。まさに糀の花が咲いている姿、菌糸がコメの芯に食い込んでいるさま、が見事に捉えられている。しかし、素晴らしいのは麴の写真だけでない、洗米、浸漬、蒸米、室仕事、酒母造り、醪仕込み、上槽といった工程の様々な場面、携わる人の動作や表情が、見事に捉えられている。

ここに収められている富田勲さんと難波康之祐さんの文章は、「笹の舟」にも再録されている。いずれもすでに故人になられているの

が、時代の経過を物語る。

河野さんは若い頃から水俣病やカネミ油症を追ってきた社会派の写真家で、吟醸酒というテーマはそれらとやや異質に見えるが、本人の中ではどこかで繋がっているのだろう。他に知られた写真集には、「水車の四季」がある。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第4巻上・下）」（集英社）

第3巻を読んでから、Harariの本を3冊読んだこともあって、間が空いた。しかし、第3巻の感想にも書いたようにファール自身が、第3巻の最後には悲観的な見通しを語っていて、3巻と4巻の間に5年の歳月が経っているという。それでも若い女性と再婚し氣力を回復させて本書を完成させたことは、喜ばしい。

相変わらずハチの話が続く。狩りバチに限らず、ハキリバチ、モンハナバチなども扱われる。しかし、中心はやはり、クモを狩るキゴシジガバチやヒメベッコウ、ドロノキハムシを狩るドロバチ、ミツバチを狩るミツバチハナスガリ、シャクトリバチを狩るユリウスジガバチ、といった狩りバチであり、それらの生態の記述は生き生きとしている。第12章で、ファール自身の研究成果でもっとも大きなものは、狩りバチの麻酔術の発見だとしている。しかし、当時はその研究に対する批判がいろいろあったようで、第15章はまるまるそれらの批判に対する反論に充てられている。

なお、下巻の最後の17章と18章ではカミキリムシが扱われる。それは幼虫が木の幹に坑道を掘って住むということから登場する。タマムシの幼虫が掘ったトンネルには、ツツハナバチやハキリバチが巣を造る。18章のタイトルは「キバチ」だが、途中まではカミキリムシの話の続きで、キバチもカミキリムシと同様に幼虫は木の幹に住むという点で共通点がある。ただし、カミキリムシは成虫が木の幹から脱出するための準備を、幼虫が木の表面近くまで坑道を造って脱出口を用意するのに対し、キバチは成虫が自分で幹を齧って脱出する、という違いがあるようだ。

進化論批判も続く。しかし、奥本の訳注を読むと、ハチなどの昆虫の能力が進化論的にどう説明できるか、現在でもまだ謎らしい。だからファールルのややエキセントリックな進化論批判は、「現代の眼からすれば愚かなもの」とばかりは言えないようだ。

本巻で繰り返される主張の1つは、「形態は行動を決定しない」というものである。とくに第9章の「モンハナバチ」はこの主張が副題となっている。モンハナバチには綿毛で小部屋を造る仲間と樹脂で小部屋を作る仲間とがあるが、両者は形態による分類学者は同じ仲間として区別しない。しかし、巣造りの行動としては明確に異なる。それである分類学の権威は大腮の形の特徴で区別できるというが、ファールルはその違いは説明力がないとする。ファールルは構造より行動が重要だと力説する。その行動がどう形成されるかについては、進化論が本能の中には後天的に獲得された習慣がある、と

するのを批判している。しかし、これはダーウィン流の進化論ではなく、獲得形質は遺伝しないことはすでにファールブルの時代にも知られていたはずだから、的外れのはずである。

ファールブル自身は、本能は完成された能力で固定的なものだとする。一方、本能の他に「識別力」というものがある、それは現実的に即した柔軟性を指していると言う。それは獲得される性質ではなく、潜在的に備わったもので、必要になると現れる。たとえばツツハナバチはアシの茎に巣を造るが、その中に小部屋を造るのに、小さいアシなら仕切り壁を順々に立てて仕切っていけばよい。その場合は、まず花粉と蜜の山を置き、その真ん中に卵を一つ産んで、その後に仕切り壁を造る。しかし、アシの口径がより大きい時は、蜜や花粉を蓄える作業の際に内壁に肢がうまく掛からないので、先に仕切り壁を造ってそれから食料を運んでくるという。これは茎の口径に応じた識別力だという。

しかし、ファールブルが本能や識別力がどのように生まれてきたのかについて、どう考えていたのかは謎である。すべて最初からあったというのだが、しかし、神が創造したということは一切言わない。ファールブルはカトリック教徒だったというが、進化論に与せず、創造主による生物の創造も少なくとも陽には肯定しないとすると、どのような立場だったのだろうか。きわめて饒舌な昆虫記の中にあって、その点について沈黙しているのは不思議だ。

今、並行してプルーストを読んでいる。どちらもフランス語からの翻訳で大作を読んでいることになるが、一方は19世紀後半で、他方は20世紀前半になる。両者の生没年はWikipediaによれば、ファールは、1823年12月21日～1915年10月11日、プルーストは1871年7月10日～1922年11月18日で、生まれた年に50年の開きがあるが、ファールが長生きだったこともあって、生きている時代は45年も重なる。「失われた時を求めて」の第一篇「スワン家の方へ」では植物のサンザシが重要なテーマの一つだが、ファール昆虫記のこの第4巻にサンザシが出てくる。奥本大三郎は丁寧な訳注をつけているだけでなく、現れる動植物すべてに脚注として、和名、学名、説明、多くの場合に図という図鑑的な情報を手間を惜しまず与え、前の巻にすでに出ていても、それを再掲するだけでなく第何巻第何章というリンクを示す。さらに巻末に和名学名対象リストを用意している。和名がないものについては、奥本自身がそれを作っていることもある。そしてすべての和名に漢字表記をつけている。カタカナ表記が標準化している現代では、これがとても新鮮で面白い。たとえば「オウシュウキゴシジガバチ」は「欧州黄腰似我蜂」である。

さらに脚注とは別に章末に訳注をまとめているが、それらに面白いものがある。この第4巻上第7章「ハキリバチ」の訳注に次がある。

「セイヨウサンザシ 小さな白やピンクの花をつけ、香りがよい
ため、プルーストなどフランスの文学作品にもよく出てくる。
フランス全土に分布し、垣根などに用いられる。」(p.225)

なお、セイヨウサンザシはメイフラワーとも言うらしい。5月に花が咲くということだが、あのメイフラワー号の名前の元である。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第一篇スワン家の方へ I,II」（集英社文庫）

「失われた時を求めて」を最初に読んだのは、学部の学生の時で1970年である。読んだのは第五篇の「囚われの女」でやはり鈴木道彦訳だった。当時、親父が取ってくれていた中央公論社の「世界の文学」の1冊で、なぜかこれにずいぶん感心した。当時、「失われた時を求めて」はいくつかの出版社から出ている文学全集にばらばらに入っていて、続けて買ったのが、筑摩書房版の「世界文学大系」に収められた「スワン家のほうへ」（淀野隆三，井上究一郎訳）である。これには1970/5/9に読み始め，同6/11に読了という書き込みがある。大学院に入ったばかりのタイミングで、暇だったのだろう。

その後買ったのものとともに、当時買ったこれらの本を並べると、次のようになる。

- 「世界の文学 32：囚われの女」（鈴木道彦訳，中央公論社，1966年1月初版）
- 「世界文学大系 52：スワン家のほうへ」（淀野隆三，井上究一郎訳，筑摩書房，1969年9月初版第14刷）

- 「豪華版 世界文学全集 1-15：花咲く乙女のかげに」（井上究一郎訳，河出書房新社，1969年9月第13版）
- 「世界文学全集 48：ソドムとゴモラ」（井上究一郎訳，筑摩書房1970年7月第1刷，古本として文成堂書店で200円で買っている）
- 「世界文学大系 58A：ゲルマンのほう」（井上究一郎訳，筑摩書房，1978年12月初版第1刷）
- 「世界文学大系 59B：見出された時」（井上究一郎訳，筑摩書房，1982年8月初版第1刷）

これは買った順になっていると思うが，しかし読んだのは最初の2冊で，「花咲く乙女のかげに」は多分途中で挫折しており（ただ，現在栞が入っている場所が正しいとすると，本文496ページ中の408ページの位置なので，8割以上読んだことになる），後の3冊は買っただけでまったく読んでいない．また第六篇の「逃げさる女」は買ってもない．法政にいる間に，定年後にでも読もうとこの集英社文庫版全13巻を買ってあった．しかし，今回それに手をつけた理由は，NHK/BSで放送された映画で録画しておいた，「スワンの恋」を見たからである．これは1983年製作のフランスと西ドイツの共同作品で，監督はフォルカー・シュレンドルフ，スワン役はジェレミー・アイアンズである．

「スワン家のほうへ」を読んだのがあらかた50年前なので，ほとんど忘れている．そもそも，この第一篇が「コンブレー」「スワンの

恋」「土地の名・名」の3部構成になっていたことすら忘れていた。「失われた時を求めて」の第一のテーマは記憶であると、訳者がまえがきで紹介している。プルースト自身がこれは「無意識の小説」であり、「意識的記憶」と「無意識的記憶」との区別の上に成り立っていると言っているそうだ。その意味で、読者としてこれをほぼ50年前に読んだ記憶を引き出す行為にも意味があるが、あの有名なプチ・マドレーヌの場面の他に、かなり鮮明な記憶があったのは、マンタンヴィルの2つの鐘楼ともっと遠くのヴィユヴィックの鐘楼が、夕陽の中で移動するにつれ色と形を変えて行く情景である（1のp.379以降）。

ファールブル昆虫記第4巻に関してサンザシのことを書いたが、「スワン家の方へ」ではコンブレーで家族でよく出かける2つの散歩道、「メゼグリースの方」（「スワン家の方」と同じ意味）と「ゲルマントの方」のうちの、前者の道沿いの生垣としてサンザシがよく登場する。

「教会を出ることになって、祭壇の前にひざまずいた私は、ふたたび立ち上がろうとしたときに、突然サンザシからアーモンドのようなほろ苦くしかも同時に甘い香りの立ち昇るのにきづいた。」（1のp.247）

「サンザシの香りは、まるで私が聖母の祭壇の前にいるように、ねばっこく、限られた範囲にひろがっている。」（同p.296）

次のページp.297には「サンザシ」の語が5回も出てくる。その直後、私はジルベルトに初めて出会う。また帰宅した後で、一步も外に出られないレオニ伯母に対し、私の祖父が言う。

「レオニや、今さっき私たちといっしょにいられたらよかったんだがなあ。タンソンヴィルは見ちがえるようだったよ。わしが思いきって手をのばせば、あんなに好きだと言っていたバラ色のサンザシを一枝折ってきてあげられたところだけど」（同p.306）

つまりサンザシがジルベルトとの出会いだけでなく、レオニ伯母にも強く結びついている。

そしてコンブレーからパリに戻るとき

「やがて野バラにとってかわられるサンザシが、花から花へと生垣に沿って一面に発している匂い」（同p.387）

一方、驚いたことにこの「スワン家の方へ」の中で、ファーブル昆虫記が言及される箇所がある。

「ファーブルが観察したあの膜翅目のジガバチは自分の死後も子供たちのために新鮮な肉が絶やされないようにと自分の残酷さの助けを解剖学に借り、ゾウムシやクモをつかまえると、見事な知識と腕でもって、肢の運動を司る神経中枢をぐさりと突き刺してしまい、しかも生命の他の機能には手をつけずにおき、このように身体の麻痺した昆虫のそばに卵を生みつけるので、その卵が孵ったとき幼虫は、従順で無害な、逃げることも

抵抗することもできない，しかもひとつも腐っていない獲物を与えられることになる．このジガバチのようにフランソワーズは，．．．」(同p.268)

コンブレーという町が実在するのかネット上で調べると，マルセル・ブルーストの父，アドリヤンがイリエという田舎町の出身だが，コンブレーはそこがモデルである．「失われた時を求めて」で有名になったので，ブルーストの生誕100年を迎えた1971年に，イリエとコンブレーを合体させイリエ＝コンブレーを町の名前としたそうだ．

この文庫の1の解説を松浦寿輝（ひさき）が，2の解説を工藤庸子が書いている．どちらも駒場の同僚だったが，とくに親しく口をきいたことはない．Wikipediaで調べたら，工藤さんは1944年生まれでぼくより4つ上，松浦さんは1954年生まれで6つ下だ．松浦さんとは駒場寮紛争時に特別委員会として教員の動員体制を取った時に話をしているかもしれないが，工藤さんとはそういう記憶もない．しかし，駒場寮紛争時の学部長だった市村さんが，今日は工藤さんと話をしたと嬉しそうに言っていた記憶がある．工藤さんは確かに美人だった．

折口信夫「大嘗祭の本義」（Kindle版 折口信夫全集）

今年の5月に新天皇が即位して，11月には大嘗祭が行われる予定だという．それに関連して，折口のこの作品が新聞の読書欄で取り上

げられていた。Kindle版の折口信夫全集は以前に導入していたが、「死者の書」を読みかけてやめていた。この機会にこの「大嘗祭の本義」を読んできた。

折口の書くものは歴史なのか、他の何かなのだろうか。たとえば

「天子様が、すめらみこととしての為事は、此国の田の生（ナ）り物を、お作りになる事で天つ神のまたしををお受けして、降臨なされて、田をお作りになり、秋になるとまつりをして、田の成り物を、天つ神のお目にかける。此が食国（ヲスクニ）のまつりごとである。」

のようにすべて断定調で語る。まるで自分が古代に生きて見てきたように言うが、その論拠はとくに示されない。歴史史料の引用は、全篇を通じてほぼまったくない。もう少し自分の見解であるということを示す表現も、まれにはある。

「私は、祭政一致といふ事、まつりごとが先で、其まつりごとの結果の報告祭が、まつりであると考えへて居る。祭りは第二義的なものである。」 その場合も、その論拠は示されない。

このような感じで、「大嘗」と「新嘗」の区別や「神嘗祭」「神今食」「相嘗祭」との関係などが同じように断定的に述べられる。しかし、いつの時代のことを言っているのか、よく分からないところも多い。奈良や平安の時代が変わってしまったというような表現があるから、それより前の時代のことを言っているようではあるが、もともとの表題は「大嘗祭の民俗学」とするつもりだった言うが、

民俗学なら歴史学と違って文字史料を重視しないということなのか
もしれない。しかしそれでも、根拠は必要だろう。

この文章は「昭和三年講演筆記」という記載が底本にはなされている
という。初めの方に

「此处で申して置かねばならぬのは、私の話が、或いは不謹慎
の様に受け取られる部分があるかも知れない、といふ事であ
る。」

とあるのが、時代をある意味で反映している。昭和の大嘗祭は確か
に昭和3年に行われたらしい。だからそれに関連して行われた講演
の記録と思われる。

鹿島茂「馬車を買いたい!ー19世紀パリ・イマジネール」白 水社

日経書評欄の「半歩遅れの読書術」で、楠木建という経営学者が鹿
島茂の「大読書日記」を紹介していた(5月25日朝刊)。これは青土社
から2015年に出た本らしい。それで買ってみようかなと思ったが、
600ページ越えという大部な本で、値段も4000円近くするので、ち
よっと考えものと思ったときに、この「馬車を買いたい!」を昔買っ
たまま読んでいなかったことを思い出した。何で買ったかも、何で
買ったまま読んでいないのかも、覚えていない。この本の初刷は
1990年に出ていて、1991年にサントリー学芸賞を受賞しているが、
持っているのは1996年に出された第5刷である。1996年は東大に移
ってから2年後なので、本書を知ったきっかけとしては、UPの4月号

に毎年載る「東大教師が新入生にすすめる本」で見たという可能性もあるかと思ったが、調べたところ1996年前後のリストには見つからなかった。それでとにかく、この機会に読んでみようと思い始めた。

本書のテーマはパリだが、時代は19世紀前半に限定される。その手法はこの時代を舞台とするフランスの小説を分析するというもので、バルザック、フロベール、ユゴー、スタンダールの作品に出てくる主人公が、主な題材である。それらの主人公に共通するのは、田舎からパリに出てきて、都会での成功を夢見て大学生活や女性との恋愛や社交生活を送るということである。パリに来る時は乗合馬車に乗り、パリでは安い下宿やレストランを利用する。その経済的な分析が面白い。食費、部屋代、洗濯代、などにいくら使い、家からどれほどの仕送りを受けていたか、というデータが集められ比較される。その尺度として、1フランは現在（といっても1990年だが、物価はあまり変わっていないだろう）の日本の価値では1000円、1フランは20スー、だから1スーは50円、などという換算は分かりやすい。

前半では学生の貧乏暮らしに多くのページが当てられるので、どこから「馬車を買いたい」というような贅沢な話になるかという、最後の2章がそのものずばり、「馬車を買いたい」という表題になっている。これらの主人公たちが、出世の野心を燃やすきっかけは、共通してシャンゼリゼ通りで馬車の行列を見る場面になっている。

るという。天気のよい日曜にシャンゼリゼ通りに豪華な馬車が集まって来て、貴族やブルジョアがこれ見よがしに富を見せびらかすという習慣があったという。

高級な馬車へのあこがれは、ポルシェやフェラーリなどの現代の高級車へのあこがれに通じるところがあるが、必要な財力は桁違いである。馬車を買うだけでなく馬を買い飼育しなければならないが、そのために人を雇い厩を用意し飼料を調達する。さらに馭者がもちろん必要だし、キャブリオレという馬車のタイプだと後ろ立ち台があってそこに立つ従者も雇わなければならない。

馬車のタイプはたくさんあって、裏表紙に20種類の馬車の絵と名前が載っているが、二輪か四輪か、何人乗りか、などで分類される。典型的な四輪馬車の一つにクーペがあるが、現代の自動車のタイプにもこの名前が使われている。

第17章の「馬車が買いたい（その二）」は、

「われわれ二十世紀の日本人が十九世紀のフランス小説を読んでいるとき、何がわからないといって、馬車の記述ほどわかりにくいものはない。おそらく、日本の読者は「一頭立て軽装二輪馬車」とか「二頭立て箱型四輪馬車」などと訳者が苦心の訳語をつけても、説明訳の部分は飛ばし読みして、おそらくはただ「馬車」というおおざっぱな概念だけ了解しているはずである。」

と書き出されている。

今読んでいる「失われた時を求めて」の時代は、本書で取り上げられている時代から半世紀後のことになるが、読者としてやはり同じような体験をしている。「スワンの恋」では、スワンがオデットを馬車で追いかける場面で、馭者とのやりとりが印象的であり、映画でも馬車をうまく使っていたが、その馬車は何かというと、少し後に次のような記述がある。

「夜会から出てくると彼はさっさと自分の無蓋四輪馬車（ヴィクトリア）に乗り込み、足の上に膝掛けをひろげ…」（「スワン家の方へ II」 p.115）。

このヴィクトリアの図はもちろん本書の裏表紙にあるが、この本には巻末付録として鹿島が以前に書いた「馬車の記号学」という文章が収録されていて、そこにも記号学の手法で分類されている馬車群の中に、ヴィクトリアは再三出てくる。

あるいは、今たまたま読んでいる「花咲く乙女たちのかげに」にもたとえば次のような場面がある。

「そして毎日彼女がその幌つき四輪馬車（カレーシュ）で散歩するために降りてくるとき、荷物を持ってうしろに従う小間使いと、前を行く従僕とは、まるで自国の旗を掲げた大使館の入口に立つ歩哨のように、彼女のために見知らぬ外国の土地での治外法権を保証しているように見えた。」（「花咲く乙女たちのかげに 1」 p.529）

ここで「彼女」というのはヴィルパリジ夫人である。カレーシュももちろん図が載っていて、「記号学」でも分類されている。

パリにはこれまで4回行っているが、最後が2001年だからずいぶん前のことになる。本書にはカルチエ・ラタン、リュクサンブール公園、チュイルリ公園、パレ・ロワイヤル、グラン・プールヴァールなどパリの地名がたくさん出てくるが、それらの場所についての土地勘みたいなものは、なくなっている（というよりもととないという方が正確である）。この本が出たときは、まだGoogle Mapもない時代なので、もう少し地図を入れてくれたら親切だったろう。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第5巻上・下）」（集英社）

この巻で、ようやく狩りバチから離れて、別の種類の昆虫が出てくる。その最初が第1巻の初めに登場したスカラベである。しかし、今度はファールがセリニアンに広い土地を得て、そこでじっくりとスカラベを観察することができた後の話で、第1巻では不明だった多くのことが明らかになる。初期の研究では、スカラベが転がしている糞球には卵は入っていないことを明確にしたが、それでは卵はどのように産み出され、孵化し育つのか、ということはわからなかった。しかし、羊飼いの青年が西洋梨の形をした球を持ってきて、その中に卵が入っているという。調べてみてそれが正しいことがわかる。通常見られる球体の糞は食料用で、この卵を梨型のとがったところに入れているものは、それより上質の材料で作られており、

地下の巣に収められている。西洋梨型の形状は温度と湿度を卵のために理想的に保つのに最適だとファールは言う。

5章までがスカラベの話で、その後12章まではスカラベの近縁種の各種のコガネムシの話が続く。さらに自分にとっても身近なセミやカマキリが取り上げられて、興味深く読んだ。セミについては、北米の周期ゼミに13年周期と17年周期のものがあることがよく知られているので、身近のセミもそのくらい土の中で過ごすのかと思っていたが、Wikipediaでは「幼虫として地下生活する期間は3-17年（アブラゼミは6年）」とある。そこからリンクの張られている「広島市 - インターネット講座「セミ博士になろう！！」 - 広島市森林公園こんちゅう館監修」では、「ツクツクボウシは3年くらい、アブラゼミは5年くらい、その他長いもので15年くらいかけて5令幼虫になる。」とあって、この2つだけでもアブラゼミの幼虫期間の記述に違いがある。とにかく土中で5回脱皮して5令幼虫になるという点は、セミの種類によらず共通らしい。

セミの成虫の寿命は1週間くらいと言われていたが、今年になって岡山県の高校生が独自の調査手法により、アブラゼミが最長32日間、ツクツクボウシが最長26日間、クマゼミが最長15日間生存したことを確認し発表して話題となったそうだ（山陽新聞，2019年06月19日）。

ファールによれば、ヨーロッパではアルプス以北にセミがないので、フランスでも南の方の人間しかセミを見たことも鳴き声をきいたこともない。イソップの「アリとセミ」の寓話は、その意味で北ヨーロッパの人間にはピンとこないので、「アリとキリギリス」に変えられたりしている。しかし、元の話の「アリとセミ」でもおかしくて、それを翻案しているラフォンテーヌの寓話では、そもそも冬にはセミの成虫はいないのにアリに物乞いに来るのがおかしいし、麦粒を貸してくれというのもセミはそんなものを食べないから変だ。大体、セミが木から吸い出している樹液を横盗りするのがアリで、アリはセミの肢や頭にしがみつくななどの邪魔さえする。さらにセミが死ぬと、その死骸に群がって残酷にも食べてしまうのがアリだという。

セミが地中にいる期間については、ファールは単に「セミは4年間も土の中にいる」(p.132)と書いているだけである。これはファールが住んでいた南フランスのセミ（5種類あるという）のことらしいが、種類によっても期間は同じ4年なのかとか、これは観察の結果なのかといった詳しいことは書いていない。

また、成虫の寿命についても、同じようにごく軽く触れているが、それは

「5, 6週間ものあいだ、歓喜に満ちた生活を送ったあとで、歌手のセミが寿命が尽きて木から落ちると、その死体を太陽が干からびさせ、通行人が踏みつぶす。」(p.106)

というものである。これを見ると、岡山の高校生による「発見」は、種類に違いがあるとはいえ、ファールブルの時代にすでによく知られていたことのように見えてしまう。しかしそのだいぶ後に、「セミの命は、ほぼ5週間、ということになる」という記述があるが(p.226)、しかしその根拠はセミが最初に鳴くのは夏至のころで、終わりが9月の半ばであり、土の中から全員いっせいに出てくるわけではないので、初めと終わりの日付の平均をとって推測したという、きわめていい加減なものであることが分かった。だから岡山の高校生の観察は、ダーウィンを超えたものだろう。

また、奥本の訳注で、「成虫までを含む寿命は、アブラゼミとミンミンゼミで5年、ニイニイゼミで4年であることも解明されている。」とあった(p.229)。しかし、成虫の寿命については奥本も言及していない。

吉村昭「生麦事件」(新潮社)

「風雲児たち」を相変わらず出るたびに買って読んでいるが、今年の5月に出たのが1冊まるまる生麦事件を扱っていた。それでずいぶん前に買って積読していたこの書を引っ張り出してみた。1998年9月に発行された本で、ぼくの持っているのは翌年2月に出た第10刷である。昔買った本を、何かのきっかけで読むという経緯は「馬車を買いたい」と同じである。

生麦事件とは、文久2年8月21日（1862年9月14日）に、生麦村（現・横浜市鶴見区生麦）付近で薩摩藩島津久光の行列に入り込ん

だ乗馬のイギリス人4人を、供回りの藩士たちが殺傷（1名死亡，2名重傷）した事件である。その事件を叙述するだけなら，事件の前後を詳細に書いたとしてもそれほどの分量を必要としないだろう。しかし本書は420ページを超える。歴史として重要なのは，生麦事件を契機として起こった薩英戦争と馬関戦争（長州とイギリスなど四力国との間の戦争），およびその結果としての攘夷の方向転換であり，その経緯がかなり詳しく述べられている。

そもそも馬で散策していた英国人の男女4人に対し，藩主の行列に入り込んできたのが当時の感覚からしていかに非礼な行為だとしても，いきなり抜刀して切りつけ致命的な傷を負わせるというのは，薩摩の一部の武士が攘夷の思想にいかに凝り固まっていたかを示すものだろう。また長州の過激な攘夷論者たちが京都に陣取って，朝廷に迫り攘夷決行の勅命を幕府に出させている。

薩英戦争でも馬関戦争でも，圧倒的な銃や大砲の性能と量の差にかかわらず，薩摩も長州も案外善戦していて，英国などの外国勢力にかなりの被害を与えている。それにもかかわらず，戦争後，冷静に力の差を認識し，和睦交渉を自ら求め，賠償の支払いにも応じている。さらに，攘夷論の無意味さに気づき，過激な攘夷一辺倒の藩内世論を変えていく。それが明治維新につながるのである。その後の，太平洋戦争に至る近代日本の政府や軍部の行動とは大きく異なるのに驚かされる。

去年の大河ドラマは西郷隆盛だったが、そのようなドラマでは西郷が心酔する島津斉彬と比べて、久光は影が薄いというか、西郷の心情としては反発の対象として描かれる。しかし、吉村はかなり意図的にと思われるが、久光が開明的な考え方をもち、攘夷論者を抑え込んでいく政治力・指導力を発揮していく面を強調している。

マルセル・ブルースト，鈴木道彦訳「失われた時を求めて 第二篇 花咲く乙女たちのために I,II」（集英社文庫）

1970年に途中まで読んでいて、栞の位置から8割方読んだのではないかとすでに書いているが、汽車でどこかに出かけるということぐらいしか覚えていなかった。肝心なアルベルチーヌらの「花咲く乙女たち」が出てくる前に、読むのをやめてしまったようで、乙女たちについての記憶がない。

そもそもこの第二編は、第一部「スワン夫人をめぐって」と第二部「土地の名・土地」という構成になっている。アルベルチーヌたちが出てくるのは第二部の後の方だから、そこまでたどり着かなかった可能性は十分にある。

「スワン夫人をめぐって」でまず驚くのは、「スワンの恋」では破局を迎えたかのようなスワンとオデットが結婚していることである。どうしてそういうことになったのか、その経緯はまったく明かされない。しかも「私」はそのスワンとオデットの娘ジルベルトに恋をするのだが、そのジルベルトはスワンと結婚する前に生まれて

いるようで、いわば連れ子である。それが本当にスワンの子なのかどうか怪しいと思われるが、そのような疑いは小説の中にまったく表されていないし、ジルベルトが生まれてきて、どのようにスワンとオデットの子供として育てられてきたのかについても、まったく触れられていない。「私」がスワン夫人と会ったのは彼女とシャルリュスとが一緒にいた時である。たとえばジルベルトはシャルリュスの子供ということも考えられるのではないか。しかし、そのようなことは小説の中でほのめかされていないだけでなく、解説や注を見てもまったく議論されていない。そういえば映画「スワンの恋」では、シャルリュスをアラン・ドロンが演じていた。

「私」とジルベルトとの関係は、「スワン家の方へ」の「スワンの恋」におけるスワンとオデットとの関係に並行するところがある。それはプルーストが意図したものだろう。ただ違うのは、「私」はジルベルトにふられてしまうのに、スワンとオデットは結婚したことである。

この巻で登場するアルベルチーナを始めとする花咲く乙女たちと同様に重要な登場人物は、友人となるサン・ルーである。ゲルマント公爵夫妻の甥で、ドンシエールの駐屯部隊にいる。これが次の「ゲルマントの方」に繋がるわけである。

小熊英二「日本社会のしくみ 雇用・教育・福祉の歴史社会学」（講談社新書）

小熊の本はみな長い。これも新書なのに600ページある。ただ、誤植をいくつか発見したので、講談社のサイトの問い合わせ機能を使って以下のような問い合わせをした。

「大変な力作で感心しましたが、いくつか誤植に気づきました。

p.257「述べる側」→「述べる例」

p.502「小池を同じ試算」→「小池と同じ試算」

p.508「国公立文理系」→「国公立理系」

私の持っているのは7月20日発行の第1刷なので、その後訂正されているかもしれませんが。」

これには

「ご指摘いただきましたこと、心より深謝いたします。お恥ずかしい限りですが、ミスによる誤植です。ただいま編集部で、修正を施すように対処しております。同様のミスを犯さないように、関係部局に指示を徹底いたします。」

という返事がすぐに来た。

これまでの小熊の本で、たとえば上下合わせて2000ページの「1968」でも、このような誤植に気がつかなかった。講談社も杜撰になってきているのか。

日本の社会には3つの生き方があるという。それを小熊は「大企業型」「地元型」「残余型」と呼ぶ。日本型雇用の終身雇用、年功序

列，新卒一括採用，定期人事異動，定年制，という特徴は，すべて大企業型のものである．それに関連して，大部屋オフィス，人事考課，企業内組合（職種別組合の不在）という特徴も出てくる．

これらの特徴がどのように形成されたといえば，明治期の官庁や軍隊にその起源があるという．軍隊組織はどこも似たような階層組織であり，官庁もとくに日本が範としたドイツは似たような組織だが，民間企業が軍や官庁の組織に近いものを大幅に導入しているのは日本の特徴だという．その一因は，日本製鉄や三菱のように官営企業の民間への払い下げが企業の出発点になっているケースが，とくに大企業に多いことにあるらしい．

ぼくは情報処理学会の認定情報技術者（CITP）のとくに企業認定制度にしばらく関わってきた．これは多くの大企業が持つ企業内資格制度自体を審査の上認定することにより，その企業内資格を持つ個人に間接的にCITPの資格を与えるという仕組みである．この企業内資格制度がかなり日本独自の由来を持つものであることを，少し前に知ったが，本書で改めてその特徴を認識した．企業内の職能資格制度は起源は戦前の官庁・軍隊型のシステムにあるというのが小熊の指摘だが，1960年代ぐらいに多くの大企業が導入した．その主な狙いは賃金コストの抑制とポスト不足への対処であった．したがって，これを設計運用するのは人事部の分掌である．だから，情報処理学会の企業認定審査委員会のメンバーにも，人事系の人が多い．資格として評価されるのは，当該企業内で積み上げてきた経験・知

識であって、他の企業で役立つものではない。一時、そのような職務規定、職能資格の標準化・共通化の動きがあったが、企業は社員をほかに取られることを危惧して、政府が構想した職務給や企業横断的労働市場育成の動きに反対した。組合も、企業内組合なので、そのような意識がなかった。

これに関連して、日本で高校への進学率の上昇、続いて大学への進学率の上昇が企業の雇用に大きな影響をもたらしたことについての指摘がある。それは賃金が職務内容で決まる職務給ではなく、学歴と勤続年数で決まるために、進学率が上がると企業にとって賃金コストが上がるという結果をもたらされるからである。その結果まず起こったことは、高卒者より中卒者を好んで採用するという行動である。さらに進学抑制と工業高校の充実を政府に要望するということが、1950年代の終わりから1960年代に起こる。これはしかし、民衆から激しく批判される。職能資格制度を多くの企業が採用するに至った背景に、このような状況があった。

しかし、進学率が向上するという同じような傾向をもたらす現象を、日本と米国と比べると違いがあるという。アメリカでは4年生大学に進学しただけでは専門職や管理・営業職に就けないので、大学院の進学率が伸びる。しかし、日本では大学院への進学率は伸びず、大学レベルでの序列化が進む。日本における学歴重視は、大学で獲得した専門能力を評価するものではなく、段階の高い入試を突破した者は潜在的能力が高いと判断するからである。そこでは「地

頭のよさ」「地道に努力する」「要領がよい」といった一般的能力が期待される。

確かに大学で専門教育を行い学生を育成しても、企業が評価するのは「声が大きい」とか「元気がよい」とかいういわゆる「コミュニケーション能力」に偏重しているような状況は、おかしいと思ってきただけではなく、企業の人たちと就職や採用の問題を議論するたびに、その問題点を指摘してきたつもりである。本書で改めて、この現象が日本社会の根柢の仕組み基づくものであることを痛感した。

小川洋子「博士の愛した数式」(新潮文庫) Kindle版

最近この本に言及した新聞の記事を、少なくとも2つは見た。もともと2003年に出た本で、読売文学賞を取るなど評判を呼び、映画化もされた。また2005年度の第1回日本数学会出版賞も受賞している。

ぼくはこのKindle版を、Kindle端末を買って割とすぐに購入した。Amazonの購入履歴を調べると、Kindle Fire HD 32GBは2012年11月23日に注文しており、本書のKindle版は2013/01/06に注文している。しかし、読んでいなかった。新聞記事に刺激されてKindleで読もうとすると、なぜか端末への配信に失敗する。実は、7/22に江南にゴルフに行ったとき、このFire端末を電車の座席の前のポケットに入れて、そのまま忘れてきた。その日か翌日に、JRの遺失物係に

電話で問い合わせ、6時46分大船発籠原行きの湘南新宿ラインのグリーン車2両目のどの座席かという明確なデータを伝えたのに、見つからないという。電車でスマホを忘れたことは5-6回あるが、そのたびに戻ってくる。それもJRの遺失物システムでは見つからないと言われながら、何日か経ってドコモから連絡があり、どこそこの警察署に行ってくださいと言われることがこれまで3度はあった。それで水道橋警察、千葉警察、横須賀警察に行って取り戻している。これが不思議である。電車の中で乗客か車掌か清掃係が見つけたとして、そこで警察に届けることは考えられず、まず駅の遺失物係に届き、それから遺失物システムに登録されるはずだ。そこで1週間持ち主が見つからないと警察に行くというルートをとる。スマホの場合はそのあと警察からドコモに連絡が行って、ドコモから登録している固定電話に連絡が来るものと思われる。しかし、Kindle端末の場合はSIMカードを入れているわけではないので、そういうルートでの連絡が来ない。しかし、スマホを忘れた時も、いつもどの電車の何両目という問い合わせをJRにしているので、JR遺失物システムの登録や検索機能に問題があるに違いない。以前、Gustavoが電車にリュックサックを忘れて遺失物係に問い合わせても、見つからなかったことがあった。多分、リュックサックとは言わずbackpackとでも言ったのだろう。Gustavoは諦めずに何度か訪ね、棚に自分のリュックがあるのを発見してこれだと言ったということがあった。

話が横道にそれたが、Fireを失くす前に本書の配信ができないという現象は出ていた。Fireを失くしてから、他のKindle本は代わりにiPadのKindle readerで読んできた。しかし、iPadにもなぜかこの本だけ配信できない。ただ、PCではダウンロードできたので、今回はPCのKindle readerで読んだ。

広く受け入れられただけあって、よくできた小説である。数学の話題としては友愛数、完全数、素数、オイラーの公式などが出てくる。話の展開は巧みだが、博士の記憶が80分しか持たないという設定なのに、ルートと呼ばれる少年への愛情が持続しているようなのが、ちょっとおかしい。

これを読んだ後、アマゾンのプライム・ビデオで映画も見てみた。アマゾン・プライムの会員ではあるが、もっぱら音楽を聴くだけで、映画はほとんど見ていない。しかし、このように必要に応じて過去の映画が見られるのは便利ではある。映画もよくできており、原作にかなり忠実であるものの、一部を変えたり付け加えたりしている。その変更部分も、たとえば野球の観戦は原作は阪神広島戦のところを、ルートが出る少年野球にしたところなど、かなり自然である。

Jared Diamond, "Upheaval: Turning Points for Nations in Crisis" (Kindle版)

Jared Diamondのファンとして新刊は見逃さないところだが、今年5月に出たこの本を、翻訳が出版されるまで気がつかなかった。30年間ほど読んできたTimeもしばらく前にやめてしまったし、NYTなども電子版でもあまり見ることがない。ニュースウィークの日本版はdマガジンで時折読むが、この本の書評は出ていたとしても気がつかなかった。ただ、このところ主にKindleで読む英語の本は、翻訳が出てから存在を知り、面白そうだと思って元の本を買うパターンが多い。

Upheavalという語は、あまりなじみがなかった。辞書には「大変動」「激変」といった訳語が載っている。本書の和訳本のタイトルは「危機と人類」である。

個人にとっての危機とその対処法を、国家にとっての危機とその対処法に対応させて論じている。危機に出会った国家の例として、黒船が来た時の日本、ソ連からの侵略の危機を迎えたフィンランド、軍事クーデターが起きたチリ、戦後のドイツ、やはりクーデターのあったインドネシア、そして大英連邦の一部だったが戦後アジアの一員としての自己を徐々に確立したオーストラリア、を取り上げ、それぞれにかなりのページを割いて論じる。ダイヤモンドはこれらの国それぞれに長く滞在した経験があり、日本を除く他の4か国の言語も習熟している。

日本については、明治期の日本だけでなく第2次大戦後の日本も危機から回復した例として取り上げられており、さらに現在の問題と今後の展望を論じるところで、また日本と米国が取り上げられる。現在の日本については地球環境問題、資源問題への消極的な姿勢と、過去の中国や韓国への非道な行為についての謝罪がない点につき、厳しい批判をしている。日本人としては耳が痛い、その批判は大方受け入れざるをえないだろう。

同様に、現在の米国についても厳しい批判をしている。本書ではTrump大統領という名前はどこにも出てこないが、トランプ政権の行為、政策が批判されていることは明白である。

国家の問題を個人の問題になぞらえて論じているのが本書の特徴だが、Diamond自身の個人的な経験が随所に出てくるのも、それに関連した特徴である。これまで知らなかったが、彼はもともと生理学者だったという。父親はハーバード大学の医学教授で、当人もハーバードに入学、生理学を専攻し、成績優秀だった。そこで大学院は英国のケンブリッジに行ったのだが、そこで挫折を経験する。不器用なこともあって実験がうまくできず、絶望的になる。フィンランドに行ったのは、その時期だという。いったんは生理学をやめ、また学者になるという計画も諦めようとしたが、たまたまケンブリッジに来た両親に、もう1年やってみたらどうかと説得され、そこで失敗していた実験もうまくいくようになって、生理学の分野で業績

を挙げる。文化人類学に転向したのは、それよりかなり後のことらしい。

彼の奥さんMarie Cohenは精神療法医で、その関係で個人が精神的な危機に陥った時に、そこからどう救うかという方法論に知識があり、それを国家の問題に敷衍して考察する、というのが本書のアプローチになっている。その点でも奥さんを通して得た知識を活用するという、個人的な立場を前面に出している。

この本も紙ベースで500ページを超える。このぐらいの長さが暗黙の基準になっているようだが、最後の方はそれまでのまとめという性格の繰り返しが多く、無理に引き延ばして500ページにしているという印象もある。

なお、薩英戦争に関して、

After nearly a year of unsuccessful British negotiations with Satsuma, a fleet of British warships bombarded and destroyed most of Satsuma's capital of Kagoshima and killed an estimated 1,500 Satsuma soldiers.(p.113)

と書いているのは間違いだろう。この間読んだ吉村昭の「生麦事件」には、薩摩側の死傷者数が英国側よりむしろかなり少なかったという記述があったのが印象に残っていた。たとえばWikipediaでは

「薩摩側の砲台によるイギリス艦隊の損害は、大破1隻・中破2隻の他、死傷者は63人（旗艦ユーライアラスの艦長や副長の戦死を含む死者13人、負傷者50人内7人死亡）に及んだ。一方、

薩摩側の人的損害は祇園之洲砲台では税所清太郎（篤風）のみが戦死し、同砲台の諸砲台総物主（部隊長）の川上龍衛や他に守備兵6名が負傷した。他の砲台では沖小島砲台で2名の砲手などが負傷した。市街地では7月2日に流れ弾に当たった守衛兵が3人死亡、5人が負傷した。7月3日も流れ弾に当たった守衛兵1名が死亡した。物的損害は台場の大砲8門、火薬庫の他に、鹿児島城内の櫓、門等損壊、集成館、鑄銭局、寺社、民家350余戸、藩士屋敷160余戸、藩汽船3隻、琉球船3隻、赤江船2隻が焼失と軍事的な施設以外への被害は甚大であり、艦砲射撃による火災の焼失規模は城下市街地の「10分の1」になる。」

とある。それでJared Diamondにメールを出してこのWikipediaの英語版などを引用し間違いではないかと指摘したら、ただちに返事のメールが来て

"Thank you! Best wishes, Jared Diamond"

とあったのには驚いた。こちらが出したのが日本時間で11:52、返事を受け取った時刻が12:48である。

2018年

金井美恵子「カストロの尻」（新潮社）

金井美恵子の小説を初めて読んだが、1947年生まれでぼくと同学年である。白状すれば、やはりこれまで読んだことのない倉橋由美子とはっきり区別がついていなかったが、倉橋は1935年生まれだから、ちょうど一回り上である。

全部で11編の作品からなるが、最初と最後が評論で、中の9つが小説という構成である。いずれも雑誌「新潮」に掲載されたもので、最初からこういうシリーズの形式にする意図があったのかもしれないが、掲載は間欠的で2013年5月号から2016年11月号にわたっており、本としての並び順は必ずしも掲載順ではないので、違うかもしれない。やはり評論の方が読みやすく、小説はその独特の文体にときどき惑わされて付いていけない感じを抱かされることがある。

小説のうち六篇は、岡上淑子のコラージュ作品から触発されて書かれたものだという。岡上淑子という人もよく知らなかったが、1928年生まれの写真家・コラージュ作家というので、今年90歳である。この創作経緯からも想像されるが、印象的な視覚イメージが豊富に登場することが一つの特徴である。とくに映画はふんだんに参照され、トリュフォーの「華氏451」の撮影日記「ある映画の物語」があとがきに登場するが、その訳者は山田宏一である。Wikipediaによ

れば、金井は「幼少の頃より映画を見続ける大のシネフィルかつ辛辣な映画評論家であり、その関係で蓮實重彦や山田宏一と親交が深い」そうだ。それでスタンダールの「カストロの尻」やフローベルの「ボヴァリー夫人」が出てくるのも自然なのか。

一面真っ赤な色彩の鮮やかな表紙が付けられており、装丁「金井久美子」とあって最初は本人が装丁もやっているのかと思ったが、久美子の方は作家の姉らしい。妹の本の装丁をよく手掛けていたようだ。

深井晃子「きものとジャポニズム 西洋の眼が見た日本の美意識」（平凡社）

昨年8月に出た本で、新聞の書評を見てすぐに買った。「カストロの尻」に続いて初老の女性の本を読んだが、これは純粋に評論である。深井は1943年生まれというから、自分や金井より5歳年長である。元静岡文化芸術大学教授という。

きものについてもパリを中心とするファッションについても、およそ縁がない。きものの用語、前身ごろ、などは言葉として知っているものの、具体的にどこを指すのかすら怪しかったが、本書の図(p.88)でようやく理解した。きものはほどけばまたもとの生地にもどり、いつでも仕立て直せる、ということもあまり身に着いた知識ではなかった。ただ、フランス印象派時代のジャポニズムについては、多少の知識があった。

美術史上、19世紀後半のヨーロッパにはジャポニズムが大きな影響力を持った。それは北斎等の浮世絵や屏風、漆器、陶磁器、などの美術品、工芸品を通して広がったが、その中にきものもあった。とくに、19世紀後半の絵画に、浮世絵、屏風などとともに、きものが頻繁に描かれる。

しかし、きものはそれ以前にオランダを通してヨーロッパに入っていたという。驚いたことにフェルメールの天文学者や地理学者が着ているガウンのようなものは、きものなのだという。それらはヤボンセ・ロッケンと呼ばれる男性用室内着で、江戸幕府がオランダ商館長に贈った時服が元だというのである。東インド会社はこのような服に目を付けて輸入したらしいが、それでは需要を賄えないので、それをまねたインド製などが作られた。

というような話に始まり、江戸の小袖、モネの「ラ・ジャポネーズ」、絵画の装飾性に関連してクリムト、マチスへと話が続いていく。それからはパリ・モードの話になる。1867年のパリ万博に新橋の芸者を派遣したことがきっかけで、パリ・モードにきものが影響を与えるようになった。きものの文様がデザインに取り入れられ、リヨンで日本のモチーフによるテキスタイルが盛んに製作される。そして、パリのデザイナーであるポール・ポアレ、その後の時代のマドレーヌ・ヴィオネは、身体を締め付けない自由さ、直線性、抽象性などの点で、きものに親近するデザインを作ってきた。その流れが、川久保玲、山本耀司、につながるのだという。

王銘琬「棋士とAI——アルファ碁から始まった未来」（岩波新書）

アルファ碁のことを語ったものだが、かなり熱のこもった書である。プロ棋士としてAI碁の出現をもちろん無視するわけではなく、反発するわけではなく、単に脅威として退けるわけではなく、よく理解したうえで真摯に対応しようとしている。その視野は囲碁に限定されず、AIが人間に及ぼす影響を広く捉えようとしている。

最初読んだときは、記述の前後で見方が混乱しているところもあるように感じたが、読み返してみるとそういう感じもしない。当初は、この本に伊藤毅志や加藤英樹の協力があり、さらに文章の編集者がいるらしいことから揺れが生じているのではないかと疑ったが、それは思い過ごしで思ったより一貫性のある本である。ゴーストライターが書いたということではなく、本人の思いが溢れでていることが、随所に感じられる。

関心の中心は、当然のことながら人間とAIとの違いである。それは主にIII章に書かれている。まず、人間にとってはストーリーが重要な判断材料だが、AIにはストーリーは関係ないという。ここでストーリーとは一手一手のつながり、ある局面までの展開と争点、そこからの展望、などのことだという。あるいは「ストーリーとは観察されるものに対する意味づけ」だとされる(p.91)。また、人間にとっては部分と全体の区別、それらの関係の認識が重要だが、AIには

部分という概念がないという。部分がない一方で、全体の「戦略」というものもない。

この辺を見ると、王銘琬がかなりよくアルファ碁のことを理解していることが分かる。アルファ碁では、局面の入力に対し局面の評価と候補手の勝利確率を出力する。したがって、確かに部分という概念はなく、たとえば定石のパターンと現局面の部分とのマッチングを取って適用する、というようなことはしていない。だから人間から見るとそれまでの流れからすると「そっぽ」ではないかと思われるような手をしばしば打つ。本書でも図38(p.127)に、人なら喜んでつぐようなのぞきに対して、すっぽかして全然違うところに打ち、のぞかれたところを突っ切られる例が載っている。これはマスターの自己対戦の譜であるから、そもそも「のぞき」とか「つぎ」という概念自体が人間の解釈によるものとなるが、アルファ碁はそのような「言葉」を使って手を決めているわけではない。ただ、王はこれがAIの一般的な特徴のように理解して議論しているが、部分とパターンのマッチングを取って手を決めるような方法を取るAIがあってもよいわけで、実際、過去の囲碁プログラムやその他のゲームプログラムには、そのような方法を取るものもあったはずである。アルファ碁はそのような戦略を取らずに、結果的に成功した。

王銘琬は本因坊や王座のタイトルを取ったことがある一流棋士で、本人が「ゾーンプレス」と呼ぶ戦法で他の棋士にはないユニークな手を打つ。本書で初めて知ったが、王は2014年にゴ・トレンドとい

う台湾を本拠地とする囲碁ソフトウェア開発チームに参加したという。そのチームの助っ人社員から、ディープラーニングを使ったらどうかという提案が2015年5月にあったが、それを蹴ってしまったことを後悔している、ということも書いている。

AlphaGoMasterがGoogle主催の「囲碁未来サミット」で柯潔を破ったのは2017年の5月だが、AlphaGoZeroの論文がNatureに4月に投稿されていたことに王は驚いていて、

「注目の技術による「マスター」より強いバージョンがあるのに、それに一切触れずに、5月の「囲碁未来サミット」を行ったことになります。・・・真剣にサミットに参加したものには釈然としない気持ちが残ったでしょう。」(p.79)

と書いている。しかし、この論文がNatureで採録になったのは2017年の9月なので、その査読期間中に内容を漏らすわけにはいかなかっただろう。その辺は研究者の世界への理解の違いが現れているといえるかもしれない。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第1巻下）」（集英社）

昨年、この第1巻の「上」を読んだ、下ではやはり狩りバチとして、アラメジガバチ、ハナダカバチ、ヌリハナバチが取り上げられる。この「下」の最初に置かれている13章「ヴァントゥー山に登る」は、そこでアラメジガバチを見つけるに至る経緯を書いた導入

文だが、グループによる山登り、植物の探索、天候の急変などを描いて、ファールのエッセイストとしての力量をよく示す。

アラメジガバチは、その前に報告されたタマムシツチスガリ、コブツチスガリ、キバネアナバチ、ラングドックアナバチなどと同じように、幼虫の餌にするヨトウムシを麻痺させてそこに卵を産みつけると、巣に蓋をして去っていく。後は幼虫が自分でその餌を食べつくした末に、羽化する。この種の狩りバチは必要ならいくつかのイモムシを蓄えてから卵を産む。ところがハナダカバチは砂地に巣を作り、卵を産みつけると、鳥のように毎日新しい餌のハエやアブを取ってきて幼虫に与える。ファールらしいのは、途中で幼虫を捕獲して自分で餌を与え、どのくらい食べるのか実験するところである。

もう一つこの巻で力を入れている実験は、ハチの帰巣能力を試すことである。親の雌バチを2キロ離れたところに閉じた箱に入れて運び、そこで放す。すると半分以上がちゃんと巣に戻る。それは風景を記憶しているからではないらしい。同様な実験を又リハナバチでも繰り返し行い、驚くべき精度で巣に戻ることを報告している。

Nathaniel Popper, "Digital Gold - Bitcoin and the inside story of the misfits and millionaires trying to reinvent money"

2016年5月に出た本で、その年の10月にKindle版を購入している。Satoshi Nakamotoの論文が出たのは2008年10月である。ぼくはその内容を2014年4月に夜ゼミで紹介しているが、Mt. Goxの破綻が起きたのが2014年2月である。この本はビットコインの歴史を経年的に追っているが、最後は2014年のAllen Co. 主催のBitcoin conferenceにおけるWences CasaresとBill Gatesとの間のやりとりの話で突然終わっている。しかし、それが2014年のいつなのかが分からない。ネットで調べてもそれらしいconferenceのことが見つからない。それまでの記述から、どうも6月より後らしいことが分かる。

こういうことを長々と書いたのは、自分がどのようにビットコインについての関心を持ったかということ振り返る意味もあるが、ビットコインの歴史は短く、しかもその間に大きな変動があったから、この本の記述範囲のすぐ後からまた多くのことが起こっているに違いないという感想が湧くからでもある。実際、日本では2017年1月に仮想通貨取引所大手のコインチェックで大規模な不正アクセスにより580億円相当の金が、失われるという事件が起きた。これは同じ仮想通貨でもビットコインではなく、後発のNEMだが、この影響で仮想通貨一般への信用が大きく影響を受けた。

この本ではBitcoinの技術的な話はほとんど出てこない。しかし、Nakamotoの論文が出て10年経つが、そのアルゴリズムだけでなく、当初はNakamotoが書いたプログラムそのものも、基本的に同じものが使われて動いているのは驚くべきことである。この間の取引

スケールの増大はとてつもないものである。ただ、現在のビットコインの大きな問題の一つは、たとえば1分あたりに可能な取引量がきわめて小さいことにあるらしい。

最後の方に出てくるNakamotoの正体を見つけたというNesweekの誤報騒ぎは知らなかった。しかし、本物のSatoshi Nakamotoは、最初の1年で現在の価値でいえば10億ドル相当のビットコインを貯めているはずだが、一度もドルや他の通貨に交換したことがないだけでなく、通貨として使用したことがないらしい、

司馬遼太郎「街道をゆく（22, 23） 南蛮のみち（I,II）」 （朝日文庫）

3月に初めてポルトガルに行った。出発間近になって「地球の歩き方 ポルトガル」を買ったが、そこにこの書の「ベレンの塔は...テージョ川に佇みつくす公女のようにも見えてくる」が引用されている。また、ネット上のリスボン案内でも、同じ引用がある。「地球の歩き方」からの孫引きだろうが、それで出発の日に羽田空港内の本屋でこれを探してみたが、これがないだけでなくそもそも「街道をゆく」のシリーズがまったく見当たらない。司馬遼太郎が死んだのは1996年で、すでに12年が経っているから空港の本屋でも置いていないということになるのか。寂しいものである。

ポルトガルにいる間にアマゾンで注文をしておいた。さすがに朝日文庫で絶版になっているわけではなかった。以前に自分で「司馬の

「街道をゆく」は旅行案内ではないのはもちろん、旅行記、紀行文というものですらなく、旅をする地域にまつわる歴史を縦横に渉猟するものであるから、旅の前に読もうが後で読もうが、とりたてて違いはない。」と書いているが、まさにその通りである。

Iではもっぱらバスクの地を旅する。テーマはフランシスコ・ザビエルである。ザビエルは1549年に日本に初めてキリスト教を伝えた。イグナチウス・デ・ロヨラもバスク人だが、この二人の関係をあまり正しく理解していなかった。ロヨラがイエズス会を始めたわけだが、そこに強引にザビエルを誘い込んだらしい。二人はパリ大学で一緒だったが、ロヨラは軍人で戦争で傷を負って故郷に戻ったあと、30代半ばを過ぎて学生になっている。一方のザビエルは若く、貴族の子で気品があり明るいが、ロヨラは学業のできは悪いが偏執的で、司馬の言い方に従えば「妖気に満ちていた」。その執念でザビエルを引っ張り込んだという。

イエズス会でバスクという連想では、栄光のときのセトアインという神父が思い出される。中学1年のときに英語を習ったが、その英語たるやすさまじいものだった。栄光では独自の英語の教科書を作っていて、それがとくに中学の各学年用のものはレベルが高く、通常の文部省検定教科書より進みが早いことで評判で、他の私立学校でも採用している例があった。たとえば駒場の同じクラスに京都の洛陽高校出身の坂上がいたが、洛陽でも栄光の英語の教科書を使っていたという。その教科書の各章末にExcercisesがあったが、それを

「エクゼルシース」と発音する。バスク語というよりはスペイン語訛りだろう。当時、初めて英語を習う中学1年生にこのような英語教師を付けるのは、とんでもない学校だと思ったものである。

日本に長く住んで日本語で多くの著述をしたカンドウ神父は、バスク人である。中学か高校の国語の教科書にカンドウの文章が載っていたのをよく覚えているが、その後はほとんどその著作に触れていないと思う。しかし、中学高校のときの国語の教科書は、新しい学年になって配布されたときに読むのが楽しみだった。普段の読書ではあまり読むことのない現代詩も、教科書にあったから読む機会を得た。現代詩と言ってもそれほど新しいものではなく、記憶にあるのは薄田泣菫、山村暮鳥、三好達治、草野心平、上田敏、北原白秋、室生犀星といったところである。別に予習というような心がけではなく、純粹に楽しむために教科書を読んだと思う。今の教科書がどんな内容か知らないが、あの頃は文学的な色彩が強かった。国語の教師も文学好きが教師になったというケースが多かったのではないか。当時から国語教育が文学に偏っている、もっと論理的な、あるいは実用的な文章を読み書きする能力を育成しなければいけない、という批判はあったと思う、しかし、そういうことでもなければ、カンドウの文章を読み、かつ読んだことを今でも覚えているということは、ありえなかったろう。

サン・ジャンという町にあるカンドウ神父の生家を司馬たちは訪れているが、その隣の三階建ての建物の壁に石板がはめ込まれてい

て、そこに聖フランシスコ・ザビエルという文字が彫刻されていることを司馬が偶然発見する(p.195)。ザビエルの父方の先祖がここに住んでいたらしい。しかし、カンドウの著書のどこにも、そのことは書かれていないという。

ザビエル城に着いて、そこに一人で住んでいる修道士の親切ぶりも、感動的である。訪れた翌日、予定を変えて再度訪ねたときに、カメラマンが忘れてきた簡易カメラのビニール・ケースを持って、待ち構えていたというエピソードがある。

II ではまずマドリードに行き、後半でリスボンなどポルトガルを訪れる。司馬は明らかにスペインよりポルトガルに好い印象を持つ。

「テージョ川の公女」という表現は1つの章のタイトルになっている。ぼくはベレンの塔がある河口の地までは行かなかった。しかし、マディラの帰りに一泊したホテルはアルファーマにあったが、司馬たちもこの旧市街を歩いたようで、ファドの話とともに出てくる。司馬たちはファドを聞かせるレストランに行っている。ぼくはレストランではファドを聞かなかったが、町を歩いて男の歌手が、練習なのか店の宣伝なのかファドらしきものを外で見事に歌っているのを聞いた。この司馬の本で、アルファーマ出身のアマリア・ロドリゲスという有名な歌手がいることを知ったが、Amazon Musicでアマリア・ロドリゲスの曲を見つけて聴いた。アマリアが見出されてファドが世界的に知られるようになったらしいが、なるほどそういう力が感じられる。

吉田類「酒は人の上に人を造らず」（中公新書）

吉田類は酒屋探訪記で有名なことは知っていたが、本を読むのは初めてだ。いつだったか服部に横須賀中央の居酒屋に連れて行ったもらったことがある。それが吉田類が紹介している店とのことだった。ウェブで検索してみると、「吉田類の酒場放浪記」という番組があるらしく（BS-TBS）、そこで横須賀中央だけでも「天国」「泡屋」「一福」「中央酒場」「興津屋」とたくさん出てきてどこだったのかが分からない。

吉田は俳人ということだが、大酒飲みで有名な土佐の出身だそうである。一方で山歩きもするようで、深酒の翌朝は山歩きで酒気を払うという。東京なら高尾山、札幌なら藻岩山だそうで、後者は名前すら知らなかった。

佐藤正午「鳩の撃退法（上・下）」（小学館文庫）

佐藤が直木賞を取った「月の満ち欠け」より前の作品で、直木賞に合わせて文庫化され宣伝されていたので、「月の満ち欠け」と一緒にこれも買って、こっちを先に読んだ。これは山田風太郎賞を取っている。

文庫では上・下の2巻になっていて、合わせて1100ページある。その長さを構成に破綻なく読む側を飽きさせずに書ききる筆力には、驚嘆のほかない。偽札の行使、一家族の失踪、という事件が展開し、ヤクザ、デリヘル、などが登場するが、それを主人公でもと直

木賞作家が事件として記録しているのか、小説として描いているのか、あえて見分けがつかないようにし、時間も場所も前後左右に飛ぶが、つじつまはきちんと合っているように見せる、という技巧を凝らしたフィクションである。技巧と言えば、まず最初の50ページの間は、三人称ではあるが語り手の視点が幸地秀吉にある。ところが文庫本ではp.51に来て、突然

「実はこのとき、コーデュロイのズボンの太腿あたりを指でつまみながら、片足で飛び跳ねていたのは僕である。つまり昨年二月二十八日午前三時過ぎ、ドーナツショップで幸地秀吉と相席していた男、それが僕で、ここからこの物語で活躍することになる。」

という一節が現れて驚かされる。確かにその後は視点がこの作家で津田伸一という名を持つ男に移るだけでなく、人称まで「僕」という第一人称に変わるが、それに慣れるのにしばらくかかる。

そういえば、冒頭の表題の前に1ページがあって、そこに

「この物語は実在の事件をベースにしているが、登場人物はすべて仮名である。僕自身を例外として、津田伸一」

と曲者の文がある。最初は佐藤正午がそう言っているのかと思ったが、見返して「津田伸一」という署名で置かれた文であることに、仕掛けがあったと気づく。この小説がいかにも作り上げられたフィクションであることを示すと同時に、作家の津田が登場人物であるとともにこの小説を書いている当人として仮託されているという複雑な構造を、見事に示すものともなっている。

佐藤正午「月の満ち欠け」（岩波書店）

こっちが直木賞を取った方だが、ぼくには前の作品の方が数段上と
感じられた。

転生の話である。昔から転生物語はたくさん作られてきたはずで、
現代に近いところでは三島由紀夫の「春の雪」に始まる「豊饒の
海」がある。そういう意味ではいかにもフィクションの典型で、
「鳩の撃退法」のようなフィクショナルなものを書く佐藤には、得
意な型かもしれない。しかし、現代を舞台として別にSFというわけ
でもなくこのような話が展開されると、読者としては、というか少
なくともぼくとしては、その世界に素直に入り込めなかった。途中
ではどこかでどんでん返しがあるのではないか、実はこういう仕掛
けがあったというような落ちがつくのか、と思ったりしていたのだ
が、そのようなこともないまま、終わってしまう。直木賞の選考委
員の間ではどのような評価だったのだろうか。

もちろん、個々のエピソードについてはやはり大した筆力を感じさ
せる。たとえば三角と瑠璃が最初に会う場面から、その後の展開の
ところなど。

この本は岩波から出ており、しかも書下ろしでその成立事情にも特
殊性がありそうだ。

**アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫
記（第2巻上・下）」（集英社）**

た

上では、まずファーブルが広大な庭を持つセリニャンの家に移住し、そこをアルマスと名づけて観察と実験による研究の場としたことが語られる。第1巻を書いて出版したのはオランジェで、そこにはアヴィニヨンから移り住んだのだが、アヴィニヨンでは高等中学の教師をしていた。そこに15-16年勤めたが、教授資格を取らなかったなのでこの間、昇任・昇給は一切なかったという（第1巻上第3章訳注）。アヴィニヨンに移ったのは1870年だが、その理由は、若い娘たちに「植物の受精」の講義を行ったことをいいがかりとして、日ごろからファーブルを好ましくないと考えていたカトリック教会派の人たちから排斥運動を受け、教師を辞めさせられたという（第1巻下第21章訳注）。そこで交流のあったスチュアート・ミルから借金して、オランジュに引っ越した。しかし、その地で最愛の次男ジュールを亡くすという悲劇が起こる。第2巻の巻頭には本書をジュールに捧げるという言葉がある。しかし直接には、オランジュの家主がプラタナスの並木を幹の途中から無残に伐ったことに腹を立てて、セリニャンに移ったのだという。

第2巻では第1巻の後半に続いて、狩りバチが取り上げられる。アラメジガバチ、トックリバチ、ドロバチ、ナヤノヌリハナバチ。それらの巣作り、麻酔術、帰巣能力を探るのは第1巻と同じだが、もちろん同じ話の繰り返しではない。新しいところでは、クモを狩るベッコウバチ。またキイチゴに住むミツバツツハナバチが1列に産む

卵が孵化した後、どういう順序で外に出てくるかという問題を、周到な実験で跡づけているのが面白い。

そしてなによりもファールルの面目が躍如するのは、最後の4章で取り上げられるゲンセイとツチハンミョウである。これらは狩りバチに寄生する鞘翅目の甲虫だが、スジハナバチなどのハナバチに寄生する。虫が虫に寄生すること自体を初めて知ったが、その仕組みの巧妙さ、それを発見するファールルの観察力には驚かされる。たとえばスジハナバチやドリゲンセイの雌は、大量の卵をハナバチの巣の坑道の入口に産みつける。孵化した幼虫はじっとその場所にいる。その期間は何と7か月に及ぶが、その間幼虫は何の食物も取らない。そしてハナバチの雄が巣に入ってくる春に、その胸の毛に取りつく。しっかり取りついて振り落とされないように、肢に爪があるなど体の構造が最適化されている。

次に、ハナバチの雄と雌が交尾する瞬間に、ゲンセイは雄から雌に飛び移る。そして、雌が産卵する瞬間にその卵に乗っかる。卵はハナバチが収集した花の蜜の上に産み落とされる。ゲンセイの幼虫は、まずその卵を食べ、その卵の皮は蜜の海にゲンセイが沈み込まないための浮きの役目に使われる。そしてある程度の体になった後は、蜜にからめとられずにそれを食べつくす。

実に驚くべき複雑な仕掛けだが、それを解き明かすファールルの直観と集中力には敬服のほかはない。ファールルは進化論を徹底的に

批判しているが、こういう「本能」がどのように作られたと思って
いたのだろうか。やはり万能の神がそうしたという理解だったの
か。一方で、現代の進化論はこのゲンセイの行動がどのような進化
プロセスで獲得されたと解釈するのだろうか。

先崎彰容「未完の西郷隆盛: 日本人はなぜ論じ続けるのか」 (新潮選書)

今年のNHK大河ドラマは西郷隆盛ものである。林真理子が原作だ
が、なぜ林が西郷を取り上げたのだろうか。もっとも林真理子の作
品は1つも読んでいないから、見当がつかないだけでなくさほど関
心もない。

大河ドラマでは以前に司馬遼太郎の「翔ぶが如く」が西田敏行を西
郷役として放送されたが、それは1990年だという。大河ドラマは比
較的忠実に見てきているが、これはほとんど記憶にない。親父が死
んだ年なので、ドラマが始まった正月はそれどころではなかったの
かもしれない。また、美季子が小さいときは、食事のときなどはテ
レビを付けないことが習慣だったので、そのためかもしれない。

本書は昨年終わりに出たが、新聞の書評で割と高く評価されてい
たので買っていた。出版のタイミングは明らかに大河ドラマに合わ
せている。ただ、内容はブームに乗った際物というわけではない。
著者の先崎彰容（せんざきあきなか）という人はこれまで聞いたこ
とがなかったが、東大の倫理学科を出てから東北大で博士を取った

人で、現在は問題の日大危機管理学部の教授である。この学部ができたのは2016年でまだ新設間もないが、今年日大でアメフトの危険タックル問題が大きなニュースになって日大に批判が集中したとき、日大の監督・コーチのみならず大学の理事長、学長などの上層部の対応が後手後手で、組織としての危機管理がなっていないと非難された。それができたばかりの危機管理学部と結びつけられて、揶揄の対象ともなった。

ネットで調べたところでは、日大の危機管理部は理事長の田中英壽が亀井静香と組んで作ったもので、警察や自衛隊の官僚の天下り場所になっているという。しかし、本書を読む限りでは著者の先崎はリベラルな思想の持ち主のようで、あまり体育会系右翼とは肌が合いそうにない。

本書は西郷の生涯や思想を直接論じるものではない。先崎の取った戦略は、西郷を論じた日本思想史上の人物を取り上げて、それら視点から西郷を見ようというものである。取り上げられるのはそれら思想家や文学者の著作で、福沢諭吉の「丁丑公論」、中江兆民の「民約訳解」、頭山満の「大西郷遺訓講評」、橋川文三の「西郷隆盛紀行」、江藤淳の「南洲残影」、司馬遼太郎の「翔ぶが如く」の6人6冊である。それぞれが1つの章を構成し、その章のタイトルが順に「情報革命」「ルソー」「アジア」「天皇」「戦争」「未完」と工夫されている、この中で僕が読んだことがあるのは「南洲残

影」だけである。思想家・文学者としては他にも三島由紀夫，柳田国男，丸山眞男，吉本隆明なども出てくる。

しかし，不思議なことに最終章と本書そのもののタイトルに現れる「未完」という語がどこから来るのか，まったく述べられない。最初は司馬の「翔ぶが如く」が未完なのかと思ってしまった。ようやく「あとがき」に

「いまだに西郷星の周囲をめぐるだけで，西郷本人を書くだけの勇気がもてない。だから本書は，あくまでも未完である。
「未完の西郷隆盛」とは筆者と西郷との格闘がいまだに続いていることを表してもいるである。」

と出てくる。しかし「表しても」という表現を見ると，本文のどこかにも未完についての説明があって，ぼくが見落としているのかもしれないという気にもなるが，注意深く見直しても「未完」の語は第6章の本文には出てこないようだ。

同じような意味で著者の見落としではないかと思うのは，「はじめに」に

「あたかも西郷星の周囲をまわるようにその後の近代日本思想史は展開していった。福沢諭吉，中江兆民，勝海舟，内村鑑三，頭山満，来島恒喜，幸徳秋水，夢野久作，丸山眞男，橋川文三，島尾敏雄，吉本隆明，三島由紀夫，竹内好，江藤淳，司馬遼太郎といった人物が，本書の舞台演出を支えている」

とありながら、これらの名前で本文に出てこないものがある点である。電子書籍ではないので検索ができないから、見落としが十分ありうるが、この中で幸徳秋水と夢野久作は本文に登場しないように思う。ただ、夢野久作は主要参考文献のリストに夢野久作「近世怪人伝」が載せられている。夢野久作のKindle版の全集を持っているのでそれで調べると、この作品で「怪人」として最初に取り上げられているのが、頭山満である。だから第3章にでてきてしかるべきだが、見つからない。幸徳秋水も出てくるとしたら第3章かと思われるが、これも見つからない。

星野博美「みんな彗星を見ていた 私的キリシタン探訪記」 (文芸春秋社)

この本は2015年10月に出ているが、買ったのは昨年ではないかと思う。きっかけは例によって新聞の書評ではないかと思うが、昨年買ったとすると新刊書の書評ではなく、少し遅れた紹介という感じかもしれない。とにかく、何でこれを買ったのかまったく記憶がない。法政から大量の本を持ち帰り、それをある程度整理したが、ついでに書斎の書棚も一部入れ替えた。そのときに、比較的最近買って近いうちに読もうという本を並べた棚の列を作ったが、その中の1冊にこれがあった。それで読み始めてから初めて、これがキリシタンを扱ったものであり、男かと思っていた著者が女性であることを認識したという、心もとない読書の開始だった。

副題に「私的キリシタン探訪記」とあるように、ノンフィクションとしては「私」が学校でキリスト教にどう接し、どこに行って何を見、どう思ったかというエッセイ風の記述が多いところが、変わっている。たとえばリユートを初心者として練習する話が延々と続くが、これがどう展開するのか読み手としては見当がつかずまごつく。

この自分の体験をベースに語るスタイルには時折驚かされる。たとえば、15歳のときに夏休みの1ヶ月間、アメリカに行ったという。そこで会った同じ年頃のアメリカ人の名前にノアとかサラとがあって、それが旧約聖書由来の名前と知り、なぜ旧約聖書なのかと聞いたら、僕たちユダヤ人だからという返事を聞く。そこで初めて旧約聖書はユダヤ教の聖典で、キリスト教の起源はユダヤ教と聞いて、晴天の霹靂だったという。ミッション系の中学に3年いて、これが「晴天の霹靂」とは本当だろうか。話を面白くするための脚色ではないか。その感想として「私はそこに日本のミッション・スクールにおけるキリスト教の布教の限界が隠されていたとしか思えないのである。」と書く。こういう強引な「私はこう思う」という表現が本書のいたるところに登場する。

今年、2018年の6月30日にユネスコ（国連教育科学文化機関）の世界遺産委員会が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」（長崎、熊本両県）を世界文化遺産に登録することを決めた。もちろん

本書が出版された後の話だが、遺産登録ための準備期間は長かったはずだ。それが本書に何らかの影響を与えているだろうか。

たとえば、島原を訪れて日野江城後に行き、

「道しるべや看板、案内の類がほとんどなく、ここをアピールしようという積極的意思がまったく感じられない。ここも一応、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の一部であるはずなのだが・・・」(p.194)

また、長崎のサント・ドミンゴ教会跡のことをスペインで思い出し、

「長崎市立桜町小学校の隅にある、あの遺構を訪れた時のことは今でも心に焼きついている。この遺構は小学校建て替えの際に校庭の下から発掘され、そこをそのままガラス張りにして、石畳や地下室が見渡せる構造だった。四〇〇年前をしのばせる、日本で唯一の教会遺構である。にもかかわらず、まるで二〇〇〇年前の遺跡を見ているような、ある特定の人たちが死に絶えた、という滅亡感が漂っていた。長崎はいま、教会関連遺産群の世界遺産申請に沸いているが、この遺構がリストに入っていないことが私には解せない。」(p.391)

という言及があるが、これらは潜伏キリシタンに焦点を移す前のことを言っているのかと思われる。

本書でもっとも成功していると思うのは、第7章「スペイン巡礼」である。体験派のこの著者の特徴が現れている。まずバスクの地の

ビトリアを、スマラガの故郷として訪れる。スマラガはドミニコ会の宣教師で、1602年（慶長7）フランシスコ・モラレスとともに来日、薩摩甕島(こしきじま)に上陸した。1605年大村に赴き、投獄中の宣教師や信徒を慰問激励し、その後平戸に渡った。のち同会副管区長に任命され、迫害下の有馬の信徒を励ましていたが、1617年（元和3）大村で捕らえられ鈴田牢に投獄。5年間監禁された後、1622年フランシスコ会監察師アポリナリオ・フランコらとともに、放虎原で火刑に処せられた。

牢内で多くの手紙を書いた。手紙は監視の目をかいくぐって、外に持ち出され残った。囚われのほとんどの宣教師たちが手紙を残している。1867年福音(ふくいん)殉教者に列せられた。これらのデータは一部ウェブで検索して補ったが、本書ではここまでスマラガについての言及は案外少ない。ビトリアに着くと、スマラガが洗礼を受けた聖ペドゥロ教会はあっさり見つかってしまう。その教会の司祭ルーベン神父に話を聞く。

次に、ハシント・オルファネールの生地、ビナロスの近くのラ・ハナを訪ねる。連絡が取れた当地の司祭のレオン神父はコンゴ人である。ビトリアではスマラガを知る人はほとんどいなかったが、ラ・ハナにはハシントの生家も残っており、教会には殉教後、同僚のディエゴ・コリヤードによって届けられたハシントの手紙が大切に保管されている。その教会で行われるミサに参列して、話をしてくれと司祭に言われる。

ここではハシント・アルファネールがよく知られているだけに、日本人が彼を殺したと理解されている。司祭に、当時は日本人のキリシタンが30万人いて、そのうちの4万人が殺されたことを伝えると、それを知らなかった司祭は直ちにミサで聴衆に話し、聴衆が感動する。

最後に星野は口ヨラの生地を訪れる。村自体が口ヨラと呼ばれ、大聖堂と生家がある。この一連の旅は、意図としても場所としても、司馬遼太郎の「街道をゆく 南蛮のみち (I,II)」と重なる。ところが不思議なことに、巻末の文献一覧に司馬の「街道をゆく」は「17 島原・天草の諸道」のみが挙げられていて、「南蛮のみち」は挙げられていない。これはそうとう意識した上のことと思われるのは、司馬の方は何と言ってもザビエルを中心において訪ね歩いているのに、星野はザビエルを避けて、日本での殉教者の後はあえて口ヨラを訪ねているからである。

樋口満「体力の正体は筋肉」(集英社新書)

この夏はほとんど家にいるので、明らかに運動不足である。それで最近出たこの本のKindle版を買ってみた。思ったよりちゃんとした本であるが、基本的な知識を説明してる第1章から第4章は速読した。しかし、本書の眼玉は具体的なトレーニング方法を書いている第5章である。そこで一番に勧めているのがボート漕ぎ(rowing)である。そのために高い機械を買う必要はなく、エクササイズチューブを使えばよいという。それで早速アマゾンで、トレーニング用のゴ

ムバンドのセットと、チューブを使った簡単なボート漕ぎ器を注文したら、すぐ届いた。ちょっとずつそれを使い始めている。

若桑みどり「クアトロ・ラガッツィ 天正少年使節と世界帝国（上・下）」（集英社文庫）

星野の本を読んだ後に、これを読むのは自然のなりゆきである。大佛次郎賞を受賞した本でかねてからその評判を知ってはいたが、偶然読んだ星野の本から逆によいきっかけを得た。星野は当然この若桑の本を意識している。まず最初に出てくるのは、次の一節である。リュートとヴィオラとビウエラの関係を議論して、使節が帰国後秀吉謁見の際にひいた楽器は何かという疑問を出した後で、

「若桑みどりの大著「クアトロ・ラガッツィ」にヒントがあった。使節が欧州滞在中、アルカラで枢機卿ドン・アスカニオ・コロナから贈られたものだという。ただしここでは表記を「リュート」としている。しかもよりによって秀吉はその楽器を全部欲しいと言い出し、関白を怒らせることをひたすら恐れた彼らは、いたしかたなく献上するしかなかった。」(p.51)

以下、これがローマから来たものとするリュートの可能性があるとしながら、結局確かなことは何一つわからない、と言う。

次に出てくるのが、何と270ページ先でこれを探すのにえらく時間がかかった。

「なぜ日本の信徒は殉教を望んだのかという疑問を私は払うことができない。キリスト教と武士道に親和性があった、という

見解を示す人は少なくない。（中略）私が多大な影響を受けた「クアトロ・ラガッツィ」の著者、若桑みどり氏も、日本人の殉教願望の根底に武士道を見た一人だ。」(p.323)

に続いて、「クアトロ・ラガッツィ」の一節が引用されている。しかし、その後は4ページにわたってこの説が批判される。殉教したのは武士だけではない、むしろより下層階級の方が多かった。また、信徒が武士か否かで拷問や処刑、さらに死後の遺体の扱いに格差があった。などの理由が挙げられている。「多大な影響を受けた」と言いながら、若桑とは異なる独自性を出したいとの気持ちが現れている感じがする。星野の本で若桑のことに触れられているのは、この2カ所だけである。

若桑がこのテーマに取り組んだ理由は、プロローグに明快に述べられている。若桑は1961年にローマに留学し、カトリック美術を研究テーマに選んだ。それから30数年、ミケランジェロをずっと研究し、その本質がわかってきた。しかし、「東洋の女であるお前にとって、西洋の男であるミケランジェロがなんだというのか」という声を内心に聞いたという。これと似たような疑問は、塩野七生「ローマ人の物語 I」を読んだときに抱いた。現代の日本人の女性である塩野が、ローマ人の物語を日本語で日本にいる読者向けに書く意味は何なのだろうか、と感じたのである。皮肉に言えば、イタリア語で書いてイタリアで出版したら売れるのだろうか、ということにもなる。それもあって「ローマ人の物語」は第1巻だけ読んで、それ以降の巻はまったく手を出さなかった。しかし、日本の読書界で

は好評が続いたようで、全15巻が完結し、今は「ギリシア人の物語」に取り組んでいる。

それに対して、若桑のこのテーマに関する姿勢は分かりやすい。戦後50年の1995年、大学を1年間休職して、自分のほんとうのテーマを探した。そしてバチカンに行き、東アジアへのキリスト教布教の第一次資料を探した。そこでウルバヌス8世大学附属図書館を紹介され、天正少年使節についての文書が多いことに気づき資料を集めた。5年後に大学を退官した後、ふたたびローマに行って聖天使城が見える建物に部屋を借り、これを書いたという。それで「ほんとうに私がやりたかったこと、知りたかったことが書けた」と言う。

若桑は美術史が専門とは言え青柳と違って研究者だから、イタリア語はもちろん、多分、ラテン語、スペイン語、ポルトガル語など是可以するだろうし、歴史資料を探し読み込んでまとめる力はあるだろう。青柳の本で不満だったのは、それが特徴とは言え自分の体験談、たとえば香港への留学の思い出、リュートの練習、長崎・天草・ポルトガルなどへの旅行、をもとに話を進めるため、キリシタンに関する史実は順不同で登場し、時間的に行きつ戻りつする。キリシタン史に不案内のこちらとしては、もっと通史的に語ってほしいという気がした。それと比べるとこの若桑の本は、別に通史というわけではないが、時間的な経緯の見通しがはるかによい。

とはいえ、この若桑の本も冷徹な研究書というわけでは決してなく、意外にも感情に溢れた表現が随所に見られる。それはプロローグに書かれているような著者の思い、情熱に基づくものだろう。解説の樺山紘一によれば、若桑による創見の一つは、4人の使節なのにローマ法王に会うときは中浦ジュリアンが外されて3人だったということの、解釈である。その箇所は、

「どうしても教皇庁はジュリアンを重病にしたい、どうしても、枢機卿謁見式に出したくないのだとしか思われぬ。もし私の推測が正しいとしたら、それは東方から来た公子が四人では困るからだ。東方から来た公子は三人でじゅうぶんだ、いや三人でなければならない！(中略) いまここで、この四人のなかで、穴吊りの処刑によって殉教し、もっとも壮絶にその信仰を貫いたのがこのジュリアンであったことを思ってみることが、われわれには必要だろう。ミゲルはかなり早く棄教してしまった。大きな権力は無力な個人を平然と踏みにじる。そして、今私が言っていることには珍しく「史料がない」。策略や陰謀にはすべて史料がない。その顔は見えない。しかし、史料のないところで、人間は、その人間にふさわしい行為をし、語られない歴史を作っているのだ。」

熱のこもった文章である。

天正少年使節をヨーロッパに送るという発想を実行に移したヴァリニャーノは、すごい人である。少年使節団が出発したのは、1582年である。ヴァリニャーノが連れて行くのだが、当人は途中のインドで総督に任じられてヨーロッパに行けなくなる。しかし、大友宗麟

等の手紙をねつ造することまでも含め、周到にお膳立てをする。それでも、四人が危険な航海、病、盗賊などさまざまな障害を乗り越えて、ポルトガル・スペイン国王フェリペ2世、トスカーナ大公、ファルネーゼ枢機卿、ローマ法王グレゴリオ、などに会い、公式・非公式に大歓迎を受けてヨーロッパ中で話題となり、8年かけてともかく無事に帰国したということは、本当に奇跡的なことといえる。しかし、出発した4か月後にキリシタンを保護した織田信長が本能寺で殺され、天下を取った秀吉は1587年には伴天連追放令を出す。しかし、秀吉は1590年に帰国した四人に謁見して、西洋音楽の演奏を喜んだり、厚遇を約束したりする。1597年には、秀吉の命による26聖人の殉教もあり、その後のキリシタン迫害は厳しさを増す。これほどの激変に見舞われた四人の生涯は、およそ他には類のないものといえよう。

伊東マンショは四人の代表格だったが、帰国後秀吉が謁見したとき、自分に仕えるようにと言われた。それを慎重な言葉づかいで断ったが、1591年には四人全員がイエズス会に入会し、1608年にマルティノ、ジュリアンとともに司祭になる。そして1612年に、四人の中ではもっとも若く死んだ。千々岩ミゲルはイエズス会を脱会し、棄教した。その後、いつまで生き、どのように死んだのかは分かっていない。若桑によれば、ミゲルはキリストの神性を信じられず、かといって仏教に戻る気持ちもなく、無神論に近くなったとする。そして

「もしミゲルが疑うことを学び、神をも仏をも信じない自由を悟り、そしていかなる宗派にも、いかなる藩にも属さず、キリスト教徒でも仏教徒でもない人間として長崎の町で人知れず生きて死んでいったとすれば、それは現代のわれわれにもっとも近い人間であった。」

と書く。

原マルティノは1614年にマカオに追放されて、その後1629年にその地で客死した。中浦ジュリアンは長崎などに潜伏し、布教を続けた。1633年に小倉で捕縛され、長崎に送られて穴吊り拷問に5日間耐えた上、殉教した。

本書が集英社から出たのは2003年、そして文庫化されたのが2008年。その文庫本のあとがきを樺山紘一が書いている。そのタイトルが「弔辞としての解説」である。若桑みどりは2007年10月に亡くなった。1935年生まれだから享年72歳である。

日本がこの時代に鎖国に向かわず、諸外国に対してより早く広く門戸を開いていたらどうなっただろうか、ということを考えずにはいられない。この疑問はおそらく繰り返し取り上げられて議論されて来ただろうし、歴史に「もし」はないとして議論そのものが無意味だともされてきただろう。しかし、その点に関連して面白いことの一つは、日本人ほど質問好き、議論好きの民族はいないと、ザビエルもアルメイダもほかの多くの来日宣教師も言っていることである。これはかなり意外である。今、大学の教室で「質問がないか」

と聞いても、学生たちはシーンとしている。東大でも法政でも同じだった。これはこちらの授業の進め方の問題かもしれないが、他の教師からも同じような感想を聞く。一方、アメリカ人やヨーロッパ人の学生は、こちらが嫌になるほど質問をしてくる。国際会議でも、英語の問題もあるかもしれないが、日本人で質問をする人は珍しい。

アンリ・ファールブル、奥本大三郎訳「完訳 ファールブル昆虫記（第3巻上・下）」（集英社）

ようやく3巻まで読み終えたが、これまでのところ取り上げられる昆虫はほとんどハチ類ばかりである。最初のスカラベの話が有名なために印象が強いが、あとはハチばかりで「昆虫記」という和名の印象からするとあらゆる昆虫が偏りなく扱われるのかと思ってしまいが、今のところはちょっと違う感じがする。しかし、ハチというのがこれだけ多様で、実に様々な生態を見せるということは驚きである。またその生態をファールブルは手の込んだ実験と観察で、巧みに解き明かす。仮説を立て、その真偽を検証する方法を編み出し、説得力をもって結果を説明するプロセスは間然するところがない。

登場するのは、ツチバチとその狩りの獲物のハナムグリ、ヌリハナバチとそれに寄生するホシツリアブやシリアゲコバチ、トガリアナバチ、ツチハンミョウやゲンセイというハチへの寄生虫、ツツハナバチなどである。とくにハチに寄生するホシツリアブ、シリアゲコ

バチ，ツチハンミョウ，ゲンセイなどの観察には力が入っているが，驚くべき巧みさで宿主を利用することが示される．

もう一つ力が入っているのは，狩りバチの多くが雌の卵には多くの食物を与え，雄の卵には少しの食料しか用意しない，またツツハナバチのように植物の茎やカタツムリの殻などを使って小部屋を作りそこに卵を産む場合，雌の卵には大きな部屋を，雄の卵には小さな部屋を用意する．それらの部屋をどういう順序に並べるか，また雄か雌かをどう識別しているのか，という問題の解明である．食物の量で性別が決まるのか，という仮説に対しては実験で否定的な結論を出す．周到な観察の結果，親の雌バチは卵の性別をあらかじめ知っているらしい，と推論する．

現代では，ハチの雌は，交尾後，精子を体内に蓄え，雌を産む場合には産卵の際に受精させる，雄を産む場合は受精させないというコントロールをしていることが知られているそうだ．実はファールブルの時代にポーランドの聖職者でミツバチを研究したジェルゾンという養蜂家が，受精によって雌ができるということを発見しており，そのことはファールブル自身が第20章に書いている．それに対して，

「ドイツから来たものであるゆえに．私はこの学説にどうしても深い疑いを抱いてしまう．」(p.345)

と言いながら，受精嚢がどのハチにもあるのか，解剖を繰り返して確認する．肝心のツツハナバチでは見つけれなかったが，他の多くのハチでその存在を確認し，ツツハナバチの場合も自分が悪かつ

たのだろうと言って、すべてのハチの仲間にこの精液の貯蔵器官があることを認めておくと言う。ただ、そのあともやや未練がましく、この説に欠陥がないかと、いろいろ論じている。

進化論への嫌悪はこれまでも何度か吐露されてきたが、ここではそれがエスカレートして、「第15章 進化論への一刺し」という独立した章がある。そこには

「単一の獲物、または多種の獲物を狩るおまえたちの共通の先祖、あるいは先駆者の存在は、まったくの幻想であると思う。（中略）要するに進化論は、おまえたちの食物を説明するためには無力だと思う。」

と書かれている。その前の「第4章 ツチバチの狩りの困難さ」でも、ツチバチが神経節が1か所に集中して刺しやすくなっている昆虫を正しく獲物に選び、その一点を間違いなく刺すようになり、さらに幼虫が途中でそれを腐らせることなく食べ進むというわざを獲得する、というようなことが偶然の積み重ねでできるはずがない、とダーウィン派を批判する。奥本はこの点について訳注で、「進化論が説明するように、偶然の積み重ねによって現在の習性を獲得したというのでは、やはり人を説得できないだろう。」と書き、現代の進化論でもまだ合理的な説明ができていないという。確かにファールブルのような進化論に対する素朴な疑問は、現在のわれわれも感じるところがあり、100年以上経ってこれだけネオダーウィニズムが広まった現代でも、すべての疑問に解答が与えられているわけではないのだろう。

この巻の最後は、その先に対して暗い見通しを述べて結ばれている。

「愛する昆虫たちよ、お前たちについての研究は、人生の試練の中で私を支えてくれたし、これからも支え続けてくれるだろうが、いまはここで別れを告げねばならない。私のまわりでは仲間の数もまばらになったし、永いあいだの希望も消えてしまった。それでもこの私には、お前たちのことをなおも語り続けることができるであろうか。」

訳注によればこの巻が上梓されたのは1886年、ファールブルが62歳のときで、その前年に妻のマリーを失っており、ファールブル自身が年老いた父親の面倒をみることになってしまっていたという。しかし、翌年には40歳若いジョゼフィーヌ・ドーデルと再婚し、子供も二人生まれる。そして5年後に昆虫記の第4巻が出たということである。

山下範久「教養としてのワインの世界史」（ちくま文庫）

もともと「ワインで考えるグローバリゼーション」という題でNTT出版から2009年に出された本を、改題して文庫化した本である。原題ではおそらく買いそうにない本だが、内容としては元とほとんど変わっていないようで、題が替えられたのと1章付け加えられたのが主な変化らしい。もともとの構成は大学の講義スタイルで、全13章からなる。だから付け加えられた章のタイトルも、「九年後の補講 文庫版のための新章」という。

これまでワインの本を案外読んでいる。しかし、ほとんど頭に残っていない。

- ヒュー・ジョンソン, 小林章夫 訳「ワイン物語 (上・中・下)」
- 辻静雄「ワインの本」(新潮文庫)
- 田崎真也「飲んで識るイタリアワイン」
- 田崎真也「ワイン生活」(新潮選書)
- 稲垣真美「ワインの常識」(岩波新書)

さらに、この本でいろいろな意味で取り上げられているParkerの本も、ハードカバー版を持っている。

- Parker's Wine Buyer's Guide, 3rd Edition, 1993

「1980年代の後半には彼の影響力は世界的なものとなり、今日なおその力は絶大です。」(p,162)

とあるから、これを買ったのはかなり早い時期だったことが分かる。買ったのはアマゾン前の時代で、Book of the Monthという米国の通販の会員になっていた時だと思う。毎月、本のカatalogが冊子として送られてきて、そこから選んで本を注文すると、確か船便で送られてきたとう時代である。それで例えば全1巻のハードカバー版シェークスピア全集なども、買っている。Amazonも初期には米国に注文していたものだが、すぐに日本版のサイトができた。

本書の著者は、駒場出身で東京大学大学院総合文化研究科単位取得退学という履歴が書いてある。国際関係論が専門らしく、グローバルゼーションというテーマはそこに由来するものだろう。しかし、こういう本を書くのだから、日本ソムリエ協会認定ワインエキスパートというような資格も持っている。

言うことはかなりもつともである。いくつかのキーワードで、現代のワインを見る視点が表されている。一つは、フォーディズム、つまり大量生産と低価格の安定供給が、ワインにも及んだという歴史的認識である。そのフォーディズムが過剰生産と需要の減退という限界にぶつかると、ポストフォーディズムが生まれる。それは外注化と高付加価値製品への特化である。その時期にパリ試飲会事件が起きたという。1976年にフランス・ワインとカリフォルニア・ワインをブラインドで名だたる専門家が試飲し、白も赤もカリフォルニア・ワインがトップになったという事件である。そしてポスト・フォーディズムを象徴する2つの傾向として、産地の拡散と品種の収斂を挙げる。産地の拡散とは、いわゆる「新世界」、アルゼンチン、チリ、南アフリカ、オーストラリアなどに産地が広がったことを言い、品種の収斂とは白のシャルドネ、赤のカベルネ・ソーヴィニヨンとメルローが世界中で生産されていることを言う。

別のキーワードはパーカーリゼーションである。それまでの権威主義的なワイン批評を、パーカーがひっくり返した。パーカーの影響力は産地の拡散と品種の収斂を加速し、どこのワイナリーもパーカ

ー好みのワインを作るようになった。そしてワインの情報化・記号化が進む。

もう一つのキーワードはテロワールである。山下によれば、テロワールとは「ワインに表現された土地の個性」だという。そしてパーカーリゼーション批判の言論では、必ずテロワールの重要性がもてはやされる。パーカーリゼーションで売れるワインの画一化が進んでしまった状況を打破する概念が、テロワールだそうだ。しかし、革命児だったパーカーが権威化したように、「テロワール」もイデオロギー化したというのが、山下の主張である。

読書として面白かったが、自分は普段、1000円程度のワインを飲んでいるので、ワインの選択や味わい方に関しては、あまり参考にならなかった。逆に日本酒の方がよい酒を飲んでいるのに、日本酒に関するこの手の本は、あまり読んでいない。サライの日本酒特集のようなほとんど宣伝のようなものの他は機械的に検索すると、以下が見つかる。

- 小泉武夫「日本酒ルネッサンスー民族の酒の浪漫を求めて」
（中公新書）
- 小泉武夫「酒肴奇譚 語部醸児乃酒肴譚」
- 秋山裕一「日本酒」
- 柳田国男「酒の飲みようの変遷」（Kindle版 柳田国男大全集）
- 吉田類「酒は人の上に人を造らず」（中公新書）

このうちワイン本に相当するのは小泉の最初の方と、秋山ぐらいだが、ヒュー・ジョンソンやパーカーと比べればボリュームが全然違う。

- Bianca Bosker. "Cork Dork: A Wine-Fueled Adventure Among the Obsessive Sommeliers, Big Bottle Hunters, and Rogue Scientists Who Taught Me to Live for Taste Paperback," March 28, 2017.

という本のKindle版もこの本と同じころ買ったが、まだ読んでいない。

谷脇康彦「サイバーセキュリティ」(岩波新書)

薄い本だが広い範囲をカバーし、よくまとまっている。著者は総務省の役人で、経歴からするとおそらく文系出身だろう。先日、現産総研、元日立の情報セキュリティの専門家、寶木和夫さんに会ったとき、たまたまこの本を鞆に入れていたので聞いてみたら、もちろん著者のことは知っていたが、この本のことには知らなかった。

ぼくも学術会議の情報学委員会「安全・安心社会と情報技術分科会」の委員を4年間やったが、そこでも寶木さんは一緒だった。委員の中には、NISCの関係者も多くいた。研究としてのセキュリティはマッチポンプのようなところがあって、多少のいかがわしさを感じることもある。つまり防御を考えることは攻撃を考えることと裏腹だから、研究対象を自己増幅させることができる、という点が他の研究分野とは違う特徴と言えるだろう。

今日(12/19)の日経の朝刊を見ても、サイバーセキュリティに関連する記事が多い。

1. [政府、官民データ管理を強化 重要インフラにも対策]

政府は官民が扱うデータの漏洩やシステムの機能停止を防ぐための体制強化に乗り出す。電力や交通、水道などの重要インフラを扱う企業に情報管理を高度化させる対策を検討。次世代通信規格「5G」の基地局やネットワーク機器を調達する際、安全性を評価するような仕組みを整える。膨大なデータが国内外で流通する現状に対応する。

19日にIT（情報技術）総合戦略本部（本部長・安倍晋三首相）の会合を開き「デジタル時代の新たなIT政策の方向性」と題した文書を決めた。来春をメドにまとめる「IT政策大綱」に反映する。首相は会合で「プライバシーやセキュリティの透明性が高く互恵的なルールの下で、自由にデータが流通する環境を整備する」と述べた。

文書は電力や交通、金融といった重要インフラに関しては情報管理の強化、高度化に向けた対策を検討すると記した。サイバー攻撃を受けてシステムが停止したり、個人情報漏れれば国民生活や経済活動に大きな被害が想定される。5Gやクラウドサービスに関する情報通信機器や重要システムの調達先を選ぶ際は情報漏洩や機能停止のリスクを重視。「安全性の評価を確実に実施する仕組みを構

築する」と、価格だけでなく安全保障上の恐れがないかも考慮し、調達先を決める方針を示した。

ITの進展でデータのやりとりが高速で効率的になる一方、適切に管理できなければ政府や企業の重要情報が流出するリスクが高まっている。文書は安全なデータ流通に関する国際的な枠組みを立ち上げると明記。個人情報を保護する体制が不十分な国へのデータ移転は厳しく制限し、違反した企業には課徴金の納付などを命じる仕組みづくりを検討するとした。

政府は10日、中央省庁や自衛隊が情報通信機器を調達する際、情報漏洩など安保上のリスクがある機器は選ばないよう申し合わせた。来年1月にはこの新しい指針を電力や金融、医療など重要産業の事業者の説明し、社内での調達や情報管理体制を見直すよう促す。米国が取引を禁じる中国の通信機器最大手、華為技術（ファーウェイ）などが念頭にある。

2. [サイバー・宇宙を積極防衛 政府、新防衛大綱を決定]

政府は18日、新たな防衛計画の大綱（防衛大綱）と中期防衛力整備計画（中期防）を閣議決定した。宇宙やサイバー、電磁波を扱う電子戦で敵の通信やネットワークを妨害する能力の強化を明記。新領域での積極的な防衛体制（アクティブ・ディフェンス）を前面に打ち出した。

アクティブ・ディフェンスはサイバー攻撃などを受ける前に相手の能力を失わせたり、低下させたりする考え方の一

つ。攻撃の予兆を捕捉し、有事と認定されれば早期に対処する。

大綱では日本の宇宙衛星や情報通信システムを脅威から守るため、敵の宇宙・サイバー空間の利用を「妨げる能力」を強化すると明記。電磁波を扱う電子戦への対応では日本への侵攻をうかがう相手のレーダーや通信を使えないようにする体制の拡充を盛り込んだ。

サイバー領域では陸海空の共同部隊としてサイバー防衛部隊を新編する。現状の150人程度のサイバー防衛部隊を拡充し将来的に500人規模に増やす。有事の際に攻撃を阻止するため通信ネットワークを妨げる「反撃能力」の保有も盛り込んだ。

新たな領域の重要性が認識されるきっかけになったのは14年のロシアによるウクライナ侵攻だ。ロシアは直接の物理的な攻撃より、サイバー攻撃や電子戦の能力を総動員した。

各国は急激に体制や装備の整備を進めており、日本は後れをとっている。たとえばサイバー分野だ。米国のサイバー攻撃に対応する部隊は約6000人とされる。北朝鮮のサイバー部隊は約7000人、中国は10万人規模との見方がある。

というわけで、タイムリーな本ではある。

渡辺正峰「脳の意識 機械の意識 - 脳神経科学の挑戦」(中公新書)

ずいぶん前に読み始めたのだが、読み終わるのに時間がかかった。

著者は1970年生まれだからぼくより20歳以上若いが、計数の出身らしい。あとがきで恩師としてたくさんの人の名前を挙げているが、その中の合原一幸と下條信輔の二人だけは知っている。

読むのに時間がかかった理由は、途中で何か月もほったらかしにした期間があったからだ。その原因の一つは、またしても出てくる「クオリア」と、この書で初めて知ったNCCという概念がずっと頭に入っていないことである。NCCはNeural Correlates of Consciousnessということであるが、このような3文字略語が、その導入以降一貫して使われていること自体が、用語として未成熟であることを暗示する。この用語はクリックとコッホによって導入されたというが、その二人の定義を著者は次のように訳す：「固有の感覚意識体験を生じさせるのに十分な最小限の神経活動と神経メカニズム」。しかし、「十分な」と「最小限」の組合せは、かなりのあいまい性を産むリスクがあると思われる。

「意識」が捉えどころがないのは、意識の自然則が確定していないからだとの主張がなされる。自然則とは他の法則から導くことができない、科学の根幹をなす法則だとする。たとえば万有引力の法則とか光速度不変の原理がその例であるという。

デイヴィッド・チャーマーズは意識の哲学の第一人者だそうだが、彼は「サーモスタットに意識が宿る」と主張する。その根拠は「す

すべての情報は、客観的側面と主観的側面の両者を併せもつ」とすることにある。そしてこれが意識の自然則の候補になる命題らしい。しかし、自然則は検証できなければならないが、この意識の自然則は検証のしようがないことが問題である。これでは袋小路に入ってしまう。

しかし、意識はアルゴリズムとする5章と終章はちょっと面白い。

「統合された情報」の存在が意識の鍵だという説があるという。しかし渡辺はこれに批判的で、意識は情報ではなく脳内のアルゴリズムだという。そのアルゴリズムとして想定されているのは、視覚処理の高次から低次への生成モデルである。生成モデルによって、脳は脳内に仮想現実を作る。そのアルゴリズムは、ニューラルネットワークモデルで表現できる。それでたとえば意識の時間遅れという現象が、説明できる。

この議論を見ても、また著者の論文リストを見ても、渡辺の専門は視覚情報処理であることが分かる。しかし、意識は必ず視覚を伴うものだろうか。生まれながら視覚を持たない人にも、意識はあるだろう。だから意識の存在に視覚は絶対条件ではない。もちろんそんなことは百も承知で、しかし脳の情報処理のプロセスを追いやすい視覚から意識の問題に迫ろうとしているのだと、著者は言うかもしれない。しかし、それならそのことをはっきり書いてほしかった。そして、視覚を欠いた場合の脳における意識は、視覚を伴う意識と同じなのか違うのか、といったあたりの議論も聞きたいところだ。

熊野純彦「マルクス資本論の哲学」（岩波新書）

渡辺の本に続き、年末になって読みかけの本を片づけてしまおうという意図で読んだ一冊である。だから読み始めてからの経過時間(elapse time)は、かなり長かった。アマゾンの記録を見ると、買ったのは1/27で、すぐに読み始めたわけではないにしろ、1年近くかけて読んだと言ってもよい。

吉本隆明は、これまでの読書で恐ろしい精神的な事件のような読み方をしたのは、ファールブルの昆虫記と新約聖書と資本論だと言っている（「読書の方法」p.16）。今、昆虫記を続けて読んでいるのは、このことが記憶のどこかにあったからかもしれない。聖書の方は、小学校以来馴染みの書でありながら通して読んだことがない。しかし、聖書についての本はいくつかは読んでいる。資本論はもっと馴染みがないが、親父の蔵書にはマルクスエンゲルス全集が数種類あり、親父が実際どれほど読んだのかは分からないが、東京帝国大学農学部農業経済学科出身という経歴を物語るものだろう。東大の農業経済はマル経の牙城と言われた。しかし、今確かめたところ、残っているマルクスエンゲルス全集の発行年が昭和2年とか3年になっている。それでは親父もまだ明治中学に通っている時代だ。戦後のマルクスエンゲルス選集もあるが、全集の方は中古を買ったのだろうか、それとも誰かからもらったものか。

とにかく、自分の残された生涯にどれほど本が読めるものか、知れたものではない。その間に聖書も資本論も読まなければならないと

いう強迫概念があるわけではないが、死ぬまでにどんな本を読むか、ということが頭をよぎることもある。

この本は、岩波新書という手軽だがある程度の信頼のおける解説本の一冊として、そのような気持ちに応えることが期待される。出版側もそのような意図から出したのだろうが、想定読者層も現代の若者、学生、というよりは、このような気持ちを持つ団塊の世代なのかもしれない。

「あとがきにかえて」で著者は、戦後の日本では資本論は3つの視角から研究されてきたという。一つは経済原論、二つに資本論体系の形成史、三つには哲学的視点だという。本書はタイトルからもわかるようにこの第三の立場ということだが、素人から見ると十分に経済学的な感じがする。

面白いことに、

「マルクスが数学を苦手としていたことは、よく知られています。遺稿となった「資本論」第三巻には地代論ばふくまれていますけれども、その設例や数値例などは、編者のエンゲルスが追加したり、マルクス自身の計算の間違いを訂正したりしています。右にひととおり見ておいた再生産表式論も、一見したところでは、いわゆる新古典派総合をへた現代経済学における一般均衡モデルとくらべて、その初等算術的な原型であるように見えることでしょう。」(p.165)。

というところがある。

本書を通してG-W-G'という形式が繰り返される。ここでGは貨幣（Geld）、Wは商品（Ware）であり、一般に $G'=G+\Delta G$ である。要するにこういう単純な算術式、しかもほとんど1次の加減算だけ、の積み重ねである。しかし、マルクスはこれらが表す内容をヘーゲル流の用語で説明するので、難解に見えるようだ。しかもそれを日本語への翻訳で学んだ人たちは、その難解さをありがたがったところがあるのだろう。

もちろん、それだからと言って、マルクスの偉大さが矮小化されるわけではない。たとえば第V章の「利子と信用」で述べられる商業資本の本来の性質から導き出される恐慌という現象の説明は、19世紀にもすでに恐慌があったから言えたものとはいえ、20世紀の大恐慌を予言するものだろう。

著者の熊野は、理論的な研究者であるだけでなく、成田空港闘争などの実践的な問題にも関わってきた人らしい。それについては、ごくわずかにであるが、本書の中でも触れられている。

渡辺京二「バテレンの世紀」（新潮社）

今、本の存在を知る情報源は新聞の書評か広告である。この本は渡辺京二の著作であり、しかも新潮社から出ているのに、新聞では気がつかなかった。10/10に岸田さんと伊藤さんの共同展が京橋であったのを見に行ったが、その後、実に久しぶりに丸善に寄った。建物内部の構造は変わっていないが、置いてある本が変わっている。

マンガとハウツーものがやけに大きく書棚を占めている。その中でざっと店内を回った際に、この本を発見した。奥付を見ると2017年11月に出た本だから1年前である。買ったの今年の8月に出た第4刷だから、それなりに売れているのだろう。しかし、自分にとっては存在を知らない本だった。

朝日新聞の「語る 人生の贈りもの」という連載に渡辺京二が12/11から登場し、全14回で12/28が最終だった。そのうちのかんりの回を読んだ。戦後、大連から引き揚げてきて苦労したこと、旧制熊本中学に在籍中に共産党に入党して活動していたこと、結核を発症して療養したこと、熊本で書評誌の編集をしていて、石牟礼道子の「苦海浄土」を編集者として世に出し、その後も石牟礼と長く交流してきたこと、などを知った。

本書は、このところ読んだ若桑や星野の本と違って、通史として書かれている。時代も16世紀から17世紀の百年間、まさにバテレンの世紀全体をカバーしていて、若桑や星野の本には出てこなかった支倉常長のメキシコ、スペイン、ローマへの派遣や島原の乱についてもかなり詳しく扱われる。

若桑や星野ほど自分を出さないのはある意味でよいところがあるが、逆にあまりに淡々と語られて、渡辺がなぜこのテーマを選び、10年にもわたって取り組んだのかよく分からないところがある。この本は渡辺が雑誌「選択」の2006年4月号から2016年12月号まで連

載した原稿をもとに作られている。ペリーが1853年に来航した300年前に、ヨーロッパ人が日本に来て衝撃的な出会いがあったが、そのことは江戸のその時期にはすっかり忘れられていた、というのが本書のキャッチフレーズとして帯に書かれている。それで「逝きし世の面影」のように、16-17世紀に日本に来たヨーロッパ人が日本人や日本文化をどのように見、どのように語ったかを描いたものと想像された。実際、イエズス会の宣教師やその他の修道会の宣教師たちは克明な記録を残しており、フロイスの書いたものなど日本史の貴重な資料になっている。もちろん、それらが引用されはするが、引用する渡辺の方に「逝きし世」のような熱が感じられない。歴史としては過酷なキリシタン迫害の時代だから、「逝きし世」で引用したような日本のよさを外の眼から再発見するという趣向にはならないだろうが、19世紀におけるコンタクトと16-17世紀におけるコンタクトがどう違い、どう類似するかという視点で描けば、もっと面白い読物になったのではないだろうか。

実際、本人も必ずしも意に沿わないところがあったのか、あとがきに

「連載は10年余の長きにわたったから、その間私はこれだけに専念していたわけではない。例えば「熊本日日新聞」夕刊に連載した「黒船前夜」は、この連載と併行した仕事だった。むしろそのほかにも、本を何冊も出した。他の仕事からその都度キリシタン史に頭を切り替えるのは、少々厄介な作業でもあった。また話の進展に従って、史料、研究書を新たに読破せねば

ならなかった。いまは「やっとキリシタン史から解放されたか」という気分で、しかも大した達成感もない。やれやれというのが正直な気持ちである。」

と書いている。

2017年

立花隆「武満徹・音楽創造への旅」(文芸春秋)

長い。780ページある。昨年中にほとんど読み終わっていたが、最後はこの正月にかかった。

本が長いだけでなく、元の原稿は「文学界」の1992年6月号から1998年5月号まで連載されたものだというから、2016年に出版されるまでの期間がまた長かった。月刊誌に連載したものにはそれほど手を入れずに短い期間で出版したきた立花にしては珍しいと思ったが、その経緯は「おわりに ～長い長い中断の後に」で明かされる。

立花がこれほど現代音楽に興味があり、造詣が深いことを知らなかった。

武満の音楽もこれまでそれほど聴いたことがなかった。小学館から「武満徹全集」というCD55枚を含む5巻本が、2002年から2004年にかけて出ている。同じ小学館のモーツァルト全集は全部ではないがほとんど持っているし、バッハ全集は最初から予約して全巻そろえている。武満の全集も出版の案内を見たが、当時はそれほど触手を動かされなかった。

立花のこの本を読んでから、武満全集を購入し始めた。出版されてから10年以上経つが、Amazonにもまだ出品されている。中古でも元の価格より高い値が付いている。

武満がなぜ音楽を志したか、というエピソードがとても興味深い。中学生のときに勤労働員として陸軍の食糧基地にかり出される。その飯能の山奥の宿舎に、徴用された大学生の見習士官が手回しの蓄

音機を持って訪ねてきた。そしてシャンソンのレコードをかけて聴かせたのだが、それが武満の音楽への決定的な出会いとなった。そのレコードに心を揺さぶられ、音楽で生きていくことに決めたというのである。

昨年、酒の飲み会の仲間の富田勲が亡くなった。武満は1930年生まれ、富田は1932年生まれである。この立花の本に富田の名前は出てこないが、たとえば慶応の医学部出身で作曲家になった佐藤慶次郎というのが出てくる。富田は慶応の文学部出身だが、同期でやはり同じ酒の会の仲間だった小森昭宏は慶応の医学部出身である。小森も医者でありまた作曲家だが、昨年富田が亡くなった1ヶ月後に後を追うように亡くなってしまった。

武満は早坂文雄を師と仰いだが、佐藤慶次郎は武満より前から早坂の弟子となっている。また、やはり若い頃の音楽仲間、慶応の学生だった湯浅譲二というのがいる。佐藤も湯浅も武満とともに、「実験工房」という前衛芸術家集団のメンバーだった。

武満はミュージック・コンクレートという、テープレコーダーで採取した具体音を材料にそれらを変形しまた合成するという手法による音楽の製作に熱中した時期がある。その一方で電子音楽には否定的だった。

「電子音楽は、音をきわめて抽象化してとらえ、音の根源は、純粹の正弦波音であると考え。フーリエ解析すると、純音の複合に帰着するのだから、逆に、純音の積み重ねをやっていけば、いかなる音でも作り出せるのだと考える。電子音楽の基本原理はこれなんです。なるほどそれは、物理学の原理としては正しいかもしれない。だけど、じゃあ現実には電子音楽がどんな音をつくり出しているのか

という、原始的楽器より単純な音しか作り出していないんですね。」(p.218)

したがって、シンセサイザーを日本に初めて個人輸入して、その後の音楽活動の中心に置いた富田とは相容れないところがあるかもしれない。

もとの連載が「文学界」に続けられている途中の1996年2月に、武満が急死してしまう。しかし、その死後も、連載のために録音されたテープなどの資料を活かす目的で、断片的な記録を集めて連載が2年以上続けられた。それでも立花にとって武満の死がもたらした喪失感は、きわめて大きなものだった。連載を続けて一応終わらせる形を作ったが、本として編集する作業にどうしても取りかかれなかったという。

それを18年後にようやく完成させたのは、立花が生涯の友と思い長く付き合ってきた女性が、ガンで亡くなったことが理由だという。彼女はノヴェンバー・ステップスの尺八奏者・横山勝也の高弟子の一人で、その関係で立花と出会った後、もともと立花の本の愛読者だったこともあって、立花の仕事を手伝うようになった。とくに本書の完成過程で、邦楽に関する知識により大きな貢献をした。その彼女が死ぬ前に本の完成を願っていたことが、ようやく出版にまで持ち込めた最大の要因だという。

とにかく本としては大変ごたごたしているが、武満の魅力が縦横に感じられる書である。

山下澄人「しんせかい」（芥川賞）

芥川賞が載る「文芸春秋」を買って読むという習慣を無意味に続けているが、こういう作品を読ませられると、そろそろやめたほうがよいという気がしてくる。選考委員の中で半分ぐらいがこれを推し、後は強く反対もしないというような選考委員会の様子だったようだが、推す方もそれほど熱が入っていたわけではないらしい。選評の中では村上龍の「つまらない」というのに、もっとも共感した。

話は倉本聰の富良野塾に応募して入塾が認められた19歳の若者の、塾における1年間の生活を描くというものである。そのような特殊な状況自体に興味を惹かれるが、しかしそのような興味は、小説でなくむしろドキュメンタリとして記録された方が満たされよう。まだ生きている倉本が「先生」という名前で小説に出てくるが、それを実在の倉本と重ねて見ていいのかどうか、読者としては気持ちが宙ぶらりんとなる。しかも、この「先生」は決して好意的に描かれていない、反抗的な塾生の目から、かなり皮肉を込めて見られている。

去年のコンビニの話は、コンビニの内側を見るという好奇心を満たされるという意味もあったが、この小説では富良野塾の内部を知って得られるものとてない。19歳の主人公なので青春小説と言え言えるが、それを50歳になった著者が50歳の目で描いている感じがする。

村上龍以外が、意外と評価しているのは不思議に感じたが、この山下という人は芥川賞の候補になったのが四度目だそうで、選考委員にはなじみの作家らしい。それでもうそろそろ賞をやってもいいのではないか、という気になったのかもしれない。しかも、これまで

の作品は難解なものだったらしい、「しんせかい」は文体も平易という点が、かえって受け入れられた要因なのかもしれない。

Steven Pinker, "The Better Angels of Our Nature," Viking Books

長い。最初ペーパーバック版を買ったのだが、800ページある。とてもかさばって持ち歩けないので、しばらくしてからKindle版を買ってそれを読んだ。ページ数にしたら立花の「武満徹」とさほど違わないが、やはり英語で読むスピードは格段に落ちる。しかも、この本でのPinkerはやけに気取った表現を多用する（と知らない慣用句などが出てくるとそう思うのだが、もちろんこちらの語彙不足が原因である。しかし、これまでの本と比べると普通の辞書にはないような表現が多いのは確かである）。読み方は継続的ではなく、ときどき思い出したように読むというペースではあったが、昨年の読書はこれと源氏物語に精力を注ぎ込んだだという印象がある。

長いが主題は簡明で、現代は暴力が減っている、その理由を科学的に探るといものである。暴力としては、戦争、テロ、殺人・性暴力などの犯罪、虐待・差別などを含む。

まず、昔は平和だったとノスタルジックに語られることがあるが、古代は決して牧歌的な平和の時代ではなかったことが、ホメロスの描く古代ギリシアの世界や旧約聖書の物語を取り上げて、小気味よく論じられる。Pinkerはユダヤ系のカナダ人だが、立場は恐らく無神論で、宗教に対してきわめて理性的・客観的に対する。最後の第10章の中の「宗教」の項で、でChristopher Hitchensによる"God Is Not Great: How religion poisons everything"という本が紹介される。このサブタイトルは最近僕が感じていることにぴったりくる表現だが、Pinkerはさすがにこれは言い過ぎだと言い、宗教がよい面

を持つことを認める。しかし、宗教の名のもとに多くの戦争が起こり、たくさんの人が死んだことは繰り返し言及される。

次に、これらすべての暴力が、欧米・東アジアを始めとして全世界で減少していることを、統計を駆使して実証する。そこで時間を横軸としたグラフがおびただしく出てくるところは、Thomas Pikettyとよく似ている。

20世紀の2つの世界大戦、原爆、イスラムなどによるテロの存在にも関わらず、長期的に見て単位人口当たりの暴力の犠牲者数は減っている。まして、第2次大戦後の「長い平和」では、原子爆弾は一度も使われず、大国間での戦争は一度も起こらず、領土を拡大した先進国はないなど、多くのゼロで特徴づけられる。

Pinker はさらに、世界大戦のような戦争以外による平和への脅威として、内乱やゲリラ戦争、民族浄化などの組織暴力、テロリズムの3つを挙げる。そしてそれらもこの冷戦終了後の20数年は明確に減少傾向にあるとし、それを「新しい平和」と呼ぶ。さらに人種差別の減少、女性の権利や子供の権利の拡大、同性愛の認知、動物の保護運動などの権利革命が、並行して広がったきたとする。

その原因が、さまざまな角度から分析される。まず、そもそも人間が暴力をふるう理由を、歴史的にまた科学的に考察する。そこでは脳科学や進化論の知見も大いに動員される。逆に、人間のよりよい天使としての面として、共感(empathy)、克己心、道徳とタブー、理性を取り上げる。

「囚人のジレンマ」は、当然のことながら繰り返し取り上げられる。終章のテーマは、このジレンマをいかに克服するかである。Pinker が期待するのは、平和主義から見たジレンマの克服、ホップ

ズのリヴァイアサン，自由貿易，女性化，共感の輪の拡大，理性の階段，現代が最悪という認識からの離脱，というところである．その見通しについて，かなり楽観的に語られる．

ところが Trump がアメリカ大統領となった現在という時点でこれを読むと，そう楽観的なれないと，大方が思うのではないだろうか．Trump は好戦的であり，保護貿易主義であり，女性やマイノリティに冷たく，理性的とも思われない．本書ではサイコパスという語がたびたび登場し，多くの犯罪者が脳科学で解明が進んでいるサイコパスと認定されることが述べられる．さらにヒトラーやスターリンがサイコパスだったと思われること，戦争による大量死や大虐殺が，特異な個人によって引き起こされることも，何度か言及される．その辺を読んでいるとき，僕は Trump もサイコパスではないかと思って，家人にそう言った．そうしたら，芥川賞が載った「文芸春秋」に，そのものずばりの「トランプはサイコパスである」という中野信子による評論が載った．そこで Pinker が Trump について何か言っていないかとネットを探すと，The United States Is Not an Apocalyptic Wasteland, Explains Steven Pinker というインタビュー記事が，Motherboard というツイッターの特別記事として見つかった．そのポイントは，Trump が現在のアメリカを黙示録的な状況として描くことによって権力を握ったが，その認識は誤っているということである．かなり長いインタビューで，インタビュアーも Pinker の本をよく読みこんで質問しているが，現代のリベラルな民主主義は貴重な達成であること，歴代の大統領の言説の分析から，単純な物言いをする大統領の時代に戦争が起こりがちで，その点からしても Trump は危ういこと，グローバリズムの趨勢は留めようがなく，また有益であるのに，Trump が反グローバリズムであるのは問題なこと，Trump は科学を軽視するが，地球環境問題などの重要

な懸案事項から見ても、それがきわめて重大な危機を招くこと、といった批判を引き出している。

同じようにWebを検索した結果からは、Pinker が大統領選前から、Trump 勝利という結果が出るまでの間、かなり頻繁にツイッターで警告を出していたことが分かる。同じくツイッター・マニアの Trump と、その点では共通するところがあるらしい。

伊庭斉志「進化計算と深層学習」（オーム社）

3月1日に行われた大川賞・大川出版賞の贈呈式に、久しぶりに出た。本書は、今年度の大川出版賞を受賞している。僕が「ソフトウェア工学の基礎」で受賞したのは2004年度だから、すでに12年も前のことになる。

著者の伊庭という人を個人的には知らないが、学問的な業績があるだけでなく、このような一般向けの本もすでに何冊も出しているようである。面識がないのは、年が15歳ほど若いからである。また、出身は理学部情報科学科ということで、計数工学科の人脈とも異なるが、大学院は工学系研究科情報工学専攻で井上先生のところらしく、それほど遠くはない。

深層学習がブームで、本書のタイトルにも入っているし、そのタイムリーさが大川出版賞を受けた要因かもしれないが、著者の専門はどちらかといえばタイトルの前半の「進化計算」のようである。

John Holland の遺伝的アルゴリズム (GA) が作られたのは1970年代だが、広くもてはやされたのは1980年代で、その頃僕も多少は勉強した。ただ、手法としては面白くても、実用性には欠けるだろうというのが当時の自分の評価だった。皮肉に言えば、大学の卒論や修論のテーマとしては格好だが、それほど実世界に大きなインパクト

を与えるものは出てこないのではないか，という評価である．とくに最適化計算として用いるには，効率がよいとは思えない．意味があるとすれば，染色体の交差や突然変異でかなり自由に生成される次世代の選択評価を，人間の嗜好・審美眼で行う美術や音楽の分野ではないか，という意見を持った．本書により，そのようなアプローチは対話型進化的計算手法(IEC: Interactive Evolutionary Computation)と呼ばれていて，CGや自動作曲だけでなく，補聴器の自動補正といった実地的な用途でも使われていることを知った(1.6節)．

本書が進化計算と深層学習を並べているのは，ブームに乗って一般受けを狙ったという出版社の意図もあるかもしれないが，実際に研究として，機械学習と進化計算が結びついたものが盛んになっているらしい．それが第4章「進化するネットワーク」のテーマで，進化型ニューラルネットワーク(EANN: Evolutionary Neural Network)という名前がついているそうだ．この分野における伊庭たちのグループによる研究成果が4.4節で紹介されるが，この節だけ20ページもあり，延々と図や表が出てきて他の節と扱いが違うが，読む方にはあまり面白くない．

本書では実際の生物の進化の話もかなり登場し，伊庭らしき人がオーストラリアの巨大なアリ塚の横に立つ写真が2度も使われている．獲得形質が遺伝しないことが分かって否定されたラマルクの進化論が，ボールドウィン効果という形で見直されてきたことが紹介されるが，確かに学習によって進化が加速されうるとしたら，本書のテーマを補強するものと言えよう．

浅島誠「生物の「安定」と「不安定」－生命のダイナミクスを探る」(NHKブックス)

浅島さんとは長い付き合いである。駒場寮問題の終盤では浅島さんは評議員（その後、この役職は副学部長(副研究科長)と名前を変えた）で、われわれ特別委員会と密接な関係にあり、それがもとで今でも旧特別委員会が催す温泉研究会の旅行の主要メンバーである。現在浅島さんは、理科大の副学長で総合研究院長だが、僕は滝本さんからの依頼を昨年受けて「超分散知能システム研究部門アドバイザー委員」になっている。委員の委嘱状は浅島さんの名前で出され、昨年9月に開かれた委員会では、浅島さんが理科大側のホスト役だった。

この本は浅島さんから寄贈を受けたわけではなく、新聞の広告を見て買った。しかし、とてもよい本だった。浅島さんは発生生物学で世界的に知られる業績を持つことは、たとえば紫綬褒章の駒場における祝賀記念会や最終講義における紹介などでもよく聞いてはいたが、その専門分野について本人が書いたものを読むのは初めてである。この本は一般向けの本で、素人に分かるように丁寧な説明がなされているが、タイトルにあるテーマで一貫して構成された緊密度の高い書である。あちこちに書いたものの寄せ集めではなく書下ろしで、NHKブックスの編集者の手腕が光る。

生命はいろいろなレベルで「安定」と「不安定」の間を揺れ動いている、というのがタイトルに込められたメッセージである。「安定」に向かおうとする動きと「不安定」に向かおうとする動きがあり、周囲の状況変化で安定が崩れたときに、前者が働いて生命の維持に向かう。しかし、後者も害を及ぼすばかりではなく、長い期間における進化の要因になっているということだろう。

最初の不安定化の例として挙げられるのが、DNA→RNA→タンパク質というセントラルドグマの流れで起こりうる変異である。メッセ

ンジャーRNAへ転写される過程で、誤りが起こりうる。さらにアミノ酸の生成過程でも誤りが起こりうる。しかし、DNAが複製される時に働くDNAポリメラーゼには、誤った塩基を正しい塩基に入れ替える修復機能がある。また、DNAの98%は非発現領域なので、間違いが問題となる確率は少ない。

転写の際だけでなく、DNAはX線や紫外線などにより損傷されうる。それに対しても修復機能が働く。修復が成功しないとガンなどの危険が生じる。こういった話が第1章の「ゲノムからタンパク質までの情報の流れ」の内容である。そして、第2章は得意の発生の話である。すべてはごく小さな1個の卵から発生するので、「卵は偉大だ」というメッセージが伝えられる。

第3章は「細胞間の相互作用」と題して、細胞内には核とミトコンドリアと植物の場合は葉緑体があること、さらに小胞体やゴルジ体があること、それらがどこから来たかについての説、細胞がどのようにネットワークを作り、互いにどのようにしてコミュニケーションをとっているか、などが説明される。この辺を読むと、こちらがいかに生物学の基礎知識を持ち合わせていないかが痛感される。第4章では個体の代謝、免疫、再生の仕組みが、恒常性をどう支えるのかという視点から解説される。そしてそこからの自然な流れとして、ヒトや動物の老化、寿命というテーマが第5章で巧みに展開される。

「おわりに」読むとライターの手が入っていることが分かるが、とにかく話の流れと言い、文章と言い、質が高くて感心した。

竹内郁雄「プログラミング道への招待」（丸善出版）

竹内さんから寄贈を受けた。竹内さんは「ハッカーの遺言状―竹内郁雄の徒然苔」と題するエッセイをサイボウズのWebページ連載していて、これが快調である。ときどきまとめ読みしているが、今見るとすでに第42回を数えていて、まだまだ終わる気配がない。1回の分量はかなりあるが、よくもまあ次々といろいろな話を繰り出すものだと思う。多彩な関心、文章力、凝りに凝った詮索力で飽きさせない。

「ハッカーの遺言状」を読むのはどちらかといえばコアな竹内ファンだとすると、本書は少なくとも見かけはプログラミングをあまりよく知らない一般読者を想定して書かれている。それがために初めの数章はコンピュータの基本的な仕組み、チューリングマシン、アセンブラーによるプログラミング、といった話題に多くの紙数が費やされる。説明は丁寧だが手を抜かないので、これでは初心者にはきつく、古くからの竹内ファンには退屈ではないか、という感じも持った。しかし、第4章「いろいろなプログラミング」あたりから本性が現れる、というか面目躍如という感じになってくる。

本書は書下ろしらしいが、当初は縦書きの本とする予定だったという。しかし、途中でやはり横書きに変更したそう。

小笠原啓「東芝 粉飾の原点―内部告発が暴いた闇」（日経BP社）

2016年7月に出た本である。この後、さらに事態は変わる。米原子力発電事業で数千億円規模の巨額損失を出したことが、2016年12月に判明した。そのため稼ぎ頭の半導体事業を今年3月に分社化することにし、今それを売りに出している。2兆円規模で売ららしい。

これだけの歴史と技術と規模のある会社も、あっという間にダメになってしまうものだ。東芝に知り合いは多いが、年齢的にかなり前に辞めている人が多いし、大学に移って活躍している人も数多い。結局自分の知人の範囲では経営のトップクラスはいないから、このような破綻を招いた責任者もいない。しかし、自分のゼミ出身で東芝ソリューションズに昨年入社した学生もいる。そのような現役の社員だけでなくOBOGにとっても、不幸な事態だろう。経営方針を誤った上に粉飾決算を3代の社長にわたって続けた挙句、ウェスティングハウスの買収が裏目と出て存亡の危機に至った。しかし、粉飾事件が報道された当初の知り合いの企業人の反応は、どこも多かれ少なかれ同じようなことをやっている、やや同情的だった。確かに、原発事故が起ころなければ、ウェスティングハウスの買収はもしかしたら成功に至ったかもしれない。もしそうなったら「戦犯」の西田、佐々木、田中の3社長も、あるいは名経営者と持ち上げられることになっていたかもしれない。しかし、西田は自分の後任に選んだ佐々木を公然と批判し田中にすげかえたというような内部抗争があり、田中は不正をよく知りながらそれをさらに意図的に続けたという経緯には、同情の余地はない。

そういえば元東芝社長の西室泰三は、その後、東京証券取引所の社長、さらに日本郵政株式会社の社長を歴任したが、その日本郵政はオーストラリアの物流会社トール・ホールディングを買収したことが原因で、4000億円の巨額損失を被った。その構図は東芝がウェスティングハウスを買収して大損害を招いたことと重なる。東芝がウェスティングハウスを買収したとき、西室は相談役として旗振り役だったそうだ。僕が10年間付き合った東証対みずほ証券の訴訟のきっかけとなった誤発注事件が起きたとき、東証の社長が西室だった。また、日本郵政の社長はもともと坂篤郎という僕と同期の男だったのを、安部内閣が更迭して西室に変えたという経緯があった。

坂とは自分のごく短い期間所属した東大ゴルフ部で同期だったし、麻布出身で米澤と仲が良く、米澤の結婚式で会って話をしたことを覚えている。というわけで、西室とは面識はないが、多少の因縁を感じる。

橘玲「言ってはいけない 残酷すぎる真実」(新潮新書)

「中央公論」で新書大賞という賞を毎年出していることを知らなかった。しかも今年は10周年だという。その新聞広告を見て、久しぶりに中央公論を買った。その新書大賞2017の年間第1位がこの本だという。第1位を取るぐらいだからそれなりに売れていて、評判にもなっているはずだが、この本自体の存在もこれまで知らなかった。しかし、とにかくこの新書大賞につられて、親書を4-5冊買い、まず第1位というこれを読んでみた。

要するに、遺伝学的にかなりのことが生まれながらに決まっていて、ヒトは平等にはできていないということを、「残酷な真実」として書き連ねた本である。その内容は目次から一部を抜き出せば、十分に想像がつく。すなわち、

- 遺伝にまつわる語られざるタブー
- 「頭がよくなる」とはどういうことかー知能のタブー
- 知識社会で勝ち抜く人、最貧困層に堕ちる人
- 「見た目」で人生は決まるー容貌のタブー
- 男女平等が妨げる「女性の幸福」について
- 結婚相手選びとセックスにおける残酷な真実
- 子育てや教育は子どもの成長に関係ない
- 「遺伝子と環境」が引き起こす残酷な真実

これらの多くはRidleyやPinkerや長谷川真理子の本ですでによく知っている話だが、それらの著者は基本的にリベラルな立場から見ていて、そのような差異があるからこそ、それぞれの能力を伸ばす環境作りとともに、人と人との共感や、社会福祉政策が重要だとしている。それに対し、この著者はかなり保守、右寄りの体質の人らしく、同じ知見を捻じ曲げて解釈しているわけではないが、眼差しに温かみがない。差異があるから差別もやむをえないとまでは言っていないが、差異がある事実を素直に受け入れるべきだという立場のように見える。しかし、もしかするとその点が、この本が意外に売れた理由かも知れない。トランプというとんでもない男がアメリカの大統領になる時代の風潮と通じるところが、日本でもある。安部はトランプと比べればましかもしれないがある程度同じ体質があり（だからこそ、トランプが選挙に勝つと直ちにアメリカに会いに行き、祝福した）、SapioとかWillという雑誌がある程度売れ、櫻井よしこなどが盛んに書いている。

本書で得た知識は、Susan PinkerというSteven Pinkerの妹の心理学者の存在である。第8章「男女平等が妨げる「女性の幸福」について」の中で、その著書の訳本「なぜ女は昇進を拒むのか」が3度引用されている。その原著"The Sexual Paradox: Men, Women and the Real Gender Gap"は2008年に出ていて、いくつか賞を得ているらしい。2014年には"The Village Effect"という本を出していて、アップル・ノンフィクションの"Best Pick"に選ばれているという。同じ S. Pinker でかなり売れる著書があるというのは紛らわしいが、分野も近い。

吉川 洋「人口と日本経済 - 長寿、イノベーション、経済成長」(中公新書)

これも「中央公論」の新書大賞で存在を知った本。経済成長に人口増加は必ずしも必須でない、イノベーションがあれば経済成長は可能、というのが主張である。実はこれだけで本書のメッセージは尽きてしまう。しかし、さすがに学者らしく、その結論を導くためにいろいろ話題を膨らませ、読者を飽きさせない工夫を凝らしてはいる。

全4章で200ページ足らず。しかし、吉川のように多くの本を出している人でも、「本を書くことは、学者にとって一里塚だ。」（あとがき）という感慨があるらしい。

第1章「経済学は人口をいかに考えてきたか」では、当然ながらマルサスやケインズの人口論が引かれる。親父は農大に行ってから「農業保護の理論と政策」という学位論文を書き、それは楽遊書房から出版されたが、不肖の息子は読んでいない。しかし、その中心にマルサスがあり、そのために親父は手に入りにくかったらしいマルサスの本を国会図書館かどこかでコピーしてきたのは記憶にある。

第2章「人口減少と日本経済」では、本書の中心テーマである「経済成長を決めるのは人口ではない」という主張が述べられる。その根拠の一つは、明治3年以降の100年間の人口とGDPの推移データである。両者は基本的に関係がない、という知見が述べられる。それは人口が増加しなくも労働生産性が伸びることによりGDPが拡大するからで、その労働生産性を伸ばすのはイノベーションだという結論が早くもここで述べられる。その延長として「AI、ITは人間の仕事を奪うか」という問題も論じられる。結論としては、ある職種に関して一時的に雇用が失われることは起こっても、労働生産性が向

上することによって所得が増え、人は豊かになるという楽観的なものである。

第3章「長寿という果実」では、先進国では、とくに日本では出生率の減少と寿命の延びが並行して起こっている現象について論じている。ここでも寿命が延びることは「果実」であるという楽観的な見方が述べられる。寿命のジニ係数という尺度が導入されるが、これは自分にとって新しい知識だった。

第4章は「人間にとって経済とは何か」と題し、主に経済成長について議論される。要するに「経済成長は必要か？」という問いである。著者はそれを必要とし、ゼロ成長論には与しないという立場を鮮明にする。その一番の理由は、若い人の雇用の面から経済成長は欠かせないというものである。そして成長の源はイノベーションだという主張が繰り返される。つまり、超高齢化社会に向けたイノベーションが必要であり、人口減少ペシミズムを克服しなければならぬというのが結論である。

青柳いづみこ「ショパン・コンクール―最高峰の舞台を読み解く」（中公新書）

これも「中央公論」の新書大賞で存在を知ったが、20位までにも入っていなかった。しかし、22人の目利きが選ぶ2016年のオススメ新書という企画があり、二人がこの書を挙げていたので、これを買って読んだ。青柳いづみこの本はこれまで何冊か読んでいるはずだったが、この「読書三十年」で検索したところでは2冊だけだった。しかも、その一つでは「いづみこ」を「いずみこ」と誤記していて、見つけるのに手間取った。

青柳はピアニストでありながら著述家として実績を持ち、それなりの自信もあるようである。5年おきに開かれるショパン・コンクール2015年の開催に参加し、その経緯をつぶさに語っている。基本的な視点は、「ロマンティック派」か「楽譜に忠実派」かという軸である。そもそもショパン・コンクールが1927年に創設されたきっかけは、19世紀的なヴィルトゥオーゾによる演奏で歪められたショパンの演奏を、本来のあるべき姿に戻すことにあったという。したがって、ショパン・コンクールの歴史においては、「楽譜に忠実派」の方が「ロマンティック派」より優勢だった。しかし、青柳によればショパンの本質は19世紀的というよりは18世紀的だという。その意味は、19世紀のロマンティック派のように無節操に自由な演奏をするのではないが、即興を重ね、演奏のたびに異なるスタイルをとることを許容するどころか重視するということらしい。それをルパートを例にとって説明する。ショパンは、ベルカント風のルパートとされる左手のリズムは忠実で、右手のメロディーが自由に伸び縮みするやり方を重視していた。これはモーツァルトと同じ考え方だという。一方、19世紀のロマン派になると、右手も左手も自由にずれる。

ショパン・コンクールではより杓子定規な楽譜に忠実派が主流のときが多かったが、ときに革新的な演奏が現れる。1980年の第10回では「ポゴレリチ事件」が起きている。圧倒的なテクニックと特異な解釈、さらに個性的なファッションで話題を呼んだクロアチアのポゴレリチが、第三次予選で落選した。審査員のアルゲリッチはそれに怒って審査員を降りた。ことは大きくなり、審査委員長と落選者のポゴレリチの異例の記者会見がなされたりして、急遽ポゴレリチに審査員特別賞が与えられることになるという「事件」となった。

これらを通して青柳が言うことは、スポーツ競技と異なり音楽コンクールでは審査の基準が定まらないということである。しかも、オリンピックなら審査結果に抗議したり、スポーツ仲裁裁判所に調停を申し立てたりする道があるが、ショパン・コンクールでは審査委員会の決定にはいかなる抗議も認められないという。

演奏を文章として描写することに、青柳は工夫を凝らす。

「チョ・ソンジの音にはダイヤモンドのようにぎらぎらした輝きはなく、絹のような上品な光沢で、あくまでも爽やかなイメージだ。」(p148)

「音はきれいに抜け、空気感がいっぱいだ。カデンツァでは、怒り、癒し、諦め、希望など、行間にさまざまな感情がこめられる。最後のパッセージは、まるで宝石箱をひっくりかえたようにきらめいた。」(p.158)

しかし、ワインのテイストを文章として表現するのと同じような限界を、感じるともいえる。

遠藤乾「欧州複合危機―苦悶するEU,揺れる世界」(中公新書)

同じく新書大賞の11位である。この数年ギリシア問題、難民問題があり、その上に去年のBrexitと続いてタイムリーであるが、著者はEUを長く研究している日本の第一人者であり、時事問題タイミングよく取り上げるという風に手軽に作られたものではない。約300ページあり、吉川「人口と日本経済」と比べても、内容がはるかに濃く充実した1冊である。

「はじめに」によれば、表題の「複合」の意味は三重だという。第一は、複数の危機が同時多発的に起こっていることである。第二はそれらの危機が連動して、相乗効果をもたらしていることだとい

う。たとえばユーロ危機のため財政規律を強めた結果、多くの国がデフレとなって中間層が窒息状態となり、その結果政治的には左右に両極化するという危機を招く。また、難民危機はシェンゲン（国境検査撤廃の協定、ルクセンブルグのシェンゲンで結ばれた）の機能不全を示したが、テロの続発を招き、排他的な勢力を伸長させ、逆にシェンゲンを強めようとする、その枠外のイギリスの離反を招いた。第三に危機が国際、EU加盟国、地域と多層で起き、各層間で複雑に影響しあい連動している。

そこで本書では、まずユーロ危機、難民危機、ウクライナ機器やパリ同時テロ事件、イギリスのEU離脱、を順に解説していく。次いで、EUが抱える問題全体を政治学的に分析する。ヨーロッパの統合史を振り返ってこれまでいかに危機を繰り返してきたかを見、その上で今回の危機がどう違うかを論じている。そして問題の解決として作られたEUという枠組みそれ自体が、現在は問題を生み出すものとなっているという視点から整理がなされる。その上で今後の展望を語るが、必ずしも悲観的なものではなく、EUはおそらくしぶとく生き残るだろうという見通しが示される。

読みやすい本とは言えないが、良書だと思う。

本川達雄「ウニはすごい バッタもすごいーデザインの生物学」（中公新書）

これも新書だが、今年2月に出た本で昨年の新書大賞とは関係ない。しかし、福岡伸一が激賞している文章が、新聞の宣伝に使われており、そうでなくても「ゾウの時間 ネズミの時間」が面白かったから、買って読んだ。

「ゾウの時間 ネズミの時間」は1992年に出ているから、もう25年も前である。その強い印象から、本川はソウやネズミのような哺乳類が専門かと思ってしまっていたが、第1章がサンゴとサンゴ礁の話で、そこに「私は若い頃沖縄で研究しており、サンゴには思い入れがある」と書いている。第4章と5章では棘皮動物が扱われ、

「（棘皮動物）に二章も割いたのは、私が四十年以上も彼らを研究してきたからであり、多少の依怙贖罪はおめこぼし願いたい」と書いている。これがやや意外に感じたが、「ゾウの時間とネズミの時間」の自分の感想文を読み返してみると、「最後の棘皮動物の項はちょっと特殊な章だが、この人の研究テーマであるだけに別の面白さがあった。動物と植物の細胞の違い、それを作った体の組み立て、デザインの違いという話も、説得力があった。」と書いている。このことはすっかり忘れていたが、本書の内容は、この部分を大きく敷衍したものだということがわかる。

ついでにこの1992年の読書ノートを読み返して思ったのは、そのころは自分もよく本を読んでいたということである。それに比べると昨今の読書量の落ち込みは激しい。

というわけで、この本では動物の34門の内の5つ、刺胞動物門、節足動物門、軟体動物門、棘皮動物門、脊索動物門が順に取り上げられる。どの話もその体のつくり、生き方がどのようなもので、その力学的、材料的、化学的な意味が解き明かされるという仕掛けになっており、だから「デザインの生物学」という副題がついている。

その構成にしたがって読み進めると、ヒトを含めた脊椎動物を除く、われわれにあまりなじみのない動物たちを紹介するという意図かとも感じるが、しかし最後の脊索動物門には脊椎動物亜門も含まれ、その大きな特徴は海から陸上生活に変わったことだとし、それ

がまた体のデザインにどれほど影響を与えた方ということが、見事に示される。

とにかく「すごい」本である。その「すごい」というタイトルが、いかにいい加減につけられたかということが「おわりに」で明かされる。編集者がうちの新書では「植物がすごい」が売れているというので、「すごい」を使うことにしたというのである。それにしてもウニは出てくるもののそれほどのページは割かれておらず、昆虫は出てくるもののバツはまったく登場しないので、その意味でもいい加減である。ただ、タイトルのついでに相談したという、各章に自分で作詞作曲した歌の譜面を載せるというアイディアは面白い。歌はそれぞれ「サンゴのタンゴ」のように、取り上げた動物をテーマにする戯れ歌であるが、著者の別の才を見せる。

朝井まかて「眩（くらら）」（新潮社）

北斎の娘で絵師の葛飾応為を主人公とする、時代小説である。

応為の絵は、「吉原格子先図」しか知らない。この絵はNHKの日曜美術館で見て、感心した記憶がある。ジョルジュ・ド・ラ・トゥールを連想させる絵だ。応為は確かに西洋画の手法を、北斎に言われて学んだらしい。

著者の朝井まかてはこれまで知らなかったが、この本は書評で褒めていたので買った。去年は朝井にとって当たり年だったようで、やはり書評で評価の高かった「落陽」も買っている。さらにこれは購入していないが、「残り火」という小説も昨年出しており、やはり評判がよい。

実はこの本を買う前に、Kindle版の Katherine Govier, "The Ghost Brush" を買っており、最初の方だけ少し読んだ。これも応為を取り上げた小説だが、『眩』より先に出ている。

応為の作品数は少ないが、北斎の名で知られているかなりの作品に、少なくとも部分的に応為の手が入っているらしい。その点ではヨーロッパのルネッサンス期に作られた絵や彫刻の多くが、工房として製作されて、しかし今残る作者名はその親方だけとなっているのと似ている。

北斎は今や世界的に広く知られるが、当時の江戸でも人気は高かった。それにしてもこの小説に描かれる北斎の生活は、貧困の極みである。著作権や印税の概念がなく、版画の画料は最初に板元からもらうだけで売れた量にはよらない。富嶽三十六景がいくら当たっても、その実入りは限られている。肉筆画も注文主に対して画家の立場は弱い。現代だったらピカソのように大金持ちになっても不思議な才能と人気を持っていたのに。その上、これはどれほどが事実でどれほどがフィクションか分からないが、時太郎という孫がいて、これが悪い仲間とともに、北斎の妻、小兎に金をせびり、小兎が死んだ後は、借金取りが取り立てに来るといった形で北斎から金を巻き上げる。時太郎はお栄（応為の名で小説ではずっとこう呼ばれる）の姉お美与の息子で、お美与は出戻りである。お栄も吉之助という絵描きと結婚していたが、やはり出戻っている。時太郎はこの小説では初めから終わりまでときどき現れ、北斎やお栄に災禍をもたらす。

同じく重要な登場人物に、善次郎という北斎の弟子がいる。お栄は娘時代から善次郎に好意を持ち、出戻ってからは関係も持つが、善次郎には芸者上がりのお滝という妻がおり、それ以外にも女たらし

でお栄との関係も長くは続かない。しかし、魅力のある男として描かれる。

なかなか手際のよい小説で、途中だれることもなく、面白く読ませる。応為の心中表白や会話も巧みである。全12章だが、章の名前が、第2章「カナアリア」、第6章「柚子」、第7章「鷺」を除くと、皆、北斎か応為の絵の題名である。そうでない3章のうち、「カナアリア」と「柚子」は、馬琴が北斎に贈ったものを指している。馬琴と北斎は仲が良いわけではなく、とくにカナリアは引っ越しで邪魔だから押しつけたものだが、それが筋の展開に生かされている。柚子は北斎の病に薬として与えたもので、表向きは今北斎に死なれると困るという馬琴の自己都合のようだが、実は気遣いが隠されているという設定である。鷺（ウソ）は嘘をかけていて、お栄と善次郎の微妙な関係を象徴する。

鶴見良行「ナマコの眼」（ちくま学芸文庫）

この間、出張でアンカレッジに行ったとき、かさばらない本を持っていこうと文庫本のストックを探して、これを選んだ。本川達雄「ウニはすごい バッタもすごいーデザインの生物学」を読んだことも、影響はしている。あの本の第4章と5章は棘皮動物で、とくに第5章のタイトルは「ナマコ天国」で、同名の自作の歌の譜面が付されていた、

かさばらないといっても、本文だけでも600ページ近くあり、さらに索引、参考文献などが100ページ近くついている。判型は文庫で小さいと言っても、かなりのボリュームだ。

これを買ったのは1996年らしい。そのきっかけは何だったのか、覚えていない。坪内祐三「文庫本を狙え！」で知ったというような記

憶があったが、それを見返してもこの本は紹介されていない。本書の単行本は1990年に出ていて、文庫の第1刷は1993年と比較的早い。僕の持っているのは第3刷だが、坪内の本を読んだのは2001年で時期が合わない。なお、鶴見良行は1994年に亡くなっているので、この本を買ったときはすでに鬼籍に入っていたわけだが、それに気づいていなかったと思われる。

同じナマコを題材としていても、本川と鶴見のアプローチは当然のことながら、生物学と経済・社会学とまったく異なる。ただ鶴見の立場はひとくくりにはできず、歴史学、文化人類学、政治学、料理学にまたがる。さらに生物としてのナマコについてもある程度の言及があり、調理の仕方についても理科的な実験を行ったりもしている。

さて、なぜナマコなのかというのがまず起こる疑問である。ナマコは普段ほとんど食べることがない。スーパーでも売っていないだろう。たまに中華料理屋で食べることがあるというのが、大方の現代の日本人ではないか。

だから、ナマコはほとんど生で食べられることはなく、ホシナマコとして商品化されているということもよく知らなかった。筆者が強調するナマコ文化の三要素とは、採る、加工する、戻して調理するである。そしてナマコの95%は水であり、その水分を抜いたものがホシナマコである。

この本では、三要素の内、「戻して調理する」についてはほとんど触れられない。もっぱら生産の場における「採る」と「加工する」に目が向けられるが、なかでも「加工する」の比重が高い。

話は意外なことに（と知識のなかった僕は感じたが）、パラオ、フィジーなどのミクロネシアの島々から始まる。この地域はかつてホシナマコの生産地だったという。次いで、オーストラリア、スラウェシ島、マラッカ海峡近辺、と徐々に西および北に進み、最後は日本の能登、伊勢志摩、北海道に至る。いずれもナマコが生産地でありながら、その地で消費するためではなく、一大消費地の中国に輸出するために作ってきたという、驚くべき事実がある。そして、その中国ではどのように輸入され消費されて来たのかという話は、どういうわけかまったく出てこない。

もっとも、日本で中国への輸出のためにもっぱら生産したというのは江戸期のことらしく、日本では記紀の古代からナマコを採り、宮廷や神社に納められていたという。ナマコは高級で神聖な食べ物だった。それより極端なのはミクロネシアやインドネシアの島々で、現地の人ほとんど食べないが、その加工技術は中国からいくつかのルートで伝わったらしい。それらの地が、オランダ、イギリス、アメリカの植民地になっていった時代にも、その植民地支配者はナマコを食べず、加工技術も持たないが、もっぱら中国との貿易のために投資し、製造させているのである。

ミクロネシアやインドネシア、フィリピンの島々についての地理的な知識がこちらには乏しい。それで地図がたくさん出てくるのは助かるが、本文に出てくる地名と載せられている地図に記載されているものとの対応がつかないものも多く、文庫の小さいページに載せられている地図を、何度も見直すことになった。

鶴見には、従来の学問分野やそこで使われてきた方法への批判精神がある。一つの視点は、国という単位ですべてを捉えるという習慣が、ものの見方をゆがめているというものである。もう一つは、文

字による記録への過剰な依存への批判で、文字以外のものから歴史を掘り起こそうと努力する。その一方で、オランダやイギリスなどに残る文書は精査される。やはり文字によって記録を残そうとする行為そのものがヨーロッパ文化なのである。もちろん、日本の文書は古事記、風土記に始まり、多くが参照される。

鶴見良行の本を読むのは初めてで、そもそも鶴見俊輔、和子との関係がよく分かっていなかったが、俊輔と和子は姉弟で、良行はこの二人の従弟ということである。

朝井まかて「落陽」（祥伝社）

朝井の「眩」は面白く読んだが、これは同じ時代小説でも時代が下り、明治天皇崩御後の明治神宮の造営、中でも神宮の森の造園がテーマである。この造園を請け負う本多静六、本郷高德、上原敬二の三人は実在の人物らしい。参考文献に上原敬二「人のつくった森――明治神宮の森〔永遠の杜〕造成の記録」が挙げられている。他に本郷高德の著書も載っている。一方、話の引き回し役は、二流の新聞社「東都タイムス」の記者瀬尾亮一と同僚の女性記者伊東響子、およびその上司で社主兼主筆の武藤笙月だが、この三人はフィクションだろう。構成としては、この記者たちが明治天皇の崩御後、東京に神社を造営するというニュースを追いかけるという形をとる。

明治神宮の園を造るのに、伊勢神宮や日光東照宮のような針葉樹の森は東京の気象と土壌では無理だというのが本郷などの主張である。それでも造園を引き受け、針葉樹でなく広葉樹を主体として150年で完成させるという計画を作り、それに従って事業が開始されるというのが話の大きな筋である。それと別の流れとして、明治天皇の独白という形を取って、17歳で東京に来た時にどう思ったか、また京都に帰りたいという気持ちをどう抑えたか、という短い

2つの章が挟まれる。これが明治神宮の造園とどう関係するのか分かりにくい、途中から瀬尾が明治天皇の思いをなぜか追いかけるという流れが作られて、元の女官を時間をかけて探し出し、通い詰めて何とか取材の機会を得て話を引き出すというストーリーが加えられる。しかし、この2つの流れは、それほどうまく結びついていない。

ストーリーとして違和感があるのはほかにもある。冒頭で瀬尾が登場するのが、ある男爵夫人に対して、醜聞をネタに強請を行い、まんまと金をせしめるという場面である。この時代の新聞記者はこんなものだったという導入なのだが、後の話とはほとんどつながらない。

と欠陥をいくつか感じたが、面白い話を掘り起こして、うまくまとめる腕はなかなかのものである。本多、本郷、上原は農科大学の教授、講師、大学院生であり、当時の農科大学の場所、今の東大駒場キャンパスが主要な舞台としてたびたび出てくる。明治神宮には美季子の初参りで行ったし、そのほかにも花菖蒲を見になど、時折訪れた。というわけで何かと縁も感じる。150年の計で作られたものがすでに100年経った。通勤で原宿を毎日のように通過するが、電車から眺める森は、確かに広葉樹が主であることが分かる。

山本一成「人工知能はどのようにして「名人」を超えたのか？」（ダイヤモンド社）

山本は将棋ソフトウェアのボナンザの開発者である。ボナンザが棋譜データから学習するという機能を付けてから強くなり、他の将棋ソフトウェアもみなそれに続いて、コンピュータ将棋がプロ棋士を凌駕するようになった。と書いてからWebで調べてみて、これが間違いであることが分かった。山本が開発したのは、ボナンザではな

く、それに触発されたポナンザである。ポナンザは保木邦仁によって開発され、フリーウェアとして公開したので、他のコンピュータ将棋にも採用されたという。

ポナンザを開発した保木は化学者で、開発当時は将棋をほとんど知らなかったのだという。それにひきかえ、山本は東大将棋部で、留年して暇だったときにプログラミングを覚えて将棋プログラムを作ってみたのが始まりだそうだ。

ポナンザは深層学習を使っているが、深層学習は黒魔術化しているというのが、山本の感想である。とくに過学習を防ぐための工夫、たとえばドロップアウト（ネットワーク内のニューロンをランダムに外す手法）は、なんでそれでうまくいくのか、どの程度ドロップアウトさせればよいのか、などは分かっておらず、いろいろ試してうまくいくパラメータを探すというのが実態らしい。一般にANNの種々のパラメータをどう決めるかは、確かに理論があるわけではなく魔術的なところがある。

本書では、アルファ碁のこともかなり書いている。しかし、棋譜が出てくるのはやはり将棋である。ただ、将棋の棋譜もそれほどたくさん出てくるわけではなく、それを碁のように読めなくてもとくに理解に困ることはない。最後の方ではシンギュラリティやAIと倫理についての議論もある。

アンリ・ファール、奥本大三郎訳「完訳 ファール昆虫記（第1巻上）」（集英社）

今年、この奥本による完訳版が完結した。原著は全10巻だが、翻訳はそれぞれを上下2巻に分け、全20巻である。翻訳には30年かかったというが、それは雑誌「すばる」に第1巻第1章が載ったのが、

1987年5月号だったというときから数えての話で、この20巻本の第1巻が出たのは、2005年である。そのときに買っていたのだが、最初の方を少し読んだきりで、積読状態だった。完結のニュースを知って、書棚を探してこの本を見つけ（結構手間取った）読み始めた。同時に第2－4巻も購入した。

本として、装丁から口絵、挿絵、また充実した脚注、訳注、まで素晴らしい。そして何よりも訳文がよい。ファーブルが30年かけてこれを書いたことは何よりもすごいが、奥本の訳業もそれに劣らず立派なものである。

多く日本人は、子供時代にファーブル昆虫記の子供版を読んでいることだろう。僕はほとんど読んだ記憶がないが、スカラベの話は何らかの形で知識を得ている。多分、ファーブル昆虫記を紹介する二次的、三次的なものを見ているのだろう。また、この第1巻上を2005年に買っているので、そのときに第1章ぐらいは読んだかもしれない。スカラベの話は第1章と2章だけで、後の10章はすべてタマムシやコオロギやバッタを狩ってマヒ状態で保存し、そこにタマゴを産み付け幼虫の餌とするハチの仲間の話である。ファーブルが最初にオリジナルな研究を発表したのが、その一種のタマムシツチスガリであるだけに、思い入れも強い。ほかに同様な行動を取るコブツチスガリ、キバネアナバチ、ラングドックアナバチなどが取り上げられる。いずれも辛抱強く観察をするだけでなく、運んでいる途中の獲物を取り換えるなどの実験に工夫を凝らす。

ファーブルの記述はときに文学的なところがあって、そこも魅力であり、奥本の翻訳もそれをよく伝える。一方で面白いのは学術的な論争にはかなり好戦的なところで、たとえば第1章ではエミール・ブランシャールという当時の大先生の著述に、いちゃもんを付けて

いる。また、同時代のダーウィンの進化論には反対だったらしく、第9章でダーウィンを執拗に批判しているが、このダーウィンはチャールズでなく、その祖父のエラスムスであるところがおかしい。

菅田亜紀子「土偶界へようこそ 縄文の美の宇宙」(山川出版社)

今年の6月に出た本で、新聞の書評で見て買い、わりとすぐ読んだ。著者自身がもともと考古学者というわけではなく、いつとは書いていないが奈良県橿原市の観音寺本馬土偶と出会ってから、各地の博物館、遺跡を訪ね歩くようになったという。そういう人の紹介する70体土偶の写真と解説は、入門書として最適である。写真は正面と裏側、さらに左右の側面やものによっては真上から撮られていて、その魅力を十分に伝える。これまで実物を美術館で見たものはごくわずかに過ぎないが、だいたい年代順に並べられたこの小さい本は、とても便利である。

長谷川郁夫「吉田健一」(新潮社)

2014年に出版された本で、同年の大仏次郎賞(第41回)を受けたというので、多分その翌年に買ったのだと思う。しかし、650ページもある本で、最初の方だけ読んで放ってあった。今年になってまた読み始め、ようやく読み終えた。著者の長谷川郁夫は編集者として吉田と付き合いがあった人である。自ら小沢書店を創立し、そこから吉田の本を何冊も出版している。1947年生まれというからおそらく僕と同学年で、1912年生まれの吉田より35歳年下である。

91ページから、それまで「吉田健一」などと呼んでいたのを「吉田さん」として、以降はそれを通す。それが吉田健一が小出版社員であった、という記述のところであるのは、もちろん偶然ではな

い。長谷川が小出版社を起こして、吉田の本を出すようになったからである。

自分の書棚から吉田健一の本を探してみたが、「私の食物誌」「金沢 酒宴」「旅の時間」「ヨオロッパの世紀末」のたった4冊しかなく、しかも読んだのは初めの2冊だけである。これを機に読み直そう。しかし、この4冊とも、吉田の晩年に書かれた本である。出版年月を昭和で書くと、「ヨオロッパの世紀末」昭和45年10月、「私の食物誌」昭和47年11月、「金沢」昭和48年7月。「旅の時間」昭和50年9月。そして吉田が死んだのは昭和62年（1977年）8月。享年65歳である。つまりこの4冊はみな、50歳近くになってからの本であるが、今世間で読まれている吉田の本は、ほとんどがこの時代に書かれたものである。あれだけ飲んでばかりいて、どこにそれだけの仕事をする力があるのだろうか。おそらく飲んでばかりではなく、仕事をするときは飲まずに集中するのだろう。その集中力と勤勉さは驚くべきものだ。これだけの内容をきっちり12回、休まず連載しただけでもすごい。しかも、その時期「瓦礫の中」に収められた3本の小説も書いて別々に発表している。

高階秀爾「近代絵画史（上・下）」（中公新書）

高階秀爾の本は結構読んで来たが、本書の存在には気づいていなかった。初版は1975年に出ている。今年出たこれはカラー版・増補版ということで宣伝していたので、早速買って読んだ。上巻には「ロマン派、印象派、ゴッホ」という副題が付き、下巻には「世紀末絵画、ピカソ、シュルレアリスム」という副題が付いている。

図版はカラー化されたとは言え、数は少なく一人の画家に一枚以下の割当である。副題にあるゴッホでもピカソでも同じである。その

分は、帯に宣伝が載っている中央公論社の「西洋美術の歴史 全8巻」を買えということらしい。

菅田亜紀子「土偶のリアル——発見・発掘から蒐集・国宝誕生まで」（山川出版社）

これも「土偶界へようこそ」と同じように今年出た本で、少し早く2月に出ている。多分「ようこそ」の書評を見て同じ菅田の土偶物を2冊買ったのだと思うが、結果的に新しく出版された本を先に読んだことになる。

この「リアル」の方は、土偶の発掘現場を訪れた紀行文を集めたようなもので、ここに取り上げられた土偶は、だいたい「ようこそ」にも載せられている。やはり年代順に並べられているが、「ようこそ」が辞典的な性格を与えられているのに対し、こちらはエッセイ集の体裁となっている。そのぶん、発掘者などの現代の人間が登場し、発見や保存にまつわる話などが交えられる。

谷口義明「宇宙を読む」（中公新書）

これは2006年に出た本で、多分その年に買っている。ということは現在の創生科学科に来て、岡村さん等の天文学者と同僚になるはるか前である。もちろん、前にいた広域科学科にも江里口さんとか蜂巢さんとか天文学者がいた。その影響で買ったのだろうか。

子供のころ、宇宙に関する本を読んで強い印象を得た記憶がある。しかし、その後、たとえば星に関心を寄せるとか、天文学を多少なりとも勉強するとか、そのようなことは一切しなかった。また、現在の天文学の基礎にある相対性理論や量子力学も、ちゃんと勉強したいという気は常にあるが、まったく実践できていない。

この本も買って少しは読んだが、そのままほってあった。今年に入
って存在を思い出して、読み始めたがまた中断していた。今度の南
京行きにもってきてようやく読み終えた。

しかし、宇宙の話はスケールが大きすぎて、数字を見ると頭がくら
くらする。

天の川銀河には1000億から2000億個の星がある(p.108)。

この宇宙にはざっと1000億個の銀河がある(p.147)。

100億光年彼方の銀河では赤方偏移による波長のシフトは約6倍にな
る(p.152)。

この方法で発見された、もっとも遠い銀河までの距離は128.3億光年
である(p.152)。

わずか137億年の間に、かくも美しい大規模構造を作って宇宙は進
化してきたことになる (p.171)。

この「わずか」には参ってしまう。

吉田健一「ヨオロッパの世紀末」 (筑摩叢書)

長谷川郁夫「吉田健一」にこの本がたびたび登場して、どこかで聞
いたような題名だと思った。探してみたら、1987年に出たこの本が
書棚に見つかった。付けられている紙のカバーに、代官山文鳥堂書
店とスタンプが押してある。この本屋は代官山の駅近くで、小さい
店だがときどき訪れた。文庫本を新潮も角川も中公も文春も、すべ
て一緒くたにして著者別に並べるという、実にユニークな配架をし
ていたが、他の本屋でこんなことをしているのは見たことがない。
スタンプの記載をここに写しておこう。

「代官山文鳥堂書店 Page 1(one) 〒150 渋谷区恵比寿西1-34-28 代
官山ファースト1F 電話 03(461)8274」

この本が筑摩叢書として出たのは1987年だが、吉田は1977年に死んでいるのでちょうど10年後になる。元の本は1970年に新潮から出ていて、さらにそのもとは「ユリイカ」という雑誌の連載（1969年7月号から翌年6月号まで）である。長谷川の本に、大岡信が吉田に頼むなら「ヨオロッパの世紀末」という題名しかない、といったという話が載っている。その部分を引用しておこう。これは大岡信の「うたげと孤心の人」から長谷川が引用しているものの、孫引きである。

「・・・私の「断章」の連載は決まった。しかしあと一、二本、強力な柱が欲しいと清水社長は言った。筆者は例えば誰を考えてますか、と私は彼にきいた。即座に、吉田健一先生にお願いするつもりです、と吉田氏崇拜というに近い清水さんは答えた。

「先生も書いてあげようと言ってくれているんです。しかし、何のテーマで書くべきか、どうしてもいいアイディアがないのです。」私は聞きながら頭にまったく自然に浮かびあがった題名を言った。

「吉田さんに今書いてもらうのなら、ヨーロッパの世紀末、それ以外にないでしょう。」

どうしてあんな名案が、題名そのものの形で生まれたのか、私には分からない。ラフォルグの「ハムレット異聞」や「英国の文学」を、寮や下宿の灯の下で一人胸を躍らせながら読んだ旧制高校、大学時代の私の守護神が、この時急にまばたきをして耳元に囁いたのにちがいない。

「ユリイカ」の大黒柱は、この瞬間に立った。」

.

文中の清水というのは、昭和43年に河出書房新社が二度目の倒産をしたとき、取締役として退社した。それが再建されたときに、詩誌

「ユリイカ」を復活させたいという強い思いを抱き、大岡や吉田に執筆を依頼したという経緯である。

これを代官山時代に買って、全然読まないで積読していたと思っていた。ところが、p.121に

「丁度、階段といふものがマルクスが定義した意味では存在しないところでマルクス経済学を提唱するには無理にもそのような階級があるものと仮定することを強ひられるのと同じで今日では所謂、芸術家なるものが自分が敵対する俗世間を曲がりなりにも作り上げてその天分なるものを立ててゐるが、この伝説が出来た頃にはそれは伝説ではなくて、その俗世間が実際にヨオロッパを支配し、寧ろこれを俗世間などと考へる方が例外に属してゐた。」

とある最初の「階段」を「階級」に訂正している。確かに明らかな誤植だが、121ページまでも読んでいたのか、誤植に気づく程度にはきちんと読んでいたのだとしたら、まったく記憶にないのはどういう訳か。

本書の主張は、ヨオロッパの18世紀はきわめて充実したよい時代だった。それが19世紀になってひどいものになつた。世紀末というのはもちろん19世紀の世紀末を言うが、その世紀末が退廃的とか病的とかいうのは誤りで、18世紀のよき文明が復活した時期として評価すべきだ、という奇抜なものである。その理屈を、吉田が持つ豊かな文学的知識を総動員して、まるで論理的であるかのように壮大に展開する。読む方はその技を楽しめばよい、という本である。この点も含めて、松浦寿輝が長い解説を書いている。それが面白い。

今回の南京へ出張で持ってきた2冊の本を、ちょうど帰国便の搭乗前に読み終えたことになる。

吉田健一「旅の時間」（講談社学芸文庫）

以前に同じ文庫に入っている「金沢」と一緒に買い、「金沢」を読んだ後にこれも読みかけたが、最初の「飛行機の中」を読み、次の「昔のパリ」の途中で中断してしまっていた。その「昔のパリ」のテーマは、ある程度「ヨオロッパの世紀末」と重なる。だから松浦寿輝の解説でも、この短編が参照されている。

場所はパリ、ニューヨーク、ロンドン、大阪、神戸、京都。旅の手段は飛行機、汽車、自動車、船とバリエーティを持たせている。全部で10篇の作品が並べられているが、すべてに吉田本人と思しき主人公が登場する小説の形を取っている。その主人公にいちいち名前が付けられていて、一応職業も与えられているが小説としてはその名前や職業にほとんどまったく意味がない。名前を並べてみると、谷村、村山、山田、田坂、坂本、本木、木戸、戸川、川西、西野としりとりである。そこにこのシリーズのしかけがあって、とくに登場人物に意味がある小説らしい小説ではなく、その点では「ヨオロッパの世紀末」が一見本格的な評論のように見えながら、松浦も言うように「虚構」であることと対をなしていると言えるかもしれない。

多くの話で、盗賊らしき者、殺人らしき事件、探偵小説的な謎がちらっと出てくるが、それもこのシリーズのしかけの一つだろう。ただそれらはあまり成功しているとは言えない。

文庫の解説を清水徹が書いているが、ほとんどそれぞれの話の要約のようなもので、まったく面白くない。松浦の解説の面白さとは対照的だ。

2016年

谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」（日本の文学「谷崎潤一郎（三）」（中央公論社）

「鍵」の感想に書いたように、これが中央公論に載っていたことは記憶がある。1961年から62年にかけて連載されたということなので、僕は中学2年生だったことになる。そのとき読んだわけではないが、棟方志功の挿絵は印象に残っている。とくに仏足を作るところはストーリーとしても覚えている気もするのだが。この中央公論「日本の文学」版では両者が数ページ離れているので、あまり確かな記憶とは言えない。

これは谷崎の最後の長編小説で、谷崎が数えて76歳から77歳にかけて発表されたが、主人公の老人卯木の年齢も77歳に設定されている。「鍵」の主人公は56歳とされているが、発表時の谷崎の年齢は数えて71歳である。しかし、初老の男と老年の男の性を扱っているという点で、共通している。さらに、「鍵」では夫婦それぞれの日記体が文章として使われていたが、こちらは題名からして日記である。ただ、卯木の日記だけで（最後の方に看護婦や医師の日誌というものも少しだけ出てくるが）、日記を読まれているかどうかという心理の綾や、読まれることを意識して書くというテクニックは使われていない。また、「鍵」と比べると「瘋癲老人日記」の方が喜劇性が強く、思わず笑ってしまう場面が多い。

話は息子の嫁の颯子への卯木の思い入れで成り立っている。77歳なのでさすがに直接セックスをするわけではないが、足に対するフェティッシュな思いと行動が繰り返される。颯子のような女の造形は手慣れたもので、生气がある。それに対して実の娘の五子と睦子に対しては、卯木は異様なほど冷たい。そこで小姑と嫁の間のどろどろした葛藤があっても不思議はないが、この娘たちは卯木が颯子に300万円のキャッツアイを買ってやったことを知っても、ほとんど騒がない。卯木の眼で書かれているので、娘の気持ちや振舞いは無視されているのである。ただ、颯子と婆さん、つまり卯木の妻とのいさかきの描写はあるが、それもコメディタッチである。

高血圧などの老人の病や薬についての記述はきわめて具体的で、これは谷崎自身の経験に基づくものに違いないと感じさせる。

横光利一「春は馬車に乗って」(日本の文学「横光利一」中央公論社)

日経新聞1月30日の夕刊に、横光のこの小説が葉山を舞台としたものだと紹介されていた。前にも同じコラムの紹介がきっかけで秋谷を舞台とした泉鏡花の「草迷宮」を読んだが、これも同じように読んでみた。短編なのですぐに読み終わる。

横光の作品は、中学か高校の頃「日輪」を読んで感激したのだが、それにしてはその後他の作品をほとんど読んでいない。

この小説の軽やかな題名は前から知っていたが、それからは想像しにくい悲しみに満ちた作品であることを初めて知った。これは横光の私小説というべきものらしい。以下はWikipediaから得た知識である。

「作中の「妻」は、横光利一と1919年（大正8年）に知り合い、1923年（大正12年）の関東大震災後から同居を始めた小島キミ（同人仲間・小島勗の妹）である。同居後キミは1925年（大正14年）6月に結核を発病し、翌年1926年（大正15年）6月24日に逗子の湘南サナトリウムで23歳の生涯をとじた。横光はキミの療養のため、菊池寛の紹介で葉山の森戸に家を借りていた。小島勗に反対され駆け落ち同然の同居であったため、二人は戸籍上婚姻しておらず、キミの死の1か月後の7月8日に入籍をした。」

これらは『新潮日本文学アルバム44 横光利一』，新潮文庫『機械・春は馬車に乗って』，岩波文庫『日輪・春は馬車に乗って 他八篇』の解説を参照して書かれているということだが，日経のコラムにも同じような紹介があった。この時代の結核は実に悲惨な病だと思う。若者が罹患して命を落とすという点が，とくに不条理である。

これよりずっと時代が下るが，大島みち子・河野実『愛と死をみつめて』を連想した。1963年末に出た本で，160万部を売り上げる大ベストセラーとなった。大島みち子が軟骨肉腫で21歳で亡くなるまでに，河野実と交わした手紙を本にしたものである。ただちに1964

年、テレビドラマ化され、映画化され、またレコードも出てヒットした。本も読んでいないし、映画も見していない。テレビドラマは部分的に見たかもしれないが、あまり記憶が定かでない。しかし、青山和子による歌はよく覚えている。その出だしは

「マコ、甘えてばかりいてごめんね。ミコはとっても幸せだった。」

というものだった。

この小説は全編「彼」と「妻」との会話を中心に成り立っているが、妻は決してこの歌詞のような甘ったるい感傷的なことは言わない。始終側にいないと怒り、「檻の中の理論」で迫ってくる。それが妻の造形に精彩を与え、作品に深みをもたらす。会話のほかのところどころ庭の池や木、海の眺めなどの印象的な描写があるが、このような表現が「新感覚派」と呼ばれる所以のものだろう。

最後は馬車に乗ってスイートピーの花束が届く。

<<「どこから来たの」

「この花は馬車に乗って、海の岸を真っ先きに春を撒き撒きやって来たのさ」

妻は彼から花束を受けると両手で胸いっぱい抱きしめた。そうして、彼女は、その明るい花束の中へ蒼ざめた顔を埋めると、恍惚として眼を閉じた。>>

当時、逗子と葉山を往復する郵便馬車があったそうである。今の、国道134号線を通ったのだろう。

横光利一「機械」

最初は「春は馬車に乗って」と同じ「日本の文学 横光利一」に載っているものを読み出したが、すぐにKindle版の全集を99円を買って、そちらを読んだ。しかし、いくら著作権が切れているとはいえ、紙の本として作ればそれなりにコストがかかるものを、電子版ならただ同然というのは驚くべきことだ。もちろん、デジタル入力には人手がかかっているはずだが、青空文庫のボランティアのお蔭でその分のコストもかかっていないらしい。その貢献には頭が下がる。

「機械」は横光の代表作と言われることは知っていたが、だから長編か中編の作品かと思っていた。しかしこれも短編である。「春は馬車に乗って」よりは長いが、中央公論社版で20ページしかない。

これは1930年の作品だが、題名からしてプロレタリア文学と関連があるのかもしれないという想像があった。実際、小林多喜二の「蟹工船」は1929年に出ている。しかし、金属プレートを製造する零細企業が舞台であり、その主人やそこで働く労働者は社会の底辺に位置する立場ではあるものの、とくに社会主義的な視点から描かれているわけではない。

製造工程の技術的な話もかなり出てくるが、これも題名から連想されるのとはやや異なり、機械工学よりも化学工学の色彩が強く、重クロム酸、蒼鉛、珪酸ジルコニウムなどの薬品名がしばしば出てくる。横光はこのような知識をどこから得たのだろうか。

実験的な作品とされ、確かに昭和5年当時には新鮮だったに違いないが、今読んでも古さを感じない。結局、題名にしてもテーマにしても、次の最後の数行がそれを象徴していると言えるだろう。

「いや、もう私の頭もいつの間にか主人の頭のように早や塩化鉄に侵されてしまっているのではなかろうか。私はもう私が分らなくなって来た。私はただ近づいて来る機械の鋭い先尖がじりじり私を狙っているのを感じるだけだ。誰かもう私に代って私を審いてくれ。私が何をして来たかそんなことを私に聞いたって私の知っていよう筈がないのだから。」

谷崎潤一郎「卅」（日本の文学「谷崎潤一郎(三)」（中央公論社）

「鍵」「瘋癲老人日記」と読んで、今度は谷崎の比較的若い頃の作品（1928年で40歳のとき）を読んだ。しかし、同じ日本の文学「谷崎潤一郎(三)」に収められているだけあって、異常な性というテーマとしての共通点がある。また日記体を活用した前者2作に対し、これは大阪弁を駆使した口語体というユニークな文体で、園子の告白録という形を取っている。

レズビアン関係にある園子と光子に対して、光子の婚約者だった綿貫と、園子の夫の柿内孝太郎が絡んできて四つどもえとなる。それが卍という題名の由来らしい。

谷崎のストーリーテリングの能力は卓越している。自然主義文学と同時代にこういう小説を書いていたのは、実に対照的だ。ただ、園子と光子と柿内が心中し、園子だけが生き残るという結末は、途中である程度予想されないこともない。

作品とは関係ないが、「卍」は地図の寺の記号として使われている。外国人観光客が増えてきた現在、これがナチのハーケンクロイツと間違われるので使用をやめるという話がある。自分でも向きがどっちがどっちか分からなくなるときがあるから、ドイツやヨーロッパから来る人には、区別がつかないかもしれない。

木谷有希子「異類婚姻譚」（芥川賞）

最近、日本語の小説を続けて読んでいるが、それが横光と谷崎と芥川賞、というのはかなり変な取り合わせと言えるかもしれない。

途中までは又吉直樹の「火花」と比べてもずっと飽きないで読ませると思っていたが、後半になってからはさすがにちょっと飽きてきた。夫婦の顔が長年一緒に暮らしていると似てくるという、よく聞くような話がこの小説の種になっている。この「似てくる説」は根拠がないかもしれないが、そう言われるとそうかもしれないと思わ

せるものがある。しかし、小説としてはこの話はきっかけでしかなく、奇想天外な方向に発展していく。

日常生活をきわめてリアルにたんたんと描きながら、シュールな世界に紛れ込んでいくというストーリーは、最近の芥川賞作品でよく目にするように思う。たとえば小山田浩子「穴」である。しかし、「穴」では最後は多くのことが主人公の妄想であったことが暗示されて、現実に戻った様子で終わるのに、こちらは主人公の旦那が一輪の山芍薬になってしまう。それを山に植えに行き、翌年の春また訪れると、ちゃんと白い花を咲かせている。しかも、寂しがるだろうと近くにあった竜胆を並べて植えておいたら、その二つの花が区別がつかないほどよく似ていた、というのが落ちである。

こう書いて、前に小山田浩子「穴」の感想を自分でどう書いたのか見てみたら、驚くことに「穴」の最後では「自分の顔が姑に似てきたことを発見して終わる」となっている。すっかり忘れていたが、木谷のこの作品は小山田から相当影響を受けているように見える。

泉鏡花「高野聖」（Kindle版「泉鏡花全集」）

3月3日に片山卓也先生の瑞宝重光章受章記念祝賀会が金沢であり、それに参加した。2年前の最終講義にも出て、その祝賀会で挨拶をしたが、今回も世話役の青木さんから祝辞を頼まれた。またまたしゃしゃり出るのも顰蹙を買うのではないかとちょっと逡巡したが、2年前は乾杯の後で、会場は騒がしくほとんど誰もこちらの話を聞

いてはいなかったことを思い出し、そのこと自体を話の枕にして祝辞を述べた。

翌日、ホテルをチェックアウトした後、泉鏡花記念館が近くにあるのでそこを訪れた。2年前はひがし茶屋街に行ったあと、たまたま目にした徳田秋声記念館に入ったが、鏡花の記念館は浅野川の対岸にあって、泊まったKKRホテルからほど近い。秋声記念館を訪れた後、秋声の小説を初めて読んだが、それが「懺」である。しかし、面白いとはとても思えなかった。

それと比べれば、泉鏡花は好きな作家だ。しかし、「草迷宮」を2010年に読んだときに

「高校の時、「歌行燈」を読んでなぜかひどく感激したが、そのわりには鏡花をそれほどは読んでいない。「高野聖」など有名なものはいくつか読んだはずだが、「歌行燈」ほどの印象を残していない。」

と書いており、しかも今回その「高野聖」を読んでみて、これを読むのは初めてであることに気づいた。前に読もうとしたことがあったが、始めの方でやめてしまったらしい。高校（か中学）のときに「日輪」を読んで感激したのに、その後全然読んでいなかった横光利一と、同じような関係である。

「草迷宮」と同じような怪異譚だが、1900年（明治33年）、鏡花28歳のときのこの作品の方が、文章は平易で読みやすい。そして妖艶

な美女が登場し、エロチックな描写があるところも、この小説の人気のもとだろう。

泉鏡花記念館では、「鏡花本 装幀の美―清方・英朋・雪岱」という企画展をやっていた。鍋木清方の美術館は鎌倉にあり、本郷の弥生美術館には鰭崎英朋の絵が多くあって、どちらも訪れたことがある。小村雪岱は名前を知っている程度だが、中期以降の鏡花の本の装丁を数多く手がけているという。

鏡花の年譜を見ていて、あまり知らなかったことは、1902年（明治35年）から1908年（明治41年）まで、病氣療養のため逗子に住んでいたことである。「草迷宮」が書かれたのはこの頃である。Kindle版の全集には、「松翠深く蒼浪遥けき逗子より」「逗子だより」「逗子より」といういずれも短い文章が載っているが、これまで気がつかなかった。不思議なことに、金沢と逗子という接点がある親父の蔵書に、泉鏡花が見当たらない。

滝口悠生「死んでいない者」（芥川賞）

これは木谷有希子「異類婚姻譚」より大分長い。それもあって、読み始めてから結構日にちを経て読み終えた。しかし、意図的に登場人物を多くし、語り手の位置をその登場人物のあちこちに変えるので、ときどき思い出したように読んでいたのでは誰が誰か分からなくなる。出てくるのは、死んだ男の葬式に集まる者たちで、その男に5人子供がおり、孫は合わせて10人だったかいる。だから複雑と

言っても一族とごく一部の知人が出てくるだけなのだが、家系図でも書くというような努力をしないと、とても正確な関係が分からない。しかし、作者も読者がそれほど努力をすることを期待しているわけではないだろう。それでもときどき読者サービスで復習のような文章を入れていて、必ずしもそのおかげという訳ではないが、部分部分をときどき読むというような読み方でも、楽しめるようにはなっている。

谷崎潤一郎「武州公秘話」（日本の文学「谷崎潤一郎（三）」中央公論社）

このところ谷崎の小説をいくつか読んだが、作品ごとに手を変え品を変え、その工夫たるや驚くべきものがある。私小説家とは根本的に異なる姿勢であり資質と言えよう。

時代は戦国時代という設定である。谷崎による漢文の序が付いているが、こういうものを書けるだけでも才だろう。その頃の知識人ならこの程度は朝飯前なのかもしれないが、とにかく本編への導入として雰囲気を出している。

話は妙覚尼の書いた「見し夜の夢」と道阿弥による手記に基づくと虚構されている。そして武州公の異常な性生活のことがたびたび暗示されるのだが、少年から青年に至る期間を扱ったこの話の中では、サド侯爵のような物語が展開されるわけでは必ずしもない。確かに、若い女性たちが落とされた首の血を洗い、化粧をするという

場面は鮮やかであり、そのイメージに取りつかれた法師丸、後の武州公は、敵の武将の鼻を矢や鉄砲で欠くことに執念を燃やすあたりは異常な嗜好といえるが、それほどどぎつい場面は描かれない。谷崎は続編を書くつもりがあったらしいが、結局実現しなかったということらしい。

ドナルド・キーンは解説でこの作品を、谷崎の最高傑作の一つとしている。

坂口安吾「囲碁修行」（Kindle版 坂口安吾全集）

坂口安吾はほとんど読んでいないが、Kindle版の全集があったのでダウンロードした。目次で目についたのがこの「囲碁修行」である。京都の伏見の上田という食堂の二階に間借りしていたとき、その主人が碁好きで、手合せをしたら安吾が勝った。安吾は「田舎初段に井目置いて勝見のない手並み」というが、親爺はその安吾に「井目置いて、こみを百もらって、勝てない」という。面白くするための誇張表現だろうが、そこに碁好きが集まるので、親爺をそそのかして碁会所を開かせた。その顛末記のようなもので随筆なのか小説なのか、よく分からない。

最近、人と碁を打っていない。直近では、1月に湘南名人会と称して熊谷、山崎、佐原を呼んでわが家で半日打ったときが最後である。そのときは、菊姫超吟と山吟の2升を4人で空けた。しかも、僕は4人の平均より多く飲んでいる。

そのせいか、2勝2敗で、いつも負けない熊谷さんに連敗した。それよりも問題は、皆が帰ってから部屋でよろけ、床に右手を突いたのだが、その突き方が悪く親指を痛めた。翌日、逗子のかんクリニクに行って、第一関節が脱臼していることがわかり、その場で入れてもらったが、その後1週間はギブス、さらに1週間は小さめのサックを着ける羽目となった。このかんクリニクには初めてかかったが、医師を始め、リハビリ専門家、看護師、受付とたくさんのスタッフがいて、それが皆が、きわめて愛想よくまたしつけられていて、きびきびしている。しかし、いまだに（今は6月）リハビリで通っている。

今年は、アルファ碁ガイ・セドルに4勝1敗で勝利し、AIがコンピュータ・ゲームの最後の牙城と言われた碁の最高レベルに早くも追いついたと話題になった。僕は相変わらず「天頂の囲碁」を相手に打っているが、レーティング対局で一時は三段になり、後1勝で四段というところまで行ったあと、連敗に次ぐ連敗で、今は何と初級にまで落ち、そこからなかなか抜け出せないでいる。

江戸川乱歩「二銭銅貨」「黒蜥蜴」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

これまで江戸川乱歩を一篇も読んでいなかったが、著作権切れで全集のKindle版が容易に手に入るようになったので、それをダウンロードして、とりあえずまず1923年に出た乱歩の処女作という「二銭

銅貨」を読んでみた。暗号ものでポーの影響は明らかだが、出世作らしくなかなかの才を見せる。

次いで「黒蜥蜴」を読んだのは、武満徹がきっかけだ。立花隆が「武満徹・音楽創造への旅」という大部の本を今年出したので、早速買ったが重くて持ち歩けないので読む方はあまり進んでいない。その中に、戦争中、武満が空襲に遭ったときに「黒蜥蜴」を読んでいた、面白くてやめがたいところだったが危険がせまったので、やむなく本を放置したというところがあった。それでこれを読んでみた。

明智小五郎ものである。いかにも作ったというストーリーだ。もちろんリアリティを求めるような類の作品ではないが、「二銭銅貨」の方が舞台が当時の下宿屋だけに、今読むとかえって現実感がある。「黒蜥蜴」の舞台はホテルのパーティーなどで、古さを感じさせない分、むしろ現実離れした感を強める。黒蜥蜴が素裸になる場面が二度あるが、当時としてはずいぶんエロティックな描写ではないか。しかし、エログロナンセンスと言われた時代だから、むしろ珍しくなかったのか。

福沢諭吉「学問のすすめ」（Kindle版 福沢諭吉作品集）

岩波文庫の「学問のすすめ」は1983年に買って、半分ほど読んでそのまま読み止しになっていた。Kindle版の全集を手に入れ、読み直

してみた。全集と書いたが、教育論関連の33作品を集めたもので、「福翁自伝」も「文明論の概略」も入っていない。

福沢の世界を見る視野は驚くべきもので、とても明治5年に出された出版物とは思えない。たとえば人が同等であることを論じるだけでなく、男女が同等の権利を持つことを言っている。それをより明確に書いているのは、「学問のすすめ」よりはだいぶ後、明治32年に書かれた「女大学評論」ではあるが、その論旨はそれでも時代をはるかに先取りしている。この間うち、NHKの朝のドラマで広岡浅子を題材にした「あさが来た」をやっていたが、そこに福沢諭吉が登場するのは、ある程度史実に基づいているのだろう。

面白いのは十五編「事物を疑いて取捨を断ずること」で、「開化先生と称する輩は、口を開けば西洋文明の美を称し」とし

「西洋人は日に浴湯して日本人の浴湯は一月わずかに一、二次ならば、開化先生これを評して言わん、「文明開化の人民はよく浴湯して皮膚の蒸発を促がしもって衛生の法を守れども、不文の日本人はすなわちこの理を知らず」と。日本人は寢屋の内に尿瓶を置いてこれに小便を貯たくわえ、あるいは便所より出でて手を洗うことなく、洋人は夜中といえども起きて便所に行き、なんら事故あるも必ず手を洗うの風ならば、論者評して言わん、「開化の人は清潔を貴ぶの風あれども、不開化の人民は不潔の何ものたるを知らず、けだし小児の智識いまだ発生せずして汚潔を弁ずること能あたわざる者

に異ならず、この人民といえどもしだいに進んで文明の域に入らば、ついには西洋の美風に倣うことあるべし」と。」

などと言う。その他、鼻紙とハンカチ、イヤリング、コルセット、家の錠、契約、噛みタバコとキセル、靴と下駄などを挙げて、開化先生ならもし日本の文化風習が逆転して西洋のものだった場合、そちらをありがたがるだろうという皮肉を、痛快に述べている。福沢は西洋かぶれではないのである。

蜷川真夫「ネットの炎上力」（文春新書）

田中辰雄・山口真一「ネット炎上の研究」という本をAmazonで買ったとき、例によって連想お奨め機能でこの新書が紹介されたので、同時に購入した。2010年に出た本で、この手の新書としては明らかに賞味期限を過ぎている。たとえば書かれたのが民主党政権の誕生の頃で、それに関する記述が随所にあるが、その後の変化を考えると隔世の感もある。

それにタイトルからネット炎上を扱っていると思うと、肩透かしを食う。著者は元朝日新聞の社会部記者で、Aeraの編集長やテレビのニュース・キャスターなどを経て、J-Cast というインターネット・ニュースサイトを立ち上げた。この本は要するに、J-Cast の誕生からこれが書かれるときまでの顛末記なのである。

ネットビジネスは広告収入で成り立っているので、読まれるページの数（PV）をいかに上げるかが勝負という。力のある記者を集める

のはコストがかかるので、記事の独自性や厚みは貧弱になり、読者から取材が足りないと批判される、と正直に書いている。それで2次情報が主となるが、読者からコメントが付けられる仕組みが強みで、それが既存のジャーナリズムにない特徴といえる。

J-Cast の比較的初期に大量のアクセスを集めたのが、「毎日新聞「変態記事事件」」である。他には「武豊騎手のコメント誤報事件」「佳子様のプライベート写真」「中田ヒデ CMから完全撤退」「オナニーマラソン」など。タイトルだけ見ても、怪しげである。とにかく大新聞では取り上げそうにない。これらは多くのコメントを集めてもいる。

タイトルの「炎上力」は、J-Cast が「炎上メディア」と揶揄されてきたことから来ている。数多くの炎上事件の記事として取り上げているからである。「炎上・上村愛子ブログそれでも閉鎖せず」「「めでたいの?」発言で乙武ブログ炎上」「キャディーを蹴った? 古閑美保ブログ炎上」といったものである。要するに、本書では炎上はビジネスの種で、批判の対象ではないのである。

田中辰雄・山口真一「ネット炎上の研究」（勁草書房）

すでに書いたように、この本を読むのがそもそもの意図だったのが、先に蜷川の「ネットの炎上力」を読むはめとなった。しかし、さすがにこちらの方は、本格的にネット炎上をさまざまな角度から議論しているまともな本である。

著者はどちらも国際大学グローバルコミュニケーションセンターに所属し、経済学が専門である。本書の内容も彼らが学術誌に発表した研究に基づいており、データの統計的分析手法を駆使している。

しかし、面白いのはそのような統計分析ではなく、ネット炎上の個々の事例である。もちろん事例だけを知りたければネット上にまとめサイトがいろいろあるらしいので、それを訪ね歩けばいいだろうが、事例だけでなく既存の論文や書籍も十分サーベイしているはずの著者たちがスクリーニングした事例は、それなりに代表的なものと思われる。第2章「炎上の分類・事例・パターン」にまとめられているが、それ以降の章でも話題に応じてその中の例がより詳しく紹介される。

分類はIからVまでの5つの型に分けられているが、その分け方はあまりすっきりしたものではない。たとえばIII型は「自作自演、ステルスマーケティング、捏造の露呈」というのだが、これだけ見てもどういう型なのかビンと来ないだろう。II型に至っては、もっと長くて「何かを批判する、あるいは暴言を吐く・デリカシーのない発言をする・特定の層を不快にさせるような発言・行為をする」というのだが、読点とナカグロの優先順位が分からないだけでなく、もう少し意味のある定義づけができないものかと思う。

本書を通して繰り返し主張されていることは、炎上はごく一握りのネット参加者によって起こされる。しかし、その対象者にはネット

中から否定されるように感じられ、大きな打撃となる。その社会的なコストは情報発信の委縮である、ということである。真つ当な主張だと思う。反社会的な行為が批判されて炎上するケースも、対象が法人の場合は意味がありうる。しかし、対象が個人の場合、それが私刑の役割を担うとすると、どんなにその批判が正義に則ったものとしても、法治国家としては問題である。

ただ、この議論の中で、炎上は一握りの参加者で起こされるという根拠が、2014年11月に行われた調査会社マイボイスが多摩大学情報社会学研究所と共同で行ったインターネットモニター19,992人へのアンケート調査で、炎上参加体験がある人が約1.11%（バイアス補正後の数値）というデータのみであるのは、物足りない。このデータから、1.11%のうち過去1年以内に書き込んだ人は0.47%と推計し、さらに年間の炎上件数が約200件なので、年間の炎上参加者がインターネット利用者全体に占める割合は0.00X%程度だという。ずいぶん乱暴である。たとえばいくつかの炎上ケースで、共通の書き込み者が特定できる、というようなことがあれば、説得力があるのだが。

昨年、うちの学科の学生で、「XX先生は試験が0点でも単位をくれるって」というようなウソの書き込みをSNSでして、それが炎上して個人情報やネットにさらされるなどの事態となった。ことが大きくなったので、大学もこの学生をけん責処分としたが、本書を読む

と大学がそのような処分をしたのが適切だったのか、疑問も生じてくる。

ドナルド・キーン, 角地幸男 訳「石川啄木」 (新潮社)

ドナルド・キーンは今年94歳である。それでこのような書下ろしの長編評論を書いて出版する。面白いのは、これだけ長い間日本文学を研究し、数多くの著作を出しながら、いまだに英語で書いて翻訳者が日本語にしていることである。

子供の頃、子供向けに書かれた啄木の伝記を読んだ。そこでも金田一京助が大きな存在として扱われていた記憶がある。中学の図書室に、啄木の作品集があったのも印象に残っている。借りたのか図書室で閲覧したのか覚えていないが、何度か頁を捲った。「一握の砂」のような短歌はあまり記憶になく、「雲は天才である」や「天鷲絨」のような小説が印象に残る。といってもそれらを読み通した覚えはなく、拾い読みだったと思う。

本書によれば、明治45年に啄木が26歳で死んだとき、一部の作家、文学者にはよく知られていたが、一般の国民に広く知られる存在ではなく、作品集の出版も、3巻から成る全集が新潮社より出されたのが大正8年、全5巻の全集が改造社から出たのがようやく昭和3-4年、というようなペースだったという。しかし、戦後になって評価が一変し、河出書房（1949-53年 全25巻）、岩波書店（1953-54年 全16巻）、筑摩書房（1967-68年 全8巻、および1978-80年 全8巻）

のように全集が相次いで出版されている。僕の幼児期や中学での体験は、そのような戦後の流れに乗るものだろう。人口に膾炙する「一握の砂」の中の短歌も、多分国語の教科書で読んでいるだろう。

「百代の過客」を書いたキーンだから、当然啄木の日記に注目する。妻節子が啄木の遺言に反して焼却しなかったローマ字日記が、多く引用される。ローマ字表記がかな漢字表記に並列されているが、ローマ字の方は読まなかった。ローマ字にしたのは節子に読めないようにという意図だったと言われるが、キーンは節子はローマ字でも読めたはずだし、読んでいただろうとしている。

また、短歌が当然多く引用されるが、それには英訳がついている。別に訳者が誰と書いていないので、キーンが自ら訳したものだろう。それもほとんどは読み飛ばしたから、このページ数（375頁）にしては読むのにかけた時間は短かった。

描かれる啄木は生涯貧乏と不遇の中で過ごし、天才であるという自負は持ち続けたかもしれないが、小説はうまく書けないことも自覚していた。性格は利己的で、借金をしまくり、金田一や宮崎郁雨など、多くの人に金銭的にも家族の扶養という面でも大いに世話になりながら、あまり感謝することがなかったらしい。また、与謝野鉄幹など交流のあった文学者の多くを、手厳しく批判している。

とても好きになれそうもない人物だが、キーンは

「子規と違って、啄木は明らかに現代歌人だった。何が歌人を現代的にするかを定義することは難しい。しかし啄木の書いた作品のどれ一つを取ってみても、子規やそれ以前の日本の歌人とは違う世界に啄木が属していたことを明らかにしている。啄木の短歌が何世紀も前に確立された韻律の法則に従っていることは事実だが、それは極めて斬新である。」(p.9)

などと言い、さらに

「啄木は今から一世紀も前に死に、その後の日本が大きく変化を遂げたにもかかわらず、その詩歌や日記を読むと、まるで啄木が我々と同時代の人間のように見える。読みながら、我々は啄木と自分を隔てるものをまったく感じない。」(p.13)

と温かい目で見ている。

実際に生きた啄木に会った人たちには啄木はとても魅力があった人物であつたらしく、行く先々で援助者・ファンが出てくるし、芸者小奴を始めとして多くの女にも惚れられる。本書の表紙に使われている写真を見ても、啄木は美青年である。しかし、現代のわれわれが啄木を好きになるかどうかは、「一握の砂」の短歌、そのすべてではなくとも少なくともその一部を好きになるかにかかっているだろう。

筧捷彦 編著「目指せ！プログラミング世界一：大学対抗プログラミングコンテスト ICPCへの挑戦」（近代科学社）

今年、ゼミでICPCのことを紹介したら、相原君が関心を示した。これまでのゼミの学生からはそういう反応がなかったので、正直意外な感じもしたが嬉しくも思った。結局、三浦研の後藤君と鈴木研の吉岡君とでチームを作り、6月24日に行われたインターネットによる国内予選に実際に出場した。法政大学としては初参加であり、それだけでも特筆すべきである。僕は監督兼コーチ役を引き受けた。

国内予選の結果は8問中3問に正解し、参加384チーム中106位となって、初参加としては健闘した。参加大学の数は93で、その内、新規参加は11大学だったという。残念ながら選抜された35チームの中には入らなかったが、よい経験になったはずである。知能系の研究室を集めて開いている合同ゼミでもICPCについて僕が紹介し、3人に体験話を話してもらった。

3人の中では、後藤君がコーディング担当、相原君がアルゴリズム検討、プログラミングの経験の薄い吉岡君は問題解析係という分担だったという。後藤君は僕の実験や「社会と知能」の授業でも、創生科学科の学生には珍しくプログラミングができることは知っていた。

3人はこの筧編著の本で勉強していた。それで僕も、実は予選が終わってからだが、本書を買って一応通読した。問題例による解説は、近山、石畑、柴山、田中哲朗などのよく知っている連中が書いている。彼らは日本で開催される地区大会の運営委員長や出題委員

長をやっているが、並々ならぬ労力をボランティアとして注いだきたはずで、それには頭が下がる。しかし、本書を見ても、ICPCの国内Webサイトを見ても、過去のそのような役職者のリストなどは載せておらず、まったくの無償行為という感じである。

本書によればICPCの歴史は1970年にまで遡るらしいが、Baylor大学に本部ができて今の世界大会の形になったのは1989年という。IBMがスポンサーになったのは1997年である。その年に日本から初めて、早稲田の笥さんのチームと京大の湯浅さんのチームが参加した。思えば、増原さんが駒場の学生を捕まえて、全学自由ゼミナールの形でICPCの問題を取り上げてプログラミングの訓練を始めたのが2000年代の前半のことだった。東大のチームが国内予選に参加するようになったのは彼が育てたからで、だから当初は東大チームは1-2年生ばかりだった。今や、東大チームが上位を独占するような状況で、多くは本郷のチームである。駒場では増原さんの後、金子さんが頑張っているはずで、本郷のチームが強いのも、駒場で訓練された連中が進学してチームを編成して参加するからである。今度の国内予選でも、1位が東大チームであるだけでなく、上位6チーム中4チームが東大。1大学から参加可能なチーム数の上限が4なので、この4チームが本選に進み、他の東大チームは予選落ちとなった。しかし、世界の壁は厚く、世界大会での日本の最高成績は、2013年の東大チームの3位である。

井上ひさし「泣き虫なまいき石川啄木」(Shincho Online Books, 新潮社)

ドナルド・キーンの本を読んで、井上ひさしのこの作品のことを思い出した。これは実際に上演もされた戯曲であるが、戯曲というものを読むのは久しぶりだ。

貧乏暮らし、妻節子と母カツとのいさかい、節子と宮崎との関係、啄木と節子とカツの結核、金田一京助との友情と諍い、父一禎の酒癖と家族を顧みない勝手さ（それでいて禅坊主として気の利いた哲学的なことを言う）、いずれもキーンの本にも出てきた題材で、啄木の伝記におそらく定番で取り上げられる事柄なのだろうが、それを巧みに織り交ぜて芝居としている。キーンの本には出てこなかった登場人物は、英国聖公会伝道医師カルバン博士と婦人伝道士マツキントッシュであるが、これは啄木の死後の場面という設定の最初の1（幕とも場とも書いてない）と最後の8に、妹光子との関係で出てくるものである。

このような惨めな暮らしとぎくしゃくした家族関係を題材としながら、ところどころにおかしみが散りばめられているのは、さすがに井上ひさらしいところである。

面白いのはト書きで、たとえば「1 事ありげな初夏の夕暮れ」では「金本退場。節子、頭を下げて見送ってから、まづ遺稿をひとまとめにし、次に日記を、読んだ分と未読の分とに選り分ける。ちなみに、このとき節子が持ち込んだ小説遺稿は九編（「雲は天才である」「天鷲絨」「二筋の血」「鳥影」「赤痢」「足跡」「葉書」

「道」「我等の一団と彼」），日記は十五冊（博文館当用日記二冊，洋罫紙を綴じたもの一冊，大学ノート十二冊），現存するものより二冊多い。」

と，芝居の制作者用というよりは戯曲の読者向けに書かれている色彩が強いものがある。もちろん背景説明として，芝居を作る上にも重要なメッセージではあろうが。

石川啄木「一握の砂」（Kindle版 石川啄木全集）

斎藤茂吉の「赤光」や北原白秋の歌集の文庫本を持っていたても，歌集を最初から最後まで読み通した記憶はない。551首が収められているこの有名な歌集を，初めて通して読んだ。

少なくとも我々の世代以上の日本人は皆，この中の数首を諳んじているはずである。茂吉にしても白秋にしても，誰もがスラスラ口をついて出る歌を詠んでいるわけではない。その意味で，啄木は確かに国民歌人と呼ぶにふさわしい。この現象は，我々がいくつかの歌謡曲の歌詞を共通に覚えているのと同じようなものかもしれない。実際，「一握の砂」の歌にたびたび現れる言葉は「なみだ」「泣く」「かなしみ」で，こう並べれば歌謡曲の世界である。

しかし，啄木の短歌には通俗な歌謡曲にはない，複雑な感情と知性がある。

甘利俊一「脳・心・人工知能」（講談社ブルーバックス）

僕の修士論文の指導教官は伊理正夫先生であるが、副指導として甘利先生の名前も入っている。修士の1年目は近藤一夫先生だったが、1年後に定年で退官されることが分かっており、その後を近藤先生の一番弟子・二番弟子の伊理・甘利という韻を踏んだお二人に引き継いでいただいたのは、考えてみればこの上なくぜいたくなことだった。しかし、不肖の弟子は、その後、紆余曲折を経て東大教授を18年勤めることにはなったものの、研究のレベルはお二人に比べ遥かに遠く、及ぶべくもない。

修論のテーマを甘利先生に示唆いただいたときもあり、それはGaborの木口グラムの数理モデルを作るというものだったと思う。しばらく考えたが、とても自分の力ではできそうもないとあっさり諦めてしまった。しかし修論審査のとき、当時もっとも勢いのある若手助教授の伊理・甘利から、指導教官ゆえに鋭い突込みがなかったのはラッキーだった。

その甘利先生も傘寿を迎えられたということだが、今も理研の脳科学研究センターの特別顧問という地位にある。そして今年、この講談社ブルーバックスの1冊を出された。この出版企画は30年前に持ち込まれたそうだが、多忙のため書けなかったものを、ついに傘寿というタイミングで出されたということである。折しもディープラーニングがブームの最中で、時機もよかった。

僕が計数工学科に進学した1968年は、甘利先生が九大から東大に戻られてまだ1-2年というところだったはずだ。パーセプトロンにより第1次ニューロブームが起こったのは1950年代後半だが、甘利先生がニューラルネットワークの確率降下学習法を考案されて、論文として発表されたのがそのニューロブームが下火になった後の1966年で、九大時代だったという。そして、1980年代に第2次ニューロブームが来る。ブームを作ったのはルンメルハルトらのバックプロパゲーションであったが、それは15年前の甘利先生の降下学習法の再発見だった。

この第2次ブームのときに僕はまだ三菱総研にいたが、通産省のプロジェクトで「バイオコンピュータ調査」を実施した。これはMRIが企画したプロジェクトではなく、通産省が大学の研究者を集めて委員会形式で行う調査の事務局を頼まれたものである。その委員長が甘利先生だった。本書にも名前が出てくる川人光男さんも委員の一人だった。麻生英樹さんもいたと思う。

甘利先生は囲碁が趣味である。僕が学生の頃、毎日のように伊達さんなどと碁を打っている姿を見かけた。僕自身は甘利先生と打ったことはないが、修士1年のときに近研の旅行で淡路島に行ったときのことが思い出される。淡路島の後、甘利、末包、韓さんなどと金刀比羅に行って1泊した。そのとき、南雲研で甘利先生を指導教官とする1年上の荻布さんも一緒だった。皆で宿屋でさんざん飲んだ翌朝、金刀比羅の1000段の階段を登ったはきつかった。そこから多

分高松→明石というルートのフェリーに乗り（もちろん本四架橋以前である）、明石から汽車に乗ったのだと思う。汽車の中で僕は荻布さんと碁を打った。二日酔いの上に、揺れる車中で碁盤を見つめていると気持ちが悪くなったが、それでも一生懸命打った記憶がある。それを横から甘利先生が見ておられて、二人ともなかなかよく打っているお褒めいただいたのが記憶に残っている。その後、荻布さんと僕は多分京都で皆と別れて、まず金沢に行って玉井の大叔母にご馳走になったりした後、荻布さんの故郷の高岡に行き、そこに泊めていただいた。先日、荻布さんと話をしたとき、彼はこのことを全然覚えていないので愕然とした。しかし、記憶とはそういうものである。逆に、人と昔の話をしていて、こちらの記憶がまったく欠落しているのを発見して驚くこともよくある。

同じ荻布さんが、甘利先生から聞いたこととして、囲碁を趣味とし、またニューラルネットワークの研究をしてきたが、この両者がどうしても結びつかない。囲碁はやはり論理的・記号的な思考に向いていて、ニューロの学習で囲碁に強くなるコンピュータ・プログラムを作ることには考えにくい、ということだった。そう言われたのがいつのことか聞きそびれたが、アルファ碁の成功は先生の予想を裏切ったことになるだろう。本書でも何カ所かでAIによるゲームの話が出てきて、囲碁については執筆の進行時にアルファ碁が現れ、まずヨーロッパでプロの2段に勝った話が付け加えられたようで、その後、イ・セドルとの勝負の結果が慌ててつけ足されている。

石川啄木「悲しき玩具」（Kindle版 石川啄木全集）

キーンの「石川啄木」によれば、第二歌集「悲しき玩具」が出版されたのは、啄木が死んで2か月後の明治45年6月だった。そこに収録されているのは主に明治44年の初期に作られたもので、病院のベッドで詠まれたものが多い。これを啄木に頼まれて編集したのは土岐善麿で、啄木はまだ手を入れるつもりがあったが、それはかなわなかった。収録されているのは194首で、「一握の砂」よりずっと少ない。

病院で作られた歌が多いので、題材は自分の肺の病が中心である。それに家族の諍い、妻と子のこと、母のこと、父のこと、妹のことなどが混じる。すべて井上ひさしの戯曲に巧みに取り込まれていたことが、改めて分かる。「一握の砂」のように人口に膾炙した歌は少ないが、キーンの本でもいくつかの歌が引用されていたので、馴染みはある。それにしても、救いのない世界である。啄木はこのように不幸で短い生涯を送り、しかしその歌は今に残った。

江戸川乱歩「D坂の殺人事件」（Kindle版 江戸川乱歩作品集）

これは明智小五郎の初登場作品だそうだ。「黒蜥蜴」の明智小五郎は、ハードボイルドというべきか大変活動的だった。子供の時の明智小五郎の記憶は、怪人二十面相と少年探偵団と不可分で、また性格が違う。一方、この作品の明智はシャーロック・ホームズのように

な書斎の探偵タイプである。話そのものが密室殺人事件で、「本格探偵小説」に属する。作品中でも「ポオの「モルグ街の殺人」やドイルの「スペックルド・バンド」を聯想されはしないだろうか」との言及がある。ルルーの「黄色い部屋」にも触れられる。

D坂とは団子坂のことらしく、乱歩は団子坂で古本屋を営んでいたことがあるという。この殺人事件はD坂にある古本屋で起こる。語り手がワトソン役で、その語り手の推理では犯人は明智小五郎ということになって、警察にそれを通報に行く前に、明智の下宿に立ち寄り、当人に自分の推理の結果を告げる。それに対して明智の推理による真相が明かされる。という筋立てである。「二銭銅貨」と同じような初期の「本格もの」だが、比べると「二銭銅貨」の方が出来がよいかと思った。

村川沙耶香「コンビニ人間」（芥川賞）

最近の若者はコンビニのない生活は、想像できないという。僕は未だにスーパーマーケットとコンビニの違いをきちんと理解していない。24時間営業かどうか、生鮮食品を扱うかどうか、というような基準が頭に浮かぶが、それがどの程度正しい理解なのか分からない。ずっと、コンビニで買物をするのがほとんどなかったが、最近、小金井キャンパスの正門近くのサンクスにはときどき入る。ほとんどの目的は、そこでコーヒーを買うことである。以前は、コーヒー豆を買っていたが、学生研究室に置いているコーヒーメーカーでコーヒーを淹れることも面倒になって、コンビニのコーヒーマシ

ンのラージサイズを買って帰ることが多い。これが缶コーヒーよりははるかに旨い。

今度の芥川賞を取った村川沙耶香は、自身が大学生のとき以来コンビニのバイトをし続けて来たそう。この小説の主人公もまた、36歳の独身女性で学生時代以来コンビニでバイトをし続けている。家族や世間から性格や言動が正常でないと思われていて、それが「治る」ことを期待されている。本人は人となるべく接触しないことに生きてきたが、コンビニでの仕事はマニュアル通り正確にこなし、積極的・活動的ですからある。

このような設定のもと、白羽というダメ男が新人として入ってきて、それを自分のアパートに住まわせることになるというようにストーリーが進む。全体に、おかしみが満ちていて、結末も上手い。

僕にとっては、コンビニの店長やバイト社員の生態、商品の並べ方、社員の訓練やマニュアル、挨拶の仕方、目玉商品の宣伝、仕入れのやりかた、などルポルタージュとして読んでも面白いと感じた。

紫式部、与謝野晶子 訳「全訳 源氏物語」 (Kindle版)

とにかく時間がかかった。読み始めたのは去年の初め頃ではないだろうか。途中しばらく、まったく手をつけていない時期があり、こ

の夏休み、とにかくこれを読み了えようと努めたが、それでも10月に入ってしまった。

実は、この与謝野晶子訳はすいぶん昔に上中下3巻本の「上」だけを買っていた。なぜか本棚を探しても見つからないが、捨てたり売ったりした記憶はないから、どこかにあるはずだ。ネットで調べたところ、多分「河出書房新社版」と思われる。1969年に出たらしいが、買ったのはそれよりだいぶ後のような気がする。しかしそれも不確かだ。「上」しか買わなかったことから分かるように、「上」も読み終えていない。須磨帰りというが、須磨までも行かなかったと思う。

1000年も前に、よくこれほど長い物語を、一貫した筋立てを保って書き上げたものだと思う。大野・丸谷の本で「若菜」が白眉だ言っていたが、通して読んでそれは実感した。しかし、あるいはそれ以上に感心したのは、宇治十帖である。大野・丸谷も若菜に次いで「浮舟」を褒めている。僕は「浮舟」の前後を含めて、筋の展開が見事だと思った。

それにしては、終わりが拍子抜けである。まるで未完のような印象を与える。しかし、「とぞ本にはべめる。」で終わりの表現であるらしい（「とぞ」だけで「本にはべめる」のない流布本も多いという）。

「蜻蛉」で浮舟が失踪したところで、作者は明らかに浮舟は死んでおらず、再生してくることを匂わせている。だから「手習」で浮舟が再登場し、最後の帖「夢浮橋」につながる辺りでは、その明るいタイトルとも相まって、ハッピーエンドで終わることを想像した。多くの読者にもそういう期待をこの1000年間、抱かせてきたのではないかと思う。ハッピーエンドとは、匂宮か薫のどちらかと再び結ばれることで、流れから言えば薫の方だろう。その期待が裏切られるばかりか、「大将は少年の帰りを今か今かと思って待っていたのであったが、こうした要領を得ないふうで帰って来たのに失望し、その人のために持つ悲しみはかえって深められた気がして、いろいろなことも想像されるのであった。だれかがひそかに恋人として置いてあるのではあるまいかなどと、あのこと恨めしいあまりに軽蔑してもみた人であったから、その習慣で自身でもよけいなことを思うとまで思われた。」で終わるとは。

しかし、ハッピーエンドを期待するという方が、単純でおめでたい読者なのかもしれない。1000年前の紫式部は、はるかにソフィステケートされた作家ということか。

源氏物語ほど研究者の多い日本文学はないだろうし、その研究が1000年にわたって連綿と続いているはずだから、どんな感想もすでにさんざん言われていることだろう。それでもあえて気になったことを挙げてみる。まず、話が飛んでいるところが何力所かある。源氏が藤壺と関係するところの描写がない。いつの間にかそういうこ

とになっている。明石への左遷も、いつの間にかそうなっていて、その理由や経緯がよくわからない。朧月夜との関係が発覚したということらしいが、直接の記述はない。六条御息所と娘の秋好中宮に関わる話でも、途中で筋が飛んでいるような気がする。玉鬘が髭黒大将と結婚するところも飛んでいる。話が飛ばされている最大の例は「雲隠」で、題だけがあって中身がない。もちろん、ここで源氏が死んだことは分かる。紫式部が題をつけて意図的に書かなかったのか、中身が失われたのか、後世の人が題だけつけたのか、いろいろな説があるらしい。

女が男に決して顔を見せないという風習が、実に奇妙である。しかし、イスラム教のヒジャブは髪を隠して顔は出すが、ニカーブは顔を隠して目だけを出すものらしい。さらにブルカというのは目の部分も隠れているそう。いずれにせよ女が顔を隠すという発想としては、共通性がある。

それが若い女だけではない。たとえば夕霧は、義理の母の紫の上の顔を、紫が死ぬまでほとんど見たことがない。顔を見ることができないことも要因ではないかと思うが、多くの男女関係がレイプで成立する。たとえば源氏と藤壺、柏木と女三宮、匂宮と浮舟。源氏の場合、藤壺以外でもほとんどのケースがレイプに近いが、紫の上の場合は、今で言えば子女誘拐監禁と言えるだろう。

与謝野晶子の訳はかなりくせものである。あえて、明治以降に作られた漢語を多用する。たとえば「芸術的な趣味」「青春の男女」（「若菜上」）。他にももっと強烈なものがあったと思うが、探すのが手間だ。

とにかく翻訳でなければとても読めないが、死ぬまでに一応読んだという満足感はある。

これを書いてから2年近く経っているが(2018/1/9)、見つからないと書いた本書の上巻が出てきた。なぜか美季子の本棚にあった。昭和60年7月20日発行の第11版である。栞が入っている場所は、美季子が動かしていないとすれば「葵」の途中で、p.168のところである。上巻の半分にも達していない。中村真一郎による解説があって、それを読んでみた。20ページ以上あって、面白く読んだ。

大野晋，丸谷才一「光る源氏の物語（上・下）」（中央公論社）」

この本は1989年に読んでいて、感想も書いている。今回、与謝野晶子訳を読んでいる中で、思い出してまた読み始めた。面白いので気がついたら晶子訳の本体の読書を追い越してしまったので、これはまずいと自制して、晶子訳を読了してから残りを読んだ。

前に読んだときから30年近く経っているが、この間に大野も丸谷も死んでしまった。時の流れを感じる。しかしこの「対談」が実際はどう行われたのか分からないが、実に見事な掛け合いである。

大野が源氏物語全体がa系, b系, c系, d系の4つに分けられることを示し, このことは物語の展開に応じて随時振り返られる。また, 個々の言葉の使い方や頻度など, 言語学者らしい視点を解釈に持ち込む。丸谷は小説家としての技術や心理という点から紫式部に迫る。まるで式部が現代の小説家であるかのように論じる。そして, 各章で何カ所かの原文を抜き出し, その現代語訳を示す。このような役割分担は明確だが, しかし対等な立場で議論が行われ, どちらがリードするというわけでもなく, また強く対立することもなく, 緊張感は失われずに「対話」が進められる。

池谷裕二 監修「脳と心のしくみ」(新星出版社)

「大人のための図鑑」と銘打ったシリーズの一冊で, 1項目に見開き2ページを割り当て, 豊富に図を使っている。そのような作りの本だから, 内容的には大したことはないかもしれないと思って読み始めたが, 案外に掘り出し物だった。

池谷が提供する海馬などの写真が美しい。文章は池谷でなく5人のスタッフが共同で書いているが, 1項目2ページという制約の下に, そつなく説明をしている。脳の構造図や各領域・器官の名前はこれまで何度も目にしているが, きちんとは頭に入っていない。この「図鑑」で子供のように覚えられるかという点と怪しいものだが, 折に触れて見直すのによいと思わせる本である。

池谷裕二「単純な脳，複雑な「私」」（講談社ブルーバックス）

池谷がいくつか啓蒙書を出しているのを知って，その中で比較的新しいこの本を読んでみた．これまで読んだ石田英敬や加藤陽子の本と同様に，高校生に話した講義をもとに作られている．4日間の連続講義（最初の1日は全校生徒向けで，後の3日間は集められた9名の生徒を対象としたもの）というが，本にして450ページあって相当な内容量である（テープ起こしが元なので冗長なところがあるにせよ）．講義は池谷の母校の静岡県藤枝東高校で行われたものである．

脳の構造・組成・機能についての生理学的な話は案外少なく，心理学，認知学的な話が中心である．その意味では，下條信輔さんの本と近い感じがする．意識，記憶，サブリミナル，生命の定義，感覚器の構造，脳のゆらぎ，フィードバック，リカージョン，ベキ則，ノイズの役割，などがテーマである．

研究者として，研究論文だけでなくこのような本を出すことの意味について，自分でも多少の後ろめたさを感じながらも語っているが，社会的に意味があることだし，本が評判になったという自負もありそうである．

池谷裕二「進化しすぎた脳」（講談社ブルーバックス）

こちらの方が「単純な脳，複雑な「私」」より先に出て評判になり，池谷の名声を上げたものらしい．もとは2004年に朝日出版社から出ており，2007年にブルーバックス版が出版された．やはり高校生相手の講義がもととなっており，このときは慶応義塾ニューヨーク学院高等部の学生8名が対象で，やはり4日間の講義である．講義が行われたのは2002年12月．

元の本，あるいはブルーバックス版がでたとき，新聞などの書評で高く評価されたらしいが，書評を割とまめに読む僕も，見逃していた．

「単純な脳，複雑な「私」」に対しては，「脳の構造・組成・機能についての生理学的な話は案外少ない」と書いたが，この本ではシナプスの構造などをかなり詳しく説明している．

この本では，講義相手の高校生の反応が「単純な脳」よりよく，鋭い質問が出る．やはり慶応といってもニューヨークにあるので，学生がよく質問し主体的に意見を述べるというアメリカの教育のよさが，出ているようだ．そこに静岡の名門高校との違いが感じられる．

茂木健一郎は相変わらず売れっ子だが，僕は茂木の本は1冊しか読んでいない（「心を生み出す脳のシステム「私」というミステリー」）．茂木が売れるのは脳科学ブームに乗っているとも言え，逆に茂木がブームを演出しているとも言える．しかし茂木がそうだと

いう訳ではないが、ブームの中には怪しい面があり、「頭をよくする」とか「心を強くする」というような功利的な期待を煽っているところも感じられる。池谷はきちんとした研究業績を上げている研究者で、エッセ科学の片棒を担ぐような人物ではないようだが、本書でも「記憶力を強くする」などの話題があり、その辺は世間から広く受け入れられる要素なのだろう。

池谷裕二「脳はなにかと言いつける」（新潮文庫）

3冊目ともなると、さすがにすでに読んだ同じ話が随所に出てくる。この本は、VISA 誌に連載された短いエッセイに、追加したい内容を池谷が口述し、それを編集者がまとめるという形で作られているので、手軽に作られた本という面がある。しかし、面白く読ませるというサービスは行き届いている。

2015年

Howard Goodall, "The Story of Music," Chatto & Windus 2013

昨年は音楽に関する本をよく読んだが、その中ではこれが一番の大物で、読むのに数か月かった。

著者のGoodallはイギリスの作曲家で、合唱曲やオルガン曲など多くの作品があるようだが、本書を読むと音楽の歴史に造詣が深い上に文章力もすぐれた人であることがわかる。

この本は音楽の歴史を語るものではあるが、音楽家の歴史ではないと序文に書いている。つまり音楽家の生い立ちとか逸話などにはまず触れずに、作曲家がそれぞれ果たした音楽の変遷に対する役割に集中して書いている。対象とする音楽はやはり西洋音楽が中心ではある。ただ、世界の音楽についても随所で言及している。また、いわゆるクラシックだけでなく、20世紀以降ではジャズ、映画音楽、ロックを中心に記述している。

歴史を遡ると、紀元前43000年ごろの象牙で作られた笛が発見されているという。しかし、音は残らないという特徴がある。古い楽器がどのように鳴ったかは試してみることはできるが、それによってどのような音楽が作られ演奏されてきたかは、不可知である。声による歌ももちろん、歌詞が残っていても音楽は分からない。ただ、民族の中にはずっと口承で伝えられているものがあり、それが歴史

の中でどのくらい変化したかは分からないとしても、古いメロディーやリズムがその中に残されていることはあるだろう。それでも、エジプトやギリシアや古代中国で演奏されていた音楽を再現することはできないわけだ。

楽譜のようなものが登場するのはずいぶん後だ。西暦1000年頃、イタリアのグイード・ダレッツォが、現在の記譜法の原型を考案したという。本書の主要部分もそれ以降となる。全8章だが、第1章が40,000BC-AD1450（この書き方からすると「紀元前43000年ごろ」と言うのは、今から43000年前の間違いかもしれない）、第2章が1450-1650（普通はルネッサンスの音楽と言われるが、その曖昧性を指摘している）、第3章が1650-1750（これもバロック期とは言わず、しかし通常はそう呼ばれる時代）、第4章が1750-1850（古典期からロマン派前期に相当、しかしロマン派という言い方もふさわしくないとする）、第5章が1850-1890、第6章が1890-1918、第7章が1918-1945、そして第8章が1945-2012と時代を区分している。第7章のタイトルは「ポピュラー時代I」で、第8章は「ポピュラー時代II」である。

しかし、現代は音楽の鑑賞にはとても便利な時代であることが実感される。ここに出てくるような音楽のさまざま一流の演奏が自分のiPodに入っているわけだし、入っていなくても入手しようと思えばオンライン・ストアで直ちに手に入れられる。そのきっかけとなったレコード・ラジオの発明・普及が、「クラシック」を19世紀を中

心とする限定された時代の音楽だけにしてしまった一因だという議論は、説得力がある。

とにかく目配りが行き届いた本で、作曲家の取り上げ方、評価の基準はバランスが取れていると感じさせる。時間をかけて読んだだけのことはあった。

村井純, 砂原秀樹, ヴィントン・グレイ・サーフ, 「角川インターネット講座(1) インターネットの基礎 情報革命を支えるインフラストラクチャー」(KADOKAWA)

昨年、KADOKAWAとドワンゴが経営統合したが、きっとそれが一つのきっかけで、この「角川インターネット講座」というシリーズの出版が始まった。これはその第1巻で、まさにインターネットの基礎を解説している。

村井さんの本は岩波新書の「インターネット」「インターネットII」などを読んでいるが、分かりやすい文章を書く人である、この本も内容の大体は知っていることとはいえ、割と面白く読める。とくに「インターネット前夜」「商用インターネットの始まり」「日本のインターネット政策」といった今や歴史となった過去を語るころは、その中心人物であった村井ならではのところがある。

たとえばJunetで東工大、慶大、東大をつないだ後、日本全国をつないだと言いたいばかりに北大と九大を加えた。しかし、電話料金が高くて呼び出せない。それを武蔵野通研の後藤滋樹と奥乃博が、通

研は課金なしに電話がかけられることを利用して、中継役を演じることで救ったという話は、インターネット屋にはよく知られていることなのだろうが、僕は知らなかった。その後、後藤さんや奥乃さんにはよく会っているのに、砂原はインターネット・プロトコルについて簡単に紹介している。TCP/IPの設計開発者の一人であるサーフが、慶応で名誉博士を授与された時の記念講演も収録されている。面白いのは、クラウドコンピューティングはドーピングしたタイムシェアリングシステムだということと、今から考えるとTCPとIPの役割分割で、IPアドレスをTCP層のエンドポイント識別子として利用したことは失敗で、そのため移動体をうまく扱えていない、というところ。

加藤典洋「アメリカの影」講談社文芸文庫

「敗戦後論」とたしか一緒に買ったんだと思うが、数か月間をおいて、これも読んでみた。

この「アメリカの影」は加藤のデビュー評論であり、それを含む同題の本書は加藤の処女出版作だという。関連のある3つの評論が含まれているが、それらを副題も入れて並べると、「アメリカの影ー高度成長下の文学」「崩壊と受苦ーあるいはフロンティアの消滅」

「戦後再見ー天皇・原爆・無条件降伏」である。3作とも戦後のアメリカによる占領政策、憲法、民主主義、天皇がテーマだが、3作すべてに江藤淳が引き合いに出される。

「アメリカの影」では、江藤が田中康夫の「なんとなく、クリスタル」をほめ、村上龍の「限りなく透明に近いブルー」をけなした、というところから話が始まる。江藤が村上を否定するのは、そこに「ヤンキー・ゴー・ホーム」という精神があるからだという。一方、田中はアメリカなしにはやっていけないという弱さを自覚している点で、江藤が評価しているのだとする。

さらに江藤が「成熟と喪失」という著書で批評している小島信夫の「抱擁家族」や庄野潤三の「夕べの雲」を題材として、日本の国家と自然を対米関係を軸として論じている。ここで江藤に発するものと思われるが加藤が繰り返すレトリックに、国家を父に擬し、自然を母に擬すというものがある。日本は敗戦と占領で自己同一性を見失い、父性原理を失墜した。それに代わるものとして母性原理の「自然」の中に日本人の個人が国家から独立する契機をもちうる(p.114)という。その自然は1960年代から70年代の高度成長期に破壊される。その後、江藤はまた「国家」に救いを求め、そのことを加藤は批判しているらしいが、正直なところこのレトリックと小島や庄野の文学作品を材料に展開される議論には、あまり付いていけない。

次の「崩壊と受苦」でも、「成熟と喪失」が引き続き取り上げられ、やや分かりやすい次のようなまとめがある。

「ところで、ここで特徴的なのは、この主題が、江藤にあっては、文字通り「母」の喪失と「個人」の成熟という軸の上に設定されながら、徐々に「個人」の成熟と「父」（＝国家）の不在という、もう一つの軸に重心をずらしていったことである。」

このように、この小論は「アメリカの影」の続き、あるいは自己による解説という性格のものである。とくに江藤が、戦後の占領期の6年間はGHQによる検閲などの政策で言論の自由がまったく奪われていた苦難のときであったことを、西村という占領期の外務省条約局長との対談で改めて思い知り、戦後文学はいかに徒花だったかを再認識した、というエピソードが話の一つの中心になっている。

「戦後再見」は1978年に江藤淳と本多秋五との間で交わされた「無条件降伏」を巡る論争を枕として、もっぱら無条件降伏をテーマとして論じる。3篇の中でこれが一番長いが、江藤に従って加藤も敗戦から占領期の歴史研究を米国の公開資料などを駆使して行った結果が書かれていて、前2作のような文学作品を用いていない分、論旨はわかりやすい。しかも、その議論は無条件降伏という政策がいかに特異なものであったかという点と、その政策決定に果たした原子爆弾という要因の大きさに絞られていて、明確である。

加藤が1948年生まれで僕と同年であることに、この本を読んで初めて気づいた。この本には本人によるかなり詳細な年譜が付けられている。それによると1948年の4月1日生まれだから早生まれの最後

で、同学年ということになる。それで同じ1966年に東大に入っている。文IIIから文学部の仏文に行ったという。全共闘には多少関与したらしい。

この年譜を見ていて驚いたのは、1990年の項に「8月、イラン、クウェートを侵攻」と誤記されていることで、単行本にもあったミスを引き継いでいるのか、文庫化で新たに挿入された誤りなのか分からないが、「アメリカの影」を語る書にしてはお粗末な校正漏れだと思う。

小野正嗣「九年前の祈り」(芥川賞)

小野は駒場出身ということである。教養学部比較日本文化論専攻から、総合文化研究科言語情報科学専攻に進んで単位取得退学という。パリ大学でPh.Dを取得している。2006年に教養学部の助手になったというが、面識はない。現在は立教大学の准教授。これまで二度芥川賞候補となり、三度目で受賞した。

大分県出身で、地元を舞台として方言を駆使した小説を書いてきたらしい。この小説でも、主人公のさなえがカナダ人と同棲してできた発達障害のある息子を連れて、故郷の大分に帰郷してからの話という設定である。同棲相手は彼女と息子を捨ててカナダに帰っている。実家には元学校の先生だった父と、口うるさいが元気のよい母がいる。息子の希敏はしばしば「引きちぎられたミミズ」の状態になる。この帰省した田舎での現在形のストーリーに、9年前の力

ナダ旅行の記憶がインターリーブされる。カナダにはこの町のオバサンたち6人が、若いカナダ人男性に引き連れられて旅行に行ったのだが、その中でもっとも若かったのがさなえである。そこでフレデリックという別のカナダ人と会い、それがきっかけで後に二人は東京で同棲することになった。カナダ旅行で一緒だった年配女性の一人、「みっちゃん姉」に息子がおり、その息子がやはり知能に遅れがあるということで、境遇が重ねられる。その息子が病気というので見舞いに行く、というのが話の本筋である。

大分の実家とカナダ旅行のインターリーブの中に、さらにさなえの想像・妄想のような情景や会話が折り重ねられる。その点では、たとえば去年読んだ芥川賞の小山田浩子「穴」と似たところもあるが、それほど非現実世界に行ってしまうわけではない。

結末の一節は「いまは悲しみはさなえのなかになかった。それはさなえの背後に立っていた。」で始まる。その前にカナダでみっちゃん姉が教会で長い祈りをあげたことが回想され、そのあと「どこか嬉しそうでも悲しそうでもあるほほえみ」を浮かべていたことが描写されている。だから、この結末は救いを暗示しているらしい。最初は変な終わり方だと思ったが、その部分を読み返して、どうもそういうことらしいと気づいた。

伊藤正男「脳の不思議」（岩波科学ライブラリー）

研究室の自分の本棚を眺めていて、何気なくこの本を手にとって開いてみた。そうしたら中表紙に「謹呈 玉井哲雄様 伊藤正男」と書かれている。理研を訪問したときにこれを頂いたことは覚えているが、署名までしていただいていたことは忘れていた。

「コンピュータソフトウェア」の編集委員長を1996年から2000年まで務めたが、そのときにいくつかの新機軸を出した。その一つが巻頭言の廃止で、それに代わり「XXXと計算機科学者の対話」という対話シリーズを始めた。XXXには他の分野の科学者・研究者、たとえば「脳科学者」が入る。土居さんがこの企画に賛同してくれて、吉川・土居対談や伊藤・土居対談が実現した。自分も中島洋や小林康夫と対談したし、溝口文雄さんには多田富雄との対談を立案・実行してもらった。その伊藤・土居対談のために、理研を訪問したのである。この本が1998年1月に出ているので、ちょうどそのタイミングだったのだろう。

脳科学の進歩は著しいはずで、1998年の本は読むならもっと早く読むべきだったが、今週たまたま手に取らなかったらいつまでも読まないでおいたろう。

全体で110数ページしかない本だから読むのに時間はかからなかったが、やはり伊藤先生の専門の小脳の神経回路網やシナプス可塑性を実現する伝達物質と受容体との化学的なメカニズムの話はややこ

しい。それ以前に、脳の海馬とか扁桃体とか乳頭体とかいった名称も、いまだにきちんとは頭に入っていない。

しかし、最初の3章は中部電力の広報誌に連載した原稿を元にしていうというだけあって、まとまっているし読みやすい。全体に、「まだよく分かっていない」という状況が正直に述べられていて、そのうちのどれほどがこの17年間で解明されてきたかは分からないが、脳研究も一筋縄ではいかないことが感じられる。

吉川浩満「理不尽な進化 – 遺伝子と運のあいだ」(朝日出版社)

変わった本である。

400ページ以上あるが、書き方がきわめて冗長である。思いつくことをすべてそのまま書くというスタイルで、そのためカッコ書きがやたらと多い。たとえばこんな感じ。

「ドーキンスの諸著作のような本格的かつ良質の啓蒙書は、読み進めるのに骨が折れるし（言われるほど簡単ではないと思う）、日常的な直観に反することたくさん書いてあるが（それが醍醐味である）、自然や生き物にたいする好奇心を存分に刺激してくれる（センス・オブ・ワンダーである）。」(p.19)

しかし、5章構成の各章のテーマは明確である。

序章「進化論の時代」

第1章「絶滅のシナリオ」

第2章「適者生存とは何か」

第3章「ダーウィニズムはなぜそう呼ばれるか」

終章「理不尽に対する態度」

第1章は、デイヴィッド・ラウブによる、現在地球上に生息する生物種は400万種は下らない、一方これまでに地球上に出現した生物種の数に50億から500億種という推計によって、種の絶滅率は99.9%を越えるという事実の紹介に尽きる。このラウブの議論は知らなかったが、なるほどと思わせる。なぜほとんどの種が絶滅するかという疑問について、ラウブは「ほとんどの種は運が悪いせいで死滅する」と答えているという。運が悪いというのは隕石の衝突というようなことばかりではない。それを絶滅の第一のシナリオとすると、第二のシナリオは「公正なゲーム」による生存競争の結果というものになる。しかし、重要なのは第三のシナリオで、それが「理不尽な絶滅」と名づけられている。ラウブによれば、このケースがもっとも重要だということになる。すなわち、生存が「運」によるか「遺伝子」によるかという対立説に関し、その中間を示すものである。というわけで、とにかく第1章はもっぱらラウブに依拠している。

第2章は世の中の多くの人には進化論、その中心概念の自然淘汰を誤解しているという。自然淘汰を適者生存と言い換えたハーバート・

スペンサー以来、誤解が蔓延し、また繰り返されてきたということだが、それはこれほどの長い章を書いて改めて強調してくれなくても、分かっているよと言いたくなる。科学の世界では決着済みであるが、世間の進化論の理解はそれと乖離しているというのがこの章の要点である。

第3章はグールドとドーキンスとの論争がテーマだが、逆にこの辺の知識はほとんどなかった。グールドの適応主義に対する批判は現代の生物学者が生物のあらゆる器官や行動を適応主義的なものとして理解することに向けられたという。自然淘汰による適応というプロセスが過大視され、適応の最適化を妨げる種々の制約が無視されている。このグールドの批判に対して、ドーキンスが、そしてデネットが痛烈に反論しているのだそうだ。そして現在の学問の世界では論争の勝敗の決着がついていて、ドーキンス側の勝ちというのである。この章も長いが、ドーキンスの反論がどういうもので、どうしてそちらが勝ちなのか、実はよくわからない。それに1章の、そして本書の最大テーマである「理不尽な絶滅」すなわち「理不尽な生存」という見方からすれば、表面上は適応主義に問題があるという結論が導かれそうである。

終章ではこの第3章の話をさらスケールを広げて繰り返している。グールドは適応主義でなく歴史が問題だとした。そこで歴史と科学という話になる。そして古くからの「説明と理解」という哲学的な問題、すなわち物理学のような「説明する」科学と、歴史やその他

の人文社会学のように「理解する」学問との対比の議論となる。そしてコントとかガダマーとか、ジョージ・プライスやウィトゲンシュタインなどいろいろ引かれて科学哲学の議論が展開される。この辺がこの著者の得意分野なのかもしれない。それも例の饒舌文体で語られるが、読んでいるときは結構面白くても、結局何だったのかあまりピンとこないというのが読後感である。結局、著者はグルードに対して愛憎相半ばする感情が強くあるらしく、

「ところで、進化論に携わる専門家やその知見に関心のある愛好家には、本章におけるグルードの大きな扱いに不満を覚える向きもあるかもしれない。」(p.396)

などと言っている。

長尾真 監修「角川インターネット講座(3) デジタル時代の知識創造 変容する著作権」(KADOKAWA)

同講座(1)の村井さんの本とは違って、これは10人の著者の小論を集めたという体裁のものである。テーマとしては、この間読んだ福井健策「誰が「知」を独占するのか – デジタルアーカイブ戦争」とほぼ同じ。その福井は著者に加わっていないが、長尾先生を始め中山信弘、名和小太郎、萩野正昭、吉見俊哉などの著名人が参加している。それぞれの書いた分量は多くないものの、面白い議論が多く、この手の寄せ集め編集の本としては通読に値する。

長尾先生の国会図書館長としての大胆な活動については、福井の本にも多く紹介されていた。ここでもそれらについての記述がある

が、何より感心したのは、現行著作権法が情報時代に合わないとして展開される議論である。出版物がマルチメディア化し多様なリソースを複合して作成される現代では、編集機能の重要性が増す。しかし、今の著作権法はこのような作品の創造を妨げる要素が多分にあるという。さらに図書館と出版社との利害対立に対して、その解消を図るモデルが提案されている（図0-1「デジタル時代の図書館と出版社・読者」(p.30)）。出版社は国会図書館の記憶装置に出版物の電子版を送り込み、その販売はこの国会図書館のクラウドシステムを通じて行う。図書館内での閲覧は無料だが、館外への貸し出しは安い金額の貸出料を取り、それを出版社に渡す、というものである。国会図書館が直接貸出料を取って出版社に還元するのは適切とは言えないので、その業務を行う「電子出版物流通センター」のような法人を作る。なかなか説得力のあるモデルだが、1936年生まれて80歳に近い長尾先生がこのようなアイディアを自ら発表されているその精神力には頭が下がる。

中山信弘の論考も、デジタル時代における現行著作権法の問題点を議論している。著作権法の権威である中山が、コモンズなどの反著作権法の動向にかなりのページを割いて紹介しているのには感心した。クラウド・ビジネスにおける問題や表現の自由との兼ね合いも論じられており、明快な問題提起になっている。同じように、名和小太郎の論も、現状の問題点を要領よくとりまとめている。

いつだったか正確な記憶がないが、1990年代に六本木の国際文化会館で開かれた電子書籍に関するセミナーに出たことがある。ボイジャー・ジャパンの主催だったはずで、多分萩野正昭が講師の一人だったと思うが、その後ボイジャーの名前をあまり聞かず、そのうちにKindleやヤフーや楽天Koboなどの電子書籍が出てきて、ボイジャーはそれらとどうつながるのだろう、と思っていた。この萩野の小論にはハイパーカード以降の歴史が概観されていて、ボイジャーから現在への流れを跡付けるものとなっている。同時に、先駆者の苦勞もしみじみ感じられる文章である。

Jeff Sutherland, "SCRUM — The Art of Doing Twice the Work in Half the Time," Crown Business, 2014

与謝野晶子訳の「源氏物語」と Thomas Piketty の "Capital in the Twenty-First Century"（英語版）を読み始め、さらにASEの17編の査読と著作権情報センターの12編の査読が重なって、この3か月ぐらい読了した本がない。その中で最近 Kindle 版を買ったこの本を、1週間ぐらいで読み終えた。

しかし、タイトルのいかがわしさとは裏腹に、驚くほどよい本だった。Scrum については、自分の授業でも軽快 (agile) プロセス方法論の一つとして触れることがあるくらいだが、実はおよそその本質を理解していなかったことが分かった。

本書は技術書ではない。Scrum は広く言えばソフトウェア開発技術と呼ぶこともできるが、チームによる開発プロセスをいかに進めるかという方法論であり、テクニカルな手法ではない。かといって、プロジェクト管理技術かというと、「管理」という語から連想される管理者によるトップダウンの管理体制とはおおよそ対極にある。

軽快プロセスとしては極端 (eXtreme) プログラミング (XP) とひとくくりにされるが、XPがハッカー型やオープンソース型の開発コミュニティを出自とするのに対し、Scrum は企業の大規模システムの開発経験から生まれ、ターゲットもそのような所有型 (proprietary) のシステムという点で、かなり性格が異なる。

タイトルから連想される誇大宣伝のハウツーものという本でもない。まず、著者の Sutherland という人が、ベトナム戦争で偵察機のパイロットとして生還率5割の任務を瞬時の的確な判断を続けて生き延びたという体験の持ち主だということからして驚きだ。初めの方に出てくるこのエピソードだけでも魅力的だし、ただ者ではないことがわかる。ついでに言えば、この話から僕よりもだいぶ年上らしいこともわかった。

ベトナム戦争の後はスタンフォード大学に戻って統計学でPhDを取り、大学にも勤めたというインテリでもある。本書でも幅広い知識が披露され、それが手軽なビジネス書とは異なる深みを与える。たとえば統計的な心理実験の面白い話もいろいろ出てくるし、シェー

クスピアの「リア王」や T. E. ロレンスの「知恵の七柱」も引用される。

Scrum は日本の生産プロセスや経営学から大きな影響を受けているという。とくにトヨタ・システムへの言及は多く、大野耐一がたびたび引用される。また、野中郁次郎も頻繁に登場する。さらに、Sutherland は合気道を習っており、その「守破離」の精神をかなり詳しく説明している。

最初に出てくる FBI のシステム例は衝撃的である。9.11の後、このテロ行為を予知できるようなさまざまなデータを FBI は持っていたのに、それを統合して判断するシステムがなかったことを反省して、システム開発が計画された。最初に1億7千万ドルかけたシステムは2005年に開発中止となった。その後、Sentinel と名前を変えて2009年に運用開始予定のシステム開発が再スタートしたが、受注業者の Lockheed Martin が2010年3月までに4億5百万ドルを費やしたにもかかわらず、その時点で半分しかできておらず、すでにプロジェクトは予定より1年遅れていた。第三者のコンサルタントが見積もったところ、後さらに6年かかり3億5千万の予算を上乗せする必要がある、とのことだった。それを Scrum でやることにし、予算は1/5以下、期間は1/10という計画が出されたとき、政府では誰もそれを信じなかった。ところが実際、その通りにできたというのである。

Scrum は、Gantt チャートを使うような落水型のプロセス管理をアンチ・テーゼとして作られていることが強調される。主眼はチームによる開発であるが、チームの生産性を上げることは、個人の生産性を上げることよりさらに可能性が高いという。チームが成功するカギは卓越性（並外れた目的意識を共有すること）、自律性、機能横断型のチーム構成にある。ただ、多くの Scrum の実践はたとえば研究のようなチームよりは個人型のプロジェクトにも適用ができそうである。

Scrum の適用対象はソフトウェア開発だけでなく、他の製造プロセスはもちろん、教育、貧困対策、政府の施策などに適用されて成功しているという最後の章の話だけでも驚くべきことである。

東山彰良「流（りゅう）」（講談社）

今度の直木賞を受賞した作品で、しかも選考委員会で「20年に一度の作品」という評価が出て、全会一致で選ばれたと言ひ、またそれが出版社にとっては恰好の宣伝文句になっている。そのうたい文句に乗せられて買い、すぐに読んだ。芥川賞はかなりまめに読んでいるが、直木賞を取った作品を出てすぐ読むのは、きわめて珍しい。

この夏は、ここに書いているようなこれまでの読書感想文をまとめて、「読書三十年」と題した電子出版物を制作することに精力を注いだ。はたから見れば徒勞な作業と見えようが、自分としては案外熱中してやった。その成果として少しは意味があるのは、検索が簡

単にできることである。早速、「直木賞」をキーワードとして検索してみたら、1990年の原奈「私が殺した少女」と1995年の藤原伊織「テロリストのパラソル」の2つだけであることが分かった。面白いことに、自分も20年に一度のペースになっている。また別に、1994年に読んだ高村薫「リヴィエラを撃て」の感想に、直木賞を取った作品と書いているが、これは勘違いだ。高村は「マークスの山」で1993年に直木賞を受賞しているが、僕はそれは読んでいない。

台湾を舞台とした小説であり、登場人物もほぼ台湾人である。台湾人と言っても、主人公の祖父は山東省の出身で、つまりこの一家は外省人である。話は、蒋介石が死んだ1975年に始まる。同じ年に、主人公の祖父、葉尊麟が殺される。この小説の骨組みは、この殺人事件、その犯人が誰かという謎を巡って形作られるが、だからといって単純な謎解きミステリーではない。

とにかくスケールが大きい。構成はかなり複雑だが、ごたごたはしていない。そして文章がよい。登場人物もそれぞれよく肉付けされていて、これまで原や藤原、あるいは高村の作品に感じたような物足りなさを感じなかった。

なぜ台湾なのかだが、本の奥付けの次のページの筆者紹介には、台湾生まれで5歳まで台湾で暮らし、9歳から日本で育つとある。この5歳と9歳の間がよくわからないが、名前からしても日本人だと思っ

た。しかし、Wikipedia を引くと、

「1968年、中国人の両親のもと台湾で生まれ、5歳まで台北市で過ごした後、日本へ移住。9歳のとき台北の南門小学校に入学したが、日本に戻り福岡で育つ。日本に帰化せず、中華民国台湾の国籍を保持している。祖父は中国山東省出身の抗日戦士。父親の王孝廉は1949年に台湾に移り教師となり、1973年に日本に移り住んだ。」とある。してみると、葉尊麟は実際に東山の祖父がモデルになっているらしい。小説にあるように抗日戦争や国共内戦の際にたくさんの人を殺したり、戦後の台湾で自分が殺されたりしたかどうかはともかく。

最初にプロローグという章があり、それが終盤のクライマックスの数ページをそっくり写したものであるという技は、これまで他の小説で見たことがない。ポップス・流行歌にはよくある手法にもかかわらず、そして確かに効果を上げている。

又吉直樹「火花」(芥川賞)

漫才の芸人が書いた小説が芥川賞になったということで大評判になっている。いや、芥川賞を取る前から候補になっただけで大騒ぎだったが、実際に受賞したのは文芸春秋としても営業上ホクホクだろう。僕は文芸春秋誌で読んだが、単行本も文芸春秋社から出ているらしい。

熱海の花火大会で語り手の漫才師が舞台に出るが、ほとんど誰も聞いていないという場面から始まる。その帰りに同じ舞台に出ていた年上の漫才師、神谷と知り合いとなり、彼を師匠と呼んで付き合うようになる。小説はこの神谷との交流をもっぱら描いていくが、神谷は笑いを求道的に追及する孤高の人物で、興業的には売れない。語り手の徳永も売れていないが、少しずつ売れるようになる。小説の途中で突然10年の歳月が経過するが、その間、徳永の方はテレビに出るなど多少は成功し始めるが、神谷は多大な借金をかかえる破滅的な生活状況となっている。しかし、徳永も相方の事情で漫才を辞めることになり、最後は久しぶりに神谷と会って、二人で熱海の旅館に行ったところで終わる。

漫才の又吉が言葉の表現に独特の感性を示し、またお笑いを生業にするにとしては極めて内省的な思考をする人間であることが面白く、それがこの小説が評判になる所以だろう。しかし、そのような作者に関する情報なしに作品としてのみ見たら、さほどの評価は与えにくいのではないかなと思う。僕は、又吉の漫才だかコントだかを見たことがないので、逆にこの小説を読む読者層の中では特殊な方なのかもしれない。しかし、10代や20代の人間がまったくの予備知識なしに単に小説としてこれを与えられて読んだとして、それほど面白がるだろうか。

柳田国男「酒の飲みようの変遷」（Kindle版 柳田国男大全集）

UPの7月号に斎藤希史が「斗酒なお辞せず」という文章を書いている。これは「漢文ノート」という連載の一篇である。「斗酒なお辞せず」は古くからの文句のように見えるが、日本国語大辞典で引いてももっとも古い用例が尾崎紅葉の「二人女房」で、それ以前のものには載っていない。「斗酒」の中国における古い用例には、たとえば「文選」に収められている詩があるが、そこでの意味は大酒とは言えず、むしろ僅かな酒というのに近い。唐代に入ってようやく大量の酒に相当する用例が出てくるが、「斗酒なお辞せず」にぴったりの例は見つかっていない、というものである。

このエッセイの冒頭に柳田の上記の文章が引かれている。こういうときに、Kindle版の全集を入手してあるのはまことに便利である（ほとんどただ）。

まず、半世紀前と比べて、一人一人が酒を飲む量はよほど減っていて、斗酒なお辞せずという類の酒豪の逸話は昔話になろうとしている、と言う。しかし、その後を読むと、大酒飲みがいなくなったというよりは、正体不明になるほどの酔っ払いが減ったということらしい。その理由として、酒の質が格段によくなっているが、昔の方が酒の毒が急激だったのではないかという。また、昔は酒を飲むのは正月や祭りなどの神に酒を備える日に限定されて、日常的には飲まなかった、飲めなかった、という理由も挙げられる。酒の生産、貯蔵方法が進歩して、日常的に酒が入手しやすくなる。酒甕で造っていたのが四斗樽の発明で普及が促進される。また、昔は酒は必ず

集まって飲むもので、独酌というのは考えられなかった、という話になる。大きな酒盃で回し飲むが基本で、そのためにさまざまな作法が生まれた。めいめい盃が使われるようになって、酒の飲み方がだらしないものになったと言う。一人で飲むのは奉公人や使いの者に主人が酒を与え、それを台所の端に腰を掛けて飲むとか、酒を売る店で酒を買ってその場で立って飲むような場合に限られたと、見下している。

やはり柳田の書くことは、面白いが勝手な断定という感じも強く、また言うことの間に矛盾も多い。この文章が書かれたのは斎藤も指摘しているように1939年で、支那事変が始まり戦争が泥沼化しているときである。そこで最後に「今度の大事変が起こってから、不思議に日本人の研究心と、発明力とは大飛躍をした」という話となり、「我々は酒を飲む習慣の利弊に関しても、是非とも今と昔との事情の変化を知って、現在の状態が果たして国の福祉と合致するかどうかを、明らかに認識し得るようにしなければならぬ。」と言う。これが執筆動機らしい。

小熊英二「生きて帰ってきた男―ある日本兵の戦争と戦後」 （岩波新書）

父の物語を書く、というタイプの小説は多い。小熊のこの本は小説ではないが、父の物語である。歴史学のオーラルヒストリーの手法を用いて、英二の父、謙二の一生を詳しく聞き出し、昭和の歴史と

して再現する。親や祖父母を題材とした昭和の話という意味では、東山の「流」とも相通ずるところがある。

読む前に想像していたのと大きく異なったのが、二点ある。

一つは、何とんでも、小熊のような超インテリが育った家庭は中流以上で、親もそれなりのインテリ、と想像するのが自然であるが、それが全然違うということである。英二は東京大学総合文化研究科で博士を取り、それから慶応の助手、助教授、教授と順調に昇進している。もっともWikipediaによると、立川高校を出た後、名古屋大学理学部物理学科を中退し、1987年東京大学農学部卒業、岩波書店入社、そこを休職して総合文化研究科に来たらしいので、紆余曲折はある。

ところが、父謙二は中学（早稲田実業）卒で富士通に入社後、直ちに兵隊に取られている。しかも、父の兄弟で中学に行ったのは謙二だけで、他は皆小学校まで。父も母方の祖父も小学校を出たら働くのが当然という家庭に育ち、そういう暮らしをしてきている。謙二が中学に行ったのも、とくに勉強ができたからとか向学心があったからではなく、たまたま二番目の兄、政一（母方の片山家を継ぐので政一と名づけられている。父方の小熊家を継ぐ予定の長男は輝一）が、謙二の進学を勧めたからだという。政一自身は陸軍の測量部の技手として働きながら夜間中学に通っていて、これからは昼の

学校を出ていないとだめだと、当時東京で一緒に住んでいた片山家の祖父伊七に進言したそうだ。

もう一つ想像と異なったのは、戦争とシベリア抑留が物語の中心で、シベリアから帰還したところで話は終わるのかと思っていたのが、その後の長い戦後社会での謙二の生き方を、社会の変動とともに詳しく述べている点である。全体から見ると、むしろ極貧の底辺生活から徐々に抜け出していくこの高度成長期の話が中心とも言えるぐらいの量になっている。謙二はシベリアからの帰国後、さらに結核で5年間を療養所で過ごすという過酷な運命にあっており、それらの試練を乗り越えた上での後半生である。それは高度成長の波にある程度うまく乗ったということだが、それほど単純な成功物語というわけではなく、地道な努力、冷静な観察と判断力で、何とか中流レベルの生活にたどり着いたというものである。しかし、底辺の生活から抜け出たからこそ、息子の英二が大学まで行けたのだろう。この本では英二自身のことはまったく出てこないが。

これまで読んだ小熊の本とは大きく毛色が変わっているが、大変面白く読んだ。本書は小林秀雄賞を取っているが、それだけのことはある。NHKにファミリー・ヒストリーという番組があってときどき見る。著名人の家の歴史を調べ上げて、本人が知らない事実を紹介して感激させるとともに、視聴者にも改めて近代の歴史を身近に感じさせるというもののだが、結構面白い。趣向としてはそれと相通じるが、小熊らしく徹底して調べて記述している。ベースは謙二の記

憶で、多くの文献で補強しているはずだがあまりそれを感じさせず、参考文献リストすら挙げられていないのも、特徴である。

羽田圭介「スクラップ・アンド・ビルド」（芥川賞）

又吉ばかりが話題になったが、羽田のこの作品も同時受賞である。

老人介護という現代的な話である。語り手の健斗は母とその父の祖父と三人で暮らし、祖父の介護役をしている。介護のかたわら行政書士資格試験の勉強をし、またときどきアルバイトの仕事をするという典型的なフリーターである。

祖父に対して健斗も母親も、口は悪いし意地も悪い。しかし、祖父も「早よう迎えにきてほしか」が口ぐせだが、なかなかしたたかなところがあり、生に執着があるような行動も取る。その辺のやりとりや振舞いの描写が笑わせる。笑わせるという点では、お笑いをテーマとする「火花」以上のところがある。三人三様で自分勝手にやっているようで、家族としてのある種の繋がりは保たれている。

他に出てくる登場人物は、ガールフレンドの亜美ぐらいだが、ガールフレンドというよりセックスフレンドという感じで、健斗はとくに深い愛情を感じている様子もないし、相手に示してもいない。しかし彼女に振られると、動揺する。

身体トレーニングに意識的な健斗と、身体の自由の利かなくなっているじいさんとの対比が面白いし、健斗はまたそのように不自由

な身体になったらどうなるかという想像力を働かせ、あるいはそれを実験してみる、というところも工夫である。使わない筋肉、神経、機能は衰えるということを前提に、食器を下げるなどの作業を本人になるべくやらせることに厳しい母親と、それらの能力を委縮させ、当人が希望する死に自然に至らせようとする健斗との対比もまた面白い。

又吉と違って、羽田は芥川賞候補4回目で、12年の作家経験を積んでいるという点も対照的だが、現代的なテーマでおかしみが散りばめられている、という共通点もある。

有島武郎「生まれいずる悩み」（Kindle版 有島武郎全集）

例によって翻訳の出た小説の英語 Kindle 版を買った時に、Amazon のお奨めに有島武郎全集があったので同時に購入した。43作品が入って200円である。

有島武郎はほとんど読んだことがない。わずかに中学の国語の教科書で子供向きの作品を読んだ記憶があるが、この全集でそれが「溺れかけた兄妹」であることが分かった。

「生まれいずる悩み」をまず読んでみたのは、有島作品の中ではよく知られたものであり、「或る女」ほど長くはないだろうと思ったからである。ほとんど読んでいない作家を Kindle 版の全集によって初めて読むというのは、徳田秋声の場合と同じである。しかし、秋

声は典型的な私小説作家であるのに対し、この小説は芸術至上主義をテーマとするきわめて観念的な作品である。

語り手の「私」は作家だが、その作家の生活周辺を描いたりはない。主人公は「私」が札幌にいたときに訪ねてきた当時16-7歳の少年で、「木本」という名前はあるが、小説の中では終始「君」と呼ばれている。「君」はたくさんの水彩や油彩画を持って訪ねてきて、それを見てほしいという。「私」はそれらの絵に強い印象を受ける。「君」は東京の学校に通っているが、勉学の意欲をなくす一方で画家になりたい気持ちはある。しかし、画家としての自分の才能に自信がないまま、故郷の岩内に帰ろうとしている。「私」は画家になることを励ましもせず、また諦めるような助言もせず、その場は別れる。その後、手紙のやりとりが数回あったまま、交流は途絶える。

10年後に「君」から小包が来て、中に自家製の汚い3冊のスケッチブックが入っている。それらに鉛筆画が描かれていて、私は大変感心する。「私」は今は東京にいるのだが、札幌に行くついでがあつて、「君」に会えないかと手紙を出す。その札幌の宿に、吹雪の中を「君」が訪ねてくる。しかし、故郷の岩内で漁師となっている「君」は筋骨たくましい青年となっていて、「私」は最初、認識できない。「君」は漁師としての厳しい仕事と暮らしの中で、絵に対する気持ちを失ってはならず、それでごく少ない時間を利用してスケッチをしてきたということである。

この邂逅後もすぐに別れるが、以降は手紙などのやりとりに基づいて、「私」が「君」の漁師としての暮らしや絵を捨てきれない気持ちの煩悶を、想像するという形でストーリーが進む。その中で展開される父と兄との漁で遭遇した大時化と、そこからの命からがらの生還の描写は、かなり迫力がある。

テーマは芸術至上主義と書いたが、むしろ生活と芸術とのいずれを取るべきか、という「君」の悩みが主題と言うべきかもしれない。漁師としての生活も、仕事がきつく、自然が厳しいだけでなく、漁の水揚げを「会社」に搾取されるという問題もあり、そのあたりは社会主義的な色彩もある。悩んだ末に「君」は断崖から身を投げて死ぬことを考えるが、寸前で思いとどまる。

話としてよく分からないのは、なぜそもそも「君」が「私」を訪ねてきたのか、という点である。画家でもなく美術評論家というわけでもないらしい「私」のことを、どうして知ってわざわざ訪ねたのか、さらに10年後再びコンタクトを取ったのか、全く説明されない。

秋声と比べれば、まだこちらの方が面白く読めると思った。長さは昨今の芥川賞作品ぐらいで、これが現在、候補になったら受賞するだろうかというような想像もしてみた。案外、いい線にいくかもしれない。

秋声の「懲」は1911年の作品。「生まれいずる悩み」は1918年(大正7年)でまあ同時代と言える。秋声はその後も長い作家生活を続けたが、有島は1923年に波多野秋子と心中して死んでしまった。

中央公論社「日本の文学」では、有島武郎は長与善郎と二人で1冊が割り当てられている。有島は「或る女」だけが収録されているが、それだけで350ページになる。その解説を本多秋五が書いている。小説には客観小説と私小説があり、「或る女」はもちろん客観小説だが、それをあえて有馬の私小説として読んでみよう、という立場で書かれた解説である。僕がこの作品を秋声と比較したのは偶然だが、結果的に面白いことになった。

本多秋五は逗子に住んでいて、2001年に92歳で死んでいるが、その息子がやはり逗子にいて、孝子は自然観察の講習会のような企画に参加したときに会ったことがあるという。その会のリーダー役だったらしい。

P. F. ドラッカー、上田惇生＋佐々木実智男＋林正＋田代正美 訳「すでに起こった未来」(ダイヤモンド社)

NHKの日曜美術館をよく見るが、今年の6月7日に「ピーター・ドラッカー 日本美術へのラブレター」という番組を放送した。これを見るまで、ドラッカーが日本美術のコレクターでよき理解者であったことを知らなかった。

番組で著書の翻訳の一部が朗読されたので、読んでみたいものだったと思った。それが The Ecological Vision という本であることは分かったが、Amazon でも売っていないし、図書館にもない。しかし、翻訳版が市ヶ谷の図書館にあることがわかり、法政に来て初めて他のキャンパスから図書を送ってもらうというサービスを利用してみた。図書が届いたら連絡があるものだと思っていたが、そういうサービスはなく、自分で届いていることを確認して図書館に赴かなくてはならない。それを知らずに、一度市ヶ谷から来た本が戻されたということを、ずいぶん経ってから小金井図書館に電話して知った。それでもう一度注文して、ようやく手に入れた。

原著は1993年に出た論文集だが、それ以前に書かれた31編を収録したものだという。この翻訳は、そこからドラッカー自身の了解のもとに16編を選んで訳出していて、1994年に出版されている。

お目当てのものは第11章「日本画に見る日本」である。量的には30ページ足らずで、ややものたりない。

まず、日本の芸術のもっとも大きな特徴は個人主義だという。その前に、日本は全体の意味に個人の意思を合わせる国であることを、日本の企業社会に対して述べていて、それと対照させている。ヨーロッパではヘレニズム、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロックと時代に特有の様式があったのに、日本はどの時代でも多様だったという。たとえば18世紀の日本の画家はほとんど南画、琳

派，四条などの流派に属しながら，きわめて個人主義的だったとされる．このように流派に属しながら自発性・個性を重視するような二極性が，日本文化を特徴づけるという．同じ画家が派手に金銀などを使った装飾的な絵を描く一方で，簡素で抽象化された絵を描く．それは京都に二条城と桂離宮がある二極性に通じる．

日本の絵画における美意識は位相的で，西洋が幾何的，中国が代数的なのとは異なる．西洋画が遠近法に代表されるように幾何的だというのは分かるとしても，中国画が代数的というのはあまりピンとこないが，比例が支配するという程度の意味らしい．

終わりの方で，白隠が達磨を描くのになだけの時間を要したかと聞かれて，「10分と80年」と答えたという逸話を取り上げ，かなりの議論を展開している．レンブラントやモネやカザルスが同じ質問に同じように答えることは考えられるが，白隠の80年は技術をその域にまで極めるのに要した時間ではなく，精神的な修業がそれだけ必要だったという意味で違うという．日本における継続学習は，できないことをできるようにする学習ではなく，すでにできることをさらにできるようにするものだという．

また日本の絵画の革新性を言うのに，たとえば蘆雪の道成寺の鐘の絵は抽象度がきわめて高いが，西洋に抽象画が現れる150年前だという．谷文晁の月下の梅花の絵は，半世紀後にターナーやモネが行おうとしたことを先取りしている．白隠の達磨はクリムト，シー

レ、ピカソ、マチスなどの表現派に属すと言え、しかも表現派の絵のごく一部でしか成功していない力がある。

ドラッカーは本職のマネジメントでも日本の産業、企業について多く論じているらしいが、日本美術についてもこのように豊富な知識と慧眼を持っている。ところどころの断定的な言い方は、文筆家としてのドラッカーの人気の理由の一端を感じさせる。

この一編だけ読んで十分かと思ったが、ついでなので次に10章の「情報とコミュニケーション」を読んだ。ここでコミュニケーションとは、人と人が意味を共有するということとして扱われている。だから結論として示されている4つ論点の最後は「コミュニケーションと情報とはまったく別のものである。しかし、情報が成立するためには、コミュニケーションが必要である」となっている。

それから訳者あとがきを読んだら、終章の「ある社会生態学者の回想」をまず読めと書いてあるので、それも読んでみた。ドラッカーは自分は経済学者でも、歴史家でも、政治学者でも、社会学者でもなく、社会生態学者だという。そしてユダヤ系オーストリア人として生まれ育った後、米国に来た半生を振り返って、どのように自分の思想を形成してきたかを跡づけている。これまでドラッカーを読んだことのない自分には、役に立った。

もう一編、8章「科学と技術」も読んだ。これも科学と技術の違いをその歴史から鋭く性格づけて、なかなか感心させる。

太田和夫，黒澤馨，渡辺治「情報セキュリティの科学 マジック・プロトコルへの招待」（講談社ブルーバックス）

この本に関して特筆すべきは，内容よりもこれをどうして入手したかの経緯である．

竹内郁雄さんがサイボウズのホームページに月に一度，「ハッカーの遺言状」というエッセイを連載していて評判が高い．最新の10月分が第24回となっているから，丸2年連載が続いていることになるが，まだまだ続きそうな気配である．この間，数か月分をまとめて読んだら，「小学生に情報科学を教える」という回で，この本が参照されていた．この本の存在すら知らなかったが，見てみたいものだった．

しかし，なにせ1995年に出たブルーバックスなので，簡単には手に入らないかと思いつつアマゾンで検索してみると，中古の本がたくさん出品されている．値段は1円で．配送料および手数料が257円，合わせて258円で送ってくれるという．中古本の状態についても出品者が記述していて，それでよさそうなものを選んで注文したら直ちに届いた．思いのほかきれいな状態なので，ゾッキ本かと思ったが，3分の2あたりのところ2か所に下線が引かれているので，個人が買って読んだ本らしいことが分かる．アマゾンのせいで街の本屋の経営が苦しくなるのは問題だが，便利なサービスが多いことは確かである．

竹内さんが引用しているのは「電話越しのコインの表裏当て」だが、確かに巧みな話の導入である。結局扱われるのは一方向関数でありRSAであるのだが、易しく説明しながらいい加減にならないように工夫された書き方になっている。ゼロ知識証明についても解説されている。

Thomas Piketty, "Capital in the Twenty-First Century," translated by Arthur Goldhammer, The Belknap Press of Harvard University

1年前（2014年12月8日）に日本語版が出て大評判になった。定価5,940円だが、Kindleの英語版では2,611円だったので、年末にそれを買った。その後、やはりKindleで与謝野晶子訳の源氏物語を買い、この両者を並行して、しかし時折思い出したように読んできたが、ようやくPikettyの方を読み終わった。源氏物語はまだ半分にもいかない。

評判になるだけあって、とても面白い力作である。長いが、その分説明が丁寧である。もっとも重要なポイントは $r > g$ という式である。 r は資本に対する利率であり、 g は成長率である。20世紀の第1次世界大戦から第2次世界大戦後までの期間は、資本が減り、また r が下がり、一方 g が増え、その結果は富の不平等が縮小された。しかし、18世紀から20世紀までの経済データを可能な限り集めて克明に分析すると、この期間(1913-1948)は例外的であり、それ以外では r は5%前後、 g は1-2%で、これは財産を持つものがますます富

を増やし、持たざる者は一生労働によるか細い収入で暮らすという不平等が固定する、あるいはより進行する世界だという。とくに第1次世界大戦前のベルエポック時代は極端な富の集中が起っていた。それが両大戦の結果大きく変動したが、1948年以降、また r と g の差が開き始め、21世紀はベルエポック時代に戻っていく可能性があるという警告する。対象はヨーロッパ、米国、日本などの先進国の経済だが、現在成長率の高い中国、インドなどの動きについても考慮しながら、世界全体として経済状況を論じている。

とくに第4部では、21世紀における福祉国家の状況、国の巨大な負債、地球温暖化対策、といった具体的な問題が取り上げられて説得力のある議論がなされる。EUの問題は、キプロスの財政破たんを取り上げて論じられるが、その後のギリシャ問題を予見している。そして処方として繰り返し主張されるのが、国を越えたレベルでの資本に対する累進課税である。EUはそれができない枠組みのまま通貨だけを統合したのが問題だとするのは、なるほどと思わせる。地球環境問題や難民問題という現在の難問も、この世界経済状況の把握とそれへの処方という構図の中で検討すべきことであることに納得させられる。

Piketty の議論は、難しい問題をきわめて平易に、しかし論理的に展開するため、著者の言うことは正しいだろうという信頼感をわれわれ読者に与え、その主張に共感を呼ぶという力がある。

佐々木健一「タイトルの魔力 作品・人名・商品のなまえ学」（中公新書）

駒場でカリキュラム改訂を2006年に行い、「情報」という教科書を東京大学出版会から出した。この教科書を作るにあたり、川合先生を中心として皆で議論したが、僕は最終的に出来上がった本とは少し別の観点から、もっと一般向けの情報学の本を作りたいという構想を思い浮かべた。その構想に基づいて試しに書いてみた一部を、SeaMailに載せたこともある（"教養としての情報学序章", SEAMAIL, Vol.13, No.11(2003), pp.2-15）。結局、その後はほっぽりぱなしで進んでいないが、最近またそれを復活させてもいいかもしれないという気になっている。

一部書いた中に、情報の表現法の一つとして名前の付け方を議論しているところがある。それを読み返して、昔買ったこの本のことを思い出した。この本は2001年に出ているので、買った動機がこの情報学本の構想にあるかどうか時期的に微妙だが、とにかくその時はまったく読まなかった。今度読んでみて、まったく期待を裏切られたのだが、少しでも読んでいれば、どんな本かわかっていたはずだ。

電通とか博報堂あたりの人が書いた本ではないか思っていたのだが、この佐々木という著者は東大の美学の教授で、そこからして大きく予想から外れた。「作品・人名・商品のなまえ学」という副題が曲者で、これにつられてネーミングの話かと思ったのだが、扱わ

れるのはほとんど美術，とくに絵のタイトルの話で，人名や商品の名称の話はごく一部につけたり程度に触れられているに過ぎない。おそらくこの副題は，中公新書の編集者が付けたものだろう。それもまた商品としての本を売るためのタイトル戦略に違いないので，その点からすると面白い構造になっているともいえるが，僕のようにタイトルに騙されて本を買ひ，途中で想像とは違うと思いながらも，新書としてはかなりのページ数のある本(299ページ)を曲がりなりにも最後まで読んでしまった身としては，複雑な心境である。

面白いことにタイトルについて「哲学的に」いろいろ論じながら，タイトルの副題というもののありかたについてはどこにも触れられていない。絵のタイトルには副題がないのか。しかし，この本に編集者によってか自分でか副題が付けられていることは，どこかで意識されたはずである。そもそも「タイトルの魔力」というタイトルをどの時期に決めたのか知らないが，本書のかなり初めの方で，「タイトルの魔力」というタイトルに引っ張られて議論を進めるという自己言及的なところがある。しかし，そこでも副題のことは無視されている。

導入は美術館での観客の作品の見方で，タイトルをしっかり読んでから絵を見る人と，タイトルを無視して絵のみを集中して見る人とが対比される。僕はどちらかといえば後者で，まず絵を見てから，ちらっとタイトルに目をやる。著者はこれを教養派と審美派と呼んでいるが，どちらの態度も近代美学の流れを汲んだものだという。

そして美術館で作品のタイトルがプレートによって表示されるようになったのは近代における風習であるばかりか、そもそも作者によってタイトルが付けられるというのはせいぜい18世紀ぐらいから意識的に始められたことだと主張する。そして、結論としてタイトルとは知覚を誘導する「理論」だという。例として挙げられるのがデュシャンの「泉」である。そしてタイトルとしての「無題」もその精神の表れだとする。

これだけのことを言うのに、ずいぶん長々と書いたものだというのが率直な感想である。自分の情報学としての名前論では、人名、リンネの二名法、プログラム変数名、日本競馬会の競走馬命名規則、などを扱っているが、そういう話にはほとんど参考になるところがない。

橋本治「性のタブーのない日本」（集英社新書）

タイトルに惹かれて買って読んだのだが、「タイトルの魅力」に引き続いてタイトルに騙された感じがする。このタイトルとなっている言明は本文中にも確かに何度か出てくるが、しかし何を根拠にそう言えるのか、ほとんど議論の展開がない。わずかにタブーがない代わりにモラルがあったという主張がなされるが、タブーとモラルがどう違うのかという説明も、さっぱりない。

では代わりに何が書いてあるのかといえ、日本の古典文学や日記に現れた性的記述を、古事記のイザナギ・イザナミやアメノウズメ

から始めて集めたというものである。万葉集，源氏物語，清少納言，和泉式部のエピソードや，連歌，葉隠，近松などが取り上げられる。それはそれで面白いところがあり，また与謝野晶子訳の源氏物語をいまだにゆっくりゆっくりと読んでいる身としては，当時の男女関係のあり方について教えられることも多く，参考になる。しかし，本としては雑然としてまとまりがないという印象は免れない。

橋本治は「桃尻娘」でデビューし，『桃尻語訳 枕草子』，『窯変源氏物語』，『桃尻語訳 百人一首』，さらに「古事記」の少年少女向け現代語訳，竹田出雲・近松などの歌舞伎の翻訳などを出している。そこで材料を仕入れてくるのはお手の物らしい。それも編集者にそそのかされて書いたらしく，最後に

「こういう本を書いて来て—というか，正確には「書かされて」ですが」

という白状をしている。

もし，比較文化論的な意味で，日本には性のタブーがなかったというような主張が説得的に展開できるのなら，そういう本を読みたかった。

高階秀爾「日本人にとって美しさとは何か」(筑摩書房)

講演の記録や雑誌に掲載された小文を集めたものである。

1997年に高階の「日本美術を見る眼 東と西の出会い」を読んでいる。そのときの感想を読むと、今回とあまり変わらない。こちらの感じ方が変わらないというより、高階が書いていることが変わっていないということか。ただ、最近、TVでは外国人が日本をほめる番組がはやっているらしく、一般に日本人が自国をほめることもおおっぴらに行われているようだが、ちょっとその風潮と通じるところを感じる、1991年に出た「日本美術を見る眼」では、よく覚えていないがこれほど日本の美術や文化をもち上げていなかったのではないだろうか。

諸外国と比べた日本の特徴として挙げているものはいろいろだが、たとえば

- 誰でも歌を詠む
- 8世紀の言葉で書かれた歌が今でもそのまま通じる
- 絵と文字とが越境してデザインを作る
- 建築や刀剣における「反り」の造形性
- ひらがなの造形性と散らし書き
- 自然に寄りそう美意識

などなど。

日本の特殊性をあげつらって卑下するより、他にない優れた美意識、工芸力、繊細さに対して自信を持つのはいいことだろうし、元氣も出る。渡辺京二の「逝きし世の面影」にも通じる。

後半の短文群には繰り返し、あるいは前の方に載せられている中規模の講演録の抜粋、のようなものも多い。あとがきでこれらの文章を「論文」と呼んでいるのは、理系と文系の違いを感じさせる。

谷崎潤一郎「鍵」（日本の文学「谷崎潤一郎（三）」（中央公論社））

NHKのBSでやる映画放送をわりとよく録画して見るが、市川崑の「鍵」もそうして最近見た映画の一つである。その原作をこれまで読んだことがなかった。市川崑は「細雪」も撮っていて、これは以前、TVで見たことがあったが、やはり最近NHKで再放送されたのをまた楽しんで見た。

「細雪」はやはり中公版「日本の文学」で読んでいるが、読んだのは1965年で高校のときらしい。この全集では谷崎に3巻が当てられていて、「春琴抄」などが入った（一）と「細雪」の（二）はそこそこ読んだが、（三）はあまり読んでいなかった。「陰翳礼賛」も（三）に入っているが、1988年にわざわざ文庫版を買って読んでいる。しかし、（一）に入っている「猫と庄造と二人のおんな」も、気づかずに去年文庫本のKindle版買って読んでいるので、（一）も全部読んでいたわけではないようだ。

夫の日記と妻の日記を交互に並べるという構成で、その工夫はうまく運ばれている。その他に出てくる登場人物は、娘の敏子、その相手だが実際は妻と関係を持つ木村の二人でほぼつくる。1959年に公

開された映画では、夫を中村鴈治郎、妻を京マチ子、木村を仲代達矢、敏子を叶順子が演じていて、いずれもぴったりの感じである。しかし、映画の結末は夫が死んだ後、ばあやが残った3人を毒殺するというとんでもないもので、小説にはそんな話はない。なお、原作ではほとんど登場しないばあやは、映画では北林谷栄が演じていて、かなり重要な役どころとなっている。

確かに、小説の最後は

「木村の計画では、今後適当な時期を見て彼が敏子と結婚した形式を取って、私と三人でこの家に住む、敏子は世間体を繕うために、甘んじて母のために犠牲になる、ということになっているのであるが．．．」

とあいまいといえばあいまいで、長谷部慶治、和田夏十、市川崑の3人による脚本は、そこに明確な決着をつけたということなのかもしれないが。

この「日本の文学」版では、棟方志功の版画がちゃんと載せられていてとてもよい。続いて収められている「瘋癲老人日記」にも棟方の挿絵が付いているが、これは親父が買っていた中央公論で見た記憶がある。「鍵」も中央公論に連載されたとのことで、ドナルド・キーンの説明によれば

「昭和三十一年一月、「中央公論」に第一回が発表されたときから、センセーションを巻き起こした。雑誌は読者が「中央公論」を買うためでなく、鍵」を買うために、店頭からいちはやく姿を消し

てしまった。」
という。

この「日本の文学」の「谷崎潤一郎（三）」が出たのは昭和42年、谷崎が死んでまだ2年である。の「谷崎潤一郎（一）」が出たのは昭和39年で、そのときはまだ谷崎の存命中である。谷崎は1965年に亡くなっているので、今年は死後50年、つまり著作権が切れる年である。著作権法上では、来年2016年1月1日で著作権が切れる。江戸川乱歩も同じ年に死んでいるので、同様である。大筋合意したTPPでは、著作権を米国などに合わせて死後70年にすることになったので、ぎりぎりではあるが、著作権法をそれに合わせて改正するのは早くても来年の夏ごろだろうから、谷崎や乱歩の著作も、来年早々に青空文庫で見られることになるかもしれない。

2014年

湯浅学「ボブ・ディラン ロックの精霊」（岩波新書）

ボブ・ディランが3月末から4月に来日し、14回の公演を行う。ディランは1941年5月生まれだから、今年73歳になる。同じくメンバーが70歳を越えているローリングストーンズも、2月末から来日し、3回の公演を行う。どちらも、その枯渇しない表現への意欲、持続性には驚嘆する。去年はポール・マッカートニーが久しぶりに来日し評判になったが、ポールの声は明らかになくなっている。それと比べると、ボブ・ディランもミック・ジャガーも、歌唱に衰えを感じさせない。

この本は、別にディランの来日に合わせて出版されたわけではないかもしれないが、昨年11月に出ている。

まず、驚くのはディランの多産な創造力である。これまでにスタジオ録音のアルバムだけで35枚を出している。ほかに、ライブ、コンピレーション、ブートレグシリーズなども膨大な量に上る。さらに、詩集、小説、絵画なども多作であり、自伝は著名である。ノーベル文学賞の候補に毎年挙げられるという。

湯浅のこの本は、妙な思い入れもなく端正で恐らく正確な伝記であろう。それでもディランの魅力をよく伝える。これまでもビル・エバンスやマイルス・デーヴィスの伝記を読んでは、そのCDを集めた

ものだが、またそのパターンに入りかけている。今はしかし、CDを買うのではなくツタヤの定期宅配レンタルを利用する。この1月から、小学館が発売を開始したクラシック・プレミアム全50巻も予約し、それが隔週に届くので、リッピング(ripping)が忙しい。

岸田孝一「ソフトウェア・グラフィティ」（中央公論事業出版）

これは SRA から発行された会社のPRを兼ねた本であるが、内容は岸田さんの自叙伝である。それに岸田さんが育てた SRA の次の世代の人たちのエッセイなどが、加えられている。

岸田さんは1936年生まれで、今年78歳になる。ボブ・ディランより5歳年上だ。しかし、若い時からのラディカルな姿勢は変わらず、SEA のメーリング・リスト上でもしょっちゅう健筆を揮い、過激な意見を寄せている。

僕が岸田さんに初めて会ったのは、1975年頃ではないだろうか。時の記憶は不確かだが、状況はよく覚えていて、山崎利治さんを中心に開かれていた研究会に、岸田さんがゲストで呼ばれて話をされたのだと思う。場所は当時の日本ユニバックの会議室だろうか。しかし、飲み屋の座敷だったような気もする。このとき、岸田さんはすでに著名で、パズルでも知られていたが、僕は「プログラミングにおける帰納的技法」という本の訳者として知っていた。この本は当時持っていたが、ほとんど読んではいない。その後、このグラフィ

ティでも出てくる、JSD の SMEF プロジェクト、ソフト協、ソフトウェアシンポジウム、SEA、ICSE、ISPW、中国との交流などを通して、長いつきあいがある。

本書によれば、岸田さんが1986年に始められたプロジェクトに、SDA (Software Designers' Workbench) がある。僕はこのプロジェクトのメンバーではなかったが、その活動の一環としてのボールダーでの研究会などには、誘われて参加したことがある。その SDA に関して

「SDAプロジェクトは、日本にソフトウェア研究コミュニティを誕生させて育てる上での踏み石のような働きをしたと言ってもいいだろう」(p.135)

と書かれているが、SDAだけでなく1970年代から90年代の岸田さんの多彩な活動が、日本のソフトウェア工学に関わる人々の結びつきを作り、また国際的な舞台へネットワークを広げるの果たした役割は、きわめて大きいことは間違いない。自分自身も現在ICSEなどに強い人脈を保っているのは、岸田さんのおかげという面が多分にある。

原武史「レッドアローとスターハウスーもうひとつの戦後思想史」（新潮社）

原武史というノンフィクション作家が「大正天皇」とか「昭和天皇」という本を出しているのは知っていたが、その著作はこれまで

読んだことがなかった。これが初めて読んだ原の本だが、テーマが猪瀬直樹と大きく重なるのに驚いた。

まず、素材としての天皇である。「大正天皇」や「昭和天皇」は読んでいないが、猪瀬の「ミカドの肖像」や「天皇の影法師」より後から書かれているのは確かである。本書でも、秩父神社と秩父宮の関係、堤康次郎による旧宮家の邸宅の買収とプリンスホテル、皇太子夫妻によるひばりが丘団地訪問、といった話が出てくる。しかも、堤康次郎と西武グループによる皇族の土地買収とプリンスホテルというのは、「ミカドの肖像」の主要テーマそのものである。

本書では西武新宿線と西武池袋線沿線の団地の生態とそこでの共産党の活動が、「戦後思想史」という位置づけで扱われる。私鉄の沿線の土地と住宅をテーマとしたという点では、東急沿線で五島慶太が展開した田園都市の計画を題材とした猪瀬の「土地の神話」とも重なる。本書でも、西武沿線との対比という形で、東急沿線が語られるが、原によれば反共だった堤康次郎の西武沿線は、ひばりが丘などの団地を中心にソビエトの住宅や都市景観に近く、それと比べると東急沿線は五島が目指したイギリス風の田園都市とは異なるものの、一戸建てが中心でクルマ社会を予期した点でアメリカ的である、という構図になっているという。

ところで2012年12月に都知事に当選した猪瀬は、2020年の東京オリンピック誘致に成功したものの、徳洲会から5000万円を受け取った

という疑惑によって、1年で失脚してしまい、その後の選挙で舛添が新知事となった。金を受け取ったことと、その処理をうまく説明できなかったことは問題に違いないが、発端は徳田虎雄の息子毅の選挙違反が摘発されたことであり、運がなかったようにも思う。あるいは、猪瀬を嫌う連中による何らかの画策があったのではないか、という疑問も浮かぶ。別に、猪瀬の肩を持つつもりもないのだが。

西武沿線には馴染みが薄く、この本を読んでも土地勘がないので、冒頭に載せられている地図をたびたび見直した。これまで多少知っているのは、二村節男君がいた石神井公園、竹内郁雄さんの家に一度訪れたことのあるひばりが丘、（そこに自由学園があることは大貫さんが東大定年後に移られたことで知った）、竹内さんが昔いた武蔵野通研を訪れたときに降りた花小金井という駅、武川さんがいた椎名町、ぐらいだろうか。レッドアロー号には笹舟会で秩父の蕎麦屋「小池」に行くのに3回ほど乗ったことがある。

ただ、小金井に勤務するようになって、この方面にやや親近感がでてきた。使う電車は中央線で、法政に来てから西武線に乗る機会があったわけではないが、これまでたとえば小金井、田無、小平、所沢と言っても位置関係が分かっていなかったのが、多少とも認識が増している。

本書は、猪瀬と同じような題材を扱ってはいるが、著者自身が3歳からひばりが丘団地に住み、そのあと、久米川団地、滝山団地と沿線の公団住宅で13年を過ごしたという個人的な経験がきっかけになっているところに特徴がある。そして、「滝山コミュニケーション一九七四」という既存作があり、それで講談社ノンフィクション賞を受賞している。本作はその続編という位置づけなのかもしれない。

小山田浩子「穴」(芥川賞)

芥川賞のために文芸春秋3月号をアマゾンで買ったのだが、つい間違えてKindle版が表示されているときにクリックしてしまった。ワンクリックで購入済みとなりダウンロードされてくるのは便利だが、しまったと思っても取り返しがつかない。しかも信じられないことに、Kindle版の方が紙の雑誌より高い。

というわけで、この芥川賞作品を電子版で読んだ。昨年の同じ時期の黒田夏子「abさんご」は横書きの実験的な小説で、おそろしく読みにくく途中まで読んでほってあるが、それと比べるとこの小説は読みやすい。しかし、見かけの平易さとは裏腹に、日常生活の描写の中に非現実感を技巧を凝らして織込んだ作品である。初めの方の同じ会社の非正規社員との会話や、引っ越しの描写、とくに姑の活躍場面などはきわめてリアルで、そういうリアリティ描写の巧みさで読ませる小説かと思わせる。ところが話が進むうちに得体のしれない動物、タイトルとなっている穴、家族からその存在を聞いたこともない義兄、子供の集団などが出てきて、しかしその描写法はそ

れまでと変わらず，どこまでが現実でどこまでが主人公の若い女性「あさひ」の妄想なのか，分からないように書かれる．それでどのように終わらせるのかと思っていると，義祖父が亡くなり，義兄や子供たちは存在しなかったことが暗示され，主人公はコンビニで働き始めることを決め，自分の顔が姑に似てきたことを発見して終わる．

面白く読んだがちょっと長い気もした．

黒田夏子「abさんご」(2013年上期芥川賞)

小山田の芥川賞作品を読んだので，読みかけのこれもせっかくだからと一応最後まで読んだ．まるで英語の小説を読んでいるように，読むのに時間がかかり頭にすっと入らない．それがもちろん作者の狙いなのだが．何のためにそういう細工をしているのか．あるとすれば，何度も読み直させて印象を深めさせるという効果はあるかもしれない．実際，評者の高樹のぶ子は「つまり作者が解体した言葉を，読者は再構築しながら読むわけだ．その過程において，フォーマットに落とし込まれた文章では到底伝わらない，湿度を帯びた大和言葉の世界が，ときには乱暴に，また薄暗い美しさを伴って，立ちあらわれてくる．再構築されることで言葉の意味が，くさびのように深く打ち込まれるのだ．」と言っている．

この作品は受賞したが，評者の間で好悪が分かれたらしい．高樹と同じように高く評価している川上弘美は「・・・明晰でこなれた文

章で、気持ちの明るむ思いでした。・・・やはりここにある日本語はほんとうに美しいなあと、うっとりしたことでした。」と言っている。一方、宮本輝と山田詠美は明確に否定的だ。ただ、その他の評者はおおむね高評価で、それで受賞に至ったらしい。

読んだ後、また初めに戻って読み直してみると、確かに今度はずっと意味が分かってついていけるが、それをまた最後までやるほどの義理はないと感じて、やめてしまった。ただ、意味がずっと入ってくると、内容的にはそれほど実験的なものではないとも感じる。母と娘の戦前から戦後にかけての生活を描いていて、読みやすいが奇想天外な小山田の世界と比べると、私小説のような現実的な世界に見える。

赤坂真理「東京プリズン」(河出書房新社)

この小説は、毎日文化出版賞や司馬遼太郎賞を受賞し、新聞の書評でも高評価を受けている。それで1年以上前、「レッドアロー」と同じときに買っていたのを「レッドアロー」をこの間読んだので思い出し、読んでみた。しかし、思ったほど面白くなかった。

東京裁判という重いテーマを小説という入れもので扱って成功した、という評価がされていると理解していたので、もっとノンフィクショナルなものを期待していた。たとえば3年前に読んだ佐木隆三「小説大逆事件」が連想された（もっとも「大逆事件」もそれほど高く評価したわけではない）。しかし、この小説の半ば過ぎま

で、主人公マリの見る夢か妄想の話が延々と続く。そこで登場するのは、ヘラジカ、シャム双生児、森の大君、生贄、人の入る箱などのイメージである。そのふわふわしたイメージ世界と東京裁判という硬質な題材がなかなか結びつかない。

一方で、これは私小説のような世界でもある。主人公は「赤坂真理」という著者と同じ名前で登場する。赤坂は1964年生まれと巻末の著者紹介にあるが、小説の主人公も同じ年生まれの設定である。そうすると、1980年に15歳のマリが米国に行ったという話も、事実であろうと思われる。全8章のそれぞれは、2つか3つの節に分けられているが、すべての節のタイトルは日付で始まる。

1980-81年、2009-11年の間を行ったり来たりする。もとは「文芸」の2010年春号から2012年夏号にわたって連載されたというから、40代半ばの著者＝主人公の現在と、15-16歳で米国のハイスクールにいたときの話とを交錯させている。マリを米国にやったという母親が重要な役割として登場し、多くの話は母とマリの国際電話という形で展開するが、現在の自分が母親役になって、15歳の自分と会話するというしかけを使っている。この母親が、戦後の東京裁判時にそこで使われた資料の翻訳という形で関わっていた、という伏線が最初に張られ、それをマリが追求していくというストーリーが展開しかかるが、その線は中途半端なうちに消えてしまう。

大体、タイトルが「東京プリズン」なのに、巣鴨の刑務所の話はまったく出てこない。東京裁判がテーマであるが、それはハイスクールにおけるディベートで「日本の天皇には戦争責任がある」という題目が取り上げられ、マリは最初の練習では否定役を、観客もいる本番では肯定役を務める、という形で扱われる。だからこのディベートが小説のハイライトであるが、それ以外の部分が多めに多く、しかもそれらとディベートの内容との関連があまりよく分らない。

連載の期間は、2011年3月11日をまたがる。だから、第7章でこの日が扱われるが、それもとってつけたようで、ストーリーにうまく組み込まれていない。ということで、久しぶりに日本語の長編小説（440ページある）を読んだが、その醍醐味を味わったとはとても言えない読書だった。

谷島宣之「ソフトを他人に作らせる日本、自分で作る米国 －「経営と技術」から見た近代化の諸問題」（日経BP社）

SEAの3月のフォーラムは「「ソフトウェア受託開発」の未来を考える」というタイトルで、この本の著者の谷島さんとIT記者会の佃さんが話したが、それに参加した。そのとき、谷島さんが講演料はいらないから昨年12月に出したこの本を買い取って参加者に配ってほしいと依頼したとのことで、SEA会員は1000円の参加費で、正価1500円のこの本がもらえるというずいぶん得な催しだった。

谷島さんという人は日経BP勤務で、2012年まで日経コンピュータの編集長だったという。日本のIT産業についてこれまで谷島さんが書いたものをまとめて本にした、という体裁のものだが、その中心テーマはタイトルにあるように日米比較にある。

「日本企業は自社で利用するソフトのほとんどをIT（情報技術）企業に開発させているのに対し、米国企業はソフトを内製する比率が高い。」

というのがその主張で、これは自分でも前から気になっていたことなので、新しい指摘ではないものの、話を聞く価値はあった。決して話が上手ということではなかったが、首肯するところが多かったのでせっかくもらった本を読んでみた。内容は実は上に引いた観察に尽きているとも言えるが、IT産業だけでなく広く日本の企業の特徴にも筆が及んでいる。さらに全4章の各章末に、ITや経営学には直接関係しない人物を取り上げて、あれこれ論じている。吉田満、夏目漱石、永井荷風、スウィフトである。必ずしも面白い議論でもないが、こ著者の面目はこの辺にあるということかもしれない。

Matthew Goodman, "Eighty Days: Nellie Bly and Elizabeth Bisland's History - Making Race Around the World"

日本の新聞で翻訳本の書評を読んで、その原作のKindle版を買うというケースが増えている。これもその一つで、とにかく面白かったが、例によってこの手の本はページ数が多く、時間はかかった。

ジュール・ベルヌの「八十日間世界一周」が出たのが1873年である。この空想旅行を現実に行ってみようというアイデアを、アメリカの新聞社Worldの女性記者Nellie Blyが社内に出した。Worldはピューリッツァーが買収して大きくした新聞社で、この時代は女性記者は珍しかったが、ペンシルバニア州生まれで母子家庭に育ったNellie Bly はニューヨークの大新聞社で働きたいと自ら売り込み、それに成功する。そしてブラックウェル島の精神病院に狂人のふりをして潜入し、患者への非人道的な扱いを暴露するというようなセンセーショナルな記事で名を挙げる。世界を80日以下で一周して記録を作るとともに、その過程を記事にするという企画はNellie自身が持ち込み、ピューリッツァーが承認して計画が練られ、1889年11月14日に大西洋を渡る蒸気船で出発する。

同じ日の朝、雑誌Cosmopolitanの編集者Elizabeth Bislandは、社主のJohn Brisben Walkerに突然呼び出され、すぐに世界一周の旅に出るように命令される。Walkerは朝Nellie Blyの企画を知り、即座に対抗する計画を立てたのである。Nellieが東回りで出発したのに対し、Elizabethは西回りで鉄道でサンフランシスコに至り、太平洋を渡って横浜からアジア・ヨーロッパを経てニューヨークに戻るという経路が用意され、その日の夕方出発する。当時、新聞と雑誌というメディアで争って報道され、後にそれぞれ本も出した話ということだが、100年以上経った今日ではほとんど忘れられていたと言ってもよいだろう。それを発掘した著者は、周到に関連資料も調査してこの面白い本を産み出した。

二人の道中を追うだけでなく、新聞社の栄枯盛衰、鉄道にまつわる話（昔は町ごとに時刻を細かく決めていたのが、鉄道の発達とともに標準時が設定されたことなど）、スエズ運河の建設、移民船、蒸気船の火夫の労働条件、などの副エピソードが数々登場する。それらもよく調べたものだと感心するが、Elizabethが日本に着いたときの描写で、男がちょん髷を結っているように書いてあるのは1890年としてはおかしく、明らかに生半可な知識で書いたものと思われる。そうすると他のところでもこのようなことがあるのではないか、と疑われもする。

日本については他にも意外に言及されている。まず、Elizabethはニューオーリンズからニューヨークに出てきたが、ニューオーリンズ時代の雑誌社の同僚にラフカディオ・ハーンがいて、彼女の信奉者だったという話がある。Elizabethは文学的才能があるだけでなくとにかく美人で、多くの男が魅せられたらしい。彼女自身、横浜に立ち寄ったことから日本が大好きになり、後に結婚してから夫婦で二度も日本を訪問している。

Elizabethによる日本の印象は、引用を活用して次のように描写されている。

“She had come from, as she thought of it, “the country of common-sense, of steam-ploughs and newspaper enterprise,” to arrive at a land of porcelain and poetry, where even the most commonplace

things were beautiful. ... The buddhist monk had smilingly warned her of the exceeding loveliness of the shogun's tomb, and having seen it Bisland decided that she would forgive fate in advance for any future trick, because it had given her this day of unmarred beauty. "Et ego in Arcadia," she cried to the monk as he walked beside her down the flower-stewn stairway, "I too have been in fairyland!"

She did not want to leave Japan, and promised to herself that someday she would return, ..."

渡辺京二の「逝きし世の面影」では幕末から明治初期の文献が主に使われているので、Bislandの文章は引用されていないようだ。しかし、ここにも同じように訪日外国人による美しい日本が描かれており、その状況は明治中期のこの頃までかなり残っていたことが分かる。しかしそれもやがて失われてしまったわけだ。

Bislandは自然や工芸の美しさだけでなく、日本人の人間としての崇高さも書いている。これは歌舞伎の芝居を見ての感想らしいが、

"He was, Bisland reflected, the embodiment of the sterner side of the Japanese character, the aristocratic spirit that kept feudalism alive in Japan long after Europe had abandoned it, the spirit that allowed no military conqueror ever to set foot on Japanese soil and freest race in Asia."

同じような観察をNellie Blyもしているが、こちらは毒がある。

“she was “disgusted with all we found worth seeing” in Kandy, the Chinese of Canton and Hong Kong were, in her description, “the dirtiest and shabbieset” people in the world. “The Japanese are the direct opposite to Chinese,” Bly later elaborated. “The Japanese are the cleanliest people on earth, the Chinese are the filthiest; the Japanese are always happy and cheerful, the Chinese are always grumpy and morose; the Japanese are the most graceful of people, the Chinese are the most awkward; the Japanese have few vices, the Chinese have all vices in the world; in short, the Japanese are the most delightful of people, the Chinese the most disagreeable.”

現在の日中の感情的な対立の状況では、国粋派が喜びそうな言辞である。しかし、Bislandの方は日本と同様に中国も愛し、結婚後の二度の旅行では、日本と中国との両方を再訪している。

ロバート・ホワイティング，松井みどり 訳「東京アンダーワールド」（角川書店）

これは2000年に出た本で、同じ年に買ったようだが読まないできた。それを思い出して読んだのは、「東京プリズン」との連想だったかもしれない。佐野真一の「東電OL殺人事件」という本があり、それを自分では買って持っていると一時思っていたが、それも本書と混同したものらしい。ロバート・ホワイティングは日米の野球を

比較文化論の対象とした「菊とバット」で知られているが、それも読んでいないので、これが初めての読書になる。

本書は、戦後の米国による占領時から、ヤクザやアングラ経済に関わる日米の怪しげな人間たちとそれが巻き起こす事件を扱っている。とくにずっと追いかけているのが、ニック・ザペッティである。イタリア系アメリカ人のニックは、1945年8月下旬に海兵の下士官として日本に来た。海兵隊の服務が終わったあとは、GHQの仕事を引き受け、さらにいったん帰国後、金儲けをもくろんで再来日し、さまざまなヤミ商売に手を染める。そして、帝国ホテル・ダイヤモンド強盗事件に関わって逮捕され、拘留所にいる間にイタリアン・レストランを開くというアイディアを思いつく。保釈後、六本木に「ニコラス」という店を出し、大成功を収める。

このザペッティを狂言回しとして、戦後の数々の事件が登場する。たとえば力道山、ミカド、日米安保、児玉誉士夫、ロッキード事件。しかし、一時は六本木の帝王と呼ばれて羽振りの良かったザペッティも、落ち目になり、レストラン・チェーンの大半を日本交通に売り渡すことになる。この顛末は日本交通がいかにも悪者に描かれて、まるでだまし取られたように読めるが、したたかなザペッティのことゆえ、日本交通側にそれなりの正当性があるのだろうと想像される。この件に限らず、やはり米国人の著者の視点は米国寄りのように感じられるところがあちこちにあるが、これまで日本発の

ニュースや本でのみ知っている事件を、別の方向から見ると面白さがないこともない。

このような浮き沈みを経て、日本人と4回結婚し日本の国籍を取ったニックも、晩年は日本を嫌い、呪いながら1992年に死んだという。

ニックの晩年はバブルの絶頂期と重なる。それは日本が、ロックフェラーセンターを買ってしまうような時代だった。そのような時代の風潮が、戦後の日本を闊歩して富を築いたニックの凋落と重ねられるのが、本書の成立時の状況だったのだろう。しかし、ニックの死んだ1992年はバブルの崩壊が始まった時期であり、日本は長い不況時代に入る。そのあたりのことは、2000年に出た本書では「エピソード」でごく簡単に触れられている。

徳田秋声「徴」

金沢には割とよく出かけるが、3月に片山先生の最終講義と退任祝賀会に出席して金沢日航ホテルに一泊したとき、翌日時間があつたので初めてひがし茶屋街を訪れてみた。たまたまその前の週だったかに、NHKテレビの「小さな旅」で紹介されていたのがきっかけである。いまや映画のセットのような感じで保存されている街で、棒茶や麩まんじゅうなどを買ったりした後、ぶらぶら歩いていたら徳田秋声記念館に行き当たったので入ってみた。その日がたまたま

「悩める文士の3.5ヶ月」という企画展の初日（3月21日）だった。
これは次のような趣旨のものである。

「100年前のちょうど今日、小説家・徳田秋聲は何をして過ごしていたのでしょうか？」

大正3（1914）年当時——その前年に『爛』、翌年には『あらくれ』といった代表を世に送り出すなど作家として勢いに乗り、私生活では愛妻と5人のこどもたちに囲まれ順風満帆...かと思いきや、ちょうどこの頃、創作に気乗りせぬまま庭を眺め、街へ出かけ、土手に遊ぶ——そんなぶらぶらとした日々ばかりが綴られています。

男、44歳。人生の岐路にたたずみ悩める文士の、春から初夏にかけての生活ぶりをご紹介します。」

つまり、1914年3月21日から6月29日までの秋聲の生活を、日記などを資料として追うというものである。朝日新聞では、漱石の「こころ」の連載100年目を期して、当時の形に復刻した毎日の掲載が始まっている。秋聲の年譜を見ると、1911年8月、44歳の時に「夏目漱石の推薦で「懲」を『東京朝日新聞』に連載し、自然主義の代表的作家になる。」とある。また、1915年9月には「再び夏目漱石の推薦で「奔流」を『東京朝日新聞』に連載」である。ということで、秋聲や漱石の100年前が回顧される年であるが、親父が生まれたのも大正3年、つまり1914年で生きていれば100歳ということになる。

秋声記念館を訪ねはしたが、これまで秋声は1篇も読んでいなかった。昭和20年代に出た角川の昭和文学全集が家に数冊あって、その中にあった徳田秋声集は中学高校のころから気にはなっていたが、結局手を出さなかった。親父が買ってくれた中央公論の「日本の文学」では、徳田秋声には2巻が充てられている。3巻が充てられているのは漱石と谷崎のみ。2巻は鷗外、藤村、荷風、志賀、といった全80巻の構成の中で、秋声に2巻というのは当時の評価を反映するものだろう。この「日本の文学」をかなりよく読んだ自分だが、それでも秋声はとうとう読まないできた。

それでこれを機に読んでみようかという気になり、Kindle版を探すと「徳田秋声はこれだけ読め」というのがあって、代表作21篇を収録して99円である。Kindle版では漱石も鷗外も芥川も買っているが、実に便利な世の中になったものである。中期の代表作の一つらしいこの「懺」をまず読んでみたが、変な小説である。男と女の話には違いないが、二人がどうして惹かれあったのか、さっぱり分からない。男は東京で一人暮らしをしている作家で、そこに手伝いに来ている婆さんの娘が女である。女は一度結婚している出戻りである。婆さんが具合の悪いときに代わりに家に来たのがきっかけではある。最初から教養と社会的な位置の違いがポイントになる。

途中の交渉はまったく抜きに、女が妊娠したことが明かされる。墮ろすとか里子に出すということを男がほのめかしたり口にしたたりするが、そのうちに結婚することになる。その辺の男の心理も、あま

り描かれないままに話が進む。女には性格的な強さが感じられ、そのあたりが魅力の一つでもあるようだが、それでも人物造形としてはきわめて浅い。男は常に不機嫌であり、女に対しての言動は理不尽であり、女も負けていないところは見せるが、そのうちに二人目の子供も生まれるのでまったくの不仲ではない。

こういう話が続いて、どのように終わるのかと想像がつかなかったが、とても小説の結末というような終わり方ではない。まるで未完のような印象を与えるが、

「午後に笹村は、長く壁にかかっていた洋服を着込んで、ふいとステーションへ一人で出向いて行った。そしてちょうど西那須行きの汽車に間に合った。」

で終わりなのである。

しかし、これは典型的な私小説で、引用した企画展の解説文に「私生活では愛妻と5人のこどもたちに囲まれ」とあるその愛妻が小説の「お銀」であり、年譜によれば、32歳のときに「手伝いに来ていた女性の娘小沢はまと関係ができ、結婚生活が始まる（実際の入籍は二年後）」という相手らしい。小説の上では冷え切った関係のような夫婦が、その後も4人の子をなすのである（1914年時点では全部で5人だが、その後さらにひとり生まれている）。

とにかくさらに続いて作品を読んでいきたい、という気持ちにはならなかった。

水町雅子「Q & A 番号法」(有斐閣)

内閣府の情報保護評価のワーキング・グループで一緒に、内閣府側の担当者として番号法案作りをほとんど一人でやったのではないかという印象のある水町さんが、番号法解説の本を2冊出して、それを送ってきてくれた。そのうちのとっつきやすそうな本書を読んできた。

全部で55問の質問を挙げて、それに2ページないし4ページで答えるという形式である。質問は外から寄せられたというものではなく、番号法の解説のために水町さんが作成したものだから、全体で法律の要点をカバーするようによく考えられている。

番号法は平成25年5月25日に成立し、同月31日に公布された。平成27年10月を目途に全国民に通知され、28年1月から利用開始の予定である。僕がワーキンググループの委員を頼まれたのは2011年6月で、まだ民主党政権時だった。政権交代があって法案成立が遅れたが、いよいよ実施段階に入る。考えてみれば、大ごとである。しかし、水町さんは頭が切れ、冷静で、かつ大変な労力をこの仕事に割いたに違いない。本書の筆者紹介によれば、東大教養学部的相关社会科学を出て、みずほ情報総研でシステム開発を経験した後、東大の法科大学院に入り弁護士になったということである。そして内閣官房で番号法立案、情報保護評価立案に従事した。システム開発の経験があるという経歴は知らなかった。

和田誠，村上春樹「ポートレイト・イン・ジャズ」（新潮文庫）

先週，ASEという国際会議のプログラム委員会でトロントに行ったとき，往きのJALの機内誌にこの本が紹介されていた．元の単行本は1，2とあってそれぞれ1997年と2001年に出ており，それを合本したこの文庫本も2004年に出ているのだが，これまでその存在を知らなかった．

トロントの会議で Vittorio Cortellessa（ラクイラ大学）に会ったが，彼は村上春樹を5-6冊読んでいるという．英語で読んだのかと聞いたら，イタリア語訳だという．そういう偶然もあって，カナダにいるうちにアマゾンで注文しておいたのが，帰ってみると既に届いていた．

村上春樹の音楽への造詣の深さは，以前に読んだ「意味がなければスウィングはない」でよく分かっていたが，あの本ではクラシックもロックも扱われていたのに，本書はジャズだけでもこれだけよく聴きこんできているということを示している．さらにこの本のユニークさは，先に和田誠が描いたジャズ・ミュージシャンのポートレイトがあって，それに村上が後から文章を付けたという成り立ちである．それがうまく行っているのは，10歳以上齢の離れたこの二人の趣味がよく一致しているからである．

ジャズといってもビバップ以前の古いジャズが中心なのは意外だった。和田の年齢からすれば分からないことはないが、村上の好みもそうなのである。もちろんマイルス・デイヴィスやビル・エバンスなどは取り上げられているが、それらはこの中では比較的新しい世代に属する。ということもあって、全部で55人出てくるジャズ・プレイヤーのうち10人ぐらいは名前すら初めて聞くという具合である。あとがきにも書かれているように、コルトレーンもキース・ジャレットも出てこない。ましてウィントン・マルサリスなどは対象外である（ただMJQの項で、服装について言及はされている(p.188)。また忘れていたが、村上の「意味がなければ・・・」ではウィントン・マルサリスが取り上げられている）。また、ピアニストは取り上げ方が少ないような気がする。たとえば、バッド・パウエル、デイヴ・ブルーベック、ソニー・クラーク、マッコイ・タイナー、マル・ウォルドロン、チック・コリアなど出てこない。

もう一つ驚くのは、村上も和田もこれらのジャズを基本的にCDでなくLPで聴いているということである。

とにかく楽しい本で、2日で読んでしまったが、何度読み返しても面白いだろう。

岡田暁生、フィリップ・ストレンジ「すごいジャズには理由（わけ）がある―音楽学者とジャズ・ピアニストの対話」（アルテスパブリッシング）

続いてまたジャズの本だが、これも飛び切り面白い。しかし、この2つの本はかなり対照的なところがある。村上本ではビバップ以前のスウィング・ジャズがどちらかといえば中心だったが、こちらでは、ビバップへの移行期としてアート・テイタムが取り上げられて以降、すべてビバップ後のプレイヤーが対象となる。その人数も、村上本で55人だったのが、こちらでは6人である。その結果一人当たりのページ数に大きな開きがある。

似ているのは、どちらも二人の異色な組み合わせの人間が協力してできた作品であるところにある。村上・和田の作家・画家という組み合わせよりは、同じ音楽家という点でこの二人のほうが近いかもしれないが、クラシック音楽学者の岡田対ジャズ・ピアニストのストレンジという組み合わせ。しかし、このフィリップ・ストレンジという人は、大阪に住んでいる現役のジャズ・プレイヤーということだが恐ろしく音楽理論に詳しく、また耳がよい。修士ではクラシック専攻で、博士の学位をジャズで取得したという。一方、岡田はこの数年ジャズに凝って演奏の訓練を受けているというから、両者の差は実態としてはさほど大きくはないといえるかもしれない。ただ、専門が違ふことが、この対話を面白くしていることも確かである。

アート・テイタム以降に扱われるのが、チャーリー・パーカー、マイルス・デイヴィス、オーネット・コールマン、ジョン・コルトレーン。ビル・エバンスとあまりに正統的である。当然、それ以外の

プレイヤーの名前も多数登場するが、全体はこの6人の音楽を分析することでモダン・ジャズの特徴を浮かび上がらせるという構成になっている。マイルスとエバンスのレコードはほとんどiPodに入っているし、コルトレーンもかなり揃えているので、電車の中でiPodを聴きながら本書を読むことができる。それで出てくる譜面の一部は追えるが、驚くべきことに本書の内容に即したビデオが作られていて、それがYouTubeに載せられてだれでも見ることができる。ピアノの前に二人が座り、実際に音を出しながら本の議論を再現しており、大変親切な作りとなっている。1つのビデオが30分ぐらいと十分長く、各章に2つ分ぐらいが割り当てられているので、まだごく一部しか見ていないが、本書全体を十分カバーしているはずである。これは現代ならではの、新しい本の作り方だろう。

今、上原ひろみを聴きながらこれを書いている。本書では注目すべき現在のジャズプレイヤーの名前もストレンジによって多く挙げられているが、そこには上原ひろみは出てこないし、日本人だけでなくアジア人もほとんどいない。ヨーロッパ人も少ないだろう。一方で、現在のアメリカでジャズは全然人気がないという。大衆音楽ではなくなっているということだろう。

岡田はときどき白人と黒人の音楽の違いやアメリカとヨーロッパの違いに話を持っていこうとするが、白人のストレンジはジャズの特徴はそのような差異を超えたところにあるとして、断じてそれに乗

ってこない。その辺もこの両者の対話の微妙に面白いところである。

半田滋「日本は戦争をするのか―集団的自衛権と自衛隊」 (岩波新書)

安倍内閣が7月1日に、集団的自衛権の行使を認めるという新たな憲法解釈を閣議決定した。連立与党の公明党はこれまでの党の姿勢とは異なるものの、安倍に押し切られて閣議決定をすることを了承した。

第2次安倍内閣が発足して1年半。景気回復にはそれなりに成功したように見える。ただ、野田が消費税値上げとTPP参加という難題を片付けておいてくれた恩恵は大きいように思う。外交はアジア、ヨーロッパ、アフリカ中南米と驚くほど精力的に訪問している一方で、対中国、対韓国との関係は冷え切っている。中国の習主席、韓国の朴大統領の姿勢によるところも多分にあるが、安倍の国家主義的な信念に基づく靖国参拝や集団的自衛権に代表される政策が大きな原因となっているのは間違いない。総裁選の際にもある種のエクセレントリックさを感じたが、2013年12月に成立させた特定機密保護法といい、今回の集団的自衛権に関する閣議決定といい、相当な強引さで自分の思い込んだ方向に引っ張っている。

この集団的自衛権の問題について、新聞は、朝日、毎日、東京が批判する一方、読売、日経、産経はこれを認めるというように割れて

いるらしい。僕は朝日と日経を読んでいるが、朝日が批判的なのは明らかだ。が、日経は必ずしも賛成しているとは見えない。ただ、朝日とはトーンが違うのは確かだ。

批判の立場から書かれた本書の書評を朝日で見ても、新聞などよりもっと豊富な材料に基づく客観的な議論を期待して買ってみた。しかし著者が新聞記者だけあって、案外ジャーナリスティックな書きぶりで、感情的な表現も多い。その口調はたとえば安倍について

「この夢想家の勇ましさは、国内における自衛隊活動に波及している。・・・どれほど武器を使わせたいのだろうか。・・・安全保障環境の悪化に、ここでも一役買おうというのである。」（「はじめに」 p.vii）という感じである。

本書の前半は朝日新聞にも出ているような材料をもとにしていて、とくに独自の情報や視点が出ているとは感じなかった。後半は極秘文書だという「K半島事態対処計画」を紹介するあたりから、この著者独自の取材に基づくもの、という感じを出している。ただ、この文書は1994年に作られたものというから、今やその秘密性も貴重性も薄いものではあろう。しかし、著者の得意分野は自衛隊であるらしく、そういえば副題にも「自衛隊」が入っている。そして長年取材対象とすると自然に情も移るのか、外務省を悪玉にする一方で、自衛隊にはその政策や行動に比較的に理解を示す。いずれにせよ、批判に徹しているはずのこの著者の論にも揺れがある。たとえば北朝鮮の脅威を強調することは、集団的自衛権容認の有力な根拠

になりうる。だからかどうか、「K半島事態対処計画」を引用して、北朝鮮の軍事力は大したことはないという見方を紹介する。しかし一方で、

「しかし、日本には使用済み核燃料棒を保管する原発や関連施設が五十五か所もある。通常弾頭でも命中すれば未曾有の量の放射線に汚染され、日本列島は廃墟と化すだろう。」(p.148)

とも言う。考えてみると、そもそも憲法第9条、

「1. 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

2. 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

に対する「解釈」で自衛隊を作り、これほど大きな軍隊に育てたところに無理がある。それが「解釈」でできるなら、集団的自衛権が行使できると解釈を変更することぐらい大したことではない、と安倍が思ったとしても、あながち無理とは言えないかもしれない。憲法が制定されて68年。この間、一度も改定されなかったことの重みは大きい。自民党は憲法を改正したいのが本音だが、反対する側は現実に改正できないことを逆手に取って、解釈を変更するという小手先の手段ではなく、憲法を改正すべきだと主張するようになり、これはそれなりの説得力を持つ。

赤澤威「ネアンデルタール・ミッション 発掘から復活へ フォールドからの挑戦」(岩波書店)

「東京プリズン」や「東京アンダーワールド」と同じように、これも2000年に出版された頃を買って、今頃になって読んでみた。

シリア砂漠でネアンデルタールの子供の完全に近い骨を発見して、それから全身の骨格モデルを作り、さらに生体モデルの制作や歩行シミュレーションを実現した、という話である。

赤澤は1967年に初めてシリアの調査に参加している。それから30年近く経った1993年に、ようやくこの骨を発見する。そのような研究一途でようやく長年の努力が報われた学究の徒というイメージとはやや異なり、著者は発想力が豊かでかつ行動的らしい。だから、骨格モデルづくりや歩行のシミュレーションを実現するというアイデアを得ると、いろいろな研究者に電話をかけまくり、協力を依頼する。そこで前の東大工学部教授で鈴木賢次郎さんの友達、現在自分と同じ法政大学理工学部教授の木村文彦さんとその東大時代の研究室スタッフが出てくるので驚いた。

あとがきに、2000年時点でのシリアの発展の様子と、イスラエルとの紛争も好転するのではないかという期待が書かれている。しかし、その後のシリアの内乱の悲惨さを知る現在の目からすると、その見通しが楽観的だったと思わざるをえない。そのような政治状況は、ネアンデルタール研究に大きな打撃となっただろうと想像される。

柴崎友香「春の庭」（芥川賞）

三島の「春の雪」を連想させるタイトルだが、現代の世田谷のアパートと洋館風の住宅（「水色の家」）の話である。「春の庭」とはこの家と庭を被写体とする写真集のタイトルということになっていて、アパートに住む主人公の太郎と、同じアパートの別の部屋に住む漫画家で年上の独身女性とが、この家に強い関心を寄せる。その家についての関心自体が、この小説のテーマである。男と女が出てくるが、恋愛とか人間同士の好き嫌いを伴った心理とかは一切出てこない。

ただ、人同士は頻繁にものをやり取りする。そしてそれをきっかけに互いの家や部屋を訪問しあったり、飲み屋に行ったりという付き合いが交わされる。何がテーマかよくわからないが、独自の世界を構築し、読み手もその世界に引き込まれるような不思議な小説。

中山康樹「ロックの歴史」（講談社現代新書）

新書の装丁も工夫が進んでいて、この講談社現代新書は帯が普通より幅が大きく、13cmもある。そこに本来の表紙や目次にはない副題風の宣伝文句があって、「ロックの誕生をまったく新しい視点で解き明かす： ロックンロールはいかにして「ロック」になったか」という冗漫な文が載っている。

しかし、どこが「まったく新しい視点」なのか、よくわからない。ロックとはアメリカで生まれたロックンロールとは別物で、ロックの歴史はイギリスから始まる、というのが一つの視点であるらしい

が、それが新しい視点とはとても言えまい。あるいは、「すべてはクリフ・リチャード&シャドウズから始まった」と今さら言われても、格別の目新しさは感じない。

しかし、さすがに中山はいろいろよく知っている。たとえば第6章は、「なぜリヴァプールだったのか」と題されている。リヴァプール・サウンドは、地元を流れるマージー河に由来して「マージー・サウンド」と呼ばれるということも知らなかったが、60年代の前半に出てきたイギリスのグループは大体リヴァプールが中心だったとこれまで思い込んでいた。だからデイヴ・クラーク・ファイブもハーマーズ・ハーミッツもリヴァプールと誤解していたが、どちらも違うのである。

「64年のビートルズのアメリカ上陸を機に訪れた「ブリティッシュ・インヴェンション」と称されるブームは、ビートルズを核にしながらも、こうしたリヴァプール以外のバンドの活躍によってもたらされた。デイヴ・クラーク・ファイブをはじめ、ローリング・ストーンズ、ハーマーズ・ハーミッツ、アニマルズ等、少なくとも60年代中期のアメリカ市場でビートルズのライヴァルと目されたグループは、リヴァプールとは無関係の土地から出現した。」(p.102)

というのは確かになるほどという指摘である。そのあとに、リヴァプールを活動拠点としたグループの名前がいくつか挙げられているが、その中で僕が知っているのはサーチャーズぐらいである。

主な記述は1970年で終わっている。今年になってローリング・ストーンズ、ボブ・ディランが日本に来て何度か公演し、ポール・マッカートニーも去年来たばかりなのに再来日の予定だったが、体調不良で直前にキャンセルするということがあった。これらは高齢者となった聞き手のわれわれ世代を狙った動きだと思ったが、作り手の彼らがこれだけのエネルギーを持続させているのは、驚くべきことである。その点について中山は「すべてが、当事者たちも含め、誰も予想しなかった展開を迎え、未踏の領域に歩を進めつつある。」(p.4)という。しかし、その「予想しなかった展開」がどんなものかは何も書かれていない。最終章にそれを書く意図があったように見えるが、本体の記述が1970年で終わってしまうことからしても、しょせん無理なように見える。しかし、80年代半ば以降のロックをやはりあまりフォローしていない自分には、この1970年で終わる「歴史」はある意味で納得するところがある。

最近、ロックやジャズ関係の本をよく読んでいるのは、ツタヤで借りるCDの候補を探すためということが多分にある。その点では本書に知らないアーティストやアルバムはほとんど出てこなくて、役に立たなかった。

加藤陽子「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」（朝日出版社）

加藤陽子とは東大出版会の企画委員会で一緒だった。僕より数年後に委員になったと思う。企画委員会では活発に発言していたが、企

画の中に功成り名遂げた名誉教授タイプを著者とするものが多いと文句をつけていたのが印象に残っている。本書でも

「政治システムの機能不全の二つ目は、小選挙区制下においては、投票に熱意を持ち、かつ人口的な集団として多数を占める世代の意見が突出して尊重されうるとの点にあります。二〇〇五年の統計では、総人口に占める六五歳以上の高齢者の割合は二割に達しました。そもそも人口の二割を占める高齢者、さらに高齢者の方々は真面目ですから投票率も高く、たとえば郵政民営化を一点突破のテーマとして自民党が大勝した〇五年の選挙では、六〇歳以上の投票率は八割を超えました。それに対して二〇歳台の投票率は四割台と低迷しました。（中略）

私自身あと十七年もすれば立派な高齢者ですから、これまで述べたことは点に唾する行為に他なりません、・・・」(p.5-6)
というくだりがある。

加藤は今、なかなか売れているが、これまでその文章はUPに連載されたものぐらいしか読んでいなかった。8月の終戦記念日に向けて、2009年に初版が出たこの本が改めて宣伝されたのを見て買ったのだが、この間読んだ半田の「日本は戦争をするのか」との連想もある。半田の本のタイトルも、この加藤の本から借用した可能性もありそうだ。

買って読み始めて驚いたのは、これが栄光学園の中高生を対象とした講義をもとにしていると初めに書いてあることである。相手は歴

史研究部のメンバーで20人ぐらいといい、その講義風景の写真まで載っている。また、「おわりに」には、謝辞の対象として僕と同級で栄光の教師をしている（していた？）大島弘尚の名前が最初に挙げられている。

これが5日間の講義だということにも、その密度の高さに驚かされる。序章を入れると全6章で、それがどう5日間に分けられたのかわからないが、ところどころで加藤が質問を出して生徒が答えるというやり取りがあり、それが実際の講義のどの程度の再現になっているのかは不確かだが、臨場感を出している。それに中学1年から高校2年までの参加者というが、著者をして、

「熱心に講義を聴き、私を震撼させるに十分な深い答え、予想もしなかった卓抜な答えを披露」(p.405)

したと言わしめている。1章から5章までは順に日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満州事変と日中戦争、太平洋戦争に当てられている。そして当事者たちがどのような判断で戦争に入ったかが分析される。加藤の立ち位置はリベラルなところのはずだが、思ったよりそのときの日本の政治家や陸軍を中心とする軍の思考過程に理解を示しているように見える。たとえば松岡洋右をかなり評価しており、自分でも

「どうも私は松岡に甘い、と日頃教えている学生にもよくいわれますが」(p.306)

と書いているが、パリ講和会議の後に松岡が牧野伸顕宛てに書いた手紙で日本の21カ条要求を弁明することには無理があるということ

をはっきり述べている点や、リットン報告書が出る時点で、当時の内田外相宛てに出した電報で、そろそろ強硬姿勢をとるのをやめないと、イギリスなどが日本をなんとか連盟にとどまらせるように頑張っている妥協策もうまくいかなくなる、と警告していることなどを紹介している。

満州事変を企んだ石原莞爾も、人物像としてはかなり好意的に描いている。たとえば、スタンフォード大学のマーク・ピーティアーの次のような見解が引用されている。

「近代植民地帝国の中で、これほどはっきりと戦略的な思考に導かれ、また当局者の間にこれほど慎重な考察と広範な見解の一致が見られた国はない。」

「日本の植民地はすべて、その獲得が日本の戦略的利益に合致するという最高レベルでの慎重な決定に基づいて領有された。」(p.192) このように、これまで自分が読んできたような、戦後平和主義から見た一方的な戦前体制の批判論調とは異なる視点が出されている点は、ある意味で新鮮である。

しかし、本書の趣旨は、明治以降、太平洋戦争に至る戦争の歴史において日本の政治家、政治システムが行ってきた意思決定を擁護するものではもちろんない。第5章の最後には、岩手県出身の陸海軍の戦死者の総数は3万724人で、その87.6%が44年以降に亡くなっているというデータを引く。負けが決まってからのむだな戦死者ということである。また、ドイツ軍の捕虜となったアメリカ兵の死亡率

は1.2%なのに対し、日本軍の捕虜となったアメリカ兵の死亡率は37.8%に上ったというデータがあるという。ニューギニアなど前線で死んだ兵士は、ほとんどが戦死というより餓死だった。食料補給という計画がないからである。というような事実が、とくになぜ日本では国民の間で戦争の「被害者」意識が強いのか、という文脈で挙げられている。

そして最後の文が大きな説得力を持つ。

「天皇も含めて当時の内閣や軍の指導者の責任を問いたいと思う姿勢と、自分が当時生きていたとしたら、助成金欲しさに分村移民を送り出そうと動くような県の役人、あるいは村長、あるいは村人の側にまわっていたのではないかと想像してみる姿勢、この二つの姿勢を共に持ち続けること、これがいちばん大切なことだと思います。」

石田英敬さんの「自分と未来のつくり方」は麻布高校の学生を相手にした講義をもとにしていたが、大学教師が高校生や中学生を相手に行った講義をもとにした本はいろいろあり、しかも成功しているものが多いように思う。自分も栄光で一度だけ講義をしたが、あまりできは良くなくて、学生の反応も弱かった記憶がある。ただ、同様の話を駒場で高校生相手にして、その内容が東京大学教養学部編、「16歳からの東大冒険講座 [2] 情報/歴史と未来」に収録されている。

白井聡「永続敗戦論 戦後日本の核心」（太田出版）

加藤の「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」と一緒に買い、続けて読んだ。2013年の3月に出た本なので加藤のものより出版は新しいが、やはりこの夏、新聞の広告欄で並んで宣伝されていた。しかし、その前から世評が高いことは聞き及んでいた。

白井は1977年生まれで若い。とはいっても1985年生まれの古市憲寿と比べれば一世代近く年上だ。古市の本は読んだことがないが、野田内閣や安倍内閣の委員をやったりして体制に取り込まれている。それとは対照的に、白井は「永続敗戦」の構造と呼ぶ戦後の体制を、完膚なきまで叩きのめす。

白井の言う永続敗戦とは、敗戦を認識において巧みに隠ぺいする構造と、対米従属の構造とが密接に結びついて、永続化されているということである。この観点からたとえば領土問題が取り上げられる。そこには「敗戦の否認」という歴史意識が明確に現れているとする。また、北朝鮮問題も、国交正常化と拉致問題との間の優先順位が途中で変わったことに、「敗戦の否認」という意識を見ている。

白井の立場はもちろん保守ではないが、戦後の民主主義・平和主義の左翼の主張にも批判的である。その立場から、江藤淳や福田恒存といった保守の論客を意外に評価する。その立ち位置は加藤典洋と近いといえよう。

Tom M. Mitchell, "Machine Learning," McGraw-Hill

Amazonで頼んで8月7日に届いた。それを最初から読んで9月3日に最後まで読み切ったので、この夏の読書はこれに尽きるという感じもするが、上に感想を書いている「春の庭」以降の5冊もすべて8月に読んでいたので、この夏は割と読書をしたとも言える。

大昔の自分の卒論で五目並べの学習プログラムを考えたり、1980年代のAIブームの際に、ダイヤモンドクレジット社の入会審査システムを決定木学習の方法で実現したりした経験から、機械学習についてはそれなりに関心を持ってきた。

最近、深層学習がもてはやされ、ジャーナリズムではAIがふたたび脚光を浴びてきたらしい。ゼミの学生にも深層学習に興味を持っているのがいる。そういうこともあって、機械学習の本をAmazonで何冊か買ってみたのだが、その中でももっとも標準的な教科書と思われる本書をまず読んでみたわけである。

しかし、さすがに米国のこの手の教科書はよくできている。説明が丁寧で予備知識なしに読めるように工夫されている一方、いい加減にごまかしたり手抜きをしているところもなく、機械学習の主要な方法をきちんと説明している。全13章400ページで、入門書としては質が高い。ただ、出版されたのが1997年なので、深層学習はもちろん Support Vector Machine についても書かれていない。

機械学習には人工神経ネットワークやベイズ学習のような数値的・統計的手法と、ルールベースの帰納推論や説明に基づく学習（EBL）

のような記号的・論理的手法とがある。Mitchellはどちらかといえば論理派だが、この本では両者の手法がほどよくバランスされて説明されている。しかし、通読してみたの感想は、実用性という点では数値的・統計的方法に軍配が上がりそうだというものである。

渡辺佑基「ペンギンが教えてくれた物理のはなし」（河出ブックス）

竹内薫が新聞でこの本をベタほめしていたので、買ってみた。確かに面白い。この生物学者で初めて本を書いたという著者には、軽い乗りで面白く書く才がある。

野生動物に計測器を取り付けて放し、回収してデータを分析するというバイオロギングという方法でわかったことが書かれている。クジラやアザラシ、ペンギンがどのような潜水行動を取っているか、アホウドリやウがどのように飛翔活動をしているか、この方法で初めて分かったことが豊富にあるという。たとえばハイイロミズナギドリは、太平洋上の南北1万キロにわたる地域を、8の字を描いて季節をまたがり渡りを行う。計測した7か月の間の総飛行距離が、なんと6万5000キロだという。アホウドリの中には、46日間で3万キロを飛んで地球を一周したものもあるという。

水中を泳ぐ動物は空中を飛ぶ鳥ほどのスピードは出ないが、それでもクロマグロは太平洋を横断して8000キロの回遊を行うという。ホオジロザメの中には、100日間でインド洋を横断したものがあると

いう。潜水ではゾウアザラシの1735メートルという記録があるそうだ。

本書のよさは、そのようなデータを単に並べるだけでなく物理的・生物的にどうしてそのようなことが可能なのかを、易しく面白く説明しているところにある。しかも、分からないことはそのまま謎だとして正直に述べている。もう一つの魅力は、本人の野外調査研究の足跡を、個人的な生活実感を交えて書いているところにある。

その点では、赤澤威「ネアンデルタール・ミッション」と似ているところがある。どちらも研究者自身が一般向けに書いた本で、対象が野外研究であり、その分野の全体的な説明だけでなく、自分のうまかった研究を、多少の自慢を交えながらしかし嫌味にならない程度に書いている。

加藤典洋「敗戦後論」（ちくま文庫）

白井聡「永続敗戦論」よりだいぶ前に買ってあった本だが、図らずも順序を前後して読んだ。読んでみると、白井の主張はほとんどここに出ているという感じもする。白井の本でもさすがにそれは意識しているようで、

「絶対的な戦争放棄という崇高な理念が冷戦と天皇制の護持という文脈から生まれたことのはらむ問題を、護憲派の多くが一意図的か否かにかかわらず直視しようとしめない傾向を改めて批判的に問題化したことにおいて、加藤の問題提起は意義を持っている。」(p.44)

としながら、続けて

「しかし、加藤の問題提起のうちで殊更注目を浴び、論争の的となったのは、こうした「ねじれ」を超克する主体を立ち上げる、という議論のほうであった。そしてその際、「日本の三百万人の死者を悼むことを先において、その哀悼をつうじてアジアの二千万の死者の哀悼、死者への謝罪にいたる道」をつくり出すという議論がもっぱら論争の中心となった。侵略行為の犠牲となった、日本にとっての〈他者としての死者〉に先んじて〈身内の死者〉を弔わねばならないと主張するものと読める加藤の理路は、結局のところ「想像の共同体（ベネディクト・アンダーソン）の論理に回帰することにはほかならないのではないか、という批判が高橋哲哉をはじめとする面々から寄せられることになった。」

と言っている。この件りを読んだときには、白井が加藤との違いを強調するために、ことさらこういう指摘をしているのかと思った。

ところが、本書に収められているのは「敗戦後論」だけでなく、それに対する批判に答えた「戦後後論」、さらにその続編ともいうべき「語り口の問題」の3編で、確かにそれらはもっぱらこの高橋らの批判について議論している。つまり「敗戦後論」の反響は、日本の死者を先に哀悼するという提案に集中したらしく見える。

とくに最後の「語り口の問題」は、ハンナ・アーレントを取り上げている。そして「戦後後論」でも出てくる高橋哲哉が、いわば敵役

として大きな役割を負わされている。驚くのは内田樹による解説でももっぱら高橋哲哉が引き合いに出されて、叩かれている。

高橋哲哉は駒場の教師だが、一度だけ話をしたことがある。それもこちらが完全に人違いをして、井の頭線を駒場東大前で降りたときに話しかけてばつが悪かったが、駒場構内までの道すがら少し話をした。高橋の著作は読んだことはなかったが、『靖国問題』（2005年、ちくま新書）は評判になっていたので、どういう人か知っていた。

高橋の批判は、このようなものらしい。

「侵略者である自国の死者への責任とは、死者としての死者への必然的な哀悼や弔いでも、ましてや国際社会の中で彼らを“かばう”ことでもなく、何よりも、侵略者としての彼らの法的・政治的・道義的責任をふまえて、彼らとともにまた彼らに代わって、被侵略者への償いを、つまり謝罪や保証を実行することでなければなるまい。」(p.267)

加藤も内田も、この高橋の理路は正しいとしながら、その「語り口」に鳥肌が立つとして批判している。この「語り口(tone)」という言葉は、ハンナ・アーレントのアイヒマン裁判報告にユダヤ社会やユダヤ人のインテリたちから寄せられた批判に出てくるものだという。そもそもこの議論の中で、ハンナ・アーレントがなぜ出てくるかといえば、高橋哲也が加藤を批判した論文の中でアーレントを

引き合いに出したからである。加藤は逆に、アーレントの言説を使って反論している。加藤はアーレントに批判的な立場ではなく、むしろ共感している。だから、高橋への反論にアーレント批判で使われた「語り口」を持ち出すのは向きが逆のように見える。

実際、加藤自身も「逆説めいた言い方になるが」(p.265)と言っている。そして「鳥肌が立つ」というきわめて情緒的な言葉を、「語り口」にからめて使っている。それは引用されている西谷修と加藤との対談で、次のように出てくる。

「日本の場合だったら、南京大虐殺、朝鮮人元慰安婦、七三一部隊などの問題に対して、そういうものの前で無限に恐縮する、無限に恥じ入ることが大事だという高橋さんのような人がいる一方で、これでは脈がない、これは違う、これはいやだ、思想というのは、こんなに鳥肌が立つようなものであるはずがない、という僕みたいな人間もいる。」(p.268)

この「鳥肌」に解説者の内田は大いに共感して、ほとんどそれに乗った議論に終始する解説を書いているのである。しかし、このやりとりだけを見ると、どうも加藤・内田組は情緒的で、高橋を打ち負かしていないように見える。別に、同僚だったからと言って高橋の肩を持つわけではないが。

全体として、日本の侵略戦争、戦後の平和民主主義、戦争責任論、といったすぐれて政治的、社会的なテーマが扱われているのに、一

方で、文学評論の色がきわめて濃い。大岡昇平、太宰治、江藤淳などがたびたび登場する。加藤の論を受けている白井の本でも、大岡昇平の引用が重要な役割を果たしていたが、加藤はこの評論を明確に文学の立場から構成している。それがやや意外だった。

Robert Louis Stevenson, "Treasure Island"

学生のとときに買ったペーパーバックで、何度か読もうとしながら読まずにきたものが2冊ある。いや、積読のペーパーバックはもっとあるに違いないが、ときおり気にかかるという点と、どちらも少年向きの有名な本という共通点から、いつしか意識の上で常に一括りにしてきた。それがこの Treasure Island と Huckleberry Finn である。

ハックルベリーの方は、幼稚園から小学校の2年生の夏まで愛読した講談社の「こけし文庫」というシリーズの1冊で読んでいたので、内容は知っている。このこけし文庫は大変質の高い子供向けの本をそろえていて、原作を少年少女向けに翻案はしているが、各冊256ページのボリュームで、熱中して読んだ記憶がある。それでいまだに家に残っており、娘の美季子に譲ってまだ彼女の本箱に入っている。ただ、子供時代の美季子がどのくらい読んだのか知らない。

その残った本の題名を書き並べてみると、「鉄仮面」「八犬伝」「ああ無情」「義経」「ロビンソン」「アンクル・トム」「巖窟

王」「三国志」「ハックルベリー」。これらすべての題名に「物語」と付けている。シリーズの1冊に宝島はあったらしいが、それは読んでいない。他に読んでいるとすれば絵本だが、確かな記憶はない。イメージとしてはディズニーのピーターパンが連想される。それは単純に海賊のイメージによるものだが、1911年に出版された Peter Pan は、おそらく Treasure Island の影響を受けているだろう。Treasure Island の出版は1883年である。ちなみに Huckleberry Finn の出版は1884年でほぼ同じ。

というわけでどちらもとくに著作権が切れているため、Kindle版は無料で手に入る。手元のペーパーバックは1969年に出版されたもので、まずそれを読み始めたが、途中でKindle版に切り替えた。古い本の手触りには簡易な体裁のペーパーバックといえどもそれなりの良さがあるが、電子版で手軽に辞書を引ける便利さには替えがたい。とくにいよいよ船を仕立てて宝島に向けて出発するあたりから、海事用語と海賊たちが話すスラングが頻出し始め、辞書の世話になることが増えた。

少年 Jim はときどき突飛な行動に出る。それがさまざまな冒険劇を導き出すところに、この小説の魅力がある。海賊が残した地図を頼りに宝を探すところ自体は、この手の他の話と比べてもあっさりしている。しかし、20人で船に乗り組んで出かけ、そのうちの12人は死に、生還するのは5人、島に置き去りにしたのが3人という結果

は、少年向きのストーリーとしては過酷に思える。ただ、人を殺す場面でも描写はあまり残酷ではない。

とにかく百数十年読み継がれてきただけあって、話の展開は見事である。

村上春樹 編・訳「セロニアス・モンクのいた風景」（新潮社）

相変わらず村上春樹の小説はあまり読んでいないが、音楽エッセイはかなり読んでいる。村上だけでなく今年に入って読んだ本のうち、音楽ものが5冊目である。全部で24冊しか読んでいないのに。

これは村上が編んだアンソロジーで、英語で書かれた12編のモンクに関する文章を村上が選んで翻訳している。村上自身が書いた本のタイトルと同じ題の文章が冒頭にあるが、これはやはり今年読んだ和田誠、村上春樹「ポートレイト・イン・ジャズ」にあるモンクの項に加筆したものである。あと、最後に「私的レコード案内」と「あとがき」を付けている。

言ってみればお手軽に作られた本である。出版が今年の10月10日で、ノーベル文学賞の発表前というタイミングに、出版社の意図が感じられる。しかし、今年のノーベル賞も、村上の下馬評は高かったにもかかわらず受賞はならなかった。待ち構えていた町の本屋も空振りだった。

収められた12編のうち、デヴィッド・カスティン「モンクと男爵夫人はそれぞれの家を見つける」が50ページあってもっとも長く、内容も面白い。これはロスチャイルド家に生まれフランス貴族と結婚して離婚し、ニューヨークに移り住んでジャズの守護神となったパノニカ・ド・コーニグズワーターの伝記「ニカの夢」から、モンクに関係する部分を抜粋したものである。天才で奇人のモンクと、金持ちで音楽の感性に優れやはり奇矯なところがあるニカとの交流は、小説のようである。

最後に収められているジョージ・ウィーン「セロニアス・モンクの人生の一端になること」や付録の略年譜にあるように、モンクは1961年、63年、70年に来日公演を行っている。そのほか、「ジャイアンツ・オブ・ジャズ」という企画で、1971年、72年にデージー・ガレスピーやアート・ブレイキーなどと全世界を回っているが、その一環で1971年に日本に来ている。このうち、1970年の公演を新宿の厚生年金ホールで僕は聴いているが、今から思えば貴重な経験だったことになる。どんな演奏だったかはほとんど覚えていない。しかし、ちゃんと時間通り来て演奏するかどうかという懸念があったのに、それは問題なかったということを知っている。演奏中ステージをうろうろ歩き回っていたような記憶もあるが、それは話に聞くことと自分の体験とがまざって創作された記憶かもしれない。

木畑洋一「二〇世紀の歴史」（岩波新書）

木畑さんは駒場の学部長だったし東大出版会の編集委員と一緒にやったりしたのでよく知っているが、専門は国際関係論ということぐらいしか知らなかった。

本書を読んでみて、帝国主義と植民地問題が専門であることを改めて認識した。300ページにも満たない新書で20世紀の歴史という壮大なタイトルのを持つ本書は、その20世紀をさらに広げて、1870年代から1990年代初頭までを「長い20世紀」と呼んで対象としている。その趣旨は、帝国主義によって世界が支配・被支配の関係によって分割・構成されてから、それが解体するまでということである。1870年代はヨーロッパによるアフリカ分割が進められた時代と捉えられる。しかし、そのような支配の拡大は、アフリカだけでなく、アジア・太平洋地域でも進められた。そして2つの世界大戦もヨーロッパの視点ではなく、植民地・被支配者にどのような影響を与えたかという見方で語られる。そして1990年代初頭を歴史の区切りとするのは、冷戦の終わりというより帝国世界の解体過程の終了と見るからである。1990年のナミビア独立によりアフリカ諸国の独立が一応完了し、東欧の変革が起こりソ連が解体した。

人類の歴史は戦争と暴力の歴史と言えるが、その暴力性・苛烈さは帝国主義の時代に入ってはるかにスケールを増大し、それを世界に広げたものであることが、本書を読んでつくづく思い知らされる。とくにこの本の面目がよく出ているのは、第一次世界大戦におけるアフリカ内の戦争の記述であり、またヨーロッパ内の戦争に支配地

域の兵や労働力がいかに動員されたか（あるいは人種差別によって動員されなかったか）という事実の指摘である。このような支配・被支配の関係は、第二次世界大戦ではさらに大きな規模で繰り返された。

日本は被支配地域からは日露戦争の勝利によって解放者としての期待が寄せられたが、その後の日本は遅れてきた帝国主義の体現者として振る舞った。その一環として南京事件などの暴力も位置づけられる。

本書のもう一つの工夫は、1970年代から第一次世界大戦まで、第一次大戦、第二次大戦、戦後の帝国解体と分けられた4つの章それぞれの章末に、「定点観測」としてアイルランド、南アフリカ、沖縄の各時代の状況を記述していることである。これらは被支配地域であるが、この長い20世紀の間に大きな変動を経験、それぞれ異なる道を歩んだものの帝国主義の影響をまともに受けた地域として確かに代表的な様相を持つことがよくわかる。

谷崎潤一郎「猫と庄造と二人のおんな」（新潮文庫）

谷崎の著作権は切れているものと思ったが、死んだのが1965年で切れるのは来年だ。だからKindleで探しても無料に近いような全集はなかったので、これは新潮文庫のKindle版で読んだ。誰かが新聞でこの小説について触れている文章を書いていたので、読んでみる気になったもの。

さすがに谷崎，文章も話の展開も実に巧みな小説である．タイトルからしてうまいが，それが小説の内容をそのまま表している．庄造というのらくらした冴えない男を巡り，追い出された前妻品子と，今の妻福子，そして猫のリリーによる話が紡ぎだされる．品子は庄造が溺愛している猫のリリーをくれと福子に手紙を出す．その手紙文からいきなり小説が始まる．品子はリリーが好きなわけではないが，庄造をおびきよせる企みで猫を所望したのである．福子は品子の願いに同情するわけではないが，庄造のリリーへの溺愛ぶりに嫉妬するあまり手放すことに同意して庄造を説得する．猫は当初品子にまったくなつかないが，いったん姿を消した後に戻ってきて，品子も情が湧いてくる．そこへ，猫を忘れられない庄造が，こっそりと様子を見にくる．

結末の付け方も実にうまい．こういうのを読むと，昨今の芥川賞作品など足元にも及ばない感じがする．

佐藤春夫への妻千代の譲渡事件や，その後の松子との結婚が連想されるタイトルでありテーマである．庄造はおよそインテリでなく，「二人のおんな」も千代や松子がモデルになっているわけでは全くなさそうだが，松子と三度目の結婚をした直後に出されたこの作品は，これら谷崎の女性関係への世間の関心を逆手に取ったしたたかなものと言えそうだ．

福井健策「誰が「知」を独占するのか ― デジタルアーカイブ戦争」（集英社新書）

福井にとっての5冊目の新書ということだが、そのうちの4冊を読んだことになる。ずいぶん忠実な読者になってしまった。しかし、この人の書くものは面白い。

テーマはデジタルアーカイブであり、まずグーグルやそれに挑むヨーロッパの戦略が描かれる。その中で遅れ気味の日本も、長尾先生によって始められた国会図書館「電子図書館」プロジェクトがその後も進められているなどの動きがある。次いで、ビッグデータや人工知能の動向が紹介される。

そのようなアーカイブ化の阻害要因として、ヒト・カネ・著作権の制約があるという。そしてその著作権の制約を解説した5章と、そのような阻害条件の中で進めるべきアーカイブ化政策を具体的に提言した6章が本書の白眉である。

最大の障害は「孤児作品」である。孤児作品とはデジタル化のために著作権処理をしようにも権利者が不明の作品である。著者やその遺族の連絡先が分からない。著作権が切れているかどうかもわからない。TVの出演者が不明である。

著作者ではなく所有者が分からない著作物の問題もある。たとえば映画フィルムは現像所で保管されているケースが多いが、それらの所有者が分からなくなっている。震災アーカイブでも瓦礫の中から拾い出された写真やビデオテープも所有者が不明なため、デジタル

化ができない。さらに肖像権も写っている人物を特定できないことが普通なため、きわめてやっかいである。

福井は今や国立国会図書館審議会の委員で、オンライン資料関連の小委員会委員長を務めるなど政策策定に関わっている。そのような経験を踏まえて第6章で具体的な提案を10件出しているが、いずれももっともな内容に思える。

2013年

アーサー・I・ミラー, 阪本芳久 訳「ブラックホールを見つけた男」(草思社)

今いる法政大学理工学部の創生科学科というところはいくつかのグループの寄り合い所帯だが、主要なものは自分がいる情報関係（「知能フィールド」と呼ばれている）と天文学のグループ（「自然フィールド」と呼ばれている）である。天文学の大看板は自分と同い年で一緒に東大から移った岡村定矩さんで、彼は現在、天文学会会長である。別にだからという訳でもないが、前に買ってあったこの本を読んでみた。

本書で「ブラックホールを見つけた男」と呼ばれているのは、インド人の天文学者でイギリスのケンブリッジやアメリカのイリノイで研究生生活を送ったスプラマニアン・チャンドラセカールのことである（ただし、本の原題は“The Empire of the Stars: Friendship, Obsession and Betrayal in the Quest for Black Holes”で、「見つけた男」というのは訳書で付けられた題名である）。もっとも、この本を読むまでは、正直なところこの人物を知らなかった。

チャンドラは1930年の19歳のときに、インドからイギリスに旅立ち、ケンブリッジに優秀な学生として迎え入れられる。そこに天体物理学の巨人と言われたアーサー・スタンレー・エディントンがい

た。本書はこのエディントンとチャンドラの確執を話の中心において描かれている。

チャンドラは数学の天才で、天体物理学における問題の計算による解法にめざましい成果を挙げる。エディントンが指導者であるが、1935年1月12日にチャンドラが王立天文学協会で行った白色矮星に関する講演に対し、完膚なきまでの批判を行う。チャンドラの発見は質量がある限度以下の星は白色矮星として終焉を迎えるが、ある質量以上になると、その収縮が無限小の特異点に陥るというものであった。エディントンは物理的に無限に小さくなることはありえない、としてこれをやっつけた。

ブラックホールという言葉は、これよりずっと後の1967年に命名されたらしい。チャンドラは晩年の1983年にノーベル賞を受賞している。その授賞理由は、この初期のブラックホールにつながる研究らしいが、本人としてはアメリカに渡ってから、放射伝達、流体及び電磁流体の力学的安定性などの別の研究で成果を挙げ続けてきたので、それらが評価されないのは不満だったという。ブラックホールについては、1970年代にその数学理論を展開している。

自分も、大学2年のときの進学振り分けで、一度出した理学部物理学科への志望を取り下げないでいれば、このような研究者への道を歩んだかもしれないという思いはある。自分も東大教授を18年やり、研究者の端くれには違いないが、やはり回り道をしている。し

かし、チャンドラも1970年代に長いこと暗い気持ちを抱えて過ごし、生涯ときおり鬱の状態になったことを見ると、最先端の研究者としての人生も、必ずしも幸福とは限らない、と言う気もする。

丸山真男「『文明論之概略』を読む（上・中・下）」（岩波新書）

「文明論之概略」自体を読むのにも時間がかかったが、丸山のこの本も時間がかかった。新書とはいえ3巻本で長い。しかし、先に元を読んでいたので、その注釈を後で読むことは、よい勉強になった。これは丸山が実際に読書会で講読したもののテープ起こしを元として作られている。岩波文庫の「概略」に載っている津田左右吉の解題などで、福沢はバッケルのイギリス文明史とギゾーのヨーロッパ文明史を踏まえているという知識を持っていたが、本書で丸山が丁寧にバッケルやギゾーと対応させてその異同を教えているだけでも有益である（しかし、津田左右吉の解題は実に冷たく突き放した書き方で、面白くない文章である。そのせいか、丸山のこの本ではこれに全く触れていない）。

福沢諭吉の生涯は1835-1901、丸山真男は1914-1996（親父と同じ年の生まれなことに今頃気づいた）。80年を隔ているが、日本の思想史上の両巨人と言ってよいだろう。その丸山が福沢を評釈するのだから、面白くないわけがない。丸山は昭和10年代、東大法学部の助手をしていた時に初めて「文明論之概略」を読んだという。昭和の国家主義路線が日に日に強まる時代にこの書に接して、時代への痛

切な批判として読めて痛快だったというのは、よくわかる。原著を読んだときに、たとえば「国体」という言葉についての考え方にきわめて新鮮なものを感じたが、当然、丸山もこの点を論じてる。

原著は全10章からなるが、それぞれに1～3回の講義が充てられている。そのうち、第2章「西洋の文明を目的とする事」と第9章「日本文明の由来」にのみ、それぞれ3講が配分されて重点が置かれている。第2章は「文明論之概略」の命題を明確に表した章であるとともに、「国体」が論じられているところでもある。第9章は「福沢に対して批判的な人でも、福沢の特色なり独特の見識が最もよく表れていると認めている」章であり、丸山も「バックルやギゾーを意識的に使っているところにもオリジナリティがよく発揮されている」としながら、第9章の独自性を評価している。

ピーター・バラカン「ラジオのこちら側で」（岩波新書）

繰り返しが多く、時間的な順序も前後してあちこちに飛び、ずいぶん編集がいい加減だと思わせる本である。岩波新書の編集者の技量が問われる気がするが、もともとバラカンがしゃべったものをまとめて編集するという作り方がされている本で、そもそも編集作業が難しかったものであることは分かる。

去年読んだ「ぼくが愛するロック名盤240」は、ツタヤでCDを借りるのの参考にするというのが大きな理由だったが、読んで見るとバラカンの自伝的要素があって、それがちょっと面白かった。この本

は、むしろ彼が日本に来てどうしてラジオのディスクジョッキーをやるようになったかということがテーマだから、自叙伝的なのは当然だが、その記述が必ずしも経年的でないので、あまりすっきりしない。一方、扱われる音楽の種類はロックというより「世界音楽」に明確にシフトしていて、アフリカ音楽やレゲエなどが主な対象になっている。だから、時代が新しくなっていることもあるが、紹介される曲やアーティストはほとんど知らない。しかし、この本で知ったサリフ・ケイタと The Derek Trucks Band は早速、ツタヤで借りて聴いてみた。とくにデレックには感心した。

丸山真男「日本の思想」（岩波新書）

「『文明論之概略』を読む」を読んだ後、たまたま新聞の読書欄でこの「日本の思想」に触れている文章を続けて2回見た。それで読む気になった。これも親父の蔵書で、1961年発行の第一刷である。この時期の岩波新書は旧漢字が部分的に使われており、値段は100円である。

4つの別々に発表された文章が集められている。後の2つは文章と言っても、もとは講演でそれを起こしたものである。

I「日本の思想」は、そのタイトルが書名としても使われており、本書の中心テーマを掲げたものである。その「まえがき」には「日本思想史の包括的な研究がなぜ貧弱なのか」という問題意識が最初に挙げられているが、そのあとの内容は、「包括的な日本思想史」を

述べたものではない。しかし、その「なぜ」に対する答えを探求し、それによって日本の思想の特徴を浮かび上がらせている。その特徴とは、外来からの新たな思想の素早く無批判な導入の一方で、過去の意識がズルズル潜入・埋没する、というものである。これは昭和32年に出た岩波講座「現代思想」の第11巻「現代日本の思想」に収められた文章で、編集者の清水幾太郎の意図は、ここで戦後思想の歴史的、論理的な背景をまず一般的に述べてもらうことにあったという。したがって、戦後思想というよりもむしろ第二次世界大戦までの思想を対象としている。

II「近代日本の思想と文学」は昭和34年に出た岩波講座「日本文学史」第15巻「近代I」所収のものである。ここでは、日本の近代における政治と科学と文学の関係が論じられる。ここで科学というのは、自然科学ではなくて、主にマルクス主義のことである。

III「思想のあり方について」は昭和32年6月に行われた岩波文化講演会の講演録である。ここで、その後有名になったササラ型とタコツボ型という類型論が登場する。講演録なので、I,IIと比べると読みやすい。

IV「「である」ことと「する」こと」も同じ昭和32年の岩波文化講演会で、こちらは10月に行われたものだが、その後、加筆と整理が大幅に行われたという。内容は、権利とか自由とか制度というものは、不断に点検しまた行使しない限り無力化するというものであ

る。しかし、1968年前後の全共闘時代、丸山真男は学生たちに強く批判された。「丸山が説いた政治参加などは、管理社会のエリートとして取りこまれてゆくことの呼びかけとしか、映らなくなりつつあり」「丸山真男教官、法学部教授会そして東大の全教官は、「軍国主義」の下においても、ひたすら研究室にこもりつづけて、「学問の自由」を守ったことによって、客観的には「日本軍国主義に加担」した」というのである（小熊英二「＜民主＞と＜愛国＞」p.583）。見かけとしては「する」という行動をしない丸山に対する皮肉な批判ということになるが、小熊の言葉では「全共闘運動と丸山は、その表現形態における対立とは裏腹に、じつは類似した思考を抱えていたともいえた」であり、「また全共闘運動による大学教授批判は、「唾棄すべき権威主義、目をおおいたくなるような無責任、倫理性の欠如」とか「自己の地位の絶対化、ゆるがぬ自己肯定、無責任性、非主体性」といったものが多かった。こうした言葉づかいは、まさに丸山をはじめとした戦後知識人たちが、戦中の為政者を批判したのと同じものだった。」となる。

Steve Hamilton, "The Lock Artist"

昨年、アマゾンの Kindle Fire HD を買った。とにかく便利だ。まず、本が安い。ペーパーバックより2-4割安い。そして購入ボタンを押すと直ちにダウンロードされ、紙の本のように配達されてくるのを待つ必要がない。そして、何よりも便利なのは、単語を押さえて長押しすれば、辞書が引けることである。そんな機能はすでにWeb

などで使われていて、今さらありがたがることではないらしいが、今回初めて実際に使ってみて、その使い良さに感激した。

簡単に買えるので続けていくつかダウンロードしたが、読む方はまずこの本とニュートンと贋金造りの話 ("Newton and the Counterfeiter") を並行して1章ずつ交互に読んで見た。そして途中からこちらの方に集中して、それでもかなりの時間をかけて読み終えた。

10代の少年を主人公とした青春小説である。父が母を陰惨に殺して自殺するという凄惨な生い立ちがあり、自身も金庫破りの腕を見込まれて強盗団に加担するという暗い状況ながら、すがすがしい青春小説になりえているのは、Amelia との恋愛が巧みに織り込まれているだけでなく、その一人称の語り口にある。

どうしても Salinger の "The Catcher in the Rye" が連想される。

孫崎亨「日本の国境問題―尖閣・竹島・北方領土」(ちくま新書)

孫崎の本はよく売れているらしいが、初めて読んだ。本書が最初に出たのは2011年5月で、2010年に起きた中国漁船による海上保安庁巡視船への意図的衝突事件よりは後だが、野田による尖閣諸島の国有化に始まる中国の強烈な反応よりはずっと前でありながら、それを予見している。

本書を読む前は、もっと右寄りの主張なのかと思ったが、むしろきわめて客観的で平和志向の考え方である。孫崎によれば、日本人の多くが尖閣諸島は日本古来からの領土であると思っているが、古来とはいつからかという答えられない。尖閣諸島が台湾に帰属するか沖縄に帰属するかの問題だとすると、沖縄としても琉球は長い歴史の中で日本でなく中国に属していた時期が長い。琉球が日本領でない時代に、尖閣諸島が日本に属することはありえない。だから、尖閣諸島が日本領になるのは、1872年以降だという。そして、周恩来や鄧小平がこの問題の棚上げを提案し、日本がそれを受け入れてきたのに、最近になって日本は棚上げの合意はないと主張しているという。

北方領土問題では、サンフランシスコ平和条約の段階で、千島列島に対するすべての権利、請求権を放棄すると条文にあり、また国後・択捉は千島列島に属することを吉田首相が認めているために、歯舞・色丹はともかく、国後・択捉については日本の領土主張は根拠がない、という。しかし、サンフランシスコ条約にはソ連は加わっていない。その後、鳩山一郎政権時代に日ソ国交回復交渉があり、一時は歯舞・色丹返還で妥結しかかった。しかし、最後に日本が四島一括返還にこだわり流れた。この背景には、サンフランシスコ条約の際には日本の千島列島放棄を当然とした米国が、その後の米ソ冷戦の深刻化に伴い、ソ連を牽制する意味で日本にけしかけたという背景があるという。ついこの間、安倍首相がロシアを訪れプーチンと会談し、平和条約締結に向けて交渉を再スタートさせると

いう共同声明を出した。しかし、領土問題は簡単には解決しそうにない。

竹島に関しては、米国の立場について指摘がなされている。日本では、米国は少なくとも中立か、日本支持だろうと思われているが、米国の地名委員会のデータベースでは、この島の所属国は大韓民国になっているという。それが2008年に「どの国にも属さない地域」に改められたとき、韓国が強く抗議し、ブッシュ大統領がライス国務長官に検討を指示し、再度韓国領に改められたという経緯があるそう。そのとき、町村信孝官房長官が、「米国の一機関のやることに、あれこれ過度に反応することはない」と述べたということだが、孫崎はこれを重大な過ちを犯したと評する。

歴史的には、米国の立場は揺れ動いている。1951年にはラスク国務次官補が「独島は朝鮮の一部として扱われたことは一度もなく、1905年以降、島根県隠岐島司の所管にある」と述べた。しかし、韓国はその後の外交努力で米国地名委員会が韓国領と明記するまでに、もっていったというのが孫崎の見解である。

結論として、感情論を超えた国家戦略が必要だとし、それを考えるのに、戦後多くの領土を失ったドイツが、EUによってヨーロッパ全体を考える戦略をとって成功したことを参考にすべきだという。

Thomas Levenson, “Newton and the Counterfeiter”

The Lock Artist と並行して読みながら、途中でこちらを中断したので読み終えるのがだいぶ後になった。Kindle では画面にページ番号の代わりに全体の何%のところからという表示が出るが、並行して1章ずつ読んでいた際にもこちらの方がそのパーセント表示の進みが悪いと思っていた。話がほぼ終わりというときでもまだ56%あたりだったのでちょっと変だと思っていたが、終わった後に、引用の注、文献リスト、索引が延々と続き、本全体の約半分を占めていることが分かった。

ニュートンがケンブリッジを去った後、ロンドンで王立造幣局長官となり、贋金造りと対決するのに大いに力を発揮した、というあまり人に知られていない話がこの本のテーマである。ニュートンはこの仕事でも完璧な能力を示し、William Chaloner という奸智に長けた悪党を捕まえ、法廷で対決し、最終的には死刑にもっていくのに成功する。

本書のテーマはニュートンのこの知られざる後半生だが、前半の田舎から出てきてケンブリッジに入り、力学理論を完成させてプリンキピアを書くまで、さらにその後の光学や錬金術の研究についても、かなりよく調べ忠実に跡付けている。それだけでも十分面白い。

大島堅一「原発のコスト－エネルギー変換への視点」(岩波新書)

昨年、「プロメテウスの罠」を読んだとき、自分は反原発でないが、しかし反原発の立場からの議論も知る必要があるという思いから、これを読んだというようなことを書いた。あの連載はまだ続いているが、本になったものは1と2を読んだきりで、その後をフォローしていない。しかし、ちょっと前に本書を買い、今度読んでみたのも、同じ思いからである。

本書は2011年12月20日に第1刷が出ている。新聞の書評などに取り上げられて評判になったので、わりとすぐにおうとしたりすでに品切れだった。それでしばらく忘れていたが、今年の1月下旬にAmazonで他の本とともに注文して、今度はすぐに届いた。それが2013年1月7日付の第3刷である。

原発による発電コストはやはり安いのではないか。原発がみな停まってから、電力会社が軒並み電気料金を値上げせざるをえなくなったことが、何よりの証左と思っていた。しかし、電気料金値上げのニュースに、朝日新聞は、「原発への過度の依存が影響」というような見出しをつける。これはかなり作為的だ。

この本で取り上げられているコストには、原発事故を受けての損害賠償コスト、直接的なコストとしての運転資金、発電所の建設、保守、更新コスト、といった営業費用と事業報酬、電源三法交付金などの政策コスト、そしてバックエンドコストとしての使用済み燃料の処理・処分コストがある。政策コストは発表されている原発と火

力、水力、再生可能発電のコスト比較に計算されていないという。しかし、原発が停まって、火力の割合が増えると、燃料コストがたちまち大きくなって電気料金を値上げせざるをえなくなったのは事実であるが、その点について、この本がより正確な原価の計算結果を与えてくれることを期待したのには、必ずしも思ったような答えはなかった。ただ、再処理費用が膨大で、それが将来への大きなツケになることは、改めて認識を深めた。

社会的費用という点では、地球温暖化という環境問題に対してほとんど触れていない。発電コストには第一に「発電事業に直接要するコスト」、第二に技術開発コストと立地対策コストからなる政策コスト、第三に環境コストが含まれなければならないとし、環境コストの中に、地球温暖化対策費用や被害、という項目があることは言及されるが、「以下では、まず環境コストを除いたコストについて順にみることにしよう。」(p.101)、と言ったまま、その後、環境のことについては原発事故に関わる環境被害のことにしか触れられないのは、ちょっと不満がある。

しかし、総じて論理的に議論が進められ、同感するところも多々あった。

池田清「海軍と日本」(中公新書)

芳永の義父は京都大学在学中に予備役で海軍に入り、駆逐艦「宵月」に乗った。その義父は1922年生まれ。この著者は1925年生まれ

で、1944年に海軍兵学校を卒業し、「摩耶」に乗り組んだという経歴の人なので、海軍へのノスタルジアも多少は感じさせる本かと思ったが、きわめて辛口の海軍評である。よく陸軍が悪玉、海軍は善玉という議論があるが、それがいかに誤りに満ちているか、というのが本書の一貫した主張である。海軍は陸軍に比べて政治力が圧倒的に弱かった。だから太平洋戦争の開始に当たって海軍に責任がないかと言えばむしろ逆で、「太平洋戦争の主役は海軍であった」と池田は言う。なるほどそうなのか、と新たな視点を与えてくれた本だった。

長谷部恭男「憲法とは何か」（岩波新書）

安倍内閣になってから国家主義的な色彩が濃くなり、韓国や中国との対立関係も強まっている。安倍が前から主張していたことは憲法改正であり、究極の狙いは9条改正だろうが、その前に、96条を変えて憲法改正をしやすくしようという意図がある。ただ、公明党がそれに慎重な立場なため、今のところ96条先行計画は必ずしも見通しが立っていない。しかし、この5月3日の憲法記念日前後には、新聞などで憲法改正議論がかなり盛んになされた。

この本は、2006年に1刷が出たものだが、その時点で自民党の「新憲法草案」が公表されており、そこに96条を改正して両議院の2/3以上の賛成ではなく過半数で発議できるようにするというものが含まれているため、この問題にも1章が割かれている（第6章）。

第1章は「立憲主義の成立」であり、立憲主義とは何かが本書全体の主要テーマであるともいえる。その説明は明快で、比較不能な価値観の対立は、深刻な争いを生まざるをえない、という認識を背景として、

「人間らしい生活を送るためには、各自が大切だと思う価値観・世界観の相違にもかかわらず、それでもお互いの存在を認め合い、社会生活の便宜とコストを公平に分かち合う、そうした枠組みが必要である。立憲主義は、こうした社会生活の枠組みとして、近代のヨーロッパに生まれた。」(p.18-19)

という。それは、価値観・世界観を共有したいという人間の本性に反するものである。だから日本の「歴史、伝統、文化」とか、日本人としてのDNAとか言い出す人が出てくるのは自然だという。これは自民党の新憲法草案を指しているが、長谷部はこのような憲法改正に明確に反対する立場であり、以下の章でそれを個別に論じている。

長谷部によると、冷戦の終結はリベラルな議会制民主主義が共産主義陣営に勝利したことを意味し、それは立憲主義が勝利したことであるという。

斎藤兆史「教養の力 東大駒場で学ぶこと」(集英社新書)

この著者は駒場の英語の教師であり、結構一般向けの本も出しているようで、これまでに名前や顔を知っていて不思議はないのだが、この本の宣伝を新聞で見るまで自分の記憶にはなかった。歳も僕よ

り10下の1958年生まれだからそれほど若くはないが、駒場の委員会などで一緒になったこともない。同じ駒場の齋藤希史と名前がよく似ていて最初は混同したが、あっちは漢文学で歳も5歳若い。ただ、ウェブで探して出てきた顔写真を見ると、見たような顔だとは思ふ。

とにかくこれまで駒場の執行部に入って学内業務などしたことのない人だと思うが、それにしても駒場の教育を代表するような本を出したものである。従来の「教養」を捉えるために、ヨーロッパ中世のリベラルアーツと旧制高校の「青春の三種の神器」、すなわち西田幾多郎「善の研究」、阿部次郎「三太郎の日記」、倉田百三「愛と認識との出発」がまず取り上げられるのは、恐ろしく正統的というか、時代がかっている。しかし、この関係で初めて知ったのは、倉田の書の中に「自然児として生きよーY君にあたふ」という文章があり、そこでY君の善の観念はあまりに常識的と痛烈に批判しているというのだが、そのY君が実は矢内原忠雄で、後年、矢内原が東大駒場に教養学部を作って初代学部長になったのは、妙な因縁だということである。

後半は戦後の大学における教養教育の話となる。大学の前の中等教育において、教養的な価値がもっとも極端に低下した科目は、齋藤の専門の英語だという。そして英語教育から文学が排除されてきた傾向を批判する。では、どのように教養教育をすればよいのかとい

う問題に対し、主張されているのは本物に触れさせるとか、学生は教師や先輩の背中から学ぶとか、案外に平凡である。

やや意外なのは情報処理教育の重要性を強調している点である。ただ、その「情報処理」が何を指しているのか、あまり明確に述べられていない。駒場に「情報処理」とか「情報」という科目があることは当然知っているはずだが、「情報処理」が重要だというときにその駒場の情報処理教育がどの程度意識されているのか、よくわからない。

海部美知「ビッグデータの覇者たち」(講談社現代新書)

服部から、アニモの社員向けに「ビッグデータとAI」のような話をしてくれないか、との依頼があった。服部がアニモを作ったのは1994年でほぼ20年になるが、同じように作られた富士通の社内ベンチャーはほとんどみなつぶれたのに、アニモはつぶれるどころか発展し、今や社員数35名の優良企業である。僕は一応顧問ということになっているが、あまり貢献していないので、講演ででも多少の役に立てばと引き受けた。そこで世の中で話題になっているビッグデータについてフォローしようと思っているときに、本書が朝日でも日経でも書評欄で取り上げられた。アマゾンで見るとKindle版があったのでさっそく購入してすぐに読んだ。

著者は米国のシリコンバレーに住む主婦で、技術者・研究者ではないので技術の詳細は分からないと言いながら、なかなかよく調べて

いる。ビッグデータ関連の学会やイベントにまめに参加し、地の利を生かして情報を得ているようだ。とくに、グーグル、アマゾン、フェイスブック、などのネット企業の動向はよく追っており、それぞれの特徴づけも的確である。アップルは自前のデータを持っていないところが弱みである。グーグルとアマゾンはビッグデータの二大覇者である。フェイスブックはその技術力とユーザの多さにもかかわらず、ビッグデータコミュニティへの影響力は案外小さい。マスコミという「青」の世界では公開データを扱い広告で収益を挙げてきたが、通信という「赤」の世界では個人データを扱って個人が料金を払うことで収益を挙げた。グーグルは基本的に青の世界の住人だが（Gmailなどでプライバシーが問題になっても、それを中性化することで乗り切ってきた）、フェイスブックは赤紫の世界にいて、広告とは相いれない部分があるという。

プライバシー問題は重要テーマとして取り上げられ、とくにビッグデータの未来を語る最終章ではかなりのページをこの問題に割いている。

西内啓「統計学が最強の学問である」（ダイヤモンド社）

これも同じようにビッグデータのことを考えているときに新聞広告に目にとまったが、やはりKindle版があったので買って読んだ。そうでなければ、いかにもベストセラーを狙ったようなタイトルと宣伝の仕方に反発して、買うこともなかったろう。実際、よく売れているらしいが、見かけよりは案外まともな本である。

著者は、東大の大学病院医療情報ネットワーク研究センター副センター長だったというが、現在は退職している。1981年生まれというからまだ若い。サンプリング、ランダム化の威力を強調するが、ビッグデータを宣教する連中は、サンプリングをしないでよいことがもたらすメリットに力を入れているはずである。しかし、本としてはビッグデータのブームに乗って売れている、という点はやや皮肉だ。

新聞では、ビッグデータを解析する人材不足が言われているが、IT能力と統計知識の両方が必要、ということだろう。ソフトウェア工学分野でも、経験的な研究アプローチが強調されるようになった15年ぐらい前から、統計学がのしてきた。世の中が統計学を正しい認識を持つ方向に行くのは、よいことであろうが。

藤野可織「爪と目」（芥川賞）

普段は文芸誌に発表される新作の小説など読むことはないのに、芥川賞作品だけはそれが発表される文芸春秋を買って読んでいた忠実さも、この数年は薄れている。今年の2月の芥川賞の載った文芸春秋は買ったのに、まだ読んでいない。そう思っていたら早くも半年が過ぎで、夏の発表があった。8月はあまり大学にも行かなかったので、駅で雑誌を買うという機会も減って、気がついたら8月も終わる。それで、アマゾンで雑誌を注文することは滅多にないが、一昨日頼んでみたら、昨日届き、今日読んだ。アマゾンでは、なぜか送料も取られなかった。

一人称の三歳の幼稚園児の「わたし」が語る，二人称の「あなた」が主人公である．「あなた」は「わたし」の父の愛人で，父の妻，つまり「わたし」の母が自殺だか事故死だかで急死したので，父との結婚の可能性を確かめるために，三人で一緒に暮らし始める．言ってみれば，白雪姫のような継母と女の子の物語である．暮らしはたんと過ぎて，継母が娘をいじめるわけでも，娘が反抗するわけでもないが，しかし最後は女の子が継母に復讐するというような形の結末となる．

話の進め方にも文章の表現にも巧みなところはあるが，面白くもなく何かを感じさせることもない小説である．

マーク・ピーターセン「実践 日本人の英語」(岩波新書)

この人の「日本人の英語」が出たのは25年前の1988年で，僕はその年に読んで感想を書いている．さらに，1990年に出た「続 日本人の英語」もすぐ読んで，感心している．

25年後に出た本書には，ややがっかりした．あまり「なるほど」と思うところがなかったのは，それだけこちらの英語が進歩したからだろうか．そうではあるまい．この本は，その後，著者が日本にずっと滞在して英語を教え，そこで観察した日本人の学生が犯す間違いを，主な材料にしている．その間違いがかなり初歩的なので，あまり面白いと感しない．もっとも，25年前の本でも，同じような日本人の英語を材料にしているわけだが，多分当時は著者にとっても

日本人の英語の特徴が新鮮で、それをネタに面白い議論ができたのだろう。25年経ってその新鮮味が薄れたのではないだろうか。

しかし、著者の日本語の能力は着実に向上しているようで、日本語は自動詞でも「死なれる」「泣かれる」のように受け身になるというのは、鋭い指摘である。

James Gleick, "The Information: A History, A Theory, A Flood"

George Dyson, "Turing's Cathedral"

このテーマがかなりよく似た2冊は、例によって新聞の書評で翻訳本が紹介されたのを見て、原著のKindle版を買ったものである。最近、このパターンが多い。前者が出たのが2011年、後者は2012年だが、翻訳はどちらも今年出たはずだ。

テーマが似ているだけでなく、本の長さや構成もよく似ている。Kindle版なのでページ数はよく分からなかったが、ネットで調べると前者が全15章544ページ、後者が全18章464ページ。前者には長い Prologue と Epilogue がついているので、章の数はほぼ同じ。どちらも60%ほどで本文が終わってしまっていて、あとはながーい注が続くところも、この間読んだ "Newton and the Counterfeiter" と同じである。

主人公でいえば、前者は C. Shannon, 後者は J. von Neumann ということになる。どちらもそれ以外の人や「情報理論」と「コンピュータ開発」以外のテーマもふんだんに出てくるが、Dyson本で占めるノイマンの役割と比べると、Gleick本でのシャノンの役割はやや小さい。というより、それ以外の話題がとても多い。たとえば、Oxfordなどの辞書の話、BabbageとAidaの話、モールス信号による電信の話、DNAやmemeの話、物理学のエントロピーの話、そして情報洪水の話など。やや散漫な感もあるが、18世紀末ごろに通信設備としてヨーロッパで建設された信号発信の櫓とそれらのネットワークの話や、それに続く電信設備の話のように、これまで知らなかった新鮮な話がいろいろある。バベッジが階差機関や解析機関の設計だけでなく、万能の天才で多彩な方面で活躍したことや、エイダの貢献ぶりなども十分には知らなかった。

Dyson本の方はもっと焦点が絞られていて、舞台はプリンストンにほぼ集中しているが、しかし南北戦争時代のこの地から話が始まるころは、やはり生半可なノンフィクションではない。このような米国を中心としたノンフィクションの出版物における調査への情熱と、それをまとめあげる能力にはいつも感心させられる。

この本で改めて痛感させられたのは、コンピュータ開発と原水爆の開発とがいかに密接に結びついて、両者が並行して進んできたかということである。その結合の中心にももちろんノイマンがいるわけだ。途中から水爆の開発に人道的な立場から反対したオッペンハイ

マーと違い、ノイマンはあくまで開発促進の立場を貫く。その点には不満を感じるが、コンピュータ技術については公開という原則を一貫させ、決して特許化しなかったのが後のコンピュータ普及につながった点は、評価できる。

ノイマンがとてつもない天才だったことには改めて痛感させられるが、53歳でがんで死んでしまう。チューリングは41で自死する。シャノンは84まで生きたが、晩年はアルツハイマーになる。ゲーデルが死んだのは71のときだったが、神経衰弱が嵩じて、ほとんど餓死だったという。こう見ると、大天才たちも晩年は幸福とは言えない。そういう感想が浮かぶのは、こちらが歳を取ったからだろうが。

とにかく、どちらの本も力作で、読むのに時間がかかったが堪能した。

渋谷陽一，松村雄策「渋松対談（赤盤）」（ロッキング・オン）

渋谷陽一，松村雄策「渋松対談（青盤）」（ロッキング・オン）

ピーター・バラカンの本のところでも書いたが、ツタヤでCDを借りるのに、クラシックやジャズはあまり品ぞろえがないので、ロックを中心にしている。この本もその参考として買った。

もとは渋谷が始めた「ロッキング・オン」という雑誌の連載ということだが、それを集めて単行本化しているのに元の文章の掲載年月が載っていない。「赤盤」と「青盤」と同時に出版しているが、どちらが前でどちらが後かも明示されていない。どちらにも「まえがき」と「あとがき」が付いているが、それぞれ同一の文章で、赤青の区分を示すようなことは書かれていない。ただ内容から、青盤の方が後らしいことが分かる。テーマがロックだからそのときどきの旬の話題ということが重要なはずだが、あえて時間を消しているのか。ただ、本としての出版が2011年で、青盤の最後の「対談」では2010年のグラミー賞やアカデミー賞を取り上げているので、期間の終わりは分かる。そして始まりは、赤盤の最初にこのシリーズの前作「渋谷対談Z」の製作が進んでいるという話があり、その出版年が2002年だから、どうもその年が始まりらしいと分かる。しかし、そういうことを読者に推定させるというのは不親切な話だ。

驚くべきことに対談と銘打ちながら、実はどちらか一人が書いているという裏話が「まえがき」と「あとがき」で明かされている。どちらが書いたかは各文章の最後にイニシャルを入れて、分かるようにしている。しかし、文体や内容だけからではどちらが書いたか分からない。それは長年やってきた（35年続いているのだという）熟練によるものだろう。そういえば、菊地成孔と大谷能生によるマイルス・デイヴィスを題材にした駒場での講義録を2011年に読んだが、それもアドリブ満載でいかにも講義の録音をそのまま起こしたように見えたが、実はきわめてよく計算された企みのもとに、第二

著者の大谷がすべて書き起こしたものだということが白状されていた。ロックやジャズについての文筆家には、そういう才能があるのだろうか。

渋谷がもっぱらレッド・ツェッペリン派で、松村がビートルズ派ということになっている。それまでも虚構ではないだろうが、とにかく彼らが自分より5年ぐらい下らしく、若い時に聞いた音楽を共有しているので親近感があり、新しいロックアーティストをこれで教えてもらっても、安心な感じがする。それでこの本に出てくる新旧のロック・アーティストの作品を、ツタヤでいろいろ借りた。その中には気に入ったものもそうでないものもあるが、とにかく情報として役に立った。

藤森照信，山口晃「日本建築集中講義」（淡交社）

藤森の本はかつてずいぶん読んだが、久しぶりに読んだこれは、画家の山口晃との対談形式で作られている。「講義」という名前が付いているだけあって、全部で13回分と大学の1学期分に当てはまるが、別に大学の授業として行われたわけではない。淡交社から出ている「なごみ」という月刊誌に1年12回連載されたものに、単行本化するにあたって「補講」として1回分を追加したという経緯らしい。

山口が漫画風の挿絵を多く描いている。どこかで見た絵柄だと思ったら、東大出版会のUPに連載されている漫画がこの人によるものだ

った。UPのものは「すずしろ日記」という題名だが、あまり読むことがなかった。本職の漫画家と違ってデッサン風の絵が何かうるさく感じられることと、やたら字が多いことが読む気をあまり起こさせなかったが、たとえば福田ひかりさんはこの「すずしろ日記」のファンだった。しかし今回は、ここに収められているやはり字の多い漫画を、残らず読んだ。

山口は東大出版会と縁が深いらしく、これまで「山口晃作品集」や「山口晃が描く東京風景 本郷東大界限」という本を出版会から出しているし、さらにUPの連載をまとめたものだろう「すずしろ日記」を、羽鳥書店から出している。羽鳥書店とは、東大出版会にいた羽鳥さんが定年で辞めた後始めた出版社である。

日本の建築を訪問して、それについて二人で語ったり、絵や写真を載せるというスタイルの本であるが、13のうち僕が行ったことがあるのは、法隆寺、旧岩崎家住宅、松本城、三溪園、西本願寺で、半分にも満たない。これを読むと、行ったことがないところはもちろん行ってみたくなるし、行ったことがあるものも再訪したくなる。

Jared Diamond, "The World Until Yesterday: What Can We Learn from Traditional Societies?"

この本は、出る前にアマゾンに予約注文し(2012/12/24)、予定より早く出たということで、今年の正月に届いた。しかし、何しろハードカバーで512ページの本なので持ち歩いて読む気になれず、しば

らくほっておいた。結局Kindle版を再購入し、この度それを読んだ。

Diamond 得意のニューギニアでの文化人類学研究がベースになっているが、他にも多くの伝統社会（未開民族社会という方がピンとくるが、差別的な古い言い方かもしれない）を材料として取り上げている。それらが「昨日までの世界」と呼ばれ、その比較対照となるものは現代産業社会、あるいは第一世界と呼ばれる。しかし、第一世界も時期的なずれはあるものの比較的最近まで「伝統社会」だった。そして現在もなお残る伝統社会から、第一世界のわれわれが学ぶことがあるのではないか、というのが本書の主要なメッセージである。

伝統社会をどう分類するかがまず問題である。Diamond の以前の著書でも出てきたと思うが、便宜的に次のような4分類を採用している。

- 1) バンド band: 数10人、多くの狩猟採集社会と一部の農耕社会
- 2) 部族 tribe: 数100人、皆が互いを知っている
- 3) 種族 chiefdom: 数1000人、皆が互いを知っているわけではない。
生産をしない酋長や政治組織が必要
- 4) 国家 state:

本書で扱われる伝統社会は主にバンドと部族である。そして境界と紛争およびその解決方法がまず大きなテーマとして挙げられる。二

ユーギニアでは絶え間ない部族間の戦争が行われてきた。それが詳述される。殺し合いが収まったのは、近年になってインドネシア国家がその支配力を強めてからだという。単純に人口当たりの戦争での死者数を比べても、20世紀の現代戦争における先進国の死者数比率より、これらの部族の死者の比率の方が高いという。一方で、めごと紛争の解決手段として、話し合い、調停のような仕組みが活用されるのは、当事者同士が顔も知らないで進む現代の司法制度より、はるかによい面があるという。

続いて子育ての仕方、姥捨てを含む老人の取り扱い、危険への対応、宗教、言語、食べ物というテーマが取り上げられ、伝統社会でのやり方（それはもちろん部族、地域、時代でも違う）と国家社会でのやり方が比較される。中でも面白いのは宗教の話で、これはDiamondのオリジナルではないが、宗教の民族間での共通性、何をもって宗教と呼ぶか、また時代によって宗教のどの機能に重点が置かれてきたか、という視点からさまざまな議論が行われる。その機能の一つは、国や民族や世界の始まりを説明するものだが、人類はこの「説明」を求める特性で進化してきたので、説明の多くの部分が「科学」に取り変わり、宗教のこの機能は昔と比べれば比重が減った現代でも、まだ一定の役割はある。それに比べて、不安の解消、慰安の提供という機能は現代に至ってむしろ役割を強めている、というのは当たり前のことかもしれないが、納得がいった。というより、むしろ宗教のこのような機能的解釈（これも古くからい

ろいろな人が言っていることではあるが），に得心するところがある．

言語については，たとえばニューギニアでは1000の言語があるという．したがって，ほとんどすべての人が多言語使用者である．世界に7000の言語が現在あるが，それらの多くは絶滅に瀕している．しかし，Diamond は多言語使用の有意義性を強調する．

今年のNHKで5回にわたって「病の起源」という特集番組が放送され，がん，脳卒中，うつ病，心臓病が取り上げられた．本書でも同様なテーマが議論されていて，そのネタは Eaton, Konner, Shostak による “Paleolithic diet” という研究であることが分かる．狩猟採集社会に適するような進化を遂げた人類が，食物が豊富になり，また食事内容が変化した現代で，原始から受け継がれた特性が，いかにこれらの病の原因となってきたか，という論である．

2012年

青柳いづみこ「グレン・グールド 未来のピアニスト」（筑摩書房）

去年の11月に孝子と渋谷で「グレン・グールド 天才ピアニストの愛と孤独」というドキュメンタリー映画を見た。この本はその前に買ってあったのだが、映画を見たのはこの本を買ったこともきっかけの一つだったかもしれない。

本としてはそれより後に買った菊地・大谷の「M/D」を先に読んだが、マイルス・デイヴィスとグレン・グールドには意外に類似するところがある。まず、世代がだいたい同じである。グレン・グールドは1932年生まれ、1982年没、マイルス・デイヴィスは1926年生まれ、1991年没。だからグールドの方が後から生まれて先に死んだのだが、活躍した時期はほぼ重なる。グールドがコロンビアから「ゴルトベルク変奏曲」で衝撃的なレコード・デビューを果たしのが1955年。同じ年、マイルスも同じコロンビアから初のメジャー・デビュー・アルバムを出す。マイルスは1975年から1980年まで活動を休止し、グールドが死んだ1982年は6年間のブランクの後、活動を再開した直後になるが、それを考えれば活動の終わる時期も、同じようなものともいえる。

本書でマイルス・デイヴィスの名前が出てくるところが、一か所ある。それは引用だが

「初期の記事は、グールドを新種の、「クールな」クラシック音楽家として描いた。つまりチェット・ベーカーやマイルス・デイヴィスのようなクール・ジャズ演奏家および知的ビーバップから派生したピアニストとして描いたのである。まもなく、批評家たちは、グールドを「音楽の最も成功したヒップスター」、そして「一種のジェイムズ・ディーン・カルトの対象」などと呼ぶようになる。」
(p.62)

これはケヴィン・バザーナ「グレン・グールド神秘の探訪」から引いているものである。青柳はジャズにはあまり関心がないらしく、即興性などの議論でもっとジャズの話が出てきてもよさそうな気がするのに、ほとんど触れていない。

しかし、モダン・ジャズが作曲者よりも演奏者が全面に出る音楽であることと、グレン・グールドが新たに切り拓いた演奏者の役割とは、重なるところがあるだろう。しかし、いくらグールドがたとえばモーツァルトのピアノ・ソナタをおそろしく奇妙に弾いたところで、ジャズでスタンダード・ナンバーをダシにして自由に楽想を展開するのと比べれば、あくまでも元の譜の制約には従ったものである。

グールドは1964年を最後に、演奏活動をやめもっぱら録音で作品を制作する。そういえばビートルズも1966年を最後にツアーをやめているが、これはとくに意味のある符合とは言えないだろう。しかし、マイルスにはテオ・マセロという強力な技術者・編集者がい

て、二人で録音に精密な加工をしてアルバムを制作したように、グールドもとくに演奏活動をやめた後、スタジオにこもって自ら細部まで編集をしたという点も、現代の音楽家として重なるところである。

ツタヤで借りられるクラシックのCDは少ないが、さすがにグールドは多少あったので、マイルス同様にいくつか借りてきた。モーツァルトはそれで初めて聴いた。しかし、以前10枚組2000円ぐらいの超廉価のグールド・ボックスを買ったことがあり、しかしそれらのほとんどは音が悪いのであまり聴いていなかったが、青柳が本書で取り上げる演奏活動期の録音がかなり入っているのに気がついた。たとえば1955年より前の、1954年録音のゴルトベルクもこれに入っている。

渋谷で見た映画のことは、「あとがき」で触れられている。コーネリア・フォスとその子供たちとの四年半の同棲生活の実態は、青柳も映画で初めてよく知ったらしい。

菊地・大谷のジャズ史観は、プレ・モダン、モダン、ポストモダンという区分に基づいていた。本書でもやはりバザーナの言葉として、「グールドはポスト・モダニストなる言葉が存在する以前から、ポスト・モダニスト」を引用している。このモダンやポストモダンが思想や建築で言うそれらとどう関係するのか、時代的にはどう重なりまた離れるのかよく分からないが、とにかくこのあたり

も、多くのマイルス本とグールド本で比べてみると面白いかもしれない。

宮沢賢治，谷川徹三 編「童話集 風の又三郎 他十八篇」(岩波文庫)

「銀河鉄道の夜 他十四篇」を読んでから少し間があいたが、これを読んだ。ここに収められているもので中学時代に読んだのは、「風の又三郎」「セロ弾きのゴーシュ」「グスコブドリの伝記」だが、これらは確かに完成度が高い。

もちろん、50年前に読んだときの記憶はほとんど残っていないが、「風の又三郎」だけは何か思い出すところがある。さすがによく知られているこれらは、ここに収められている十九篇の中でも傑作だ。それ以外で感心したのは、「雪渡り」である。話としても気持ちのよい作品だが、「堅雪かんこ、しみ雪しんこ」に始まる数々の歌の調べが素晴らしい。その歌に乗って、幼い兄妹の四郎とかん子が狐とともに踊る情景が心に残る。途中で一郎から三郎という三人の兄が出てきて、一緒に狐のところに遊びに行きたいというと、狐からもらった入場券に十二歳以上は来場お断りと書いてあるので、だめだということになる。そこで兄たちが怒って意地悪をするのかと思ったら、そういう展開にはならず、三人の兄たちはそろって二人を見送り、また帰ってきたときに、暖かく出迎える。そういうところも読んでいて気分がよくなる。

瀬山士郎「はじめての現代数学」(早川書房)

日経で竹内薫が薦めていたので買って読んだ。もとは1988年に講談社現代新書として出たものを文庫化している。その間に3次元ポアンカレ予想が解決したので(2003年)、3章の章末に注の形で付記されているが、それ以外は新書版のまもらしい。

去年、高木貞治「近世数学史談」を読んだとき、自分の人生で数学にもっとも真剣に取り組む可能性もあったのにそうしなかったという感慨を抱いたが、本書でもまたそれを感じた。高木の本が主に19世紀前半の数学を扱っているのに、この本は20世紀に中心をおいている。ただ、導入として代数方程式の解法や非ユークリッド幾何や解析における無限の取り扱いを、第1章で書いている。その後は、カントールの集合論、トポロジー、ゲーデルの不完全性定理、さらにまとめてファジー理論、フラクタル、カタストロフィー、四色問題に触れている。これらについては皮相ながら知識があり、かえって高木の本の方の関数論についてはほとんど知識がなかったのは、面白い対照である。

立石泰則「さよなら!僕らのソニー」(文春新書)

立石の本は、1993年に「覇者の誤算―日米コンピュータ戦争の40年」というのを読んだことがある。あれは単行本で上下合わせて800ページぐらいの大冊だったが、これは新書である。ソニーが出井、ストリンガーのもとでいかにダメになったかを書いている。

企業の成功・失敗は、経営者の手腕によるところが大きいかもしれない。しかし結局後づけの議論ではないのか、という感じも強い。この本では、創業者の井深、盛田は偉大で、出井、ストリンガーが悪いということになっている。一方で、立石は世の中の経営学書は後から抽象化する議論だから意味がないという。しかし、エレキ（電化製品）を捨ててエンタメ（映画、音楽産業）を指向したのが失敗のもとという解釈は、ずいぶん単純ではないか。アップルの成功は製品を内製せず、音楽配信などのソフト・ビジネスに手を広げたからではないのか。

アマゾンの読者評をたまたま見たら、本書で悪く書かれていない大賀も久多良木も、戦犯だというものがあって、妙に説得力があった。結局、ビジネスの失敗を経営者のよしあしのみで帰する議論となれば、戦犯探しになる。そして、それは確かに話としては面白い。しかし、テレビが大赤字なのはパナソニックも同じである。要するにサムソンやLG電子の韓国勢に負けているわけだが、それは昔、日本勢がテレビで米国の電器メーカを打ち負かしたのと同じ構図だろう。

田中慎弥「共食い」（芥川賞、文芸春秋2月号）

今期の芥川賞は受賞者が二人だが、受賞時の記者会見で田中の方が一方的に話題になった。アカデミー賞で何度も候補になりながらなかなか受賞できなかったシャーリー・マックレーンが、実際に賞をもらったときに受賞して当然と言ったとかいう話を用意していたこ

ともともかく（田中も何度も候補になったらしい）、酔っているような口ぶり、早く会見を切り上げようと腰を浮かせる態度、都知事の石原へのあてつけ、などが受け、またそれ以上に記者たちは、高校を出てからいっさい外で働くことなく、母親と二人で家にこもって小説を書いてきたというオタクぶりに関心を集中させていた。

主人公は17歳の高校生。それに、セックス時に女に暴力を振るう父親と、その離婚した妻で主人公の母親、父親の現在の妻、少年のセックス相手の女の子、などが登場する。舞台となる澱んだ川辺の風景描写やクライマックスの盛り上げはうまい。選考委員の誰かが書いていたように、登場する3人の女の描き方も生き生きとしている。しかし、全体に滅入るような世界だ。中上健次を連想するというような評があるようだが、中上のような爽快さはない。

円城塔「道化師の蝶」（芥川賞，文芸春秋2月号）

略歴を見ると東北大学理学部卒業後、東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了とある。物理が専攻らしい。受賞者インタビューという記事があるが、それを見たら金子邦彦の研究室にいたと書いてある。そこでポストクまでやっているのだ。しかも、今読んで気がついたが、金子は自分でも小説を書いていて（初耳だ）、その小説に出てくる「円城塔李久」という物語生成プログラムからペンネームを付けたという。どうりでこの小説にも数学者ペアノが作った無活用ラテン語という人工言語や自己言及のパラドックスなどが出てくるわけだ。

きわめて実験的な小説で、田中慎弥とは対照的だ。途中までは面白いと思って読んでいたが、真ん中辺から退屈になった。なにせ長い。田中の「共食い」が34ページで、これは40ページ。意図的に読みにくく書いているので、この差以上に長く感じる。

蓮實重彦「映画論講義」(東京大学出版会)

2009年の初めに淀川・蓮實・山田の対談「映画千夜一夜」を読んでいるが、そのきっかけになったのが、2008年に出た蓮實のこの本である。というよりこの本の出版に合わせたUP誌の企画で、久保田智子が蓮實にインタビューしたもののなかで「映画千夜一夜」の話が出ていた。それでこの本もその当時買ったのだが、ずっと忘れていて、思い出して読み始めたが、寝る前にベッドで読むのが主だったため、読み切るのに時間がかかった。いろいろなところに書いたりしゃべったりしたものを集めたもので、一つ一つは短いが、本としては500ページ近くある。

いつものように蓮實らしい気取りと自信に満ちた文章が続く。慣れてくるとあまり嫌味にも感じなくなる。クリント・イーストウッドを評価しているのがちょっと意外だったが、共感できた。

安西祐一郎「心と脳－認知科学入門」(岩波新書)

安西さんの退職記念講演会と記念祝賀会という催しが、1月20日にあった。委員会とぶつかって講演会は行けなかったが、祝賀会には出た。500人規模の大パーティーだったが、その出席者一人一人に

記念品としてこの本が配られた。僕も真似をして、3月27日の退職記念パーティーでは、だいぶ規模が違うが50名弱の出席者に自分の本を配った。

副題に認知科学入門とあるように、認知科学の全貌を概説したもののだが、新書としては300ページあって、かなり読みでがある。しかも記述が terse で、きちんとはしているが読みにくい。並行して Steven Pinker の “How the Mind Works” を読んでいたが、ほとんど同じテーマといえるのに、その書き方はまことに対照的である。Pinker の本は実にサービス満点で面白く読めるが、この本はかなりつらい。

しかし、学部長、塾長と長年大学行政のトップを務めて超多忙であった中で、このような本を単著で書くというのは立派である。ちょっと分野が違っているので、ここでサーベイされている多様な研究が、取り上げる範囲としても内容としても適切なのかどうか判断しにくいところはあるが、かなり本格的な感じはする。

ただ、岩波新書という一般知識人相手の本にしては、面白みに欠けるのが難点だ。

坂村健「不完全な時代 一科学と感情の間で」（角川Oneテーマ21）

自分の「ソフトウェア社会のゆくえ」を送ったら、すぐに礼状とともにこれが送られてきた。

同じ慶応スクールの安西の本と、新書という形態は共通するが、いろいろな意味で対照的な書である。まず、文体。読みやすさ。時事性。しかし、あちこち鋭い指摘があり、坂村の眼と勘のよさが光る。大部分は震災前に書かれた文章がもとだが、震災後に出版したために、それに合わせてうまく編集している。

坂村は意外にブッキッシュなところがあるが、その「教養」の母体はSFで僕がほとんど知らない世界である。

Steven Pinker, “How the Mind Works”

Pinker のこの本は1997年に出ていて、出てすぐかどうかは分らないが、とにかく駒場に移った早い時期に、つまり1990年代に購入した。しかし、ハードカバーの分厚い本で持ち歩くのに不便だから、ずっと手を出さないでいた。

Pinkerの本は、2004年、2009年などに、これまで合わせて4冊読んでいるが、そういう理由でこれが後回しになったのを、駒場の本を整理したときに思い出して、今年の初めから読み始めた。しかし、駒場の最初の5年ほどの間に購入した本は図書館に登録されているので、除籍処理が必要だと僕には気づかないことに福田さんが気づいてくれて、100冊ほどを係に提出した中にこれが入っていた。それで改めてソフトカバーのものを買って読むことにした。

ところが、なにせ600ページあり、電車の時間が長いといってもほとんど原稿書きや査読や授業準備などの仕事に当てているので、きわめてゆっくりとした進行となり、駒場から法政に移って3か月、ようやく読み終えた。安西さんの本を読んでいたときに並行して読んでいたので、いくら分量に大きな違いがあるとはいえ、遅れること4-5か月である。

しかし、やはり Pinker は面白い。まず、認知科学は脳の動作を計算する機械として理解することで、大きく進歩したという。それが第一の視点である。そして第二の視点は、人間の脳も他の器官と同様、ダーウィン流の進化の原理で現在の構造と機能を獲得したということである。

この第二の立場から、ヒトの思考、感情、こころの働きを、再構築（リエンジニアリング）する。その鍵は、生物の生存に情報が重要な要素であるという命題が握っている。眼の構造や立体視がどのように進化したか、という問題に第3章は大きなスペースを当てているが、それはこころの発達と進化を結びつけるためである。人の様々な活動、たとえば発明・発見、犯罪・戦争・倫理・幸福追求・献身、家族愛、などがリエンジニアリングされる。

それらの話を展開させる Pinker の手腕は、いつもながら卓絶している。浩瀚な知識、面倒を厭わない表現方法、読者へのサービス精神、などが総動員される。たとえば音楽について書いているが、そ

ただ、Douglas Hofstadter などと比べると、クラシックよりポップス系を中心に行っているところに特徴があるが、

内容としては、Jared Diamond や Matt Ridley の書くものと重なる。そして、これらのものを読むと、昔は哲学の大問題だったものが、みな進化論、脳科学、言語学などの「科学」で取り扱えて、解答が与えられるのではないか、という印象を受ける。

ところが、最後の The Meaning of Life と題する章で、意識はどうして生ずるか、自己とは何か、自由意志とは何か、意味とは何か、道徳はなぜあるか、という問題は、とても答えが出ないものだという。これに対して人類は、宗教に解答を求める、これらはそもそも問題ではないとする、それらを解答可能な問題に帰着させる、という3つの方法のいずれかで対応しようとしてきた。そのいずれもが満足できる結果を与えない。そこで Pinker は、これらの哲学問題は人類の脳にはそもそも取り扱えない問題なのだとする第4の立場に近いという。人は短期記憶に1万語を記憶できないし、紫外線を見ることができない。ものを4次元空間で回転させることを想像することもできない。それらと同じで、自由意志や知覚の問題は、人間の脳が本質的に解答を与えられない問題ではないか、という。これは意外だった。何か釈然としないが、進化論で何でも説明できるという立場でないことは、Pinker が誠実であることの証かもしれない。

朝日新聞特別報道部「プロメテウスの罫―明かされなかった福島原発事故の真実」(学研)

朝日新聞は明確に反原発の立場である。それにしては、菅直人が首相として浜岡原発の停止命令を出したとき、朝日は全面的に支持を表明してもよさそうなものだったのに、「天声人語」でも持って回った言い方をして、賛成なんだか反対なんだかわからなかったが。

それに対して、僕は「反原発」ではない。福島事故はひどいし、それで家を捨てて避難させられている多くの人たちは、本当に気の毒だと思う。しかし、原発をすべてやめて他の電源に頼るのが本当に良いのか。火力は現にコスト高の影響が如実に出ているし、ついこの間までグローバルな大問題とされていた地球温暖化、大気汚染のこともある。太陽光や風力などの自然エネルギー発電にもさまざまな欠点がある。大飯原発が7月になって再開したが、やむをえないこと、というよりむしろ電力需給を考えれば当然の結論だったと思う。

しかし、原発に関しては世論は二分されている。朝日新聞を読んでいると反原発が優勢のようにも見えるが、福島原発事故後1年の現時点では、原発推進を声高に唱えるわけにはいかないだろう。しかし、この問題で大きく意見が割れていることは確かである。他にも消費税値上げ、TPPという問題で政治家や国民の意見が割れているが、現総理大臣の野田は思いのほか信念をもって決断し、民主党内

の分裂と自民党などの野党からの批判という困難な状況の中で、健闘していると思う。

しかし、原発のように強い対立がある問題については、面白いことに自分でも反対派の論説に対して「またか」という感覚で、それをよく検討しようという気が薄れる傾向がある。それではいけないと、新聞連載時にはほとんど読まなかったこのシリーズが本になったところで、買って読んでみた。この連載はまだ続いており、次々と本になるだろう、その最初の1冊である。

この連載の方針として、事実にごだわり主観を省く、わかりやすく書く、国民の視点で書く、官の理屈に染まらない、という立場を取ることを決めたという。しかし、原発賛成か反対かという二元論的の一方に視点をおいて書く限り、主観を省くというのは難しいはず、というよりそれではレポートの価値もなくなるはずだ。本書でも随所に主観的な表現がある。また、記者会見などで記者から批判的な質問としてよく出される「国民の視点から見て問題ではないか」というような表現に対しては、そこで言う「国民」とは誰なのか、新聞が国民を代表しているのか、という違和感をしばしば覚える。

とはいっても、この本で教えられたことはいろいろあり、興味深く読んだ。ただ、「目線を下におき、為政者から見た動きでなく、ふつうの国民の視点で書く」という方針ながら、もっとも面白かつ

たのは第6章の「官邸の5日間」という震災直後5日間の首相官邸における動きを追ったところである。ここで例の東電の撤退問題、ベントや海水注入の遅れなどの状況が、迫真をもって語られる。意外なことに、ここに描かれる菅直人は、宰相らしく的確に判断し果敢に行動しているという印象を与える。実際、「おわりに」に「4月以来、国の原発対応が杜撰だった点を首相の責に帰す報道が続いていた。第2シリーズの取材をされていて感じたのは、それへの違和感だった。ことはそう単純ではないのではないか」と書いている。そして問題はむしろ、官僚機構の無責任さにあるとしている。

現在、国会の原発事故調査委員会、東電の事故調査委員会、政府事故調査委員会、民間の事故調査委員会と4つの報告書が出ているらしいが、それらの間で認識にかなりの差があるらしい。この朝日の連載もそれらの調査と並行して行われ、相互に影響を与えてきたようだ。しかし、この記事がまだ連載継続中であることは、中でももっとも息が長い活動と言えるかもしれない。

松本哉「寺田寅彦は忘れた頃にやって来る」（集英社新書）

中学生のころに、寺田寅彦をかなり読んだのは、親父の影響である。探してみると、昭和35年4月15日第25刷発行という岩波文庫の「寺田寅彦随筆集 第一巻」が出ててきた。確かに自分が中学1年のときに発行されている。これを親父が買ってきて読むことを勧めたんだと思う。星三つの本で、この時代星一つが40円だったらしく、120円である。

しかし、すぐには読まなかった。小宮豊隆が時代順に編んでいて、冒頭にあるのが「団栗」である。もう少し大人になって読めば美しさ哀しさを感じさせる文章だが、中学1年生にはピンとこなかったろう。だが、寅彦は19歳で夏子と結婚していて、この「団栗」に書かれているのは夏子との東京での短い結婚生活が送られた明治33年、22歳のころのことだから、歳としてはそれほど違わなかったのだが。

その後、何かのきっかけで、これに収められている「丸善と三越」「自画像」「芝刈」などを読んで、とても面白く感じた。それでやはり家にあった角川の昭和文学全集中の「寺田寅彦集」をかなり熱心に読んだ。こちらは昭和27年発行の親父の本である。

さて、この新書が出たのはもう10年も前の2002年で、そのときに買ったのだが読んでいなかった。長い時間かけたPinkerがようやくかたがついたので、積読の中から軽い本を探してこれを選んだ。内容だけでなく重さが軽いことに意味がある。毎日重い鞆を持ち歩くせいか最近左肩が痛いのだ。

しかし、このタイミングで読んだのは結果的に意味があった。タイトルからしても、寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやって来る」という言が本書の一つのテーマになっている。初めの方で、昭和8年に書かれた「津浪と人間」から何ヶ所か引用されている。昭和8年3月

3日に三陸地方で起こった地震と津波の災害を受けて書かれたものである。その37年前の明治29年に三陸大津波が起きている。

そして

「津浪にこりて、初めは高いところだけに住居を移していても、5年たち、10年たち、15年、20年とたつ間には、やはりいつともなく低いところを求めて人口は移ってゆくであろう。そうして運命の1万数千日の終わりの日が忍びやかに近づくのである。鉄砲の音に驚いて立った海猫が、いつの間にかまた寄って来るのと本質的の区別はないのである。」

という部分が引用されている。寅彦だけでなく、それを引用した松本も、今から見ると予言的だった。

実は、1992年、つまりこの新書を買うちょうど10年前に、「ちくま日本文学全集」という文庫本の文学全集の1巻として出されていた「寺田寅彦集」を買っている。これも半分ぐらい読んでそのままになっていたが、その最後に「天災と国防」という随筆が収められているので、ついでに読んでみた。これが書かれたのは昭和9年で、寅彦が死ぬ1年前、「津浪と人間」が発表された翌年である。そこにまた予言的なことが書かれている。

「しかしここで一つ考えなければならないことで、しかもいつも忘れられ勝な重要な要項がある。それは、文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその劇烈度を増すという事実である。

(中略)

文明が進むに従って人間は次第に自然を征服しようとする野心を生じた。そして、重力に逆らい、風圧水力に抗するような色々の造営物を作った。そして天晴れ自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然が暴れだして高樓を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危うくし財産を亡ぼす。その災禍を起こさせたものの起りは天然に反抗する人間の細工であると云っても不当ではないはずである。災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているものは誰あろう文明人そのものなのである。」

アインシュタイン同時代の物理学者とはいえ、核エネルギーを知らないこのときの寅彦は、「位置エネルギー」と言って高層ビルや堤防を意識して警告を鳴らしているが、今これを読めば誰しも原発事故のことを連想せざるをえないだろう。

新書に戻ると、軽いがそれなりに面白く読めた。著者は神戸大学理学部物理学科出身で、河出書房新社で物理、天文の専門書および啓蒙書の編集に従事したとある。それにしては熊本高校時代の寅彦の日記を引用して「長崎支店や南湖堂などに行きて Calculus [代数学の専門書] を売却し、その代にてバイオリンを買わんとせしも成らず」と Calculus に代数という注を付けているのはどういう訳か？この注はもちろん中学生の寅彦でなく松本が付けたものだろう。今

学期、Calculus の授業をやる羽目になった（しかしそれを楽しめた）自分としては、ひっかかる。

第3章に志村の別荘の話が出てくる(p.57)。そこで鶴ヶ谷真一の「書を読んで羊を失う」が参照されている。この本も2000年に読んだことを思い出した。それでそれに収められている一篇「丘のうえの洋館―寺田寅彦」を読み返してみたら、

「中学生のころ、家にあった「昭和文学全集」の第三巻、「寺田寅彦集」によって、この随筆家のおもしろさを知った。」

と書いていることに改めて気づいた。鶴ヶ谷は1946年生まれなので、ほぼ同世代。だから同じような体験をしても不思議ではないが、

朝日新聞特別報道部「プロメテウスの罠2―検証！ 福島原発事故の真実」（学研）

この朝日新聞朝刊の連載はまだ続いているが、早くも2冊目の本が出た。2012年6月8日までの連載分をまとめたという本書が、奥付によれば7月17日に発行されている。しかし、僕がアマゾンにこの本を注文したのは7月9日で、7月10日にはもう届いている。

今回は、第8章「英国での検問」で日本からイギリスやフランスに使用済み核燃料を送って再処理してもらい、それが日本に送り返されるという仕掛けを、とくに英国の再処理工場や、運搬会社取材してレポートしたものや、第9章「ロスの灯り」で核燃料サイクル

基地となったむつ小川原の開発経緯の記録など、福島原発事故とは直接には関係しない話も取り上げられている。そして、とくにその第9章が面白い。下北に一大工業地帯を作ろうとした北村正哉と地元で反核燃運動を展開した菊川慶子という二人の人物に焦点を当てて描いているところに工夫がある。ただし、この二人が直接接点を持ったという記述はない。

北村は青森県議としてロスアンジェルスを視察して、青森を豊かにするには巨大開発プロジェクトを起こすしかないと思い定める。その後、新全総の一環として「陸奥湾・小河原湖大規模工業開発」を発足させることに成功するが、実際に下北に来る大手企業がなく、計画はとん挫する。青森県知事になっていた北村は、やむをえず工業予定地に核燃料サイクル基地を受け入れることを決める。

菊川は六ヶ所村の開拓民の家に生まれた。豊原と呼ばれる開拓地は、樺太の豊原からの引き揚げ者たちが開墾したことに由来する。菊川は中学卒業後、集団就職列車で上京し東京で働く。家庭を作って松戸に住んでいたが、岐阜で「高度差利用農法」を始めようと思い、家族も説得し土地も購入していた。しかし、雑誌「現代農業」で「反核 反原発 ふるさと便り」という特集を読み、一家を連れて六ヶ所村に帰ることを決心する。そして「女たちのキャンプ」運動や情報誌発行などをする一方で、チューリップ栽培などの農業を行う。

この章の書き方は、北村を批判の矢面に立て菊川をヒロインとするわけではなく、両者の行動を客観的に並行的に扱っている。とくに北村の方に多くの紙面をあて、青森県民の暮らしを向上させようという信念による行動という点に理解を示して、必ずしも否定的には描いていない。ただ、核燃料の再処理、リサイクルという計画がいかにうまく行っていないか、そして廃棄物の処理にどれほど膨大がコストがかかっているかは、よく分かった。

菊川の話の中で印象に残るのは、当初野菜作りで食べていこうとしたが、生産地が六ヶ所村というだけで販売業者に断われたということである。そのころは、村にまだ放射性物質は何一つ運び込まれていなかったのにである。今、福島でも風評によって農作物の価格が4割減になっているという。こういう風評被害や、宮城・福島の瓦礫の他県での受け入れ拒否、というような実態に、もっともやりきれない気持ちができる。

サイモン・シン、青木薫 訳、「フェルマーの最終定理」(新潮社)

読書とは何だろうかとつくづく考えさせられる体験だった。

夏学期に解析の授業を担当したこともあって、数学に久しぶりに接した。それで本棚にあったこの本を読んでもみる気になり、その内容と語り口のうまさに引き込まれて読み進んだ。5章か6章あたりまで来て、しかし以前にサイモン・シンの本を読んだことがある、それ

も翻訳で読んだはずだと思って、過去の「書評」のファイルを検索したら、驚くべきことに検索で見つかったのはこの同じ本である。しかも読んだのが2000年だから、12年しか経っていない。それなのに200ページぐらい読んでも初めての読書という気持ちでいたのはどういうことだろうか。情けないと言えば情けないが、これからの余生、昔読んだ本も十分楽しめるという教訓と前向きに受け止めることにするか。

感想は前と変わらないが、7年間、ほぼ一人で朝から晩まで取り組んだという集中力に改めて感心した。今、大学の方は時間的にかなり余裕があるので、この数十分の一かの集中力を自分でも持てれば、新しい研究ができるはずである。

ピーター・バラカン「ぼくが愛するロック名盤240」（講談社+アルファ文庫）

駒場にいた頃は、よく渋谷のツタヤでCDを借りた。渋谷のツタヤは在庫が豊富だが、クラシックはほとんどない。だから借りたのはほとんどジャズか昔のロックである。たとえば菊池・大谷のマイルス・デイヴィスものを読んで、ツタヤからせっせとCD化されたマイルスのアルバムを借りた。

渋谷で降りる必要がほとんどなくなったため、ツタヤに寄ることもめっきり減った。そこで、ツタヤのオンラインによるレンタルシステムを使ってみることにし、TSUTAYA DISCASというのに登録し

た。月額2000円ちょっとの会費で、月DVDかCD8枚までが借りられる。それ以上も追加料金を払えばよい。キャンペーンとして最初の8枚を無料にしている。

登録してしまってから、いざ借りてみようとしてリストを検索すると、案外借りたいものがないことに気づいた。やはりクラシックは貧弱である。ジャズはすでにビル・エバンスとマイルス・デイヴィスはあらかた集め、コルトレーンもある程度持っているので、今のところそれほど食指が動かない。そこでロックということになるが、渋谷ツタヤからめぼしいものはすでにかなり借り出している。たとえば、レッド・ツェッペリン、キンクス、ローリング・ストーンズ、フー、ディープ・パープル、ビーチ・ボーイズ、クリーム、エリック・クラプトン、ジェフ・ベック、ジミー・ヘンドリクス、ボブ・ディラン、バース、ジェファースン・エアプレイン、ピンク・フロイド、サントナ、スティーリー・ダン、ダイア・ストレイツ、フリーウッド・マックなど。また、昔の名前を思い出して検索してみると、検索に引っかからないか(検索機能に柔軟性がないせいもある)、見つかって在庫切れ、ということで、申し込んだのは浅慮だったかという気にもなった。

それで、クラシックでもジャズでもややブッキッシュな僕としては、本にヒントを得ようと考えた。そこで思いつく名前は渋谷陽一とピーター・バラカンである。アマゾンで3冊本を買ったが、その1冊がこれである。

通読するような本ではないかもしれないが、しばらく拾い読みをした後、結局通して読んでみた。240のアルバムの紹介だから、1枚当りは8行ほどしか文章が書かれていない。それでもバラカンの半生を追う形で紹介されるので、イギリス生まれの著者がどのような音楽をロンドンで聴き、どうして日本に来たかという私生活が、わずかながら垣間見られるところに多少の面白さがある。

1960年代、70年代、80年代、90年代のロックが紹介される。すべてがイギリスかアメリカのもので、なかにはジャマイカ出身のアーティストもいるようだが、アルバムはすべて英米で作られ、歌は英語のものだけである。バラカンはYMOの事務所に勤めていたことがあるというが、日本産のものは240に入っていない。当人は最近（この本は1998年に出ている）ロックよりブルース、ソウル、R&B、レゲエなどに関心があるといい、それに近いものもいくつか入っている。

マイルス・デイヴィスのイン・ア・サイレント・ウェイも入れている。とにかく、よきにつけあしきにつけ、偏っている。まえがきに自分で書いているが、

「さて、ここで選んだ作品でいちばん不思議に思われるだろうと予想しているのは、欠落している部分だ。レッド・ゼペリンも出てこない、ディープ・パープルも出てこない、デイヴィッド・ボウイも出てこない、クイーンもマーク・ボランもピンク・フロイドも出てこない。」

それだけではなく、自分のこの手の音楽を聞いていた時期との関係で、60年代、70年代はまだしも知っているアーティスト・作品がかなりあるが、80年代以降になるとぐっと減る。しかし、その辺を補うというのがこれを買った意図でもあった。

大栗博司「重力とは何か アインシュタインから超弦理論へ、宇宙の謎に迫る」（幻冬舎新書）

村山斉「宇宙は何でできているのか」で当てた幻冬舎新書が、同様の分野で出したこの本も、かなり売れているらしい。大栗はCalTechに勤めているが、村山のカブリIPMU機構にも所属し、村山から執筆を勧められたらしい。

内容は重力をテーマとして、特殊相対論、一般相対論、ブラックホール、量子力学、超弦理論と重厚である。大栗は

「相対論の啓蒙書は数多く出版されていますが、本書はそうした本を読んでいなくてもわかるように書きました。そのときに心がけたのは、「ごまかしをしない」ということ、また、私自身が納得できるように、これまでにない新しい説明の仕方も工夫しました。」

という。その意図はかなり成功している。英語で書かれたものには、Brian Greene のようにごまかさず、その代り冗長なくらいに言葉を費やして書かれる啓蒙書が多いが、日本語では珍しい。本書は新書ながらかなり Greene ものに近い。

ただ、やはり啓蒙書だけ読んでいても理解は皮相なものでしかない。いずれはもう少し理論的なレベルで理解したいものだが。

重力子の発見に関して、駒場にいた米谷民明の名前が何度か出てくる（p.214など）。米谷が理論物理で優れた業績のある学者であることは、最終講義を聴講したので知ってはいたが、改めて駒場には多彩な人たちがいたのだと感じた。

Richard North Patterson, “Eyes of a Child”

夏の読書としてミステリを選ぶのが続いている。一昨年は Le Carre, 去年は Greene, そして今年は North Patterson.

Patterson は2001年に “Degree of Guilt” を読んだ。それより前、1996年頃に同時に2冊を買っているらしいが、買ってだいぶ経ってから1冊読み、それから11年後にこれを読んでいることになる。この本の存在を思い出したのは、荻布さんが今年の5月ごろ、この本を読んだことをブログで書いていたからである。

手の込んだ話を破綻少なくまとめているという感想は、11年前の “Degree of Guilt” に対するものとまったく同じである。小説の長さも、前のが534ページと書いているが、これは565ページとさらに長い。2002年に John Grisham の “The Rainmaker” を読んで Patterson と比較したりしているが、その Rainmaker の長さが568ページと書

いているところを見ると、この手の本には長さに暗黙の標準があるのか、という気がしてくる。

高野明彦，吉見俊哉，三浦伸也「311情報学—メディアは何をどう伝えたか」（岩波書店）

8月に軽井沢に行ったとき、比較的最近できた千住博美術館に行ってみたら、そこでばったり高野さんに会った。この本は、8月29日発行で、会ったばかりでもあるし、吉見さんも情報学環で一緒だったからよく知っているので、早速買って読んでみた。そして、今学期に開講している「社会と知能」という授業の第1回目のネタにもした。現在の情報社会を考える題材として、タイムリーと思ったからである。

最初に吉見さんが、総論的なことを書いている。そこでは、3.11にまつわる情報の問題を、マスメディア、インターネット、アーカイブ化、グローバル性という4つの側面からまとめている。3.11がマスメディアとインターネットでどう報じられ、またそれらの情報がどう利用されたか、というのが1つの視点である。そして、膨大な情報をいかにアーカイブ化して、しかも即時に利用するかという点と、情報はもちろん全世界に行きかったが、たとえば日本における報道のされ方と海外がどう異なったか、というのが別の視点である。

これらの情報は5つの圏で取り交わされたという。その圏とは、日常生活圏，マスメディア圏（テレビ，新聞），インターネット圏（メール，ウェブ，SNS），専門家圏，行政機構圏である。そして圏ごとに語り口が異なる。

これらは吉見さんらしい優れたまとめだが，あくまでも総論である。しかし，高野さんとの出会いを書いているところは，この共同研究，そして結果の一つとしての本書の成り立ちを語って興味深い。

江藤淳「南洲残影」(文芸春秋)

オフクロの実家の日渡家に伝わる南洲の書があるが，オフクロの管理が悪く，雨漏りのする廊下に置かれた戸棚の上に長年放棄されていて，ボロボロになっていた。時々，美重子叔母からあれどうしたというような問いかけがあったようだが，オフクロはものに手を触れないだけでなく，話題にすることも一切拒んでいた。そのまま袋に包んで保管し，オフクロの死後もやはりアンタッチャブルの状態で来たが，孝子が何かの伝手で古い書画の修復をする古賀さんという人を見つけ，試しに別のものを一度やってみてもらった後，この南洲の書を頼んだら，かなり時間はかかったがきちんとした仕事をしてくれてできあがってきた。見事に修復されている。

しかし，悲しいことに読めない。草書で書かれた漢詩らしきものである。前にちょっと見ていた「草書の覚え方」という本を引っ張り

出してみたが、にわか勉強の身では、それらしいと識別できるのはごく一部の字のみである。

インターネットで「西郷南洲先生詩集」という本が出ているのを知った。国会図書館や神奈川県立図書館にあることが分かり、アマゾンでは中古が5,000円よりとして出ていた。ところが出版元で直接販売していることに気づき、ウェブで注文して、送料込の代金約4,000円を振り込むとすぐに送られてきた。その本を始めから順に見えていって、144番目にこの書の詩を発見したときは、感激だった。「失題」となっている七言絶句である。

纔出都門稍散襟
緑葉蔭下碧溪濤
未炊丹洞胡麻飯
朝暮穿林半隱心

この本は大木俊九郎という人が編じて昭和33年に出版されたのを、西郷南洲顕彰会が平成9年に復刻したものである。その大木の註によれば、

「これは次の二詩と共に、先生四十七歳の明治六年の夏舎弟従道の目黒の山荘での作に相違ない。」

とある。今、従道の屋敷跡の一角は西郷山公園となっているが、代官山に住んでいたころはよく行った。これも何かの因縁だろう。

という経緯で、昔買ったこの江藤淳の本を読んでみた。最近、積読の本を改めて読むことが増えているが、この本も初版は1998年に出て、その年に買っている。しかし、江藤淳については、以前次のようなことを書いたことがある、

1992年に「朝日ジャーナル」が廃刊になったが、5月に出たその最終号について、

「ジャーナルを振り返る文章では、正確には文章ではなくインタビュー記事だが、安岡章太郎ものもいい。それに比べ、短い文章ながら江藤淳の書いていることは、実に嫌味に満ちている。

しかし、20数年前の自分は、朝日ジャーナルの何を読んでいたのだろうか。東大闘争については、中にいながらジャーナルの記事で経過を追っていたという面はある。連載で印象に残っているのは江藤淳の「アメリカと私」と高橋和巳の「邪宗門」だが、どちらも連載を読んでいたわけではない。」（“雑誌について”，SEAMAIL, Vol.7, No.1, 1992）

などと書いている。要するに江藤淳は好きでなかったのだが、ほとんどその文章を読んでいないので、嫌いだから読まなかったという因果関係だとしても、食わず嫌いという面もある。しかし、「南洲残影」を買っておきながら14年間も読まなかったのは、「嫌い」という思いの現れとも言える。

西郷を題材にしたこの本はしかし、ほぼ西南戦争だけを扱っている。そこで描かれる西郷像は、あまり強い印象を与えるものではな

い。むしろ、貴島清とか永山弥一郎とか桐野利秋とかの方が生き生きと描かれている。

福井健策「著作権の世紀」（集英社新書）

駒場の「情報科学概論II」で知的財産権の話を1回分やっていたが、現在、法政で担当している「社会と知能」でも著作権や特許の話を取り上げる予定である。それでしばらく前に買ったこの本を読んでみた。これが意外に面白い。

福井は芸術文化法や著作権法が専門の弁護士で、文化審議会の委員もやってきたらしいが、なかなか筆が立つ。その立場は、著作権は情報の独占制度だが、情報には独占になじまない面があるといい、声高な権利保護論者ではない。むしろそれを牽制する議論に特徴があり、そこに好ましさを感じる。

デジタル化、ネットワーク化で変容する著作権を巡る現状を、多くの具体例を挙げて説明する。たとえば、「村上隆対ナルミヤ」事件、「海洋堂フィギュア」事件、「槇原敬之対松本零士」事件、「おふくろさん」騒動。そして、著作権期間の延長問題、著作権自体のリフォーム論、強すぎるDRM、フェアユース、パブリック・ライセンスといった重大問題に、リベラルな視点から説得力のある議論を展開する。さらに、疑似著作権として寺社や公園の「撮影禁止」とか菓子・料理の「著作権」などを挙げているのにも目を開かれる。

福井健策「著作権とは何か」（集英社新書）

「著作権の世紀」が面白かったので、遡ってそれより前に出ているこの本も読んでみた。こちらは2005年に最初の版が出た本で、入門的色彩が強い。しかし、「模倣とオリジナルの境界」「既存の作品を自由に利用できる場合」「その権利、切れていませんか」という章の表題の立て方を見ても、ユニークさが分かる。

福井健策「ネットの自由vs.著作権」（光文社新書）

集英社新書から2冊出している福井が、同じようなテーマでこれを光文社新書から出している。この辺の著者と出版社の関係はよく分からない。

TPPがここに書かれているように知財に大きな影響のある問題であることを、初めて知った。第2章はこのTPPの話にまるまる当てられており、米国はTPPを通じて著作権などの知的財産権で米国の国益を押しつけてくると警告している。

増田俊也「木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか」（新潮社）

5月の下旬に駒場に行ったときに、生協の退会処理をする前に書籍部に行って3冊の本を買ったが、そのうちの一つがこれである。大宅壮一賞を取ったというので買ったのだが、何しろ厚いので(700ページ)、しばらく読まないでいた。

“Eyes of a Child”を読み終わってからこれに手を付けたのだと記憶するが、重いので外には持ち歩かなかったため、ちびちび読んで時間がかかった。しかし、それだけ長い時間楽しめた。

木村政彦と力道山戦という歴史的な事実は知っていたが、木村がこんなに強い柔道家であること、また戦前には寝技中心の高専柔道というのがあって、それが一世を風靡していたこと、その柔道がブラジルに伝わってヒクソン・グレイシー等のブラジリアン柔道につながっていることなど、知らないことばかりだった。

ここで「高専柔道」の高専とは、旧制高校と旧制専門学校のことを指す。6高が一番強かったらしいが、井上靖も1高で強い選手だったらしい。

この本は、あとがきによれば、1993年に木村政彦が死んだとき、すべてのマスコミが「力道山に負けた男」と報じたのに反発して書き始められたという。木村は負けたわけではないという思いが、表題にも表れている。しかし、著者が苦しみながら正直に書いているように、あの試合はいかに汚い手を力道山が使ったとは言え、やはり木村の負けだったと認めざるをえないというような結末になっている。

自身が北大で柔道をやって新聞記者になったという増田は、実に丹念に調査して多くの事実を掘り出している。またこれまでのさまざま

まな本や雑誌の誤りも指摘してる。ただ、ここに記述されていることにも誤りはきっとあるだろう。

柔道や格闘技にまったく知識がないのでそれに関してここがおかしいとは言えないが、たとえばロスアンジェルスからサンフランシスコに「南下した」(p.451)というような変な記述がある。

野崎昭弘「離散数学「数え上げ理論」」(講談社ブルーバックス)

今学期「離散数学」という授業を持っているので、参考のために読み、実際にいくつかの題材をここからもらって授業で使った。ブルーバックスだからかなり馬鹿丁寧に書かれているが、内容のレベルは低くない。この本は、2008年に出ているが、1936年生まれの野崎さんの元気さは大したものである。

関川夏央「二葉亭四迷の明治四十一年」(文春文庫)

二葉亭四迷の小説は読んだ記憶がない。しかし、日本近代小説の祖という文学史的な知識は中学生の時にしっかり頭に入っていた。国木田独歩の「武蔵野」などは読んでいたから、ツルゲーネフの訳という仕事も知っていた。それがために「獵人日記」を買って半分ほど読んだが、どうしても飽きて、最後まで読み通せなかった。今、探してみると、昭和36年発行の角川文庫で、確かに中学2年の頃のような。しかも、上下巻のうちの上巻しか買っていないらしい。訳者は中山省三郎という人である。

独歩の「武蔵野」に「たき火」という作品が入っているが、これは逗子の浜辺が舞台である。この関川の本で、独歩が逗子に住んだのは、佐々城信子との短い結婚生活のときだったことを、改めて知った。「たき火」はやはり中学1年か2年の頃、親父が音読してくれて、読みながら涙を流していたのが忘れられない。

親父と言えば、本書でも何度か引用される中村光夫の「二葉亭四迷論」がその蔵書の中にあった。ただ、僕は読んでいない。

たくさんの明治の作家が登場する。独歩のほかに、一葉、漱石、啄木、花袋、などなど。中でも坪内逍遙には四迷はずっと甘えっぱなしで、とくに苦しい時期になるとまめに手紙を出して、いろいろなことを頼んでいることも初めて知った。

しかし、本書は文学史、文学評論ではない。文学者を通して、明治という時代を浮かび上がらせようという意図の書である。とくに考証が細かく及ぶのは、収入がいくら、支出がいくらという、執拗なまでの経済調査である。

宇賀克也，長谷部恭男 編「情報法」(有斐閣)

これは放送大学大学院の講義用のテキストを改訂して、有斐閣から出しなおしたものだという。今、自分も同じ放送大学大学院のテキストとして中谷さんと一緒に書いた「ソフトウェア工学」の最終校正をしているところだが、岩波の「ソフトウェア工学の基礎」が絶

版となっている現在、この新しいテキストをいずれ別の形で出版する可能性もあるかもしれない。

昨年から内閣府の「情報保護評価サブワーキンググループ」の委員をやっているが、その座長が編者の宇賀克也さんで、自分は座長代理である。委員5名のうち、自分以外はみな法律家である。ただ、弁護士宮内宏さんはもとNECのSEだった人で、法科大学院を受け直して司法試験に通り弁護士になったという経歴なので、多少は技術系でもある。

もう一人の編者の長谷部さんは憲法学で有名だが、東大出版会の企画委員で一緒だった時があると思う。執筆者にも知り合いが多い。山口和紀、中川裕志、井上由里子。山口さんは「情報倫理」、中川さんは「データベースとコンテンツ」という章を担当している。山口さんにこの間、駒場であった時に聞いたら、法律家が担当する別の章と重複しないことに気を使ったため書きにくかったという。確かに、話題があちこちに飛んでまとまりにやや欠ける感じがする。逆に、中川さんの章では著作権の話が主となって、井上さんの担当する知的財産権の11章、12章と重複気味である。宇賀さんは「情報公開」と「個人情報保護」を担当していて、さすがにこの方面の大家なのだということが分かる。

別に全部の章を読む必要もなかったが、最後の刑法に関する2章も含めて通読し、それなりに勉強になった。

福沢諭吉「文明論之概略」（岩波文庫）

高2の頃に「福翁自伝」を読んで無類に面白いと思った。今、探してみると、昭和32年発行の岩波文庫が出てきたので、自分で買ったのではなく、親父の本を読んだらしい。国語の授業で、多分、碓谷先生だったと思うが、「福翁自伝」を読んだ人はいるかと聞かれて、手を挙げたのが教室で僕だけだった記憶がある。

間が飛んで、1980年代に「学問のすすめ」を読もうとしたことがあったが、途中でやめてしまった。「文明論之概略」も前からいつか読もうと思っていたのだが、この間の香港への出張に持って行って、そのあとさらに2週間ほど時間をかけてようやく読み終えた。

明治8年という時点でこの書が出版されたことを考えると、福沢諭吉のすごさが痛感される。西洋に対する知識の範囲が広くまたレベルが高く、しかし西洋崇拝ではなく、切実な国の独立という問題意識のもとに、西洋の圧倒的な「文明」をどう見、日本はどうすべきかを縦横に論じている。

この時点で、このような内容の文章をどんな文体でどんな用語を用いて書くか、まず問題だったはずである。福沢が作った語で、今も使われているものがいろいろあるに違いない。しかし、たとえば「交際」のように、文脈に応じて「社会」とか「外交」に読み替えて通じる言葉もある。カタカナ表記の外国語を使っている例は思いのほか少ない。全体に用語に関してはさほど違和感はないが、昭和

の軍国主義時代に天皇制の意味で政府や軍部が好んで使った「国体」という語が、やや違った意味合いで、しかし本書にとっても重要な言葉として出てくるのは、むしろ新鮮だった。福沢の思想の中では、天皇制は相対化されており、その後の太平洋戦争に至る時代とは明らかに異なる捉え方をしている。

文体は文語体であるが、漢文訓読調からはかなり工夫がされているのだろう。しかし、われわれより下の世代の普通の読者には、かなり読みにくいのではないだろうか。そういう自分も、読み終えるのに結構時間がかかったのは、ある程度この読みにくさに起因している。特に頻出する「なきに非ず」のような二重否定は、ややもすると逆の意味にとりかねない。

とにかくその文体で、歯切れよく小気味のよい文章が、繰り出される。諧謔精神にも富み、思わず笑ってしまうところが随所にある。そして例として挙げる事例や譬え話が巧みである。

全体を通して、文明の進歩への強い楽観主義が見られる。それは19世紀という時代を反映しているのだろう。その一方で、日本の現状への冷静な判断に基づく危機意識が、本書のきわめて重要な観点である。それがもっともよく現れているのが、独立が目的で文明はその手段という第10章の主張であろう。

その立場は西洋崇拝でなく、もちろん国粹的でなく、相対的、実証的、現実的である。基本的には「啓蒙」という立場であり、啓蒙の

書らしいしつこさ、執拗さがある。意外かもしれないが、現代の S. Pinker とか J. Diamond のような一般向け科学書の書きぶりを連想させるところがある。これはむしろ、現代の日本の書き手には欠けた資質ではないだろうか。

その意味で、福沢は科学に関しても優れた理解者だったことが分かる。たとえば統計学の知識も持っており、議論で活用している。さすがに統計という言葉はまだ作られていないらしく、

「斯くの如く広く実際に就いて詮索するの法を、西洋の語にて「スタチスチク」と名く。」(第四章, p.74)

とある。

この岩波文庫も親父の本だが、1977年版なので親父の生涯の中では比較的遅い。本の少なくとも真ん中あたりまで、鉛筆の線が入っていて、読んだ形跡がある。

丸山真男の「文明論之概略」を読む（上中下）」も親父の蔵書にある。1986年に出たのをすぐには買っている。僕も次にこの丸山の本を読むことにしよう。

2011年

Oliver Sacks, "Musicophilia: Tales of Music and the Brain"

多分、2009年3月末にケープタウンに行ったとき、行きか帰りにシンガポールの空港で買った本である。そのまま積読していたが、安藤さんが福井一「音楽の感動を科学する」という本を読んだとメールで報告していたので、これを思い出し、読んでみた。

よくまあ、こんなに面白い話をいろいろ集めてくるものだと感心する。中心は、サックスが医者として見た患者の症例である。他の医者の患者の話もある。さらに論文やさまざまな本から仕入れた話もある。著述家としてのサックスは、大変な読書家でもある。そして、サックス自身の音楽上、聴覚上の体験談もある。

最初の話は、雷に打たれてから、突然音楽に目覚める男の話である。それから、音楽によっててんかん発作が引き起こされる症例、脳からしつこく湧き出る音楽の話、幻聴、音痴、絶対音階、リズム音痴、2000のオペラがすべて頭に入っている知的障害の天才、ステレオ感覚、視覚障害者の天才音楽家、失語症、記憶喪失、パーキンソン病・アルツハイマー・ウィリアムズ症候群などと音楽の関係、などなど。

自分の頭の中で音楽が勝手に鳴り出すことは、だれでも体験することだが、それを巧みに使っていたのが、以前のTVドラマ「アリー・マイラブ」だった。ミュージカルで人が突然歌いだすと、どうしても不自然な感じがあるが（オペラだと普通はレチタチーヴォを含めすべて音楽つきなので、その約束の上で見ているせいかな、かえって違和感がない）、アリーを見るとそれが自然に見える。

さて、こう並べると雑多な寄せ集めのように見えるが、脳内の音楽の処理が言語処理とは異なるより古い層にあって、言語中枢が活発だと音楽の能力は抑制されることがある、という脳科学的な見方でかなり一貫性をもった議論が展開される。

アルツハイマーやその他の認知症で家族の顔すらわからなくなっても、歌を歌ったり楽器を演奏したりする記憶は失われず、音楽を楽しむことでその人の個性と存在価値が周囲の人にも伝わり、生活の質が回復されるという最後の方の話はとくに驚きだ。僕も認知症になったら家族に音楽を聴かせてくれるように頼むことにした。

柳田国男「海上の道」（岩波文庫）

柳田国男についての長々しい大室の本を読んだので、柳田本人の文章を読まねばと思った。それで、岩波文庫で手に入るもの4冊を買ったが、その中からまずこれを読んだ。

沖縄諸島の歌謡や言い伝えや言葉を材料に、日本民族が南方から海上の道を伝って渡来したという柳田の持論を展開する。最初の方に、学生時代に伊良湖崎で漂着した椰子の実を見たという話がある。この話が藤村の詩の材料になったことはよく知られているが、
「この話を東京に還ってきて、島崎藤村君に話したことが私にはよい記念である。」

と書いている。また、

「ともかくもこの偶然の遭遇によって、些々たる私の見聞もまた不朽のものとなった。」

とも書いて、このことを肯定的に見ているようだが、一方で

「そを取りて胸に当つれば 新たなり流離の愁ひという章句などは、もとより私の拳動でも感慨でもなかったうえに、海の日沈むを見れば云々の句を見ても、或いは詩人は今少し西の方の、寂しい磯ばたに持って行きたいと思われたのかもしれないが」

というあたりは、やや批判的な感じも受ける。

前に、

「舊の樹は生ひや茂れる」という句を捉えて、「「椰子の枝」なぞというふものは、一体何処を指してそう呼ぶのであるか」

と植物学者が文句をつけているのを引用で読んで笑ってしまったが、柳田がこのような漂着物から海を伝ってくる民族の移動という学問的考察を育んでいたのに対し、藤村の情緒的な捉え方は対照的といえるだろう。

大室の本に、柳田が苦心して作り上げた文体のことが、かなりの紙幅を使って述べられていた。本書の文章はすべて戦後に書かれたもので、その文体が円熟したときのものであろう。しかし、あまり読みやすくはない。独特の癖があり、読んでいてときどき迷子になる。どこにひっかかるのか、明確には指摘できないが、

文庫版の解説を大江健三郎が書いている。

「柳田国男のまた沖縄学の研究家でない僕が、語の一般的な意味で、この重要な本の「解説」をおこなうことはできない。」

と始めているが、しかし読む側としては役に立つ「解説」である、初めの方で、「専門家」が書いた文章がいくつか引用される。その中に中村哲のものがあって、

「・・・原日本人そのものが始源の時代においては南から島づたいに漂いついたもので、その際、途中で離島に残ったものが原沖縄人であるというもののようである。これは柳田にとっては、学問以前の、椰子の実に仮託する初心の夢であり、彼自身がこの世に生をうけたことの意味であるかのように問題をなげかけている。それは詩であり文学であって、彼にとっての一つの神話でさえある。」

という引用がされている。これは取りようによっては、柳田の仕事が詩であって科学ではないという批判のように見える。僕には、学者としての柳田の仕事には科学性があって、この批判は当たらないという反論を聞きたい気がする。しかし、文学者の大江の反論は逆の方向である。すなわち

「したがって僕はここで、《それは詩であり文学であって、彼にと

っての神話でさえある》という評論・性格づけを、あらためて文学の側から積極的に読み取ればどういう問題があきらかになってくるかを、一作家として考えようとするのであることをあらかじめいっておきたい。」

というのである。

朝吹真理子「きことわ」（芥川賞）

今回の芥川賞と直木賞はどちらもダブル受賞で、文芸春秋社は大宣伝を展開している。2月と8月に律儀に文春を買って芥川賞作品を読む習慣をかなり続けたが、この数年はごぶさたしている。さすがに今回はその話題性に乗せられて、文春を買ったが、読むのは遅くなった。

朝吹登水子が大叔母だそうで、また父親の朝吹亮二という人は知らなかったが詩人ということで、フランス文学者一家というふれこみである。そういう先入観もあるせいか、この作品から以前芥川賞を取った堀江敏幸を連想した。文章の質と描かれる世界とに近いものを感じる。

選者はおおむね朝吹の感覚の新しさと技術の高さを称賛しているが、夢と記憶を題材にするのは目新しいことではなく、むしろ使い古された手法と言ってもよいのではないだろうか。ただ、それをうまく処理しているということは言えようが。

チェスとかオーディオとか古生物とか，意外に理数的な感覚を思わせる材料を使う．また，逗子と葉山が舞台で，油壺や城ヶ島らしいところも出てくるので，それだけでも親近感を感じる．

孝子も子供のころ，毎年夏に逗子に来ていた．小学校1年生のときの夏休みの日記が出てきて，2－3週間逗子で過ごしたらしいことがわかる．もちろん，そのとき互いを知らないから，記憶を共有しているわけではない．しかし，たとえば海岸にコニーランドという遊園地があったことや，海上ページェントという催しがあったことは，共通の記憶である．同じときに同じ空間にいて，それぞれが記憶を持っているということも，やはり小説的な状況かもしれない．

西村賢太「苦役列車」（芥川賞）

インテリ家庭出身で慶應の博士課程に在学中という朝吹に対し，西村は中卒で各種アルバイトで食ったきた体験を私小説にしているという，絵のように対蹠的な作家である．しかし，選者の誰も指摘していないが，この二つの作品には，ある共通点がある．それは25年前のことを書いている，という時間設定である．

「きことわ」には，「二十五年以上むかしの，夏休みの記憶を夢としてみている．」という明示的な文がある．また，「苦役列車」には，まず「その貫多は十日ばかり前に十九歳になっていたが」とあり，やがて「もしかして，昭和四十二年生まれ？」という会話で貫多の生年が示されるので，時が1986年であることが分かる．しか

も、西村は私小説作家を自ら標榜し、9割以上事実を書いているというだけあって、西村自身の生年も昭和四十二年なのである。

しかし、「きことわ」が時間をテーマとして、二十五年の歳月が経っていること自体が作品の重要な要素であるのに対して、「苦役列車」では舞台が二十五年前であることを意識させるようなものはほとんどない。しいていえば、日雇いの仕事がやろうと思えばいつでもあって、5500円という日当がきちんと出ること、それも毎日出ていかななくても、気が向いたときに行けばかならず仕事にありつけることは、この時代の景気のよさを反映しているだろう、ということぐらいだ。

肉体労働とセックスと暴力、というと中上健次が連想される。しかし、「枯木灘」の土方仕事の描写は荘厳なまでに美しいのに、この主人公はいやいや仕事をしていて肉体労働を美化するようなところはまったくない。性欲処理もみみっちく、荒い言葉を吐くことはあっても暴力はまず使わない。という点で、中上とは資質がまったく違う。中上のようなイメージの喚起力は乏しく、僕にはあまり面白くない小説だった。しかし、こういうみみっちさが嫌いのはずの石原慎太郎が、やけに褒めているのが不思議だ。それにしても、他の選者は大きく若返ったのに、なぜ石原だけが残っているのだろうか。

田中久美子「記号と再帰 ― 記号論の形式・プログラムの必然」（東京大学出版会）

この本は、田中さんから去年送られてきた。いつもは本の寄贈に対してすぐに機械的な礼状を出すのだが、この本は読んでから感想を交えてお礼を書こうなどと考えているうちに読むのが後回しになり、その結果、礼状も遅くなった。

その間に、本書は大川出版賞とサントリー学芸賞を受賞し、世間から正当な評価を受けた。もっともちゃんと読んだ人がどのくらいいるのか、怪しいものではないかという気もする。計算機科学と記号論とにまたがる素養を要求する、

歯ごたえのある本だ。僕は全体をまじめに読んだ数少ない読者ではないだろうか。それでも十分なレベルで理解したかという点、おそらくそうではない部分が多分にある。

本書を要約すれば、著者自身が最後にまとめているように

「記号が投機的媒体であることは、記号論の範囲では機械でも人間でも変わらない。その一つの必然的な帰結が再帰である。」

ということである。計算機の歴史は再帰をどう扱うかという問題を中心としてきたというのは「ありふれた論」だと田中は言うが、その論をこのような形で展開して見せたのは、実に非凡な才能である。ソシュールの二元論とパースの三元論とを、関数型言語とオブジェクト指向言語の対比を材料に論じる前半からして、ユニークな視点だ。そしてプログラムの三次性は再帰で生じると喝破する。

寡聞にして「是態」という言葉を知らなかったが、ものがそのものである所以のことだそう。この語を中心に、インスタンスとクラスを論じた第8章も秀逸だ。再生産可能な複製システムの存在下で、是態のあるインスタンスを取り戻す方法に、最適化とインタラクションがあるというのも、ちょっと強引な議論という気もするが面白い。

第三部では記号系の再帰性が議論される。まず構成的システムと構造的システムの対比論がある。これは「構造主義」の復習というところだが、啓発されるところがあった。というのは、前に1970年代のソフトウェア工学における構造化プログラミングについて

「(1970年代におけるソフトウェア工学の) 推進力となった指導原理は「構造化」である。まず構造化プログラミングが提唱され、続いてソフトウェアプロセスを遡る形で、構造化設計、構造化分析が提案されて大きなインパクトを与えた。この時代、フランスの哲学界を席卷した1960年代の「構造主義」の余韻はまだ強く残っていたが、ソフトウェア工学における「構造化」と構造主義との直接的な関係は、あまりなさそう。」

ということを書いたことがあるが、どのように無関係なのかきちんと考えていなかった。しかし、構造的・構成的という言葉が提示されてみれば、ソフトウェア工学で言う構造化は、話を制御構造からモジュール構造に広げてみても、いずれにせよ「構成的」であって「構造的」ではないのである。

このあと、参照透明性に関わる時間の問題や、系の再帰性に関連してクワイン・プログラムやメタプログラミングが話題にされる。この辺も要領はよいが、もう少し大きな議論になりうる話である。

しかし、ここでもまた教えられたことがある。Haskellのモナドを知った後、ライブニッツの「モナドロジー」を読んで、両者は関係ないことを知ったが、ワドラーが導入したモナドは、圏論から来ており、

「哲学の上でのモナドとは何ら関係なく、同じ名前であるのは単なる偶然である。」

と明記されている。関数型言語をやっている人には常識なのだろうが、不勉強の自分には、若い田中に教えられることが多い。

各章の初めに美術作品の写真を2-3点置いて、章の中身への導入としているが、その作品の選び方のセンスもよい。これにも感心したが、このあたりがとくにサントリー学芸賞を得た要因だったかもしれない。

黒岩比佐子「パンとペン 社会主義者・堺利彦と「売文社」の闘い」(講談社)

幸徳秋水と大杉栄と堺利彦の名前を大逆事件と結びつけて知ってはいたが、誰が処刑され、処刑されなかった者はその後どのような人生を送ったのか、実におぼろげな知識しかなかった。この本は、大逆事件を直接テーマとするものではないが、とにかくそのあたりの

薄い知識をカバーする効能もあった。しかし、本書の主人公は堺利彦であり、時代としても大逆事件以後の10年間、1910年代を主に扱っている。この時代、堺は「売文社」というユニークな会社を起こし、広告代理店の先駆けとなるような事業でそれなりに収益を挙げながら、盛んな文筆活動を行い、しかも社会主義者としての信念を貫いて、官憲に抵抗を続けた。

本書に描かれる堺は実に魅力的で、作者がそこにほれ込んで膨大な調査と執筆に精力を注いだことが強く感じられ、読者として共感できるとともに、作者も幸福だったろうと想像される。しかし、黒岩は本書出版直後の2010年11月17日に膵臓がんで亡くなっている。がんになったことは当人の「あとがき」に書かれている。自分のがんのことを書く前に、次のような一節がある。

「ここまで書いたところで、信じられない訃報が届いた。近藤千浪さんをご自宅に訪ねて写真の件などをお願いしたのは、今年の六月九日のことだった。その日はとくに変わった様子もなく、お元気そうだった近藤さんが、六月二十日に急逝されたというのである。まだ六十八歳だった。知らせを聞いたときは茫然とし、いまだにその死を現実として受けとめられずにいる。」

この近藤千浪とは、堺利彦の娘の近藤真柄の娘、つまり堺の孫である。しかし、こう書いた黒岩の享年は五十二歳であった。

堺利彦は、事業家としても文筆家としても成功を収めたであろう能力と性格を備えた人物であったようだ。しかし、一生を社会主義者として生きた。明治の後半から大正、そして戦前の昭和の時代、社会主義者として生きるのは苛酷である。何度も投獄され、出すものは出版禁止となり、講演会はやるたびに「中止」命令がかかり、どこに行くにも必ず尾行がつく。仲間も投獄され処刑されテロで殺される。本人も暴漢に襲われ傷害を受ける。そういう中でユーモアにあふれる言動を続け、人の面倒をよく見、多くの書を読んで自分でも活発に書き、家族を愛した堺は、確かに傑物だった。

藤岡靖洋「コルトレーン ジャズの殉教者」(岩波新書)

音楽についての本は、できの良し悪しはあるにしても、概して読んで楽しい。この「ジョン・コルトレーン研究家」(奥付の著者紹介による)によって書かれた岩波新書も、面白く読んだ。自分のiPodに入っているコルトレーンは、Blue Train, Giant Step, Love Supremeのアルバム3枚だけで、しかも後の2枚は昔買ったLPからダビングしたものである。Blue Train もCDを持っていないので、ツタヤから借りたのかもしれないが記憶にない。ほかに、マイルス・デイヴィスの Blue Miles や Autumn Leaves のCDを持っているが、コルトレーンはそれにももちろん参加している。まあ、その程度のファンである。

藤岡は研究家というだけあって、英文によるコルトレーンの伝記や研究書を、共著で出している。だからこの新書の記述も、その正確

性に関しては信頼できるだろう。

1966年にコルトレーンが日本に来たときのことから書き始めている。藤岡は大阪の中学一年生で、グループサウンズのタイガースが道頓堀のジャズ喫茶に登場したことは覚えているが、同じ年にその近くの映画館でコルトレーンの公演があったことはもちろん、コルトレーンという存在すら知らなかったという。

しかし、1966年といえば、ビートルズが来日した年である。ビートルズの日本公演もこの年だけだったが、コルトレーンもこの一度だけなのだそう。しかも、翌年の1967年には、40歳で死んでいる。その一度だけの来日で、東京、大阪、広島、長崎、福岡、京都、神戸など8都市を訪れ、15回の公演をした。とくに、広島、長崎に行っていることは、特別な意味がある。当時はベトナム戦争の最中であつたことも、背景にある。

コルトレーンは Love Supreme だけをみても、宗教的でまじめな印象があるが、若いころはやはりほとんどのジャズ・ミュージシャンと同様に麻薬におぼれた時期がある。また、女性関係も最初の妻ナイーマ、二番目の妻アリス、のほかにいくつかあつたらしい。

しかし、マイルス・デイヴィス、ジョン・コルトレーンがいた1950年代から60年代初めは、ジャズという音楽ジャンルのピークが作られた稀有な時代だったと改めて感じる。クラシックが19世紀のヨーロッパでピークを作ったのと同じようなものだろう。本書によれ

ば、その凋落の大きな要因は、ビートルズを筆頭とする「英国侵略」だという。そのイギリス・ロックのピークももはや過ぎた。ジャズの黄金期は去ったが、録音が残っていてそれを楽しめるのはありがたいことだ。

佐木隆三「小説大逆事件」(文芸春秋社)

2001年に出た本で、その年に買ったはずだ。黒岩の「パンとペン」を読んでこの本のことを思い出し、買った10年後に読んだ。期せずして、今年は大逆事件の判決と12人の死刑執行があった1911年の100年後にあたる。

「小説」と銘打つのはなぜか。フィクションなのか。しかし、ノンフィクション・ノベルというよく分からぬ範疇のものらしい。

前半は主に宮下太吉と新村忠雄の二人を中心として描かれる。そこで互いの会話やそれぞれの思いが描写されるところが、小説仕立てらしいところだろう。しかし、捜査、予審、裁判、判決となると、基本的に供述書などの資料のまとめである。そういう意味では、黒岩の本のようなノンフィクション・スタイルの方が好ましく感じられる。

これを読んでも、24人に死刑判決が出たことはつくづく不条理な検察捜査であり裁判であったと、憤りを感じざるをえない。そもそも刑法73条の大逆罪の条文が「天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太

子又ハ皇太孫ニ対シ危害ヲ加ヘ又ハ加ヘントシタル者ハ死刑ニ処ス」というので、この「加えんとした」というのが適用されて、計画しただけで処刑される。しかも一審だけで決まるというのが、今では考えられないことである。刑は死刑しかない。

その上に、確かに、宮下、新村、菅野は爆弾で天皇を殺すことを計画したかもしれないが、他の21人は具体的な計画におよそ関わっていない。ただ、この3人が幸徳秋水の仲間であり、幸徳はこのテロには明確には賛成しなかったが、無政府主義者として一般的な暴力革命の可能性は論じており、その幸徳と関係のあったいくつかのグループのメンバーたちが、社会主義者を一掃するという方針で一網打尽にされたのである。

24人のうち12人は、恩赦で無期懲役となった。しかし、明治天皇の死去に伴う恩赦・大赦も、この12名には適用されず、多くが獄中で短期間のうちに死んだ。しかし、最近の村木厚子の裁判などを見ると、今の検察もやっていることは案外変わっていない、といえそう。あらかじめ有罪のシナリオが作られていて、それに応じて検察が調書を作る。そこで強引な自白の強要と、検察が作文した調書への署名が求められる。

村木事件の経緯を見れば、過去のリクルート事件の江副浩正、ホリエモンの堀江貴文、鈴木宗男と佐藤優なども、検察の立件がかなり疑わしいものではなかったのか、という疑問を生じざるをえない。

大逆事件の苛烈さはそれらの比ではないかもしれないが、検察の体質には明治以来の血がかなり残っているのかもしれない。

渡辺浩「日本政治思想史 [十七～十九世紀]」（東京大学出版会）

渡辺さんは同じ東京大学出版会の企画委員で、その縁で昨年出版されたこの著書の寄贈を受けていた。渡辺さんは昨年はいったん企画委員を退任していたが、長谷川さんが総合文化研究所の研究科長に今年なったので、それに伴い長谷川さんが去年から就いていた東京大学出版会の理事長職に、この4月から交代で就任した。そのことは4月の企画委員会で初めて知ったのだが、それより前に、寄贈を受けてから半年以上にもなるこの本を読み始めていた。

快著である。読んでいてスカッとする。

まず、儒学について説明がある。20ページほどで、儒学をよく知らぬ自分も分かったような気になる。しかし、本書を通じて一貫しているのは、現代人の読者に分かるように解説するが、現代の目で見てもおかしいと思えることも、その時代の文脈、当時のものの見方に沿って、なるべく肯定的に理解しようとする精神である。

ついで、徳川時代の武士というのがどういう立場の者であったかが説かれる。武士は職業軍人の組織であり、しかもそれがそのまま統治組織だった。しかし、二世紀以上戦争経験なしに世襲された軍事組織という奇妙なものだったと指摘する。

次に徳川政治体制を支えた「御威光」という構造，続いて，日本独特の「イエ」という組織単位が述べられる．また朱子学と日本の儒者たちの立場が解説される．それからようやく個々の思想家に則して話が進められる．伊藤仁斎，新井白石，荻生徂徠，山県大弼，安藤昌益，本居宣長，海保青陵．これらはたとえば加藤周一の「日本文学史序説 下」などでも解説を読んでいるが（基本的にこれまでの自分はその程度の知識），いずれに対してもやはり著者の肯定的な姿勢が読んでいて気分がよく，爽快な気持ちになる．もちろん，これらの思想は互いに異なり，互いを批判したりしているので，すべてを肯定することは矛盾である．しかし，理解のためにはそれぞれがどんな立場で思想を展開させたかに共感することは，有益である．

このように要約すると本書は思想家列伝のように見えてしまうかもしれないが，これらの間にも「「御百姓」たちと強訴」「「日本」とは何か」「「性」の不思議」というような魅力的な章がある．

それから開国と明治維新を迎える．そして明治の政治思想家として取り上げられるのは，福沢諭吉と中江兆民である．

感心するのは，引用の仕方である．上に名前を挙げた人を始め，多くの文献から簡にして要をえた引用がなされるが，すべて原文で現代語訳をつけない．しかし，僕にもよく分かるのは，表記法の工夫と現代人にはわかりにくい語にさりげなくつける説明によるだろ

う。後、引用する箇所もそういう意味で分かりやすいところが選ばれているのだろう。

本文だけで470ページを超えるが、飽きさせずに読ませる筆力には感心した。これまで談話はうまいと思っていたが、文章はやはりプロという感じだ。

柳田国男「不幸なる芸術・笑いの本願」（岩波文庫）

「不幸なる芸術」と「笑いの本願」という戦後出版された2冊の本が収録されているが、中の文章は「鳴瀬の文学」を唯一の例外として、ほかのすべては戦前・戦中に書かれたものである。

笑いとかウソとかヲコ（バカ）がテーマだが、すいぶん生真面目な論述で、気楽に読めるような文章ではない。そして、やはり柳田調の文章は読みにくい。

たとえば「不幸なる芸術」五の冒頭、

「元来自分の志は、被害者というような私心を離れて、今一度この消えてゆく古風の芸術を見ようというにあるのだが、不幸にして渡世が拙なるために、つい騙されても構わぬというまでの生計の余裕ができなかった。」(p.135)

など最初は何のことかわからなかった。しかし、この「消えてゆく芸術」というのが詐欺のことだと、ここまで読んでくればすぐに分かるべきで、問題は単にこちらの読む力かもしれない。ただ、この

引用箇所は適切でなかったかもしれないが、読みにくさを感じるのは自分だけではないらしい。井上ひさしが「柳田国男への挨拶」という解題を書いているが、

「すると浮かび上がってくるのは柳田国男の文体である。柳田国男の遺産を受け継ぐ方法はただひとつしかない。彼の文章を読むことである。ところがその文章はやたらに息が長く、満々と水をたたえて悠然と知識や論理を運び、結局、彼がなにをいいたいのかわからなくなってしまうことがしばしばある。揚句には、わたしは「どうも読みにくい文章だ。まったくこの人はなにをいいたかったのだろう」と力なく呟いて頁を閉じてしまう。」

とある。井上によればその理由の第一は、柳田自身が「鳴瀬の文学」で言っているように「結論は読者に作ってもらう流儀」によって結論をぼかすこと、そしてそれと表裏の関係にあるが、主題をぼかしていることが第二の理由だという。そうかもしれない。ただ、読みにくいと言いながらも少しずつ読んでいかせるだけの魅力はあり、段々に毒されていく感じもある。

柳田が繰り返し語るのは、笑いも古には人を嘲る笑いより質のよいものを指し、ウソも相手が笑って許すようなものをいい、ヲコも現在の「馬鹿」よりはるかに品のある言葉だった、ということである。その根拠として、なるべく書物、書かれた記録に頼らず、話し言葉を収集する民俗学の方法に依ろうとする。といっても文による記録がなければ証拠能力は弱い。それを柳田は独特の言い回しで、かなり断定的に述べる。しかし、それが柳田の豊富な知識と体験か

ら出ていることが読者には感じられるので、その調子に酔わされてしまう。

戦前戦中の文章だが、案外現在に近いと感じられるところが結構ある。たとえば、「涕泣史談」は、時代とともに人が泣かなくなったという議論で、それ自身も現在の知見としておかしくないと思うが、その中で

「子供の顔つきや肌膚の色、青ばなは垂らさず、シラクモ頭はなくなり、身のまわりが一般にさっぱりしてきたことも事実であるが、それよりも気持のよいのは、オーンオーンといつまでも泣いている児の、何処へ行っても稀になったことである。」

というのは、昭和16年でもそういう観察があったのだと印象深く感じた。

鬼頭宏一「文明としての江戸システム」（講談社「日本の歴史19」）

渡辺の本で政治思想史の視点から見た江戸の文化を面白く感じたので、昔買って読もうとしたこともあるこの本に、再度挑戦した。

この本の帯には「閉鎖体系の下での循環型社会の創造」とか「緑の列島の持続的成長モデル」とかいう言葉が並んで、グリーンとかエコとかがキーワードとなっている現在に、「江戸システム」が大きなヒントを与える、というメッセージを前面に出した本のように見える。しかし、たとえば

「幕末の写真や絵図，明治初期の地形図をもとに，工業化以前の日本各地の里山の景観を復元した小椋純一氏によれば，山地には高木林があまりみられず，一般に低木か，なかには植生がほとんどないはげ山も少なくなかったという。」(p.130)

日本の森林は中世までの乱伐が激しく，その頃の絵を見るとはげ山が多い．それを江戸幕府の植林政策で復活させた，というのがたとえば Jared Diamond の Collapse に書かれているし，TVの番組でもその手の話を聞いた．しかし，昔読んだ小原二郎「日本人と木の文化」にもそのような記述があったはずだと引っ張り出してみたが，江戸城の築城や振り袖火事後の再建に，いかに膨大な量の用材を要したかということは載っているが，植林の話は見当たらない．

本書では上のような引用がある一方で

「江戸時代の日本では，いったんは枯渇の危機に瀕した森林が，市場のメカニズムと，領主の政策を通じて再び回復した．」(p.135)
という記述もある．

また，災害列島という見出しで，

「江戸時代には，風雨・高潮・洪水・旱魃・落雷といった気象災害，地震・津波・噴火などの地殻変動にともなう災害，疫病，農作物における虫害など，多数の災害が記録されている」

という．これを見ても環境調和的な社会を作るとは，いかに難しいかが分かる．さらに都市衛生やごみの問題も書かれている．「逝きし世の面影」のように外国人が江戸を見てその緑の豊かさに驚い

た、という話も載ってはいるが、出版社の宣伝のしかたと比べると、負の面も客観的に書いて安易なユートピア化をしてはいない。

その点はある意味では期待外れだったが、学者としての姿勢に好感が持てないこともない。しかし、歴史家としての著者の手法は、主として宗門人別改帳などを用いた人口分析である。以前読んだ速水融「歴史人口学で見た日本」と同じ流儀で、実際本書でも速水の著作が参照される。しかし、そのアプローチの結果、文章は往々にして無味乾燥な数字の羅列になり、研究論文ならともかく、一般向けの本としては少々退屈である。その点、「逝きし世の面影」とは対照的な本である。

野本響子「いいね！フェイスブック」(朝日新書)

3月の震災後、別に震災がきっかけというわけではなかったが、Facebookに登録した。「友達」が70人以上できたが、日頃それほど熱心に読んだり書いたりしてはいない。ただ、入ってすぐに福永さんから呼びかけがあり、元MRIのOB/OGのグループができて、さっそく4月に集まって会食したのが面白かった。

フェイスブックの使い方を本で学ぼうなどというのが、そもそもインターネット向き人間ではない証拠だろう。それに読んでみても、さほど得られた知識もないし、感心した知見もない。ただ、それほどいい加減な本ではなく、著者の姿勢には共感できるところもある。一方で、繰り返しが多く、情報量は少ないとも感じる。またフ

エイズブックの将来を描いた第五章は、あまりにバラ色の世界を描いていて、それまでの落ち着いた書きぶりとは調子が違う。

高木貞治「近世数学史談」（岩波文庫）

この本は1996年に買ったらしいので、15年経ってから読んだことになる。しかし、原著が最初に出たのは1933年だから、15年経ったことは何ら影響がない。ガウス、コーシー、アーベルなどの数学者の跡をたどるが、さすが高木貞治で、凡庸な伝記紹介ではない。ときにかんりの数式が使われて、追うのが大変である。というか、一部は斜め読みですました。

自分の仕事は多少は数学に近いところもあるつもりでいるが、ここに出てくる19世紀前半の数学は、大学時代にもほとんど身についていないうえに、その後、まったく触れることなくすましてきたことを、本書を読みながらあらためて痛感した。理系が専門の大学教員として恥ずかしいともいえるが、現在の専門分化の時代では普通のことと居直ることもできる。しかし、駒場の学生のときは、高木貞治の「解析概論」はかなり真面目に読んだ。そしてその内容だけでなく、書き方、文体にも魅せられた。高木貞治が死んだのは1960年というから、僕が大学1年のときは、まだ亡くなって6年しか経ていなかったのだ。解析概論の人名索引を見てみると、ガウスが9か所、コーシーが14か所、アーベルが4か所、ディリクレが5か所など、やはり本書に登場する数学者の参照が多い。なお、驚いたのはフォン・ノイマンも索引に載っていることである。その本文は、

「1949年に、J. von Neumann が、電子計算機ENIACで、 n および e の値を十分先まで計算して、数字分布の乱率の統計的尺度を知る可能性に興味があることを表明した。それが機縁となって、1950年6月にENIACは e および n の値を小数2000位以上計算し、当時計算されていた n の小数806位までは一致することを確認した。」

というところである。紛らわしくなったかもしれないが、この引用は「近世数学史談」でなく「解析概論」からで、その初版は1938年に出ているが、この引用は1961年に出た改訂第三版からのものである。1961年というと高木が亡くなった翌年だが、その辺の事情は改訂第三版の序文に黒田成勝が書いている。高木が死んだとき、第三版の改訂原稿は、著者の指示に従って、岩波書店編集部で整理中であつたという。ただ、内容は1943年に出た増補第二版と変わらず、このフォン・ノイマンのくだりは例外的な追加部分であるらしい。しかし、第二版が戦争中の1943年に出ているというのもちょっと驚きである。

高木はガウスの手紙やアーベルの手紙を自分で訳して引用している。ガウスの手稿なども直接見ているらしい。そこにも高木の単なる数学者ではない教養の高さがある。

本書における高木の文章は、かなり独特である。口語文ではあるのだが、「言うている」というような言い回しがよく出てくる。これは関西弁なのか？高木は岐阜の出身らしいが、三高、帝大（もちろん東京）を出ている。しかし、その口調も味がある。

渡辺京二「黒船前夜 ロシア・アイヌ・日本の三国志」 洋泉社

「逝きし世の面影」の渡辺京二の近著である。これは大佛次郎賞を受賞したが、朝日新聞の紙面でそれが発表されるまで、この本の存在を知らなかった。それまで、さほど話題にならなかったと思う。受賞後ですら、あまりこの本について書かれたものを目にしない。

著者が言うように、「黒船前夜」という題名はミスリーディングで、副題が実態をよく表している。ただ、三国志とはいうもののアイヌはわき役であり、ロシアから来たラクスマン、レザーノフ、ゴローヴニン等と松前藩や江戸幕府の役人たちの交渉が話の中心である。この辺はみなもと太郎のマンガ「風雲児たち」がかなり詳しく描いていた。また、高田屋嘉兵衛については司馬遼太郎の「菜の花の沖」があるが、読んだのが1987年なのであらかた忘れている。実際、大黒屋光大夫と混同しているところもあるという、恥ずかしい状態だった。

本書で直接言及されていないが、暗礁に乗り上げたままの北方領土問題が、この本の企画の背景にあることは想像される。本の企画は熊本日日新聞から、著者のもとに持ち込まれたらしい。いや、「あとがき」をよく読むと、熊本日日からは連載の依頼があっただけで、テーマは著者が決めたとある。そして夕刊に週1回連載したのがもとになったとある。渡辺は熊本在住であり、熊本日日への連載

ということであれば、北方領土の政治的な問題意識は実はそれほどなかったのかもしれない。

齋藤希史「漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界」 (NHKブックス)

これも駒場ものといえる。著者の齋藤とはほとんど面識がないが、駒場の教師であることは確かである。確かまだ准教授なので、もっと若い人かと思っていたが、巻末の筆者紹介を見ると1963年生まれというから、50歳に近い。Wikipediaで見ると、駒場に來たのが2005年で、同じ年に出版された「漢文脈の近代」（名古屋大学出版会）でサントリー学芸賞を受けたとあるから、その頃ブレイクした人らしい。このNHKブックスの後に出た「漢文スタイル」（羽鳥書店、2010年）も、新聞などの書評で取り上げられていた。

本書の意図は、最初に著者が述べているように、「近代日本のことばの空間を漢文脈という視点から考える」ことにある。ここで漢文脈というのは、文体だけでなく漢文的な思考や感覚を含めるという意味合いで使われている。

日本において漢文が素養というような位置づけとなったのは意外に新しく、近世の半ば、寛政の改革からだというのは、少なくとも僕には目新しい見解だった。清少納言が「文は文集。『文選』新賦、『史記』五帝本記」と言ったからと言って、漢文が規範的かつ中心的な位置を占めてきたとは必ずしも言えないという。寛政の改革で

「異学の禁」が出されて朱子学が正統化され、昌平黌が幕府の正式な学問所となって、漢文を読み書きすることが18世紀末から19世紀に日本全国に広まったというのである。

科挙制度の下、中国の古典詩文を学ぶことは士大夫の条件だったが、江戸後期の武士階級が漢文を学ぶことは、士人意識の醸成と結びついたともいう。その代表として頼山陽が取り上げられる。昔、中村真一郎の「頼山陽とその時代」を途中まで読んだが、挫折したことが思い出される。ベストセラーとなった「日本外史」は読みを意識した漢文だという。明治になって、訓読文が漢文から独立し、それが新しい文体を作った。徳富蘇峰などがその機能性を重視した。それが西欧語の翻訳文体にも向いていた。

以降、中村正直訳「西国立志伝」、久米邦武「米欧回覧実記」から、明治の漢詩壇の大物、森春涛などが取り上げられる。そして漢文脈における、公と私、士人と文人、機能性と精神性、政治と文学という二つの焦点の絡み合いが議論される。

続いて「文学」から森鷗外、永井荷風、谷崎潤一郎、芥川龍之介、夏目漱石などが取り上げられる。ただ、漱石の扱いは特殊で、鷗外と並べて論じられるのではなく、終章で「新たな文脈（文体ではない）と格闘する漱石」という位置づけで議論されている。

ところで、19世紀以降の日本の文体を追ったこの本自身は、「ですます」調で書かれている。意識的な選択だろうが、この著者の他の

本はどのようなだろうか。

読む前は、漢文脈が現代の文章にどのように生きているかという話かと思ったが、ちょっと違った。逆に、漢語の多用で現在の日本語は話し言葉が漢字を連想しないと理解できない、同音多義語の曖昧性を解消できないという特殊な言語になっている、という問題が取り上げられるかと思ったが、そういうことでもなかった。しかし、刺激を受ける本だった。

大和田尚孝「システムはなぜダウンするのか 知っておきたいシステム障害、信頼性の基礎知識」（日経BP社）

システム障害の事例集として買って置いてよいだろうと思い、2009年に出て間もなく買ったはずだが、これまでほとんど眺めてすらいなかった。

放送大学でソフトウェア工学の講義をすることになり、今年はその教科書を書かなければならない。全15章の章だては決め、そのうちの4章分は中谷さんに頼んで、後の11章を自分で書くことにしている。内容は岩波の「ソフトウェア工学の基礎」とかぶることはやむをえないが、あれから7年経っているので、なるべく新しいものを入れ、また新たな観点から書きたい。川合さんの示唆もあって、第2章の表題は「ソフトウェアの不具合がもたらす社会的な影響」とした。このテーマでは別にすでに書いた文章もあるが、それと違う

材料を得ようと、この本を読んでみた。最初はざっと見る程度のつもりだったが、案外よく書かているので、一応通読した。

著者は日経コンピュータの記者だっただけに、企業のシステム障害例をたくさん知っているのが強みである。事例は金融業界にかなり偏っているのが、弱点と言えは弱点だ。障害の原因を、「ソフトウェアの不具合」「性能・容量不足」「設定・操作ミス」「不慮の事故」と分類し、さらにソフトウェアもアプリケーション、ミドルウェア、OSと分けるなど細分化して、多くの事例を整理しているのはよいが、そのわりには使う事例にも、原因説明にも重複がある。まあしかし、読み飛ばしている限りはあまり気にならない。

芳賀徹「平賀源内」（朝日選書）

これも駒場ものだ。芳賀徹は戦後駒場にできた教養学部教養学科の1期生で、比較文学では平川祐弘と肩を並べてきた。平川とともに駒場で長く教鞭を取った人で、同じ駒場ものと言っても斎藤希史とは世代が大きく違う。平川も一緒に定年で辞めたのが1992年だから、僕が駒場に来る2年前だ。

平川の本はこれまで何冊も読んでいるが、芳賀徹の本はこれが初めてかもしれない。しかし、こちらの方が肌に合う。

400ページ以上ある本で、源内の多様な活躍ぶりがよく書き込まれている。源内の伝記や研究書は、明治に出た水谷不倒「平賀源内」

以来いろいろあるらしいが（といっても巻末の文献表を見る限りは驚くほどの数ではない），それらを縦横に利用しつつときどき批判するのは，学者として，また新機軸を出すべき著者として，やむをえざるところだろう．しかもそれがさほどうるさくは，感じられない．

18世紀の田沼意次の時代は，徳川時代に新しい息吹をもたらしたときであったことが分かるが，天災などの不運もあって田沼が失脚したのは惜しかったかもしれない．しかし，源内はその失脚前にあっさり死んでいる．

「風雲児たち」のこの時代のあたりを読みなおしてみると，源内にしても，渡辺京二が描くロシアとの接触にしても，あのマンガは実によく描いていると，ほとほと感心する．

水村美苗「日本語が亡びるとき 英語の世紀の中で」筑摩書房

第1章が「アイオワの青い空の下で」と題された作家たちの国際交流の場への参加記で，この本全体はそのようなエッセイ風の話を集めたものかと誤解したが，2章以降に展開される議論は，実に力のこもった主張であり論証である．

第1章は，世界の作家たちが，それぞれの国の言語で小説や詩を書いているんだな，という感慨を述べて，それ以降の議論のきっかけにしているのである．その主張の原点は，普遍言語，国語，現地語

という3つの言語カテゴリーの区分という認識である。普遍言語とは基本的に書き言葉で、「読まれるべき言葉」を読み、書くための言語である。それに対し、現地語は基本的に話し言葉で、地域で日常的に使用されるものである。普遍言語はヨーロッパではギリシア語、ついでラテン語であったし、東アジアでは漢文であった。これに対し、国語はヨーロッパでとくにグーテンベルグの革命以来、ラテン語に代わって「読まれるべき言葉」を書き表すために、国・地域で作られてきた言語で、フランス語、英語、遅れてドイツ語、ロシア語などがそれに当たる。

これらはまず、普遍言語で書かれた書、たとえば聖書、を翻訳するという作業を通して構築された。ついで、最初から国語で書く作家、思想家が現れる。

国語としての日本語は、明治になってやはり西欧語の書を翻訳する作業を通じて作られ、すぐにそれを用いて高度な著述を生み出した稀有な言語である。非ヨーロッパ圏でこのような国語を成立させたのは、例外的なことである。各国語が成立したヨーロッパでは、しかしフランス語、英語、ドイツ語などが普遍言語に準じる地位を占めるに至った。すべての知識人がラテン語で読み書いていた時代と異なり、それぞれの国の知識人は自国の国語で書くようになったが、少なくとも読むことだけは他の国語でもできたからである。

ところが、現在は英語が普遍言語の地位を占めている。いくらフランス政府ががんばっても、仏語の役割は英語に遠く及ばない。世界でシェークスピアが読まれても、ラシーヌを知る人ははるかに少ない。そして、英語の普遍言語化はインターネットの発達に伴い、ますます加速している。

理系では英語が普遍語であることは、ずいぶん前から実感されている。とにかく、ヨーロッパ人の英語の能力は格段と高い。インターネット以前に、EUの発達で、共同研究、共同開発の場が広がったことが大きかっただろう。

そういう中で、日本語で小説を書くことにどういう意味があるか。日本語が「亡びる」運命を避けるために、何をすべきか。それには学校教育がある、というのが最後の章の論点である。

そこで日本語教育の話になるかと思いきや、水村がまず力を入れて提言するのは、英語教育である。日本人の英語力の弱さは深刻な問題だという認識が、示される。それに対して英語第二公用語論があるが、その気持ちはよく分かるものの、一部の人間がバイリンガルになればよいとする。

そして、バイリンガルになるのは一部だとして、全体としては今のお粗末な日本語教育を、意識的に改革すべきだということになる。具体的には、日本近代文学を読み継がせるのに主眼を置くべきだというのが、結論である。

普遍言語としての漢文という話題は、齋藤希史の本と重なるところがあるが、齋藤の本は引用されていない。水村の主張には、「源氏物語」などの存在はちょっと具合が悪いところがあるかもしれない。齋藤が漢文が広く日本人の素養とされるようになったのは近世の半ば以降だというのも、水村の論とは若干相容れないところがある。

本書は小林秀雄賞を受けている。その価値は十分にある。

西沢和彦「税と社会保障の抜本改革」（日本経済新聞社）

内閣府の「情報保護評価サブワーキンググループ」の委員を依頼されて引き受け、すでに8月初めに第1回の会合があった。このSWGは、税と社会保障の一体化という6月に国会を通った大綱に基づくものである。一体化実現のためのインフラとして国民番号制度の導入が計画されているが、それをシステムで扱う際の個人情報保護のためのガイドライン策定が、このSWGの目的である。座長は東大法学部の教授で個人情報保護が専門の宇賀克也で、僕は座長代理ということである。

SWGでの仕事はシステム関連だが、そのもととなっている税と社会保障の一体化とはどういう問題なのか、勉強する必要があると思っているところに、本書の存在を新聞の書評で知り、さっそく買って読んだ。最新の時事問題を扱った本に違いないが、内容は本格的で記述のレベルの高さには感心した。全10章で、まず日本の税制と社

会保障制度を俯瞰し、なぜ一体改革が必要とされるかという論点を整理した上で、消費税、所得税、年金財政、年金制度、健康保険財政と高齢者医療制度、国民健康保険、子ども手当、給付付き税額控除の可能性、が順に論じられ、最後に改革について著者の提言が述べられている。

年金はもちろん、健康保険や消費税の仕組みについてすら自分が無知であったことがよく分かったが、本書はそれらをきちんと説明し、また何が問題かを明瞭に論じている。これを見ると、現在の財政破綻がいかに深刻か、それなのに政府が迷走しているのがいかに問題か、ということが痛感され、暗澹たる気持ちにならざるをえない。

バタイユ、中条章平 訳「マダム・エドワルダ、目玉の話」 (光文社古典新訳文庫)

バタイユはフランス哲学でよく名前が出てくるが、猥褻文学を書いている、という程度の知識しかなかった。実際、ここに訳されている2つの中編は猥褻文学といってよく、これだけ読んでも、バタイユがなぜ思想家として有名なのかわからない。

これも光文社古典新訳文庫の一冊で、前にはカントやダーウィンをこの文庫で読んだが、この「新訳」はそれらと多少趣が違う。訳者のあとがきによると、これらのバタイユ作品は生田耕作訳というのがよく知られていて、中条もそれを中学3年のときに読んで大きな

衝撃を受けたのだという。ませた中学生である。だから旧訳だと難物だがこの新訳で読みやすくなった，というわけではなさそうだ。新訳にあたって訳者がいろいろ工夫したことは，あとがきに書いてあるが。

文庫で160ページほどしかないので，旅行に持っていくのちょうどよいと，5月にハワイに行ったときに持って行って，ほとんど読まないうちに飛行機の座席のポケットに忘れてきた。帰ってからまた買って，今度のトレント行きで読んだ。

グリニス・リドリー，矢野真千子 訳「サイのクララの大旅行 幻獣18世紀ヨーロッパに行く」(東洋書林)

1741年にカルカットからオランダに連れてこられたインドサイが，その後17年間にわたってヨーロッパ各地を巡業して，多くの観客を集めた，という話である。クララと名付けられたメスのサイは，母親を殺されたために人間に飼われていたが，推定で3歳の時にオランダ人で東インド会社の船長だったヴァン・デル・メールに買い取られた。ヨーロッパへの船旅だけでも大変だが，ヴァン・デル・メールが稀代の興行師で，ウィーン，ドイツ，フランス，イタリア，ロンドンの各地を回って，いずれでも見世物として成功させる。マリア・テレジア，フリードリッヒ大王，ルイ15世など支配者も見に来て庇護を与えたりもするし，多くの庶民が見に来れるような会場，入場料などの仕掛けを工夫して，巧みな宣伝を展開する。グッズとしてポスター，版画，コイン，磁器などを取りそろえ，その販

売でも大きな収益を上げる。面白いのは解剖学の本とタイアップした宣伝で、解剖学図を描く画家にクララの姿を描かせている。

著者はイギリスの若手の歴史学者で、18世紀が専門だという。面白い読み物として書いている中に、ヨーロッパ文化でサイがどう受け入れられてきたか、という歴史的考察が交えられているのは、たぶん著者ならではのところなのだろう。ローマ時代のプリニウスが著した「博物誌」で、サイは象の大敵と書かれているので、サイは角で象の腹を引き裂くというイメージをヨーロッパに定着させたのだそう。神話のユニコーンや聖書のビヒモスがサイと混同された。とくに欽定英訳聖書では、ラテン語訳聖書の「サイ」がすべて「ユニコーン」に置き換えられているという。1515年にデューラーが伝聞情報をもとに描いたサイの銅版画は、おびただしく複製されヨーロッパにおけるサイのイメージに大きな影響を与えた。その絵では、サイの背中に頭と別の角があり、また甲冑のようなものが身を包んでいる。

矢野という人の翻訳は見事である。最近の翻訳技術も進歩したものだ。

Graham Greene, "Brighton Rock," Vintage Classics

これは去年読んだJohn le Carreの"The Constant Gardener"と同じときに買ったもので、やはりTimeの夏の読書特集で、文句なしに楽しめる本の薦めというリストに入っていたのがその購入理由である。

Le Carre も読みにくかったが、別の理由でこれも読むのに骨が折れた。Greene の文章はそれほど癖はないが、なにせ1930年代のイギリスの地方都市 Brighton が舞台で、Greene がこれを書いたのも1938年だから、時代、文化という点で、21世紀の東京にいる自分には遠いものがある。

17歳のチンピラ Pinkie に、16歳の女の子 Rose と、偉丈夫のオバサン Ida がからむ。Pinkie は二人を殺し、その証人になりうる Rose を口止めさせるために結婚する。Ida は初めて Hale に会った日に、トイレに行っている間に彼がいなくなり、不審な死を遂げたことから個人的に調査を開始する。最後は、Pinkie によって自殺を強要された Rose を救う。しかし、結末の最後の一文が恐ろしい。

Greene の小説らしく、カトリックの教義に関わることがところどころに出てくる。しかし、行動力のあるミス・マーブルといった感じの Ida は（ただミス・マーブルほど年寄ではない）、きわめて合理的な精神の持ち主で、宗教を信じていない。彼女はもっぱら正義(right)か不正(wrong)か、を問題とする。一方、貧困階層出身の Pinkie と Rose がカトリックで、Pinkie は悪の道に突っ走り、Rose はそれを慕うが、それぞれ善(good)か悪(evil)か、天国か地獄かを気にかける。この両者が対照される。ただ、合理的な Ida が、自動書記というのか、しかし人間が無意識に書くのではなく、紙の上を転がる道具でランダムに描かれた線で、それを文字として読み取って

未来を占う，ということをやって，それがこの物語の筋書きに運命的なものを与える，というところは違和感があった。

カトリックの教義という意味では，“stirrup and ground”という句が重要な言葉として出てくるが，意味が分からなかった。鎧と地面ということで，落馬した人間が，地面に落ちて死ぬ瞬間に信仰を得れば天国に救われるということらしい。小学校の時に聞いた「天国泥棒」ということだろう。Greene の小説にはこの句がよく使われるらしい。

芳賀徹「渡辺華山 優しい旅びと」（朝日選書）

めったに古本屋など行かないし，古書を集める趣味もないが，この本は本郷でちょっと時間つぶしの必要が生じたときに，三丁目の古本屋に入ってぶらぶら見た末に買ったうちの一冊である。買ってから気がついたが，この本には著者による次のような献呈の辞がある。

「矢野 暢 様 惠存 一九八六年二月 芳賀 徹」

失礼ながら，あまり達筆とはいいかねる。しかし，驚くのは矢野暢という献呈先である。矢野の「劇場国家日本」はベストセラーになったし，僕も読んだ。

その後，ノーベル賞について盛んに書いたりTVでしゃべったりして，一般にも広く名が知られた。それが1993年にセクハラで告発さ

れ、京大の教授の座を追われた。そして1999年に63歳で死んでしまった。この本も、きっと遺族が売り払ったものだろう。

この本は最初は淡交社の「日本の旅人」という全15巻シリーズの1冊として出たものだそうで、だから渡辺華山の伝記的なものを期待していた点からは、やや当てが外れた。しかし、著者自身も本書は執筆中に最初の予定から大きく外れていったという。

「最初、私はこの本に「外なる世界へ」と副題をつけて、華山がみずからの内的関心に発し、小関三英や高野長英や幡崎鼎の手引きを受けて洋学へと深入りし、深い危機感と憧憬とを持って観念裡に西洋世界を旅し探査してゆくさまを、一種の架空旅行記として描き、そのために少なくとも本書の三分の一は捧げるつもりであった。それでこそ、本書の第二章「『旅』の精神史」の後半部とも首尾呼応することになるはずであった。ところが、『四州真景図巻』『游相日記』そして『毛武游記』や『訪甌録』と、華山の旅の足跡を追ううちに、私は深みに足をすくわれ、予定のペースをすっかり崩されてしまったかの感がある。」(p.184)

それだけこれらの華山による旅の記録の文章とスケッチが魅力的だったということだが、その魅力を芳賀はよく伝えている。そして、江戸時代にこのような人物がいたことに驚かされるとともに、悲運な死を遂げたことを惜しむ気持ちが湧きあがってくる。

画家としての華山も、優れた作品を多く残していることがわかる。しかし、インターネットで検索しても、ほとんど作品は載っていない。これは欧米の著名な画家の場合と徹底的に異なる。田原市美術館のホームページにはごくわずかの作品の画像が載っているが、いずれも小さくて観賞に耐えるようなものではない。

最近、渡辺京二のロシア交渉史や芳賀の平賀源内、そしてこの渡辺華山と読むごとに、みなもと太郎の「風雲児たち」の該当部分を読み返しているが、改めて感心することしきりである。よく調べているし、絵・マンガが持つ文章とは異なる表現力は大したものだと思う。

津村節子「紅梅」（文芸春秋）

吉村昭と津村節子は作家同士の夫婦だが、吉村は2006年にガンで死んだ。その発病から死までを、妻の立場で、かつ作家の眼で書いたのが本書である。吉村の本は数冊読んでいるが、津村の書いたものはほとんど読んでいない。「玩具」で芥川賞を取ったのが1965年らしいので、そのころは高校生だったからまだ芥川賞作品を読む習慣がなかった。

本書は事実経過に沿って丹念に書いているが、登場人物の名前は変えてある。当人は「育子」と呼ばれ、他の作家や編集者などの関係者もすべて別名が与えられている。ただ、吉村だけは一貫して

「夫」と呼ばれている。形式としては一応小説ということになるのだろう。それが小説家としての筋の通し方なのであろうか。

自分もいずれ何かで死ぬわけだが、ガンで死ぬ可能性も相当あるだろう。ガンで死ぬのは、くも膜下出血とか心筋梗塞などによる突然死よりは、本人も家族も死ぬ前のある期間、近づく死を意識しながらも一緒に過ごす時間を持てるし、脳梗塞などで半身不随になったり、アルツハイマーなどで精神活動がまったくだめになり、家族にただただ長い看護期を与えるような病気より、はるかによい死に方だという説がある。しかし、このようなケースを見ると、やはりかなり悲惨なところがあるのは否めない。

黒田日出男「江戸図屏風の謎を解く」（角川選書）

明暦の大火以前の江戸を描いた屏風が、3点あるのだそうだ。出光美術館所蔵の「江戸名所図屏風」、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」、個人蔵の「江戸天下祭図屏風」だという。その中の「江戸天下祭図屏風」に焦点を当てて詳細に図を読み解き、この屏風は誰がいつ何のために描かせたのか、という謎を解くという趣向である。黒田には「謎解き洛中洛外図」や「謎解き伴大納言絵巻」という著書があり、謎解きが得意らしい。

屏風の分析の前に、絵図・地図の話がある。江戸時代は絵図・地図が爆発的に作られた時代だという。そして屏風絵の分析には絵図・地図との対照が不可欠である。これについても謎解きがあって、寛

永江戸図という江戸初期の図が、実際はいつ作られたのか、という謎を追及する。そしてそれが後世の編纂図であるという学説を一蹴し、寛永図系江戸図と呼ばれる一群の絵図のうち、国立国会図書館所蔵のものが原図であること、そしてそれは寛永9年以前に版行されたと結論づける。

また、主論の「江戸天下祭図屏風」に入る前に、国立歴史民俗博物館所蔵の「江戸図屏風」の考察にも1章を当てている。この屏風の製作年代は、当初、寛永12年頃とされていたのが、だんだん時代が引き下げられて、18世紀初頭という学説が有力になってきた。それに対して黒田は批判を展開し、仮説として注文主は松平伊豆守信綱で、3代将軍家光の信綱邸来訪に合わせて描かせたとし、記録にある家光の信綱邸へのお成りは寛永14年が唯一のものだから、制作時期もその前、と主張する。

本書にとってはここまではウォーミングアップだが、「江戸天下祭図屏風」の注文主とその意図を推定し、それから制作年代の導くという手法は、同様である。そうして出される結論は、なるほどもっともらしい。

朽木ゆり子「ハウス・オブ・ヤマナカ」（新潮社）

山中商会という関西の美術商が、明治の中ごろに米国に進出し、ニューヨーク、ボストン、シカゴなどに店を構えて、個人コレクターや美術館を顧客とし大きな商売をした。当初は日本の書画、仏像、

工芸品から盆栽など、後には中国美術を中心に売った。中心人物は山中定次郎だが、山中一家とそれ以外の多くの日本人が関わり、米国の客の高い信頼を得ていた。

しかし、1930年代半ばからは、日米関係の悪化、不景気、入手できる美術品の減少、などの困難に見舞われる。そして1941年7月に日本が南部仏印に進駐したことへの報復措置として、米国政府は在米日本資産凍結令を公布する。続いて真珠湾攻撃直後に、山中商会のニューヨーク、ボストン、シカゴ店は、財務省によって閉鎖される。商品はすべて敵国資産として没収され、山中商会は解体される。しかし、資産処分のため、米国政府の役人が会長、社長などのポストにつき、日本人店員も残して営業を再開し、残った商品を売る。さらに美術館などに向けてカタログ販売し、最後には競売を何度かに分けて行ってすべて処分し、その売却益は米国政府が没収した。

朽木はヤマナカという名前さえ忘れられたこの話を、フリーア美術館などのヤマナカからの購入者の購入記録や、敵国資産管理局の年次報告書などを探し出してきて、掘り起こす。ただ、朽木は山中商会が忘れられ、また山中商会に関する資料がきわめて少ないと言いながら、「ここ数年、山中商会や同時代の美術商の活動に興味を持ち、研究対象とするジャーナリストや研究者が増えて」いるとも言っている（あとがき）。その中で、いち早く先鞭を付けたというところだろうか。

記述に整理がし切れていないような部分もあるが、面白い読み物ではあった。

日比野秀男 解説「渡辺崋山」（新潮日本美術文庫 20）

芳賀徹の「渡辺崋山」を読んで、崋山の作品をインターネットで探したがほとんど見つからないと書いた。その後、もう少し見てみると、ある程度は載っていることが分かった。しかし、先日渋谷のジュンク堂・丸善店に行ったときに、この本を見つけた。たまには本屋で本を眺めるのもいいもので、思わぬ収穫がある。これはたった1100円という廉価本だが、カラー図版が32図載っていて、もちろんインターネットで見つかるものよりはるかに大きく鮮明である。日比野による簡単な解説がついていて、その中で芳賀の本についてもちょっと触れられている。

宮沢賢治，谷川徹三 編「童話集 銀河鉄道の夜 他十四篇」（岩波文庫）

宮沢賢治について書いたものは、見田宗介とか中沢新一とかいろいろ読んでいるが、宮沢賢治そのものは案外読んでいない。若い時もあまり読んだ記憶がないが、その一つの理由に最近思いあたった。中央公論社の「日本の文学」に宮沢賢治が入っていないのである。自分の青春時代の文学の読書については、中央公論の「世界の文学」と「日本の文学」が骨格を作ってきたというところがある。ただ、中学時代に家にあった角川の昭和文学全集で「宮沢賢治集」を

拾い読みした記憶はある。それを探してみたら昭和28年発行の初版本である。目次に読んだものについて中学生の自分が印をつけているが、この岩波文庫に入っているものでは、「どんぐりと山猫」「注文の多い料理店」「北守将軍と三人兄弟の医者」に印がついているから、当時読んだらしい。

谷川の解説によれば、宮沢賢治の童話及び童話的作品は、筑摩版全集では94編、十字屋版全集では89編数えられるそうだが、岩波文庫ではここに15編、もう一つの「風の又三郎」に19編、計34編を選んで収録している。しかし、賢治の生前に出版されたのはこのうちのごく一部で、多くは未定稿から死後編集されて出版されているのだ。だから、有名な「銀河鉄道の夜」でも、また傑作の「ビジテリアン大祭」でも、（以下原稿数枚なし）とか（この間原稿五枚なし）などという部分がある。さらに、賢治が原稿にページ番号を打っていないので順序に問題が残ったり、第一稿と第二稿があってそれが混ざっていたり、という状態らしい。

佐藤道信「＜日本美術＞誕生 近代日本の「ことば」と戦略」（講談社選書メチエ）

「ハウス・オブ・ヤマナカ」がわりと面白かったので、積読のリストにあるこの本を読んでみた。これは1996年に出た本で、買っているのは1997年の第2刷だが、そんな昔に買ったのだろうか？ もっと最近のような気もするが。「日本美術」という概念や「日本美術史」という体系は、近代に作られた。それらを語ることば、「美

術」「絵画」「彫刻」「工芸」や「歴史画」「風景画」などの用語も、近代に作られた、という認識から、ことば、概念、制度がどのような過程でできてきたかを見ようという発想で書かれた本である。面白い着想に見えるが、結果としてはあまり面白い本ではない。1章から3章までが言葉の詮索で、それだけではどうしても退屈だし、4章で制度の歴史を扱い、美術行政、美術団体、コレクターなどを描いているが、駆け足で通り一遍という感じである。そもそも明治以降の美術の制度化という捉え方は、北澤憲昭という人が平成元年に出した「眼の神殿」という本で明快に出していて、佐藤の議論はそれにかかなり依拠しているらしい。

「絵」と「画」の違いとか、「近代美術」と「現代美術」の区分が戦後できたという話など、ところどころ面白いところはあるが、全体的にはあまり感心しなかった。

菊地成孔、大谷能生「M/D マイルス・デューイ・デイヴィスIII世研究（上・下）」（河出文庫）

東大をだしにした本が多く出ている。たとえば辻原登「東京大学で世界文学を学ぶ」、遥洋子「東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ」、草間俊介・畑村洋太郎「東大で教えた社会人学」、岡田斗司夫「東大オタク学講座」、石浦章一「遺伝子が明かす脳と心のからくりー東京大学超人気講義録」などなど。

この本はタイトルにこそ東大が出てこないものの、駒場での全学ゼミナールの授業をもととした本である。同じ著者たちに「東京大学のアルバート・アイラー」という前作があり、こちらは副題にも「東大ジャズ講義録」と東大を前面に打ち出していた。

しかし、この本を買ったときは、東大での講義録がもとになっていることを知らなかった。「東京大学のアルバート・アイラー」の方は、それが出た頃生協書籍部でも平積みになっていたし、タイトルから東大での講義が関係していることは想像がついていたが、この本が同じ著者のペアで、「アルバート・アイラー」の翌年に行われた講義に基づくとは、まったくの無知だった。

学生のころから、マイルス・デイヴィスは多少は聴いていたが、持っているLPは2-3枚、CDは4-5枚で、とくに入れ込んだ時期があったわけではない。ジャズに目覚めたのは高校のときにNHKラジオのモダン・ジャズの歴史というようなシリーズを聞いたときで、1964年ぐらいだろう。ただ、このラジオの内容はMJQが中心だった。もちろん、そのときにマイルス・デイヴィスという名も知ったはずだが、自分の記憶でこの名が強く頭に刻まれたのは、大学生になってから週刊新潮かなにかの1ページ足らずのコラムで、ジャズは何を聴けばよいかという質問に「とにかくマイルスを聴け」というような答えを掲げていた（自問自答の形式だったかもしれない）のを読んだ時である。

この本は、11月2日に孝子と「グレン・グールド」という映画を渋谷で見たとき、待ち合わせにマークシティの啓文堂を使って、待っているときに文庫の棚でたまたま見つけた。しかし、その少し前からマイルス・デイヴィスを改めて聴きなおそうとしていた矢先だった。そのきっかけはこれもNHKだが、TVで昔のマイルス・デイヴィス日本公演の映像が見つかったことを中心に作られた、ドキュメンタリーと解説だった。その番組では、近々再発見された映像を放送すると言っていたが、その後、気をつけているのに放送された気配がない。単に見逃したのかもしれないが、権利関係で問題が起きたのかもしれない。なにしろ、マイルス・デイヴィスの公演映像が残っていたとしたら、まさにお宝だろう。

この本は、文庫では上下合わせて1000ページ以上ある。この講義は2005年の夏学期に駒場で行われたということだが、その当時、講義の存在に気がつかなかった。「アルバート・アイラー」の方のものの講義は、その前年の2004年の夏冬と行われたらしいが、それも知らなかった。

1000ページ超になっているのは、講義録以外のものも突っ込んでいるからである。たとえばファッションについての高村是州との対談とか、ケイ赤城というマイルスの最晩年のグループのメンバーへのインタビューとか、著者たちが別のときに書いたエッセイとか。しかし、講義部分だけでも15講あって、これは駒場の1学期間でははみ出る。これも編集しなおされているのだろう。

本の口調はくだけたもので、アドリブ満載の講義の録音をいかにもそのまま起こしたように見えるが、実はきわめてよく計算された企みのもとに、第二著者の大谷がずべて書き起こしたものだという。それは「アイラー」の文庫本のあとがきに書いてあるのだが、こちらの方でも同じだろう。

口調だけでなく、その内容もまたみかけによらず、がっちりと骨組みが作られて、マイルス・デイヴィスの音楽の変遷を一貫した歴史観のもとに展開する。その歴史観は前作で出されたジャズ史に則るものであるが、同時にジャズやポピュラーミュージックだけでなく、政治文化経済史に自ずと関わった記述となる。それを実に楽しい読み物としてまとめる力量は、並みのものではない。

これを読みながら、ツタヤからせっせとマイルスのCDを借り出してAPX-2にダビングしては聴いていた。iPodにももちろん入れた。ということで、この2か月ほど、マイルスに浸っている感じである。

菊地成孔、大谷能生「東京大学のアルバート・アイラー 東大ジャズ講義録・歴史編」（文春文庫）

M/Dが面白かったので、遡ってこれも読んでみた。出版されたときにずいぶん評判になったらしいが、講義の存在に気づかなかっただけあって、本としても注目していなかった。すでに書いたように生協に置かれているのは目に入っていたが、大新聞の書評で取り上げられた記憶がなく、こんなに面白い本だとは思わなかった。

この「歴史編」ではジャズの歴史を、第1章でまず提示されているように、「十二音平均律→バークリー・メソッド→MIDIを経由する近・現代商業音楽史」という大きな流れで捉えようとしている。バッハの十二音平均律は、音楽を記号化し、調性、和声に基づく西洋音楽を堅固なものとした。間が飛んで、20世紀半ばからの米国のバークリー音楽校における教育メソッドは、コードの記号化を標準的に定め、ジャズやポピュラー音楽の理論的体系化を行った。そしてMIDIは究極の記号化だという。

記号化という意味では、面白い観察もある。19世紀のポピュラー音楽は譜面の出版とそのピアノによる再生で、大衆化した。プロの音楽家による生の演奏に触れる機会は大衆には限られていたが、この手段によってアマチュアが楽しめるようになった。これも記号化である。しかし、ラジオやレコードの発明により、演奏家の個性がそのまま記録されて広く享受されるようになる。これは言ってみれば反記号化である。ビバップは曲ではなく演奏が勝負という世界を切り開いたが、一方でバークリー・メソッドにより記録されたビバップの演奏を分析し、記号化するという流れを生んだ。

このような歴史意識と、モダン、プレ・モダン、ポスト・モダンのような音楽を超えた流れを捉える感覚により、この一見ふざけた講義録に見えるものが、ずいぶんと知的な読み物になっている。音楽そのものに関しても、著者たちは音楽理論に詳しくまた一家言があって、議論は高度である。菊地は1963年生まれ、大谷は1972年生ま

れで、どちらも演奏家であり、かつ批評も行って筆が立つ、ということらしい。

タイトルにはだまされる。アルバート・アイラーをだしにしているので、フリージャズが大きな位置を占めるのかと思いきや、そうではない。著者たちはどちらかと言えばフリージャズには批判的で、やはりマイルス・デイヴィス派なのである。もちろん、オーネット・コールマンが牽引したフリージャズが出てきた1960年代から50年経っている現在、演奏と批評をしている彼らの立場はそう単純ではないだろうが、アルバート・アイラーは単にタイトルでクローズアップされるだけで、本文で割かれるページは少ない。ただ、授業でアイラーの曲をかけたことは確かなようだ。

菊地成孔，大谷能生「東京大学のアルバート・アイラー 東大ジャズ講義録・キーワード編」（文春文庫）

「歴史編」が2004年の夏学期の講義をもととしているのに対し、これは同年の冬学期の講義がベースである。あとがきなどによると、一般読者の反応は「歴史編」がきわめて大きかったのに、こちらはそれほどでもなかったらしい。体裁や口調は変わらないが、確かにこちらの方が内容的にやや手ごわい。しかし、著者たちにはむしろこちらの方が自信作らしい。

これも行き当たりばったりの授業ではなく、事前に4つのキーワード、「ブルース」「ダンス」「即興」「カウンター／ポスト・バー

クリー」を用意し、それぞれに1カ月を当てる、そして各テーマについて外部から講師を一人招く、という周到な計画を立てている。

「ダンス」は従来のジャズ研究がダンスという面を無視しているという主張に基づいて取り上げられている。最後の「カウンター／ポスト・バークリー」では、バークリーと異なる理論開発者の濱瀬元彦本人を呼んできて、難しいがユニークな理論を披歴させる。

とにかく、この一連の文庫本4冊はそれぞれページ数も多いが、堪能した。

2010年

村上春樹「意味がなければスウィングはない」(文春文庫)

去年は、村上春樹の「1Q84」が大ベストセラーとなった。それも読んでいないし、これまでに村上の本はわずかししか読んでいない。小説は「ダンス・ダンス・ダンス」だけ。後は、フィッツジェラルドの翻訳と、柴田元幸との合作の翻訳に関する新書がすべて。読んだ唯一の小説「ダンス・ダンス・ダンス」でも音楽、とくにポップスのことがたびたび出てきたが、本書で村上が本当の音楽オタクであることを知った。

この本のことは岡田暁生「音楽の聴き方」で知った。そこで岡田はずいぶん褒めていたが、本書を読んで岡田が自身の本を書くのにこの本から多くの刺激を受けたことがよく分かった。そもそもデューク・エリントンの「スウィングがなければ意味がない」をもじった本書のタイトルからして、音楽の意味を議論した岡田に影響を与えたに違いない。

全部で10章だが、そこで取り上げる音楽家の取り合わせがすごい。シダー・ウォルトン、ブライアン・ウィルソン、シューベルト(のピアノソナタ第17番二長調)、スタン・ゲッツ、ブルース・スプリングスティーン、ゼルキンとルビンシュタイン、ウィントン・マルサリス、スガシカオ、フランシス・プーランク、ウディ・ガスリ

ー．意図的にクラシック，ジャズ，ポップスを混ぜこぜにしている．

しかし，この中で僕もかなりの思い出があるのは，ブライアン・ウィルソンぐらいである．ウィントン・マルサリスは20年ぐらい前，Timeのカバー・ストーリーで取り上げられたので，レンタルショップでCDを数枚借りてテープに録ったが，その後はキャスリーン・バトルとの共演CDを買ったぐらいで，あまり熱心に聴いていない．スタン・ゲッツはイパナメの娘の頃にずいぶんラジオで聴いたが，LPもCDも持っていない．シューベルトのピアノソナタは，イ短調や変ロ長調は聴いているが，二長調はそもそも聴いた記憶がない．ルビンシュタインはショパンのCDを何枚か持っているが，ゼルキンはほとんどない．ウディ・ガスリーはこの本にも出てくる伝記映画「わが心のふるさと」を昔TVで見て，かなり印象に残っているが，音楽そのものは伝説の人という感じでほとんど聴いたことがない．さらに，シダー・ウォルトンやスガシカオにいたっては名前すらほとんど初めて聞く．

ところが，村上はシューベルトの二長調のLP/CDを何と15種類も持っているという．しかも，それらの各々を何度も繰り返し聴いているらしい．そして本書でその15種類すべてに論評を加え，どれが好ましいかを断じている．

村上は僕よりかなり若いと思い込んでいたが、ほとんど同じぐらいであることを初めて認識した。ブライアン・ウィルソンのところで、

「初めてビーチ・ボーイズの音楽に出会ったのは、たしか1963年のことだ。僕は14歳で、曲は「サーフィン・USA」だった。」

とある。同じ調子で自分の記憶を書けば、

「初めてビーチ・ボーイズの音楽に出会ったのは、たしか1964年のことだ。僕は16歳で、曲は「アミューズメント・パークス・USA」だった。」

となる。この最初に聴いた曲の違いが結構効いているのではないかと思うのは、

「1966年に「ペット・サウンズ」を初めて耳にしたとき、・・・たぶん当時の大多数の人々と同じように、その全体像を十全に理解し、受け入れることはできなかった。正直に言って、それは当時の僕の理解を超えた音楽だった。そのアルバムを聴きながら、首をひねらないわけにはいかなかった。」

と村上が書いているからである。僕はビーチ・ボーイズのレコードで買った唯一のものが「ペット・サウンズ」で、何よりこのLPに魅せられた。

僕が、村上をいかに読んでいないかは、本書で彼が29歳で初めて小説を書いたと知ったことからわかる。それまで、大学を出た後、ジャズの店をやっていたのだという。

とにかく、この本は村上のことを知るにも、音楽のことを考え直すにも、とてもよい本だった。

三島由紀夫「小説家の休暇」（新潮文庫）

これも岡田の「音楽の聴き方」に感化されて読んだ、三島の評論集である。しかし、村上の「意味がなければスウィングはない」と違って、音楽のことはごく一部にしか出てこず、ほとんど岡田が引用した部分で尽きている。

この文庫本のタイトルともなっている「小説家の休暇」は、昭和30年、三島が30歳のときに書いた日記形式の評論である。そのほか小評論が8篇続き、最後に死ぬ前、昭和44年に書かれた未完の「日本文学小史」が収録されている。

「小説家の休暇」は「快晴，酷暑」という天気の話とか，ビキ二の水爆実験，トニー谷の子供の誘拐いった事件に触れるあたりがわずかに日記としての時を感じさせるぐらいで，基本的には芸術，芸術としての文学，芝居，俳優論などをテーマにしたさまざまな批評を，自信満々に論じたものである。たとえば太宰治をこてんぱんにやっつける文章などにその自信が溢れている。一方で自作の「潮騒」について，その欠陥を率直に述べた文章もある。

音楽について

「音という形のないものを，厳格な規律のもとに統制したこの音楽

なるものは、何か人間に捕らえられ檻に入れられた幽霊と謂った、ものすごい印象を私に惹き起す。」

などの議論を展開しているのも、これら評論の一つである。

後、日記らしいところは誰と食事した、飲んだという記述で、当時でもすでに著名だったと思われる作家、俳優、文化人の名前がたくさん出てくる。しかし、

「ところで最近私は、「太陽の季節」という学生拳闘選手のことを書いた若い人の小説を読んだ。」

という文があるから、石原慎太郎はまだ駆け出しである。小論のいくつかには退屈したが、ワットオ論など面白いものもある。昭和36年に発表された「魔」には

「それは公開された磔刑への欲求であり、劇的状況の下に殺されることへの欲求であり、かつその欲求不満である。（中略）・・・若いままの自分の英雄的な死のイメージが揺曳している。これは永久に太鼓腹や高血圧とは縁のない死にざまで、死が一つの狂おしい祝福であり祭典であるような事態なのである。かつては戦争がそれを可能にしたが、今の身のまわりにはこのような死の可能性は片鱗だに見当たらず。壮烈な死が決して滑稽ではないような事態を招来するには、自分一人だけではなく、社会全体の破滅が必要なのではあるまいか？」(p.267)

と明白に9年後に自分が起こす事件を予見するような文章がある。それだからこそ、この一編が本書に収録されているのだろうが。

最後の「日本文学小史」には感心した。最初に「方法論」という章が置かれて、文化とは創造的文化意思から生まれるものであり、そのような文化意思から形成された12作品を選んで論じる、という方法が宣言される。しかし、その最初の5つ、古事記、万葉集、懷風藻、古今和歌集、源氏物語、と進んだところで未完にされている。

論じられている5作品それぞれに当てられているページ数も、比較的少ない。とくに最後の源氏物語が短いのは、これ自身が未完なのだろう。それでも古事記、万葉集などについて絞った視点から、力強いメッセージを発している。第一章で「われわれは文学史を書くときに、日本語のもっとも微妙な感覚を、読者と共有しているという信念なしには、一步も踏み出せない」

と断言しているだけのことはある。各作品からの的確な個所を引用する腕も見事だ。

シドニー・デッカー、芳賀繁 監訳「ヒューマンエラーは裁けるか 安全で公正な文化を築くには」(東京大学出版会)

東証対みずほ事件裁判に関わっていることもあり、ヒューマンエラーの問題は社会的に重要だという認識はある。

本書は、医療事故や飛行機事故を例にとり、事故の責任を一人か少数の個人に押しつけて責任を取らせる、あるいはその他の関係者や組織・システムが責任を取ることを回避する、という多くの社会で

見られる傾向に厳しい批判の目を向ける．とくに裁判に持ち込まれると，真実が明らかにされるどころかむしろ隠されるという．

最初に紹介される看護師マーラのケースは，大変説得力がある．集中治療室にいた乳児への点滴による投薬のための調剤の際に，薬瓶を取り違えたためにキシロカインという薬を過大に与えた．その後，乳児は死亡した．マーラは自分のミスではないかと病院に報告し，それが外に出て新聞に載った．それを検事が目にしてマーラを起訴し，最高裁まで争ったが有罪となった．

しかし，この事件には手書きで処方箋を書いた医師，マーラに引き継いだ看護師，など多くの関係者があり，事故に至る筋道もいろいろなものが考えられる．それがいったん検事の手に渡ると，1つの筋書きに固定され，一人の犯罪者が仕立て上げられる．

著者はこれでは安全で公正な社会とならないという．エラーを起こした者は報告を避け，事故の教訓を生かして次に起こりうる事故を防ぐ手立てを講じることが妨げられる．とくに問題なのは，後知恵による責任追及である．裁判は解決にならず，むしろ真実を隠す．これは刑事裁判の話だけかと思ったが，第9章で，民事裁判により賠償責任を追及することも，安全にも正義にも寄与しないという議論がなされる．

東証みずほ事件には，みずほ側の誤発注というエラーと東証側のプログラム・ミスというエラーとがからんでいる．自分はどうしたら

このようなシステム障害を防げるか、という立場から分析したつもりだが、後知恵といわれれば確かにそういう面はある。一方、著者の議論はヒューマンエラーに起因する事件だけでなく、通常の犯罪にも適用できるようにも思える。殺人にもいろいろな要因があり、立場によって異なるストーリーが成立しうるし、社会やシステムに原因を求めることはいつでも可能であろう。となると問題はさらに大きくなる。

ということで、いろいろ考えさせられる本だった。翻訳は比較的正確なのであろうが、文章としてはかなり読みにくい。それにもとの書き方も相当しつこいように思え、おそらく半分のページでも十分に議論は伝わるはずだ。だから、後半はかなり退屈して読み飛ばした。

泉鏡花「草迷宮」(岩波文庫)

高校の時、「歌行燈」を読んでなぜかひどく感激したが、そのわりには鏡花をそれほどは読んでいない。「高野聖」など有名なものはいくつか読んだはずだが、「歌行燈」ほどの印象を残していない。

「草迷宮」という作品が三浦を舞台にするものであることを、比較的最近、新聞の作品探訪のような文芸欄読み物で知った。舞台は秋谷である。解説の種村季弘は「物語の舞台となる逗子のパノラマ景観」と書いているが、「三浦の大崩壊（おおくずれ）」というのは逗子にあるのだろうか。確かに物語の冒頭は

「三浦の大崩壊を魔所だという。葉山一帯の海岸を屏風で劃った、桜山の裾が、見も馴れぬ獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、逗子から森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分、人死のあるのは、この辺では此処が多い。」

である。しかし、次の節「二」は

「修行中の小次郎法師が、諸国一見の途次、相州三崎まわりをして、秋谷の海岸を通った時のことである。」

と始まり、以降ずっと秋谷で話が進む。大崩壊も秋谷にあるように書いてある。われわれ住民の感覚からすると、秋谷は逗子葉山の南にあるとはいえ、逗子の一部とは感じないが、それは現在の市町村区画に慣らされているからか。

「ヒューマンエラー」の生硬な日本語を読んだ後には、鏡花の日本語はよい口直しとなった。しかし、明治41年初出というこの作品は、今や現代小説というより江戸期の「古典」に近く感じる。ほとんどが登場人物の口を借りた語りと会話で書かれていて、そういう意味では口語だが、その言葉、口調に技巧が凝らされ、語りの中に会話が引用される入れ子構造が意識的に作られていることもあり、ときに難解である。

語り手も、茶店の婆さん、その連れ合いの宰八、主人公たる若者の葉越明、秋谷悪左衛門から美しき鬼だか女神だかに変わっていく。小次郎法師は全編を通して、ほぼ聞き手である。そしてエピソードも移り変わっていく。

話は怪異譚だが、畳が持ち上がったたり行燈が飛んだりとわりと他愛なく、ホラー小説としての怖さはない。ところどころに詩的な美しい言葉とイメージが振り撒かれる。たとえば

「月に浪が懸りますように、さらさらと風が吹きますと、揺れながらこの葦簀の蔭が、格子縞のように御袖へ映って、雪の膚まで透通って、四辺には影もない。中空を見ますれば、白鷺の飛ぶような雲が見えて、ざっと一浪打ちました。」(p.37)

「あの、薄煙、あの、靄の、一際夕暮れを染めた彼方此方は、遠方の松の梢も、近間なる柳の根も、いずれもこの水に淀んだ処で。畑一つ前途を仕切って、縦に幅広く水気が立って、小高い礎を朦朧と上に浮かしたのは、森の下闇で、靄が余所よりも判然と濃くかかった所為で、鶴谷が別宅とその黒門の一構え。」(p.73)

やはり鏡花はいい。

大貫隆「聖書の読み方」(岩波新書)

昨年の11月に、清泉小学校の後援会が主催する「鎌倉研修会」で、大貫さんに「生徒と読む聖書」という講演をしてもらった。その講演内容を相談する過程で、岩波新書から出す予定の本の話が出て、それを下敷きに話を進めるのはどうかという大貫さんからの提案があり、文句なく賛成した。その本が出版されて贈呈を受けたので、読みさしの本をさておいて直ちに読んでみた。

大貫さんらしい誠実さに溢れた本である。

以下、大貫さんに出したメールを載せる。

「大貫先生

ご著書「聖書の読み方」をお贈りいただき、誠にありがとうございました。早速拝読いたしました。

ご承知のように、私も幼稚園から小学校の一部、そして中学高校とカトリックの学校で過ごし、聖書に接する機会がそれなりにありました。しかし、この本にも書かれているように、神父や先生から聖書に基づいた説教を聞く場合や、皆でそれを読む場合、つねに断片的で、「聖書を読んだ」という気にはならない体験でした。自主的に読んでみようと思ったことも若いころは何度かありましたが、挫折という段階に達するはるか前に、やめていたと思います。そういう人間が多いことを前提に、そのような人間に向けて書かれたこの本は、それだけで素晴らしいと思います。

鎌倉研修会で先生のお話を伺ったとき、学生への調査から、天地創造と進化論との矛盾や奇跡の非現実性が大きな躓きとなるという点を指摘されたことは、なるほどとは思いながら、自分の場合、聖書への抵抗感はどこにあるのではない、むしろ信仰を持たない立場、根本的に神の存在を信じられないという立場で、聖書をどう読めばよいのか、というところにある、と実は感じておりました。しかし、本書の初めの方にいきなり、信仰のための規範の書としてでなく、理解するために読むという読み方があるべきではないか、という言が出てきて、目を開かれる思いがしました。

稚拙な感想ですが、感謝の気持ちをお伝えしたく、メールを差し上

げる次第です.

奥様によろしく」

今野浩「すべて僕に任せてください 東工大モーレッツ天才助教授の悲劇」(新潮社)

今野さんがこれまで書いた一般向けの本は、ソフトウェア特許の話、カーマーカー特許への異議申し立て以降の裁判の顛末記、株の話などだが、この本は大学の内幕ものでびっくりするようなことがあからさまに書いてある。一部の名前はイニシャルで表しているが（しかし「たとえば東大のSさんを見てください。あの人はTRONプロジェクトの中心人物でしたが、教授でなかったために周りが苦労したそうです。」のように、誰が見ても誰のことだかすぐにわかるような書きぶりを結構している）、主要人物はすべて実名で登場する。たとえば僕が筑波で同僚だった木島さんや吉瀬さんは、かなり重要な脇役として何度も出てくる、これはいってみれば当事者が書いたノンフィクションという体裁の本で、話は面白く、またこれまでの著書でも示された今野さんの巧みな語り口も快調で、暴露的な興味もあり、読み物としての魅力を備えている。だからこそ新潮社がこれを出版したのだろう。

主人公は早川という天才的な研究者で、東工大の社会工学科森雅夫さんのところで博士を取った後で、当時東工大の人文・社会群にいた今野さんの助手となった。そして今野さんとともに金融工学の分野に乗り出し、研究成果を次々と出した。僕はこの早川という人は

知らない。とにかく天才でかつ奇人であつたらしく、理解者も多くいたが敵もたくさん作った。

今野さんが東工大に理財工学センターを作ったときその専任助教授となり、今野さんが定年で退官するとき、41歳で教授になった。しかし、翌2003年に42歳になったばかりで、癌で死んでしまう。

しかし、20歳のときにすでに非A非Bの肝炎ウィルスによる肝炎を発生しているらしい。僕がインターフェロンを最初に打ったのが確か1990年、それはリバウンドしてしまったが、翌年もう一度打って完治した。どうしてそのような治療をしなかったのだろうか。

読み返してみると、1996年に在外研究先のベルギーから帰国したところで体調が悪くなり、検診を受けたところただちに入院となった。そこでインターフェロンを打って体調を持ち直した、という記述がある。とするとウィルスがあまりに強力に巣くっていたため、インターフェロンで根絶することができない状態だったのだろうか。もちろん、ウィルスのタイプによってインターフェロンがあまり効かないものもあるが、今野さんの書き方からすると、当人は早くから自分の命が短いことを覚悟して、猛烈に仕事に突っ走ったということらしい。

もっと治療に時間を割けば、あるいは寿命が延びたかもしれない。しかし僕の場合も、インターフェロンの治療のタイミングが合わなければ、同じように癌への道をたどったかもしれない。

Jhumpa Lahiri, “Unaccustomed Earth”

Jhumpa Lahiri の本を読むのは3冊目だ。しかし、彼女は3冊しか出版していないから、全部読んでいることになる。

最初の本が Interpreter of Maladies という短編集、2冊目が The Namesake という長編、そしてこの本は2部構成で、第1部は5編の短編、第2部は100ページ以上ある中編である。

どの小説も見事だ。ストーリーも描写も自然に流れ、妙なひねりを利かせたり、どんでん返しがあったりはしない。それでいて、展開は予想通りというわけではなく、それだけでも読む楽しみがある。ペーパーバック版なので、例によっていろいろなべた褒め書評を宣伝用に集めて、裏表紙や表紙と扉との間に満載しているが、その激賞ぶりがおかしくは感じられない。

あいかわらず、主人公はベンガル出身かベンガル出身の親を持ち、米国の東海岸に暮らすという型が守られる。ほとんど必ず男と女の物語となるが、多くの場合男か女のどちらかが白人のアメリカ人である。大体、アイビーリーグの大学に在学中か、そこを卒業したインテリである。

第2部の Hema and Kaushik は構成が工夫された小説で、3つの物語からなる。最初の Once in a Lifetime は女が一人称で語る。次の Year's End は第一の物語より数年後の設定で、男が一人称で語る。

最後の Going Ashore はその20年近く後の設定で、三人称形式で物語られる。しかし、予想されるようなハッピーエンドにはならず、男は死に、その後は女の一人称に戻って終わる。しかし、そのような仕掛けの技巧に頼った小説ではなく、他の短編と同じような感銘を与える。

ダーウィン、渡辺正隆 訳「種の起源（上下）」（光文社古典新訳文庫）

去年はダーウィンの生誕200周年、「種の起源」の出版150周年で、それに合わせてこの新訳が出た。それで読む気になり、かなり時間はかかったが新訳の読みやすさもあって、さほど苦勞なく読み終えた。

吉本隆明が聖書と資本論と種の起源の3冊を必読書に挙げている。聖書も資本論も通読したことはないが、「種の起源」を読んでみてそのすごさに改めて感服した。死ぬまでに聖書も資本論も読むべきかもしれない。

言い古されていることだろうが、遺伝子はもちろんのこと、メンデルの遺伝の法則すら知られていない時代に、これだけの論考をしたダーウィンの偉大さは恐るべきものがある。創造説に対して、相当な用心をしながらも、しかし周到にまた執拗に反論する言説が、本書のいたるところに散りばめられている。そのためちょっと冗長な

感じを覚えるところもあるが、全体としての説得力には圧倒させられる。

UPの今年6月号に、瀬戸口烈司という人が、「ダーウィンの著作は『種の起原』か、『種の起源』か」という随筆を書いている。本書は「起源」だが、それ以前の15種類の訳書を調べると、14が「起原」で「起源」は1つだけだという。

その理由は、日本で2番目に古い訳書が「起原」と表記しているの
で、後がそれに従ったということで、とくに深い意味はないらしい。

Kazuo Ishiguro, "When We Were Orphans"

1920年代の上海、1930年代のロンドン、そしてまた1930年代後半の上海を舞台とした、長編小説である。戦争と恋愛という筋立てで、メロドラマといってもよい。とにかくエンタテインメントもののように面白く読める。実際、主人公は探偵である。孤児であり探偵である Christopher が、何でロンドンの社交界で名士になるのか、そのところがよく分からない。遺産である程度の資産があるにしても、英国では探偵の社会的地位は高いのだろうか。

もう一つ疑問に思ったのは、Christopher がロンドンで成功してから、なぜ再び上海に行かねばならないと思うか、その理由づけの点である。もちろん、誘拐により（と想像されている）失踪している

両親を探すという目的に違いないが、なぜ20年ほども経って二人が、あるいはそのうちの一人でも、まだ生きていると信じられるのか。さらに、上海行きはそのような個人的な理由だけでなく、破局に向かう世界を救うためという理由づけもされている。Christopher より先に、Sir Cecile Medhurst とその妻となっている Sarah が上海に行っているのも同じような使命感からである。しかし、どちらの場合も上海に行って具体的にどんな行動をするつもりなのかが分からない。問題は、日本政府、日本軍であり、それが中国で起こしている戦争という事態を何とかしたい、ということらしいが、しかし、その問題自体も明確には記述されない。まして、Sir Medhurst や Christopher がどのような見通しでどうしようと思っているのか、まるで説明されないのである。

Christopher はインテリだが、Sarah との関係でも、上海でのとくに市街戦に巻き込まれてからの行動でも、なかなかタフで強引である。まるで、ハードボイルドの探偵のように動くところがある。一方の内省的な心理描写とやや齟齬を感じもした。

と気になるところを挙げてみたが、読書として、大変楽しめた。

蓮實重彦「映像の詩学」（ちくま学芸文庫）

これは蓮實さん独特のまわりくどく難解な文体で書かれた映画評を集めたもので、これまで読んだ淀川長治や山田宏一との対談と違っ

て、きわめて読みにくい。しかも文庫本で600ページ近くある。それでもベッドの枕元に置いていたので、なんとか読み終えた。

基本的に映画監督を対象として論じていて、最初の方の「巨匠」たち、ジョン・フォード、ハワード・ホークス、ジャン・ルノワールや、それに続く「亡命者」たち、ルイス・ブニエール、フリッツ・ラング、ジョセフ・ロージーあたりはまだ読みやすい。そのあとから、どんどんついていけなくなる。だから後半は、かなりいい加減に読んだ。

いずれにせよ、論の立て方も強引である。たとえばジョン・フォードについては「白いエプロン」というイメージで話を押し通す。ハワード・ホークスの場合は「透明な装置」というイメージである。そしてその強引なロジックで、とくに読者には思いがけない言明をするときは、必ず「いうまでもなく」という形容をつける。これで読者は煙に巻かれる。

外岡英俊「情報のさばき方 新聞記者の実戦ヒント」朝日新書

駒場の同僚の江里口さんが、「教養学部報」の新入生への一言欄でこの本を薦めていたので、買って読んでみた。

著者の外岡は朝日新聞の記者、編集者で、その長年の経験から、「情報をつかむ」「情報をよむ」「情報を伝える」方法について語

っている。その基本原則を5つにまとめているが、それをここに引用しておくのが本書のまとめとしては最適だろう。

1. 情報力の基本はインデックス情報である。
2. 次に重要な情報力の基本は自分の位置情報である。
3. 膨大な情報を管理するコツは、情報管理の方法をできるだけ簡単にすることである。
4. 情報は現場や現物にあたり、判断にあたっては常に現場におろして考える。
5. 情報発信者の意図やメディアのからくりを知り、偏り（バイアス）を取り除く。

ここでインデックス情報というのは、この情報は誰に聞けばよいとか、何を見れば知ることができるのかという、手がかり情報である。それさえ残せば、情報をため込むことはないという、その情報を捨てることに徹する姿勢に、自分にはできていないという意味で、もっとも感心した。

石田英敬「自分と未来のつくり方ー情報産業社会を生きる」 （岩波ジュニア新書）

石田さんが贈ってくれた。石田さんは去年から情報学環長だが、本を書く暇もあると見える。

麻布学園の中高生を相手に行った課外授業をもととして作られた岩波ジュニア新書だが、われわれが読んでも面白いように、うまく書

いている。

ミヒヤエル・エンデの「モモ」を読んでくることが、生徒に課された条件である。「モモ」を僕は読んでいないが、「時間貯蓄銀行」の灰色の男たちが出てくる話で、労働が抽象化され時間が金に換わる資本主義社会を童話の形で扱ったものだという。

それからアメリカのフォード式の新しい資本主義は、労働者を消費者にし、消費者の欲望を生み出し制御するという。そこで出てきた情報機器はその中に時間を流すもので、その時間は意識を生み、意識の市場ができる。この解釈はなかなかうまい。

人文学者らしく、モモ以外にも、宮沢賢治、マックス・ウェーバー、ハイデッガー、プラトン、フッサール、フロイトなどが引用される。しかし、技術的な解説も案外あって、テレビは1秒間に25フレームぐらいが映し出され、走査線が上から下、左から右にたどることでフレームが描かれるとか、人の瞬きは1/7から1/10秒間だが、写真のシャッタースピードは1/50秒より遅いと手ぶれするとか、書いてある。

このような情報参照社会はメディアが消費意欲を操作し、プラトンのイデア論の影が実体化し、文字文化を「新しいテクノロジーの文字」に変えることで、人の思考の自由を奪う、という負の側面を指摘する。この問題に対して、情報のエコロジーを考え作っていかうというのが石田の処方箋なのだが、その論は今ひとつ説得力に欠け

るような気がする。しかし、彼がそういう問題意識で仕事をしているということは分かった。

John le Carre, “The Constant Gardener”

読むのに恐ろしく時間がかかった。ペーパーバックで560ページある長編というだけでなく、le Carre の英語は読みにくい。

この本をなぜ買ったかといえば、多分、去年のTimeの夏の読書特集で、文句なしに楽しめる本の薦めというようなリストに入っていたからだろう。Amazon で買ってほってあったが、Jhumpa Lahiri, Kazuo Ishiguro と英語の小説を続けて読んだので、次はエンターテインメントものということで、これに手を出してみた。

しかし、これだけ入り組んだ物語をよくもこう巧みに紡ぎだすものだ。話は Sandy Woodrow の視点で始まるので、これが主人公と思っていると、途中からむしろ悪役となり、当初さえない Justin Quayle が主役となる。アフリカを舞台とする製薬会社と政府や外交官の悪徳を、正義感に燃える若くて美貌の妻 Tessa が糾弾するのだが、それがゆえに彼女はむごたらしく殺される。それに対する夫 Justin の復讐譚だが、結末は典型的な復讐物語のようにはならない。

とにかく日数をかけて、その分長期に楽しめた。

古田亮「俵谷宗達 琳派の祖の真実」(平凡社新書)

著者は2004年に東京国立近代美術館で「琳派 RIMPA」展を主催した人である。専門は近代日本美術で、宗達は必ずしも専門でないという。だから近代画家との関連に視点を向け、琳派展でもそれを一つの軸にしたようだ。本書も宗達は近代になって発見され再評価された画家だという点を踏まえて、近代美術に与えた影響と、近代画家との比較に特徴を出している。とくに最終章は「宗達vs. マチス」として、マチスが宗達から影響を受けたという証拠はないが、両者を音楽的な絵画という特徴でくくって論じている。

琳派としての位置づけでは、宗達は琳派の祖といわれるが、尾形光琳とは資質が違い、光琳の名に由来する琳派に、遡って宗達まで含めるのはおかしいという。そもそも琳派という言い方が一般化するのは、1972年の東京国立博物館の「琳派」展からで、40年しか経っていない。光琳は宗達を尊敬し、多くの模写をしているが、光琳の本質はデザイン性であり、一方宗達は独自の絵画性を持つという。

しかし、宗達の有名な絵はこれまでに主に図版や映像で見ているが、残っているものだけでもこれだけ多くの作品があるのだということすら、知らなかった。それでいて、生涯の記録がほとんどないのだという。

トーマス・マン、高橋義孝 訳「魔の山 I,II」（新潮社版 世界文学全集 29）

東大新聞から連載中のコラム「青春の一冊」に原稿を書いてほしいという依頼があったのが、今年の5月である。引き受けて、何を選ぼうかと考えた。大学時代に読んだであろう本のリストを眺めても、この一冊というのが浮かんでこなかった。それで東大新聞からの依頼ではあるが、やはり自分にとっては、高校時代に（高1の時だと記憶しているが、高2かもしれない）読んで感激した「魔の山」が一番だと決めた。

しかし、その高校以来、この本を読み返していない。原稿を書くために読み始めたが、締切に間に合わせて原稿を書いて送った6月23日の時点では、まだIの半分もいっていなかった。その後も、ゆっくりとしたペースで読み、夏を超えて9月になってようやく読み終えた。高校時代はどのくらい時間をかけて読んだのだろうか。一気に読んだような気がするが。

改めて、ヨーロッパの超一級の知性のすごさを感じる。日本人には書けない小説だろう。ゼテムブリー二の口を借りて、アジアの後進性がたびたび侮蔑され、現代の目から見るとすべてがヨーロッパ中心に考えられているという限界は明白だが、この強烈な物語展開と描写を前にすると、それらの限界はむしろ作者が意図的に企んだもののようにも思えてしまう。ただ、激しく対立するゼテムブリー二とナフタも、同じヨーロッパという土俵の上で戦っているという感

は強い。

高橋義孝の翻訳はすごい。今なら使えないような差別用語も頻出するが、原文にあるのだから、もし新訳が出てこの辺が中性化されてしまうと、ずいぶん異なる印象になるだろう。差別用語以外では、たとえばワインがぶどう酒となっているようなむしろ好ましい例が多い。

読んだ本は、高校の時に読んだ新潮社版世界文学全集中の2巻そのものである。1964年発行。保存状態はよく、製本もしっかりしているので読むのにまったく問題はないが、50年近く前に買った本をそのまま読んだことに、ある種の感慨がある。

東大新聞およびその後「東大教師 青春の一冊」に収録された文は、別掲。

奥泉光「シューマンの指」（講談社）

奥泉が芥川賞を取った「石の来歴」は読んだが、それは1994年のことである。その後の「グランド・ミステリ」は買ったものの読んでおらず、最近作のこれを芥川賞以来初めて読んだ。

やはりミステリの範疇に入るが、クラシック音楽、というよりシューマンに関する蘊蓄を、相当に傾けた本である。ということで始めのうちは、「のだめカンタービレ」を連想するところもある。話はミステリらしい工夫がこらされていて、最後にしかけがある。

この本を買ったちょうど同じころ、シューマンのCD25枚組のボックスを買った。その事情を説明する、安藤さんに宛てたメール（2010/8/21発信）を引用しておこう。

「Music Birdも後1年でなくなるし、渋谷のHMVも閉店で、ここで話題にしたものもいくつか消えていきますね。

HMVの閉店セールだということで今週行ってみました、とくに大々的にセールしている、という感じではありませんでした。メールが来ていて5000円以上買えば1000ポイントくれるということでしたが、レジで確認したところ、それはオンラインで買った場合で、何も渋谷店まで出かける必要はなかったのです。しかし、店頭でシューマンの全集がボックスで出ていて、9500円ぐらいだったので、店ではパッケージされた中身が見えないからどんな演奏が入っているのかわかりませんでした。ポイントのこともあり、家でオンラインで注文したらすぐ来ました。しかも、オンラインショップでは6500円ぐらいで、ずいぶん得をした気がします。Sonyが出していてCD25枚組ですが、キーシンとかレイサダとか、古いところではホロヴィッツとかルビンシュタインとか、一流の演奏です。まだあまり聴いていませんが、たまたま同じころ買った奥泉光「シューマンの指」（講談社）を読みながら聴くのは、なかなかいいものです。」

野間秀樹「ハングルの誕生 音から文字を創る」（平凡社新書）

2008年にソウルに二度行ったが、近い国なのに韓国を訪れたのは中国と比べてずっと少なく、その前2004年にAPSECで釜山に行ったの

ですべてである。しかし、韓国に行くとハングルが読めないのはちょっと不便である。最近では、都内の駅や施設でも英語、中国語と並んでハングルによる表記がある。

この本を読んでハングルが読めるようになるわけではないが、ハングルという文字の作られ方と普及の経緯について、知的にスリリングな物語を読むことができる。ハングルは表音文字であること、それをまとめて漢字に対応するような文字構成を作っていること、という程度のあやふやな知識はあったが、一方で韓国や北朝鮮で漢字をほとんど捨ててもやっていけるということに驚き、どうしてそんなことが可能なのかという疑問をもっていた。日本語では漢字を捨てることはまず考えられないだろう。

そのような怪しげな知識が正され、疑問に答えがえられたと思う。

これが世宗という一人の王の意思によって始められた文化革命であり、世宗自身が音韻学の深い理解をもって文字の設計を指導した、ということは驚くべきことである。そしてそれを実施した優れた学者・政治家たちにも恵まれた。

新書と言っても、長大な索引、文献リスト、年表などを伴った400ページに近い労作である。

中沢新一「カイエ・ソバージュⅤ 対称性人類学」（講談社選書メチエ）

この5巻シリーズは、2005年に最初の2冊を読んだが、その後はとびとびに2007年、2008年に1冊ずつ読んで、また2年の間をおいてようやく全巻読み終えた。これは前4冊を総括する性格のもので、したがって繰り返しも多いが、前の多くは忘れていたので復習にはなる。

神話的思考には対称性の論理があるという。それに対比して、科学的思考はもっぱら非対称性の論理であるとする。この対称性の論理思考は、4万年から3万年前にヨーロッパに出現した現生人類が、脳の組織に起こった革命的な変化によって獲得したものだという。それは脳内の領域間を横断的に結ぶ神経組織の通路の生成によるもので、それにより流動的な知性が生まれ、象徴的な思考ができるようになった。これは高度な技術的才能を持っていたネアンデルタール人にはなかったものだというのが、「認知考古学」の成果らしい。この対称的論理は非対称的論理と共同してバイロジックを作っていたが、国家の形成、一神教の確立とともに、また後代では資本主義経済の成立と同じ流れで、抑圧され、フロイトの意味での無意識の領域に追いやられた。しかし、これを改めて現代の経済の中で、思考の上で位置づけることによって、ホモ・サピエンスの幸福がよみがえるとする。

このような話の展開のかなりの部分には共感できるところがあるが、ちょっとどうかなあと思うところも少なくない。対称性と非対称性が「対照」されて論じられるが、何をもって対称性というかは

多分にご都合主義である。たとえば交換と贈与で、普通に考えれば交換は対称的で贈与は非対称的と思うが、中沢は贈与が対称性の論理に基づくもので、交換は非対称だという。このように同じ「対称」ということば・概念をずらし、「圧縮や置き換え」を行っていくことが、まさに科学論理と異なる詩的な対称性論理なのかもしれないが、そういつてしまうと何を基準に考えればよいのか分からなくなる。たとえば、通常の科学は非対称性論理の典型とされるが、どういうわけかアインシュタインは違うとされるのである。そして、絵画におけるキュビズムとからめて

「二十世紀初頭の科学と芸術の領域では、無意識に内在する知性のさまざまな可能性が探求され、その探求の最高の産物として、芸術ではキュビズムと抽象絵画が、科学の理論としては相対性理論と量子力学が生み出されたのでした。」(pp.227-228)

というのは、あまりに都合のよい解釈という気がする。相対性理論や量子力学は、やはりギリシャ以来の科学的な論理思考の上に立つものだろう。数学もよく引き合いに出される。たとえばクラインの壺とトーラス、カントールの集合論、超準解析学など。中沢はそれらをかなり理解しているようだが、その使い方はやはり恣意的な印象がある。

しかし、読みやすく書かれてはいるが内容は濃く、刺激的な本であることは間違いない。

レヴィ・ストロース、川田順造 訳「悲しき熱帯」（中央公論社「世界の名著71」）

昨年、レヴィ・ストロースが亡くなった。この間、中沢新一の「対称性人類学」を読んで、そこにレヴィ・ストロースがたびたび参照されるので、前から読もうと思っては手を出しそびれていたこの著作を読むよい機会だと思った。

読み始めて驚いたことがある。1か所だけだが鉛筆で線を引いた部分がある。しかし、自分では線を引いた記憶がない。そこでようやく気づいたのは、この本が自分の本ではなく親父の本だということである。これは「中公バックス」版で、発行が1985年だから親父の晩年である。その頃、文化人類学に関心が生まれたのか、新書などのいくつかの文化人類学解説本が親父の本として残っている。

最初に載せられている1967年にこの「世界の名著」出版のために書かれた「日本の読者へのメッセージが」が、感動的である。

「日本文明ほど、私の知的、道徳的形成にとって、早く影響を与えたものはありません。」

と始まる。5、6歳のころ、画家の父から広重の版画をもらい、それ以来、学校の成績がよいと褒美に日本の版画をもらうことで収集を始め、やがて自分でも版画だけでなく刀身や刀の鐔などまで買い集めたという。そして

「感情と思考においては、少年時代のすべてと青春時代の一部を、私はフランスでと同じくらい日本で過ごした、ことができます。」

というのである。しかしこの1967年の時点において、まだ一度も日

本に行ったことがないというのにも驚く。それは子供時代の夢の国に対して、現実の姿に直面するのが恐ろしかったかららしい。

本書は1930年代にレヴィ・ストロースが行ったブラジル調査を、1954年に振り返って記述したものだが、文化人類学(本訳書では「民族学」)者としてブラジルに行くに至るまでの回顧も含めた、自伝的な要素の濃い作品であり、それが大きな魅力となっている。ソルボンヌで5年間哲学を専攻した後、民族学に転じたこと、フロイト、マルクス、ソシュールなどへの言及など、彼の思想を形成した過程の一端がのぞかれる。また、1941年に米国に脱出した波乱に満ちた顛末も、語られている。

ブラジル調査の内容では、まずカドゥヴェオ族の女たちが体や顔に描く絵が実に面白い。フラクタルを思わせる幾何学的、装飾的な線画だが、豊かな多様性があり綿密である。レヴィ・ストロースは紙の上に顔を書いて、その上に装飾をさせるという方法で、数百のモチーフを採集している。そして、作られた絵柄は

「対称と非対称の二重の原理を同時に用いて、しばしばそのままにしておく」(p.474)

という。さらに

「この複雑な任務から、いくつもの要求が生じている。機能にもとづく対称性の要求、そして役割に応ずる非対称性の要求である。問題は対称的でありながら、しかし斜めに対称であるという構成をとり入れることで解決される」(p.476)

という。中沢の「対称性人類学」もこの辺からヒントを得ているかもしれない。しかし、この絵画の構成を社会構造と結びつけ、3つの階級という非対称的な構造と、互いを婚姻の対象とする2つの半族という対称的な構造と重ねる議論は、ちょっと強引な気もする。

最後に詳しく記述されるナンビクワラ族は、消えゆく民族として愛情を持って語られるが、「悲しき熱帯」の悲しさを代表している。現在ではまったく滅び去ってしまったのだろうか。

柳田国男「遠野物語」 （岩波文庫）

これも何度か読もうとして挫折した本である。民話の収集としては価値があるだろうが、文学的な面白味はないと感じていた。それで、過去2-3度読みかけたが、途中で飽きた。今回はレヴィ・ストロースを読んだ後でもあり、またそのきっかけが中沢新一だったこともあり、「山の人生」「山人考」が一緒に収められている本書を、最後まで読んだ。

やはり「遠野物語」だけでは、面白さはよく分からない。ただ、ところどころに柳田による「遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイもアイヌ語なり。」のような注があるのが面白い。その注の集大成のようなものが、「山の人生」と「山人考」であるともいえる。

しかし、「遠野物語」の見かけは平明な語りは、柳田によって研ぎ澄まされた文語体の表現が工夫されているだけでなく、その物語としての加工にも相当な技巧が凝らされているらしい。その辺は、桑原武夫の解説によってうかがいしれる。桑原の解説は二つついていて、一つは「『遠野物語』から」と題する「文学界」1937年7月号に載った評論で、ほぼ賛辞に満ちている。もう一つはこの文庫のために1976年に書かれた解説で、柳田の死後のせいかな、なぜ柳田家に養子にいったのだろうか、などの柳田の人生に対する無遠慮な憶測を交え、かなり批判的なトーンも感じられる。文庫の解説としてはちょっと異色である。

狩野博幸、河鍋楠美「反骨の画家河鍋暁斎」(新潮社 とんぼの本)

これは読む本というより眺める本だが、しかし文章も精読した。河鍋楠美は暁斎の曾孫で、眼科医だが河鍋暁斎記念美術館館長。狩野博幸は日本絵画が専門の美術史家で同志社大の教授だが、名前からして狩野派の末裔なのだろう。その狩野による解説と、狩野と河鍋の対談がある。

暁斎は戯画、エログロというイメージがあるが、狩野派で学んでその技術をしっかり身に付けており、なんでも描ける。とにかく面白いしすごい才能である。

「とんぼの本」は何冊か買っているが、これだけ質のよい図版が豊富に入って1500円は安い。

徳田雄洋「デジタル社会はなぜ生きにくい」 （岩波新書）

ソフトウェアを題材にした一般向けの本を出したいと思って、岩波の吉田さんに相談した。一応原稿を作って見てもらおうとメールで送ったら、直接会って話したいと言って、先日駒場に見えた。面白く読んだが、どの辺の読者層を狙いとするか、一般向けなら少し構成を工夫した方がよいということで、ヒントを出してくれたが、本にすることには前向きだった。

そのときに、この本を参考のためと持ってきてくれた。徳田さんがこの岩波新書を出したことは知っていたが、読んでいなかった。しかし、タイトルはなかなか魅力的で、気にはかけていた。ところが吉田さんの話では、あまり売れ行きが芳しくないという。だから、彼はそうは言わなかったが、半ば反面教師のような意味で持ってこられたのかもしれない。

この本は、僕にはわりと面白かった。1984年以降をデジタル時代と位置づけて、デジタル化技術がもたらす製品・システムが、どのような影響を人々に与えているかを、とくに負の面に気を配りながら記述している。ただ、評判が今ひとつぱっとしないとしたら、その理由はわかる気もする。このタイトルは、編集者が苦心してつけたものらしい。タイトルとして惹きつける力があるが、これから多く

の人が期待するのは、もっと社会的、心理的、哲学的な側面からデジタル社会に切り込むことではなかろうか。しかし、徳田さんの専門からすれば当然のことながら、その立場は技術的な知識を背景に問題点を指摘し、またそれへの処方箋（というほど具体的ではないが）を示すということである。

ちょっと気になったことが2点ある。一つは、たとえば「はじめに」の冒頭の一文

「2008年7月11日金曜日、ニューヨークに数百人の行列が出現した。」

とiPhoneのことを語り始めるのだが、iPhoneという商品名はおろか、アップルという会社名も出さない。以下、すべてこの流儀で通している。分かる人には分かるが、別に分からなくてもいいという態度である。これは変に具体的な商品名・企業名を出して偏った受け取り方をされるのを嫌った防御的な、あるいは公正中立的な意味があるのだろうが、話に具体性を与えて読者を引き込むという点では損な戦略ではないだろうか。

もう一つは、各章の扉に付されている次のような引用文である。

「病院の表示

『このたび当病院は事務処理をコンピュータ化しました。手作業より時間がかかりますのでご了承ください。』」

これについて「はじめに」に、

「各章の扉の題辞は、著者の体験や周囲の観察に基づいている。」

と書いている。それでいつどこで収集されたものか、一切記述がない。同様に、本文でもニュースの類がふんだんに引用されるが、それらについて出典、日時がまったく示されない。したがって、これが著者の創作でないかという疑いを、払拭するすべがない。

竹内 啓「偶然とは何か―その積極的意味」(岩波新書)

この間、「関根智明さんを偲ぶ会」というのに出て、そこで伊理先生と談笑されていた竹内啓先生にお会いして、少しお話をする機会があった。東大出版会のことをこちらから話題にしたら、あそこから1980年代に竹内先生が編集して出した教養講座というシリーズは、執筆者たち皆がよいものを書いてくれて、面白い講座となった。あれを復刊できないものか、ということだった。竹内先生と親しく口をきいたのはこれまであまり記憶にないが、あいかわらずシャープな頭脳の持ち主という印象を受けた。

この本にも、感心した。偶然と必然とを対照して、種々の角度から簡潔ながら密度の高い議論を展開する。まず、そもそも

「偶然と必然とは対であると述べたが、それは日本語（漢語）のことであって、他の言葉ではそうになっていない」

といって英語の例を挙げている。そして、

「むしろ偶然と必然という対概念がたまたま日本語（漢語）の特性から生じたとしても、私はそのことは幸運であったと考えたい」

という。さらに

「『偶然でないことが必然である』というよりやはり『必然でない

ことが偶然である』と思われよう」

と言って、まず必然とは何かを論じる。

こうすると、何か形而上学的な議論が始まりそうに見えるかもしれない。実際、導入として九鬼周造の「偶然性の問題」という哲学的な本が取り上げられる。しかし、経済学者、数学者の竹内は、九鬼の議論をあっさりと切って捨てる。

すなわち、

「九鬼の本は、多くの哲学者の議論を引用して偶然の概念についていろいろ論じているが、私は本書では偶然をもっぱら科学（自然科学，社会科学，実験心理学等の人間科学）と人間の現実生活の観点から考えることにしたいので、形而上学的な議論には、これ以上立ち入らないことにしたい」

と小気味よい。

そして、第2章、第3章で統計数理学の専門の立場から、確率の意味、大数の法則、中心極限定理、統計的推測の論理などについて、手際よく述べる。しかし、本書のメッセージは、確率論の導入によって「偶然」は克服されたと考えるのは、間違いだということである。偶然の蓄積する様式は、偶然が相互に打ち消しあって大数の法則を成り立たせるような加法的なものだけでない。偶然の蓄積によって変化が特定の方角に進むことがあり、生物の進化はまさにそのような場合である。

さらに歴史における偶然と必然，人間の自由意志，人の運と不運をどう考えるべきか，という問題が議論される．そして「不確実性の中の意思決定理論」の限界を強調する．最後に金融工学の失敗とバブルの問題を取り上げ，基本的な問題は「効率的市場仮説」にあるとする．これらの議論を含む最終章は，示唆に富む意見がいろいろ出されているが，多くの話題がそれぞれあっさり書かれていて，もっと十分掘り下げてほしかったという気もする．

物理的な世界観からは，ニュートン，ラプラスの決定論やエントロピー増大の法則は触れらるし，ビッグバンも名前だけは出てくるが，量子力学にまったく触れられていないのはやや意外である．ただ，カオスの話は最後の最後になって，ようやくちょっとだけ顔を出す．

とにかく，小著ながら考えさせる本だった．

村山齊「宇宙は何でできているのかー素粒子物理学で解く宇宙の謎」（幻冬舎新書）

この本が売れていることを，岩波の吉田さんから教えてもらった．その後，注意してみると確かに新聞の書評などでよく取り上げられるし，ベストセラーになっているらしい．講演をもとにライターが大幅に関与して作られたらしいが，最先端の科学の話をやさしく説いている．

Brian Greene と同じようなテーマを、同じように科学者自身が書いているのだが（村山の場合はライターの手伝いがあったとしても）、大きな違いはその分量である。しかし、新書という手軽さにも、捨てがたいものはある。また、この分野は日進月歩だから、Brian Greene の2冊の本で読んだことより、新しい内容もあるはずだし、カミオカンデや村山自身の研究（村山は現在、東大数物連携宇宙研究機構の機構長）に関わる話題も Greene の本にはなかったろう。

と、断定的に言えないのは、すでに Greene の本の内容をほぼ忘れていているからである。

しかし、こういう本が20万部も日本で売れるというのは悪いことではない。

大室幹雄「ふくろうと蝸牛―柳田国男の響きあう風景」（筑摩書房）

「遠野物語」を読んだので、大分前に買ってあったこの本を読んでみた。しかし、単行本で500ページあり、大室の文章はくせがあって読みにくく、ずいぶん時間がかかった。

買ったときに、序章だけ読んでいた。「山の人生」の最初にある、炭焼きの男が自分の子供二人を鉈で打ち殺す話を取り上げている。この話自体が強烈なインパクトを持ち、それに対する大室のいわく

ありがたな評し方が、いずれ時間があるときに、この本を読もうという気にさせていた。

実際、「遠野物語」とともに収録されている「山の人生」をこの間読んで、この冒頭の話の強烈さを再度味わった。しかも、これがその後展開される「山の人生」の種々の話とあまり関係がない。

今回、本書を読んでみて、この大室の本における序章の位置づけにも、予想とは違う印象を持った。序章では、この事件は実際にあったことながら、柳田の記述は、まず季節を春から秋に変え、殺すに至った経緯について、事件の記録や報道にはない子ども達が自分で殺してくれと言った、というストーリーを加えているという。ということで、柳田のそのような技巧、細工に対して批判的な立場から本書は書かれているのかと予想したが、1章から10章および終章に至る本文では、柳田に対する賛辞に満ちた論評が展開される。柳田が田山花袋、島崎藤村、などの日本の自然主義作家、私小説家といかに異なる地点に立ち、高い知性とリアリズムと文学性を備えていたか、が繰り返し強調される。

大室はまた、柳田がいかに文体に苦心し、さまざま実験的文体を試行しながら、見事な散文を書くに至ったかを述べる。そういう大室の文章は、僕には相当な悪文に思える。柳田からの引用が多くを占めるのに、癖のある大室の文章がこちらの頭にはひっかかる。それに繰り返しが多く、同じものが何度も引用され、それも技巧の一つ

なのかもしれないが、500ページの長さを飽き飽きしたものにさせる。

まあしかし、柳田を少し読んでみようという気にはさせられた。

2009年

淀川長治，蓮實重彦，山田宏一「映画千夜一夜（上・下）」 （中公文庫）

蓮實さんの映画評論をほとんど読んだことがないが，東大出版の企画委員会で彼の「映画論講義」が提案され，ほどなく出版されてかなり評判はいいようである．その出版に合わせてUP誌で蓮實さんと久保田智子という若い女性の対談が載った．その中にこの本のことが出てくる．たとえば

久保田「・・・あんなタジタジになっている蓮實さんって，ほんとに淀川さんがいたからだと思うんですけども，今はそういうことってあまりないですよな．」

蓮實「あれは，淀川さんと蓮實は話が合うなどと誰も信じていない時期の大胆な企画だったのです．私は難しいことばかり書いているし，淀川さんはテレビで「さよなら，さよなら」を言っているだけの人だと思われていましたが，現実にお会いすると「あんた難しいこと書いているけども，いいこと言ってるわ」なんて言ってくださったんです．」

という風なので，面白そうだと思い買って読んでみた．

雑誌に連載された全12回の座談会がもとだが，上下合わせて800ページ近くある長大な本となっている．「千夜一夜」とはよく名づけ

たもので、座談会といっても蓮實と山田はもっぱら聞き役に回り、淀川がシェーラザードとして縦横無尽に語る。

全編、恐るべき記憶力の勝負である。座談会の後から資料を調べて補っているところがあるに違いないが、とにかくおびただしい数の映画名、俳優名、監督名、カメラマン名、プロデューサー名、が出てくる。さらに何年の作品で原作者は誰で、というようなデータだけでなく、とくに淀川は映画のストーリーや場面を、独特の語りで仔細に描写する。しかも、蓮實と山田より30年近く年上の淀川は、蓮實や山田が知らないサイレント時代からの映画を子供の時から見ていて、それらをまた鮮明に記憶しているらしい。

この座談会のもう一つの見どころは、淀川が自分とはタイプの全く違う蓮實に、対抗心、劣等感、優越感をないまぜにしながら、一方で揶揄し、一方で共感しあって、巧みに座談を進めていくところである。

しかし、批評の表現としてはまったく好きか嫌いかに終始する。あれほど難しい文章を書く蓮實も、ここでは淀川と同じで、「いいですね、あれは」とか「好きなんだなあ」としか言わない。けなす場合も「デボラ・カーってどうしてあんな馬鹿みたいな顔をしているんでしょうね。」といった具合で、まったく非論理的である。しかし、それが面白いので、こっちはほとんど見たことのない映画の話

を、3人が好き勝手にしゃべっているという構図なのに、800ページを一気に読んだばかりか、もっと続きが読みたい気がした。

「文庫版あとがきにかえて」というのがあって、淀川は1998年に死んでいるので、蓮實と山田とで対談しているのだが、蓮實が総長時代に行われていて、対談場所が何と東大総長室である。

堤未果「ルポ 貧困大国アメリカ」（岩波新書）

昨年秋の金融危機以来、派遣の打ち切り、正社員の首切り、という労働・失業問題が前にもまして深刻化した。それは規制緩和とグローバル化による格差の拡大という現象としても捉えられている。そして貧困問題、働いても暮らしが苦しいワーキングプア問題、に関する本の出版も増えている。岩波新書でも、本書や湯浅誠「反貧困ー「すべり台社会」からの脱出」や阿部彩「子どもの貧困」といったものが続けざまに出されている。

著者はニューヨーク州立大学で国際関係論の学士、修士を取っていて、アメリカ事情に詳しい。そこで綿密な取材のもとに、貧困により肥満児が生み出されること、ハリケーン・カトリーナは人災だったこと、高額医療費と大量の無保険者問題、貧困高校生をターゲットとした軍のリクルート、世界のワーキング・プア層が支える民営化された戦争、というアメリカにおける恐るべき現実を、鮮やかに描く。これと比べれば日本の方がまだはるかにましという気にさせられるが、著者の意図はもちろんそこにはなく、みんなが自覚し立

ち上がらねば、日本も同じ道を歩むというのが、メッセージだろう。

レーガン、サッチャー以来、規制緩和、民営化、小さな政府、自由競争が世界の流れとなった。日本でもとくに小泉はその路線を継承した。

1994年に佐和隆光「平成不況の政治経済学―成熟化社会の条件」を読んだとき、

「それにしても佐和は、貿易問題では日本の規制、談合、競争回避の構造を壊すべきだと主張しながら、規制緩和は失業増加を招き、景気浮揚には必ずしもならないなどといい、どうしたらいいのかはつきりしない。貿易問題自体についても、数値目標を是認するように言いながら、結局手段としては構造改革を実施する主張となる。」

という感想を書いた。やはり経済学者も揺れて来たのではないか。最近、中谷巖が「資本主義はなぜ自壊したのか「日本」再生への提言」という本を出し、新自由主義的経済学の旗振り役と目されていた中谷が、180度「転向」を表明して「改革が日本を不幸にした」と懺悔しているということで、話題になっている。

蓮實重彦、山田宏一「傷だらけの映画史」(中公文庫)

淀川、蓮實、山田の「映画千夜一夜」の面白さがあとを引いて、同じ中公文庫から出ているこれを読んでしまった。これはもとは、

1988年出されたビデオシリーズ「リュミエール・シネマテーク」のおまけとして非売品で出されたものだそうだ。「映画千夜一夜」が単行本で出たのも同じ1988年だが、雑誌に連載された座談会が行われたのは、本書の対談よりも前だろう。

座談会の方は淀川対蓮實・山田連合という趣きだったが、淀川抜きだと知識背景も趣味も共にするもの同士のかけ合いとなる。しかし、それはそれで別の迫力を生んで、一気に読ませる。前以上に、個々に出てくる映画をほとんど見たことがないのにもかかわらずである。

プロデューサーのウォルター・ウェンジャーと、監督のラング、ヒッチコック、フォード、ハサウェイ、ルビッチ、ルネ・クレール、ダグラス・サークが順に取り上げられる。淀川がいないので、二人で遠慮がなく自由に語っている。スチル写真も多く入れてあって、映画の雰囲気的一端に触れられる。

吉田健一「金沢・酒宴」(講談社文芸文庫)

4年ぶりに参加した菊姫ツアー（1/31－2/2）に、この本を持っていた。金沢の旅のガイドになることも多少は期待したが、やはり吉田健一ではそうはいかない。だいたい、書き出しからして

「ここは加賀の金沢である。尤もそれがこの話の舞台になると決める必要もないので、ただ何となく思いがこの町を廻って展開することになるようなので初めにそのことを断って置かなければならな

い。」

というのである。

これは吉田の幻想小説の最高峰だという。最初から最後まで、主人公の内山は酒を飲んでいる。その酔いを写してか、場所が揺れ動き、時間が過去、未来を飛び交う。そして不思議な文体。その読みにくさには最後まで慣れなかったが、しかしこの文体こそが吉田が練り上げた幻想を表す手段なのである。実際、「金沢」という作品は1973年に発表されたものだが、併せて収録されている「酒宴」は1955年の小品で、同じように酒宴で幻覚的な情景を描きながら、文体が違う。こちらの方はまだ常識的な普通の文体で、それがために「金沢」のような味がないのは確かである。

一応、犀川とか兼六園とか成巽閣とか忍者寺といった観光地の名前は出てくる。ツアーから帰って来てから読んだところに、「骨董屋が鶴来という町の近くで取れたという熊の肉を土産に持って来て話がその町とそこの山菜料理のことになった」という文から始まって、鶴来を訪ねるくだりとなり驚いた。もっとも鶴来に行ってから話は、例によって幻想的で実際の鶴来とはおよそ関係なさそうだ。もちろん、鶴来の酒、菊姫は出てこない。

寺澤盾「英語の歴史－過去から未来への物語」(中公新書)

12月にJAISTに行ったときに、安藤さんからこの本のことを教えてもらった。

読み始めてしばらくしてから、この著者が駒場の同僚であることに気がついたが、会ったことはない。1959年生まれというからそんなに若くないし、駒場に來たのもかなり前らしいが、

古英語、中英語、近代英語の変遷だけでなく、黒人英語、インド英語、ピジン・クレオールやコンピュータ/インターネット英語、差別語撤廃運動、フェミニズムの影響まで書いてある。終章が「英語の未来」で、とくに大胆な予測があるわけではないが、母語としての英語 (ENL) を話す人口と比べて、第2言語としての英語 (ESL) と外国語としての英語 (EFL) の割合が大きく伸びることを前提とした議論がある。

末延芳晴「森鷗外と日清・日露戦争」（平凡社）

このところ鷗外物をいくつか読んだが、鷗外に関する本はもちろん汗牛充棟だからそのごく一端に触れたにすぎない。本書も鷗外を扱った評論だが、戦争という着眼点が新しいらしい。しかし、引用されているものを見ると、個々の材料には当然ながら必ずそれを議論の対象とした先例があるようだ。

鷗外は日清・日露の両戦争に従軍した。文学とは国家権力から独立した個人の営みであり、国家による暴力としての戦争には批判的な著述で立ち向かうべきだというのが末延の立場である。その観点から、明治大正の文学者の中でも、とくに陸軍軍医部長として内側か

ら戦争に関わった鷗外が、何を書いたか、というより何を書かなかったか、という点を追求する。

というと鷗外批判に終始する論のように聞こえるかもしれないが、末延の筆致はそう単純ではなく、鷗外の人間性を暖かく見ているところもある。読み方によっては、評価が揺れているような印象を持つかもしれない。

鷗外は戦場にはいたが、常に安全圏にいたとし、

「『うた日記』の中で、最も戦場に近いところに立ち、悲壮な口調で書かれたこの詩（『唇の血』）においても、鷗外は安全圏に身を置いていた。あるいはそこから身を乗り出すことはなかった。」
(p.238)

という。しかし、戦後60年の平和の時代を生きて、より確固とした安全圏にいる立場からのこのような批判は、いい気なものではないのかという気がする。

ただ、「あとがき」によると著者は自衛隊のイラク派遣と憲法第九条の改変・廃棄に反対して、リレー式ハンガー・ストライキを続けてきたという。ただの口先だけの評論家ではないらしい。

文芸評論としてみると、本書の大きな主張は、鷗外が日清・日露の経験から文学の道を見つけたということになるだろう。戦争時の「うた日記」の後、詩歌からは離れて小説の道を選び、最後は史伝

に至ったことが戦争経験で準備されたという議論は、それなりに説得力がある。

第6章で日露戦争中に妻志げに宛てられた133通の手紙のことが語られる。「日本の文学 森鷗外集(一)」の感想で、解説の三島が書いていることについて、僕はこのように述べた。

「三島は

『不透明で硬質な心の持ち主である女性と、まるで象牙のコマを鉢合わせさせたように同居していて、家庭とは呼べないし冷え冷えとした生活を営んでいたところに、日本の近代というもののふしぎな姿が現われている。(中略)「半日」の世界は、どんな自然主義の貧乏物語よりも、私には凄愴苛烈なものに思われる。』

と書くのだが、これはどうだろうか。「半日」にはむしろ滑稽小説のようなおかしみ、軽みがある。その点で鷗外は「奥さん」を、案外温かい目で見えていたのではないか、という気がする。」

実際、「半日」とこれらの甘い手紙との落差は大きい。手紙からは「冷え冷えとした生活」はおおよそ想像できない。ただ、鷗外は志げを愛していたが、母との比較ではやはり母を上にした。これを、母、すなわち家は国に準じるもので、鷗外にとっては私より公という意味で上位なのだ、と末延は解釈するが、それはどうだろうか。妻より母を重視したと判断する論拠として、遺言状で遺産の半分は母に、半分は長男に遺し、妻には何も遺さないと記されている点を挙げているが、同じ著者が一方でこの遺言の意図を、鷗外が戦場で

死んだ後、まだ若い志げを家に縛りつけたくないからだろう、と解釈している。そちらの方がもっともらしく感じられる。

本文では石川淳の「森鷗外」に言及していないが、あとがきではかなりページを割いて、その姿勢を評価している。しかし反戦の思想に関連して、石川が「古い手帳から」と「大塩平八郎」を取り上げて森鷗外を批判していることに触れていないのは、意外な気がした。

隈研吾「自然な建築」（岩波新書）

自然な建築とは、コンクリートでなく石や木や紙などを使った建築を指している。もちろん、コンクリートや鉄骨ももとの石灰石や鉄鉱石は自然にあるものだから、自然か自然でないかという区分は明確ではない。しかし20世紀はコンクリートの時代であり、それが自由に形を作れて強度を保証できる便利な素材であったがゆえに独占的な地位を占めたが、そのために失ったものも大きいとして、なるべくコンクリートを使わない家や建物を隈は建てようとする。そして自分が設計して建てた、水、石、竹、和紙などを使った建築の例を、写真を交えて8例紹介している。

「負ける建築」で隈が筆が立つことはよく分かったが、現役の建築家としてちゃんと設計もしているんだといういことを、これを読んで知った。

湯浅誠「反貧困 ―「すべり台社会」からの脱出」(岩波新書)

2008年4月に出た本だが、その後、事態は加速度的に進み、失業者、生活保護申請者が急増している。湯浅は昨年末の年越し派遣村（通称、日比谷テント村）の村長としてテレビのニュースでもその姿がよく映し出された。

堤の「ルポ 貧困大国アメリカ」ではアメリカのひどい話という感想ですんでいたが、本書は日本の現実の問題であり重い。一応安定した生活を送っている自分は何をなすべきか、という問いを突きつけられる思いがする。

湯浅はすべり台的に貧困に落ち込むプロセスに、5つの排除が働いているという。教育課程からの排除、企業福祉からの排除、家庭福祉からの排除、公的福祉からの排除、自分自身からの排除、である。そして「溜め」がない状況ではあっという間に最底辺に落ち込む。「自己責任論」はそれを理解していないと批判するだけでなく、貧困に陥った人が過剰な自己責任意識を持っていることが問題だとする。

議論は感情的でなく理性的で説得力がある。文章の質も高い。

西田宗千佳「クラウド・コンピューティング ウェブ2.0の先にくるもの」(朝日新書)

新書の中にも本格的な著作はあるが、多くは軽い知的な読み物ということだろう。バズワードとしてのクラウド・コンピューティングを紹介する本書は、まさにそういう新書の役割に合うものだが、予想したほどお手軽に書かれた本ではなく、むしろ良書というべきだろう。

新用語の解説となれば、「クラウド・コンピューティングとは何か」と始めるのが常道だろうが、本書の工夫はそのようなストレートな方法をとらず、クラウドという言葉が最初の3章、150ページの間はほとんど出さないことにある。

第1章は「サービス化」で、パソコンのパッケージ・ソフトはその役割が縮小しているという。第2章は「ボーダーレス化」と題してiPhoneを取り上げ、パソコンと携帯とまた他の家電との区別がなくなっていることを言う。第3章は「オンライン化」で、Gmailを例にとり、データも処理もすべてネットワークの向こうにありながら、ローカルでの処理と変わらない性能や使い勝手が実現されていることを言う。そして第4章に至って初めて「クラウドとは何か」を論じ、それまでの3章で見た現象すべてが、クラウドの側面を表しているとする。クラウド・コンピューティングは2006年にグーグルのシュミットCEOが言い出したもので、それだけに他の企業からは批判もあるし、類似の概念は過去にもユーティリティ・コンピューティングとかネットワーク・コンピューティングとして提唱されてきたことにも、きちんと触れている。

この手の本には往々にしていい加減なことが書いてあるが、本書はその点でもかなり信頼できる。ただ、コンピュータの初期に世界で5台もあれば十分と言ったのがIBMのトーマス・J・ワトソンが言ったというのはどうだろうか。エイケンではなかったか？と思って Howard H. Aiken をWikipediaで見たら、

In 1947, he is purported to have said, "Only six electronic digital computers would be required to satisfy the computing needs of the entire United States." This remark is also attributed to Thomas J. Watson, but was probably said by neither.

とあった。

レイモン・ラディゲ，新庄嘉章 訳「肉体の悪魔」（新潮社「世界文学全集44」）

2月から3月にかけてはアカデミー賞シーズンで、NHK-BSは例年、過去のアカデミー賞受賞作品を放映する。昨年末Blu-rayディスク・レコーダーを買ったので、それらの映画をずいぶん録りだめした。その中の「肉体の悪魔」を最近見た。ジェラルド・フィリップである。

とくにこの映画に感激したわけでもないが、昔読んだ「肉体の悪魔」を引っ張り出してみた。新潮の世界文学全集の一冊で、モーリヤック、コレット、サン・テグジュペリと一緒に入っている。珍しくその本に買った日と読んだ日付が書き込んである。買ったのは

1970年4月20日、翌日からほぼ1日1編のペースで読んでいる。大学院に入ったばかりで、よほど暇だったのだろう。

それで読み直してみた。39年前に読んだ内容の記憶は全く残っていないが、映画を見たばかりなのでそちらとの対照はできる。映画で新しく付け加えられた場面は結構あり、設定を変えているところもある。しかし、骨組はかなり忠実に原作に従っている。

16歳の早熟な少年の異常な性愛物語だが、第一次世界大戦という時代背景のもと、読む者を惹きつけるストーリーと心理描写がある。ラディゲはこれを自分が16歳のときに書き始め、20歳の年に出版された。その年に、腸チフスで死んでしまう。

翻訳はさすがに古めかしいところがあるが、さほど気にならない。ただ、たとえば服のことを「着物」と言うが、現代では着物といえば和服を指すので変な感じがする。また、tuとvousを「あんた」と「あなた」と使い分けるのは苦しいところだ。

三島の「春の雪」はもしかすると「肉体の悪魔」を下敷きにしているかもしれないと思った。

橋本治「小林秀雄の恵み」（新潮社）

橋本治の本は読んだことがなく、「「三島由紀夫」とはなにものだったのか」を書いて第一回の小林秀雄賞を取ったことも知らなかったが、橋本にとってはそれが小林秀雄について書くきっかけになっ

たらしい．なにしろこの原稿を書きだす時点で、「本居宣長」以外の小林秀雄の著作を読んでいないと言っている．それにしては、「本居宣長」以外の著作についての言及が多い．とくに第5章から7章あたりでは、「当麻」「無常といふ事」「徒然草」「西行」などが重要な位置づけを与えられている．さらに小林によって出版も全集への収録も禁止された「感想」というベルグソン論まで読んでいる(第2章)．

橋本が意識して書いているように、古事記を読んだ本居宣長が書いたものを小林秀雄が読んでそれについて書き、それを読んだ橋本治がそれについて書き、それを読者のわれわれが読むという構造になっている．

これも意識しているのかもしれないが、無駄を省いて簡潔雄勁な小林の文体に対し、橋本の文体は繰り返しが多く、俗な表現を交え、多弁である．しかし、小林とは別の意味で達意の文章である．同じ引用を何度も使うのも特徴だが、そうして小林、あるいは小林が引用する宣長の文章、主張に慣れさせながら、結局自分の主張に導いていく．しかし、本居宣長の文章は小林が引用しているものしか引用していないようで、独自に宣長を読んで勉強しているわけではないらしい．

「『本居宣長』を何度読んでも、私は本居宣長にまったく関心が湧かないのである．私は、その初めから本居宣長には関心がなくて、『本居宣長』を何度読んでも、「本居宣長の書いたものを読んでみ

ようかな」という気にならない。（中略）私の関心は、書かれる「本居宣長」より、「『本居宣長』を書いている小林秀雄の方に向かってしまうのである。」(p.55-56)という。

「小林秀雄の恵み」と題し、小林のすごさを評価しながら、「・・・としか私には思えない」という強い断定口調を多用して、自分の意見、異論、批判を述べる。とくに最初の方で、本居宣長は和歌を詠むのが好きで、それも自分の歌を自由に詠むことを信条とし、その考えの本を確かめるために源氏物語、古事記の研究に向かったという説を述べる。これがどの程度、橋本のオリジナルなのか分からず、実際、小林の「本居宣長 補記」では最後に

「もうお終いにする。彼は急迫した政情に関し意見を求められても、直に物が見えて来る物静かな(冷静なではない)歌人のまなざしを少しも崩さなかった。これは彼の学問の一番深いところに隠れていた彼の志と言えるので、彼の学風を学んだ彼の後継者も、この志を受継ぐ事は、容易ではなかっただろうと、私は思っている。」と書いているそうで、これは橋本の言うことをそのままずばりと先に言っているように見える。しかし、橋本はこの「補記」を明快すぎて面白くないと言って、その後、ほとんどとりあげない。

とは言うものの、これを含む橋本の見方には面白いところが多い。ただ、第10章で「『本居宣長』－その終局の難渋」と題して、「本居宣長」の（四十）以降、

「小林秀雄がなにを問題にしているのか、私にはさっぱり分からない」

で始まる議論は、その橋本の議論自体がよく分からない。どうも近世に生きた本居宣長を小林は近代の眼で理解しようとしている、として批判しているようだが、それには十分な説得力がない。本居宣長と上田秋成の論争について小林が書くのを、小林の資質は宣長より合理的な秋成に近い、それが宣長を弁護するところに無理がある、という。しかし近代の合理性から見れば秋成に近い資質を持つのは小林ならずとも当然で、その上でこの論争を考えるとこに意味があるはずだろう。また、議論となるのは「古事記伝」の本編の前にあるという「直毘霊」の受け取り方で、狂信的な古伝説崇拝を書いているものらしい。それが本居宣長の優れた学問とどう折り合うのかという解釈が、問題となる。これについても、橋本はいきなり「私は、本居宣長が「直毘霊」を書くことを、そんなに不思議とは思わない。」と宣言してしまうので、それでは議論にならない、という気がする。

しかし、読む方にこのような思考を促すだけの力がこの本にはある。400ページを越える分量で、今回の旅行（南アフリカのケープ・タウン行き）に持って行ってようやく読み終えたが、結構楽しめた。

**ゲーデル著，林晋，八杉満利子 訳・解説「不完全性定理」
(岩波文庫)**

ゲーデルの不完全性定理についての解説は、これまでホッフスタッター、野矢茂樹、野崎昭弘などのものを読んできた。本書はゲーデルの原論文の翻訳である。翻訳部分は50ページで、その後に林・八杉による解説が240ページも付く。林さんはICOTの初期のころ、亡くなった広瀬さんが委員長だった定理証明系委員会の中心人物の一人だったので、同じ委員としてまたその委員会の仕事を受注した側として、よく知っている。八杉さんは名前だけは昔から知っていたが、二人が夫婦であることを知ったのは、比較的最近のことだ。

さすがに、前半のゲーデルの論文部分を読むのには時間がかかった。高度な数学というわけではなく、一つ一つの論理の組み立てはむしろ簡素だが、丁寧に追うには手間がかかる。それでもなるべく真面目に論理を追った。組み立ては簡素といっても、ゲーデル数の導入やそれに基づいた1-46の概念を関数と関係として形式的に定義するところは実に巧みである。しかし、その1-46は最初の一つ一つ読まず、先に進んで必要に応じて戻って定義を確かめる、という読み方をした。それでも第1不完全性定理の洗練と応用が展開される第3節と、第2不完全定理が示される第4節は、かなりいい加減に読んだ。

解説に至って、さすがに読むスピードは上がったが、しかし量が多い。岩波文庫の他の古典の翻訳本と比べても、このバランスは極端だろう。しかも、解説者がまえがきで認めているように、岩波文庫

としては異例なことに、「未発表の研究成果や、未完成の研究を文庫の解説に盛り込」んでいる。

かなり注意深く一般読者向けに書いているが、それでも「7 不完全性定理論文の仕組み」のあたりは、蘊蓄を傾けている。ゲーデルの解説であるが、これも解説者が何度も断っているように、ヒルベルトに関して過半のページを割いている。また、この手の解説で常套のゲーデルの伝記的な紹介はほとんどなく、年譜などまったく載せていない。

Malcolm Gladwell, “Blink,” Penguin Books

ケープタウンに行ったときシンガポール経由だったが、その空港で往きだったか帰りだったか、2冊のペーパーバックを買ったうちの1冊である。

本書の導入として出される話は、カリフォルニアのポール・ゲッティ美術館が14か月の科学的な調査をした上で本物と認め購入したkouros（アポロン像）を、何人かの専門家が一目見ておかしいと見破ったというものである。それから、人間の直感的な判断(blink)が、長期間の綿密な調査に基づく結論よりも正確なことがしばしばある、というように話が進む。一方で、そのような直感が間違う場合、偏見でゆがめられる場合も多いという事例も挙げられる。さらに、直感で得る判断の精度を上げることは、訓練で可能になるというメッセージもある。

しかし、本書の特徴はこのような議論を理路整然と進めるのではなく、心理学の面白い実験結果や知見をふんだんにばらまくところにある。たとえば、ワシントン大学の J. Gottman の研究室で夫婦の会話を記録して、その夫婦が数年後に離婚するかどうかを当てる話、第2次大戦中のイギリスでドイツのモールス信号オペレータの個人識別ができていた話、テニスの第2サーブ直前の動作からダブルフォルトになる場合を100%近く当てる話、顔の表情から性格を読む話。一方、判断を間違える例としては、見かけでだまされるということで Warren Harding は実にハンサムで堂々としているので大統領になったが、最低の大統領だったこと、Fortune 500の会社のCEOは白人であるだけでなく、身長が6フィートでアメリカ人男性平均の5フィート9インチより3インチも高いこと（みかけで得している）、マーケット調査が当てにならないこと、たとえばコカコーラは目隠しテストでペプシに負けるので味を変えて大失敗したこと、1999年2月のニューヨークでギニアからの移民 Amadou Diallo が自宅アパートの前の階段で座っていたところで、4人の警官に41発の弾丸を浴びて殺された話、彼は銃も持っていなかったのに4人の警官はどうして判断ミスをしたか。話はみな面白くまた巧みに語られるが、全体の議論に必ずしもつながらない。

たとえば、最初の方に企業の求人で大学生をどう判断するとよいかという話が出てくる。週2回1年間面接するか、寄宿舍の部屋を15分観察するか。そしてかなりの場合、後者の方がよい判断ができるという。たとえば飾ってある表彰状、散らかっている洗濯物、アルフ

アベット順に並べてあるCD群，などが多いことを語る．しかし，これは瞬時の直感的判断というよりは，むしろ多くの情報からの分析的な判断と言うべきだろう．その意味で，kouros の話とは逆のケースと言ってもよいのではないか．

浜矩子「グローバル恐慌—金融暴走時代の果てに」(岩波新書)

浜さんは三菱総研時代から名が知られていた．しかし，僕は一緒に仕事をしたこともないし，個人的に言葉を交わしたこともない．Amazon の読者からの評の中に「1990年代初頭，シンクタンクのエコノミストとしてロンドンに赴任していた．折しも日本経済はバブル崩壊で大変な状況に陥り、世界第2位の経済大国の行方に欧州経済界の関心は高かった．そこで彼女にお呼びがかかる．BBCなどのニュース番組に出演し，日本経済に対するキャスターからの難しい質問を，流暢な英語で難なくこなしていた．現在は，日本で教壇に立つ著者であるが，テレビ討論などにパネリストとして出演した時には，その強烈な個性と，鋭い舌鋒で話題を呼ぶ鬼才とも言えるべき」人だという紹介がある．なるほど，そうなんだ．

「緊急出版」されたというこの本でも，彼女の才覚ぶりは随所に見られる．とくに現在のこの世界的な経済状況は「危機」と呼ぶべきものではなく，「恐慌」と位置付けるべきであるとして，1929年の大恐慌や19世紀の恐慌との類似点を指摘しながら，また相違点も明確に論じているところはさすがと思わせる．ただ，この事態にどう

対処したらよいかという処方箋を描くところは、彼女にしてもさほど明快ではない。

ラシーヌ、内藤濯 訳「アンドロマク」(岩波文庫)

NHKがロッシーニの「エルミオーネ」(2008年8月、ロッシーニ・オペラ・フェスティバル)を放映したので録画して見た。昔も「エルミオーネ」をVHSに録画しているが、見た記憶がない。今見ると、テープにカビがついたのか、ひどい画質である。テレビもデジタル化し大画面化したので、VHSに録り溜めた昔のオペラの価値は半減した。

この「エルミオーネ」がラシーヌの「アンドロマク」を原作としているというので、昔読んだことを思い出した。その岩波文庫版が昭和44年発行だからその頃読んだのだろうが、なぜ読んだのは定かでない。そのちょっと前に、ソポクレスの「オイディプス王」を読んでいる。これは恐らく、パゾリーニの映画「アポロンの地獄」を見たからだろう。その連想で、これを読んだのかもしれない。前後して「フェードル」も読んだらしい。

エクトルの寡婦アンドロマクをピリュスが恋し、そのピリュスをエルミオヌが恋し、エルミオヌをオレストが恋して、いずれも思いがかなわないという構図はオペラでもラシーヌでも同一で、だからタイトルをアンドロマクにしようがエルミオーネにしようが、話には

大きな違いはない。原作でもアンドロマクにとくに焦点を当てているわけではないし、エルミオヌの扱いが小さいわけでもない。

アンドロマクはエクトルへの貞節と息子の助命との間で、ピリュスとエルミオヌは恋と嫉妬との間で、オレストは恋と使命との間で、いずれも心が揺れ動くという心理劇である。シェークスピアのような華やかなレトリックはないが、翻訳で読む以上、原作の詩句が持つであろう音楽性は味わえない。

エウリピデスの「アンドロマク」では、アンドロマクはピリュスとの間にモロススという子供を作っていて、その子供がエルミオヌによって殺されることを恐れている、という設定らしい。エクトルの子、アスチアヌスはとっくに死んでいる。ラシーヌはその設定を変えて、アンドロマクをあくまでもエクトルへの貞節を尽くす女性とした。それで確かに悲劇性は増したのかもしれない。

ただ、最後の方でアンドロマクが子供を救うためにピリュスとの結婚に同意するが、しかしエクトルへの貞節を守るために婚礼後自殺する決意をするのは、論理的には無理がある。アンドロマクが死んでしまえば、ピリュスにとってアスチアヌスを守る意味がないからである。

読んでいて途中で気づいたが、この岩波文庫は旧漢字を使っている。昭和26年に第1刷が出て、この昭和44年版は第3刷だから改版さ

れていないのだろう。われわれより下の世代では、読めないかもしれない。

星野英一「民法のすすめ」(岩波新書)

1998年に出た本で、出てすぐ買ったようだが10年間積読だった。買った当時は駒場寮問題で裁判が続いていた頃で、同僚の民法学者の道垣内弘人などとしょっちゅう顔を合わせて裁判や強制執行について議論をしていたから買ったのかもしれない。

本書の主張は「民法は市民社会の法」であるということである。そこで第3章を「民法と市場経済」、第4章を「民法と市民社会」として、社会の基本的なあり方と民法との関係をまず論じているところに特徴がある。「謝辞」によれば

「本書は小著ではあるが、筆者の専門でない部分がある。第三章、第四章であり、入門書から専門書（編書）に至るまで、多くの論考のお世話になった。」

とあり、本文中でもたとえば

「日本における「公」「私」の言葉の意味については、かなりの議論があるようであり、専門家でない筆者としては、とうてい十分にフォローすることができない。」

という表現がある。しかし、やはり本書の面白い部分はこのあたりである。

「公」「私」を中国と比較した西欧と比較する。その結果、日本では「公」が国家や公共団体の意味で使われ、国民の共同という意味で使われていないという。この傾向を著者は公益国家独占主義と名づけている。

また、「社会」と「世間」の比較もある。そして

「要するに、西欧における「社会」は個人が前提になり、個人がその意思に基づいてそのありかたを決めて作るものだが、「世間」は個人の意思によって作られてそのありかたが決まるものではなく、「所与」とされている。」

とさまざまな論者の見方をまとめる。

実は、この間うちの新型インフルエンザ騒ぎで、その「世間」という発想を感じた。バンクーバーに行っている間は、マスクをしている人をまったく見かけず、インフルエンザについてテレビでも新聞でもほとんど取り上げられていなかった。その間、日本では、感染者を出した高校の校長が涙の記者会見をしたという。これは「世間に申し訳ない」という反応であり、さらに言えば日本人の「けがれを嫌う」というメンタリティが図らずも浮上したものでもあるかもしれない。このような中では、市民社会の法としての民法に対し、一般に日本人が無関心であるのも理由がある、ということになるだろうか。

そもそも日本の民法典は明治の初期に、商法、民事訴訟法、刑法、刑事訴訟法などともにフランス、ドイツなどの欧州の法典をもとに短期間に作られたものである。急いだ理由は条約改正のためであり、富国強兵の政策を進めている時代であった。その経緯からも市民社会に根づいたものでない、という傾向はある。

しかし、著者はもちろんネガティブな面を強調しているわけではなく、経済成長を終え、情報化社会を迎え、高齢化社会に入った今こそ、民法の思想を意識することが重要になったという。

そういう訳で、民法の個々の条文の引用や解説はほとんどない。そういう意味ではまさに「すすめ」の本である。ところで、法学者には工学者とともに悪文家が多い気がする。この人の文章も決して読みやすいとは言えず、どちらかといえば悪文に属するだろう。

夏目漱石「道草」（岩波漱石全集 10）

年に1冊か2冊、漱石全集を読んできて、「道草」まで来た。小説では後「明暗」を残すばかりだ。しかし、「道草」は初めて読んだ。

「道草」は漱石の他の作品と異なり自伝的な小説で、私小説に近い。大正4年に新聞に連載されたので、花袋の「蒲団」（明治20年）や近松秋江の「疑惑」（大正2年）はすでに出ている。志賀直哉の「和解」は大正6年だ。そういう時代の流れに、漱石すら影響されたのだろうか。

私小説の形だが、一人称ではなく、一応三人称で書かれている。しかし、健三の視点から見ているのは明らかで、周囲の人物は「細君」「兄」「姉」と呼ばれている。血のつながらない人物は、「島田」「比田」のように名前で呼ばれる。ただ、

「健三も何も云はなかったが、腹の中では斯うした同情に乏しい細君に対する厭な気持ちを意識しつゝ箸を取った。細君の方ではまた夫が何故自分に何もかも隔意なく話して、能動的に細君らしく振舞はせないのかと、その方を却って不愉快に思った。」

のように、細君側の気持ちを直接描写する部分もある。それはほとんど、夫婦間の気持ちがすれ違う場面に限られる。

出てくる人物が、健三と細君も含めて、皆魅力的に描かれていない。皆、それぞれ経済的にも不遇であり、生活に楽しさを感じていない。だから上の短い引用でも、健三は「厭な気持ち」で、細君は「不愉快」である。

夫婦の間の気持ちのすれ違いがテーマの一つだが、しかしまれには夫婦間にぎこちないいたわりの感情が芽生える時がある。それに比べて驚くのは、子供に対しては徹底的に冷淡なことだ。「猫」でもそれを感じたが、3人目の女の子が生まれたあたりの描写は実に冷たい。ここで書かれる漱石の生活は、「猫」を書いた時代にあたるというが、滑稽味溢れる「猫」と暗い「道草」は対照的でありながら、その不機嫌な気分にはやはり共通するところがあるだろう。

ということで、読んで愉快的気持ちになる小説ではないが、文章も話の展開も、ある意味で完成度が高い。漱石の小説技法が到達した境地、ということは感じさせる。

なお、情景として逗子の小坪が出てくる。

そうしてそのまま小坪へ這入る入口の岬のところまで来た。そこは海へ出張った山の裾を、人の通れるだけの狭い幅に削って、ぐるりと向こう側へ廻り込まれるようにした坂道であった。叔父が一番高い坂の角まで来てとまった。

碧海純一「法と社会—新しい法学入門」（中公新書）

これも1998年に出た第48版を買っているから、「民法のすすめ」と同じころ、同じような動機で買い、やはり積読しておいたものだろう。しかし、こちらは初版が1967年に出ており今から見れば40年前の本である。48版といっても、この間に改訂された形跡はない。たとえば

「とりあえずわが国だけについて考えるとしても、自民、公明、民社、社会、共産という複雑な布置や」

とか

「かつては「一枚岩」的な団結をほこった共産圏で中ソ対立がますます深刻化する」(p.139)

などという表現がある。

しかし、これだけ版を重ねているのは、名著という定評があるからなのだろう。表題に「新しい」という言葉を入れながら、内容を40年前から変えないでも読まれるというのは、こういう分野の本としてはすごいことといえよう。

「法と社会」というのはごく普通の表現だと思ったが、法学の長い歴史の中で、法律の見地から社会生活の実態を研究することはほとんどなされてこず、法の合理的な運用のための科学的な基礎を研究することを目標とした「法社会学」という新たな学問が成立したのは、ようやく1910年頃だという。本書はそのような意味での法と社会の関係を中心に置いた、法学の入門書である。そこで著者は文化、言語、心理学、文化人類学などに触れ、法との関係を論じる。その中で人間の後天性を強調するが、たとえば言語に関してエスキモー語に雪の微妙な状態を区別する言葉が多いという例の話が出てきたりするのを見ると、やはり古いかな、という感じがする。ところが第37版への後記というのがついていて、そこに次のように書いてある。

「本書を私が書いてから、既に二十三年余の歳月が流れた。その間に、法学、社会学、人類学、心理学、言語学、動物行動学、哲学などの諸分野で相次いで新しい学説が提唱され、重要な発展が見られた。当然のことながら、私自身の考え方もそれに伴って若干の重要な点でこの四半世紀の間に変わってきた。しかし、本書全体を全面的に書き直すことは、實際上不可能であり、また、私の全構想が根

本的に変わったわけではないから、その必要もない。ここでは次の三つの問題について、簡単に現在の私見を述べたい。」

そしてその2点目として、本書の執筆時は当時の言語学、心理学、人類学などの通説の影響で人間の後天的なものを力説したが、その後考えを改めた、ということを挙げている。その中で、チョムスキーにも触れている。

しかし全体に言語学、人類学、心理学などを視野に入れた記述をしていることにより、「民法のすすめ」よりはるかに読みやすい。それに文章もよい。

田中修「都会の花と木 四季を彩る植物のはなし」（中公新書）

花にずっと関心がなかったが、去年の秋に突然思い立って、まず庭の花の写真をデジタルカメラで撮り、それに和名、科属、学名などの情報を加える、という作業を始めた。個人で図鑑を作っているんだと思えば、そのようなものはインターネット上でもいろいろあるが、むしろインターネットにあるものを情報源に使って、手軽に自分用の記憶庫を作っている、というべきものである。

記憶庫とという意味は、植物の名前を憶えるという意味と、家の庭や訪れた園などを記録するという意味とを兼ねている。この春に出た本書は、そのような新しい趣味に合わせて読むのにちょうどよかった。

取り上げられる花と木は「都会」で見られるものだから、おおかたごく平凡なものである。しかし、こちらが知識がないものだから、書いてあることに知らないことが多く、そのような知識を得るだけでも十分楽しめる。

たとえばウメの花の形を描けといわれれば、ほとんどの人が5枚の円か楕円を輪のように並べる。梅の花の形は分かりやすい。だから神紋、家紋としてよく使われてきた。その典型が道真を祀る天満宮の神紋だという。

あるいはヒヤシンスのつぼみは花咲く春の前年の初夏に作られ、翌年の春までゆっくり成長する。その間に冬の低温期を経験しないと、花が咲かないという。だから水栽培の鉢をずっと室内に置いておくと春に花が咲かないということが起こるのだそうだ。

アサガオはいつ咲くか？日没で暗くなってから約10時間後に咲くのだそうだ。だから秋になって日没が早くなると、咲くのが日ごとに早くなり、10月になると午前1時や2時に開花するのだという。

ジンチョウゲもキンモクセイも、日本では種ができず、すべて挿し木で増やされているという。いずれも雄株と雌株があるが、中国から日本に伝来したときに雄株しか来なかったためだそうだ。

イチヨウも雄株と雌株がある。秋にギンナンができると銀杏並木沿いの住民から苦情が出ることがある。そこで大阪の御堂筋では20数年前からイチヨウを植え替える時に、密かに雄株だけにしているそうだ。びっくりする話である。

こういう面白いことがたくさん書いてある。著者は京大農学部出身の農学博士で、すでに中公新書をこれ以外に3冊、講談社ブルーバックスを2冊出している。杉本秀太郎とはまた違う知であるが、今の好みから言えば、こちらの方がよい。

並木誠士「絵画の変ー日本美術の絢爛たる開花」（中公新書）

16世紀の日本の絵画に焦点を当てて、どのような絵が生まれてきたかを、図版を交えて綿密に語った本である。信長、秀吉が狩野永徳などに絵を描かせたこの時代は、絵画の変革期だったという。その要因の一つは、絵を鑑賞するのにまず会所、そして書院造の床の間や違い棚などの場が成立したことである。

そこに狩野正信、元信、永徳と続く狩野派が画家として、また制作工房として登場した。当初は中国の牧谿、梁楷、馬遠、夏珪などの筆様、つまり擬似唐物が描かれたが、元信あたりから和漢の融合が起こる。主題も中国のものが使われていたが、やがて和様化する。それとともに扇絵や奈良絵のように町で販売される量産品も出てくる。

とくに著者の研究成果が述べられる第VI章「風俗画の成立」と第VII章「16世紀における和歌と絵画」は読みごたえがある。その中で、これまで絵画として美術史上扱われていなかった合貝の絵も論じられる。

16世紀といえば、イタリア・ルネッサンスと同じ時代だが、そういうことについてはまったく禁欲して語らない。また、大きなテーマの風俗画の誕生という点では17世紀のオランダと比較してもよいと思うが、そこも禁欲している。

Steven Pinker, "Words and Rules: The ingredients of language"

Steven Pinker の本を最近2冊買い、まずこれを読んだ。

Steven Pinker のファンは多い。この本の裏表紙の宣伝では、Jared Diamond の次の評を引用している。

"Pick up this book and prepare yourself for a delicious romp through everything interesting about words....If you are not already a Steven Pinker addict, this book will make you one."

もう一冊では、Douglas Hofstadter が次のように言っているのが引かれている。

"Engaging and provocative...filled with humor and fun. It's good to have a mind as lively and limpid as his bringing the ideas of cognitive science to the public."

さらに Richard Dawkins は

"Pinker is a star, and the world of science is lucky to have him."

という。このように超一流の書き手から絶賛されるだけのことはある。

話は英語の規則・不規則動詞と名詞の規則・不規則複数形である。それだけでこれだけ豊かな内容の本にしてしまうことに、まず驚かされる。

魅力の一つは面白い用例が、ふんだんに使われていることである。米国の新聞には、正しい言葉遣いの専門家が読者からの質問に答えるコラムがよくあるらしいが、それらからの採集もある。またマンガもかなりの数、引用される。それらのマンガはみな面白いが、日本のマンガと違って言葉の役割が大きいことに驚かされる。もちろん、言葉を題材にしたマンガを集めているのだから、これがマンガ全体を代表しているわけではないだろうが、そもそも日本ではこのような言葉の文法の問題を題材にするマンガを見たことがない。もっとも、こちらが見ているマンガの範囲がきわめて狭いことは確かだが。

このような用例を収集するだけだと、週刊朝日にあった「日本語相談」（朝日新聞社）みたいな寄せ集めで終わってしまうが、Pinkerのことだからもちろんそんなことはない。問題は、規則・不規則を人間の脳がどう処理しているか、である。すべては規則に還元されるというのが、Chomsky流の立場である。不規則動詞も不規則名詞も、より基本的なレベルですべて規則として解釈するのが Chomsky & Halle の理論である。一方の立場は規則も不規則も、すべて連想記憶で作られているとするもので、具体的なものとして Rumelhart & McClelland によるニューラルネットワーク・モデルが紹介される。

これは規則・不規則動詞の過去形を学習し、それを新しい語に適用できるだけでなく、子供がよく犯す間違いまで再現して見せるということであるという。

Pinker はこのどちらも批判する。そして規則の適用と記憶の検索とが並行して動作するというモデルを示し、それを科学的に、しかし一般読者によく分かるように、丁寧にかつ明快に説明する。

Chomsky派の Pinker も Chomsky & Halle の極端なモデルにある深刻な問題は、看過できない。しかし、本書を通して繰り返し批判されるのは、コネクショニズム派である。この説では、規則変化はその統計的数量の多さによって規則が学習されることになる。しかし、ドイツ語では規則動詞の数の方がむしろ少ない。

たとえば外来語、擬音擬態語、名詞の転化、合成語のような新しく作られた動詞は、規則変化する。これは脳の中に規則があって、脳の辞書に収納されていない語については自動的に規則を適用するからである。だから原因と結果が逆で、規則動詞の頻度が高いから規則が学習されるのではなく、新しい語に規則が適用されるから、規則動詞の数が時代とともに増えるのだという。

それではそもそもどうして不規則動詞は生まれたのか。それはもとは規則に従っていたが、その後の音韻変化、外国語の侵入や同化、その他の変化によって、不規則化したからである。その中で、新たな不規則語が生まれることもある。それは新語が既存の不規則語か

ら派生して作られる場合や、新語の音の形がたまたま既存の不規則語に近い場合である。

本書でなるほどと思った話はたくさんあるが、その第一は複合名詞を構成する名詞に複数形を使うかどうかという話である。たとえば three-week vacation とか all-season tires であって、three-weeks vacation や all-seasons tires とはしない。このことは知っていたが、単にそういうものであるという知識として持っていただけで、理由は不明だった。しかし、これが不規則名詞なら複数形が許される。たとえば a rats eater とは言わないが、a mice eater と言ってもおかしくない、ということは知らなかった。この本でその理由が見事に説明される。

また、外野フライでアウトになるという fly out の過去形は、flew out ではなくて flied out である。その理由は何か。飛ぶ fly と野球の fly とは同じ語だが、「フライを打つ」という意味は「飛ぶ」の意味が直接転用されたのではなく、動詞の fly から外野フライの fly という名詞がまず作られ、その名詞が逆に動詞化した用法だからである。ウム。

そのほか、子供が言葉を学ぶとき、最初に規則動詞を他の不規則動詞に引きずられて不規則化するような間違いが起こるが、そのうちに規則を過剰適用して、不規則動詞を規則化してしまう時期を経

る，という話も面白い．最後の方では，この規則と辞書の学習過程についての脳科学的な解明に関する章も設けられている．

夏目漱石「明暗」（岩波漱石全集 11）

前に「明暗」を読んだのはおそらく20歳を過ぎてからである．つまり若い時代に読んだ漱石の小説の中ではもっとも遅く読んだはずなのに，今回読んでみてまったく内容を記憶していないので，愕然とした．中学や高校の時に読んだものの方が，はるかによく覚えている．

ということで，今回の読書は新鮮だったし，また楽しめた．

徹底した心理小説である．情景描写など必要最小限しかない．登場人物の心理劇で成り立っているという意味では，「道草」に似ているが，道草ではほぼ健三の視点でことが語られるのに，ここでは津田とお延とが等分の比重で扱われる．どちらも一筋縄ではいかない癖のある人物であるが，「道草」の主人公たちよりはるかに生き生きとしている．吉田夫人と小林というメフィストテレス的な人物も現れる．吉田夫人はいささか類型的な描かれ方だが，小林は裕福な身分の主人公たちと対比して，社会の底辺からの抗議や怨念を代表し，小説に社会主義的な色彩を与える．秀子も鮮明な輪郭を持つ登場人物で，病院におけるお延との対決場面はスリリングである．

テーマの一つは愛で、これだけ愛という言葉がそのまま銜いもなく登場人物の科白に現れる漱石の小説は他に記憶がないし、漱石に限らずこの時代の日本の小説では珍しいのではないか。たとえば継子が

「じゃあたしのようなものは、とても幸福になる望はないのね」
というのに対し、お延は言う。

「あるのよ、あるのよ。ただ愛するのよ、そうして愛させるのよ。
そうさえすれば幸福になる見込はいくらでもあるのよ」
あるいはお延が秀子に言う科白。

「津田はあたしを愛しています。津田が妹としてあなたを愛するように、妻としてあたしを愛しているのです。だから津田から愛されているあたしは津田のためにすべてを知らなければならないのです。」

ただそれはもっぱらお延の科白に限られるところが、この小説の構造をよく表しているといえよう。地の文でも

「彼女の愛は津田の上にあった。」
のように、お延の夫への愛か、お延から見た夫の自分への愛を語る場面で「愛」の語が使われる。

お延に対比される清子が登場し、クライマックスを予感させるところで、漱石の死により物語は未完のまま終わってしまう。しかし、全体に緊迫感に満ち、漱石の小説の中で今でも好まれるものの一つだろう。

水村美苗の「続明暗」をつい買ってしまった。

Steven Pinker, “The Stuff of Thought”

この2ヶ月間、この500ページ近い本と、小熊英二の上下合わせて2000ページの「1968」を読んでいた、ほとんど他の本を読めなかった。しかし、この2冊を十分堪能して過ごしてきたともいえる。

この間読んだ “Words and Rules” に引き続き、言語を真正面から対象とする。前作が統語論を扱ったのに対し、この作品では意味論と運用論を題材としているところが対照的ではある。とは言っても、しかめつらしい言語学の本ではもちろんない。Pinker の浩瀚な知識、洞察力、そして豊富な用例を駆使し、人間の振舞い、世界理解の方法、人間が作ってきた文化を縦横無尽に論じて飽きさせない。

本書のテーマは、言語がわれわれの思考、社会、感情、人間関係、そして現実世界にどう関連するかということである。まず、動詞の用法が材料となる。英語ではたとえば

Hal loaded hay into the wagon.

Hal loaded the wagon with hay.

や

Jared sprayed water on the roses.

Jared sprayed the roses with water.

や

Betsy splashed paint onto the wall.

Betsy splashed the wall with paint.

のように、同じことを同じ動詞を使い、しかし目的語を変えて表現できる場合がある。

ところが似た表現の

Tex nailed posters onto the board.

に対して、

Tex nailed the board with posters.

というのは正しい表現ではない。

Serena coiled a rope around the pole.

とは言いが、

Serena coiled the pole with a rope.

とは言わない。なぜか。

このような用例の比較は、前回もたとえば合成語における複数形の使い方などで巧みに論じられた。しかし、繰り返しになるが、ここで正しいか正しくないかを決めるのは統語論ではなく意味論である。

この議論を発展させて、人間が扱う概念というものは、数の限定された基本概念の組合せとして捉えられるか、それとも無限の連続的なバリエーションからなるか、という問題が論じられる。

さらに、隠喩、命名、卑語・隠語、丁寧語・婉曲表現などが次々と取り上げられる。どれも面白いし、Pinker の言うことには説得力が

ある。

それにしても、この本を翻訳で読んだのではよく分からないのではないか（とくに卑語・隠語のところはどう訳しているのか？ ただし、中には日本語の猥褻表現も出てくるが）と思う一方で、やはりこちらの英語の語彙の不足、語感の欠如で、よく分からないところもあちこちにある。

今尾哲也「歌舞伎の歴史」（岩波新書）

歌舞伎座が来年取り壊されて建て替えられるというので、9月に家族で歌舞伎座に芝居を観に行った。だからというわけでもないが、しばらく前に買ったこの本を読んできた。

歌舞伎はカブキ者の風俗を写して踊るカブキ踊りに始まり、その時代時代の魅力的なカブキイタ主人公を発見し直しながら、その精神を生き続けさせてきた、というのが本書の主張である。カブキと同じようにカタカナで表記されるもう一つのキーワードはヤツシである。敵討のような目的のためか追い込まれた運命によって、身分的秩序を逸脱した者に変身するのがヤツシだという。カブキが日常の生の秩序から逸脱した存在であることに対応し、ヤツシの人物もカブイタ存在だという。

カブキの歴史を作ってきた人物としてある程度多くの記述が充てられるのは近松門左衛門、中村仲蔵、並木宗輔、並木正三、鶴屋南

北，並木五瓶，尾上松助，河竹默阿弥，村井長庵，九代目市川団十郎，初代市川左団次，二代目市川左団次といったところである．新書のために記述は簡潔だが，おそらくかなりきちんとした歴史書になっているのだろう．

現代の歌舞伎は，

「古典的なレパートリーが主流を占め，しかも，同じ狂言の繰り返しが多く，新作はほとんど上演されない．」(p.198)

その理由として興行的に団体客に頼っていることがまず挙げられる．それはもっともな原因として納得できる．しかし，「第二の原因は，現代社会における秩序の問題が，カブキ者の発見を困難にしている点にあらう」というのは，簡単には首肯できない．本書を一貫する視点からは，このような考察を導きたいという気持ちはわかる．しかし，現代は社会秩序が多層化しているから，秩序を逸脱するカブキ者が発見しにくい，というのはかなり強引な議論のように思える．

歌舞伎に新作が出ないのは，オペラに新作が出ないのとまったく同じ現象ではないか．そこに現代の大衆観客の嗜好，興行のあり方，という点で共通性があるに違いないが，その共通点に現代における「カブキ者の発見の困難さ」を持ってくることは難しそうだ．

岡田暁生「音楽の聴き方一聴く型と趣味を語る言葉」（中公新書）

岡田の3冊目の中公新書である。これも編集者の松室徹がテーマを出してできた本だという。編集者の企画の腕もすごいが、それにまともに答えてこのような本を書く岡田も大したものだ。

音楽の聴き方は自由で、個人の感性に従えばよく、感性について語ることは無意味だ、という議論に対して、聴く喜びには語る喜びが伴うべきで、「音楽を語る言葉を磨く」ことは努力によって可能になる、という主張から本書は始められる。その意味で、この本は音楽と言葉の関係を論じたものだといってもよい。

第1章では、音楽体験は美術や文学の受容よりも生理的で、香道やワインのテイスティングに近いところがあるが、それでも聴き手の波長と合う合わないということはある、そのような「好み」は社会的集団性を持っている、という議論が展開される。そのような受容の型、共鳴の仕方については、言葉で語ることができるという。

それを受けて、第2章は「音楽を語る言葉を探す」と題して、音楽についての言説のあり方が問われる。「音楽は言葉を超えている」というのはロマン派が作り出した近代イデオロギーだという。19世紀は音楽に宗教メタファーを適用して、神聖化した。同時期に、音楽批評という独立のジャンルが生まれたが、その言葉は芸術の神殿に仕える司祭が語る神託であった、という。そうは言っても批評はまさに言葉だから、音楽は言葉を超えているという認識と、言葉で音楽を語ることが専門化されるという矛盾をはらむ現象とが、同時

期に起こったことになる。それらが裏腹の関係にあることを、岡田は委曲を尽くして説明してはいるが。

第3章は、音楽自身が言語であるという観点からの議論である。音楽は分節化された単位から構成され、その意味で文法と語法とを持った言語だということである。そして音楽を漫然と音の流れとして聞くのではなく、その構造を意味として読み取る意識的な努力をする「聴き方」を勧めている。

第4章は「音楽はポータブルか？」という題だが、西洋音楽はまず楽譜という道具で、また学校や学派という制度で、さらに近年はレコードやラジオという機器によって、いかに正確に作曲者の意図通りに音楽を複製するかということに、多大な力を傾注してきたという話から始まる。その後は、もっぱらアドルノの音楽論をふんだんに引用して、「音楽における意味の壊死」プロセスが進んでいるという議論を展開する。たとえばフルトヴェングラーとトスカニーニを比較して、フルトヴェングラーは

「萎みゆく作品を自分の存在によって熱く包み込み、終わりつつある作品の生命を漏らすところなく護ることができるような解釈者」であるのに対し、トスカニーニの演奏は

「不気味なまでに輝かしい演奏行為であり、まるでクロームメッキを施したように光り輝いていた」

と批判する。このあたりは人の説の受け売りに終始しているように見えるが、岡田自身がもっとも力説したいことでもあるらしい。そ

れに紹介される著述も日本語で読めるものではなく、それを紹介するだけでも価値があるかもしれない。しかし、章の標題との関係も明確でないし、岡田が力を入れるほどの気持はこちらに伝わってこない。

「ポータブル」という語に関連しては、この章の内容とは無関係に、次のような感想を持った。それは、iPodによってこういう本の読み方も大げさにいえば一変したということである。電車の中で読んでいて、たとえば

「シューベルト《楽興の時》の有名な第三曲のホロヴィッツの演奏を聴けば、これがみすばらしい放浪の楽師の奏でるアコーディオンであることは、一目瞭然となる。」(p.111)

という一節に至れば、iPodでそれを探してみる。幸いに岡田が言うのと同じときの演奏かどうかはわからないが、ホロヴィッツのこの曲の演奏が入っているからそれを聞いてみ、さらに他のピアニストの演奏も再生して比べることができる。

あるいは、ポリーニの「黒鍵エチュード」の終わりの華やかなオクターブ下降を取り上げ、「楽譜を知っている人がこれを聴いたなら、ひょっとすると仰天するかもしれない」という (p.164)。それで早速、ポリーニの「黒鍵」を聴いてみて、楽譜を知らないから別に仰天もしないが、確かに岡田の言うように本来「タララ、ラララ、タララ、ラララ」いうリズムであるところを、「タラ、ララ、ララ、タラ、ララ、ララ」と弾いていることをすぐに確認できる。

宮本常一「塩の道」(講談社学術文庫)

「塩の道」「日本人と食べもの」「暮らしの形と美」という3つの小編が収められている。いずれも昭和54年から56年にかけて講談社から出版された、おそらく複数の著者による編集ものの本に入っていたものらしいが、文体から講演の記録のように思われる。しかし、せっかく田村善次郎という人が長々と解説を書いているが、これらの作品の成立事情にはほとんど触れていない。

「塩の道」は塩の製法と使用される器具の話から始まる。岩塩がほとんどない日本では海水から塩を取るが、海水をそのまま煮詰める古来の方法から、古式入浜、揚浜といった方法がある。器具としては古代は土器を使っていたが、土器は塩によってすぐ壊れる。そこで鉄を使うようになって生産性が飛躍的に高まったが、さびが出るために真っ白な塩ができない。しかし鉄の役割は大きく、とくに近江の鉄が流通し、若狭の鉄の塩釜もその系統だという。

その後、新潟の北の山に住む人が、どのように塩を手に入れていたか、という話となる。冬の間は山で木を伐り、川のほとりに持っていっておく。雪解けのころにそれをすべて川に流す。河口に綱を張っておいてそこで木を引き揚げその浜で塩を焼く。そうして作った塩を山へ持って帰る。そのうちに、木を流した山の人が出向いて行って塩を焼く代わりに、海岸の人に焼いてもらうようになる。さらに時代が下ると、瀬戸内海の塩が船で新潟に運ばれてくるようになってそれを買うようになったため、自分たちで塩を焼くのはやめ

る。こういう話を集めてくるのが、全国を歩き回った宮本常一の真骨頂である。

タイトルとなっている塩の道は、海岸から塩を運ぶルートとして発達した、長野、岐阜、群馬などの道を指している。運搬には牛、馬、舟が使われ、また人が背負って運んだ。人の背で運ぶやり方としてポッカというのが図つきで紹介されるが、ポッカがそのような格好で運ぶ人を指すのか、道具を指すのか、それとも運ぶ方法を指すのかよく分からない。

次の「日本人と食べもの」では、まず日本の人口は中国のように戦乱で激減するということとはなかった、という話から始まる。それは戦争をする者と農耕をする者とが別々だったからだ、という説をとる。そしてクリやトチやアワ、ヒエ、ソバを食べていた縄文文化に、後から来た稲作文化がどのように展開していったか、という話になる。米食は粉にしてダンゴなどにして食べるよりも、粒のまま食べるのが主流であり、それには煮るのと蒸す方法があるが、甑で蒸すのが主であった。そのためには自在鉤と炉という山の文化の組合せは向かず、釜戸が使われる。このように調理法に二つの系統があるという。

そのほか、魚の食べ方としての鮓、発酵食品としてのミソなどが論じられる。この「日本人と食べもの」の中でも、江上波夫の騎馬民族説を宮本が肯定していることが出てくるが、次の「暮らしの形と

美」では、とくに日本における馬の役割との関係でこれがまた触れられている。しかし、日本に古来からいる馬は小さく、それに車を引かせることも人が乗ることもなかった、という。そのような馬の飼い方は騎馬民族と違う。鎌倉武士も馬に乗るときに、馬丁がついてさらに馬柄杓をかついだ供がつく。馬が水を飲むのに馬柄杓を使って水をやらないと、落馬してしまうのだろう、つまり乗馬が下手だったのだろう、という。それが騎馬民族の末裔だとしたら情けない話だが、騎馬民族説を裏付ける証拠として宮本が出してくるのは、「年中行事絵巻」などの絵巻で出てくる公家の、馬の乗りこなし方が見事だということである。どうもそれだけでは根拠が薄弱だ。

総じて、宮本のさまざまな主張は直感的で、怪しげなものが多い。それらは宮本の多くの観察と経験から生まれたもので、そのような学の作り方が宮本らしいところなのだろうが、おそらく正統的な歴史学者からは批判があるところだろう。実際、宮本の弟子らしい田村が解説で、

「・・・いたるところに宮本先生ならではの語れない部分があり、先生の壮大な仮説がちりばめられている。

読者の中には、引っかかって首をかしげるところのある人もいるかも知れない。大いに首をかしげていただきたい。」

と書いている。

水村美苗「続 明暗」（ちくま文庫）

漱石の未完に終わった「明暗」の続きを書いて完結させるというのは、大胆不敵な試みである。しかもパロディとして書くのではなく、漱石自身が書いたらこうなろうという正攻法で取り組むのであるから。「明暗」が出たのが大正6年（1917年）で、水村のこの本が筑摩書房から刊行されたのが1990年。この間、誰もそんな大それたことをしなかったのもむべなるかなという気がする。

しかし、「明暗」は、人物の劇的な対立関係と筋の展開で読ませる漱石の晩年には珍しい作品であるから、読者がこの先どうなるだろうと続きを読みたくなる気持ちにかられるのも自然で、読者としての水村がそれにまともに答えるべくこの小説を書いたわけだ。

水村は漱石の文体や語彙を周到に調べたに違いないが、それ以上に漱石が残した伏線を綿密に追って、ストーリーの組み立てに最大の苦心を払っただろう。そしてそれは成功している。もちろん、漱石がこのような結末を用意していたかどうかは知る由もないが、読む側としてはいつしか誰が書いたかということを忘れて、話に引き込まれる。ストーリーの展開が「明暗」よりも面白すぎるような感じがあるが、これは水村が意図したものらしく、「新潮文庫版あとがき」に次のように書いている（「続 明暗」は筑摩書房から刊行された後、新潮文庫に収められ、それが絶版になった後、「ちくま文庫」に入ったという経緯がある）。

「・・・私は『続明暗』が『明暗』に比べてより「面白い読み物」になるように試みたのである。

ゆえに漱石と意図的にたがえたことがいくつかある。まず『続明暗』では漱石のふつうの小説より筋の展開というものを劇的にしようとした。（中略）さらに心理描写を少なくした。」

漱石と明らかに違うもう一つの点は、視点の中心が男の津田より女の清子とお延に移っていることである。「続 明暗」を通して津田はずっと中心人物ではあるが、性格的にも矮小化されているように思える。「明暗」でも津田は好もしくは描かれていないが、もう少し複雑な人物であった。「続 明暗」では作者の目は、清子やお延に対して少なくともより好意的である。

もっとも同じ女でも吉川夫人はイアーゴ的な極端な策略家の悪人に仕立てられているが、これは話を面白くするための作為であろう。しかし、漱石自身による吉川夫人の描き方がそもそも同様だったので、違和感がさほどないどころか、いよいよ正体を現したというようにも受け取れる。

結末はどうしても、「則天去私」を匂わせなければならないということだろう。そういう意味で、悪くないと思う。

ベディエ編，佐藤輝夫 訳「トリスタン・イズー物語」（岩波文庫）

テレビで放映されるオペラを長年VHSで録り溜めてきたが、Blu-rayの時代になってもはや古いものをあまり見る気も起こらない。溜めた中にはワグナーの作品のほとんどが含まれ、「指輪」などは3種類ぐらいある。それらは録画しただけでなくてほとんど見ているが、「トリスタンとイゾルデ」だけは2種類録っているのにもかかわらず、全曲を見た（聴いた）ことがなかった。最初の方だけですぐ退屈してやめてしまう。

去年に引き続き、今年もメトロポリタン・オペラのNHKによる放映があった。実際の公演は1シーズン前のものだが、四夜連続で放送されたものを今年はすべてBlu-rayに録った。その中に「トリスタンとイゾルデ」があり、今回はこれをじっくり見て堪能した。それでまた、昔読んだ「トリスタン・イゾルデ物語」を引っ張り出してきて読んだのは、「エルミオーネ」を見て「アンドロマク」を39年ぶりに読み返したのと同じ構図である。

これを読んだのは大学院生の時、1971年らしい。当時オペラというものを見たこともなく関心もなかったのに、どういうわけか同じ年に、「カルメン」や「フィガロの結婚」も読んでいる。また、ヨーロッパの叙事詩の系統では、「オシアン」「ロランの歌」「ニーベルンゲンの歌」なども同じ頃読んだと思うが、これらはおそらく安藤さんの影響だろう。

もとはケルト伝説のトリスタンとイゾルデの話が、イギリス、フランス、ドイツなどに伝えられてさまざまな形となった。ベディエ編のこの本の原著が出されたのが1890年というから、1865年に初演されたワグナーの「トリスタンとイゾルデ」よりはだいぶ後である。ベディエは12世紀中ごろフランスで書かれたことが想定され、今は失われたトリスタンの物語を、さまざまな断片から構成しまとめた。それは中世フランスの文化が色濃く出たものだが、ケルト文化の名残もほのかにあるらしい。

この日本語訳は昭和28年（1953年）に出たもので、考えてみれば元の本が出た年と現在とのちょうど中間時点なのだが、自分の感覚では1890年は歴史上のとき、つまり大昔で、昭和28年はすでに自分が5歳になっているから現代である。

しかし、「アンドロマク」と同じで、この時代の岩波文庫は旧字で組まれている。翻訳にも「浄瑠璃」「股引」「絵硝子」「緞帳」「垂れ頭巾」「間諜」などの訳語が使われていて古めかしい。それに今訳すとしたら、「せむし」「唾」「癩病人」「気違い」「乞食」などの語は使えないだろう。

小熊英二「1968」（新曜社）

昨年、「情報処理」の依頼原稿で「ソフトウェア工学の40年」という解説を書いたが、その文章を次のように始めた。

「1968年は波乱の年であった。1月にチェコで「プラハの春」と呼

ばれたドブチェクによる政治体制の自由化運動が始まったが、8月にはソ連につぶされた。4月にマーチン・ルーサー・キングが暗殺された。6月にロバート・ケネディが暗殺された。おりしもベトナム戦争のさなかで、米国ではコロンビア大学で戦争反対の学生が大学本部を占拠するなどの運動が拡大し、パリでは5月革命とも呼ばれる学生を中心とした反体制運動が過激化した。日本でも大学の旧体制解体を唱えて、東大では3月に安田講堂の占拠、7月に全共闘の結成があり、日大では5月に全共闘が組織された。東芝府中工場の3億円強奪事件が起こったのもこの年である。また明治維新は1868年であったから、奇しくも維新後100年という節目の年でもあった。このような中で、10月にドイツの Garmisch で Software Engineering という名を初めて冠した会議が開かれたことなど、ニュースにもならなかったはずである。しかしソフトウェア工学の歴史はこのときから始まる。そして今年(2008年)はそれからちょうど40年。ソフトウェア工学も不惑の年を迎えたわけだ。」

本書は1968年を中心とする全共闘運動の歴史を、膨大な資料を駆使して語ったものである。上下各1000ページ計2000ページの異常な大冊で、夏に読み始めて読み終わるのに4カ月以上かかった。

前作の「民主と愛国」（これも1000ページ近い本だった）と同じく、全編が大量な引用からなる。その出典は前作では知識人の著作であったが、本書では主に全共闘やセクトのメンバーが当時または後年に書いたメモ・回想である。もちろん、アジビラも資料として

使われるが引用は少ない。後は新聞・雑誌の記事である。小熊のスタイルとして、関係者へのインタビューなどは行わず、もっぱら資料に依拠する。

しかし、よくこれだけ整理して取りまとめたものである。しかも、歴史として一貫性のある記述がなされ、2000ページをさほど退屈させずに読ませる力がある。やはり、全共闘世代より15年ほど若い小熊だから書けたのだろう。そして、途中でも何度か繰り返され、最終章で結論として述べられる小熊のこの時代の運動に対する全体的な評価は、おおむね肯けるものである。以下、そのまとめをさらにまとめてみる。

1. この時代の若者たちの叛乱は、高度経済成長にたいする集団摩擦反応であった。
2. その要因は、大学生の急増と大衆化、高度成長による社会の激変、戦後の民主教育の下地、当時の若者のアイデンティティ・クライシスと「現代的不幸」からの脱却願望、であった。
3. 全共闘運動は政治運動の形を取ったが、むしろ自己変革・自己表現を求めた運動だった。そして政治運動としてはほぼ失敗だった。
4. 批判されるべきは、「戦後民主主義」を性急に非難しすぎたこと、運動後は多くが企業戦士に変身したこと、運動のモラルの低さ、運動内の責任意識の希薄さ、である。
5. 1968年は世界的な学生叛乱の時期であったとされるが、それは

日本、アメリカ、フランス、イタリア、西独などで世界の一部ではない。また、日本の運動の性格は、アメリカやフランスと異なる面がある。

6. 全共闘やベ平連の運動体の原理は、ピラミッド構造型の「プロセス工業」に適した組織形態とは異なるものを造る可能性を持っていた。

7. この時代の叛乱が遺した最大のものは、高度成長への、そしてその結果として出現した大衆消費社会への適応であった。それは日本が発展途上国から先進国に、「近代」から「現代」に脱皮する過程において必要とした通過儀礼であり、高度資本主義社会への適応過程であった。

8. 1970年代に左翼運動は、マイノリティ差別、戦争責任論、公害や障害者問題への注目、管理社会への抵抗、というような方向へパラダイムシフトしたが、現在その70年代のパラダイムは説得力を失いつつある。それが前提とする経済成長が停まり、批判の対象であった年功序列・終身雇用の「管理社会」は不安定雇用時代の今ではうらやむべきものとなったからである。

9. 現在の若者の問題とされる不登校、自傷行為、摂食障害、空虚感、閉塞感と言った「現代的」な「生きづらさ」の端緒がこの時代に出現した。あの叛乱は、それに反応した現象だったといえる。

10. 「私には何もないの。それでは闘ってはいけないのでしょうか？」という40年前の少女の言葉の地点から、再度出直すことが求められている。

僕は、ノンセクト・「ノン」ラジカルだった。一方で、全共闘へのシンパシーもあった。1968年には部分的に日記をつけている。6月17日の機動隊導入、6月20日のスト決行、6月28日の大河内総長との集会/団交、9月20日の再ストライキ、あたりでは経過と感想を多少書いている。たとえば9月20日、6号館前で計数の3年が集まって議論している様子を書く中に次のような記述がある。

「・・・やがて黙っていられなくなって、次のようなことをしゃべった。16日の学生大会で建築の学生が言ったことは極めて重要である。それは今までいわゆる急先鋒の学生が、故意か不故意かはっきりとは言わなかったことである。すなわち、大学側、教授側との話し合いというものは幻想で、それに期待する気持ちをさっぱりと捨てる必要がある、というのである。そこには、大学側とは学生側に敵対してその要求を圧殺するものであるという認識があり、その認識に立つ以上、話し合いなどに期待しないという態度は当然となる、そうするとストライキを打つなどという示威行為は、それ自体が目的化しているのではないか。ストライキを一つ的手段として、それで大学側との交渉に道を見出すという思考がないのではないか。そして先導的スト派の学生達は、「闘争の敗北」を目指して進んでいき、自分たちは最強の闘争を組んだが、反動の壁は厚く、その弾圧下に悲劇的に敗北したというポーズを取るのではないか。

もう一つは、常に、この闘争について、自己とのかかわりあいを見つめる、日常性に埋没する自己から脱却し、自己の主体性を回復するということが、くどく言われるが、これは何なのか。いわゆる東

大闘争を、“自己”の“実体性”の問題として考えよ、というのはどんな意味があるんだ。

そのようなことをもっと簡単に言った。これは本心であるが、自分で言いながら、何か物足りない。実は、どういっても積極的に行動している人々にたいして、論理的にも倫理的にも、なんらかの引け目が避けえない。しかし、それだけではない。この4-5ヶ月間、自分の心境は常にゆらゆらしている。

(・・・)

数理の3年が、クラスで試験ボイコットにたいする態度について討論した。ボイコット強行は、T,Y,Kが主にしゃべり、批判側では自分とS,Yなどが主にしゃべった。傍観者から見たら、あるいはわれわれの方が言いあいには勝っているように見えたのではないかと思う。しかし自分は一方で、たとえばTみたいなことを言う人がいてくれるからこそ、こういうことを安心して言えるのであり、皆がもし批判者めいたことを言い出せば、自分はまたどうなるかわからぬ、と思った。実際、両親などの前では、全共闘のやり方を弁護する自分であってみれば。」

小熊の本でも、「自己否定」が全学的に問われるようになったのは9月からだという最首悟の証言が引かれているが（上、p.759）、この自分の文章を見てもそのことが分かる。

辰巳浜子「料理歳時記」（中公文庫）

これは気持ちのよい本だった。

春夏秋冬の順に季節の料理，というより旬の素材を挙げてそれにまつわるエッセイを書き連ねていく，という構成はまさに歳時記で，今年読んだ本の中では田中修「都会の花と木」に近いところがある．対象が一方は観賞のための花と木で，他方が食べるための植物や魚貝類という違いだ．

一方で，古きよき日本の生活文化を蘇らせるという点では，今泉みね「名ごりの夢」を連想した．といっても，時代はずいぶん違う．今泉みねは1855-1938,辰巳浜子は1904-1977．明治，大正，昭和という時代を共有していると言っても50年のずれがある．しかも，本書のもとが「婦人公論」に連載されたのは昭和37年から43年で，本として出版されたのが昭和48年というからまさに「1968」の時代で，自分にとっては現代である．だからここに出てくる食べものも，多くは親しみがある．しかし美季子の世代にはかなりが残らないかもしれない．

いわゆる料理よりも，ゆず，生姜，蓼，茗荷，山椒，などの薬味，つま，けん，吸口になるものについての記述や，梅干し，柿の葉ずし，糠味噌漬け，のようなものを作る作業の話が多い．また，鎌倉に住んでその庭で育てる野菜，収穫する梅や柚子，買い求めたり取り寄せる魚，貝，果物などを語り，豊かな暮らし方を教えるところもある．物価高，環境汚染といった問題にも目が配られ，単によい家庭に生まれ育ち経済的にも恵まれた人生を歩んだ主婦の気楽なグルメ談義にはなっていない．その元になっているのは，戦争時代の

疎開先での生活のようで、そのような自伝的な記憶が挿入されるのも本書の魅力の一つである。

その日本語がなかなかよい。文章の質も高いが、素材の漢字、ひらがなによる表記だけで、奥ゆかしさが出るものだ。金柑、杏、落の臺、薺、韭、紫蘇、麩、蒟子、・・・

本書にはあまり出てこないが、辰巳はNHKの料理番組でも活躍し、現在はその娘芳子が同じように有名らしい。荻昌弘による解説に

「私はたまたまNHKテレビの料理番組で、この辰巳浜子なる小柄な女性が、包丁やお玉握って登場したアシスタントの女の口を、真っ向う唐竹割の壮烈さでぶっとばしている実況を目撃したのである。」

とある。孝子の話では、芳子の方にもそんなところがあるらしい。

2008年

平川祐弘「和魂洋才の系譜 内と外からの明治日本（上・下）」（平凡社ライブラリー）

昨年末に読み終わると思っていたが、文庫とはいえ上下合わせて約800ページあって、思いのほか時間がかかった。

タイトルからは想像しにくいだが、対象は森鷗外である。昨年は鷗外関連の本を何冊か読んだので、その締めくくりとしてはうってつけの読書だった。

これは平川の博士論文である。出版されたのは1971年だが、あとがきに「ここに集めた一連の文章は、私が東京大学の助手を勤めた昭和三十九年から昭和四十四年夏にかけて執筆した」とある。平川が教養学部教養学科比較文学比較文化コースの助手だった時代である。1977年に教授となり、1992年に定年退官しているので、僕が駒場に来た時はすでに職を去った後だった。

「和魂洋才の系譜」というタイトルは、第1部の第1章となっている論文から取られている。そこでは「外国産の主義や思想を一つの権威として盲目的に奉ずることもなく、また逆に偏狭な国家主義におちいることもなく」精神生活を営んだ例として、森鷗外が描かれている。その中で、日本は中華思想の周辺にあってもともと和魂漢才のモデルがあり、そのモデルが西欧文明と接した時に並行的に使わ

れたが、中華思想の中国ではそのような摂取の仕方ができなかったために近代化が遅れた、という議論があって、これはそれなりに説得力がある。

それ以降の章で、姉崎正治の「洋行無用論」に対する鷗外の批判、ヨーロッパにおける黄禍論の鷗外による紹介と議論、日露戦争を巡るヨーロッパからの日本の見方と平和論、鷗外の「普請中」「花子」「妄想」などの作品を取り上げての日本と西欧との文化的関係についての考察、などが展開される。そこではベルツ、アナトール・フランス、キプリング、徳富蘇峰、ファレール、クーシュー、トルストイ、与謝野晶子、正宗白鳥、などが縦横に参照されて、確かに平川の比較文学アプローチの充実ぶりがうかがえる。

鷗外の作品中にフランス語が頻出するが、それらの多くは鷗外が独訳で読んだものからもとの仏語の単語を推定しているため、時におかしな誤りがある、といった指摘はフランス語もドイツ語もイタリア語も、英語や漢文も強いらしい平川の面目躍如というところである。もっとも鷗外は、とくに小倉の時代などにフランス語を熱心に勉強したらしい。独訳からフランス語の単語を推定しているのを

「鷗外には自分の外国語知識をひけらかす虚栄心もないわけではなかったから」(下, p.95)

と評しているのは、仏語も独語もできない僕としては平川にそのまま当てはめたい気もするが。

平川は気風として相当に保守的である。与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」を皮肉り(上, p.412-) , 丸山真男に対して

「戦後日本で行われたつまみぐいの最たるものの一例は、西欧型の言論の自由とソ連型の社会主義が両立しうるような幻想が丸山真男氏などの論壇の有力者によって説かれたことであろう」(p.227) と言い切っている。

そして最後の文章「地下の鷗外が心」で鷗外の遺言を取り上げ、その中野重治による解釈を批判したことから、その後中野との間に論争を起こしている。この文庫版では付録として「中野重治氏の批判に答える」という1987年に発表された文章が採録されていて、それが面白い。

さらに「平凡社ライブラリー版あとがき」では、本書とは別に「魯迅の「藤野先生」は漱石の「クレイグ先生」の創作的模倣だ」という趣旨の別の文章をめぐって、竹内好に「これほど人間蔑視が文学研究の名においてまかり通る時代の到来を予期していなかった」とやられたという。

平川が本書を書いていた時期は、東大闘争の時代を完全に含む。そのときに、このような精神でこのような作品を書いていた平川は、暢気なものだという気もするし、反骨精神があるという気もするが、新進の人文学者として丸山、中野、竹内のような既成の大物左翼知識人を批判するというのは有力な戦略であったかもしれない。

なお、「中野重治氏の批判に答える」で気になったことがある。平川は昭和45年の後期の一般教育演習で、筑摩書房の「森鷗外集」をテキストとして用いたという。その期末試験で鷗外の遺言と鷗外の「地下の蘭化が心」と中野重治の「鷗外論目論見のうち」を読ませて感想を書かせた。その学生が書いた感想を相当数引用して中野への反論に使っている。試験という場での学生への感想の出させ方に誘導性を感じるが、それは今はおく。驚いたのは

「私が答案を読んでいてはっとしたのは、鷗外が「地下の蘭化が心」で、「学問と美術との位は、人爵の外に在るにあらずや」と言った時、その「人爵」という言葉は反射的に「天爵」という言葉を思わせる。鷗外の態度は儒教的伝統にも根ざしているのではないか、という鎌田繁氏の指摘であった。私は鎌田氏に教えられて自分の原稿に補筆した。」(下, p.353)

と書いていることである。本文に確かに

「しかしこの場合にも、儒教文明圏の伝統が底流としてすでに鷗外の血脈中を流れていたことが「人爵」という表現を通して感得される。「人爵」という言葉は反射的に「天爵」という言葉を思わせるが、人爵も天爵も「孟子」の訓に由来する。」(下, p.333)

とある。しかも、これが鎌田氏の指摘によるものだという注記もない。「反射的に「天爵」という言葉を思わせる」とそっくり使ったのは、実際に反射的に連想しなかった平川としてはあまりにひどいのではないか。本文のこの部分を読んだとき、さすがに孟子にまで目が行き届いているのかと感心した。これがとくに印象に残ったのは僕だけではないようで、同じ「中野重治氏の批判に答える」に

引用されている昭和47年1月4日の朝日新聞の書評に

「たとえば結末の「地下が鷗外の心」は、「余八石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と言残した例の遺言状の意味を分析したものだが、従来の中野重治、勝本清一郎らの解釈に鋭い批判を加えて、「人爵」に対する「天爵」という独自の読みを提出している。」
(下, p.154)

とある。このような書評も臆面もなく引用しているのが平川の強さだろうか。

本書が平凡社ライブラリーに収録されたのは、渡辺京二「逝きし世の面影」が同じライブラリーに収録されたこととつながるものかもしれない。いずれにせよ、平凡社がこのような本を簡便に入手できるように出版してくれることはありがたい。

柄谷行人「倫理21」(平凡社ライブラリー)

この本をどんな動機でいつ買ったのか、覚えていない。今回読んだのも、鞆に重さの軽い文庫か新書を1冊入れておこうと思って、本棚から適当に引っ張り出したのがきっかけで、いわば偶然である。

この冬学期に主に文系の1-2年生を対象にした「情報科学概論II」という講義を始めた。藤垣さん植田さんと分担して自分は最後の4回分を担当している。その2回目に「情報倫理」をテーマとした話をしたが、それがこの本を取り上げた際に無意識に連想されたかもしれない。

柄谷の作品をまともに読むのも初めてである。そして最初に読むのに適切な本だったと思う。

本書における倫理についての柄谷の考察は、おもにカントの思想に依拠している。カント以前の道徳学説には道徳的規範が客観的に存在するという共同体の道徳説と、個人の幸福や利益を指向する幸福主義・功利主義とがあった。カントはこのどちらも批判する。前者は他律的であり、後者は自然の原因に支配されるという意味で、いずれも自由に基づいていない。しかし、自由がなければ倫理性は議論できず責任を問うことはできない。柄谷によればカントは人間が原因に支配されていることを十分に認識したうえで、自由は決して自然から出てこず、「自由であれ」という命令に従う義務として生じると主張するのだという。そしてフロイトを始めとする多くの論者が、この「義務」を共同体の規範を内面化したものと誤って解釈して、カントを批判してきたという。

この議論は決してわかりやすすくない。柄谷はそれをさまざまな点から議論して、丁寧に説明する。とくにわかりやすいのは、われわれはものごとを認識的(真か偽か)、道徳的(善か悪か)、美的(快か不快か)という少なくとも三つの基準から同時に判断する。それらは混然としているが、立場・状況によってその中の一つを選び他を括弧に入れる。たとえば科学者は道徳的および美的判断を括弧に入れて事物を見る。そのような選択は自然になされるのではなく、暗黙の命令によるのだ、という説明である (p.72)。しかし、慣れのため

に括弧に入れたことを忘れてしまい、科学的対象、美的対象それ自体が存在するかのように考えてしまわないようにすることが大事だという。

この辺の議論は第3章、4章にある。それより前には、1997年に起きた神戸の中学生による連続殺傷事件や1972年のあさま山荘事件を例として、犯罪者の親の責任を追及する日本の「世間」やマスコミの特殊性を取り上げる。これは以前から僕もおかしい現象だと思っていたことである。

また、後半は戦争責任が中心テーマとなる。その議論は、後に柄谷よりずっと若い小熊英二が「<民主>と<愛国>」で詳しく論じた内容と重なるが、柄谷が本書を書くきっかけとなったものであるらしい。

以前に読んだ Matt Ridley, "The Origins of Virtue" では、道徳の由来を進化論、動物社会学をベースとして論じている現代の知の状況を知って、目からうろこが落ちる思いをした。その感想としては、伝統的に哲学で論じられてきたことの多くが、いまや多様な科学の対象として扱われているということである。

さらに Steven Pinker, "The Blank Slate" や Matt Ridley, "nature via nurture" で、やはり自由意思や共感(empathy)が同様なアプローチで考察されていた。柄谷の本書ではそのような動向は触れられておら

ず、もっぱらカントを始めとする伝統的な哲学の枠組み内の議論である。

それでも現代性はある。この本のタイトルがどういう意味か最初はわからなかったが、もとの本が2000年2月に出版されているので、21世紀の倫理ということらしい。そして第12章が「生まれざる他者への倫理的義務」と題されて、地球環境問題や将来の危機に起こる戦争の可能性について触れられている。さらに「平凡社ライブラリーへのあとがき」でその後イラク戦争が起こったことなどに触れ、「私の懸念は的中しつつあります。しかし、私は、日本の動向に関しても、世界の動向に関しても、決して悲観的ではありません。二一世紀には、環境問題をはじめとして、人類が直面せねばならない深刻な問題があります。かつてないような悲惨な事態が生じると私は思います。それを止めることはたぶんできません。にもかかわらず、私は未来にかんして楽観的なのです。その意味で、「倫理21」は「希望」の書である、と私は考えています。」

と書いている。この楽観は、不思議と Jared Diamond が “Collapse: How Societies Choose to Fall or Succeed” の中で自分を cautious optimist だと言っているのと通じるところがある。

梨村源次郎「優雅な大人のための欧州浪漫紀行」（幻冬舎ルネッサンス）

梨村源次郎とは大学時代の友人、杉田茂樹のペンネームである。その杉田がヨーロッパでの滞在と旅行の経験をまとめて美しい本とし、昨年3月に出版した。

それを寄贈してくれたので、すぐにイタリアの部分だけ読んだ。最近、彼からメールがきて、それに金沢を2回にわたって訪れた紀行文が添付されていた。そこでは主に、九谷を始めとする陶芸品を美術館などで見たことが書かれている。それも結構面白く読んだので、この本の残りの本も読んでおくことにした。

3部構成で、第1部がイタリア、第2部がスイスアルプス、第3部がパリとフランスである。イタリアは2000年8月にヴェローナ、パドヴァ、ラヴェンナ、サンセポルクロ、ピエンツァ、などでオペラやジョットやピエロ・デッラ・フランチェスカを見たことから始まり、同じ旅でさらに南イタリアのソレント、ポンペイ、ナポリまで行った見聞を語る。それから1971年に新日鉄の新入社員時代にターラントの製鉄所に赴任したときの思い出が述べられ、ついで2006年8月にシチリアを中心に大ギリシャ時代の遺跡を巡る旅の話となる。

旅行に際し、和辻哲郎の「イタリア古寺巡礼」やゲーテの「イタリア紀行」を参照するところは僕と同じだが、ヘロドトス、トゥキュディデスなどを引用して歴史に蘊蓄を傾けるところなど、僕には及ぶべくもない教養の高さである。

この本のオビには「通だけが知っている，奥深い欧州の愉しみ．その土地でしか見られない本物の絵画，遺跡，音楽，そして美食の数々をめぐる，欧州紀行エッセイ」とあり，中高年女性向けのワイン・グルメ案内という印象を与えるが，内容は案外に硬派である．

スイスではセガンティーニを見た話が印象に残る．セガンティーニは自分にとってはとくに強く心ひかれる画家ではないが，スイスの風景の中で見ればきっと印象が違おうだろう．

最後のフランスの話は大変駆け足でページ数も少ないが，パリだけでなくヨーロッパの方々に行ったことはわかる．彼がパリに滞在していた1982年から1985年の間に，僕もパリを訪れて彼に連絡したような気がするが，会ったかどうか記憶が怪しい．1982年の10月初めにスウェーデンからフランスに入ってマルセイユを訪れており，そのときにパリを経由しているはずである．会ったとすればその時かと思ったが，さらに1985年8月に，ロンドンで開かれたICSEに参加する際にパリ経由で入っており，8月26日にパリに着いて杉田に連絡したが応答がない，という自分のメモを発見した．

柄谷行人「隠喩としての建築」(講談社学術文庫)

柄谷の「倫理21」を読んで，最初に読むのに適当な本だったろうという感想を書いたが，その勘は当たりだった．「倫理21」と比べるとこの本は読みにくい．

妙に気取った文章で、「倫理21」のような平易さを心がける姿勢がない。それでも通読したのには理由がある。これは単行本としては1983年に出版されたものだが、手元にあるのは1989年3月に発行された文庫版で、買ったのは親父である。親父がガンで入院したのは1989年11月で、翌年2月に亡くなったから、これは親父が残した本の中では一番新しいものの一つだろう。本はきれいなままで、読んだ形跡が感じられないが、親父がなんでこのような本を買ったのか興味を感じた。

さらに本書を一貫するテーマと言えバゲーデルの不完全性定理ということになるが、それが読む気を起させたともいえる。もっとも柄谷のゲーデル理解は怪しげである。Wikipediaで柄谷行人を引いてみたら、

「（しばしば誤解を指摘されつつも）クルト・ゲーデルの不完全性定理に積極的に言及したことでも知られる(主に『隠喩としての建築』)」

とあった。

実際、ユークリッドの第五公理をめぐって「ユークリッドの「建築」が崩壊せざるをえなかった」という言い方は正しい認識に基づいているのかちょっと怪しい。続けて、「十九世紀後半からの数学者の努力は、自然言語を排除することによって完全な公理体系を建築することに向けられたが、それはゲーデルの「不完全性定理」によってとどめをさされた。」というのはよいとしても、

「こうして、数学はそれ自身では完全な建築ではありえないこと、それは諸科学から独立して諸科学に超越的な基礎を与えるものではなく、その妥当性は“解釈”に依存するということが明らかになった。」(p.16)

というのは言い過ぎだろう。同じページには「ガリレイによる解析幾何学」というような明らかな誤りもある。

たとえば、野崎昭弘の「不完全性定理」ではゲーデルが不完全性定理を証明した1930年の同じ年に、その前に証明した1階述語論理の「完全性定理」が公表されていることが書かれているが、柄谷はそういう認識を持っていないようである。ただ、本書の後の方に載せられている「八十年代危機の本質」という小文では、「ゲーデルは一九三〇年に、自然数論にかんして、ある形式的なシステムはそれが“無矛盾的”であるかぎりにおいて、“不完全”であるということを証明した。」とより正確な表現に努めている。これはきっと誰かに批判された結果だろう。

しかし、今気がついたが、野崎の「不完全性定理」では第6章「ゲーデル登場」の扉に、柄谷の文章を引用している。ということは野崎もある程度、柄谷を評価しているのだろうか。

本のタイトルともなっている巻頭論文には、ゲーデル以外にもグレゴリー・ベイトソンだとか、クリストファー・アレクサンダーだとか、ダグラス・ホッフシュタッターだとか、佐藤信夫といった馴染

みの名前がたくさん出てくる。それもこの読みにくい文章を読み続けさせた原動力の一部になっている。

柄谷がこの本に収められた文章を書いたのは1981年から1982年の間で、その間にイエール大学に滞在し、ちょうどそのとき出たホッフシュタッターの「ゲーデル、エッシャー、バツハ」を読んで刺激を受けたらしい。僕も1981年にEGBを読んで強烈な印象を受けたことを思い出す。

「日本の文学3 森鷗外（二）」（中央公論社）

この巻には、歴史小説が収められている。順に、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「護持院原の敵討」「大塩平八郎」「堺事件」「安井夫人」「栗山大膳」「山椒大夫」「津下四郎左衛門」「じいさんばあさん」「最後の一句」「高瀬舟」「寒山拾得」「梶原品」「渋谷抽斎」「寿阿弥の手紙」「細木香以」である。

この中で、一番最近読んでいるのが「渋谷抽斎」で、最近といっても1986年のことである。それ以外は読んでいるとしても学生時代で、初めて読んだものもいくつかある。

「渋谷抽斎」の五百（いお）の印象が強いので、1988年に娘が生まれた時に、「いお」という名前をつけようかと思った。ギリシャ神話のIoにもつながるし、それが木星の衛星の一つの名でもあり、Voyager1 が Io の写真を送ってきたのが1979年だったようだから、

その記憶もさほど古くはなっていなかったろう。IOはコンピュータ用語でもあるから、その因縁もある。しかし、「いお」にどのような漢字を当てるか、ちょっと考えた。まさか五百にするわけにもいかない（だいたい五百をいおと読ませるのはどういういわれなのだろう）。

今回、「渋江抽斎」を読み返して驚いたのは、次の一文である。保の言葉として「母は五百の字面の雅ならざるがために、常に伊保と書していた」という。それで明治4年に成善が名前を保に変えたのは、その母の名から一字を取ったというのである。赤ん坊の名前を考えているときには、このことはまったく記憶に浮かばなかったと思う。たとえば「伊緒」のような字を考えていたはずだ。しかし、結局周囲の反対で、この命名は実現しなかった。

「渋江抽斎」の面白さは、一種の謎解きにある。最初は武鑑を蒐集しているうちに、そこに「弘前医官渋江氏蔵書記」という朱印をたびたび見たことから、この渋江氏とは誰だろうか、という興味を抱く。そして文書を調べ、いろいろな人に問い合わせ、墓を訪ねるなどして、森鷗外と多くの共通点を持つ幕末の知識人「渋江抽斎」の像が明らかになっていく。

1986年に書いた感想の中に

「巻の真ん中を過ぎたあたりで、抽斎は死んでしまって、後は経年的にその遺族のその後が語られる。それも事実の列記という部分が

多い。」

とあるが、今回これに関し新しい見方を発見した。渋江抽斎が死ぬまでは、抽斎の物語である。抽斎の死後は五百の物語である。前半は主に文献によっている。後半は主に保の話によっている。抽斎が死んだとき、保（成善）はわずかに二歳だから、抽斎を記憶していない。しかし、五百は抽斎の死後26年生き、明治17年に死んだ。この間のことを鴟外は直接保から詳しく聞きだしている。

したがって、保の話に基づく後半は、五百が中心になるとともに、文ではなく人の記憶に頼ることからくる人間臭さが前半よりもある。象徴的なのは、「渋江抽斎」の中でもハイライトというべき、三人の怪しい侍が抽斎を取り囲んで刀の柄に手をかけた時、五百が風呂から裸のまま懐剣を口にくわえて出てきて、2つの手桶の湯を侍に投げつけ、懐剣の鞘を払って「どろぼう」と叫ぶ場面は、もちろん抽斎の生前の事件であるにもかかわらず、抽斎の死を記述したしばらく後に出てくることである。それは保が母から聞いた話に基づいているからである。この話が誰にも強い印象を与えることは、本書に付けられた羽石光志の挿絵でもこの場面が描かれていることや、大岡昇平の解説でも触れられていることから分かる。

「渋江抽斎」の補遺ともいうべき「寿阿弥の手紙」は、今回初めて読んだ。手紙の内容自体を紹介する前半は、部分的に面白いところもあるが総じて退屈である。ところが

「わたくしは寿阿弥の手紙と題するこの文を草してまさに稿をおわ

らんとした。しかるに何となく心にあきたらぬふしがあった。」
というところから、俄然面白くなる。鷗外はまず寿阿弥の墓を訪れ、そこで寿阿弥の墓が藤井紋大夫や力士谷の音の墓と一緒にになっている、などという新しい事実を知る。さらに寿阿弥の墓を命日ごとに参る老婆の存在を知る。その人を尋ね当て、さらにその家に保存されている古文書を見る機会を得るに及んで、多くの謎が解ける。まるで前半はそれらの謎を鷗外が意図的に仕掛けたもののよう
にさえ見えてくる。この手法は、渋江抽斎で得たものであろう。

太田浩一「哲学者たり，理学者たり 物理学者のいた街」 （東京大学出版会）

太田さんは昨年、定年で駒場を去った物理学者である。その最終講義を聴きに行ったのだが、PCとプロジェクタの結合不良のため、スライドを投影できず、結局もう一人の人と順番を入れ替えたため、別に用事があった僕はその最終講義を聴きそびれた。

昨年の教養学部報1月号に松井哲男が太田を送る言葉を書いているが、それに

「太田先生は、一九六三年に神戸高校を卒業されて本学に入学されています。希代の秀才で、高校三年間で岩波文庫をしらみつぶしに読破したという、ちょっと信じられない記録を残されています。」

とある。希代の秀才であることは疑いないが、岩波文庫を全部読んだというのは本当だろうか。しかし、大読書人であることは確か

らしい。最終講義は聴けなかったが、同僚の司会者による最初の紹介だけは聞いた。そのとき、たぶん太田の教科書「電磁気学I,II」のことだったと思うが、文献が2つの巻それぞれに100だか200だかついていて、可能なものはすべて原論文が挙げられており、もちろん太田はそれを皆読んでいる、というような話があったと思う。それを当人が訂正して、文献数はそれぞれ300と500だといった記憶がある。

昨年から僕は東京大学出版会の企画委員になっていて、この本の企画の検討にも参加した。そのとき「哲学者たり、理学者たり」という表題は変ではないか、と言った委員がいた。しかし、この本を読んでわかったが、これはシラノ・ド・ベルジュラックの言葉なのである。その辺りを引用すると

「ロスタンのシラノが最後に自分の墓碑銘を詠む場面がある。

哲学者たり、理学者たり、
詩人、剣客、音楽家、
将た天界の旅行者たり、
．．．

理学者はphysicienの訳で物理学者のことだ。シラノは物理学者でもあったのだ。」

これがまさに辰野隆・鈴木信太郎訳の岩波文庫を引いているのだ。

本書が作られた動機はあとがきに明確に書かれている。

「この仕事は、アンペールの法則を講義している途中で、ふと、

「ぼくはアンペールの論文を読んだこともないのに、知ったかぶりをしていいのだろうか」と疑問を感じたことから始まった。そして、アンペールの論文を読むとどこにもアンペールの法則が書かれていないことを発見する。間もなくアンペールの法則はマクスウェルの創造であることを見つけてしまう。」

それ以来、原論文を読み、物理学者の伝記を集め、物理学者の生家や墓を訪ねて回り、その成果がこの本になったというわけだ。

訪れる国はヨーロッパ、それもイギリス、フランス、ドイツ（ウィーンも含めて）と米国に限られる。物理学はやはり西欧の学問なのである。しかし、太田の教養は物理学の範囲にとどまらず、モーツァルトやシューベルトなどの音楽家も出てくれば、永井荷風やホーソーやヴォルテールのような作家も頻繁に登場する。1篇がすべて14-16ページの範囲で、その中で対象の物理学者の伝記的事項、つまり生い立ち、家系、知人から学問まで、さらに太田の紀行とが凝縮して語られるので、密度が濃すぎるくらい濃く、ところどころ読みにくい。

とくにおびただしい人名と地名とが交錯する。しかし、時間をかけて読む楽しみはある。全部で5巻出す予定というから、まだ先にも楽しみが残る。

石川淳「おとしばなし集」（集英社文庫）

この文庫本はずいぶん前に買って、どうも初めの2-3篇を読んだようだが、そのままになっていた。1986年7月発行の第8刷なので、その頃買ったのだろう。

例によって、混んだ電車や昼食時のために書棚からなるべく薄い文庫本を1冊とろうとして、これを見つけた。しかし、この細工をこらしリズムと歯切れのよい文章を集めたものを、前にどうして途中で読みさしたのか分らない。

「堯舜」「李白」「和唐内」などのおとしばなしが7篇、「小公子」「蜜蜂の冒険」などの世界名作のパロディが7篇。これらはみな戦後の昭和20年代の作品だが、さらに戦前・戦中の「鉄拐」「張柏端」「曾呂利咄」が入っている。

いずれも斎藤孝ではないが「声に出して読みたい日本語」である。とくにおとしばなしは、文章を味わうだけでなく、奇想の展開も楽しめる。もっとも最後のオチは必ずしも面白くない。こちらの無教養でオチが分からないものもあるが、今ならおやじギャクと言われそうなものもある。話に戦後の世相が出てくるところも面白い。かならず酒とハダカの女が出てくるのもおかしい。

カント、中山元 訳「永遠平和のために／啓蒙とは何か 他3編」(光文社古典新訳文庫)

光文社が2006年から古典の新訳を出す文庫を始めた。これが大当たりらしく、とくに「カラマーゾフの兄弟」は異様に売れているとい

う。

このカントも出てすぐ買ったと思うが、柄谷の「倫理21」が「永遠平和のために」を下敷きにしていたので、買ってあったことを思い出して読んでみた。

表題の2編の他に、「世界市民という視点から見た普遍史の理念」「人類の歴史の憶測的な起源」「万物の終焉」が入っている。最初の「啓蒙とは何か」が1784年の作品で、最後の「永遠平和のために」は1795年の作品である。この間にフランス革命があるが、革命後の「永遠平和のために」では、そのことには直接触れられていない。むしろ、革命前の「啓蒙とは何か」に

「おそらく革命を起こせば、独裁的な支配者による専制や、利益のために抑圧する体制や、支配欲にかられた抑圧体制などは転覆させることができるだろう。」

というような文が出てくる。

本書は「あえてカントの哲学用語を使わずに翻訳」されている（「訳者あとがき」）。丁寧な訳注もつけられ、さらに訳者による100ページを超える解説がある。それでカント独特の「公的なものと私的なもの」という普通とはむしろ逆の区別とか、「人間の非社会的な社交性」という概念とか、共和制を理想的としながら「民主制は語のほんらいの意味で必然的に専制的な政体である」(p.171)というような分かりにくい議論も、分かったような気になる。

すぐれた著作，思想は預言的なものだが，帝国主義の19世紀，2つの世界大戦と国際連盟，国際連合の20世紀を経験している現在を，確かに予見している．カントは「自然状態は戦争状態である」という認識では甘くはないが，戦争状態を経て文化が作られ，平和状態が創出できるという点では楽観的なところもある．自然の中で人間が至上であるとする点で，きわめてヨーロッパ的であるが，現在のEUもこのような思想の流れに乗るものであるといえるだろう．

ライプニッツと同じように，キリスト教の制約の上で苦勞して合理的な哲学を作ろうとしているが，ライプニッツより100年後なので，より自由に議論をしているところがある．たとえば，「万物の終焉」でキリスト教には愛すべきものがあるとした上で，

「ところがキリスト教のためを思って，キリスト教にある權威を加えようとしたりする．するとその意図は善く，その目的もきわめて善いものだとしても，キリスト教に權威が加えられることによって（たとえばそれが神の權威であつても），愛すべきものという性質が失われるのである．」

と書く．訳注によると，フリードリヒ大王が死んだ後の当時のプロイセンで，後継のフリードリヒ・ヴィルヘルム2世のもとで，国家の權威によるキリスト教の支配強化が進められていたことへの批判だという．プロイセン政府はカントの批判に腹を立て，この論文の発表直後にその後の「宗教・神学に関する口述を禁じた」そうだ．大学を追われたり投獄されたりしなくてよかったが，勇気のある行為だっただろう．

中沢新一「カイエ・ソバージュ IV 神の発明」（講談社選書メチエ）

カントと並行してこの本を読んだのは、なかなかよいタイミングだった。

この本ではスピリットの世界からどのように神(ゴッド)が作られたか、がテーマである。スピリットは人間の脳の発達から、人類に共通に生まれたものだという。アボリジニの描く図形、ハッシシ吸引で体験する「内部閃光」のパターン、世界各地の旧石器時代からの遺跡に描かれた神聖図形が共通するのは、ヒトの脳に生じる「内部視覚」だという。

この内部視覚というのが広く研究されてきたものである、ということ自体をほとんど知らなかった。僕自身、この内部視覚を具体的に体験し、意識するようになったのはこの5-6年ではないかと思う。床について眠れないことは滅多にないが、たまに時差の影響などですぐに眠れないことがある。また年をとってからは睡眠後4-5時間経って目が覚め、それから寝られない、ということも起こる。その時、目をつむったまま意識的に目に映るものを見ようとすると、頭の中で想像するというのとは少し違う、視覚としていろいろなものが見えてくることがある。これはまた睡眠を促すのにも効果があり、連続して夢になることがあるので夢とも近いように思われる。

これが自分の内部視覚だろうと思うが、そこで出てくるイメージは本書に示されているような抽象的なパターンではなく、景色や人の顔や建物のような具象的なものが多い。まあ、僕にはシャーマンの素質がないということだろう。

この内部視覚とスピリットとが同じもの、あるいは深く関連するものだという。そしてどの民族のスピリットたちにも、その中にグレートスピリットと呼ばれるような特別なものが存在したが、それが直接神に変化したのではないという。

では、どのように神が生まれたか。そこで物理学の「対象性の自発的破れ」という現象が援用されて、高次対象性を持つスピリットから非対称性をもつ高神と低次対象性をもつ来訪神が分かれた。その高神が来訪神のような低次対象性の神を追いやった非常に特殊なものが、ユダヤ教などの一神教の神だというのである。

前作の「愛と経済のロゴス」で出てきた三位一体、父と子と聖霊の関係がここでも述べられる。スピリットがすなわち聖霊である。そのような形で、キリスト教でも何とかスピリットが生き残っている。

カントの「人類の歴史の憶測的な起源」では、旧約聖書を題材としながら、人間の行動がどのようにしてその特性を獲得するに至ったかを「憶測」している。そこでは、聖書の記述から合理的な説明を引き出すという手法が取られている。

また「万物の終焉」ではキリスト教の最後の審判が発想の契機として述べられているが、それにまた理性的な解釈を加えている。というわけで、この2つの本を並行して読んだのは意味があった。

大平雅巳「西洋陶磁入門」（岩波新書）

この本は実に楽しめた。陶磁器はまず中国、それから日本が先進で、ヨーロッパはそれを真似し追いかけた、というイメージが強い。実際、それは大方正しいようだが、一方で古代ギリシャ以来の伝統もある。それを要領よく、16話にまとめて紹介する。

16話のそれぞれに代表的な作品がまず写真で紹介され、それにまつわる話と、関連する陶磁器や場所が写真を多用して記述される。写真はカラーで美しく、それを見ているだけでも楽しい。歴史の勉強にもなるし、陶磁器の知識も得られる。たとえばラスター彩（これはrasterではなくlusterである）、錫白釉、スリップウェアなどの言葉を覚えた。

同じヨーロッパを対象としているという意味で、太田浩一「哲学者たり、理学者たり」を連想するところがあった。物理学者の跡を訪ねるのと陶磁器とではずいぶん違うようだが、1つのテーマでヨーロッパの各地を追い、写真と文章でそれを紹介するというスタイルに共通性がある。太田の文は多くのことを詰め込みすぎて息苦しく感じるところがあったが、この大平の本は「ですます」調の語りで平明なうえ、教養も溢れていて知的なレベルを落としていない。た

例えば第12話「食の国の白い器」でモンテーニュを引き、1581年にイタリアのサン・キリコで次のように書いていることを紹介する。

「陶器かと思われるほどに白くて清潔な、しかも非常に安い、これらの土製の食器を目にすると、本当にそれらはフランスの錫の器などより、食卓用としてははるかに気持ちのよいものだと思う。ことに宿屋で出されるきわめて汚い錫の器よりはずっとよい。」（「モンテーニュ旅日記」関根秀雄・斎藤広信訳）

そこで原文にあたると、ここで陶器とあるのは磁器で、土製の食器は陶製の器のことだという。そういうところが面白い。

岡崎裕史「ウチのシステムはなぜ使えない SEとユーザの失敗学」(光文社新書)

わざわざ感想を書くほどの本ではないが、一応通読した。

今、みずほ証券から相談を受けて、東証との裁判資料として提出されている売買システムの不具合に関する説明文書を読んで意見書を書いた。ソフトウェア工学のケーススタディとしては面白い題材である。そこでも発注者の東証と開発者の富士通の関係が一つの問題である。そういう理由もあって、出たばかりのこの新書を読んでみた。

この著者は一般向けに解説することには慣れているらしく、要領よく書いている。とくに間違ったことも書いていないが、別に目新しい話はない。SEとはどんな仕事をするどんな人種かということをや

ーザの立場から書いているのだが、自分でも言うように「SEを悪者か道化のように描いている」。著者はSEとユーザの間によりよいコミュニケーションを作らなければならないというが、本書によってそれができるようになるとは、とても思えない。

川上未映子「乳と卵」(芥川賞)

「文学」がはやらなくなる一方で「文学賞」が氾濫する現在でも、芥川賞はマスコミに取り上げられるイベントである。その芥川賞もさらに話題性を求めるのは出版社としては当然で、その点では今回の受賞作、というより受賞作家は、話題に事欠かない。高校でデザインを学んで、卒業後は書店の店員とクラブのホステスとしてアルバイトをしていた。同時に音楽活動をしていて3枚のシングルと3枚のアルバムを出している。ただし、全然売れていない。大学の通信講座で哲学を学び、詩を書き、小説を書き始めてその一作目が芥川賞候補になり、この二作目で実際に芥川賞を受賞した。というような知識は、本作品が掲載された「文芸春秋」3月号で、作品の前に付けられているインタビューで得たが、受賞作と同時にインタビュー記事を載せるというのもこれまでにあったかどうか記憶にない。その記事の見出しが「家には本が一冊もなかった」である。

しかし、この売り方から素人っぽい作品を想像すると、あてが外れる。周到に計算され、技巧がこらされた小説である。樋口一葉の「たけくらべ」が下敷きになっていることは、選評やインタビューを読むまで気がつかなかったし、この作品にとってさほど重要な要

素とは思えない。しかしそのような素養と意識があることは、やはりこの作家の意外な側面である。

磯辺勝「江戸俳画紀行 蕪村の花見，一茶の正月」（中公新書）

俳句にはほとんど興味がないが、この本は楽しめた。22の小編から成る。各話で一人の江戸時代の俳人を取り上げ（最後だけ三上千那，三上角上の二人），それぞれ一枚の俳画を載せる（これも最後だけ千那と角上と一枚ずつで二枚）。僕にとっては名前すら聞いたことのない俳人が多いが、その生涯や俳句の特徴も、要領よく紹介される。しかし、焦点は俳画であり、絵と文字のバランスで作られる独特の世界である。

俳画という以上、絵が注目されるわけだが、僕は字をとくに注意してみた。といっても書としての美というような視点ではない。情けないことにひらがながよく読めないのです、なんとか読もうと努力したということである。アダム・カバット「妖怪草紙 くずし字入門」という本で、かなの読み方を少しだけ練習したことがあるが、まだとても「読める」という域に達していない。江戸時代はもちろん、明治ぐらいでまでなら普通の人苦もなく読めたはずの文字が、多分、われわれの親の世代あたりから、普通には読めなくなっているのではないか。これは文化的に異常なことかもしれない。しかし、その原因は明治以来のかなの標準化、活字化という教育政策の結果だから、皮肉なものである。

単に俳画を載せて解説するだけでなく、著者はゆかりの地を訪ねて知られざる俳画を探したり、地元の研究者と交流したり、墓を訪れたりしている。そういう点では、やはり16話の小編からなった「西洋陶磁入門」や太田浩一の「物理学者のいた街」とも相通ずる。そこで共通に言えることは、この種の本も、書き手の水準が高いと、門外漢にも十分楽しめるものになるということだろう。

隈研吾「負ける建築」(岩波書店)

隈研吾は栄光の7年後輩で、廣瀬通孝と同期である。

先端研に御厨貴という歴史家がいて、明治期の歴史研究でもよく知られているが（僕も彼の「日本の近代3 明治国家の完成」（中央公論新社）を買っているがまだ読んでいない）、オーラルヒストリーという手法についても、本を書いたりそれを使った現代史記述事例を多く発表するなど活躍している。その御厨が何を間違えたか僕の所にオーラルヒストリー研究会の案内をよこしたことがある（もしかしたら、江戸の町の建築などをしている建築史家の千葉大の玉井哲雄と間違えたのかもしれぬ）。そのときのゲストスピーカーが隈研吾と西垣透だったので、出してみた。隈研吾とはそのときが初対面だったが、休憩時間にしばらく話をした。

隈研吾という名前が実に建築家らしくてよい。最初はなぜそう思うのか自分でも意識がなかったが、本書に村野藤吾が出てきてかなりのページを使って好意的に紹介されているのを読んで、はたと気づ

いた。辰野金吾、村野藤吾と並べてみれば、隈研吾という名のよさが分かるというものである。まるで建築家となってからつけたペンネームのように見えるが、栄光の名簿を見てもこの名前で出ているので、本名であろう。

この本を読むと、隈研吾が文筆家としても名をなしている理由が分かる。まず、なかなかの名文家である。「はじめに」でオウムと9.11が建築的事件であったというところから、意表をつく。続いて最初におかれた「切断から接合へ」で、「建築というものの自体が社会の敵かもしれない」と建築家とは思えない言表から始める。建築は図体が大きく、物資を浪費し、作られると取り返しがつかない、という厄介な性質を持っているのにもかかわらず、20世紀が「建築の世紀」と見なされるのは、持ち家政策とケインズ経済のためだという。経済の専門家ではないにもかかわらず、隈は舌鋒鋭くケインズ流の政策を批判し、小気味よい。その断定口調は文章に精気を与え、仲間内の建築界も切って捨てるところは喝采を招く勢いがある。

ただ、本人の専門を外れるところでの機知にあふれる議論は、かなり危ういものなのではないかとも思わせる。というのは、オブジェクト指向について次のように書いているからである。

「では分割を乗り越えることは可能か。オブジェクト指向と呼ばれるコンピューターOS（オペレーティング・システムの略）の新しさは、関数と変数という類別の否定にある。そこでは、関数の中に変

数が代入されるのではなく、関数も変数も等価なものとして取り扱われる。それによって演算速度は飛躍的に向上した。（中略）従来のOSでは関数が複雑化した時、関数の入れ子状態（サブルーティンと呼ばれる）が重層し、演算処理に時間がかかる。オブジェクト指向の場合にはそもそも上下のヒエラルキーがないので上位のものが下位を含む入れ子状態が発生せず、関数が複雑になればなるほど、そのフラットな方法の優位が確認されるのである。」(pp.44-45)

柄谷行人のゲーデル理解のようなものだろうか。

ジョナサン・ハー、田中靖 訳「消えたカラヴァッジョ」(岩波書店)

こういう本を翻訳で読むのは久しぶりだが、さすがに早く読めるし集中できる。翻訳の質も高い。

1990年にカラヴァッジョの真作「キリストの捕縛」がアイルランドで発見された。その実話をローマの美術史専攻の女子大生フランチェスカとラウラや、アイルランドで発見をした修復士ベネデッティを主人公として、巧みに物語る。

イタリアにいたとき、カラヴァッジョの作品をいくつか見て、ご多聞にもれず心服した。それで日本に帰ってから Catherine Puglisi, "Caravaggio" をアマゾンから購入したが、この機会にまたそれを眺めてみた。「キリストの捕縛」ももちろんカラー図版が載っているが、見事な作品のように見える。

畑村洋太郎「失敗学のすすめ」（講談社文庫）

みずほ証券と東証の裁判について、みずほ側から相談を受けて意見書を書いて裁判所に提出した。この事件はまず1株61万円の売り注文を61万株1円の売りと誤って入力したことから始まったが、裁判で係争の焦点となっているのは、この注文の取消が、東証の売買システムに潜んでいたエラーのせいで実行できなかったことにある。

これと比べればずっと小さな事件であるが、東大の情報基盤センターで今年2月に実施したメールホスティング・システムの移行作業が、導入しようとしたネットワーク機器の不具合で予定より28時間遅れとなり、その間学内の1万人を超す利用者がメールを使えないという事件が起きた。岡村副学長・理事がこの件の事故調査委員会を立ち上げることとし、僕にその委員長を依頼してきたので引き受けた。そしてつい最近、報告書を取りまとめた。

このどちらも典型的な「失敗」事例である。畑村の「失敗学」は今や有名だが、そのきっかけとなったこの本の文庫版が出て手に入りやすくなったので読んでみた。

さまざまな失敗事例を集め、それを整理しパターン化して、失敗を未然に防ぐにはどうしたらよいか、ということを論じた本を想像していた。もちろんそういう部分もあるが、むしろ失敗を隠そうとしたりごまかしたりせず、次の発想に前向きに利用する、という心掛けをより強調している。その意味では、発想法の立場に近い。

石川淳「新釈雨月物語 新釈春雨物語」（ちくま文庫）

この本は1992年に買っている。CSM'92というメンテナンスの会議のプログラム委員会がCMUであったとき、これを持っていったことを覚えている。このときは、ピッツバーグに行く前にニューヨークに行って、藤崎家や福田家に泊めてもらった。ピッツバーグでは三田村照子さんにも会った。

しかし、雨月物語は読んだが、春雨物語の途中で読みさしにし、16年もほっておいた。最近、やはり昔買った石川淳の「おとしばなし集」を読んだのがきっかけで、これも通読してみた。

読んだはずの雨月物語も、16年経つとほとんど忘れている。しかし、いずれも近代性を感じさせる作品である。「白峯」「菊花の約」「夢窓の鯉魚」などが有名らしいが、「仏法僧」「蛇性の姪」も印象に残る。驚いたのは最後の「貧福論」で、形式はプラトンの対話篇のようであり、内容も現代的な経済倫理学に通じる。

春雨物語の最初の数編はやや退屈だが、「樊噲」（はんかい）は悪人を徹底的に悪く描いたものとして、凄味がある。さすがに有名らしく、巻末の石川自身の「秋成私論」でも三島由紀夫の「解説」でも触れられている。

しかし、この石川と三島の解説がどういう意図のものかよく分らない。どちらも石川の「新釈本」ともその文庫版とも無関係の文章

で、この新訳がいつ何のために書かれたのかは不明である。巻末に「本書のテキストは「石川淳全集」第17巻を定本に、「古典日本文学全集」第28巻「江戸小説集 上」と校合して作製された」とあるのみである。

キース・デブリン, 山下篤子 訳「数学する遺伝子」(早川書房)

人間にはなぜ数学をする能力があるかを論じている。その答えとして、数学を可能とする脳の特性は、言語能力の特性と同じだからだという。

ヒトの言語能力がなぜ進化したかについては、コミュニケーションを目的とするためと、思考のためとの両説があり、一般にコミュニケーション説の方が支持率が高いが、デブリンは思考の方を重視する。

一方、数学とはパターンを捉える能力だという。そして言語能力と数学力を結びつける本書のキーワードはオフライン思考である。他の動物にないヒトの思考力は、今現実にはないことについて、それを対象に考えることができることであるとし、それをオフライン思考と呼ぶ。チョムスキー流の統語獲得能力は、概念を組み合わせることを可能とし、そのようなオフライン思考をできるようにした。数学は概念の抽象度が高いだけで、オフライン思考と本質的に同じである。

さらにこじつけに近く感じられる議論は、ヒトは言語をほとんどゴシップのやりとりに使用しているが、数学も n とか群とかについてのゴシップを語るようなものだという。通常のオフライン思考も現実の対象を抽象化したものについて議論するが、数学の場合は抽象性が現実から大きく離れているので、それを扱うのに訓練がいる。しかしそれは、マラソンをするのに訓練がいるのと同じようなものだという。

このようにまとめてしまうと、あまり大した論ではないように見えるが、著者は数学者、数学の啓蒙書ライターであるだけでなく、人類の進化、言語などについて相当造詣があり、議論は単線ではない。そのぶん、本として冗長な感じも与えるが。

Christopher Benfey, "The Great Wave: Gilded age misfits, Japanese eccentrics and the opening of old Japan," Random House.

5月の出張にもって行って読みはじめたと思うので、1ヶ月半もかかったことになる。この間、例によって査読地獄だった。また、並行して「ワイン物語」を読んでいたが、これは長大な物語でやはり時間がかかっている。

しかし、十分堪能できる本である。19世紀終わりから20世紀初めの日本と米国の文化的な交流を描く。まず、ジョン万次郎と Herman Melville である。この二人は時を同じくして太平洋を西に行き東に

行った。その米国東海岸の拠点はいずれも New England の Fairhaven である。途中のハワイでも同じ教会の宣教師とそれぞれ交渉があり、直接会ったわけではないがすれ違っている。万次郎は危険を冒して帰国する。上陸したのが開明的な薩摩だったのが幸いだったという。その後日本が開国して1860年に咸臨丸が米国に行ったとき、万次郎は通訳として同行し、San Francisco に上陸する。同じ年、Melville は最後の太平洋への旅に捕鯨船に乗って出たが、船が南米ホーン岬を回って San Francisco に着いたとき、突然その先の航海を取りやめたという。それが万次郎が San Francisco についた数ヶ月後である。明治になってからの万次郎は不遇であったが、Melville の晩年もまた不遇であった。

Melville が「白鯨」より前に書いたのが Typee という太平洋の諸島を天国として描いた本だが、それに夢をかきたてられた男たちとして、Lafcadio Hearn, John La Farge, Henry Adams が挙げられている。これらの人物は、後の章で主人公として登場する。

その前に出てくる重要人物は、Edward Morse である。Morse は Salem の出身である。Salem は太田さんの「哲学者たり、理学者たり」で最初に取り上げられた Nathaniel Bowditch の街である。Salem で行われた凄惨な魔女裁判について太田はかなり詳述しているが、それは本書ではほとんど触れられない。その代わり、Bowditch や Nathaniel Hawthorne は Salem に住んだ重要人物として、共通に取り上げられる。Bowditch の The New American

Practical Navigator という航海術の本は、何と万次郎が日本語に訳しているという。このことは恐らく太田の本にも出ていたはずだが、すっかり忘れていた。（太田の本を調べてみたら、「ボウディチはこれらの航海中に計算を行い1802年に『新アメリカ実践航海者』を出版した。それには月の角度を測定して経度を決めるボウディチの公式が書かれている。現在でも船乗りが使っている不朽の名著だ。」とあるだけで、ジョン万次郎の翻訳のことは触れられていなかった。）また Hawthorn はイギリスのリバプールに住んでいた時、まずペリーの訪問を受けてペリーの日本航海記をまとめて本としてくれる適当な人物の紹介を頼まれ、Melville を推薦したという。これは実現しなかったが、2年後に Melville 自身がリバプールの Hawthorn を訪ねて1週間ほどを過ごしたという。

Morse は3度日本を訪れたが、1883年以降は決して訪れることはなく、収集した陶磁器その他の美術品、日用品、写真の整理にあたったという。それらは現在、Salem の博物館で展示されているらしい。ちょうどよいタイミングで、その Edward Morse の遺品を編集した本、「百年前の日本 モース・コレクション[写真編]」「モースの見た日本 モース・コレクション[民具編]」が小学館から発刊されたので早速買ってみた。これは10年ほど前に出たものを廉価版として再発行したもので、大変楽しめる。多くの写真は人による彩色が施されていて、中には不自然なものもあるが、多くは保存状態もよく、その時代の日本を美しく再現する。

続いて岡倉天心である。岡倉天心は3章で Isabella Gardner との交流を中心に上げられているが、その後の章でも何度も登場し、本書全体の主人公の位置を占めると言っても言い過ぎではない。この長い物語で多くの人物と交流しさまざまな活躍をするので、1913年に50歳で死んだというところまで読むと、その寿命の短さに驚くぐらいである。

さらに取り上げられる Henry Adams, John La Farge, Percival Lowell, Mabel Loomis Todd, Lafcadio Hearn, Mary Fenolossa, Theodore Roosevelt, William Sturgis Bigelow など、いずれも生き生きと描かれ、作者の探究心と筆力には驚嘆させられる。

その中でも九鬼周造の話は面白い。昨年、九鬼の「「いき」の構造」を読んだのが偶然とは思えない。周造の父、九鬼隆一男爵は大使として米国に滞在し、天心の上司だった。その妻はつを日本に返す際、天心に同行を頼む。そこではつと天心は恋に落ちる。周造は天心の子であるとするのが本書の立場である。九鬼周造はヨーロッパにいる間、Herrigel, Husserl, Heidegger, Sartre 等と交流する。その華麗な人脈作りは岡倉天心と通じるものがあると著者は言う。

作者は日本にことのほか愛情を持っているようだが、基本的にはすべて他者の言の引用によって日本の魅力を語り、本文では自分を直接出すことはない。しかし、最後の謝辞の中で、16歳の時に日本で

ともに1年を過ごす機会を与えてくれたことを両親に感謝している。

宮下規久朗「刺青とヌードの美術史 江戸から近代へ」 (NHKブックス)

本書のテーマを一言でいえば「日本の近代美術とヌード」ということになる。

江戸時代には、日本では裸が日常的にみられた。渡辺京二の「逝きし日本の面影」に、外国人が日本の裸体習俗を見て驚いた言説が数多く引用されているが、そのことは本書でも触れられている。一方で理想化したヌードを美術として描くという風習はなかった。それが明治になって、外国人の目を憚って明治政府が裸体禁止令を出した。ギリシャ以来のヌード美術の歴史を持つ西洋では、むしろ裸体のタブーが強いという。

黒田清輝の「朝妝」展示が起こした騒動や別の「裸体婦人像」の腰巻事件（僕はこの両者を混同していたが）は、日本における芸術としてのヌードの受容が遅れていたことを象徴するものとしてよく語られるが、これについては引用されている若桑みどりの議論が説得力がある。

「（「朝妝」は）裸体制御の西洋的なシステム（検閲と許可）も一緒に輸入した」

「検閲をくりかえしながら、権力は崇高なヌードと猥褻なヌードを

上下に二分し、民衆の性のメンタリティーをコントロールすることに成功していった。」

あとがきに

「従来ほとんど試みられなかったテーマであるため、自説を赤裸々に吐露し、展開してしまった。」

とあるが、そのすぐ後でも認めているように、本文で若桑だけでなく数多くの先行研究を引用しており、ときにうるさく感じられるほどである。結局、自説とは江戸時代の浮世絵や生人形などから、日本独自のヌード芸術が育つ可能性はあったのに、そうならなかったということらしい。

この間読んだ“The Great Wave”の主要登場人物の一人、モースの言も引用されている。

「モースは、日本人にとって裸体は無作法でないとし、『たった一つ無作法なのは、外国人が彼等の裸体を見ようとする行為で、彼らはこれを憤り、そして面をそむける』」

この短い引用だけでもモースはものをよく見えていた人だということが分かるが、日本では裸体をさらすのは問題ないが、それを見つめることは不道徳で、他人の裸体は見えていても見えないようにふるまう、つまり「間接的なまなざし」が必要とされた、という本書の重要な議論の一つの根拠になっている。

表題では「刺青」が先に来ているが、割かれたページ数で言うと刺青の話は5分の1ぐらいである。「ヌードは裸体をモチーフにした絵画や彫刻であるのに対し、刺青は裸体そのものが作品になっている」ということから、本書で刺青を取り上げていることは分かる。また、

「わが国の裸体の美意識は元来、プロポーションや体型などのいわば線的な美ではなく、肌の肌理や色合いと言った面的な美に求められてきたことはすでに述べた。その美意識の延長に、肌の上に絵や文様を施して裸体の美を発揚する刺青が生まれたのである。」
という議論も面白い。

しかし、「魏志倭人伝」に「男子は大小となく皆面に黥し身に文する」と書かれていて、縄文時代の土偶や埴輪にも刺青と見られるものがあることは知っていたが、その後刺青の風習は日本から消え、江戸期になって刑罰としての入墨と起請としての彫物が復活して、江戸末期に独自の華やかな技術が発達した、という歴史は知らなかった。

大岡信「詩人・菅原道真 うつしの美学」(岩波現代文庫)

新聞の書評などで見て面白そうだった本を、メモしておかないとすぐ忘れてしまうと思い立って、気になる本の著者・書名・出版社のデータをリストし始めたのはいつからだったかと今リストの初めの方をチェックして、1999年だったらしいことが分かった。これを始めてから本を買う量が着実に増え、その分積読も増えた。

大岡のこの本はそのリストの最初の方にあるが、その時点で10年前に出た本だったので、新刊の書評で知ったのではない。誰かがどこかで非常にほめていたのだが、そのとき調べた限りでは絶版だった。それが最近「岩波現代文庫」で再刊されたのですぐに買って読んだ。

副題に「うつしの美学」とあり、かなり長い「はじめに」で「うつし序説」としてその趣旨が語られる。それは次の大変面白い疑問文から始まる。

「日本の文学・芸術において、写実主義が勝利を収めたことがついに一度もなかったのは、なぜだろう」

そして日本の文学・芸術では写実よりも「うつし」、それも「写し」や「映し」よりも「移し」という概念が中心的な役割を果たしてきたという。うつしの典型例は和歌の本歌取りや俳諧における付けの「うつり」だが、たとえば「かな」もうつしのすぐれた例であるという。

この論は、道真が漢文・漢詩を自分のものとした上で、独自の叙事詩と抒情詩を融合した詩の世界を作ったということにつながるが、しかし道真を論じた本論では、「うつし」にはそれほど言及されない。

しかし、ここで紹介される道真の詩は確かに素晴らしい。もちろん読み下し文、さらには大岡による訳文でやっと意味が分かるのだが、

漢字の字面を眺めるだけでも多少の鑑賞になる。道真の詩が心に訴えるのは、大宰府への左遷という悲運がもとになっているからで、当人には不幸でしかないが、それにより高い詩の境地に到達し現代人にも訴えるものが残された。大宰府以前にも、「阿満を夢みる」という7歳の息子を亡くしたときの詩、「寒早十首」という讃岐に左遷された時の詩、など栄華を極めた時より不幸のときの詩が紹介される。とくに驚くのは「寒早十首」で、当時の讃岐の庶民の貧窮の様を詠んでいる。このような視点と表現は、日本の和歌を中心とした文学ではまずほとんど見られないものだというのは確かだろう。そこで大岡が親しみをこめて「同時代人・菅原道真」と呼ぶのに、共感を覚えざるをえない。

ヒュー・ジョンソン、小林章夫 訳「ワイン物語（上・中・下）」（平凡社ライブラリー）

実に長大な「物語」である。グルジアに始まり、エジプト、ギリシア、ローマの古代から、中世を経て、新世界ワインを含む現代にいたる。日本のワインにまで触れられている。ワインについて語っている文学、随筆、研究書、技術書、ガイドブック、などの文献は膨大にある。また、ワイン研究者としては生物学、農業、発酵学、地質学、貿易経済、地理、などの浩瀚な知識を必要とする。

Hugh Johnson という著者は、そのような知識と経験と、さらに文才を備えた人らしい。福田育弘というフランス文学者による「解説」に、

「ワインに関する著作や雑誌といった，ワイン本やワインジャーナリズムは，フランスやイタリアといった，いわゆる古くからのワイン産国ではなく，イギリス（ヒュー・ジョンソン）やアメリカ（ロバート・パーカー）に多い。」

とある。なるほど。

Parker's Wine Buyer's Guide は1994年版を買っている。これは第3版となっているが，毎年のように改訂されているはずである。しかし，銘醸ワインなどまず買わず，名もない安物ワインばかり飲む身としては，ほとんど繙くことがない。ただ，このジョンソンの本で不足なのは地図で，載せられている数も少ないし，その僅かな図も情報量が小さい。そこで時折，パーカー本に載せられているボルドー，ブルゴーニュ，ライン，シャンパーニュなどの地図を参照した。文庫本3冊で1000ページをはるかに超える本書を読んでも，ワインについて造詣が深まったような気はしない。ただ，印象に残るエピソードはいくつもある。たとえば，ドン・ペリニオンである。ドン・ペリニオンはシャンパーニュの発明者とも守護神とも言われているそう。時は17世紀後半。彼は完全主義者で，細心の注意のもとにブドウを育て，摘み取り，圧搾し，発酵させる技術を完成させた。しかも当人は粗食を旨とし，

「よほどのグルメだろうと思われていたこの修道士は，ワインも飲まず，ほとんどチーズと果物だけを食べていた」(中巻p.133)

という。そうしてデリケートに保った味覚で，作り出したワインを吟味していたのである。

もっと驚くことがある。この時代、すでに発泡性のものを好む傾向が見られたが、現在シャンパンの代名詞ともいえるドン・ペリニヨンは、一生をかけて発泡性ワインは作りたくないと思っていたという。

しかし、これだけの本を日本酒について書ける人はいないだろう。日本酒も長い歴史と文化があり、醸造技術は複雑を極め、現代その技術がさらに大きく進展しているが、それを文化史と醸造技術の両面から体系的に捉え、しかも興味深い「物語」として書ける人は出てこないものか。

辻惟雄「岩佐又兵衛 浮世絵をつくった男の謎」(文春新書)

国立博物館で、「対決—巨匠たちの日本美術」という特別展示を7月8日から8月17日までの会期で出している。対決する対は、運慶vs快慶、雪舟vs雪村、永徳vs等伯、長次郎vs光悦、宗達vs光琳、仁清vs乾山、円空vs木喰、大雅vs蕪村、若冲vs蕭白、応挙vs芦雪、歌麿vs写楽、鉄斎vs大観というもの。このうちポスターにも取り上げられている若冲・蕭白と芦雪は、辻惟雄の「奇想の系譜」で世間に知られるようになった画家である。7月の末にこの「対決」を見に行った。さすがに混んではいたが、人が固まっているところを避けてどんどん先に行くと、案外スムーズに見て回ることができた。

その「奇想の系譜」で最初に取り上げられていたのが、岩佐又兵衛である。辻は研究者としての駆け出しの時代に、恩師の勧めで岩佐

又兵衛を対象として、MOA美術館にある「山中常盤」などの作品をすべて写真に撮り分析したという。

そこで岩佐又兵衛には特別の思い入れを持っている。そこを文春の編集者がうまくついて、この新書ができた。新書といってもカラー図版をふんだんに使っている。

岩佐又兵衛は謎の多い画家である。信長に負けて一族三十余人が処刑された荒木村重の息子という出自からして、特異である。生母だけは乳飲み子の又兵衛を残して殺されている。

又兵衛の、というか「勝以」の落款のある作品はそれほど多くない。一方で、辻が又兵衛風絵巻群と呼ぶ作品は相当数ある。それらが又兵衛筆なのか、又兵衛工房のものか、流れを汲む別グループの作品か、贋作か、それが大問題である。おそらく本書の大きな話題は、これまで辻が又兵衛作品ではないと主張してきた「舟木屏風」を、改めて真筆だと認めたことだろう。もちろん、専門家の間ではすでに公にしていたことだろうが、一般向けの本書でそれを明確に宣言している。以前から学会では又兵衛筆という見方が多勢だったというが。

そのような鑑定としては、山中常盤は前半部分は又兵衛の筆、堀江物語絵巻は又兵衛ではない、浄瑠璃物語絵巻は少なくとも全巻の構想や下絵描は又兵衛の仕事ではないか、小栗判官絵巻は又兵衛ではなく有能な弟子が多くの手を動員して作成したのではないか、花

見遊曲図屏風は真筆，などという．ただ，その根拠は線が似ているとか似ていないとかいうもので，たとえば顔料とか紙の質とかの科学的分析によるものではないらしい．

夏目漱石「行人」（岩波漱石全集第8巻）

久しぶりに漱石全集で読み残していたものに取りかかった．今年の夏の読書というところである．

「行人」は若いころに読んでおらず，今度初めて読んだ．やはり晩年のこの時期になると，漱石も小説を書くのに熟達してきたという感じがする．話が自然に流れ，文章にも力みや気どりがまったく感じられない．

しかし，小説の構成という点ではあまり緊密に作られているとは言えない．主要なテーマは語り手二郎の兄一郎の煩悶ということになるだろう．とくに最後が，一郎を旅に連れ出したHさんからの，一郎の動静を伝える長い手紙という形を取っていて，手紙の終わりが小説の終わりでもあるから，その印象は強い．しかし，それまでに二郎と嫂直との交渉，二郎の友人三沢の入院と三沢を慕う女の話，お貞さんの結婚の世話，二郎の結婚話，父や母の小市民的な生活ぶり，などさまざまな話が展開する．どれも一郎の煩悶とそれを巡る家族の困惑というテーマと関連はしているが，それぞれ中途半端なままという感じもする．

とくに嫂を慕うというのは漱石の小説に繰り返されるテーマで、この小説でもそれが本筋かと途中まで思わせておきながら、さほど話は発展せずに終わる。

二郎が直から「翻弄される」ように感じるという関係は、三四郎と美禰子を連想させるところもある。一方で直は、一郎の虐待に耐える女という性格も与えられる。その耐え方に冷然としているところがあるために、一郎は余計苛立つという設定で、単に耐え忍ぶ古いタイプの女というわけではないが。

一郎の悩みはインテリの悩みである。対比されるのが世俗的な父や母の性質と生活である。また漱石自身が悩んだ神経衰弱という要因も重ねられる。そして救いを「則天去私」に求めるような部分がある（この語そのものは出てこないが）。

漱石の小説の主人公たちは、何で生活しているのかよくわからない。一郎が大学勤めであることは、わりと早くから示されているが、二郎の職業が何であるかは、この長い小説の半ばに達するまでわからない。それも初めは有楽町の事務所に通うという形で示される。それからさらにだいぶ先に行ってから、事務所の机の前に立って図を引く、という表現で間接的に建築の設計を仕事としているらしいことが明かされる。職業とか経済の問題は、漱石は意図的に小説の世界の外に置く。したがって悩みも仕事の上の悩みというのは

出てこないし、逆に仕事に打ち込むことによって解消される見込みもない。

ただ、職業だけでなく、二郎とか長野かいう人名や、番町という地名なども、ずいぶん後になって出てくる。これも一つの手法なのか、あるいは新聞小説として連載しているうちに、名前なしで済ますわけにもいかなくなってやむを得ず途中で出したものか。

最後にHと一郎が寝泊まりする場所が「紅が谷（べにがやつ）」である。注解によればこれは鎌倉の材木座にあって、漱石は明治45年の夏に家族のために紅が谷に「田山別荘」という貸別荘を借りているそうである。そういえば「彼岸過迄」に小坪が出てきた。紅が谷という地名は初めて聞いたような気がするが、子供の時からよく行っていた東の叔母の家の近くのようなのだ。

「三四郎」の感想（1999年）で次のように書いた。

「次のような会話がある。

「主人は雑誌を投げ出した。

『では行くかな。とうとう引っ張り出された。』

『ご苦労様』と野々宮さんが云った。」(p.402)

この「ご苦労様」は野々宮さんが広田先生に言っているもので、最近流行の「ご苦労様」は目上が目下に言うものという説への反例となる。僕はこの「目下に言うもの」説に納得がいかなく、そのせいか

どうか若い人が「ご苦労様」という代わりに「お疲れ様」というのが気持悪い。」

この小説でも次のようなところがある。

「「御苦労さま。此暑いのに」と自分が云った。」(p.107)

これは二郎が嫂に言った言葉だから、目上に対してのものである。

ところで、インターネットを探すと漱石のテキストはすべて電子化されていて、自由に読めることを、遅まきながら発見した。「行人」ももちろんある。それで「御苦労」を検索してみると、この例のほかに次が見つかった。

(1)自分は看護婦の方を向いて、「昨夕（ゆうべ）は御苦労さま」と一口礼を述べた。

(2)母はさも愛想（あいそ）らしくまた弁疏（いいわけ）らしく口を利（き）いて、「二郎、御苦労だったね、早く御休み。もうよっぽど遅いんだろう」と云った。

(3)「どうも御苦労さま、すまない」（Hさんから二郎へ）

(4)そのうち三沢はまた盆を持ってこっちへ帰って来た。自分の傍（そば）を通る時、彼は微笑しながら、「どうだい」と云った。自分はただ「御苦労さま」と挨拶（あいさつ）した。

電子化されているとこのようなテキスト検索が便利である。このうち、（2）は明らかに目上から目下への発言であるが、そのため「さま」がついていない。その他は、上下関係を意識していない発

言だろう。「目下に言うもの」説にも根拠があるのだろうし、言葉は生き物で時代で変わるというのも確かだが、自然に変わるのならともかく、「目下に言うもの」という知識が先行して、それを鵜呑みにした人が「御苦労さま」と言われると不快に思うというのはどういうものか。

潮木守一「フンボルト理念の終焉？ 現代大学の新次元」東信堂

フンボルト理念とは、教師が学生に一方的に教えるのではなく、学生が教師とともに研究することで学問を身につけるという大学教育の考え方だという。すなわち、学問をすでに知識化されたものとして与え受け取るのではなく、まだ明らかにされていないことを扱うものとし、学ぶ者と教える者との協同体を作るという理念らしい。

「らしい」というと初めて聞いたように聞こえてしまうが、大学勤めの身としてはもちろん何かで読んだことはある。

ところがこのフンボルト理念が現在、きわめて評判が悪いらしい。いわく、フンボルト理念は教授会による独善的な大学支配を正当化し、大学改革に抵抗するための錦の御旗として使われている。大学教師を研究者として規定し、学生の教育より研究を上において教育を疎かにする口実となっている。少人数のゼミ教育として構想されているもので、大学全入時代にまったく合わない。200年も前の古ぼけた言説で、時代錯誤だ。というのである。フンボルトという名前を出すかどうかはともかく、このような議論も確かによく聞く。

潮木という人は東大の教育学部出身で名大の教育学部長などをやり、とくにドイツの大学について詳しいらしい。フンボルトをテーマとしている本書だから当然とはいえ、出てくる大学の事例はもっぱらドイツで、それと東京帝国大学や京都帝国大学が対比される。後は、アメリカでジョンズ・ホプキンス大学がドイツの大学を真似てそれを大学院として実現したという、よく知られた話が引用されるぐらいで、イギリス、イタリア、フランスなどの話はほとんど出てこない。

著者はフンボルト理念を復活させるべきだと主張しているわけではない。しかし、フンボルト理念を批判する前に、まずそれがどんなものなのか正しく理解すべきだという。本書を書いた動機の一つとして、2001年にドイツの歴史学者パレチエクが発表したフンボルト理念は作られた神話だという新説が紹介される。フンボルトは確かに「ベルリンにおける高等教育施設の内的・外的構造」という文書を書いていて、これがフンボルト理念を提唱したものとしてたびたび引用される。しかし、この文書は書かれて100年間倉庫に眠っていて、1910年のベルリン大学100周年記念の際に掘り起こされ、それ以降フンボルト理念の名のもとに有名になったというのである。そして著者の調査でもこの説はほぼ正しいらしい。この逸話は確かに面白い。

最後に「大学の大衆化はフンボルト理念を無効にしたのか？」という見出しのもとに5ページほどの議論が展開されているが、この設

問に明快な表現では答えていない。

東信堂というのは教育関係の出版社らしい。本書に誤植が多いのは、やはり弱小出版社だからだろうか。

Joe R. Lansdale, “The Bottoms”

たまにはミステリを読もう、と思って例によって積読の中から選んだ1冊である。ミステリというよりはホラー小説に属するのか？ちょっと Stephen King に似たところはあるが（実は King は “The Green Mile” 1冊しか読んだことがない）、King のように非現実的ではなく、ホラー仕立てでも合理的な説明がいずれは与えられるスタイルである。この本の最初の版は2000年に出ている。やはり翻訳が出て書評などに取り上げられてから、英語のペーパーバック本を買ったのだろう。

時代は1930年代の大恐慌の頃に設定され、場所はテキサスの東部である。Lansdale はテキサスの出身で、現在でもテキサスに住んでいるらしい。この設定で、貧しいながらもシンプルな暮らしをする古きよきアメリカ、という郷愁にうまく訴える。それはアメリカ人が感じるもので、自分には無縁かということそうでもない。たとえばマーク・トウェインを連想した。われわれも子供時代に「ハックルベリーフィンの冒険」とか、トウェインではないが「アンクルトムの小屋」とか読んでいるので、懐かしさがあるわけだ。もちろん、トウェインと30年代のテキサスでは、場所も時代も違うが、本書の大

きなテーマは黒人問題であり，そのため南北戦争もたびたび言及される．

語り手 Harry は12歳になろうかという少年に設定されており，すべてこの少年の体験したこととして語られるため，両親の寝室での会話を壁を通して聞き耳を立てて聞くとか，死体解剖の場면을屋根に登って穴から覗いて目撃するとか，なかなか技を凝らしている．少年を語り手にすることで，Salinger の “The Catcher in the Rye” ようなみずみずしい感性を感じさせる効果も計算されている．また少年の成長物語というよくあるパターンを利用しているともいえる．

父親に Sir と呼びかけ，母親に Ma’am と呼びかける礼儀正しさとか，身近の人も Mr.や Mrs.の敬称をつけて呼ぶ，というだけでも今の時代では新鮮な感じがする．父親は教育はないが，黒人を対等に見る目を持ち，それがために nigger lover と言われる．しかし，父は強くKKKの脅しにも動じない．ただ，この父も母も白人で，父は強く母は美しく，妹の Tom はきわめて可愛く描かれる．もちろん，主人公の少年は聡明で美少年である．そこは都合のよい設定とも言える．

犯人探しの要素もある．名探偵は登場しないが，探偵物語ならこうなる（しかし現実とは違う）というような形で，意外な犯人という結果がほのめかされる．その意外な犯人も見当がつくように，ところどころで読者へのサービスのよな表現が挿入される．

このように個々の工夫は使い古されたものかもしれないが、さまざま登場人物の造形と、はらはらさせる話の展開は舌を巻くうまさである。

辻静雄「ワインの本」 （新潮文庫）

ヒュー・ジョンソンの大著を読んだので、昔買ってあったこの本を思い出した。この文庫本を買ったのは平成8年らしいが、もとの本は昭和49年、つまり1974年に発行されている。ジョンソンの原著が出た時よりかなり前だ。文庫に入ったのも昭和57年と古い。

書いてあることはジョンソンの本とかなり重なり、量的にはその3割ぐらいだが、歴史の記述がない分、フランスの個々の生産地別の現在の（といっても1970年代初めの）ワイン銘柄の紹介はこの本の方が相当詳しい。解説の荻昌弘が「教科書的な網羅主義に徹した」本と言うだけのことはある。ロワール、ボルドー、ランドック、ローヌ、ブルゴーニュ、アルザス、シャンパーニュなどの産地と銘柄を羅列されても、それらを飲んだこともなく、まして比べてみたことのない身としてはおよそ退屈な記述だが、不思議とカタカナ（あるいはフランス語表記）を追っかけるのを、途中で投げ出させない何かがある。

しかし、本文より荻昌弘の短い解説の方が面白い。たとえば

「この十年、われわれ日本人と「ワイン」の接点は、それ以前の常識では想像もつかぬほど、格段に豊富になった。」といいながら、

「殊に、昼など、多人数の洋式会食となると、皿にはフォアグラだ、ヒラメのムニエルだ、ビフテキだ、と高額品を並べて見せる気前のいい接待者も、アルコールのほうはビール一本槍、客に泡で料理を流し込ませて済ませようとする主催者が、これは完全に今なお圧倒的であり、客もまた、それに異議をとなえない。」

この解説は1982年に書かれていて、さすがに現在はずいぶん変わったが、この感じはいまだに残っている。

それより荻の解説で一番驚くのは、最後の次の証言である。

「辻さんは、じつは飲まない。つまり飲んでべろべろになることを精神の昂揚と錯覚する、そういうパターン人間とはまったく逆の人物である。だからこそこの「ワインの本」ができた、ということとは重要だろう。」

そうなのか。

ところで、荻昌弘は1988年に62歳で死んでいる。辻静雄は1993年に60歳で死んでいる。美食家、食通は長生きしないということか。

夏目漱石「心」（岩波漱石全集第9巻）

「心」は多分、中学の時に読んで以来だろう。普段、文学などあまり読みそうにない友人がこれを読んで、やや興奮した感想を語っていたような記憶があるので、あるいは学校で推薦図書にでもなっていたかもしれないが、感想文を書かされた覚えはない。

「行人」と比べれば、緊密な構成を持つ作品である。「先生」に秘密の過去があり、それがために自殺に向かうという流れは初めからいくつもの伏線が張られて暗示される。三部構成の最後はすべて「先生」の遺書であり、その叙述は緊張感に満ちた密度の高いものである。

語り手が卒業前後の大学生で、主人公たる「先生」についても、作品の中心である「遺書」ではその大学時代の行動がもっぱら描写されるので、形としては「三四郎」や鷗外の「青年」「雁」のような青春時代をテーマとする小説に類似する。しかし、たとえば「三四郎」に比べて、青春のはつらつさはここにはまったく感じられない。

導入部分の材木座海岸における先生との出会いでは、先生は西洋人の青年と泳ぎに来ている。明治の時代に西洋人と日常的につき合う人は、珍しいだろう。

夏、鎌倉に滞在して毎日泳ぐということ自体、きわめて行動的、また社交的な人物を連想させる。ところがこの西洋人というのはその後、一切出てこないばかりか、先生の交友関係は皆無のように描かれる。この点は、綿密に構成されたように見えるこの作品の、わずかな綻びのように感じられる。

「私」がこの「先生」になぜこれほど惹きつけられたのかは、よく分からない。その知性や人間性に魅力を感じたということだろう

が、知性を示すような挿話はほとんどなく、人間性はむしろ捉えどころがないことがこの小説の眼目である。

この作品でも、「先生」にしろ「私」にしろ職を持たない。その無為な暮らしが悩みを深めているのではないか、という気がする。しかし、「先生」の恋愛に関する感情は、現在の目から見てとても理解できないと切って捨ててしまえないところがある。「お嬢さん」に対しての恋愛感情を、当人にもライバルであるKにも、あるいはお嬢さんの母親に対しても、押し殺して表現しないような気持は、昭和の戦後生まれ、多分この「先生」より70-80年後に生まれた僕にも、まったく無縁とは言い切れない。しかし、現代の若者はどうであろうか。

明治天皇の崩御、乃木の殉死が、この物語の展開に重要な役割を果たしている。乃木の殉死への反応が鴎外に「興津弥五右衛門の遺書」を書かせたことと、漱石の「心」における事件の扱いについては、多くの研究者が比較対照した研究を発表していることだろう。とにかくこの事件が世間に、また知識人に大きな衝撃を与えたことがわかる。

M. マクルーハン, E. カーペンター編著, 大前正臣, 後藤和彦 訳, 「マクルーハン理論 電子メディアの可能性」 (平凡社ライブラリー)

マクルーハンが日本でブームになったのは、40年ぐらい前のことらしい。情報学環の関係で社情研（正しくは社会情報研究所）の人と多少はつきあうようになって、メディア学の開祖ともいえるべきマクルーハンを読んでみようかと、“The Gutenberg Galaxy” や “Understanding Media” を買ってみたが、積読のままである。

この本の原書は1960年に出版されたもので、その元は、1953年から59年にマクルーハンを中心に編集発行された Explorations という雑誌に掲載された論文を集めたものだという。日本では1967年12月にサイマル出版から「マクルーハン入門」と題して翻訳出版された。ただし、原書の論文の一部を除き、一方でマクルーハンの「テレビとは何か」という講演記録を加えている。この講演は1966年に行われたものというから、本書の他の論文よりだいぶ新しい。しかし、原書にないこの論考が僕のマクルーハン理解に一番役に立った。そしてこの中に、とくにインターネット時代を予見するような言葉が多く見られる。たとえば

「エレクトロニクス的世界にあっては、多くのものが相関連するのであるから、人は自分だけ責任をのがれているわけにはいかない。」(p.125)

「エレクトロニクスによる情報流通の条件下では、「やったのはあいつだ」とはいえない。これは一九世紀的な古い分類と断片化の条件下ではありえたことである。人は犯人をつかまえて罰することができた。しかし、あらゆるものが同時に生起するエレクトロニクス的世界においては、それは實際上、不可能になるのである。」

(p.126)

「「ザ・パブリック」というもの、あるいはモンテーニュが呼んだところの「ラ・ピュブリーク」というものは、一六世紀、印刷術の登場によって成立した。それは中世期には存在しなかったし、また今日も存在しない。エレクトロニクスの条件の下では、「公衆(パブリック)」は存在しないのである。存在するのはあらゆる人が相互に深く関連し合う「マス」なのである。」(p.129)

「われわれのエレクトロニクスの環境についてもう一つ基礎的事実をあげておきたい。それはこの環境が狩人の世界のように全面的(トータル)な環境だということである。(中略) 犯罪が関係あるのは、全世界がエレクトロニクスによって、情報、データの狩猟の対象になっているという事実である。」(p.136)

「エレクトロニクスのいえば、人はプライベートな人格をもつことは不可能である。プライベートな人格は、データ分類の古いテクノロジーに属している。たとえば、「私はハンガリー人です。私は歯医者で三五歳です。子供は三人います。それが私です」。これはエレクトロニクスの状況にあっては、だれでもないということになるのである。」(p.137)

いずれも「エレクトロニクスの環境」を「インターネット環境」に読み替えると、見事に現在の批評になる。

Peter L. Bernstein, "Against the Gods: The remarkable story of risk," (John Wiley & Sons)

9月以来、米国を発信源とする金融危機が世界を席捲している。日本の平均株価も、15000円近くから8000円以下にまで急落した。

この本は、1996年に出版されている。しかし、この本の存在を知ったのは例によって翻訳が出てからで、調べてみると1998年に日経から出版されている。それを契機にこれを買ったに違いないので、10年間積読だったことになる。この金融危機で、抜け目のない出版社はこの文庫版(日経文庫)の宣伝を新聞に載せたので、思い出して読む気になった。

初めの方は数学史が延々と展開される。それはパスカルとフェルマーによる賭けごとの確率論的扱い、あるいはむしろ賭けの問題を解くために発見された確率論、に至る前史という位置づけではあるが、ギリシア数学やインド・アラビア式の記数法などが詳しく語られる。著者は経済コンサルタントという肩書で、金融投資理論の専門家らしいが、学者ではなくまして数学は素人らしい。それでも、よく調べている。だがフェルマーの大定理に関して、ピタゴラスの定理は2乗については成り立つが3乗では成り立たないと説明して、整数解という肝心なことを言っていないところを見ると、数学の知識も怪しいものかもしれない。

しかし、Pascal, Fermat, Halley, Galton, Daniel Bernoulli, Jacob Bernoulli, Bayes, de Moivre, Gauss, Quetelet, von Neumann, Morgenstern, Keynes, Harry Markowitz, Richard Thaler, Frank Knight,

Stephen Stigler, Kenneth Arrow, Daniel Kahneman, Amos Tversky, Fischer Black, Myron Scholes,といったところが手際よく紹介されると、リスクを数学的に扱ってきた歴史の流れがわかる気がする。ただ、この手の英語の本の常として、数式は一切出てこない。よくあるグラフを使った説明すらない。

2003年に読んだ Roger Lowenstein, "When genius failed" で扱われた LTCMの破綻は本書が出た後の話である。本書では新しい手法を開発した Black や Merton は天才として登場するが、その二人が加わった LTCMがつぶれたのは1998年でこの本が出た後である。そのきっかけとなったアジア通貨危機やロシア財政危機はまさに出版直後である。そして10年後の今、さらに大きな金融危機に見舞われているさなかにこれを読んだことは、面白いタイミングだった。

本書はこのような事態を予見するような鋭いものではないが、1998年や2008年の経験によって読むことが無意味になるほど底の浅いものでもない。しかし、本書で指摘しているように、人間は直前の経験を過大視するものであり、また時代の風潮に左右されるものである。それを自己反映して本書は種々の警告を放ちつつも、楽観的な気分がある。それを象徴するように、現在の危機の原因を作ったと批判されている当時のFRB議長、Alan の言葉を、最終章の一つ前の18章の最後に引用している。

There are some who would argue that the role of the bank supervisor is to minimize or even eliminate bank failure; but this view is mistaken, in my judgment. The willingness to take risk is essential to the growth of a free market economy...[I]f all savers and their financial intermediaries invested only in risk-free assets, the potential for business growth would never be realized.

ちょっと皮肉である。

玉井虎雄「餓える地球：人口爆発と食糧危機」（日経新書）

親父は生前に単著の本を5冊出した。親不孝の息子は、これまでその中の1冊たりとも読んでいなかった。1冊というより1頁たりとも読んでいない、という方が正確である。考えてみればひどい話だ。

しかし、世界は今や金融危機と並んで食糧危機にも瀕している。40年前に出たこの本を引っ張り出して読んでみたのも、金融危機というので Berstein の10年前の本を読んだのと同じような動機ともいえる。

この新書は1969年1月に出版されている。親父の本の中ではもっともポピュラーなものだ。タイトルもなかなか洒落ているが、ボークストロームという人の「餓える惑星」という本が既にあって、「私のこの書物の題名はこのタイトルに負うものであって」(p.131)と正直に種明かしをしている。

現在新書は乱立しているが、日経新書は1964年創刊らしく、岩波、中公に次ぐ老舗のようだ。この本は日経新書88番で番号が若い。値段は280円。巻末の「日経新書案内」を見ると、都留重人、谷川徹三、高坂正堯、大来佐武郎など結構著名人が並んでいる。この形の日経新書は1970年代で終わっただけで、その後は「日経文庫」がその役割を担ったようだ。また日経は最近、新しく「日経プレミアシリーズ」という新書を出し始めた。

本書が出た時代背景としては、インドで1965年と66年と2年続きで大旱魃があり大量の餓死者が出たこと、ソ連が1963年を転機に食糧の大不作に見舞われ、大量の穀物買付けをする食糧輸入国に転じたこと、などがある。この時点で世界の人口は35億人で、「人口爆発」という認識も高まっている。本書では2000年には世界の人口は倍の70億人になりそうだと予測しているが、2008年現在では67億人で、予測を若干下回るものの爆発的な人口増加の傾向はまだ続いている。

最近、NHKで食糧危機問題を取り上げた特集番組が放送された（NHKスペシャル「世界同時食糧危機(10/17,19)」）。第1回に「アメリカ頼みの“食”が破綻する」、第2回に「食糧争奪戦～輸入大国・日本の苦闘～」という副題が付けられていたが、その内容は充実していたと思う。簡単にいえば、現在の食糧危機は米国発であり、またグローバル化の結果だということである。直接の引き金は、エタノール燃料の生産増大と中国の食糧需要の増大・食糧輸入国への転換

とされる。しかし、とうもろこしなどをエタノール燃料化する生産シフトは、米国の農産業界が、穀物価格の上昇を狙って戦略的に行ってきた結果だという。

また、中国人に牛肉を食べさせるための営業活動・キャンペーンも米国の業界が強力に進めており、その結果飼料としての大量の穀物が中国に輸出されるようになった、ということである。

この米国の穀物飼料に頼る農業形態は、米国が戦後日本に豚を持ち込んで成功させ、そのモデルを全世界に広げたというのが、NHKスペシャルで印象的に取り上げられているエピソードである。そのためにエジプトとかエルサルバドルとかアメリカ依存を深めた国に、穀物値上がりの深刻な影響が出ているという。

ところが1969年に出た本書でも、世界の食糧事情に及ぼす米国の影響の大きさがまず語られている。米国は第二次世界大戦後、慢性的な食糧過剰問題に悩まされてきた。第二次大戦後の米国以外の世界は、空腹と飢餓に脅かされた。そこで米国はマーシャルプランの一環として大規模な食糧援助を行い、過剰な生産を振り向けてきたが、ヨーロッパの農業生産が回復すると、膨大な余剰が出るようになった。そこで1954年に余剰農産物処理法を制定し、東南アジアなどへ無償援助するか安価で提供し、一方減反政策で作付面積を減らした。その政策は米国財政に大きな負担となり、政治の大きな争点となった。1960年に登場したケネディは、農政を大転換させ、余っ

た食糧を援助で輸出して国内では減反政策をやめる，という方針をとった．その農政転換構想はジョンソンにも受け継がれた，というのである．

単純に見ると，この流れが米国への食糧依存をグローバル化させている現在につながっているということかもしれない．そういう意味では，40年前に出たこの本を今読んだのも，意味があったといえよう．

この本では，さまざまなデータが引用されているが，この時代，統計データを集めるのも，それを加工して本に使うのも結構大変だっただろう．親父がペンで，原稿用紙に数表を書き込んでいたのが記憶にある．しかし，今の時代は多様なデータがインターネットで手に入り，そのデータ処理も簡単である．暇があったら，ここにあるデータの現在の統計を収集し，比較してみるのも面白いだろう．

太田浩一「ほかほかのパン」（東京大学出版会）

太田さんの「物理学者のいた街」シリーズの第2弾である．前回16人を取り上げていたが，今回もまた正確に16人．一人あたりのページ数もほぼ約16ページで統一し，物理学者らしく几帳面である．しかし，その16ページのためにしごく交通の便が悪いところまでこまめに歩き回り，またいちいち文献を挙げていないが，膨大な資料を読み込んでいる．どれを読んでも1冊の本になりそうな内容で（す

でに他の人の手による伝記が複数出版されているケースも多いだろうが)、無知な自分には感心させられることばかりである。

だから、このシリーズは新聞の書評などにもっと取り上げられてもよさそうだが、ほとんど評判になっていない。もしかするとそれは、内容が凝縮されすぎているせいかもしれない。たとえばケプラーの項の最初の2ページだけで、人物としてはヘルダーリン、その父母・継父、シェリング、ヘッセ、エマーヌエル・ナスト、ルイーゼ・ナスト、ヘーゲルが登場し、地名としては、テュービンゲン、ネカー河、ラウフェン、ニウルティンゲン、マウルブロン、エーバーハルト橋、シュトゥットガルト、レオンベルク、プファール通り、マルクト広場が出てくる。しかも2ページといっても両ページの半分は写真で占められているので、実質は四六版の1ページ分の間にである。そして主人公のケプラーはまだ登場しない。

今回はイギリス、アイルランドなどで行ったことのある場所がいくつか出てくる。また訪ねる時には、この本をガイドブックとして住居や墓などを訪ねるのも面白いかもしれない。しかし、今回の人物の中では一番よく知っているはずのチューリングについても、昨年マンチェスターの公園でその銅像は見たものの、その銘板に「コンピュータ科学の父、数学者、論理学者、戦時暗号解読者、偏見の犠牲者」というバートランド・ラッセルの言葉が刻まれていることなど、気づきもしなかった。

エドウィン・フィッシャー，佐野利勝 訳「音楽を愛する友へ」(新潮文庫)

これはひどく古い本である。しかし，不思議なことにこの本のどこを見ても，原著がいつ書かれ出版されたのか，書いてない。訳者による解説があるが，フィッシャーが1886年生まれ，1960年没ということしか分らない。後は訳書の成立事情ばかり書いてある。この小冊にはフィッシャーの2つの作品のほかに，フルーノ・ヴァルターの「音楽の道徳的ちからについて」という文章も収められているが，それには1935年の講演記録であるという訳者による注がついている。フィッシャーの文章はこれより前のものと想像されるが，確証はない。

この文庫になった元の翻訳が出版されたのは1955年だというから，それだけでも古い。文庫になったのが1977年で，多分その年にこれを買ったらしい。僕が結婚した年である。180円だから安い。読みかけたことが2-3度あったが，すぐにやめていた。30年ぶりに通読したのは，初めの方のやや退屈な人生論，芸術論を過ぎると，モーツァルト，ショパン，シューマン，ベートーヴェン，バッハという作曲家論となり（ただバッハを除くといずれも短く，「論」というほどのものではない），かなり気楽に読めたからである。

つい，昨日竹内さんの凝りに凝ったオーディオセットを試聴した。そのとき，竹内さんがグルダのLPでクラヴィコードをエレキ化した，実に変わった録音を聞かせてくれた。イタリア協奏曲とか半音

階的幻想曲とフーガとかが入っている。そこでこの本の「ヨーハン・セバスチャン・バッハ」の中で、クラヴィコードについて書いてあるところを皆に紹介した。それをここでも引用しよう。

「J.S.バッハは鍵盤楽器のうち、オルガンのほかにチェンバロとクラヴィコードを使用した。(中略)(チェンバロに) 対して、クラヴィコードの音は、弱く、繊細なものであったが、効果的な陰影をつけることが可能で、また音を震わせる奏法（ベーブング）によって「カンタービレ」風に演奏することもできた。このクラヴィコードは、バッハが家庭での音楽のために特に愛好した楽器であった。」
(p.86)

Benoit Mandelbrot & Richard L. Hudson, "The (Mis) Behavior of Markets: A fractal view of risk, ruin & reward," (Basic Books)

Mandelbrotには1992年4月に会ったことがある。NTTが主催の講演会で「フラクタルの美と科学」というタイトルで話をしたのに参加した。レセプションで Mandelbrot と少し話をしたことが、当時の日記に書いてある。

「プログラムに虫があった結果できた面白い絵というのを講演で2枚ほど見せたが、あれは虫があるとどうしたわかったのかと聞いた。プログラムの正しさについては、細心の注意を払って、ステップバイステップで進めるようにしている。それでも虫が入る。しか

し経験から、ある程度こんな絵になるという予想がつく。あの例の一つではそれがずいぶん予想と違ったので、おかしいと言ってプログラムを書いた人に調べさせたところ、3変数 x, y, z のうち、 z がいつも0のままというエラーだった。

もう一つ聞いたのは、Mandelbrot という名とマンダラとは音がよく似ているという半ば冗談だが、真面目に答えて言うには、Mandel は walnut で brot は bread、つまりパンの一種だ。あるとき、どこか東欧の国で汽車に乗っていたら、車内をマンデルブロットといいながら歩いているのがいて、同じ名前の人を呼んでいるのだと思い、誰が返事するか楽しみにしていたら mandelbrot chocolate というお菓子を売っている売り子だったという話をしてくれた。」

この年の6月にニューヨークに行って、藤崎家に泊めてもらい、またワトソン研究所の藤崎さんのオフィスを訪問した。同じワトソンの違う建物にいるという Mandelbrot から名刺をもらっていて、会うことも考えていたのに、結局気後れがして訪ねなかった。

さて、この本の主題は、先日読んだ Bernstein の “Against the Gods” と同じである。しかし、Bernstein の本には Mandelbrot は一度も登場しない。

Mandelbrot がこの本の中で再三言うように、彼の理論は異端らしい。逆に本書の文献リストには、Bernstein の1992年の本が1冊挙げられている。

本書では現代の投資理論の数学的基礎を作った人物として、Louis Bachelier がたびたび言及される。Bernstein の本でも Bachelier は出てくるが、扱いは非常に小さい。Bachelier はフランス人で、Poincare がその学位審査をしたが、そのテーマが「投機」という当時の数学としては特異なものであったこともあり、やや過小評価をした。それもあって Bachelier は学者として不遇だったが、自分の理論と能力には過剰なばかりの自信をもっていた。そういう経緯からやはりフランスの異端児である Mandelbrot が Bachelier に親近感を持つことが考えられるが、実は本書では徹底して Bachelier に始まる現代投資理論が批判される。つまり、50年間忘れられていた Bachelier の理論は、今や正統派なのである。Mandelbrot は、現代理論がおく次の仮定は誤りだとする。1) 人は合理的に思考し、金持ちになることだけを目的とする。2) すべての投資家は同じように行動する。3) 相場の変化は実質上連続的である。4) 相場の変化はブラウン運動に従う。

数学的には（といってもこの本はやはり一般読者向けで、数式は基本的に出てこないが）、相場変動の正規分布性や事象独立性の仮定が違っているという。

それに代わって、指数分布、自己相関性が現実のデータをよく説明する。そして強調されるのはもちろん、マルチフラクタル性である。単純に言えば、ほとんどの相場データは、時間単位を時間にと

ろうが、日にとろうが、週次、月次、年次、10年次でみても、同じ構造をしている、ということがフラクタル性の一つの現れである。

Mandelbrot はフラクタル幾何学を作った後に、それを相場の理論に適用したのだとこれまで思っていたが、そうではなかった。バックグラウンドは数学に違いないが、早くから経済学分野で仕事をし、1960年ごろにハーヴァードに呼ばれて経済の講義をしたりしているのだ。

本書の第二著者の Hudson は Wall Street Journal の編集者をしてたりしているジャーナリストで、この本を一般に分かりやすくするのに、大いに貢献しているようだ。

磯田光一「思想としての東京 近代文学史論ノート」（国文社）

三島由紀夫が1970年にあの事件を起こして死んだあと、大学の研究室で三島の伝記の類が回し読みされて、僕も読んだ記憶があり、その著者が磯田光一だったかもしれないと思ったが、著書のリストを見てもああこれだというものが見つからない。磯田が三島由紀夫論でデビューし、「殉教の美学」という本で有名になったのは確かなようだが、それが出たのは1964年である。しかし、当時、磯田光一という名を知っていたとは思ふ。

この本の存在は新刊本ではなく昔の本を紹介する新聞の書評欄に載っていて、知ったのではないかと思う。1978年に初版が出、1989年

に手元にある新装版が出ているが、買ったのは2004年頃らしい。なお、磯田は1987年に死んでいる。

近代文学評論家の磯田が、江戸から明治以降の東京の地図と、文学作品と流行歌を使って東京の思想性を論じるというものだが、正直なところちっとも面白くなかった。「下町」「東京方言」というような言葉を使って行われる議論は、ごく単純に理解すると、明治の薩長政府を作った田舎者を江戸を受け継ぐ下町文化の立場からバカにする、というように読める。もちろん、そう取られることを牽制して、磯田は何度も次のような文を差し挟む。

「こういうことを書いて、私は東京出身者を地方出身者よりも優位に置いているのではない。ましてや個人の生き方を出身地で規定できるなどとは少しも考えてはいない。」

しかし、それがどうも言い訳じみて聞こえる。

本論としての「思想としての東京」の後に、「補論・文学史の鎖国と開国」という文章が収められている。こちらの方は、さらについていけない。日本の文壇の閉鎖性を批判しながら、その議論は日本の近代文学の独特の状況についての知識なくしては、理解不能である。僕は一般読者としてはある程度日本の近代小説を読んでいる方ではないかと思うが、それでも「近代文学」派の党派性というようなことをあれこれ議論されても、何の興味もわからない。

2007年

大室幹雄「囲碁の民話学」（岩波現代文庫）

大室の本は何冊も買っているが、いずれもハードカバーの部厚いものばかりで、結局どれもまだ読んでいない。読了したのはこの本が初めて。もちろん、囲碁がテーマということでそれに惹かれて読んだ。第一章の近松の「国姓爺合戦」の碁立軍法の話に惹き込まれた。それからは大室専門の中国の書からの博覧強記の引用である。

まず「西陽雜俎」の中の蓬球の話。山に入って四人の仙女が碁を打っているのに出会う。

「幽明録」にある漢の武帝が玉女と碁を打つ話。

「西遊記」第十回にあるという、唐の太宗の話。

「聊齋志異」巻八の「狐夢」の話。

そして囲碁の宇宙論的なシンボリズムの話になる。後漢初期の班固による「奕旨（えきし）」が囲碁についての最古のエッセイだそう。そこに

「局の必ず方正なるは地則を象る
碁に白黒あるは陰陽の分なり」
とあるそう。

そして張擬の「碁経」では

「万物の数は一から起こる。局の路は三百六十一である。一は数を

生ずる始めであって、その極を拠点として四方へ運行するのである。三百六十は周天の数を具象しており、分れて四つの隅となって四季を具象する。外周は七十二路である。」

として天体、宇宙論と結びつけている。

第3章に紹介される「爛柯」は碁の別名ともなっている有名な民話らしい。王質が木樵りに石室山に登り、童子が碁を打っているのを見る。童子が棗を王質に与え、それを食べると飢えを覚えない。碁が終わると、斧（柯）が爛し尽している。村に戻るとすでに数十年経っている。

で、このあとは、童子が老人、仙人でもある。童子が鳥になる。桃となつめと桃源郷というような連想の連続による民話の紹介が延々と続く。囲碁の話からは離れ、似たようなおとぎ話ばかりで食傷気味になる。この辺はかなりいい加減に読んだ。

誰しも、大室はどのくらい碁を打つのかと気になる。それが「岩波現代文庫版あとがき」で、ほとんど打てないことが明かされる。囲碁というテーマに惹かれて読んだ読者の多くは、これでがっかりするのではないか。

結局、この本は碁の発生や歴史を考察したものではない。タイトルにあるように囲碁を題材にした「民話学」なのである。

黒田草臣「名匠と名品の陶芸史」（講談社選書メチエ）

著者は渋谷の黒田陶苑を親から受け継いでいる陶芸家で研究家である。明治，大正，昭和にまたがる陶芸の巨匠を13人並べて紹介する。

荒川豊蔵，三輪休和，石黒宗麿，加藤唐九郎，板谷波山，富本憲吉，金重陶陽，河井寛次郎，加藤土師萌，濱田庄司，小山富士夫，川喜田半泥子，北王路魯山人

全員が明治生まれ。いずれも一癖も二癖もある個性的な人物である。多くは人間国宝に認定され，また文化勲章をもらい，そういう意味では権威づけられている。しかし，魯山人のように人間国宝の認定を打診されたが断っている者もある。

自分で焼物を作るとなれば生半可なことではできないだろうが，見て楽しむのは簡単である。本来は触って使って楽しむべきだろうが，それは財力との兼ね合いがある。もちろん安いものでもいいものを探すこともできるだろう。

そういうための入門としては便利な本である。ただ，文章は雑である。

森まゆみ「円朝さんまい」（平凡社）

作品を紹介しながら，その舞台となった場所を旅してまわるという仕掛けは，同じ著者の「『即興詩人』のイタリア」と同巧である。

「即興詩人」も円朝も，よく知られてはいるが現在それを読む人は少なからう。それを紹介してもらって読んだ気になり，ついでに温

泉巡りや居酒屋巡り，あるいは路地探訪記を読む面白さも味わえる。（イタリアの場合は観光地巡りとグルメガイドだった。）

そういう点でなかなかよいジャンルを掘り当てたという感じがする。そもそも森は，谷中，根津，千駄木が地元で，その地域雑誌を出しているのだそうで，出世作は「鷗外の坂」である。即興詩人を追ってイタリアに行ったのも，鷗外探求の延長だ。だから，円朝は森にとって身近なのである。実際，中学3年の時，家に帰りたなくて谷中をぶらぶらし，全生庵にたまたま入って円朝が集めた幽霊画を見たというところから，話が始まる。

志ん生のCDをかなり集めたが，その中に牡丹燈籠，塩原多助など，円朝ものがある。それらは面白いが，もとの円朝の話や書いたものからすれば，全体の話のごく一部らしい。そして長い話は，森の紹介によれば相当に荒唐無稽，というか巡り巡ってばったり会うとか，善人が悪人になるとかいう話で，歌舞伎やイタリア・オペラと同じく筋は現代の眼からすると無理だらけのようだ。それでも副題に「よみがえる江戸・明治のことば」とあるように，言葉の技，芸としてみると充分鑑賞に耐えるらしい。

これをきっかけに，この間，根津・谷中を散歩したが，今後も歩いてみたくなる。

池内了「物理学と神」（集英社新書）

これも物理学の啓蒙書のひとつである。神をもってきたことが工夫である。しかし、神、宗教と近代科学、その雄としての物理学の対峙をまともに議論するものではない。神を物理学の発展を説明するための狂言回しに使っている、というのが実態に近い。著者はなかなか文才があり教養もあって、その工夫はある程度成功しているが、第1章でガリレオ、デカルトあたりで神の追放がなされたというのはあまりに単純な言い方だし、第2章で神への挑戦としての悪魔の登場として、ラプラスの悪魔やマクスウェルの悪魔を挙げているのは、語呂合わせのような気もする。次に神と悪魔の間としてパラドクスのことをいうのも、ちょっと強引か。そして、アインシュタインの「神はサイコロ遊びをしない」が後半のテーマである。

しかし、人間原理の宇宙論の話は、これまでも少しは別の本で読んだが、本書でなるほどと思うところがあった。

青山七恵「ひとり日和」（芥川賞）

石原慎太郎、村上龍が珍しく和して褒め、それを利用して文芸春秋が宣伝に力を入れている。それにつられて、久しぶりに芥川賞作品を読んだ。

京王線のどこかの駅のプラットフォームが目の前に見える古い家で、家主のお婆さんと暮らすフリーターの若い女性の話である。設定がうまく、話の舞台がよく見える印象を与えるし、お婆さんやボーイフレンドとの人間関係の展開で作られたストーリーも、惹きつ

ける力はある。死んだ猫の写真とか主人公の盗癖とか，小道具も工夫されている。フリーターを主人公にしているのも，時勢を反映して話題性をもたらす要素の一つだろう。

しかし，山田詠美が選評で言うように，退屈といえば退屈だ。フリーターを取り上げたからといって，社会問題というような色彩はもちろんない。それでは小説にならないかもしれない。それにこの主人公は，コンパニオンのような割りのよい仕事も簡単に手にいれ，それもあっさり捨てるが，やがて普通の企業のパートの事務員となり，すぐに正社員に採用される。恵まれているといえは恵まれているのだ。

小説としては，読む者を鼓舞するものでも，知的な刺激を与えるものでも，人間について考えさせるものでもない。川上弘美のような伸びやかさもない。

ずいぶん前に，やはり筑波大学の出身だったか在学中だったかの女性が，芥川賞をとった。その作品となんとなく共通性を感じる。しかし，あの作家はその後消息を聞かない。

森まゆみ「鴉外の坂」（新潮文庫）

これは森まゆみの出世作である。出世作だけあって，この間読んだ「円朝ざんまい」と比べ，同じ谷根千を舞台にしそこに暮らした明

治（大正）の大物を対象としながら、やはりこちらの方が「力作」である。

鷗外の散歩道や鷗外の作品の登場人物の歩く道をたどり、また鷗外の史伝と同じように、鷗外をめぐる人々の墓や関係者（の遺族）を訪ね歩くという手法は、すでにこの作品で確立している。

その上に、鷗外その人や家族、周囲の人物たちが書き残したものを丹念に読んで、鷗外の足跡をとくに親、兄弟、妻、妾、子どもたち、そして住んだ家との関係を中心にすえて、見事に描き出す。とくに子供たちが残した父を敬慕する文章をふんだんに引用し、それを通して著者自身が抱く鷗外への敬愛の念を自然に表現している。

悪妻とされるしげに対しても、意外なほどに理解を示す。その分、母の峰や妹喜美子への評価が割り引かれている感じた。

本郷に行って時間がある時に、この本や円朝の本に導かれてあの界限を散策するのが楽しみになった。すでに定年後の生活を先取りしているような感じもする。

これをきっかけに鷗外の「半日」を読んでみた。妻しげについての知識をえて読むと、実に面白い。この短編から森まゆみは非常に多くの文章を引用しているが、確かに鷗外とこの二度目の妻との生活、そして嫁姑の諍いを知るのに絶好の作品である。しかし、よくまあこれだけあからさまに書いたものだ。

内田樹「寝ながら学べる構造主義」（文春新書）

題名に反して、まじめな本である。しかし題名や書き方には作者の思いがあって、

「私は「専門家のための」解説書や研究書はめったに買いません。つまらないからです。．．．

入門書は専門書よりも「根源的な問い」に出会う確率が高い。これは私が経験から得た原則です。」

という信念で書かれている。そして実際にその思いによく応えた本を自ら書いた、といえる。

これを読んだ理由は、今度のSEAのフォーラムの「プロセスとプロダクト」で、とくにバルトの「作者の死」を材料に使ってみようという安易な動機であった。しかし、バルトの部分だけでなく全体を通読し啓発された。

単にソシュール、フーコー、バルト、レヴィ・ストロース、ラカンの思想の紹介でなく、明治以来の日本の学校教育、とくに身体教育の話、狂言「ぶす」の話など、独自の例が工夫されていて面白い。

Jhumpa Lahiri, “The Namesake”

この著者の短編集 “Interpreter of Maladies” を読んだのは2001年だ。その作品はピューリッツァー賞を取った。

その Lahiri が最初に書いた長編がこれで、2003年に出ている。わりとすぐ買ったが、読むのは遅くなった。しかし、その後新作は出ていない。

実に滑らかにストーリーが流れる。1968年に始まり2000年まで、時代を追って二代の家族を描くというスタイルは、古めかしく正統的である。文章は端正で過不足がない。読む側に心地よさを与える。

米国で暮らすインド出身の夫婦に子供が生まれるところから物語は始まる。夫は米国の大学を出てMITに職を得、妻は彼と結婚して初めて米国に渡る。その子供たちの世代はまったく異なる文化を自然に吸収して成長する。二世代でもっとも違うのは、一つは男女関係で、お見合いでほとんど相手と会わずに結婚する親の世代に対して、若い世代はみな奔放な性生活を送る。もう一つは交友関係で、上の世代がつき合う相手は同じベンガル出身で米国に暮らす人々と、ときどきカルカッタに帰って訪問し合う大家族に限られるのに対し、子の世代は白人系の米国人と自然につき合う。

1968年に生まれるこの小説の主人公に、Gogol というロシア作家の名前がつけられる。それから名前をキーワードとして話が展開するところは、実に巧みである。

この有能な作家は、写真で見るととても美人である。この小説の中で Gogol がつき合う女性たちも皆美人として描かれている。また登場人物は皆、Ivy リーグ出身のエリートばかりだ。Yale, Columbia,

MIT, Brown など。貧しい人はほとんど出てこない。わずかにベンガル出身のタクシー運転手が、ほんの一場面で出てくるが。

小林信彦「名人，志ん生，そして志ん朝」（文春文庫）

すいぶん雑に作られた本である。同じことが何度も出てくる。小林の志ん生，あるいはむしろ志ん朝への思い入れは分かるが，評伝というわけでもなく，とりとめのない個人的な思い出という感じ。

しかし，最近，志ん生や志ん朝のCDをiPodで聞いている。電車の中で，一人でクスクス笑っているのははたから見てもおかしいだろうが，電車の時間の過ごし方としては，読書や査読に次ぐ有効なものである。

ロラン・バルト，宗左近 訳「表徴の帝国」（ちくま学芸文庫）

この間の「プロダクトとプロセス」フォーラムで，バルトの「作者の死」を知ったかぶって引用した。「作者の死」そのものは図書館で「物語の構造分析」を借りて読んだが，他に簡単に手に入る文庫本のバルトの本を4冊買った。その中の一冊である。

構造主義の本は一般に翻訳で読んでも（翻訳で読むから？）晦渋だが，これは対象が日本だから比較的読みやすい。その日本は，バルトが来た1966年の日本である。僕が大学に入った年だ。だから使わ

れている写真は、義経姿の舟木一夫、タイガース、若い丹波哲郎、全学連といったものである。

日本が表徴の帝国であるというのは、「意味」を喪失しているということらしい。その議論は、おもに文楽、俳句、禅の公案などをもとになされている。天ぷら、パチンコ、歌舞伎の女形も材料になっている。そういう「表徴の帝国」にバルトは惚れこんだらしい。

東京の中心が皇居という空虚な空間であるという本書でのバルトの指摘は方々で引用されているが、それを最初に読んだのは猪瀬直樹の「ミカドの肖像」であった。

加藤徹「貝と羊の中国人」（新潮新書）

かなり前に買った本をマンチェスターへの旅行に持ってきたが、俗に言う目からウロコが落ちるといった本で、実に面白かった。

表題は、殷の文化が東の貝を求めて貨幣とし、商業を中心とするホ
ンネ型、道教型の社会であり、西から来て殷を滅ぼした周の文化
が、遊牧をベースとした羊を大事にする社会で、タテマエ型、儒教
型の社会である、ということから来ている。周に滅ぼされた後も、
殷人は各地に散って商業を営んだ。それで中国にはこの両者の文化
が混交している。この話が非常に説得力があるのは、貝を含む漢字
と羊を含む漢字とを並べて見せるところにある。

買，賣，貿，購，財，費，貢，貨，貧，販，貴，貯，資，
賃，・・・

美，議，義，善，祥，養，儀，羨，・・・

前者は多神教，後者は天を至高とする一神教だという。

この話に始まって，各章で異なる話題，たとえば人口の変化，士大夫の役割，ヒーロー，地政学，支那という名称，など実に様々なものを取り上げて，とくに日本，日本人と比較しながら，あえて断定的でわかりやすい表現を取って，目からウロコを落とさせるのである．しかも，中国学者に比較的多い妙に右翼的な位置取りではなく，かといって中国讃美でもなく，ほどよく中庸な視点からものを見ているのがよい。

半藤一利「日本海軍の興亡 戦いに生きた男たちのドラマ」 (PHP文庫)

芳永の義父は学徒出陣で海軍に行き，下士官として駆逐艦宵月に乗っていた．大和について沖縄に行くはずが，宵月が不具合により引き返したため生き残った．戦死していれば孝子は生まれなかった．

日渡の祖父は横須賀で医院を開業していたが，その場所は現米軍基地のゲート近くだという．場所柄，日本海軍の若手将校たちの出入りがあったらしい．海軍の軍人がよく使う料亭「小松」のことは，おふくろもよく話していたし，芳永の義父も行ったことがあるらし

い。横須賀の日渡医院は戦時中に海軍に接收されて、祖父は逗子に移り開業した。

この本は4章構成になっていて、それぞれ別の場所で発表されたものが集められている。第1章は日本海軍の歴史を勝海舟、山本権兵衛、から山本五十六、南雲忠一まで、人を中心にたどる。とくに山本権兵衛と加藤友三郎には多くのページが割かれている。

第2章は日本海海戦の話である。司馬の「坂の上の雲」では、ロシア第二艦隊が対馬に来るか津軽に来るかという大問題に対し、東郷平八郎が「それは対馬海峡よ」と言い切ったとされているが、これは事実と違うという話がとくに面白い。対馬と思って待っていたのがあまりに遅いので、大勢は津軽とみて北上すべきだということになり、東郷によってその決断が下されたが、第二艦隊参謀長藤井較一大佐が、ただ一人断固として異を唱え、それが徐々に認められていったという。しかも戦後、藤井はその手柄を人に語らず、東郷は神格化されていった。しかし、藤井は、その前の日清戦争の頃から、いく度も危機を救う判断と果敢な行動をした闘将だという。

第3章は昭和海軍の戦争に至る動きを描く。そこでは

「（三国同盟への画策に）対米英協調路線を堅持しようとする海軍首脳がはげしく抵抗するであろうこと」(p.195)

というのがこれまでの昭和史の定説であって、

「陸軍はもちろん、外務省内にも親ドイツのグループが次第に勢力

をのぼし、勢いそうした“時代の流れ”に真正面から立ち塞がったのが日本海軍、という構図」(p.195)

であった。それに対し、海軍大臣米内光政大将、次官山本五十六中将、軍務局井上成美少将のトリオは確かに反対し続けたが、海軍内にも反英米派が大きく勢力を占めるようになっていたという。

4章は、二次大戦の機動部隊の戦いを述べる。真珠湾、ミッドウェイ、ラバウル、レイテ、それらを政略そして戦略が誤っていれば、いくら戦術に成功しても戦争に勝てないという歴史認識に立ちながら、あえて戦術を中心に、しかし広い視野のもとで叙述している。本全体としてのまとまりは欠け、ずさんな感じもあるが、しかし面白い本であった。

石川淳「森鷗外」（ちくま学芸文庫）

大文章家の石川淳が大大文章家の森鷗外について書いているのだから、面白くないはずがない。

石川は鷗外に敬服しているが、一方的に敬うだけでなくときに舌鋒鋭く批判する。その第一は、「古い手帳から」に見られる社会主義共産主義への単純な嫌悪からくる粗雑な議論に対して向けられる。この項の最後に次のような注が括弧書きでついているのが面白い。

「（この項を読んで下すったであろう読者におことわりする。鷗外の没年は大正十一年である。したがって、この項の叙述もまた大正

十一年以前のことに係る。今日から見れば、もちろん天下の形勢はまったくちがう。どうか諸君みずから少年の日を回顧するような甘美な気持で、童話の世界をさかのぼったのだと思ってください。わたしは古語辞典を編纂しているのではないのだから主義だの思想だのという死んだことばに――注釈は附けない。まさか今時分そんな空虚なことばを頭痛に病むひともいないであろう。昭和十六年十一月記。）」

実際、本書が上梓されたのは昭和十六年十二月、太平洋戦争の始まったときである。その時点で、読みようによっては社会主義共産主義を擁護しているようにもとれる文章を発表しているのはしたたかだ。上の注記は、あるいはそのように読まれることを懸念しての予防線なのかもしれない。

石川は昭和十三年に発表した「マルスの歌」で発禁処分にあっているから、なおさらである。ついでに「マルスの歌」を読み直してみたが、さすがにこの作品の強い反軍国主義のメッセージは、発禁となっても不思議ではないと改めて思った。

その点でつくづく感心するのは、戦後になって再出版された「森鷗外」に対して、戦後の時点から見た別の意味での注記が不要なことである。

鷗外批判の二点目は「大塩平八郎」である。この批判の趣旨も、「古い手帳から」に近い。

「平八郎の思想は未だ覚醒せざる社会主義である。」

「平八郎は極言すれば米屋こはしの雄である」

と鷗外が切り捨てているところを強く批判する。その石川の立場は、「古い手帳から」についての批判と見事に一致している。

結局、石川が称賛するのは「拙斎」「蘭軒」「霞亭」の三部作である。「雁」は児童戯に類し、「山椒大夫」は俗臭芬芳たる駄作だという。

「拙斎」に大感激した自分としては文句ないが、「蘭軒」と「霞亭」には手を出していないので、大きなことは言えない。霞亭は鷗外自身が書き進めているうちに大した人物ではないことに気づいたという不幸な作品だという世評を以前何かで読んでいたので、余計読む気をなくしていたが、その事情は本書にも書いてある。

石川のこの本で、鮮やかな描写があるのは、石川が中学生のときに市電で鷗外を見たことがあり、それが石川が鷗外を見た唯一の機会だったという個人体験を語ったところである（「諸国物語」p.131-134）。そのときすでに石川は「即興詩人」のところどころを暗誦し、「諸国物語」に感激していたという。

長谷川真理子「生き物をめぐる4つの『なぜ』」(集英社新書)

構成が明快な本である。表題の「4つのなぜ」とは、オランダの動物行動学者ニコ・ティンバーゲンが言ったことだそうで、動物の行

動につき

- 1) それが引き起こされている直接の要因は何か（至近要因）
 - 2) それはどんな機能があるから進化したのか（究極要因）
 - 3) それは動物の個体の一生の間に、どのような発達をたどって完成されるのか（発達要因）
 - 4) それはその動物の進化の過程で、その祖先型からどのような道筋をたどって出現してきたのか（系統進化要因）
- という疑問だという。

確かに物理や化学では1)に相当する「なぜ」しか扱わないが、生物は2)とそれに関連した3)4)を問うところが特徴であり、また戸惑うところでもある。で、「雄と雌」「鳥のさえずり」「鳥の渡り」「光る動物」「親による子の世話」「角と牙」「人間の道徳性」という7つの行動・現象について、この4つのなぜに答えるというのが本書の構成である。

どのテーマについても4つのなぜについて完全な答えが見つからないわけではない。解明の状況は、テーマによりまた4要因により濃淡があるので、本書の記述もそれに応じて粗密がある。雌雄の問題は同じ長谷川の講談社現代新書で、子の世話の話は J.ダイヤモンドの本などで、道徳の話は Matt Ridley の本などで、ある程度の知識はあったが、このような構図で説明されると新鮮だ。

野崎昭弘「不完全性定理 数学的体系のあゆみ」（ちくま学芸文庫）

Hofstadter の “A Strange Loop” を読んでいるが、ハードカバーの本なので、持ち歩いて読むことが少なく進みが遅い。それで内容的に関連が深いこの文庫本を並行して読んで、先に読み終わった。最近、ちくま学芸文庫はこの手の理数系の本を採録し始めているようだ。

1章から3章まではギリシアの数学以来の前史である。中国や日本で、なぜこのような数学、論理学が生まれなかったのかという話題はよくあるが、第1章のタイトル「ギリシアの奇跡」が示すように、このような体系がギリシアに生まれことの方が奇跡的なものかもしれない。

4章は形式論理学の説明で、かなりがんばって易しくしながらもごまかさずに書いている。5章がヒルベルトの超数学で6章がハイライトとしてのゲーデルの話である。不完全性定理は知っているようでいて、やはり概説的なものを何度か読んでいただけなので、このような解説でも改めて分かった気になる。ここも野崎さんは結構がんばって書いている。Hofstadter より突っ込んでいる。

これは1996年に単行本として出たものを文庫にしているのだが、読みやすくする工夫の「コラム」が、文庫という小さい版型ではかえってわずらわしく、本文と錯綜して分りにくくしているきらいがある。そのコラムが19もある。

伊藤宗行「「数」の日本史」（日経ビジネス文庫）

定年で引退した大学教授が、自分の直接の専門分野ではないが、関連する領域で多くの文献を調べ上げて書いた、というタイプの典型的な作品らしい。著者は物性物理が専門で、元阪大教授。日本物理学会会長などの経歴を持つ。

原著は2002年に、やはり日経から単行本として出されていて、今度、日経ビジネス文庫というちょっと系統が違いそうな文庫に入った。

話は縄文尺から始まり、明治以降の洋算から現代の数学教育に至る。三内丸山の遺跡を見ると、基準となる尺を用いてきちんとした測量、設計がなされたことが分かるばかりか、数の数え方は12進法だったのではないかと想像されるという。弥生時代を経て紀元後8世紀ぐらいまで、大陸の数文化が到来し、間接的にはインド数学の影響も入り、律令国家の基礎となる土地の計測、税務、暦法を支えた。

ところが平安になって、現在の日本と並行するような「理数科離れ」が起こっているというのが面白い。学問への尊敬心は薄れ、ましてほとんど学問とは見られていなかった算学は、いやしい仕事とされた。それが鎌倉時代となって実務的な方向に風向きが変わる。

5章では吉田光由の塵劫記が詳しく紹介され、6章では関孝和を頂点とする和算が詳しく語られる。和算は閉じた環境の中で特殊ながら

高度に発展した。しかし、科学的客観性、普遍妥当性を欠いた、というのが著者の評価である。

最後に現在の学習指導要領に基づく教育への批判と問題提起がなされるが、説得力がある。

奥本大三郎「虫の宇宙誌」（集英社文庫）

前からファールブル昆虫記を読まなければと思って果たしていない。抄訳は読んだことがある。奥本大三郎による完訳版がやはり集英社から出始めていて、今読むならこれかとも思うが、まだ買ってもない。

この本はずいぶん前に買ったが、ふと思い立って読んでみた。最初から面白い話が次々と出てきて、読みながら思わず声を出して笑ってしまったことも一度や二度ではない。たとえば

「実際、「蒐集」という言葉は、女には解らないものの一つである。女は宝石を集めたがるが、もし宝石からシンボリックな力や経済的な実力をとり去ってしまったら、大半の女は集めたものを子供にやってしまうだろう。一男の児に」(p.33)

次は引用だが

「彼の藤村氏の「椰子の実」にしても、私の好きな唄ではあるが、
大中寅二の曲で云へば二番にあたる、
舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影やなせる

と云ふところなぞはどうか訂正して貰い度いものである。「椰子の枝」なぞというふものは、一体何処を指してそう呼ぶのであるか。大家にして既にこう云ふ植物学以前の過を犯すのであるから他は推して知るべしである。」(p.89) (財津理一郎「蟲のみどころ」より)

次もまた引用だがギリシアの風刺詩人クセナルコスの断片ということで

「蟬は幸いなるかな、その妻は鳴かざればなり」(p.165)

もっと面白いところもあったと思うが、これだけでも本書の引用の多用と女性観という特徴が図らずも出ているといえよう。

引用は多いが、その引用が魅力的である。とくに感心したのが「昆虫図鑑の文体について」(一、二)で、奥本は子供時代に枕頭の書とした平山修次郎「原色千種昆蟲圖譜」の漢文系の簡潔な文体に魅了され、横山光夫「原色日本蝶類図鑑」の抒情的でやや感傷的な文章にも魅かれていたのが、戦後の図鑑は科学的無味乾燥な文体になっているという。その対比が実に面白い。

台湾で動物、地理、民族学とあらゆる分野で大きな足跡を残し、登山家、探検家として活躍した鹿野忠雄という人物のことも、この本を読まなければ知らなかっただろうが、その鹿野が残した文章をふんだんに引用した「サ라마オのモンシロチョウ」も見事な章である。

もう一つの特徴として挙げるのは著者には心外かもしれないが、女性をやや揶揄するような話が多いように思える、本書が最初に出版されたのは1981年らしいが、今だったら多少はジェンダー論をはばかってこんな調子では書かないのではないか、という感想が浮かぶ。

僕は昆虫少年ではなかった。幼稚園の頃だったか、家で昆虫採集の道具一式を買ってもらって、セミや蝶の標本のようなものを作ったことはあったが、それ以来のめり込んだことはない。しかし、本書で分かったが、戦前から日本の家庭では、男の子の教育用に昆虫採集の道具をそろえるということは、かなり広く行われていたらしい。これはどうも外国（中国やヨーロッパ）ではあまりないことのようにだ。

福岡伸一「生物と無生物のあいだ」（講談社現代新書）

この本はベストセラーになっているらしい。新聞の広告によると15万部を突破ということである。この本がそれほど売れるというのは結構なことだと思う。日本の読者層の水準の高さを感じる。

確かにこのような分野の研究者にしては筆が立つ。適度に自己の回想や生物分子学の歴史的な逸話を交えるところがうまい。それでいて、生物を無生物と区分するものとして、自己複製の機能だけでなく、「動的平衡」を保持する能力があるというメッセージをはっきりし出している。そしてその動的平衡論が、臍臓細胞の消化酵素分

泌に関連するあるタンパク質についての自らの研究に即して語られる。そのところが科学ライターが書く解説ものと違うよさである。しかもその説明は手際よく、ある程度の細部も語りながら退屈させない技術がある。

個人的な回想を一見文学的に綴りながら、主題から逸脱しないで感興を与える文章の一番よい例は、「エピローグ」だろう。そこでは少年時代に練馬から松戸に引っ越した思い出が語られる。これを読むだけでも福岡という著者の並々ならぬ才能が感じられる。

奥本大三郎「博物学の巨人アンリ・ファール」(集英社新書)

こんな本も前に買っていたことに気がついた。奥本が敬愛するファールの一生を語っている。そのファールは今ではフランスの地元でもあまり知られていないというのがまず驚きである。アンデルセンの「即興詩人」が故国で知られていないほどではないだろうが。

日本ではファールの昆虫記は大正時代から読まれていたという。最初の訳者が大杉栄だというのにびっくりした。

奥本というのは不思議な人である。これだけ虫にのめり込んでいるが、仏文学を専攻し埼玉大学で語学を教えているらしい。しかし、書いているのは虫のことばかりである。ファールには傾倒してい

るようで、「昆虫記」の翻訳やファールブルの伝記的研究に、フランス語、フランス文学の知識は活かされているのだろう。

ファールブルの一生は、子ども時代に読む偉人伝にまさにふさわしい。貧しさの中に生まれ育ち、少年時代の苦労は辛酸をきわめ、それでも向学心を失わず、自らの人生を切り開いていく。不屈の精神と独創性で、大きな業績を残す。一方で、ファールブルの資質を受け継いで虫や自然を愛し、また優れた才能の萌芽を見せていた次男を病気で失うなどの悲劇にも見舞われる。

ファールブル自身は91歳まで生きた。きわめて丈夫だったらしい。61歳のときに妻を失い、2年後に23歳の家政婦と結婚して、それから3人の子供が生まれたというのもまた驚きである。

ファールブルはダーウィンと交流があり、互いに尊敬していたというのも知らなかった。ただファールブルはダーウィニズムには反対だったらしい。さらに、ジョン・スチュアート・ミルとも親しく、ファールブルがアヴィニョンを去らざるをえなくなり、引っ越し費用もない窮状に陥ったとき、ミルは3000フランの金を、借用証書もとらずに貸したという。

新書という小さな本ながら、叙述に工夫の凝らされたよい伝記である。

坂村健「ユビキタスとは何かー情報・技術・人間」（岩波新書）

坂村は精力的に本を出す。そしてそれを必ず送ってくれる。送ってもらったものをみな読むわけではないが、これは岩波新書でページ数も少ないし、しっかり編集されているはずだと、通読してみた。そして通読するに値する本であったと思う。

坂村によるユビキタス・コンピューティングの基本は、uコードとuIDアーキテクチャである。uコードは128ビットのコードで、ユビキタスIDセンターというNPO組織が一元的に発行する。この組織は全世界の500団体から構成されているという。uコードはバーコードと違い、そのビット構成の意味が固定化されていない。また、uコードのライバルである米国ウォルマートが中心のEPCグローバルのコードと比べても、EPCが商品バーコードの管理団体の下部組織であることから、メーカー・コードがその中に含まれ、コードを発行できるのがメーカーに限定される、という制約があるのに対し、uコードは意味づけが自由であり誰でも発行できる点が違う、と坂村は強調する。

uコードはRFIDの電子タグに入れられ、それを端末（ユビキタス・コミュニケーター、UC）などで読み取ることが想定されている。読み取られたコードから、それにリンクされている情報をインターネットから得ることで、さまざまな応用が展開できる、というのがuIDアーキテクチャということらしい。そして坂村が運営しているYRPを中心に多くの企業が集まって、このアーキテクチャに基づくさまざまな実用化実験が行われている。

確かにこれは、道路網やインターネットのようなインフラストラクチャを作ることである。そこでのイノベーション上のネックは、技術よりもむしろ制度だ、というのが本書の重要な主張である。このプロジェクトを2000年から始めて進めてきた経験に基づく実感だろう。その関連で、日本の国家プロジェクトでは大きな目標が設定されず、具体的な実現目標からスタートするところに問題があると主張する。たとえば、「電子的に、おじいちゃんに孫のカラー写真を一瞬で送れるような社会を作りたい」というような目標を掲げて、インターネットのようなものは生まれず、カラーファックスでよいことになる、というのは説得力がある。それでe-Japan構想では、「世界一のブロードバンドの普及率達成」という具体的な目標だけがひたすら追求され、IPv6という普通の人には誰もわからないようなものの実現が求められたというところに、歪みがあるという。

とにかく、坂村がどういうことを目指しているかがよく分ったし、それがまたきわめて困難なものであることもつくづく感じさせられた。

Douglas Hofstadter, "I am a Strange Loop," Basic Books

ずいぶん前に読み始めたが、8月に入ってから腰を据えて読むことにし8月下旬に読み終えた。「夏の読書」ということになるだろうか。

“Gödel, Escher, Bach”が出たのは1979年である。そのとき、Hofstadter は34歳であった。30年近くの時が流れ、彼もすでに60歳を超えている。テーマは実はGEBの延長なのだが、GEBの読者には十分受け止めてもらえなかったものだという。僕は読者として「ひとの意識というものはシステムである」という主張がGEBにあったことはよく記憶している。本書はこの主張を執拗に追及するものである。ただし、ここではシステムという言葉は使われない。同じ意味で、脳内の原子分子レベルの物理現象、あるいはその上の脳細胞・シナプスレベルの電氣的・化学的反応から、抽象化されたマクロレベルの概念や意味を扱う世界との階層構造を考え、「意識」はその上位構造のパターンとその動作そのものだという。

だから、現在の脳研究からは意識についての解明は生まれない。また、日本では茂木健一郎あたりが流行させている「クオリア」という概念など無意味であるともいう。

意識を生む上位構造で本質的なものが、自己言及のループである。それがタイトルの意味するところである。そしてラッセル・ホワイトヘッドのPM (Principia Mathematica) の形式システムに、ゲーデルが自己言及の仕組みを埋め込んで作ったループが、その本質をよく表すものとしてこの本でも重要な位置づけを与えられる。しかし、ゲーデル理論の紹介は平易さを最優先するために、多くのページが割かれるものの肝心なところが一般読者には伝わらないのではないか、という感じも与える。

意識はこのようなものだから、大きな意識と小さな意識というような相対的な差があるという。胎児には意識のもととなる機構はあるが、意識そのものはほとんどない。幼児には意識が少しできてくる。それが成長とともに膨らむ。アルツハイマーになればそれが縮む。この見方を延ばせば、犬はどうか、馬はどうか、アリはどうか、ロボットはどうか、という議論が可能で、どの段階から意識と呼べるかについてはっきりした境界線はないが、「奇妙なループ」が存在するかどうかはその境目だというのである。

大事な点はこれが二元論ではないことである。下位の物理的なレベルの上に、上位構造が成立しているので、不可思議な精神、霊のようなものが物質と別に存在しているわけではない。ただ、上位の意識のレベルはその下位レベルに関知しないだけである。すなわち Hofstadter の立場は還元主義であり、その点でも共感できる。

必ずしも共感できないのは、意識がこのようなもので、脳はその意識を育てる入れ物だから、一つの意識が複数の脳に分散して存在する、という主張である。この考え方には、妻 Carol の突然の死がからんでいる。1993年の12月に Carol は43歳で亡くなった。そのとき、二人の子供 Danny と Monica はそれぞれ5歳と2歳だった。Carol は死んだが、その考え方、子どもへの感情、趣味、などは Doug の脳の中に、不完全ながら共有されているという。他の家族、周囲の人々にも同じように少しずつ分散されている。つまり一つの脳に一つの意識とは限らないというのである。その延長で、「自己」とい

う概念は便宜上作られたフィクショナルなものである，とまで言う．

それに関連して哲学者 Derek Parfit による思考実験が紹介される．仕組みは “The Mind’s I” に Daniel Dennett が書いていたのと同じで，遠隔運搬装置が人の細胞のすべての情報をスキャンして火星に通信して正確に送る．情報は送るが肉体は運ばない．火星ではその情報に基づいて，新しい材料でその肉体を正確に再現する．もちろん脳の細胞もその詳細な状態に至るまですべて再構成される．したがって，その人間が地球にいたときと連続した意識を持つ．このとき，第一実験では，地球でスキャンされた細胞は破壊されるが，第二実験では破壊されずそのまま残る．この地球と火星の2つの意識はどうなるのか．さらに Hofstadter は第三のケースを考え，地球の細胞は破壊されるが，スキャンされた情報は同時に火星と木星に送られ，それぞれで復元される．そのとき，意識はどうなるのか．

Hofstadter はこれを，意識が一つの脳に閉じ込められないという考察の根拠として取り上げているようだが，僕に言わせれば，第二実験でも第三実験でも，2つの意識が同時に，しかし別々に存在するようになり，どちらも出発時点では同じ経験・記憶に基づいた同じ思考様式をもっているが，その後の経験で異なる道を歩むことになると思う．互いが相手の存在を知ることになっても，それは別の個体，それぞれの自己をもった存在として認識することになるだろう．

この意識の分散の議論の中で、Hofstadter が言及してもよさそうなのに不思議と触れないのは多重人格のケースである。多重人格者は一つの脳に複数の意識、自己が存在するのだとすれば、Hofstadter の主張の一つの根拠になりそうだが、おそらく意図的にそれについては議論していない。

本書のテーマはほぼ以上に尽つきるが、全体は400ページに達する。やはり米国人の著作らしく説明が懇切丁寧なこともあるが、内容も同じテーマを変奏しながら長大に繰り返す、という形を取っている。GEBのような華やかさ、溢れ出る才気、多様な形式による演出、という面には欠ける。その「地味さ」に年輪を感じるともいえる。

その思想はキリスト教的世界観とは対立するものといえるが、宗教についての言及は少なく、わずかにエピローグで多少触れられている程度である。一方で、意識（=魂）には大きさがあり、人間以外にも多少の意識がありうるという思想は、むしろ仏教に近いかもしれない。仏教についてはほとんどまったく触れられていないが（Taoism と Zen がちょっと出てくる程度）、Hofstadter 自身は動物を殺すことに反対する意図から菜食主義に転向したという。それと同じような意味で、シュバイツアーの博愛の精神に傾倒し、シュバイツアーが弾くバッハのオルガンのレコードを愛聴する。それを聴いていたとき、部屋にバッタが入ってきた。そのバッタをお椀とレコードのジャケットを使って捕らえ、外に放してやる。次にアリが

来たので同じように外に逃がしてやる。このような行為はシュバイツアーの博愛の精神に合うものだという。最後に、蚊が来たが、これは容赦なく叩き潰す。蚊は「吸血ミサイル」だという。このあたりは、ちょっと仏教の精神とは違うように感じて印象に残った。

諏訪哲史「アサッテの人」(芥川賞)

芥川賞には珍しく、実験的な作品である。冒頭に語り手が過去に書いた小説の書き出しが置かれるが、その始まりですぐに

「バスはのろのろと寝ぼけたように進んでいった。と、書いたところで不意にポンパときた。(中略)こんなのっけからポンパとこられたのではこのまま小説を続ける気も失せるというもの」

と小説を書いている自分を見ている自分が登場する。

それで「アサッテの人」である叔父について語るというプランが示されるが、

「この「アサッテ」が性質上あらゆる「作為」を拒むものであるからには」

として、叔父さんの亡くなった奥さんの生前に、語り手が叔父さんを材料にした小説を書くために行った奥さんに対しての聞き書きや、叔父さんが残した日記の抜粋を並べる、という趣向で、作為のない小説という虚構を作為の限りを尽くして組み立てている。

しかし実験的と言っても前衛的でちんぷんかんぷんというのではまったくなく、文章はまともで、おかしみがふんだんにある。

面白いのは、4人の女性の選考委員、小川洋子、川上弘美、高樹のぶ子、山田詠美がすべてベタ褒めであること。対照的に、青山七恵の「ひとり日和」を激賞した石原慎太郎と村上龍はそろってけなししている。やはり石原や村上は才気走ったものには嫉妬があるのか。山田詠美が「ひとり日和」を退屈だと評したが、村上がこの「アサッテの人」を「退屈だ」と同じ表現で評しているのは、意図的だろう。

この小説と Hofstadter の本とはおよそ遠い世界のようなのだが、並行して読んだせいか妙な関連性を感じた。まず若くして奥さんを亡くすという共通する事件がある。さらにこの小説からの次のような引用はどうだろうか。

「「記述されたアサッテそれ自体を条件反射的に定型化し、それが更なるアサッテを生む」という隙間のない循環が姿を現したのである。」

「事故以来、朋子話す言葉のすべては、僕の内部の言葉に等しくなった。」

まさか諏訪が Hofstadter を読んでいることはないだろうが、この符合にはびっくりするし、このような発見こそ読書の醍醐味という感じもする。

中島岳志「パール判事―東京裁判批判と絶対平和主義」（白水社）

8月は新聞もテレビも終戦特集を組む。その一つとして、NHKが放送したパール判事のドキュメンタリ番組を見た。それと合わせるようにこの本が出たので、買ってわりとすぐに読んだ。中島岳志は「中村屋のボーズ」で大佛次郎論壇賞を受賞しているが、そちらもまだ買っていなかったので一緒に買った。

本書はパール判事の生涯を描いている。もちろん中心は東京裁判であり、そのときのパールの取った行動と思想である。中村は膨大なパール判決書を丁寧に読み解き、その考え方を詳しく紹介する。

A級戦犯の罪状としては「平和に対する罪」「人道に対する罪」と「通例の戦争犯罪」の3つがあるが、はじめの2つについては罪刑法定主義の原則から無罪だとする。通常の戦争犯罪、たとえば南京虐殺やバターン死の行進などについては、道義的責任はあるが、それらはBC級戦犯のレベルの犯罪であり、A級戦犯の被告には、国際法の立場から直接責任を問えないとする。

本書の初めの方では、パールの基本的な精神を形成した前半生が語られる。パールはベンガル地方の小さな農村に生まれた。カーストの地位は低く、経済的にも貧しかった。さらにパールが3歳のときに父親が死亡し、その生活は辛酸をきわめる。しかし、本人の努力と、援助者の出現などで大学にまで進み、優秀な成績を修める。またまた読書上の巡り合わせということになるが、この生い立ちはファブルのそれときわめてよく似ている。しかも、パールがカルカ

ツタ大学で得たのは数学の修士号で、それを生かした職に就いた後に法学に関心を抱いて勉強し、法律家になったというところまで似ている。ファールも苦労して入った大学で得た学士号は数学と物理であった。そして高校の物理の教師になった後も、数学の勉強を続けていたのである。

東京裁判の後の、3度の日本訪問を中心とした後半生もかなり詳しく書かれている。パールは日本に来ては、絶対平和主義と米国からの支配への抵抗を説いた。

本書の強いメッセージは、パール判決書を日本無罪論として利用する者たちへの警告である。たとえばパール判決書をベースに「日本無罪論」を書いた田中正明は、東京裁判の対象となる戦争は、1937年7月7日の盧溝橋事件をもって開始された敵対行為を含むものであるとパールが書いているのを、1941年12月7日以降のものと、意図的に改竄しているという。あるいは南京虐殺について

「残虐行為は日本軍がその占領したある地域の一般民衆、はたまた、戦時俘虜にたいして犯したものであるという証拠は、圧倒的である」

と言い、その他20か所の地域における日本軍による残虐行為を

「主張された残虐行為の鬼畜のような性格は否定しえない」

とパールは書いているが、パールをたびたび登場させている小林よしのりの「戦争論」では、これらはまったく無視されているという。しかし、パールが日本の右派人脈と交流があり、A級戦犯の生

き残りや遺族とも親交があったことは事実である。パールの反植民地主義への強い思い入れから、日本が戦争を起こしたことについて、ある程度の理解を示しそれを表現している部分があることも確かなようだ。

終章で、パールの長男プロサント・パールが1998年に日本で上映された「プライドー運命の瞬間」という映画について、憤っているというインドの新聞記事が紹介される。この映画はパール判事とその判決がメインの映画を作りたいという企画で、日本の映画関係者からプロサントのところに相談が持ち込まれた。しかし、できた映画は東条英機の生涯が中心で、東条を肯定するものだったという。ところがこの8月にインドを訪問した安倍首相は、この長男プロサント・パールにわざわざ面会している。安倍の意図は何だったのか。プロサントはどのような気持ちだったのだろうか。

福岡伸一「プリオン説はほんとうか？ タンパク質病原体説をめぐるミステリー」（講談社ブルーバックス）

「生物と無生物のあいだ」で有名になった福岡の出世作である。この本は2006年度に講談社出版文化賞科学出版賞を受賞している。しかし、先端ではあっても主流・定説となっている科学のトピックを啓蒙的に解説するブルーバックスの1冊としては、異例な本ではないだろうか。

ノーベル賞も取ってその意味では学界から定説と認められている、BSEなどのスポンジ状脳症の病原体がプリオンであるとするスタンリー・プルシナーの説に、福岡は真っ向から異を唱える。本書の前半ではプリオン説が有力な理由を多く並べ挙げる。さすがに定説化しているだけあって説得力があるし、また本書の構成としてはこの部分ではいかにプリオン説がもっともらしいかを強調して、後半の反論を際立たせるという効果も狙っている。

同時に、プリオン説を言い出したプルシナーが、いかに一般受けを狙って学術誌に論文が載る前に新聞の一面を飾るように工作したか、「プリオン」というネーミングをいかに宣伝したか、ノーベル賞を狙って画策しそれをいかに首尾よく手に入れたかを述べ、「ミステリー」仕立ての「犯人」のイメージを作り上げている。とくに効果的なのはp.84にあるプルシナーのノーベル賞受賞時の写真で、いかにも淒味のあるワル、というイメージを与える。

後半でプリオン説の弱点を突き、ウィルス説の蓋然性を詳説する。ウィルス説の一番の弱点は、肝心のウィルスの正体、それを構成する核酸が見つかっていないことだが、同じく決定力を欠くプリオン説と比べて少なくとも同程度の説明力があると言う。福岡自身がこの立場で研究をしていて、ウィルス説を探究するためにどのような方法を取ったかを述べ、しかし結果としては決定的な証拠が掴めなかった状況も語られる。つまり、一線の研究者が自身の研究の現場を紹介しているので、それが本書の強みである。

「生物と無生物のあいだ」のように、種々のエピソードを交える読者サービスはしていないし、文学的な表現に凝ることもない。逆にグラフや図を多用して、かなり専門的な内容も恐れず、しかしうまく説明する。米国産の牛肉の輸入制限問題について、僕は日本の措置は国内の畜産農家の保護という政治的な理由に基づくもので、危険な部位を除けば月齢20カ月未満の若い牛だけでなく成牛もとくに問題はないというアメリカの主張の方が科学的ではないかと思っていた。福岡の説によれば、

「いわゆる特定危険部位（脳、脊髄、扁桃腺、回腸）さえ除去すれば、あとの部分は食用にしても安全であるという考え方は論理的でない」(p.132)

ので安易に輸入を再開すべきではないという。これはやや意外だった。

僕は1986年にB型肝炎と診断された。そのときは、さらに非A非B型のウィルスも持っているという話はなかった。それが1991年に担当医師が教授から若い講師に変わったら、B型よりもC型肝炎の方が問題だと初めて明確に言われた。教授がC型ということに気づいたのもその時点で最近のことだったが、教授はそちらの方は抗体があつて（後から見ればこれは間違い）とくに問題ないというような判断だった。しかし、その若い医師がインターフェロン治療を試す価値があるといい、最終的にはそれが成功した。そのC型ウィルスの正体が1989年にマイケル・ホートンによって明らかにされたものであることを初めて知った。その追求が砂浜から砂金の一粒を見つける

ような大変な作業であったことを知ったのも、本書で得た興味深い知識である。

「日本の文学2 森鷗外（一）」（中央公論社）

このところ森まゆみや石川淳が鷗外について書いたものを読んだので、鷗外が書いたものを読みたくなった。引っ張り出してきたのは中央公論社の昔の文学全集「日本の文学」で、この巻には「舞姫」から「なかじきり」まで25篇の作品が収められている。その題名を並べてみると、

「舞姫」「うたかたの記」「文づかい」「半日」「追灘」「魔睡」
「冪タ・セクスアリス」「鶏」「金貨」「青年」「ル・パルナス・アンビュラン」「普請中」「花子」「あそび」「妄想」「鴈」「百物語」「不思議な鏡」「藤棚」「羽鳥千尋」「余興」「予が立場」
「歴史そのままと歴史離れ」「空車」「なかじきり」

このうち、中篇は「冪タ・セクスアリス」「青年」「鴈」の3篇で、後はすべて短篇である。歴史小説・史伝の類はみな「森鷗外（二）」に収録されていて、この巻の舞台は明治の終わりから大正にかけての「現代」に統一されている。

「日本の文学」シリーズは自分が高校生のころに出始めたと思うが、この本は1966年に初版が出ている。僕が大学に入学する年だ。昔、読んだ記憶があるのは「舞姫」「冪タ・セクスアリス」「鴈」だけで、他は読んだとしてもすっかり忘れている。しかし、18、19歳の頃に読んでも、つまらなかったのではないか。それが今読むと

面白い。これらの小説とも言い難い作品群を楽しむには、やはり森まゆみや石川などから得た鷗外の生活や思想についての知識が、不可欠とは言わないまでも、有効なものであるのは疑いない。

三島由紀夫が解説を書いている。「森鷗外と何か？」という問いから始める。明治以来、鷗外は山の手知識階級の知的アイドルであったのが、戦後20年経って、戦前の「漱石はわかりやすいから通俗、鷗外はより高級」という固定観念がなくなった今、改めて森鷗外とは何か、と問う。そしてそれに対する自らの答えを

「鷗外は、あらゆる伝説と、プチ・ブルジョアの盲目的崇拜を失った今、言語の芸術家として真に復活すべき人なのだ。言文一致の創生期にかくまで完璧で典雅な現代日本語を創り上げてしまったその天才を称揚すべきなのだ。どんな時代になろうと、文学が、気品乃至品格という点から評価されるべきなら、鷗外はおそらく近代一の気品の高い芸術家であり、その作品には、量的には大作はないが、その集積は、純良な檜のみで築かれた建築のように、一つの建築的成果なのだ。」(p.535)

とする。そうかもしれない。

「半日」だけ先に読んで、その感想は「鷗外の坂」のところで書いた。これが最初の口語体の小説だという。妻しげが昭和26年まで再発表を許さなかったと三島が書いているが、さもありなんと思う。三島は

「この「奥さん」のような、猛烈さと非妥協性は、戦後の女性解放

の世の中でさえめったに見られぬもので」

と言うが、三島がそう書いたときから40年経つ今でも、やはり同じ感想が浮かぶ。アメリカ映画を見ると、猛烈に口喧嘩をする場面があまりに多いのでいつも驚くが、この「奥さん」はそういうアメリカ映画に出てくる女性に近い。三島はさらに

「不透明で硬質な心の持ち主である女性と、まるで象牙のコマを鉢合わせさせたように同居していて、家庭とは呼べないし冷え冷えとした生活を営んでいたところに、日本の近代というもののふしぎな姿が現われている。(中略)「半日」の世界は、どんな自然主義の貧乏物語よりも、私には凄愴苛烈なものに思われる。」

と書くのだが、これはどうだろうか。「半日」にはむしろ滑稽小説のようなおかしみ、軽みがある。その点で鴎外は「奥さん」を、案外温かい目で見えていたのではないか、という気がする。

「鴈」はやはり傑作だ。石川が「児戯に類する」というのは、みんなが褒めることへの反発が多分にあるだろう。

中島岳志「中村屋のボースーインド独立運動と近代日本のアジア主義」（白水社）

中島はこの本で大佛次郎論壇賞とアジア・太平洋賞を取ったが、これを書いたのが29歳の時だというのを改めて知った。1975年生まれでまだ若い。

中島はビハーリー・ボースを大阪外語大の卒論テーマとしていて、それ以来20代をボース研究で過ごしたという。大阪外語大といえば

司馬遼太郎が思い出される。司馬は蒙古語専攻で中島はヒンディー語専攻。司馬の世代では陳舜臣がヒンディー語専攻である。

中島がまだ学生であった1998年に、R. B. ボースの娘、哲子に会いに行く。そこで史料を見せてもらい「この史料、すべてお貸ししますので、どうぞお持ちになってください。」と言われ、頭が真っ白になるような感激を味わう。そこで、

「私はこの時、何としてもR. B. ボースの伝記を書かなければならないと強く決意した。私がこの世に生を受けた意味があるとするならば、それはR. B. ボースの生涯を書くことだとさえ思った。」

(p.330)

という。幸せなことである。2000年に、森博達「日本書紀の謎を解く」を読んで、

「なかなかの力作である。しかし、あとがきで、「私はこの本を書くために生れてきた。書き終えての余韻でしょうが、そんな気がします。」と当人に言われると、ちょっと鼻白んでしまう。」

という感想を書きつけたが、森の場合、そう書いたときの年齢は50歳で、それと比べて20代で同じような気持ちを述べる中島の方に初々しさを感じるし、うらやましくもある。

事件だけを追えば、インド時代のハーディング総統爆殺未遂、逃亡、日本亡命、頭山満による神隠し、中村屋での隠遁生活、俊子とのロマンス、「恋と革命の味」のインドカーリー、とメロドラマ仕立てにもなりそうな題材だが、本書はそのような物語を交えながら

も、R. B. ボースのインド独立への思いの中心にある「多一論的宗教観」「アジア解放論」を、ボースの言論活動や頭山満、大川周明、等の日本のアジア主義者との交流を丹念に追って跡づけた学術書という性格を持つ。その中で、1920年代には日本の中国に対する帝国主義的な政策を厳しく批判していたボースが、1930年代にはそれに迎合していく過程も、冷静な目で記述される。

出版順序とは逆に読んだ近作で、パール判事の日本の国家主義的な人脈との交流を知りやや意外な感を受けたが、本書を読むとそのような繋がりは、戦前にボースが精力的に築き上げたネットワークが準備したものだということが分かる。ボースは太平洋戦争の結果もインド独立も知ることなく死に、パールとは入れ違いで面識もなかったようではあるが。

折しも、僕は10月に初めてインドを訪れる。その意味でもよい読書だった。

Robert Goddard, "Out of the Sun"

たまにはミステリを読もう、と思っても新たに買う必要はない。いつ買ったかも忘れたようなペーパーバックが、本棚に転がっている。

この作家のものは初めて読む。だからそもそもどうしてこれを買ったのかもわからない。多分、名前に聞き覚えがあったのと、裏表紙

の新聞の書評を引用した宣伝文句に惹かれて買ったのだろう。1996年に出た本だから、かなり前だ。

職を転々としているしがない60男が主人公である。警官でも探偵でもない。その主人公 Harry Barnett に、息子さんが糖尿病のためのインシュリンの過剰注射で植物人間状態で入院中だという電話が入る。彼に息子はいない。しかし、34年前に人妻と浮気をしたことがある。そこからストーリーはめまぐるしく転回し、ヒーローらしくないヒーローの Harry が活躍する、という話である。

プロットが実にうまい。スピード感のある文章もよい。

堀田善衛「インドで考えたこと」（岩波新書）

初めてインドに行くので、この古い本を引っ張り出して読んでみた。初版は昭和32年に出ている。我が一家がタイから帰った年だ。この本も親父が昭和33年の初めに買った本で、値段は100円だ。

堀田がインドに行ったのは、1956年の晩秋から57年の年初にかけてで、第1回アジア作家会議に出席するためだった。その前年1955年にバンドン会議が開かれ、アジア・アフリカの民族解放運動の盛り上がりがあったという時代潮流を受けた会議である。堀田は日本からのただ一人の参加者だが、書記局員として12月23日からの会議開催の1ヶ月前からデリーに滞在している。

アジア作家会議といっても、それぞれが他の国の文学をほとんど知らない。むしろ、それぞれはヨーロッパの文学についてはるかによく知っているはずである。しかし、会議の精神は反植民地、反帝国主義、反西欧で、そのような皮肉な状況を後ろ向きに捉えるような気分ではないらしい。ただ、インドの地で堀田はやはり日本のことを考え、それは当然西欧から外発的に文明化された日本という位置づけで捉えられる。そして、漱石の

「我々の遣つてゐる事は内発的でない、外発的である。是を一言にして云へば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であると云ふ事に帰着するのである。…併しそれが悪いからお止しなさいと云ふのではない。事実已むを得ない、涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならないと云ふのです。」(p.48)

という文章が何度も引用される。

しかし、会議準備と言いながら、インド内のいろいろなところに出かけている。デリー近郊の農村、デカン高原のオーランガバード、ナーグプル、ハイデラバード、ヒマラヤが見える北の地シムラ、さらにカルカッタ、ボンベイ、そしてエレファンタ、エローラ、アジヤンタの3つの洞窟寺院も訪れている。ずいぶん精力的だし、資金もあったものだ。最初の方に、

「費用については自分自身の用意とともに、先輩作家やいろいろな団体の合力をえたが、そしてそういう合力が可能であるという点にも、実は日本の特質があるということに、私はアジアのいろいろな

作家に会うまで気がつかなかった。」(p.4)
と書いているが、

ちょっと意外だったのは、日本のことを
「日本の電気，ネオンサイン，すさまじい消費．ああいうすさまじい消費にふけっている都会」(p.59)

という風に描いていることである．今の感覚では，1956年頃の日本はまだまだ貧しかったはずだという思い込みがあるが，高度成長期以前のこの時期に，

「眼のまわるような生産と消費とをなしうる日本民族のエネルギー」(p.60)
という感覚があったのである．

あと，言語の話がある．堀田は英語で何とか作家会議の準備をするグループとコミュニケーションをとった．そして，インドのヒンドゥー語と英語だけではない，おびただしい言語（とそれをしゃべる民族）のことを考える．さらに，中央アジアと西アジアの人たちが，ペルシャ語を共通の言語として会話をすることに驚く．おかしいのは，堀田はフランス語は当然得意なのだろうと思っていたが，
「これ（北ヴェトナムの代表団との話合い）には甚だ難渋した．私のフランス語は，喋るようにはまったく出来ていないからである．仕方がない，蛮勇をふるって冠詞はぜんぶはずしてしまい，女性，男性ぬきの奇々怪々なるフランス語で打合せをした．」(p.117)
というところ．

椎名誠「インドでわしも考えた」（集英社文庫）

椎名がインドに行ったのは1983年である。不思議なことに、本書のどこにも何年の話なのか書いていないが、最初に出版されたのが昭和59年2月だと「解説」の後に記載されており、本文中に雑誌「写楽」の昭和58年6月号というのが登場するので、そう推定できる。堀田がインドへ行った27年後である。

インドに行くに際し、

「...一つの方針をもった。インドに行くにあたってインドの本を読んだり最新情報を聞いたりガイドブックを読んだりするようなことは一切やめよう、ということにした。」

と書いている。しかし、タイトルから明らかなように少なくとも堀田の本は読んでいるはずだ。本文中では堀田の木の字も出てこないが、「インドの男は陰のある目つきをしている」というような表現は、堀田の本から借用したとしか思えない。

で、僕は今度のインド旅行に際し、中途半端に堀田や椎名の手軽な本を読んでみたわけである。ところでなぜ「写楽」の6月号が出てきたかという、そこにヨガの行者の空中浮揚の写真が載っていて、それに感激した椎名がこの旅のテーマをそのような行者を探して空中浮揚するところを目撃する、というように決めたという組み立てになっているのである。これがまた1983年という時代を感じさせる。つまりオーム真理教事件以前の時代である。麻原彰晃の空中

浮揚の写真が出て、あのような悲惨な事件が起こった後であったら、こんな呑気なことは言えなかったろう。

このテーマは実際に狂言回しのように使われ、何人かのヨガの行者と会ったりしているが、もちろん空中浮揚は目撃できない。そして「今度の旅行はとりあえず行くべき都市だけ決めておいてあとは現地でなるようになるまま、というのが基本方針」(p.36)、というが、行くところは皆代表的な都市か観光地であり、その先々に必ずインド政府観光局から派遣されたガイドが手配されていて、行く場所もすべてスケジュールされているのである。全体が2週間強で、ボンベイ、マドラス、カルカッタ、バラナシ、カジュラホー（ミトゥナ像）、アーグラ（タージマハル）、デリーと回る。そういう意味では典型的な観光旅行で平凡である。ガイドを茶化したりするところで椎名らしいおかしさを出しもするが、全体には抱腹絶倒という訳にはいかない。

ただ、カメラマンが一緒に行っていて、文庫版でも多くの美しい写真が収録されているのが魅力である。堀田の本でも口絵に数葉の白黒写真があるが、写真製版技術の落差は大きい。

しかし、自分もインドに行って、椎名の観察のいくつかになるほどと思うことがあった。たとえば、街でよく二人の男同志が手をつないで歩いているという。確かに、僕も気になった。また、ホテルの配車係が威風堂々としているという。これも同じ感想をもった。さ

らに、これは平凡ではあるが「サリーを着たインドの女性は美しい」というのも同感である。

中島岳志「インドの時代 豊かさと苦悩の幕開け」（新潮社）

これは2006年に出た本で、椎名の本から22年後、堀田からは実に49年後である。

著者中島はインドの若手研究者であるという点でも、堀田、椎名とは大きく違う。そして「豊かさと苦悩」の現代のインドが描かれる。たとえば見出しからキーワードを拾っても、郊外の住宅、新しいライフスタイル、キャリア・ウーマン、受験戦争、ショッピングモール、旅行ブーム、カフェブーム、インドのマクドナルド、といった具合である。

一方でそのような新しいライフスタイルを築く中間層にストレスがたまり、ヒンドゥー・ナショナリズムへの回帰、あるいは新興宗教の台頭、ヨーガの見直し、ベジタリアンの増加、といった現象を生んでいるという。これらの現象は、最近の日本に見られる排外的なナショナリズムを連想させるところもある。しかし、イスラムとの対立が過激化するという点では、より危険性をはらむものかもしれない。

本書は経済的な豊かさを手に入れつつある中間層に焦点が当てられているが、貧富の格差がより拡大しているという点にももちろん目

が向けられている。現在のインドの人口は約11億人で、そのうちの4億人ほどが1日1ドル以下の切実な貧困にあえいでいるという。

旅行者として訪れるインドでは、ホテルや会議場のある超高級な地域と、それと対照的なオールドデリーやたとえば観光地タージマハルへ行く途中に見る農村地帯の貧しい風景のみが印象に残り、郊外の新興住宅地やショッピングモールなどに接することがない。本書はそういう面への知識も補うものであった。

九鬼周造「「いき」の構造」（岩波文庫）

有名な本である。名のみ有名で読まずにきたが、岩波文庫に収録されたものをたまたま生協で目にして買い、買ってから1年ほど経って思い出して読んでみた。

この文庫には「「いき」の構造」のほか、「風流に関する一考察」「情緒の系図」の3篇が収められている。「いき」は単行本としては昭和5年に刊行されており、後の2篇は昭和16年に刊行された「文芸論」に収められているという。

江戸の「いき」という美意識を、ヨーロッパの哲学の枠組みを使って構造化してみせる、というのがミソである。だから6章構成の第2章と第3章が「「いき」の内包的構造」「「いき」の外延的構造」となっている。さらに、これは九鬼の工夫らしいが、「いき」の構

造を意気一野暮，上品一下品，地味一派手，渋味一甘味，という対立軸で捉え，立方体として幾何学的に図示して見せる。

内包的構造は「意識現象の名の下に成立する存在様態」として捉えられるという。そして外延的構造とは「客観的表現を取った存在様態」であるとし，考察はこの順序に行わねばならず，その逆ではだめだという。このところがよく分らない。実際に説得力のある議論は，見事に引用される江戸の文献における表現に基づくものであり，そのような引用は外延の話だけでなく，内包的議論でも使われるのである。

ということで，初めのうちは西欧哲学を江戸の「いき」に適用したパロディという印象を妙にもったが，適切な引用に感心したというのが正直なところである。

2篇目の「風流に関する一考察」も手法は同じで，華一寂，笑一厳，細一太，の3つの軸で捉え，その構造を今度は正八面体として図式化する。

3篇目の「情緒の系図」はちょっと手法を変えて，昭和の初めに刊行され始めていた「新万葉集」の短歌をコーパスとして，さまざまな情緒の分類，性格づけをする。これは存外楽しめた。「新万葉集」にはほとんどが一般の人の多数の歌が収められているようだが，それらの短歌に思わずほろりとさせられるものがある。

中沢新一「カイエ・ソバージュ III 愛と経済のロゴス」 (講談社選書メチエ)

久しぶりにこのシリーズ本を読んだが、これはとくに面白かった。

話は交換と贈与のことである。確かに経済の話であり、また文化人類学が発見した贈与論の話である。それに「純粹贈与」という無償の贈与を第3の概念として持ち込み、この3者が作る関係を、カトリックの三位一体となぞらえる。

純粹贈与のもと、生命の増殖、自然が生み出す恵みである。その構造が国家と貨幣によって破壊される。そういう観点から市場経済が批判される。

ワグナーの「ニーベルングの指輪」の元となっているのが、ドイツの「ニーベルングの歌」とほとんど同じ話の北欧神話の「ウォルスング家のサガ」であるということを初めて知ったが、これは貪欲に黄金＝貨幣を取りあう暗い話である。ワグナーはこれを取り上げて、同時代のマルクスとは違うやり方で、「経済学批判」を实践したのだと中沢は言う。マルクスが贈与論的な意味で「愛」について書いている、という話とともに、このワグナーの話は印象に残った。

ただ、ラスコー洞窟の話のところで、「その井戸の地下からは、濃度の高い二酸化炭素をはじめとする有毒ガスが噴出している」とか「二酸化中毒で危ない状態になる」という表現が出てくる(p.84)の

はいただけない。中沢新一も理科的常識に欠けるのか。僕の持っている本は2005年に出た第8刷なのにまだ訂正されていないというのは、編集者の怠慢でもあろうか。

2006年

立花隆「天皇と東大（上・下）」（文芸春秋）

上巻，下巻とも800ページ近くある。それで，読むのにえらく時間がかかった。7年かけて文芸春秋に連載したものを，そのまま本にしている。そのため重複は多いし，歴史の記述としても「行きつ戻りつ」が多い。はしがきに当人も

「基本的に重複があっても神経質にことこまかに削らない形で原稿の整理を進めた。この点重複を絶対よくないとする神経質な方々のご寛容をお願いしたい」

と，まるで重複を言い立てるほうがおかしいような言い方をして，防戦を張っている。

そもそも連載時のタイトルは「私の東大論」だが，そのタイトルによって意図された構想は，すっかり変わっている。確かに「天皇と東大―大日本帝国の生と死」という現タイトルは，内容をよりよく表している。

国家の問題，政治体制の問題，思想表現の問題を，膨大な引用で記述するという形は，小熊英二の「民主と愛国」とよく似ている。そして立花の本書が明治から太平洋戦争終結までを扱い，小熊が戦後を扱っていることで，相互に補完関係にあるともいえる。どちらも人を中心とした歴史である。しかし，同じように膨大な引用で成り

立っていても、小熊の本の構成は見事にとられており、立花のこの本はつぎはぎだらけの普請である。もう一つの違いは、立花は人の思想を扱いつつも、やはり事件を中心に記述しているのに対し、小熊は言説を中心に組み立てて、それが社会の動きにどのような影響を与えてきたか、という描き方をしている。

成書としての欠陥はこのように多いが、しかしやはり魅力のある本である。一つは右翼の視点が広範に語られていることである。東大にも超国家主義者、神がかり的な右翼の教授がたくさんいたし、テロ行動に走った学生グループもあった。戸水寛人、上杉慎吉、平泉澄、筧克彦、土方成美など。また血盟団、神兵隊事件の話は、三島の「奔馬」が小説として書いたことに対応する歴史的事実である。

これらに抗した学者として、河合栄治郎や田中耕太郎、矢内原忠雄などの話を掘り起こすときの立花の情熱も、よく伝わってくる。とくに河合はヒーローとして、著者の強い思い入れも交えて描かれる。

対象が国家論、政治なので、取り上げられるのはもっぱら法学部、それから分かれた経済学部である。文、理、医、工、農はほとんど登場しない。だから辰野金吾、隆親子も出てこない。漱石も伊東忠太も登場しない。しかし、出てこない人を数え上げてみきりはない。

面白いのは「民主と愛国」での取り上げられ方である。索引で見ると、本書で重要な役割を果たす人物のうち、矢内原忠雄は2ヶ所、大内兵衛は2ヶ所、美濃部達吉は1カ所、田中耕太郎は8カ所でしか出てこない。中でわりと多く登場するのは南原繁である（全部で37カ所）。

岡田暁生「西洋音楽史―「クラシック」の黄昏」(中公新書)

中世音楽から始めてルネサンス、バロック、古典派、ロマン派、20世紀と、西洋音楽の歴史を、大きな流れとして叙述するという方針で書かれている。客観的で無味乾燥な記述でなく、語り手の視点を出して、魅力的に述べている。

ルネサンスからバロックにかけてはこちらにほとんど知識がないので、目を開かれるところがあった。とくに

「端的に言えば音楽のバロックは、オペラの誕生とともに始まる」
(p.68)

というあたりからのオペラの位置づけも、なるほどと感心した。この時代の音楽は、バッハ以外は、モンテヴェルディ少し、ビバルディ、ヘンデルぐらいしか聴いていない自分にとって

「バロック音楽史の見取り図をややこしくしているのは、バッハという「時代の最も偉大な作曲家」が必ずしも文句なしに「時代の最も典型的な作曲家」とはいえない点にある」(p.85)

というのも新鮮だ。

フランス、イタリアに対するドイツ、カトリックに対するプロテスタントという構図で、いずれも後者に属するバッハは中心から外れる、というのである。

岡田暁生「オペラの運命―十九世紀を魅了した「一夜の夢」」(中公新書)

「西洋音楽史」が面白かったので、同じ岡田のより前の作品である、この本を読んでみた。本書は2001年出版で、サントリー学芸賞を受けている。つまりこちらが専門で、それで賞を取ったので、それに乗じて中公新書の編集者が「西洋音楽史」の企画を持ちかけて書かせたということらしい。

この本の視点は「はじめに」で明確に書かれている。

「「私にとってのオペラ」とは

1. 絶対王政(バロック)時代が始まる十七世紀に
2. 中央ヨーロッパのカトリック文化圏において
3. 宮廷文化として誕生し、
4. フランス革命以後は新しく擡頭してきたブルジョア階級と結合し、
5. 十九世紀にその黄金時代を迎え、
6. 第一次大戦後の二十世紀大衆社会の到来とともに歴史的使命を終えたところの
7. 音楽劇の一ジャンル」

という。つまり、オペラのスポンサーが、最初の王侯・貴族から、革命を経て上流ブルジョア、そして大衆へと変遷したことを通して、オペラをとらえているところが、独自の点であり面白いところである。

もちろん、モーツァルト、ロッシーニ、ヴェルディ、ワグナーといった個別作曲家の作品論もある。とくにモーツァルトのオペラブッファがどのような時代背景で生まれたかという考察は、見事である。

一方、スポンティーニ、マイヤベーアなど、今ではあまり上演されない作曲家、作品についても、流れの中でかなりスペースをあてて紹介している。これも教えられた。

中島義道「ウィーン愛憎 ヨーロッパ精神との格闘」(中公新書)

ウィーンに行くので、その1-2週間前に表題だけで買ってみた。この著者が「うるさい日本の私」という本を書いて、JRなどの駅や電車内のアナウンスのうるささと無意味さを批判していることは知っていたが、それ以上の知識はなかった。本書によると、中島は1946年生まれ。文一に入って、哲学にかぶれ、教養学部の科史・科哲を出た後、物理の大学院に行き、しかし物理をあきらめ、本郷の哲学科に行き、さらにまた法学部に学士入学した。法学士になったが公務員試験や司法試験を受けるという当初の計画をやめ、哲学の修士に

再入学し修士号を得た。そして予備校の講師をしていたが、それも耐えられなくなり、あてもなくウィーンに行ったという。その1979年10月から1984年3月までのウィーン滞在について書いているのが本書である。

この間、中島はウィーン大学で哲学博士号を取得し、また日本から派遣教師としてウィーンに来た女性と結婚し、表面的には成功体験に満ちた滞在であったはずである。しかし描かれるのは、そのような幸せな思い出ではなく、いかに自分が失敗を繰り返し、また周囲の日本人社会とヨーロッパ人社会の悪意に満ちた対応を経験し、それとどう戦ったか、という話である。そうすると惨めな体験談のようだが、著者はそれまでの典型的なモラトリウム人間の経歴から想像される優柔不断な性格ではないらしく、常に挑戦的に生き、それをまた客観的に茶化して描いて、面白い読み物にしている。

外国、とくにヨーロッパやアメリカ暮らしのことを書いた日本人は多いが、林望のような徹底的な賛美者か、中島のような激しい憎悪者に、極端に分かれるようである。本書の気分は倉部誠「物語オランダ人」に近い。

とにかく観光ガイドにはまったく役に立たなかったが、面白く読んだ。話を面白くするために大げさにしているとも感じたが。

それで著者は日本に帰ってきて

「とくに、私はひとびとの柔らかい物腰や言葉づかいに感動してい

た。一日中街を駆けまわっても一度もどなられることはなく、明らかな嘘や不遜な態度にいらつくこともなく、ひとびとは自然に争いを避けようと配慮しており、ことはすべて効率的かつ柔軟に運んでいる。」（あとがき）
と書く。

そういう中島が「うるさい日本の私」という不満たらたららしい（読んでいないが）本を書くのが面白い。多分、日本社会では中島のような性格は嫌われるだろう。その「西洋的」な性格のゆえに、そこが本書の矛盾に満ちた面白さである。

この気分はまた、藤原正彦のロンドン滞在記に近い。その藤原は今、「国家の品格」という本を出して、それが超ベストセラーになっている。これは現在の日本のナショナリスティックな気分を反映している。

そして、中島の気分もナショナリスティックである。気分だけではなく、本書はあの西尾幹二の支援で出版されたという。西尾とは、電通大で同僚という間柄でもある。

梅田望夫「ウェブ進化論—本当の大変化はこれから始まる」 （ちくま新書）

読書にあてる時間が短いので、新書ぐらいしか読み終わらない。この本はベストセラーになっているが、内容はしっかりしたものであ

る。著者はシリコンバレーで企業を起こし、インターネット上や旧来の雑誌などのメディア上の言論で、活躍している人らしい。

「インターネット」と「チープ革命」と「オープンソース」が三大潮流だという。チープ革命とはムーアの法則に象徴されるハードウェア・コストの劇的下落をいう。この3つを並べるだけでは平凡に見えるが、米国のWeb文化のさなかにいて、多くの経験をもとに進める考察には説得力がある。他のキーワードはグーグルがヤフーより優越する戦略としてのインターネットの「あちら側」と「こちら側」という対比、ロングテール、総表現社会、「民主主義」と楽観主義、というところ。

また終章で2001.9.11を境に、「自分(1960年生まれ)より年上の人と過ごす時間をできるだけ減らし、自分より年下の人、それも1970年以降に生まれた若い人たちと過ごす時間を積極的に作ることで次代の萌芽を考えていきたい」という決意と、実際にその決意にしたがってとってきた行動が語られるが、これにも感心した。とくにその時期、著者は日本の「エスタブリッシュメント社会に受容される上り坂を駆け上がり始めていた」という。NEC、NTTドコモ、オムロンなどの経営諮問委員になっていた。そういう委員のような仕事は新しく受けないようにしたばかりか、雑誌への寄稿もほぼすべてやめ、ブログに集中したのだそうだ。

辻惟雄「日本美術の歴史」(東大出版)

「奇想の系譜」の辻惟雄が通史を書いた。キャッチ・フレーズは「縄文からマンガ・アニメまで」で、東大出版の本としては結構売れているらしい。近代まで来ても息切れすることなく、全体に同じようなバランスで書いているのは大したものである。

辻の主張である日本美術の「かざり」という特徴で、ある程度一貫した視点が与えられる。図版でも初めて見る作品も多く、それだけでも楽しめる。

たとえば吉山明兆(1351-1431)という仏画師を、恥ずかしながらこれまで知らなかった。

しかし欧米の美術はインターネット上に豊富なページがあり、それらを巡るとずいぶん多くの作品を鑑賞できるが、日本はまだ充実していない。吉山明兆もいろいろ探してみたが、2つしか画像データが見つからなかった。

渡辺京二「逝きし世の面影」（平凡社ライブラリー）

いろいろな人が褒めた本だが、地方の出版社から出ていてずっと絶版になっていた。それが最近、平凡社ライブラリーに入って読めるようになった。

600ページもあるが、読んで気持ちのよい本で、今度の旅行（トロント行き）の前から読み出してはいたが、旅行の往復で読み終えてしまった。

「逝きし世」とは江戸末期に成立していた、今はなき一つの「文明」である。渡辺による文明とは「歴史的個性としての生活総体のありよう」である。それをよみがえらせる方法として、幕末・明治に来日した外国人が残した記録を丹念に読み込んで再構成するというやり方をとる。したがって、本書は膨大な引用からなるが、その引用のまとめ方が巧みで、著者の控えめだが芯の通った評を加えて、見事な読み物となる。そこに現れる当時の日本人の性格、社交、遊び、労働、そして日本の風景、街の風情、園芸は涙が出るほど美しい。もちろん、渡辺は意図的に外国人が日本をよく描写しているもののみを取り上げ、けなしているものは避けているだろう。ところどころでは公平さのために、マイナスの記述も交えてはいるが、量的には少なく、またさりげなくそれらの議論に反駁する記述を加えている。

しかしこれは渡辺によるきわめて意識的な方法なのである。明治以来の日本の知識層、とくに左翼は、西欧の文化の導入を至上とし、それまでの日本の文化・風習はすべて捨て去るべきものとしてきた。したがって、外国人が古い日本を褒めるのを無視し、迷惑にも感じてきた、というのが著者の見方なのである。

小林忠の「江戸浮世絵を読む」にオールコックの引用があり、それに感心したことがあるし、中尾佐助の「花と木の文化史」で

「江戸期の日本の花卉園芸文化は全世界の花卉園芸文化の中でももっとも特色のある輝かしい一時期であった」（本書のp.459に引用さ

れている)
も読んでいた.

しかし、これだけ広範に渉猟し、丹念に再構築されると、改めて江戸期の日本の文化（本書の用語でいう文明）の大きさを考えざるをえない.

なお、本書は日本のネオコンとでもいうべき人々に持ち上げられている. しかし、著者はあとがきで

「世間には、私が日本はこんなにいい国だったのだぞと威張ったのだと思う人、いや思いたい人が案の定いたからである.」

という言い方で、そのような読み方に釘をさしている.

Paul Hudak, "The Haskell School of Expression: Learning Functional Programming Through Multimedia"

この本は、先学期輪講したが、出張などで都合がつかないときは学生達に任せ、飛び飛びで見ていたら話が分からなくなったので、頭から通して読んでみた.

よくできた本である. この Hudak という人はなかなかすごい. 通して読んだといっても、学生のように処理系を使って動かしてみたわけでもなく、練習問題もやっておらず、細部は飛ばし読みしたところもあるので、十分に身についた知識なったとはいえない. とくにやはり Monad はよく分らない. しかし、ほぼ終わりまで読んで、

最後の方の音楽の扱いにも感心した。音楽記述用のDSLを定義し、それをMidiに変換する。今年のAOSDの査読で、音楽のモデル化をしてそこにアスペクトを持ち込むという論文を読んだ。そのモデル化はセンスが悪く、問題点も多いので、僕は低い評価をしたが、後の二人の査読者がわりと高い点をつけ、題材も面白いということで通ってしまった。しかし、すでにこのような仕事があるのなら、あの論文の価値はますます低いといわざるをえない。

ライブニッツ，清水富雄，他訳「モナドロジー，形而上学叙説」（中公クラシックス）

買ったのは1年ぐらい前だが、読んだきっかけは妙なところにある。この間、Haskellの本を読んだ。Haskellで一番難しいのはモナドである。ちゃんと理解するにはカテゴリーからやり直さなければならないだろう。学生と輪講しているときに、渡辺君からモナドの語源は何だろうという疑問が出されたので、直接にはカテゴリー論だが、元はライブニッツかもしれない、と言った。その辺は確かめていないが、ライブニッツのいうモナドはどんなものか、と読んでみる気になった。

「モナドは、自然における真のアトムである。一言でいえば森羅万象の要素である。だからここでは分割の心配がない。」

というが、原子論の原子のようなものではない。訳者の注によれば、ライブニッツはこれを個体的実体、実体形相、魂、エンテレケイア、形而上学的点、実体的一、能動的力などと呼んできて、「モ

ナド」に至ったという。個々の人間や動物の存在そのものがモナドらしい。

この本には「モナドロジー」「形而上学叙説」の他、小品が6編収められている。中には「位置解析について」のような幾何学の記号的扱いという形式化に関する面白い着想もあるが、ほとんどは思いの外、スコラ哲学的な神の完全性とそれに基づく世界の認識、その基本としての「モナド」やその中で神に近い人間の精神に関する考察である。立論に大変苦勞している自由意志の問題、神がすべてを知っているならすべては必然か、とか、なぜ世界に悪があるのか、不幸があるのか、というような問題は、神の存在という呪縛を逃れれば何のことはないと現代の眼では思ってしまうが、ライプニッツは神の存在を疑うことはないらしい。そして法則には目的因と動力因とがあるという。ニュートンと競って微積分学をつくり、計算機をつくり、数学、物理学で多くの実績を残したライプニッツにして(p.35の表を見ると、ライプニッツがカバーする範囲は、哲学、数学、歴史、神学、政策、言語学、物理学、中国の文化、学会組織、教会統一、平和論、計算機、鉱業、文献学．．．と恐ろしく広い)、目的因などというものを重視するのも意外な感じがする。一方で、すべてを機械論的に解釈することへの反発は現在でも依然強い力を持つし、ライプニッツが

「自然全体において、原因、力、作用などの形而上学的法則が驚くべき仕方で成立していて、それが純粹に幾何学的な物体法則よりもすぐれている。」

というとき、なるほどと感じるところもある。もちろん、何が形而上学的で何がそうでないのか、恣意的だといえるのも確かだが。

進化論について僕が昔感じた違和感は、ニュートン以来の物理学で問う「なぜ」が、ライプニッツの言葉でいえば「動力因」を問うているのに、進化論の「なぜ」は目的因を問うているように見える点であった。もちろん、それは自然淘汰というメカニズムで機械論的に成立し、目的論のように見えるのは比喻に過ぎないと頭で理解したとしても、何か釈然としないものが残る。

しかし、人間の社会になぜ道德、倫理観が作られたか、というような問題も社会進化論的に解釈される時代となり（そして僕自身もそのような解釈に違和感をまったく持たないが）、ライプニッツの時代の神は、進化論に取って代わられたということもできる（天地創造説対進化論とは別の意味で）。並行して、Brian Greene の The Fabric of the Cosmos を読んでいるが、現代物理学の世界の解釈はきわめて抽象的、想像的で、形而上学的な認識と妙に相通じる感じがある。もちろん、解釈にますます神を必要としない方向に進んでいるという意味では、ライプニッツと反対方向とも言えるが。なお実際、Greene の本の中で、ライプニッツが6カ所に登場する。また、下村寅次郎による解説が冒頭に60ページほどあるが、ライプニッツが公共的実践活動を生涯にわたり行った人であることが分かって、興味深かった。

Brian Greene, "The Fabric of the Cosmos: Space, time and the texture of reality," Knopf

500ページあり，昨年読み始めた後，間にさまざまな読書が入ったので，ずいぶん日数がかかった．しかし，前作 The Elegant Universe と同様に読みやすい．

それにしても，すごい本である．副題が示すとおり，現代の最前線の物理学における時間と空間の問題を見事に語る．初めに父親の本棚にあったカミュの「シジフォスの神話」を10代で読んだ話が出てくる．

「真の哲学的問題はただ一つ，それは自殺だ．世界が3次元だろうが心が9つか12のカテゴリを持とうが，それは二の次だ．」
というところに強い衝撃を受けたという．

しかし人生は生きるに値するかという問題と，科学による量子の世界や宇宙の解明は強く結びつくというのが，Greene の信念らしい．そしてそれはもっともな気もしてくる．

この本では，特殊／一般相対性理論，エントロピー，量子力学，インフレーション理論，超弦理論，などが次々と，例によって平易かつ魅力的に紹介される．最後にはタイムマシンの可能性まで論じられる．

そして確かに、宗教、哲学の多くの問題が、すでに科学で解明されているか、少なくとも科学がそれらの問題に大きなインパクトを与えていることが実感される。

しかし、こういう本を書く人がいる、しかもジャーナリストでも科学史家でもなく、現役のバリバリの物理学者で、ということだけで、人間とはすごいものだという気になる。

内井惣七「空間の謎・時間の謎—宇宙の始まりに迫る物理学と哲学」(中公新書)

駒場の生協がこの4月から新しくなって、書籍部もスペースが増えてちょっとした本屋になった。2-3週間前にぶらっとそこに入って、この新書を見つけた。

帯に「ライプニッツ恐るべし」とある。章別のタイトルを示せば、

1. 空間とは？ 時間とは？
2. ライプニッツとニュートンは何を争ったか
3. ニュートンのバケツから相対性理論まで
4. マッハ流力学の行方
5. 宇宙と量子

だから、ライプニッツと Brian Greene を読んだ後で読むのに、まさにぴったりの本である。

この人がライブニッツに肩入れしているのはよく分った。ライブニッツの「時空の関係説」が、それに続くマッハ、アインシュタイン、そして現在の宇宙論の視点で見て、慧眼であったという主張である。しかし、それは多分にその後の300年の物理学の発展の知識に基づいた「結果論」である。

全体として Greene の本とテーマが相当重なるし、実際 Greene の The Elegant Universe も、The Fabric of the Cosmos も引用されいる。しかし、この手の本が、いかに数式を使わずに分ったような気にさせるか、が勝負だとすると、Greene の勝ちは明らかである。もちろん、250ページの新書と500ページのハードカバーの違いはある。その条件下では内井もそれなりに健闘しているが、どちらかというと自分で面白がっていて、読者を面白がらせるサービス精神が Greene にかなわない。

佐野真一「阿片王 満州の夜と霧」(新潮社)

満州ー上海で阿片王と呼ばれた里見甫を、とくにその関係者を発掘して克明に追ったノンフィクションである。といっても、主に戦前の昭和の話だから、直接の関係者はほとんど物故している。その中で丹念な調査（それ自身が謎解きの面白さを与える。もちろんそれが作者のねらいでもあろう）と、たくましい想像力を交えてこの謎めいた怪物の正体を明らかにしようとする。

佐野は里見を「数十万人の中国人を阿片で廃人にした」といいながら、悪人としては描いておらず、むしろその謎めいた魅力に惹かれているようである。もちろんノンフィクション・ライターとしてその対象にある程度は惚れこまなければ力の入った作品はできないだろう。ただ、里見の魅力として、金離れのよさ、私腹を肥やさない清潔さは繰り返し挙げられているが、その他はあまりよく分らない。度胸のよさ、中国に作ったネットワークに見られるような人を惹きつける磁力、というようなものがあるらしいが。

私腹を肥やさないという意味で、笹川、児玉とは格が違うという。笹川、児玉や岸信介、佐藤栄作など戦後の政治、経済につながる人間達もいろいろ出てくるが、そのような戦後社会と満州帝国という人工国家との関係を追うことは本書の目的ではない。ただ、そのような戦後に里見は表に出ることなく20年生きた。またもう一人の主人公とも言える梅村淳も平成6年まで生きたのである。

吉田司「王道楽土の戦争（戦前・戦中篇）（戦後60年篇）」（NHKブックス）

情報科学財団の乗っ取り計画事件があって、財団の評議員をしている自分は、7月8月にその顛末に関わった。この財団を作ったのは高橋治則という人だが、その人が昨年7月に急死したのが、発端である。

この本に次のような一節があって驚いた。

「土地転がしで巨万の富を築いて錬金術師といわれた、イ・アイ・イ・グループの高橋治則っていただろ。・・・銀行から膨大な資金を引っ張り出して海外リゾート施設を買いあさって、瞬く間に資産一兆円以上の帝国を築き上げた。その不良債権の山のおかげで、長銀が破綻する引き金を引いたのも高橋だ。」

しかし、この本を読んだのは佐野眞一の「阿片王」を読んだ流れである。その書きだしが

「ある日突然、見知らぬ他人から<三枚の写真>がとどいてさ、
「ふっふっふっ、吉田クン。この三枚の写真をつないで、”鬼面人を驚かす”日本人の物語をキミは書けるかな、できるかな？」ナンテ書いてあったら、面食らうよな、誰だって。」

で、こっちが面食らった。ずっとこういう文体なのである。

内容の方は文体にかかわらずなかなか真面目である。一貫したメッセージは「<もう一つの満州> 建国＝戦後日本」ということである。象徴的には、1964年に開通した新幹線は、満鉄の新幹線計画が大東亜戦争で挫折したのを、戦後の高度成長期に向けて「本土」で復活させたものだということである。それで、そのいきつく果てとしてのバブル時代は大東亜共栄圏の経済版だという。

しかし、バブル崩壊後、この「王道楽土」の戦後版「民道楽土」も崩壊した。そして、軍事化、監視社会化が進んでいるという変化

に、強い警告を発する。このような観察と主張には、大いに首肯ける。

しかし、この2冊の本全体は膨大な引用で成り立っている。佐野の本のように、自分でまめに取材した結果をまとめたものではない。自分自身の書いたものも、おびただしく引用される。もちろん、その中には直接取材した記録もある。しかし、それらを改めてまとめ直すのではなく、すでに出版された形を生かして引用するという方法をとる。著者はこれをコラージュ手法と呼んでいる。

引用主体という点では小熊英二と似ているところもあるが、意図的に小熊のような整ったスタイルを避けている。それが案外読みにくさの元となっている気がした。ただ吉田という人は書斎派ではなく、水俣、成田といった現場にずっとかかわってきた行動派らしい。それが書き方にも反映しているという面もあろう。

今泉みね「名ごりの夢―蘭医桂川家に生まれて」(東洋文庫)

幕末の蘭医桂川家に生まれたみねが、少女時代、そして明治になり結婚してから見聞きしたことが、昭和になって子や孫に話すという形で記録され、昭和10年に出版された。それが戦後、東洋文庫の1冊となっている。

みねの父、桂川甫周は将軍の典医であり、また江戸における蘭学の中心人物であったため、数多くの俊英が家に入出入りした。箕作秋

坪，福沢諭吉，成島柳北，宇都宮三郎など。さらに咸臨丸で米国に行った木村摂津守は，母方の叔父だという。

倒壊寸前の幕府の側にあって，みねの記憶するそのような人びととの交流，遊び，生活には，豊かさとともにのどかさが感じられる。一方で，士の子は男でも女でもいつでも死ぬ覚悟を持っていたことも語られる。しかし，さまざまな歌，踊り，言葉遊び，芸者の出入り，舟遊び，隅田川の美しさ，といった記憶，「名ごりの夢」は，「逝きし世の面影」と通じるものがある。実際，「逝きし世の面影」の中でも「名ごりの夢」のエピソードが1カ所で引かれていた。

みねが明治になって結婚した相手の今泉も，佐賀出身で征韓論に与し，維新政府に楯突く立場の人物である。しかし，副島種臣に可愛がられ，結局は司法省内の地位を得るが，50そこそこで死んでしまう。

みねの子供時代はいたずらで気が強かったようだ。その気の強さは，大人になっても残っていて，夫達が政治について密談している部屋にうっかり入ったら，夫から「しっしっ」と追い出され，犬じゃあるまいしとすぐに離縁を申し出る。

それに対し夫から，出て行ってもよいが，茶の間の妻の座はいつでも帰ってこれるようにそのままにしておくよ，と言われ，夫の愛情に感謝するといういい話もある。

三島由紀夫「暁の寺」(新潮文庫)

このところ Jared Diamond の “Collapse” を読んでいるが、ハードカバーで厚いので、旅行には持っていく気がしない。それでこの間、Minneapolis に行ったとき、この「豊饒の海(三)」を携帯した。「奔馬」からはだいぶ間をおいて読むこととなった。

この巻では、これまで狂言回しだった本多が中心人物となる。本多の目を通したタイの王女ジン・ジャンが、清顕、勲に続く転生の主人公であるが、その描かれ方は謎めいているばかりであまり生彩がない。ストーリーの展開も、「春の雪」や「奔馬」ほど闊達でなく、そのためか修辞に凝った文章がなかなか読みにくい。

ただ、慶子のような登場人物の造形には腕を見せる。槇子を「奔馬」から再登場させているのも工夫である。

この巻の中心は、ジン・ジャン姫というより、タイの寺や風物の描写、そしてインドの強烈な光と影の描写にあるといえよう。ただ、本多のインドでの体験が、

「(アジャンタとペナレスという)その二つの土地で、本多は彼の人生にとって何かきわめて重要なきわめて本質的なものを見たのである」

というほどにはこちらには感じられない。むしろ、後続く輪廻転生説の歴史や阿頼耶識にいたる唯識論についての、長口上な非小説的論述で、三島は主題の説明を補おうとしているように見える。

転生のお話を続けるには、ジン・ジャンも若くして死なせなければならぬ。それをどうするのか、後半の見所だった。プールで事故死するのか、と思わせておいて、突然火事になる。その炎の中で死ぬのかと思った。もしかするとそれがもともとの構想だったのかもしれないが、結局はそうならない。破綻ではないのだろうが、意外な気がした。

三島由紀夫「天人五衰」(新潮文庫)

「暁の寺」は晦渋なところがあり、ストーリーの起伏もやや少なくて読みにくかった。「天人五衰」は晦渋さは残るものの減り、ストーリーも変化はあって、若干読みやすい。

今度の主人公、安永透の造形はよく分らない。鋭い観察眼、異常に高い知能指数、白い肌の美少年、強い自尊心、人と交わらず選ばれたものだという自覚をもっている点など、清顕、勲とまったく同じ個性ではないが、相通じるものを感じさせるように描いている。それでいて、本多は透を一目見たときから、

「自分と全く同じ機構の歯車が、同じ冷ややかな激動を以て、正確無比に同じ速度で廻っているのを直感した。」(p.77)

と、清顕、勲とは対照的に描いてきた本多と同類の人間として設定するのである。

単に同じパターンの繰り返しを避け、この透が本物か、つまり4人目の転生を受け継いだ人間か、贗者でホクロは偶然の一致か、とい

うドラマ性を持たせるという理由かもしれない。しかし、これは最終巻で、この長い転生のテーマに決着をつけないといけないはずである。

透が20歳を越えて生きたことで、この繰り返しのパターンは断ち切れ、転生に齟齬を来たす。その意味で衝撃的なのは、結末部分で聡子が清顕など知らないといい、

「実ははじめから、どこにもおられなんだ、ということではありませんか？」

と、この全物語を否定するようなことを言うところだ。

結局、この4巻のうち、やはり「春の海」がもっとも出来がよく、また一つの完結した物語として独立に読めるようになっていた。全4巻の構成は最初からあり、それなりの伏線も用意したのだろうが、むしろ後の巻で「春の雪」の挿話を利用し、後から前への繋ぎを作ることで、初めから伏線があったように見せることになったのも多いだろう。そして最後に聡子が出てきて、「春の雪」そのものを打ち消してしまうようなことを言うのは、三島らしいあざとい細工といえるだろうか。

しかし、今の時点、というかこの本が出てすぐに三島があのようにならなくなった、それを知って読む立場では、やはりあの事件を暗示するような部分に反応してしまう。三島は老いを知らずに、老いるのを拒否して死んだ。この巻では本多の老いについての述懐がおびただし

く出てくる。それは三島にとって想像でしかない。そして

「そうだ。老人は時が酩酊を含むことを学ぶ。学んだときはすでに、酩酊に足るほどの酒は失われている。なぜ時を止めようとしなかったのか？」(p.131)

「・・・それにしても、或る種の人間は、生の絶頂で時を止めるという天賦に恵まれている。俺はこの目でそういう人間を見てきたのだから、信ずるほかはない。」(p.132)

など、自死を暗示するすいぶん直接的な表現がある。

また、時間という点でもおやと思ったのは、

「昭和四十九年のクリスマスを、透がどう過ごすかということ
を、・・・」(p.222)

と、この小説を書いている時点、発表された時点(昭和46年初め)、三島が死んだ時点、より先に設定していることである。最後は昭和50年で終わっている。

Duncan J. Watts, "Six Degrees: The science of a connected age," Norton

感心した。いわゆる Small World 現象、この本のタイトルにあるように世界中のすべての人々に6段階で到達できるという Milgram の実験に由来するネットワークの特性を分析する研究について、一般向けに易しく解説したものである。これがそう簡単な問題でないこともよく分るし、Watts 等の研究で何がブレイクしたかもよく分る。また病気の感染、インターネット上のWebの性質やウィルスの

蔓延，ファッション，株式市場，産業組織，など多様な社会現象の間には関連があること，しかしそれに関する科学的な成果はまだごく限られたものであること，もよく分る。

新しく成長する科学分野を紹介した本として，89年に読んだ Gleik の “Chaos” と似たところがある。しかし，Gleik は科学ライターであり，Watts は科学者で自分の専門分野について書いているところが違う。ところがこの Watts がなかなかの物書きで，語り口が巧みである。知識の幅も広く，読者を飽きさせない技量もある。そしてそのペースが最後まで持続するところがすごい。

Jared Diamond, “Collapse: How Societies Choose to Fall or Succeed,” Viking

去年，出版されてそれほど経たずに買ったので，ハードカバーである。そして575ページある。旅行にはちょっと持っていけない（もっとも米国人はよく平気でこのようなぶ厚い本を持って飛行機に乗っている）。

買って1年以上経った今年，夏の読書として読み始めた。夏休みの後は通勤にも持っていくようにしたが，旅行には持っていかなかった。しかし，今年も100編以上の論文査読をしたので，読書に回す時間が大いに減った。そういうこともあって読み終わるのにずいぶん時間がかかった。その分，十分に堪能できたともいえる。

相変わらずの Jared 節はますます冴えわたる。しかも、今回は現在の地球における環境問題、持続可能性の問題という、大きいだけでなく深刻なテーマに正面から取り組んでいる。

タイトルの Collapse, 崩壊は、自ら森林, 土壌, 河川, 海, を破壊して崩壊していった過去の社会, 文明と, 同じことを地球規模でやっている現代の人類社会を指している。

最初にモンタナの農場とグリーンランドの農場が対比される。どちらも同じような規模だが、モンタナの方は現代で豊かな生産力を保持しているのに対して、グリーンランドの方は500年前に崩壊した。

続いてモンタナの話が長く語られる。導入から予想されることと反し、環境に恵まれていそうなモンタナで、いかに環境悪化が深刻化しているかが、詳しく語られる。そういう内容を興味深く話すのが、J. Diamond の腕である。しかしモンタナは崩壊していない。

次に崩壊した文明の例として、イースター島, 南太平洋の Pitcairn 島と Henderson 島, 米国の Anasazi, マヤ, アイスランドとグリーンランド, がそれぞれ巧みに紹介される。一方、環境悪化をくいとめた例として、ニューギニアの Tikopia 島と徳川時代の日本が取り上げられる。

これらは皆、近代以前の例である。現代のものとして、ルワンダ, ドミニカとハイチ, 中国, オーストラリアが詳しく取り上げられ

る。同じ島ながら、東のドミニカと西のハイチで、環境政策に大きな違いがあり、それが広く、社会、経済、文化に影響を与えていることは知らなかった。

中国が大きな環境問題をかかえ、経済発展によってそれがさらに悪化し、地球全体に悪影響をもたらしていることも、齒に衣着せず語られる。一方で、希望の持てる傾向についても触れているが。

驚くのはオーストラリアである。オーストラリアは農業・牧畜生産では豊かな国なのかと思っていた。それがまったく違うらしい。土壌が貧しく、雨が少なく、家畜による過剰な植物の摂取で、きわめて生産力が低いという。それなのに政府は人口を増やそうとしている。オーストラリアで自給できる人口規模は、現在の半分だという。

そして、このような環境破壊が、一つの社会、国に留まらず、グローバル化により全地球規模で危機を招いていること、今のままでは子供、孫の世代に崩壊が来ることが説得力をもって示される。しかし、このような深刻な事態に対し、決して超悲観的にならないところが、J. Diamond の素晴らしいところである。

彼は自分を cautious optimist だという。そしてその理由も説得力をもって議論される。もちろん、人類が強い危機意識を持って、この問題に取り組めばという条件のもとで。

アレクセーエフ，長谷川四郎 訳，「デルスウ・ウザーラ ー 沿海州探検旅行」（東洋文庫）

東洋文庫は普通の本屋ではあまり置いていない。かなり前に，神田のどこかの本屋で，これと「名ごりの夢」を一緒に買った。今年，「名ごりの夢」を読んだので，その後これも旅行に持っていくなどして，読み終えた。

この話は，黒澤明が映画化したことでも有名になっている。しかし，その映画は見ていない。

ロシアの極東軍の若き士官アレクセーエフが，1907年に行ったウスリー地域，シホテ・アリニ山脈以東の沿海州，の調査の報告記である。アレクセーエフは軍人でありながら，動植物，鉱物の知識が広い。本書にはそのような博物学的な調査結果の記述がかなりある。またこれは探検記でもある。山岳，谷，森林を進むうちに，大雨，嵐，冬には寒気などの気象条件，自然条件で数々の試練に出会う。もちろん，調査目的には軍事的なものも大きかっただろう。時は日露戦争直後である。この地域にはウデヘ族を始めとする先住民と，数を増してきた中国人がいて，しかし政治的にはロシアの支配下にある。朝鮮人も日本人も入り込む。

しかし，本書が今でも広く読まれているのは，タイトルとなっているデルスウ・ウザーラというゴリド人の魅力による。デルスウは「老人」だが，歳は59で今の僕と変わらない。一生森で過ごしてきて，

近代社会的な意味での教育を受けていないが、深い知恵を持っている。

たとえば人の足跡を見て、

「これはロシア人でも、シナ人でも、朝鮮人でもない。ウデヘ人で、クロテン捕りをしており、手には杖、斧、クロテン捕獲の網を持ち、若い男だ」

ということが分るのである。シャーロック・ホームズも顔負けだ。

大きな獲物が取れば、皆に分け与える。自然と対話をし、動物、植物や自然のあらゆるものに、人と同様に話しかける。アニミズムには違いないが、シャーマニズムのような異常なところはなく、合理的である。

アレクセイエフはデルスウによって何度も助けられるが、それ以前から彼を人間として全幅的に信頼している。しかし、最後には悲劇が待っている。視力が落ち、森での生活に自信を失ったデルスウを町につれてきて一緒に住むが、デルスウは森の生活を失ったことで精神的に落ち込む。そしてしばらく森に戻ると言って出て行くが、町に近い森の中で、おそらく盗賊によって撃ち殺されてしまう。

しかし、この20世紀初めの未開拓な沿海州で、すでにトラやその他の動物が数を減らしていることが分る。また、山火事で多くの損害が出ている記述もある。

鹿島茂，井上章一「ぼくたち，Hを勉強しています」(朝日文庫)

今年は，読んだ本の冊数が例年になく少ない．大作をいくつか読んだせいもあり，論文査読がまた100を超えたせいもある．年末が近づいて少しは冊数を増やそうと，買ってあった文庫の中でも，もっとも手軽なものを読んだ．思惑通り一日で読んでしまったが，まあその程度の内容である．

二人の売れっ子の書き手が，蘊蓄を傾けてHについて対談する．しかし，その結果は室井佑月という女性の解説で「インテリのおじさんたちって，なんておぼこいのだろう」と一蹴されてしまうのがおかしい．この室井という人は，官能小説を書いている人なんだそうだ．

解説の前にある井上の「あとがき」にも，肩透かしを食う．この対談では自分はもてないことを強調してしまったが，今の自分は結構もてるというのである．

種村季弘「江戸東京<<奇想>>徘徊記」(朝日文庫)

種村はこの本を2003年12月に単行本として出した後，2004年8月に死んでしまった．

江戸の面影の残る東京の下町，都心からはやや外れた繁華街や場末を，散策逍遥する．全部で30箇所．歩くだけでなく，江戸や明治の

文献を引いて、蘊蓄を傾ける。そして帰りにちょっとした料理屋や飲み屋で一杯やる。

最初に碑文谷、次に目黒が取りあげられて、馴染みがあるので俄然読む気になった。碑文谷の「すずめのお宿公園」はラッタッタに乗って行ったことがあるが、法華寺の蓮華往生という話はまったく知らなかった。その法華寺は鎌倉時代に日蓮宗に改宗された寺で、今は元の天台宗圓融寺に戻っているというが、その圓融寺もあまり記憶にない。多分、そのときに訪れていると思うが。

目黒の方は槍ヶ崎に近藤重蔵が作ったという近藤富士の話が出てくるが、それもまったく知らなかった。近藤富士そのものは昭和34年に取り壊されたという。

続いて出てくる目黒不動の方は、もちろん行ったことがある。その後、品川、川崎、森ヶ崎と、場所としては馴染みのあるところが続くが、過去の遊郭や酒合戦の歴史も、現在の具体的な街の様子も、知らないことばかりである。

そこから先は人形町、上野、墨堤と東の下町方向が続く。日刊工業新聞の本社が人形町に移ってから、中小企業ソフトウェア表彰の会議で人形町も少しは馴染みとなったし、本郷の周りの上野、根津あたりはかなり長く親しんできているはずだが、何しろ西片町に1年半下宿した以外は住んだことがないので、東京の西側よりは馴染みが薄い。

種村は池袋生まれで、板橋の小学校に通い、成人してからは東京の中だけで10回以上も引越しをしているという。後半の池袋や愛宕山などの探訪記は、種村自身の過去の回想記でもある。そういう住んだことのある実感をもつ者と、街を通り過ぎる立場では、自ずと感覚が違うだろう。ただ、茗荷谷に5年通ったので、伝通院、大塚などは親近感があるし、慈恵病院にも長く通ったから、愛宕山も馴染み深い。そういえば、親父は日暮里生まれで板橋小学校を卒業している。初子伯母の家はずっと本郷だった。大塚の石渡の家も子供のときからの思い出がある。

団塊の世代が定年を迎え、このような本を片手に町歩きをする者がさらに増えるだろう。種村はそういう世代から見ると、一世代上の憧れの対象かもしれない。71歳で死んでしまったのは惜しいことだ。

2005年

Craig Holden, "Four Corners of Night"

このペーパーバックをいつどういうきっかけで買ったものか、記憶にない。積読の中から読む本を探すとき、最近はとにかく重さが軽いものを選ぶ傾向にある。電車の中で読むのに、また持ち歩くのに、重いもの、かさばるものは敬遠だ。それからたまにはミステリを読みたくなる。英語ではこの手のものは *mystery* とはいわず *crime novel* というのだろうか。

それで本棚からこれを取って読んでみた。実に見事だ。Dennis Lehane と似たタイプだが、とにかくアメリカには大した書き手がたくさんいることだ。

現在進行の少女の失踪事件と7年前の刑事 Bank の娘の失踪事件とが並行して語られ、さらに語り手の刑事 Mack と Bank の間の子供時代からの友情の話が織り込まれるという時間を錯綜させた記述をしながら、しかし明快にストーリーが展開される。リアリティに富み、クライマックスのどんでん返しもそれほど無理を感じさせない。

鈴木博之「都市のかなしみー建築百年のかたち」(中央公論新社)

建築家には文章家が多くいる。この人の文章は初めて読んだが、建築史が専門だから当然とはいえ、なかなかの文章を書く。ただ、自分とは少し波長が合わないところがある。

雑誌に発表されたエッセイを集めたものだが、冒頭に置かれ本の題名とも関連する「ふかい哀しみの街」でも、街、都市を歩くのが好きだという気持はよく分るが、突然「街には生きている哀しみのようなものがある」という文句がポンと出、最後に仙台に行った時のちょっとした出来事を書いて「ここもふかい哀しみに満ちた街なのだ」といって終わるが、その哀しみのもとが何なのか、意を尽くしておらず共感が湧かない。次の「都市と機能、装飾、ゲロニウス・ロキ」も機械（操縦するものとしての航空機など）と都市との対比から始めていろいろなことが語られるが、もともと機械や都市にあった「普遍性」が失われていくという主張である。それとゲロニウス・ロキ（地霊の力）、つまり個々の土地のもつ靈感や可能性を取り戻したいという主張とは、「普遍性」という言葉の使い方としてしっくりこないものを感じる。

刺激を受けた文句は

「情報という存在は、本質的に可視的な構造をもたない。だからこそ情報を可視化するものは装飾的にならざるを得ないのである。」
(p.147)

しかし、NTTドコモの代々木のビルがエンパイア・ステートビルに似ているという話から、

「情報産業の本質は目に見えない。「情報」には構造もかたちもないから、それは「機能的」に表現することはできない。」

というのは別にNTTドコモでなくてもオフィスビル全体に言えることだろう。むしろNTTドコモのビルが塔のような形をもっているのは、実は電波の送信のためだということだから十分に「機能的」なのではないだろうか。同じように、繰返される「公」の主張も、共感するところもありながら「民」と「官」との関係が今ひとつすっきりしない。しかし、とにかくいろいろ考えさせるきっかけを与えてくれる文章ではあった。

中山典之「昭和囲碁風雲録（上・下）」(岩波書店)

中山という著者は、碁では大成しなかったが文章の方で名を上げたらしい。

去年の暮れに加藤正夫が57歳で亡くなった。日本棋院のゴタゴタで、理事長職を引き受ける羽目になり、その心労もあって脳梗塞だったかで死んでしまった。

今日のNHKの昼の囲碁対局は、番組変更で加藤を偲ぶという特別プログラムとなり、石田、武宮、大竹、趙、小林という木谷一門が集まって、加藤との対局碁を振り返る形で追悼していた。そういうタイミングでこの本を読み終えた。

自分も高校のときから碁を少しやりだして、新聞の囲碁欄をずっと見ている。したがって、とくにこの下巻の扱う歴史は、ほとんど知っている。その間、多くの一流棋士が入れ替り立ち替り覇を競った。しかし、今や完全に韓国に水をあけられている。しかも、江戸時代の元丈、因碩、秀和と戦っても勝てないだろうという。さらに遡って道策にはもっとかなわないという。不思議なことである。

この本は上下巻で長いが、棋譜がかなり載せられている。しかし、1つの碁を原則として2枚の譜で載せているので、紙の上だけではすぐに追えなくなる。碁盤に並べてみるより電子的に追ったほうがよいが、適当なソフトウェアが案外ない。実に Windows95 の時に買った「碁の研究」というソフトウェアを試してみたら、ちゃんと動いた。それで一部の総譜を入力して鑑賞しやすくなった。

Dan Brown, "The Da Vinci Code"

この本をなぜか、まだペーパーバックが出る前に、ハードカバーで買っていて、読まずにほってあった。米国だけでなく世界中で大ベストセラーとなり、日本でも翻訳が出て売れている。読み始めてからは、重たいがカバンに入れて持ち歩いた。

この間読んだ Craig Holden が徹底的にリアリズムを追求しているのに対し（といっても相当無理に作っているところはあるが）、こちらは徹底的な作り話で、そのパズル性、クイズ性、奇想天外性で売っている。しかし、シンボリズム、聖書外典、魔女伝説、キリスト

の聖杯伝説，と歴史的，宗教学的，文献学的な面白さも散りばめている。文体は Holden と違って徹底的に平易で，一般読者向けのサービスも行き届いている。しかし，これだけ手の込んだ話を，あまり破綻も見せずよく次から次へと展開させていくものだと言嘆する。

キリスト教を原理主義的に受け入れているらしいブッシュのアメリカで，この本が数百万部も売れたという現象は面白いところがある。このストーリーの中心に，イエスはマグダラのマリアと特別な関係にあり，マグダラのマリアはイエスの子を宿していた，そしてイエスは自分の後の教会を，彼女に託していた，キリストの神性という話は3世紀のアウグスチヌス皇帝により政治的に決められたものである，という話がある。マグダラ伝説は別にしても，キリスト教会がそのように作られてきたことは事実だろう。

中村桂子「ゲノムが語る生命—新しい知の創出」(集英社新書)

集英社新書が創刊5周年とやらでフェアをやっている。そのせいか魅力的な本が出て何冊かまとめて買ったうちの一つである。

よい本だった。感心した。

生命科学を科学技術という観点からでなく，「生きる」「暮らす」という見方で考えていこうという主張である。そこで全6章に，「変わる」「重ねる」「考える」「耐える」「愛づる」「語る」と

いうタイトルをつける。その内容はこれらの動詞から必ずしも想像できるものではない。全体を通して、またとくに第1章において強く主張されることは、生命科学を科学技術として見て産業と結びつけ、プロジェクト指向で成果を出すという研究のやり方、政策に反対するということである。

遺伝子ではなくゲノムとして見るということも強調され、説得力がある。5章の「愛づる」もとくに面白い。

中沢新一「僕の叔父さん網野善彦」（集英社新書）

網野善彦が中沢新一の叔父さん（父親の妹の主人）だったというだけでも驚いたが、網野の史学の形成のプロセスに中沢が立ち会ってきただけでなく、その父厚とともに大いに議論し、互いに刺激しあってそれぞれの思想を築いてきたということにびっくりするとともに、感動した。

網野の「異形の王権」を読んだときの感想（2001年）に、

「飛礫については引用されている中沢厚の「つぶて」などの多くの研究、後醍醐天皇についても佐藤進一などの多くの先行する業績があり、それらによりつつ発展させていることが分かる」

と書いたが、その中沢厚が新一の父なのである。そのいきさつも書いてある。1968年の佐世保の原子力空母反対デモで学生たちが投石をした。それをTVのニュースで見た厚が子供のときの石合戦を思い出す。それから厚は石合戦を調べ始める。そして網野に礫のことを

聞くのである。網野はひどく感動し、やはり調査を始めて、その結果をどんどん郵送してくる。それが網野史学の誕生につながったというのである。そして網野は律儀にも、自分の思考に火をつけた人に、自分より先に飛礫についての研究をまとめて出版するように勧める。それは遅れたが網野の尽力で1981年に出版されたという(p.54)。

このように中沢の生い立ちも含め、網野と中沢の家族間のパーソナルな交流が懐かしさをこめて綴られる、稀有な書となっている。

野村進「救急精神病棟」（講談社）

野村の書くものはいつも面白いが、これまたユニークな題材である。しかし、野村は知らなかったが脳研究についても取材していて、「脳を知りたい」「脳の欲望 死なない身体」という著書もあるらしい。この本でも「精神病と脳」という章があって、精神医学と脳科学の結びつきを手際よく説明している。

本書は「千葉県精神医療センター」という日本で唯一の救急精神医療専門の病院を取り上げ、その院長計見一雄を初め、スタッフ、患者、家族に取材して読み応えのあるルポルタージュとしている。といっても患者のプライバシーを尊重するという理由で、事実に相当の“デフォルメ”をしていると書いている。つまりフィクションの自由をある程度生かしているのだ。

中井の本を読んでも、精神病と人格障害、さらに神経症の違いが分からなかった。この本で、とくに前二者の区分が重大な意味をもつものであることを初めて知った。しかし12章「医療と司法」で展開される計見の主張には、やはり分からないところがある。精神病だと治療の方法があり、人格障害だと治しようがないのだろうか。また、精神病患者が犯罪を犯す可能性は、人格障害より少ないのか。

そう思って最後のほうまで読むと、大阪の澤温という「さわ病院長」が計見の仕事を高く評価しながら、「ただ計見先生と僕でいつも意見が合わないのは、人格障害の患者さんをどうするかですよ」と言っている話があり、部分的に僕の疑問が論じられている。

全体を通じて、精神医療にあたる医者、看護婦（士）の大変さがつくづくと感じられる。その患者の治療に打ち込む姿には頭が下がる。そしてたとえばあとがきの最後に引用されるある看護婦の言葉「とにかく一緒に座っているうちに、何か光が見えてくるような気がしてくるんです。別になんにも解決していないけど、患者さんと一緒にもう少しやってみようかという気持ちになるときが、いつかきっとやってくるんですよ。そのときの（長い緊張の時間から）抜け出られた充実感といったら、本当に深いですね。」のようなところは胸にジーンとくる。そのようなところが本文でも随所にある。

V. S. ラマチャンドラン, サンドラ・ブレイクスリー, 山下篤子訳「脳のなかの幽霊」（角川書店）

著名な本でずいぶん前に買ってあったが、急に読む気になって読んでみた。面白い。

ラマチャンドランは幻肢についての研究で有名になったらしいが、この本でもそれについての話が先頭にあって、幻肢という症状が起る脳内のメカニズムに説得力のある説明を与えている。オリバー・サックスでもそうだが、神経学者の書く本は、面白い症例だけでも興味を呼ぶ。それにユニークな実験や推論が加わり、脳という仕組み全体についての、深い考察に導く。確かに従来哲学の問題とされてきたものが、脳科学として扱えるところにきているのだ。その意味で、最終章「火星人は赤を見るか」がクオリア、意識、自己という問題をまともに論じて、歯ごたえがある。

中沢新一「人類最古の哲学」（講談社選書メチエ）

この間、中沢の「僕の叔父さん 網野善彦」を読み、また中村桂子の「ゲノムが語る生命」の中に、「このシリーズ（カイエ・ソバージュ）は一字一句息を詰めながら読んでいたのだが」(p.188)という一節があったので、読まねばという気になった。

この「カイエ・ソバージュ」というシリーズは講義録で「比較宗教論」という講義だという。シリーズの1冊目が本書である。

神話といいながら7章のうち5章はシンデレラの話である。しかしシンデレラは「民話として語られながら神話としての特徴を失ってい

ない稀有な例」なのだそうだ。

神話的思考というのはよく分からない。シンデレラの話に入る前に、豆は死の世界と生の世界の仲介者だ、だからピタゴラスは豆を嫌った、だとか、インディアンでは豆は睾丸に対応され、ペニスを表現しているトウモロコシと比べてより女性的存在だ、とかいうのは、何だか勝手な議論のような気がする。シンデレラでも、灰、カマドは死と生の仲介の位置にあるとか、王子は死者の世界の象徴だというような話は、本当かな、と思う。

しかし、神話が共通なところが広い地域、時代に分布しているというのは確かなようだ。ヤマタノオロチとバビロン、ユダヤ、キリスト世界の竜退治の話の親近性は、この間うち、ちょっと調べたばかりである。

デヴィッド・スノウドン、藤井留美訳「100歳の美しい脳」(DHC)

ノートルダム教育修道女会の修道女を対象として、老いとアルツハイマー病を調査した記録である。記録と言ってもこのスノウドンという医学者は語りの才能があり、自らの生い立ちや修道女会を研究対象とする経緯まで含めて、なかなかの筆力で読ませる。この人は疫学の人で、脳や遺伝学は専門ではない、しかし脳神経医のマークスベリーなどと組んで、修道女の脳を調べるため、死後の献脳を依

頼し、多くの脳の分析データを集め、それと症例を比較することを可能にする。

修道女はほとんど皆、同じようなものを食べ、同じような生活をし、タバコものまず、比較研究には大変都合がよいのである。しかも、平均的に長生きである。さらに修道女になるときに自伝を書かされるなど、その生涯の記録も膨大に残っている。さらにスノウドンは個々の修道女たちと人間的な親交を深め、その描写が本書に奥行きを与えている。

しかし、これだけ綿密な調査を長期に行っても、確定的に分かったことは案外少ない。アルツハイマーは脳にプラークと神経原繊維変化が生じることで起こるといわれているが、その程度がかなりひどくてもアルツハイマー病の症状がほとんど現れない人もいれば、逆に相当の痴呆が見られても、脳組織の変化は微小な人もいる。

分かったとされていること、たとえば教育レベルの高い人ほど長生きだというのも、教育を受けたことによって長生きになるような書き方がされているところが本書にあるが、高いレベルの教育を受けるような資質をもった人が、老いを遅くするようなものを遺伝的に受け継いでいると見るほうが、自然ではないだろうか。

遺伝子の関係も確定的なことは言えないらしい。ビタミンCとEとベータカロチンの抗酸化性は、老化を防ぐ可能性が高いらしいが、こ

れも確定的とは言えないようだ。葉酸は明らかによいとされている。

清泉小学校のシスターたちも高齢だ。そのうち一番茶目っ気があって若々しかったシスター宮川が、先に亡くなってしまった。

中沢新一「熊から王へ」（講談社選書メチエ）

カイエ・ソバージュの第2弾。

序章におかれた宮沢賢治の「氷河鼠の毛皮」が素晴らしい。宮沢賢治は見田宗介とか人の引用でばかり読んでいるような気がするが、そういう人たちが惚れ込むのもよく分かる。

この序章の講義が行われたのが、2001/9/11の2週間後だという。その状況で「対称性の思考」が語られる。人と動物（熊）との対称性、非対称な社会はテロを呼び起こし、テロという「野蛮」に報復すれば（この時点でアフガン侵攻もイラク戦争もまだまだ先の話だが）、それも「野蛮行為」だという。このメッセージは肯ける。

シベリア、日本の東北、ベーリング海峡、アメリカ大陸北西部、さらには南米に、モンゴロイド系の共通の神話があり、それは熊と人との関係を語り、対称性の思考を表現しているというのが、本書の主な論点である。その議論はシンデレラの話よりついていきやすい。

なお、アメリカ北西海岸インディアンの冬の祭を記録したフランツ・ボアズのことが出てくる(p.169-)。ボアズは Steven Pinker の “The Blank Slate” にも重要な学者として出てきて、文化という言葉を、美術、芸術でなく民俗の営み全体を指すものとして使うようにしたのは Boaz からだという。その本では Boaz を批判的なコンテクストで取り上げているような記憶があったが、見返してみると、彼の弟子の Ruth Benedict や Margaret Mead、さらには言語学の Sapir や Whorf が批判されているので、Boaz 自身は批判の対象ではなかった（Whorf は Boaz の弟子で、Sapir は Whorf の弟子）。

岡野宏文，豊崎由美「百年の誤読」（ぴあ）

1900年からの100年間のベストセラーを100冊取り上げて、二人の若手の、といっても55年生まれと61年生まれだからそう若くはないが、とにかく軟派系というのか、エンタテインメント（娯楽小説）系というのか、そういうタイプの批評家が対談批評する。その語り口はたとえば丸谷・山崎の対談批評のアンチテーゼとなっていて、豊崎「・・・お前はアメダスかって叫びだしたくなっちゃった（笑）」

岡野「そっかー・・・」

でな調子である。

帯に「文学的評価や世間の評判なんて歯牙にもかけず、ダメなものはダメと断ずる痛快至極な文芸対談」とあるが、その評価は意外にも正統的というか平凡である。たとえば泉鏡花，漱石，芥川，内田

百間，中島敦，太宰，谷崎などは大変ほめている。意外なのは森鷗外の「渋江抽斎」の評価で，「ツライ」とか「泣きたくなった」などといっているが，どうしてだろう。僕にはとても面白く読めた作品だ。

逆の意味で意外なので堀辰雄「風立ちぬ」の評価で，
「いいよねえ，これは。なんだろう，この美しさってのは。」
とか
「比類なしです。」
「鳥肌が立つほどキレイで淋しく哀しいシーンですよ。」
とかベタほめだが，ほめすぎだろう。

この二人の意見がまたほとんどで食い違うことがないのもおかしいくらいである。一人がほめ，一人がけなすということはまず起こらない。

ここで取り上げられているのは文芸作品に限っておらず，ベストセラーということになっている。だから「頭のよくなる本」とか「怪物商法」とか「ノストラダムスの大予言」とかも入っている。それで，昭和35年を境に，「だらしな派」の低俗な本がどっと出てくるというが，それ以前はデータがなく，多くは今にも生き残っている文学作品を取り上げているからではないか。

Brian Greene, “The Elegant Universe”

この本は2000年に家族で London に行ったときに買ったはずだ。その後ほっておいたが、同じ著者の “The Fabric of the Cosmos” が昨年出て、これも評判がよかったので買い、それがきっかけでまず前の本を読む気になった。

この著者の才能はすごい。まだ若くして string theory に大きな貢献をいくつかしているだけでなく、このような一般向けの啓蒙書を、実に達意の文章と巧みな比喻で、数式を使わずに見事に書く。しかも400ページを超える大著である。新著はさらに厚くて、ハードカバーで569ページである。

とにかくこれで、アインシュタインの特殊相対論、一般相対論から、量子力学、そして両者を整合的に結びつける理論としての string理論を、かなり分かった気にさせられる。しかも統一理論としてのM理論に至るまでの最新の成果について、丁寧に説明している。

String theory の発達が1970年頃始まったというから、1967年の進学振り分けで、一度理学部物理学科に出していた志望を工学部応用物理学科（計数工学科）に変えるという選択をしていなかったら、どうだったろうという気にさせる。

P.264 に空間の tearing のたとえ話でNYの World Trade Center のツインタワーを出しているところが、この本が2001/9/11以前に出されたことを示して、感慨を催させる。

田中優子「樋口一葉「いやだ」と云ふ」（集英社新書）

査読地獄に陥っていて、普通の本がほとんど読めない。その中で、ずいぶん前からちびちび読んでいたこれを読み終えた。

江戸の研究者の田中が、明治文学を江戸との連続性に着目して語ったというのが本書の魅力である。そこで一葉と西鶴とか浄瑠璃とかの洒落本、人情本との関係が論じられる。また江戸時代の吉原との対比としての明治の遊郭の状況なども、なるほどと思わせる。

もう一つの特徴は、一葉の女としての生き方を「自分だったら」と著者の素顔を出すことによって議論しているところで、これも面白い。

一葉は高校のときに読んだきり、読んでいないかもしれない。しかし今の高校生には、現代語訳がいるらしい。

ドナルド・キーン、足立康 訳「果てしなく美しい日本」（講談社学術文庫）

このところ査読と校正などの仕事ばかりを電車ですしているものだから、本を読んでいない。その中でこの本を読み終えた。

この文庫本には3編が収録されている。第一部が「生きている日本」で、量的に全体の8割を占める。これは1958年に米国で出版されたもので、その後1973年に日本語版が出版された。第二部は「世

界の中の日本文化」と題する1993年の富山における講演記録である。第三部は「東洋と西洋」と題する1999年のザビエル上陸450周年記念国際シンポジウムの講演で英文原稿の翻訳である。ところが第三部の内容はほとんど第二部の焼き直しである。

中心の「生きている日本」は1950年代に米国人向けに日本を紹介するという目的で書かれている。今でも変わらないと思われるところと、この時代からずいぶん変わったものと思われる部分がある。キーンの視線も、この時代は案外皮肉たっぷりで揶揄的なところがある。たとえば高村光太郎の「頬骨が出て唇が厚くて眼が三角で・・・」を引くところ(p.40)。もちろんこれはキーンの見方というより、日本人が日本人を見る見方の紹介なのではあるが。あるいは第4章「日本人の一生」に描かれる典型的な日本人の一生の書きぶり。

この本が所得倍増を果たし、経済大国の仲間入りを果たしかけた1973年に日本で出されたのは面白い。それに江藤淳が簡単なあとがきを寄せていて、まず日本人による日本人論は多いことを言った後、

「外国人が日本について書いた書物が、日本語に翻訳されたり、あるいは最初から日本語で書かれたりしていれば、話はおのずから別になる。それは第一に珍しいし、・・・」

と書いているが、ベネディクトの「菊と刀」に代表されるように珍しくないし、だからその前にある

「外国人たちが自分のことをどう見ているかについては、おおむね無知なままに過ごしてきた」

というのは事実と離れているのではないかと思う。しかし、面白いのはその後で、

「謎のイザヤ・ベンダサンの最近における流行ぶりは、この珍しさ
と刺激と読みやすさとをおいて、説明することができない」

と書いているところ。江藤もこの時は、イザヤ・ベンダサンを外国人
とっていたらしい。

第二部、三部では、キーンの筆致は日本人に対してもっと暖かい。
なるほどと思ったのは、日本人が外国から猿真似と言われるように
なったのは、鹿鳴館からだ、という点である。

辻惟雄「奇想の系譜」（ちくま学芸文庫）

「奇想」の画家として江戸時代の岩佐又兵衛、狩野山雪、伊藤若
冲、曾我蕭白、長沢蘆雪、歌川国芳の6人を取り上げる。いまい
ずれも有名である。若冲の展覧会は見に行ったが大盛況だったし、
他の画家もたとえばNHKの日曜美術館で取り上げられている。日曜
美術館の放送は大体展覧会に合わせているから、関連した催しがい
ろいろあったはずだ。

しかし、本書の初版が1970年に出たときは、いずれも無名の画家だ
ったらしい。現在これだけ有名になっているのは、本書の力が大き
いようだ。それで1988年に新版が出、さらに昨年、この文庫版が出

た。ちくま学芸文庫や講談社学術文庫がこのような本を探して文庫にして出すのはありがたいことである。

口絵4枚，図版91枚が載っている。文庫だから小さい。口絵以外はすべて白黒だ。しかし，今の時代，探せばかなりがインターネット上で見つかるだろう。

辻惟雄「奇想の図譜」（ちくま学芸文庫）

本人があとがきで書いているが，「奇想の系譜」を復刊したのにあわせて，1989年に出したのだが，同じ柳の下にドジョウはおらず，さっぱり反応がなかったという。確かに「系譜」の方は「奇想」という共通項で6人を取り上げるという構成のしっかりした本で，しかもそれまで無名な画家たちであったが，その図版の与えるインパクトだけでも強烈な反応を生み出したことは想像できる。

それと比べると，本書は雑文の寄せ集めという印象を免れない。しかし，北斎の波，舟木屏風，白隠などいずれも魅力のある紹介である。最後の「かざり」の奇想も，日本人の美意識論として，なるほどと思わせる。

Truman Capote, "The Grass Harp"

誰かが新聞で薦めていたので，しばらく前にアメリカの本屋で買った。

Breadfast at Tiffany's が1958年。この本がは1951年だからそれよりかなり前である。処女作の Other Voices, Other Rooms が1948年というから、初期の作品といえよう。

The Grass Harp は中篇である。マーク・トウェインのような子供の世界、お話の世界に、美しい自然描写が混じる。舞台は南部で、それもトウェインを連想させる。善人と悪人が明確に分かれ、諧謔味に溢れる。人生には辛いことが多いが、それでも生きることは幸せだと感じさせる。

他に短編が8つ収められている。中では最後に置かれた A Tree of Night が有名らしい。Master Misery は夢を売る話。ホフマン物語を連想する。Children on Their Birthdays はよそから田舎町に来た勝気で変わった女の子を巡る話。Shut a Final Door は自分勝手に友人や女友達を次々に裏切っては破滅していく男の話。Miriam は初老の寡婦の白昼夢。The Headless Hawk は画商と絵を売りに来た不思議な女の子の話。My Side of the Matter はやはり自分勝手な男が話す、自分に都合のよい解釈による妻と妻の親類の話。そして A Tree of Night は夜行列車の中で、若い女子学生が経験する流しの女と白痴の男との遭遇の話である。

**岡田温司「マグダラのマリアーエロスとアガペーの聖女」
(中公新書)**

新書でマグダラのマリアを扱うものは初めてだそうだ。この出版のタイミングは The Da Vinci Code のヒットを受けて絶妙である。この著者のあとがきなどにはそのような記述はないが、少なくとも僕は Da Vinci Code の影響でこれを買って読んだ。

Dan Brown の小説で、キリストとマグダラのマリアが結婚しているということが出てくるが、それは聖書外典などにある話らしい。本書は図版を多用し、主に12-17世紀のイタリアを中心とした美術に現れるマグダラについて多くの記述を割いている。そのような美術解説の本としても面白い。

中村文則「土の中の子供」（芥川賞）

親に棄てられ、子供のときから暴力を受け続け、成人した現在、そのトラウマで自殺衝動にじじゅう駆り立てられる主人公が、一人称で語るという形式の小説である。きどらぬ文体ですらすら読めるが、面白くはなかった。特異な状況で経験しがたいことから、心理に関心を抱かせるということもなければ、そこを通過して新しい境地が拓けるということもない。共感も感じないし、文学的な面白さも見出せない。ある種の才能はあるかもしれないが、今後読んでいきたいと思わせる作家ではない。

若桑みどり「マニエリスム芸術論」（ちくま学芸文庫）

文庫本ながら500ページある。内容的にもあまり読みやすい書とは言えず、時間がかかった。17世紀に否定され、19世紀まで顧みられ

ることのなかった16世紀のマニエリスムと呼ばれる芸術のエポックを、多面的に論じている。一般向けの解説書でなく「論文」なので、専門家の眼を意識して書かれている。それが読みにくい一つの原因である。多くのヨーロッパにおける先行研究が、引用・参照される。

そしてたとえば、

「もし我々が、めんどろなイコノロジーの口出しをできるだけ最小限におさえて、この時代の芸術のもっとも原始的な「形態」の核をつかまえようと望むなら、それは絵画よりも彫刻をとりあげるほうが容易なのである。」(p.193)

とか、

「・・・セズネックやパノフスキーによって手をつけられており、ゴンブリッチやブラーツなども次々と新しい例を提供してくれて、また今後われわれも新しいことを発見することが許されると思う。」(p.209)

というときの「われわれ」は、一般読者を想定した「われわれ」ではなく、同じ専門分野の研究者達を指しているのである。

「文庫版へのあとがき」に

「1970年にわたしはハウザーの「マニエリスム」を訳して岩崎美術社から出版していた。これが日本で最初にマニエリスムという名前が世に出た書物である。」

と書いている。

しかし、僕は高校生のときに、マニエリスムという語を知っていた。というのは講談社の「世界の美術9 ルネッサンス」というのを買っている。これが出たのは1964年の東京オリンピックの年、高校2年のときである。定価550円、予約特価490円とあるので、美術書としては安いから買ったのだろう。シリーズの多分最初の巻だが、後は買っていない。この解説を矢代幸雄が書いていて、その補説というページ（著者名がないが、やはり矢代が書いているのだろう）にマニエリスムの説明が1ページほどついている。この短い紹介がずっと頭に残っていて、マンネリズムという翻訳日本語もここから来ているという話とともに、印象づけられていた。しかし、この40年以上前の本は、思ったよりきれいな図版が載っていて、内容も充実している。

佐藤卓己「八月十五日の神話 一終戦記念日のメディア学」 （ちくま新書）

「言論統制」に続く佐藤の力作である。

ポツダム宣言受諾は8月14日、降伏文書の調印は9月2日なのに、なぜ8月15日が「終戦記念日」として定着しているか、という問題を「メディア学」として論じている。もちろん8月15日に「玉音」放送があって、一般国民はそれで終戦を知った。また、8月15日は旧暦のお盆である。しかし、終戦記念日として8月15日が定着するのは、1955年あたりからだという。一方で、盆踊り、高校野球、戦没英霊盂蘭盆会というセットになったような催しは、戦前からの連続

性があるという。その経緯を、新聞、ラジオ、教科書という3つのメディアを綿密に掘り起こして実証する。中国や韓国が、むしろ日本に合わせて、8・15を終戦というか解放というか、記念日化してきている指摘も面白い。

青柳いずみこ「ピアニストが見たピアニスト」（白水社）

6人のピアニストを取り上げている。リヒテル、ミケランジェリ、アルゲリッチ、フランソワ、バルビゼ、ハイドシェク。

最初の4人は超有名であり、奇行も知られている。後の2人は著者が個人的によく知っているという観点から取り上げられている。といっても著名なピアニストには違いないが、僕はこの本を読むまでよく知らなかった。

著者はピアニストであると同時に物書きで、この本でもよく調べて書いている。しかし、最大の特徴は「ピアニストが見た」という視点である。だから自分もピアノを少しでも弾いていたら、もっと興味深かったろう。

しかし、面白く読んだ。取り上げられていないポリーニが方法で言及され、それも著者が直接言うのではなく引用によってだが、完璧すぎて面白くない、あるいは音楽性がない例として登場するのも面白い。

なお、福田さんに聞いたら、彼女はこの著者に面識はないが、音楽家で博士号を持っている稀有な存在だという。

遠藤秀紀「パンダの死体はよみがえる」（ちくま新書）

動物の死体を見ることは少ないが、それは都会だけでなく、自然に動物がいるところでも、すぐに食われたり処理されたりするだけでなく、動物が隠れて死ぬのだという俗説（？）を聞いたことがある。象の死に場所の洞窟には、象牙がわんさとあるというのは、作り話だろうが。

で、この本にはそういう話を書いてあるのかと思ったら、まったく違った。著者はこれを書いた当時は国立科学博物館に勤める獣医学者、解剖学者である。

動物の遺体を動物園などから無制限に集め、解剖してその秘密を解き明かす。最大のヒットはパンダの第6の指が、親指の役割で竹を掴むように進化したという従来の説に対し、その「指」の骨は掌に固定されていて、それを自由に動かすと従来思われていた3種類の筋肉は、そのような機能を果たしていない、という発見である。

同時に、この本は著者のように動物の遺体に対することのない解剖学者、動物学者への告発になっている。とくにパンダの解剖を大学の解剖学研究室で始めたとき、「臭い臭い」といって遠巻きにした

大学教授たちにはずいぶん頭にきたらしく、何ヶ所かで同じことを書いている。

これを機に、Stephen Jay Gould の The Panda's Thumb を改めて読んでみた。確かにその記述は、遠藤の発見と比べれば「誤った」記述になっているといえよう。

Doug Lee, "Concurrent Programming in Java, 2nd Edition," Addison-Wesley

こういう専門分野の本を、他の本と同様に読了したとして感想を書きつけるのもおかしいかもしれないが、専門書だとかえって、最初のページから最後のページまで読むことが少ないという事実もある。

この本はかなりマニアックな本で、読むのに苦勞した。初版を買って半分ぐらい読んでやめていたら、この第2版が出た。第2版も最初から読み直して、やはり半分もいかないところでうっちゃっていた。今回、また最初から読み始めてようやく読み終えた。

並行プログラミングの概念とさまざまは手法をパターン化して、Java によって書いている。著者は一級のプログラマに違いなく、出てくる例題にエラーは気がつかなかった。コードはかなり技巧的である。しかし、本としても、粗密なく一貫したスタイルで書き通しているところには、感心した。

ミシェル・ウェルベック, 野崎歓 訳「素粒子」(筑摩書房)

世界中で評判になった本だという。この訳書が出て、新聞の書評でもよく取り上げられた。訳文も評判がよかったが、訳者の野崎歓がこれまた駒場の教師である。しかし、まだ顔を合わせたことがない。

手の込んだ小説である。話は1998年に始まる。いや、その前にプロローグが置かれているが、最初に読んだときは、これが何を意味しているのかさっぱり分からなかった。主人公ミシェル・ジェルジンスキは分子生物学者である。この小説には、生物学、遺伝学、量子力学、相対性理論などの科学の話がもっともらしくよく出てくる。

小説は急にミシエルの出自をたどり、その祖父の生まれた1882年に飛ぶ。そして母親ジャニーヌがビートニックというかヒッピー世代に属し、一人の男と結婚してブリュノという男の子を産み、離婚して別の男と結婚しミシエルを産み、どちらの子も棄てて、カリフォルニアのコミューンに行ってしまう、という次第が語られる。このヒッピー世代への批判的言辞も、この小説の一つの流れを作る。

この小説のもう一つの特徴は、露骨な性描写である。ブリュノはもてない男だがセックスのことばかり考えている。性的に満たされない生活が続けた挙句、クリスチャーヌという女性と知り合い、二人でヌーディスト村に行って多人数でのセックスに参加し、幸福感を

得る。このブリュノに関連して、異常なセックス、卑猥な言葉、侮蔑語、人種差別表現などがたくさん出てくる。またブリュノは暴力的でなく、むしろ暴力、いじめを受けてきた人間だが、ディ・メオラという人物に関連して残酷な暴力描写がある。これらがこの小説にスキャンダラスな評判を立てるのに寄与したろう。

ブリュノの幸せはすぐに終わり、クリスチャーヌは自殺する。ミシエルも幼友達のアナベルとよりを戻すが、それもアナベルの末期癌と自殺で終わる。

こうして人生は苦しみに満ちたもの、というメッセージが伝えられる。ところがエピローグで、ミシエルのその後の遺伝子を完全に制御し、両性生殖を人類がやめる方向に導く大発見により、人類は三度目の形而上学的変異（一度目はキリスト教、二度目は唯物論）を遂げる、というSFの世界になる。そしてプロローグの語られた時点は2080年代ごろであることが明かされる（訳者はあとがきで2200年代と書いているが、間違いではないか？）。

まあとにかく変わった小説だが、楽しめた。

小熊英二「<民主>と<愛国>」（新曜社）

大作である。1000ページ近い。

力作でもある。戦後のナショナリズムと民主主義に関する言説を精査して、その変遷過程を見事に描く。

たくさんの引用があるが、それで散漫な印象を与えずに、きわめて統一感のある叙述を作る。厚いので読むのに時間がかかるが、持ち歩くことができれば、あるいはまとまった時間を投入できれば、一気に読めただろう。それほど読みやすいし面白い。

一つの論点は、戦後を第1段階、1955まで、第2段階、1980年代まで、第3段階、それ以降と、と分ける点である。多くの戦後民主主義に対する批判が、第2段階で作られた誤った、あるいはずれた第1段階のイメージに対して行われているという。その論拠として、同じ言葉、たとえば「市民」とか「近代」という語が、その時々で異なった意味で使われていることをあげる。

多くの知識人が詳しく取り上げられる。肯定的に取り上げられているのが、丸山真男、竹内好、鶴見俊輔、小田実、等。否定的に取り上げられているのが、吉本隆明、江藤淳。その位置取りに大いに共感するが、肯定的な評価と否定的な評価の説得力も高い。

しかし、佐藤卓己にしても小熊英二にしても、若手で有能な研究者が出てきたものである。佐藤が1960年生まれ、小熊が1962年生まれ。小熊は学部は東大の農学部だが、駒場の国際社会で博士を取っているらしい。

石毛直道、森枝卓士「考える胃袋―食文化探検紀行」(集英社新書)

石毛という人は国立民族学博物館の教授だった人で、食文化の研究者だという。京大出身で今西錦司、梅棹忠夫などの系統。

森枝という人は写真家で、東南アジアを中心に写真を撮る傍ら、その地の料理、酒を研究してきたという。

二人とも自分で料理をよくし、いろいろな酒をよく飲む。その二人が「アルコール抜き」で語り合った内容を本にしたもの。対談ベースの面白さはあるが、やはりお手軽に作った本という印象は否めず、工夫によってはもっと面白いものになったろう。それでも魚醤の話、麺の話は面白い。

三島由紀夫「春の雪」(新潮文庫)

「豊饒の海」4部作は、親父が買っていたが、誰かが持っていったらしく整理した親父の蔵書の中にはなかった。三島の小説はある程度読んできたが、これには手を出さないできた。新潮文庫でこの4部作を買ったのは、1996年らしい。

その理由は、美季子が新潮文庫のキャンペーンで文庫カバーの裏についている切取りマークをあつめていたからである。一緒に逗子の島森書店へ行って、10冊近く買った。いずれ読むだろうというつもりで買ったが、そのままほってあった。

今になって読んだ理由は単純で、「春の雪」が映画化され今上映中だからである。暇を見つけて見たいと思う。

豊饒の海については批判的な評をいくつか読んだ記憶がある。しかし、「春の雪」だけみても、実にうまく作られた小説だ。三島らしいきらびやかな文章表現だけでも十分楽しめるが、ストーリーがよく工夫されている。

聡子が禁忌の存在になって清顕は初めて本気になり、破滅的な恋の道を進むという設定はうまく考えられている。それまで作者は清顕を皮肉を込めて描いていたが、ここから真のヒーローになる。一方、聡子は最初からずっと美しく一貫した存在として描かれている。

しかし、別れた後の清顕の不具な学生に同情するエピソードなどはとってつけたようであり、取り持ち役の老婆蓼科が実は、という展開など作りすぎである。

ただ、本筋に関係ないプロット、たとえば本多が裁判を傍聴する場面などは、後に続く編への伏線なのであろう。

三島由紀夫「奔馬」(新潮文庫)

この巻で、「豊饒の海」4部作が輪廻転生の物語として構想されていることが明らかになる。またこの巻は神風連に感化された右翼青年のテロルを扱っていて、三島自身が自衛隊市谷駐屯地に突入し割腹自殺した行動に直結するものとも読める。

主人公飯沼勲が「神風連史話」という本に心服して、本多を含め多くの人に読むことを薦める。その「神風連史話」がそのまま作中に埋め込まれている。これも三島が資料を基に創作したものに違いがない。その文体は本文とほとんど同じで、自然描写や比喻の交え方まで三島風であるのがおかしい。

勲のテロの計画は、いかにも未熟で稚拙なものに描かれている。そして、三島らしく、それが不首尾に終わるプロセスに、父や槇子や佐和や堀中尉がからんださまざまな仕掛けが施されている。こういういかにも小説的な扱いと、実際の自分の行動がどう結びつくのか不思議な気がする。

佐藤卓己「キングの時代―国民大衆雑誌の公共性」(岩波書店)

佐藤卓己の本は、まず「言論統制」を読み、その後に出た「八月十五日の神話」を読んだが、その前にこの大冊が2002年に出て、サントリート学芸賞を取っている。逆の順序で読んだが、「言論統制」と「八月十五日の神話」という2つの新書の源がこの大きな仕事であったことは、歴然としている。実際、鈴木庫三は本書にちょっとだけだが出てくるし、玉音放送を含めたラジオの話も、キングという雑誌が「ラジオ的・トーキー的雑誌」であったという文脈で、かなり詳しく取り上げられる。キングは1925年、すなわち大正14年に創刊され、最盛期には120万部以上を売った。戦後も生き続け、1957年に廃刊となる。

キングは野間清治が起こした大日本雄弁会講談社の、繁栄の中心となった雑誌であった。野間はいわゆる立志伝中の人と呼ばれ、あくの強い特異な人物であつたらしい。その野間の伝記的な部分にもかなり記述が当てられ、それだけでも面白い。「キングの時代」という表現には、野間が雑誌界の、また報知新聞を買収したので広くジャーナリズム界の、さらには「私設文部大臣」といわれたように大衆教育の世界での、「キング」であつたという意味も込められている。それは著者の創案ではなく、野間が生きていた時代からそういう言い方があつたらしい。

雑誌キングは岩波文化と対照的な大衆文化の象徴であり、戦争に至る国策、ファシズムを扇動した、というのがこれまでの評価だという。それは大正デモクラシーや教養主義へのアンチテーゼであり、戦後の民主化で厳しく批判され、方向転換したが及ばず衰微した、という見方である。著者はそれに対して連続性を見る。大正デモクラシーが大衆の参加を準備し、大衆が「国民化」される公共空間をキングが作った。戦後の復興、経済成長も同様な国民参加の構図だという。そうかもしれない。実際、キングが売れに売れた1930年代の様子を見ると、戦後のテレビが同じ役割を果たしているのだと、誰でも気づく。しかし、キングに代表される講談社ジャーナリズムを1930年代に「駄菓子ジャーナリズム」と鋭く批判した(p.45)大宅壮一が、1950年代にテレビによる一億総白痴化を唱えたという、先見性と一貫性は見事である。

佐藤は33年分のキングをおそらくすべて読んだだけでなく、関連するさまざまな資料を渉猟している。ただ、キングでおそらく重要であったと思われる漫画や挿絵についての言及は、全然ないわけではないが比較的少ない。その辺はやはりキングが想定した読者層とは異なる知識人、文の人だから、というのは表層的な皮肉だろうか。皮肉といえば、この本が岩波から出ているのも皮肉である。本書では、ステレオタイプの「岩波文化対講談社文化」論への批判が出てくるが、それは岩波も講談社と同じ穴のムジナ的なところがある、という論調 (p.65) だからである。

2004年

Edward Rutherfurd, "London the Novel"

これを買ったときは、いつになったら読む気になるだろうかと思った。最初買ったペーパーバックで1000ページあった。その本をBrusselsのホテルに忘れてきたためにロンドンで買い直したが、その版は活字が大きくて、なんと1300ページある。

最初にこれを買ったきっかけは、例によって翻訳が出てその書評が新聞に載ったのを見たことである。書評で面白そうだと思っただけでなく、翻訳は上下2冊でそれぞれが5000円する。ペーパーバックで買うと1冊でよくて、しかも\$10ぐらいだ。今の版は£8である。

10月に思い出して、孝子に送ってもらって（考えてみれば送料と、買い直し代と、後で余計に金をかけている）、読み始めた。途中で失くして買い直すまでの期間もあったが、とにかく読みきるのに3ヶ月近くかかった。その分堪能した。

よくできた物語集である。要するに「お話」だ。日本でいう大衆小説のジャンルか。いずれも巧みに作られ、登場人物、プロットにむだがなく、皆からんでくる。最後に仕掛けがあることが多いが、大体メデタシメデタシである。かといって勧善懲悪の臭みが目立つということはない。複雑な心理描写や思想性がない代わりに、ロンドンの歴史という背景が大きな強みとなっている。著者はその歴史に

ついて該博な知識を持つだけでなく、その取捨選択、プロットへの絡ませ方、に特別のセンスを見せる。歴史上の人物も数多く登場するが、それらは主人公ではなく、活躍するのはあくまで著者が創造した金持ちから貧乏人まで幅広く含むロンドン市民である。だから歴史小説とはいえない。

ロンドンに2ヵ月半暮したので、多くの地名になじみがあり、それがこの小説への興味を深めた。そういう意味では絶好のタイミングの読書であった。しかし、ずいぶん時間を使った。

陣内秀信「ヴェネツィア 水上の迷宮都市」（講談社現代新書）

フィレンツェ行きの車中で高階の本を読了したのと同じような戦略で、この本をヴェネツィア行きの車中で読み終えた。

今気がついたが、この人は1947年生まれで東大の建築出というから、われわれと同学年で、西やもう一人の玉井と一緒にかもしれない。イタリアの都市についてよく書いているようで、森まゆみの「「即興詩人」のイタリア」でも、ナポリでこの陣内の常宿のホテルに泊まる話が出てくる (p.225)。

この本は都市論の話なので、高階の本のように観光ガイドブック代わりに使える部分は少ない。しかし生きている町の様子は分る。講談社現代新書という軽い本ながら、10章の構成はきちんと取れていて、その表題が、浮島、迷宮、五感、交易、市場、広場、劇場、祝

祭，流行，本土，と工夫されている．この見出しを見るだけでもヴェネツィアという都市の特徴が浮き出してくる．

小松英雄「徒然草抜書」（講談社学術文庫）

この本は多分，東大出版会のUPの4月号で毎年載せている新入生向けの読書特集で，誰かが薦めていたんだと思う．しかし，講談社学術文庫ではずっと絶版のままだった．1年ぐらい前に神田の古書店で講談社学術文庫の絶版ものを揃えているところがあって，これを見つけた．

今度の旅行にこの本を持ってきたのは，ヨーロッパ文化の中で1冊ぐらい日本の古典文学について読むのもいいのではないかと思ったからである．しかし，読んでみるとその思惑はかなり外れた．

この本は徒然草の内容を鑑賞する本ではない．徒然草の中から5つのごく短い断章を選び，その解釈につき文献学的な立場から微に入り細を穿った論考を進め，従来の「通説」が間違っていることを主張する．通説を批判する論調はかなり攻撃的で，そのためか，あるいはここで主張されていることにその後異論が多く出たのか，その辺が絶版の理由なのではないかと憶測させる．実際，この本の奥付は1990年に第1刷発行，1994年7月15日第5刷発行となっていて，第5刷まで順調に出たのに突然絶版になったという印象を与える．買った本は古本ではなく，ゾッキ本というものと思うが，多分これが一番最新の刷ではないだろうか．

「蜷という貝」の議論はちょっとおかしいと、少なくとも途中までは思った。

「みなむすびといふは糸を結びかさねたるが蜷といふ貝に似たれば
いふとあるやん事なき人おほせられき になといふはあやまりなり」

これを素直に読むと、最後の「にな」が誤りというのは貝の呼び方ではなく結びの呼び方だと取れる。というのは「みなむすびといふは」という主題提示があって、それが続いているので、第2文の主題も「結び」だと思うのが、日本語の文章法だと思うからである。それを小松は

「・・・この文章の書き出しは、「みなむすびといふは・・・」となっているのですから、それは最初から動かしがたい語形として前提されている、と考えるべきでしょう」

という強引な議論で、誤っているのは貝の名だとする。結論的にはそうかもしれない。というのは貝の方は「ミナ」が「二ナ」になったことが跡づけられているのに、結びの方はそのような変形がなかったらしいからである。しかしどうも釈然としない。

田崎真也「飲んで識るイタリアワイン」（柴田書店）

もっと早く読んでいればイタリアでまじなワインをもっと飲めたかもしれない。伝統的なDOC, DOCGから離れた新しいワインがこの20年ぐらい作られるようになったという知識を、初めて得た。知らずに買っていたAntinoriのワインなどがそれらしい。

田崎の香りのかぎ分けはすごいが、合わせる料理は基本的にその香りに近いものである。別種の香りを合わせて別の効果を生むということはないのだろうか。

西川治「イタリア半島「食」の彷徨」（小学館文庫）

この著者は料理写真家でミラノしばらく住んでいたといい、またイタリア各地を旅行して食べて回っている。文庫本だが鮮明なカラー写真がかなり収められて、旨そうである。文章は雑だが、それなりの面白さはある。

料理の Carpaccio は画家の Carpaccio から取ったことをこの本で初めて知ったが、

「・・・僕は画家であったカルパッチオのことを、もっと知りたくなった。そこでイタリアに住んでいる友だちに図書館や美術館へ行ったり、辞書などで調べてもらったが、かいもく分らないらしい。」
(p.110)

というのにはびっくりした。さらに、調べても調べても分らなかったのに、住んでいたミラノのブレラ美術館にカルパッチョの絵が1枚あることを、ひよんなことから知ったと書いている。ヴェニスに行けば、いやというほどカルパッチョの絵があるというのに。

金原ひとみ「蛇にピアス」

綿矢りさ「蹴りたい背中」(芥川賞)

「蛇にピアス」は異様な話である。しかし小説としては面白く読ませる。変だと感じたのは、「アマ」がいなくなった時の主人公の狼狽ぶり、悲嘆ぶりが、それまでの主人公の行動と相容れない感じがすること。ところがアマを殺したのが「シバ」らしい、となると急にシバを守ろうとする。つまり殺人犯として捕まるのを防ごうとする。その行動はアマに殺人の疑いが生じたときの行動とまったく重なる。

文章としては地の文に「私から言わせてもらえば」といった表現があるのは気に入らなかったが、全体としては悪くない。

「蹴りたい背中」はタイトルがぴったりだと何人かの選考委員が言っているがその通りだ。

Ian McEwan, "Amsterdam"

この本は Imperial College の本屋で買った。

実によく作られた小説である。1998年の Booker 賞というのもむべなるかなと感じる。最後、Clive と Vernon が殺し合う必然性は弱いですが、とりあえず十分な伏線が張られてはいる。文章もうまい。うますぎて時々分らないところもある。

大貫隆「イエスという経験」（岩波書店）

簡単な感想を書いて大貫さんに送った。それを写しておく。

「イエスという経験」を拝読しました。著者の口吻と興奮が伝わってくるようで、こちらも一気に読みました。私は中高がカトリックの学校だっただけでなく、幼稚園と小学校の一部の期間もカトリックの系統のところに通う経験をもち、その意味で聖書は身近な存在でしたが、正直なところ身を入れて読んだことがありません。その私でも目の覚める思いでした。

誠に素朴な質問ですが、イエスの死後、「解釈学的事件」を経て、原始キリスト教は「基本文法」を獲得したということですが、その後キリスト教がヨーロッパであれだけ強大な力を持ったのは、そのような「基本文法」を獲得したがゆえである、ということはいえるのでしょうか？ 少なくとも「にもかかわらず」ではないんでしょうね。

須賀敦子「トリエステの坂道」（白水社）

フィレンツェのレストランに忘れてきた本である。帰ってきて買い直して読んだ。本の題名は最初に置かれているエッセイから取られている。これは詩人サバを偲んでトリエステを訪れる話である。時期は須賀がミラノから日本に帰国してから後のことである。

しかし、これ以外の文章はほとんどミラノにおける須賀の生活、とくに彼女の夫の家族達の話である。須賀の結婚相手は大学出のインテリだが、生れたのは貧しい鉄道員の家で、その父も早く亡くなっているし、兄と妹も結核で若死にしている。そのようなイタリアの

中下層の人々の様子が、途中からは著者の義父とか義弟といった距離ではなく、小説家のような眼で語られる。しかし、それは小説的脚色や技巧を加えているという意味ではなく、語り手の位置を変えているというだけである。その距離のとり方が、揺れ具合も含めて絶妙である。

三浦篤「まなざしのレッスン」（東京大学出版会）

これも駒場ものである。しかし、この三浦という人にはまだ会っていない。総合科目「美術論」の講義を基にしているという。「14世紀から19世紀初め頃までの伝統的な西洋絵画を対象にして、主題別にその見方、考え方」を話すという意図で作られている。この間のヨーロッパ行きの前に読んでおけばよかったかもしれない。高階秀爾とか若桑みどりとかこの手の本は結構読んできたが、しかしなかなか勉強になった。

全体が12章である。やはり講義をベースとするとこのくらいの量になる。ページ数も270ページ（僕の本が13章270ページ）。図版が175、他にカラーの口絵が12点。本文の白黒図版はものによるが、一般にあまり解像度はよくない。講義ではどうしたのだろうか。プロジェクタを使ったのだろうか。原図はどこから取ったのだろうか。なお、少なくとも2つの図版の年表記に誤植がある。

村上春樹「ダンス・ダンス・ダンス」（講談社文庫）

ミラノにいるときに Geneva 近郊の Lehti 夫妻を訪れて、2晩泊めてもらった。そのとき Teuvo が貸してくれた英訳本を60ページほど読み、日本に帰ってきてからこの文庫本を買った。

初めの方で、むしろ英語のほうが歯切れがよく感じたというのは、ちょっと面白い。一つは文体の慣れの問題もある。村上特有の文体に慣れてきた後半は、そのリズムに読むほうとしても乗ってきた気がした。英文の翻訳者はまた固有の文体を作り出していたのだろう。それと英訳は、直接原文と対照したわけではないが、かなり部分的な省略をしているのではないか。英訳で読んだ60ページ分が、文庫で120ページあたりの所までだったと思う。

大江健三郎以上にアブストラクトな世界である。一方で音楽、とくにポップスは、歌手・グループ名、曲名ともやたら出てきて具体的であり、年代も正確である。よくいろいろな酒を飲む。料理をする。そういうところも具体的、リアルである。

会話はリアルでないが面白い。人物もリアルではないが、巧みに描かれている。くだらないギャグもあるが、質のよいおかしみもあちこちにある。その辺が人気の理由だろうか。

結局しかし、羊男によってつながれているというのが、何なのかよく分からない。

岡本薫「著作権の考え方」（岩波新書）

この著者に会ったことはないが、著作権情報センターの委員会で著作権課長としての「岡本君」の噂は時折耳にしていた。しかしそういう役人が書いたものだからと思ってあまり期待しないで読んだところ、これがとても面白かった。

- ・知的財産権は私権であって規制ではない。
- ・知的財産権はルールであってモラルではない。
- ・知的財産権における権利は「無断で・・・されない権利」という意味で、「・・・できる権利」と違う。
- ・実用品のデザインは保護されないので、三越の包装紙に著作権はあるが高島屋のにはない。
- ・世界中の著作権法で、「映画会社」と「放送局」は特別の優遇を受けているが、これはどこの国でもこの二つの業界の政治力が強く、ワガママが通っているからである。
- ・アメリカは保護水準がもっとも低い。
- ・著作隣接権は単に政治力の強い業界に付与されているものである。(p.60)
- ・「伝達行為における工夫や準著作性を評価して・・・」などという説明自体が、学者や専門家による「後付けの理屈」だ。

といった眼から鱗が落ちる話がたくさんあるが、とくに第5章「新しい「法律ルール」の構築」、第6章「「契約」と「ビジネス」ー日本の弱点」は実に明快な議論の展開で、感心した。この人は東大の理学部出身で文化庁に入ったと奥付の略歴にある。

Richard Fortey, "Life, a natural history of the first four billion years of life on earth"

この本も実に長いこと時間をかけて読んだ。読み始めたのが“London, the Novel”の後だから、1月のミラノだろう。3ヶ月もかかった。本が長いことも長いが（といっても本文は322ページ。ただ活字が小さく詰まっている）、文章が読みやすすくない。一つは大量に出てくる生物名。ラテン語はもちろん英語名でも未知の言葉ばかりである。英和で和名を見ても分らないが、感じが少し分る。もう一つはこの人のイギリスの知識人らしいペダンティックな語彙。

Stephen J. Gould に対抗意識を燃やして書くものだから、文体も文学的な引用も相当に気取っている。しかし、導入の学生時代の Spitsbergen での経験の語り口は巧みで、引き込む力がある。

ある意味で London と同じような長大な歴史物語を読んだような感じがする。もちろん、著者自身がそれを意識している。しかし、正直なところ、読み終えてやれやれという感じもする。

丸山茂徳、磯崎行雄「生命と地球の歴史」（岩波新書）

R. Fortey の Life を読んだので、かなり前に買ったこれを読んでみた。読みにくい本である。磯崎さんに難しかったといったら、岩波新書は「日本の歴史」には上中下3冊もの量を与えているのに（井上清のもののことだろう）、地球の歴史は1冊に収めろといってページを削られ、冒頭の部分がなくなって全体の構成が分りにくくな

ったと言っていた。しかし、それだけでなく、あまり解説が丁寧でない。「丸山は」と筆者を明示しているところが何ヶ所かあるが、磯崎さんがどの部分を書いたのかよく分からない。しかし、駒場の人の本を読むのはいずれにしても面白い。

榊原悟「江戸の絵を愉しむー視覚のトリック」(岩波新書)

絵巻のように開いて見る、襖絵のように動く、掛け軸のように縦に開いてみる、といった動く視点。寄せ絵、見立て、小口、などのトリック・遊び。猿の図像学。といった話である。それなりに面白いが、眼から鱗、というほどではない。

この人には、「日本絵画のあそび」という前作があるらしい。

桐野夏生「OUT」(講談社文庫)

この作家の評判は聞いていて、昨年刊行された「グロテスク」も書評で好意的に取り上げられていた。そう思っていたところへ、ミラノから帰ってきた頃、この「OUT」がアメリカのエドガー賞の候補になっているということで、「日本ミステリー初の快拳」と騒がれていた。で、ミーハー的と思いながら平積みの文庫本(上下)を買ったものである。

確かにたいした筆力である。構想もしっかりしている。大変知的な作家と思われるが、対象の主人公や登場人物はすべて下層階級の人

間で、インテリジェントな人間達ではない。それで、単純にはその人物の心理、葛藤、判断に共感できない。

その中で、しかし、雅子という主人公をある種の魅力ある人物像として描くことに成功している。対する佐竹は魅力的とはいいがたいが、しかしやはり存在感がある。そしてこれらの人間達の行動にリアリティを持たせてる。不思議な小説である。

山本洋三「栄光学園物語」（鎌倉春秋社）

これは服部がわざわざ買って届けてくれた本である。山本という著者は16期生、つまりわれわれの2年下で、現在栄光の国語の教師である。面識はない。

前半は学校の歴史で、既存の資料やデータによっている。後半は著者の半生記を栄光に重ねて描いている。その私的な思い出話が案外面白い。最後に養老孟司等との座談会が付いている。

渡辺正雄「文化としての近代科学 歴史的・学際的視点から」（講談社学術文庫）

読みやすい本だが、Pinker の The Blank Slate と並行して読み、意識してペースを合わせて読んできたので時間がかかった。それでもやはり先に読み終えた。

著者は村上陽一郎よりさらに世代が上の人である。東大にいたらしいが駒場かもしれない。そしてICUに移ったようで、これも村上に先行する。

そういう世代のせいか近代科学は西洋の知の所産であり、日本や東洋では生れなかったもの、というきわめて素直な史観によっている。序章に「日本人にも科学ができるか?」という仁科芳雄のボーアへの質問を引き、これが意味のある疑問だとする。しかし、

「・・・森永氏は、歴史的背景を含めた西洋と東洋の相違を意識して初めて大きな可能性が出てくると考えているのである。筆者も森永氏の見解に全く賛成であり、本書の後の方で、日本的アプローチが西洋的な科学とうまく結びつき、大きな成果をあげた具体例を紹介しようと思う。」

と書く。それでもその具体例の紹介（第9章）のトーンは、やはり日本の特殊性を強調するように見える。

もちろん、近代科学の礼賛という単純な立場ではない。環境破壊の第一の責任は近代科学、あるいはそれを生み出したユダヤ・キリスト教的西洋の世界観にあるとする。しかし本書全体を通じて感じられる著者の論調は、総じてヨーロッパの作ってきた近代科学への敬意の念と楽天的な受容であるように思う。

Steven Pinker, "The Blank Slate"

読むのにずいぶん時間がかかったが、すごい本である。よくこんなものが書けるものだ。

論旨は明快である。人間の脳は何でも書き込める真っ白な板ではない。遺伝子により生来的に決められている分が半分はある。

これだけの主張を440ページにわたって延々と述べるが、しかし飽きさせない。縦横の引用があり、それだけでも著者のすごさを感じる。文章は平易だが、表現が綿密に計算されている。内容は哲学的にも文化社会論的にも高度である。

タブーへの挑戦（人種問題、フェミニズム、．．）という意味で、勇気ある書でもある。しかし、もちろん冷たい視点ではなくヒューマンな精神に溢れている。また、啓蒙への情熱という点で、そのパワーには脱帽せざるを得ない。日本人にはこれだけしつこく説明するというパワーはない。

Jared Diamond と共通する部分が多い。テーマとしても art についてなど、類似するものが多分にある。

夏目漱石「彼岸過迄」（岩波漱石全集）

「門」以来久しぶりだ。「彼岸過迄」もこれまで読んだことがなかった。森本の話、敬太郎が松本を探偵する話、松本の子が死んだことを語る千代子の話、須永の話、松本の話、と明確なまとまりのあ

る話から構成される。しかし、相互に関係があり、前の方で後の話の伏線が張られたりして、相当構造が考えられている。

占いを登場させ、それと最初の森本の話のステッキを結びつけ、探偵で謎を追うなど、新聞小説を意識したストーリーの工夫が見られる。しかし全体としては、やはり地味な味の小説である。

中心は須永と千代子の関係である。須永の煮え切らなさや嫉妬は分りにくい。ただ、とくに仕事をせず親の残した大きくはない資産で無為に過ごすインテリという漱石の小説によく出てくる類型として、感情を素直に表さないという気分は分るところもある。もう一人、松本もこのタイプとして設定されている。しかし、須永の鬱屈の原因が、母が実の母でなかったところにあるという展開は、あまり説得力がない。

漱石の五女ひな子の急逝を踏まえて書かれている「雨の降る日」は、他の話とのつながりは悪いが、ひな子の誕生日に筆を起こし同女の百か日に脱稿して、「小生は亡女の為好い供養をしたと喜び居候」というだけあって、心を打つものがある。

藤田真一「蕪村」（岩波新書）

萩原朔太郎の「郷愁の詩人と謝蕪村」を読んだが、今度はこういう新書が出ているのに気づいた。

本書でもっとも力が入っているのは、第6章の「春風のころろ「春風馬堤曲」の世界」である。実際、あとがきによれば当初の著者の企画は「春風馬堤曲」を中心にすえるというものだったという。この作品については森本哲郎でも読んだし萩原朔太郎でも読んだが、やはり本書の解説がもっとも充実していた。

この詩は何度読んでも新鮮だが、序の中の

「容姿嬋娟トシテ癡情憐レムベシ」

とか、3段目の

「裙ヲ裂キ且ツ股ヲ傷ツク」

という表現には強いエロティシズムを感じる。それはこちらに漢語の知識がないために、語感にずれというか誤解があるせいだろう。しかし誤解にしても漢字が喚起するイメージは強い。

この章だけでなく、第1章「蕪村発見の軌跡」では明治以降、子規に始まっていかに蕪村が「発見」されてきたかの歴史が語られ、そこで朔太郎の「蕪村」も出てくるのも面白いし、第3章「俳画の妙」にも感心した。

Matt Ridley, “nature via nurture”

Steven Pinker の The Blank Slate と大体重なるテーマを扱い、主張・立場もほぼ同じである。Pinker の本が先に出ているので、Ridley も書きにくいところがあったのではないだろうか。

最初的话题を人間の遺伝子が30,000個「しか」見つからなかったの
で、Observer 紙(2001年2月11日)で、“Environments, not genes, key
to our acts” という大見出しが出たことから始めているが、これは
Pinker の本にもあった話なので、かなりの重複が全体にあるか思っ
た。しかし、同じ話題を取り上げても意識的にかずいぶん異なった
書き方をしており、また Pinker にはない話も、当然ながら多くあっ
て、むだに読んだという感じはまったくない。

しかし、今、Pinker の本を調べて気づいたが、この
“Environments,...” の見出しは、そちらでは The Guardian のものと
され、同じ日の Observer の社説に、「これは左翼には慰めで右翼
には頭にくるものだろう」という解説が載ったとあって (p.76)、ど
うもこちらの方が正しそうだ。しかし Ridley は Pinker の本を読ん
でいるのだから、そんな間違いを犯すのは変だという気もする。

Pinker と比べて Ridley の特徴は、生物の遺伝子研究を全面的に中心
としているところにある。その意味で9章 The seven meanings of
'gene' などにはよくその特徴が出ている。

一方、10章 A budget of paradoxical morals でとりあげられるテー
マ、parents, peers, meritocracy, race, individuality, free will はすべ
て Pinker の本で詳述されていて、目新しいものはない。gender が
見出しになっていないのが、むしろ目出づ。

司馬遼太郎「街道をゆく34 大徳寺散歩 中津・宇佐のみち」（朝日文庫）

この文庫本は京都四条のジュンク堂で買った。しかし、その京都では二条城以外に何も見る暇がなかった。

大徳寺散歩では禅宗について多くが語られる。大徳寺の開山大燈、一休、沢庵という系譜、あるいは利休や三斎細川忠興の話がある。永徳や小堀遠州も出てくる。

司馬の筆はいつものように自由に逍遙する。その中に意外な話もある。ダダの高橋新吉は

「・・・臨済宗の老師足利柴山(1859-1959)のもとで参禅し、在家ながら、終生の弟子になる」(p.29)

のだそうだ。そして大燈の文章から取った「億劫須臾」と書いた墨蹟を残しているという。たまたま並行して読んでいた「ベンヤミン「複製技術時代の芸術」精読」に「ダダイズムの評価」という節があり、妙な符合を感じた。

中津・宇佐は八幡宮の話である。宇佐には行ったこともないが、最近の少しでも関連する事柄を挙げるなら、Jeff 達を鎌倉の鶴ヶ丘八幡に連れて行ったことだろう。宇佐の神託、道鏡、和氣清麻呂の話。八幡はハチマンでもヤハタでもあり、ヤハタは秦人の神ということではないかという。秦氏は朝鮮半島から来た農民だという。芳永の方の孝子の祖母の実家が秦である。

中津ではもちろん福沢諭吉が取り上げられる。またここでも領主だった細川忠興の話がある。

多木浩二「ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読」 (岩波現代文庫)

多木による解説が9章、130ページほどあり、その後にベンヤミンのテキストの和訳がついているという構成の本である。ベンヤミンがパリ亡命中に書かれ、その仏語訳が1936年に出版されたという。ベンヤミンはその後1940年、ドイツ軍のパリ侵攻のため、パリを脱出。ルルドに出、マルセイユからアメリカに渡ろうとするが、出国ビザが取れずに失敗。ピレネー越えを決行し、スペインの国境の町ボル・ボウに入るが、スペイン警察による強制送還の脅しにあい服毒自殺。

「ベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』というと、アウラ、礼拝的価値、展示的価値の三題噺のように思われがちだったが」
(p.109)

多木はこれを否定し、ミメシスと遊戯空間ということを強調するための前振りに使っているが、やはりこの3つはキーワードである。それにマルクス主義の立場とそれによるファシズムへの対峙という姿勢がある。そして映画を対象としたユニークな考察。そこでは、技術・機械と人間という関係が重要な視点となる。さらに多木に就いてキーワードを挙げれば、大衆、触覚といったあたりになるうか。

とにかくデジタル・コピーの発達した現在に対して、予言的な書である。

小山清男「遠近法―絵画の奥行きを読む」（朝日選書）

図学教室の流れを汲む組織に所属しながら、遠近法についてすら理解が怪しかった。著者は芸大で図学を教えていた人で、15世紀のイタリアで開発された線遠近法を中心に、丁寧に解説してくれる。マサッチオ、ウッチェルロ、ダ・ヴィンチ、フェルメールなど、最近見た絵が取り上げられていて、楽しめた。

鐸木能光「デジカメ写真は撮ったまま使うな！」（岩波アクティブ新書）

岩波アクティブ新書で前に読んだデジカメ本は写真家が書いたものだったが（田中長徳「デジカメだからできるビジネス写真入門」）、この著者は作家、作曲家だという。一方で、パソコン、エディタなどについての本も何冊か出している。それで、カメラマンの本よりむしろ技術的、実用的な内容である。

フリーソフトでデジタル写真を修整し編集する方法を、具体的に紹介している。カメラは極力明るいレンズ（F2.8以下）を買えというのが、繰り返されるメッセージである。

潮木守一「世界の大学危機」（中公新書）

今年4月から国立大学が法人化された。ということもあって改めて大学の役割を考えさせられることの多いこの頃だが、それを狙ってこのような本がいくつか刊行されている。

この本では米国、ドイツ、イギリス、フランスの大学が取り上げられていて、これらの大学人といろいろつきあいがある割には、これまで無知であったことを知らされた。たとえばイギリスの場合、ロンドン大学の設立経緯は Anthony Finkelstein から聞いていたが、それを契機に19世紀に誕生した市民大学、そして2次大戦後の新構想大学という構図については、単に赤レンガと白タイルというレッテルについて聞いたことがあるという程度の知識だった。あるいはドイツのフンボルトの理念に基づくベルリン大学が1810年にできたのが、近代大学のはしりとされること、そこで研究をしながら教育するという形式が作られ、ゼミナールが誕生したという話も新知識である。

アメリカの大学院はそのドイツのやり方を導入して、1874年にジョンズ・ホプキンスが世界で初めて大学院を作った、ということ。フランスのグランゼコールと大学の関係。エリート養成のグランゼコールは20ぐらいあるが、中でもエコール・ポリテクニーク、高等師範学校、ENAの3つがエリート中のエリートの行くところだということ。フランスの大学改革案は提案されるたびに学生運動でつぶされ、ミッテランもシラクも失敗したこと。肝心の日本の話はあまりない。事実関係で面白かったのは、ヨーロッパでは私立大学はまっ

たかないか例外的にしか存在しなかったが、事情が違っていたのはアメリカと日本で、私立大学が多いこと。しかし、どちらも1960年から2000年までの間に大学生数は4倍になったが、拡大部分の8割が公立大学によったアメリカに対し、日本は8割が私立大学によったという (p.185)。

今後の展望を示した第6章は平凡で物足りないが、結局こんなところなのだろうか。

森本哲郎「詩人与謝蕪村の世界」 (講談社学術文庫)

森本哲郎が蕪村について書いたものを、これまでも読んでいます。というより森本によって蕪村に対し目を開かれたように思う。ただ、今探してみても、「生き方の研究」の中の短章、「中国幻視行」であちこちに、というのは見つかったが、もっとまとまったものを読んだはずだと思いながら見つからない。春風馬堤曲をかなり詳しく論じたものを読んだ気がするが。

とにかく、それからだいぶ経って、たまたま萩原朔太郎のものを読み、藤田真一の新書を読み、そして森本の原点とも言うべきこれが講談社学術文庫に入っているのを知って読んだ。元の本は1969年に出ているが、こういう本を復刊する講談社学術文庫はありがたい。

全18章、各章平均22ページ。もとが雑誌の連載だけあって、1章あたりの分量はきれいにそろっている。また1回の掲載分の独立性を

高めたスタイルの連載の性質から、重複が多い。本にする際に「すでに述べたように」などと補っているが、弥縫策でしかない。しかし、重複によって森本の主張や蕪村像が刻み込まれる効果はある。

同じような章に見えるが、各章それぞれにテーマがある。たとえば母のイメージ、弟子の句の評に見る蕪村の浩瀚な知識、画家としての蕪村、父としての師、など。中国の詩などを縦横に引き、説得力のある論を展開する。

芭蕉との比較がとても面白い。萩原が芭蕉より蕪村がいいとあれだけ言いながら、最後にやはり芭蕉かとふらつくのに対し、森本はあくまで蕪村派である。

しかし、これを書いた当時の森本は若かったから、若いときの萩原と同じなのかもしれない。とにかく、蕪村を論じる場合には芭蕉と引き比べずにはすまないというだけ、芭蕉という存在は大きいのだろう。

佐藤卓己「言論統制」（中公新書）

評判になっている本だけあって迫力がある。陸軍少佐で情報官だった鈴木庫三という人物は、石川達三の「風にそよぐ葦」でモデルにされて以来、戦前、戦中の言論統制を強圧的行った人物として、「被害者」側から一方的に悪玉として描かれてきたが、実際にはど

んな生い立ちでどのような思想を持った人間だったのかを、克明に追ったノンフィクションである。

あとがきによれば、書き出しの言葉は早くから決めてあったという。

「『中央公論社』はただいまからでもぶつつぶしてみせる！」
1941年2月26日、中央公論編集部と情報局第二部第二課の懇談会で情報官鈴木庫三少佐が「非協力的」な嶋中雄作社長に投げつけた言葉とされる。」

この本を中央公論新社から出すことに意味があったというのである。

中井浩一「徹底検証大学法人化」（中公新書ラクレ）

中公新書ラクレは大学問題をテーマとするものを何冊も出していて、同じ著者の「「勝ち組」大学ランキング」を前に読んだ。

法人化の渦中にいながら、法人化がどう進んできたかも、それで何がどう変わるのかも、よく分かっていないというのが、情けないながらも実際である。そのプロセスについては、この書で知ったことは確かにかなりある。多くの人に取材してまとめているが、まとめ方には雑なところがある。前後関係が乱れるし、繰り返しも多い。取材による人の発言が、時々地の文として著者の意見のように語られたりもする。著者の評価軸も揺れているように見える。

この人は前著で駒場を持ちあげてくれたが、本書でも東大を比較的高く評価している。それに比べ、京大、長尾さんは批判的に書かれているところが目立つ。著者が京大出身なので、身内に厳しいというところもあるかもしれない。

しかし全体に繰り返される大学人に主体性がないという指摘は、確かに自分としてもまじめに考えるべきことだと思う。

中井久夫「治療文化論 精神医学的再構築の試み」（岩波現代文庫）

この高名な精神科医の著作を初めて読んだ。その浩瀚な知識とユニークな論考は、さすがに広い読者層をつかんでいるだけのことはある。話は普遍症候群、文化症候群、個体症候群という3つの分類を巡って進められる。西洋の近代精神医学システムは、主に普遍症候群を対象としてきた。それは「標準指向型・近代医学型精神医学」だという。それに対し、個人症候群の意味を強調し、個別の「治療文化」を考える、という立場らしい。

あとがきにある「話をにぎわせるために自分を売り、家族を売り、そして友人を売りかけた」ということに相当するらしい記述、本文でポイントを落としてあるところが、とくに本書の魅力だろう。そこで豊富な体験と読書から得られた蘊蓄が披露される。その文章は、ときどき現れる奇妙な図や表とともに、ひとりよがりな感じも与える。しかし、これが中井調なのだろう。

2003年

清水徹「書物について その形而下学と形而上学」（岩波書店）

本の物体性，形而下の特性に大きな注意を払いながら，もちろんその精神性，形而上学と突き合わせて論じた本である．それだけにこの本自身の装丁，造本とも美しくできている．著者は仏文学者でビュトールの翻訳などで知られる．それで今確かめたが，中央公論から出た世界の文学に収録されたビュトールの「時間割」は評判だったが，この人の訳である．昭和39年，つまり1964年の東京オリンピックの時の出版．当時，高校2年だったので鮮明な記憶があり，何度か読もうとしたが，結局読みきることはなかった．

そういう人だから，一番力が入っているのはマラルメとビュトールのあたり，あるいは遡ってユーゴーを扱うところである．そういうと文学史のようだが，書物というものを歴史的にたどるという主題は一貫していて，冊子という形態の発明，グーテンベルグ革命と順に語られ，最後はコンピュータによる電子媒体上の書物についても議論がなされる．

とはいっても，やはりヨーロッパのとくにフランスの話である．たとえば長い歴史を持つ中国における書物は無視されている．それも専門からいってやむをえないだろうが．とにかくこの本を読むこと自体が重量感のある読書となった．

柴田俊隆「カラスの早起き，スズメの寝坊 文化鳥類学のおもしろさ」（新潮選書）

家によく来る鳥は，メジロ，シジュウガラ，ヒヨドリ，ムクドリ，スズメ，カラス，アオジ，イソヒヨドリ，ツグミ，ウグイス，ハト，トンビ，ジョウビタキ，といったところ．この冬見慣れない2種類の鳥が来ている．一つは多分ジョウビタキのメス．もう一つはモズのメスのようだ．

この本は，鳥についての気の利いた短いエッセイを60収録している．1篇は大体3ページ．鳥の習性に関するだけでなく，神話，童話，音楽などに話が及ぶ．人間社会との比較なども，科学的には危険なことながら，巧みに語る．

昔，何かでカラスやスズメは長生きで，50年とか100年とか生きると読んだか聞いたかして，そういうものかと思っていた．この本で，

「イギリスの鳥学者 D. ラックは1954年に小鳥の平均寿命を多くの統計からわずか1.5年と発表して学界を驚かせた」(p.142)

とある（p.204にも同様のデータあり）．ミヤマガラスの19歳11ヶ月という例が大変な長寿だという．どうも間違った情報がインプットされて，ずっと頭に残っていたようだ．

しかし，動物学者に日高俊隆というのがいるが，著者の名前が同じなのは，単なる偶然であろうか．

茂木健一郎「心を生み出す脳のシステム 「私」というミステリー」(NHK出版)

NHKブックスという手軽な体裁の本にしては力作である。問題はニューロンの塊の脳からいかに自己、意識が生まれるかである。もちろん現在のところはほとんど解明されていない。しかし、脳科学、心理学、情報科学でそれなりの進展がある。キーは「システム」だというのが表題にこめられたメッセージで、もちろんそれは目新しい話ではない。しかし、この人は科学に基づきながら、自分の体験や、文学(柳田国男、小林秀雄)、映画(小津安二郎)なども使って、まじめにかつ情熱的に語る。

そのキーワードは感覚的クオリアと志向的クオリア、その関連性ということだが、このクオリア(qualia: 物から抽象した独立・普遍的な特質(リーダース英和))という概念自体がそれほど明確に説明されているとはいえない。

感覚的と志向的の違いも「感覚的」である。まだまだ手探りの仮説の段階なのである。

しかし、この間読んだ酒井「言語の脳科学」(それと関連づけてこれを読んだのだが)と比べて、ミラーニューロンの扱いの違いが対照的である。本書ではミラーニューロンを衝撃的な発見で脳科学に大きな転回を与えたものと捉え、ミラーニューロンの性質は「心の理論」を可能にし、言語にもつながるとする(p.92)。酒井は

「最近になって、「ミラーニューロン」が言語の起源であるという誤解が広まっている。」(p.40)

と書く。ミラーニューロンはサルに発見されたものだから、サルには言語本能がないというチョムスキー派の立場と相容れないのだろう。

徳大寺有恒「一台のクルマがあれば人生を変えるのに充分だ」(平凡社)

うちではプレリユードを7年乗り、その後買った今のスカイラインは9年経った。変え時かというわけで、プレリユードやスカイラインを買う前にも買った徳大寺の「間違いだらけのクルマ選び」をまた買って、ざっと見た。その後、この本が出たのを知り、買ってみた。

この人は、クルマに関する文筆で身を立てているだけあって、主張が明確にある。この本は、20世紀のクルマをふりかえっていて、自動車産業史的な性格もあるし、著者の半生記という趣きもある。だから、こちらも自分のわずかなクルマの経験と重ねてみるところに興味がわく。

最初のクルマはタイ時代のフィアットで1955年か56年のはずだ。ところが

「1955(昭和30)年。この年は日本の自動車産業界にとって歴史上最も大切な年であり、今日の日本の自動車のありようを決した年であ

る。」(p.12)

そうだ。そのフィアットは p.176-183に出てくるが、そのどれだかよく分からない。写真を見る限り、ヌオーバ500（チンクエット）というやつのように見えるが、これが出たのが1957年というので、合わない。

次が1967年、免許を取った年のブルーバード。それがまた「1967(昭和47)年という時代は日本のクルマの大普及期であり、日本中がクルマ、クルマと熱狂していたときなのだ。」(p.35)という時なのである。

うちで買ったのはブルーバード410で、モデルチェンジ直前だった。そういう知識もなしに買って、後で営業の塩見さんに文句を言った覚えがある。この410はイタリア人のピニン・ファリーナのデザインで、前衛的なスタイルだったが、コロナの直線的なスタイルの方が人気が出て抜かれた。そこでこの年日産は、510を出したのである。徳大寺はこの510を傑作車だという。しかし、これはコロナに完全に負けるのである。

この頃、プリンスのスカイライン、とくにスカイライン2000GTは人気があった。そのプリンスが日産に吸収合併されたのがやはり1967年だと思う。記憶に鮮明なのは1968年の夏、立川のカシオ計算機に実習で2週間行っていた、そのときに、まだ発表前の、合併後初めて出すスカイラインを見たからである。これは1500か1600のモデル

だった。その半年後ぐらいに2000GT も出た。金成の妹がそれに乗っていた。

うちがブルーバードUに変えたのは1972年である。会社に入った年だからよく覚えている。それで会社の女の子を箱根のドライブに誘ったりした。

このクルマは僕があちこちこすってデコボコになり、結婚前の孝子が見てあきれていた。結婚後、親父たちはまた新しいブルーバードに変えたが（多分1978年ぐらい）僕はこれにはほとんど乗っていないから、あまり思い入れがない。おふくろが運転をやめるまで、逗子ではこれに乗っていた。

うちは代官山コーポラスの車庫がなかなか空かなかったので、最初にクルマを買ったのが、美季子の生まれる前年の1987年である。それがホンダのプレリウドで出たばかりのモデルだった。そして逗子に引っ越した翌年にスカイラインに乗り換えたのだから、それが1994年である。ちょうど東大に変わる頃だった。

そのときの日記を引っ張り出してみたら、孝子が「家も職場もクルマも新しくなって、新しくないのは奥さんだけね」と言ったとある。

岸俊光「ペリーの白旗」（毎日新聞社）

このきっかけになった宮地正人による「ペリーの白旗所管は偽文書である」というUPの論考を読んでいた。それでこの毎日新聞の記者である著者の本が新聞の書評に紹介されたとき、読んでみる気になった。先週末に Amazon から届いた本の一冊がこれで、日曜日に一日で読んでしまった。

大変手際よく書かれているし、この人の想像を交えた結論も妥当なもののように思われる。

Jared Diamond, "The Third Chimpanzee: The Evolution and Future of the Human Animal"

すごいの一語だ。"Guns, Steel, Germs" より前の作だが、こっちの方がもっとすごいかもしれない。

ヒトのDNAがチンパンジーと1.6%しか違っていないということを出発点とする。そして、次々と深遠な疑問をあげる。たとえば- ヒトとチンパンジーは具体的にどう違うのか

- その違いはいつ現れたか
- ヒトの子は通常一人ずつ生まれ、父親も面倒を見る。ヒトは長生きである。メスに閉経がある。なぜか。
- ヒトの子は乳離れ後も餌を与えられる。ヒトは通常一夫一婦制である。チンパンジーやゴリラよりペニスが大きい。チンパンジーは睾丸が大きい。なぜか

- ヒトはなぜ隠れてセックスをするのか。ヒトはなぜ楽しみのためにセックスをするのか。発情したときだけでなく。
- われわれはセックスの相手をどう選ぶか。婚外性交への男と女の態度の違いは何に基づくか。
- なぜ歳をとるのか。
- ヒトと他の動物の違いとしての言語，芸術，技術，農業。これらは他の動物に本当にないか。あるとしたらどう違うか。ヒトのこれらの活動はなにから発生したか。
- 薬物の乱用もヒト特有である。その理由は何か。
- 宇宙の他の星に高等生物が存在する可能性。
- ヒトとヒトとの戦い，戦争，支配。その由来と特徴。

これらを踏まえて，人類が地球環境を破壊しつつある状態と原子爆弾によって絶滅する可能性まで論ずる。なんとも壮大なテーマであるが，これらを観念的に論ずるのではなく，動物進化論や比較言語学や，その他もろもろの説得的な科学の論証に基づいて，しかし大変見事で楽しい文章で，説得的な議論を展開するのである。個々の論証がすべておざなりでなく，話としても面白いのが信じられないくらいである。

松井茂記「インターネットの憲法学」（岩波書店）

これも Diamond の本と同じぐらい量がある。370ページあって，読み応えがあった。Diamond と比べれば文章は硬いし娯楽性はない。インターネット上のわいせつ表現，青少年への有害情報，名誉毀

損，プライバシー侵害，著作権侵害などの問題を取り上げ，憲法の表現の自由との関連で，きわめてリベラルな論を展開する．主張は一貫しており，米国法に近い立場からドイツ法などには批判的である．山口いつ子さんに聞いたらよく知っていて，考えが近いといていた．後で気がついたが，謝辞に彼女の名前が出ているだけでなく，浜田さんや田島さんにも感謝している．浜田さんは本文でも何度か取り上げられていて，どちらかという批判の対象になっている．

黒崎政男「デジタルを哲学する 時代のテンポに翻弄される<私>」（PHP文庫）

上の二著と比べるとこれは実に軽い．大きな字で200ページもない新書で，内容も物足りない．編集者の努力で，新聞の連載を単行本化したもの．「<もの>から離れた情報は喜びを与えてくれるか」という設問に自らネガティブな言説を言う，しかしあいまいに，という本である．

ホッブスが「考えるとは計算することである」と1655年に「物体論」で言っていることは常識的なのだろうが，あまりちゃんと知らなかった．これがライブニッツにつながるのだ．その辺はある程度ちゃんと勉強しておくべきかもしれない．

ツヴェタン・トドロフ「日常礼賛」（白水社）

オランダ行きに合わせて読んだ本である。フェルメールの時代のフランドルの風俗画をとりあげ、それぞれが単に道德などの表象として描かれているのでもなく、純粹の写実でもなく、日常を美しく描くことで、生活の礼賛になっているのだと主張している。ほとんどの図版が残念ながらモノクロだが、それでも美しさが伝わってくる。テル・ボルフ、ヤン・ステーン、デ・ホーホ、メッツ。

今度もまた、アムステルダム的美術館に行こう。去年はレンブラントとフェルメールの画集を買ったが、今度はこれらの画家のものを探そう。

ツヴェタン・トドロフ「個の礼賛」（白水社）

この前の「日常礼賛」が17世紀のオランダの風俗画を扱っているのに対し、これは15世紀のオランダ（フランドル）の肖像画を扱っている。その前に、エジプトやローマの肖像が振り返られ、またキリスト教の枠組みの中での象徴と表象の関係が議論される。その辺は奥が深いが読みにくくもある。

中心であり読みやすいのは「15世紀フランドル絵画」の章で、ロベール・カンパン (Robert Campin)、ヤン・ファン・エイク (Jan van Eyck)、ロヒール・ファン・デル・ウェイデン (Rogier van der Weyden) を取り上げているところである。白黒のいくつかの写真だけでも、これらの画家のすごさ、しかも14世紀という時代における存在の大きさがわかる。

しかし「日常礼賛」と同様、本文で言及されながら図の載っていない絵がかなりある。それについては、Webに WebMuseum というページがあって、充実していることが判った。小林康夫がいうように、デジタル化され液晶画面で見る絵は美しすぎる感じがする。質感がないともいえるが、

しかし、恥ずかしながらカンパンやウェイデンという画家は初めて知った。ファン・エイクについても「アルノルフィニの婚約」しか知らなかったといっている。

これはしかし、明治以来の日本人の一般的な知識ではないだろうか。絵といえばまず印象派、そして遡ればイタリア・ルネッサンスである。フランドルでは、レンブラント、ルーベンス、そしてブリュゲルといったところで、フェルメールすらごく最近有名になったのではないか。司馬遼太郎の「オランダ紀行」があれだけ美術について書きながら、もっぱらレンブラント、ルーベンス、ゴッホであるのが象徴的である。ただ本書でも

「偉大なる先駆者は、その名をロベール・カンパンという。百年余り前までは、この名はいかなる意味ももっていはいなかった。」
(p.140-141)

と書かれている。

萩原朔太郎「郷愁の詩人 与謝蕪村」（岩波文庫）

たまにはこういうものを読むのもいい。森本哲郎が蕪村を称賛していたが、萩原は詩人として蕪村の作品の情操には、鮮新な、浪漫的な、西欧の詩と相通ずるものがあるという。芭蕉の「老」に対して蕪村のもつ「若さ」を評価するが、しかし萩原も年を取ってから芭蕉の良さがわかったといい、本書でも付録として「芭蕉私見」をつけて、ここでは逆に蕪村以上に芭蕉を評価するようなことも書き、一冊の書としてはやや一貫性を欠く体裁になっている。しかし、萩原がいいという

遅き日のつもりて遠き昔かな
春風や堤長うして家遠し
行く春やおもたき琵琶の抱きごころ
陽炎や名も知らぬ虫の白き飛ぶ
更衣野路の人はつかに白し
鮎鮎や彦根の城に雲かかる
愁ひつつ岡に登れば花いばら
うは風に音なき麦を枕もと
柚の花やゆかしき母屋の乾隅
月天心貧しき町を通りけり
凧きのふの空の有りどころ

など、確かによい。

宮本武蔵「五輪書」(岩波文庫)

今年、NHKの大河ドラマは武蔵で、歌舞伎の市川新之助の主役はよく合っているが、脚本、演出はよくない。まあしかし、それをきっかけに岩波文庫もこういうものを増刷しているので、買って読んだ。岩波文庫の短いものを朔太郎の「蕪村」と続けて読んだことになる。今、授業のために Jeff & Jeff の Concurrency と Dong Lea の本を持ち歩いていて重いので、もう1冊は軽くしている。

この本は弟子に伝授するために書いたものらしい。しかし秘伝というような神秘性、カリスマ性を感じさせる文章ではない。口語体に近い平易な文章である。かといって技術を細かく論じているわけでもない。気の持ち方、心構えの類の心理的な記述が多い。だから現代でも経営学やスポーツなどに読み替えられるのだろう。実際、最近少し読むことのあるアメリカで出されたゴルフの指南書などに相通じるところもある。

一方で、「剣道」の話ではなく、人を斬る、殺すことに徹した実戦的な話である。その意味ではプラグマティックであり、人を斬ることに対する心理的な葛藤などはまったく感じさせない。自分が殺されるという恐怖心についても触れるところがない。

「大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬるとふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。」(p.12)

という。

しかし、やはり和文脈の文で抽象的な議論をすることの苦労は並大抵ではない。

「今此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことももちひず」

とその点はかなり意識的ではある。任意に引けば、

「．．，よきやうに見せて、敵ちかくなつて、づんかつよくはなれて、飛付くよに見せて、敵のたるみを見て、直につよく勝つ事、足一つの光、．．」

というような文体である。擬音語を多用し、たとえを使う、など苦労している。

個人の戦いも合戦も基本は同じだとして両者を論じているが、武蔵はやはり将として合戦をした経験はないのであろう。だからその点は弱い。

あとやや意外だったのは、二刀流についての具体的な技術の話がほとんどない点で、「此一流、二刀と名付くる事」(p.26)という項はあるが、ほとんど具体的な記述はない。

Steven Levy, "Hackers"

この本は、Portland のアメリカ最大と称する本屋で買った。よく知られた本だが、この間 Crypto を読んで感心したので読んでみる気になった。5月24日の高校生講座でハッカーの話を少しして、10代の若者を鼓舞したいという意図もあった。

帰りの飛行機で読み始めたのに思いのほか時間がかかった。この間、読書に当てる時間が少なかつただけでなく、本書が450ページもある大冊のせいもある。

1984年に出た本だが、Penguin に入っているだけあって、今読んでも十分に面白い。最初が Hacker の語源ともなったMITの50年代から60年代の人たちの話。出てくる人では Peter Deutsch と Richard Greenblatt の名前ぐらいしか知らなかったが、すごい人がたくさんいたのである。次が Stephen Wozniak などの初期のパソコンを作った人たちの話。ここでも Wozniak 以外、名前を知っているのはほとんどいないが。次がゲームソフトウェア。最後に Richard Stallman が登場する。Stallman と Symbolics の敵対関係の話も知らなかった。

とにかく hacker 文化はユニークだ。こういうものとIBMと、両方を生み出すのがアメリカの強さだ。

砂原秀樹，他「ネットワークアプリケーション」（岩波書店）

わざわざ書くほどのものではないが、最近あまり本を読んでいないので挙げておく。岩波講座「インターネット」の1冊。Telnet, Ftp, WWW, RPC, NIS, DNS, DHCP, Java についてざっと書いてある。

坪内祐三「新書百冊」（新潮新書）

新潮社が新潮新書というのを始め、その最初に出したものの1つである。これを買うつもりはなかった。「文庫本を狙え！」の彼が新書というのも、お手軽な企画だと思った。しかし、5月の終わりが6月の初めに、品川駅で湘南ライナーの500円券を買おうとしたら細かいのがなく、この券売機は1000円札しか受け入れないので、駅内のかなり大きな本屋に行って、つり銭をもらうために本を探した。時間もなくあせって選んだのが結局これである。

とにかく読書時間が減っていて、Hackers を1ヶ月以上もかかって読むていたらくで、日本語で気楽に読む読書をしようと思い、これを引っ張り出して数日で読んだ。

「文庫本．．」と違って、100冊並べて寸評したものではなく、自伝風に高校・大学時代から順に読んできた新書を振り返るという体裁をとっている。それでこの人の反「戦後左翼」的気分とかサブカルチャー指向というものがどう作られてきたかもなんとなくわかる。

しかし、挙げられている100冊で、僕が読んだことのあるのは「新唐詩選」「知的生活の方法」「歴史とは何か」「私の読んだ本」「羊の歌」「日本の名著」「私の読書法」「読書論」「書斎の王様」「政治家の文章」「翻訳語成立事情」ぐらいで、1割強である。しかもほとんどが3章までに出てくるもので、4～7章は2冊しかない。

大学に入って現代アメリカ文学を極めることを目指したというが、面白いことにもっぱら翻訳で読むのである。アメリカへ行こうという気もなく、しかし日本人の書いたアメリカ留学記の類を一生懸命読む。不思議な気がするが、こう徹底すると面白くもある。

ぜんぜん出てこない分野、僕と重ならない部分は、まず理系。数学、物理、生物などまったく出てこない。それから音楽、美術、経済、言語、語学といった僕の新書のストックの大きな部分を占める分野もまったくない。

しかし感心するのは、同じ本を何度も読んでいることで、新書といえどもそのような読み方があるということには目を開かれた。

それにしても、新書が日本でこんなにはやるのはなぜなのだろうか。アメリカにはこれに相当するものはなさそうで、手軽でちょっと知的、というのは厚い本が好みのアメリカ人向きではないということか。

竹内洋「教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化」 (中公新書)

本をかいつまんで紹介するのに、やはり帯にある惹句は便利だ。安易だがそれを引いてみよう。

表側には

「読まなければならない本、というものがあつた．．。」

裏表紙側には

「1970年前後まで、教養主義はキャンパスの規範文化であった。それは、そのまま社会人になったあとまで、常識としてゆきわたっていた。人格形成や社会改良のための読書による教養主義は、なぜ学生たちを魅了したのだろうか。本書は、大正時代の旧制高校を発祥地として、その後の半世紀間、日本の大学に君臨した教養主義と教養主義者の輝ける実態と、その後の没落過程に光を当てる試みである。」

ご丁寧にも背表紙にも文句があって「本を貪り読んだ日々」で、旧制第一高等学校の流れを汲む駒場に勤める身としては、読まなければならないという気になる。

坪内の「新書百冊」とはまるで違う世界のようにも見えるが、妙に繋がる話である。ただ坪内は1958年生まれ、つまり僕よりちょうど10歳下で早大卒。竹内は1942年生まれで京大卒。この年齢の差というか、世代の違いはもちろん大きい。早大か京大か東大という違いも多少はある。

しかし、坪内はサブカルチャーを過剰に意識した、でもやはり教養主義といえそう。坪内が意識しているのはわれわれ団塊の世代かと思ったが、もしかすると、本書に書かれているような旧制高校の、また戦後マルクス主義とも結びつき、あるいは進歩的文化人、岩波文化に象徴される教養主義なのかも知れぬ。

驚いたことに本書に坪内の名前が出てくる。

「とすれば，評論家坪内祐三の永井荷風についての以下の言明も納得しやすくなる．坪内は岩波文化，つまり教養主義文化と永井荷風の作風の非親和性についてつぎのようにいう．」(p.180)

なお，この本はこの手のものには珍しく詳しい索引がついていて，この引用を見つけるのも簡単だった。

日本の高等教育，エリート教育の歴史としても読め，日本社会の階級論としても読め，なかなか内容があった。

丸谷才一「輝く日の宮」（講談社）

丸谷としては「女ざかり」(1993)以来，10年ぶりに出した長編小説である。「女ざかり」は今ひとつ感心しなかったが，これは面白く読んだ。

源氏物語には「輝く日の宮」という失われた巻があったという，国文学上の考証を小説にしている．もっとも考証はそれほど精緻でなく，小説として面白く読ませる工夫のほうが，よほど勝っている。

最初に主人公の杉安佐子が中学生のときに書いたという設定の泉鏡花ばりの小説がおかれる．最後に安佐子が書いたということになる「輝く日の宮」の想像版の現代語訳風のものがおかれる．単純に「輝く日の宮」存在説が無理筋だと思うのは，その巻名が源氏の他

のどれとも形が違う点である。他にひらがなが入っているものはなく、長さも1から3文字である。

構成には凝っている。1章と7章がさっき言った小説中小説仕立て、2章は通常の小説話法、3章は年表式で1987(昭和62)～1996(平成8)を1年1節で編年体に語る。これは後の、安佐子による源氏成立前後の年表式ノートと対応させている。

4章はシンポジウムを戯曲形式で語る。これがとても面白い。作者は技巧の限りを尽くす。5章は2章の普通のスタイルに戻っているようである。しかし、長良が社長になるという企業小説風の色彩を帯びる。6章は静岡からの帰りの電車で、安佐子がさっき触れた年表ノートを見ながら、「輝く日の宮」の小説構想をふくらませる。この章で、1章、2章に対応させ過激派グループの内ゲバ殺人が出てくるが、この意図は不明である。

まあとにかく久しぶりに小説を堪能した。

吉村萬壺「ハリガネムシ」(芥川賞)

なかなか描写力はあるし、会話もうまく、思わず笑ってしまうようなおかしさもあって前半は面白く読んだ。しかし段々と暴力がエスカレートし、陰惨さが増してくる後半は不愉快さのほうが先に立った。高校の倫理の教師という設定は実に作為的だが、この主人公の暴力衝動はどこから来るのか、どこに向かうのか。暴力対象のサチ

コという人物は的確に描写されているが、主人公が抱く侮蔑感、冷酷さは理解を超える。それだけこちらが常識人ということか。

森まゆみ「「即興詩人」のイタリア」（講談社）

よいタイミングでよい本が出た。1830年代にアンデルセンがイタリアを旅し、小説を書いた。いかにもロマン的な小説で（あるらしく）、イタリア観光案内も兼ねている。それを鴎外が、ドイツ語訳から重訳した。これは日本文学に大きな影響を与えたが、デンマーク本国でも他の国でも、もう読まれていないらしい。

この本は即興詩人の後をだどってイタリアを旅行した旅行記だが、それはアンデルセンの旅行の後をたどることにもなるし、鴎外という人の人生をたどることにもなる。鴎外自身はイタリアに行っていないらしいが、この森まゆみという著者は「鴎外の坂」という本も出して、鴎外の研究家らしい。あれ、同じ森だから子孫だろうか。

この著者の行動力で、なかなか面白い発見がある。それだけでも面白いが、観光記としてもサービス精神に富んでいる。さらにこれで「即興詩人」を読んだ気になるという得な本だ。文庫本の「即興詩人」はずいぶん前に買ってあるが、読んでいない。

「昭和13年に野上弥生子が見物したころ、．．」（p.218）とあり、
「1942年、野上弥生子が訪れたときヴェスヴィオは」（p.219）とある

が、1942年は戦争中だ。きっと間違いだらう。

藤原正彦「遥かなるケンブリッジー数学者のイギリス」 (新潮文庫)

このところイタリアものの本をだいぶ買い込んだが、イギリスものは探してこなかった。前に林望ものを3-4冊読んだが、それでよしとしていた。しかし、孝子がこの本を前に読んでいたのを思い出して、借りて読んでみた。なかなかの人である。筆もたつがさむらい魂もあり、しかもそれを自分で茶化していユーモア小説仕立てにしている。とくに次男のいじめの話など。一方で、数学研究の真剣勝負を伝える描写もあり、最後のイギリス論は、まじめな文明論になっている。

須賀敦子「ミラノ霧の風景」(白水ブックス)

ずいぶん前に「コルシア書店の仲間たち」を読んだが、今回イタリアものとしてこれと「トリエステの坂道」を買った。いずれも白水社から新書版として再刊されている。

須賀敦子の世界は独特である。イタリアに住み、イタリアに受け入れられ、多くの人と出会い、心の交流をし、たくさんの本を読み、翻訳などの文筆作業で日伊の文学に貢献し、それでいて得意になったり浮ついたり知識をひけらかしたりしない澄んだ文章を書く。森まゆみも面白かったが、ああいう軽薄さはここにはない。それでも森はこの本からナポリの話とボルゲーゼ公爵令嬢のカヴァッツア侯

爵夫人の家に招かれたときの話(p.129)を、相当詳しく引用している。とくにこの本の「ナポリを見て死ね」の章は、即興詩人でアントニオがナポリに着いたときの描写を13行にわたって引用していて(p.53)、森の本のアイディアもこの辺りから来ているのではないかと思わせる。

しかし著者がイタリアに暮らしてから20年経て書いているせいか、登場人物は皆死んでしまったか、あまり幸せでない晩年を送っているか、行方がわからなくなっていて、人生の淋しさを強く感じさせる。イタリア人の夫の早すぎる死は何度も触れられるが、詳しくは記述されない。その須賀本人も、すでに故人である。

黒岩徹「イギリス式生活術」（岩波新書）

ロンドン往きの成田空港で、「即興詩人」を探しに本屋に入ったが（これを昔買ったと思っていたが、見つからない。「十日物語」を買っていたので、買ったつもりになっていただけかもしれない）、岩波文庫などはやはり置いていない。代わりに岩波新書で出たばかりのこの本に気づいて買った。

しかし、ひどい本である。岩波新書の質も落ちたものだ。途中で読むのをやめてもよかったが、読み了わるためにだけ読んだ。タイトルが示すような生活論・文化論はない。この人は毎日新聞の記者で、オクスフォードに留学の経験があり、89-95ロンドン支局長だったという。その頃の新聞の切り抜きを集めたような本で、話に一

貫性はなく、イギリス式生活術とは何なのか、さっぱり分からない。大体、イギリス以外のネタが多い。文章も平凡、俗で、新聞記者あがりの人の書く文章はこの手のものが多いかもしれない。須賀敦子とははるかに遠い世界である。

角山栄「シンデレラの時計」（平凡社ライブラリー）

角山栄の本の「茶の世界史」にも「時計の社会史」にも感心したが、これも小冊ながら誠に面白い。内容的には「時計の社会史」との重複もあるが、読者対象を中高生に想定して語りかけている。しかし内容のレベルは高く、また「時計の社会史」とは異なる（といっても前書の内容をほとんど覚えていないが）メッセージがある。

昔は神が時間を支配したが、時計ができて人の時間が作られ、経済原理が時間を支配するようになった。とくに産業革命後の、資本家による時間管理は苛烈であった。その後労働運動と政府の施策で労働者の休暇時間が段階的に延びてきた。その余暇をいかに過ごすかが問題である。学生でも同じだという。

もう一つは、日本の江戸時代の好奇心と技術が不定法の時計を作り、また勤勉さが時鐘で生活するパターンを作り、これらが日本の近代化のもととなったという主張である。

今野浩「金融工学への挑戦」（中公新書）

これは中公新書だが、似たような本が岩波新書などでも出ていて、それらも多分買っているが読んでいない。LTCMの破綻に関する米国で出た本を2冊買っていて、そのうちの1冊を半分ぐらい読んだが、少し基礎知識を確認しようと、これを読み始めた。今野さんの本は特許ものを2冊読んだが、この本も面白く書いてある。一応、数式も少しは使ってあって、そういい加減な本でないのは流石である。

Roger Lowenstein, "When genius failed"

副題は The rise and fall of long-term capital management である。

この本は実は5月の Portland 出張のときに持っていった1冊である。やはりそのときに持っていった白川静の本の方もまだ読了していない。帰国後、どちらの本もうっちゃって別の本を読んでいた。それでもこちらの方は、時折思い出したように読んでいたが、勢いをつけるために、今野さんの本にも手を出した。今回、今野さんの本をこれと一緒にロンドンに持ってきて、ようやくどちらも読み終えた。

丹念に事実を掘り起こしてLTCMの“興亡”を跡づけるだけでなく、とくに Epilogue に顕著なように、著者による明晰な批判的分析があり、それが強い説得力を持つ。

和辻哲郎「イタリア古寺巡礼」（岩波文庫）

1000ページの London the novel を読み出してから、他の読書がストップしてしまった。僅かに並行して、ごくたまに読んでいたのがこの本で、“London” をブリュッセルのホテルに忘れてきた副作用でこちらを読み終えた。

和辻がイタリアに行ったのは、1927年の暮れで、それから1928年の4月まで滞在中に家に出した手紙を元に編集して本として出版したのが、なぜか戦後の1950年である。

高階秀爾の解説によれば

「当時京都大学助教授であった和辻哲郎が文部省の海外留学生としてヨーロッパに渡ったのは、1927(昭和2)年2月から翌年の7月までの約1年半のことである。留学地はドイツであったが、その間に、本書に見られるように、フランス、イタリアの各地を巡って、教会堂、美術館などを訪れている」

ということである。つまり、現在の自分と同じ制度でヨーロッパに来ているといえるわけである。しかし、ずいぶん優雅なものである。高級ホテルに泊まり、よいレストランで食事するだけでなく、当時は高かったのではないかと思われる自動車や馬車などもよくチャーターしている。そして毎日教会や美術館を見歩く、いってみれば観光旅行をしている。昔は文部省の旅費も潤沢に出たのか。

もっとも漱石のロンドン生活は、結構貧乏生活だったようだ。4半世紀の差があるが、漱石の頃のほうが海外に派遣されるのはエリー

ト中のエリートだったはずだ。しかし、この4半世紀の間に、日本が豊かになったのだろうか。それとも和辻の家が資産家だったのか。

とはいうものの、世間から見れば僕の今回の出張も優雅なものと思われるかもしれない。何しろ官費である。イタリア案内という面より、そのような現在の自分との比較という意味で、結構面白いところがあった。

ちょっと意外なのは、見て歩くばかりで、人と会うということがほとんどない。まして講演をしたとか会議に参加して議論したとかいうことがない。これは滞在地がドイツで、イタリアは単にその間の旅行だったからかもしれない。しかし、一人で歩いているわけではなく、日本人の仲間がいつも誰かいたようだ。

ガイドのような者も雇っていたかもしれない。日本人は何人も出てくるが、その頃まだヨーロッパにいる日本人は少ないので、近くにいれば連絡を取って寄り集まるのが自然だったのかもしれない。

専門家ゆえ多くの美術品、とくに絵画は事前に写真で仔細に研究した上で実物を見たようだが、当時の写真は白黒だったので、実物を見たときに色がどうだったか、という記述が盛んに出てくる。これも時代を感じさせる。もちろん現在のカラー写真も実物とは違うので、今だったら色や質感に関してまたそれなりの議論を和辻はしたことであろうが。

南川高志「海のかなたのローマ帝国」（岩波書店）

たまたま出かける前に、駒場の生協で見つけ、「古代ローマとブリテン島」という副題から出かける先の英国とイタリアの両者がキーワードとして出てくるという単純な理由で購入し、この旅行に持ってきた。並行して読んでいる *London, the novel* とも関連し面白い読書だった。ただこの本自体はよく書けた本とはいえない。話に繰り返しが多し、一般読者向けの視点で書いているのか、専門家の立場で書いているのかははっきりしない。

英国で19世紀のローマへの関心が、英国自身の帝国主義と関連づけられて高まった。ローマ属州としてのブリテン島の歴史についての見方も、これに従って高度なローマ文明が遅れていたケルト民族に受け入れられ文明化が進んだ、という解釈が中心となった。それに対してこの10～20年間に否定的な学説が主流となったという。歴史観がその同時代の政治経済状況や思潮で左右されるのは当然だが、この書が紹介するように、現在は逆向きに振れて、ローマの影響を最小化したものとし、またケルトというものも存在しないとするなどの「今日的」な解釈も同様に時代の風潮に乗ったものだろう。本書でその立場から展開される議論も、同じ資料に対して憶測を交えて違う結論を出すものであり、とくに説得的という感じがしない。所詮、文献的にも考古学的にも資料が限定されており、しかもたまたま残り、たまたま発見された資料に基づいて議論するのだから、相当の自由度がある。

フェルメールの研究家の本を読んだときも同じような感想を抱いたが、すでに多くの研究者が色々な本，論文を書いているこういう分野で，新しい仕事をするのは大変なことだと感じる。あまりうらやましいと思う研究ではないが，しかし面白さは想像される。

高階秀爾「フィレンツェ」（中公新書）

意図的とはいえ，フィレンツェ行きの汽車の中で読み終わるのには絶好の本である。1966年に初版が出た古い本であるが，15世紀のことを書いているので，別に問題はない。メディチ家を中心とする政治，経済的背景と，ブルネレスキ，ドナテルロ，マサッチオを中心とする天才たちによる15世紀前半の新しい芸術表現，世紀後半にそれが装飾化し，また他の都市に芸術家が散り，経済的にも衰退していく様が描かれる。たった1世紀の栄光だったが，今フィレンツェはその15世紀の姿がそのまま保存されているという。またこのフィレンツェが，レオナルド，ラファエロ，ミケランジェロの古典主義的盛期ルネッサンスを準備したわけである。

2002年

高島俊男「本が好き，悪口言うのはもっと好き」（大和書房）

「漢字と日本人」が面白かったので，これを買ってすぐに読んだ。

たとえば林望とか坪内祐三のように突然ブレイクし，著述家として売れるようになった人のようだ。しかし，すでに相当な年であるところが（1937年生まれ），林や坪内と違う。

「漢字と日本人」と重複するところもあるが，雑誌に載った小さなエッセイを集めたものである。「握りまして先番」とか「年は二八か二九からず」とか，悪口を言っている文章は確かに面白い。

「「支那」は悪いことばだろうか」は多分正しいこと言っているのだろうが，この人にしては加地伸行にしても，中国文学者は妙に（現代）中国嫌いで右寄りの感じがある。

尾藤正英「日本文化の歴史」（岩波新書）

「自閉した歴史観を打ち破る大胆な日本文化史の試み」と帯にあり，書評でもそのような評価があって期待したが，それほどのもではなかった。基本的には宗教や文学に現れた日本の文化，精神を年代順に追うもので，アプローチとして新しいものではないし，それを貫く明確なテーマや概念があるとも感じられない。しかも新書

の短い記述だから、たとえば加藤周一の「日本文学史序説」と比べても量的に物足りない。

ところどころでこれまでの通説を否定するが、その論拠はあまり説得的には示されない。日本の歴史、文化を肯定的に見る態度は、西尾幹二などに近いのかと思わせたが、「あとがき」でその「国民の歴史」を槍玉にあげているのは、意外というかなるほどというか、安心した気分は残る。

John Grisham, "The Rainmaker"

2年に1度ぐらい Grisham ものを読むが、彼はもっと生産性が高いので、読んでいないものはいくらかもある。これは1994年に出たもので、そう新しくはない。買ったのもかなり前だ。

Grisham は大衆向けで Patterson はインテリ向けという評価があるらしいが、こういう良質のものを読むと、Grisham の人気が高い理由は分かるし、その自然な物語性と文章は、非常に作られた感じのする Patterson よりレベルの高さを感じさせるところもある。

しかし、この話は悪役の保険会社があまりに一方的に悪く、裁判はうまくいき過ぎて、このままでどう話を終わらせるのか不安になる。途中で、何か不測のことが起こって裁判がだめになるのかと思わせるが、そうはならない。そして結末はやはり苦しい。しかし、Grisham にはよくあるパターンだ。

これも568ページ。よく書くものだ。

吉本隆明「読書の方法」（光文社）

吉本の読書論の類は何冊か読んでいる。というより、それ以外の吉本のまともな評論をほとんど読んだことがない。

これは編集者が苦心して集めてきた雑文の寄せ集めで、吉本自身が「わたくし自身の記憶を喚起させられたのは六割か七割くらいで、あとは、うへえ、こんな文章を書いたのかという思いで．．」と書いている（「あとがき」p.332）。

そういう本を頭から終わりまで読むというのもどうかという気がするが、時々思い出してちびちび読み、結局最後までいった。繰り返して出てくるのは、昆虫記と聖書と資本論である。中沢新一、荒俣宏、それぞれとの対談や、三浦雅士による対談に近い長いインタビューがあるが、どれも難解でなんだかよく分からない。しかしその他は、「ノンジャンル・ベスト120」など、気楽な文やリストである。

長嶋有「猛スピードで母は」（芥川賞）

昨年8月の芥川賞は文芸春秋を買いそびれて珍しく読み逃したが、今度はちゃんと買った。

軽みのあるなかなかよい小説だと思った。しかし、選考委員の評はかなり対照的である。とても褒めているのが、村上龍、黒井千次、高樹のぶ子、池澤夏樹、日野啓三、河野多恵子である。さすがに受賞しただけあって、褒める人が多い。とくに河野の褒め方がよい。

けなしているのが、例によって石原慎太郎、宮本輝、やや不満というのが三浦哲郎で、古井由吉はもっぱら無視している。選評で受賞作に一言も触れないというのも珍しい。

長谷川真理子「オスとメス ― 性の不思議」(講談社現代新書)

感心した。

長谷川真理子は駒場の長谷川寿一の奥さんだが、奥さんの方が有名である。しかし仲はいいらしくて、この本でも「長谷川寿一撮影」という写真を何枚も使ったりしている。「あとがき」にも

「夫の長谷川寿一には、本書の作製のみならず、生活のあらゆる面にわたって援助を受けました。よき配偶者に感謝したいと思います。」

とある。この「配偶者」という言葉は、本文を意識して使われている。

なぜ性があるのかから始まって、性と繁殖の関係、配偶者獲得競争、子育ての分担、配偶者の選択、そしてヒトの性まで、一貫して

カバーしながら、どれも要領よく、しかもこちらの目からウロコを落とさせる記述をしている。

これを読んだきっかけが、高島俊男がほめていたから、というのも面白い。高島の評は正当だが、彼のやや右がかった体質が、本書にちょこっと出てくるフェミニストへのある種の批判に共感したのかもしれない、という気がする。もちろん、長谷川の論はきわめてまっとうだが、そのような観点から共感されるのは迷惑かもしれない。

田中優子「江戸百夢」（朝日新聞社）

なかなか綺麗な本である。約百枚のどの絵も面白い。改めて感心したのは広重である。

山形孝夫「死者と生者のラスト・サパー」（朝日新聞社）

感動的な書である。

この人の「聖書の起源」を以前に読んで感心した。本書は著者が小学校3年の時にその母が自死したことを出発点とする、自伝的な魂の記録である。学生時代、いかにしてキリスト教に出会ったか。そしてアメリカ留学での南部における人種問題、女性問題の経験、その終わりはケネディの暗殺である。続いて、レバノンでの聖書の起源をたどる研究と旅、その終わりはレバノン内戦である。

そして治癒神イエスという役割の発見と、死者のよみがえりについての個人的な思いを混ぜ合わせにした解釈。「一冊の本」という雑誌に3年8ヶ月連載したものという成り立ちにしては、実に見事に構成された本である。

タイトルはちょっと変だ。なんで「ラスト・サパー」などという英語を使うのか。

Matt Ridley, "The Origins of Virtue," Penguin Books

長谷川真理子の本を感心して読んだ後、積読の中から選ぶとすればこれかなと思って読み始めた。期待は半分以上当たったが、この本は進化論や動物社会学だけをベースとしているわけではない。しかし、タイトルが示すように（"The Origins of Species" を意識している）、進化論や動物社会学が大きな出発点になっていることは明らかである。他には、経済学、ゲーム理論、文化人類学、心理学など、実に該博な知識が注ぎ込まれる。しかも説得力のある文章である。

その意味で Jared Diamond とあい通じるところがあるが、メッセージはだいぶ違う。ただ、文化の違いよりも共通性の方に目を向ける点は、同じ性向といえるだろう。

とにかく内容の深い本である。

田中長徳「デジカメだからできるビジネス写真入門」（岩波アクティブ新書）

岩波が、「岩波アクティブ新書」というのを始めた。岩波新書とは別に、実用書、ハウツウものを狙っている。その中の1冊で、わざわざ「読了」というほどのこともなく、薄いし簡単に読めてしまう。しかし案外いい本である。思ったほどハウツウは書いていない。デジカメの登場で、アマチュアでも仕事用に簡単に写真が撮れるようになったというメッセージがよい。それにふんだんにデジカメで撮った写真が載っていて、それが印刷技術とあいまって驚くほど綺麗である。岩波新書によくある何が写っているのかよく分からない白黒写真とは、えらい違いだ。

今年買ったデジカメを活用しようという気になる。

司馬遼太郎「街道をゆく35 オランダ紀行」（朝日文芸文庫）

4/22-29とオランダの Enschede に行く。Twente 大学でAOSDという会議があるのだが、この Enschede という町は、「地球の歩き方」でも1行も解説がない。

「街道をゆく」で海外は、中国、モンゴル、アイルランド、台湾、ニューヨークぐらいたが、このオランダ紀行は文庫本で約400ページあり、司馬の思い出入れがあるようだ。いつもながら、どこかへ出

かけるときに、行き先に合った「街道シリーズ」の本があるときは楽しみだ。

この本では、案内役の後藤猛という人とその奥さんのティルさんという人を大変好ましい人物として描いていて、それを通してオランダ人というのはいい人たちだと思わせ、逆に司馬の人柄のよさを感じさせる。

「さまよえるオランダ人」、三浦安針、などの面白い話がある。ベルギーに入っては「フランダースの犬」である。しかしもっとも多くのページが割かれているのはゴッホで、286－359ページがゴッホの話に当てられる。その他の部分でもゴッホが登場するところがある。次はレンブラントで、pp.124-135。アントワープへ行ってはルーベンスの話になるが、これがpp.200-210。フェルメールは出てくるが、あまりページを当てられていない。

とにかく画家の話が多いが、なんといってもゴッホである。司馬はゴッホの手紙を一生懸命読んだらしい。

小林英樹「ゴッホの遺言」（情報センター出版局）

3年前に出て評判になった本である。出てすぐではなく、多分1－2年経ってから大新聞の書評などでもとりあげられ、NHKでもドキュメンタリに仕立てられたはずである。確か「江戸川乱歩賞」だかミステリ関係の賞をとっている。

僕もかなり前に買っておいたが、司馬の「オランダ紀行」をきっかけに、読んでみた。

確かに「寝室」のスケッチが贋作だとの議論には説得力がある。著者は画家だけに、自分で参考図をいろいろ作ってみせるところが、ユニークである。ただ書き方には妙な思い入れ強く出すぎて、鼻白む思いをするところもある。自分でも「不慣れな文章に表せるかどうか」(p.6)と書いているように、初めて本を出したらしく、文章には癖がある。

透視図のところはもっとも強い論拠だが、たとえば右の壁の下に掛かる2つの絵については線を引かないなど、恣意的に感じられるところもある。しかし、このスケッチは見るからに漫画的で、もう一つのゴーギャン宛てのスケッチと質が違うようであることは見て取れる。

しかし、この論法でヨーを犯人に仕立てているのはあまりに強引な議論と思える。七月六日の記述にごまかしがあるとしても、「捏造」があるというのは何を指しているのか分からない。それに絵を掛けるかどうかどうかでヨーとゴッホが喧嘩したのが、直接ゴッホの自殺の引き金になったというのはムリな議論である。ヨーが「思い出」で七月六日の辺りのことをぼやかして書いているのは確かだとしても、ゴッホの手紙を公開した行為そのものが、隠そうとしていないという態度を表しているはずである。

広島にあるドービンの庭の絵とテキサスのものとの対比は、確かに強烈である。しかし、どちらが先に描かれたのかについて、考察されていない。

小林頼子「フェルメールの世界」(NHKブックス)

とにかく、アムステルダム国立美術館の4枚のフェルメールをじっくり見るのに、よいきっかけを与えてくれた。

口絵には8枚のカラー図版があるが、本文にある80の図は白黒で鮮明でないものも多い。しかし、今回美術館で買ったVermeerはすべてカラーの絵を収録しているので、それを補ってくれる。もっとも写真図版は当てにならない。この美術館の本の「デルフト眺望」は全体に黄色っぽく、小林の本の口絵3の方がよほど美しい。あるいは洗浄が行なわれて、その後の写真なのかもしれない。

小林の本を読むと、美術評論家も大変な仕事だと思う。フェルメールのように微に入り細にわたり研究されている画家を対象に、何を新たに付け加えるのか。

倉部誠「物語オランダ人」(文春新書)

奇妙な本である。最初のうちはオランダ人の悪口をこれでもかといやになるほど書いている。しかし後半になると賛辞に変わる。オランダの地で12年間、住み、働き、辛酸もなめ、好悪相半ばというところか。

司馬と比べて眼差しが対照的だ。旅行者と居住者の違いは大きいだろう。日本に来て好感を持った外国人が、長く暮らすほどに嫌悪感を持ち始めるというパターン（小泉八雲以来）は、どこの国でもあるだろう。また司馬の場合は案内してくれる相手が日本文学研究者ということで、一般オランダ人ではない。また司馬と倉部との歴史についての知識・認識の差も大きいだろう。

しかし、それ以上に個人的な人のよさが司馬にあり、倉部に欠けているのか、という気がする。

朽木ゆり子「盗まれたフェルメール」（新潮選書）

このところのオランダ、とくに画家ものの一環。しかし、小林の本と違って、これはジャーナリスティックな立場から書かれた本で、ガードナー美術館から盗まれた「合奏」などの話を中心に、とくにフェルメールに限らず絵画の盗難事件について追ったものである。まあしかし、それなりに面白く読ませる。

Matt Ridley, "Genome: The Autobiography of a Species in 23 Chapters," Perennial

この前読んだ“The Origins of Virtue”に続く Matt Ridley ものだが、これにも感心した。この本は、2000年の New York Times の編集者が薦める年間ベストの1冊に確か入っていた。

ゲノムの単なる紹介ではない。決定論と運命論，つまり nature か nurture かという古くからの問題，かと思えば狂牛病，優生法 (eugenics) など，扱われるのは生半可な問題でない。語り口はやはりうまい。しかし，結構読むのに時間がかかった。

若桑みどり「絵画を読む イコノロジー入門」(NHKブックス)

高島俊男もこの本を褒めていた。若桑はNHKの日曜美術館にも一時よく出ていたので知っているが，本を読むのは初めて。

想像したような内容の本だが，「視聴者の手紙にもっとも頻繁に使用された言葉は「目から鱗がおちる」という言葉であった。」(p.9) というほどには感心しなかった。視聴者とは本書の元となったNHK 人間大学の「絵画を読む」という番組講座のものである。同様の講義を駒場でも非常勤でやっているようだ。

しかし，小林頼子にしても若桑にしても，この分野では女性が活躍しているらしい。

Tracy Chevalier, "Girl with a Pearl Earing," Plume

この本は多分，Heathrow空港で買ったものだろう。とすると去年の4月である。表紙の Vermeer の絵と，'A jewel of a novel' (Time) という宣伝文句に惹かれたのだろう。しかし，その時点で Vermeer についての知識はまことに少なかった。

これは Vermeer を題材にして、なかなかうまく小説にしている。このところ続いて読んだ Vermeer の解説ものと比べても、面白い読書だった。

主人公の Griet を非常に強い少女として描いている。いきなり Cornelia をひっぱたく。そのあと、この Cornelia に様々な意趣返しをされるが、この Cornelia をあくまでも敵対者として描いている。しかし、この少女をもっと魅力的にしていける手もあったろう。

森内俊雄「真名仮名の記」（講談社）

書についての随想である。文章は短文を重ね、彫琢されている。本の装丁も美しい。ただバーコードとISBNが黒字の美しいカバーの一部を白くえぐって刷り込まれているのが無残である。

しかし、かなり奇矯な人のようだ。あまりつき合いたくない。きっと気難しいだろう。

第一篇の「真名仮名の記」に、手習いを始めたと告げた友人から「字が上手になりましたか」と聞かれたことを強く根にもつ記述がある。その書き方が尋常でない。こう書かれた方はたまらない。

第二篇の「石声の笏」には伏見信一さんという具体的な人物が出てくるが、この人についても何度も意地悪な描写がある。

その後は、自らの異常なほどの道具への執着振りを執拗に綴っている。それでもある種の知的爽快さを味わわせる本である。

村上春樹，柴田元幸「翻訳夜話」（文春新書）

相変わらず村上春樹の小説は、気になりながら読んでいない。フィッツジェラルドなどの翻訳は読んだが、とくに感心しなかった。

柴田は駒場の教師である。これは、駒場の学生や翻訳学校の学生や翻訳家の卵をだしに使って、わりと手軽に作られた本である。面白いのは、村上と柴田が、カーヴァーとオースターの短篇をそれぞれ訳してみせているところである。両者の訳はずいぶん違うという感じもする。どちらの短篇も気が利いていて、ちょっと面白い。とくにオースターのもの（「オーギー・レンのクリスマス・ストーリー」）は。しかし、どちらの訳も、やはり翻訳ものというゴツゴツした感じは残る。後に、英語の元のテキストが付いていて、やはりこれが一番読みやすい。もっとも、先に訳を2つも読んで、ストーリーが頭に入っているからでもあるが。

今野浩「特許ビジネスはどこへ行くのか IT社会の落とし穴」（岩波書店）

著者からの贈呈本が岩波から贈られてきたので、すぐに読んだ。今野さんとは昨年の暮れ、八重洲ブックセンターでばったり会って、長いこと立ち話をしたが、その時まもなく本を出すと言っていたのがこれだった。「カーマーカー特許とソフトウェア」（中公新書）

のあと、異議申し立て、さらに特許無効審判と諦めずに戦ってこられた経緯をよく知らなかった。今野さんはまたそのような顛末を面白おかしく書く才に恵まれていて、それを扱う第3章は抜群の面白さである。

主題のビジネス特許についてはやや弱い感じもするが、世の中なんでも特許の時代に異議を申し立てる姿勢には、強く共感を覚えるし、このような時代に貴重な本だと思う。また、コンピュータソフトウェア誌に今野さんと並べて原稿を書いてもらった特許庁の相田さんについては、認識を新たにした。

小林忠「江戸浮世絵を読む」（ちくま新書）

やはり日本語の本は速く読める。読むスピードの違いはもちろんだが、本のページ数の差も大きい。

しかし、この本は小さいながら充実している。著者が「はじめに」で「この一冊を読めば、「浮世絵のすべてが分かる」「江戸の浮世絵が読みとける」と確信している。」(p.12) と豪語してるが、なるほどそれだけ自信を持つのもうなずける本である。日本人は大したもんだ感じてしまう。

また、オールコックの引用で紹介される江戸の町の美しさには衝撃を受けた。どうして東京や現代の日本の都市はこうも醜くなってしまったのだろう。

「この首都（江戸）には、ヨーロッパのいかなる首都も自慢できないようなすぐれた点がある。（．．）どの方向に向かってすすんでも、木のおいしげった丘があり、常緑の植物や大きな木で縁どられたにこやかな谷間や木陰の小道がある。しかも、市内でさえも．．ひろびろとした緑の斜面とか、寺の庭園とか、樹木のよくしげった公園とかがあって、．．このように、市内でも楽しむことができるような都市はほかにはない。」

なんと失ったものの大きいことか。浮世絵の技術にしても、美意識にしても。

中井浩一「「勝ち組」大学ランキング どうなる東大一人勝ち」（中公新書ラクレ）

中公新書ラクレという新しい新書のシリーズがあって（最近は岩波も含め、どこの出版社も新書を何種類も出すようになっている）、そこで大学問題をテーマにしたものが何冊か出ており、それでたまたま買ったみた。読んでみたらタイトルから想像されるものと違って、駒場の話である。そういえば、このもとが今年の中央公論（5月号）に載ったのを思い出した。それは読み損なっているが、学部長室で話題にはなっていた。

ずいぶん駒場を持ち上げている。重点化にまつわる駒場の改革は、僕が駒場に来る直前の話なので、個々のことは大体知っていても、こうして第三者の手でまとめられると、改めて大変なことだったの

だという感を深め、また川口さんや多数の人たちの並々ならぬ労力について頭が下がる思いがする。

そういう意味で、駒場にいるものにとっては痛快な本であるが、外部の人間にはよく分からないかもしれない。別の感想として、やはり情報分野も“Universe of English”とか「知の技法」のような本を書かなければいけないと思った。

読売新聞社大阪本社編「潰れる大学，潰れない大学」（中公新書ラクレ）

これも中公新書ラクレの1冊。

朝日や日経にも同じような連載はあったが、これは確かに量が多い。関西中心というのも特徴。立命館アジア太平洋大学の話が割りと面白い。

先端研も1章が当てられ、南谷さんが写真つきで出ている。

Steven Levy, “Cripto,” Penguin Books

とにかく面白い本だった。よく調べていることにも感心するが、多数の登場人物を手際よく扱い、首尾一貫したストーリーに仕上げている。この本の前半のハイライトの一つ、M. Gardner の Scientific American のコラムのRSAの話は、それを直接読んだのかどうか怪しいが、とにかく強烈な印象がある。しかし、それ以降、PGPや

Clipper Chip について断片的に知識は入ってきても、これだけつながりのあるものとして頭に入っていなかった。

いつもながら米国や英国の科学ライターの力量には敬服する。

斎藤美奈子「文章読本さん江」（筑摩書房）

これも傑作である。僕も随分、文章読本を読んできたつもりでいた。確かにここで、旧御三家、新御三家と呼ばれる、谷崎、三島、清水と本多、丸谷、井上はすべて読んでいる。しかし、ここで槍玉にあげられる文章読本の数はすごい。よくこんなに出されていると感心するが、また斎藤もよくこれだけ集めて読んだものだ。

IIIで作文教育の歴史が叙述され、これはこれで面白いが、文章読本との関係やいかにと不審にも思う。さすがにそれも、このような文章読本が大量に書かれてきた背景として結びつけられるところなど、なかなか大したものである。

最後の「文は衣装」というオチも、まあまあか。

速水融「歴史人口学で見た日本」（文春新書）

この本が評判になり、歴史人口学という分野が改めて脚光を浴びている。宗門改帳などの史料をミクロ分析し、マクロ人口だけでなく、近世の人々の生活を浮かび上がらせようというものである。

この手法を、著者が若い時ヨーロッパへ遊学して、偶然のきっかけで仕入れ、それを日本の江戸時代の資料に適用したという個人的な経緯が書かれていて、その部分の描写は生き生きしている。この手法で分かったことについては、思ったほど面白い話が書かれていない。諏訪や美濃での人々の世帯の大きさ、出稼ぎの数と行き先、結婚と離婚などのデータが示される。

最後はかなり大胆な仮説が示される。家族のパターンに、東北日本—アイヌ・縄文型、中央日本—渡来人・弥生文化型と西南日本—海洋民型の3つがあるというのである。

吉田修一「パークライフ」(芥川賞)

さらさらと読んでしまったが、大して感心しなかった。しかし、後で選評を読んで、概して評価が高いので驚いた。

日比谷公園に毎日行くという生活が、「パークライフ」である。そこで謎めいた女に会う。謎めいたといって、事件があるわけではなく、もちろんミステリじみているわけではない。スターバックスとか携帯とか CryoLife（臓器販売の会社、なんだか実在のように思える）とかWeb上の分身の旅とか、いかにも現代の道具立てが出てくるが、その扱いはさりげなく、ことさらに今を強調する道具として使われているわけではない。

しかし、ところどころ、思わず笑ってしまう描写がある。たとえば、留守番をしている家に残されているレシピでよく料理を作るが、メモには料理のタイトルがなく、

「．．自分が何を作っているのか、実際に最後まで作ってみないと判らない。」(p.405)

などというところ。

Jane Jacobs, "The Nature of Economics," Vintage Books

短い本だが（本文だけなら151ページ、Notes, Indexを入れても190ページ）、内容は濃い。

短い本だが、読むのに時間がかかった。やはり英語を読む力は格段に落ちる。

経済を Ecologyとして、自然と同様の dynamism をもつものとして、理解しようという話である。これを書いた Jacobs は、1961年に出版した "The Death and Life of Great City" で有名になった人だから、すでに相当のお婆さんである。4人の登場人物で話を進めるというスタイルをとり、構成としてもなかなか巧みである。全体にずいぶん楽観的なところもあって、それも好ましい。

しかし、Chaos の理解はやや怪しい。変数の数が増えると複雑になるとか、構造が変わるので予知できない（それは言語と同じという）とかいう理解で、少ない変数の単純な構造が、非線形性のため

に予知不能になるという理解ではない。Selfish Gene も、十分に理解していないかもしれない。とにかく Selfish Gene の概念には、全面的に賛意を表してはいない。

伊佐千尋「邯鄲の夢」（文芸春秋）

これも時間がかかった。だいぶ前に買っていたのを、この間の廬山行きの時に持っていった。それから1ヶ月。

時間がかかったのは、ふんだんに引用される漢詩のせいである。原詩はもちろん、読み下し訳を見てもよくわからないことが多い。

この本は、蘇州、紹興、西安、洛陽、開封、杭州を訪れる旅行記の体裁をとりながら、史記、十八史略、三国志などを使って、歴史を語り、詩を鑑賞するという本である。著者は中国の歴史家でも研究者でもないから、よく知られた話（たとえば項羽の最後とか三国志の有名なくだりとか）、よく知られた詩を、照れることもなく取り上げ、余計な考察などを交えず紹介する。それが、自分のような知識のない読者には好ましい。

思えば、小学校の頃、三国志や史記の物語を繰り返し読んだ。唐詩は吉川幸次郎の「新唐詩選」や「人間詩話」や、他の人の杜甫の紹介などを読んだ。しかし、それだけだから、漢文は読めない。漢字を知らない。本来なら中国語として読みたいところだが、それはま

して不可能である。この著者は、そのレベルよりかはるかに知識がある。なかなかよい導き手といえる。

日経コンピュータ編「システム障害はなぜ起きたか みずほの教訓」（日経BP出版センター）

つけたりのような第3部ははす読みしたが、みずほについては新聞情報より少し様子が分かった。SEAにおける4月頃の議論、とくに二、三の人の一方的な厳しい論調には違和感を感じていた。この本はずっと現場に同情的である。その代わり、悪いのは経営だということで一貫している。もっともなところもあるが、そう単純ではないだろう。

日本の報道が一面的である例として「当たり前のことできないみずほ」とか「海外の銀行は情報システムの統合をきちんと実施している。それに引き換えみずほは、．．」（p.21-22）というのが挙げられている。このような新聞情報のみをソースとして、その尻馬に乗って技術的欠陥として叩くのはいかなものか。

もっともこの本を見ても、十分掘り下げられていないので、何が問題だったのか本当のところはよく分からない。

川本三郎「本のちよつとの話」（新書館）

朝日新聞で珍しく山崎正和がこの本を褒めていたので、さっきの「みずほ」と一緒に日本の Amazon で買ってすぐ読んだ。Amazon

で買ったのは、「みずほ」の本を生協に注文したら、どういうわけか品切れで出版元で増刷の予定なしという返事だったからで、Amazon で注文したら、翌日だったか翌々日だったか、他の3冊の本とともに直ちに届いた。

これも本についての本で、一種の書評本である。しかし、意外な事実の連鎖を組み合わせ、あっと言わせる。たとえば、明治の軍人で田村怡与造というのがいて、篠原という人が評伝を出したという。この田村は名将といわれたが、今は忘れられている。しかし、鷗外との親交から鷗外研究者には知られている。その娘が伊藤智子という女優だそうである。成瀬巳喜男の映画などに出演し、沢村貞子の回想記に憧れのスターとして出てくる。さらに永井荷風の断腸亭日乗にただならぬ関係の相手として出てくる。夫は本間雅晴だという。といった具合。

小林忠の「浮世絵を読む」でオールコックの引用に感激したが、この本ではシュリーマンの「シュリーマン旅行記 清国・日本」が紹介されていて、そこに江戸の町がいかに清潔かが描かれているという。さらにロバート・フォーチュン「幕末日本探訪記 江戸と北京」を引用して、

「交互に樹々や庭、恰好よく刈り込んだ生垣がつづいている公園のような景色に来たとき．．私は世界のどこへ行っても、こんなに大規模に、売り物の植物を栽培しているのを見たことがない」
という江戸の園芸都市ぶりを紹介している。

Dave Pelz, “Dave Pelz’s Short Game Bible,” Broadway

ずいぶん前に買った本だが、今年、ゴルフを再開して読み始めた。確かに Bible と謳うだけのことはあり、科学的な実験、データ分析に基づいて、short game につきあらゆることが書いてある。何しろハードカバーで430ページもある。これで目を開かれたことはいろいろあるが、実践にはあまり結びついていない。しかし、チップショットだけは確実にこれでやり方がわかり、よくなった。

矢野直明「情報編集の技術」（岩波アクティブ新書）

狙いは面白いのに、実につまらない本だった。実用的な知識も得られず、ASAHIパソコンなどの編集委員長としての経験談も、通り一遍でつまらない。

Frederick P. Brooks, Jr., “Mythical Man-Months,” Addison-Wesley

和田さんに頼まれて、情報処理の「名著名論を読む」とかいうシリーズで紹介することになり、20年ぶりに通読したが、やはり感心した。詳しくは紹介文（別掲）に書くことにする。しかし古典と呼ぶに値する本である。

今回は1995年に出た Anniversary Edition で読んだが、付け加えられた4章も読んだ。

アラン・ライトマン，浅倉久志 訳「アインシュタインの夢」（ハヤカワepi文庫）

不思議な小説である。アインシュタインがいた1905年のベルンを舞台に、いや舞台にというのは正しくない、その時代、その場所を連想させる描写を点描させて、時間の性質への考察を種としたショート・ショートを30篇重ねる。しかし、ともすれば哲学的、あるいは単なる知的遊びに終わりそうな発想を、詩的な美しい文章で文学的なものにしている。翻訳の日本語もすばらしい。

詩ではなく、小説として人生の断面を垣間見させるところも多分にある。実際、小説というものはすべて、ある意味で時間を作者が自由に操って、話を作り出すものであろう。ほんの数行である男の、女の、生き方のようなものを紡ぎだす。

作者のライトマンは現役の理論物理学者だという。

森口繁一「数理つれづれ」（岩波書店）

去年、出てすぐ買ったが、1章だけ読んで置いてあった。森口先生が亡くなられたのを機に読んでみたが、やはり感心した。先生が85歳の時に出された本である。

たとえば、第7章近似分数の n の図7.4だけでも感心するが、この話と2章の音階の話とを結びつけるところもすごい。

中山康樹「超ブルーノート入門ージャズの究極・1500番台のすすめ」(集英社新書)

ブルーノートの1500番台のレコード98枚を、1枚につきちょうど2ページ割り当てて解説するという、変な本である。解説というよりはエッセイで、面白いところもあるが、文章が乱れて意味不明なところも結構ある。この人はスイングジャーナルの編集長だったというから、よく知ってはいる。

しかし、この中の1枚も持っていない。そういう意味では、Bill Evans の時と同様の変な読書だった。しかしこういう読書も楽しめるものだから面白い。昔の植草甚一をちょっと思い出した。

河合祥一郎「ハムレットは太っていた」(白水社)

これも駒場本である。著者は1960年生まれで、駒場の助教授だが、面識はない。もっともこの本は駒場の生協で見つけたというわけではなく、新聞の書評に取り上げられて知った。

著者がケンブリッジで学位を認められた博士論文の内容を、日本語の本にしたものである。シェークスピア研究など、今さらやることがあるのかと思うが、これは役者、その体型というところに目をつけ、新しい(らしい)説を展開する。そのためにシェークスピアだけでなく、同時代の浩瀚な戯曲を読み込んで、例証する。パソコンのDBを使ったという。

最初はだらだら読んでいたが、この2日でこの本の中心である5章のイアーゴの話と、6章のハムレットの話を一気に読んだ。さすがにこのあたりは説得力がある。

まあしかし、多くの人にはどうでもいいこと、という気もする。

Dennis Lehane, "Darkness, take my hand," Harper Torch

米国に読みさしで持って行って、往きに読み終えた。これも朝日（あるいは日経か？）の北上次郎の書評で知った本である。評判になっただけ、さすがに面白くできている。しかし暗い。河合の本で読んだばかりのイアーゴの犯行動機の話が出てくる。また Phil が Glenn にやられるところで、Glenn が犬の Patton にかける合言葉が Iago である。謎は犯人探しでなく、最初から怪しい人物が犯人である。

しかし、色々謎はある。その謎が解けるきっかけとして、主人公の Patrick がヤギ髭の男の顔を思い出したり、Phil と2人で子供の頃に道化師の車にボールをぶつけたことを一緒に思い出したりするのは、ご都合主義という感じもある。

最後のほうで、警官が Glenn は善人だと言ったり（実際は間違いで悪者）、EEPAグループの一部が世間的に成功したりする理由は、明かされないままである。

しかし、全体にうまい。

白石隆「海の帝国」（中公新書）

評判になった本で、第1回読売・吉野作造賞を受賞している。

あまり熱中して読めなかった。ラッフルズの夢から近代国家としてのリバイアサンが変形した形でいくつかの国が東南アジアに現れてきた過程の記述は、ある程度のスケールの大きさを感じさせる。ラッフルズの秘書だったアブドゥッラーの自伝や、カルティニの書簡集 (p.113-120)、ルイ・クーベルスの小説などを使って状況を描くあたりは、工夫がある。

しかし、全体に文章が読みにくい。気取ったことを言っでは「何も難しいことを言っているのではない」というフレーズがしつこく繰り返されるのには、辟易させられる。

Dennis Lehane, "Mystic River," Harper Torch

Lehane の前の本を米国の往きに読んでしまったので、Charleston でこれを買った。こちらの方が、さらにできはよい。これはKenzie/Gennaro コンビの話ではない。まず、1975年という設定で、Steven Devine, Jimmy Marcus, Dave Boyle という13歳の3人の少年の話が語られる。そして25年経った2000年、この3人が絡む殺人事件が起こる。これはちょっと天童荒太「永遠の仔」を思わせる。

「永遠の仔」も日本のミステリとしては緊密に構成され描きこまれ

ていたが、周辺人物の描き方、会話、人生を考えさせるある種の思想性、という点で、この本には及ばない。

本書も “Darkness,...”と同じで、読んで決して楽しくなる本ではないが、とにかく大した筆力である。

酒井邦嘉「言語の脳科学」（中公新書）

これも駒場本で、酒井という人には会ったことがないが、言語情報の助教授である。中公新書にしては厚く（340ページ）、下條信輔さんの本のように講義録をもとにしたもののようだが、下條さんの本ほどの一貫性、迫力はない。チョムスキー派で言語は物理のような科学だと強調する。もともと物理出身なのである。思いはよく分かったが、内容的にはあまり新しい知識はえられなかった。

坂村健「ユビキタス・コンピュータ革命一次世代社会の世界標準」（角川Oneテーマ21）

坂村健はとみに精力的である。今年本を2冊出して、どちらも寄贈を受けた。

これともう一つは岩波から出した「21世紀日本の情報戦略」である。こっちの方が新書で持ち運びに便利なので読んでみた。

彼は速筆だから（多分）、文章が粗いが、しかし最近、朝日の書評委員として書いている文章はかなり質が高い。この本もみかけはよ

りはちゃんと構成された本で、ユビキタスの全貌を知るには悪くない。

2001年

猪瀬直樹「ピカレスク 太宰治伝」（小学館）

猪瀬が三島，川端（と大宅）に続いて取りあげた作家の伝記ものである。三島，川端，太宰とあまりに著名で，おびただしい評伝が書かれている作家を取りあげて，しかし文学面より社会的なコンテクストに置いて，新しい視点から話を繰り広げる猪瀬のアプローチは，成功しているといっていいたいだろう。

ここでは太宰の4度の自殺ないし心中未遂は，いずれも狂言に近いものとされ，成功した5度目はむしろ女が引っ張ったものと暗示される。また，井伏鱒二は悪者扱いされている。

参考文献の第7章に倉沢愛子（学生時代の同級生）の本が2冊挙げられているが（インドネシアもの），どう使われたかは分からない。

親父が残した本の中に，新潮文庫の奥野健男「太宰治論」があるのを見つけたが，なぜか本書の参考文献に挙げられていない。

序章の書き方は非常にうまい。

井伏の「黒い雨」などを，ネタ本を写していると非難している。猪瀬はどうなのか。小説でなくてノンフィクションだと，その辺の考え方はどうなるのか。しかも，多くのところでまるで見てきたよう

な、言い換えれば作ったような、つまりフィクションに近い叙述の仕方だと感じる著作であるが。

坪内祐三「文庫本を狙え！」（晶文社）

誰かによるこの本の書評で、引用が抜群にうまい、これだけで読んだ気になる、などと褒めていた。確かに面白く読ませる。

目黒考二「活字学級」というのが紹介されていて、それに

「私はミステリや日本の現代小説をめったに手にしない人間であるから、ここで紹介されている作品は殆ど読んだことがない（巻末に載っている書名索引を眺めると、登場する200冊近い作品の内、私が読んだことのあるのはたった5冊だ）。それなのに、私は、この本を、グイグイ読み進めていった。それは目黒考二の語り口の上手さにある。」

とある。

まったく同じことがこの本を読んだ自分に言える。ここでは154冊の文庫本が紹介される。その内、読んだことがあるのは、

- ・森鷗外「渋江抽斎」
- ・杉田玄白「蘭学事始」

なんと、たったの2冊だ。しかも、この2冊は紹介される他の本と比べると、きわめて特異なものだ。ほとんどの本の著者の他の作品も読んだことがない。それでも「グイグイ」読んで面白かった。

で、これを読んで読みたくなったものというのが、これが案外少ない。（しかしその後、これで知った本を何冊か買って読んでいる。）

あとがきによれば、坪内は1996年まで、1冊の著作もなかったという。そして、この本のもととなった週刊文春への連載が始まったのが1996年で、それから売れるようになったらしい。

この人は、僕より10年若い。その世代差のせいか、著者は意識的に戦後の左翼、護憲民主派に対して批判的というか揶揄的である。そこには違和感を感じる。気分としては分かるものがあるが、主張というよりポーズという感じがする。

それと少しは関連して、マンガ、プロレス、などのサブカルチャーをすすんで取り上げ、渋谷抽斎などと同列に論じる。これにも何かわざとらしさを感じる。

一般に、団塊の世代に対しての自己主張という意識が常に頭にあるのではないだろうか。もっとも、マンガ、プロレスは団塊の世代のものであるかもしれないが。

なお、この本は誤植が散見される。陸軍が陸軍になっていたりする。その意味では雑な作りの本である。

宮沢篤，武田政樹，柳原孝安「コンピュータゲームのテクノロジー」（岩波書店）

暮れに美季子に何か科学物の本を買ってやろうと思った。ちょうど美季子の年の頃に、子供向きの科学物を読んで、大変感激した記憶がある。シリーズの何冊だったかだが、箱入りでハードカバーの立派な本だった。残念ながら今残っていない。書いたのは原田三夫だろうか。しかし、インターネットで調べてみると、原田三夫の「誰にもわかる科学全集」全12巻が出版されたのが1921-30とある。僕が読んだのはもちろん戦後のものである。内容は、原子力、地球の歴史、天体宇宙だったと思う。崎川といった名前が記憶にある。あるいは伏見康治も関係していただろうか。

本屋でそのようなものを探したが、あまり適当なものがなかった。その時、岩波の科学ライブラリーのこの1冊を手にしたら、川合さんがまえがきを書いている。それにつられて買ってみた。130ページぐらいの薄い本で、すぐに読めてしまう。物足りなくはあるが、案外面白い。割と真面目に書いてある。これで技術の中身までは分からないが、気分は分かる。

3人の著者は(株)ナムコに所属するゲーム開発者である。その彼らが、3D 演算のために独自のデータフローマシンを作ったというのには驚いた (p.76)。

「3D ゲームのテクノロジーとはコンピュータゲームのテクノロジーであり、それはまた、コンピュータのテクノロジーそのものである」 (p.78)

というのも、むべなるかなという感じがする。それだけの自負をこ

の著者たちが持っていることはよく伝わる。一方で

「絵は最高級でもつまらない3Dゲームより、グラフィックが貧弱でも2Dのよくできた携帯ゲームの方がはるかに「のめり込める」．．ゲームの本質は，．．すなわちインタラクティビティという部分であり，．．没入感はずしも形や動き，色だけでなく，総合的な演出という大きな枠の中で考えられなくてはならない．．」(p.121-122)

というのも，なるほどと思う。

またその後の，「のめり込み」の危険についての議論も面白いと思った（FreeCell などという単純なゲームに膨大な時間を費やしている身としても）。

里見真三「賢者の食欲」（文芸春秋）

この間の坪内とよく似た雰囲気の本である。たとえば，池田弥三郎の本から，同じところを引用している(p.135)。獅子文六からも同じところを引用している (p.111)。文章は大げさで，時々鼻につく。

Jared Diamond, "Guns, Germs, and Steel: the Fates of Human Societies"

すごい本である。よくこういうものが書けると思う。何しろ，なぜ文明がユーラシア大陸で発達してアフリカや新大陸を圧倒したかという考察を，12000年の五大陸の人類の歴史を踏まえて語るのである。その議論は人文科学的な歴史方法論に基づくのではなく，植

物，動物，地理環境の分析による．その主張は大変説得力があるが，単に論理の組み立てだけでなく，文章力にも大いに依っている．このような壮大な話を400ページで述べるのは簡単すぎると著者は言うが (p.408)，十分長い．読むのに時間がかかった．しかし，このように念入りな書き方で，しかも読者を飽きさせないのは，なかなか日本の著述家にはできないことである．

この本は，去年翻訳が出て存在を知った．翻訳で読めばもっと短期間で読めただろうが，このように1ヶ月以上もかけて読むと，堪能したという気分になる．

新聞の本の宣伝では，この翻訳が20万部も売れたという．本当だとすると，日本の読者人口の質も高い．

堀江敏幸「熊の敷石」 (芥川賞)

エッセイ風だが，小説と言われれば小説とも言える．ペダンチックなところもあるが，しかしモンサンミッシェルだとかラ・フォンテーヌだとかリトレだとか，意外に平凡な道具立てである（といって自分はこれを読むまでリトレを知らなかったが，フランス語，フランス文学をかじる人には常識的なものらしい）．しかし，文章やそれが描く世界は静かに落ち着いて，感じがよい．主人公の語り手「私」が，何を考えているのかはよく分からない．結末はなんかとってつけたようだ．歯痛で終わるとは．

青来有一「聖水」 (芥川賞)

堀江のものが35ページに対し、これは50ページあってやや長いが、隠れキリシタン、長崎の原爆、スーパーを一代で作った父親と、その乗っ取りの企み、新興宗教、語り手の「ぼく」とカヤノさんとの男女関係など盛りだくさんで、長編にしてもよさそうである。このようにストーリーを作るタイプの小説で、「熊の敷石」とは対照的である。しかし、主人公の語り手が何を考えているのかよく分からない、という感じは共通する。

視覚的な鮮やかさを意識した文章は悪くはないが、どうも自分の趣味には合わない。気持ちとしては堀江のほうを好む。

Jhumpa Lahiri, “Interpreter of Maladies”

これも、翻訳が評判になったので存在を知った本。最近、新しい小説を読むことなど芥川賞の受賞作ぐらいしかないと、これは一篇一篇が楽しめた。どれも芥川賞の水準をはるかに抜く。O. ヘンリーやサキのような仕掛けで勝負する短篇ではない。しかしうまい。

9篇の短篇が収められている。共通するのはインド系アメリカ人がインド人が必ず登場すること。舞台は主にボストン周辺かインド。しかし、主人公は一篇一篇異なり、語り手も一人称だったりそうでもなかったりする。飾りのない文章が小気味よい。

NHK TVで毎週月曜の夜に、藤沢周平の小説を元にした毎回読み切りの、しかし舞台は同じ江戸の下町という、よくできたドラマが放送

されている。不思議と共通する世界を感じる。

獅子文六「食味歳時記」（中公文庫）

いや、傑作である。

獅子文六など読んだことがないし、実際今後読もうと思っても、小説など文庫にも入っていないだろう。そして、最晩年、死の1年前に気楽に連載したものをベースとしたこの本が、唯一生き残っているのではないだろうか。

しかし、それだけのことはある。

坪内の「文庫本を狙え」でこの本の存在を知った。次に里見の「賢者の食欲」を読んだら、また出てきた。里見の本では獅子が最初に取り上げられているだけでなく、最後にもう一度取り上げられて、主役の位置にある。またこの本から、坪内も里見もまったく同じところを引用している。

「食ってみるとウマかった」というようなそっけもない文章を連ねて、季節感と日本の食べ物文化の豊かさを見事に描く。そして最後に、

「さて、一年間、長々と書き連ねたが、なにが好きなの、かにがウマいのと、人に語ることが、あまり意味のあることとは、思っていない。

一人で、自由に食っていれば、いいのである。」
と書いて、照れを見せるところが昔の男らしくて、好ましい。

池田清彦「構造主義科学論の冒険」（講談社学術文庫）

池田の「分類という思想」は半分ぐらい読んで、あまりに「吹く」ので辟易して読むのをやめた。昨年、金沢のソフトウェア・シンポジウムにゲスト・スピーカーとして池田清彦を呼んでいたが、僕は所要のため、その話を聞けなかった。

後で岸田さんに聞いたところでは、ずいぶん好色だか下がった話が多く、変わった人だとのことである。

さて、この本の要約は、本人が一番明快にしてくれている。

「外部世界の实在性（唯物論）の過程を排除しても、科学は立派に成立すること。これがこの本の第一のメッセージです。多元主義社会をめざそう。これが第一メッセージに付随する第二のメッセージです。私がこの本で主張したかった事はこの二点だけです。」（原本あとがき, p.277)

しかし、実際は「实在性の仮定を排除しても成立する」ではなく、「排除しなければならない」と主張している。そこがよく分からない。

また「第一のメッセージに付随する」というが、どう付随するか分からない。この二つのメッセージは独立に見える。そして、後者は

ある種の啖呵であり，なかなか面白くすつとするが，かなり曲者でもある．同じような混ざり方が「分類という思想」でもあり，そこについていけなかった訳だ．

岩波書店編集部編「座談の愉しみ（上・下）」（岩波書店）

「図書」に載った座談会を集めたもの．

前から，日本の雑誌に特有なものは，巻頭言と座談会だと思っていた．この本の「解説」（日高昭二）によると

「この形式を雑誌編集の企画の一つとして打ち出し，また読み物としても大きく育てたのが「文芸春秋」の菊池寛である．」
という．

座談会はともすると，脈絡のない雑談となり，本人たちは楽しんでいるけど読む方はちっとも面白くない，ということになる（パネル討論も同じ）．その典型が冒頭の，河野与一，中野好夫，水野亮，栗田賢三，という碩学達の座談である．

一方，読ませるものは座談者（とくに対談者）がよく準備してきているか，座談・対談後に丁寧に推敲していると思われるものである．たとえば，これまでも常に感心してきた，大野晋，丸谷才一の対談は，ここに載せられているものもよく準備されていると思う．

他に感心したのは，

・中村光夫，大江健三郎「二葉亭四迷をめぐる」

- ・蘆原英了，近藤四郎「足」
- ・大江健三郎，柴田翔「小説とエッセイの間」
- ・長田弘，鶴見俊輔「本とつきあう」
- ・栗津則雄，香原志勢，村上陽一郎「怠惰について」
- ・大岡晋，大岡信「古典とつきあう」
- ・荒俣宏，柏木博，藤森照信「形あるものの行方」

あたりである。座談のうまい丸谷が，石川淳，大野晋，幸田文との「東京ことば」では発言が極端に少ないのもおかしい。石川，幸田という大先輩にけおされたというよりも，丸谷が酒田出身で，他の3人が東京育ちのせいだろう。

「丸谷 ちょっと差別されているみたいな気持ですね（笑）」
(p.278)

というのが，正直なところだろう。

荒俣宏「大東亞科學綺譚」（ちくま文庫）

これも坪内の「文庫本を狙え！」に紹介があった。

この本は荒俣の多くの本の中でも読みでがある。ページ数も436ページと多いが，著者のあとがきでも

「本書は筆者にとり，最も心に残る一冊になることと思う。」
と書いている。

「大東亞」という名前は，懷古趣味ないしエキゾチシズムという雰
囲気で付けたものかと思ったが，あながちにそうでもなく，かなり

の話が戦前、戦中の大東亞共栄圏構想と絡んでくる。

佐藤信夫「わざとらしさのレトリック―言述のすがた」（講談社学術文庫）

これで、講談社学術文庫に入っている佐藤の本は全部読んだことになる。

この本が最初に出版されたのは佐藤の晩年に近い1986年（佐藤が死んだのは1993年）であるが、それ以前に個別に雑誌などに書かれた小文を集めたものである。それにしてもテーマに一貫性がある。いや、佐藤の思索と文体は、どんな本でも常にある種の一貫性を持っていたともいえる。

しかし、この本は漱石、小林秀雄、吉行淳之介、谷川俊太郎、井上ひさし、筒井康隆、高橋康也、バルトをとりあげていて、作家論、文体論、文章読本のような面白さがある。それらを料理する佐藤の手並みのよさを、堪能できる。

網野善彦「歴史を考えるヒント」（新潮社）

岸田さんがSEAMAILに、網野の本を色々読み漁った上での考察を書いていた。僕は網野の本を何冊か買っているが、読み通したのはこれが初めてである。

これは、ことばの考察をめぐって歴史を論じた本である。「日本」という国名が689年に決まったという話から、「関東」と「関西」，「人民」と「国民」，「百姓」，被差別民の呼称，商業用語などをとりあげる。一貫しているのは，農本主義で語られてきた歴史を見直そうというものである。

Raymond Floyd, “The Elements of Scoring”

ずいぶん前に Amazon で買ってざっと見たが，ちゃんと読まなかった。2月のゴルフで惨めな結果を得て，発奮して最初から読み始めた。刺激を受けて4月と5月のゴルフに自信をもって臨んだが，結果は同じくひどいものだった。それで最後の少しを残して打っちゃっておいたが，区切りをつけるために読み終えた。

しかし，ゴルフのハウツーものにしては，1枚の写真も図もないという変わった本である。かといってゴルフにまつわるエッセイとか回想とか自伝とかではなく，純粹にスコアアップを望む者のための本である。

副題は “Scoring your best when you’re not playing your best” という。結局，ゴルフではスコアが一番の目的だという。というと精神論を廃して，もっぱら技術を論じているかのように思われそうだが，むしろそうではない。気持の持ち方，考え方を中心に書いている。それで面白い。

名文なので感心したが、裏カバーの折り曲げたところに、第2著者として Jaime Diat という人の名前が載っている。スポーツライターだという。気の毒なことに表紙や中表紙にはその名がない。

山室恭子「歴史小説の懐」（朝日新聞社）

暦，季節，天候などを手がかりに，歴史小説の分析をして，ある季節が好まれるとか，途中で時の進みが止まるとか，時の前後関係に矛盾があるとか，これまで人があまり問題としなかった指摘をして，楽しもうという本である。とくに「大菩薩峠」でその手法が功を奏し，400ページの本書の100ページ以上がそれに当てられる。しかし，それに次ぐページ数の当てられている「お宿かわせみ」になると，一時はやった「サザエさんの秘密」などと同工のものとなって，飽き飽きしてくる。世のシャーロキアンという人達も同じような作業をしているのであろう。

網野善彦「異形の王権」（平凡社ライブラリー）

この本は恐らく，網野のユニークな史観を世に知らせるのに大きな意味を持った本なのではないだろうか。しかし，これを読むと，絵引についてはもちろん宮本常一等，飛礫については引用されている中沢厚「つぶて」などの多くの研究，後醍醐天皇についても佐藤進一等の多くの先行する業績があり，それらに依りつつ発展させていることが分かる。

しかし、ここに採録されている図版はモノクロで質はあまりよくないものの、いずれも面白い。美術としても民俗学史料としても、確かに魅力のある絵が多数残っているのである。

長尾真「「わかる」とは何か」（岩波新書）

表題から教育心理学のような内容が想像されるが、中身はかなり異なる。科学技術における説明、理解、発見の方法の話である。

長尾さんの文章は常に平易である。この本を、佐藤信夫のものと平行して読んでいたら、平板でつまらなく感じた。それでしばらくほっておいたが、とりあえず読みきった。

2章のあたりは、この間読んだ池田清彦と重なるが、もちろん長尾さんのは正統的。平凡といえば平凡だが、しかし薄っぺらいわけでもない。コクはないが。

Anne Tyler, “Breathing Lessons”

アメリカのおばさんが書いた Baltimore あたりを舞台とする小説が、何で面白いのか。主人公の Maggie と Ira という夫婦の年が、今のわれわれぐらいだからか。別にそういうわけではなくて、とにかく面白い。

独特のユーモア。出来事としては1日のことを語りながら、高校時代、結婚、子供達の成長、という過去が巧みに物語られる。しか

し、幸せな人生という訳ではない。それと比べて自分の家庭はまだ幸福だと感じるために、こういう小説を読むわけではないが。

立花隆「僕が読んだ面白い本，ダメな本 そしてぼくの大量読書術・驚異の速読術」（文芸春秋）

前に読んだ「ぼくはこんな本を読んできた」の続き。タイトルがさらに長くなった。しかも、冒頭に67ページもの序がついている。

立花自身が本は通読するものではないというから、その教えに従ってこの部分は飛ばし読みした。しかし、そのような読み方でも確かに言っていることの見当は、充分つく。でもこれだけの序をつけるエネルギーはすごい。

一方で、週刊誌に連載された本の紹介の方は、頭から順に真面目に読んだ。とにかく知らない本ばかり紹介されている。紹介されている中で読んでいるのは6冊だけ。買って読んでいないのが1冊だけある。

しかし、この紹介だけで充分読んだ気になるものも結構ある。

谷崎潤一郎「幼少時代」（岩波文庫）

大岡昇平の「幼年」も面白く読んだが、ここではさらに前の時代、明治の下町の思い出が語られる。トルストイもカロツサも年をとっ

てから幼少時代を振り返るものを書いている。それがしかし、単に個人の記憶を綴ったものに終わらずに、不思議な感銘を与える。

たかが100年前の東京だが、大いに変わってしまったということから、記録的な面白さもある。偕楽園という支那料理店は明治16年に作られたが、ずっと東京市内にただ一軒しかなかった支那料理店で、大正4、5年ごろまでは、都下の支那料理店は

「寥々数件に過ぎざりし」(p.146)

というのなどに驚く。鍋木清方の挿絵もよい。

九代目団十郎、五代目菊五郎の話は、渡辺の本あたりでも度々目にしたが、貴重な記録だろう。この辺は、キーンのオペラの追憶談と似た感興をそそられた。

三好万季「四人はなぜ死んだのか」(文春文庫)

女子中学生が、和歌山カレー事件の警察や医者への対応に対する批判を、インターネットを駆使して展開したということで評判になり、文芸春秋の読者賞をとり、その後単行本化されたのが文庫で出たので買った。美季子に読ませる目的だったが、自分で通読してやはり感心した。

インターネットの部分が主に世間から注目されたようだが、その批判精神、徹底的に調べる能力、文章力、いずれも舌を巻く。付録に

ついている中2の時の「始めまして」か「初めまして」という自由研究からしてすごい。ほとんど立花隆の域である。

森本哲郎「ウィーン」(文春文庫)

9月にウィーンに行くので、たまたま本屋で見つけたこれを買って、すぐに読んだ。平行して昔買ったジョンストンの「ウィーン精神」もちびちび読んでいる。

森本の本は気楽に読める。ザメンホフ、ボルツマン、ショーペンハウアー、ムジル、カフカ、ツヴァイク、シューベルト、ベートーベン、フロイト、エゴン・シーレ、ヒトラー、ヴィトゲンシュタイン、シュニッツラーなどを扱いながら、サービス精神旺盛で飽きさせない。観光ガイド、歴史ガイドにもなっている。また、この間の谷崎ではないが、自分の幼年時代、青春時代の追憶的な部分もある。

図版も多く、索引、参考文献、年表までついている。得する本である。願わくば地図を付けてほしかった。旅行ガイドブックを買って、その地図を参照してみたが、あまりうまく対応がつかない。ガイドブックの地図は杜撰である。

A. C. グレーリング、岩坂彰 訳「ウィトゲンシュタイン」(講談社選書メチエ)

森本の「ウィーン」にもウィトゲンシュタインが出てくるが（なんとヒットラーと並べて論じられる），それを買ったとき一緒に「ウィトゲンシュタインのウィーン」という本を買った．それを読む前に，以前に買って1/3ほど読んでいたこの本を，まず片付けることにした．

この本は著者が「専門家でない人々にウィトゲンシュタイン思想の概略を知っていただくこと」を目的とすると言っているように，読みやすい．また訳文がこなれていて，その点でも抵抗が少ない．それでウィトゲンシュタインの思想の概要が，確かに分かった気になる．Flores & Winogradの本ではウィトゲンシュタインが1つの下敷きにされていたが，確かに言語に対しての前期の論理的なアプローチと，後期の言語行為論的なアプローチとの対比は，初期のSchrdluのような自然言語処理研究から，その限界を感じてあのような本を書いたウィノグラードの軌跡と，相通じるものがありそうだ．

しかし著者はあとがきで，

「ウィトゲンシュタインはある意味で詩人である．ひとたび原文の字句から離れ，きらびやかな比喻や詩的な部分によって眩惑されないようにしたならば，そこに残されている論証は少なく，決定的に重要な考え方もまるで明確でなく，期待したレベルには，そして哲学研究として要請されるレベルにはまったく及ばないということがわかるのである．これは残念なことである」(p.221-222)

とやけに批判的である。そのような立場をとる人が、何でこのような本を書いたのだろうか。

ところで、ラッセルの「西洋哲学史」を見てみたが、ウィトゲンシュタインはまったく出てこない。31章の「論理分析の哲学」ではカルナップは出てくるが。

ジョン・ダワー、三浦陽一・高杉忠明 訳「敗北を抱きしめて（上・下）」（岩波書店）

圧倒された。量も多いが中身も濃い。

それでも主に日本の資料に頼る上巻の5章ぐらいまでは、それほど感心したわけでもなかったが、やはり占領側の資料を駆使した第3部以降は、すごい力で引き込まれた。

まず、この人の公平な視点がよい。文章もよい。翻訳がよい。このように多くの原典が日本文のものは、翻訳で読むのに最適である。

大きなテーマが、マッカーサーによる天皇制維持の方針とそれに呼応するしたたかな裕仁、およびその取り巻きである。それから、戦時体制に続く官僚制の温存、計画経済、一方でp.223にあるような昔馴染みの「新しさ」。

「要するに「変化」そのものが続けられていたのである。日本人は現状を維持することに慣らされていなかった。それどころか1860年代の明治維新からずっと、日本人は変化の嵐に巻きこまれてきた

し、そのうえ戦争が変化のプロセスをさまざまに加速したのであった。」

というような指摘。

ずいぶん多くのことを教わったが、不思議に書いていないのが農地改革である。

検閲に関しての批判的な考察は実に鋭い。僕としては珍しく、この本にはずいぶん線を引いた。

ちょっと前の Time で、沖縄のレイプ事件が取り上げられて「これは人種問題だ」とか「容疑者が日本人だったら逮捕されなかったろう」などと刺激的なことを書いていた。しかし、この問題の根は、占領時代にあったことが、この本を読むとよく分かる。

Richard North Patterson, "Degree of Guilt"

ウィーンに持っていった本なので、3週間ぐらいかかったことになる。ペーパーバックで534ページと長い。

他の本を読む時間を奪ったと思えばもったいない気もするが、念入りに書かれていて堪能したとはいえる。法廷ものとしては John Grisham をたくさん読んだし、そちらの方が世間でももっと売れているが、新聞で Patterson の方がはるかに質が高いと書いているのを読んだことがある。

確かに、Grisham のようなストーリーの破綻はほとんどない。手の込んだ話をうまくまとめている。ちょっとしつこく書きすぎているところはある。しかし、これだけしっかりしたものは、なかなか日本人のミステリ作家には書けないと思う。

夏目漱石「門」（岩波漱石全集6）

「門」は初めて読んだ。しかし、どんな話かは大体知っている。「それから」と似て、友人の妻を取る話である。過去に何かあって地味な暮らしをしている夫婦の描写が前半続いて、その過去の事件はなかなか明かされない。しかし、それが謎解きのようなサスペンスを生むわけではまったくない。

中頃で、その事件が述べられるが、そこに至る過程はかなり書かれているものの、肝心なところは漠然とした言い方で暗示される。この間読んだ Patterson なら、ここに何十ページも費やすだろう。

夫婦にとってそのことは劇的であったはずだが、その後はおよそドラマ性とは遠い生活が続ける。これは社会に対する負い目のようなものによるとされる。その友人の安井が、少しは小説らしく、運命的にも大家の家を訪れることになる。宗助はあわて、逃げるように鎌倉の禅寺へ行く。これが円覚寺らしい。しかしそこでは悟りを得られない。家に戻り、安井がまた蒙古に帰ったと聞き、小さな平安を回復する。そこで話が終わる。

「虞美人草」のように作為的な筋書きを作って、自分で照れを見せるようなことはない。その意味で漱石が小説を書きなれてきたのかもしれないが、その分、「虞美人草」にあった華麗さはまったく消える。新聞小説としては読者には受けなかったろう。

ドナルド・キーン「能・文楽・歌舞伎」（講談社学術文庫）

キーン・ファンの僕としては、いつものように大変楽しんで読んだ。

序文からして思わず笑ってしまうような、彼らしいユーモアを湛えた文章が続く。しかし、ここに収められた能についての文は1966年に書かれたものであり、文楽もやはり同じ年に書かれている。文楽はその時に吉田健一訳で日本で出版されているが、能のほうは英語で出されただけで、訳が出るのはこれが最初らしい。歌舞伎については、短い新稿と2つの講演記録が載せられている。

なんといっても感心したのは文楽である。自分は文楽をTVですら見たことがない。これを読んで、その奥の深さ、芸術性というものに目を開かれた。キーンによってオペラに開眼させられたのとまったく同じである。キーンには、このような音楽や演劇についてもっとたくさん書いてほしい。

川上弘美「センセイの鞆」（平凡社）

新聞の書評で持ち上げられていた。とくに松浦寿輝は読売で「ここ数年来、こんなすてきな小説を読んだことがない」と書いて、それがこの本の帯にも載っている。僕が買ったのが第4刷だからだろう。それに「谷崎潤一郎賞受賞！」とも印刷されている。松浦さんが褒めているせいか、駒場の生協ではこの本が平積みになっており、それを僕は買った。

確かに気持のよい小説である。しかし、比べる相手がおかしいのかもしれないが、同じ小説といってもたとえば Anne Tyler とはずいぶん違う世界である。でも、これは恋愛小説である。それもずいぶん純粋な。そして酒とその肴の描写の旨そうなこと。

藤森照信「天下無双の建築学入門」（ちくま新書）

藤森の書くものは面白いし、内容もこれまでのような日本における西洋建築史とはまた別の、渡辺武信が書くような住宅建築の話で期待させられるし、事実、期待を裏切らぬ面白いことがかなり書いてあるが、渡辺のものほど、またこれまでの藤森のものほどには感心しなかった。それは多分、軽薄体風の文体のせいだろう。大体、本のタイトルからしてよくない。

なお、最初の1/3強は縄文や弥生の住居の話である。それもそれで面白い。とくに、屋根に花を咲かせる芝棟という話、それがフランスにもあるというのは秀逸である。しかし、「夏は櫟（す）に宿（ね）、冬は穴に住む」という「日本書紀」の文句が、いくらもと

は雑誌の連載とはいえ、3度も4度も出てくると、くどいというか、雑という感じを受ける。

杉本秀太郎「花ごよみ」（講談社学術文庫）

別に意識したわけではないが、春頃に読み始めて、枕元において時々思い出したように1~2項目読んで、冬に入ろうとする時に読みおえた。花は、春夏秋冬の順に並べられているので、よい読み方であった。

しかし、こちらは花の名前を知らない。名前だけでなく実物を知らない。各項目に、恐らく著者による小さな図がカットとしてついていて、線画で色もなく、小さすぎてよく分からない。

今、朝日新聞でも毎朝「花おりおり」という題のコラムがあって、こちらは文章はもっと短い、カラー写真がついていて少しは感じが分かる。新聞だからもちろん季節を意識していて、同じ頃同じ花について読むこともあった。たとえばワレモコウ、シュウカイドウ、マツムシソウ。しかし、あとがきによると、この文章は平凡社の別冊「太陽シリーズ」として刊行された季刊「花の図譜」4冊に連載したものだという。それなら、大判の美しい図が本で見られたのだろう。

たまたま前のほうをひっくり返して、柳の項に漱石の「門」のお米と安井と宗助と3人で出かける場面で、土塀のそばに柳がある情景

が引用されている (p.59). しかし, この本で引用するのは基本的に詩歌である. あとがきによれば, 杉本は古今和歌集が好きなのだそうだが, 俳句, 近代詩, 短歌, フランスの詩の訳詩が多い. このような文芸と植物学, 本草学を融合させた知である. しかし, 「八手」の項のように, 思いがけない私的な告白がなされるところもある.

本書も講談社学術文庫だが, この文庫のものをずいぶん読んでいる.

越智貢, 土屋俊, 水谷雅彦 編「情報倫理学」(ナカニシヤ出版)

今度, 川合さんに頼まれて, Tという人が提出した情報倫理をテーマとする学位論文の審査をすることになったので, 大分前に買ってあったこれを読んでみた. 最初はもちろん通読するつもりはなく, 拾い読みをしようとしたが, 速読できるし案外読んでつまらなくもなかったので, 最後まで読んでしまった.

10人ぐらいが書いているが, 内容はまちまちである. しかし主に京大の人文科学系の人が多い. 比較的単純なアンチ技術主義みたいなところもある. 情報倫理はよりよいものを進める倫理でなく, 何かをしてはいけないという否定的な倫理だという主張もあれば, 電子民主主義や体制を壊す役割を論じるものもある.

こういうものが速く読めるのは、まず日本語で、対象が情報という一応自分の専門で、しかも技術書でない手軽さからだろう。

田崎真也「本格焼酎を愉しむ」（光文社新書）

ソムリエ世界一の田崎が、何と日頃一番よく飲む酒は焼酎だという。それだけで充分面白い本である。しかも、こちらはほとんど焼酎を飲まないのに、ドナルド・キーンに文楽を教えてもらうのと同様の面白さがある。

痛風には焼酎がいいかもしれない。

後半の個別の銘柄の説明は、読み飛ばした。飲むときに読めばいいだろう。しかし、香りの表現などに工夫がある。

渡部直己「不敬文学論序説」（太田出版）

確か駒場の誰かが、この本を推薦していた。それで自分の買ってもよい本のリストに入れておいたが、この間、駒場の生協にこれが置いてあるのを見つけて買った。こういう買うべき（買ってもよい）本のリストを作っているために（そうしないと書評などで読んでも端から忘れてしまう）、やたらと買う本の量が増えた。いったんリストに載せると、何か買わなければいけないような気になってしまう。しかも、今やアマゾンなどがあって、本を探して買うのが実に楽になっている。

推薦していたのは小森さんあたりかもしれない。小森さんは本書のP.83あたりに出てくるが、必ずしも肯定的に書かれていない。むしろ蓮實さんの方が、好意的に取り上げられている(p.87など)。あるいは同じ「批評空間叢書」で「折口信夫論」を出している松浦さんだったかもしれない(これもp.120に出てくる)。

さて、不敬罪のあった時代はともかく、戦後から現在に至るまで、とくに現在はかつて以上に、天皇についての批判どころか描写を避けようとする、すなわち天皇に触れるのをタブー化する、マスコミの風潮に違和感を常にもっていた。

本書がその疑問に答えてくれることを期待したが、その期待は部分的にしか満たされなかった。

不敬罪の施行が明治15年で、「風流夢譚」が戦後15年の昭和35年で、その並行性を指摘する議論は鋭く面白い。しかし、それ以外については、まず著者の文章が晦渋で、悪文といってよく、ついていけないところが多い。そして多く引用される「不敬な」文は楽しませるが、それ以上のことはあまりない。もちろん、そのような不敬な文章の少なさを問題とする作者の主張はよく判る。しかし、なぜこのようなタブーが現在も、あるいは現在こそ、きわめて強いのか、結局よく判らない。判ったのは、「不敬」文学にこちらがもつ関心は、ポルノ小説に抱く関心と近いものであることだ。検閲、伏

字という歴史からも明らかだが、大江、中上などが、天皇制と性とを直接結びつけるのは、やはり理由があるのだろう。

北村龍行「借金棒引き」の経済学―現代の徳政令（集英社新書）

これも書評で見た。

前から素朴な疑問を持っていたのは、ここ数年の金融不況問題というか、不良債権問題で、もちろん審査能力がなく図に乗って貸し込んだ銀行も悪いが、借りて返さない方がまず悪いのではないか。その辺があまり新聞にも出てこない。

取り立て能力がないこともまた銀行の問題ではあろうが、借りた方の責任追及はどうなっているのだろうかという、まことに素人っぽい疑問である。

それに答えてくれるのではないかと期待した。その期待に必ずしも答えてくれたとはいえない。しかし、4章、5章でたどるこの5年の動きは、改めて異常なことであると思う。

この本のアイディアは、中世の徳政令の歴史を省みて、それと現在を比べてみようというのである。今年のNHKの大河ドラマは北条時宗の話で、蒙古襲来がテーマである。時宗役は狂言のホープの和泉などかだが、演技は固い。異母兄の時輔役が結構人気を得ているようだ。話は史実と作り話が混ざっていて、かなり怪しげである。

しかし、この本で、竹崎季長、安達泰盛、北条政村、平頼綱とかが出てくると、どうしてもTVのそれらの役のイメージが浮ぶ。

この中世の徳政令との対比もあまり成功しているとはいえないが、しかし徳政令の記述と現在の話、それぞれは個別にある程度よく描かれていて、それなりに面白い。

堀江敏幸「おぼらばん」（青土社）

芥川賞を取った「熊の敷石」は、それほど強烈な読後感を残す作品ではなかったが、妙に記憶に残った。しかし、芥川賞を取る前から、この作家の「おぼらばん」などの作品を、誰かが新聞の書評かなにかで非常に褒めていたので、例の本のリストには載せていた。最近、駒場の生協で、確か「不敬文学論序説」と一緒に見つけて買った。

15の短篇が収録されているが、「熊の敷石」とほとんど同じ世界である。舞台として、たまに生まれ故郷や現在の職場（明治大学）の近くの日本が登場するが、ほとんどはパリやその周辺。小説というには、ブッキッシュな蘊蓄がそれとなく出てきて、読んだ本の話と現実の話とを結びつける趣向が多い。現実の話の方のどこまでが本場で、どこからがフィクションなのかは判らないが、エッセイ風のスタイルは、フィクションとは思わずに読んでほしい言っているように見える。

最後の作品「のぼりとのスナフキン」（目次で、これだけがちょっと別扱い）で、堀江の勤務先が明大でも僕も2年に一度非常勤で行く生田の方であることが判った。

仲畑貴志「この骨董がアナタです。」（講談社）

ちょっと評判になった本である。

本として面白いが、自分で骨董をやるのは金も暇もないという感じ。

タイトルがよくないが、これは白洲正子に徳利を見せたら、「この徳利が、あなたです」と言われたのを使ったとのことである。最近、この手の話には白洲正子と交友があったということを得意気に書く人が多い。とくに白洲が死んでから、以前にも増してブームになっている。NHKのTVでこの間、「白洲正子の世界」というのをやっていて、ビデオにとって見た。人気があるのは判らないでもないが。

安岡章太郎「歴史への感情旅行」（新潮文庫）

安岡の小説は、ほとんど読んだことがない。「質屋の女房」とか、いくつかの短篇を読んだかもしれないが、ほとんど記憶に残っていない。安岡と吉行淳之介は文学的に近いようで、当人たちも交流があったようだが（本書でもたとえばP.244に吉行のことが出てく

る)、まだ吉行の方は少し意識して読んでいる。しかし吉行も、必ずしも好きな作家とはいえない。

本書を読んで、安岡が関心を持つものに親しさを感じた。たとえば、親の故郷の土佐の話で、得月楼で自由民権論者たちがよく飲んでいたということが出てくるが、この得月楼にこの6月に行ったのでちょっと気分が判る、といった他愛無いことであるが。それから「日本近代文学館と私」という文章では、高見順が代表として文学館を発足させる頃のことを書かれている。この日本近代文学館は駒場にあるが、間もなく閉鎖されると新聞に出ていた。

山の上ホテルの話が出てくる(「旅人の弁」p.95)。このホテルには学生時代から親しみがある。

井伏鱒二のことがたくさん出てくる。かなり敬愛しているようだ。で、『黒い雨』について、その盗作説に真面目に反論している。この間読んだ猪瀬直樹の「ピカレスク」では、井伏を悪者に行っている。そこに次のような一節がある。

「作家の安岡章太郎が「重松日記に同じことが書いてあったとしても、『黒い雨』に描かれたものとは文体が違っているはずである」と『新潮』(昭和64年1月号)で述べたのはその一例である。．．．」

ここで、安岡が作家の創作に違いないといった部分、メダカが群れているのを見るという光景は、実はもとの重松日記に該当箇所があ

る，と猪瀬は指摘している（「ピカレスク」p.461）。猪瀬が引用するこの安岡のもとの文章が，本書に収録されている（p.112）。

もっとも，猪瀬の本が出た後，誰だったか，直接猪瀬を引き合いに出してではなかったが，井伏を擁護することを書いていた。あるいは，重松日記に関わる資料が出てきて，『黒い雨』の創作性が改めて認識されたという記事だったかもしれない。

後，知らなかったのは，安岡が遠藤周作を代父としてカトリックの洗礼を受けていたという事実である。

Apostolos Doxiadis, "Uncle Petros and Goldbach's Conjecture"

俗に「小説より面白い」という。「事実は小説より奇なり」と出版社がノンフィクションを売るときに宣伝文句としてもじって使っているのが，大方かもしれない。

数学史の話には，確かにそういうものがある。たとえば決闘で死んだ天才ガロア。この間読んだフェルマーの定理の話もとにかく面白かった。昔，矢野健太郎の「大数学者」というのを読んだが，あれも面白かった。最近，TVで藤原正彦がニュートンやガウスなどの数学者を取り上げて紹介する番組をやっていた。

で，この本は逆に，数学をネタにフィクションを作ったものである。なかなかよくできている。作者はギリシア人で，15歳でコロン

ビア大学数学科に論文を出して入学を認められたという人である。
だから、この小説の主人公のように天才数学者といわれた経験があるのだろう。

面白くできているが、また数学を全然知らない人にも楽しめるように工夫されているが（そこが少し数学を知っている僕などにはやや物足りないが）、結末は予想されるようなもので、やや興醒めである。

長沼行太郎「思考のための文章読本」（ちくま新書）

安藤さんに薦められた本である。そうでなければ気づかなかった本だろう。彼が薦めるだけあって、内容はある。「単語の思考」「語源の思考」「問いの思考」「擬人法の思考」など思考のタイプを並べ、それぞれに適切な文章を引用する。

「「三次元とは、一つの点を明示するのにたとえば経度、緯度、高度の三つの数字を必要とするということだ。」（ジェームス・グリッグ『カオス』）

これは類と種差による古典的な定義法とは違うけれども、抽象的な用語をこんなふうに即物的操作的に説明されるとわかりやすい。」
(p.78)

なんていうことに感心するのは、著者が「文系」だからかと思った。他にもそう思ったところがいくつかある。

養老孟司が引く沢庵の『医説』からの孫引きで、「入れる」ということばを沢庵(～1645)が今と同じような形で使っていたという指摘(p.241)は面白い.

P.231の漢文の訓読の話で、この「文法」を与えるのは面白い練習問題かと思った.

平松剛「光の教会 安藤忠雄の現場」 (建築資料研究社)

大宅壮一賞を取った作品だが、建築資料研究社という地味な出版社から出されたもので、平松剛という著者も無名である. 奥付を見ると早大の建築を出た人で、建築事務所に勤務していた経歴があり、プロの著述家ではないようだ. 文章は物足りない.

ただ、この著作の中に、自分に関することは一切出てこない. それどころか、著者による前書きも後書きもない. 代わりに安藤忠雄による「発刊に添えて」という文章が巻末にあり、さらに“編集者”による「解説にかえて」という短い文章がその後にあるが、この“編集者”は名前がなく、その中で著者は“筆者”と呼ばれている.

このように控え目な著者は、とにかく事実経過を丹念に報告することに努め、余分な思い入れ、脚色は極力避けようとしているように見える. それには共感を覚える. 描かれるのは安藤だけでなく、現場監督の水谷、施主の軽込牧師、施工業者の一柳、那須などに同じ

くらいの目が注がれる。安藤の個性は強烈だが、建築は多くの力でできることも痛感される。

宮本常一「民俗学の旅」（講談社学術文庫）

一種の自伝である。「忘れられた日本人」や佐野眞一の「旅する巨人」に出てくる話がかかなりあるが、やはり当人の言葉で語られたものは深みがある。

とくに最初の方の祖父、父、母の話は、みな感動的である。後は、実によく歩いたものだという印象である。そして大変社交的らしい。社交的という言葉は都会のパーティーなどの付き合いを連想させるので、そぐわないかもしれない。話好き、世話好き、人に好かれるタイプということだろう。

「忘れられた日本人」が地方の古い、しかしちょっと前までいた日本人を記録したものであり、そのように地方で同じ暮らしを長い年月続けてきた日本人をいつくしむ気持がある人は、現代の日本社会や若者に対して批判的であろうかと想像されるが、そうでもない。農業政策、中央中心の政治には批判的だが、最後の章で自分が大学で教えた若い人達に大変大きな期待を寄せている。これは宮本がまた、若い人を育てることが巧みであったということでもあろう。大学教師として自分は、落第かもしれない。

2000年

出口裕弘「辰野隆 日仏の円形広場」(新潮社)

書評などで評判がよかった本である。確かに面白い読み物である。そもそも雑誌「東京人」が東京大学特集を組んだとき、辰野金吾、辰野隆父子2代の東大教授について書いたものがきっかけだったという。僕は金吾と隆が親子であったことも、あまりちゃんと認識していなかった。そういえば藤森照信の書いたものに、そんなことがあったっけという程度である。

それで、よく調べ、いろいろなエピソードを集めている。金吾が自分の死の床で、人を集めて告別の辞をなし、万歳を連呼するという話からして、びっくりする。小林秀雄の口述試験の様子、太宰治の落第生ぶりを自ら書いた小説の一部など、次から次に面白い話がある。著者自身のフランスとの関わり方、日本と仏国との関係の歴史など、話は多岐にわたる。文章もよい。人がほめるだけのことはあるが、なんだか物足りない気もする。もう少し骨太の作品になりえたテーマではないか。しかし、辰野隆の洒脱さが基調の本に、それを言うのは野暮か。

浅野、大森、川口、山内編「東京大学は変わる 教養教育のチャレンジ」(東京大学出版)

自分も1章書いている本だが、人の分も一応すべて読んでみた。

教養学部50周年記念の出版で、川口さんの尽力でできた本である。東京大学出版会から出された駒場関係の本ということで、誰しも「知の技法」と比較するだろう。さらにこの本は受験シーズンに出版し、「東京大学」というブランドに頼って売ろうという魂胆がかいま見える。帯にある「リベラル・アーツ教育の現場からの問いかけ―東大生になることの意味」、この後半部分がその辺を意識した惹句のはずである。対象読者層は、東大を受験しようという高校生やその父兄、教育関係者ということだった。

しかし、できあがった本を見ると、それほど売れそうな本とは思えない。教養教育の問題をまともに論じている部分が多いが、それはともすると駒場の問題という内向きの議論になりがちで、あまり元気の出る論調にはならない。もう一つは、最近の学生の学力低下がたびたび論じられ、人によっては説教調になる。どう見ても若い高校生や新入生に元気を与えるような文章が少ない。その中であって自分の文章は若い人が読むことを意識した、ずいぶん前向きのものである、と自画自賛したくなる。

江里口さんがUP（東大出版PR誌）に書いていた文にもわりと感心したが、本書にも6ページほど書いていて、そこで500人の文科生を相手に、2回に1回の割合でレポートを提出させ、毎回それを採点しコメントをつけて返却するというのには感心した。川口さんの評価の話も、教養教育全体の経緯の中に位置づけていて、よい文章だった。浅野さんの「終わりに」も、意外にと言ったら失礼だが、なか

なかよい。それに比べ、文系の大森さん、山内さんの文章は論旨が明快でない。とくに山内さんの文は悪文だ。彼としてはあわてて書いたのではないだろうか。

J. K. ローリング「ハリー・ポッターと賢者の石」（静山社）

美季子が素早く読んだので、こちらも頑張って読んでみた。初めのうちは馬鹿馬鹿しいという気持ちも抑えがたかったが、後半からさすがに面白く書いていると感心した。

この訳者、松岡佑子という人が、亡くなった夫の零細出版社、静山社を引き継ぎ、この翻訳権を得て美しい本として出版した、ということも驚きである。

角山栄「茶の世界史」（中公新書）

この前読んだ「時計の社会史」が面白かったので、その前作である本書を読んだ。

「茶がこんなに（17世紀）ヨーロッパ人にもてはやされたのは、彼らの東洋文化に対するコンプレックスからきている」(p.37)

とか、イギリスも最初は緑茶を主として飲んでいたが、

「18世紀をつうじて緑茶の割合が次第に減少していく一方、紅茶の割合が年々増加していく」(p.51)

とか、それこそ目から鱗が落ちる話である。そして

「16世紀に東洋へ渡航したヨーロッパ人をもっとも驚かせたのは、中国や日本のすぐれた料理とその食べ方、マナーであった」(p.77)

「しかし、イギリス・ブルジョワ社会の平和と幸福を代表した紅茶も、その紅い色が象徴するような血なまぐさい本質を秘めていたのである」(p.88)

として、砂糖植民地と奴隷制の話、中国からの茶の輸入の見返りとしてのアヘン貿易、インド綿業の壊滅とインド、セイロン茶の開拓という、帝国主義的残酷な歴史が述べられる。なるほどと思う。

後半は、日本の茶の輸出の歴史で、総じて失敗続きであった過程が、明治時代の資料を丹念に掘り起こして述べられる。

とにかく、角山栄という人は面白い本を書く。

丸山眞男「忠誠と反逆」(ちくま学芸文庫)

最近、学位論文の査読などが多くて、あまり本を読んでいない。その中で、この500ページぐらいある文庫本をコートのポケットに入れて、毎日、山手線の10分間ぐらいずつの時間で読んだ。

丸山眞男は、実はこれまで「超国家主義の論理と心理」ぐらいしか読んでいない。しかし、中野雄の「丸山眞男 音楽の対話」がとても面白かったので、丸山を読んでもみる気になった。

堪能した。数学のロジックとは異なるロジックである。しかし、ロジックには違いない。やはり本のタイトルとなっている「忠誠と反

逆」が面白い。しかし、「福沢・岡倉・内村」も「歴史意識の「古層」」もまた面白い。面白いという以上の感想が浮かばない。川崎修という人の解説が、自分の感想の代わりになる。

初めの方は「茶の世界史」と並行して読んでいた。そこで、佐久間象山がアヘン戦争で衝撃を受けて、「海防八策」という上書を呈したなどというあたりを読んで (p.144), 思わぬ関連に愉快的気分になった。アヘン戦争という悲惨な歴史を材料に、愉快になったというのも不謹慎な話だが。

玄月「蔭の棲みか」(芥川賞)

藤野千夜「夏の約束」(芥川賞)

前者が在日韓国・朝鮮人の社会を扱い、後者がゲイを主人公にしているので、マイノリティの世界を扱うものである、と一括してしまっては、身もふたもないかもしれない。だが、そういう「異」の世界を、ごく普通の視線、描写でたんたんと言っているところに共通性があるといえはいえる。

「蔭の棲みか」は非常にうまいと思った。一方、「夏の約束」は明るくて面白く読ませるが、やや素人くさいかと思った。しかし、先週の朝日の書評で、清水良典という評者が激賞している。そのほめ方が、気持ちいい。

「近ごろこれだけ読んで元気の出た小説はない。心優しい元気、ヒ

トというものを好きになる元気である。」

と始まる。

選評では、スクウェアな慎太郎がやはり両作品をけなしている。慎太郎は旧世代への反逆者として登場したが、弱者には冷たいメンタリティを持った人だろう。しかし、今、都知事として、銀行への外形課税やディーゼル車排ガス規制で、評判をあげている。

野口悠紀雄「「超」知的生産とパソコン」（アスキー）

98年11月に初版の出たこの手の本を、今頃読了というのは時機を失している。実際、1年前に買って、たまに思い出したように読んだ。もとは97/6-98/5の間アスキーに連載されたものだということから、さらに「ふるい」。

内容はともかく、野口さんの「超」の売り方はたいしたエネルギーである。

見田宗介「現代社会の理論—情報化・消費化社会の現在と未来—」（岩波新書）

情報組織論の学生のレポートでこの作品を引用しているものがあったので、読んでみた。つまり「情報」のキーワードに惹かれて読んだわけだ。ところが、この本の「情報」はつねに情報化・消費者社会という形で、「消費」という概念との組み合わせで出てくる。つまり「情報による消費の創出」がもつ消費の無限性ということであ

る。そしてバルトの「モード」の体系が紹介される。で結論的には、<情報化/消費化社会>によって、需要の有限性と供給能力の無限拡大からくる資本主義の破綻を逃れる、純粋な資本主義が成立するという。

こういえば、きわめて楽観的だ。実際、それに続いて「誘惑されてあることの恍惚と不安」などという、きわめて文学的なユートピア的世界を意図的に描いて見せる。ところが、第2章で環境の臨界、資源の臨界、第3章で南の貧困、北の貧困と題して、この純粋資本主義から「外部化」された深刻な問題を、ほとんどすべて他書からの引用で繋ぎながら、しかしきわめて説得力のある筆致で展開する。この引用によりながらのオリジナリティのある論述は見事である。第4章で、ようやく吉田民人などが出てきて、「情報」が純粋な形で顔を出す。ここで描かれる問題の解決は、それほど十分に練られたものではない。

しかし、小さい本だが、大変強烈な力を持つ本である。

佐藤信夫「レトリック感覚」（講談社学術文庫）

この前読んだ「レトリックの記号論」がエッセイ集であったのに対して、こちらはまともにレトリックを系統的に論じている。といっても硬い講義調のものではなく、自分で採集した例文を多数引き、また自らの文がレトリックに満ちた名文となって、愉しませる。だいたい直喩 simile, 隠喩 metaphor, ぐらいいは知っていても、換喩,

提喩となると、怪しい。この本でまずそれらの知識を得ただけでなく、古代から現代までのレトリックの変遷において、これらの概念がどのように扱われてきたかまで判る。とくに換喩と提喩の区別に関する議論については、オブジェクト指向の association, composition, generalization の関係と対応して、大変面白い。このアイディアは使えるのではないか。「レトリックとオブジェクト指向」てな具合に。とにかく、佐藤信夫に、最近入れあげている。

坪内祐三「靖国」（新潮社）

この人は1958年生まれというから、僕よりちょうど10歳年下だが、本書の方法、気分、は猪瀬直樹とよく似ている。まず猪瀬が天皇をテーマとしたように、靖国というイデオロギー的に物議をかもしやすい対象をテーマとして取り上げる。

しかもその対象に対して、あえてイデオロギー的な議論から距離を置いて、それを符丁として結びつくさまざまなことを、文献を渉猟して集めてくる。そして集めたものの間の意外な関係、たとえば高橋由一、カペレッティ、岸田吟香、下岡蓮杖、淡島椿岳、矢田一嘯、大宮喜八郎、伊藤為吉、岸田劉生、野島康三、土浦亀城、伊藤道郎、千田是也といった人を結びつけてしまうのである。

とにかくこの本は「ミカドの肖像」によく似ている。そして同じように楽しめる。

佐藤信夫「レトリック認識」（講談社学術文庫）

とにかくこれにも感心した。「レトリック感覚」の続編というか下巻という感じの本である。ここでとりあげられるのは、黙説、中断、ためらい、転喻、対比、逆説、諷喻、反語、暗示引用。

清水義範「おもしろくても理科」（講談社文庫）

相変わらず「櫻史」と野矢さんの「論理学」を読んでいるが、これらは時間がかかる。水曜にちょっと時間が空いたときに、生協の本屋で軽い本を7冊ばかり買ったが、そのうちの1冊である。これは「パスティーシュ」系のものと思っていたが（たとえば「国語問題必勝法」のような）、思ったよりまじめに理科というか科学の話題を取り扱ったものである。題材といい、かなりの文献を読み込んで勉強しそれを易しく書くというアプローチといい、その判断のバランスのよさといい、立花隆に通じるものがある。ただ、立花より一般読者へのサービス精神が高いという違いはある。西原理恵子という漫画家が挿絵と突っ込みを入れるという構造もいろどりを添える。清水は文章で西原を一方的にほめてばかりいるが、西原は漫画の中で清水をけなしてばかりいる。

俵浩三「牧野植物図鑑の謎」（平凡社新書）

これは掘り出し物だった。とにかく面白い。

話としては「ダーウィンに消された男（原題は Delicate Arrangement）」や「ロバート・フック ニュートンに消された

男」と相似するところもある。ダーウィン、ニュートンが牧野富太郎で、ウォレス、フックが村越三千男というところ。

しかし、牧野はニュートンやダーウィンには及ばずといえども大学者であるのに対し、村越はウォレスやフックには及ぶべくもない。

それでも村越の生前は植物図鑑の出版に関し、牧野の大きなライバルであったことは確からしい。その忘れられた村越を掘り起こし、いくつかの「謎」を設定して巧みに話を展開させるこの著者の手並みは、なかなか大したものである。

野矢茂樹「論理学」（東京大学出版会）

この間、同じ野矢さんの「無限論の教室」に感心したので、これも読んでみた。駒場の講義から生れた教科書だろう。

やはり感心した。論理学についてはある程度読んで、基本的なことを分かっているつもりでいたが、これまで読んだものは主に計算機科学の立場からのものだったから、やはり感じが違う。著書も言うように、本書は「哲学」の視点を意識している。

「．．論理学というのは、こうしてわれわれがすでに生きている論理を自覚し、反省するという哲学的な色合いを強く持っている学問のように思います。」(p.213)

萩谷さんが駒場で論理学や統計学が文系の科目として教えられていることに批判的な言を書いていたことがあったが、野矢さんのよう

な人が担当しているのなら、結構なことではないか、という気もする。

たとえば、述語論理を導入するのに、歴史的な記述から始めるというあたりが真骨頂であり、またこういうところでまさに「目から鱗が落ちる」思いをさせる。かといって、形式的扱いをいい加減にしているところはなく、証明技術の例題や問題を出して「つい．．趣味だと思ってください」(p.121)

と言いつけている。略歴を見ると野矢さんは基礎科学科を出た後、教養学科に入り直しており、もともと理科系らしい。

自分が駒場の学生るとき、「論理学」をとったが、なんだかよく分からなかった。教師の名前を覚えていないが、その時の教科書はまだとってある。中村秀吉「論理学」。この中村という人は金沢大学助教授と書いてあるので、多分駒場で教えた人は別の人だろう。縦書きの本で、多分全然読んでいない。序を読んでみたが、現在の目で見ると奇異な感じがする。マルクス主義者の形式論理の知識が不足しているということが延々と書いてある。この本が青木書店から出版された現代哲学全書の1冊という時代背景を反映しているのだろう。

野矢の本は道元と無門を突っ込み役として登場させるという工夫をしていて、会話体を入れるだけでも教科書としての硬さをやわらげるのに成功している。

「初心者の素朴な疑問と驚きに満ちたものにしたかった。」
という意図はよく分かる。ただ、このために初学者がかえってまごつくのではないかという疑念もかすめた。

山田孝雄「櫻史」（講談社学術文庫）

誰かがUPの東大教師が新入生にすすめる本の1冊として挙げていたので、しばらく前に買った。この桜の季節に読み始め、5月までかかってしまった。

昭和16年5月に初版が出た本だから、国粹的な言辞も多い。漢文には読み下しがついていて、それでもよく分からぬ。しかし上古より現代まで、櫻にまつわる文章、歌、詩、を集め、文学、歴史、本草学にわたるユニークな書となっている。毎日電車の中で、2-3篇ずつ読むのは、意外な楽しみだった。

山田忠雄（これは孝雄の息子だろうが）が、読み下しだけでなく和歌の訳というか解説をつけているが、これがしつこくてよくない。しかしそれを読まないとわからないものも多い。

多くの歌が載っているが、およそ平凡なものばかりという気がする。古代から現代まで、このようにつまらない歌ばかり作り続けられてきたというのも、一つの文化であろうか。詩の方は分からないからかえって新鮮に思えたりする。

清水義範「もっとおもしろくても理科」（講談社文庫）

前作よりさらに「本格的」である。何しろ扱う題材が、進化論、生物と非生物の違い、動物と植物の違い、両性生殖、ビッグバン、遺伝とDNAというのだから。

この人の精神の健全性、見かけによらない真面目さは、DNAの神秘化を批判してるところにもよく現れている。

「「人の行動は、すべて神の命じるままにその意思のもとにある」という考え方と、「人の行動は、すべてDNAの命じるままに生じた生命活動である」という言い方は、すごくよく似ているのである。DNAをそのような神秘的支配者の位置に置く考え方はあまり科学的な態度ではないのだ。」(p.249)

以下のあたり。そして「利己的な遺伝子」に話が及び（ドーキンスのことをアメリカの学者といっているのは基本的な間違いだが）、これを面白おかしく敷衍して、遺伝子に意志があるような言い方をすることについて、見事に批判している。しかし、清水は人がいいというか、優しいというか、優柔不断というか、竹内久美子の本などを、徹底的にやっつければいいのに、

「竹内氏のその説の紹介も、刺激に満ちた面白いもので、大変な話題になった」

などと、一見持ち上げているように見える。さらに「パラサイトイブ」というくだらない小説の作者、瀬名秀明から手紙が来たとして、それを丁寧に紹介するなど敬意を払っている。

瀬名が、DNAと染色体と遺伝子の関係についての清水の説明の不正確さを正すのはいい。しかし、清水は紳士的にほとんど触れていないが、瀬名の手紙に①科学を利用して小説を書くときの、作者の心構えはどうあるべきかの議論②私のこの稿の中にある科学者への偏見への異議があったとして(p.239)、それに対し、①は自分の考えを返事し、②は瀬名の言うことを認めて、本では一部書き換え、「瀬名のおかげで」論旨がすっきりしたと、ここでも感謝している。想像するに、この本でも残っている

「それだけではなく、合理的精神の持ち主であるはずの科学者自身が、解説書などでそういう、神秘的にたとえた話をやってしまうこともある」(p.249)

というあたり、瀬名のものは小説、作り話で、解説書ではないから直接批判の対象になっていないが、瀬名当人には批判に見えたことだろう。雑誌掲載時は、この辺がもっとはっきり書いてあったのではないか。

司馬遼太郎「愛蘭土紀行I, II」（朝日文芸文庫）

前にも多分書いたが、どこか旅行に行く際に、その地を対象とした司馬の「街道をゆく」を読むことは、日本語の読めるものの幸せ、無上の楽しみというべきだろう。

この本を見つけたのは変なきっかけである。5/5-6と静岡に行ったとき、帰りは静岡駅に予定より早く着いて、時間が余った。買ってあった切符より早い新幹線は満席で変更できない。そこで駅ビルのデ

パートを少し散策した。美季子と孝子がキャラクターグッズの売り場をのぞいている間、本屋に入って見たが、ろくな本は置いていない。文庫本の棚を見て、せめて「街道をゆく」で静岡付近がないかと探したら、それは見つからなかった代わりに、アイルランドがあった。

2分冊になっているのを一気に読んだ。お蔭で、ケルトという民族やアイルランドという国について、かなり親近感を持った。

Iではなかなかアイルランドに行かず、ロンドン、リバプールで時間を使う。アイルランドとイギリスは陰と陽との関係ゆえ、アイルランドを知るのにイギリスの理解が必要との作戦である。それで、ダブリンに行くのにわざわざリバプールから小さなプロペラ機で行く。

アイルランドに行くのにこちらは司馬を読めばいいが、司馬はスウィフトからワイルドからイエーツからジョイス、シング、ベケットとたくさん読んでいる。

「アイルランドにゆくにあたり、以上の峰々については、ジョイスまでは読んだ。」(I, p.180)

と書いている。イエーツの「鷹の井戸」の翻訳は角川文庫で出ているはずだが、絶版になっている。司馬の本でちくま文庫に「ケルトの薄明」などイエーツの著作や編になるものが3冊あるのを知り、さっそく買った。

もちろん、オコンネルなど、アイルランドが英国に支配され、搾取され、弾圧された歴史の話は随所に出てくるが、全体に上のような文学者、文学作品の話が多い。映画も出てくる。ダーティーハリーがアイルランド人という設定だとか、「風とともに去りぬ」のスカーレット・オハラもそうだとか、初めて知った。O'xxxという名前とかMacという名前がケルト系というのも新知識である。

それでIRAとか北アイルランドの内戦の話はほとんど出てこない。ここに司馬のある種の限界を見ることもできるだろうか。

しかし、僕はもっと単純な司馬の不得意領域を発見した。リバプールのところでビートルズにかなりのスペースを割いているが（G. ハリソンはアイルランド系らしい）、

「私の耳は、その機能を十全に果たしていない。人の声を聴くことは好きだが、音楽をふくめた音響がにが手なのである。

ただ、リバプールへゆく前にビートルズのことをすこしは知りたいたいと思い、幾冊かの本を読んだ。前述の理由によって、そのサウンドをきくことは御免蒙った。」

なんと気の毒なことだ。

鈴木良平「アイルランド問題とは何か」（丸善ライブラリー）

今年の3月、丸善ライブラリーとして出た本。司馬で得た知識を補うのに、ちょうど適当な本だった。アイルランドという国の苦悩に

満ちた歴史をつくづくと感じる。

しかし、本としては大変まとまりに欠ける。同じような記述があちこちにばら撒かれ、全体の統一感がない。著者の視点も定まらない。

小柳公代「パスカルの隠し絵」（中公新書）

著者は文系のパスカル学者である。日本にはフランスに次いでパスカルの研究者が多くいるのだそう。そのパスカルが1647年に出した「真空に関する新実験」にのっている8実験は、これまで皆から実際にパスカルが行った実験だと思われてきたが、実はすべて思考実験で、実際には行われていないというのが著者の主張である。その論証は説得力があり、そこに至る過程を「謎解き」として面白く書いている。

こういう研究にどんな意味があるのか、と問う向きもあるが、これも立派な知的作業に違いない。

柳瀬尚紀「ジェイムス・ジョイスの謎を解く」（岩波新書）

これは一度半分ぐらい読んで、あまりに馬鹿馬鹿しいのでうちやっしておいたが、アイルランド行きに当たって「ユリシーズ」の原文はもちろん、翻訳で読むのも億劫なので、これを引っ張り出してともかく読んだ。17世紀のフランスと20世紀のアイルランドという違い、分野の違いはさておき、西欧著名人の著名な著作を東洋の日本

人が読み込んで、これまでにない異説を出したという点では「パスカルの隠し絵」と似ているところがある。しかし、小柳の論はそれなりの説得力があるのに、柳瀬の説は徹頭徹尾ムリな説である。たくさん書いてあるが、説得力のある根拠はほとんど示されない。柳瀬流に言えば犬強不快である。しかし、こういう論を出したこと自身がパロディなんだろうか。どうもしかし、著者は本気のようにも見える。

ただ、中に出てくる翻訳や、それらの翻訳のためのさまざまな語や句の説明自体は楽しめる。

John Grisham, "The Testament"

アイルランドの帰りの空港で買って、すぐに読んだ。これは出来がよかった。結末もまあうまくいっている。

Grisham は段々、現在の米国の弁護士のあり方、金万能主義への批判を強めている。この本ではキリスト教の世界を、金、ドラッグ、離婚の米社会と対比して描き、だからか、裏表紙の宣伝に使われている書評のうち、Publisher's Weekly で、Dickens や Graham Greene と比べられている。

瀬戸賢一「メタファー思考」（講談社現代新書）

この本は手軽なものかと思ったが、案外そうでもない。日本語と英語から、視覚や空間に関する様々なメタファーを並べ、メタファー

が必須の表現手段であることを主張する。時として無味乾燥な例の羅列という印象を与えぬでもないが、これだけしつこく並べられると、なるほど人間の発想とは言語によらず共通性が高いものだなと思わされる。

夏目漱石「坑夫」（漱石全集 岩波書店）

ごくゆっくりしたペースで、思い出したように読んだ。

漱石の中でも特異な小説だろう。まあ失敗作なのだろう。足尾銅山の労働者の劣悪労働条件への不満から起こった暴動事件が題材というかヒントになっているようだが、それから連想されるような社会派、社会主義的な作品にはなっていない。あくまでも個人的な体験という視点で描かれている。そして坑夫になることを墮落といい、坑夫たちの教育のなさ、がさつさを軽蔑するような表現が多く、搾取されている労働者の立場への同情はあまり感じられない。

小説として、作者が自信のないような表現がたびたび出てくる。

「・・・何やら蚊やらと、そっくり其の儘書き立てたら、大分面白い続きものが出来るんだが、そんな筆もないし時もないから、まあ已めにして・・・」(p.38-39)

「自分が学者でないから、かう云ふ心持は何と云ふんだか分からない。残念なことに名前を知らないので、ついかう長くかいて仕舞った。学問のある人から見たら、そんな事をと笑はれるかも知れないが仕方がない。」(p.60)

「詩だの文章だのと云ふものは、あんまり読んだことがないが、恐らくこんな因縁に勿体をつけて書くもんぢゃないかしら。」(p.79)

「詩とか美文とか云ふものを、あんまり読んだ事がないから、自分の境遇の苦しさ悲しさを一部の小説と見立てて、それから自分で此の小説の中を縦横に飛び廻って、．．どうも詩的だ杯と感心する程なませた考へは少しもなかった。」(p.82)

「是れでは小説にならない。然し世の中には纏りそうで纏らない、云はば出来損なひの小説めいたことが大分ある．．小説になりそうで、まるで小説にならないところが、世間臭なくなつて好い心持だ。」(p.115)

「もっと大きく云へば此の一篇の「坑夫」そのものが矢張りそうである。纏りのつかない事実を事実のままに記す丈である。小説のように拵へたものぢゃないから、小説のように面白くはない。」(p.115-116)

こう挙げだすときりがない。そして最後の締めくくりが何と、

「一 自分が坑夫についての経験は是れ丈である。さうしてみんな事実である。其の証拠には小説になつてゐないことでも分かる。」
という奇妙奇天烈な文である。

もちろん形式としては、筆者に仮託されている主人公の告白であるわけだが、漱石自身の自信のなさが、見え見えである。とてもメタ小説というような技巧を凝らした結果とは思われない。

描写としても、坑山に着くまでは、なんだかリアリティに欠ける。

「猫」や「坊ちゃん」に近い江戸弁をまじえた文体が、描写対象とマッチしていないということもある。

しかし、坑山に着いて、とくに初さんに案内されて坑道の中をあちこちさ迷い歩くあたりは、さすがに見事な描写力だと思う。

森博達「日本書紀の謎を解く」（中公新書）

これも、牧野富太郎の話やパスカルの話のように、学術研究を「謎物」として新書で出してるものだが、なかなかの力作である。しかし、あとがきで、

「私はこの本を書くために生れてきた。書き終えての余韻でしょうが、そんな気がします。」

と当人に言われると、ちょっと鼻白んでしまう。

仮名遣い、音韻、および漢文としての語法から、日本書紀の章をα群とβ群に分ける。そして、α群は唐からの帰来者、β群は日本人の筆によるものとし、さらに執筆順序から、述作者の推定にまで及ぶ。本当かな、と思う部分がないわけではなく、またあまり細かい議論は追うのをさぼったところもあるが、全体として相当説得力がある。少なくとも柳瀬のジョイスの「謎解き」とは比べものにならない。

町田康「きれぎれ」（芥川賞）

松浦寿輝「花腐し」（芥川賞）

どちらも元気の出なくなるような小説で、面白さはない。町田の方は文章の面白さを時折感じることはあるが、長続きしない。話も私小説をデフォルメしたようなものである。松浦さんは去年も「幽」で候補になり、それを載せた文春を買ったが、とうとう読まなかった。この人とは、駒場のプレハブ事件の時に、何度か警備班で一緒になったが、あまり話をしたことはない。しかし、詩集をいくつか出しているのを知っているし、「知の技法」シリーズでは2編書いている。でも、この「花腐し」という小説は面白くない。あまりうまいとも思わない。もっと知的にスカッとしたものを書いたらどうか。

加島祥造「タオー老子」（筑摩書房）

主に英訳の「老子」（タオ）から、詩の形に自由訳したという変な本だが、中国に来て、インターネットビジネスの話をたくさん聞いた期間で読んだというのは、面白い読書だったといえる。原点に近いもの（たとえば読み下し）を読む気になる。

Peter Pettinger, “Bill Evans: How my heart sings”

すごい本だ。徹底してあらゆるレコードやアクセス可能な録音を丹念に聴き込み整理し、簡潔だが達意の文章で描写する。著者自身がピアニストで、クラシックもジャズも演奏し、若いときから Bill Evans に傾倒して多くの演奏を聴いてきているようだ。

生涯を追っているが、音楽以外の要素、女性関係や麻薬や家族については極力筆を押さえている。しかし、それは崇拜のあまり美化しているのではなく、あくまでも音楽を中心テーマとしているからである。それでも、Evans の人柄について触れる部分は多くあり、それらは暖かい。著者が暖かく見ているだけでなく、Evans の周囲にいる人達がすべて、暖かい気持ちを持っていたようだ。

しかし、著者の記述に従えば、Bill Evans は30年以上の間、最高の音楽家であり続け、それも同じレベルを保つというのではなく、常に新しいものを工夫し、磨き続けたという驚くべき存在である。もちろん Miles Davis のように変身したわけではなく、そういう意味ではマンネリと評する人がいるのかもしれない（本書にはそのような話は出てこないが）。しかし、たとえばビートルズはたった5年ぐらいしか活動しておらず（無名時代を入れても10年ぐらいだろう）、しかもその後半は演奏活動をやめてしまってスタジオ・レコーディングだけだったのに、Evans は死ぬまで毎日のように演奏活動を行っている。想像の及ばない人生である。

この本の影響で、Bill Evans のCDを30枚ぐらい買った。

Bob Brier, "The Murder of Tutankamen," Berkley

面白い本である。考えてみれば、中学のときに、中央公論「世界の歴史」第1巻でエジプトの歴史の数十ページを読み、また高3の修学旅行前のツタンカーメン展を見て以来、エジプトについてはそれほ

ど知識が増えていない。ツタンカーメンを巡って、これほど面白い話があるとは、しかも、3000年前の話がこれほど精細に復元できるとは、驚くべきことだ。

Brier という人は、解剖学者で、それもミイラなど考古的な解剖が専門らしい。ツタンカーメンのミイラのX線写真とその他の考古学的な資料から、ツタンカーメンは19才で殺されたことを実証し、犯人は誰でその動機は何か、という謎を明らかにする。こう書くといかにも受けを狙ったきわもの的な印象を与えるが、大変分かりやすく明快な文章で、しかも学者としての誠実さを感じさせる。とにかく語り口の巧みさには驚嘆した。ただ、ミイラが専門という割には、このツタンカーメン殺人説について、ミイラによる証拠とされる材料は弱い気がする。

山藤章二「似顔絵」（岩波新書）

岩波新書の軟派路線の一つだが、絵を見るだけでも楽しい。

佐藤信夫「レトリックの意味論」（講談社学術文庫）

今回の旅行には、これとスティーヴン・ピンカーの「言語を生み出す本能」を持ってきた。両方めでたく読み終わった。この両書を並行して読み始めて、ずいぶん時間が経っている。

佐藤のこの本は、これまで読んだ佐藤の本の中ではもっとも本格的な論考というか、重い内容のものである。それが証拠に、本人が後

書きで、

「主題は、ちょっと見たところではささやかであるとはいえ、私としては、もっとも根源的な（それゆえもっとも一般的な）問題について、全力をつくして考え、書くことができたと思っている。」

と、この著者にしては珍しく興奮気味で、自負に満ちた口ぶりであるのもうなずける。

三浦雅士という人がなかなかうまい解説を書いているが、文体が佐藤信夫風になっているところがおかしい。しかし、佐藤の文章はレトリックを使って明晰に書くことを地で行っていて、いつもながら感心する。それで感化力も大きいのだろう。

スティーヴン・ピンカー「言語を生み出す本能」（NHKブックス）

邦訳は上下2冊で合わせて600ページ以上ある。

この人はチョムスキー流派である。チョムスキー理論をよく知っているわけではないが、生成文法や変形文法はともかく、人間は言語を（とくに文法を）理解し習得する能力を本能として持っているという説は、どうも信じられないと思っていた。

本書のIIでは（全体でといってもよいが）、この説がかなりの説得力をもって論じられる。

この他、言語が思考を作るというウォーフ説への批判、サルに手話やキーボードで言語を教えるという研究の批判など、かなりびっくりすることが書いてある。イヌイットが雪に対して数十語もの語彙を持っているというのも嘘だそうだ。

とにかくこの人は、遺伝学から脳神経学から心理学にまでにわたって博識で、また構造言語派にしては、言語の面白い具体例もたくさん収集している。それをこれだけ一般向けに分かりやすく書く筆力と馬力はたいしたものだ。ただそのしつこさには、時々辟易する。半分か2/3ぐらいの長さの本でもよかったと思うが、この辺がアメリカ人らしいところ（正確にはカナダ人）、あるいはそう思うこちらが日本人らしいところだろう。

夏目漱石「虞美人草」（漱石全集 岩波書店）

小学校の時、誰かに買ってもらった「夏目漱石」という伝記の印象は強い。その中に、次の引用があった。

「春はものゝ句になり易き京の町を、七条から一条迄横に貫いて烟る柳の間から、温き水打つ白き布を、高野川の磧に数へ尽くして、長々と北にうねる路を、大方は二里余りも来たら、山は自から左右に逼って、脚下に奔る潺湲の響きも、折れる程に、あるは、こなた、あるは、かなたと鳴る。山に入りて春は更けたるを、山を極めたらば春はまだ残る雪に寒からうと、見上げる峰の裾を縫ふて、暗

き陰に走る一条の路に、爪上りなる向かふから大原女が来る。牛が来る。京の春は牛の尿の尽きざる程に、長く且つ静かである。」

この美文に実に感心した。しかし、虞美人草を実際に読んだのはもっとずっと後で、中学3年か高校であったかもしれない。そのときに、構成がまるで本格ものの探偵小説、つまり最後に登場人物がすべて一同に集まって、名探偵により犯人、悪者が名指しされ、悪が滅ぶという様式だと思ったことを覚えている。

確かにその通りである。そして登場人物はあまりに典型的。甲野と宗近が何度も小夜子に出会うところなど、著者自身が気にしているようにきわめてご都合主義の筋の展開、最後に藤尾が理由不明で突然死んでしまうという解決もあまりに安易。そして甲野と母親の関係が「なさぬ仲」で、小野が出世と金と先生から受けた恩に対する義理との間で板挟みになるなどの図は、尾崎紅葉調で、初の新聞小説で大衆を意識しすぎたもののようだ。

こういうことはすでに繰り返し言われているのだろう。3組の若い男女、藤尾と小野あるいは宗近、糸子と甲野、小夜子と小野と出てくるが、まるで恋愛感情らしいものに展開しないのも、不思議といえば不思議だ。糸子や小夜子の一方的な思慕の情や、藤尾のこれまた一方的な独占欲やコントロール欲は描かれるが、双方向の恋愛感情というものではない。これが儒教の浸透が根強く社会のベースとなっている明治の実態を表すものか、漱石の社会の見方か。

しかし、そのような心理はあまり描かれないが、男女が一緒に博覧会に出かけたりするような行動の自由はずいぶんあるようなのだ。

地の文が凝っているが会話も多い。新聞小説用の工夫かもしれない。その会話で、

「博覧会へもいらっしゃらないの」

「いいえまだ」(p.99)

とか、

「未だ京都から御音信はないですか」

「いいえ」(p.105)

とか

「愈東京へ行くと見える。昨夕京都の停車場では逢はなかった様だね」

「いいや、些とも気が付かなかった」(p.128)

のように、否定形の疑問文に対しての、はい、いいえが英語調になっている。漱石の癖なのか、この時代に一般的だったのか。

また坑夫で気になった「小説」についての言及もある。

「小説は自然を彫琢する。自然其物は小説にならぬ。」

「小説なら、是が縁になって事件が発展する所だね。」(p.129)

なお、同じページの「少し逢ひ過ぎるよ。」の注が面白い。さらにp.151には小説論がある。

丸谷才一「闊歩する漱石」（講談社）

この漱石論は、いつも通りの丸谷調である。三四郎と坊ちゃんと猫を取り上げながら、これらの作品や漱石とは直接関係ない話を延々とする。坊ちゃんではビジョーの「物尽くし」、三四郎ではブラッドベリ、猫ではバフチンに「寄りかかって」、自由にというか勝手なというか、議論を展開する。文学の学問としての論ではないから、きちんとした論証ではない。無責任とも言えるし、それだけ自由な「作品」となっているともいえる。しかし、「食通知ったかぶり」ではないが、どうもあやふやな「知ったかぶり」の議論という印象を免れない。

稲垣足穂「A感覚とV感覚」（中央公論社「日本の文学34」）

主にトイレで読んだ。ふさわしい場所であろう。

Patricia Cornwell, "The Body Farm"

York に行った帰りに Heathrow で買った。この人が売れっ子なのは知っていたが、1冊も読んでいなかった。たくさん並んでいるから、裏表紙などの広告文で、一番代表作らしいものと思えるものを買ってみた。

ヒロイン Dr. Scarpetta は死体専門の解剖学者かつ弁護士というスーパースターである。超インテリというべきか。姪、妹、母親との家族関係も描かれ、Wesley の浮気もあり、そういう中で人間的弱みも見せる。強いだけ、インテリなだけ、ではない。

導入から中間までの話の進め方，描写，会話は実にうまい．ただし，捜査会議ののっけから，“The mother’s bed is made?” (p.12)と早くも，何らかの疑いを母親にかけているかのような質問が出てくるのは，変といえば変だ．

この少女殺人事件と並行するスパイ事件のほうはストーリーとしてかなりいい加減で，本筋との絡め方も手際よいとはいえない．とくに，スパイの舞台となる店で，連続殺人事件の犯人である Gault を見かけるなどというのはメチャクチャな気がする．多分，これはシリーズとして見ないと判らない部分かもしれないが．少女殺人事件の方の結末は，やけに簡単だ．

まあしかし，全体として評判になるだけのことはある．

サイモン・シン，青木薫 訳，「フェルマーの最終定理」 (新潮社)

大分前に買って，最初の100ページぐらいを読んで，手軽には読めるが退屈だと思ってほっておいた．しかし今週再開して，一気に読んだ．やはり翻訳だと（それもよい訳だと），はるかに早く読めるということもあるが，一気に読ませるだけの筆力もすごいものがある．中でもワイルズが証明に至る足跡をたどる5～7章は，大変面白い．

Kent Beck, “eXtreme Programming eXplained”

かなり雑に書かれた本である。しかし、評判にはなっていて、IEEE Software や CACM などに書評が載っている。この間の EDOC でも XPという言葉は何度も聞いた。毀誉褒貶相半ばである。Cris Cobryn はどちらかといえば批判的。Desmond D'Souza はどちらかといえば肯定的である。もっとも激しかったのはOO2000に来た Jim Coplien で、懇親会で口を極めて罵っていた。

200ページにも満たない薄い本で、口語的なくだけた調子で書いてあるので、米国人ならあっという間に読めてしまうだろうが、こちらは逆にそのくだけた英語のせいか、案外時間がかかった。繰り返しが多く中身も薄いが、通して読むと一応その精神は分かった気になる。技術論よりも意外に精神論が多く、たとえば DeMarco & Lister の Peopleware などに案外通じるものがあると思っていたら、巻末の解説つき文献リストに Peopleware が載っていた。

本書を通して繰り返し出てくる実践上の勧めの一つに「テストを書け」というものがある。この write a test という言い方自体目新しく感じるが、実際にどう書くのかはまったくと言っていいほど説明されていない。ただ、これについては別に本を出すようだ。

Thomas Harris, "Hannibal"

何しろ長い。ペーパーバックで564ページ。しかも文章が pedantic でやたらと難しい。というかスラングも含めて文化的背景知識を必要とする言葉遣いが多い。で読み了るのに時間がかかった。

まあ、よくもこんな話を作るものだ。出てくる人物は異常な人格の者ばかりだ。それに対し、ヒロインは正常で異常犯罪者を最後に捕まえるのかと思ったら、ヒロインも同じ異常世界に入ってしまうという変な話だ。

最初は Patricia Cornwell とずいぶん似ているかと思ったが、最後は全然違う。

鶴ヶ谷真一「書を読んで羊を失う」（白水社）

古今東西の書を読み、蘊蓄を傾けたエッセイ集である。といっても気取りや衒いのない、あるいは少ない、品のいい文章である。

たとえば、ファン・フォーリクは僕も日本語や英語で何冊か読んだし、オランダの外交官だということも知っていたが、駐日オランダ大使としてかなり長く日本に滞在したこと、中国語、日本語、サンスクリット語、チベット語を学び、15の言語に通じていたこと、日本女性と7年間同棲していたこと、草書、琴、篆刻、絵画などの心得があったことなど、驚くばかりである。ディ判事シリーズの中国語訳も自分でやり、「その文章は闊達にして着想も新規」と中国人に言わせている。

「浮世ばなれ」に売茶翁の話が出てくる (p.129)。この間京都で見た若冲展に売茶翁の絵があったので、記憶に新しかった。

最後の寺田寅彦の話だけ、他のものより長い。

天童荒太「永遠の仔（上・下）」（幻冬社）

このところ P. Cornwell, T. Harris とエンタテインメントものを読んでいるので、前に買ってあったこれを、日本のものとして読んでみた。日本で評判になったミステリというのは、読んでみてがっかりするものが多い。それらに比べると、これはなかなかの力作と思った。

上下で2段組900ページもある。「圧倒的迫力の2385枚」と帯にある。ついでに「このミステリーがすごい 2000年版第1位」とも宣伝している。

これだけ長いものを破綻なく描いた構成力、筆力はたいしたものである。ただ、ミステリ仕立てにするために、現在時点で起こる2つの殺人事件の犯人を梁平と思わせておいて実は笙一郎であったとするストーリーには、無理を感じる。

そもそも最初の事件から17年経って、やり手の弁護士として活躍している笙一郎が、その弁護士の仕事上のこととはまったく無関係に動機のほとんどない殺人を犯す設定に、必然性がない。元の事件の父親を突き落とした人間が、二転三転するのも、ミステリにこだわった細工だろう。

テーマは幼児虐待であり、また老人医療のことも出てきて現代的であり、処理もうまい。

文章は平板で、知的遊び、ゆとりに欠ける。それは Hannibal などとはずいぶん違う。しかし、テーマからある程度の生真面目さと平凡さが必要なのかもしれない。それにしては「天童荒太」というペンネームがよくない（まさか本名ではあるまい）。

山村修「気晴らしの発見」（大和書房）

1年ぐらい前から、書評などで気になった本をパソコンに記録するようにしている。そうしないと忘れてしまうからだ。登録した本をすぐを買うわけではない。買わないでしばらくすると、著者名やタイトルだけ見てもどんな本だか判らなくなることがよくある。それでも買う気になるかどうかで、一つのセクションになる。買ってもまた読む本はそのうちのごく一部である。

Amazon がとうとう日本に進出し、年内は送料がただだということで、洋書を4冊と和書を3冊注文した。和書はいずれもそのリストから選んだもので、こういうことでもなければ買わなかったかもしれない。その中の一番薄くて手ごろそうなものを、昨日から読み始めて今日読み終わった。

それがストレス症状と、それに立ち向かうために著者が工夫した「気晴らし」の話なのだが、教養はあるし、語りはうまいし、人生への真面目な態度が気負いもなく浮つくこともなく、飄々と語られる。語り口からはとてもストレスに苦しむ人とは思えない。語り口

だけでなく、前向きに気晴らしに取り組む態度からも、心因性の病を持つ人と思えない。

しかし、症状の記述を見ると、深刻そうでもある。ただ、早朝覚醒の軽度なものは自分にもある。しかも、今日来た健康診断の結果では、軽度の高脂血症！とある。なんだか身につまされる。

でも、この人は大学図書館員という。会社勤めと比べればそれほどストレスがあるとは思えない。それでも

「管理職の立場になった。同時に、これまで少しずつ堆積してきた不要の澱のようなものが、早朝、しぶとく固まって立ち現れるようになった。」(p.13)

なんてことがあるらしい。

夏目漱石「それから」（漱石全集 岩波書店）

今回全集で読み直している漱石の中では、もっとも最近読んでいる。といっても調べて見ると1987年4月のことなので、それほど最近でもない。当時の感想を探し出したので、引いておく。

「読んだ動機は、これを映画化したものの一部をテレビで見たからである。それで三千代のイメージが藤谷美和子にどうしても重なる。先入観を差し引いても、藤谷は三千代にぴったりに思える。

典型的な非行動型のインテリが、愛から行動を起こすという話である。もちろん、その行動は華やかなものではない。むしろ見通しの暗いものである。かといってまったくの自暴自棄とも違う。だから

その結末は救いなのか絶望なのか、読む人間によって見方が分かれよう。

中で「15貫のいい身体をしている」という文がある。15貫といえは56kgぐらいか。日本人の体格も変わったものだ。」

今回の感想もほとんど変わらない。しかし、虞美人草と比べると、小説としてははるかに熟達している。人物の性格づけも単純ではない。代助に対しても、皮肉と共感とが混ざった書き方である。二百十日などであれほど嫌われている実業家（父や兄）の扱いも、それほど一方的でない。

佐藤文隆「物理学の世紀」（集英社新書）

これと Meme Machine を並行して読んでいたが、思いのほか時間がかかった。Susan Blackmore と違って、一般人に分かりやすく言葉を費やすということはない。文章が悪いわけではなく、教養の深さも思わせるが、簡潔に記述されているために、こちらが知識を持っていないことから、頭に入らない部分がかなりある。新書で小さい本だからでもある。

感心したのは「終わりに」である。第4章の「8. SSC中止とサイエンスウォー」あたりから「終わりに」はつながっている感じがある。しかし、サイエンスウォーを仕掛けた連中に対して、やけに冷たい (p.189-190)。

p.200あたりに、

「また、「若い人を鼓舞し」というのも「社会的訓練のない若い人を惹きつける、単細胞的な人間向きの学問だからな」という陰口を誘う雰囲気知的世界に現在ある。要素や原理への還元主義をマイナスに捉える風潮である。」

とある。情報、とくに「理系」の情報は、文系の同じような視線に対して、どう対応すべきか。

Susan Blackmore, "The Meme Machine," Oxford

ようやく読み終わったという感じ。別に読みにくい本ではない。Blackmore の文章は、実に丁寧で懇切、説明の仕方はうまい。しかも、簡単に説明できる話ではない。

よく考えているだけでなく、これまでの様々な人の著述を読み込んでいる。Denett が立場が近いらしい。

しかし、本書の内容を簡単に知るには、Dawkins による序を読めば充分である。11ページもあるだけでなく、大変見事に書かれている。

それにしても結論たる第18章には驚かざるをえない。Self というのではない、幻想だ、という。その信念（彼女にとっては真実）に基づいて、どう生きるかが描かれている。一種の諦観主義に陥ってしま

うのではないか。それにしては、このような力作を著述するエネルギーはどこから生れるのか。

この Susan Blackmore という人はサイエンス・ジャーナリストかと思っていたら、臨死体験や金縛りの考察で業績のある心理学の研究者らしい。立花隆の「臨死体験」の本を引っ張り出して見たら、これにはちゃんと索引が付いているので、引用されていることが分かった。それほど大きな扱いではないが。

1999年

G. ガルシア・マルケス，鼓直 訳，「百年の孤独」（新潮社）

やっと読み終えたというのが，正直なところである．読みにくいわけではない．話は面白いし，訳文もうまい．しかし長い．それにこういう作り物の話につき合うのはくたびれるという気持ちがある．

この小説が何でそんなに売れたのだろう．全世界で2000万部出ているという（数字は怪しいが，朝日新聞日曜版の20世紀の100人にガルシア・マルケスが取り上げられていて，確かそのような数字が出されていた）．

確かに見事な想像力である．読んでいるうちにこの世界の人や事柄に親近感を覚えてくる．しかし，どっぷりと浸るというところまでは行かなかった．多くの登場人物が出てきて，名前も同じものを繰り返して使うので，誰が誰だか分からなくなりそうだが，それが不思議にあまり混乱しないのは，相当の工夫が凝らされている証拠であろう．

訳はうまいが，「フマキラー」なんていうのが出てくるのでびっくりする．しかし，この本が広く受け入れられている証拠として，さっき挙げた朝日新聞ばかりでなく，文芸春秋の政・官・財・文化人アンケート「二十世紀図書館」の海外の本部門でベスト3位に入っ

ている。1位がケインズの「雇用・利子および貨幣の一般理論」、2位が魯迅「阿Q正伝」で3位が「百年の孤独」とフロイトの「精神分析入門」が同票になっている。これはやや不思議である。魯迅はどうしてそんなに人気があるのか。ケインズやフロイトを皆、本当に読んでいるのか。だから「百年の孤独」が3位に入っても、単に有名だからに過ぎないかもしれない。

芥川龍之介「蜜柑」「杜子春」（中央公論「日本の文学29」）

少し前の朝日新聞の神奈川版に横須賀線の歴史にまつわる話を書いてあり、芥川龍之介の「蜜柑」は、芥川が横須賀の海軍機関学校に非常勤嘱託教官として鎌倉の家から通っていた時、横須賀線で遭遇したことに基づいているという。

芥川が勤務したのは大正5年12月1日からで、月俸60円だったそう。 「蜜柑」が発表されたのは、大正8年、28歳のときで、「新潮」に載った。

中学生のとき読んだ芥川の短編の中で、「蜜柑」は印象に残っているが、横須賀線の出来事であったことを記憶に留めていない。むしろ中学生の自分は見逃していたような気すらする。実は、この風景は何となく紀州あたりの話だと思っていた。よく考えて見ると、これは、大学1年から2年になる春（1967年）、服部、竹ヶ原、松岡と南紀から奈良・京都へ旅行に行った際、勝浦だか熊野のあたりで汽

車から見えた風景と勝手に結びついているような気がする。踏切脇に小型トラックがひっくり返っていて、積荷のミカンが散乱していた。その周りに何人かの人ぼんやり立っていた。トラックが本当にひっくり返っていたかどうかは怪しいが、汽車とぶつかった事故といった深刻なものではない。さらに言えば、蜜柑から紀州を連想するという単純なものもあるかもしれない。

それで久しぶりに読み返してみた。確かに、冒頭

「ある曇った冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり発車の笛を待っていた。」

とある。二等車というのが懐かしい。

そうしたら、2-3日前のやはり朝日新聞に、歌手のさだまさしが峨眉山のことを書いていた。「あの杜子春の舞台の」と書いている。それで今度は、杜子春を読み返して見た。もちろん、中学の自分が峨眉山という地名に具体的なイメージを持つ由もないが、1996年夏に成都から峨眉山に行ったときも、「杜子春」など思い浮かばなかった。

こちらの方は、中学の自分は童話だと思ってあまり気を入れて読まなかったような気もする。この話を芥川は何を元に書いたのか。手近な解説書には出ていない。発表は大正9年7月、「赤い鳥」である。

林望「イギリスはおいしい」（文春文庫）

林望「イギリスは愉快だ」（文春文庫）

ベストセラーになっていたときは読む気がしなかったが、在外研究でイギリスに行く可能性が出てきたので、読んでみることにした。それにこの間の笹舟会で、ロンドンの話が出たときに、山崎さんがこの本を引き合いに出されたので、山崎さんが読まれるくらいなら読んでみてもいいか、という気にもなった。

さすがにベストセラーになっただけあって、面白く読ませる。一方で、イギリスの手放しでの礼賛振りは、いい気なもんだとも思わせる。「おいしい」の方はまだ料理に集中した話なのでよいが、「愉快だ」の方はその点が鼻につく。

しかし、両書の成立事情を著者自身が書いたものを読むと、「愉快だ」が雑誌連載という形では先に世に出、「おいしい」は書き下ろしで刊行されたが、そのとき題名を、先に決まっていた「イギリスは愉快だ」に対応して決めたという。

ノーマン・マクレイ、渡辺正、芦田みどり 訳「フォン・ノイマンの生涯」（朝日選書）

われわれが学生の頃、計数工学科の図書室に von Neumann の全集が入っていた。Neumann が死んだのは1957年だから、まだ死後10年だったのだ。

プリンストン高等研究所における von Neumann については、エド・レジス「アインシュタインの部屋」で読んでいた（かなり内容を忘れていたが）。しかし、ノイマンの一生については案外無知であった。たとえばハンガリーのユダヤ人の置かれた立場、20世紀の初頭前後に天才を輩出したこと、など知らなかった。

ハンガリーのノーベル賞学者6人のうち、5人までを1875－1905生れのユダヤ人が占めているという。von Neumann 自身についても、数学での天才ぶりから、量子力学、経済学、原爆開発、コンピュータ開発、政府の原子力政策のリーダー、といった多様な活動について、知っていたことよりむしろ知らないことのほうが多かった。

理論と開発と実務と、いずれにも傑出した人物であったことが分かる。著者の思い入れはすごく、ウィーナー、B. ラッセル、さらには、ニュートン、ガリレオ、アリストテレスとまで比較して、比較相手をけなすのである！

この著者は面白いことに、日本の経済を論じた「驚くべき日本」「日は昇った」「日本の衝撃」という本を書いており、本書でも何度か日本の経済成長を引き合いに出している。この本が書かれたのがまだ日本の景気のよかった時代であったことも、無関係とはいえない。著者は数学、物理、コンピュータは分かっていないので、その点物足りないところがあるが、ページ数も多く、楽しめた。

しかし、やはり自分と比べたくなる。もちろんノイマンの天才とはそもそも比較すべくもないとは思いながら、もっと若いうちに頑張っていれば、あるいは別の教育を受けていれば、という気持ちが起こらないわけではない。歳を取った証拠かも知れぬ。

林望「ホルムヘットの謎」（文春文庫）

この本は著者のあとがきが一番面白かった。2つあって、「送る朝あとがきに代えて」と「『ホルムヘットの謎』縁起 文庫版あとがきに代えて」である。

これで著者がなぜイギリスに行き、「イギリスはおいしい」で当て、「成功」していくかの経緯がよく分かる。本文のほうも、イギリスものから源氏など日本古典まで、エッセイの種は豊富であるし、文章は軽快である。

小泉堅吉郎「英語のなかの複数と冠詞」（ジャパントイムズ）

ずいぶん前に荻布さんが貸してくれた本である。返さねばなるまい、ということで通読してみた。

冒頭の「I like a girl はどういう意味か」というのが衝撃的である。I like girls との意味の違い。

とにかく自分で英語の文章を書いて、一番分からないのが複数と冠詞の問題である。これを読んで氷解したかという、全然そういうことはない。しかし、今まで以上に注意深く見ようという気になる。

われわれの分野では software, information がZ型であるが、これを複数形にする日本人は多い。また、requirements はどういうわけか、いつも複数形である。この点に注意して収集する必要がある。この本で取上げられていない、自分でいつも迷う、all, both, each などとの組み合わせ、固有名詞の組み合わせ、などについて書いた本はないものか。

この小泉という著者は、理学部出身で科学史でPh.Dをとった人だそう。

中野雄「丸山眞男 音楽の対話」（文春新書）

一気に読み、大いに感心した。この間、加藤周一と丸山の対談を読んだばかりだが、実は丸山の仕事はよく知らない。「超国家主義の論理と心理」を高校生のとき読んだが（中央公論 昭和39年10月特大号「戦後日本を創った代表論文」）、それ以来まとまったものを読んだ記憶がない。まして、丸山がこれほど音楽に入れ込んでいた、というよりほとんど専門家であったということは、まったく知らなかった。

しかし、すごい。レコードやテープだけでない。スコアの膨大なコレクションがある。そして、ワーグナーの指輪のスコアについて、
「・・・総ページ数は5000に近い。そのほとんどすべてのページには、ぎっしり、万年筆による書き込みがなされている。青インクの跡をとどめない譜面を捜すのは困難である。」(p.23)

ワーグナーとフルトヴェングラーへの傾倒がこの本の中心テーマである。しかし、もう一つのテーマは丸山の座談の力、対話による教育ないしは知的創造と楽しみ、のすごさである。著者、中野は丸山と40年の付き合いというが、その話しぶりを実に生々しく伝える。別にテープに録音しておいたわけではあるまい。よくこのように伝えられるものだ。

この間読んだノイマンにしてもワグナーにしても、何ともすごい人間が存在するものだと思う。しかし、丸山もそのレベルではないにしても、われわれからは及びもつかない人間に違いない。同じ東大教授という肩書きがついていても、彼我を比べることすらはばかれる。

フルトヴェングラーはこれまであまり関心がなかった。名前のみ有名だが、現代のはるかにすぐれた録音が聴けるのに、好き好んで録音状態が悪いものをありがたがって聴く気になれぬというところであつた。これを読んで聴いてみようという気になっている。一方で、しかし同時代性というものがなければ、あるいは青春時代に聴

くという個人的な経験，記憶と結びつかなければ，特殊な感興は生れないだろうという気もする．真空管アンプや英国製スピーカーへのこだわりにも，同じような感想を若干抱く．

あるいは，ドナルド・キーンが批判する，ドイツの音楽はドイツの演奏家でなければという思い込み．丸山や中野が言うのがそんな皮相なことではないのは分かっており，丸山に言わせればきっと，アメリカ人の音楽理解はそんなもの，ということになるかもしれないが，キーンの心情に近いものを自分も持っている．しかし，聴き込み方，音楽への接し方に，まるで及びもつかない違いがあるのだから，おこがましいといすらいえない感想である．

最後の「執拗低音」と丸山の日本思想史の方法論の関連も面白く，とにかくよい本を読んだ．

平野啓一郎「日蝕」（芥川賞）

23歳の京大生の作品が芥川賞を取った．

結構，一生懸命読んだ．かなり長さがあって，文芸春秋で75ページ．擬古典的な文体（明治の「口語体」という感じ）と難しい漢字の多用ということもあり，読むのに意識的な努力を要する．しかし，読ませる力のある文章であり，電車の中で集中して読んだというところである．

文体以上に漢字の使い方に特徴がある。物語の世界はウンベルト・エコーの「薔薇の名前」に似ている。15世紀末のドミニコ会派の修道士が語り手である。この前の芥川賞の花村萬月「ゲルマニウムの夜」もカトリックの修道院の話だった。両者の性格は極端に異なるが、カトリシズムを題材にしている点は共通である。これはどういう現象か？

文体とストーリーに工夫があるが、異端審問、つまり魔女裁判、両性具有者、古写本、錬金術と使われる小道具は陳腐といえば陳腐である。しかし文体の面白さに酔わされるという趣きである。

今回は、作品を通読してから選評を読んだ。河野多恵子、古井由吉、日野啓三が、選評でこの作品以外についてはまったく論評せず、さらに言えばこの作品に触発されて文体までも影響を受けている、とまでは言わないにしても、興奮が読みとれる評を書いているのは面白い。一方、案の定というべきか、一人石原慎太郎のみがこの作品を認めていない。三島の再来などと呼ぶなと言いたいらしいが、自分が「太陽の季節」で若さを看板にデビューしたことから、この否定的な評価とは無関係ではあるまい。鼻持ちがならない若者であった石原が、40年若い鼻持ちがならない才能に嫉妬しているのではあるまいか。なお、河野が新仮名遣いあることを肯定的に指摘しているのが、面白い。

大野晋「日本語練習帳」（岩波新書）

1月末の科研の集会で牛島さんがこの本を紹介していた。牛島さんにとっては発見だったらしいが、僕は大野晋のものをずいぶん読んでいる。丸谷才一を通して知ったという面もあるが。

前にもどこかで読んでいるはずだが、ハとガの話 (pp.47-88) が一番面白かった。練習帳ということで問題形式になっているが、黙読でできるものしかやらなかった。しかし問題に取り上げられている朝日の社説を見ると、普段社説など読まないが、社説の文章とは質の悪いものだ。大野侑郎さんが筑波国際大学で天声人語や社説の書き直しを学生にやらせているというが、天声人語はともかく、社説は確かによい材料かもしれない。

野矢茂樹「無限論の教室」(講談社現代新書)

これも駒場の人である。先生と学生2人の会話を中心としたくだけた形式をとっているが、内容は濃く、感心した。

実は僕も最近無限のことを考えていた。中学や高校の情報教育について考えたのがきっかけである。中学や高校の数学の中には、計算科学的な部分がある。変形規則としての等式は両辺が対等でなく、書き換え計算規則と見るべきものが多い。このような手続きはむしろ理解しやすい。逆に手続きが明快でない因数分解やユークリッド幾何は難しい。

一方で、 ε - δ 論法は皆がつまずくもとであるが、これはまさに手続き的な論である。どんな ε に対しても適当な δ が取れるという手続きの可能性を言っている。これで無限が扱える。これは本書でいう「可能無限」の立場といえるだろうか？

とにかく計算論的な話は無限が入るととたんに難しくなるが、しかし人間が無限を理解するには、このような手続き的な解釈によるしかないではないかとそのとき思った。そういう考え方は、変わったものでも目新しいものでもないことは、この本を読んでもよく分かる。出てくるのはゼノンの逆理、カントール集合論、そこでの対角線論法、冪集合と無理数、カントールのパラドックス、ラッセルのパラドックス、直観主義、ヒルベルトの形式主義、ゲーデルの不完全性定理と、知っているものばかりではあっても、このように易しく説明されるのには感心する。またこちらが知っているといっても、十分に自分のものにしていない証拠でもある。しかし、うまい本だ。

この通り講義をしたわけではもちろんないようだが、講義に基づいているという。下條さんの本といい、こちらもやる気を出さねばと思う。

田崎真也「ワイン生活」（新潮選書）

ちょっとずつ読んでいたが、とにかく片付けようと読み切った。しかし、悪い本ではない。田崎という人、売れているだけのことはあ

る.

ウィリアム・パウンドストーン, 松浦俊輔 訳「囚人のジレンマ フォン・ノイマンのゲームの理論」(青土社)

この間のフォン・ノイマン伝が面白かったので、それよりかなり前に買ってあったこの本を取り出して読んでみた。かなり分厚い本である。本文だけで2段組360ページ。

フォン・ノイマンの伝記的な部分と囚人のジレンマの話とが混ざっている。もちろん、ノイマンのゲームの理論が2つをつなぐ鍵である。しかし、もう一つの鍵がある。囚人のジレンマ自身はノイマンのゲームの理論からははみ出るが、ノイマンは原爆や水爆製造に関わっており、それらの核戦略が囚人のジレンマに代表されるゲームの問題に関連してくる。そういう意味できちんとしたテーマのある本である。

この間の本のノーマン・マクレイより、この著者はずっとリベラルのように見える。マクレイの本にところどころ現れるエキセントリックさがこの本にはないのも、それと関係するかも知れない。

大貫隆「グノーシスの神話」(岩波書店)

大貫さんとの付き合いがなければ、読むこともなかったろう。しかし、多くの本屋に置いてあり、装丁も美しく目立つ本である。グノ

ーシスという言葉すら知らなかったから、新鮮だった。グノーシス「主義」は神話をもって語られる。

その神話は体系だっておらず、かなり散逸し、断片化し、分化し、多様な言語で書かれている。それを丹念に拾い集めて復元するのが研究者の仕事である。その意味で、本書のテーマそのものを論述する前のI-二「グノーシス主義の系譜」というグノーシス研究の歴史的跡づけの部分に、おそらく著者の意図とは離れて、妙に感心した。

また復元した神話を日本語化する作業にも、頭が下がる。工夫を凝らして訳出された日本語は、読む者に他の文章を読むのとは違った喜びを与え、日本語を豊かにすると感じさせる。例の「日蝕」にしても、過去のそのような努力の遺産を逆に利用しているのだろう。

「結び」に書かれた現代における意味づけも、傾聴に値する。大貫さんはこのような宗教学の研究者であり、かつ日本基督教団を場とする宗教の実践者でもある。この両者の関係がどうなっているのかも、興味あるところである。単純な話、グノーシスは基督教の正統から見れば異端だろう。それを研究することと信仰とはどう折り合うのか、一度聞いてみたい。

司馬遼太郎「街道をゆく 24 近江散歩，奈良散歩」（朝日文芸文庫）

家族と奈良に行ったのでこれを読んだが、やはり感心した。奈良には定番だが和辻哲郎「古寺巡礼」と亀井勝一郎「大和古寺風物詩」を本棚から引っ張り出して持っていったが、それらよりずっと上の気がする。

先に「奈良散歩」を読んだが、まず奈良の現代の、といっても明治生まれの歌人、前川佐美雄と一緒にいくところがいい。そしてたとえば多武峯について、万葉、記紀以降の歴史に触れる際、室町あたりで止まらないで、たとえば明治の廃仏毀釈について述べる。さらに六条篤(1907-44)という一般には無名の洋画家まで話に登場する。この人は多武峯の子院の社僧の孫なのである。

あるいは、

「奈良県といえば、明治の立身出世にはおよそ適（む）かない県だった。・・・奈良県は敗戦まで一人の大臣も出さず、大将のほうも縁がなかった。敗戦の直前に、大和五条の出身の陸軍少将がひとり出たというみごとな県なのである。」(p.189)

と書く。このような視点、視野は和辻や亀井にはない。もちろん、和辻や亀井が対象としている「文学」や「美術」や「宗教心」とは、もともと異なる視野ではあるが。

僕が奈良から明日香への街道で感じた破壊的沿道風景については、司馬は前から、とくに晩年は大いに嘆いたテーマであるから、当

然出てくる。奈良の方でなく近江に関してであるが、彦根から伊吹山の見える方向に向かう道路を通りながら、

「十字路にはガソリンスタンドができ、路傍にはトラック運転手のための食堂ができ、その他の商店がさまざまな看板をあげる。たちまち農村の風情がくずれてゆき、昭和初期の東京月島か、そのころの阪神間の尼崎、十三、布施のようになってしまう。すでに奈良県があらかたそうになってしまった。」(p.9)

「むかしの日本の農村は、うつくしかった。村の字々の連なりひとつで全景として造形的だった。・・・

大和にせよ近江にせよ、いま急速に都市の周辺の場末の街に転落（！）しつつあるというのは、私どもの文明がかかっている重大な病気としか思えない。」(p.104)

そして子供の頃、そこから琵琶湖の内湖の伊庭湖を眺め感激した記憶を大切にしながら、安土城址に登って、下を見たとき、すべて埋め立てられ湖など見えなかったときの落胆ぶりは、筆を押さえて書いているだけに、読む者にひしひしと伝わってくる文章になっている。

本当に情けないことだと思う。

猪瀬直樹「続日本国の研究」（文芸春秋）

「日本国の研究」は文芸春秋の短期連載で、書き下ろしに近かった。この本は週刊誌への連載コラムをまとめたもので、1回当たり4ページぐらいだから、ずいぶん性格が違う。実際、文芸春秋の方の連載をしている最中の報告が、

「こんなことになったのも「文芸春秋」に1回で100枚の「日本国の研究」の連載をはじめたせいである。」(p.178, '96.11.7)

という告白となって現れている。

それでこの本に「続・・・」という表題を付けるのは詐欺みたいなものだが、内容は確かに霞ヶ関や虎ノ門の行財政改革に関連することが中心ではある。その論点も大体首肯できるものばかりである。週刊誌のコラムだから、十分な議論を展開するというスタイルではないが、その分歯切れはいい。立花隆の「同時代を撃つ」と同じような形式であり、また主張である。

例によって猪瀬の方は立花に片思いをしているらしく、佐藤問題に対する立花の態度を引いている (p.189)。

とくに印象に残る話は、源泉徴収を受けるサラリーマンは、法律上も「納税者」ではないという話、港区の超高層職員住宅の話、住民税の仕組み、県立大学の話、岡光の「家の履歴書」、雇用促進事業団の施設、といったあたり。ちょっと別の意味で面白かったのは、「極私的「中小・国民金融公庫」とのつき合い方」で、猪瀬がいか

に現在のような超売れっ子作家になったかというあたりがほの見え

るところ。やはり僕の予想したように（というか誰にも見え見えだろうが）、「ミカドの肖像」が昭和天皇の死を予感する絶好のタイミングで出てきたのは意識的で、「ミカドの肖像」ではなく、第1作の「天皇の影法師」の方だが、これを書くために生活費を国民金融公庫から無担保で借りる際に、「いずれ「昭和」が終わるけど」といって売り込んでいるのである。

Mitch Albom, “tuesdays with Morrie,” Doubleday

翻訳は日本でもベストセラーになっている。

死を目前にした師と弟子が、週1回人生について語り合った記録である。その意味では、キリストの言葉を弟子が記録した福音書や、ブッダの言葉を後に記録した仏典と似ているともいえる。しかし、師の死後に記憶によって、あるいは伝説によって書かれたものとの違い、生の記録である。著者 Mitch はテープレコーダを持ち込んでいる。

より現代的なのは、TVの役割である。まず、Morrie がゲーリック病で余命いくばくもないことが分る。しかし前向きに生きようとし、ちょっとした哲学を断片的な文章にする。それが Brandeis 大学の同僚の目に留まり、Boston Globe の記者に渡って記事となり、それを見て Nightline というニュース番組が乗り出してくる。有名キャスターの Koppel が訪問して番組を作り、それを著者が見たのがこの本

のきっかけである。Mitch の大学時代の指導教官が Morrie で、格別の敬愛を持っていたが、しばらくは交流がなかった。

Nightline はこの後二度番組で教授を取り上げる。とくに最後は、露骨に死の間際を狙ってくる。しかし、この Mitch の本もTVでの公開の下で作成されているようなもので、Morrie が死ぬ前から出版が約束されている（Morrie 自身が望んだと書いてある）。言ってみればTVとタイアップして作られたベストセラーなのである。

そうは言っても、やはり Morrie の言葉は心を打つ。言っていることはきわめてシンプルで常識的ですからある。しかし、金や名誉のみを追い求めるアメリカ社会には、非常に新鮮なのだろう。キリストやブッダを引き合いに出したが、宗教臭さはない。神秘性、オカルト性から遠いところにいるのが気持ちよい。

Mitch の文章も巧みである。インタビュー記録ではありながら、回想、自分自身の私生活などを適宜交え、よい作品にしている。

マーク・ピーターセン「心にとどく英語」（岩波新書）

「日本人の英語」（正・続）もよかったが、これも面白い。精神は大野晋の日本語練習帳」に似ている。

オリバー・サックス、高見・金沢 訳、「妻を帽子とまちがえた男」（晶文社）

世評の高い本である。それだけのことはある。

脳神経に障害のある患者の記録である。記録というより、著者が意識しているように物語である。下手をすると好奇の目、あるいは哀れみの目で見える話になってしまうところを、作者の暖かい人間理解の視点が、質の高い「物語」にしている。とくに4部の知的障害を持つ天才達の話が面白い。

佐々木良一「インターネットセキュリティ入門」（岩波新書）

この著者は現代詩が趣味だと書いているが、それにしても無味乾燥でマニュアルみたいな本である。もう少し面白く書けないものか。

野村進「アジア 新しい物語」（文芸春秋）

「コリアン世界の旅」（大宅壮一賞）が面白かったので、文芸春秋に連載されているときから、注目していた。書評でも評判がよかったのに、本屋で見つけるのに苦労した。そして、ほとんど同じ趣旨で同じ取材から作られた同じ著者の別の本、「アジア定住」を間違えて先を買ってしまった。

前作でもそうだが、この野村という人は妙な先入観にとらわれずに書いているのがさすが。中国人がビジネスでいかにだますか、ベトナムが賄賂でいかに堕落してるか、カンボジア人がいかに恩知らずか、そういうことをあけすけに書きながら、軽蔑したり非

難するのでなく、実に暖かい目で見ている。野村自身が暖かい目で見ているというより、ここに登場するアジアに在住する日本人達が皆、そういう目で見ているのを、野村が記録しているわけだが、そこに自ずと作者の人柄のよさが現れる。

司馬遼太郎「燃えよ剣」（ポケット文春）

1964年初版で司馬の初期の作品である。親父の蔵書だが、ポケット文春という今はないシリーズで、いかにも剣豪小説という感じでこれまで手を出していなかった。しかし、司馬の死後、とくに司馬の仕事を振り返るというような文章で、この小説をたとえばベスト5などに挙げる人が多いのに気づいた。

土方歳三の話である。親父の中川のほうだか桜丘のほうだかの遠い親戚だという話を聞いたことがある。親父がこれを読んだのも、そのせいかもしれない。

35年という短い生涯に、大きく時代が変わり、土方も大いに出世し散る。出世といっても幕府が倒れる混乱期だからである。新撰組の内部の粛清を果敢にやる男で、あまり好感を持てる人物ではない。しかし、芹沢、沖田、近藤などが死んでも（芹沢は殺したわけだが）、不思議と生き抜く。天性の戦闘家。

歴史的な史実の記述法や作家としての司馬自身が顔を出すところなど、司馬のスタイルは既にこの頃確立している。お雪のように、い

かにも小説らしい架空の人物（恐らく）も出てくるが、

下條信輔「<意識>とは何だろうか」（講談社現代新書）

前作の「サブリミナルマインド」は中公新書だったが、これは講談社現代新書である。しかし、前作と同様、新書としてはボリュームがあり(262ページ)、内容も濃い。こういうものを駒場の講義をベースとして書けるのは、大したものである。

この本のメッセージは、脳と身体と環境はつながっていて、その境目は明確でなく、その全体に心があるということ。というと、たとえば養老孟司の唯脳論と対立する図式のようなのだが、その脳と身体と環境の関係で心がつくられるのは「来歴」によるとののだとし（この「来歴」が本書のキーワードである）、来歴が残るのは可塑性のある脳だから、その意味では唯脳論に近づきもする。しかし、身体や環境にも来歴が残ると言っていたかもしれない。

この主張のための手がかりとして、錯誤を扱う。ここはなかなか工夫がある。さらに、意識と無意識の問題、そしてプロザックという向精神薬を話の糸口とする倫理の問題に及ぶ。このように哲学的、社会的な問題にまで手を広げながら、それほど破綻をきたさず認知科学の立場から一貫した思索を続け、分かりやすい文章にする下條さんは、なかなか偉い。さすがに最後の倫理の話は、歯切れがよいとはいえないが。

栗原康「共生の生態学」（岩波新書）

情報生態学というキャッチフレーズを考えていて、前に買ったこの本を読んでみた。最初の方に牛の胃袋、ルーメンのことがかなり詳しく書かれている。著者の専門研究対象の一つらしく、確かに多様な原生動物と細菌、そして牛自身との巧みな共生関係が作られているとのことだが、ずいぶん特殊な話のような気がした。しかし、5章以降は人と自然との関係という大きな視点で捉えられた生態系の話である。著者の姿勢はこれらの対象の違いの中でも一貫しているらしい。思ったより歯ごたえのある本で、中身は濃い。しかし、安易に情報学には結びつけられそうにない。

子母澤寛「新撰組始末記」（中公文庫）

もちろん司馬の「燃えよ剣」を読んだからこれに手を出したものだが、近ごろの新聞で誰かがこの新撰組三部作を薦めていたのも記憶にある。

子母澤寛は講談調の本を書く人だろうと、完全に誤解していた。これはまるで森鷗外の史伝風である。書き出しに

「歴史を書くつもりなどない。ただ新撰組に就いての巷説漫談或いは史実を、極くこだわらない気持で纏めたに過ぎない。」

とあるが、実は「重版に際して」に、

「この頃雑誌その他で近藤についての多くの記述を読む事は喜ばしい。しかし文献によらず生存故老の言によらず、或いは死人に口なきを利用し、或いは有りもせぬ筆写本などを有りと称し、或いはその出典を明らかにせずして我論を張ると思われる人も一二ある。」

といい、裏返せば自らの記述は正確な史実に基づくよう最善を尽くしているという自負が強くあることが分かる。

この本は近藤勇を中心としたものである。土方も沖田も出番が少ない。しかし、司馬のものと続けて読んだので、新撰組について一時的に詳しくなった。

しかし、ずいぶん簡単に人を殺した時代である。内部の粛清は苛酷である。一方、強い剣客は本当に強く、映画の殺陣もあながちに作り話とは限らない、という妙な感想も持った。

宮部みゆき「本所深川ふしぎ草子」（新潮文庫）

新潮文庫がキャンペーンをやっていて、カバーシートの一部を切り取って集めると、景品がもらえるらしい。美季子も最近は文庫本を読むので、この景品目当てに新潮文庫を買いたいという。それで一緒に逗子の本屋に行って、美季子は「動物の不思議」とかいう翻訳ものを買い、僕は美季子に協力するという名目で、小説ばかり10冊ほど買い込んだ。そのうちの1冊である。

宮部みゆきの評価が高いのは知っているが、これまで読んだことがあるのは、「小説新潮」の特集号に載った、やはり時代物の短編一つで、確かにうまいなと感心した。この「本所・・・」はその手のものの傑作で、よくできている。

ストーリーの作り方もうまいが（しかし、ところどころムリはある）、登場人物に親しみを覚えさせる腕が巧みだ。江戸の庶民の暮らしのつらさと情感も上手く伝える。

佐藤良明「J-POP進化論」（平凡社新書）

平凡社から新しく出始めた新書の1冊である。結構売れているらしく、この間久米宏のニュースステーションに佐藤が出てきて、10分ぐらいレクチャーしていた。僕は柴田元幸とこの人がごっちゃになっていて、本郷に移ったと勘違いしていたが、この間の教授会に出ていたので、まだ駒場にいることが分かった。

1950年生まれだから、自分とほぼ同世代で、聴いている音楽も同じようである。あとがきに

「ふるさとは60年代。森山加代子ならたいてい歌えるが、SPEEDもジュディマリも1曲も歌えない。」

というが、こっちは歌えないどころかSPEEDはほとんど聴いたことがなく、ジュディマリというのは存在すら知らない。だからこの本に出てくる安室や宇多田の曲を材料にした話は曲を知らないのでピンとこない。しかし、テトラコルドの構造で、日本の古い歌とblack系のものがくつつくという話は理解できた。

僕の趣味も60年代に形成された。60年代を代表するのはもちろん日本のグループサウンズではなくて、Beatles である。70年代は個々の曲としては好きなものはあっても、全体の流れとしては愛着がな

いと思っていたが、キャロル・キングの「つづれおり」は1972年らしい。80年代は、小林克也の Best Hit USA を毎週のように見、84年にはアメリカに2ヶ月いてマドンナのデビューを強烈に体験した、という意味で案外フォローしている。

しかし、90年代はポップスを一切聴かなくなった。もっぱらモーツァルト、バッハである。ここに出てくる日本の曲も、80年代までは知っている。いや、そうでもないか。というよりこの本には80年代の曲はほとんど出てこない。戦前から戦後の曲がずいぶん掘り返され、70年代まではその流れで跡づけられているが、そこからいきなり安室、宇多田、B'z、Puffy で、これらをこちらはまったく知らない。

夏目漱石「野分」（岩波漱石全集3）

ずいぶん長い期間をかけて読んだ。時々思い出したように数ページ読むというペースであったから。

しかし、ストーリーはあまりないのに、長いことは結構長い。登場人物は、白井道也と高柳と中野の3人しかいない。まあ、白井の細君とか兄とか、脇役が少しはいるが。白井と高柳が反体制派、中野が体制派で、作者の意図は前者を肯定し後者を否定しているように見える。しかし、白井も高柳も社会を変革していこうという意思を強く持っているというより、すねて孤立しているようだ。

言ってみれば孤高を保ちやせ我慢しているが、社会というレベルで何かしようというようには見えない。とにかく不機嫌である。中野は人がよくて、高柳のためにあれこれよく気を使い、最後には100円という大金を高柳が受け取りやすいように細工をして渡す。

白井の演説によれば、善玉と悪玉を分ける基準は金である。金持ちとは「趣味とか嗜好とか気品とか人品とか云う事に関して、学問のある、高尚な理屈のわかった人」ではない (p.440)。で金持ちの対極が「学者」になっている。この学者という語感は多分、現代のわれわれのものとは少し違うだろう。

エドウィン・ライシャワー、田村完誓 訳、「円仁唐代中国への旅 『入唐求法巡礼記』の研究」（講談社学術文庫）

この夏の五台山への旅行の前に、第1章「円仁の日記」、第2章「円仁一巡礼と師父」を読み、また第3章「遣唐使」を途中まで読み、第6章「大乘の仏教」のとくに五台山のあたりをざっと読んだ。それで充分かとも思ったが、旅行中の空いた時間に残りをすべて読んだ。本文だけで448ページ。訳者のあとがきも結構長い。

円仁の唐滞在は9年3ヶ月であるが、われわれの旅は11日間である、と並べるのもほとんど意味はないが、この本を読んで、9世紀の円仁にそれほどの近しさを感じるところがある。しかももちろん円仁は常人ではない。こういう人物が日本の歴史上に存在したことに誇りを感じるほどである。

ライシャワーもすごい。この本は単に円仁の日記の紹介ではない。日記をもとに、唐の生活、文化、経済、政治、仏教とその弾圧、朝鮮人の活躍ぶり、などを見事に描いている。もちろん、遣唐使を送る日本政府側の政治行動も、これはむしろ円仁の日記以外の資料を駆使して描いている。

そして円仁の日記は、マルコポーロのものより事実を客観的に記し、しかも漢語に通じ、自ら仏教求法僧として生活したという背景からも、貴重だとしている。この頃の五台山は、木が中腹まで鬱蒼と茂っていたそうであり、今より湿度も高かったようだという。それにしても、円仁は足で五台のうち四台までを訪れているが、われわれはバスでも一台にも行かなかった。だから「五台山」という名称を実感はしていない。

翻訳は原文（英語）を尊重して、日記からの引用もわざわざフィート、ポンドなどとするようなやり方を取っているが、もっと素直な円仁の本文の現代語訳を使ったほうが、これで円仁の日記も読んだことにしたい自分のような読者には助かる。

酒見賢一「語り手の事情」（文芸春秋）

新聞の書評で見てリストに記録し、しばらくしてから紀伊国屋のオンライン注文システムを試すのに、リストを見直して発注したので、その時点ではどんな本か、小説か評論かエッセイかすらすっかり忘れたままだった。本が手元に來てみて、その表紙カバーの絵が

エロチックなのに驚き、読んでみて性の妄想をテーマにした、仕掛けに凝った小説であることを知った。

この小説は楽しめた。単に妄想というオブラートに包んだ単純なエロ小説かもしれない。しかし、その扱い方に知的遊びがある。

瀬戸川猛資「夢想の研究」（創元ライブラリ）

この人は最近、50歳だか51歳だかで死んでしまった。死後、瀬戸川のことを多分、日経のコラム「春秋」が取り上げたのを読んで、初めてこの評論家の名前を知った。本書の親本は93年に早川書房から出ているが、面白いことに今年、ライバルの創元社から文庫化されて出た。それを本屋で見つけ、早速旅行に持って行っただが、あっという間に読んでしまった。読み終わるのが惜しいような本であり、著者が死んでしまったのがもっと惜しい。

丸谷才一が文庫版の解説を書いている、誉めそやしている。例によって

「何しろ話の柄がむやみに大きい。気宇壮大である。・・・」

などという言い方で。丸谷は自分の「忠臣蔵とは何か」が本書で取り上げられて好意的に扱われているので気分がいいのだろう。

「つまり忠臣蔵、冬至、クリスマスは新暦、旧暦の違いはあるけれど、みな同じ祭りなのだと彼は説いた。・・・（わたし）はこれを読んでももちろん大喜びし、しかし茫然として、どうして自分はクリスマスのことに気づかなかったのかと首をひねったり、・・・」

と書いている。しかし、クリスマスが冬至と関係するというのは常識的な議論だから、この文章はわざとらしい。とにかく、この本で取り上げられているのは本や映画で、自分が読んだり見たりしたものは決して多くないにもかかわらず、大いに楽しめる知的エンターテインメントであった。

宮部みゆき「火車」（新潮文庫）

この間読んだ時代物短編集「本所深川・・・」と打って変わって、現代物長編である。文庫で582ページある。それを一気に読ませる。太原のホテルでこれを一気に読み終えた。

筋はよく計算されており、人物の性格描写もうまい。とくに脇役の女性をうまく描く。事務所の女子社員「みっちゃん」、保の奥さん郁美、バカスの女主人紺野信子、・・・

しかし事件の発端となる栗坂和也の話や人物の扱いはちょっと変だ。

阿久悠「愛すべき名歌たち＝私的歌謡曲史」（岩波新書）

朝日新聞の夕刊に連載されていたとき、たまに読んだ。いずれ本になるだろうと思っていたら、岩波新書として出た。この間の佐藤の「J-POP進化論」との関連も若干意識して読んだが、あまり関連はない。作詞家阿久悠は曲のことはほとんどまったく触れない。阿久悠の音楽の趣味を表す文章は僅かしかないが、たとえば次のような

のがある。

「昭和36年の叙情歌の流行はうたごえ喫茶からであった。しかし、ぼくは、モダンジャズの喫茶でつぶらかっていた。」(p.87「北帰行」の項)

「気取っていたわけではないが、モダンジャズやソウルミュージック以外のレコードを買うことは珍しかった。」(p.128「女のためいき」)

ちょっと不思議な気がする。

しかし、この本は作詞家としての立場から書かれたものですらく、作者があとがきに書いているように、

「心にのこる歌、記憶にのこる歌を、幼児から引っ張り出してきて百編のエッセーを書いたら、五十年間の日本と、五十年間の「私」という人間の年史になった。」

とある通りの本である。とくに前半の幼児から青春時代の文章がよい。とても質のよいユーモアがある。後半は、昭和史という意識もあって、ところどころに当時の事件や世相の記述を短く入れているのがうまい。

そして、全体を通奏低音のように流れているのが作者と同年生れの美空ひばりの存在で、だから最後のエッセーは「川の流れのように」になっている。そのような構成上の工夫もある。

瀬戸川猛資「夜明けの睡魔」(創元ライブラリ)

「夢想の研究」に感心したので、続けてこれを読んだ。やはりミステリ・マガジンに連載されたものを集めているが、面白さは少し落ちる。やはり「夢想の研究」は、ミステリと映画との組み合わせで論じるという着想が成功で、著者もそれにより夢想の羽を自由に広げたようなところがある。だから丸谷の「柄が大きい」という批評にもつながったわけだ。この「睡魔」の方は、最初は新作の本格物紹介、途中から新作のジャンルを問わない紹介、さらに古典の半ば批判的鑑賞という趣向だが、趣向のひとひねりが足りなかったという感もある。

取り上げられている本で読んでいるものは少ない。今後もミステリにのめりこむことはないかもしれないが、何か読みたくなったら、手引きになるだろう。

しかし、これだけ読み込んだ情熱には頭が下がる。この文庫の解説は法月綸太郎という人が書いていて、この人もミステリ評論家らしいが、高校生のときにミステリ・マガジンで毎月この瀬戸川の批評を立ち読みし、その文章にしばれたという。そして

「現在のミステリ・シーンにおいて、特に海外本格について積極的に発言している書き手は、みんな瀬戸川マジックの洗礼を受けて、目から鱗が落ちるような経験をしているはずである。(中略)しかし、師匠の域にまで達した語り手は未だ出てこないようだ。たぶん瀬戸川ほどの達人は、もう二度と現れないだろう。」

と書いている。

G. K. チェスタトン, 橋本福夫 訳「ブラウン神父の純智」 (新潮文庫)

しばらく前に“The Scandal of Father Brown”を読んだが、今度読んだのは翻訳である。しかし、翻訳でもなかなか読みにくい。KeatingはこのInnocenceを評価し、Scandalは灰だというが、それほどの違いを感じない。荒唐無稽さはどちらも同じだし、文体の気取りも同じである（翻訳で読んで想像する限り）。単にScandalなど晩年のものが、マンネリになっているというだけだろう。

しかし、この短編集の第1作の刑事役で、ブラウンをホームズとすればワトソン役とおぼしきヴェランタンが、第2作で犯人となり、第3作以降は、第1作の犯人だったフランボウが、私立探偵でブラウンの相棒、つまり正にワトソン役で出てくるのにはびっくりする。これはルール違反ではないのか。

しかし、なぜ今頃この本を読んだかといえ、この間読んだ「夜明けの睡魔」に入っていた折り込み広告に「著名作家10人が選んだ創元推理文庫ベスト5」というのがあり、そこで3人が共通に挙げているのが「ブラウン神父の童心」で、他に複数の人が挙げているのは2人による「賢者の石」だけという結果なので、これは読まねばならないと思ったからである。しかし、創元文庫は訳本のタイトルも違うことから分かるように、訳者が別なのだろう。「純智」というのは新潮文庫で、これは昭和34年に初版発行。手元のものは昭和48年の第15刷だが、自分で買った記憶はなく、多分親父の本である。

丹羽敏雄「数学は世界を解明できるか」（中公新書）

新書で180ページしかないが、内容は結構ある。Dynamical Systemの理論の変遷を、数式を一切使わず、巧みに説明する。天動説から始まり、プトレマイオスの理論もきちんと紹介する。

その前に、システムの閉じたものと開いたものを説明し、

「ふつつ開いたシステムという、そのシステムが置かれている環境と何らかの相互作用をもっているシステムと考えられているが、厳密にいうとこれは正確ではない。考察されているシステムはその環境から影響を受けているが、環境自体はシステムの状態には影響を受けず、自らの状態によって自律的に変化していく。」(p.13)

という指摘は自分には新鮮だった。確かにそうなのである。相互作用があるならシステムと独立して考察できない。

日本語の科学啓蒙書としてはかなり水準が高いものだと思うが、参考文献がついていないのが不満である。本書を著述するために参考にしたというものも、読者がより進んだ知識を得るための推薦図書というものも、どちらもない。わずかに図版に引用文献があるが、本人の書いた別の本である。

司馬遼太郎「街道をゆく(15) 北海道の諸道」（朝日文芸文庫）

これは函館に行く前に買ったが、函館にもっていくのを忘れ、帰ってきてから読んだ。しかし司馬の「街道をゆく」は旅行案内ではな

いのはもちろん、旅行記、紀行文というものですらく、旅をする地域にまつわる歴史を縦横に渉獵するものであるから、旅の前に読もうが後で読もうが、とりたてて違いはない。

この巻もこのシリーズの他の巻と同様、とても面白かった。司馬の高田屋嘉兵衛（「菜の花の沖」）、土方歳三（「燃えよ剣」）、「ロシアについて」を読んでいるので、彼の北海道への思い出は分るし、実際この本にも上の3作品に関連する話が多く出てくる。しかし、ニコライ、関寛斎、三岸好太郎などの話は実に面白い。さらに三岸の異父兄が長谷川伸で厚田村出身であり、新撰組について司馬は長谷川に挨拶し、教示を受けているという話は、人間関係のつながりという点でもびっくりさせられる。

Reginald Hill, "A Pinch of Snuff"

ずいぶん前に買ってあった。買った理由は例によって、H. R. F. キーティングの「海外ミステリ名作100選」に入っていたからである。

チェスタートンはまったく違う意味で気取りのある文章で読みにくい。分らないところがずいぶんありながら、話の展開が実にうまくて引き込まれる。もちろん人物描写は最高級にうまい。結末はちょっと平凡で、どうってことなく終わる。しかも、主人公の Pascoe より悪役のように見えた上司の Dalziel の方が、はるかに正しく状況を把握していたことが知らされる。

池波正太郎「散歩のとき何か食べたくなって」（新潮文庫）

池波の本を初めて読んだ。獅子文六と同じで小説は読んでいないし、今後も読みそうにないが、食べる話は面白く読める。

鹿島茂「パリの王様たち ユゴー・デュマ・バルザック、三大文豪大物くらべ」(文春文庫)

たまにフランスに旅行に行くというので、少しはフランスに関係あるものを持っていこうと思い、買い溜めしてあった文庫本の中から、これを選んで持って行った。

いずれも伝記がたくさん出ていて、研究の充分されている三人を対象にしているから、それらをまとめ直せば読み物とするのは簡単である。タイトルからしてガイ・エンドウ「パリの王様―大デュマ」を複数形にしただけの借り物である。しかも素材の三人が無類に面白い人物だから、面白い物語になることは請け合いである。著者の工夫は、ナポレオン後の政治の空白期に、文学のナポレオンたろうとする者を産み出す時代の気運を三人の出現背景としてを説明していることかもしれないが、それもどうやら新しい説ではないらしいことは、本文のいろいろな引用で分る。

三人を横並びに書くという工夫は、最初のうちは単なる並列になっていて、かえって読みにくい。しかしバルザックの借金ぶり、ユゴーのケチと女狂い、デュマの先見性などの話になると、とにかく面白い。

いずれもあまりつき合いたくない人物だが、本で読む限りは限りなく魅力的だ。こういう破天荒さは、現代では無理だろうか。

「今日フランスの都市で、ナポレオン通りはなくても、ユゴーの名を冠した目抜き通りのない都市は存在しないのだから。」(p.298) は、ついこの間ツールーズでビクトル・ユゴー通りを目にしていただけに、印象に残る。

Stephen King, "The Green Mile," Plume

初めて King を読んだ。この本は6分冊で順番に出版していくという形態を取り、それでも話題になった。読んだのは1冊に合本したもので、通常のペーパーバックより大きい判型で465ページある。

King の人気は分るような気がする。荒唐無稽な話を、綿密なリアリズムで語るという手法である。そしてストーリーの組み立ても周到である。6回に分けて出しても、読者からの反響によってストーリーを変えたとは思えず、最初から完成した構想に基づいて書かれたように見える。とにかく一気に読ませる筆力は確かなものだ。しかし、King のものを次々に読みたいとまでは思わなかった。

夏目漱石「三四郎」(岩波漱石全集5)

高校のとき読んで以来だろう。所々覚えている場面はあるが、大体は新鮮である。

漱石の小説の中でも、三四郎はとくに人に好まれる方だろう。それは、青春小説として伸び伸びした感じがあるからだだろう。美禰子という女性像と、彼女への三四郎の思いが、この小説の一つの中心である。美禰子は魅力的ではあるが、十分に描かれていない気がする。三四郎から見て謎の残る女性という意味で、それは意図的かもしれない。とにかく三四郎に対して妙に気を惹く行動に出ながら、結局は消えてしまう。

美禰子との関係は、三四郎の心の中の描写まで含めて、あくまでプラトニックであるが、またこの時代の小説（しかも新聞小説）として、性的に露骨な描写も考えられないだろうが、一方で冒頭の汽車で一緒になる女との交渉に、やけにあからさまな性的ほのめかしのあることに、改めて気づいた。

この間読んだ「野分」と比べると、広田先生という人物像は白井道也や高柳とつながるところがあるが、それほど不機嫌でなく、ユーモラスで好感が持てる。この明るさも、「三四郎」の魅力だろう。

しかし「三四郎」は映画化されたことがあるのだろうか。観たという記憶はないし、話題になったこともないように思う。なぜか、美禰子のイメージに稲垣美穂子（古い女優だ）が重なるのは、名前の連想も大きいのだろうか。それとも高校生として読んだときに、稲垣美穂子が好きで勝手に結びつけたのだろうか。今となっては記憶の彼方である。

次のような会話がある。

「主人は雑誌を抛げ出した。

『では行くかな。とうとう引っ張り出された。』

『ご苦労様』と野々宮さんが云った。」(p.402)

この「ご苦労様」は野々宮さんが広田先生に言っているのですが、最近流行の「ご苦労様」は目上が目下に言うものという説への反例となる。僕はこの「目下に言うもの」説に納得がいかなく、そのせいかどうか若い人が「ご苦労様」という代わりに「お疲れ様」というのが気持悪い。

小泉八雲著，平川祐弘編「明治日本の面影」（講談社学術文庫）

この本は、松江の今井書店で買った。もっとも講談社学術文庫だからどこでも買える。松江から帰る飛行機で「英語教師の日記から」を読み終わり、後は読まなくてもいいかなという気持だったが、結局480ページに収録された22編をすべて読んでしまった。

この本は、「知られぬ日本の面影」の後半と、その他のいくつかの文章を編集したものである。編集者は平川祐弘になっているが、平川の言葉はなく、解説の遠田勝が、

「本書にはハーンの来日第一作である・・いくつかの好篇を収めた。」

とまるで編集者のような書き方をしている。どうなっているのだろう。ただ、「英語教師の日記から」には、訳者平川の丁寧な、とい

うより解説に近い訳注がついている。この訳注だけでも結構楽しめる。

いまや、明治の日本は、こういう文章から想像するしかない。ハーンの傾倒ぶりは日本人としてくすぐったいほどだが、この日本人と今のわれわれとは違う。むしろ明治の日本人を観察し、その生活文化や性格がすぐにも失われることを予想し、またすでにその兆候を捉えて嘆いているハーンの眼と近い立場にわれわれはいるが、それだけにかえって訴えるものは大きい。

もちろん、ここに描かれている日本は、その明治の時点での日本の現実というよりも、ハーンの頭の中に作られ理想化された、虚構に近いものかもしれない。事実、ハーンは後に幻滅を味わって、それをチェンバレン宛の手紙などにあけすけに書いてもいるらしい。それでも、心を打たれるところが方々にある。それらは、著者が文学的な意図をこめて作ったらしい場面であるが、しかしやはり涙が出てしまう。たとえば横木が死ぬ前に学校を見たいといってじいやに背負われて学校に行く場面 (p.67-69)、隠岐の老いた武士が行列を作って山祭りの風習を甦らせる話 (p.199-200)、「お大の場合」(p.383-391)、そしてまた「横浜にて」に出てくる老師の知性と人柄の印象は強烈である。

山田風太郎「八犬伝」 (朝日文庫)

誰かが新聞でこの本をほめていたので買った。

小学校1年か2年のとき、「こけし文庫」で子供向きにダイジェストされた八犬伝を読んで夢中になった。ただ、夢中になり方は「三国志」ほどではなかった。後者は20回以上読んだ。

この「こけし文庫」の本はまだ残っていて、美季子の本棚にある。原作 滝沢馬琴、円城寺健「八犬伝物語」、1955年発行、定価100円である。

山田風太郎の本は初めて読んだ。昔、くノ一忍法で有名だったが、その後非常に幅広い作品を書いていることは知っている。

この小説の工夫は、八犬伝の話を、それを書いている馬琴の話と交互に「虚の世界」「実の世界」として語っているところで、今や八犬伝だけではそのアナクロニズムについていけないところを、巧みに虚とは何か実とは何かという問題に絡めて、新しい小説の世界を作っている。もちろん馬琴の話も、ある程度史実を踏まえた上での、山田風太郎による虚構である。この構図がもっともうまく決まっているのは、「実の世界 神田同朋町」で、馬琴と北斎が鶴屋南北の四谷怪談を観にいき、そこで南北と会って応酬する場面である。ここには本当に感心した。最後のこれも史実ではあるようだが、馬琴が失明し、嫁で文盲のお路に口述筆記をさせるところもすごい。

八犬伝そのものには大して感興を得なかった。感心したのは名前の付け方である。悪者は実に悪者らしい名前を与えられている。皮上

宮六（ひかみきゅうろく）、軍木五倍二（ぬるでございじ）、馬加大記（まくわりだいき）。後、連想したのはこの間の、ユゴー、デュマ、バルザックである。実際、大塚夫婦は、レ・ミゼラブルのテナルディエ夫婦を思わせる。そして、山田の最後の文は

「『南総里見八犬伝』世界伝奇小説の烽火、アレキサンドル・デュマの『三銃士』に先立つこと3年。」

である。

エピソードとして一番よくできていると思ったのは、やはり庚甲山である。とくに赤岩一角が馬に乗って猫を引き連れて通る場面は、魅力がある。しかし、いくつかのエピソードで悪役で出てくるのはすべて船虫というのは、女の登場人物を複数作るのが面倒だったのだろうか。

高橋克彦「写楽殺人事件」（講談社文庫）

八犬伝を読んで、この本を買ってあったのを思い出した。しかし、案に相違して現代物だった。話はよくできている。写楽の謎に挑んだ本は多いようで（またそれらをこの本も下敷きにしているが）、そこに新機軸を出すのも結構大変だが、さらに殺人事件というミステリ仕立てにしている。むしろミステリに写楽の謎を絡めたというべきか。

著者はもともと美術畑の人だそうで、写楽の謎の扱いはいい加減ではない。そして本書は江戸川乱歩賞を取っている。

よくできているが何か物足りない。おそらく人物の描き方だろう。その存在感が、やはり英米のミステリと比べると弱いのではないか。

角山栄「時計の社会史」(中公新書)

この著者の別の本の書評を読んで、本書の存在を知ったが、実に面白い本だった。やはりローマ経済史に関する本の書評で奥泉光が書いていたが、学問の中でもっとも面白いのが経済史だという。こういう本を読むと、なるほどと思わせる。

和時計の話は山本七平も何かに書いていたが、出所は大方本書だろう。しかし、西洋から到来した時計に対しての、中国と日本との対応の違いは面白い。

本書は、時計の技術や産業の歴史だけでなく、時計で測られる時間が、資本主義の展開にどれだけ関与したのかという視点が、もう一つのテーマである。

84年に出た本なので、最後の章の時計の電子化の話は、まだ部分的である。

矢野誠一「三遊亭圓朝の明治」(文春新書)

圓朝については牡丹燈籠位しか連想が浮かばない。文学史的には口語体の形成に影響を与えたという知識があるのみである。この間読

み返した三四郎の引用が本書に出てくる。

「圓遊も旨い。然し小さんとは趣が違ってゐる．．」
というところ。

河竹黙阿弥が出てくるかと思ったが、出てこない。

面白いところはあるが、新書で量的に足りないせいか、なんか全体にあっさりしている。

佐藤信夫「レトリックの記号論」（講談社学術文庫）

何かで高い評価をされているのを読んだことがある著者だが、その本を読むのは初めてである。レトリックを扱う文章もレトリカルなものかと思ったら、案に相違してずっと明晰である。

やはり冒頭の「認識イメージのレトリック」が最も読みごたえがある。最初にコードの話がある。次に文化のコードを代表するのが言語だという。そして言語は守備範囲を無限にかかえてしまっているという。ずっとレトリックという言葉は出てこない。頭から17ページ過ぎて、やっとレトリックという語が小見出しとして出てくる。本文では実に20ページ目に初登場する。

「言語学から逸脱したところの言語現象というものは、古来レトリックという学問が無意識のうちに研究してきた問題ではないか．．」

これが、この小論のポイントである。後半は、そのコードからの逸脱について論じられている。

他の文章は皆もっと短いが、多くのところでハッとさせられるし、文もうまい。

1998年

加地伸行「儒教とは何か」（中公新書）

儒教に関して、まとまったものを読んだことがない。実際、仏教に関する本は多いが、儒教の本は少ない。あるとすれば論語に関する本か。

本書の冒頭に、日本における葬式が仏教と儒教の混ざったもので、どっちとしても変だということが書いてある。そのような日本の冠婚葬祭がどのように作られてきたのかを知るのも面白いと思った。それで、この本をかなり一生懸命読んだが、儒教に関して、日本の習慣に関して、それほど知識を得た感じがしない。この人の文は「現代中国学」で経験したが、悪文といってよい。この間の伊原ほどではないが、なぜ中国学者に悪文家が多いのだろうか。

文章が悪いし、同じことの繰り返しが多い。何度も繰り返されるのは、これまで儒教の礼教性にばかり眼が向けられ、批判ももっぱらそれに対して行われてきたが、もう一つの重要な側面である宗教性は無視されてきたという。しかし、その宗教性というのが今一つよく分からない。古代のシャーマニズムにつながるもの、家における父母、祖先の礼拝、招魂儀礼であるという。それは宗教なのか。礼ではないのか。

「宗教の定義」という節はちゃんとある (p.26). しかし、そこには定義は書いてない. 他人の定義やキリスト教, 一神教のみを宗教と考えることへの批判が延々と書いてある. で, 次の「儒教の宗教性」という節で

「それでは, どういうときに宗教を意識し, 求め, 必要とするのかということになる. . .それは死である. 」

という文章があるが, これも定義の形になっていない. もう少し後に,

「つまり, その民族の民族性に適合した死ならびに死後の説明をなしえたとき, それはその民族の国民的宗教となる. 」

とあり, さらに

「宗教とは, 死ならびに死後の説明者である. 」

とようやく, 少なくとも形式は定義らしいものが出てくる. しかし, 儒教が死についてどのような説明をしているのか. 魂と魄があるという(p.17). それが分離するのが死である. それを帰ってこさせるために招魂儀礼がある. 以下22ページぐらいまでが, この本の結論である. つまり, 単なる招魂儀礼にとどまらず, 「孝」という概念で統一した理論体系を作ったのが儒であるという. しかし, 「理論」は宗教から離れてしまうのではないか.

渡辺保「黙阿弥の明治維新」(新潮社)

大変感心した. 読み物として面白く, 完成度も高い. 雑誌連載にしては構成も緊密である. 歌舞伎をろくに見たことのない人間が, こ

ういう本を読んで楽しめるのも面白い。

前半のポイントは、小団次の死に結びつく江戸幕府の統制が黙阿弥にいかに重圧となり、明治維新に変化を期待させることになったかという点にある。同時に、小団次の上方風、くどくあざとい演技と結びついたところに黙阿弥の不幸があって、団十郎などとの江戸歌舞伎の作者として仕事が続けられれば、もっと違う芝居が書けたらうともいう。しかし、この点は結局あまり詳しく議論されない。また、それなら小団次の死後、作品の性格が変わることが期待されるが、そういう議論もない。

後半、荷風を引き合いに出し、黙阿弥は現代までずっと江戸情緒を残した人とされ、絵画的、音楽的部分だけを鑑賞されてドラマの構造や背後の意図・主張が顧みられていないとし、その証拠に、一部の幕や場だけを取り上げての公演が一般化していることを挙げている。この論がこの本の主眼であり面白いところだが、しかし通しでやらない公演形態というのは、江戸時代からの歌舞伎の慣例で、歌舞伎の本質として、全体の構成を無視して部分を楽しむということがあるのではないか。これは渡辺の「歌舞伎」の読後感を書いたときに引き合いに出した加藤周一の論の受け売りだが、ついでに言えば、荷風の見方はより近代の視点、西洋の近代主義の洗礼を受けた目で見ているとして、そこで渡辺は近代主義の特徴として機能的細分化があるとし、森全体を見ずして個々の木で判断するという。これは加藤の見方とまったく逆である。名せりふ、名場面を中心に上

演し、全体のドラマを軽視するというのが江戸以来の歌舞伎の伝統とし、加藤はそれを近代の視点から批判的に見た。やはり、この部分を鑑賞するという方が、部分化、細分化というべきではないだろうか。

多田富雄「生命の意味論」 （新潮社）

「免疫の意味論」と比べて、多田の書き手として技量は一段と増したように思える。

免疫システムを初め、脳神経や発生のシステムを多田は超システムと名づける。その特徴は、自己生成、自己多様化、自己組織化、自己適応、自己言及、自己決定であるという。そしてその多様性が生れる過程は、DNAで決定的に決まっているものではない。状況に応じて確率的に多様化する。個体発生や免疫システムができるプロセスの話を聞くと、確かに驚くべきことが行われていると感じる。この超システムの概念を都市や企業や大学の生成過程になぞらえる終章は、一見陳腐なようだが、案外面白い。とくに、このような過程で作られるシステムは自己目的化し、合理的、客観的な目的を失う。それが官僚システムの弊害で、それを阻止するには外部から超システムとして観察し、制度に内在する生理機構を再点検して、病理現象の要因を発見しなければならないとする(p.233)。しかも、行政改革として、合理性だけで切り詰めると、超システムの本来の多様性と冗長性を壊してしまい危険であるとも言う。この辺は面白い。

最初の章に、浅島さんの仕事の紹介がある。浅島さんは学者として立派な業績があるとは聞いていたが、具体的にどんなことをやっているのか、初めて知った。

全体に、言語のアナロジーがよく使われる。「意味論」とする理由であろう。チョムスキーが引かれる。この比較、メタファーも説得的である。また、能の話、ヨーロッパ都市の話の巧みに使って、教養の幅を見せる。大したものである。

恒吉僚子「人間形成の日米比較」（中公新書）

これも駒場の先生の本である。直接話したことはないが、プレハブ動員の頃に顔を認識した。清楚な感じで若いと思ったが、本書によれば1961年生まれというから、そう若くもない。

自分の日米での生活経験と、博士論文となった日米学校調査の結果とから、子供の家庭および学校での教育の日米比較をしている。なかなか面白い着眼点である。美季子の清泉での教育と比較して見ても面白い。

しかし、結果的には案外ステレオタイプである。外在型のアメリカと内在型の日本。しかし、確かに学校教育の朝礼やら班による小集団活動やら、掃除当番や給食当番や、今週の目標といったパターンが、日本の企業における行動や組織につながっているという気はする。

自発性を促す日本の教師と権威と規則を押し付ける米国の教師というパターンと、個の自立を強調するアメリカと、集団協調を促す日本というパターンが、相容れないようでつながっているという指摘が面白いところだが、それがどうつながるのか、今一つ納得しにくい感じもする。また、日米の比較ゆえに、同じアジアでも日本と他のアジアはどう違うか（中国の話はちょっと出るが）、ヨーロッパはどうか、という議論はない。それにもかかわらず単純に「欧米と比べて」と言ってしまうところに不満を感じる。

文章もあまりよくない。とくに後半はだれる。

渡辺裕「音楽機械劇場」（新書館）

あまり期待しないで読んだが、結構面白かった。機械というと音楽性とはかけ離れたものと思われがちだが、機械に注目して音楽の歴史を見ると、面白いものが見えてくる、という着想である。具体的に取り上げられるのは、まず19世紀前半のピアノ、自動演奏装置、バセットクラリネット、など。とくにベートーヴェンが当時のハイテク好きだったという話などが、面白い。次が20世紀初めの蓄音機、ラジオ、映画、など。音楽性と技術性、機械化と演奏家を經由しないことによる純粹化の関係など、考えてみるとなかなかのテーマがある。方法論としては、当時の雑誌、広告などを発掘する。なるほど近代史はこの点で有利である。手軽に資料が手に入り、多分多すぎもせず、読解にも苦勞もせず（言葉ができれば）、料理しやすい。しかし、読者としては自分ではとても発掘できないから、楽

をして楽しめる。写真がたくさん入っているのもよい。おそらく古いものだから、著作権の問題も大してないのだろう。

横地清「数学の文化史 敦煌から斑鳩へ」（森北出版）

一流の本とはいえないが、それなりの面白さはある。そもそも、昨年、敦煌に行くに際して、どんな本があるかOPACで検索した。それで、松岡譲「敦煌物語」とか、東山健吾「敦煌三大名窟」といった本の存在を知り、買って読んだ。そのときにこの本も検索して、生協に注文した。

要するに数学的遠近法が中国や日本の絵画でどう表されているか追った本といえる。著者は数学教育が専門で、その立場で幼児の絵から漢から唐代の絵の遠近法を比較する。本としては素人っぽいが、そこがまた特徴になっている。

しかし、遠近法云々より、この本は著者の中国訪問記として読むと面白い。自分も最近よく中国に行くようになったが、この人は1979年以来22回訪中しているという。そう書いているのは1991年だから、年2回のペースである。僕もこのところ年2回以上である。しかし、この人はまめに色々なところに行き、また瑠璃廠や北京画店などに出入りして、ちょっとした美術品を買い集めている。そのところが違う。

テーマは面白いので、もっとよい本にできた可能性はあろう。しかし、B級の本としては楽しめた。

渡辺洋三「法とは何か 新版」（岩波新書）

いろいろな分野の中で、法律、法学はこれまでもっとも関心が薄かった分野である。それがまず、著作権法や特許法の関係で、また駒場寮問題で、小寺、道垣内、大越などにつき合うようになって、身近に感じられるようになった。そして法の持つ論理性（場合によっては詭弁）にある種の小気味よさを感じるようになった。

しかし、この書はそういう法律をかじって得をしようというような根性に対して、正義（モラル）を対峙させた厳しい書である。その徹底したリベラルな姿勢は、今時はやらない。今や、週刊誌、とくに文春や新潮など、また諸君や Voice などの月刊誌は、「人権派」を叩くのに精力的である。僕自身も、本書で取り上げられている問題でいえば、夫婦別姓、死刑廃止、子供の人権などの論については、少し考えが異なる。また、福祉を厚くする大きな政府論も、その財源をどうするのか、という気になる。しかし、こうして徹底した立場は、尊敬に値する。渡辺は1921年生まれというから、77歳である。この歳にしてというべきか、この年代だからこそというべきか。とにかく、日頃接する法学者達とはずいぶん違うタイプの、一徹したリベラリストである。西欧市民社会を理想として描くことは、今や気恥ずかしい気さえし、実際、この書にはアジアに眼が向

けられていない嫌いがあるが（教科書問題で出てくるだけ）、これだけ徹するのも大したものである。

中島秀人「ロバート・フック ニュートンに消された男」 （朝日選書）

このタイトルは「ダーウィンに消された男」（ブラックマン）としてウォレスを描いたノンフィクションの二番煎じのようであるが、しかし内容のレベルは高い。だから朝日出版賞を取ったし、その賞を報ずる紹介文で僕も買う気になった。

確かにフックの法則は知っていても、フックという人物についての知識はなかった。本書によれば、ニュートンよりは7歳年長で、業績も先行する偉人である。

しかし我が強く業績上の争いについても好戦的である。ニュートンに対しても、引力は距離の2乗に比例するという法則の占有権を主張し、それが徒になっただけらしい。

しかし、本書の最後のほうで、歴史上ニュートンが残りフックの存在が忘れられたことと、理論優位、実験・応用の軽視の傾向とが繋がるとの指摘は興味深い。

Kazuo Ishiguro, "The Remains of the Day"

オックスフォードへの旅に、この本を持ってきた。映画化された後のペーパーバック版で、表紙に映画の写真が使われている。

Anthony Hopkins

と Emma Thompson である。BSでこの映画が2-3ヶ月前に放送されたので、録画して見た。それが面白かったので、以前に買ってあったこの本を引っ張り出し、旅行に持ってきた。

さすがに評判になった小説だけあって、人を惹きつける魅力があるが、しかし実に不思議な魅力である。Darlington 卿に忠実に仕えた執事の独白という形式で、Miss Kenton との間の不器用で微妙な心の交流が話の中心である。これをイシグロという長崎に生まれ6歳で英国に来て、英国で教育を受けた作家が89年に出した。54年生まれだから、35歳のときである。そして、89年の Booker 賞を受けた。

執事の性質、職業意識、考え方を執事の言葉で語らせる文章の巧みさは、驚くばかりである。しかも、それで男女の関係、ナチを巡る英国の政治、階級、老い、人の生き方、という問題を、様々に考えさせる。何ともうまい小説である。

張競「中華料理の文化史」（ちくま新書）

案外面白い本だった。歴史的な話も面白いが、現代の中華料理についてもっと書いてほしかった。

序章に出てくる、上海料理の名前が著者にも分らなくなっているぐらい、中華料理はどんどん変化していること、香港料理の影響が非常に大きいこと、などがなるほどという感じだったので、とくに地域的な関連をもっと論じてくれたら面白かったろう。しかし、この本で羹（あつもの）というものがどういうものか初めて分った気がした。「羹に懲りて膾を吹く」という諺を中学か高校で習っても、それらがどんな料理か、熱い料理と冷たい料理というぐらいの説明しか、高校教師はしないだろう。箸の置き方という話も感心した。宋代までは、中華料理も日本のように淡泊だったという話 (p.153) も面白い。

Stephen Jay Gould, "Questioning the Millennium"

Gould という人は、どんな題材でも書けてしまうすごい人である。この本も充分面白かった。

この人のとくに生物関係のエッセイ集を英語で読むと読みにくいと思うことがあるが、この本を読んでその理由の一端が分った気がする。とにかく教養があって、こちらの知らない言語、人名、文学作品、言い回しなどがやたらに多いのである。Michael Jackson の本に出てきて、ディケンズ研究者の山本さんにも分らなかった *Pirates of Penzance* が、本書にも出てきた。してみると、かなり有名な本らしい。

最後が泣かせる。途中に何度も出てくる知恵遅れの話だが、天才的な曜日計算家の正体が、実は自分の息子であること明かされる。しかし、この話で、ある大学院生が日夜練習を積んだら、ある日突然、天才達と同じように素早く計算できるようになったという事例が紹介されているのが興味深い。

世紀の始まりをいつにするかという問題について、1 B.C. = 0 A.D. とするというアイディアはうまいと思うが、それなら世紀の呼び方も0世紀からはじめるべきだろう。そのことには触れられていない。

計算機の2000年問題は、ほんの1-2行触れられているだけである。復活祭が、春分の日の中の最初の満月の後の最初の日曜であることを初めて知った。太陽暦、太陰暦と曜日に関係するからややこしいのだという。なるほど。

最相葉月「絶対音感」(小学館)

週刊ポスト・SAPIO主催の21世紀国際ノンフィクション大賞の第4回受賞作とやらで、評判が高い。

これを読んで、美季子のやっていた聴音の訓練は、園田清秀（高弘の父）に始まる日本独特の幼児絶対音感教育の流れのものであることが分った。とくに美季子の磯野先生は、レオニード・クロイツァーの孫弟子になるらしいが、クロイツァーのことは、この本のp.61-

63に出てくる。笈田光吉（これが笈田敏夫の父である）の師であり、笈田の家に住んでいたという。その笈田が園田の実験を引き継いで、「絶対音感及和音感教育法」という教則本を作り、普及させたというのである。

この本には、そのような日本の特殊な音感教育の話だけでなく、関連して音楽そのものの議論、さらにコンピュータ音楽や認知科学の話も出てくる。よく取材しており、読ませる。

雑然としている感じもするが、面白かった。NTTの柏野のことが大部出てくるが、この人は奥乃さんと一緒にやっている人だろう。

Richard P.Gabriel, "Patterns of Software - Tales from the Software Community"

とても面白い本だった。Gabriel は1984年の Austin で開かれた Lisp Conference で強く印象づけられている。翌年の IJCAI でも見かけているだろうが、記憶は定かでない。この本によれば、Gabriel が Lucid という会社を作ったのが1984年である。85年にはAIツアーで Lucid を訪れたはずである。Tony Slocum に会っているような気がする。

この本は、エッセイを集めたものだが、主に3つの部分からなる（章立ては全5章だが）。最初の部分はパターンの話である。というより Gabriel による Christopher Alexander の徹底した紹介である。Alexander は今や、計算機科学者の間でもっとも有名な建築家

である．たとえば建築家の黒川雅之さんは，Alexander の名前をわずかに知っている程度だったから，建築家の間ではそれほど有名ではないのかもしれない．

オブジェクト指向ではやりだしたが，古くは Tom de Marco が Peopleware の中でとりあげていた．しかし，僕としては Alexander 自身の本を読んだことがなく，これをオブジェクト指向に導入したパターン屋たちの書いたものを読んでも，Alexander のすごさというのは，よく分からなかった．Gabriel を通して，その丁寧な説明によって，初めてある程度分った気がする．普通紹介されるのは，“A Pattern Language” や “The Timeless Way of Building” という70年代後半の Alexander の著作であり思想である．Gabriel はさらに進んで，現実の建築でこれがあまりうまくいかなかったこと，それを Alexander が認めて，いろいろ考察していることにまで及んでいる．さらに93年に出た，絨毯の模様に関する著作まで詳しく論じている．

しかし，この本の序として Alexander が書いていることを読むと，さらに驚く．Alexander は Gabriel に面識がない．しかし，JOOP に載った Gabriel のエッセイを読んで，建築家仲間よりはるかに進んだ理解をしていることに，まず驚いたことが語られる．しかし，この序ですごいのは，Gabriel がこの本で紹介した以降，Alexander は自分の考えに基づく建築に「成功」してきており，問題は解決されたと自信を示すことである．そして，そのことは間もなく出版され

る The Nature of Order に詳述されるという。しかし、同じような解決がプログラミングでも可能であろうかという疑問を提示し、それに対し、素人で分らないと保留しながらも、どちらかという否定的な意見を述べている。

真ん中は、Lisp と C の比較といった言語の話。Gabriel が Lisp の失敗を認めていることに驚かされるが、その経緯は後の自分の半生記を読むと分る。また、文章術、詩作の話もある。Gabriel は意識的な著述家なのである。

最後の自伝的な話は実に面白く、生々しい。高校での教師による迫害、大学での遠回り、いかに Stanford で学位を取ったか、結婚と離婚、そして何より Lucid の設立と失敗の10年の話はスリリングである。Gabriel のあくの強さもよく出ていて、関係する他の人はきっと違う見方をしているだろう。しかし、実名入りでこれだけあけすけに語られると、第三者には週刊誌を読むような面白さを与える。

小林康夫，船曳建夫 編「新・知の技法」（東京大学出版会）

自分の書いたものも載っているが、面白く読んだ。スタイルが確立しているので、新しい著者もスタイルを合わせて書ける。だからメンバーが変わっても、手馴れたという感じになっている。それだけ社会にはインパクトが弱いのか、新聞などでは今のところあまり取り上げられていない。

タイモン・スクリーチ, 高山宏 訳, 「春画」 (講談社選書メチエ)

このスクリーチという人は、オックスフォード大卒、ハーヴァードで博士、ロンドン大助教授という人で、「大江戸視覚革命」という本の書評で存在を知り、その本を買ったが、それを読む前にこの春画という本を先に読んだ。

ずいぶん勝手な解釈と思われるところもあるが、とにかく面白く読んだ。もちろん絵に魅かれてであるが。

久野靖「UNIXによる計算機科学入門」 (丸善)

大分前に久野さんから送られたものだが、ざっと読んでみて、やはり感心した。久野さんの熱心さが伝わってくる。GSSMでの教育をベースにしたものだが、広い範囲を、しかしある程度突っ込んで、カバーしている。

John Grisham, "The Runaway Jury"

Grishamは何冊目か。これだけ読んでくると、ストーリーの展開はある程度読める。そのムリ、アラも気になってくる。それでも面白く読ませる腕はさすが。初めのうちはあまり気を入れて読んでいなかったが、200ページを過ぎたあたりから、ついつい引き込まれる。しかし、フィクションとしても陪審員制度とは問題の多いもの

だと思わせる。陪審員候補を調査するという職業のことなど、どこまでが本当で、どこからがフィクションだろうか。

渡辺照宏「不動明王」（朝日選書）

昔、渡辺照宏の「日本の仏教」を感心して読んだことは、よく覚えている。内容は覚えていないが。

探してみると2冊あって、一つが昭和36年12月10日の第7刷（なお、第1刷は昭和33年1月25日）、もう一つが1984年10月20日の第33刷。前者は親父ので、僕が読んだのは後者だろうか。しかし、学生の頃に読んだような気もするので、親父のを借りて読み、84年のものは親父がまた買ったのだろうか。

「日本の仏教」と比べればやや軽い本ではあるが、面白く読んだ。過去の日本文学から不動尊に言及しているものを抜き出しているあたりは、方法としては面白いが、データベースの検索という感じがしないでもない（もちろん、渡辺はデータベースを使っているわけではなく、索引を使っているのだが）。

しかし、日本における密教、そこでの不動明王の役割について、まったくの無知の状態から知識を得ただけでも収穫である。そもそも、如来、菩薩、明王、天部という区分も、あまりよく知らなかった。空海の果たした役割の大きさも、改めて感じられる。

しかし、「日本の仏教」の初めの方と読み比べてみると、渡辺の姿勢にずいぶん違いを感じる。たとえば、「日本の仏教」では

「現在われわれが比較研究の結果、日本仏教の特異性と認められるものは、広い視野に立って自由にえらびとったというよりも、客観的知識が不十分なために、ありあわせの知識で間にあわせたという場合の方が多いようである。それを仏教の進歩とか発展とか名づけるのは人の勝手かもしれないが、比較研究の立場にたつわれわれとしては、誤解や認識の不足に基づく変貌を遂げた日本仏教が仏教の精髓だなどとは、到底言うわけにいかないのである。」(p.15)

と厳しい。一方、本書では、最初に日本人が、成田山などお不動さまにいかに関心しているかという導入をおき、たとえば日本人の宗教上の寛容について、「この寛容は日本人の性格によるところも多いが、一つには仏教本来の姿勢からも来ている。・・・」(p.14)

と理解を示す。さらに

「本来の仏教はきわめておおまかである。「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」という古歌がある。(中略)私が親しくつきあっていたある有名なキリスト教の学者は、この古歌が大嫌いだと私に明言した。・・・」(p.16)

などという。両書の間、17年、その間に渡辺も丸くなったのであろうか。

猪瀬直樹「マガジン青春譜」(小学館)

この前読んだ「日本国の研究」とはまたずいぶん別方向の題材だ。その前の三島由紀夫と同じように文学者を取り上げる。時代は大正。川端と大宅が同じ茨木中学で、一方は孤児、一方は父の放蕩と兄の頼りなさで、一家を支えて苦労している。どちらも少年向きの投稿文学雑誌に投稿する。それが紆余曲折を経て、東京帝大生となる。

傍流として登場する、島清、賀川豊彦の個性が強烈である。菊池寛と文芸春秋も重要な役割である。

しかし、後半はずいぶん雑になる。直木三十五、横光利一などの登場のさせ方もいい加減である。タイトルの「マガジン青春譜」というのもいただけない。

しかし、前半はとても面白い。

北杜夫「茂吉晩年」（岩波書店）

あとがきに、

「辛うじて、「青年茂吉」「壮年茂吉」「茂吉彷徨」「茂吉晩年」を書き上げた。終わりの方はもう少しまともにと考えていたが、体調不全のため意のままにならなかった。しかし、それが不肖の息子私にはふさわしいのかもしれぬ。」

とあるのは、正直なところだろう。

また、同じあとがきにも触れられているが、他の人の著書からの引用が多い。これも

「しかしそれを再構成するエネルギーが私になかったためにもよる。」
という。

実際、北杜夫もすでに73歳のはずである（大正14年生まれらしい）。それで、同じことの繰り返しが多い。しかし、それでもこの連作は面白い。それは斎藤茂吉の強烈な個性によるものだろう。

藤沢周「ブエノスアイレスの午前零時」（芥川賞）

芥川賞らしい巧い作品。さほど感心しなかった。

花村萬月「ゲルマニウムの夜」（芥川賞）

よきにつけあしきにつけ、こちらの作品の方が強烈である。饒舌な文章、次々と展開するストーリー、凄惨で過剰な暴力場面、陵辱場面。主人公がこれらの暴力や陵辱をなぜ行うのかはまったく分らない。それでいて、妙に青年の成長物語という趣がある。カトリシズムと冒涇がテーマなのか。それらしくもあるが、告解の内容を神父が人に言えないことを利用する手口は、常套的でもある。

村井純「インターネット II」（岩波新書）

同じ岩波新書で村井が「インターネット」を出したのが1995年というから、早くもIIを出す意味があるというのは、インターネットの技術と社会的受容の進展の速さを物語るものであろう。

前作「インターネット」で見直したが、村井の書く内容は思ったほど皮相ではない。インターネットのもつ草の根的、非集権的性格から来る特性を、それが様々な問題を生み出す可能性を認めつつも擁護する。そのアプローチは、他の社会的な仕組みと比べてインターネットに特有なものかと問いかけることであり、また技術によってかなりの部分が解決できるという楽観論である。こういう論を展開せざるをえないような批判が一方である状況を示してもいるが、村井が単に技術至上主義でエネルギーに動いているわけではないことが分るのは、何となくホッとさせられる。

Truman Capote, "In Cold Blood"

今や古典のこの本のペーパーバック版をしばらく前に買っていたが、今度の中国旅行にもって行って、帰国した翌朝、目が早く覚めたため、残った50ページほどを読み終えた。久しぶりに本を耽読したという感じがする。

1959年に起こった事件で、出版されたのが1965年だから、事件からしばらくしてから材料を集めて書いたのかと思ったが、犯人が処刑されたのが1965年4月なので、それを待って直後に出したらしい。見事な構成と文章である。初めから犯人側の動きを並行させて語る

という方法を取りながら、逮捕後の自白の肝心な部分は、その時まで取ってあるというのもうまい。事実に丹念に基づきながら、会話などの自然さはやはり小説家の腕によるものだろう。しかし、これを読むと、Elmore Leonard も John Grisham も亜流に見える。現代的なクライム・ノベルはここに始まったと言えるのだろうか。実際、Dick と Perry の描写は Leonard の Killshot を連想させるし、裁判以降は Grisham の The Chamber を思わせる。どちらも明らかに影響を受けているはずだ。

多くの場面にほろりとさせられるが、最後の方の Mrs. Hickock の独白 (p.322-323) や、Mrs. Meier の語り (p.345-346) それぞれが、まるで一篇の小説である。

魯迅「呐喊序」「孔乙己」「故郷」「祝福」「酒楼にて」「藤野先生」

紹興行きから帰ってきて、魯迅を少し読んでみた。昔懐かしい中央公論「世界の文学 47」を引っ張り出して読んだが、その翻訳と解説が高橋和己であったことを忘れていた。それで高橋の結構長い解説も読んでみた。

魯迅には中国改革の意思、革命に賛同する気持はあったろうが、それらを鼓舞するような書き方を決してしない。インテリらしく2歩も3歩も身を引いている。

これでよく現代の中国で、厚く尊敬され人気があるものだと思いに思う（共産主義という意味でも、現実的な経済発展の機運という意味でも）。小説でなく、評論を読んで見ないと分らないかもしれない。しかし、やはり「故郷」や「祝福」には小説としてのよさがある。

椎名誠「活字博物誌」（岩波新書）

前の「活字のサーカス」も読んだはずだが、あまり記憶に残っていない。しかし、気楽に面白く読めて、結構色々考えさせられる。あとがきにあるように

「読書の楽しみとして手にするのは圧倒的に自然科学のものが多い」

ところに特徴がある。それと漂流もの、極限状態からの生還ものを色々探し出して読んでいるのもユニークだ。

丸山真男、加藤周一「翻訳と日本の近代」（岩波新書）

とにかく、この希代の知識人二人が対話をするのだから、面白くないはずがない。明治における翻訳の話である。丸山の江戸時代の儒者（主に荻生徂徠）と福沢諭吉についての造詣が披露される。

吉田直哉「脳内イメージと映像」（文春文庫）

新しく出始めた文春文庫の最初に出版された1冊である。書き下ろしらしい。

吉田の本はいくつか読んでいるが、これも書評でわりと評判がよかったので、八重洲B.C.で買った。

人は頭の中に体験や記憶を越えて広がる内なる宇宙を持っている。これを脳内イメージと呼ぶというのが、著者の立場、また題名の由来である。吉田自身の臨死体験が、このイメージの存在への確信を強めている。僕は、頭に浮かぶイメージのほかに、もっと網膜に近い、しかし実景とは異なる映像が見えることを実感している。しかし、この本の主眼は、やはりTV作家、映像を作成し配信する立場からの思索である。たとえば「日本の素顔」の製作体験、「21世紀は警告する」（これは吉田秀和の批判とそれへの反論という本書の中でも特に面白いテーマを呼び起こすもとになっている）、「ジョバンニの銀河」「明治という国家」など。

同時に吉田はブッキッシュでもある。取り上げられている多くの本は、映画、映像関係で読んだことのないものばかりだが、いずれも面白そうだし知的な内容である。大岡信の菅原道真に関する本など、読んでみたい。

佐野真一「渋沢家三代」（文春文庫）

同じ著者の「旅する巨人―宮本常一と渋沢敬三」を面白く読んだので、これも買ったが楽しめた。そもそも渋沢栄一に若干の興味はあって、山本七平「近代の創造」を買ってあるのだがほとんど読んでいない。

で、この本の中での引用で思い出した、関連する過去の読書を挙げてみる。

ドナルド・キーン「続百代の過客」の中の「航西日記」(p.94-108)。

猪瀬直樹「土地の神話」。この本は渋谷秀雄と田園調布の話である。

ところが、第一国立銀行設立時の三井との確執を何かで読んだ記憶が鮮明にあるのに見つからない。藤森照信ではないかと思っていたが、「日本の近代建築」にはない。

長田弘「記憶のつくり方」(晶文社)

長田は詩人で、これも散文詩のようなもの。新聞などでずいぶん評判が高かったが、僕はそれほど感心しなかった。しかし、自分の脳内にある記憶は、すでに大きくデフォルメされているとはいえ、あるいはそれゆえに、大変豊かな世界、場所であることは確かだろう。とくに50年も生きてくれば。

山内昌之「イスラームと国際政治―歴史から読む」(岩波新書)

国際政治の話で、イスラムが関わるととたんに話がよく分からない。地理的、文化的、そしてもちろん宗教的にもっとも遠く、知識に欠ける。それを山内さんが解説してくれるのだからありがたい。

現評議員の山内さんは、タカ派のイメージである。とくに駒場寮問題ではタカである。もっとも直接関わる場所は少ない。

山内さんのこの本は、国際政治におけるパワーポリティックスにうとく、平和ボケしている日本への警鐘という受け取り方も一部ではされているようである。山内さん自身がそういう立場であるのは確かだが、本書を読んだ限りは、意外に中庸な意見のように思えた。もちろんイスラムのテロルを発生させる素地に対しては批判的である一方、アメリカ、ロシアなどの政略についても厳しい批判の目を持っている。

この本で、不足していた知識が充分埋まったとはいえない。雑誌に書いた短い文章を集めたもので、系統的ではない。それにしては、こちらの知識不足のせいかわそれほど読みやすすくない。しかし、読んだ意味はあると思わせる本である。

1997年

稲垣真美「ワインの常識」（岩波新書）

これは問題の書である。刊行されてすぐに、週刊朝日に間違いだらけだと叩かれた。200ページの本に二百数十箇所誤りがあるという。著者は狭い意味でのワインの専門家ではなく、ワインにはうるさい人が多いから、叩かれやすいのだろう。それにしても、週刊朝日によれば、著者が「あわてて書いたので」などと言っているというのは許せない。岩波の編集も甘い。実際、具体的な誤りの個所は自分には分らず、週刊誌に載っている例も、それほど重大なこととは思えないが、単純な表記の揺れ（人名、地名の表記の不統一）が目につき、杜撰という印象を受ける。週刊朝日によると、第4刷で数十箇所（60ぐらいだったか？）訂正したという。僕が買ったのは第2刷であり、欠陥商品を買わされたことになる。岩波は取替えに応じるだろうか。

面白いのは、日本におけるワインの受容というより、偏頗な受容のされ方をした歴史を書いたところである。ボルドー物の高級品の偏重、ドイツワインの重視、日本での生産、赤玉ポートワイン、など。それで、1, 2章はまあまあ、3章の各国別の紹介は平凡、4章の日本酒との関係は、この著者独自の視点を示す。5章はほとんど繰り返して、どこで何を食べて何を飲んだというようないい気な話が

書いてある（前の方の章でも同じような調子のところがいくつかある）。

宮本常一「忘れられた日本人」（岩波文庫）

宮本の本を初めて読んだ。とくにこの本は著名だが、それだけのことはある。

最初の「対馬にて」からびっくりする。これが昭和25年頃の調査である。そんなに昔ではない。「名倉談義」「土佐源氏」「梶田富五郎翁」など、まるで創作のような面白さである。こういう日本人の暮らし方が、ついこの間まであった。

それと現代の都会の日本人の生活はつながりがあるのかなのか。いや、現代では、ここで取り上げられている山村、漁村の方が大きく変わってしまっているかもしれない。そして、今ある種の安楽な生活に慣れた身には、ここで描かれているような暮らしに戻ることは考えられないとしても、この間に失ったもの（たとえば対馬沖で、目の下三尺の鯛がいくらでも釣れたというようなこと）は大きいに違いない。

柳田国男の本（たとえば遠野物語）を何度か読もうとしたが、今までちゃんと読んだことがない。何か読みにくい。それに比べてこの本は、一気に読ませるものがある。

親父の蔵書に宮本の本があまりないような気がするが、なぜだろうか。記憶にあるのは「日本残酷物語」だが、単著のものがあるだろうか。しかし、東京生まれで東大で農業経済をやり農林省の役人であった親父と、宮本や、この本に書かれている高木誠一や田中梅治といった百姓をやりながら学問をした人とは、大きな隔たりがあるだろう。こう書くと親父の批判めくが、親父が店で売る米の値段も知らなかったことも事実である。

高階秀爾「日本美術を見る眼 東と西の出会い」（岩波同時代ライブラリー）

高階の本をまた続けて読んだことになる。これは方々の雑誌に書いたのを集めたもので、したがって重複も結構あるが、やはり面白く読ませる。最初にある「日本美の個性」が比較的まとまった評論で、この見方で他のエッセイも一貫性を保つ。視形式の違い、枝垂れモチーフなど、着眼点が面白い。最後に置かれた書き下ろしの「記憶の遺産」は、20年で建て替える伊勢神宮を例にとり、日本の美に対する考え方をまとめてみせる。

「その第一は、「型の継承」である。・・・」(p.217)

とあって、まるでオブジェクト指向の教科書である。

後は、「儀礼の反復」（関連して、循環的時間、季節との結びつき）、「土地との結びつき」（歌枕）などとなっている。さらに連歌に及び

「だが日本においては、先人との対話ばかりでなく、同時代の仲間

たちが集まって、それぞれ自己の個性を保ちながら共同して芸術活動を行うという連歌、連句の「座」のような芸術活動のかたちが、伝統的に成立していたのである。」(p.231)

というあたりも、ソフトウェア制作活動との関連づけを考えたいくなる文句である。

山内昌之「近代イスラームの挑戦（世界の歴史 20）」（中央公論社）

力作である。索引まで含めると446ページ。

19世紀を中心にその前後を含めたトルコ、エジプト、イラン、その他のムスリム国がヨーロッパ列強に支配されていく歴史を描いている。工夫の一つは、日本の資料（たとえば和蘭風説書、福沢諭吉、徳富蘆花、新井白石、大川周明、大庭柯公、など）を駆使しているところである。単に資料を引くだけでなく、トルコの没落と明治維新との対比という形で、日本に関わる話を展開している。

気になるのは、引用されている外国語の文章の翻訳をすべて「xxx訳を一部変更」としている点。もとの訳者にずいぶん失礼だと思うが、この辺にも自己主張の強さが感じられる。絵や写真にもわざわざ山内昌之撮影とか山内昌之所有とか書いてあるのが目立つ。もちろん著作権、出典をはっきりさせようという意図ではあろうが。

しかし、山内の本を初めて読んだが、著者紹介によるとずいぶんたくさん本を出しているだけでなく、サントリー学芸賞とか、毎日出

版文化賞とか、吉野作造賞とか、賞をいっぱい取っているのである。この間の学部長選挙で候補になった5人の一人だったが、印象的だったのは5人のうち3人が東大出身でなかったことである。この山内が北大、山中が東外大、学部長になった大森が中大と文系がすべて東大でなかった。もっとも山中と大森は大学院が東大である。これはいいことかもしれない。

吉永良正「『複雑系』とは何か」（講談社現代新書）

複雑系が日本では今ブームで（Wardrop の本の翻訳が昨年出たせいでもある）、その中でもこの本がわりと評判がよい。新聞で例えば意外な人として山崎正和なんかが褒めている。哲学の素養があるところがいいのだそうだ。3章、4章あたりは Wardrop の本の換骨奪胎という気もしたが、全体としては確かにそんなにいい加減な本ではない。一つには日本の金子邦彦（これは駒場の人で、栄光の後輩）等の研究も紹介している点がよく、それが Wardrop の本とは違う。もう一つは、科学史の視点をわりと明確に出している。それで、6章、7章あたりがよい。

佐野真一「旅する巨人 宮本常一と渋沢敬三」（文芸春秋）

この間、「忘れられた日本人」を読んで圧倒されたが、よいタイミングでこの本が出た。買って少し読むまで、これが「遠い山びこ」と同じ著者であることに気づかなかった。しかし、ノンフィクションとしては、この本のほうがずっとよい。

これも最初の方は「忘れられた日本人」に書いてあることがほとんどそのまま出てくるので、いい加減な本のような気がしたが、しかしそうではない。よく調べている。とくに渋谷敬一との関係を中心においたところがよい。

しかし、宮本という人はつくづくすごい人だったのだと感心させられる。そして渋谷も。

山川健一「マッキントッシュ・ハイ」（幻冬舎）

朝日新聞で五木寛之が最近面白かった本として挙げた3冊の中に、どういうわけかこれがあった。五木はマックなど使うのだろうか。とにかくそんなことでもなければ、およそ買って読んでみようという気になりそうもない本である。

1年前にマックを買ってからとりこになって、1年をマックを使うことで費やし、その間7台のマックを買ったという。この山川という人は「群像」の新人賞を取っている作家で、ロックのヴォーカリストでもあるという。確かにロックの話、とくにローリングストーンズの話がふんだんに出てくる。文体はリズムカルな一種の軽薄体。ロックのリズムを意識しているのだろう。

僕は筑波に行って翌年、当時では高級なマックを買ったが、ほとんどテトリスとOHP用に PowerPoint を使っただけだった。駒場に来て、中谷さんがそれをしばらく使っていたが、昨年

PowerMac9500(?)を買って、古いのはお払い箱になった。PowerMacはもっぱら中谷さんが使っている。

佐々木力「科学論入門」（岩波新書）

これも駒場の人の本である。力作であり、刺激を受けた。

この人の考え方は健全であり、多くの点で共感が持てる。フォン・ノイマンを徹底的に悪役に仕立てているところには違和感を感じるが、T. Kuhn がこの人の師なのだそうだ。もと同僚だったはずの村上陽一郎は本書に一切名前が出ないが、学問上の争いでもあるのだろうか。

この本の主題は、西欧近代科学が特異なものであること、しかもそれが17世紀の科学革命の後、19世紀の科学とテクノロジーの結合による第2革命ともいうべき変身を遂げ、その後の形態を、日本は明治期に科学として受け入れたこと、といえようか。後者を佐々木は「テクノロジー科学」と呼んでいる。問題は科学やテクノロジーと社会との関係であり、最終章ではとくに倫理的観点から、脳死と原子力発電が議論の対象となる。脳死についての彼の考え方にはほぼ同感だが、原子力は少し違う。僕は原子力はもっと冷静に議論すべきだと思う。

しかし、つい2-3日前にも、動燃爆発事故があり、95年12月の冷却ナトリウム漏れの事故の際と同じように、処理と広報が拙劣で頼り

なさを露呈しているのを見ると、少しは考え方を変えなければいけないかとも思う。しかし、先進国の中で、脳死と原子力について日本は特殊な道を歩んでいるのは面白い。

東大について

「東京大学は科学的テクノロジーを制度化させた世界で最初の大学であった」(p.104)
と書いている。

また、p.112の「技術の社会構成主義」あたりの議論は、この間の佐藤俊樹の本との関係で面白い。

渡辺武信「住まい方の実践」（中公新書）

前2著と比べると、雑誌に連載されたコラムの寄せ集めでまとまりに欠ける。面白いのは、自分の家の設計と改築の歴史を語ったところである。

「そういう観点からすると、たとえ建築家でなくても、住まいは一度完成したら終わりというのではなく、暮しながらつくっていくほうがいいと思う。

(中略) 実際に変えることよりも「変えよう」とする意思が感性を育てるのではないか?」(p.233)

というあたりは共感できる。具体的なものでは、新聞収納テーブル(p.177)などに感心した。

猪瀬直樹「日本国の研究」（文芸春秋社）

文芸春秋に3回連載で載って評判になったものである。猪瀬がこれまで時事問題を扱ってこなかったわけではないが、主な仕事は近い過去の埋もれた話を資料から発掘するものであり、僕が読んできたのはすべてそのジャンルのものだった。

「ミカドの肖像」「天皇の影法師」「土地の神話」「唱歌誕生（ふるさとを創った男）」「欲望のメディア」「黒船の世紀」「ペルソナ」。

ずいぶん忠実に読んできたものである。

これはそれらと異なり、今まさにもっとも問題となっている霞ヶ関官僚批判の書である。それも、特殊法人、公益法人に狙いをつけたところが鋭かった。最近の新聞で、いくつか大規模林道の建設が中止になったという記事を目にするが、この猪瀬の書も多少の影響を与えたのではないだろうか。一方で、長崎諫早湾の堰が閉じられ、ムツゴロウなどが死滅するというニュースも最近のものである。

立花隆は猪瀬をあまり評価していないようであるが、この本の「あとがき」には、

「タイトルでおわかりのように本書は立花隆の「田中角栄研究」を念頭において企画された。」

とあるのが面白い。

マックス・ヴェーバー、脇圭平 訳「職業としての政治」（岩波文庫）

「職業としての学問」と同じように、1919年1月に行われた講演の原稿とのことだが、岩波文庫に入ったのは、どういう訳か、「学問」が1936年なのに、「政治」は1980年である。岩波文庫から出る前に、同じ訳者による訳が平凡社から出ているとのことだが、それも1968年ですいぶん遅い。

かなり読みにくい本である。初めにトロツキーの

「すべての国家は、暴力の上に基礎づけられている」
を引き、これは実際に正しいとする。

「国家とは・・・正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である。」

「政治とは、・・・要するに権力の分け前にあずかり、権力の配分関係に影響を及ぼそうとする努力である。」

などというので、ヴェーバーもかなりマルクスに近いのかと思ってしまいが、やはりそうではない。

以降、イギリスやフランス（さかのぼってギリシア、ローマ、中国）の歴史的な政治を踏まえつつも、主としてアメリカとドイツを比較して論じられるのは、「学問」と似ている。しかし、最後の「倫理」についての議論が、1919年という時代を踏まえて、重い問題提起となっている。1920年に死んだヴェーバーだが、ヒットラー

の出現を予想しているようにも読める。訳者の解説には、そういう言及はなかったが。

柳美里「家族シネマ」

辻仁成「海峡の光」（芥川賞）

どちらにもあまり感心しなかった。とくに辻のものは長すぎて、退屈した。柳は劇団を作りシナリオを書いてきた人。辻はロックバンドのリードヴォーカルということで、芥川賞作家も多様になった。とはいえ、過去にも池田万寿夫とか唐十郎とかがいるか。

中上健次「千年の愉楽」（河出文庫）

ずいぶん時間がかかってしまった。電車の中でちびちび読むには、癖のある文体を意識的に使って独特の世界を創り上げているこの小説に入り込むのに時間がかかりすぎる。読み出したのは「職業としての政治」と同時だったのが、読み終えるのに1ヶ月も余計にかかった。

神話を意識して創られた物語である。6つの物語に出てくる中本一統の若者は、皆突然死んでしまう。それがオリュウノオバという巫女のような老婆の眼を通して描かれ、現実のことかオリュウノオバの頭の中で作られた話が不分明である。

中上は（中本という名前は中上から取ったのか）、46歳で死んでしまった。この物語の主人公達ほど若死にではないが、あつけない死に方であった。この物語でも死は近い。彼が死ぬはるか以前に書かれたものではあるが。

中上の世界はなぜか、宮本常一を連想させる。日本の土俗的なもの、始原的なものという点で通じるものがある。それとインテリを参らせるという点で。この文庫の解説の代わりとして、吉本隆明と江藤淳が別のところに書いた文章が採録されているが、吉本はともかく、江藤と中上というのは妙な取り合わせと感じた。吉本も江藤も、とにかく参っている。そして、まるで中学生の読書感想文のようなものを書いている。

市川伸一「考えることの科学 推論の認知心理学への招待」 （中公新書）

この市川さんというのは教育学部の助教授で、ECCの運営委員会などで同席することがあるが、話をしたことはない。

中公新書で下條さんの本と分野も近く、講義がもとになっているらしいことも似ているが、量的には下條さんの「サブリミナル・マインド」の半分ぐらいである。しかし、年齢からも経歴からも下條さんに近く、実際、変形三囚人問題について

「この変形版は実は東京大学の下條信輔氏と私が考案したもの

で、・・・」(p.106)
という記述がある。

四枚カード問題，ヘンペルのパラドックス，三囚人問題，などこの分野ではよく知られた問題だろうが，僕には新鮮だった．とくに三囚人問題は面白い．帰納の話も，標本の大きさの無視も，回帰効果も，事前確率の無視（タクシー，感染者）も，分かってはいても，うっかりしそうである．

藤沢周平「蟬しぐれ」（文春文庫）

Boston へ行くのに成田で買ったが，飛行機の中と眠れぬ2日目の夜で，あっという間に読み終えてしまった．今年藤沢周平が死んで，追悼記事や雑誌の特集がたくさん出た．司馬遼太郎に匹敵するほどである．司馬はかなり読んでいるが，藤沢は読んだことがない．しかし，追悼文で丸谷や井上ひさしやその他多くの人が激賞しているのをみて，読んでみようかという気になっていたところだった．

中でもこの作品は有名である．確かにそれだけのことはある．全体の構成，細部の描写，いずれも実にうまい．気持のよい青春小説である．主人公達は伸び伸びしているが，しかし制度的，（武士の道徳としての）儒教的制約もきちんと書かれている．そして，忘れかけられているが，しかしわれわれの中に残っている日本人の心情（潔さ，我慢など）を思い起こさせる．

季節の描写，それによる時間の推移を実感させる技法も巧みである．剣術の試合，秘剣のあたりは，剣豪小説の感じがして若干の違和感もある．時代小説としては常道なのか，あるいはサービスのし過ぎか．お家騒動で主人公が逆転するという構成自身が，その意味では常套的なものかもしれないが，しかしそのストーリー性も充分楽しめる．

Robert Parker, "Paper Doll"

ボストンへ行ったので，しばらくぶりにスペンサーものを読んでみようと思い，HarvardのCOOPで買った．帰りの飛行機の中でかなり読み，あとは電車で読んだ．話にはずいぶん無理がある．しかし，PCゲームなどよりはよっぽど質のよい時間つぶしである．いまだに読むのに結構時間がかかるのは，時々出てくるParkerの文学趣味と，口語体の砕けた言い方によるだろう．

この間ボストンでツアーバスに乗ってみたので，出てくるボストンの地名にある程度見当がつくので面白い．

Thomas Gilovich, "How we know what isn't so," The Free Press

これは市川さんの「考えることの科学」の種本の一つである．市川さんの本をボストンに持っていったので，Harvard COOPの本屋でこれを見つけて買った．

評判となったらしい本だけあって面白い。Martin Gardner が推薦の言葉を寄せており、本文にS. J. Gould の The Mismeasure of Man が引用されていて、ものの考え方がこれらの人に近いのが好ましい。ただ書き方がしつこい。同じ事例が何度も出てくる。米国の科学を判りやすく書くという伝統からこのような良書が生れるのだろうが、日本人にはしつこい書き方に思える。Gardner が推薦の文の中で言っているように、EPS の章などはとくに面白い。

野村進「コリアン世界の旅」（講談社）

大宅壮一賞を取り、辺見庸などが激賞しているので買ってみた。なるほど、それだけのことはある。感銘を受けたというより、感動した。

しかし、のっけから予想とずいぶん違った。やはり著者があとがきで言うマスコミの次のような姿勢に、こちらの方も染まっていたというしかない。つまり

「・・・日本のマスメディアは韓国・朝鮮系の住民に対して大きく分けると二通りの見方しかしてこなかったように思われた。ひとつは、何だか重苦しくて厄介そうな話だから取り上げないほうが無難だろうという、事実上のタブー視である。もうひとつは、「強制連行」や「同籍条項」や「指紋押捺」といった用語がことさら強調される、「在日問題」としての問題視である。」

いや、その通りである。それに対し本書は、まず美空ひばり、都はるみや力道山から、にしきのあきらの取材という、意外なところから始められる。この人の精神ものびやかだが、話の書き方もうまくて、もちろんもとの話がいいのだが、それを発掘する才能も不思議なくらいで、とくに、パチンコの話や「韓国人ボクサー父と子の拳」などは小説のようである。済州島の話もまったく無知であった。米国やサイゴンで取材するアプローチも人が気づかないところである。

佐伯胖「新・コンピュータと教育」（岩波新書）

前の本をわりと面白く読んだので、これにも期待したががっかりだった。IとIIはコンピュータを道具として「使いやすい道具とは」「分りやすい道具とは」といったユーザインターフェースの話が展開されるが、常識論を出るものではない。ユーザインターフェースの話は難しく、とくに心理学、認知科学や教育学、人間工学(ergonomics)あたりを駆使した立派な議論はありそうだが、どうも門外漢として近寄りがたいという認識をもっていた。これを読むと結局は大したことではないのだなと、半ばがっかりし半ば安心する。最後のIIIのインターネットの話は、少し面白い。とくに2章に紹介されている小学校同士のやりとりや、3章のCSILEの話には感心させるものがある。

礪波護、武田幸男「世界の歴史 6 隋唐帝国と古代朝鮮」（中央公論社）

隋唐帝国と表題にあるが、五胡十六国、南北朝の時代に多くのページが割かれ、隋唐になったら時間とページ数が少なくなったせい、やけにあっさりしてしまう。6章の「隋王朝」までに160ページが費やされ、隋が23ページ、唐が38ページ、8章の「大唐の文化と日本」を入れても合わせて90ページしかない。

武田が担当している「朝鮮の古代から新羅・渤海へ」の部分は、あまり知識のないところである。本書はそれに170ページが当てられている。古代の朝鮮についての考古学や神話の解釈については、日韓の学者の間に、ナショナリズム色の混ざった見解の相違があるらしい。

松岡譲「敦煌物語」（講談社学術文庫）

初版が昭和18年に出版された本である。この講談社学術文庫版は、戦後の改版によっている。

スタインとペリオと橘光超による敦煌文書取得の経緯を小説仕立てで語っている。解説の上原和という人によれば、この本では英仏の探検隊がいかに敦煌遺物を巻き上げたかという文化侵略の面が強調され、それにくらべ「立花」の話は略奪とされていないが、これは仏教の帰依心に基づいて作者が仮託した創作だからだという。しかし、僕は違う印象を受けた。スタインとペリオは確かに批判的に書かれてはいるが、そう一面的でもない。スタインの学問への貢献という点がきちんと述べられているし、ペリオは漢籍にも通じた立派

な学者として描かれていて、壁画の一部を削り取った話はあえて書かれていない。橘もそう完全に理想化されているわけでもない。戦争中という背景を考えると、むしろ意外なくらいスタイン、ペリオと「立花」を区別していないというのが僕の印象である（戦後の「改訂」のせいがどのくらいあるのか分らないが）。戦争中の話として驚くのは、シャトー・イ・ケムの白ワインを開けるくだりである (p.153)。

しかし、面白く書けた本である。敦煌巡りの旅中で読むのにふさわしかったのはもちろんである。

東山健吾「敦煌三大石窟」（講談社選書メチエ）

百科事典的に莫高窟を中心とした石窟の一つ一つを解説したもので、歴史や時代時代による美術の傾向ももちろん丁寧に解説されるが、それぞれの説明に写りの悪い白黒写真がある程度載っている。読んでいてイメージが湧かず、無味乾燥に感じられる部分もある。しかし、この執拗さには頭が下がる。

東山、松本、野町「敦煌ものがたり」（とんぼの本）

こちらはカラー写真が多く入っている。なかなかきれいだ。スタインやペリオの撮った写真も少し載っている。p.72のペリオの写真と現在のカラー写真を比べると、ペリオの写真の方が陰影がはっきり出て立体感がある。

山之内靖「マックス・ヴェーバー入門」（岩波新書）

「職業としての学問」「職業としての政治」を読んだところでこの本が出た。

しかし、手軽な入門書というものではない。非常に密度の高い本だ。ヴェーバーがヨーロッパ近代主義、合理主義の完成者であるというこれまでの一般的な理解を批判し、ヴェーバーは近代社会の根源的批判を追及したのだという主張である。それが、実に見事な文章で語られる。議論の展開もスリリングである。

こちらはヴェーバーはもとより、引用される様々な文献についてほとんど知識がないが、社会科学のアプローチというのも大変なものだと思う。これだけの文献を読みこなして立論することが一体どれほど生産的なことなのかという気も一方ではするが、現代社会への批判的な理解にもつながる作業であるのだろう。

変な感想。

- 1) ヴェーバーはワグナーを聴いたのだろうか。もちろん聴いただろうが、好悪はどうなのだろう。
- 2) なぜかヴェーバーとマックスウェルが昔から連想された。その理由を考えてみた。多分、実につまらないことであり、マックス・ヴェーバーとマックスウェルの語呂合わせ。それで百科事典を引いて見て思い出したのが、マックスウェルよりちょっと年上の物理学者で、同じ電磁気分野に Ernst Weber というのがいること（ウェー

バーの法則の人）。それにたとえば、ヴァレリーがマックスウェルに一時凝ったというように、マックスウェルには何となく人文・社会科学に近いイメージがある。百科事典で初めて知ったが、マックスウェル自身、戯文や詩の類をずいぶん書いていたらしい。

加地伸行「現代中国学」（中公新書）

加地という人は古典中国学の学者だが、その眼で現代の中国を論じている。現代中国に対して批判的であるが、同様に現代日本も批判する。立場は保守主義，反リベラリズム，反社会主義である。「諸君」や「正論」に載った文章が多く再録されている。昔の「朝日ジャーナル」や「世界」に載った菊池昌典や井上清の文章が批判される。

底意地の悪い頑固爺という感じだが、一気に読ませる。古典文学者にしては文章に品がないが、小気味はいい。その儒教についての理論，名と実の価値観が基になっていて、それはかなり説得力がある。

文革当時から文章の愚かしさを冷静に批判し、毛（農民派）と劉少奇（都市派）との権力争いとして捉えていたことが、手柄である。

小林康夫，船曳建夫 編「知の技法」（東京大学出版会）

駒場に來た年にこの本がベストセラーになったが、買って読む気はしなかった。教官には配られると聞いたが、文系のみということだ

った。その後、「知の論理」「知のモラル」と出て3部作としてよく売れている。

小林，船曳とも知り合いになった。とくに小林は現学生委員長で，つきあいが多い。その小林から今度「新・知の技法」を出すので，書いてほしいといわれた。「コンピュータの言語」というタイトルを与えられたが，これなら何でも書けそうな気がする。

それで東大出版の羽鳥さんという人から連絡があり（「小林康夫先生の奴隷です」と言っていた），「知の三部作」を読んでいないといったら，わざわざ「知の技法」をもって説明に来た。60万部だか70万部だか売れたという。「論理」は13万部，「モラル」は7万部で，今度の「新・知の技法」はまず5万部刷るという。

早速読んでみたが，評判になっただけあってなかなか面白い。著者に知っている人が多くなっているので，余計面白い。とくに冒頭の3編，中村雄祐，義江，丹野の分には感心した。山中さんののも案外面白かった。最後の船曳さんの文章もよい。

湯川秀樹「物理講義」（講談社学術文庫）

これは湯川が昭和49（1974）年，日大理工学部で行った公開講義の速記録である。相手が主に理工系の大学院生というから，素人向けではない。しかし，硬くはなく，座談的な面白さがある。3日間の講義で，古典力学，マックスウェルから，特殊相対論，量子力学，

一般相対論にまで話が及ぶ。こちらは駒場時代でほぼ物理の知識は止まっている、というより退歩しているから、話は追えても深みは分らない。分らないながらも面白い。

司馬遼太郎「街道をゆく 25 中国・閩（びん）のみち」 （朝日文芸文庫）

閩とは福建省である。10月の末にISFSTという会議で福建省廈門に行く。ちょうどよい読書である。

マルコポーロの言うザイトンというのが、福建省の泉州のことだそう。そして泉州開元寺に猿のレリーフがあって、中野美代子の説でインドのハヌマットと孫悟空を結びつけるのに、この像が重要な役割を果たしているのは、中野の本で読んだが、この司馬の紀行でもそのことが出てくる。

平清盛の宋貿易の相手は主に福建だったと書いてある。といっても平家が船を出したわけではなく、福建船が来たのを独占したということらしい。

テグスの話も新鮮である。宮本常一がこの話を発掘したという。

鄭成功も福建を根拠にして台湾に攻め入った。

明治の植林の話がある。しかし、前に読んだ小原二郎という人の「日本人と木の文化」では、日本の木の豊かさは江戸時代に作られ

たと書いてあったように思う。中国で林業思想は希薄だが、例外的に「管子」があるという。

焼畑の話，船の構造の話，司馬の蘊蓄は皆面白い。後，天目の話や「坊ちゃん」の道後温泉のところなどにも感心した。

魯迅は厦門大学にいたことがあるそうだ。

野崎昭弘「逆説論理学」（中公新書）

ちょっと古いがしゃれた本である。Elliot の妖精の絵というのを初めて知った。美季子と作って見るのも面白いだろう。やはり「VI逆説論理学」が面白い。野崎さんの専門分野らしい。野崎さんの印象としては、1978-9年頃、IBMの天城シンポジウムで一緒だったことがある。一緒だったといっても、とくに親しく口をきいたわけではないが、大須賀さん（彼もこの時初めて知った）に批判というか揶揄する言葉を飛ばしていたのが記憶に残る。確かにこの二人のセンスはずいぶん違う。大須賀さんにはこのようなセンスのよさはない。

直接話をしたことがあるのは1989年だったか、GSSMで塚本さん（彼女のICUの指導教官が野崎さん）が野崎さんと呼んできて、面白い話をしてもらったときである。向こうも僕のことを認識していた。

野崎昭弘「詭弁論理学」（中公新書）

この間の「逆説論理学」が面白かったので、これを探していたら駒場の生協にあった。最近中公新書はかなり古いものも復刊している。

これも楽しめた。よく色々な話を集めてある。しかし、文系のやり方でさらに徹底的に集めて、強弁、詭弁を整理したら、もっと面白かったかもしれない。

高橋哲雄「ミステリーの社会学」（中公新書）

題名に惹かれて買って、速読した。といっても新刊ではなく89年に出ているものだが、今まで存在に気がつかなかった。

新書としては結構ページ数もあるし、それなりに工夫して書いているが、感心するほどではない。宗教との関係、貸し本屋との関係を論じたあたりがユニークで読ませるところ。期待としては「このミステリが面白い」といった知識を得ることもあったが、それはほとんど満たされない。

立花隆「脳を究める一脳研究最前線」（朝日新聞社）

「猿学の現在」と同じく、その道の研究者を訪ねてインタビューするというスタイルの本である。相変わらず立花の勉強ぶりは立派で、よい質問をし話をたくみに引き出す。といってもインタビューをそのまま起こしたというより、立花によって咀嚼され文章化され

ているので読みやすい。図と写真を多く入れている。立花が被験者になっている写真が多くある。

最後は甘利さんである。やはり数理的な理論は伝えにくい。立花はよい質問をしている。甘利さんは逃げ腰に見える。このインタビューだけでは、甘利さんの仕事のすごさは伝わらない。

小林康夫，船曳建夫 編「知の論理」（東京大学出版）

羽鳥さんが「知の論理」「知のモラル」と届けてくれるといいながらなかなか来ないと思っていたら、これも作戦なのか10月末の締め切りのときに念を押しに来て、この2冊を置いていったそうだ。僕はその時、中国に行っていて福田さんが預かってくれていた。

羽鳥さんが「論理」はそれぞれの筆者が枚数を守らないので、厚くなって小林に怒られたと言っていた。300ページある。しかし、このくらいあってもいい。学生が厚い本を敬遠するようでは情けない。

比較的気に入ったのは、野矢、高橋、佐藤、山下、ドウ・ヴォス。それに続いて、丸山、松原、村田といったところか。どうもソーシャルなり、サイドなり、フーコーなりの紹介が主のもの（単なる紹介には終わっていないが）は、評価を下げざるをえない。文学ものは遊びのようで面白くない（藤井、小森）。対象は源氏と谷崎で面白いのだが。

石光のものは、取り上げられている吉田戦車の漫画の魅力におんぶしている。理系では金子のカオスの話があり、それなりに工夫されているが、すごいというほどではない。僕の文章も理系の人間からは同じような評価になりそうな気がするが。

野矢は面白いと思ったが、学友会の出している雑誌に載っている96年6月(?)の寮祭主催の討論会（学生が野矢さんと船曳さんと呼んだ）の記録では、基礎演習の試みに批判的で、このシリーズも小林・船曳の個人的な仕事と考え、それに文を寄せることには応じたという言い方をしているのが気になる。

全体に「構造主義」というものの影響を引きずっている文章が多い。しかし構造主義（あるいは記号論）というのは、よく分からない。僕の「コンピュータ言語」で、チョムスキーは再三触れたが、ソシュールには言及していない。70年代の構造化プログラミングとの関係は？ 多分ないだろう。

小林康夫，船曳建夫 編「知のモラル」（東京大学出版）

これで「知の3部作」をずいぶん誠実に読んだことになる。最後の船曳の文章を読むと、3部作という構想はかなり早い時期に生れたものであることが分る。

「作りつつあったその本（「知の技法」）にすでに手ごたえを感じて、小林康夫と私はこれは続けて出さないと何かが終わらないと考

えが一致し、いつものように最初の一撃に俊敏な小林が、それは『知の論理』，それから『知のモラル』と断言したのでした。」

(p.281)

小林らしいといえる。

とにかくこの3部作で、小林と船曳はこのような編著の面白さを充分に教えてくれた。というより彼ら自身が自分達の作業の中でその面白さを発見していったに違いない。実に多様な人たちが書いているのだが、本として通して読んで違和感がないし、互いに響きあうものが感じられる。

しかし、「モラル」とは難しいものを最後に置いたものである。その辺についてはやはり船曳が書いている。

「私が読者として何を書いてもらえるかな、と期待した人たちは一様に、うーん、とうなって考え込んだのでした。

しかし、すべての執筆者にもう一つ共通するものがありました。それは、この題名で何が書けるのか、時間をかけて考えてみる、という答えと、そこに見られる意気込みでした。」

さもありなんと思う。そしてそれだけ、各執筆者の真摯な気持が「技法」や「論理」より素直に現れている。

これが96年春というタイミングで出たので、駒場寮の連中は廃寮問題とからめて言行不一致と批判する材料にした。また、ここに文章

を載せている隅谷の三里塚調停団に相当するものを駒場寮に関しても作りたいと期待もしたらしい。

確かに隅谷の論文はこの中にあって異彩を放っている。他によかったのは、樋口、小熊、長谷川眞理子、竹内。また、ここでは小林、船曳両者も独立に1編を寄せていて、それぞれ（とくに船曳のもの）面白い。続いて、小寺、森、蓮見といったところも読ませる。吉川は、それこそ意気込みはすごく、洋服屋、ニュートン力学を例にとったアブダクション、人工物、と材料を用意したが、話が残念ながら繋がっていない。ただ知識自体に倫理性があるというメッセージは分る。

それに比べると松浦の話は「知的に」よく繋がっていて、いかにも「表象文化論」らしい巧みな文章だが、訴えるものがない。モラルといえば、宗教をまともにとりあげるもの、および大学の問題、とくに全共闘を論じるものがもっとあるかと思った。しかし、わずかに竹内のものぐらいである。竹内の菩提心の話は目を開かれる思いがした。ただ1968年の話はあまり展開されていない。別の文章を読みたい。

最後の船曳の「民主主義のからだ」論は面白い。「そして希望せよ」なるほど。

藤沢周平「玄鳥」（文春文庫）

5月にボストンに行ったとき、成田で「蟬しぐれ」を買って初めて藤沢周平を読んだ。今度も成田でこれを買って、時差ぼけで眼が覚めた夜中に読み終えた。

短編集である。やはり表題作「玄鳥」がよい。「浦島」も面白い。ストーリー性の強い後の3作より、この2つの方が好ましく感じられるのは、やはりこちらの嗜好が「純文学」系なのだろうか。

しかし、藤沢の魅力は、巻末の中野孝次が書いている通りである。中野孝次というのは、「清貧の思想」とかいう本を書いた人だろうか。

「（藤沢周平の描く女たち．．）彼女たちはみな控え目で、自制心に富み、欲望や感情をむげに出すのをはしらないこととし、献身的で、躑というもののあった時代の日本の女はかくあったかと、われわれの心をゆさぶるのだ。」

というあたりは、それらしく思われる。これにはちょっとついていけない感じがするが。

伊原弘，梅村坦，「世界の歴史 7 宋と中央ユーラシア」 （中央公論社）

厦門に持って行き、宋の部分はかなり前に読み終わっていたが、後半をしばらく読まずにいたので、全体を読み終えるのに時間がかかった。

伊原の宋の部分は、まず悪文であり、話の組立ても分りにくく、お粗末である。それと比べると梅村の中央ユーラシアの記述はよほどよい。しかし、知らない固有名詞（人、地名、国名）が頻出するので、そう早くは読めない。ただ、張掖（甘州）、武夷、酒泉（肅州）、敦煌（沙州）などが重要なポイントとして出てくるので、そこを旅した経験から親しみを感ずる。

松尾剛次「中世都市鎌倉を歩く」（中公新書）

これは案外掘り出し物だった。鎌倉という名前で買ったが、鎌倉時代さらに室町時代の鎌倉が分り、個々の寺が、政治的背景と鎌倉仏教との関係で頭に入る。

春になったら、美季子と鎌倉を歩いてみよう。

1996年

瀬名秀明「パラサイト・イヴ」（角川書店）

これは「第2回日本ホラー小説大賞」受賞作であるだけでなく、その選考委員がべた褒めした作品である。本の帯によれば各誌絶賛となっていて、「本の雑誌」「日経（小谷真理子）」「週刊現代」「週刊文春」「図書新聞」の書評の抜き書きが載っているが、どれも本当に「絶賛」している。

しかし、僕はそんなに感心しなかった。ミトコンドリアの反抗というアイディアはいいが、それが「女」としての意識を持ち、意思を持って人間のように行動するというのは、いくらなんでも無理がある。著者は薬学研究科の博士課程在学中ということで、その専門知識を活かした設定であり、用語説明が頻出する。それはこの作品のとりえだが、そのリアルな設定とおよそそぐわない。ホラー小説というジャンルがそういうものだとしたなら、ホラー小説というものを読む気にならない。Stephen King はまだ1冊も読んだことがない。Ira Levin は面白かった。

とくに彼女＝ミトコンドリアが正体を現してからの展開は、典型的なハリウッド映画だ。エキゾシストだとかエイリアンの世界だ。あるいは日本のセーラームーンだ。

前半で気になったのは、脳死になってから腎臓を提供するまでが、この間読んだ柳田邦男の「犠牲」そっくりなことだ。巻末に参考文献が付されていて、柳田の文春に載ったものが挙げられており、問題にするほどのことではないかもしれないが、看護婦、コーディネータの描き方まで似ているので、参考というよりも下敷きというのに近い。

よく構成された長編で、文章力も認めるが、これほど皆が絶賛するのはおかしいのではないか。高村薫といい原寮といい、評判の日本のエンターテインメントを読むといつも不満足な感じが残る。

大江健三郎「「救い主」が殴られるまで」（新潮社）

これは「燃えあがる緑の木」三部作の第一部である。大江がノーベル賞を取るずっと前に買ったが、何となく億劫で最初の数ページを読んではやめるということを二三回繰り返していた。そのうちにノーベル賞騒ぎとなって、余計読む気がしなくなった。それをこの正月休みに久しぶりに取り出して読んでみたものである。

三島は「豊饒の海」四部作を書き上げて自決した。大江はノーベル賞をもらい、これからは小説を書かないといっている。確かにこれは大江ワールドの集大成であるだろう。

昔は大江の新刊が出るとすぐ買って読んだ。段々その気持が薄れてきた。この小説にはK伯父という大江らしい作家が登場し、また大

江の過去の作品が参照され、登場人物も一部過去の作品に重なるが、昔読んだものをほとんど覚えておらず、それらの読書体験と素直につながらない。

たとえば「同時代ゲーム」だ。これは結構面白く読んだ記憶のある、1979年の作品だ。同じ故郷の小宇宙の話だが、「壊す人」という過去の伝説の人が主人公となっている。より近くは「懐かしい年への手紙」1987年。そうこれが直接つながりのある物語だ。今度のほうでは「さきのギー兄さん」になっている人の話である。しかしこの「懐かしい年への手紙」に、今度の語り手であるサッチャンが登場していたのかどうかさえ覚えていない。やっぱり小説にも索引がほしい。

「懐かしい年への手紙」は「万延元年のフットボール」につながり、それを直接参照している個所がいくつもある。この作品も、それらの過去の作品で起きた事件や登場人物を使うという手法を意識的に取っている。また、語り手が見聞きしたことのみを記述するという制約を不自然なくらいに守っているのも、意識的な手法の一つである。さらに、これがいかによく計算された小説であるかを示すのが、ページ数の割り当てである。

第一章「蘇りとしての呼び名」 50ページ

第二章「童子の蛍」 50ページ

第三章「最初の説教」 50ページ

第四章「転換」 44ページ

第五章「森の力は恢復しているか？」 44ページ

第六章「Kajiという記号」 40ページ

第七章「燃えあがる緑の木」 34ページ

この数列は明らかに偶然ではない。

しかし、おそらく計算されなかったのは「オウム教」事件だろう。まるでこの奇怪な事件の出現を予言するようだ。もちろんギー兄さんと麻原彰宏は比べようがないが。

男性から女性に転換したサッチャンを語り手にした意図はよく分らないが、最後にギー兄さんと性的交渉にいたることは、途中から想像がつく。しかしその場面はそれほど劇的ではない。

武田雅哉「蒼頡たちの宴」（筑摩書房）

この著者の存在を立花の本で知った。漢字の話である。しかし漢字がどう作られたかという歴史を扱うものではない。蒼頡による漢字創成神話から始まるが、その神話を含め、中国人たちが漢字を捨てたい、その呪縛から逃れたい、と様々な動きを重ねてきた歴史を書いている。そこにヨーロッパとの文化・文字交流が絡み、また普遍言語、言語ユートピアの歴史が重なる。著者は中野美代子と同じく北大の中国文学者でおそろしく博学である。しかし、本としては案外読みにくい。なぜかよく分らないが。

小浜逸郎「オウムと全共闘」（草思社）

この著者は1947年生まれで、まさに同世代、全共闘世代である。朝日の書評で褒めていたので、全共闘との比較という視点は面白いかと思い、買って読んでみた。期待を充分満たしてくれたとは言い難い。著者の主張は分る。常識的な議論だが、常識論を説得力をもって展開するのはかえって難しい。それに真剣に取り組んでいることは評価できる。

物足りなく思う一つの理由は、全共闘にしてもオウムにしても、それらについての他の「知識人」の言論に対する批評（肯定と否定と）としてもっぱら議論を展開している点である。結局「論壇」向けなのである。このことは著者は充分意識的で、「言葉による芸」というような言い方をよくする。全共闘とオウムの比較の仕方、関係の議論も充分でないように思う。しかし、彼の主張していること、批判していることのほとんどはもっともであるとも思うし、かなり共感を覚えて読んだ部分も多い。

バートランド・ラッセル、平野智治 訳、「数理哲学序説」（岩波文庫）

ずいぶん時間をかけて読んだが、感心した。Principia Mathematicaを易しく一般向けに書いたというものだろうが、内容は濃い。たとえば、数論が論理学に帰着するということあたりは、スリリング

ですらある。この本が出たのは1920年だから、その後の進展があるだろうが、その辺は何を読めば分るだろうか。

戦前の訳で、訳者自身も認めるように訳文は生硬である。用語も今となっては使われないものが多い。たまに誤訳ではないかと思われるところもある。しかし、本の性格から、よく読めば多くは分る。

中山信弘「マルチメディアと著作権」（岩波新書）

中山の「ソフトウェアの法的保護」というのはよい本だった。この本も手堅いが、マルチメディアというまだ正体もはっきりしないもののだけに、元来「保守的」だという法学の立場からの議論は、明快とはいいかねる。しかし、著作者の特定の難しさ、著作者人格権の問題、新しい権利処理システムの必要性、私権性と公共性、など問題点は整理されており、参考になる。

又吉栄善「豚の報い」（芥川賞）

沖縄の話である。面白く読んだ。しかし、あまり後に残らない。選評はおおむねよい。

Dick Francis, "Decider"

久しぶりの D. Francis だが、相変わらずこの人の力は衰えていない。これは1993年の作品だからわりと最近のもの。毎年1作出しているというが、手を変え品を変えよく続くものだ。作り話として楽

しんでいるが、自分だったらどういう展開にするか、などと考えてみても、やはり本家のほうが上手の感じだ。試しに手持ちのペーパーバックを数えてみたら、これが10冊目の D. Francis である。他に翻訳で1冊読んでいる。結構読んできたものだ。

池内 紀「ぼくのドイツ文学講義」（岩波新書）

全部で10講。それぞれが短く、気楽に読める。さて翻訳でも読んでみようと思うような作品は案外ない。しかし、文学者という商売もいいものだなという気がする。今、特別委員会で付き合いの深い池田信雄もドイツ語教師だ。彼はずいぶん年上だと思っていたら、僕と同年代だという。奥さんが「ソフィーの世界」の訳者で今や有名だ。

池内という人は本郷の方の教授だったが、最近定年前に辞めた。

中では「ケペニツク事件」の話が面白かった。暇があればドイツ語を勉強し直して、ハイネなどを読むのもいいかもしれないが。

淮陰生「完本 一月一話 読書こぼればなし」（岩波書店）

岩波の図書に連載したものをまとめたもの。淮陰生とは中野好夫だそう。しかし、文中に時々「中野好夫氏」が登場する。たとえば、

「これも出所を書けば、中野好夫氏の小随想集「私の消極哲学」の一つに見える。」(p.135)

カモフラージュも苦しいものだ。もっとも多くの読者に知られていたのかもしれない。

博学も確かだが、反権力で一貫した姿勢も見事である。

武田雅哉「猪八戒の大冒険」（三省堂）

中野美代子と同じく西遊記を題材にしているが、古典や時代の考証というよりは、その後代の垂流、テレビ、漫画、人形にまで目を配った軽い文化論である。

八戒はイノシシではなく豚であり、白じゃなくて黒く、必ずしも太っていない、などわれわれの「常識」に挑戦する部分もある。むしろ三蔵法師が太っているのだ。

この間の芥川賞が又吉栄喜の「豚の報い」だったが、この題名に対する選者の反応が面白かった。

石原慎太郎「私自身が冒した過ちだが、題名にある「豚」という言葉の持つ意味合いが、東京にあってと沖縄とでは決定的に異なるということに往々私たちは気がつかない。この題名に眉をひそめようと、豚は彼の地にあっては高貴かつ高価なもののイメージとしてとらえられるという価値の習慣を、私たちは何をもって忌避することが出来ようか。実はこの題名における豚は、直喩（シミール）ではなくて暗喩（メタファー）であることを往々私たちは知り得ないのだ。」

日野啓三「・・豚という沖縄では特別重要な動物を軸にした骨太な構成・・」

三浦哲郎「「豚の報い」（なんと殺風景な題名だろう。）」

多分、実際のところは石原は大げさで、三浦は冷たすぎるのではない。しかし、沖縄で豚が高貴だとしても、武田の本によれば、中国ではまた違うようだ。

丸谷才一，井上ひさし 責任監修「短編小説傑作選 戦後50年の作家たち」（文芸春秋）

この手のものを全篇読んだというのは、われながら律儀なものである。律儀といっても、さすがに最初のページから順に読んでいったわけではない。気の向くままに読んでは、目次で読み終えたものにバツを付けていったら、全部にしるしがついた、ということである。しかし、1年近くかかっている。

印象に残っているのは、阿刀田高「ナポレオン狂」（この人のものは初めて読んだ），吉田健一「酒宴」（吉田らしいいい加減さがよい），三島由紀夫「橋づくし」（実に巧い），川端康成「三浦市」（これも巧い），丸山健二「雁風呂」（この人のものも初めてかもしれないが、魅力の一端がわかる），井上ひさし「ある朝の蟬」（こういうセンチメンタリズムにはこちらも弱い），大江健三郎「河馬に噛まれる」（読んだことはあるはずだが、新鮮），村上龍「鐘が

鳴る島」(この人の文章はイメージよりよい), 宮城谷昌光「布衣の人」(最近の人気も分る)。

John Grisham, "The Chamber"

去年9月に米国に行ったときに買ったペーパーバックだが, この間久しぶりに Dick Francis を読んで, またこの手のエンターテインメント物に手を出す気になった。

676ページと長大だが, 一気に読ませる。相変わらず見事な腕だ。ストーリーは比較的単純なのに, 不思議と長さを感じさせない。とくに会話は絶品だ。

ただ, Sam という人物が, 元となった事件ではドジで間抜けな人物のように見えるのに, 実際に登場してから, しかもその時点は死刑間際で70歳近いという設定なのに, きわめて知的, シニカル, 会話に巧みで, 性格が異なるように感じる。しかし, とにかくこの Sam の会話は魅力だ。

ストーリーは単純といったが, 死刑の是非という重大な問題をまともに取り上げている。共犯者の存在が無理な設定と思ったが, 最後までサスペンスを盛り上げる脇役ではあっても, 実際に何も起こらないのはよかった。

とにかくよくこんなものが書けると, 感心するばかりだ。

藤原伊織「テロリストのパラソル」 （講談社）

英米のエンターテインメントものを続けて読んだので、今度は日本のものを読む気になった。江戸川乱歩賞と直木賞を二重に取った作品である。それで気にはなっていたが、あえて買う気になったのは、少し前に朝日にこの藤原が駒場を訪れて、この作品にも出てくる第八本館（今の言い方では1号館）の屋上に行き、感慨を述べている写真付きの記事があったからである。写真は時計台前で撮られていて、ダンスのグループが新人勧誘で踊っているのが大きく写っている。駒場寮のことも少し触れられていたが、別に寮生に同情するというようなところはなく、むしろこの本のプロローグに「私と同時代を生きのびた友人たちに　そうすることもなく去った友人たちにー」と書いたのを悔やんでいる、

世代論をするつもりはまったくない、と言っていたのが印象に残る。「パラサイト・イヴ」よりははるかにこの作品に好感を持ったが、それでもとくに後半、いかにもちゃちな感じがする。とくに桑野という人物像が、劇画調で面白くない。

丸谷才一、山崎正和「二十世紀を読む」 （中央公論社）

丸谷の対談ものは、ずいぶんよくつきあって読んできた。だいが鼻についてきた感じもある。しかし、丸谷と山崎というコンビは、うまくできている。知的ゲーム。しかし、互いに相手をやっつけよう

というゲームではなく、観客をいかにうならせるかという競争である。競争というよりも協力的な関係の方がはるかに強いが。

形は書評であるが、本をかなり詳しく紹介しながら、そこからテーマを引き出して、蘊蓄を傾ける。その芸には、またかと思いながらもつい感心させられてしまう。とりあげられた6冊のうち、読んだことがあるのは塚本哲也「エリザベート」だけであるが、他の本も読んだ気になってしまう。もっともどこまでが取り上げた本の話で、どこからそれを離れているのか、判然としない。取り上げられた本は、単に肴という感じもする。

司馬遼太郎「街道をゆく 42 三浦半島記」（朝日新聞社）

晩年の司馬は小説をやめ、この「街道をゆく」と「この国の形」というシリーズをずっと書いていた。

「三浦半島記」は死後に出た最新刊である。このシリーズでこれを初めて読んだのは、むろん三浦半島が対象だからで、わざわざというわけでもないが逗子の島森書店で買った。島森でつけるカバーは鎌倉の古地図を使っていて、ぴったりである。

紀行文というものではない。源頼朝、三浦一族、さらに昭和海軍などをとりあげて、筆のおもむくままに書いている。もちろん、大楠山に登っただとか、三笠を訪れたとかいう部分はあるが、全体からすればその地を訪れた時の印象のような記述はきわめて少ない。む

しろ司馬という類まれな歴史小説家の晩年の頭の中に蓄積された様々な知識と思いが、地名などをきっかけに次々と紡ぎ出されてくるという趣きである。なかなか楽しい。よく巷の歴史好きのおじさんが一杯入った勢いで自慢げに歴史の知識、とくに郷土や先祖がらみの話をひけらかすことがあるが、それと司馬の話の感じは似ているところもありながら、やはり質が違う。

高1の夏休みの宿題として平家物語を原文で通読した読書感想文に、あえて頼朝を取り上げて書いたことが思い起こされる。

北杜夫「茂吉彷徨」（岩波書店）

シリーズ3冊目だが、相変わらず面白い。この巻には照子の浮気事件や、茂吉の永井ふさ子との恋愛という、肉親としては書きにくいだろうことが詳しく語られる。茂吉の人間としてのいやらしさも、隠さず書かれる。一方、北杜夫自身の回想、少年時代から青年時代への歩みも語られる。全体に面白いのは茂吉の“フモール”とそれとは少し性質の違う北のユーモアであり、電車の中で思わず笑ってしまったことが何度もあった。歌もこうして読むと、心に訴えるものがある。

立花隆「インターネット探検」（講談社）

立花としてはずいぶん手軽に作った本である。しかし、彼は今、先端研の客員教授で、生命系の授業をもっている。そこでWWWを活用しているが、その方法には感心させられる。

後、週刊誌に出たとき読んだが、村井純との対談が入っている。この本に収められているのは、週刊誌版よりボリュームがあり、その中での村井の発言はなかなかよい。日米のキャンプのカウンセラー体験 (p.141) など面白い。

近藤誠「患者よ、がんと闘うな」(文芸春秋)

これもベストセラー。こちらはなかなか問題の書である。要するに手術、抗がん剤などの治療は、ほとんどの場合、むだか有害だというのである。放射線医なので放射線治療については甘いが、それでも弊害についてかなり書いている。

ずいぶんラディカルである。舌鋒の鋭さに、時々反発をうながされる。彼のいう「がんもどき」仮説は、明解な根拠はなさそうだ。もっともらしいが、思いつきに過ぎないかもしれない。

自分も、がんになる確率はかなり高いと思う。一つは家系で、親父、毅叔父、祖母ががんで死んでいる。もう一つは肝炎ウィルスである。

カルヴァン・ウォルフレン、篠原勝 訳「人間を幸福にしない日本というシステム」(毎日新聞社)

藤崎さんが日本に来たときに、この本をぜひ読むべきだと強く薦めた。それまで新聞等によく取り上げられていた本だが、読む気の起こらない本だと判断していた。そもそも日本のことがおかしいとい

うことを外国人が書いた本を，日本の出版社が出版して，それがベストセラーになるという構図が気に入らない。

日本人は日本人論が大好きで，とくに外国人（というより欧米人）がいうことだとやたらありがたがるという話は，すでに聞き飽きるほどである。「菊と刀」から「菊とバット」まで．さらには日本人が外国人に仮託して書いた「日本人とユダヤ人」といったもので．

それで，藤崎さんの強い薦めにもかかわらずやはり手を出さなかった．ところが駒場の相関社会学主催の公開シンポジウムで，「現代日本のパブリック・フィロソフィ」と題するものがあって，ウォルフレンが講演した．この企画を見て本を買う気になり，半分ほど読んだところでシンポジウムを聞いた．通訳つきでウォルフレンが1時間しゃべった後，大森彌，岩田一政，松原隆一郎がそれぞれ15分しゃべった．ウォルフレンの話は，本に書いてあること以上のことはなかった．しかし，この人がオランダ人だというのは象徴的である．どうしても江戸とオランダとの関係，シーボルトなどを連想する．シーボルトはドイツ人ではあるが．30年も日本にいるというから日本語で講演するのかと思ったら，完璧な英語だった．

やはり，読んでみて愉快的な本ではない．読者を幸福にしない本である．しかし，言っていることのかかなりの部分は，正しいと言わざるをえない．第一部はわりと素直に読めた．第二部はやや論理の切れ

に欠け、読みにくい。第三部には、ところどころかなり面白いところがある。駒場での話はほとんどこの本の中にある。市民社会、シカタガナイ、conflict, accountability, 聖徳太子と和、など。本になかったのは菅直人の銅像を立てるべきだ（もし近い将来、日本に真の民主主義が成立したら）ということぐらい。

別に印象に残ったのは、日本は脅かしに弱いという話である。とくにアラブに対して弱い証拠として、服部君殺害事件と五十嵐が殺された事件を比べているところ (p.322)。および部落解放同盟との戦い。

しかし反論するにしても肯定するにしても、まともに相手にすべき議論が展開されているのは確かである。

野口悠紀雄「「超」勉強法」（講談社）

「「超」整理法」で当てて以来、野口は「超」をつけたハウツーものを書きまくって、皆ベストセラーにしている。中でもこの本はよく売れているらしい。

しかし買う気はなかった。岡本さんから、森口先生がこの本に刺激を受けて、ご自分で何かまとめられたという話を聞いた。森口先生が一目置くぐらいなら、何かいいことが書いてあるかもしれないと思い、買ってみた。

書きまくっているとはいえ、そんじょそこらのいい加減なハウツーものと違い、さすがにきちんと書いてある。とくに英語の「教科書丸暗記法」は自分でも中高で誰に勧められたわけでもなく実行し効果があったし、数学の「パラシュート法」は高校のとき静岡大学の竹田先生から受けた個人レッスンがそれに相当するだろう。

このような本の一番の効果は、個々の手法よりもやる気にならせるところだが、それについては何より、このような本をこのようなペースで、しかも一定のレベルを保って出し続ける野口の集中力自身が範となり刺激となる。なお、野口はこの4月から東大の先端研に移籍した。東大もスターを増やしている。

佐々淳行「連合赤軍「あさま山荘」事件」（文芸春秋）

文芸春秋で全3回で連載されたものだが、後の2回を読んでいたので本を買うのがもったいない気がした。しかし、面白く書いていたので、改めて買って通読した。

よくメモを取っていたものである。警察の資料にもアクセスできるのだろう。24年待ったというのは、裁判が終わるのを待ったのだろうか。

この人は、講談調の語りの才能がある。自分を美化し過ぎの嫌いがあるが、妙なおかしみもある。

雑誌で読んでいなかった部分では、土田警務部長夫人が爆弾で殺される直前に、著者が電話で話をしたばかりだったこと、三島由紀夫と著者の関係、などが目新しい。

司馬遼太郎「街道をゆく 20 中国・蜀と雲南のみち」（朝日文庫）

成都への旅行に合わせて買い、旅行中に読了した。司馬が泊まったところと同じ錦江賓館に泊まり、都江堰など司馬たちが見学したところをわれわれも見た。

しかし、歴史の知識が違うから、もちろん感慨の深さも違う。しかも、自分が司馬を頼ると同じように、司馬も明治に蜀を訪れた竹添井井 (p.20)、山川早木 (p.31) などを引いているから、こちらは司馬を入り口とするだけで、古からの旅行記をたどることができる。司馬は歴史だけでなく、建築、植物などの知識も駆使する。中国語もある程度操れるらしい。

司馬の人柄の魅力は、案内をした四川大学出身の横川健という人についての書きぶりからだけでも強く感じられる。

四川でコンニャクを探す話に力が入っているが、雲南で「ところが、雲南省が自生および栽培の本場だった」と拍子抜けすることをあっさり書いている (p.214)。

司馬遼太郎「街道をゆく 19 中国・江南のみち」（朝日文庫）

これも成都に持っていったのだが、結局ずいぶん時間がかかってしまった。しかし楽しんだ。司馬の書き方も重複もあり、気楽に書いているようだが、座談を聞くようで、しかもその頭に豊富な泉を持っているから、こちらを退屈させない。

当然のことながら、中国を書きながら日本を書いている。直接的にはうだつのこと、「呉（ご）と呉（くれ）」、「呉音と呉服」、茶、寧波と遣唐使などの交流、造船技術などだが、ほとんどのテーマが多かれ少なかれ日本との関係におかれる。

川上弘美「蛇を踏む」（芥川賞）

いわゆる変身譚である。面白くは読んだが、「はてこれは何だ」という感想のものである。丸谷が珍しく、やけに褒めている。

「・・・文句のつけようがない。佳品である。有望な新人を推すことができる。嬉しい。

・・・それが実に清新である。・・・

書き出しもよく、真中もよく、結末もうまい。

ユーモアも質が高い。文章の足取りもしっかりしている。乱れたところが一箇所もなかった。」

と手放しである。それほどだろうか。

杉山正明「クビライの挑戦 モンゴル海上帝国への道」（朝日選書）

サントリー学芸賞受賞というふれこみである。最初に、モンゴルが中国やヨーロッパの歴史家によっていかに野蛮、残虐、文化破壊者として、捻じ曲げて伝えられてきたかが書かれていて、これが面白い。それから、クビライによる通商、自由経済の世界規模システムがいかに構想され、ある程度実現されたが、時期尚早でもあったという話が展開される。ややひいきの引き倒しという感じもするが、新鮮な知識を得た。

武田雅哉「桃源郷の機械学」（作品社）

この人の本を3冊も読んでしまった。3冊目ともなると、すでに読んだ話も多い。とくにこの本はいろいろな雑誌に書いた雑文を集めたものだけに、なおさらである。しかし、図を多く引用し、楽しい本にしている。中国の観光地のあり方、自然の見方（見立て）の話はなるほどと思うところがある。

名和小太郎「サイバースペースの著作権」（中公新書）

デジタル化、ネットワーク化に伴う著作権の問題を、なかなか手際よく描いている。最後にEUの「情報社会における著作権および諸権利」の冒頭部分を紹介して (p.174-176)、「あわせて本書の要約としたい」と言っているところからも、その整理は著者のオリジナルとはいえないだろう。実際、このEUの文書は引用されるところだ

けを見ても、よく問題をとらえ、大胆な突込みをしているようだ。このEU文書や米国の「知的所有権と全国情報基盤（グリーンペーパー）」と比べると、日本の対応するものは「著作権マルチメディア小委員会ワーキンググループ検討結果報告」となっていて、「タイトルからも分るように」「禁欲的な記述」となっているという指摘はおかしいし、もっともだ。名和はきっとこの委員会に入っていないのだろう。

それと、米国の政府情報は「情報の自由法」で著作権の保護が及ばないとされているのに、日本の政府著作物は国が国有財産として著作権を持っているという指摘も、実に面白い。著者は音楽のことなども案外よく知っていて、取り上げられる例は幅が広い。

塩野七生「ローマ人の物語 I」（新潮社）

評判の本で、すでに6巻ぐらいまで出ているが、ようやく第1巻を、それもずいぶん前に買ってあったものを、読み終えた。

面白く書けている。この巻の意図は、あとがきにある通りだろう。ローマの歴史を、キリスト教の価値観やフランス革命の自由・平等・博愛の理念を通して見たのでは、おかしいものになるというのである。そして、

「知力ではギリシア人に劣り、体力ではケルト（ガリア）やゲルマン人に劣り、技術力ではエトルリア人に劣り、経済力ではカルタゴ人に劣っていたローマ人が、これらの民族に優れていた点は、何よ

りもまず、彼らのもっていた開放的な性向にあったのではないだろうか。ローマ人の真のアイデンティティを求めるとすれば、それはこの開放性ではなかったか。」

という。塩野の視点は、他の作品でも統一されているようだ。この作品ではそれが成功していると思う。

高階秀爾「日本近代美術史論」（講談社学術文庫）

これは堪能した。明治期の画家11人を取り上げているが、どれも無類に面白い。問題意識は明確で、西洋にどう対してきたかという一点である。もちろん、取り上げるのは洋画家だけではない。芳崖、大観、春草、鉄斎が扱われている。

高階の本はどれを読んでも面白い。なぜだろうか。美術史など、はたからみると気楽な専門領域に思える。しかし、そういうところで独自の研究をする苦労は、素人の想像外かも知れぬ。本書はもちろん、研究書ではない。しかし、このような分野では、研究書と一般啓蒙書との境界はそれほど鮮明ではないであろう。研究的な内容を持つものを面白く読ませる。そういう才能がこの著者にはある。

図版は多少入っているが、もちろん小さくモノクロである。それに鉄斎などは、2-3枚しか載せていない。画集がほしくなる。

江崎誠致「呉清源」（新潮社）

新聞の書評で評判がよく、文壇囲碁名人の江崎が呉清源を書いたというので期待したが、意外に平凡な本だった。呉清源の経歴を追っているところは、日本棋院から本人が知らぬ間に脱会させられた話など、あまり知られていない事実の発掘が多少はあるようだが、立花隆や猪瀬直樹のようなノンフィクションライタのしつこさはなく、さらさら流れてしまう。

かといって、棋譜を載せて勝負を追うという面白さもない。全巻を通じて棋譜は1枚しか載っておらず、それも32手目までである。呉清源の偉大さを伝えようという気持は出ている。しかし、全体に物足りない。

高階の本は画の図版がなくても充分楽しめた。この本を読んで棋譜を集めた呉清源全集をそろえたい気になったが、それはこの本に感心したからではなく、逆に不満感が残ったからである。

司馬遼太郎「街道をゆく 37 本郷界隈」（朝日文庫）

このシリーズを遅まきながら読み始めて、4冊目である。やはり馴染みのあるところから順に読むことになる。

司馬も楽しく書いているが、読んでいる方も楽しくなる。本郷という場所がテーマのようだが、結局は人がテーマである。モース、鷗外、漱石、春日局、逍遙、子規、一葉、水戸光圀、朱舜水、近藤重蔵、高島秋帆、緒方洪庵、最上徳内。

並べてみると文学散歩のように見える部分もありそうだが、もちろん司馬のことだから、そんな軟弱な雰囲気ではない。また、場所、つまり地形、地理の話もむろんないわけではない。とくに地質時代にまで思いを致し、「本郷台地」という言い方をして、全体の地形をつかもうとするところは、真骨頂である。

そして、「見返り坂」についての面白い考証に代表される江戸の境界についての議論も、目を開かれる思いがする。

司馬遼太郎「街道をゆく 36 本所深川散歩・神田界隈」 (朝日文庫)

これも楽しめた。本所深川の方は土地勘がない。神田の方はずっと分るかと思ったが、そうでもない。

ここでもいろいろな人物が出てくる。江戸と明治が主である。地理の知識も得た。鷗外の護持院ヶ原というのがどこか。千葉道場の於玉ヶ池というのがどこか。

人物の年齢関係も意外なことが分る。たとえば吉田茂が野村胡堂の銭形平次のファンだったという話がある。ところが吉田茂は1878-1967。胡堂1882-1963で、吉田の方が年上なのである。で胡堂は岩手中学で石川啄木(1886-1912)より1級上だったという。こちらの印象は活躍した時代であるから、啄木は明治、胡堂は戦前、吉田は戦後というイメージで、年とはまったく逆だ。

樺山紘一「世界の歴史 16 ルネッサンスと地中海」（中央公論社）

中央公論社が最初にこのシリーズを出したのが1960年。僕が中学1年生のときだった。「小説より面白い」というキャッチフレーズで、値段が当時の1ドルレート360円より安い350円だったはずである。親父がこれを取ってくれた。で、毎巻熱中して読んだ。とくに、初めの方、中原与茂九郎のインダス・エジプト文明、村川堅太郎のギリシャ・ローマ、貝塚茂樹の古代中国、岩村忍の西域とイスラムなどが強烈な印象として残っている。

36年ぶりに全面書き下ろしの新企画である。前のシリーズは16巻だったが、今度は30巻。編集委員は樺山紘一、礪波護、山内昌之である。山内は駒場の同僚だが、年齢は僕と同じはずで、やはり中学生のときにこれを読んだのではないかと想像される。

この前のシリーズは編集委員に池島信平がいて、編集者の企画センスがずいぶんあったと思う。それと比べると、今回は皆学者で、気のせいかな地味である。

しかし、本にはカラー図版がふんだんに入って2600円。350円の7.5倍だが高くはない。この36年の物価上昇率より、本の値段の上昇率のほうが高いだろうから。

前シリーズは、第1巻から順に刊行された。今度はいきなりルネッサンスである。叙述に工夫がある。地中海という視点、インテルメ

ツツオとして人物を取り上げるページ，絵からの服装や暮らしぶりの読み取り．しかし地中海といっても，イタリアが中心である．イタリア中心に書いたというのも一つの方針ではあろう．ブルクハルトとブローデルを導き手として書くと，最初に宣言している．地中海という視点がそれほど明確に出たとも思えないが．

文章は明快で品がよい．しかし坦々としすぎている嫌いもある．全体に編年体で書いていないのは工夫の一つだろうが，事件や流れの時間的展開という，ノンフィクション的な歴史の面白さが若干欠けるように思われるのはミーハー的か．

佐藤俊樹「ノイマンの夢・近代の欲望―情報化社会を解体する」(講談社選書メチエ)

いわくあり気な題名が付いているが，世の中でたびたび騒がれる「情報化社会」というイメージがいかにかにいい加減かという議論である．論点としては面白い．

佐藤という人は本のカバーによれば1963年生まれというからまだ若く，東大文学部社会学科卒で，現在東工大助教授という（その後，駒場に移って来た）．

その議論には首肯できないところも多い．しかし，反論するなら真面目に反論すべき内容を持っている．メッセージは「情報技術が社会を変える」のではなくて「社会が変わるのが先で，それが情報技術の使い方を決める」「情報化社会」とは繰り返し生産され消費

されていく神話であり空虚な記号（シニフィアンゼロ）である」というものである。

一つの疑問は、「社会が変わるのが先」というその社会の変化とは何か、それは何を原因として起こるのか、という点である。出てくるのは、たとえば人口構成の変化といった話でしかない。それなら確かに「情報技術だけ」が社会を変えたのではないとしても、他の要因（たとえば人口）と同程度には変化の要因になりうるのではないか、という疑問が起こる。

この本の中で一番いい加減に使われているとおもわれる言葉、概念は「メタ自己」である。p.90に

「近代的な<個人>というのは、自由意志にもとづいて選択し、その選択の結果を自己の責任として引き受ける存在である。そのような<個人>が成立するためには、自己のみが自己を特権的に制御でき、かつその自己が過去・現在・未来を通じて同じもの＝「この私」でなければならない。そうしたメタ自己をもつ個人が<個人>なのである。」

とある。そして「近代的な<個人>＝メタ自己」ともいう。また「人間の知性とかメタ自己というのは、本来こうした存在なのである」(p.113)あたりの説明では、メタ自己＝知性となっている。

p.108あたりでは「制御される自己」は肉体のこととして扱われている。とすると、デカルト以来の心と体の二元論の心のことをメタ自

己とっているのだろうか。それとたとえば法人に認められる「人格」とを一緒にするのは無理ではないか（「責任」の議論でこの二つがある程度同一視されている）。

下條信輔「サブリミナル・マインド 潜在的人間観のゆくえ」（中公新書）

特別委員の下條さんの本である。自分で買って読み出していたら、当人から学内便で本の寄贈を受けた。

大変感心した。中公新書だがページ数もあり、内容も重厚である。駒場の講義に基づいている。それで序プラス全九講の講義形式になっている。文章も「です・ます」の語りかけ口調で、ちょっとした間投詞を入れたり、繰り返しやまとめを入れて、講義調の雰囲気を用意的に出している。しかし、内容は濃い。

それにテーマがサブタイトルにある「潜在的人間観」という点で一貫している。第九講では、それが認知心理学の枠を飛び出して、自由意志、罪、責任、という倫理、法学、哲学、人間観の議論となる。しかし、そこにいたる八講までの心理学上のテーマの取り上げ方、材料の処理も工夫されている。自分の講義ノートもこういう形にまとめ直して、本にしたいという気にさせられる。

下條さんは4月から Caltech だったか、米国の大学に移る。

マックス・ウェーバー、尾高邦雄 訳「職業としての学問」 (岩波文庫)

高名な本であるが、多分初めて読んだ。大体ウェーバーを読むのも初めてだろう。これを読んだのも駒場に来たせいといえよう。社会科学の入門書として、大学生によく薦められる本であるから。親父の蔵書にはどういう訳かウェーバーがない。

これが書かれたのが1919年である。それで思い出すのがまず、トーマス・マンの「魔の山」である。これは1912年に書き始められ、1924年に完成したという。この物語はハンス・カストルプが第1次大戦の戦場に行くところで終わる。

ヘルマン・ヘッセの「デーミアン」は1919年に出ている。この2冊から10代の僕が受けた感銘は強烈であった。今、世界文学全集を見たついでに、カロツサも持ってきたが、カロツサも一次大戦に従軍して「ルーマニア日記」を書き、戦後(1922)「幼年時代」を出した。

ウェーバーの「職業としての学問」に一次大戦の話が出てくるわけではない。時代性というのはあるはずだが、大学における職の偶然性から、学問に対する心構え、学問と政策の区別の議論に至るまで、時と場所を離れた今の日本での議論とそれほど変わらない。とくにアメリカとの対比が一つの軸になっているところも同じであ

る。ただ、1919年という年を見て、ドイツの精神という意味で連想したまでである。

渡辺保「歌舞伎 過剰な記号の森」（ちくま学芸文庫）

この人がTVで、鏡獅子を4回に分けて解説した番組は実に面白かった。で、ちくま学芸文庫のこの1冊を買ってみた。オペラはドナルド・キーンの本がきっかけになった。キーンの本は実に楽しかった。渡辺の本はそれと比べると、本格的な歌舞伎論である。構成に工夫がある。文章がよい。そして当人が「口上」で書いているように

「・・・一見解説書入門書のようにみられるこの本は、そういう類いの書物とは本質をまったく異にしている。」(p.12)
との自負を持った書である。

全体的に歌舞伎の美学を（もちろん）肯定的に論じているが、その対象は現代のものより、六代目菊五郎までの時代の歌舞伎であるらしい。

加藤周一が「日本文学序説」で、

「全曲が互いにほとんど独立した挿話と場面の連続から成り、その全体を一貫するすじには大きな意味がない。各幕は大詰へ向って収斂するのではなく、それだけで一種の盛り上がりを見せる。

・・・

科白劇としての歌舞伎は、浄瑠璃の語りの部分を抑えて、各場面を

役者の科白で進行させる。しかしそのことは浄瑠璃の美文の魅力が、役者の科白に移された、ということではない。それどころか科白劇の成立は、同時に歌舞伎が「言葉の力」を失うことでもあった。

．．．

しかし、特殊な状況における特殊な感情の表現に科白を限定することは、芝居から知的興味を奪い、登場人物の人格の大きさを制限する。・・・性格らしい性格はほとんどない。」(下 p.202-208)
という鋭い批判がある。

しかしこの渡辺の書、渡辺の美意識はずいぶん「知的」である。自分は歌舞伎をほとんど見ていないので、加藤と渡辺のとちらに与するか、何ともいえない。そもそも加藤と渡辺認識に対立があるのかどうかもよく分からない。

せいぜいTVの歌舞伎中継でも見よう。オペラと同様、録画したビデオばかりが増えることになりそうだが。

1995年

武田泰淳「司馬遷 史記の世界」（文芸春秋）

史記は小学生の頃、講談社の子供向きの「史記物語」を愛読した。項羽と虞美人の話や、呂后が戚夫人の手足を切って人豚とした話などは、強烈な印象を残している。

武田の「史記」は有名なことだけはある。どのくらい有名かというと、「現代」の「近代日本の100冊」にも入っているし、アサヒの「日本がわかる100冊」にも入っている。

読んだのは親父の蔵書で、文芸春秋社から昭和34年に初版が出たものだが、実際にあるのは昭和36年発行の第4版である。もともとは昭和18年に出た本だから、頭にまず序文（昭和34年）、続いて第三版序文（昭和27年）、再版自序（昭和23年）、初版自序（昭和17年）がついている。そして、たとえば第三版序文に、自ら「私の著書のうち、一番評判がよいのは「司馬遷」である」と書いている。

第一篇は主に「仁安に報ずるの書」の紹介、というより翻訳である。その仁安への手紙自身が大変胸を打つ。それとともに、これを紹介する武田の思い入れも鮮明に出る。

第二篇は、「本紀」「世表」「表」「列傳」と順に史記の各構成要素を論ずる。史記がこういう構成をとっていることも知らなかつ

た。

その捉え方の中心は「絶対持続」という概念である。

「およそ個人にしても、血族にしても、集団にしても、持続が本能である。本能ではあるが、史記的世界では、この本能をとおすのが困難であった。しかし持続が困難なことは、「史記」では栄枯盛衰、生者必滅的な意味、時間による変化の意味で問題にされているのではない。持続が転換を含む持続であり、持続を書くことは非持続を書くことになるとは言え、・・(中略)

史記的世界では、持続は空間的に考えられている。全体的に考えられている。

・・(中略)

すべては史記的世界全体の絶対持続を支え満たすものである。」
(p.131)

見方によっては稚拙な概念である。しかし、著者の真剣さは伝わる。そして、これが書かれたのが昭和17年である。だから、再版自序に「私は20代の後半期に於て、世は恐怖とそれにとまなう緊張にみちていた。この書物にも恐怖らしきもの緊張らしきものがふくまれている。」

と書いている。

多分、「絶対持続」という概念は熟していないにしても、この書の中心となる言葉は「「史記」の世界構想」というところにあるだろ

う。「世界構想」としてとらえようとする視点、そこにこの本が息の長い読まれ方をしているポイントがあるのではないかな。

さて、武田泰淳という作家をほとんど知らない。名前だけは有名だが、作品を読んだのはこれが初めてだ。「日本の文学」を探してみたら、武田泰淳は1冊を割り当てられている。そこにも「司馬遷」が収録されている。寺田透という人が解説を書いているが、ほとんどが引用と「武田泰淳は端倪すべからざる作家である。」というような詠嘆ばかりで、何だかよく分からない。年譜を見ると、1912年生まれで、浦和高校、東大支那文学科卒。左翼運動から転向などということが分る。もっと重要なのは、寺（浄土宗）の生まれということだろう。

それでちょっと小説も読んでみようかと思って、「異形の者」などパラパラめくって一部読んでみたが、あまり腰をすえて読む気が起こらない。ただ、障子の紙を勃起した陰茎で破る場面を発見して、オヤッと思った。慎太郎の「太陽の季節」とどちらが先なのか。

調べてみると、「太陽の季節」は1955年7月号の「文学界」に発表されている。「異形の者」は1950年4月の「展望」と5年も早い。文庫本の「太陽の季節」の解説（奥野健男）をみたら、この「文学界」に載ったのが新人賞受賞作として発表されたことが書いてあって、そこで選者の寸評が引用されているのだが、その中になんと武田泰淳の名もある。

次に「ひかりごけ」をちょっと読み出して、どこかでこれを参照していることを思い出した。中野美代子の「カニバリズム論」である。それで、これは最後まで読んでみた。実は、初めの導入の部分は飛ばし読みである。その導入部分に「野火」などが参照されて、作者がこれをどう書こうか、なんて考えているところが描写されるのは変に感じた。しかし戯曲仕立ての部分は、なかなか面白くできている。中野美代子がホモセクシャリズムの一表現だとする解釈は無理な気もするが、連想ゲームとしては、武田は北大文学部中国文学科の助教授だったことがあり、その線で中野とのつながりがあるのかもしれない。

多田富雄「免疫の意味論」（青土社）

なかなか筆の立つ人である。本屋で立ち読みして、第1章冒頭

「たとえばこういう実験がある。

受精後三ないし四日のニワトリとウズラの卵を使って、発生途上の胚の神経管の一部を入れ替えてしまうのである。」

を見て、この本は読めるなと思った。

12章からなるが、雑誌「現代思想」に1章ずつ連載したものだとい
うだけあって、各章の初めに工夫がある。たとえば、2章の頭はカル
タゴがシラクサを攻撃する話から始まる。後も同じようで、8章
の冒頭はカルダーノの話、10章はオルヴィエート大聖堂のサン・ブ
リッツィオ礼拝堂にあるシニョレッリの壁画のアンチクライストの
話、11章はサルディニアの文化の話。

別にこういうヨーロッパ文化の教養だけでなく、全体に語り口が巧い。「自己」と「非自己」とは何かというテーマで免疫の問題を通して考えているのも、分りやすい。

その腕をもってしても、専門的な部分はよく分らないところが多く残る。結局、最先端の状況も、未知の部分がきわめて大きいというためであろうか。

吉川幸次郎，三好達治「新唐詩選」（岩波新書）

初版が昭和27年に出た本である。読んだのも昭和28年1月25日第9刷というもの。親父の本に違いないが、自分も中学か高校の頃読んだと見えて、書き込みがしてある。それがおかしい。

「江亭」に対して

「故郷の為に一生を憂いて過ごすのが杜甫か。」

「返照」に対して

「最初の四行は素晴らしい。後の四行は、だらしが無い。杜甫は後のほうが言いたいのかも知れぬが、こっちには興味はない。そんなに南がいやか。田舎でも強く生きられぬか。つまらない愚痴ばかりだ。」

などと書いている。能天気の中学生には、到底杜甫など理解できなかったと見える。また、「栄光」の理想主義的教育、カトリックの前向きな姿勢、の影響が現れているかもしれない。

しかし、50に近づいた現在、杜甫の心境がよく理解できるようになったかという、そうとも言えぬ。それは、やはりこちらの境遇が恵まれているということかもしれない。

吉川と三好の書き方はずいぶん違う。それがこの本の面白さでもある。

吉川幸次郎、桑原武夫「新唐詩選続篇」（岩波新書）

新唐詩選続篇というタイトルが付いているが、取り上げられた詩人は、吉川、桑原二人合わせて、白楽天と韓愈だけである。ああ、あと桑原が杜甫も少し取り上げていた。でもそれで3人。

しかし、白楽天の詩は分りやすくていい。高校のとき、確か堀さんの授業で長恨歌を暗唱させられたのが懐かしい。しかし、あれは全篇が載っていたのだったろうか。

春寒賜浴華清池

温泉水滑洗凝脂

侍兒扶起嬌無力

始是新承恩澤時

というところは、高校生には刺激的だったが、今読んでもエロチックだ（吉川もそう書いている）。

今度は吉川の相手は桑原武夫だ。意外な感じがしたが、その経緯は本人が説明している (p.184-189)。

白楽天の新樂府は吉川も取り上げているが、桑原は全50篇を総ざらえしている。もっとも数行ずつで紹介されても感じはよく分からない。しかし、日本での受容について、「白氏文集」は宮廷インテリの必読教養書だったが、

「香爐峯の雪はすだれをかかげて見る」

といった白楽天の美的な面のみが摂取され、彼の詩のもつ社会性は全く理解されなかった (p.237) というこのようだ。

吉田直哉「癌細胞はこう語った 秘伝・吉田富三」(文春文庫)

書評で評判がよかったので買おうと思っていたが、時機を逃していたら、早くも文庫版が出た。単行本は平成4年11月刊ということなので、2年ちょっとで文庫にするとは、ずいぶん早いものだ。

息子が偉大な父について書く。しかも「あんな偉大な存在はなかった」と書く。書ける。この構図は北杜夫の茂吉伝と共通する。たとえば「青年茂吉」のまえがきには「繰返すが、私は不肖な子ながら父を尊敬している。父の歌に私なりに惚れこんで以来、私は三分の一は肉親として、あとの三分の二は第三者として父の文学に対してきたものだ」などと書いてある。

ところがこれはこちらの勝手な連想ではなく、この吉田の本の中に、富三と茂吉の比較論があるのである (p.74-79)。共通点は、ともに東北の出身で、小学校を終えたところで東京の中学に入る。とも

に身柄を引き受けてくれた家の長女と後に結婚し、医学を志し、ドイツへ留学し、同じ長崎医科大学の教授を務めた。それに作者は書いていないが、ともに息子もかなり有名で、親の評伝を書いた、ということになる。

しかも、この話のきっかけは、富三が故郷を後にするシーンと、直哉が演出したテレビドラマ「楡家の人々」の場面との重ね合わせから始まっている。

直哉がよい文章を書ける人だということは、分っている。しかし、この本は自由なエッセイと違って伝記であり、しかも自分の父親の話だ。かなり勝手が違ったろう。それで、なかなかうまく工夫している。まず、富三自身の文章や講演記録を相当量引用している。ほとんど編集という感じに近いところもある。しかし、引用の途中で別の挿話や別の引用を交え、またもとに戻るなど、構成に変化をつけている。

引用される文章自身、大変立派なもので、とくに国語審議会への提案の文章などすごいが、それだけではやはり硬い。そこに直哉の文章で紹介される私的な追想、感想、その中に笑わせるもの、泣かせるものがある。期せずして親子の資質の違いが対照的に出る。

しかし、この本には、岳父、田子勝弥、師佐々木隆興、母ナヲなど、好人物ばかりが出てくる。それだけ富三の生涯が幸福だったことの証左であろうか。

野口武彦「忠臣蔵 赤穂事件・史実の肉声」（ちくま新書）

今さら忠臣蔵でもあるまいという気もするが、この事件を記録した資料は多く、その中で一次資料となるものを集めて事件を再構成するという狙いを明確にしたものである。丸谷の「忠臣蔵とは何か」は芝居の話だったが、こっちは歴史的な事件そのものを対象としている。それだけに余計なレトリックはなく、しかも引き込まれる。というのは、単に事実の羅列ではなく、副題にあるように史料から引き出される「肉声」を重視しようとしているからである。

平川祐弘「小泉八雲 西洋脱出の夢」（講談社学術文庫）

駒場の生協の本屋は、やはり駒場の教師の本を多く置いている。これは新刊だからどこの本屋にもあるだろうが、やはり平積みになっているから目立つ。しかし、この原本が出版されてサントリー学芸賞をとったことは記憶にあり、そのときは買いそびれたが、同じ講談社学術文庫で出た「西洋の衝撃と日本」を面白く読み、いずれ小泉八雲も出るだろうと期待していたから、なにも駒場に來たから買ったというわけではない。

NHKで小泉八雲をドラマとしてとりあげ、その最初の松江の夜明けの時間の音の描写が大変美しかったのが印象に残る。解説によれば、これはジョージ・チャキリス主演の「日本の面影」であり、このように最近ハーンが再評価され、テレビにまで取り上げられるきっかけを作ったのが、本書だとのことである。

多くの文献を渉猟し、モーパッサン、ロティ、漱石、柳田、など意外な関係をあきらかにするという手法は、この本の魅力であり、ノンフィクションの猪瀬直樹などともつながる手法だと思ったが、これが比較文学、比較文化研究の基本的な手法であり、本書は文学作品ではなく学術研究書であるという。そういうものか。しかし、作品として面白く読め、学術書といった難解さをてらうところがないのは、読者としては大変嬉しいと同時に、同じ学問でも文学というのは気楽だなという、妙な反発もある。

Bob Greene, "Hang Time"

去年、アメリカで買った本だが、Jordan がバスケットに復帰したというタイミングで読んでみた。

M. Jordan と Bob Greene という幸福な組み合わせを得て、大変よい本になっている。Greene が Jordan と接し、シカゴのスタジアムに通って Jordan について書くようになったのは偶然のきっかけである。親に虐待された子供についての取材コラムの話と、そのコラムがきっかけで殺された子供の兄にあたる児を試合に連れて行き、そこで Jordan に会うという導入自身が大変感動的だし、スポーツライターが書くストーリーとは違う Greene の特質を最初から示す。

しかも偶然なことに、Greene が取材を始めた年が Bulls 3連覇の最初の年（1990-91のシーズン）で、この本はその最初の2年をずっと追うことになる。

Jordan の人間性，とくに障害児への気配り，人間としての品位 (decency) への強い意識，頭のよさ，話す言葉の適切さ，などが Greene の見事な文章で鮮明に伝えられる．一方で，ギャンブルという悪癖を持っているのも事実らしい．

安易なスポーツものではないが，それでもプレイヤーとしてのすごさというのも，改めて伝わってくる．

川合慧「コンピューティング科学」（東大出版会）

川合さんが「計算機科学概論」という総合科目の講義のために書いた本だが，改めて通読してみて感心した．たとえば Mother Goose など材料に工夫があるし，数式もきちんとしたプログラミング言語もほとんど使わずに，かなり深い内容を書いている．

Nick Bantock, "Griffin & Sabine," Chronicle Books

絵葉書，手紙の交換をそのまま本にした体裁を取った本で，文章の量は少ない．絵が美しいが，改めて文章を通読してみると，ストーリーも一応面白くできている．

Daniel Keyes, "Flowers for Algernon"

この間，シアトルの本屋で見つけた．評判の高い本だけあって，よくできている．最後に何かどんでん返しがあるのかと思ったが，そういう小細工もない．

SFには違いないが、文学性が高い。感心したが、しかし若い人が熱中するタイプの小説とも思えない気がした。

杉原厚吉「理科系のための英作文法」（中公新書）

著者をよく知っているために、余計な感情が入るタイプの本である。しかし、なかなかいいことが書いてある。この本が書評に取り上げられたのを見たことがないし、本の広告も目立たないが（といっても中公新書なのだから、それなりに広告されてはいるが、野口悠紀雄の本のように売れていないらしい）、なぜだろう。やはり工学者がこういう分野に口を出すと抵抗が大きいのか、それともそもそも英文で理系論文を書くことが必要な人口が小さいということか。

一番共感を覚えたのは、あとがきにある、学生の手書きのものを添削の際に、学生諸君の抗議から自分を守る盾として作ったというところである。

石川九楊「書とはどういう芸術か 筆触の美学」（中公新書）

この間、鶴来に行くときに何か軽いものを買って、少し前に買ってあったこの本をカバンに入れた。飛行機で「はじめに」を読んで面白いと思った。

「ご多分にもれず、美術記者も「書は難しい」と言って見て見ぬふりをして過ごし、知識人は書の良し悪しなんてさっぱり解らないと

言って、すましている。」

「「大衆の時代」とはいえ、現在習字に熱を上げる子供や主婦の習字、あるいはその先生の書と、これら書の歴史上の担い手の書との表現上の大きなギャップを見逃すわけにはいかない。」

「華や茶や書に大衆の根強い共感と支持があったからこそ、それらは稽古事に姿を変えながら、生きのびて来た。その生命力は、近代以降日本に入ってきた西洋音楽や西洋絵画の比ではない。」

（しかし、美季子の周辺を見ていると、ピアノやバレエも稽古事として日本では生きている。）

「大新聞主催の公募展の出品は約2万点。入賞率は6割程度。6割を切ると「今年の審査は厳しかった」と業界紙が報じる世界だ。落選した人を探すほうが、入選した人を探すよりよほど難しい。」

「こういう超特大の稽古発表会を、文化勲章、文化功労賞受章者、芸術院会員の書道家が頂点で取り仕切る。西洋美術家や西洋音楽家には信じ難い世界だろうが、日本の政治家が、市町村議会議員から都道府県議会議員、国会議員、そして大臣、総理大臣というコースを描くように、大衆に基盤を置いた日本の組織は、多かれ少なかれ、地方から中央へという立身出世型、年功序列型の似たような形を取らざるをえない。」

「美術大学で本格的な書道科や書道専攻というものはひとつもない。大学で書道科をもつものは、東京学芸大学、新潟大学教養学部、奈良教育大学、筑波大学など。実態は、書道教育養成機関。」

「一方、このような書の状況にいらだった若い一部の書道家は、書を絵画のような美術の一環として位置づけたいと考えている。（中

略) この手の書道家は根無し草であるだけに、成長の契機がなく、伝統的な書道家より始末が悪い。」

とこのあたりまでは実に面白かった。しかし、本論に入ると、なんだか肩に力が入りすぎて、ついていけない感じがする。批判の対象となる書の「理論」と石川の理論にそれほど大きな違いが感じられない。

そしてびっくりするような「あとがき」がある。

「「書とは何か」についての初めての新書が生れた。」

「百十数年を経て「書は美術ならず」論争に終止符が打たれた。」

いや、実に力が入っているのである。

ダレル・ハフ、高木秀玄 訳「統計でウソをつく法」（講談社ブルーバックス）

とにかく古い本である。もとは1954年。翻訳がブルーバックスで出たのは1968年。何で買ったかというところ、駒場の新入生向けの推薦図書として、統計の先生（松原さん?）が薦めたため、生協で平積みになっていた。有名な本だけあって、巧みな説明だが、新しい知識は特になかった。しかし自分の統計の知識は乏しい。もう少しまとめた入門書で勉強し直すべきか。

J. L. ボルヘス、鼓直 訳「伝奇集」（岩波文庫）

「中国の動物分類」のことでボルヘスが気になっていたもので、これを読んでみた。ボルヘスを読むのは初めて。

知的，ブッキッシュ．人工的な仕掛けを作るところは，変な連想かもしれないが，清水義範に通じるところすらある．

訳が読みにくい．訳者はボルヘスの専門家らしい．訳注を見ると情報量はないが，よく調べよく知っていることは分る．しかし，訳文はあえて原文のスタイルを出そうとするせいなのかもしれないが，こなれていない．

訳者自身の解説に

「最後に文体について一言．たとえばイベリア半島で名文家の名が高いオルテガ＝イ＝ガセーの文章のように・・・ボルヘスの文章は対照的に簡潔でる．

・・・彼の文章は，表現すべきことを過不足なく言い表していて間然とするところがない．・・・じつに簡勁で男性的な文章である．」
などとあるが，どうもそういう感じを味わうには至らなかった．

亀井俊介「サーカスが来た！」（東京大学出版会）

東大出版会の宣伝誌「UP」の4月号に例年「東大教師が新入生にすすめる本」という特集があり，その中に「私がすすめる東大出版の本」という項目がある．そこで杉田英明という人が，

「それまで丸山真男「日本政治思想史研究」のようなお堅い本ばかり出版していた東大出版が，突然極彩色のピエロの表紙の本を出したのには驚いた」

と言って本書を推薦していた．この本は日本エッセイストクラブ賞

を取ったりしていたので前から知ってはいたが、この推薦をきっかけに買って読んでみた。著者はもと駒場の教師で、「駒場1991」によれば1932年生まれだから、もう2年前に退官したのだろう。

読んだのは東大出版のものではなく、92年に岩波の「同時代ライブラリー」として再刊されたものである。この間の平川（この人も、「駒場1991」で見ると1931年生まれだ）の「小泉八雲」を講談社学術文庫で読んだのと同じようなケースだ。しかも、平川のほうは牧野陽子という女性のお弟子さんが解説を書いているが、亀井のほうも能登路雅子という、やはり東大で教えを受けたという女性研究者が解説を書いているところまで、同じパターンである。

日本ではサーカスはうらぶれて衰しいイメージだが、アメリカでは子供の夢、脱走して行きたい憧れの場所という話が冒頭に出てくる。これで思い出すのが、少し前に読んだ、フレドリック・ブラウンの「シカゴ・ブルース」である。

亀井は触れていないが、ちょうどTVでジョン・ウェイン主演の「サーカスの世界」という昔の映画をやっていたので録画した。この本で扱われている19世紀のもっとも華やかな頃のサーカスが描かれている。そして確かにサーカスのアフターショーとして西部物がある。しかし、この映画はあまりにも陳腐で見通す気にならないような代物だが、3度に分けて何とか最後まで見た。

1964年，Henry Hathaway 監督．Claudia Cardinane, Lita Hayworth などが出ている．原題は Circus World.

山形孝夫「聖書の起源」（講談社現代新書）

小さな新書だが，内容は濃い．1976年に出た本で，親父が買ったのだろうが，今は絶版かもしれない．

ちょっと前から，たまに福音書を読んでいて（岩波文庫の塚本虎二訳），それがきっかけでこの本に手を出してみた．すぐに引き込まれて読んでしまった．

序論にあるように，この本は全体の構想を三つに絞って書かれている．

- 1．モーセ六書（創世記からヨシュア記まで）を中心に旧約聖書の根本主題を解明し，イスラエル宗教の起源に接近すること．
- 2．新約の四福音書を中心に，新約聖書結集の核となったキリスト論成の問題に接近すること．
- 3．この両者の伝承に幾世紀にもわたって影響を与え続けた，オリエント神話の痕跡を，史料層の分析を通してあきらかにすること．

実に堂々とした宣言である．「新書」には似つかわしくないと感じても，不思議ないだろう．

具体的な鍵として，土地取得伝承，遊牧民と農耕民の闘い，契約祭儀伝承，カナンの神々の系譜，病気なおしの神々，治癒神イエス，

などが扱われる。大変魅力的である。

Winston Groom, "Forrest Gump," Pocket Books

ベストセラーものである。Mark Twain の流れを汲むという評もあるらしいが、それはほめすぎだろう。南部、ほら話という共通項はあるが。

フットボール、ベトナム戦争、NASAとアメリカらしいものが出てくる。南部の自然や人情と成功物語の部分もアメリカ人の心をくすぐるだろう。しかし、多分小説より映画のほうがよくできているのだろう。映画は見ていないが、安藤さんは夫婦で見て、涙がつい出たという。

Gump は精薄ということになっていて、そのスタイルは D. Keyes の Algernon と多少似ているところがある。Charley の場合は知能がどんどん進歩し、それに伴って文体が変わるところが一つの腕の見せ所だった。Gump は精薄のままだが、一方ではスーパーマンでもある。フットボール、卓球、ハーモニカ、チェス、数学、何でもすぐ一流になる。この辺がちょっと都合がよすぎる。

途中、宇宙船から落ちてニューギニアの土人に捕まるあたりから急に面白くなる。土人の書き方があまりに類型的だ。

井上章一「狂気と王権」（紀伊國屋書店）

この人は「美人論」などというので売れたらしい。もともとは建築史の人。精神異常，その鑑定と皇室の話である。猪瀬直樹の関心と近い。猪瀬ほどのしつこさはないが，書きっぷりも似ている。やたらと改行が多いのが気になった。

あとがきに，いやに謙虚なことが書いてある。

「・・・私の本は，セコハンのデータをかきあつめた，やや概説的なしあがりとなった。正直いってこのことははずかしい。(中略)

くりかえすが，くやしいし，また忸怩たる思いもする。」

しかし，気晴らしに読むには面白い本だった。

Patricia HighSmith, "The Talented Mr. Ripley"

映画「太陽がいっぱい」の原作だが，後半は映画とまったく異なる。この前読んだ The Tremor of Forgery と同じような独特の奇妙な世界が展開する。これは Tom, Dickie, Marge の三角関係の話と読めるが，セックス場面はない。実際にセックス関係がない。Marge は Tom と Dickie の間のホモ関係を疑うが，それらの表現も，時代性とおそらく著者の性格からきわめて婉曲である。

プロットに無理があるような気がしても，それを気にせず読ませてしまう力がある。不思議な作家だ。

幸田文「父・こんなこと」(新潮文庫)

幸田文など読んだことなく、そもそも露伴にしても中学生のときに「五重塔」を読んで以来、ほとんど読んでいないだろう。それが、最近朝日で高橋源一郎だったか誰か若い作家が、現代の人間では書けない文章として幸田文を挙げていたのと、少し前、この本にも出てくる文の娘の玉子が「小石川の家」とか言う題で出した本が評判になったこともあって、読んでみた。

「父」の文章は不思議な魅力があるし、死に近い露伴の姿もよく描かれているが、なんといっても辛気臭い。ところどころは、中年女性によくある愚痴という文章もある。その点「あとみよそわか」などで出てくる露伴は元気で、文は勝気な10代で、文章におかしみがあり、明るい。なんののかんの言いながら、父の偉大さに結局心服する気持ちが吐露されている文章は、部外者から見ると全面的には共感しえないが、今は日本の家庭から失われてしまったであろう父の強くて大きな姿が、この文章で残されているのは確かだ。しかし、一番面白いのは、一般的な父親の権威＋大文学者、文化勲章、学士院というもので圧倒するのみでなく、掃除の仕方、障子張り、襖張り、などの実践と理屈で圧倒することで、これにはこちらも参りましたと思わせられる。おそらく明治、大正の父親の中でも特異だったのではないだろうか。

ジャン・ジャック・ルソオ、青柳瑞穂 訳「孤独な散歩者の夢想」（大日本雄弁会講談社）

親父の本である。昭和23年2月20日発行。大日本雄弁会講談社。自分が生まれた年に出た本だ。

読むために持ち歩いているうちに、装丁の一部が崩れてきた。もともとは保存状態が比較的良好だったが、紙の質は悪い。綴じ方も弱い。

しかし、活字の大きさ、旧漢字旧かなの字体、余白の取り方など、目に快い。時々、いかにも活字の拾い間違い、というより置き間違いらしい誤植があるが、もちろん変換ミスのような誤植はない。今やこんな本にすら、和綴じ本に感じるような懐かしさ（といっても自分のことではない、和綴じ本など持っていないし読めない）を感じる時代になったといえようか。

何でこれを読む気になったかというと、ルソーの本はこれまで読んだことがなく、親父の蔵書にはいくつかある。これはその中でもっとも古い。たとえば、やはり親父の蔵書に桑原武夫編の「ルソー研究」があるが、それによると「孤独な散歩者の夢想」のこの青柳訳は最初の訳本だが、その後、違う訳者のものが別に3種類も出ている。他に親父が持っているルソーの本には、「政治経済論」,「エミール」などがある。だから自分としてルソーを1冊ぐらい読んでみようという気持ちと、親父の精神史を想像するという2つの要因で読んでみた訳だ。

この書がルソー最晩年の著作であることも、読み出す前は知らなかった。不遇な晩年を、世間的な成功、栄誉、社交から遁れることで静謐な暮らしを得、それを楽しむ。表面上はそのような書に見えるが、決してそうではない。たとえばわが国の西行、長明、兼好、芭蕉などと、隠遁生活という共通項はあっても、その心境、メンタリティはまるで異なる。執拗な自己弁護、正当化、「彼等」に対する糾弾。月並みだがフランス人は、そして西洋人はやはり日本人と違うという感想を抱かされる。しかし、訳者の後書きでは、ブリュンチエール(?)が、懺悔録、対話録、夢想の三作を「これらはいずれも狂人の作だ」といったとか、ピエール・ラセールが

「私は彼を理解するように出来ている頭を持ち合わせていない」と言っていることを引用し、

「・・・多くのフランス人が、ルソーを「理解する頭」を持っていなかったのも無理はあるまい」と書いている。

もっともルソーが受けた受難というものは生易しいものではなかったらしい。逃亡先をすぐに追われる生活。だから「夢想」では具体的にどんなことで「彼等」から断絶されたか分らないが、その試練は並大抵ではなかったことは分る。ルソーの性格も異常だったのであろう。しかし、その異常さで、特異な著作をなしえ、後世に影響を与えたとも言える。

Nick Bantock, "Sabine's Notebook," Chronicle Books

Nick Bantock, "The Golden Mean," Chronicle Books

これで3部作を読んだことになる。絵はきれいだが、謎めいた話の決着はさっぱり分らない。

高辻知義「ワグナー」（岩波新書）

ワグナーの生涯を追っている。新書なので量的には物足りないが、その制約の中では丹念な記述である。伝記としては平凡な記述法だが、何しろワグナーという人物のスケールが大きいので、引き込まれて読んだ。創作にかかったときの集中力、速さには圧倒される。しかし、付き合いたくはない人物だ。

これが面白かったので、講談社新書の「ワグナー」も買ってみたが、これにはがっかりした。

G. K. Chesterton, "The Scandal of Father Brown"

前にも読もうとしたことがあったはずだが、衒学的な文章に阻まれた記憶がある。この間、メリーランドに行く旅に持っていったのがきっかけで、結局全部読んだ。話のリアリティはまったく欠ける。文体、表現とブラウン神父の性格で読ませる。しかし、正直言って読みにくい。分らない単語が多い。また、一方で名調子にうならされることもある。

キーティングの評価では、初期の「ブラウン神父の童心」(1911)が高く、晩年のもの（この作品は1929）は灰だそうである。

ヨースタイン・ゴルデル，池田香代子 訳「ソフィーの世界」（NHK出版）

大ベストセラーである。なかなか面白く読ませる本だが、訳本で660ページあり、読みやすいとはいえ哲学の歴史を語ったこの本が100万部だか売れたというが、買ったうちのどの程度が通読しただろうか。

ラッセルの「西洋哲学史」と「不思議な国のアリス」を足して2で割ったという評があるそうだが、まあそんなところである。そのお話の部分は、創るものと創られるもの、認識上の存在と実存在の関係というような構造になっていて（ロマン主義のイロニー）、うまくできている。ラッセルの本をまたじっくり読んでみるか、という気になる。もちろん、直接哲学書を読めばいいのだが。

キリスト教に対する視点が醒めているが、それも適切な気がする。

木下恂「ソフトウェアの法則 コンピュータの利用技術とは」（中公新書）

この著者は知らない。東芝でずっとソフトウェア開発に携わっていた人らしい。その経験に基づいたエッセイ集だが、各エピソードの

導入に私的なことを書いていて、しかも嫌味がない。日本の企業における知のあり方をうかがわせる。

こういうスタイルではなく、しかし一般向けの本を自分も書いてみたい気持はある。

猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」（文芸春秋）

猪瀬のものは、習慣的に読むようになってしまったが、今度は三島である。これにも猪瀬らしい計算があると思われる。今年三島が自決して25周年であるから。また、これは偶然だが、未亡人の瑤子が今年の7月に死んでいる。

話を祖父の平岡定太郎からもってきた。原敬に取り立てられたエリート官僚で、樺太庁長官となったが、政争に絡んで失脚した。父の梓も官僚（農商務省）となったが、大して出世しなかった。同期に岸信介がいる。三島も大蔵省に入ったが、9ヶ月で辞めた。同期に長岡實がいる。このような官僚の系譜、官僚の描く社会設計との対比で、三島を描くというのが工夫である。

もう一つの工夫は、「園子」、湯浅あつ子、「x嬢」など、恋人、女友達を取材し、うまく材料を引き出していることである。

40歳でノーベル賞の候補に続けてなりながら、川端にさらわれて「このつぎに日本人が貰うとしたら、俺ではなく大江だよ」と言っ

たという。これは、次に回ってくるのは10年か15年先、その時は生きていないという予言を含んでいると猪瀬は言う。

そうすることで、大変面白く読める。また三島の作品自身もよく読みこんでいる。しかし、猪瀬の姿勢は、やはり天皇に対してと同じように、よく分らない。

たとえば p.388

「看板の墨文字が「市谷駐とん地」となっている。・・・

とたんにすべてが滑稽に見えてきて、・・・

そうだ、あんたのせいじゃないんだよ。・・・

国民のうえに超越的に存在してきた官僚機構を、日常性の司祭とするわけにはいかない。」

このあたり、猪瀬の気持がもっとも直接的に表現されている数少ないところだが、何を言いたいのか分らない。

村井純「インターネット」（岩波新書）

朝日新聞の先週の読書欄に誰かが書いていた。「インターネットについてやたらと本が出ているが読めたものがない。結局、岩波新書に頼るというのも情けないが、やはりこれが一番分った。」という。

村井さんはそれほど文章が書ける人とも思えないが、おそらく宮内さんか誰か岩波の人がしっかりサポートしていて、さすがにちゃん

と読める本にしている。

量的に物足りないが，案外面白く読んだ．とくに彼の思いがストレートに出ている部分がよい。

柳田邦男「犠牲 サクリファイス」（文芸春秋）

心の病で25歳で自殺し脳死となった柳田の息子について語った書である．とくに自殺してから脳死と判定され，腎臓を提供し，心臓死に至る数日間が語られている．見事な文章である．長男賢一郎の語る言葉がところどころ挿入され，これがまた胸を打つ．立花の語る脳死と別の視点からの議論が重みをもつ。

今野浩「カーマーカー特許とソフトウェア」（中公新書）

この間の伊理先生のお祝いの会で，今野さんが下さったのでサインしてもらった．まだ広告も見たことがないと言ったら，今日出たところだという。

一気に読んだ．一般向けにうまく書いているし，主張も強く出ている。

「オペレーションズ・リサーチ」に書いた書評は別掲。

立花隆「ぼくはこんな本を読んできた」（文芸春秋）

立花が色々なところに書いてきたものを寄せ集めたもので、お手軽な作りではあるが、量的には結構多いし、立花らしく面白いところがあちこちにある。とくにテーマを決めると本をあさり、数メートル分読み、専門家に負けないように勉強し、取材準備をするというところは、知ってはいたが、改めて圧倒される。

最後に、週刊文春に連載した「私の読書日記」3年分がまとめて載っている。3段組125ページあるが、これが案外面白い。この中で自分も読んだのはS. J. グールド「ワンダフルライフ」と井上章一「狂気と王権」の2冊だけだが、まず自分では読みそうもない本ばかりでも、数行の紹介だけで読んだ気になって面白く感じる。読んでみようという気になったのは、原田実「黄金伝説と仏陀伝」、ウィード「メトセラの軌跡」、鹿島茂「絶景パリ万国博覧会」、渡辺富哉「偽りの烙印」、森浩一「日本神話の考古学」、春名幹夫「スクリュウ音が消えた 東芝事件と米情報工作の真相」、ロミ「突飛なるものの歴史」、佐藤清彦「おなら考」、海野和男「蝶の飛ぶ風景」「昆虫の擬態」、ショヴィレ「ウィトゲンシュタイン その生涯と思索」、武田雅哉「桃源郷の機械学」「猪八戒の冒険」、小林安雅「海中記」、クラーク「湾岸戦争」

エドワード W. サイド、大橋洋一 訳「知識人とは何か」 (平凡社)

サイドとは、エルサレムに生まれたパレスチナ人で、米国に亡命して米国市民となり、プリンストン、ハーバードで学位を取って、

現在コロンビア大学の英文学，比較文学の教授だという．本書の内容はほぼ一つのメッセージの繰り返しである．知識人は体制に奉仕する専門家であってはならない．アマチュアリズムを守り，常に体制に no という勇気を持つべきだというものである．とくにパレスチナ人の立場から，米国政策に一貫して反対する．ただし，宗教には与しない．米国でインテリとなり地位を得ながら，亡命者であることにこだわり続けるその意志の強さにはほとほと感心する．しかし，本としては面白くない．これは，BBC の Reith Lecture の内容という．メッセージは伝わるが，文学的な豊かさは感じ取れない．

「いっぽうの側を善であり，もういっぽうの側を悪と決めつけるような分析は，真の知的分析においてはつつしむべきなのである．」
(p.182)

という言はそのまま自分に返されるべきではないか，と批判するのは安易だろう．しかし，「客観性」に関する議論はあまり説得的でない．一般に彼の立場に共感するにしても．

1994年

荒俣宏「大博物学時代」（工作舎）

この間、木村陽二郎の「ナチュラリストの系譜」を読んだので、前に初めの方だけ読んでいたこれを引っ張り出して通読してみた。ビュフォン、キュビエ、ラマルク、リンネと対象となる博物学者は当然重なる。続けて読んだことで、これらの名前が近しいものとなった。

もちろん、書きぶりはずいぶん異なる。大体この本は、もとが雑誌の連載ということもあるが、荒俣の本来の性向からして、つまみ食いの、興味のおもむくまま、筆の動くまま、資料を渉猟し、面白い話を集めて語るというもの。それが魅力であり物足りなさでもある。藤森照信と似た「知」のあり方だが、藤森の「日本の近代建築」のようなものも書いてもらいたい。

この本の出版は1982年12月で、木村の方が1983年2月である。

司馬遼太郎「八人との対話」（文芸春秋）

前にも書いたが、日本の雑誌にはどういうわけか対談、座談が多い。それを集めて本にすることも結構多い。

そういう中でこれは質が高いだろう。何しろ司馬はいろいろな話をよく知っていて、それをテーマに合わせて豊富に語る。相手はすべ

て並々ならぬ人たちだが、常にリードするのは司馬である。だいぶ考え方が違うのではないかと思われる山本七平なんかでも、すっかり司馬のペースに乗せられている。丸谷オ一ですら、天皇が白拍子を入れたといって、それは上皇になってからだと訂正されて、恐れ入っている。

森本哲郎「生き方の研究」（新潮選書）

最近、森本哲郎著作集が出だした。本屋でそれを見ていたら、すでに出ている2巻のうちの一つが、この「生き方の研究」と「続生き方の研究」（どちらも新潮選書）を収めたものである。オリジナルを並べて売っていたので、その方が2冊に分かれていて、しかもソフトカバーで軽く、さらに値段も安いので買ってみた。

この人の本は、これまで「二十世紀の旅」と「読書の旅」を読んで、どちらも面白いと思った。これもよい本だ。古今東西の人間を取り上げて、人生論を論じている。きわめて平易で親切な文章だが、内容は高い。哲学をやった人が、こういう文章を書くのはかえって難しいことだろう。また、セネカ、陶淵明、与謝蕪村、などという人たちを、てらいもなく取り上げるだけでも勇気がいるかもしれない。それを気負いもせず、しかし勘どころを押さえた紹介をした上で、「生き方」を考えさせる。たいした腕だ。

野口悠紀雄「「超」整理法」（中公新書）

これは大ベストセラーのようだ。要するに分類するな、という。すべての書類を封筒に入れて、時間順に並べろという。部分的にはやってきたことだが、全面的にやる気はなかなか起きない。

しかし、パソコンの使い方などについても、考えさせることが結構書いてある。ちょうど駒場に引っ越すので、書類の扱い、計算機環境などを考えるいい機会だ。

木村泉「ワープロ作文術」（岩波新書）

もっとワープロを駆使する技術を書いてある本かと思ったが、思ったより普通の「文章読本」である。

梅棹の「知的生産の技術」を数ヶ所で参照しているところは、この間の野口の本と共通で、発想法にかかわってくる。しかし、文書をどう管理するか、どう検索するか、ワープロを知的生産支援の道具としてどう使うか、についてはほとんど書かれていない。それはきっと読んでいない「ワープロ徹底操縦法」に書いてあるのだろう。が、比較すれば、野口の本の方がよほど刺激を受けた。

しかし、本というのは不思議と著者を知っていると点数が辛くなる。逆に面識がない人の本を読むと、その人が雲の上の存在のように偉い人に思えてしまう。おかしいものである。

森本哲郎「続生き方の研究」（新潮選書）

ここでは、老子、佐々木小次郎、イソップといった半伝説的人物から、坊ちゃん、失業者アントニオといったフィクションの人物まで取り上げている。

ショーペンハウアー、フロイス、良寛などの記述に感心した。エラスムスはやはり心情的に自分に近い。

立花隆「マザーネイチャーズ・トーク」（新潮社）

変な題名だが、7人の科学者との対談集である。河合雅雄、日高敏隆、松井孝典、多田富雄、河合隼雄、古谷雅樹、服部勉。

とくに河合雅雄、多田富雄、日高敏隆が面白かった。いつものことながら、立花の勉強ぶりには感心させられる。変な題だといったが、これは新潮から出ていた「マザーネイチャーズ」という科学雑誌に連載されたものだという。しかし、雑誌が7号出たところで廃刊になったので、もっとやるはずだった対談が、7回で終わったのだそうだ。

芦原義信「東京の美学—混沌と秩序」（岩波新書）

かなりいい加減な本である。岩波新書だが、量も少ないし繰り返しも多い。構成もいい加減だし、文章も練れていない。何より、主張が混乱している。東京の都市計画のなさ、部分発想の欠陥、私権が異常に強いことの弊害、という負の面と、カオス的な構造の持つ美や活力の見直し、安全性、部分のよさ、という正の面との

ambivalence に揺れている。そこにこの本の魅力が出てくるべきところだったが、実際には両者がごっちゃに出てきて、結局何をいいたいのかすっきりしない。しかし、「なぜ靴をぬぐか」「官民両者の土地の利用性のみへの執着」など、個別の指摘には面白いものがある。結局この本自体が、部分発想、カオス的なのではないか。

奥泉光「石の来歴」（芥川賞）

ストーリー作りがうまい。ちょっと作りすぎのところがあるが。

田中琢，佐原真「考古学の散歩道」（岩波新書）

これは二人の考古学者が英文月刊誌「ルックジャパン」などに書いたエッセイを集めたもの。考古学と現代や広い地域との結びつきを論じている点が、ユニークな点である。銘々器（「わたしのはし」「わたしの茶碗」）が現在では日本と韓国だけで見られる現象というのは面白い指摘だ。大工道具の話も面白い。

しかしやはり白眉は「国際化とは」「戦争・・・」「文化財保護・・・」といった議論である。

B. ラッセル，市井三郎 訳「西洋哲学史 1」（みすず書房）

ソクラテス，プラトン，アリストテレスの項のみ読んだ。ラッセルはプラトンやアリストテレスに対しても、かなり手厳しい。西洋哲学の祖としてそれなりの尊敬を払っていることは、当てられたペー

ジ数（この3人で100ページ）でも示されているが、うやうやしくあがめるといふ態度ではない。ラッセルは演繹主義の中心人物かと思うと、そうではないらしくイギリス人らしい経験主義がよく表れている。それに品のよいユーモアがある。

これが1941年に書かれていることは驚異的だ。ギリシアがドイツに占領されているという事態を踏まえた記述があるが、それで初めてこれが執筆されたときの時代性に気づかされる。

出口保夫「ロンドン塔 光と影の九百年」（中公新書）

ロンドン塔を見物に行った日、ちょうどこの本も読み終えた。案内記としては便利で、よいタイミングの読書ではあったが、内容は物足りない。

ロンドン塔は、1980年に広瀬健さん等と一緒に訪れている。だから、今回は14年ぶりだ。

Gregory McDonald, “Fletch”

面白く読んだが、めちゃくちゃな話である。個々の場面のリアリティはあるが、ストーリーとしては相当無理だし、途中から先が読めてしまう。最後で Alan を殺してしまうところも、いかにもいい加減だ。

大体、Fletch という人物を自己破滅型の人間として描いているが、一方で冷静な取材力と推理力と計画性を完璧に備えていて、ずいぶん矛盾する。この男は徹底的にショービニストで、上司の女性、2人の離婚した妻に対する態度はめちゃくちゃだし、Bobbi, Joan に対しても冷たい。女性の読者には不愉快な小説だろう。Amanda Cross とは対極にあるというべきか。

Ed McBain, "Sadie when she died"

87分署シリーズは昔テレビで見えていたが、原作を読むのは多分初めて。何しろ多作なので、どれから手をつけていいのかと思っていたら、Keating の本でこれを推薦していた。それを探していたが、この間ロンドンで見つけた。

感心した。本筋となる事件は比較的簡単なものだが、それに数名の警官と、その警官たちにかかわるエピソードを交え、クリスマス前のニューヨークという時節を巧みに背景とし、会話、メモ、盗聴記録などの形式の多様性も取り入れ、しかもゴタゴタしない。

John Grisham, "The Client"

Pelican Brief, The Firm と読んで3冊目だが、相変わらずさえてい。これだけの長さを飽きさせず読ませる。Mark, Reggie, Harry といった人物の作り方が実にうまい。いろいろな場面を丁寧に書きながら、しかも退屈させない。たとえば Harry の開く法廷の場面。ス

トリーリーの展開にとっては大したエピソードではないところだが、長いページを当てる。しかし決してだらだらしない。

ただ、この話の前提に疑問を感じた。話は Mark が死体の場所をしゃべると殺されるという思い込みの上に成り立っているが、この点について、Reggie も FBI の連中ですら、疑問を持っていない。しかし、マフィアにとっては、Mark がしゃべる前に殺したほうが、しゃべってから殺すよりかはるかに意味がある。

最後には結局 FBI の保護プログラムにのるのだが、それなら早くしゃべったほうがよほど安全だったのではないか。

吉田満「戦艦大和ノ最期」（講談社文芸文庫）

この本と著者の存在を、「現代」の「日本がわかる100冊」を見るまで知らなかった。この対談で、呉という読書雑誌の編集者が、だれもこの本を知らなかったといってあきれ、長谷川という人が

「「へーっ、そんな本があるんですか」と言って、「戦艦大和ノ最期」をいい大人になってから改めて読む、というのも読み方の一つだと思う」

と言っているから、知らない人は多いし、知っている人は、何でこの本がそんなに知られていないのか、と思う本らしい。

感動した。一見、正確を期した記録の体裁をとりながら、随所に感情、思索、感慨、そしてユーモアすら交え、見事な文学になっている

る。もちろん文学になっているから感動するのではなく、事実の強さに打たれるのであるが。

しかし、訓練にくたびれ果て、出撃でその猛訓練から解放されるとほっとするというのは、何という軍隊だろう。この本が検閲で出版できなかったというのも、重い話である。「きけわだつみの声」が、反戦のものだけを集めるように、そして好戦的な文句は削除するように編集者が手を入れたという事実も、思い起こされる。

われわれは戦争を経験しない、実に稀有な世代として生まれ育った。これは、本当に偶然である。その直前の世代が、これだけの無念の思いと、同時に次の世代への祈りをもって死んでいった。そのことはしかし、いつも忘れられている。皆が忘れている。

養老孟司「脳の見方」（ちくま文庫）

「唯脳論」の前に、方々の雑誌に書いたエッセイを集めたもの。独特の妙にいじけた言い方が、鼻につくところもある。しかし、フーコー、ゲーテ、モンテーニュなどを語った文章もあって、この人が読書家であるのはよく分かる。

真木悠介「自我の起源」（岩波現代文庫）

真木悠介は見田宗介のペンネームである。別に駒場に来たから読んだわけではないが、学生時代に習った記憶があり現在でも駒場で現役の人は、見田と折原浩ぐらいだろう。

この本は、自我の起源を遺伝子と個体との進化論的關係に探っている。ドーキンスが引用され、その理解と批判の上に議論が展開される。その議論はなかなか説得力があるだけでなく、場合によってずいぶん文学的な表現に発展する文章により、酔わせるところがある。昔の無味乾燥な印象のみが残る講義とは、大いに異なる。その文学性は、補論としてついている宮沢賢治を題材にした個の解放の文章では、もちろんより直接的である。

小林峻一、加藤昭「闇の男 野坂参三その百年」（文芸春秋社）

大宅壮一賞を取ったというので、本屋に平積みになっている。じっくり構想を暖め、取材し材料を集めて書いたという本ではなく、ニュース性の高い作品である。1990年代になって、ロシアから公開された資料を探り、30年代の野坂の行動を暴く。実際、野坂はこの旧ソ連から出てきた新資料のために、名誉議長を解任されただけでなく、党を除名になっている。100歳の現役党员だった野坂がである。

よく資料を発掘したものと思う。それでも謎は多く残る。推定の多くは、憶測に過ぎないともいえる。しかし、スターリンの粛清というのは、実に異常なものであった。ヒットラーとスターリンと、どこまでが個人の異常性で、どこまでが歴史性なのか。しかし、個人の異常性といっても、それがごく特殊な例外でないがゆえに、あれだけの結果を招来するに至ったのだろう。つまりすべてのあるいは

多くの人間が、それに同調するか黙認するか負けるかするだけの類似の人間性を部分的にも保有しているわけである。自分でも、その場に身をおいたら、どういう行動をとるのか分からないかもしれない。

金子史朗「ポンペイの滅んだ日」（原書房）

今度の旅行に合わせてこの本を手に入れるにあたっては、ちょっとした苦労があった。まずこの本の存在は新聞の書評で知っていた。入手した本の裏カバーを見ると、それが88年2月であったことが分かる。また、その頃紀伊国屋でも何度か見かけ、買おうかどうしようか迷った記憶がある。

今度、ソレントで開かれるICSEのプログラムに、ポンペイ・ツアーがあったので申し込んでおいた。それでこの本を思い出した。まず紀伊国屋に行ってみた。見つからない。次に旭屋に行ったがここにもない。しかし、オンライン・サービスで調べてもらった。何しろ題名もはっきりしないし、著者名も出版社も覚えていない。手がかかりはポンペイである。さすがに該当する本が40冊近くあったが、首尾よく見つけた。

次に駒場の生協に行き、棚を散々探した後、注文してみることにした。それが5月9日である。1週間かかるというので無理かと思ったが、できればその週のうちにと頼んでおいたら、うまい具合に5月12日に入荷したと連絡があった。生協もなかなか便利である。

ポンペイについては語りつくされているのかと思ったら、今でも発掘が続いていて、とくにヘルクラネウムはまだまだこれからだという。発掘の話，火山研究の成果に基づく噴火当日の再現，鉛中毒問題など，飽きさせない。ほとんど2次資料のようだが，日本語で読めるのは便利だ。

堀田善衛「ミシェル 城館の人 III 精神の祝祭」（集英社）

やはりヨーロッパへの旅ということで，読みさしのこの本を持ってきた。モンテーニュは精神的にローマ人（世界人）であったし，この巻の前半は，イタリアなどの紀行にあてられている。

堀田善衛はなぜモンテーニュについて書いたのだろうか。そういう記述はほとんどない。森鷗外が「渋江抽斎」のあと2つほど史伝を書いたが，書いているうちに初めに思ったほどの人物でないことが分かり，落胆したという話がある。

その点，モンテーニュなら確かである。確かであるが，すでに多数の研究書，評伝があるだろう。ありすぎて調べるのが大変ということもあるが，何を付け加えるかという問題もあろう。しかし，日本語でこのようなスタイルで出すということだけでも，十分な価値はある。

最後のほうで唐突に，戦争中に堀田がモンテーニュを読んだときの思いが出てくる。その唐突さに，最初は一種のアリバイ工作かと思

った。つまり、モンテニューへの関心は昨日今日のものではないというアリバイ作りである。しかし、この辺に本音があるのかもしれない。

Ruth Rendell, "A Judgement in Stone"

これもイタリアに持っていったもの。これは3月にイギリスで買った。例の Keating のリストを持って行って、ロンドンの本屋で見つけた。さすがにあのリストに入っているだけあって、よくできている。

いきなり、

"Eunice Parchman killed the Coverdale family because she could not read or write."

という文章で始まる。むろんよく計算された上での書き出しであるが、これによってゲームのルールが宣言されるわけである。「犯人探しではない。結末は分かっている、そこへどうもっていくかに腕を見せる。」という宣言。すごい自信だ。ただ、一家を殺すというところで終わるわけではなく、その後にも工夫がある。

驚くのは、その最初のページに文盲は一種の不具者だというような議論が展開されるところである。このあたりは現在の日本では、なかなか日本語にしにくいだろう。作者は文盲の Eunice だけでなく、殺される Coverdale の家族たちも、ずいぶん突き放した皮肉な筆で描いている。確かに、どちらかに道徳的に、あるいは人間の評価と

いう点で肩入れしたら変なことになるだろう。あくまでもルールにのっとったゲームなのだ。しかし、その面を強調しすぎると、リアリティが飛んでしまって、読む気がうせる。ここでさらに微妙なバランスを保つ腕が試される。もともと、現実感のない設定ではある。さらにゴールが示され、そこへ向かうプロセスで勝負しようという道筋を明らかにすることで人工感は強いが、その上でリアリティを出す。大したものだ。

前に読んだ彼女の小説は、中身をほとんど忘れたが“A Demon in My View”だった。あれも最初から犯人が分かっている点は、共通だったはずだ。

秋山裕一「日本酒」（岩波新書）

日本酒の技術が向上したというが、日本酒に関する一般向けの本も、よいものが増えてきた。著者は造り酒屋に生まれて大学で醸造学を学び、その後日本酒醸造の研究に打ち込んできたという経歴が、小泉武夫と共通する。技術と歴史とに目を配るという姿勢も類似している。小泉の麴は日本の独創とする説にはやや批判的で、より客観的な議論をしているように見えたのが面白かった。

高村薫「リヴィエラを撃て」（新潮社）

確か直木賞を取り、その前に種々の推理小説賞の類を取って有名になっていた本なので、かなり前に買ってあったのを、思い出して読んでみた。

分量の多さと、アイルランド・イギリスを舞台にして細かく地理を調べて書いている点には感心した。複雑な筋だがそれほど乱れもせず書いている。しかし、やはり人間的な魅力が出てこない。そこがたとえば John Grisham なんかと違う。文体も硬い。硬いのはむしろストーリーに合ってはいる。意識的に合わせた文体にしているのかもしれないが、手紙文などを混ぜるという工夫をしている割に、文体に代わり映えがしない。

世界としては Robert Ludlum に近い。といっても Ludlum は1冊しか読んでことがない (The Parsifal Mosaic)。そのときも、人間描写や文体に同じような感想をもったと思う。

しかし、OLをしていた日本女性が、こういうものを書くということ自体が、不思議でなかなかすごいことである。

立花隆「生，死，神秘体験」（書籍情報社）

立花隆の本はつい買ってしまう。対話集というような手軽に作られたものでも、立花が文芸春秋に長い間連載して臨死体験の話は完結したらしく、いずれ単行本が出るだろうが、これはその前触れのようなものだ。

冒頭の山折哲雄との対話が面白かった。それと岡田節人とのものも。

田中克彦「言語学とは何か」（岩波新書）

この人の「チョムスキー」も面白かったが、この本もなかなかこちらの脳を刺激するところがある。ソシュールの位置づけ、アメリカの言語学、チョムスキー、社会言語学、などが要領よく語られるが、単なる紹介ではない。

ソシュールの丸山による解説本を途中で投げ出してるが、また読んでみてもいいかもしれない。

M. Spivey, "Z Notation"

これを通読してみて、大変感心した。今までのZの理解は、かなりいい加減なものだった。Spivy という人は、大したものだと思う。

西垣通「マルチメディア」（岩波新書）

西垣が、マルチメディアというジャーナリスティックなテーマを岩波新書として書いたのを読んでみた。これを読んで、マルチメディアについて新たに得られた知識というのはほとんどない。一方で、彼が行っている議論にとくに共感するところもない。独特の気取った文章で、いろいろ料理して見せるが、この著者とテーマの組み合わせは成功したとはいえない。

基本的な姿勢は、アメリカニズムにのっとったマルチメディアについての警告というところだが、何が問題で、どうすればいいのか、はなはだ心もとない。

ただ、4章3「列島リオーガナイス」というところで、少し気持ちが伝わる。要は金子郁容などのネットワーキングと近いようだ。

F. T. A. ホフマン、石丸静雄 訳「ホフマン物語」（新潮文庫）

新潮文庫の復刊シリーズの一冊である。なぜ買ったかといえば、しばらく前にビデオで取っておいたオッフエンバックの「ホフマン物語」を見たということ以外にない。

小説として楽しめたとはいえない。だいたい、訳があまりよくない。文や語句で意味不明のところがずいぶんある。19世紀初めのドイツ・ロマン主義の文学というのもずいぶん現在の日本から遠いが、昭和27年に発刊されたこの訳文、翻訳手法、訳者の知識が、案外われわれから遠い。

しかし、短いので最後まで読んだ。これはオペラ「ホフマン物語」の下敷きになった3つの短編を集めたもので、ホフマンがこの形で短編集として出したわけではないらしい。

僕にとってやはり面白いのは、自動人形オリンピアの話で、AIの人がこれを引用しないのはなぜだろう。理性と感性（夢想的傾向）との対立というテーマ自身も明確である。

ホフマンはコリン・ウィルソンの「アウトサイダー」では多分取り上げられていなかったが、アウトサイダーに一脈通じるものがある。

しかし、幼稚な気もする。

小泉武夫「酒肴奇譚 語部釀児乃酒肴譚」（中央公論社）

小泉という人は農大の先生だが、サービス精神に溢れている。もちろん、秋山の本とは狙いが違うが、ちょうど同じ頃出版されて好対照を成している。

しかし、この本で「日本人が魚の食べ方や肴の造り方にかけて、他民族が舌を巻くほどの力量をもっている事」(p.184) といった表現が頻出するので、中公新書の「日本酒ルネッサンス」で感心した日本の麴、酒造り文化という評価の客観性に、やや怪しいものを感じた。ここで出てくる日本人の食文化礼賛自体はそんなに嫌味ではなく、説得力もあるが。

堺屋太一「満足化社会の方程式」（日経）

堺屋の本は初めて読んだ。これは日経に連載されていたとき少し読んで、案外面白いと思っていた。特徴は徹底した官僚批判と、江戸や大正・昭和などの近世・近代の歴史に学ぶというアプローチである。ズバリと言って気分を爽快にさせるところは、大前研一とよく似ている。

萩谷昌巳「ソフトウェア科学のための論理学」（岩波講座ソフトウェア科学 11）

萩谷さんは理論に強く、センスもよく、しかも文章がうまいので若い人に人気がある。この本もよくできている。シーケント計算という推論方式で統一して書いている。最後のほうの動的論理やカテゴリは少しはしよりすぎの感がある。

とにかく、この岩波の「ソフトウェア科学講座」はなかなか充実している。自分が書いていないのがしゃくである。今、武市の「プログラミング言語」を読んでいる。

佐和隆光「平成不況の政治経済学—成熟化社会の条件」（中公新書）

堺屋太一と似たようなテーマをほぼ同じようなタイミングで出した本である。

リベラリズムと（新）保守主義という軸を視座としてすえる。これでいくと、堺屋は完全な保守主義者ということになるろう。佐和はリベラルの立場に立つ。そう言明はしていないが、全体の流れからその主張は明らかである。

しかし、両者の現状分析、問題指摘は驚くほどよく似ている。とくに日本経済の競争回避の構造、排他性、官庁の縦割り行政、・・・

堺屋の主張は歯切れがいいが、佐和の論旨はそれほど明快でない。一つには、評論家と学者の違いがある。学者として、なるべく正確にまた公正に述べようとする。評論家としての堺屋は、やはり受け

を狙うという面がある。直線的な物言いは気持ちがいい。立場の違いもあるだろう。すべてを市場に任せる、それが消費者利益につながる、効率のよいものが生き残るという仕組みのためには倒産が出るのはやむをえない、民主主義の選挙に落選があるのと同じである、という主張は明快である。リベラルの主張は、自由競争と規制、機会平等と公正、個の自由と環境・福祉など、すべてが兼ね合いの問題だから、歯切れは悪くなる。

それにしても佐和は、貿易問題では日本の規制、談合、競争回避の構造を壊すべきだと主張しながら、規制緩和は失業増加を招き、景気浮揚には必ずしもならないなどといい、どうしたらいいのかはつきりしない。貿易問題自体についても、数値目標を是認するように言いながら、結局手段としては構造改革を実施する主張となる。

そもそもリベラルー保守という図式がそれほど絶対的なものか。米国の民主＝リベラル、共和＝保守という区分けはそう単純でない。さっきもABCのニュースを見ていたら、クリントンの医療保険改革に対し、ゲッパードがよりリベラルな別法案を提案し、同じ民主の保守派は、ゲッパード案にはもちろん、クリントン案にも反対している。それに対し共和党は、条件付でクリントン案という関係らしい。

大岡昇平「幼年」（講談社文芸文庫）

どれほど多くの作家が「幼年」とか「幼年時代」という作品を書いていることだろうか。カロッサ、トルストイ、谷崎・・・

大岡の「幼年」は甘い回想ではない。大岡らしく、事実をなるべく正確に掘り起こそうとする。事實は結局、住んだ渋谷周辺の町の歴史、生活史ということになる。それが、あの辺りに15年住んだ自分の興味にもつながる。しかも、今も駒場に通っているわけだ。

大岡のイメージから、東京の中の上以上の家の出身かと思っていたが（とくに成城高校で、中原中也、小林秀雄などと付き合っていたわけだから）、両親は和歌山から出てきて、父は株の仲買人、母は芸者出で、貧乏だ、などという家庭環境は意外だった。

夏目漱石「漾虚集」（岩波漱石全集 2）

漱石全集を買っているが、あまり読んでいない。だいぶ時間をかけて、第二巻の「坊ちゃん」以外、つまり「漾虚集」に収められている7編を読んだ。それで、大岡昇平の「小説家夏目漱石」を引っ張り出してみた。これはだいぶ前に読んだが、その時点では「漾虚集」に入っている作品はほとんど読んでいなかったもので、おもにそれらを取り上げている最初の200ページぐらいは、あまりピンとこなかったに違いない。その証拠に、今回「幻影の盾考」、「趣味の遺伝をめぐって」、および一連の江藤淳の「漱石とアーサー王伝説」批判を読み返して、ほとんど前に読んだ記憶が失われているのを発見した。それにしても、江藤淳への批判は執拗だ。同じく江藤

淳を嫌い、大岡を好むと思う自分としても、ずいぶん感情的だという気がする。

漱石の作品については、「倫敦塔」を今年3月に訪ねる前に読んだので印象にある。最近読んだ「趣味の遺伝」は変な作品だが、最初の戦死者が犬に食われる幻想や、新橋の凱旋の光景は印象に残る。寂光院の銀杏の葉の落ちる描写も美しい。しかし、大岡も言うように、「猫」系のこの文体は全体の印象と合わない。そういえば、少年の頃、「吾輩は猫である」を読み、大いに文体に感化され、作文などでその口調を真似た。よい点はリズムに対しての気配りであったろう。悪い点は実に下手な比喻だ。本家、漱石も時として失敗している。

武市正人「プログラミング言語」（岩波講座ソフトウェア科学 4）

萩谷の本に続けて、これにも感心した。テキストとしてのまとまりのよさは、萩谷の本以上である。プログラミング言語という広範な分野を、Gofer をメタ言語として用いて、意味定義からコード生成まで、きわめて要領よく、しかも手を抜かずに書いている。大したものだ。

bit, Vol.27, No.6(1995) に載せた “ぶっくす「武市正人 著: プログラミング言語」” は別掲

笹野頼子「タイムスリップ・コンビナート」（芥川賞）

笙野の作品は、ユーモアのあるリズム感のよい文章で面白かったが、時々そのユーモアが萩野カンナ風のダジャレに近くなるところが気になった。それに三重の故郷の回想が妙に私小説的だ。

室井光弘「おどるでく」（芥川賞）

室井の作品のほうに僕には面白かった。雑然といろいろな話が出てくるが、どれもひねってあって興味を持続させる。「コリヤード懺悔録」と「啄木日記」の引用がとくに面白かった。しかし、文献に頼るのは小説的でないという評者の批判もある。

今回、選考委員の評はあえて両作品を読んでから目を通した。最近、僕と感覚がずれてきたと思う丸谷は、やはり室井より笙野のほうを買っている。しかし、結末が物足りないという感想は一致する。河野多恵子は笙野の作品を「名作」という最大級の褒め方をする。室井のほうをほめているのは大江と大庭。ところで古い日記を見ていたら1968年のものが出てきて、その中に芥川賞を読んだ話がある。大庭の「三匹の蟹」と丸谷の「年の残り」が同時受賞であることを知った。大庭の印象は強いが、丸谷はこのときはまったく記憶に残らなかった。

Patricia Highsmith, "The Tremor of Forgery"

例の Keating の100冊の中の1冊で、ロンドンで買ったもの。

不思議なミステリである。チュニジアでこの本と同じ表題の本を書き進めている米国人の2ヶ月ほどの生活を描いているが、大した事件は起こらない。小さな謎がいくつかは出てくる。ほかに米国人とオランダ人の二人の男と、一人の米国人女性が出てくる。舞台はアラブの世界で、名前を持ったアラブ人も少しは登場するが、主人公の独白にもあるように、多少とも人間的交流のあるのはボーイの少年とレストランの主人に限られる。このうち後者は、ほとんど人物描写がされていない。

テーマはアラブというまったく異なる文化における、生活の規範、倫理、リズム、行動の決め方の問題である。それらがどのように影響を受け、変わるか、あるいは変わらないか、あるいは変えずにいるべきか、ということらしい。しかし、もっぱら西洋人、白人の視点で考えられ、アラブの側に立って考えるという姿勢はどの登場人物にもない。

恋人の Ina と別れるプロセスも、よく分からない。しかし、全体に不思議な魅力がある。また、毎日何ページ小説が進んだという文章が何度か出てきて、妙な話だが、そうだこういう風に本を書いているかなければいけないのだと、およそこの小説の趣旨とは無関係なところで、刺激を受けた。

この作品は1969年出版で、舞台の背景は中東戦争である。

辺見庸「もの食う人びと」（共同通信社）

評判の高い本である。とくに、日経に載った松永伍一の書評がすごい。

「筆が立つという形容はここでは嘘になる。文章が立ち上がり、作者の好奇心といっしょに走っている。最も上質なジャーナリストの嗅覚と洞察力が、読者をもその場に連れこむ。」

「ドキュメントが文学の情趣を含んでいるという意味でなく、ドキュメントの斬新な方法論で文学として屹立したということだ。」

「食うことは日常の行為なのにそれを超えた意味をもつのだと、作者にきつく諭されたが、活字を通じて食い、泣いたことは死ぬまで記憶から消えないだろう。そんな尊い本だ。」

ちょっとほめすぎの感もあるが、これだけの書評を書かせる本というのはめったにあるまい。

新聞に連載されたものがベースで、おそらくその発表形態のせいもあって、全体は30篇の比較的短い文章からなる。しかし、その一つ一つが書きようによっては一冊の本になるほどのドラマ性を持っている。

辺見という人は「自動起床装置」で芥川賞を取った人だが、共同通信社の記者で、むしろこのようなノンフィクションが本業である。ノンフィクションといっても、とくに新聞記者の特徴がよく出ていて、目のつけどころに大変な勘のよさがあり、しかもたくましい行動力と取材力がある。

これは「長年飽食になれ、・・万事無感動気味の、だらりぶらさがった、舌と胃袋」を「異郷に運び、ぎりぎりいじめてみたくなった」という、日本の食の現状への反省から出発している。そこに平和に慣れきって、世界の多くの地域の戦争、飢餓、悲惨を実感できなくなっている日本のわれわれ、政府、経済、生活という図を重ねている。それに対し、鋭い一投をなげかけたが、結局何ができたのだろうか。皮肉に言えば、きわめて巧みなしかけをもつ作家が、格好なテーマを見つけただけではないのか、という感想すら浮かぶ。

しかし、何もしていない自分との距離ははるかに遠く、そのようなロジックは自分に対しての言い逃れかもしれない。とにかく、考えさせられる本だ。

夏目漱石「草枕」（岩波漱石全集 3）

前に読んだのは、中学のときだろう。思春期のその頃は、那美さんが風呂場に入ってくる場面が大変刺激的だったのだから可愛いものだが、シェリーや陶淵明の詩の出てくるところ、椿が池に落ちる描写なども印象に残っている。

しかし、今回読んでみて、ずいぶん漢文調の難しい言い回しが多いのに改めて気づいた。漱石の漢詩文に関する知識は大したものだ。

漱石は、那美のようなインテリで生意気なタイプが好きだったのだろうか。「一夜」の女がその走りだが、「三四郎」の美禰子や「虞

美人草」の藤尾など、何人かそのタイプの登場人物があるだろう。大塚楠緒子がモデルという詮索もあるようだが（大岡「小説家夏目漱石」p.84-88）。

それと「猫」でも病的に毛嫌いされていた探偵が、ここでも忌み嫌われて出てくる。何かのコンプレックスがあるらしい。

しかし、これを「（明治39年）7月26日に一応書き出したがあまり進まず、8月3日から改めて没頭、後は一気に書き上げて、9日には脱稿」（「日本の文学」の中野好夫による解説）というのには恐れ入る。

ミレーの「オフィーリア」の絵が、草枕の中で重要なモチーフになっている。「倫敦塔」ではポール・ドラローシュの「エドワード4世の二王子」と「レディ・ジェイン・グレイの処刑」だった。漱石は絵画から刺激を受ける性向があったのだろうか。そういえば音楽はあまり出てこないような気がする。

Agatha Christie, "Sleeping Murder"

A. Christie など読むのは何年ぶりだろう。いまさらこういうのを読むのも気恥ずかしい。ペーパーバックにカバーを付けることはまずないが、これを電車で読むのに、自分でカバーを付けた。

これも Keating の100冊のうちの一つ。この間の Highsmith の項に、

「女史の作劇法は一見まったく無計画に見えるかもしれないが、ストーリーテラーとしての手腕は、たとえばアガサ・クリスティと同程度であることを忘れてはいけない。それにしても両女史の手法がなんとちがうことか。・・・」

とあったので、比較のために、これもずいぶん前に買ったのを読んだのだ。

しかし、今読むと、古めかしいという印象を免れない。ルールにのっとって作られたものを、読者も作り物だということをよく意識しながら楽しむ。それで、途中から犯人は分かってしまうが、分からせることも作者としてはフェアな書き方なのである。

しかし、この作品が1976年で、ハイスミスの The Tremor of Forgeryの方が1969年の出版というのは不思議な感じがする。（Keating を見たら、これが出版されたのは1976年だが、書かれたのは第二次大戦中とのことだ。）

青山圭秀「アガスティアの葉」（三五館）

変な本である。自分で買って読むということは、まず考えられない。持ってきたのは服部である。それも「第5章 哀しみのイエズス会士」（なんて嫌な章題だろう）に大木神父のことが書かれているので、読んでみたらということだった。著者は広島学院出身で、そこで大木先生の教育を受けた。カトリックの洗礼も受けている。この

第5章はポカラの大木先生を訪れた時のことを書いている。そこだけ読んで、しばらくほっておいた。

しかし、青山という名前や著書について、新聞などでも目にするところがある。また、この人の経歴を見ると、東大教養の相関理化学専攻の修士を出ているというので、因縁も感じるし、インド医学や占星術の話にしても、ひょっとすると科学的な議論をしていて面白いのではないかとの期待も感じた。で、読んでみた。

読んでみて、途中でとてもついていけないと思ったが、たまに暇なときに読み継いで、一応最後まで読むことになった。

全体から見れば大木先生の話は異質であって、つけたりともいえる。主なところは、アガスティアの葉に書かれた予言を聞きにいく話だが、とても信用できる話とは思えない。サイババという人は、かなり高い宗教性を持った人物のようだが、著者がどうしてこれほど惚れ込んでいるのか、今一つよく分からない。

面白いことに、そのサイババ自身はアガスティアの予言に対しては否定的である。

著者のインド哲学というよりは宗教へののめりこみは、一見真面目なように見えながら、その実、若者たちの占いブーム、オカルトブームを狙ってベストセラーを書き、有名になろうとする意図が、意

外に臆面もなく、あるいは素直に表出されていて、おかしい気がした。

夏目漱石「二百十日」（岩波漱石全集 3）

革命，社会主義という漱石としては珍しいこの時期だけのテーマを，巧みな会話体で流れるように書いている。テーマ自体は深まっていかないが，阿蘇で嵐に会い，道に迷うところの描写はさすがに素晴らしい。

ドナルド・キーン，土屋政雄 訳「日本文学の歴史 1」（中央公論社）

キーンの本は何でも面白いが，これはまた野心的な試みである。日本の文学史を一人で書こうというのだ。全18巻が順に配本される。その1巻目。加藤周一の「日本文学史序説」も大変な労作だと思ったが，それよりもまたスケールが大きい。その意図は「まえがき」に明白である。

「事実の羅列を避けて，なるべく主観的に書いた。」

「当世権威を持つ文学理論を余り利用しなかった。」

「書きたかった文学史は，できるだけ読みやすく，できるだけ面白いものであった。」

その意図は十分に反映されている。「序」だけでも面白いしユニークだ。

ほとんどの詩に英訳を載せている。最初、すべてキーンが訳したのかと思ったが、必ずしもそうではない。この本は、先に英語で出版されているから、英訳がついているのは不思議ではない。しかし、それを日本語版に入れたのは、なかなか面白い試みだった。現代語訳はついていないから、意味を英語で確かめることになり、それが結構役に立つ。

多数の図もよい編集だが、残念ながらカラーではない。

林健太郎「昭和史と私」（文芸春秋社）

これは「私の履歴書」の長編版という感じのものである。ただ、家族のことなど私的な話はほとんど出てこない。

林健太郎の著作というものを、これまで読んだことがない。東大紛争のとき、文学部長だった。それで有名だったが、それが主に軟禁事件によるものであることは、この間の佐々淳行の本で記憶を新たにした。

いわゆる現実主義者、アンチ左翼であることはよく知っていたし、そのために若い頃は嫌っていたとか敬遠していたことは確かである。しかし、その思想傾向を知っていたということは、総合雑誌に書いたものなどいくつか読んでいるのだろう。

この本を読んで初めて知ったのは、戦前はマルクス主義者だったということで、それも一高時代の一過性のものではなく、かなり信念

を持続していたということである。かといって、戦前、戦時中に、そのために検挙されたとか迫害されたとかいうのではない。兵役にもついているが、昭和19年の12月という末期で、武山にただけでさして苦勞をしていない。

戦時中にマルクス主義を守り、戦後、左翼全盛のときにあえてその批判に回ったということからは、時流に抗した信念の人のようにも見えるが、全体としてみると、むしろ逆にうまく立ち回ってきたという感が否めない。つまり戦争中にマルキストであったことが戦後免罪符となり、その後の共産国家崩壊の過程を生きて、共産主義批判を正当化したということになる。政党でいえば、共産党から社会党シンパ、と段々右に移って、最後は自民党の参議院議員になった。しかし、どうしてそのように思想を変えていったのかは、ほとんど説明されない。

大正2年生まれで、親父とほとんど同世代である。親父も同じようにマルクス主義を信奉していたはずだが、何かの行動をしたわけではない。逆に晩年まで、少なくとも選挙では共産党に投票していた。しかし、書いたものにも、生活信条といったところにも、マルクス主義の痕跡はほとんど認められない。

そういうことを考えて読んでいった前半は、とくに面白かった。後半は、なぜ「転向」したかよく分からないし、60年安保について批

判的だが、ちょうどそのときの2年間、欧米を物見遊山していて、のんきなものだという印象も強い。

しかし、やはり東大紛争のところは引き込まれて読んだ。

自分も、なぜ革新派、50年代、60年代のいわゆる進歩的文化人の書くものに共鳴し、その気持ちをこれまでもある程度はひきずってきているのか、改めて考えてみる必要がある。一方で、「行動」はしていないし、東大紛争のときの立場は、ノンポリというよりむしろ全共闘に批判的であった。

John D. MacDonald, "The Green Ripper"

マクドナルドという推理作家は何人かいる。"Fletch"は Gregory だったが、これは John だ。これも Keating の100冊のうちの1つで、この間米国に行ったとき空港の売店で買い、帰りの飛行機で読み始めた。荒唐無稽だが、哲学的なところが少しある。知的だがジェームス・ボンドのように強い、Trevis McGee という現実離れした人物が主人公である。

前半はフィリップ・マーロウや Spencer と似た感じかと思ったが、後半は狂信者集団のアジトに単身乗り込んで、結局全員を一人で退治してしまうというかなりタイプの違う展開となる。

立花隆「臨死体験（上・下）」（文芸春秋社）

出版を待っていたので出てすぐ買い，上下900ページ近くを，一気に読んだ．この本がなかなか出なかったのは，雑誌の連載に手を入れていたのではなく，連載が長かったからである．初めが文芸春秋の91年8月号で，これを読んでいるはずだが，延々と今年の4月まで続けたい．で，本になるとときには，ほとんど手を加えていないようだ．ただ，詳しい索引がついている．

立花としては，ちょっとリスキーなテーマに手を出したといえる．オカルトの世界に限りなく近いのである．しかし，立花らしく，そっちに引っ張り込まれることはない．

脳内現象説と現実体験説と，かなり注意を払ってこれらの論拠も示しながら，基本的には前者を取っている．しかし，後者の可能性を否定しない．僕は，立花以上に強く，脳内現象説に与する．

しかし，不思議なことがあった．多分，先週の水曜日の夜である．この日，帰りの電車の中で，ちょうど19-21章辺りの対外離脱の話を読んだ．とくに21章の対外離脱と金縛りの関係は，自分もときどき金縛りを経験するので，印象に残った．

夜中に眼が覚め，それから眠れなくなった．実は，この本を読む前から，横になって眠れない，あるいは眠らない状態で眼を閉じたまま，意識を集中すると鮮明な映像が視覚に映じてくるという体験をしている．これは頭の中にイメージを結ぶというのと違って，もっと現実の視覚体験に近い．つまり，網膜に映っているという感じが

するものである。主に、自然の風景が映る。たとえば村、野原。人はほとんど出てこないか、出てきても風景の点描という感じで、存在感は薄い。音はない。色彩は鮮やかに着いている。現実の視覚よりも映画やTVのスクリーンにうつる映像に近い。というのは、視点がかなりの速さで動くからである。パンインやパンアウトもある。しかし、対象の方はほとんど動きのない自然である。この間、意識ははっきりしているが、その意識によって、ある特定のものが見えてこないかと考えたりしても、それには左右されない。ただ観客として見ているという感じである。で、これは幻覚とか夢とかとは、明らかに違うものである。ただ、面白いので、眠れないときに試してみる。普段、眠れないことはほとんどないので、この経験は、主にこの間のカナダへの旅行中と帰国後の、時差の影響のあるときのものである。

さてこれを試してみたが、このときは余りうまくいかなかった。それでもなかなか眠れない。と思っているうちに、いつの間にか眠ったらしい。

ふと気づくと、鎌倉の東の家の茶の間から奥の部屋に向かって歩いている。歩いているというより、視点がカメラの移動のように移動しているという感じである。見えるものがやけに鮮明で、その点が普通の夢と違う。

廊下に出る。廊下の突き当たりに手洗いがある。これは今でもあるかどうか分からないが、自分の子供の頃にはあった。その戸を開けて、というか戸が自然に開いて、中に入る。このあたりで、意識がかなり客観的になっている。これは現実ではないのではないかという感じがする一方で、この立花の本によく出てくる話のように、夢よりも驚くほど現実感がある。欄間のような棧がくっきりと見える。

中にまた戸がある。そこの先はどうなっているのだろうかと思う。そう思う意識には、この手洗いはすでになくなったのではないだろうか、という記憶も作用している。また自然に戸が開いて、古い和式の便器が見える。その小さい空間は清潔である。

実は、トイレの夢はよく見る。必ず明け方である。つまり尿意や便意によって、そういう夢を見るようだ。多くの場合、トイレを探し回ってあくせくする。見つかるほとんどの場合、気持ち悪くなるほど汚れていたり、詰まっていたりする。あるいは、衆人の見ている前で用を足したり、ズボンを汚してしまう、など、実に後味の悪いものばかりである。

ここに出てきた手洗いは、どうもそういう要因により出現したものではないらしく、きわめて清潔だし、こちらも別にそこで用を足そうという気持ちがない。

このとき、不意に後ろから押された。人に押されたのと同様の感覚だが、人の姿とか人の手を目にしないし感じもしない。そのとたんである。身体がふわっと宙に浮いた。後ろから押されたために、ちょうど両足が前方に舞い上がって、仰向けになった姿勢である。身体は狭い空間の天井の辺にある。あっ、対外離脱だ、と思って興奮した。本で読んだことが思い出される。しかし、離脱といっても、自分の身体が下に見えるわけではない。大体、仰向きなので見えないわけだが、むしろ自分の体が宙に浮いている感じなのだ。重量感がまったくない。

さあ、面白い。いろいろ見てやろうと思った。同時に、なんだかいつも簡単に対外離脱を経験できた、とも意識した。立花でも体験していないようなのだ。

見てやろうと思ったら、体は浮いたまま便所から離れて、部屋に戻った。しかし、その部屋は、もとの東の家の部屋ではない。洋間である。広くて暗い。自分の家でもない。見た記憶のない部屋だ。暗いといっても真っ暗ではない。部分的に弱い照明がある。赤や青のネオンのような光がある。仰向けの姿勢から、横向きになったようだ。壁に本棚があり、辞書のような分厚い本が数冊見える。

一生懸命背表紙の文字を読もうとしたが、視覚的に鮮明な印象があるのに、読めない。そのまま、体は頭の方に動いていく。

前方に壁がある。その壁を越えてみたいものだと思った。だが越えてゆかない。むしろ、体が下がり始めた。もう戻ってしまうのか、残念だと意識した。体はすうっと下がり、それまで床に自分の肉体が置いてあると意識したわけではないのに、最後の瞬間に、確かに肉体に戻ったという感覚があった。それも、すぽっと入ったという感じである。そして同時に、これは金縛りが解けた感覚とも似ていと意識した。立花の本にある金縛りとの関連が、実感できたと思った。

しかし、とにかくこの経験に興奮し、孝子に話をしたいと思った。この日、美季子が夜中に自分の部屋から起きてきて、われわれのベッドの真ん中で寝ていた。

ところが気がつくと、美季子と孝子が逆の側にいる。左右が逆というより、頭と足が逆転して、そのために左右が逆転したという感じである。とにかく、孝子を起こして、今の話を興奮してしゃべる。しかし、臨死体験という言葉が出てこないで、脳死体験といったりする。対外離脱という言葉も出てこない。

ここで本当に目が覚めた。つまり金縛りが解けてから、今度は普通の夢を見たのである。目が覚めたときの印象として、その後半の明らかな夢と、それまでの体験とは、質が異なるものだということを強く感じた。

しかし、あまりにあっけなく「対外離脱」を体験し（これは純粋な離脱ではないかもしれないが、共通点はかなりある）、その後続いて通常の夢を見たので、対外離脱や臨死体験といっても、やはり脳内で起こる現象だという認識を強めたといえる。

I. Hayes ed., "Specification Case Studies, 2nd Edition"

通読するような本ではないと思ったが、それぞれの Case Study がなかなかよく書けていて、結局通して読んだ。これでほとんど Z を分かった気になった。

森本哲郎「中国幻視行」（森本哲郎 世界への旅，新潮社）

中国昆明に行くのに合わせて、これを読んだ。森本は江南の地で、陶淵明、蘇軾、白居易、杜甫、李白、などの足跡を追う。あるいはむしろ、それらの中国の詩人に傾倒し、一生中国を思い続け、しかももちろんその地に足を踏み入れることのなかった、蕪村、芭蕉の気持ちを追って旅する。森本の文はいつも平明で、しかし考えさせる。たとえば詩人と政治との関係の日中の違い。清談のイメージの違い。北と南の関係（儒対道など）。

中村隆英「昭和史I, II」（東洋経済）

去年出て評判になり、大仏次郎賞を取った。買ってあったが、しばらくほっておいて、この間、林健太郎の「昭和史と私」を読んだので、その延長で読んでみた。林と違って自分史に重ね合わせるとい

う方法ではなく、客観的に叙述しているが、それでも1925年生まれの著者の思い入れや個人的回想は随所に見られ、時として平板な記述を救っている。

著者は経済学者だが、政治、文化を含めた全体的な歴史記述を目指していて、政治や政治家の評価も書いている。著者の立場は中道的で、安心できる代わりに一貫した価値基準というものはあまり伝わってこない。

終戦までの1926-45を扱ったIの方が、重量感を感じさせるが、これは自分がよく知らないことも多いからかもしれない。逆に、1945-89のIIは、知っているだけに読みやすいが、平板な感じもする。とくにIIの後半はそうで、著者自身、

「高度成長が終わるまでのところは書くのが比較的楽しく、そのあとが苦しかった。(中略)とくに田中角栄内閣のあとは、政治史がつまらなくなるのである。首相が交代しても、局面が変わるわけではなく、書きたいことがなくなってしまうのである。」と書いている。

一方、戦前の政治史でも、憲政会と政友会が理念や政策上の対立でなく、政権を求めて足の引っ張り合いをし、しかし官が強く官僚の政権がたびたび出、結局、挙国一致内閣ができたりするプロセスは、今と変わらない感じがする。

軍がない、というか力がない分だけ、ましだが。

吉川幸次郎「人間詩話」（岩波新書）

この間の中国旅行に持っていったが、帰ってからもちびちび読んで、結局全部読んだ。これは第1刷が昭和32年に出ているが、自分が持っているのは昭和40年の第8刷。¥150。つまり高3か大学1年のときに読んだ勘定になる。親父の本である可能性もあるが、自分で買ったような気がする。ただ、親父の本を整理したときに、重複するものは捨てたので、これも捨てているかもしれない。

森本哲郎に引かれて、また漢詩を読んでみる気になった。そういう時、吉川幸次郎は、実によい導き手である。読み下しというより翻訳に近い和訳が素晴らしい。

1993年

黒田玲子「生命世界の非対称―自然はなぜアンバランスが好きか」(中公新書)

最近、中公新書が好調である。たまたま買うものが重なっただけかもしれないが、面白いテーマを発掘している。この本の話も、この間読んだ本川達雄「ゾウの時間ネズミの時間」と同様、知らない話で面白かった。あるいはガードナーの対称性の本に載っていたかもしれないが、記憶にない。

生物界ではすべて一方のキラリティ（という言葉も初めて知ったが）からなる核酸とアミノ酸からできているというのは、驚くべき事実である。

ただ、この人の文章はあまりうまくない。同じ素材を、別の（たとえばアメリカの）プロのライターが書いたら、さぞかし興味津々の物語にするだろう。その点、本川達雄は文才がある。

小泉武夫「日本酒ルネッサンス―民族の酒の浪漫を求めて」(中公新書)

これも中公新書である。このところ軽い本ばかり読んでいる。

酒について書いた本はいくつか読んだが、これまで面白いと思ったものはほとんどない。わずかに翻訳でエイミスの「酒について」と

というのがまだ楽しめたが、それを読んだ直後にB型肝炎が発覚して飲めなくなったので、印象を悪くしている。

その中で、この本はなかなかよかった。著者は農大教授で発酵学の研究者らしいが、歴史もよく調べている。酒にまつわる儀式、商売、器、肴にまで触れられていて、楽しませる。この本のメッセージは、日本酒が日本の文化であるということで、麴の特殊性、パストゥールに300年先んじた低温殺菌などということが、述べられている。この間読んだ小原二郎の本では木に対するつきあい方が日本は独特であることが書かれていた。そういう話を読むのは、悪い気がしない。自分でも日本文化回帰の気持ちがあるのかもしれない。

山室恭子「黄金太閤 夢を演じた天下びと」（中公新書）

別に秀吉に興味はないし、著者も知らなかったが、年末の朝日の「書評委員が選んだ今年の収穫3点」で、伊藤隆がこの書を「とにかく面白い」と評して選んでいたので買ってみた。つくづく書評の威力は大きいと思う。しかし、中公新書が最近好調だというのは僕の感想というばかりでなく、この20人が3冊ずつ選んだ中に、中公新書が4冊も入っていることからもうかがえる。

秀吉の行動を、大衆の目を意識した演出であるという観点から読み直すというテーマの本である。それを芝居仕立ての章立てで、巧みな語り口で語る。文章はなかなかうまい。たとえば黒田の文章のような生硬さはもちろんないし、小泉の本で出てくる同じ話の不用意

な繰り返しのようないい加減さもない。よく練られた構成と文章である。

しかし、この論点で、秀吉の朝鮮侵攻を肯定的に評価しようとするのなら、無理がある。もちろんまともに肯定しようとはしていない。しかし、従来とは違う視点で見て、「もうろくしたじじい」としてやったのではなく、一定の戦略性のもとに行っただとするのは、やはり再評価しようというものだろう。逆に、朝鮮に同情的な言を残した人に対しては、いやにシニカルである。

「（多聞院栄俊が、高麗の人は、皆さぞ悲しんでいるだろうと書き残しているのに対し）感激しやすい人ならば、ここで日本にもヒューマニストがいたと、大喜びするところだろう。荒みきった日本の良心を守り通した孤高の人。うまくすれば雨森芳州みたいな人気者になるかもしれない。」(p.112)

「行長という一個の人格が、秀吉という背後の束縛を振り切って突然前面に出てくるわけだ。これが昂じると、彼はキリシタンで平和主義者だった、だから戦争の惨禍を最小限に食い止めるべく、明側を語らって両国の和睦の実現のために奔走したのだと、行長公美化の道をひた走ることになる。信仰の人アゴスティーニユ行長がいかにかに立派に振舞ったかを賛美してやまない宣教師たちが最初に敷いた路線だ。凄惨な修羅の時代を吹き抜けた一陣の薫風。」(p.120)

このスタンス、つまり人道主義、平和主義への侮蔑感は、妙に塩野七生に通じる。

このように秀吉に肩入れするのだから関西人に違いないと思って奥付を見ると、「1956年東京都に生まれる。」とある。

しかし、それがプロというものだろうが、さすがによく一次資料にあたっている。しかも専門家臭を出さずに面白く書いているところは感心する。

名和小太郎「技術標準対知的所有権—技術開発と市場競争を支えるもの」（中公新書）

企業法学の斉藤博さんに誘われて、法律とソフトウェアにまつわる問題を扱った学内プロジェクトに参画している。といっても、知的所有権関係の文献を少し集めて見た程度。その関連で、この本を読んできたが、期待していたものとはいささか異なった。

序章と終章を除く9章は、それぞれ印刷、通信、レコード、VTRなどをテーマとした開発と特許をめぐる競争の歴史を、簡潔に述べたものである。下手をするとすでに人がさんざん書いてきたものの焼き直しになるところだが、この人はなかなか要領よくまとめて書く才がある。そして面白く読ませる。かなりいい加減なところもありそうだが、これだけの範囲をカバーしたのだから、薄くなるのはやむをえないところもあろう。

しかし、とくにソフトウェアの特許や著作権の問題に関しては、あまり新しく得るところはなかった。

荒俣宏「目玉と脳の冒険」（ちくま文庫）

博物学を渉猟した本である。歴史というよりはエピソード集であり、きちんとした構成はないが、なかなか博識で面白く読ませる。図版が多く入り、文庫版なので小さいが、楽しい。解説を養老孟司が書いていて、併行して養老の「唯脳論」を読んでいたもので、偶然だがよい読書の流れとなった。

リンネについてもっと書いてほしかった。期待させながらほとんど直接の記述はない。

明治以降の日本の博物学史も面白い。中沢新一の祖父が優性遺伝論者だった (p.353) などの知識も得た。日本の博物学は「やんごとなき」人々でやられてきたという指摘はおおむね正しいのだろうが、例外に牧野富太郎、南方熊楠がいるのでは、例外が偉大すぎるだろう。

養老孟司「唯脳論」（青土社）

なかなかの文章家である。もちろん文章だけでなくユニークな思想の展開をしてみせて、うならせる。

すべてが脳にあるのだという議論もともかく、視覚－聴覚、知覚－運動、構造－機能、自明－証明、という関係が平行しているという主張に力を入れている。

この人は解剖学者だということだが、そこからこういう知が生まれるということに驚く。しかし、考えてみれば不思議ではないのかもしれない。

自分のフィールドでも、という気を抱かせる、刺激がある。

丸谷才一「女ざかり」（文芸春秋社）

10年ぶりの書下ろしという。ベストセラーになっているようだ。

僕は丸谷のかなり忠実な読者である。といってもこの人は、小説は寡作だから、それを大体読むというのは大したことではない。評論の類も結構読んでいます。

この小説も面白く読ませるし、丸谷らしい工夫がいたるところにある。しかし、「たった一人の反乱」や「裏声で歌へ君が代」ほどには熱中しなかったかもしれない。もっとも忠実な読者といいながら、たとえば今挙げた二つの小説のあらすじすらよく覚えておらず、両者がごっちゃに記憶されている程度であるが。

この本の評としては、日経の「春秋」で取り上げているのと、朝日の大江健三郎の書評を読んだ。「春秋」の方は書評ではないが、

「論説委員が主人公というので読んでみたが、生きた論説委員を批評しているのではなく、頭の中で作ったステレオタイプの論説委員を揶揄しているのだから、面白くない」というのである。しかし、これは小説の読み方をはき違えているので、大江が言うように、女性の論説委員を主人公とするという工夫で、日常的な生活を舞台にしながら、知的な会話、考察が出てくることに違和感がないという、舞台構成なのである。別に、新聞の論説委員をからかうための小説ではない。

大江の書評はやけに甘い。しかし、「どんな登場人物も伏線も、すべて生きてムダがない」という指摘は正しい。それがゆえに、作り物という色彩も強く出る。

また、小説のリアリティという問題に突き当たる。丸谷はリアリティのある小説を書こうとしているわけではないし、意識的に方法論的であろうとする作家だから、作り物というイメージは欠点ではないというだろう。しかし、妙にSF的で、登場人物に人間的な親しみを感じないというのも居心地が悪い。

宮崎義一「複合不況」（中公新書）

去年評判になったこの本を、やや遅れて読んでみた。説得力のある論旨である。

現在の不況を、金融の自由化によって生じたバブルの崩壊が主原因であると見て、これまでの総需要減退による不況とは違うタイプであると論じる。使っているデータ、資料はほとんど2次資料で誰でも入手できるものであるが、それを丹念に拾って根拠を示す。新書にしてはページ数もあり、図表が多く、論文風だが、読みにくいことはない。

この本が中公新書であるのは、最近の中公新書の好調ぶりを象徴している。前書きに本人が、本書は「世界経済をどう見るか」、「ドルと円」の続編であると書いている。ところがこの2書はいずれも岩波新書なのである。その宮崎にこの本を書かせて当てた中公新書の編集者は、してやったりというところだろう。

多和田葉子「犬婿入り」（芥川賞）

前半は文章も面白く、話も奇想天外で楽しませる。後半は何かつまらなくなる。

非現実的な話ながら、多摩の公団住宅の街の感じ、人々の生態が見事なリアリティを見せる。「犬婿」のお伽噺がその中での話の展開の中心になってくると、何か違和感を感じてしまう。

しかし、まだ32歳で才能の豊かそうな女性作家である。

野口悠紀雄「バブルの経済学」（日経新聞社）

宮崎義一の「複合不況」とほとんど同様な分析を行いながら、結論が違ふ。現在の不況を、宮崎はバブル崩壊によるものだとし、野口は主として景気循環的なストック調整によるものだとする。当代一流の経済学者が誠実に分析した結果がこうも違ふというのは、経済学の不確かさを示すものだろうか。

野口は計数工学科の先輩である。大蔵省に入り、そのあとイェールに留学して、いい師にめぐり合ったらしい。

高橋三雄「パソコンソフト入門」（岩波新書）

同僚の高橋さんが岩波新書を出して1冊くれた。読んでみて、案外ちゃんと書いているので感心した。彼は一橋の商学部出身で、アメリカのどこかの大学でPh.Dを取り、大塚に来る前は、成蹊の先生だった。専門は経営学からいつしかパソコンソフトに変わっている。毎月雑誌5-6誌にソフト紹介の原稿を書き、毎年数回アメリカに行つて、ソフトを大量に仕入れてくる。彼の研究室は、購入したり寄贈を受けたパソコン機器で一杯である。もっぱらソフトの利用者、紹介者に徹していて、自分でプログラムを書くことはない。それで、計算機系列の教授というのも同僚として最初に変な気がしたが、パソコンについてはむしろ彼の流儀のほうが正統であるかもしれない。

雑誌に記事を多産して、よく本を書く暇があると感心したが、逆に早く書くペースをつかんでいるのだろう。その割には、全体の構成

もまとまりがあり、読ませる内容になっている。深さはないが、入門書としてはいいのではないか。黒川さんの本より悪いということはない。

立花隆・利根川進「精神と物質」 （文芸春秋社）

途中まで読んでしばらくほっておいたが、今日一気に読んだ。利根川の仕事がよく分かった気になる。少なくとも新聞レベルで理解していたことより、はるかに明確な知識を得た。さすがに立花の手腕は大きい。

しかし、利根川が成功したのはやはり米国に行ったからで、研究者を育てるという点で、日米の大学の、そして研究教育のあり方の違いを痛感させられる。

この間の野口の本のときも、自分も米国に留学でもしていたらもっと大きな仕事ができていたかもしれないという感想を持った。しかし今や自分もその教育をする側に身をおいているのである。

この本に関して思い出すのは、慈恵の山内医師と僕の前患者との会話である。診療室の外で待っていて聞こえてきたもので、患者がこの本を読んだといい、山内さんが

「あれは僕も飛行機の中で読んで、帰りにスチュワーデスにあげた。あれを聞き出した立花隆はすごい。よく勉強している。」
と言っていた。

レックス・スタウト，佐倉潤吾 訳「腰ぬけ連盟」（ハヤカワ文庫）

H. R. F. キーティングという人の「海外ミステリ名作100選」というのを買ってしまったために，そこに出てくる本を読みたくなってしまう。

原作は1935年出版でずいぶん古い。しかし，その頃の映画は，今でもTVで楽しめるぐらいだから，それほど古さを感じさせない。エレベータをレバーを使って自分で止めるという辺りに，時代を感じるぐらいである。

ミステリを翻訳で読んだのは10年ぶりぐらいだろう。とても上手い訳とはいえないが，下手でもない。会話が硬いことを除けば，水準以上だろう。まれに，「湯を浴びる」とか「体を清め，衣をまとい」とか，ちょっと古風な表現が出てくる。安易に「シャワーを浴びる」などというより，かえって新鮮に感じる。原作の時代を意識した表現なのだろうか。この翻訳が文庫として出たのは1978年で，それ以前には日本での出版はないらしい。

話は荒唐無稽で，途中からストーリーも大体読めてしまうが，それでも面白く読ませる展開力がある。ワトソン役のアーチャー・グッドウィンが行動型の探偵で，まったく動かないネロ・ウルフと対照させているところが上手く，このアーチャーの語り口が大きな魅力になっている。

しかし、こういうのに余り手を出して時間をとられるものまずいか。

養老孟司「からだの見方」（ちくま文庫）

これは「唯脳論」と違って、雑文集である。いろいろな雑誌に書いた小文を集めている。その中に

「私は中学、高校を通じて、幸か不幸か、イエズス会の学校で教育を受けた」(p.87)

という文章が出てきて、あれっと思った。調べてみると、確かに栄光の4期生で、鎌倉在住という。

「唯脳論」に比べると軽いが、文章家であることは確かだ。

フレドリック・ブラウン、青田勝 訳「シカゴ・ブルース」（創元推理文庫）

これは、スタウト「腰ぬけ連盟」と同時に買ったもの。原作は1947年出版で、この翻訳は1971年という組み合わせも、よく似ている。青年の成長物語である。成長といっても一週間の期間の話だ。しかし、その成長プロセスは、かなり非現実的な筋立ての上でも、納得させるものがある。

池田清彦「分類という思想」（新潮選書）

これは通読したわけではない。かなり変わった本である。最初から激しい主張があるのだが、こちらが部外者のせいかな、何にそんなに

力を入れているのよく分からない。この間、安藤さん、荻布さんとも、この本と中尾佐助の「分類の発想」のことが話題になって、安藤さんも「中尾の本は面白いが、この池田の本はダメだ」と言っていた。

しかし、2章の分類の歴史を振り返ったところは、知識として役に立った。また「自然分類」という言葉も初めて知った。

佐々淳行「東大落城」（文芸春秋社）

この手の本が、事件後25年近く経つこれまでに、ほとんど出なかったのが不思議である。これは当時の警備第一課長という当事者が書いたものである。メモや記録、証言に基づいて、情報としてはいい加減なものを踏まえていない。しかも、この人はなかなか筆が立つ。かなりの部分は戦記物の乗りである。実際、軍記物、戦記物を相当読み込んで、それを実戦でも作戦に利用したらしい。しかし、それだけでなく、この事件の意味を位置づけようという意図もあり、記述もある。充分とはいえないが、単なる機動隊側の勝利賛歌に終わらせない内容にはしている。ただ、考えの基準が、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対比という軸のみであるのが、単純に過ぎる。著者も言うように、学生側の「総括」を、ぜひ誰か書いてほしい。

並木美喜雄「量子力学入門—現代科学のミステリー」（岩波新書）

高校の頃は、理論物理学に漠然としたあこがれを抱いていた。駒場の進学振り分けのときに、最初「理物」に志望を出したのは、自分自身に対するポーズだけだったかもしれない、しかし、すぐに「応物」に転向し、しかも「応物」の中で物理と関係ない「数理」に進んでしまった。そして、量子力学は結局勉強しなかった。朝永振一郎の本を読んだり（下巻の途中で挫折したが）、ディラックの教科書を買ったりしたが、未だによく分からない。

この本を読んでも、結局はよく分からなかったが、単に量子力学の一般的な紹介でなく、並木が専門的な関心を抱く観測問題に焦点を当てて書いているところが、この本のよさであると感じた。

木田元「ハイデガーの思想」（岩波新書）

木田がハイデガーをよく読みこんでいるだけでなく、自分の言葉で解説している点で明快である。ハイデガーに多少とも関心をもつようになったのは、Winograd & Flores の本を読んだからである。

しかし、ハイデガーといいミシェル・フーコーといい、当人の著作を読まずに入門書や伝記から入っているのは、悪い選択ではないだろうが、安易であることも確かである。スタイナーの「ハイデガー」も読みさしている。

この木田の本と並木の「量子力学入門」は並行して読んだ。同じ頃読み始めたのは偶然だが、すぐに意識的に並行して読み進め、同時

に読み終えた。両書には妙に符合するところがある。たとえば「量子力学入門」の第1章は「プロローグー「存在」とは何か？」と題されている。そしてもちろん「ハイデガー」の本には「存在」という言葉が満ち満ちているが、たとえば第1章は「存在への問い」であり、その第1節はまさに「存在とは何か」がカッコつきで題となっている。「量子力学」の終章はまた「エピローグー再び「存在」について」である。

H. R. F. キーティング、長野きよみ 訳「海外ミステリ名作100選」（早川書房）

キーティングが選んだ100冊に、それぞれ3ページ弱の紹介文をつけたもの。こういうものを通読するというのも妙な読書だが、それなりに楽しめる。しかしほとんどの作品や著者の名前を知らない。覚えるのも大変だ。なまじ覚えて本屋で見つけると買いたくなる。そうすると他の読書の時間を食ってしまう。

女性の作家が多いことに、改めて気づいた。

荒俣宏「パラノイア創造史」（ちくま文庫）

荒俣は、高価な図鑑の類をずいぶん出しているが、買って読んだのは文庫ばかり。これももとは85年に出版されたのが91年に文庫化されたものである。

14章で、大体各章に一人、パラノイア、といっても必ずしも厳密な意味での偏執病の患者ではなく、奇人、変人を紹介している。超能力者、心霊者も多いが、それらを常識以上に信じているわけではなく、そのからくりと疑われるものを冷静に紹介しながら、一方で突き放して徹底的にインチキ性を暴くという態度でなく、上手い距離をとって好奇心を刺激するやり方は、なかなか好ましい。

清水義範「江勢物語」 （角川文庫）

相変わらずのパロディ、パスティーシュを集めたもの。主に翻訳にまつわる題材を使っている。たとえば表題作は古文の教科書調現代語訳、「スノーカントリー」は川端康成の「雪国」の英訳の”高校生”による日本語訳、といった具合。後者のアイディアは面白かったが、あまり成功していない。「生具心経」はむしろまともな「般若心経」の解説だが、面白く読める。しかし、全体に清水の他の傑作と比べると、だいぶ落ちる。

清水のエッセイに属する文章を、これでほとんど初めて読んだ。

「町の顔」「我がインド」「再びのインド」。これらの文章は、パロディでなく清水の地が出たものだが、意外とつまらない文章、さえない文体である。内容的にところどころ面白いところはあるが、ピリツとしない。

清水義範「アキレスと亀」 （角川文庫）

「江勢物語」よりこの方が、平均的に出来はよい。同時通訳、マラソン中継、動物園飼育係の宴会、対談、などという題材を取り上げるアイディアは相変わらず大したものだが、この短編集はアイディア倒れに終わらず、よく肉付けした作品が多い。「超現実対談」が一番笑えた。しかし「決裂」「酔中動物園」「復讐病棟」（この最後のだけ少し毛色が変わっている）にも感心した。

荒俣宏「図像探偵」（光文社文庫）

博物学ブームらしく、荒俣の本は多く出ている。しかし、これも楽しい本だ。

荒俣が集めた古書の図、絵をふんだんに使って、ちょっとしたエッセーをつけたものだが、文庫ながら図版の再生具合もよく、楽しめる。著作権の切れているものばかりで、転載するのに問題ないのだろうが、蒐集には時間と金がかかっているはずで、それを手軽に見せてもらう便利さは、ありがたい。

今、このように売られている荒俣宏は、「目玉と脳の大冒険」の後書きに、菊池寛の「晩年」を紹介した後（これは59歳の博物学の博士が、視力の衰えと自分の半生への疑問から、幻滅に至るという話だとのことだが）、

「筆者は序文で「五歳の好奇心」を論じ、博物学のユートピアを謳いあげた。その舌の根も乾かぬうちに「晩年」を語るのは、まことに心苦しいものがある。だが現実にはこのユートピアは、視力をはじめ

とする自分自身の肉体をゆるやかに犠牲にすることによってのみ維持を得るもののようだ。いまこの文章をつづる筆者も、ほとんど永瀬秀三に近い幻滅を味わい、いまや心と視界の両方を失いつつある惨状である。」

という暗い文章を残している。

もっとも、文庫版あとがきには、少し明るさがあって、

「ちなみに、初版あとがきで触れた著者の精神的ならびに肉体的健康の劣化についてであるが、少なくとも目に見える部分での状況は、幸いにも一層の悪化へ向かってはいない。」

と書いている。

いずれにせよ、このあとがきは、妙に気になった。自分は精神的な落ち込みというのは今のところまったくないが、視力、記憶力、聴力の減退は、つくづく感じる。

G. スタイナー、生松敬三 訳「ハイデガー」（岩波同時代ライブラリー）

木田元の新書に続いて、ハイデガーの入門的解説書を2冊読んだことになる。

この本でも、新しい序言を木田が訳しており解説もつけている。また本文の訳者、生松は、すでに没しているが、この本を訳すにあたって木田にずいぶん相談したと書いている。

結局、ハイデガーの思考のもとには、「存在」に対する驚きがある。これは、自分が子供の頃繰り返した問い「僕って何だろう」と同じものに違いない。あれは「存在への問い」であったのだ。

Michael Crichton, "Jurassic Park"

確かによくできている。物語の中で Malcolm に徹底的にやっつけられる Hammond というこの park の発案・実行者のできなかったことを、Crichton は結局小説の形で実現し、Spielberg が映画で実現して、大もうけをするという構図はちょっと皮肉だ。

しかし、登場人物が Grant だけだと典型的なインディ・ジョーンズ型の話になるところを、Malcolm を登場させて少し考えさせるものとしているのは、工夫ではある。

恐竜に追っかけられてハラハラさせる場面は、余りに常套的で鼻についた。しかし、それを除けば、見事な手並みだ。

Ed Yourdon, "Decline & Fall of the American Programmer"

Jurassic Park と並行して読んで、ほとんど同時に読み終わったが、同様に気楽な本である。Caper Jones が IEEE の Spectrum に書いた書評を松原さんに見せてもらって読んだが、あの書評は当たっている。この題からすると、アメリカのソフトウェア産業が、外国の、より安い高品質のソフトウェアに負けるという警告の書のように見

えるが、それについて直接書いているのは第1章と付録のインドのソフトウェア産業の話だけ。しかも、インドの話は思ったより「冷静に」見えていて、現状ではそれほど脅威でない、というトーンが強い。

もちろん、2章から10章に取り上げられている CASE とかりエンジニアリングとか再利用といった個別の項目は、それらにこう対処しないと「世界クラス」のソフトウェア企業になれないという警告として書いているので、著者の意図は一応通っているであろう。

個々の内容は、取り立てて目新しくはないものの、上手い語り口だし、調査しようと思えばその出発点としても使える。終わりに必読書が87点挙げてあるが、このうち読んだものが少ないだけでなく、名前も聞いたことがない著者や題名が多いのには参る。

Robert James Waller, "The Bridges of Madison County"

Jurassic Park に続いて、またベストセラーものである。日本でも翻訳がベストセラーになっている。

中年の男女の4日間の恋愛を扱った小説である。時は1965年。この設定に、古きよき時代への郷愁という作者の意図がうかがえる。男はカメラマンであるが、時代に遅れてきたものと自分で認めている。女はイタリア系だが、Iwoa の農夫の人妻である。つまり、ボヴ

アリー夫人，アンナ・カレーニナにつながる設定である．やはり西洋文明の伝統が，流れているのだろうか．

フェミニズムとは遠い．フェミニストは多分好まない小説だろう．しかし，林真理子はフェミニストかどうか知らないが，本の広告で褒めている．

かなり仕掛けが見え見えの小説だが，今日電車で残りの1/4ほどを読んで，不覚にも涙を出してしまった．作者自身カメラマンで，これが処女小説らしいが，文章はなかなか上手い．20年前の Love Story というベストセラーを連想する．

猪瀬直樹「黒船の世紀」（小学館）

猪瀬の本は出ると読むという感じだ．書く方もよく息が続くと思う．今度は，日米未来戦記というテーマだ．なかなか面白いところに目をつけた．それが出た頃は火はやりで，今はまったく忘れられているか黙殺されているもの．それを発掘するという作業である．忘れ去られているといっても，そんな昔のことではないから，資料収集はそれほどの苦労ではないかもしれない．しかし，ホーマー・リー，水野広徳，バイウォーターなどの伝記的部分を交えた紹介は，面白く読ませる．また黒船以来の日本人のアメリカに対する屈折した心情を，大衆的な読者層を狙った未来戦記で跡づけるという意図は，現在の日米貿易戦争の状況と照らし合わせても，面白い．

しかし、この作品では、猪瀬はかなり紹介に徹していて、自分の発想をほとんど前面に出さない。もともとそういうタイプだが、「ミカドの世紀」ではストレートな言い方ではないものの、かなり自分の思索の表明があったと思う。

林京子「道/やすらかに今はねむり給え」（講談社文芸文庫）

美季子のマリア幼稚園の一番の友達に、林あき子ちゃんという子がいる。1月ほど前に、そのあき子ちゃんお祖母さんが芥川賞作家だということを孝子が聞いてきた。林という名前だというから、「林京子かな」と唯一思いつく名前を言った。それがまさしく林京子だったのである。

「群像」の1000号記念だったかで、群像に載った過去の代表作品を並べた特集号があった。それを買って、その中で林京子の「空罐」という作品を読んだ。

これで初めて林京子という名前を知ったし、これまで読んだこの作家の小説はこれがすべてであった。これもやはり原爆を扱ったものだったが、かなり強い印象があったので作家の名前が頭に残った。

そのうちに、孝子が講談社文芸文庫のこの本に著者が署名されたのをいただいてきた。孝子は早速読んで、今度の入院のカバンの中に入れてくれた。

2つの小説が採録されているが、どちらも8月9日に学徒動員で三菱の兵器工場で働いている際に被爆した経験を、女学校の先生と友人を中心に書いている。

「道」の方は生存している先生を訪ねて、いずれも工場に監督としてついていて亡くなった3人の女の先生が、亡くなったときの状況を聞く、というものである。「やすらかに今はねむり給え」は、先生の一人の「工場日記」と友人の日記を材料に、動員が始まってから8月9日で実質的に動員が終わるまでの経過を描く。やはり動員されている七高生との淡い交流などもある。しかし、全体のトーンは重い。文章は淡々とし、強い感情の吐露を避けているが、井伏鱒二のような軽味はない。しかし、工場日記や友人の日記を引用することで立体感を与え、また沖縄の中学生の話を交えることで視野を広げている。

このような題材を、ノンフィクションでなく小説として書くことは、どういう意味があるだろうか、ということを考えさせられる。

名前の問題は案外大きい。「道」では先生の名前が T, K, M というイニシャルになっている。「やすらかに・・・」では先生も友人も名前を与えられている。しかし、著者のあとがきで、いずれも仮名であることが明かされる。そして、そこで本名が明示される。

もちろん、名前だけの問題ではない。明らかにこれは小説であり、ノンフィクションではない。しかし、読者としてはどこにその違い

を感じるのか、作者の姿勢はどう変わるのか。

「道」のような作品は、外国語、とくに英語に訳されてしかるべきだろう。すでに翻訳されて紹介されているのだろうか。

塚本哲也「エリザベート パプスブルグ家最後の皇女」（文芸春秋社）

この本は大宅壮一賞を取り、その選考委員が軒並み褒めていた。いつも辛口の立花隆も賛辞を寄せていた。

猪瀬の「黒船の世紀」、林京子の小説、そしてこの本と、期せずして20世紀の戦争にまつわる話を読んだ。その中で、これは歴史としてのスケールがもっとも大きい。19世紀末から始まって、第一次世界大戦、第二次世界大戦、その後の冷戦まで含めた歴史が、オーストリアという多くの事件の中心となる舞台で語られる。エリザベートの一生を追っているが、前半は個人的な生活を描くところが多いものの、後半はむしろ中欧の歴史という面が強い。それが証拠に、彼女の父、祖父の皇帝、二人の夫と恋人にはかなりの記述が当てられているが、子供たちについては驚くほどわずかしか触れられていない。

林京子の小説とは逆の感想がある。この本はノンフィクションだが、多分に歴史小説的である。「彼女は・・・と思った」という書き方とか、創作されているに違いない会話とか。これも一つのスタイ

ルだろうが、たとえば柳田邦男の「マリコ」に感じたような、多少の違和感がある。

しかし、著者も言うように、この歴史が1989年以降の東欧革命につながっているのだ。その点で、自分の不足している知識を大いに補ってくれた。

こういう本を読むと、われわれは稀有な平和の時代に生きていると改めて思う。もちろん現在でも、ボスニア、レバノン、ソマリア、カンボジアなど、戦争、内乱地域は多い。だから時代だけでなく、生まれた場所にも恵まれた。最近の Time を読むと、ボスニアの話、極貧売春の話、アメリカの少年たちが銃を集めている話、麻薬の話、とにかく胸塞がる話ばかりである。われわれだけがこのように平和と安逸を享受していていいのだろうか。

Wordsworth, "Introduction to Z"

一応通読したが、練習問題などやってみないと、身についたとはいえないだろう。

筒井康隆「本の森の狩人」（岩波新書）

「唯野教授」でよく分かったが、筒井という人は読書家であり、小説の方法に意識的であるだけに、「文学研究者」ともいえる読み方をしている。51冊の本が挙げられているが、読んだことのあるのはトーマス・マンの「魔の山」だけである。

ジッドの「贗金つかい」も読んだかもしれないが、覚えていない。それでも充分楽しめる。しかし、一方で、これで読んでみようという気になるものも存外なかった。

M. Mitchell Waldrop, "Complexity - The emerging science at the edge of and chaos"

去年の夏、同じように一般向けで、同じような題材の S. Levy, "Artificial Life" を読んだ。この手のものでは、Gleick の "Chaos" に感心したが、それと比べるとかなりおちる。なんといっても冗長だ。取材対象がインタビューで語った話を、なるべく忠実に起こしているように見える。もちろん、単純に起こしているのではなく、手を加え構成に工夫はしているはずだが、Levy の本に比べても、技術の内容にはあまり突っ込まない。その分、人物の半生、性格、人間関係などについての記述が多い。

しかし、こういう本も、この分野への導入、論文を読んでいく手がかりとしては有益だ。しかし長い。さらにやはり日本語で読むより手間がかかる。読み飛ばしがあまりできない。その分丁寧に読んだ。

大場みな子「二百年」（講談社）

題と比べると短い小説なので、短時間で読んでしまった。

芥川賞作品はわりと忠実に読んでいるが、ほとんど頭に残らない。その中であって、大庭の「三匹の蟹」は強く印象に残っている。しかし、その後、大庭の小説は読んでいない。

「二百年」という作品には、いろいろな時間が流れている。「現在」は孫の杏子が古い本を見つけて、それから過去を回想して、杏子を深大寺公園に散歩に連れ出して、帰ってくる半日である。その間に曾祖父の話から始まって150年のことが、女系を中心とした家族の歴史と、それに関連する社会や文学の歴史とを絡めて描かれる。そして杏子の50年後までを想像して、200年に及ぶ。

登場する男には、直治を除いて、おそらく意図的に名前が付けられていない。夫とか父とか祖父とか兄とかいう言い方である。ただ、夫、父の姓は示されるが、それは「私」や母の姓として出てくるに過ぎない。このことが象徴するように、男は脇役で、性格づけもぼかしてある。それも充分計算してのことのようだ。

ところどころに楽しい笑いを誘う描写がある。単なる引用（「経済実務家要鑑」など）がとてもおかしい。家族の私的な回想のようで、人間の歴史の繰り返しということへの省察でもある。直接の登場人物ではないのに、与謝野晶子、北原白秋、津田梅子などが、それらと同時代を生きた普通の人々の生き方をたどることで、妙に生き生きとしたイメージを与える。これは新鮮だ。

これはもともと雑誌に連載されたもので、そのときは毎号挿絵があったことがあとがきに書かれている。本にしたときにそれを入れなかったのは惜しい。

Amanda Cross, "Death in a Tenured Position"

大庭の小説と比べると、こちらはミステリ、完全な作り物の世界で、まるで対照的なように見える。しかし、どちらも女性作家というだけでなく、案外に共通項がある。

単純な話、どちらにも Henry James や Madame Bovary が言及される。Amanda Cross はニューヨーク市立大学の英文学教授で、この本の主人公の Kate Finsler もニューヨークのある有名大学の英文学の教授という設定である。だからミステリといっても文学的で、事件の解明に被害者の読んでいた詩や伝記が手がかりになる。多くの引用があり、英文学の教養の乏しいこちらには、ピンとこないところも多い。表現も単純でなく、部分的に読みにくいところがある。ときどき辞書を引いて、結構丁寧に読んだ。

Amanda Cross と大庭みな子は、多分同じぐらいの年ではないだろうか。大庭は米国で暮らしていて、文学をやっていたわけだから、それだけでも共通部分がある。Kate はガチガチのフェミニストではないが、フェミニズム問題は、この本の中でも重要な、しかも上手に扱われたテーマである。一方、大庭の本ではそれは前面に出ていないが、しかし曾祖母、祖母、母、自分、娘、孫娘を描くことで、

女性と社会の関係が自然に対象となっている。Cross のこの本に登場する男では、Moon という人物のみが、ある程度個性を持った人物として描かれている。

引用が多いといったが、そのごく一部について、調べてみたりした。たとえば福音書ルカ伝が出てくる。これを調べたら、本文では 13:37 となっているのが、12:37 の間違いであることに気づいた。Eleaner Marx というのが出てきて、ぜんぜん知らなかったが、Marx の三女で自殺している女性である。学生るとき買わされて読んでいない、向坂逸郎の「マルクス伝」を見てみたら、写真が出てくる。しかし、「マルクス伝」の本文では妻の話は少し書いてあるが、娘についてはまったく触れられていない。Eleaner はボヴァリー夫人の翻訳をしたそうである。

Robert X. Cringeley, "Accidental Empires"

Bill Gates, Steven Jobs などの悪口を徹底的に書いた本である。裏表紙に、

"Robert X. Cringeley is the most influential gossip columnist in an industry practically ruled by gossip."

とある。いいえて妙だ。

話を面白くするために書いているから、どこまでまともに取ったらいいか分からない。しかし、案外ちゃんとしたことも言っている。とくに最後のメインフレームの没落、PCメーカーの没落、残るのは

チップとソフトウェアのメーカーだけ、という予測などは説得力がある。そしてソフトウェアの開発は、映画のスタジオのモデルが今後の参考になるだろうという。

スティーヴン・J. グールド、渡辺政隆 訳「ワンダフルライフ」（早川書房）

グールドの書くものは面白いが、その多作ぶりにも驚かされる。この本にしても、もともとグールド自身がよく知っている人たちの仕事であり、その内容も自分のフィールドのものとはいえ、あらためて一連のモノグラフを精読しだけでなく、ウォルコットに関してスミソニアンに残されている膨大な資料を掘り起こしている。この2つの材料だけでもグールドの腕にかかれば充分面白いストーリーになるのだが、それらを種の爆発的な多様化と、多くの種の偶発的な絶滅という史観を通して、それを根拠づける材料と、そのような革新的な考え方を受け入れない保守勢力という図式で展開しているところが見事である。

バージェスの化石が示す動物たちは、確かに変わっているが、こちらにはグールドが強調するほど突飛に異なるとは感じられない。この点については、訳者あとがきによると、専門家の間でも、しかもバージェス化石の新解釈を提出した当事者たちの中にも、異なる意見があるという。

しかし、とにかく面白い本だった。

佐野眞一「遠い「山びこ」」（文芸春秋社）

「エリザベート」と大宅壮一賞を争った作品で、多くの選者がほめていた。

「山びこ学校」がベストセラーになったときはもちろん知らないが、親父が持っていた本を、中学か高校のときに拾い読みした記憶がある。今でもその本はある。

それがもう40年前だという。そして、その山びこ学校の卒業生や、もとなった作文集「きかんしゃ」を探し出すことすら、相当の努力を払わねばできなくなっている。この作品の面白さの一部は、そのような探索プロセスそのものにあることは確かで、これこそジャーナリストというものだと頭が下がる。しかし、この本の本質は、農業が崩壊し、一方、日本経済全体は工業を中心に成長していく中で、無着による教育の結果や、日本における教育そのものが、どう変わっていったかを跡づけたところにある。

第5章「翻弄される山村」の中で、戦前の山元村、それを含む山形県の農村の状況を描いたところは本筋と関係なく、わずらわしいとすら思ったが、しかしその意味で著者の意図をよく現したものである。

それにしても、引用されるもとの生徒の作文は、やはり感動的だ。結局、すべての魅力はそこに帰着する。

やや突飛な連想だが、丸谷オーのことを思った。丸谷が直接「山びこ学校」に触れた文章を読んだことはないが、国語教育における「思ったままを書く」運動には批判的である。古典の技法を学ばない段階での詩作も無意味とする。おそらく無着とは対照的な考え方の作家だろう。その丸谷は山形県出身である。

同じ山形でも酒田で、山元村の子供たちとは、家庭環境も受けた教育も大きな隔たりがあろう。しかし、地理的には近い。年齢的にも同じようなものだろう。

丸谷はこのような土着「文学」をおそらく評価しない。農業についても語らない。最近、丸谷の書くものに感ずる多少のフラストレーションは、そういうところから来るのかもしれない。しかし、そういう自分は戦後に生まれ、東京近郊で恵まれた環境に育ち、彼らの境遇に対しては、本を通じてしか実感できない。

この本で、批判的な文脈の中で出てくる農業基本法に関係したはずの親父は、「山びこ学校」をどう読んだのか。農林省の役人ではあるが、農業の生産に関わったことはない。東京で生まれ育ち、東大を出ている。

もう一人連想するのは、中上健次。インテリを参らせる土着の力という点では共通する。山びこ学校から、中上のような作家が生まれてもおかしくなかった。佐藤藤次郎というのが、成人後、無着を批

判しつつ、もっとも忠実に無着の教えた路線を守り、村に残り、かなりの本を出しているらしいが。

立石泰則「覇者の誤算（上・下）」（日本経済新聞社）

コンピュータ産業の歴史を書いた本である。上下2巻でずいぶん長いが、一気に読ませる。ここで覇者とはIBMのことらしい。しかし、最も力を入れて書いているのは通産省の平松と富士通の池田をめぐる人々と事件である。もちろん彼らが常に巨大な相手として意識したIBMは、重要な役割（敵役だが）を占める。

パラメトロンの頃の話や、池田の話は、よく知っているようでいてむしろ知らないことのほうが多く、この本で教えられることが多かった。

技術的な記述はもちろん物足りないだけでなく、誤りらしきものも多い。産業史としての経済的な視点も突込みが足りない。しかし、著者の狙いは人間のドラマとしてのノンフィクションであり、その点については面白く読ませる。

それにしても、通産省は、今から思えばずいぶん露骨な保護育成と外国メーカーの排除をしてきたものである。イギリスなどでもそうだったらしいし、それが成功して、日本では国産のコンピュータ産業が生き残ったのも確かだろう。最近のアメリカの貿易摩擦に対する政策は、あまりに横暴だという感があるが、このように歴史を振

り返り、過去に日本がどれほど保護主義的であったかを考えると、あながち無理な要求とも言いにくくなる。

IBM だけでなく、富士通を初めとする日本のメインフレームもおかしくなった現在、「誤算」をしたのは IBM だけだろうか。そういう意味でも、面白いタイミングで出た本である。

北杜夫「青年茂吉」「赤光」「あらたま」時代」（岩波書店）

北杜夫の本を読んだのは、多分初めてだろう。しかし、気分的には親しい作家である。というのは、高1のときにトーマス・マンの「魔の山」を読んでえらく感激したが、その新潮社版の全集の月報に北杜夫の文章があり、若いときにマンを読んで感激し作家になった、というようなことを書いていたからである。

同じ頃、加藤周一の「読書論」を読み、最近これが岩波から再版されたが、そこで貨物船の旅は本を読むのに最高だということが書いてあり、これが自分の頭の中ではおそらく「ドクトルマンボウ航海記」の連想で北杜夫と結びついて記憶されている。

斎藤茂吉の歌というのも、知っているようで、実はほとんど読んでことがない。しかし、中学だか高校だかの国語の教科書に採られている赤光のいくつかの歌には感動した。それは「のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死にたまふなり」のような、よく知られた歌だったと思う。

大文学者の息子は大変である。文学者に限らず、偉大な人間の子供たちに共通するところがあるろう。一方で、とくに作家になった息子にとって、茂吉のような偉大で特異な歌人、文学者を父に持ったことは、幸せというべきところも大いにあるはずだ。

この本は、そのような幸福と不幸がよく出ていて、それだけで充分面白い。もちろん、茂吉の歌の入門書としての役割も充分果たしている。そして、北の評価、この歌が好きだ、これは大したことない、という批評は、妙に僕自身の好みと一致する。僕にもそれなりに鑑賞眼があるということだろうか。

この間の「遠い「山びこ」」の感想で山形県との関連から丸谷才一に連想が及んだが、茂吉も山形出身である。そして、「遠い「山びこ」」に出てきてそれまで名前を知らなかった結城哀草果という人も、この本に何度か登場する。

小塩節「トーマス・マンとドイツの時代」（中公新書）

「魔の山」以来、トーマス・マンは好きな作家だが、読んでいない作品も多い。「ブッデンプログ家」「ヨセフとその兄弟」、それに「ファウスト博士」も途中で投げ出している。

この著者は「ヨセフとその兄弟」などを訳した人だそうだ。また、未亡人のカチアと交流があり、それについてはこの本でもかなりのページを割いている。

マンだけではなく、ドイツの歴史、文化に造詣が深いことがよく分かる。いろいろ教えられることが多かった。

しかし、文章にはあまり感心しない。内容的にもやや物足りない。

北杜夫「壮年茂吉」（岩波書店）

「私はあくまで小説家であり、死ぬまでにどうしても書いておきたい作品がいくらかある。それにとってはこの駄文は有体に言って妨げになる。それゆえ幾度か止めようかと考えたことも事実である。」(p.213)

とか、自分の体調の悪さを言う文章も時折出てくるが、それでも面白く読める本である。

しかし、この時代の茂吉は、人生の辛苦と闘い続けている。日記を中心にたどられる人生の跡を追うだけでも、小説的な感興を覚える。引用される短歌の評価については、この巻では北杜夫の意見と少し違うと感じるところもあった。

しかし、歌集などほとんど読んだことのない自分である。

メリメ、杉捷夫「カルメン」（岩波文庫）

この間、ロイヤルオペラのカルメンをTVでやっていたので、録画しておいて見た。通してちゃんと見たのは初めてである。やはりよくできたオペラだと思う。

カルメン役はマリア・ユーイングという歌手だが、美人ではないし、声もとくに素晴らしいというほどでもないけれども、カルメンの役柄によく合っており、それだけの演技力もある。カルメンの音楽はオーケストラ用組曲などで耳になじんでいるが、やはりビゼーの音楽は見事だと感じる。これは91年の公演のビデオだが、舞台、演出がまた素晴らしい。

ストーリーはヴェルディ物によくあるような荒唐無稽のものではない。やはり椿姫と同様、ちゃんとした原作があるものは、そこがしっかりしている。しかし、闘牛士が山中に現れるのは唐突だし、カルメンがトランプで自分かホセが死ぬ運命にあることを占うところはあまりに常套的に思った。それで、昔読んだ原作を読み直してみた。昭和45年4月30日第42刷発行の岩波文庫である。だから大学院のときに読んだのだと思う。この頃、オペラには関心はなかったが、「ニーベルングンの歌」とか「トリスタンとイゾーの物語」とか「ダフニスとクロエ」とかを文庫で読んでいる。それから「ローランの歌」などの叙事詩をいくつか読み、また、「オイディプス」だとか「フェードル」「アンドロマック」などを読んでいる。

オペラの台本で闘牛士を出したのは、スペインという舞台ではやはり欠かせないという作為だったのではないかと思ったが、原作でもルーカスという闘牛士が終わりの方に出てくる。もっともカルメンの話の中で名前が出てくると、ホセが闘牛場でルーカスの倒れるところを見るという形で登場するだけで、直接描かれるわけではな

い。しかし、原作で何人か出てくるカルメンの相手、ホセの嫉妬の対象を、闘牛士に代表させるのは悪いアイディアではない。カルメンの運命についての占いも、違う形ではあるが出てくる。原作にはなくてオペラで出てくるのは、母親のもとにあってホセを慕っている娘ぐらいで、これも悪い効果ではない。

全体は、考古学者の語り手が見聞きしたことに、地理歴史的な知識を交えながら語るというスタイルになっていて、ペダンティックなところがある。これも昔の小説のスタイルだろう。

とにかくカルメンのような魅力と魔力を持った女、それに虜になって破滅の人生をたどる男、という典型を作り出したメリメの力は大したものだ。しかし、それがこれだけ広く知られ、長い命を保っているのは、オペラの力、ビゼーの力に違いない。

大庭みな子「津田梅子」（朝日文庫）

大庭の「二百年」に津田梅子の名前が出てくるが、あの小説の構想自体にこの津田梅子の伝記の仕事が大いにインパクトを与えているようだ。

梅子がアメリカの養母アデリン・ランマン宛てに、実に数百通の手紙を書き、それが1984年に津田塾で偶然見つかった。この伝記はその手紙を材料としたものである。なんといっても梅子の手紙の文章が心を打つ。

7歳でアメリカに渡って、10年経って帰ってきたときには、日本語も日本の文化も、家族のことすら忘れている。しかし、その状態からアメリカを単に懐かしみ、アメリカに帰ろうとするのではなく、逆にまた日本にすぐ同化してしまうのでもなく、日米を越えた視点を維持しながら、しかも日本における教育という使命感を全うするという意志的な人生を選びとる生き方には、感嘆するほかない。しかも文章の質がよい。表紙の写真を見ると、少女時代のもののようだが、美少女である。

大庭の書き方は、小説家らしい。資料として手紙を翻訳して収めるというのでもなく、それを材料に、他の資料と総合して歴史的に梅子の伝記を叙述しようとするのでもない。自らの体験を巧みに交え、梅子の性格、人生観、そして生きた時代というものを浮かび上がらせる。それはそれで成功しているが、もっと本格的な評伝としての著述や、手紙全体の翻訳も、（大庭の手によらずとも）出版されてもいいように思う。

解説という題でなく「巻末エッセイ」として鶴見俊輔が書いているが、これにはがっかりした。ほとんど本文の抜書きみたいなものだ。鶴見ともあろうものが。

Stephen Hawking, "Black Holes and Baby Universe and Other Essays"

大ベストセラー “A Brief History of Time” 以来の本である。新作と言っても書下ろしではなく、方々で行った講演のための原稿などを集めたものである。

初めの3つは自らの生い立ちを語ったもの。それから前著についての後日談や批判への反論などがあり、7～13が black hole などについての Hawking 自身を中心とする最新の研究状況を一般向けに書いたものである。不思議なことに black hole からは radiation があり、長い年月のうちには質量が消えてゆくこと、宇宙の始めは、imaginary time の次元では特異点でないこと、などが繰り返し語られるので、分かったような気になるが、もちろんよくは分からない。

論文を読んだら分かるだろうか。一般相対性理論も量子力学もよく分かっていないのだから無理か。

最後のインタビューも面白い。

藤森照信「日本の近代建築（上）（下）」（岩波新書）

久しぶりに読み終わるのが惜しいという本だった。この人は路上観察だとか建築探偵だとかいう言葉から、軽い若者向けの「ピア」的な指向の人かと思っていたが、まったく間違いだった。知識が広い。整理の手際がよく、体系化されているが、かといって無味乾燥な整理ではない。文章がいい。単なる歴史記述でなく価値観が入ってい

るが、しかし趣味的なものではなく、偏見にとらわれているようでもない。過度の思い入れもなく、とてもいいところでバランスを保っている。

（上）はもちろん（下）も引き続き見事な記述だが、できれば戦後から現代までの流れを、簡単でもいいから書いてほしかった。しかし、モダンからして藤森の関心は低いらしい。

また、社会政策派という章で、震災復興などに見事な活動をしたとして、佐野、池田などの紹介があり、そういう話は初めて知ったが、一方で東京を初め日本全国いたるところに、無様な街並み、無計画・低質の住宅群があることにまったく触れられていないのが、奇異に感じられた。とくに東京は、明治、震災、戦災という3つの願ってもない都市計画のチャンスをことごとく無駄にしてきたというのが、僕のこれまでの理解だっただけに、もう少し詳しい議論が聞きたかった。

藤森照信「建築探偵の冒険」（筑摩書房）

やはり岩波新書の「日本の近代建築」とはスタイルがずいぶん違う。軽薄体に近い文体である。初めは妙に読者に媚びる感じがして馴染めない感もあったが、慣れてくると、これはこれで一つのスタイルかと思えてきた。もちろん、内容もよりくだけて人間的である。渡辺邸、看板建築、東京キネマ、鏡子の家（デ・ラランデ邸）

などではとくに発見のプロセスがあり，人間のドラマもあって，感心させられる．

皇居の話，渋沢の田園調布の話など，猪瀬直樹と題材が一致する部分がある．実は「日本の近代建築」でも猪瀬を連想するところがあったが，より直接的なつながりを見い出した．しかし，両者のアプローチは違う．

藤森照信「建築探偵日記」（王国社）

これは「建築探偵の冒険」と出版社が違うが，題名だけでなく本の作りまで似ている．しかし，内容的にはもっと薄い．というのも26件の紹介があるが，1つに当てられたページ数が少なく，ダイジェスト版のような感じで物足りない．

それでも93年7月に発行されたこの本に出てくる建物のうちの少なからずが，すでに消滅しているというのは驚くべきことだ．もとは86/6-92/9の期間，雑誌に連載されたもので，単行本化するまでの間に壊されてしまったのである．

自分も，親の家を壊したが．

中川信弘「ソフトウェアの保護（新版）」（有斐閣）

法律家の文章も，案外面白く読めるものだ．

柳父章「翻訳語成立事情」（岩波新書）

この本については、月間Asahiの「日本がわかる100冊」で、長谷川三千子という人が強く薦めていたので知った。「100冊の本」の類は雑誌の常套的な企画だが、つい買ってしまう。しかし、この紹介がなければこの本の存在に気がつかなかっただろう。

社会、個人、近代、美、恋愛、存在、自然、権利、自由、彼・彼女という、いずれも明治に翻訳語として成立した語を取り上げ、それらがいかに「カプセル化」して、つまり意味の体感されない、しかしありがたく便利な言葉として、あるいは原語とどれだけずれた形で、創られ使われてきたかを論じている。この人の主張にはかなり共感するところもあるが、一方で相当強引という感じも抱く。

翻訳語として工夫され、受容されていく過程で、原語との距離が十分に縮まってきたということもあるのではないか。

吉田政幸「分類からの出発ープラトンからコンピュータへ」 (中公新書)

中尾佐助、池田清彦という生物学畑の人の分類学の本を読んだが、この吉田という人は、化学系である。現在、図書館情報大学副学長という。やはり、この本のほうが、こちらの思考に合う。とくに初めのうちは面白い。この人には、プラトン、アリストテレスから、中世、ルネッサンス、近代、現代とつながる思想の系譜に沿って、分類学を見ようという意図がある。しかし、それでも羅列的、ばらばらという印象は残る。

なお、中尾佐助が昨日死んだ。

藤森照信「建築探偵神出鬼没」（朝日新聞社）

文章は短いが、写真の質がよい。

John Grisham, "The Pelican Brief"

今年のベストセラーで、確か5月に Baltimore に行ったときに買って
おいたペーパーバックだが、読み出したらやめられなくなった。ベ
ストセラーになるだけあり、うまいものだ。著者は法律をやってい
た人らしいが、米国の弁護士制度には相当の不満を持っているよう
だ。Bush を連想させる大統領、FBI長官、CIA長官、Washington
Post などが出てきて、真実味があるが、政府の要人たちが辛らつに
戯画化されているのにはびっくりする。

Bertrand Meyer, "Object-Oriented Software Construction," Prentice Hall International Series in Computer Science.

この本には本当に感心した。

司馬遼太郎「「明治」という国家」（日本放送出版協会）

これは親父が買った本である。平成元年10月15日の第2刷発行であ
る。親父の癌がわかったのは11月22日で、入院が12月5日。いった
い親父はこの本を読んだのだろうか。

親父が病院で読んでいたのはアンドレ・モーロワの「英国史」である。これは親父の古い蔵書だ。で、これを読み終えたはずだ。次に出たばかりの井上靖の「論語」を家から持ってこさせたが、結局これは読まなかった。それは棺に入れた。

僕はこの司馬の本を、親父が読んだ気がする。そういう読書も死んでしまえば結果は残らない。

この本はNHK-TVで放送した内容を、NHKが出版したものである。この放送を、自分は見た記憶がない。長崎、ロンドン、アムステルダムなどでロケをしてるのは、映像を見ないことには味わえない。文章としては重複も多い。そういう欠点はあっても、充分楽しめたし、司馬のよさがよく出ている。

このところ、津田梅子、黒船の世紀、藤森の建築史、北杜夫の茂吉など、明治という時代に触れることが多かったので、この本を読んでもみる気になった。また、この間の柳父の本と同様、「日本がわかる100冊」に入っていたこともある。

John Grisham, "The Firm"

これは "Pelican Brief" の1作前のものである。やはり、500ページを面白く読ませる才能に感心する。話としては、Pelican Brief より少し無理がある。

木村陽二郎「ナチュラリストの系譜―近代生物学の成立史」 (中公新書)

フランスの王立植物園を中心に、18-19世紀に活躍したナチュラリストを短い伝記集というスタイルでまとめたもの。著者自身、フランスで勉強した生物学者だが、よく歴史をフォローしている。しかし、歴史の流れにしても、話の流れにしても、やや飛び飛びの感はある。

結局、この本も分類学の本である。分子生物学が生まれるまでは、生物学は分類学であったということか。

1992年

中尾佐助「花と木の文化史」（岩波新書）

これは案外面白かった。自分としてはおよそ知識の乏しい領域だが、それだけに新鮮な面白さがある。もちろん本から得た知識では身につかないだろうが。

同じ著者の「分類の発想」でも感じたが、この中尾という人の著作は、構成のきちんとした系統だったものではなくて、該博な知識を（実に博識である）、座談風に興のおもむくまま出してくる。そこによさがあるし、物足りなさもある。文章もところどころいい加減だと感じるところもあるが、良きにつけ悪きにつけ、個性的である。

しかし、それなりの構成はもちろんあるし、強い主張もある。日本の江戸期に、当時の世界一の花卉園芸文化があったという指摘など、なるほどと思わせる説が随所に見られる。

石川淳「新釈古事記」（ちくま文庫）

原典のもつ物語の豊かさと、石川淳の見事な文体との相乗効果で、楽しめた。

この間、TV（NHK-BS2）で「黒いオルフェ」を見た。主題曲のみ有名な映画だが、これが案外良かった。フランス映画で、登場人物は仏

語を（ふきかえで）しゃべるが、舞台はブラジルのリオデジャネイロで、カーニバルが行われる。そこで Orpheus と Eurydice の話が展開される。ギリシア神話の知識は断片的だが、この後にイザナギ、イザナミの話を読むと、すでに多くの比較がなされているのだろうが、その類似性に驚く。

やはり、出雲のスサノオ、オオクニヌシ、シロウサギなどの話は生気がある。天孫降臨のあたりはつまらない。ヤマトタケルは、物語よりも歌だということを改めて思う。オオサザキ（仁徳）の後のイワノヒメの嫉妬の話も、生気がある。

古代の日本人は、数詞は八しか知らなかったかと思うほど、八ばかり出てくる。

権力争い、とくに兄弟の争いは、すさまじい。後の、源氏、足利、織田などに共通するパターンだ。簡単に人を殺す。中国からの思想が入る前の、古代日本の倫理観はどんなものだったのか。日本には倫理哲学型の宗教家が生まれなかったといえるのか？

西郷信綱「古事記の世界」（岩波新書）

「新釈古事記」を読んだ後で気がついたが、その解説を書いているのが西郷信綱である。「古事記の世界」でも、「新釈古事記」の訳文を引用しているところがある。

この本の視点は、古事記に現れる神話を、とくに大嘗祭に代表される祭式に重ね合わせてみるというものである。それが、神話を“科学的”に解明するのではなく、フィールドワークに範をとった、古代人の世界に実践的に入り込むというアプローチの主張と結びつく。

この点で、とくに印象的な説明がなされるのは、7章「八千矛神—古代歌謡」である。ここで取り上げられる歌は、新釈古事記で読んだときも、実に新鮮な感じがするとともに、物語の流れとの違和感も感じた部分である。それが演劇的所作を伴う舞曲として、見事に解明される。

ただ、このような神話性を強調するあまり、歴史性を必要以上に軽視しているような感じもする。

Robert van Gulik, “Poets and Murder”

この間、岸田さんに借りた本。中国で岸田さんと熊谷さんが、このシリーズの話をしていた。中国のTVでもドラマ化され、放送されていた。中国唐代の裁判官 Dee をモデルにするという設定が面白く、作者 Gulik は中国のことをよく勉強している。英語でこういうものを西洋人の眼で読むというのも、ちょっと複雑な異国趣味で悪くない。筋はあまり大したことはない。Dee の性格も鮮明ではなく、魅力的とはいいがたい。むしろ同僚 Lo の方が面白味のある人間として描かれている。

P. D. James の Dalgliesh は一流の詩人という設定だが、Dee はこれまで一つだけ作った教訓詩を、自分で思い出せないで、Court Poet からそれでは大したものじゃあるまいと揶揄される。その辺りが、かえって面白い。

松村栄子「至高聖所」(芥川賞)

筑波大の卒業生が筑波大を舞台に書いている。芥川賞をとるだけあって、文章も上手いし、話の展開も工夫されている。初めは退屈な気もしたが、中ごろは面白く読み進んだ。最後が変な気がした。

しかし、この手のパターンの小説は、芥川賞で何度も読まされているような気がする。大学生ぐらいの平凡な人間を語り手とし、その友人に変わった人物が登場する。語り手は理科を専攻し、文章は無機的な透明感に溢れている。そう、同じようなことを91年9月に辺見庸「自動起床装置」について書いている。

コリン・ウィルソン、中村保男 訳「アウトサイダー」(集英社文庫)

ウィルソンの処女作、出世作である。独学のウィルソンが20代の初めに書いた。ずいぶん長い本で、しばらく間をあけて読んだので、読書に要した経過時間はかなり長い。

出てくる作家は、サルトル、カミュ、ウェルズ、ヘミグウェー、ヘッセ、ニーチェ、トルストイ、ブレイク、ドストエフスキー、イエ

一ツ，などの，一部は結構読んでいて懐かしく，一部はほとんど読んでいないが著名作家ばかりである．しかし，読んだものも，ほとんどが学生時代かその後の若い頃の読書である．

そもそもこの書は，「人生は生きるに値するか」をテーマにしたものだといってもよく，そういう問題意識すら，自分の若い頃の記憶に埋もれてしまって，ある種の懐かしさを覚えることでもある．何ということだろう．

たびたび出てくる「ヴィジョンの瞬間」に近い経験が自分にもしあるとすれば，子供のときに体験した「僕って何だろう」という文句の繰り返しによって開かれる不思議な世界であろう．

Robert van Gulik, "Murder at the lake"

この方が，前に読んだもの（"Poets and Murder"）より手の込んだ話で，面白く読ませる．もちろん荒唐無稽であるし，密室殺人，碁を使った謎，死体の取替え，誘拐，変装など，典型的な手口，トリックがやたらと出てくるが，それでも中国唐代という舞台を生かして読ませる腕は，なかなかのものである．

C. A. R. Hoare, "Communicating Sequential Processes" (Prentice-Hall International Series in Computer Science)

ずいぶん時間をかけて読んだ。この手の専門書はこれまであまり感想を書いていないが、from cover to cover で読んでいるというものは、案外少ないということもある。しかし、これは楽しんでゆっくり読んだ。さすがに Hoare だけあって、きちんと書かれた本である。

安藤博「日米情報摩擦」（岩波新書）

著者が構造計画研究所の所属なので、情報の中には情報産業やソフトウェアの話もあるのではないかという期待もあったのだが、もっぱら朝日新聞の記者だった時代の話が材料になっている。構造計画に移って10年になるのに、新聞の話ばかりというのも特殊だ。逆に言えば、構造計画は何のためにこういう人物を雇ったのだろう。

ワシントン駐在だったときの率直な反省がベースになっているのが、本書のユニークな点である。正直すぎて、何だか暗い気持ちになる。ワシントンで会った日経の田村さんは、もっと生き生きとしていたように思う。

中村紘子「ピアニストという蛮族がいる」（文芸春秋社）

この人が、面白い文章を書ける人であることは、前回の「チャイコフスキーコンクール」で実証されている。だからこそ、文芸春秋もこれを企画し、書かせたのだろう。その期待を裏切らず、面白いものを書いた。

前作と違って、これはピアニストの奇行や波乱の人生を追ったものだから、文献をベースとしている。もちろん、彼女自身の経験譚、聞いた噂話も織り交ぜ、そこが単なるノンフィクション作家が書くものとは違っている。しかし、文献が材料ということは、いかに面白くてしかも忘れられている人・話を発掘するかが勝負で、その点に、久野久、パデレフスキ、アイリーン・ジョイスなどで成功している。もちろん、文春のスタッフの協力があつたに違いないが。とくに、アイリーン・ジョイスの話は、まるで作ったようなすごい話である。

学生の頃、工学部の丁友会の企画で、まだ若かった中村紘子の演奏会を、杉田と聴きにいったことが懐かしく思い出される。

菊池誠「日本の半導体四〇年」（中公新書）

NHKのTVでやっていた「電子立国日本の自叙伝」というシリーズはよくできていた。それに菊池さんも度々登場した。

この人は、なかなか文章が書ける。この本も軽いものだが、結構面白い。とくにソニーに移ってからのCCDの話は、技術史としても読ませる話である。もっと詳しく書いてもらいたい気がする。しかし、研究者として幸せなんだと思う。

さて、自分は何が残せるだろうか。

藤田恒夫「腸は考える」（岩波新書）

自分も腸の具合がおかしいことがよくある，ということもあって読んでみたが，掘り出し物だった。藤田という人は，僕より20歳ほど上の人だが，大変陽気でしかもみずみずしい感性を持っているようだ。文も上手いし，ストーリー・テリングの才能が不思議とある。古い日本の研究者の仕事を再発見し，当人たちを見つけてその人たちを中心としたシンポジウムを開催し，顕彰するところなどは，この本の主題とは離れながら，感動的だ。

「一人の学者が打ち立てた業績を，たとえそれを否定したり修正するとしても，あとに続くものが引き継ぎ発展させてこそ，人間の営みとしての学問は存立すると思うのだが。外国では，自国の学者の仕事に，とくに敬意とこだわりをもって後世に引き継いでいくことが一般的であるが，この日本では，自国の先輩の仕事ときいただけで評価しないというのが一般である。ほんとうに情けない。」
(p.108)

「日本人の業績が世界で認められることは，とくに半世紀前はむづかしかった。それならば日本人自身がそれを認め，世界に売り出していくべきなのに，外国の業績ばかりをありがたがっている。」
(p.126)

しかし，自分の腸の問題に関しては，この本はまったく役に立たなかった。

ロバート・ファン・フーリック，松平いを子 訳「中国鉄釘殺人」(三省堂)

やはり岸田さんに借りたもの。この作品では、ルー夫人という犯人が、精彩を持って描かれている。理はこの人のほうにあるように見える。ディー判事が逆にあまり精彩がないのは、むしろいつも通りである。ただ、この本では、奥さんたちが母親の病気で出かけていって一人残されている状態だったり、恋心を抱いたクオ夫人が殺人犯で、最後に自殺してしまったり、人生の寂寥感を出している。最後に、首都裁判所長官への昇進というめでたい話があるが、

「彼は父上の言葉を思い起こしていた。「孤独なものだ。頂上に立つということは―」」

という語られ方になっている。

足田輝一「樹の文化誌」（朝日選書）

気楽な本だが、何しろ長い。500ページ近くある。定年となった元朝日の記者が、“ナチュラリスト”として、樹にまつわる話を筆のおもむくまま書いたもの。朝日カルチャーセンターでやっている講座が、元になっているという。この間読んだ中尾の「花と木の文化史」と題名も似ているが、こちらはアマチュアとしての気楽さが随所に感じられる。しかし、広い知識をもつことも確かである。残念ながら自分に知識がないから、もっとカラー図版などがないと、文章だけではよく分からないことがある。図はかなり入っているが白黒で、写真は解像度が悪い。

中野好夫「世界史の十二の出来事」（ちくま文庫）

1978年に文芸春秋社から単行本で出たものが、ちくま文庫の新刊として最近出された。単行本のもとには、1953年頃に雑誌「新潮」に連載されたものなので、新潮、文春、筑摩と大手の出版社を渡り歩いたわけだ。

それぞれ読み切りで、20-30ページの分量のエピソードが並べられる。毎回一人の人物を取り上げ、講談調で、しかし節度のある文体で、その人物に関わる事件を巧みに語る。対象は洋の東西に及び、時代はルネッサンスから20世紀にわたるが、取り上げているのが一癖も二癖もある人物という点が共通する。多くが不幸な死に方をしているが、ダントンのケースなど、主人公以外の悲惨な死や虐殺の話も多い。

「人類は実に愚行を繰り返してきた。」

これがメッセージなのだろうか。しかし、そこに面白さがあるということか。

丸谷才一「鳥の歌」（福武文庫）

「忠臣蔵とは何か」以降の評論を集めたものだが、その中心は「忠臣蔵とは何か」を批判した諏訪春雄という学者との論争である。この論争で、丸谷はやけに好戦的で、相手を論じ負かすことだけでなく、揶揄し嘲笑することにも、その文章力とレトリックと精力を傾けている。しかし、諏訪の文章を読んでいないので、丸谷の言うことがどれほどもっともか、よく分からない。

大体、「忠臣蔵とは何か」自身が、その実証的な論理よりも、着想をいかに構成力、文章技法、引用、レトリックを尽くして一つの作品に仕上げるかに工夫を凝らしたもので、という印象を受けるので、この論争も、論争という形式に丸谷の持てる技術を結集して見せた、という感じがする。「忠臣蔵とは何か」がこのような性格のものであることは、清水義範のよくできたパロディによっても、一層鮮明になった。清水は丸谷を批判する意図はなかったと思うが、その見事なパロディで、原作自身も一種のパロディ、つまり文芸評論の形をとりながら、そのロジックよりもそれを組み立てる技を見せるというもので、であることを示した。

それ以外の、「ある裁判小説の読後に」「鷗外の狂詩のことなど」「白い鳥」のいずれも、短編小説的な意外性、筋の展開の巧みさであっといわせるもので、しかしこれらは素直に楽しめた。それに比べ、論争の方はやはり楽しめたとはいいい難く、さっぱりしない読後感が残る。

立花隆「アメリカ性革命報告」（文春文庫）

もとは1978年に雑誌に連載されたものというから、ちょっと古い。しかし内容は今でも充分面白い。もちろんエイズ以前の話である。

アメリカのペントハウスやハスラーのような雑誌の投書に目をつけたところが、解説の常盤新平も言うように立花の手柄だが、この本のメッセージは、そういうところに見るアメリカの進んだ性革命の

一方で、人々の意識は案外進んでいないところがある、そのもとには長い間のキリスト教の影響があり、そこが日本と違う、というところである。

今、並行して立花の「サル学の現在」を読んでいるが、この人の知的好奇心のあり方と、徹底的に資料を読み込み、かつユニークな視点から胸のすく議論を展開する手法とは、対象が何であれ変わらない。一方で、上手い題材を見つけてくることにも長けているわけだが。

藤川隆男「オーストラリア 歴史の旅」(朝日選書)

今度、初めてオーストラリアに行くので、案内書代わりに買ってみたが、意外な掘り出し物だった。とくに、アボリジニの排除、ウサギの大繁殖と駆除、カンガルーの虐殺の3つの話には、考えさせられた。たとえば、ウサギの話は、ウサギ狩りをするためにウサギを入れ、それが生態系を壊して大繁殖し、天敵を入れて駆除しようとしてさらに多くの先住動物を絶滅させるなど生態系を破壊しながら、肝心のウサギは一向に減らず、なんとビールスによる病気を人為的に伝染させて、やっと減った。しかしウサギに免疫ができはじめ、また増え始めているという。実に愚かな話である。

しかし、これが建国たった200年の間に起きたことだから、旧大陸ではもっと長い期間をかけて同じようなことをやってきているのを、戯画的に愚かしく見せているだけなのかもしれない。

観光ガイドとしては役立たなかったが、この若い著者、藤川という人はなかなか文章力もあり、視点も明快で、いい印象を持った。

中野美代子「孫悟空の誕生 サルの民話学と「西遊記」」 (福武文庫)

中野美代子については、岸田さん、熊谷さんから教えられた。福武文庫に入ったこの書を読んでみて、やはり大したものだった。

最初に猿と猴との動物分類学上の違いの話がある。前者がテナガザルで、後者はマカ属だという。そして「好色のサル」「閉じこめられるサル」「求法のサル」という3つの軸で、中国の民話上のサルの話に孫悟空の源流を追い、さらにラマーヤナのハヌマーンが南海経由で来たというルートを結びつける。また、三蔵法師、猪八戒、沙悟浄という悟空以外のキャラクターを追った話も面白く、地理、空間・時間論の考察もはっとさせる。

民俗学、文献考証学、博物学、歴史学の面白さを堪能させる。これを立花隆の「サル学の現在」と並行して読んだのは、よい読書であった。

子供の頃、親父が、確か中央公論に連載されていた邱永漢の孫悟空を読んでくれたのを思い出す。棟方志功の版画が挿絵としてついていたと思う。

立花隆「サル学の現在」 (平凡社)

700ページに及ぶ大作である。雑誌に連載された霊長類学者との対談集だから、対談という形式からくる冗長性のためにページ数が増えていることはあるが、しかし内容も豊富である。それに、もちろん立花のことだから、対談といっても単にインタビューに徹しているわけではなく、自分で文献もしっかり読み込んで勉強した上で、分からないところはいい加減にせず、素人の強みを存分に発揮して、しつこくせまる。それで、立花の勉強に合わせて、読む側でも勉強していけるという、面白い構成になっている。用語の説明なども補っているし、ところどころ文章による補助的な説明もある。

日本ペンクラブ編，越智道雄 選「オーストラリア読本」 （福武文庫）

このペンクラブ「編」，越智道雄「選」，というのはよく分からないが、とにかくこれはオーストラリアについて日本人が書いた文章を集めたアンソロジーである。アンソロジーを編むということはおそらく楽しい作業ではないかと想像するが、幅広い知識とセンスが要求されるものでもあろう。

アンソロジーを読んだことはあまりないが、なかなか便利である。一つには、このようにオーストラリアという新たな対象に対して、いろいろな人の見方をいっぺんに見せてくれる。第二に、こういう本でもない限り読むこともなさそうな人の文章を読む機会が得られる。ここでは9人の文章が集められているが、そのうち名前を知っているのは半分以下で、井上ひさし、小松左京、椎名誠、辻井喬の

4人である。しかも、この4人のうち、ちゃんとした作品を読んだことがあるのは、井上だけなのだから。

いずれも単純な紀行文ではなく、ましてや観光案内ではさらさらなく、ユニークな体験をベースとする実のあるものである。ただ、辻井のものだけは妙に観念的で、知識階級と対比して、生活に根ざした文化を称揚する主張も素朴に過ぎる気がし、違和感を覚えた。これは1975年に発表されたものといい、9本の中で最も古く、結局、日本のことを語っているわけだが、その時代の状況による部分が強く出ているのかもしれない。

「朝日ジャーナル最終号」

朝日ジャーナルが廃刊になるというので一騒ぎがあったが、5月21日に最終号が出たので買ってみた。朝日ジャーナルを買うのは20年ぶりだろう。

逗子の家を片づけたとき、1968-70年頃の朝日ジャーナルが出てきて、いったんは棄てようとして外に出したが、思い直した。その直後に、廃刊とは面白い巡り会わせだ。

全共闘運動の終わりとともに朝日ジャーナルの売り上げ部数も激減し、この10年、筑紫哲也、下村満子を起用して挽回を図ったが、うまくいかなかったということらしい。この最終号を見ても、あまり面白くない。廃刊についての感想文みたいなものが多いから、通常

の号とは違っただろうが、それでも不調な理由が分かるような気がする。たとえば主要記事の「ハイパーメディアへの大潮流」は、ハイパーメディアという語の使い方がおかしい。われわれと違う意味で使うのならそれはそれでもいいが、本文に一度もこの語が出てこないのはどういうわけか。取材も物足りないし、文章としてもつまらない。この10年、Time を読んできてそれに慣れたせいかな、Time の回りくどい英語のほうが、この日本語より頭に入る。

ジャーナルを振り返ったものでは、文章ではなくインタビュー記事だが、安岡章太郎のものがいい。それに比べ、短い文章ながら、江藤淳の書いていることの、実に嫌味なこと。

しかし、20数年前の僕は、朝日ジャーナルの何を読んでいたのだろうか。東大闘争については、中にいながらジャーナルの記事で経過を追っていたという面がある。連載で印象に残っているのは、江藤淳の「アメリカと私」と高橋和巳の「邪宗門」だが、どちらも毎号読んでいたわけではない。「邪宗門」の方は、だいぶ後になって、文庫に入ってから読んで、こんなに通俗性がある小説だったのかとびっくりした。

結局、朝日ジャーナルを読まなくなってから、少年マガジンと少年サンデーを一時期毎週買って読み、その後しばらく週刊誌を読まない時期を置いて、Time を読むようになって現在に至っている。

村上春樹「ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック」 (中公文庫)

村上春樹の小説はまだ1冊も読んでいない。村上の本でこれまで読んだのは、やはりフィッツジェラルドの訳本「マイ・ロスト・シティ」だけである。本書は、第一部が「スコット・フィッツジェラルドと五つの町」と題されて、フィッツジェラルドにゆかりのある町について村上が書いた物を集めている。第二部は「スコット・フィッツジェラルドについての幾つかの文章」で3つのエッセイがある。第三部はフィッツジェラルドの2つの短編を村上が訳している。

フィッツジェラルドについても、この2つの村上の本にある短編の訳を読んでいるだけで、「ギャツビー」も映画をビデオで見たのみである。だからいずれの作家にも、中途半端な付き合い方しかしていない。

第一部が割と面白い。このうち、ニューヨークとハリウッドについては、村上がまだアメリカを訪れた経験のないときに、古い詳細な地図やガイドブックによって想像力を膨らませて書いていることが、意外な気がしたし面白かった。

ドナルド・キーン、中矢義一 訳「音楽の出会いとよろこび」 (中公文庫)

この前に読んだ「私の好きなレコード」が、僕をオペラに開眼させたが、この本も実に楽しく読んだ。あとがきに

「実のところ、本書に収められたエッセイのいくつかは、専門の音楽批評家たちの文章を読んだり、FM放送などで彼らの解説を聞いたときに感じたいら立ちが直接の刺激になって書かれている。」

とあるが、共感するところが大きい。「アメリカのオペラのために」はメトの日本公演について、ある著名な音楽批評家の公演評の結論は「アメリカにはオペラがなかった」というものだったことを述べ、大いなる反発から書かれている。ただ、その評論家の名前も挙げないし、その論への反論という形で書かれてもいない。全体にその傾向で、批判精神をユーモアにくるみ、紳士的に述べている。しかし、ところどころに結構きついことを、サラッとやっている。だが、少なくともこの件については、まともな反論をしてもらってもよかった気がする。

訳者が「いくつかの残念な理由が重なって、キーンさんが音楽について書かなくなってから、すでに十年が経過した。」と書いているのも気になるところである。専門の音楽批評家からの圧力でもあったのだろうか。

とにかくいつもながら、この人の情熱と人柄の暖かみが伝わってくるよい文章を堪能した。

Stephen J. Gould, “The Mismeasure of Man”

この人は、雑誌にエッセイを連載して、それが次々と本になっているが、これはまとまった、かなりボリュームのある本である。一貫した主張、テーマがある。「科学」の名のもとに、人間の知能を計量するという目的で、いかに偏見に満ち、場合によっては意図的なインチキが行われてきたか、を明らかにしようとする。とくに19世紀の頭蓋骨の容量測定と、20世紀のIQテストが対象となる。Gouldは丹念に論文とデータを拾い、その過程を見せる。その努力と情熱には、脱帽するほかない。おびただしい引用には、背筋を寒くさせるものが多い。しかしそれに対し、同じ白人でニューヨーク生まれの米国人が、このように熱のこもった批判を展開するところに、大いなる救いがある。

Robin Milner, “Communication and Control”

Hoare の CSP を読み終わってから4ヶ月経って、Milner のこの本を読み終えた。こういう理論を、ほとんどゼロから発想し、体系的に組み上げ、しかもこれほどやさしい教科書として書けるというのは、並大抵の才能と努力ではあるまい。

須賀敦子「コルシア書店の仲間たち」（文芸春秋社）

朝日でも日経でも書評で取り上げられ、評判がよかったので買って読んでみた。

帯に「芳醇な文体」とある。むしろ静謐という形容が当たっていようか。

20年から30年前のイタリアのミラノにおける経験を回想したものである。一つ一つの断片をある程度独立した短編小説のように書いている。小説ではないが、小説の雰囲気がある。

妙な取り合わせだが、石川好のストロベリー・ロードを連想した。年齢もかなり違い、時代は60年代で重なっても（須賀がイタリアに渡ったのは58年らしい。石川が渡米したのは65年）、カリフォルニアのイチゴ農場と、ミラノのキリスト教系左翼＋ブルジョア・貴族社会とでは、舞台があまりに違う。しかし、まだ外国旅行をすること自体が珍しかった時代に、その地に旅行者としてではなく生活者として暮らし、そしてそのことを20-30年経って、小説のように生き生きと回想して本としたというところは、共通する。

同じイタリアの日本人女性という組み合わせで、塩野七生と比べると、須賀の文章はそれを書く必然性というものを感じさせる。たとえばイタリアで出版されても、不思議はない。

田中直毅「最後の十年 日本経済の構想」（日本経済新聞社）

久しぶりにビジネス書という類の本を読んだ。しかし、これはハウツー的な安っぽいビジネス書ではない。世界の情勢の中での日本の経済、政治そして研究状況を論じ、日本に求められる構想力への道を提示したものである。力作であり、説得力がある。田中はこの分

野の書き手としてもっとも力量がある人だと思っていたが、この本で確かにそれが示されている。

第1章、日本の経済を論じたところはあまりに楽観的であり、また日本企業の将来を見通す力を持ち上げすぎているのではないかと思った。しかし、それと比べた政治、官庁の低迷、そしてその財政政策の結果としての研究機関の崩壊というのが、この人の認識の核にある。米国、EC、アジアに対する認識も、明確なものを感じる。

Philip K. Dick, "The Man in the High Castle"

おそらく初めて読んだ本格的なSFだろう。

第2次大戦にドイツ、日本が勝ったら、という設定は、誰でも考えそうだが、その設定でこれだけ真実味のある物語を展開するとなるとまた別だ。しかし、この本が出たのは1962年。ちょうど30年前だが、そのときと比べ、日本、ドイツが世界の経済、政治に占める大きさは、きわめて大きくなっている。現実と空想との間に、時間（歴史）という軸が入って、また別の多様性が現れる。

しかし、結局この小説はよく分からなかった。結末で何か大逆転が起こるか、並行的に語られてきた複数のストーリーが収斂するのかと思ったが、そんな単純な終わり方ではない。SF処女の読者としては、中途半端な気持ちが残ってしまう。

しかし、ドイツ、日本が勝った戦後の世界という設定で、そこに米英が勝った世界のフィクションを登場させるという手法は、なかなかうまい。もう一つの重要な道具立てである Oracle, I Chingの方は、よく分からない。陰陽道、卦の類であろう。I Ching は易経だろうか。

いずれにせよ中国思想で、それが日本と一緒にくたにされている。まあ、日本でも易は生活に溶け込んでいるかもしれない。しかし、作者の日本に対する知識はかなり怪しい。少なくとも登場する日本人の名前が、皆おかしい。

ただ、Oracle の結末での使い方は、確かに上手い。米英が勝ったというフィクションは実は Oracle が書いたものであり、その Oracle になぜこの本を書いたかという問いを立てて占うと、「これは真実である」という託宣が出るのである。

設定の割には、登場する日本人はドイツ人ほど戯画的に描かれていない。むしろ、Tagomi 氏にしても、Kasoura 夫妻にしても、かなり知的である。しかし、その役割はよく分からない。終わり近くに Tagomi 氏の放浪と長い思索の部分がある。ここは作者が力を入れているらしいが、ここもよく分からない。

P. K. Dick の小説が映画ブレードランナーの原作だと聞いたことがある。それがこの小説だろうか（実は同じ作者の "Do Androids Dream

of Electric Sheep?”)。ブレードランナーをTVで見て、面白いと思ったが、今は筋もまったく忘れた。

堀田善衛「ミシェル 城館の人（２） 自然・理性・運命」 （集英社）

すでに第1部のことをかなり忘れていたが、この第2部に入って筆者の、そしてそれにつられて読者である自分の、モンテーニュへの親愛感が、大きく膨らんできていると感じた。とくに、彼の自由で固定観念にとらわれないものの見方は、大変近しいものを感じるようになった。

同時にこの書で、モンテーニュのエッセイそのものに触れ（かなり多くの引用がある）、またこの時代のヨーロッパの歴史を勉強するよすがともなるのは、恩の字である。モンテーニュの研究書など汗牛充棟だろうが、このようなスタイルの本こそ、素人にはよい導き手となる。

不思議なことに、マスコミは本書をまったく無視している。書評にも取り上げられないし、なんらかの形で触れられることもない。そういえば、出版元の集英社の広告も、控えめなような気がする。出版業界か「文壇」でなにか政治的な事情でもあるのだろうか。

もとが、雑誌（スバル）の連載で、その手の本に多いことだが、章の切り方は内容によるのではなく雑誌掲載の分量によるものであり、重複もあり、あっちこっちに流れが変わることもある。本にす

るときに、もう少し手を入れないものか。うがった見方をすれば、これもモンテーニュのエッセイのスタイルを踏襲したということだろうか。

「けれども、人間存在の現実をそのままに書物に、ミシェルの言い方を使うとして、<挽肉を詰める>ようにして詰めて行くとすれば、ある程度の混乱と無秩序はむしろ必然的要素であり、それが<グロテスクで怪物じみたもの>になることもまた必然であった。人間存在とその歴史に関する、百科全書的な混乱と無秩序は当然である、もしそれを混乱と無秩序と呼ぶとすれば」(p.318)

というあたり、モンテーニュと一緒に作者も居直っている感じがする。

ロバート・A・ハインライン、福島正実 訳「夏への扉」（ハヤカワ文庫SF）

この間、Dick を読んだので、SFを読んでみる気になった。茗荷谷で一人で食事に出たときに、手持ち無沙汰を紛らすために本屋に入り、文庫を漁った。その1冊にSFマニアが選んだベストテンといったリストを載せたものがあり、そこに並んでいる名前からこのハインラインという作家を知って、その傑作といわれているらしいこれを買ってみた。題名も気に入った。どうも「宇宙の戦士」だとか「銀河市民」だとかいったタイトルには、なかなか馴染めない。

これは1957年の作品である。この間、日経の書評欄でSFを紹介している中に、「50年代風」という形容があった。50年代はSFの一つの頂点だったらしい。

しかし、こういうSFの「古典」を読むというのは、面白い読書体験である。書かれたのが57年、舞台は70年という近未来で、そこからさらに冷凍睡眠という趣向で2000年に飛ぶ。ところが、今の時点で「未来」の70年ははるか昔で、むしろ2000年のほうが近い。それなのに、著者が想像する世界が馬鹿馬鹿しさを感じさせないのは、さすがに大したものである。

しかも、この作品はそうした未来の想像で面白がらせるのではなく、そこを舞台にしたストーリー（技術屋に徹した素直でさわやかな主人公と、それを詐欺にかける女ペテン師と、ネコと、可愛い娘と、善良な人々が作る、軽いが明るく、適当なスリルもあるもの）で読ませる。

しかし、「6週間戦争」という核戦争がすでに70年の時点で過去にあったことを、2-3箇所であえて触れていながら、ハインラインの描く未来の見通しは、この間の Dick と比べると、やけに楽観的だ。

「・・・そして未来は、いずれにしろ過去に優る。誰がなんといおうと、世界は日に日によりなまさりつつあるのだ。人間精神が、その環境に順応して徐々に環境に働きかけ、両手で、機械で、かんで、科学と技術で、新しい、よりよい世界を築いてゆくのだ。」

(p.306)

何んという幸せな展望だろう。これが50年代という時代性を逆に表しているといえようか。

コリン・ウィルソン，中村保男 訳「右脳の冒険」(平河出版社)

「フランケンシュタインの城」と同一のテーマだが，フィンランドで会ったブラッド・アブセッツという人物の話を中心にしている。この「右脳」の働きの解釈は，おそらく根拠がない。しかし，彼の論点にそのことはそれほど影響しない。とにかく，マスローのいうような至福経験をどうしたら意のままに実現できるか，というのが目標で，それには内宇宙を探ることだという。内宇宙というのは過去の記憶の図書館で，そこからプルーストの「マドレーヌ体験」のようなものが生まれる。

ウィルソンの議論は，論理的には分かりにくい，経験や引用の巧みな使い方で，読ませる腕がある。しかし，彼の立つところは，似非科学の間際のあやういところにある。たとえば占星術を真面目に信じているらしい。

この間，スタンフォードの本屋で，M. Gardner が似非科学について書いた本が3冊も出ているのを見つけて，買おうかどうしようか迷ったがやめた。しかし，僕の立場は，Gardner にまったく共感するものである。

中上健次「枯木灘」(河出書房新社)

前に買ってあった本だが、中上の死(8/12)に合わせて読んでみた。
この夏は雨がなく異常に暑い。それにも合った読書体験だった。

「働き出して日がやっとな自分の体を染めるのを秋幸は感じた。汗が皮膚の代わりに一枚膜をはり、それがかすかな風を感じるのだった。・・・

めくれあがった土、地中に埋まれたために濡れたように黒い石、葉を風に震わせる草、その山に何年、何百年生えているのか判別がつかないほど空にのびて枝を張った杉の大木、それらがすべて秋幸だった。」

全篇にこのような表現が繰り返し繰り返し出てくる。雨はほとんどまったく降らず、一回ぐらいしか描写がない(それも描写といえないほどのもの)。

この本の折込みに、評論家たちの書評を集めたものと、熊野地方の地図、登場人物の関係図が載せられている。この地図と関係図はありがたい。人物関係は複雑で、しかし作者は同じことを趣を変えながら何度も繰り返し述べるという手法で、読者に自然に受け入れられるようにしている。

書評も面白い。インテリの文芸評論家たちが、この作品に参ってしまっていることが分かる。確かにインテリをうならせるもの、参ら

せるものがある。土方の生活や自然の描写，文体，人物造形，のいずれもが。

黒川利明「ソフトウェアの話」（岩波新書）

黒川さんらしく面白く書いている。あとがきにもあるように、もともと権利保護，ハード化，文化との関わりを軸に考えたというだけあって、その辺の議論がユニークなところ。ただし、権利保護は常識的な線を出ず、文化の話は食いたりない。「ハード化」は一番よく練られた議論になっている。

Steven Levy, "Artificial Life - the quest for a new creation"

Chaos と同じようにジャーナリストが書いた本である。手法も同じで、この分野の科学者に精力的に取材し、また自分でも勉強して、書きこんでいる。日本でわずかに立花隆がいるが、他にこういう手法でこれだけの力量を発揮する人はいない。この著者 Levy は Hackers という本で有名らしい。

Chaos よりはやはりテーマの魅力がはっきりしないせいもあって、やや迫力不足である。しかし、この間の AAI で Langton の招待講演を聞いて、この分野を認識したような自分にとっては、大変便利な本であった。専門の論文をいくつか読むより、全体を知るにはよほど効率がいい。

ずっと人工生命の新しさ、面白さ、インパクトの大きさについて語ってきて、最終章はウィルスの話から、ネガティブな議論を展開する。その一部は、現在の人工生命の技術状況からすると、馬鹿馬鹿しい恐れのようにも思われるが（人類が人工生命に滅ぼされる）、それでもこの人の筆は、かなりの説得性を与える。

ずいぶん冗長度の高い記述だと思うところもあったが、時間をかけて読んだ意味はまああったろう。

Elmore Leonard, “Maximum Bob”

E. Leonard を読むのは久しぶりだが、これも面白かった。主人公の一方が、途中であっけなく死んでしまうところが変わっている。それを殺す Elvin の視点で、人に読んでもらったウェスタンの本で、悪役がいい者を殺そうとするとときに、ちょっと余計な話をして隙をつかれ、逆にやられてしまうことを思い出すところがあるが、これは少しまずかったのではないか。さすがに主人公を殺すのに気がひけて、こんな仕掛けを入れてしまったのかもしれないが、もともとフィクションと了解しながら、しかしある種のリアリティを感じつつ読者は読むのに、このようなメタレベルへ一ひねりした仕掛けを導入すると、読者にフィクションという虚構性を改めて意識させてしまう。

この手法は、純文学を含めて比較的よく見るが、成功する確率が低いと思う。

丸谷才一，山崎正和「見わたせば柳さくら」（中央公論社）

対談集だが，丸谷と大野晋の源氏物語に関する対談集と同様に，周到に用意され，手を入れられ（多分），大変密度の高い読み物になっている．僕は丸谷のファンといえようが，最近，とくにあの忠臣蔵に関する論争を読んでから，少し鼻についてきた印象もあった．しかし，この対談集は，山崎正和という特異な相手にも恵まれ，というかももちろん自然に恵まれたわけではなく，両者の意識的な選択で，互いの波長がぴったり合うものを見出しているのだろうが，そのよさがよく現れている．

丸谷の影響力は大したものので，この解説（向井敏）は意図的に丸谷のスタイルをまね，丸谷が書いたような文章を書いている．

D.エリボン，田村俣 訳「ミシェル・フーコー伝」（新潮社）

なかなかの長編で，読み終わるのに時間がかかったが，伝記を読む楽しさを堪能した．よく書けている．

実は，ミシェル・フーコーについてほとんど知らずにこの本を読んだ．なるほど魅力的な人物である．われわれはフーコーというとフーコーの振り子のジャン・フーコーをまず連想するが，もちろん時代が違う．この本とモンテーニュを並行して読んでいたので，5世紀を隔てた二人のミシェルという哲学者とつき合っている気分だった．

しかし、フーコーの本を読まないことには、話が始まらない。その手引きという意味でも良書であるが、入門書として書かれたものでなく、あくまでも伝記であり、この本の魅力もそこにある。ところどころ引用されているフーコーの文章は華麗だが、読みやすくはなさそう。しかし、この訳者の力量は大したものだ。

本川達雄「ゾウの時間ネズミの時間」（中公新書）

新聞の書評で評判がよかったのでつられて読んだが、確かに面白かった。

動物の大きさ＝体重の $1/4$ 乗に、基本的な時間単位（心拍、呼吸、寿命）が比例しているというのである。こういう本を読むと、生物学の面白さは、今はやりの分子生物学、遺伝子学だけではないことがよく分かる。

この人の文章には独特のユーモアがあり、必ずしも著者が意図的に笑わせようとしているわけではないのに、思わず笑ってしまうところがある。なぜ動物に車輪やスクリューなど回転機構がないか（実はバクテリアには鞭毛を回転させるものがあるそうだが）という話は有名なテーマなのだろうが、この本で初めて理由の説明を読んだ（必ずしも決定的なものではないが）。

レイノルズ数との対応の話も面白かった。最後の棘皮動物の項はちょっと特殊な章だが、この人の研究テーマであるだけに別の面白さ

があった。動物と植物の細胞の違い，それを作った体の組み立て，デザインの違いという話も，説得力があった。

伊藤喜良「日本の歴史 8 南北朝の動乱」（集英社）

このシリーズは1～3巻まで去年読んだが，3巻あたりでかなり飽きて，4巻以降は買っておらず，いきなり8巻に飛んだ。これを買ったのは，去年のNHK時代劇「足利尊氏」の総集編を見て，その兄弟の争いなどが面白く思ったからである。

権力争いのプロセスに興味をもって読むなら第5～7章あたりが中心だが，著者は第2章，4章，9章のような人々の暮らしや，多様な民衆の世界の描写に力を入れているようにも感じられた。

吉本隆明「書物の解体学」（中公文庫）

最近，吉本の「新・読書の解体学」という本が出た。1冊の本に数ページを当てた書評集である。それに対しこの本は，新刊本の書評集ではない。9人の作家・哲学者を取り上げ，それぞれに30-60ページを当てた評論集である。取り上げられている作家たちが，この間読んだ「ミシェル・フーコー」といずれも関連がある。面白いことにミシェル・フーコーは取り上げられていない。

フーコー伝の索引で比べてみよう。以下の数字はフーコー伝での参照数である。

ジョルジュ・バタイユ 17箇所

モーリス・ブランシュ 22箇所

ジャン・ルネ 10箇所

ロート・レアモン 1箇所

ミシェル・レリス 5箇所

ヘンリー・ミラー 0箇所（さすがにミラーは出てこない）

ガストン・バシュラル 8箇所

フリードリッヒ・ヘルダーリン 1箇所（参照箇所は1箇所だが、フォーコーはヘルダーリンについての論文を書いている）

カール・グスタフ・ユング 1箇所（心理学を出発点にしているフォーコーにしては少ないが、フロイトはさすがに12箇所に出てくる。ユングとは相容れないのだろう）

実は、吉本隆明を読むのは多分初めてである。そして取り上げられている批評対象は、フォーコー伝などでなじみの名前とはいえ、ほとんど読んでいない作家ばかりである。しかし、この読書は楽しめた。

評論の出だしは思いがけないところから始まる。たとえばバタイユは、吉本の自論「遠隔対象性」という話から始まる。それからデュルケームの氏族に関する考察を延々と論ずる。なかなかバタイユ論に入らない。実はすでに入っているのだが、直接的な関連をすぐには明示しない。他も多かれ少なかれ、似たような手法を取っている。文章は想像していたほど晦渋でない。むしろ明快と言ってもいいくらいである。

しかし、ここに出てくるような思想家とその思想と、C. ウィルソンが「アウトサイダー」で扱っているものとは、案外近い。フーコーとウィルソンを比べれば、一方は最高教育を受けたエリート、他方は大学も出ていない独学の人、一方は今世紀最高の哲学者の一人とされ、他方は大衆受けするベストセラー作家と見られようが、領域はずいぶん近いのである。

金子郁容「ボランティア もうひとつの情報社会」（岩波新書）

やはりこのように知っている人間の本は、対抗意識もあるし虚心には読めないものだが、しかし感心した。思ったよりずっと真面目な態度であり、啓発される。自分も何かせねばという気になる。とくに導入部がうまい。

来年のソフトウェアシンポジウムの招待講演の候補として名前が挙がり、それなら僕が連絡しようと引き受けた。「編集工学研究所」（松岡正剛がやっている）を通してやっと連絡がついた。引き受けてもらったが、正直なところその交渉をしたときは、まだこの本を読んでいなかった。

吉田の結婚式のとくに福永君と話をし、彼と西垣通は同期だという。それと金子郁容のことが話題になり、福永君は金子の本を読んでいるが西垣の本を読んでおらず、僕は西垣の本を読んで金子の本を読んでいないことを発見した。

やはり知っている度合いに反比例して、手を出しにくくなるものらしい。

小原二郎「日本人と木の文化 インテリアの源流」（朝日選書）

これは掘り出し物の本だった。著者は建築学者だが、とくにインテリアの専門家である。インテリアというと洋風だが、そして日本のインテリアの短い歴史はまさに「いかにして欧米のインテリアに似せるか」（あとがきp.222）にあったらしいが、この人は、日本人がいかに木に対して特異なつき合い方をしてきたか、（それはまた日本という国が木に非常に恵まれていたことにもよるが）という点を懇切に述べる。そのベースには、それがどう変化してきたかという綿密な研究があるわけだが。

最近、木に関して興味を抱いてきたが、用材としての使い方という面については、初めて関心をもった。針葉樹と広葉樹の用材としての違いといった初歩的な知識に、目を開かれる思いがした。イギリス家具と日本家具との考え方の違いも面白いし、隣の国朝鮮と、木の使い方に関してはずいぶん違うということも面白い話である。

1991年

P. D. James, "A Taste for Death"

長い小説だ。500ページある。

しかし、最初に殺人の発見があってから、事件らしい事件はまったく起こらない。ただ最後にちょっとした波乱、つまり犯人が女性刑事のアパートに押し入って人質を取る、という事件が起こる。それまではすべて、Dalgliesh が中心となっていく、もっぱら聞き込みによる捜査の過程を追う。しかも、次々と謎が深まる、あるいは謎が解かれていく、というわけでもない。ひたすら登場人物の心理描写と、生き立ちや性格づけでもたせる。それで飽きさせない技量は大したものだ。

初めのうち、たとえば Kate の出生とそれにまつわる性格描写、あるいは Sarah についての同様に念入りな描写などを読んだときには、これはやりすぎだ、性格描写のための描写になってしまって脇道で遊んでいる、と感じたものである。

驚くべきことに、一見無関係におかれているこのような記述も、実は伏線になっているのである。これだけの長い話が、計算しつくされている。恐れ入るほかない。しかし、E. Leonard のスピードが懐かしく感じられるのも確か。

大江健三郎「人生の親戚」（新潮社）

帯に「作家歴30余年にして初めて女性を主人公に据え・・・」とあるが、確かにこれまで女性が中心人物として出てきていない。ただ、この前読んだ「懐かしい年への手紙」で、「妻」やオセツチャンがかなり重要な役回りで登場した。そして今度は女性「まり恵さん」が主人公というわけである。

個人や個別の家庭を襲う悲劇、不幸の話である。また、宗教・神の話でもある。不幸と言っても、アンナ・カレーニナのようなものでなく、「事故」に由来するものである。事故というのは、障害児が生まれる、交通事故にあう、ガンにかかる、といった、いわば確率的なものという意味においてである。

自分もときおりそのような事故に基づく不幸のことを考える。これまでの人生は、その意味では平穏無事であったが、今後もそうであるかどうかは分らない。そのときどんな生き方ができるだろうか。事故の中には、自分が急死することだって入る。そのときは、それからどう生きるかではないが、それまでどう生きたといえるか、という話になるだろう。

小説としては、最後の「後記にかえて」というのが、実に変な印象を与える。それまでのストーリーの続きのようでもあり、まさに「後記」で、小説家がこういう筋も考えたが止めたという内情告白している体の文章でもある。奥付の前のページに初出の雑誌名が載

っているが、それによればこの最後を除いた部分は「新潮」89年1月号に一度に掲載され、「後記にかえて」は別のタイトル「マッチョの日本人」として、「文学界」89年3月号に出たものらしい。どうりで接木のような感じがするわけだ。

しかし、大江にとって宗教とは何なのか。前にも「イエスの方舟」を題材にしたものがあったが、今度も同じような集団とリーダーが出てくる。一方、どこかで「僕」は信仰をもっていないと書いている（探したがページが見つからない）。

大江の独特な文体は、若い頃と変わっていないように思うが、今回もつくづく感じたのは、たとえばサッチャンの手紙とか、まり恵さんの手紙や説教、あるいは他の人の談話にいたるまで、結局みな同じ文体なのである。こういう徹底したやり方もあるのだ。いろいろな文体を書き分ける腕を見せる小説家もある一方で。

小川洋子「妊娠カレンダー」（芥川賞）

新幹線の中で、仕事のことも気かけながら読んだので、没頭して読んだとはいえない。そのせいか、読後感はあまりよいものではない。面白い筆致、視点、話の展開ではあるが、自分自身が妻の妊娠、子供の誕生に特別な思い入れがあるから、作者のユニークなアングルを素直に楽しめないのかもしれない。

これは、評者の三浦哲郎に多少近い。

「ただ、このような選考には私情が無縁のものと知りつつも、現実
に染色体が欠損したまま生まれた肉親を持つ身にとっては、どうし
ても結末の部分を平静に受け入れられなかったことを恥とともに告
白しておかなければならない。」

同じ障害児を持つ大江は、このことに触れていないが。

この結末部分には、他にも批判がある。

丸谷オー「しかし、末尾の数枚には落胆した。グレープフルーツの
ジャムは妹の悪意の、むづかしく言へばオブジェクティブ・コレラ
ティブ、うんと碎いて言へば小道具に、なっているかしら。ずいぶ
ん疑はしい。このへんから「妊娠カレンダー」は急にむづかしくな
る。病院の裏口からはいっていくのだって、準備が足りないため読
者に負担がかかりすぎる。わたしは、これは幼児期に退行して、次
に胎内にあこがれ、ついで赤ん坊に出会ふのかなどと思案して、結
局、よく分からなかった。」

吉行淳之介「・・・しかし、その程度で極端な結果が起こることは、
「わたし」は全く信じていないとして、私は読んでいった。ところが、
末尾で困った。ここは逆説的表現のやりそこないか、本気のこ
ととしてなのかわからない。だいいち、こういう読み方自体、作者
の意図と違うかもしれない。しかし、この作風を貫くためには、説
明はいけない。」

ところで、小説の最後の一文は、

「わたしは、破壊された姉の赤ん坊に会うために、新生児室に向かって歩き出した。」

である。この「破壊された・・・」は、「歩き出した」時の想定であるとすれば、「わたし」の頭の中のことであって、事実はまた別とも解釈できる。一方、事後的に振り返って書いた記述というようにとれば、「事実」ということになる。僕は前者だと思ったが。

堀田善衛「ミシェル城館の人」（集英社）

親父の蔵書に堀田善衛のものが多く、かなり律儀な読者だったことが分かる。堀田が作家として売れる前に、家の近くの魚徳の2階を借りていたことがあり、その頃多少のつきあいがあったことは確かである。執筆のために農林省のどこかの寮を玉井の名前で借りて堀田が宿泊し、宿で「玉井さん」と呼ばれてすぐに返事ができなかった、といったエピソードを昔聞いた。そういう関係だけでなく、書くものに共感するところがあったのだろう。晩年まで文学志向のあった親父にとっては、ある種の羨望感もあったかもしれない。

堀田の「ゴヤ」4部作も親父の本を借りて読んで面白かった。今度はモンテーニュである。時代を遡り、場所がスペインからフランスに移り、人物が画家から思想家に変わっても、アプローチ、叙述スタイルは同じである。対象も「ヨーロッパの歴史と文化」とくくってしまえば、同じ範疇に入る。しかし、こういうきっかけでもなけ

れば、名前のみ高名でも触れることのないままにいたかもしれないモンテーニュに導いてくれるのは、ありがたいところである。

D. Knuth, 有沢誠 訳「クヌース先生のドキュメント纂法」 (共立出版)

クヌースが行った Mathematical Writing という講義の講義録である。

講義1シリーズが26回(週2回)というのにちょっと驚いたが、米国の大学ではこれが普通なのだろう。Marie van Clair とか Ullman とか Halmos とか Lamport など、いろいろな人をゲストに呼んでいるところが贅沢である。内容にも刺激を受けたが、講義の仕方ということでも考えさせられる。

大岡昇平「堺港攘夷始末」(中央公論社)

大岡の遺作である。

たまたま、日経の「私の履歴書」の今の連載が堺出身の河盛好蔵で、面白く読んでいる。その第2-4回を使って、堺事件のことを書いている。河盛がフランス文学を専門としたことと堺に生まれ育ったことの因縁ということだろう。そういえば、本書p.313に、昭和12年に堺事件70年の忌礼が宝珠院で行われたことに触れ、

「大阪府知事代理、河盛堺市長(河盛好蔵氏親族)、フランス代

表、・・・など五百名が集まった。」
とある。

また、河盛の手記に与謝野晶子の生家の前をよく通ったという話があるが、本書のp.383-4に晶子が堺事件に触れている「故郷」という詩が載っている。

このテーマは鷗外の「堺事件」批判をきっかけに取り組んできたものらしいが、鷗外の「渋江抽斎」を読んだときと類似の知的体験をしたという感がある。多くの資料を渉猟し、正確さを期そうとする情熱に感嘆する。それでも、なお誤り、不確かなものが多く残るらしく、校訂者が丁寧な注をつけている。「正しい」事実とは、「正確な」歴史とは、いかに捉えがたいものか。

しかし、正確さへの情熱は、一見訓詁学的な無味乾燥さを招来しそうに思えるが、その情熱自身が大きな魅力に転じてしまうという不思議さをもっている。

この本の本質は、もちろんそのような正確な事実の復元ということだけではない。やはり文学になっている。文学としての面白さがあり、その一方で文学の可能性をさらに広げた仕事ともいえよう。その広い視野と手法の巧みさについて、菅野昭正の巻末解説がよく捉えている。

森鷗外「堺事件」

昔読んだ「日本の文学 森鷗外(二)」を引っ張り出して、この作品を再読した。

先に大岡による批判を知っているから（といっても直接批判した論文は読んでいないが）、種本を無批判に踏襲し、考証が不完全で、発砲し切腹した土佐藩士達をやや美化し、フランス側の視点が欠如している、といった印象を持つ。

たんたんとした叙述は簡素な美しさをもち、下敷きになった佐々木甲象「泉州堺烈拳始末」とは、その点ではっきり異なる作品になっているのだろうが、平板という感じも否定できない。鷗外は、何のためにこれを書いたのだろうか。

解説が大岡昇平である。

フレッド・ウェー・ショクスキ、青木栄一 訳「日米半導体戦争 チップウォー」（経済界）

この手の本を久しぶりに読んだ。400ページあるが、面白く読ませる。日本の半導体産業のやり口を批判するところもあるが、どちらかというアメリカの産業に反省を促しているところが多い。

1980年頃、bitに連載されて本になった北正満「IBMの挑戦」「IBMとの攻防」（共立出版）とか、瀬見洋「日米半導体戦争（正・続）」（日刊工業新聞社）などを読んだ。その頃はまだ米国が強かったが、ずいぶん変わったものである。

この本を読んでもわからないのは、1986年9月の日米半導体協定と、その“違反”に対して取られた1987年4月の制裁措置である。この87年4月はちょうど出張でアメリカにいたときで、荻布さんがジェット口にいて、そのニュースの載った現地の新聞を日本の通産省にFAXで送っていたので、強く印象に残っている。

日米半導体協定はダンピングに対する制裁措置を含んだ協定であるのに、どうして日本市場のシェアの話に適用されるのか。ダンピングの定義が輸出価格より国内価格のほうが高いということであるとすれば、米国の企業は日本市場の方が商売がしやすいはずである。それと、シェアを政府が保証することを求めるというアメリカの発想もよく分からない。日本の産業政策を批判している言動と、矛盾するのではないか。

しかし、全体として、アメリカで開発され育てられた半導体技術が、日本の独特なやり方と製造技術の強さでやられてしまったことに不満な気持ちがあるのはよく分かる。

Elmore Leonard, “La Brava”

4月の中国旅行と5月の米国旅行に持って行って読んだ。Leonard のスピーディな小説には、このようなのろのろした読み方は合っていないだろう。そのせいかもしれないが、今まで読んだ Leonard のものの中では、下の方のランクに入るように感じた。

今度はカメラマンがヒーローで往年のハリウッド女優が相手。この主人公はやけにもてて、この女優だけでなく、Franny という化粧品のセールスをし絵も描く若い女にも惚れられる。さらに Jill という女も登場するのだが、この人物との関係は、最初に登場したときに匂わせたほどには進展しない。

そういえば、冒頭に Maurice（老人で女優のパトロン、なかなか面白く描かれている）の話し相手として Evelyn という女性が登場するのだが、それ以降一度も出てこない。この場面は La Brava という主人公の紹介のためのものであるが、何かストーリーの展開に行き違いがあったのかもしれない。

女優の仕掛ける企みにも無理があるし、二人の犯人が犯行過程で警察にも分かっているのに、自由に行動しているのが変である。

David Halberstam, "The Next Century"

感心した。そのリベラルな眼。鋭い認識と批判。話の上手さ。今、日経でフルブライトが私の履歴書を連載していて、大変面白く読んでいるが、共通するところが多い。

米国の現状に対してきわめて厳しく見、悲観的であるが、こういうジャーナリストがいる限り、そしてフルブライトのような政治家がいる限り（もうとっくに引退してはいるが）、米国は大丈夫なので

はないかという気がする。逆に、本書で大層ほめられている日本は、ジャーナリストと政治家という点で、大変心もとない。

中尾佐助「分類の発想 思考のルールを作る」（朝日選書）

普遍的分類学を目指したものというが、その見通しはあまりよくない。分類法の分類がなされている。類型分類，規格分類，系譜分類，動的分類という分類自身が，ずいぶんあいまいなものである。それぞれがきちんと定義されていない。とくに動的分類にいたっては，何のことかさっぱり分らない。

しかし，この本にはそれなりに魅力がある。その魅力のもとに，著者の生物学，民俗学などにおける豊富な知識と，それらを雑然とではあるが面白く語る話術にある。

森本哲郎が紹介している中国の分類というのがあったのを思い出した。これはもともとボルヘスが書いてフーコーが引用したのを，さらに森本が引用したものである（森本哲郎「読書の旅」p.125）。

「シナのある百科事典」と題して，

「動物は次のごとく分けられる。

- (a)皇帝に属するもの
- (b)香の匂いを放つもの
- (c)飼いなされたもの
- (d)乳呑み豚

- (e)人魚
- (f)お話に出てくるもの
- (g)放し飼いの犬
- (h)この分類自体に含まれているもの
- (i)気が狂ったように騒ぐもの
- ・・・」

これはボルヘスの創作だろうと思って、森本のそれに続く文章を読んだら、これは十二支からヒントを得てボルヘスが創ったのだろうという、鋭い推測があった。

中尾の本に戻ると、体系的分類の始まりはどの文化でも本草学にあるという。つまり薬の分類である。そして中国では、たとえば陶弘景 (456-) の「神農本草経」「本草集注」とか、李時珍の「本草綱目」(1596) とかの体系的なものがある。後者は、田中優子の本にも出てきたと思う。だから西洋と東洋では分類の発想が違うどころか、同じ方向で中国の方が進んでいたといえそうである。

コリン・ウィルソン, 中村保男 訳「フランケンシュタインの城」(平河出版社)

渋谷の大盛堂の1コーナーにコリン・ウィルソンの本が10冊ぐらい並んでいるのを見て、手を伸ばす気になった。日本での人気は高いらしい。巻末に邦訳著作リストというのがあって、何と40冊ぐらい

挙げられている。その半分ぐらいをこの中村保男という人が訳している。本書で見る限り、こなれたいい翻訳をしている。

日本語版への序文というのがあって、これにほとんどすべてのことが書いてある。自伝風のことまでこの序文に記述があり、自分の仕事の流れでの位置づけ、また自己体験に基づく手法まで書いている。逆に言うと、本文の方はしつこいぐらいの繰り返しである。しかし、広い読書による知識と、体験の描写で、飽きさせない。

繰り返し書いているわりには、右脳と左脳の役割分担は、それほど明確に理解できない。多分、脳生理学的には、ずいぶん怪しい議論を展開しているのだろう。しかし、これは思想、哲学の書であって、生理学の本ではない。

哲学といっても平易である。幸福に生きるためのハウツーものという観すらある。しかし、確かに昂揚状態、絶頂体験、圧倒的な幸福感、至福、純然たる歓喜、恍惚、強烈の瞬間、要するに作者が言う「意識の別形態」を意のままに手に入れられるのであれば、そんなありがたい話はない。この本は、その気にさせる点で大いに成功している。

しかし、僕の評価は好悪相半ばする。その問題意識は納得がいくし、抽象的になりがちが議論を、多くの材料を駆使して平易に語る語り口も好ましい。一方、オカルト、ポルターガイスト、テレパシーなどの存在を安易に肯定しているところが気に入らない。

「どうやら私は典型的な”蟹座”らしく」(p.155)

なども多分本音だろう。また、著作リストを見ると、そういう超常現象、セックス、犯罪、などを売り物にしている風にも見える。

宮脇壇「それでも建てたい家」（新潮社）

渡辺武信の本を読んで以来、この手の本を探していた。面白く読んだ。会話調のくだけた文体ながら、内容は日本の住宅政策への痛烈な批判、住宅産業への辛口なコメント、文化・生活習慣に根ざした住宅設計への個性的な見解など、なかなか豊富である。自分の家や離婚などの私生活についても、結構あけっぴろげに語る（ややしつこいぐらい）。

それで家を建てることに直接参考になるかというと、部分部分に役立つ話があるが、やはり断片的という恨みがある。

Colin Wilson, “The Misfits — A study of sexual outsiders”

副題に誘われて買い読み出したが、Wilson が関心をもつテーマとそれを扱う姿勢は、この間読んだ「フランケンシュタインの城」と一貫している。

Wilson の主張は健全すぎるぐらいに健全である。サド、バイロン、Swinburne, D. H. ロレンス、ウィトゲンシュタイン、三島由紀夫、などを批判的に取り上げているのだが、その論点はたとえば

- セックスは人生にとって重要だが、すべてではない。
- 既成の性道徳を破壊するのに、サドのように他人に対する考慮というのをまったく欠いては、結局自己破壊になる。
- 倒錯的な性は、想像力に根ざす意味で、19世紀ロマンチズムと同根で、大きなテーマである。しかし、ある意味でパブロフの犬と同じ現象で、常に刺激をエスカレートさせなければならない。

平凡といえば平凡。しかし、終章の想像力という概念を中心とする議論は、説得力がある。結局、大変楽天的な幸福論になるところが、この人の特徴であり、やや物足りなさを感じさせることになる要因でもあろう。しかし、実によく本を読みながら、易しく書くところが最大のよさである。

宮脇壇「住まいとほどよくつきあう」（新潮社）

同じ宮脇壇の「それでも建てたい家」は朝日の書評で知ったのだが、それを新宿紀伊国屋書店で買った。この店では最新の新聞各紙の書評欄を、赤線で囲って掲示している。それで思い出して買ったのだが、大新聞の書評欄のもつ影響力は実に大きい。それを買うときのレジのカウンターで、売れそうな本が平積みになっている中に、この本があった。その紀伊国屋の戦略にまんまと乗せられて、一緒に買ったものである。

文体、形式はまず同じである。内容にも重複が多い。しかし面白いし、なるほどと思わせるところがあちこちにある。渡辺武信と違うところは、日本の文化、伝統建築と住み方、暮らし、風土、についての考察にとくに重点を置いているところだろう。渡辺にも谷崎の「陰翳礼讃」の引用があったが、何ととっても多く引用されるのはハリウッド映画であった。

佐々木高明「日本の歴史 1 日本史誕生」（集英社）

力作である。はじめに

「本書は、民族学（文化人類学）を専門とする筆者が、考古学をはじめ、他のさまざまな学問分野の研究成果をとり入れながら、「日本史誕生」のプロセスを、できるだけ具体的に描こうとする試み」とある。そのさまざまな学問分野というのは、人類学、言語学、生態学、作物学などで、実に種々の微に入り細をうがう研究があるものだと感じさせられる。

日本の基層文化として、採集・狩猟文化としては例外的に豊かでレベルの高い縄文文化があること、それにナラ林文化と照葉樹林文化という大きな二つの形態があること、など自分にとって新鮮な知識である。

照葉樹林文化については、この間読んだ中尾佐助とこの佐々木という人は、共同で仕事をしているらしい。

上前淳一郎「複合大噴火」（文芸春秋）

しばらく前に新聞の書評で目にした本だが、これまで本屋で心がけてみても見つからなかった。それを今度、渋谷の紀伊国屋で見つけたのは、雲仙岳の噴火に合わせて増刷されたものかと思ったが、奥書によれば買ったのは1989年6月30日発行の第一刷である。本屋がニュースに合わせて仕入れたのか、出版社が在庫を宣伝したのか。

著者自身があとがきに書いているように、「風変わりな本」である。1783年のラキと浅間山の大噴火から話が始まる。日本では、天明の大飢饉、田沼失脚と展開し、ヨーロッパではフランス革命へと展開する。それらの社会的大事件に、噴火に伴う気象学的条件がきっかけを与えた、という着想で書かれた本である。

しかも、日本とヨーロッパで偶然（？）同時に起こった大噴火という事態で捉え、日欧の事件を並行的に記述したところが工夫である。

記述のスタイルは、会話体を入れ性格描写を交えるなど、小説的なところがある。著者は新聞記者出身らしい。「読むクスリ」というのは、週刊誌で見るような気がする。「太平洋の生還者」という本で大宅壮一賞を取っている。

そういえば、雲仙に続いてフィリピンのピナトゥボ山という火山で大噴火が起き、大きな被害を与えた。噴火というのは大きく地域を離れたところでも連鎖的に起こるものか？このフィリピンの噴火は、気候の変化による作物の不作というような間接的な経路でな

く、直接的な被害によってフィリピンのただでさえ困難の多いアキノ政権に、大きな試練を与えている。面白い副次効果として、前からアキノ政権が撤退を要求するのかもしれないのかあいまいだった米軍のクラーク基地が、噴火の被害から復旧しがたいという理由で閉鎖となった。

田中優子「近世アジア漂流」（朝日新聞社）

書き下ろしだった前作「江戸の想像力」と違い、評論集である。雑誌に載せた文章を集めたもので、当然、雑然としている。本人がまとめているようにエキゾチックとエロティックがキーワードで、アジアから日本を見るというのが基本姿勢である。

エロスには相当なこだわりがあるようで、評論の表題を見ても、「愛液したたるシャム」（本書では「神話に満ちたシャム」と改題されているが）、「李朝朝鮮の死と肉とエロス」、「エロス・したたかな共存力」（これも改題されている）などという具合である。写真やTVで見る著者はなかなか美人で、それだけにこのこだわりには興味をひかれる、というのは男の読者の偏見であるが。

内容的には食い足りないところも多く、出どころについても人の受け売りらしいらしいものが多い感じがするが、図版が多く入っていて楽しめる。倭寇に代表されるように、日本のアジアにおける悪評判は歴史の古いものであるという指摘は、はっとさせられる。

石田晴久「コンピュータ・ネットワーク」（岩波新書）

この分野はもっとも知識のない部分で、そういう意味では便利な本であった。

一般向けの岩波新書ながら、社会的なインパクト、産業経済的意味、などについてほとんどまったく論じていない。これはかえって賢明かもしれない。しかし、あまりにバラ色の未来を想定してるのが気にはかかる。

丸谷才一「樹影譚」（文春文庫）

表題作「樹影譚」の他、「鈍感な青年」「夢を買います」の2編が収められている。

「樹影譚」は小説を作ることを小説にしているような作品で、丸谷得意の仕掛けがある。その意味で「横しぐれ」とよく似ている。想像力に基づくストーリー、情景や心理の小説的な描写と、小説論のような評論・思索とが、うまく融合されている。この中で小説の起源に関して出てくる女流評論家というのは、マルト・ロベールという人らしい。朝日新聞の高橋源一郎の文芸時評の中で、山田登世子「メディア都市パリ」を紹介した文章で触れられている。

「鈍感な青年」は、一見よくあるような男女の清々しい恋愛もののようだし、そう読んでもよくできている。もちろんここにもいくつかの工夫が凝らされている。

「夢を買います」はバーのホステスの会話体を取っているが、話の展開が鮮やかである。

小説は最近、芥川賞ものとミステリしか読まない傾向があるせいか、このような丸谷の短編も、つい芥川賞の選定委員が模範例として書いたもの、というような気分で読んでしまうところがある。

田中琢「日本の歴史 2 倭人争乱」（集英社）

この巻で、考古学的材料に文字による資料が加わる。個人名も初めて登場するが、人間的描写はない。卑弥呼にしても雄略にしても、ほとんど名前だけである。

具体的な発掘記録、それにまつわるエピソードなどを上手く用い、書き方を工夫している。しかし、どうも全体の見通し、流れというのが読みにくいように思う。その点で、第1巻はよく書けていた。

邪馬台国論争はごくあっさりとしか触れていない。その他、三角縁神獣鏡や王権の成立過程、銅鐸と銅剣文化圏など、論争のあるテーマが取り上げられ、著者の立場が示されているが、その根拠はあまり明快ではなく、説得性が不足するように思った。

John Le Carre, "The Russia House"

Le Carre の本は読みやすすくない。しかし、これは傑作だ。話の展開も描写力も見事なものだ。

ソ連の「8月革命」（ゴルバチョフ失脚）の時期に、タイミングのよい読書だったといえようか。しばらく前の Time で、冷戦終了によりスパイ小説も題材に困るという話が出ていたが、ペレストロイカ以降のソ連を舞台にしてこういう小説を書く Le Carre は別格だろう。

Bjarne Stroustrup, “C++”

入院中に専門書もいくつか持っていったが、読了したのはこれだけだ。

S. フィッツジェラルド, 村上春樹 訳「マイ・ロスト・シティー」（中公文庫）

ここに収められたいずれの短編も、ペシミズムを感じさせる。短編らしい劇的な仕掛けがない代わりに（もっとも「三時間」にはある意味で典型的な“逆転”があるが、それほどドラマチックではない）、皮肉な人生というものを感じさせる筋書きを工夫している。村上の解説を読むと、ほとんどの話にはフィッツジェラルドの人生経験が投影されているようだ。ただフィッツジェラルドは、太宰や坂口安吾や壇一雄のような単なる生活破滅型の作家ではなく、本来ずいぶん派手な作家であるが。

D. ワインバーグ, 木村泉 訳「コンサルタントの秘密—技術アドバイスの人間学」（共立出版）

ゼミ合宿の課題図書の一つにこれを選んだので、自分でも読まなければと思い読んだ。かなり前に木村さんから寄贈されていて気になっていた本である。

合宿のために感想を別の書いたので、それをここに採録する。かなり長い。

[感心した]

この手の本では第一級のものだろう。もっとも、この手の本をそんなに、というかほとんど読んでいるわけではないが。

ワインバーグのセミナーに一度顔を出したことがあるが、とくに面識はない。そのセミナーの一度の経験も、ずいぶん前のことだが、面白かったという記憶は残っている。やはり、木村泉さんが進行役兼通訳のようなことをされたと思うが、自分は単なる受講者だったのか、何か手伝いをしたのかも忘れた。

したがって、ワインバーグには、もっぱら著書を通じて接しているといつてよい。といつてもそれほど忠実な読者というわけではなく、The Psychology of Computer Programming や Handbook of Walkthrough, Inspections and Technical Review を読み（ただし後者は拾い読み）、木村さんの訳された本や bit の連載をかなり読んでいるという程度である。木村さんは訳された本をいつも送ってくださるので、なるべく読むようにしている。

本の内容は、著者のコンサルタントとしての経験と幅広い教養、知識に基づく。この両者のバランスが、実にいい。経験の裏打ちなしに理論やモデルをふりまわしたり、やたら衒学的になったりせず、一方で現場主義の人の書き物によくあるような、やりきれない平板さ、薄さ、没知性とも無縁である。

[ユーモア]

ワインバーグの特色の一つは、上質なユーモアのセンスだろう。十分楽しめるが、文化の違いというか、米国人独特のホラ話の類には、よく分からないものもある。たとえば、冒頭p.3のジークとルークの話。誰か、分かったかな？

この手のジョークは、翻訳も一番難しいところだろう。

[人生論]

コンサルティングとはカウンセリングに近いのだと、改めて思った。さらにいえば、人生論といった部分がある。人生論といっても、倫理的、哲学的なものではなく、実践的な生き方の指南というところ。最後に参考書として、B. ラッセルの幸福論を挙げているのもうなずける。下手なハウツーものの人生論（幸福の科学?）より、含蓄があるかもしれない。

[身につまされるところ]

MRI で自分はコンサルティングを専業にしていたわけではないが、中にはそれに類する仕事もした。大体、MRI でやっていること全体

が、広い意味ではコンサルティングに入るだろう。もっとも、狭い意味の経営コンサルティングやシステムコンサルティングの比重は、MRIでは意外と小さいのだが。

そういう仕事をする前に、この本を読んでいればよかった思うところは多々ある。とくに身につまされるのは、価格設定に関するところ。これは、別にコンサルティングでなくても、ソフトウェアやサービスを売っている人には、よく納得のいく話だろう。

もっとも、日本の顧客との関係は少し違うと思うところもある。その辺は議論すると面白そうなところ。しかし、日本にはこんな本を書ける人は、いそうにない。

[たとえ話]

イソップや聖書を思わせるたとえ話を効果的に使っている。具体的で、「読者」を退屈させない。さらに、秘訣と思われるのは、話の登場人物に固有名詞を与えることである。とても実名とは思えないし、話そのものがフィクションである可能性も高いが、「昔デューイという依頼主がいた」というだけで、もっともらしくなるから不思議である。

[翻訳]

大体読み易い訳だが、ところどころひっかかる。とくに気になるのが、「読者は」の頻出。

[装丁]

ピンクに近い紫を使った実に安っぽいカバーである。大新聞の書評でも取り上げてよさそうな内容のある本で、2400円もするのだから、もう少しましな装丁ができないものか。

[索引]

語句の索引だけでなく、法則集索引というものがついている。実際にこれで「法則」を検索するという使い方を想定したものというより、一種の遊びだろうが、おかげで法則の英語名が分かり、ネーミングに恐ろしく工夫していること、翻訳も苦労していることがよく分かる。

辺見庸「自動起床装置」（芥川賞）

辺見のこの小説は、90年2月の芥川賞受賞作、大岡玲「表層生活」を連想させた。といっても古い日記を必死でひっくり返して、作者名と題名を探し出したのだが。似ているのは、語り手が青年で、その友人の一風変わった男を通して話を展開させる、という仕掛けである。テーマとしては、こちらは人を起こすという変わった仕事を描いて、眠りと目覚めというあまり小説の題材にないものを扱っているところが、ユニークである。

萩野アンナ「背負い水」（芥川賞）

辺見の作品と比べて、こちらには面白さを感じなかった。

天野彰「居住のソフトウェア」（講談社現代新書）

渡辺，宮脇に続いて，このところ読んできたこの手の本の3人目の著者だが，この人もなかなかの文章家である．子供部屋，リビングなどの考え方は，ほとんど宮脇と同じである．

章立てが気が利いている．いわく，第1章「住まいの経済学」，第2章「住まいの物理学」，第3章「住まいの心理学」，第4章「住まいの生理学」．もっとも，これは後で編集する際に作ったもののようだ．

Tom DeMarco and Timothy Lister, “Peopleware”

この間カリフォルニアに行ったとき，Sunny Vale の本屋で買った．よく知られた本で，松原さんが翻訳を出していることも知っていたが，実物を初めて目にし，面白さにつられて読んだ．

よく書けた本である．言っている内容は常識的に思えることも多いが，語り口が上手いし，例として出すエピソードが豊富である．また人間中心の観点が一貫していて，それに基づいて，よく考えるときわめて革新的な提案をしているのが，しごく当たり前の考えのように見える．

藤沢秀行「勝負と芸一わが囲碁の道」（岩波新書）

藤沢秀行は実に面白い人物だが、もっと面白い話を書けそうな気がする。

クリフォード・ストール，池央耿 訳「カッコウはコンピュータに卵を産む」（草思社）

さすがにベストセラーになるだけのことはある。一気に読んだ。しかし，恐るべき筆力である。天文学を専門とするプログラマが，よくこれだけのストーリーを書けるものだ。ストーリーといってもノンフィクションである。だから，この人の真実を探求する意志，行動力，発想力が素晴らしい，ということだろう。

それになによりも，忠実に記録を残していることが強みだ。この間参加した ISPW と ICSP という会議でも，克明にメモを取っているのが何人かいるのにびっくりし，さらに帰国後，Conrad というノルウェイ人が，両会議について長文のレポートをメールで流してきたのにはさらにびっくりした。記録することへの執念である。

さらに無味乾燥な記録から，このように人間的な物語を紡ぎ出す能力は，並大抵でない。しかも，同棲しているマーサとのことなど，私生活の話題も豊富に，しかも巧みに交えて，さらに小説風の仕立てにしている。

訳も素晴らしい。やはりプロだ。木村泉訳とはちょっと違う。気になったのは「コンピュータ機器連合通信」ぐらい。これは CACM のことだ。調べてみたら，確かにこの著者の論文が CACM 88年5月号

に載っている。本書と比べてはるかにフォーマルな論文である。さらに同じ年の10月号のフォーラムに、新聞記事の対象になることについてエッセイが載っていて、こちらはかなり地が出ています。

西垣通「デジタル・ナルシス」（岩波書店）

ある程度評判となり、サントリー学芸賞というのも取っている。読ませる文章ではある。多少の嫉妬心というか対抗心を感じるところもあり、虚心に読めない感もあったが。

ノイマン、チューリング、バベッジ、シャノン、ベイトソン、ウィーナーを取り上げている。ゲーデルはなぜないのか？

伝記ではない。たとえばシャノンやウィーナーの冒頭など、読ませる工夫をしている。一つの手法は、他の人間や作品を唐突に持ってきて、ぶつけるやり方である。ノイマンにシャルル・フーリエ、チューリングにジャリ、シャノンに聖山アトス、ベイトソンにゴングロヴィッチ、ウィーナーにメルヴィル、といった具合。

これらの天才達を取り上げながら、いずれに対しても多かれ少なかれ批判的である。情報科学のパイオニア達が「生身の人間」という扱いはされていないという問題意識をあげながら、ここでの取り扱い方も「血が通った」ものとは決して言えない。むしろすべて記号化され、象徴化され、著者の本来の主張とは裏腹に、高度なレベル

ではあるが記号操作の対象にされている．確かに論理的な操作ではなく，レトリカルな操作ではあるが．

上田篤「日本人とすまい」（岩波新書）

建築家に結構文章家がいることが分かってきたが，この人の文章もなかなかのものである．少し古いものなので(1974年) これまで敬遠していたが，読んでみるとさほど古さを感じさせない．渡辺や宮脇のような軽さはないが，日本と西洋の建築，文化，住まいについての，広い教養が背景にあり，それが時々はっとさせる指摘を生んでいる．たとえば，日本は雨が多い，湿度の高い環境で，それに合わせて屋根，床などが工夫されてきたのに，現代の住宅がその点を忘れて，住みにくさをもたらしていること，など．壁，戸，柱，庭，階段，などに対する日本と西洋の発想の違いは，他の本でも部分的に触れられていたが，この本がもっとも説得力があるし，自分の読んだ中では一番古い本だから，単純に見ればこれが原典ではないにしても，他の本の参考になっているはずだろう．

Lewis Carrol, annotated by Martin Gardner, "Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass"

M. Gardner が丁寧に注釈をつけたこの本は，多分1960年に出版されたものである．これを僕は昔，榊原さんから譲り受けた．そして美季子がアリスを楽しむ年齢になって，改めて精読したわけである．

一口に言って、Lewis Carrol の世界に魅せられた。Carrollean といわれる研究家が輩出している理由が分かる気がする。Tenniel のオリジナルな挿絵も、この本にはすべて収録されているが、これも楽しい。

Alice は何度も映画化されているらしい。前にTVの放送を録画しておいたイギリスの比較的新しい作品は、なかなかよかった。最近、BSで全3時間のアメリカ映画をやったのも録画した。これは「不思議な国」と「鏡の国」をかなり忠実に映画化している。しかし、ハリウッド的な映画で、あまりよい作品ではない。サミー・デイヴィス、Jr.、リンゴ・スター、イーディー・グーメなどのスターを集めていて、それらの出番では歌を歌わせる。その音楽が典型的なハリウッド・ミュージカルである。とくに悪いのは Jabberwocky を不気味な怪物として登場させ、終わり近くで、実にしつこくアリスを追いかけさせる。これはきっと美季子が怖がると思ったが、Carrol の精神からも遠く離れたものである。ゴジラ映画を見ている気になった。

その点、ディズニーのアリスは、両方のストーリーを適当に混ぜているが、割と上手くできている。

礪山雅「J.S.バッハ」（講談社現代新書）

本屋に行くと、モーツァルトの本は棚2つを優に占めるのに、バッハの本はほとんどない。手軽なもので今手に入るほとんど唯一のも

のがこれである。ちょっと物足りないが、それなりに知識源となった。

吉村武彦「日本の歴史 3 古代王権の展開」（集英社）

思ったほど面白くない。この著者は大化改新あたりを専門とするらしいが、6章1節「大化改新論」など、通説の批判はあっても、自説が明快に述べられていない。

しかし、権力争いは古代からすさまじいものがある。天智から天武にかけての争いは、この間うちNHKでやっていた太平記の原型ともいえる。

1990年

柳田邦男「死の医学」への序章（新潮社）

ガンで死んだ精神科医西川の記録をたどって、死の医学を考えようとしたもの。もちろん、親父がガンで入院していることが読んだきっかけだが、自分の問題でもある。自分の死を考えることが、いかに生きるかにつながる。

原奈「私が殺した少女」（早川書房）

直木賞を取った作品を買って読んだのも初めてなら、そもそも日本の現代のミステリ作品を読んだのもほとんど初めてである。松本清張とか横溝正史は何冊か読んだことがあるが、他には記憶がない。

書評などでよく見るし、文章がいいなどと褒めてあるので、読んでみる気になった。初めのうちは、それほど文章がいいとも思わなかった。少しすると、慣れてきて楽しめるようになった。かなりのボリュームを使って書き込んであるところがいい。チャンドラーの翻訳ものから意識的に影響を受けているらしいが、会話は日本人のものとしては無理があり、苦しいところだ。好んで使われる隠喩も、あまり面白くない。

最後のどんでん返しによる謎解きは、こういう趣向を結末にもってくると自体いかにもオーソドックスなやり口だが、やはりリアリ

ティとしての無理は否めない。別に Parker 流の自然な終わり方でもよかったかもしれない。

M. Gardner, “Mathematical Carnival”

いつ読んでも、ガードナーはすごい。

大岡玲「表層生活」（芥川賞）

“計算機”というあだ名の人物が主人公で、人工知能、認知科学などという言葉も飛び出す、ずいぶん変わった、われわれには題材からも興味深い小説である。「理科的」であることは2年前（1988年2月）の池澤夏樹の「スティルライフ」と共通するところがあるが、池澤は地球物理や天文学の理科であるのに対して、大岡はコンピュータやエレクトロニクス（というよりAV,音響映像技術というべきか）である。ところで偶然かもしれないが、池澤は福永武彦の子、大岡は大岡信の子である。

とっぴな連想だが、ヘルマン・ヘッセの「デーミアン」を思い出した。もっとも“計算機”はデーミアンほど魅力的な人物ではない。

とにかく実験的な小説だが、こういう試みは自分にも新しい小説が書けるかもしれないという気持ちを少々抱かせる。

瀧澤美恵子「ネコババのいる町で」（芥川賞）

この小説は87年夏の村田喜代子の「鍋の中」との共通性を感じさせた。不思議な話を自然な文章で語るところがよく似ている。もっとも瀧澤の話に不思議という形容はややあたらない。女性の主人公の半生を語るが、ただその生い立ちは特異で、なかなか尋常ではない。それを妙に自然に、しかも哀しいところが多いのに、なぜか笑わせる筆致で描いているのがユニークだ。評者達が褒めているのも肯ける。

前に、芥川賞の面白さは選評にあると書いたことがあるが、今回もそれを感じた。選評の短い文章で的確な評価を明快な表現で示すことは、先輩の当代一流と目されているはずの作家達の腕の見せ所でもあるはずで、考えてみれば、これは既成作家の委員達にとってもかなり厳しいテストなのだ。

平川祐弘「西洋の衝撃と日本」（講談社学術文庫）

面白く読める。最初にマテオ・リッチが出てきてアダムスを導入したあたり、スケールの大きい本かと思ったが、読み進むとどちらかといえば小さなテーマを並べた体の本であるという印象が強くなる。いろいろ知らなかったことを教えてもらって面白かったという以上の感想が、なかなか湧いてこない。この人の天皇や革新勢力に対する態度に自分とは合わぬものを感じることも、多少評価を割り引かせているかもしれない。

文献の引用を集めて学問になるなら楽だな、というのが皮肉な感想だが、しかし文献渉猟と引用にも多大な労力と才能が必要なことは認める。

感心したものの中には、解説（仙北谷晃一）でも触れられている、若き漱石によるハイネの「二人の擲弾兵」の訳と、鷗外の「箱入娘」がある。科挙試験の話も実に面白かった。

V. E. フランクル「夜と霧」（みすず書房）

いい本を読んだ。柳田邦男の著作でこの本のことを知ったが、それに合わせるかのように最近再版された（初版は1961年で、買ったのは89年9月20日に出た新装第11刷）。

アウシュビッツのようなことが、人間によって人間に対してなされたということは想像に絶する。その境遇の中で、このように高貴さを保ったこともさらに想像を絶する。

不思議なほどナチへの怒りが述べられていない。一見、運命として受け入れてしまっているようにすら見える。実際はそのようなものではないのだろう。怒りについて書こうとしても、言葉がないのだろう。その分だけ、普遍的な人間精神の書となっている。

中学高校の頃は、人生論という言葉を目にしたものとして考えていたし、人生論を扱うような書もいくつか読んだ。宗教についても考えた。「大人」になって、人生論を真正面から自分で考えることも、

そのような論を読むことも、いつしかほとんどなくなった。ある意味では幸福だったといえるかもしれない。楽をしたともいえる。あやしげな道徳訓やエセ宗教への批判精神もあった。

父の死の前後から、いかに生きるべきか、いかに死ぬべきか、という永遠のテーマに、目を向けざるをえなくなった。この本は、ほとんど信仰の書に近いが、既成の宗教に直接的に触れているところはきわめて少ない。それが自分にはむしろ好ましい。

「解説」というものがついていて、これは余計だ。確かに知識としては役に立つ。しかしその論調、スタイルが、本文と合わない。解説を書いているイギリス人は、階級的な偏見をもっているのではないかと疑わせる。文章にも品格がない。そこに述べられている事実の厳粛さには慄然とさせるものがあるが。

筒井康隆「文学部唯野教授」（岩波書店）

これまで読んだ筒井の小説の中で一番感心した。いかにも難解な文学理論を小説にしてしまうのだから、恐ろしい腕だ。大学もまた巧みに批判揶揄されている。しかも、この小説で、構造主義だとか現象学だとかが分かった気になるのも、すごいところである。だからといって、これを入り口としてそれらの理論を少し突っ込んでみようなどという気にはあまりならないが。

実作者の筒井は何でこんな理論に膨大なエネルギーを費やしているのだろう。技法に意識的な作風だからというだけでは、説明しきれそうにない。

ウンベルト・エーコ、河島英昭 訳「薔薇の名前」（東京創元社）

すごい小説だ。翻訳も大したものだ。こういうものを書く知識，構想力，文章力，持続力は想像が及ばない。圧倒されて，実のある感想が浮かんでこない。

辺見じゅん「収容所からきた遺書」（文芸春秋）

大宅壮一賞を取った作品である。本の選択を賞に任せるのは主体性のない限りだが，大きなはずれがないのは確か。とくにこの本はほとんどの選者が激賞していた。

それだけのことはある。シベリアに抑留されていた日本人の山本幡男という人物に焦点を当てて，その収容所の生活から帰還までを描いている。山本というのが特異な魅力を持った人物で，つらい抑留生活の中で，勉強会や句会を組織し，人々に希望を与え，信奉されるにいたる。この埋もれていた人物の魅力を引き出したのが，本書の手柄である。山本は抑留中に死ぬが，その遺書を仲間が手分けして記憶し（紙に残すと没収されるから），日本の遺族に伝える，という信じられないような事実が，核となるテーマである。遺書だけでなく，本書にある句，短歌，詩，短文などのほとんどすべては，

こうした記憶によって残されたものである。このことは驚異的だが、口誦による詩歌の原点に立ち戻った自然の行為とも言える。

その白眉は「海鳴り」という詩で、この詩にはうならされる。しかし、そのような鑑賞的な感想をはばむ、あるいは越えるものが、これらの詩作にはある。

つまり山本を始めとする人々にとって、句や詩を作ることは余技ではなく、もっと本質的な生活、祈りであって、いわば万葉の時代の人々が歌を作ったのと同じようなものだからである。

事実の中で面白いと思ったことは、山本が満鉄の調査部にいたことがあって、北方調査室の一員として「ソ連抗戦力調査」をまとめたが、これは三菱研究所と東亜研究所が関東軍の要請で作成した際の、下請けで行った調査だという話 (p.56) である。親父がその三菱と東亜の研究所にいたこと、ちょうど整理していた親父の資料の中に、満鉄調査月報が出てきたこと、が面白い。そういえば、本書で度々名前が出てくる「ソ同盟共産党小史」の本も親父の蔵書の中にあった。

収容所の話としては、この間読んだ「夜と霧」との共通点も多い。収容側の冷酷さはもちろんナチの方がひどいが、しかし人の自由を奪うという基本的な不条理は程度の違いを区別できるものではないだろう。その抑圧された側が、このように共通の高い人間性を示すところが、人間の不思議さである。

このノンフィクションは、作者の顔をまったく出さないスタイルである。あとがきで初めて、作者がどういう経緯でこの話を発掘したかが示される。これも一つのやり方であろう。

立花隆「同時代を撃つ Part3」（講談社）

これを読むのも毎年恒例となった。1989年はつくづく大変な年だったことが分かる。ソ連のペレストロイカ。天安門事件。ポーランド、ハンガリー、チェコ、と続いた東欧の共産主義体制の崩壊。そしてベルリンの壁が打ち壊される。

ところで、立花隆も「収容所から来た遺書」を選考委員として激賞していた。

西垣通「秘術としてのAI思考」（ちくまライブラリー）

著者の西垣という人は、1948年生まれ。東大計数出身とある。しかし、会ったこともないし、名前を聞いたこともない。（その後、互いに東大に移り、情報学環では同僚となった。）名簿で調べてみたら、昭和47年計測卒なので、年次も所属もそれなりに距離がある。

ずいぶん気取った本である。

ここで、negative な属性とされているのは、実利性、効率、有用性、合理性、形式性、無謬性、实在論、分析知。それに対するプラスの概念は、レトリック、言葉の多義性、“迷宮”、総合知、芸術

（アート）、虚構性。こう並べると Flores & Winograd の論点と重なるところがあるが、Flores & Winograd が論述的に進めた内容を、歴史からの多彩な引用で“レトリカル”に進めるという書き方の違いがある。そして、AI にこの後者の豊かな可能性を見出しているという結論が、Flores & Winograd と違うところであり、またあまり説得性のないところである。というのは、その理由として挙げられているのが、AIでは厳密ではなく客観的論理性を欠いた自然言語を扱うから、という単純なものであるから。

しかし、必ずしも著者の発見ではないようだが、AI が記憶術や汎知論につながるという指摘は面白い。文章もなかなか達者。記号論や構造主義などをやっている人達の文章のパロディという感じもあるが。

佐伯胖「コンピュータと教育」（岩波新書）

この人の書いたものをまともに読んだのは恐らく初めてだが、感心した。

印象的な主張をいくつか引用する。

「ブラックボックス主義にとどまるかぎり、真の意味での教育は生じえない・・・技術そのものを「わかりやすい」ものにし、万人が納得できるものにしていく、つまり「教育的」側面を大切にすることは、技術というものが人間の文化のいとなみとして発展していくための必須の条件である。」(p.15-16)

「シンボルを見るものは、その解釈の痕跡を手がかりにして、シンボルをつくったときに行った解釈を復元し、抽象化する以前の「もとの世界」を復元する。その際、もとの世界とそっくり同じものが復元されるという保証はない。・・・再解釈が異なるからである。」
(p.67)

「実際の「わかっていく」過程というのは、記号、略図、モデル、現実経験のどこからはじまってもよい。・・・それらが相互に行き来しあって「一つのことが多くを意味し、多くのことが結局は一つである」という実感が生まれたときこそ、まさに「わかった！」と叫び出したくなるときではないだろうか。」(p.140)

「リアリティの喪失というのは、技術的にはリアリティあふれる映像の中で、人びとの感覚がマヒしてきて、虚実の区別があいまいになっている状態をさしている。(中略)(リアリティの喪失に対しては)映像に根源的表象性を回復すること、これが筆者の処方箋だ。」(p.198)

これらの主張はもしかすると、西垣の言っていることに驚くほど相通じるものかもしれない。しかし、西垣のようにレトリックを積み上げてみせて遊ぶという態度ではなく、佐伯はより真剣に真正面から取り組んでいる。その姿勢が好ましい。とくに第5章は読ませる。

しかし、この本の中でもっとも感動的なのは、佐伯本人の主張や体験ではなく、引用されている他の教育者（多くは無名の人たち）の

事例である。例えば、p.120-123の3で割り切れる話、p.150の最大公倍数、最小公約数。そして、もっとも感動的なのが、p.206-214の戸塚によるLOGO教育。

Elmore Leonard, “Bandits”

このうまさにはいつも感心させられる。葬儀屋という設定からして奇抜である。ストーリー、人物描写、会話のリアリティ、を作り出す創造力は、どこから湧き出るものか。しかも Nicaragua のコントラ問題や聖フランシスの話が織り合わさっている。そういう点では、突飛なようだが、ウンベルト・エーコの「薔薇の名前」と重なるところもあるのだ。キリスト教—西欧文化という伝統の脈を感じざるをえない。

石川好「カリフォルニア・ストーリー」（中公新書）

「ストロベリー・ロード」で自分の体験を面白おかしく書いている著者が、文献的にカリフォルニアの歴史を研究してもいて、それらをもとに、カリフォルニアとは、そしてアメリカとは、と考えてきたことがよく分かる本である。

意外なことに、石川は本書でカリフォルニアでの中国人排斥や日本人排斥に、ある程度の理解を示す。しかも、その理解の根拠に中国人の場合と日本人の場合とで、異なるものを挙げている。中国人については、移民を送り出した国家が、自ら郷里を棄てた人間なんかどうでもいいという棄民の態度であるから、粗末にされても仕方が

ないという論調である (p.134)。一方、日本移民が排斥されたのは、彼らが自ら獲得した富をすべて本国に持ち帰ることを前提にした出稼ぎの気風で、定住意思がないことが原因だとする。本国が棄民の国であれば移民は定住の意思が強いはずであり、移民が出稼ぎのつもりでいるなら本国は帰国を歓迎するか少なくとも拒まないのだろう。とすると、この2つの理由は逆の方向を向いている。

もともと僅かな原住インディアンがいた所にスペイン系が入り、それをアングロサクソン系が奪ったのであってみれば、アングロサクソン系が中国や日本の移民を排斥する合理的な根拠はないはずであろう。そんな点が少し気になったが、なかなか考えさせる本であった。

石川好「ストロベリー・ボーイ」(文芸春秋)

大宅壮一賞をとった「ストロベリー・ロード」の続編である。やはり、前作を読んだときのような新鮮な驚きが少なくなるのは致し方ない。その分、登場人物が作者による作り物という印象が強まったのと、一方でアメリカに対する文明批評的な考察の文章が増えたとの印象がある。

一番感動的なのは「おばさん」の話だろう。次に、キング牧師が暗殺されたことについての牧師先生のコメントで、

「人間というものは三つのことでしか自分以外の誰かと係わりを持つことはできません。愛とビジネス行為とセックスです。」

だからすべての関係が断ち切られたところからスタートしているアメリカでは、この三つが過剰になる、という観察には、うならされるものがある。

1968年は、キング、R. ケネディが殺され、大学紛争があった年。この本にも出てくるソンミ事件が起こったのもこの年である。ソンミ事件について、この間NHKでBBCが作ったドキュメンタリーを放映した。たまたま京都のホテルで見たが、厳粛な気持ちにさせられた。元米兵の証言と、村の生き残りのベトナム人の証言で構成されていた。

昭和の一桁から10年代にかけての日本軍と比べれば、おそらくはるかに「民主的」で人権意識のあったはずの米軍が、このようなことを実際にやったのだから、南京虐殺などは決して嘘でも大げさなものでもないのだろうという感想をもった。殺人の訓練を受け、極限的な思考の麻痺状態におかれれば、人間はいくらでも異常で残虐になれるのである。

加害者である元米兵の証言者達が、その後の半生を罪の意識にさいなまれ、十字架を背負って生きているのも、無残であるとともに、人間性への信頼という点ではほっとするところもある。しかし、中には今でもあれは命令によるものだ、正当な行為だと言い張る人間がいる。そして、無期懲役刑を受けながら、ニクソンにより赦免さ

れ、今では地方都市でガソリンスタンドを経営しているというキャリア中尉（取材は拒否）の姿を見ると、その人間への信頼も揺らぐ。

清水義範「グローイング・ダウン」（講談社文庫）

この本は「蕎麦ときしめん」以前の作品集で、だからまだ最近の清水のものの快調さには達していないが、話の作り方は類似である。中では、梅原猛をもじった「神々の歌」に感心した。

ドナルド・キーン「日本の作家」（中公文庫）

キーンの記事は楽しいが、ときどき前に読んだことがあるような気がしてくる。

出典によると、啄木、子規、太宰、谷崎に関する文章には、中央公論社「日本の文学」の解説の転載部分があるという。これらは恐らく昔読んでいたが、その内容を記憶しているとはいえない。

三島に関するものがいくつかあり、それがこの集の中心だが、同じ文章を再利用しているところがある。とすれば、他の作家についても、文章が再利用されている可能性はある。たとえば子規、啄木は「百代の過客」に類似の文章があったろうか。

そんな詮索はまあ無用で、面白かった。三島への傾倒ぶりは不思議なほどだが、その文学をよく理解した上での暖かさに溢れている。

猪瀬直樹「ふるさとを創った男」（日本放送出版協会）

猪瀬は相変わらず面白い題材を見つけてきて、よく調べて面白く読ませる。相変わらず話が発散する傾向も多少見られるが、ここではそれが最小限に抑えられ、小学唱歌というテーマに絞られてまとまりがよい。

最後はやや端折り気味である。とくに岡野貞一については若い頃について詳しい記述があるが、肝心の唱歌作曲のあたりからほとんど登場しないで終わってしまうのは、もともとのプランと恐らく異なり、齟齬であろう。

細かいことで気になったのは、

- 1) 岡野が鳥取から岡山へ移ったのは、同じ池田藩ということと関係ないか？
- 2) 独歩と武蔵野のあたり、もっと話に絡んでこないのか？

「春の小川」は宇田川あたりということは前にも聞いたことがあるが、作詞者が女性だという話もあったような気がする。

辻原登「村の名前」（芥川賞）

丸谷才一が激賞しているが、それほどの感激はなかった。

深田祐介「新西洋事情」（新潮文庫）

もとは1975年に出た本で、時機を逸している感もあるが、読んでみると15年経ってもそれほど状況は変わっていないという感じもあ

る。ユダヤ人のことがやけに出てくるのは、当時のベンダサンの影響もあるのだろうか。つまり、日本の国際性を考えるとき、ユダヤ人を尺度とする、という図式である。

プイグ、野谷文昭 訳「蜘蛛女のキス」(集英社)

ホモと政治犯という登場人物で、性愛、政治、人権というテーマを扱う。獄中での会話を主とする構成、映画の話の織り込み、フロイト、マルクーゼなどの引用による不思議な註、など巧みな手法を用いる、よくできた小説である。映画はかなり原作に忠実だったことが分かる。プイグ自身による芝居用の脚本があるらしい。映画でモリーナ役をやった W. Hart はうまかったが、Hart 自身は筋骨たくましい男である。モリーナのイメージはもっと女っぽいホモかもしれない。

P. D. James, "Cover Her Face"

P. D. James の名は、数年前の Time のカバーストーリーで知った。英国にはどういうわけか女性の優れた推理作家の系譜がある。これを昨日、茗荷谷のコーヒー屋で読み終え、この人の翻訳はどの程度あるものかと思って近くの本屋の文庫の棚をのぞいてみたが、見つからなかった。しかし Ruth Rendell はある。そのあと、小林信彦の「地獄の読書録」というのを立ち読みしたら、「英国の女流作家はすごい」という見出しが目につき、そこを見るとレンデルの「わが目の悪魔」のことを言っているのが分かった。

Cover Her Face の始まりは、まるで J. オースチンを思わせ、いかにも英国的と感じさせる。全体にミステリとしてトリックや謎解きの工夫がそれほどあるわけではない。むしろ性格描写、心理描写に見事な冴えを見せる。最後に登場人物が一堂に会して、そこで犯人が分かるという典型的な「本格推理」の形式に従うが、犯人が誰かはどうでもいいようなものである。（しかし、登場人物の中で一番力が弱そうな人物が、手で首を絞め殺した犯人というのも、おかしいといえおかしい。）とにかくこの悠々としたペースは、E. Leonard とは対照的である。

気になったのは語り手の視点だ。これはいわゆる神の立場を取っていて、特定の人物が語り手になっていないが、人物の内面の心理に立ち入るために、場面ごとにある人物の視点に立っている、ともいえる。その人物がどんどん変わるので、最初のうちは違和感をもった。この手法だと、犯人をその視点に置くことがしにくい、それを避けると犯人が分かってしまう。

冒頭が Eleanor Maxie の視点で語られているのは、その辺の工夫の結果か？読んでいる側では、ずっと Eleanor の目で語られるのかと思ったが、どんどん変わるので戸惑った。

英文は少々読みにくかった。文章も多少凝っているが、英国の風俗や語彙についてのこちらの知識不足が大きい。テレビのことを Telly というなど、初めて知った。Time を探して、カバーストーリーにな

った号をやっと見つけた。1986年10月6日の版である。カバータイトルは“The Mistress of Murder”となっている。写真で見ると、不細工なおばさんである。この時点で66歳。これで分かったが Cover Her Face は彼女の第1作なのだ。

吉村昭「冷たい夏，熱い夏」（新潮文庫）

この本は母が貸してくれたという珍しいきっかけで読んだ。さらに、母には由美子が読んで貸したもので、もともとは由美子の本である。

由美子や母がこれを熱中して呼んだのは、もちろん肺ガンの弟が死ぬのを看取るというこの話を、父の経過と重ね合わせてみたからである。ガンによってあっという間に衰弱していくプロセスは、驚くほどよく似ている。たとえば、点滴，尿管，動脈点滴，酸素吸入，というような一方向の流れである。

一方で違うところもある。この話で、「弟」はガンが発見されて手術してから、1年間生きている。その間のガンの痛みによる苦しみ方は凄絶である。父の場合は11月の下旬に分って、2月19日に死んでしまった。3ヶ月というあっけない期間だった。しかし幸いなことに、ほとんど苦しまなかった。

話の一つの骨格は、「私」があくまでガンであることを本人に隠し通すことにある。父に対してもわれわれはそうした。これまた幸い

なことに、父は猜疑心をあらわにしてわれわれを問い詰めるなどということは、一切しなかった。

多分、当人は分っていただろうが、どの程度認識していたのか想像するしかないくらい、まったくそれに触れなかったのは、われわれとしてはありがたかった。その意味では「私」の措置は理解できる。

一方で、もし自分が病気の場合、ぜひ真実を教えてほしいと感じる。その点で、「私」の態度は理不尽にも思う。

しかし、身内のことをこのように小説にして公にする小説家というのは、どういう存在であろうか。吉村昭は私小説家ではない。それだけに、これは大きなテーマであり、重い課題であったろう。また、これを小説として読むわれわれは、どういう立場で読み受容するのか。自分達のように身近な経験から「身につまされて」読むのが本来なのか。もっと客観的な「鑑賞」がありうるのか。まったく対照的なケースで、ボブ・グリーンの子供日記を読んだときの感想と、合い通じるところもある。

Elmore Leonard, “Killshot”

Leonard のものを読むのは何冊目だろう。どれも退屈しない。これは89年に出たもので、多分最新作だろう。

冒頭のスピード感ある導入部は、いつもながら冴えを見せる。それも、まず犯人側を先に主人公であるかのように取り上げているとこ

ろが工夫だろう。3章で主役の Wayne と Carmen 夫婦が登場するが、短いこの章で夫婦の半生と人柄を鮮明に描く筆力には驚嘆する。しかも、この夫婦に親愛感を持たせるように書くところがすごい。

それに比べると、後半、Missouri に行ったあたりから、意識的にかペースダウンする。

犯人をやっつけるという結末は分っているが、いかにそこに導くかが腕の見せ所で、そこがやはりうまい。意外性と伏線の生かし方が見事。もし、将来、この手のものを書いてみたい気になったら、Leonard の本を途中まで読んで、そこから自分で書いてみて比べてみることだろう。

竹内靖雄「経済倫理学のすすめ」（中公新書）

感情から勘定へというテーゼには首肯できるが、絶対的な価値基準となる勘定の方法などありえないだろう。面白い問題提起が随所にあるが、論理が雑なところも多い。

丸谷才一「横しぐれ」（講談社文芸文庫）

「横しぐれ」は丸谷らしい凝った仕掛けのある小説である。私小説への批判精神からのあてつけのように、語り手が「私」であり、その設定も国文学者で水戸出身と、酒井出身の英文学者＝小説家の丸谷に類似させている。一方で、「作り物」だということをあちこち

で巧みに示す。しかし、丸谷と山頭火という取り合わせは意外だった。あまり丸谷が興味を持ちそうな対象に思えなかった。

そのことは、本人による「文庫版へのあとがき」で触れられていて、さもありなんと思った。

「わたしは発句は好きだが自由律俳句は虫が好かないし、それにあのころやうやく有名になりかけてみた山頭火は毛嫌いして何となく敬遠の気味だったが、それでも、貧困を押し売りする気配が厭だった。」

この「それでも」は分りにくい。それはともかく、この「あとがき」で、あっさりグリーンと父親とバイロンという話の種が明かされてしまう。実経験に基づく小説かと誤解されるのを心配したのだろうか。

方法に意識的な丸谷は、案外に、清水義範などとも近いのかもしれない。「初旅」にはとくにそういう感想をもった。そういえば、清水による丸谷の「忠臣蔵とは何か」のパロディーはよくできていた。

筒井康隆「短篇小説講義」（岩波新書）

「文学部唯野教授」は相変わらず売れているようだが、筒井の岩波からの第2弾がこれということになろう。ただし、唯野教授ほど弾の威力はない。

短篇小説を岩波文庫の外国小説から選んでいるから、驚くほど正統的である。取り上げられているのが、ディケンズ、ビアス、マーク・トウェイン、トーマス・マン、モーム、ゴーリキー、ホフマンというわけなのだから。しかし、たとえば永井龍男（ついこの間死んだが）あたりを名人と評する短篇小説論などと比べると、妙に新鮮ともいえるから不思議だ。

それなりに楽しんで読んだが、いささかあっけなかった。

マーク・ピーターセン「続・日本人の英語」（岩波新書）

あっという間に読んでしまったが、前作に続き相変わらず面白い。なるほどと思ったことはいくつかあるが、たとえば

- 1) the Japanese という言い方と Americans の違い
- 2) He has a sore leg. と His legs are sore.
- 3) If 節に will を使うこと。これについては僕も完全に日本の文法教育に刷り込みをされていて、If I'll be late, I'll call you. などという例文を見ると、“其女子大生”達と同じく変に感じてしまうから、教育は恐ろしい。

全体に見られる日本と日本人に対する暖かい理解やユーモアに、D. キーンと共通するものを感じる。

大野・丸谷・大岡・井上「日本語相談 2」（朝日新聞社）

大野・丸谷・大岡・井上「日本語相談 3」（朝日新聞社）

週間朝日に連載しているものをまとめている。1回当たり3枚と量が少ないのが物足りない。その制約のもとで、この名うての手だれたちが、自ら楽しみながら技を尽くす。しかし面白さは、何と言っても寄せられる相談の質問による。その点、思ったほどよい質問がない。

中上健次「讃歌」（文芸春秋）

ポルノグラフィーである。少なくともそういう宣伝に乗って買い、そういう興味で読み出した。少し前に買った「枯木灘」はほっておいてこっちを読んだのも、そのせいである。

さすがによく引き締まった硬質の文体である。しかし、文体を云々するのは、オペラ歌手がロックを歌うのを聞いて、さすがに音程がしっかりしている、などというようなものかもしれぬ。

設定が巧みに創られている。すべての人物が妙な存在感を持つ。会話が面白い。そういう意味で小説として堪能できる。しかし、それ以上の読後感が浮かばない。

とにかく中上というのは、きわめて特異な魅力を持った現代日本の作家であることが分った。

エド・レジス、大貫昌子 訳「アインシュタインの部屋（上・下）」（工作舎）

プリンストン研究所を対象としたドキュメンタリーである。アインシュタイン、ゲーデル、フォン・ノイマン、ヴェイユ、などとそうそうたる名前が並ぶ。訳本の上巻がこの人達の話（あとオッペンハイマー）だが、個々のエピソードはそれほどのものではない。ただプリンストン研究所というものの成り立ち自身が面白く、いいところに目をつけたといえる。中では、フォン・ノイマンの話が人柄もうまく伝えて生彩がある。

訳本の下巻の方は現在の人を対象としているので、研究の中身にも取材が突っ込んであり、よく書けている。ウルフラム、ウィッテンの両者には、ページ数も多く割いているが、なかなか魅力的な記述である。

猪瀬直樹「欲望のメディア」（小学館）

猪瀬の本はどれも面白いが、これはテレビの話である。「ミカドの肖像」「土地の神話」と続く3部作の完結編というふれこみだが、テーマとしての一貫性はそれほど感じられない。昭和史という大きな共通項と、手紙、議事録、週刊誌などの資料の発掘、駆使、および取材というアプローチ、とくに意外なものを結びつけてくる巧みさ、という共通性は確かにある。

たとえば高柳健次郎の研究室で「イ」の字が見えた日、「大正天皇崩御」でその号外を研究室から出た高柳が見つめた（本当かな？）という。そして昭和天皇が、浜松工高にその実験を見に来る（これ

は本当だ）。それを猪瀬はこう書く。

「古い天皇の死とともに産声をあげたテレビを、新しい天皇が認知するという構図がここに生まれるのだ。」(p.43)

高柳より年長で、機械式のテレビを実験していた男として、早大の川原田政太郎という人物を紹介している。おそらく意図的に触れていないが、その生い立ちは、この間NHKでやっていた朝の連続ドラマ「凜々と」の主人公に重なる。それも結構細部まで（医者に援助を受け東京に勉強に出るが、その医者が姦通罪で捕まるとか、事業に失敗した父親が北海道へ渡るとか）モデルとして利用していることが分る。まあ、このことは別に猪瀬の手柄ではないが。

それよりたとえば

「「のど自慢」を発案したのは、NHK音楽部のプロデューサー三枝健剛（作曲家三枝成章の実父）だった。当時の音楽部長は吉田信、副部長は丸山鉄雄（・・丸山真男の実兄）である。」(p.149)

のさりげない（）内の注に猪瀬の面目がある。大げさにいうとすべてこの手法なのだ。丁寧な人名索引が後についているのは象徴的（しかし、この索引と詳細な文献リストは米国などの出版では常識でも日本の本ではむしろ珍しく、敬服に値する）。

とにかくミカドというテーマは、最初のうちこそヒットラーとの対比という形で提示されるが、やがてどうでもよくなる。あとがきで、「ミカドの肖像」の御真影のテーマを発展させたのだと位置づ

けているが、やや苦しい。しかし、求心的というよりは発散的なのがこの人の特徴であり資質なのだろう。

森毅「数学の歴史」（講談社文庫）

この人の文章は朝日の書評欄などで目にしているが、本を読んだのは初めて。該博な知識を背景に、数学の歴史を簡潔に描いている。後半は、こちらの数学の知識不足もあって、かなり難解。

Ruth Rendell, "A Demon in my View"

定評ある小説だけあってよくできているが、迫力はやや不足。英語の小説を読むとこちらの語彙の不足をいつも感じるが、英国のものは米国以上にそれを感じさせる。

1989年

猪瀬直樹「土地の神話」（小学館）

「ミカドの肖像」と同じようなモチーフでありアプローチである。ただ、五島慶太と田園都市のテーマに絞っているため、「ミカドの肖像」「天皇の影法師」より構成がすっきりしている。日本の、とくに東京の都市計画のあり方、というよりむしろどうして都市計画が育たなかったか、という問題意識も割合はっきりしている。

ラッセル・スパー、左近允尚敏 訳「戦艦大和の運命―英国人ジャーナリストの見た日本海軍」（新潮社）

こういう本を読みなれていないせいか、翻訳のせいか、読みにくかった。訳者の左近允尚敏という人は元海軍士官でサンケイの客員論説委員という経歴から適任と思われるが、なぜかずっと頭に入らない文章である。しかし原文自身が引用など日本文から翻訳しているところもあるわけで、それらは原典に当たっているようだから、日本語訳で読むことに意味があるはずだ。

固有名詞がずいぶん出てきて、それめかなり綿密な取材に基づいているらしいのだが、それらの人物が最後まで頭に入らず、そのために印象が薄くなってしまった。

吉村昭「戦艦武蔵」（新潮文庫）

想像していたのと大分違う作品だった。

全14章のうち、11章までが、武蔵の建造から竣工までの話で、残りが編入されて沈没するまでである。これがまず意外だった。

が、「あとがき」で、この作品のきっかけが人から借用した造船技師による戦艦武蔵の建造日誌であったことが明かされる。しかし、そのような作品の成立経緯とは別に、武蔵の生涯が確かに建造の過程はドラマに満ちていながら、実績上はおかしなほど役に立たず、成果をあげるチャンスすらなく、ただ沈められるために存在したようであることから、このような構成が納得されるのである。

磯田光一が解説を書いている、それにはたとえば

「・・・武蔵の建造もまた“愚行”であるという批評眼を、つねにこの作者は失っていない。」

などとあり、それを途中で先に読んでいたが、僕はあまりそう感じなかった。むしろ同じ磯田が引用している

「所員たちには、一つの確信があった。自分たちのつくっているこの巨大な新型戦艦が海上に浮べば、日本の国土は、おそらく十二分に守護されるだろうということ。かれらは、この島国の住民の生命・財産が、自分たちの腕にゆだねられているのだという、強い責任感に支配されてる。」

などをみると、批判精神が欠如しているのではないかとすら思った。

しかし、多分そうではないのである。具体的な記述、描写からは、おそらくきわめて意図的に価値評価を抜きさっているのだ。そして物語り全体からその徒労性、しかしその中での人間の営みということを浮びあがらせようとしているのだろう。

吉村という作家は初めて読んだ。誰かが朝日の書評欄の小さなコラム「私の5冊」だけで、吉村の作品を激賞していた。朝日の威力はやはりすさまじく、ある女性作家が同じコラムにある本を薦めたら、絶版になりかかっていたその本がたちまち大変な売れ行きになったという話がある。それと同じ伝で、紀伊国屋の吉村作品が並べられた棚には、この吉村作品を激賞したコラムのコピーが宣伝に使われていた。

語り口がうまいし、冒頭をシュロの話から始めるところなど憎いばかりである。しかしそのニュートラルな書きぶりは、いい面もあるが、やや物足りなさを与えるものでもある。

この小説の中で一番感動的なところは竣工の場面で、完成させた技術者達（だけでなくもちろん作業員も）の感激ぶりはよく分る。同じ技術系の人間として、こういう感動を真には味わっていないという、ある種の羨望感すら感じる。同時に、このような技術者の与えられた目標に無批判に邁進する行動の問題性もつくづく感じる。しかし自分がそのような立場だったらどうか。正しい評価眼がもてた

か。もしそのような判断力があつたとしても、体制に反して批判ができただろうか。

Dick Francis, "The Danger"

Dick Francis に駄作はない気がするが、これまた冒頭からいきなりクライマックスに飛び込むような迫力である。宣伝についている裏表紙の書評の引用の中に、それをうまく言っているのがある。

"Leaving the starting gate like a shot out of a gun ..." (Observer)

コーヒーなど飲みながらこれを読むのは楽しい。ただ、最後はちょっとあっけない。

Dick Francis, "Break In"

これも見事だが、D. Francis を続けて読んでくると、ワンパターンではあるとも感じる。主人公はきわめて知的であるだけでなく、意志が強くタフ。必ず美女が出てきて、主人公とのロマンスがある。はらはらさせながら、最後はハッピーエンド。こう筋書きが決まっている中で、リアリティを持たせ、人物は個性的に作り、筋の展開がスピーディで飽きさせない。The Dangerと同様、最後のところにちょっと無理な感じもあるが、そこに来るまでは迫力満点だ。

南木佳士「ダイヤモンド・ダスト」(芥川賞)

李良枝「由熙」(芥川賞)

前者は死，老年，後者は民族，言語という重いテーマを扱う．どちらもそのテーマに真面目に取り組み，しかも理屈っぽくはならず小説として読ませる仕上げにしているところが共通する．

ただし，前者は初めのうち梗概を読んでいるような感すら起こさせるほど簡潔なのに（とくに主人公の死んだ妻の話など），後者は筋書きがややゴタゴタしている．この李の小説は，日本で育ち早大を中退して，今韓国の大学にいる在日韓国人の作者が，日本語で書いて芥川賞を取ったということ自体，やや複雑な成立事情だ．ちょっと前のユダヤ人の妻としてユダヤ人社会を皮肉な眼で書いた女流の芥川賞作品を連想した（米谷ふみ子「過越しの祭」）．あの作品がユダヤ人から批判されたと同じように，韓国人は複雑な思いでこの作品と受賞というイベントを捉えるのではないだろうか．

吉村昭「零式戦闘機」（新潮文庫）

小説として面白い部分もあるが，自分としてはあまり知識のなかった歴史をたどること自体が面白かった．生産された飛行機を工場から飛行場まで牛車で運んでいたという話が一つのポイントで，奇想天外ともいえ悲しい話ともいえるが，それを冒頭にもってきたところが戦艦武蔵のシュロの話と同様の工夫である．しかし，なぜ道路をつくらなかったのだろうか．実に不思議だ．

解説（鶴岡冬二）が，よく新聞に暇な老人が投書するテレビドラマ評と似たような調子で，がっかり．

立花隆「脳死再論」 （中央公論社）

これは斜読みした。

柳田邦男「零式戦闘機」 （文春文庫）

吉村の「零式戦闘機」を読んだとき、もっと堀越を中心にもってきて技術に的を絞った本も書けるのではないか、と思った。まさにそれをやったのが本書である。吉村の本が昭和43年、これが52年に初版出版。だから柳田は多分に吉村のものを意識しているはずである。

資料に共通するところが当然多いから、類似のエピソードも多く語られる。柳田は、零戦の前の七試と九試にも多くのページを割いて、その間の技術者の成長ぶりを描いている。一方、吉村の方は零戦完成後の戦争での使われ方や、それを含めた歴史を描いている。吉村のきっかけが名古屋の工場に動員されて空襲で死んだ中学生たちを思ったことであつたらしいのに対し、柳田は事故調査の山名教授との接点から零戦に興味をもったということが、この2つの作品の性格を分けている。

導入部分などに不満があるが、面白く読めた。とくに当時の技師達にかなり綿密に取材しているところが柳田らしく、読ませるところである。

高階秀爾「ルネッサンスの光と闇―芸術と精神風土」（中公文庫）

本屋でたまたま見つけて買った本だが，拾いものだった．もとは1971年に出版され，中公文庫として最近再版された．そのもとは雑誌「三彩」への連載だという．

もっとも多く触れられているのがボッティチェリ．次はティツィアーノか．その中で，ユマニスト達のネオ・プラトニズム，そこでのグレコローマン古典とキリスト教との関係，が中心のテーマである．雑誌の連載ということもあり，かっちりした構成を持った本ではないが，大きなテーマの中で筆の流れに任せていくという進行が，一つの魅力でもある．こういう「研究」で楽しみながら食っていけるのは，うらやましくもある．

残念ながら172載っている図版が小さく白黒で不鮮明だが，時々美術書の複製などを引っ張り出して眺めながら楽しんだ．きちんとした索引がついているのに感心した．

高校のとき，小型版の美術全集シリーズのなかでたまたま1冊だけ買ったのがルネッサンスものだった．その印象は暗い．ルネッサンスの光よりも，中世から引きずっている宗教画の暗さの方が印象として強い．たとえばマンテーニャの宗教画である．その一方で，裸体画にエロチシズムを感じ，10代という年齢と，カトリック教育を

受けてきたという背景から、妙に屈折した興奮を味わったように思う。ポルノグラフィーから見れば他愛もないものだが。

吉川弘之、立花隆「ロボットが街を歩く日」（三田出版会）

吉川と立花という組み合わせから大きな期待を持ったが、期待ほどではなかった。気が向いたときに少しずつ読み、なかば義務的な気持ちで読み終えた。

中村紘子「チャイコフスキー・コンクール ピアニストが聴く現代」（中央公論社）

大宅賞の発表された文芸春秋を買ったのだが、受賞の二作はいずれも1章程度の抜粋が載っているだけなので、ミーハー的とは思いつつ、両方の単行本を改めて買ってしまった。で、まず中村の方を読んだ。

なかなか文章力がある。もっとも中央公論に12回連載したものということから、構成はゴタゴタしているところがある。コンクールでは、そしてクラシック音楽界全体で（多分ピアノに限らず）、19世紀ロマン派が中心であることが、改めて強く認識された。古典派や現代音楽のウェイトは想像以上に低い。

日本では「ハイ・フィンガー」という変な伝統があるというのは新しい知識だが、これと19世紀ロマン派とが不適合だという話はよく分る一方、それに関連する「なぜバッハをショパンのように弾いて

はいけないのか」（これは文脈からするとむしろ「なぜショパンをバッハのように弾いてはいけないのか」となりそうであるが）とか、「音楽的」と「出鱈目」との違いとかの議論は、十分よく分らないところもある。また、日本人演奏家への著者の視点も、アンビバレントで揺れている。

立花隆「同時代を撃つ Part2」（講談社）

読んで実にスカッとする。週刊現代に連載された短文集ながら、よく調べてあり、手抜きがない。しかもその歯切れのいい批判精神は爽快。思想的にはまったく違うが、ズバリ言う語り口は大前研一に通じるものがある。しかし、右の大前に対し、立花の立つ立場にはほとんど全面的に共感を覚える。とくにたとえば天皇問題、イラン航空機撃墜問題、マスコミ批判。

さすがだと思わせるのはリクルート関連である。すでに88/11/26号時点で、高石、加藤、長谷川、式場、さらに真藤までの逮捕を見通している。

決まった枚数の制約の中で、単なる想像上の議論でなく、しっかりと事実の分析を踏まえて、きちんとした論理構成により過不足なく強い主張をする手腕は、いつもながら見事である。

ダンテ、谷口江里也 訳「神曲（抄）」(JICC)

ギュスターブ・ドレという挿絵画家が19世紀にいたそうだが、そのドレがつけた絵を中心に神曲を抜粋し、谷口江里也という人が訳をつけたもの。JICCという出版社から出ていて、あまり素性のはっきりしない本である。たとえばこれはドレの絵すべてを使っているのか、少なくとも絵を縮小拡大するなどかなり自由に編集している形跡はある。抄訳・意識というが、原本のどのくらいの部分なのか。どのくらい「意識」しているのか。これは全訳版と比べてみれば分ることだが。

想像力を挿絵に頼るのは邪道といえど邪道だが、もとは別の本だと思えば楽しめる。ドレの絵はあまり品がよくなく、現代の劇画と同じようなものである。しかし丹念な仕事ではある。大江健三郎の小説を読んで神曲の面白さを吹き込まれたが、この本でもそのスケール的一端はうかがえる。

Robert Parker, "Crimson Joy"

Parker はこれまで読んだことがない。最近、日本に来たのか来る予定なのかで、この間寄った丸善に Parker コーナーができていた。Spencer ものをすでに15冊出しているそうだが、初めてなのでどれにしようか迷った。Promised Land で1976年の E. A. Poe Award を受けているそうだが、それは見つからなかった。それで最新作というこれを買った。

推理，謎解きがあるわけではない．かといってハードボイルドものらしく，サスペンスのある立ち回りがあるわけでもない．最後なども実にあっさりと犯人が捕まる．不思議なミステリだ．かといって純文学に近い密度の濃さがあるわけでもなく，軽い．テーマは犯罪とか推理というよりむしろ，Spencer と Susan の間の職業および男女の役割と関係にまつわる葛藤という感じだが，あまり深刻でもない．Susan の分析医という職業上の守秘義務と，それにかからむ自立性へのこだわりは，正直言って自分には理解できない感もある．

しかし，妙な味がある．会話の妙，ところどころに出てくる術学趣味など．

石川好「ストロベリー・ロード（上・下）」（早川書房）

5月の連休中の2日間で一気に読んだが，一気に読ませるだけのものがある．

体験的なアメリカ論である．僕の知らないアメリカである．自分の知っている範囲は，この本の言い方でいえばビジネス日本人の社会や，そこから見たアメリカに近いだろう．移民1世や2世の，そして“ファーマー”の眼から見たものではない．

といっても著者は高校出たてで，半ば学生としてアメリカに行っているんで，本当の移民ではない．それだけ客観的でもある．著者，石川の年代は僕と同じである．だからたとえば

「1960年代の前半に日本の高等学校で教育を受けたものならだれしもが持ったアメリカに対する敵意が、僕の中にも芽生えていたのである。」(上, p.38)

などというのを読むと、妙に納得する。自分の高校はミッションスクールで、教師に60年安保の洗礼を受けていたものなどは見当たらないのにもかかわらず。また、考えてみればこういう感覚をずいぶん前に忘れていたのにもかかわらず。

一方、この本は、一種の青春小説という感もある。たとえば Salinger, 最近の McInerney, 日本の庄司薫。作者のあとがきの冒頭で

「日記やメモの類を残したわけでもないのに、23年も前のことがどうしてこれほど鮮明に記憶のうちにあるのだろうか・・・」

とある。多分事実だろうが、半ば弁解でもあるのではないか。会話の文があまりに生き生きしている。つまり、ある意味で創作したのではないだろうか。だからといって価値が下がると言っているわけではない。石牟礼道子の「苦海浄土」を連想する。

上質のユーモアがあり、読みながら何度も噴き出した。人への優しさ、とくに丘の上のじいさんなどへの態度は気持ちがよい。また同じような人のよさを見せる兄の描写もうまい。自分がかっこよく見せない書きっぷりでいて、女性とのセックス関係など、かなりかっこいいところがあるのだ。

楽しい読書だった。

Elmore Leonard, "52 Pick-Up"

これは本物だ。Glitz よりすごい。話の展開が実にリアルでスムーズ。作り物という感じを与えない。会話のうまさはいうまでもない。この作家はかなりの年になってから売れ始めたらしい。とにかくこの間読んだ R. Parker の軽さとは対照的だ。探偵や刑事が登場せず、脅迫されている被害者が主人公というのも変わった趣向といえる。

S. W. Hawking, "A Brief History of Time," Bantam Books

見事な本である。Hawking という人物については、最初に Time で知った。Time に載ったのも、昨年この本が出てからであろう。いかに自分が現代物理学に疎いかという証左といえる。次にこの本について目にしたのは、加藤周一が月1回朝日新聞に書いている随筆によってである。飛行場で買って飛行機の中で読んで感心したという。

Time の記事では、Hawking の身体の障害のことが何よりも印象に残っている。ほとんど身体が動かないという。

実際に当人の著書を読んで、いろいろなことを考えさせられた。たとえば、子供の頃、アインシュタイン伝や少年向きの科学シリーズを読んで、科学者に憧れを抱いたこと。その憧れを漠然としたまま持ち越して理Iに入り、2年のときの進学振分け志望をまず理物に出

したこと。しかしあまり信念もなく、それを引っ込め（というよりまず理物に出したのが自分の気持ちの中では儀式のようなもので、いずれ工学部に変更することが前提だったような記憶がある）、一応、物理という名のついた応用物理学科を選んだこと。実に今から考えるとのんきでいい加減な話だが、応物に入るまでその中にどんな科があるのかを知らず、数理の存在もさらに1学期過ぎてコース選好の時点でやっと認識したような状態であったこと。それらをまづ思い出した。

ある意味で皮肉なことに、回り道をして今、「学者」というような身分になった。しかし、物理とは遠く離れ、これまでのところ研究としての実績にはあまり見るべきものがない。

この本は、現代物理学の最先端の状況を、その第一人者が分りやすく明晰に紹介しているだけでなく、哲学的な面についても興味深い議論をしているし、歴史へのしっかりした眼も見せている。おまけについているそれぞれ2ページのアインシュタイン、ガリレオ、ニュートンについての逸話的な言及すら、生き生きとした描写で読ませる。

とにかく大きな刺激を受けた。この方面を改めて勉強する気にもなるし、自分の分野での研究者としての生き方についても示唆を受けた。

ワインバーガー，木村泉 訳「ライトついてますか」（共立出版）

なかなか面白かった。

Robert Parker, “Promised Land”

Parker の出世作だけあって，この間読んだ *Crimson Joy* より迫力がある。しかし，会話の妙，銜学趣味，クライマックスがあっさりしていること，などの特徴は共通である。*Crimson Joy* では孝子と行ったことがある *Legal Seafood* が出てきたが，今度は *Pier 4* が出てきた。

鹿島茂「レ・ミゼラブル 百六景」（文芸春秋）

この本は1987年7月に買ったが，当時「レ・ミゼラブル」というミュージカルが評判になって，それに合わせて出版されたものだ。

中学1年の夏休みに，レ・ミゼラブルの全訳3巻を読んだのが懐かしい。本郷の伯母が中学入学祝いに本を買ってくれるというので，新潮の世界文学全集の中のこれを選んだ。その理由は，幼稚園か小学校1年のときに「こけし文庫」で読んだ「ああ無情物語」の甘美な読書体験の思い出があったからである。しかし子供の頃あれほど楽しかった読書が，この原作を読んだときは何でこんなにつらいのかと思った。最後まで読まねばという半ば義務感から読破した覚えがある。その理由の一つは，本筋に関係ない脱線，あるいは社会評論

が延々と続くところにある。たとえば、修道院という組織についての長い長い考察。しかし、本当の問題は悪文としか言いようのないひどい訳のせいだったろう。佐藤朔という慶大の塾長をやった人の翻訳だが、最初の1ページを見ただけでも、こんな文にお目にかかる。

「世間の大変動のために生活や財産をめちゃめちゃにされてもびくともしなかった人も、ときにはショックを受けて、気も転倒するような神秘的な恐ろしい打撃に、かれはこれまでその生活をしめていた気ばらしと愛欲のさなかに、不意打ちをくらったのであろうか？」
これを中学生に読ませるのは犯罪的ではないだろうか。

これを買ってくれた伯母が、ついこの間死んだが、2年間もほっておいたこのダイジェスト版を取り出して読んでみたのも、偶然ではあるが因縁めく。この間の神曲と同じように、挿絵を中心にダイジェストしている。ドレの絵を使った「神曲」と違うのは、著者が単に抜粋の訳をつけているだけでなく、時代背景、社会状況を紹介しようという、社会史的な観点を意図しているところにある。挿絵1ページに対してダイジェストと考察1ページという分量からいっても、その試みはよく成功しているとはいえないが、なるほどと思わせるところも所々にある。

しかし、何よりも楽しい体験は、30年前の読書の記憶が時折強く立ち戻ってくることである。コゼットが人形を見つめるところ、修道

院・ワートルローなどの筋から離れた蘊蓄話，リュクサンブール公園でコゼットのスカートが風で吹き上がってふくらはぎが見えるところ（この描写に中1の純真な自分は大いに興奮した．考えてみれば，ふくらはぎであって，ももまでもっていないのに），バリケード，地下道．

Jon Bentley, "Programming Pearls"

専門分野の本ではあるが，一流の著作である．CACM に連載されていたときはあまりちゃんと読んでいなかったが，通読してみるとその面白さは格別だ．教育をする立場になったから，このような仕事の貴重さはさらに強く実感する．

高階秀爾「世紀末の美神たち」（集英社）

この間読んだ「ルネッサンスの光と闇」と比べると，軽い題材で気楽に書いている．女性を取り上げることで，19世紀の天才芸術家達の交渉が浮かび上がってくところが味噌である．とくに Misia Godebska と Alma Mahler の交友範囲の広さとレベルの高さには，圧倒される．

James Gleik, "Chaos—Making a New Science"

素晴らしい本だった．カオスを勉強することにしよう．

下田博次「リクルート 新集団主義の研究」（毎日新聞社）

「エコノミスト」誌に連載されたものを本として出版している。

かなりよく取材しているが、今一つ物足りない。結局、リクルート事件とはどういう事件だったのか、リクルートとはどんな会社だったのか、腑に落ちたという印象がない。

下田のリクルートあるいは江副への批判姿勢が、新聞などの論調とあまり変わらないものであるのが、やや意外だった。エスタブリッシュされていない、大学サークルの延長のような性格を残す企業であるがゆえに、あるいは（NTTも含めて）情報産業という未だに鉄鋼業などに牛耳られている財界から見ると新興で素性の分らぬ産業であるがゆえに、実際以上にたたかれた面があるのではないか、というのが僕の一つの仮説である。これについて少しは触れているが、割とあっさり否定している。

そして江副自身には取材しておらず、部課長クラスを中心に取材しているので（それはそれで面白いが）、江副個人を悪者にしているようなところがある。

ラルフ・W・モス，丸山工作 訳「朝からキャビアを」（岩波書店）

強烈な個性だ。自分とはまったく違う個性だが、科学への情熱と人を引っ張っていく力とは、見習うべきものがある。

岩波は最近この手の科学もの（とくに翻訳）に力を入れている。
「ご冗談でしょう，ファインマンさん」が当たったからだろう。

司馬遼太郎「ロシアについて」（文春文庫）

この本と「アメリカ素描」は同じ頃出ているので，姉妹作のようなものかと思っていた。「アメリカ素描」だけは前に読んでいたが，今度「ロシアについて」が文庫に入ったの買って読んだ。

「アメリカ素描」は紀行文だが，これは歴史随筆でまったく趣が違
う。作品としてのまとまりは，アメリカの方がよい。「坂の上の
雲」「菜の花の沖」というどちらも読んだことのある作品にとりか
かる過程で，ロシアのことを考えてきたという。だからここでいう
ロシアは，主としてシベリア，極東のロシアである。その関連で，
モンゴルのことにもかなりの紙面が割かれる。このような普通の人
があまり関心を持たない歴史について，資料にあたり，司馬らしい
着眼を示すところ，とくに国家の品格などを論ずるところは面白
い。しかし，重複も多く，話が前後し，文体も途中で変わったりし
て，雑然とした印象は免れない。

フィリップ・ロス，中野好夫・常盤新平 訳「素晴らしいア メリカ野球」（集英社文庫）

これを読みながら，TVで高校野球を見ていると，2つの世界があま
りに対照的でおかしくなる。もちろん，一方はフィクション，しか
も荒唐無稽なホラ話の類であり，他方は真面目な現実であるから当

たり前だが、しかしよく言われるアメリカの baseball と日本の野球とはまったく別の球技だという議論も、何か納得されるところがある。

しかし、なんという小説だろう。10年以上前に買ったまま読んでいなかったものを改めて読んでみる気になったのは、井上ひさしの解説を読んだからで、これは実に見事な解説兼パロディ。

小説の冒頭の訳者がもっとも苦心したと思われる言葉遊びのところ、そして井上が実に上手に真似ているところは、ある意味で先を読み進む障害となる。実際、これまで何度か読みかけてやめたのはそこを抜けられなかったからである。

今度、井上の解説に導かれてその長いプロローグを乗り越えてからは、一気に読みきった。しかし、井上が「中野好夫、丸谷オー、常盤新平のお三人の訳業によって」と書いているのはどういうわけか。本には訳者として丸谷は載っていない。

さて、この小説は何の話なのか？ アメリカの話には違いない。アメリカを野球と赤狩り（マッカーシズム）で代表させている。不具者、小人のような奇形がいっぱい出てくる、John Irving のようなバロックな世界。さらにユダヤ人、黒人をバカにするような言辞が続く。もちろんユダヤ人作家であるフィリップ・ロスが、racist として書いているわけではない。しかし日本人の自分としては、正直なところ意図がよくは分らない。

プロローグにチョーサーのカンタベリー物語が出てくる。カンタベリー物語の西脇順三郎訳を買ってあるが、ほとんど読んでいない。試しに初めのほうの「騎士の物語」をはす読みしてみた。同じ作り話ながら、やはり現代のロスの「作り話」の方が面白い。それはカンタベリー物語が「本当らしさ」を一応ルールとした作り話なのに、ロスの方は「作り話らしさ」を意識した作り話だからではないか。

筒井康隆「ダンヌンツィオに夢中」（中央公論社）

冒頭にあるのが書名と同じタイトルの評論である。評論と書いたが、評論の形をとった創作であり、パロディである。パロディといってもその評論的な内容がいい加減ではない。今まで読んだ数少ない筒井の文章の中で、これは最上のものである。

表題作の後はおまけのようなもので、新聞や雑誌に書かれた1-4ページ程度の短文を集めている。日経に連載したらしい、評論でもなく芝居やクラリネットの話でもない、日常身辺雑記の随筆らしい随筆も、実はなかなか手が込んでいて、丹念に仕上げられている。

小林信彦「唐獅子株式会社」（新潮文庫）

単行本3冊分が入っていて、さらに筒井康隆の解説がついてるのはずいぶん得だ。実は、筒井の「虚航船団の逆襲」という文庫本を拾い読みしたら、その中にこの解説が収録されていた。それを読んで面白そうだと思って、本体のほうを買ったのである。

まあ、面白く読んだという以外にあまり感想も湧かない。気楽そうに書いていて、自分でも書けそうな感じがするが、これでも結構苦労はしているのだろう。

筒井の注以上に多くのパロディーがある。笑えるという意味では、僕にとっては清水の作品の方が上だ。

Bob Greene, "Cheese Burgers"

最初のアラモの話からして、自分も福永君たちと1984年に行ったときに、「アラモ砦が街の中心地にあり、ショッピングモールと同じような雰囲気で見学化されている」という似たような感想をもったことから、共感させられた。

なにしろ同世代である。ベビーブーマー世代は、多分、国、文化を越えて共感するところがある。とくに米国文化の流入の中で育ったわれわれ日本の戦後世代は、アメリカの同世代人に対して余計そう感じるのかもしれない。

Greene の本質は、ある種のノスタルジーによって古いアメリカのよさを、直接的な表現によらずに訴えているところにありそうだが、その国に育っていない自分が妙に懐かしさを共有できるのは、やはり戦後の日本で成長したという条件によるだろう。それに、たとえばTVドラマ（この本に出てくるのはTVのスーパーマン）やニュース

(やはり出てくるケネディ暗殺を始めとし、米国から日本へ流れるニュースの量は多かった)を共有していることも確か。

もう少し特殊なものとして、教科書の Dick & Jane がある。僕もこの教科書をバンコクの International School で使ったが、その前に日本でも見ていた。それが幼稚園で皆で読んだのか、タイに行くので英語の勉強を個人的に和智(?)先生に習ったときに使ったのか、不確かだが。本書によると、Dick & Jane は1950年代にもっともよく使われたという。そして70年代に絶版になった。

Greene のその他の特徴は、

- ・ 平凡で日常的なことを取り上げる。もちろん、たとえばフォード、ニクソン、メリル・ストリープ、アリのような有名人へのインタビューに基づくものもある。しかし、その場合も視点は一般人のものであろうとしている。「・・・問題」を論じたりはしない。
- ・ 体験的。実際にその場におもむきやってみる。
- ・ 人の本・文献の参照・引用をほとんどまったくしない。ブックishなタイプとは対極的。
- ・ 回顧的
- ・ 優しい
- ・ 平易な文章
- ・ 批判を直接的な表現でしない。たとえばフォード。明らかに批判しているが、表面上はそういう表現はない。

Bob Greene, 西野薫 訳「ボブ・グリーン」の父親日記」（中公文庫）

三鷹の第九書房という本屋で買った。この本屋においてある本はなかなか面白い。その2階は実に旧式な名曲喫茶になっている。

「結婚11年目にして初めて子供を持った」という書き出して、思わず買ってしまった。ボブ・グリーンは1947年生まれで同世代。結婚11年目で子供をもったこと、それが女の子であること、生まれたのが6月であること、まで一致している（美季子は6月14日、アマンダは6月11日）。

こういう条件でもなければ、大して面白くない本かもしれない。まったく私的な記録である。そこが面白いわけだが（一般的な育児書ではないという意味で）、ボブ・グリーンならではの感はあまりない。僕だって書けたろう。だけどボブ・グリーンだからこそ本にもなり売れたわけだ。

日米の違いを感じるところもあるが、それは些末な点で、本質的には誕生から1年というのはどこも変わらない、というのが一番の印象である。

翻訳が自然なこともあって、ずっと長い本にもかかわらず、Cheeseburger を読んだときよりかなり早く読めた。やはり日本語は楽だ。

井上ひさし「吉里吉里人（上・中・下）」（新潮文庫）

大作である。文庫で買ってきて、上を読み、下に取り掛かったら話がつながらない。そこで中があることに気づいた。最初買ったときに、たまたま中が抜けて本棚に並んでいたのである。

この間読んだ「素晴らしいアメリカ野球」の井上ひさしの見事な解説が印象に残っているが、それによるとこの本を76年5月にキャンベラで読んで鼓舞され、1年のオーストラリア滞在予定を半年で切り上げたという。「吉里吉里人」が世に出たのが1981年。この文庫本の解説によれば、その前にまず「終末から」に連載。中断されたが「小説新潮」に再び連載され、やがて思わざる大長編となって現れたとあるが、残念ながらその連載期間がいつなのか書いてない（なお、この由良君美という人の解説は不出来。文庫の解説なのに、話の粗筋にかなりの量をとるなどは最悪だ）。想像するに、「アメリカ野球」を読んだことがこの本の成立に大きな影響を与えているのではないか（たとえば76年というのが、その連載中断時に一致するとか）。

これだけの長さで、しかももとは連載だったというにしては、話の筋立てがよく計算されている。冒頭の汽車の客が全体の2/3あたりに再登場するし、同じく冒頭に出てくる古橋等の旅（鍾乳洞を探検している高校教師の話）の当初の目的も、伏線として後で生かされている。筋や人物の性格描写の破綻も少ない。

これはユートピア小説である。筒井康隆の「美藝公」を思わせる所もある。しかし、それよりはるかに大きく重要で真面目なテーマを扱っている。国家論，自衛隊と軍備力，農業，医療問題，金融，言語（方言と国語）。喜劇の中でこれらの問題に正面から取り組んで退屈させないのは、恐るべき技量である。

「アメリカ野球」と比べると、荒唐無稽ぶりがやはり徹し切れていない、という感もある。それはこういう深刻な問題を真正面から取り上げてしまったからかもしれない。F. ロスの世界と（読んだことはないが想像するにたとえばマルケスの世界と）似て非なるところは、フリークの扱いかもしれない。ここにも、「綿吹き娘」やら、「愚人」として登場する不具者やらがあるが、それほど「異常」でない。しかしフリークの異常さを描くことは、この本に流れるヒューマニズムと相容れないはずである。そこにはむしろ共感できる。

一番感心したのは章の表題である。「吉里吉里語」で実に楽しい題をつけている。

古橋という人物を揶揄化，矮小化しすぎて（古橋はある意味で井上の分身であるために，謙遜が入っていることを読者は感じてしまうが），ちょっと話をまずくしている気もする。もう少し共感できるキャラクターにしてもよかったのではないか。さらに「記録者」という視点がすわりが悪い気がしたが，とにかくそれで首尾一貫して，最後に落ちまでつけている。

井上が勉強家であることは、改めてよく分かった。そのためにあえて言うと、タックス・ヘヴンは tax haven のはずだが、一貫して tax heaven と間違えている。

脳死と植物人間を混同しているのも、立花隆を読んだ後では気になるところ。おそらく、医学や法学上もおかしいところはいろいろあるだろう（たとえば日本人と吉里吉里人が結婚して、日本人が吉里吉里国へ帰化したら、その人の土地が領土として増えるなどとはおかしい話）。

Dashiell Hammett, "The Maltese Falcon"

先日、初めてレンタルビデオ屋に行って、ジョン・ヒューストン監督ハンフリー・ボガード主演の「マルタの鷹」を借りて見た。それで原作を読んでみた。

映画は原作にきわめて忠実だったことが分る。逆に言えば、映画向きの小説だ。会話も生きていて、恐らくほとんどそのまま使われている。

確かに傑作だ。無理がなく、緊迫感とスピードのあるプロット、個性の強い人物の描写。とくに Sam Spade と Brigid O'Shaughnessy というキャラクターは強烈だ。日本の書き手には、こんな人物を創造することは考えられないのではないだろうか。

英語は読みにくかった。映画を見て筋を知っているのに、読み終えるのに結構時間がかかった。1930年の作品ということもあるだろう。4文字言葉を直接表記しないところや、セックス描写のおとなしさに、時代を感じる。1930年といえば昭和5年。藤村が夜明け前を、志賀直哉が暗夜航路を書いていた頃。むしろ江戸川乱歩 (1894-1965) と比べるべきか。「黄金仮面」が1930年だという。

筒井康隆「夢の木坂分岐点」(新潮社)

計算された実験的小説である。夢の話というのは題材にしやすいだろうが、成功するのは難しい。これまで読んだもので面白いと思ったものは記憶にない。

たとえば、鳥尾敏雄に「夢屑」という小説があって、群像500号記念では大岡が

「『夢屑』は想像力奔放で、僕は圧倒されました。いろいろな幻想が出てくる。僕はこんなに沢山いろいろな夢を見られない。」

と褒めているし、この作品集は何かの賞を取ったと思うが、僕は初めを少し読んで、読み続けられなかった。

漱石の「夢十夜」はもう少し面白く読んだような気がするが、何しろ中学か高校の頃だ。

自分でも繰り返し見る夢がある。たとえば飛行機の夢だ。下から見ていると、その飛行機は低空で飛行して必ず墜ちる。もっと恐ろし

い夢も度々見る。空がピカッと光る。あっ、核戦争が始まったと直感する。人類の終わりだ。これで死ぬんだなと思う。気持ちは平静だが、空しさ、寂寥感が迫ってくる独特の気持ちを感じる。

「夢の木坂」の読後感になっていないが、とにかくこの本にもあまりのめりこめなかった。だから時間もずいぶんかかった。この一週間ぐらい、寝る前に枕元で読んだが、毎日1ページもいかないうちに、こっちが眠って夢を見てしまう。

柳田邦男「ガン回廊の炎」（講談社）

親父がガンだと分ったことがきっかけで買って読んだのには違いがないが、なかなか考えさせる本である。

主として、国立がんセンターのガンに対する研究と治療法の発展を追ったものだが、患者の立場からの取材もある。柳田は航空事故を取材したときと同じように、ガンや医学についてもよく勉強し、突っ込んで取材して書いている。立花の脳死の扱いぶりとも一脈通じる。

研究・開発競争の中には、負の面もあるはずである。全体に医者への努力を賞賛するトーンが強く、批判的な部分が僅か、むしろほとんどないのは、柳田の公平な眼を信用すべきだろうか。航空事故で木村団長以下をあれほど明快に批判した柳田だから。

大野晋，丸谷才一「光る源氏の物語（上・下）」（中央公論社）

大変面白く読んだ。前に読んだ同じ二人の対談形式の「日本語のために」も面白かったが，これはそれ以上である。中央公論に連載されていた頃，数回読んでこれは面白そうだと思ったが，やはり引用されている原文を追うのは骨が折れた。今回通して読んで，原文を読むのにも多少は慣れた。

二人が褒める「若菜」や「浮舟」のところは，確かに面白い。それ以外にも縦横無尽に論じていて，しかも二人が適当に対立するところもある。これで源氏を読んだ気になってはウソだろうが，単に与謝野晶子訳などを読むよりずっと印象深いものになっている面もある。

遠山彰「法隆寺金堂炎上」（朝日新聞社）

朝日の夕刊に連載されていて，ちょっと面白そうだと思っていたが，本として出版されたので買って見て，一気に読んだ。

よく調べてある。手際よく整理してある。客観的な記述である。しかし，途中では，何のためにこれを調べて書いているのか，著者の姿勢が分らない気がした。

後半，取材過程が述べられ，新証言を引き出したりして，それまで意識的に抑えた筆遣いだったのが，熱を帯びてくる。結果的には疑

問が残るままではあるが、

遠藤周作「海と毒薬」（中央公論社「日本の文学 72」）

遠藤周作の小説を読んだのは、多分初めてである。この間、日経の「私の履歴書」を遠藤が書いていて、例によって自分がいかに落第生だったかを面白おかしく読ませていたが、ああいうものを読むと、遠藤がどうして作家になったのか、しかもこのような深刻な作品を書くに至ったのか、さっぱり分らない。

捕虜を人体実験で殺すという、重いテーマである。神を信じない者にとって、罪の意識とは何なのかが主題といえよう。構成が工夫してある。視点が、何人かの登場人物の間を移るという工夫である。中で主となるのは勝呂の立場である。途中、「裁かれる人々」という表題のもとに、看護婦上田と勝呂の同僚戸田の告白が入るが、戸田の方に出てくるエピソードはちょっと作為的過ぎる。

1988年

I. ディナーセン、横山貞子 訳「夢見る人びと」（晶文社）

ディナーセンの「七つのゴシック物語」のうちの3つを訳した本である。そのうち「エルシノーアの一夜」と「夢見る人びと」はかなり前に読んだ。この物語集の最後に入っているのは「詩人」という作品で、これを読めば一冊片付くという変な義務感から、87年の年末にこれを読んだ。この最初の2作品と「詩人」の読書の間に、「アフリカの日々」を読んでいる。

前に読んだ中では「夢見る人びと」の空想性、非現実的な物語性が印象に残っている。「詩人」も同じような世界である。ヒルシホルムというデンマークの町の森を初めとする自然の描写が美しい。訳も見事。解説によれば、この物語は「作家によって作中で作家が否定される物語」であるという。なるほど、そういう読み方もできよう。

塩野七生「わが友マキャヴェッリ」（中央公論社）

装丁の美しい本である。

結構本が売れている塩野を今まで読んだことがなかったのは、一つには自分にもまだある女性への偏見であるかもしれない。しかし、去年、田中優子の著作に感心し、最近では本間千代子を読んだ。女性

の力作が目立つこの頃である。二つには、フィレンツェに住んでヴェネチアやフィレンツェの歴史物を美しい装丁の本として出し、それがまた高く評価され受け入れられているこの著者に、「いいご身分だなあ」というある種の嫉妬心を漠然と抱いていたかもしれない。

この新作を買って読んでみる気になったのは、例のように書評で、確か高坂正堯あたりが褒めていたからだ。

マキアヴェリについては、これまでほとんど教科書的な知識しかなかった。作者が惚れこむだけあって、なるほど面白い人物である。しかし作者が惚れこんでいることはよく分るが、なぜなのかはあまり明確に書かれていない。政治や権力と無関係な現代の日本人の女性が、どうして？というのはあまりに硬直的な疑問かもしれない。人間としての親愛と興味と言うだろうか。多少、書いてあるのは、同じ「モノ書き」として、ということであるが。

作者はそういう意味では、自分の顔、すなわち「モノ書きである私には」とか、「女である私には」という面をわりに出す。

序章がうまい。後の方で、まるで種明かしのようになり始めの頃、編集者から最初の3行で読ませなければダメだと言われたとある。

文章は悪くないが、時々「キープして」など安易な英語表現を混ぜるのはどういうわけか。このイタリア語の堪能な人が、ところで、これをもし作者がイタリア語で書いたら、イタリアで出版する本屋があるか？出版したとして売れるか？これはちょっと皮肉な疑問である。つまり日本語にして、あるいは日本人の読者を対象としているから意味のある本か。まあそれでもいいのだが。

ネガティブな（安易な英語表現）ことを少し書いたが、読書としては楽しめた。

D. キーン「続百代の過客（上）」（朝日選書）

「百代の過客」（正）を読んだのは1986年である。（続）は新聞で連載されているときに、かなり読んだ。改めて通読してみるとまた面白い。

（正）で扱った江戸までと違って、近代には膨大な量の日記があるから、そのうちのどれを取り上げるかが一つのポイントである。この上巻（下巻はまだ出版されていない）での中心は、幕末・明治に異文化（北海道、沖縄も含め）に接した人々の体験に焦点を当てている。これは実に卓抜な着眼点である。鷗外や漱石の日記もそのテーマの中で捉えられている。最後の木戸と植木が異なるが、木戸は米欧での新島との接触がきっかけで取り上げられたものだし、植木は自由主義というヨーロッパ思想の推進という面で捉えられ、最後に「彼の人間性発展の軌跡を見ると、もうこの時代においては、日

本人が近代人となるためには、外国へ行くことが、必須の条件ではなくなっていることが分るのである」と結んでいる。これが上巻全体の結びの文句でもあるわけだ。

この本に取り上げられて、初めて知った名前も多い。そういう中に特に面白い発見があり、キーンの暖かい眼と感受性が見られる。

一人に当てられているページ数で、キーンの惚れこみ具合が大体分る。多い順に挙げれば、

久米邦武 28

新島襄 26

成島柳北 26

村垣範正 25

森鷗外 25（ただし鷗外は別に9ページ分がある）

笹森儀助 24

松浦武四郎 24

たとえば、最もページ数の多い久米邦武についての文章は、最後をこんな優しい言葉で結んでいる。

「究極的には、彼が観察者として特に明敏であっただけではなく、一個の立派な人間であったことが、私には分った。なれるものなら、友だちになりたかった人物である。」

河合隼雄「宗教と科学の接点」（岩波書店）

大きなテーマである。帯には「20世紀末の、そして21世紀の最大の課題となるであろう大問題に、真正面から取り組む」とあるが、真正面ではない。

あとがきに、「世界」から依頼があり、任にあらずと断ったが、
「この大問題を正面から取りあげて論じるというのではなく、筆者が自分の経験から見て、現在のところこう考えているということ
を、・・・」

書いてくれと言われて引き受けたとある。岩波でも、宣伝のためにはこういう自己撞着のようなことをやるのか。

筆者の立場は心理療法の実践者としてのそれである。またユングの学徒である（といって自分はユングの学説にまったく無知であるが）。死の扱い、日本人の自己と西洋の自我、意識と無意識の問題などの議論は、説得力がある。小難しく書かない態度は好感がもてる。しかし、共時性とか意識のスペクトルという話は、やはり分ったようで分らない。

根本的な疑問は、これが宗教かという点である。（西洋）科学と何か（たとえば東洋哲学）への接点の話であることは確か。その何かを宗教と呼んでいいのか。キリスト教を聞かされてきた自分には、どうもこれが宗教とは思えない。

大野晋，丸谷才一「日本語で一番大事なもの」（中央公論社）

対談という形式をとっているが、よくある出たところ勝負の対談ではない。日本語の助詞、助動詞を主として万葉、古今、新古今などの和歌を題材に綿密に論じたもの。資料、索引などを周到に用意し、共同作業、共同研究のプロセスを生き生きと捉えているという感がある、新しい作品形式といえよう。現在、中央公論で同じ二人が源氏物語を同じ形式で論じているが、その先駆けとなるものといえる。

帯に、野坂昭如の評が引用してあり、それが週間朝日 '80 12/12 となっているので、大分前のものらしい。最後の対談が去年のもので（「サラダ記念日」が材料として登場する）、「前回からかなりの年数が経っている」とある。

日本語文法を論じて新しい着想を次々と出している大野晋に、文学者丸谷がかなり勉強して絡んでいくところがこの本のミソだが、それだけでなく和歌の文学的鑑賞の手引きとしての役割も果たしているところが大変面白いところだし、丸谷の面目の出ているところでもある。

中勘助「銀の匙」（岩波文庫）

昨年、岩波文庫が創刊60周年記念として、「私の好きな岩波文庫100」というキャンペーンを行った。著名人にアンケートして好きな作品を選ばせ、集計して票を多く集めたものから100冊を選出している。トップになったのがこの「銀の匙」だったことが、ちょっ

とした話題になった。この評判により本屋では売り切れになっているというので、その頃、恵比寿の小さな本屋でこれを見つけたとき、つい買う気になった。

「銀の匙」は栄光学園の図書室にもあり、友人が読んでいるという話も聞き、その頃読もうと思ったことがある。25年も前のことである。しかしなぜか手を出さずにそのままきた。

自分が高校生くらいの頃、やはり岩波は「100冊の本」というのを出した。中学の頃かもしれない。一時、その100冊を読破しようと情熱を燃やしたことがある。7割ぐらいいは読んだろうか。

読み始めて初めのうちはあまり引き込まれなかった。意気地のない子供の話だ。それが、結構自分の幼年時代の経験と共通するものが多いだけに、かえって気詰まりな気持ちになる。自分の子供の頃も、まず周りが女ばかりだった。母と妹、遊び相手は美重子叔母のところの従姉妹、陽子と礼子、あるいは吉田さんのヤスコちゃんとマリコちゃん。ばあやがいたし、近所の子供達とは遊ばなかった。言葉遣いも「お庭」「お水」のように女言葉で（これは昔は女言葉というより幼児語という別の言葉遣いだったかもしれないが）、幼稚園からタイに行くまでぐらいいは、ずいぶん弱虫の子供だったろう。

内向した子供の世界を描くだけでは、その描写がいかに美しくとも、退屈だという感じがあった。やはり成長という面がなくては。

期待していたように、前篇の中ごろで急に成長、一種の逆転が来る。つまりクラスでビリが一番になり、力もついて大将格になる。それはあまりにあっさり描かれているので、拍子抜けがするほどである。しかし、内省的な性格はその後も変わらない。そしてそのことは、この作品に一貫性を与えてよいのだが。

前篇で感動したのは、最後の恵ちゃんとの別れの場面。美しい。後篇では田舎に戻ってすっかり年老いた伯母さんとの再会の場面。ここは、幼児の時、あれだけ強い愛情を与えられた人との再会にしては、かなりあっさりしている。抑えた筆の中に強く感動させるものがあるものの、ある意味ではこれは少年の持つ残酷さ、滅びるものへの無理解が、自然にか意図的にか現れたものか。

お恵ちゃんとの交渉、それから最後の友だちのお姉さんの場面など、意外なエロティシズムがある。もしかしたら、この辺が長い人気の秘密かも知れぬ（たとえば、お姉さんという人物の登場を、風呂に薄く浮いた脂で導入するところなど）。

時代は、明治20年代である。この間の本間の本ではないが、ここに見られる東京山の手の中産階級の家雰囲気は、遠く自分の子供時代の体験にまでつながるものがある。

一方で、小石川の自然描写は、今ではやはり想像を絶する。これがつい100年足らず前の話なのだ。やはり東京は多くのものを失った。

D. キーン「続百代の過客（下）」（朝日選書）

下では上と比べて著名な文学者が多い。上と同じようにページ数の多い順に並べてみると

有島武郎 44

石川啄木 33

国木田独歩 32

樋口一葉 28

正岡子規 28

徳富蘆花 27

というところが上位。で、これらの人がいくつで死んだかに注目したい。

有島 45(自殺), 啄木 26, 独歩 37, 一葉 24, 子規 35, 蘆花 59

子規までは皆, 若死にだ。そのうち, 有島を除くと, 現在の自分の年齢よりはるかに下だ。

だからということもあろうか, この巻のこれら中心人物の日記は, 理想主義的, 生真面目, 生硬, ユーモアの欠如, 内省的などの点で共通点が多い（とくに一葉まで）。

やはりページ数も多く, 友人森田との交渉を詳細に追った有島日記の紹介が, 格別に面白い。それに比べて, 「明治時代の文学作品
中, 私が読んだかぎり, 私を一番感動させるのは, ほかならぬ石川啄木の日記である」という割には, 啄木の日記の面白さは今ひとつ伝わってこなかった。

最も異常なのは蘆花の日記である。女中などへの苛烈な態度と妻を含めた女性への性的交渉を、作り話のように精細に描写している。その行動自身が性格異常のもたらすもののように見えるが、それを事細かに記述することもきわめて異常だ。これまでに読んだ蘆花の作品から受けるイメージと、ずいぶん異なる。

しかし、独歩の生真面目さにはついていけないにしても、独歩、有島、啄木などに見られる若き悩みへの真摯な内省的態度には、自分も遠く離れてしまったような気がするし、時代も醒めてきて、それらを失ってしまったように思える。

池澤夏樹「スティル・ライフ」(芥川賞)

三浦清宏「長男の出家」(芥川賞)

今度の芥川賞は、二人の男性作家の同時受賞で、これは10年ぶりだという。選好委員も皆べたほめだったこともあり、話題となっている。

確かに両者とも面白く読める作品だ。どちらも文章が自然で美しく、話の展開も巧みだ。池澤の方は福永武彦の実子ということでも話題である。もちろん、福永とは世界が違う。“理科的”なセンスが強いところが、選考委員には新鮮だったらしい。理科といっても地球物理や天文学のセンスである。

三浦の方は、小学生の息子が僧になりたいと言い出し、中学のときに実際出家してしまうという変わった話。これが作者自身の体験に基づいているということが、作品そのものの鑑賞とは関係ないというものの、一つの話題になっている。ヘッドフォンステレオを聴いたり、中学に入って不良がかってポルノ雑誌を見たり煙草を吸ったりし始めた現代の少年が、僧になる意志を棄てずに話がどんどんそちらの方に進むというのは不思議な話だ。とくに母親がまったく反対しないのも不思議だったが、後半ではこの母、つまり“僕”の妻との葛藤も、ドロドロしたものではないながら、出てくる。もっとも、数十年ないし数百年前の日本なら、こういう話を不思議と思うほうがおかしかつたろう。

澁澤龍彦「高丘親王航海記」（文芸春秋）

この作家の作品を読むのは初めてである。昨年亡くなり、遺作となったこの作品は評判がよかった。たとえば、本の帯に引用されている奥野健男の評では、

「十年余り文芸時評を続けている間に読んだ多くの文芸作品の中で稀に出会うことのできた屈指のすぐれた小説、綺譚と言ってよい。」

と絶賛している。さらに引用すれば、

「作者の古今東西に及ぶ該博な知識が奇想とも言える卓抜な想像力によって織りなされ、この世を超えた幻想的な物語が展開される。それがブキッシュな厳密な考証に耐えると共に、現代の風刺になっ

ているだけでなく、実におどろくべきことだが、作者の身心の表白にもなっていることだ。」

この最後の「作者の身心の表白」ということは、最後に死ぬ高丘親王が途中から自己の死を予感することと、作者の湍澤がこれを書いたときにおそらく自らの死を予感し、この作品を送り出してすぐに実際に逝ったという事実を踏まえているだろう。

芥川賞のところでも書いたが、作者の私生活についての知識が、読み手に与える影響ということを考えさせられる。それをあえて無視する必要はないと思う一方で、作品の独立した価値評価が難しくなるという面も否定できない。

綺譚という性格では、石川淳の「狂風記」などを連想した。登場する世界はずいぶん違うが、類似の読書体験を与える。

また、文体に工夫がある。分りやすい平明な口語体の中に、やまとことば系の古風な単語を混ぜる。任意に拾えば

「とうに本卦がえりしているのに、どう踏んでも五十代の半ば以上には見えず、親王の背すじはいつもすくよかにぴんとのびていた。」

「とたんに、げっそりしていた一同が活を入れられたように、甲板にわらわらとあつまって、行く手の海上に浮ぶぼんやりした島山のかげを熱心に見つめ出した。」

「息をころして待つこと半時、やがて月が中天に達するや、蟻塚は

ひとときわあかるく照らし出され、それとともに、蟻塚の外壁に嵌まりこんだ小さな石も、はっきりそれと見分けられるまでになった。いや、見分けられるどころではなく、すでに石はまぶしいほどの晃々たる光をはなつて、どうしてもそこに目を向けずにはいられなかった。親王はそこにひたと目を向けた。鳥はいた。内部から滾々とあふれ出る光に浴して、石の中の鳥は目にもけざやかに、いまにも殻をやぶって飛び立たんばかりのすがたに見えた。」(p.36)

立派な文章である。一つ注目すべき点は、漢字とかなの使い方であろう。和語系の動詞、形容詞には通常の習慣よりかなを多く使っている。しかし常にそうしている訳でもない。一定のルールがあるとは思えぬが、こう書かれると漢字を使われる部分がとくに印象に残る。一方、ひらがな表記自身も新鮮に目に映る。もちろん、唐の話、仏教の話で固有名詞を含め自然に漢字が多くなるのを、こうした工夫でバランスを保っていると想像される。

自分は奥野ほどにはこの本の世界に浸りこめなかったが、こうして抜粋をしたりすると、実にすぐれた文章であり、また想像力であると改めて思う。

石牟礼道子「苦海浄土一わが水俣病」 （講談社文庫）

すいぶん前に、丸谷才一の「遊び時間」に収められた「うつくしか潮」という文章で「天の魚」の引用を読み、びっくりし感動した記憶がある。

実際、この作品は想像していたよりはるかに文学的な作品だ。いい意味でも悪い意味でも。おそらく多くの人が認めているであろうように、その美しさは水俣の方言を駆使した語りの部分にある。仙助老人、坂上ゆき女、杳太郎の祖父、等の語ることばの不思議な響きと、自然に生きていた頃の回想の美しさ、切なさ。それが聞き語りではなく、ほとんどが作者の創作（患者の気持ちを忖度しての代弁）と解説（渡辺京二「石牟礼道子の世界」）で知って、びっくりするとともにさもありなんという気もした。

それに比べると地の文は時々感情過多でバランスが崩れる。ある意味でそれを救って面白い効果をあげているのは、医事報告書などの記録のかなり長い引用である。

しかし、書かれている事実は重い。この書が発表されていた昭和40年代、自分は学生だったが、その重みを強く感じていた記憶がない。つい最近、チッソの当時の社長、工場長（どちらも80歳前後だった）の刑事責任を認める判決が下った。今頃どういう意味があるのか。

この作品は、水俣病の悲惨さを伝える一方で、その美しい語りのために、現実離れしたおとぎ話、昔話の印象を与える。大体、ゆき女、仙助老人といった名づけ方自身が、そのような効果を出している。そのことは救いであり、気持ちをほっとさせるものではある

が、現実の問題を弱める面がないだろうか、という疑問も起こさせる。

D. キーン「私の好きなレコード」（中公文庫）

この2年間にキーンの本を書いたものを多く読んだ。ファンとなって、読む対象がこのような肩の凝らないものにまで及んできた。しかし、キーンの本、とくにオペラの鑑賞歴は生易しいものではない。

ところが自分はオペラ、声楽というジャンルはまったくといっていいほど避けてきた。実際、声楽のレコードは一枚も持っていない。オペラも声楽のコンサートも行ったことがない（川喜多さんのお稽古会や、フォーレ、モーツァルトのミサ曲、第9、メサイアといったものは別として）。ジャズでもボーカルは避けてきた。なぜか？人間の肉声は妙に生々しくて、音楽の純粹性とは異質とを感じる、というのが理由づけである。日本の一般的なクラシック音楽の聴き方の伝統、風土というものに影響されてもいようし、言葉の壁もあろう。

そういう自分が、オペラにほれ込んでいるキーンの本を読んでも、出てくる歌手の名前をほとんど知らず（しかもこの文章の元は1976年頃に「レコード芸術」に連載されたもので、キーンがオペラを聴き始めたのが10代、つまり1930年代だから、出てくるのはほとんどが古い歌手である）、オペラにしてもフィガロ、ドン・ジョバ

ンニ、マイスタージンガー、トゥーランドットあたりをテレビで見たことがある、という程度だから、まあちんぶんかんぶんといってもいい。それでもこの読書が大変楽しめたのは、キーンの感受性への信頼感としか言いようがない。少しヴェルディでも聴いてみるか。

猪瀬直樹「天皇の影法師」（新潮文庫）

「ミカドの肖像」と同じテーマで、同じようなアプローチを取ったものである。象徴的な、というか思わせぶりなプロローグに始まり、対応するエピローグで終わるという形式まで同一。つまりベストセラー「ミカドの肖像」を準備した先駆的な作品といえる（もとは昭和58年、朝日新聞社刊）。

例によって、いくつかの異なる話の連作という形式である。元号「光文」の誤報事件、八瀬童子、鷗外の元号考、戦後の松江騒擾事件。初めの三つは大正天皇崩御にまつわる話ということで筋の連関はあるが、最後の一つは恩赦ということで関連づけてはいるものの、かなり異質なエピソードである。そして例によって、天皇をめぐるエピソードは、恐ろしく執拗な取材と考証により、きわめてディテイルなところまで、しかもスリリングに語られるものの、天皇そのもの、つまりヒロヒトはちっとも出てこない。「ミカドの肖像」の読後感に書いたように、猪瀬の作品は「主張がストレートに伝わらない」タイプなのである。もちろんこれは意識的な手法で、

だから「影法師」という表題になっているわけだが、大宅壮一賞の評で立花隆が強く批判していたのはその手法であった。

しかしそれにしても、情報収集力のすごさはもちろん、埋もれていた題材を発掘する感覚が鋭い。八瀬童子の話は「ミカドの肖像」でも使われていたが、光文事件や元号考は、忘れられていたテーマであろう。この人は取材をチームでやっているということを誰かが書いていたが、引用文献に昭和30年ぐらいの週刊誌などまで駆使されているのには驚く。

後ろについている久世光彦の解説「鶴伝説」も、なかなか読ませる。そこにある

「私の見るところ、猪瀬直樹は恐らく鶴への憎悪から身を起こしたはずなのに、いつの間にか、手で触れているうちに鶴を愛してしまっているのである」

というところが、自分も気になる。彼の「憎悪」がストレートに語られないだけに。

ところで天皇をテーマとする猪瀬の一連の仕事は、天皇制のもつ胡散臭さを批判的な目で見ることが一つの動機となっただけではいようが、大正天皇崩御の大葬、元号問題などは、今きわめてタイムリーなものである。というのは今の天皇がもういつ死んでもおかしくないからだ。そしてそうなれば、大葬だ、即位式だ、新元号だと、大騒ぎになることは目に見えている。多分その騒ぎ方は、明治天皇や大正

天皇が死んだときの比ではあるまい。マスコミも「昭和を振り返る」など、十分の準備をすでにしていることであろう。宮内庁も準備しているだろう。

とにかくそのときは、これだけ考証をやってきた猪瀬が一躍スターになることは間違いない。大宅壮一賞を取ってもうスターかもしれないが、例えばこの間天皇が入院したそれだけで、早くも猪瀬に脚光が浴びせられたという事実もある。そのあたりの狙いが、この仕事を始める猪瀬にあったと考えるのは自然ではないか。

清水義範「国語問題必勝法」（講談社）

朝日の文芸時評で富岡多恵子が清水義範の「ワープロ爺さん」という小説と「邂逅—中年のジャック・アンド・ベティ」という小説を紹介していて、その引用が実に傑作だった。次に「群像」の500号記念号を買ったら吉川英治賞の発表が載っており、清水が新人賞を受けたことを知った。対象作品がこの「国語問題必勝法」である。

この間、三鷹のASTセミナーで話をした帰り、駅前の第九書房でこの本を見つけ、早速買った。

短編集だがどの作品にもそれぞれユニークな仕掛けがあって、それだけで感心させられる。さらにアイディア倒れにならず、読ませる作品として仕上げる筆力にも驚嘆する。僕にはとくに丸谷のパロディの「猿蟹合戦とは何か」が面白かった。「忠臣蔵とは何か」をも

じったものだが、文体、論旨の展開、実に見事に真似て、しかも単に真似る以上に、知的に面白いユニークな材料を提出している。つまり猿蟹合戦と、太宰治と、フロイト的解釈と。

これが実にもっともらしいので、丸谷自身を書いても不思議ない気がしてくる。さらに、「忠臣蔵とは何か」も、実はこんな遊びではないか、という気さえしてくるのだ。考えてみれば、これは丸谷にとって痛烈な皮肉になりうるが、清水の意図はそこにあるわけではないらしい。あとがきに、

「悪ふざけのつもりではなく、むしろ憧れの人であるからこそ真似をしたのだと・・・」

とあって、これはどうも本気らしい。文学賞選考委員の井上ひさしも

「・・・パロディがとにかく落ち入りやすいイヤラシサとは無縁であり・・・丸谷文学への明るく景気な頌歌になっている」と書いている。

他の作品もそれぞれ面白かった。自分は井上ひさしとか筒井康隆とかほとんど読んでいないが、そういう類に入るのだろうか。

木村泉「ワープロ徹底入門」（岩波新書）

われわれにとってはさほど目新しいことは書かれていないが、木村さんらしさがよく出た本である。意気込みも感じられる。

大江健三郎「懐かしい年への手紙」（講談社）

これまで大江の全作品を読んできているわけではないが、かなり忠実な読者の方である。この10年くらい、「洪水はわが魂に及び」「ピンチランナー調書」「同時代ゲーム」「『雨の木』を聴く女たち」などを、刊行されればすぐ読んできた。それ以前になると、自分は「遅れてきた」読者である。「死者の奢り」「芽むしり仔撃ち」「日常生活の冒険」「性的人間」「個人的な体験」「万延元年のフットボール」「遅れてきた青年」などを院生時代に読んだ。

こういう回想を書いてみたのも、「懐かしい年への手紙」が回顧的だからである。それはたとえば、自分の過去の作品が回顧され引用されるところに、端的に現れている。「個人的体験」以来の障害のある子供もヒカリという名前で登場するし（その弟、妹が出てくるのは初めてか）、奥さん（オユースン）、妹など総登場する（あいかわらず名前の付け方がユニークでうまい。Kちゃん、ギー兄さん、オセツちゃん、セイさん、・・・）。

他の作品を素材に使うという手法も、また用いられている。この作品ではダンテの「神曲」である。

大江の不思議なところは、このように自伝的なものを持ち込んでも私小説にならず、人の作品を持ち込んでも評論にならず、独自の想像的な小説世界を作ってしまう点である。

ずいぶん長い作品だが、構成が少しゴタゴタしているという印象がある。時間の進行があちこちに飛ぶのはそれほどうるさくないとし

ても、ギー兄さんの殺人事件のように何度も何度も前もって言及したものが実際に記述されるのがずいぶん後だったり、後ろのほうへくると、「これは初めに書いたが」といった注釈がやたらと出てきたりする。ヒカリさんが最初の方に出てきただけで、後は間接的にしか現れないのも、作者のもともとの意図とは違うのではないか。

あいかわらず性的な描写が多い。50歳を越えても（越えたからということもあるのか）性がこれだけ重要なテーマとなっていることが、不思議な気もする。

しかし、本当に重要なテーマなのか。確かに性にまつわる事件や、ちょっと異常な描写は多いが、それがもつ意味は必ずしも判然としない。ただし、そういう場面がいやだということではない。むしろ楽しんで読んだが。

後半はかなり集中して読んだが、初めのうちは少しずつしか読んでいなかったもので、イメージが希薄になっていた。それで、時々前を読み返したりした。しかしそういう読み方が向いているところもある。作者も何度も書き直しているらしいから。

川喜田二郎「続発想法」（中公新書）

KE/SE養成プログラムの開発という仕事を三菱電機情電研と始めるので、その参考にということで読んでみた。

KJ法のカードを空間配置したA型図型から文章を作るプロセスがあるが、そこでは2次元で表された構造を、直線的な文章に変換しなければならない。文章や音楽や映画のような時間的直線性を持つものと、絵画・彫刻のような空間的同時性を持つものの違い、という月並みな対比が思い浮かんだ。

文章の場合、構造を入れる工夫はいくつかある。

- 1) 章節立て
- 2) 箇条書き
- 3) 「前述の」「後述する」「x x ページにある」のような参照
- 4) 囲み欄

いずれも不十分ながら何とかしている、という工夫だろう。

プログラミング言語との類推で言えば、繰り返しと条件分岐はどうだろうか。繰り返しは詩などではよくある。最近のミステリでは、ネットワーク状に分岐する構成になっているものがあるそうだ。読者の選択によって、ストーリーの展開が変わっていく。

音楽ではソナタなどの形式、もっと簡単なカノンなどの構造がある。

以上はこの本の感想とは無縁である。連休中に大江の小説とこれを並行して読んで、同じペースで読み終えたが、ちょっと変わった読書法だったかもしれない。

小出五郎「脳 1400グラムの宇宙」(朝日選書)

著者はNHKの科学番組のディレクターで、「ザ・ブレイン」などの番組を作ったという。今、並行して吉田直哉のエッセイを読んでいるので、期せずしてNHKの人の著作を同時に読んだことになる。NHKにはなかなかの知性ある人がいる。

吉田のエッセイと違って、この本はまったく啓蒙的な内容である。脳の専門家ではないから、内容は平易。よく勉強はしているが、立花隆のような執拗さと主張はない。しいて言えば、精神分裂病に対する日本の社会認識や体制を描き、問題提起しているところに著者の意思の反映があるが、この本の主題からこの部分はかなり逸脱していることもあって、ちぐはぐな印象を与えてしまう。こちらも知識を得ることを目的として読んだので、知識の寄せ集めの本ではあるが、それなりに得るところはあった。

平井富雄の「脳と心」には、その読みにくさに辟易させられた覚えがあるので、それと比べると本書の平易さは評価できる。

吉田直哉「透きとおった迷宮」(文芸春秋社)

前の「夢うつつの図鑑」と同じスタイルで、文芸春秋に連載されたものである。

前作ほどには感心しなかったが、それでもなかなか楽しめた。そうそう無類に面白い話の種のストックはないだろうが、中ぐらいの種

は結構まだ持っているのだ。それに海外への取材，広い読書の2つが供給源になっている。大体，シーンやテーマの連想で組曲風に展開していく手法は安定してる。しかも各回の量がこれまた安定している。45分のNHK特集をきっちり作る感覚だろうか。

ベトナム難民の無残な運命やヒトラーといった強烈なテーマもあるが，そういうものもやや観照的な，カメラアイを通したような姿勢で描いているところが，読む側に好ましく思う面と物足りぬ感じとを共存させる。といっても，たとえば難民について何もしていない自分よりは，ずっと「何か」をしているわけだが。

J. McInerney, “Bright Lights, Big City”

一番の工夫は，主人公を二人称 you で一貫して呼んでいるところだろう。これまでの小説は一人称か三人称だったが，二人称というのは誰も気づかなかった。いや誰かすでにやっているかもしれないが，そうでなければなかなかの発明である。

次に面白いと思ったのは，雑誌社の Fact Verification という部署の存在である。この小説で見る限り，ずいぶん徹底したチェックをやる。こういうセクションがあるなら，作家や書き手は楽だ。日本の雑誌がこんなことをやっていることは，想像できない。しかし，小説とはいえまったくの作り話ではないだろう。

この雑誌は由緒正しいものとされているのだが（New Yorker か？），そういう有名誌ならこのくらいのことはやるのだろうか．
とにかく感心した．

小説としてはどうか．前半ぐらい，なかなか面白いと思った．スピードのある文体と巧みな人物描写（とくに Meg など）．

しかし，甘ったれた主人公だ．後半，母との対話はよくできているが，マザコンといえばマザコンである．Amanda が主人公を捨てる気持ちも分る．要するに典型的なインテリ WASP のお坊ちゃんが味わう疎外感がテーマといえる．

Antisemitism 的な描写が結構ある．黒人が出てこない．女性の上司 Clara Tillinghast の辛辣な描き方には，anti-feminism の匂いもある．こういうところが，現在のアメリカの保守的な回帰気分を表しているのかもしれない．

Amanda も中部の田舎の娘だったからうまくいかなかったので，ボストンのインテリ Vickey を対照させているのも，あまりに露骨な感じがする．

大江健三郎，井上ひさし，筒井康隆「ユートピア探し，物語探し」（岩波書店）

子供が生まれた日に読み終えた．この鼎談には，何か人生を前向きにさせる要素があると思ったが，自分の子供が生まれたという昂揚

感と重なったこともあろう。

筒井康隆「美藝公」（文春文庫）

鼎談は面白かったが、筒井の作品として初めて読んだこの小説には、それほど感心しなかった。筒井としては上等な作品ではないのかも知れぬ。しかしSFものをほとんど読んできていないせいか、アイディア、仕掛け、プロットに頼って人間を描きこまない小説には、違和感を感じる。アイディアはある程度面白いが、ユートピアとして作られた虚構から見たアンチ・ユートピアとして裏返された、実像の現代日本を批判する内容に、共感するところもありながら、賛成できかねるところも多い。とくに平等主義への批判。もっともこれはフィクションだから、批判自身もフィクションで、ある面ではその批判自身を戯画化しているのかもしれない。しかし、そうだとすると主張が不明確になってしまう。象徴的にいえば、ユートピアの生活が、女中、運転手などのついたものであるところが気に入らない。

大江と筒井が鼎談で互いに褒めあう中で、対立の一面を見せたのがフェミニズムについてであった。しかし、その論点は深く掘り下げられず、互いにむしろそれ以上触れるのを避けて、話を先に進めている。大体、あの鼎談は、丁々発止とやりあうものではなく、日本的思いやりに満ちた褒めあいでは終始する。（しかし、これは非難して言うのではなく、それだから実に実りの多い議論になっている。）

本書で筒井のアンチ・フェミニズムの言が出てくるのは、
「そこはつまり、残虐性、残酷さが幅をきかせる子供の社会と同じであり、女性の底意地の悪さで成立してる社会というわけだ。」
(p.161)

しかし、清水義範を読んで、読んだことのない筒井康隆につながるものを直感し、そのタイミングで例の鼎談を読んで面白かったので、筒井のもう少しいい作品を探して、読むべきだろう。

梅棹忠夫「情報の文明学」（中公叢書）

1963年に書いたという「情報産業論」は確かに時代を予見するものである。その25年前の論文と、今年「中央公論」に書いた2編の論文を中心に編まれた書である。25年を隔てて、両者の間に大した違いがないのは、初めの論文が進みすぎていたのか、著者の思索の展開が乏しいのか。

梅棹の本は「知的生産技術」しか読んでいなかったが、分りやすい文章を書く。短い文と短い断片の積み重ねで論文が作られる。体系的ではない。またデータや実証的な分析はなく、思弁的である。思弁的であるが哲学的ではない。現象の把握に感覚を示すもので、本質を捉えるタイプではない。データや具体的事実を使わない（図表をまったく使わない）のは、たとえば牧野昇さんと対照的。

しかし、部分部分に面白いところがある。日本的な知のあり方か。

柳田邦男「マッハの恐怖」（新潮文庫）

杉山隆男が朝日新聞の「文庫で読むこの5冊」という特集でこれを挙げ、印象的な紹介を書いていた（1987年10月29日）のが記憶にあり、たまたま本屋で目にしたときにこの本を買った。柳田をこれまで読んだことがないが、杉山の「メディアの興亡」でノンフィクションの面白さに目を向けるようになって、この柳田の原点といわれる作品に行き着いたといえる。

勝部領樹の解説に「事実以外の情報はすべて切り捨てたこの異色作」とあるが、確かにそうである反面、きわめて強い主張、すなわち木村団長による調査結果への徹底的な批判がある。

取材への執念が見事である。取材というより、柳田自身が事故原因の究明者として、事実を追いかけている。そして第4部は、フィクションのようなスリルに満ちている。

ここで取りあげられている一連の事故は、昭和41年2月～3月に起こった。ちょうど自分は大学受験のときで、鮮明な記憶がある。全日空が2月4日（金）、カナダ航空が3月4日（金）、BOACが3月5日（土）であったことを本書で確かめたが、妙なことにこの事故の報道と、ラジオのポップスのヒットチャート番組が記憶で重なる。前田武彦（まだTVで売れる前）と榊原ルミがやっていた。日本ではやっているポップスのベスト10番組で、この日付からすると、多分金曜の夜に放送していたはずだ。その中で、とくにこの一連の事故に自分の頭の中で結びついてしまっている曲は、Ventures の Paradise

a gogo である。これはボロディンのオペラ「イーゴリ公」の中の「ダッタン人の踊り」が原曲だったはず。

もう一つの記憶は、全日空の事故でなかなか遺体が上がらず、本書によれば8月になって最後に見つかった篠田さんという方がおられたが、これが妹の同級生のお父さんであったことだ。

マーク・ピーターセン「日本人の英語」（岩波新書）

藤崎さんの歓迎会で安藤さんに会ったとき、面白いと薦められた。確かに面白い。

何よりも著者が苦勞して日本語を学び、この本を日本語で書いていることが素晴らしい。そして日本語を学んだ経験が、日本人の英語を添削してきた経験と重なり合って、話が組み立てられているのが本書の最大の魅力である。

したがって、着眼点が普通の英語上達法のようなものと違う。たとえば冠詞と単数複数の話が2章から6章まで続くが、そこになるべく合理的な説明を与えようとする態度がある。on と in などの前置詞の話もきわめて有益だ。そして18章から20章で、とくに順接の接続詞にしばって論じているのが、これまた面白い。

しかし、言葉というのは難しい。たとえば理由を示す as は、since や because に比べ古めかしい表現だという。この語感は持っていなかった。同じく for は文学的なんだそう。

柳田邦男「続 マッハの恐怖」（新潮文庫）

この間、柳田邦男という作家を「発見」し、「マッハの恐怖」に書かれた飛行機事故には、個人的な記憶に結びつくものがあることを見たが、本書にはさらに別の思いがある。ここで取りあげられている日航ニューデリー事故で、栄光の同期、杉浦が死んでいるからだ。

「第二報 乗員氏名

機長・五十嵐清 昭12・11・9生 (34)

．．．

航空機関士・杉浦一成 昭22・4・29生 (25)」

ボイス・レコーダの記録では、事故8秒前に杉浦が

「ディシジョン・ハイト（進入限界高度通過）」

と冷静な声で言っている。その2秒後に機長が

「パワー、パワー！」

と叫び、そのまま墜落。

杉浦とはあまりつきあいがなかった。正直言って好きなタイプではなかった。服部が少しつきあっていて、服部の家で会ったこともある。服部がなんで杉浦なんかとつきあっているのか、と思ったものだ。

しかし25で死んでしまい、われわれはその後、15年を生きている。杉浦の死は当時ニュースとして知っただけだったが（葬式などには出なかった）、このような記録で読むと改めてその不運さに同情を感じ

じる。そういえば松岡の結婚式に杉浦の弟が死んだ杉浦の代わりに来ていて、話をした記憶がある。

本題からそれたが、柳田の真摯な取材、記述にはつくづく頭が下がる。最近、原子力問題を中心に、改めてヒューマン・ファクターが注目され、MRI でも調査を請け負ったりしているが、柳田のような水準で考えている人間は数少ないだろう。

R.ファインマン、大貫昌子 訳「困ります、ファインマンさん」（岩波書店）

この本が、米国より先に日本で出たというのは驚きだ。前に刊行された「ご冗談でしょう、ファインマンさん」が広く迎えられたことによるという。

相変わらず痛快だ。そして訳も快調である。

内容的には、今度の本はだいぶシリアスなものがある。最初のアイリーンとの死別の話は、たんたんと書かれているが、悲しい話である。

スペース・シャトル事故調査委員会の経緯を書いたものは、この本の中で一番多くのページ数をとって、読み応えがある。最後に編者 R. レイトンが入れた「科学の価値とは何か」は、とてもよい編集の選択で、ファインマンの良心がうかがえる。事故調査委員会は、柳田が書くところの全日空事故の木村委員会を髣髴とさせる。

ファインマンが最高の物理学者の一人だからといって、事故調査で本当に手腕を発揮できたのか疑問のところもあるが（柳田の本の山名委員の話などをみると、事故調査の専門性というのは高度なレベルのものが求められるようだ）、その情熱的な態度と、自説を通す信念は、やはり意義の深いものだったろうと想像される。

新井満「尋ね人の時間」（芥川賞）

芥川賞の受賞作を読むときの楽しみのかかなりの部分は、委員の選評にある、普通の文芸誌に作品が載るときは評などはつかないのだから、芥川賞ならではの。しかも評者は当代一流。といっても最近メンバーがずいぶん変わった。

で、今度も、先に選評を読んでしまった。これは作品を読む上でバイアスになる。たとえば

吉行「2章3章の出来栄はずいぶん良くて、この二つの章だけでも、作品として成立する。蠟石で白い線を引いてゆく少女、郷里の古井戸の記憶、その他いろいろと輝く細部があった。」

水上「とりわけて「井戸」はいい。紋白蝶がくっきりうかびあがってくる。だが圭子という女がどうもはつきりせぬ。」

黒井「別れた妻との間の子供であれ、主人公自身の幼年時代であれ、総じて子供のいるカードには澄んだ哀しみが湛えられているのに対し、大人の男女の関係を示すカードとなると俄かに色彩の薄くなる印象を否めない。とりわけ、主人公の性的不能の描き方には最後まで疑問が残った。」

いずれも、読後に自分が感じたこととぴったり符合するが、それは事前にこれらの評を読んでいたからではないかという疑念は強い。別にそれで構わぬのだが。

柳田邦男「マリコ」（新潮文庫）

柳田の作品としては、どちらかというとな失敗作ではないか。といっても実は「マッハの恐怖」とその「続」しか読んでいないのだが。

素材は大変面白い。それを文章化する仕方にも、もちろんそつはない。しかし、「マッハの恐怖」と同じノンフィクションといっても、事件や一つの主張、メッセージに焦点を当てるものではなく、これは一種の伝記である。そのために「マッハ」であったような取材者、分析者としての作者、柳田が前面に出てきていない。それは意識的なスタイルで

「<<これからここでの生活が始まるのだわ。ともかくすでに選択してしまったのだし、メインは意欲に燃えているから、きっと大丈夫>>マリコはそんなことを思いつつ、降りるための身支度をした。」
というように、フィクションの語り手と同じような位置に自分を置いている。どうもこれが僕の感じた違和感の一因らしい。

伝記として、誕生から現時点（執筆時の1976年）までの時間経過を、ほぼ一定のペースで記述している。この間、確かに波乱万丈ではあるが、太平洋戦争までの話と、米国に帰ってからの結婚、政治活動の話では、ずいぶん性質が異なる。どちらか一方に絞ったほう

が、テーマとして統一感があったろう。もちろんそれは同じ女性の一生の間に起こったことであり、その前半生と後半生をつなぐものがあるはずだが、そしてその点を描き出すことこそが作者のねらいのはずだが、それに成功しているとは思えない。

しかし、はたからの無責任な感想としていえば、辛かったはずの戦争の前後がマリコにとってかえって生き生きとした幸せな頃で、結婚後の条件として恵まれた時代の方が生彩がない、という印象をもつ。長男の自殺という本当の悲劇を別としても、挿入されているかなりの数の写真のうち、子供時代のマリコがとくに美しく生き生きとして見えることに、多分に影響されている面もあるが。

そういう意味では、人の一生というものを考えさせられる。

最近のニュースで、マリコの知人の日本女性の呼びかけで、マリコを日本に招き、最近の日米摩擦に関連して講演をしてもらったという話があった。

夏目漱石「吾輩は猫である」（中央公論「日本の文学12」）

大岡昇平は「猫」を10回以上読んだと言っている。「坊ちゃん」はその数倍だそうだ。僕も、最初に「吾輩は猫である」を読んだのは中1のときだと思うが、それから何度読んだろうか。

親父が、僕が高校か大学の頃、「猫」を改めて読んで読書ノートをつけていたことがある。親父がそのノートを見せてくれたのか、僕が勝手に見たのか覚えていないが、なんでいまさら漱石なのかと思ったのと、そのノートの存在で印象に残っている。

「猫」の中で、繰り返し揶揄の対象となるのは、探偵、実業家、そして女である。辛辣な中にも暖かい目があるという人はいるが、漱石の場合はまったくそういうことはない。探偵についてはかなり病的である。女については、恐妻家だった、あるいは悪妻だったという通説を納得させるものがある。実業家も徹底的に嘲罵されるが、かといって実業家とは異なる世界に住む、漱石の分身たる苦沙味、迷亭、寒月、等も、冷たく批判する眼で見られている。

形式論理学という言葉が出てきて、びっくりした。

「思うにこの両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかににかかわらず結合せられたものであろう」
（（十）の初めの方）

この両者とは「細君」と「掃除」である。そういえば、首吊りの力学もあって、寺田寅彦がエッセイで解説していたっけ。

船橋洋一「通貨烈々」（朝日新聞社）

読むのに時間がかかったのは、前の「日米経済摩擦」と共通する。この人の文は悪文というわけでは決してないが、分析的でロジカルなだけに、歯ごたえがある。

評判になった本で、内容は濃い。経済問題を政治的な面からジャーナリストの立場で追い、かつ分析評価するというアプローチは、「日米経済摩擦」と同じやり方である。日米欧、同時出版という力作だ。

夏目漱石「坊ちゃん」（中央公論「日本の文学 12」）

小学生のときに読んで以来かもしれない。

文体もストーリーも、流れが非常によい。漱石の時代に「やになる」などという表現を文章に使うのは、今の椎名誠ぐらいの感じかもしれない。

「猫」と同様、かなり酷に揶揄されるのは田舎者と中学生。「めくら」や「ちんば」なども軽蔑語としてかなり出てくる。むろん現在の差別語排斥運動などのない時代だから感覚が違うところがあるだろうが、漱石がこういう点で冷たい人間だったことは想像される。もちろん、これはフィクションだから、主人公の性格作りに必要な描写という見方もできるが、それだけではない。逆に、清に対する異常なほどの親愛感、暖かさ、優しさは、確かにフィクションを越えている。

なお、古典からこのような差別語を少なくとも今のところ削っていないのは結構だが、新仮名、新漢字にしてしまうくらいだから、今後どうなるか確かではない。

大江健三郎「新しい文学のために」（岩波新書）

「懐かしい年への手紙」の後にこれが出たので、この長編の創作過程をたどるといった形式のものかと思った。実際、

「この本を書きはじめる直前、僕は「懐かしい年への手紙」という長編を書き終えた。終始一緒に仕事をした編集者から、校正刷りを検討する段階で、次のような問いかけがあり、それを契機に、僕には新しく自分の考え方を明瞭にする、ということがあったのである。」

と始まる。しかし、

「・・・それはつまり、ひとつの小説としていま書いたばかりのことを、現に作家として生きている自分の内情を正直にさらしながら、語りなおしてゆく、ということになる。（中略）しかし僕は、ここでそれとはちがう仕方を取りたい。」

として、原理的、方法論的に語ろうとするのである。その試みは成功しているか？

「異化」「創造力」といったキーワードが丁寧に説明され、その限りでは説得性がある。しかしそれでも、これまでの「文学入門」や「文章読本」との隔たりは、それほど大きくない気がする。

大江に「小説の方法」という著作があり、この本の中でもそれに触れて、難解という批評があったと書いている。僕も昔買って少し読んだが、途中でやめた。それよりは本書ははるかに読み易い。しかも例として出てくるのが、トルストイ、ドストエフスキー、バルザ

ック、フローベルなどで、これは前著とずいぶん違う。その点が意外だったが、著者の意図がそこに読み取れる。

最後に語られる「最後の小説」の構想は、感銘を与える。

長屋宏「アレルギー」（中公新書）

中公新書の小さな本だが、なかなかの良書だった。自分の花粉症は、1972-73年頃気がついた。以来、毎年繰り返している。

著者はUCIの教授でかつ開業医でもある。アレルギーのメカニズムを非常に分りやすく説明する。そして根本的な治療法としては減感作療法しかないという。この治療法はしかし、根気の要るもので、自分としてはやる気が起こるまでには至らない。

清水義範「蕎麦ときしめん」（講談社）

前に読んだ「国語問題必勝法」と同じように、パロディや仕掛けで読ませる小説群である。ベンダサンー山本七平をパロディ化した表題作のほか、「商道を行く」「猿蟹の賦」は司馬遼太郎のパロディで、このどちらも表題作以上に出来がいい。「序文」も大変面白い着眼で楽しめる。これは何かのパロディになっているのだろうか？連想するのは安田徳太郎や一連の邪馬台国もの、あるいはもっとまともに大野晋あたりだろうか。

「群像」が500号記念として、過去の傑作を選んだ特集号をこの4月に出した。それを思い出したように時折読んでいるが、それら「純文学」の短篇と清水のものは明らかに違う。しかし純文学が知的で清水のものは娯楽と分類してよいかというと、必ずしもそうではない。むしろある面で、清水のものはより「知的」な作品である。それも単に作った面白さだけでなく、文章としての水準も高い。

立花隆「同時代を撃つ」（講談社）

週刊現代に「情報ウォッチング」として連載されているコラムの1987年1年分を集めたものである。

今年の6月ごろ、週刊現代を続けて買った。鎌田慧の「「東大卒」のそれから」という連載を読むためである。昭和45年の経済学部卒の現在を追ったもので、知った名前が出てくるのではないかと思ったが、だれも出てこなかった。それにレポートしても面白くなかった。

かわりに毎週面白く読んだのが、この立花のコラムである。その批判精神と情報収集能力には感服せざるをえない。ただ、本になったものはすでに時事としてのタイムリー性を失っているし、短文の寄せ集めを通読する意味も薄いだろうと買うのをためらった。それでも買って読み始めたら、一気に通して読んでしまった。

ジャーナリズム批判，環境，アメリカ経済政策批判，日本の政治のあり方，などが比較的多く取りあげられるテーマである．米国に対してはつきりものを言おうという態度は大前研一と一脈通じるものがあるが，その思想的立場は右と左に大きく分かれる．自分は立花に近い．

新宮家創設への批判なども，まさに同じことを当時思い，マスコミの無批判をおかしいと感じていたが，それが明快に書かれていて気持ちがいい．

大岡昇平「小説家夏目漱石」（筑摩書房）

同じ大岡の中原中也はまとまった評伝だったが，これはもとは講演の記録を集めたものであり，それだけに粗いところはある．

この本を時間をかけて読む合間に，「猫」と「坊ちゃん」を読み直した．今度気がついたことは，小学校，中学校の頃読んだこれらについてはかなり記憶があるのに，成人してから読んだ「明暗」は，いつ読んだのかさえ定かでないが，結構感心した記憶はあるのに，内容の方はさっぱり覚えていない，ということである．この論文集の一番最後にある「『明暗』の結末について」は，この本の中でも面白いものであるが，それで粗筋をよんでもまったく記憶が蘇ってこない．

清水義範「永遠のジャック&ベティ」（講談社）

「国語問題必勝法」のところで引いた富岡多恵子の書評にある「フープロ爺さん」と「ジャック&ベティ」がこれに載っている。富岡の評は好意的でよい紹介になっており、引用も適切だった。初めて全文を読んだが、その引用から想像されること以上のことがあまりなくて、かえってやや失望した感があるくらいである。富岡の評ではほかに、「冴子」についても書かれているが、これら3作品を含め、多くのものに老人を取りあげている。それについて富岡は

「『フープロ爺さん』『冴子』は高年齢者の生欲と性欲を扱いながら、これらの日常を描いていることによって、読む者を楽しませるのである。高年齢者の肉体や精神の、生欲＝性欲の疎外のなかでの異形は描かれることはあっても、日常生活が描かれることは少ない。・・・」

と書いている。自分とほぼ同世代の清水が老人を題材にコミカルな小説を描くとき、ともすれば若い漫才師が老人を揶揄する嫌味に陥りかねない。中にはかなり危ういところもあるが、大体は富岡の言うような線が出せているのは、清水の才能だろう。

この人の文章力を感じさせるのは「四畳半調理の拘泥」で、これはパロディとしてはあまりうまくないが、料理の描写力はなかなかのものだ。

John Irving, "The World According to Garp"

この小説は昔買って、200ページぐらい読んで読みさしていた。この間、TVでこれを映画化したものを深夜映画でやったので、ビデオ

にとって見た。それで改めて読み直した。

かなり奇想天外のプロットの展開なのに、妙に自伝的なのは、大江健三郎を連想させる。奇形的な登場人物、奇妙なユーモア、なども共通する。実際、大江は「小説の方法」で小説における道化師の役割を論じている。しかし、文体も含め（もっとも英語の文体を論じる資格は自分にはないが）、大江の創る世界の方がはるかに豊饒であろう。

登場人物の中の Robert Muldoon というのは、元ニュージーランドの首相の名前だ。なんでそんな名前を使ったのだろう。もっともこの本が出たのと Muldoon が首相になったのと、どっちが先だったのかという時間関係が分らない。

前に、木村泉さんがこのペーパーバックを読んでいるのを見かけたことがある。

渡辺武信「住まい方の演出」（中公新書）

この本は掘り出し物だった。本の存在は朝日新聞の書評で知った。そこで、とにかく文章がいいと褒めていた。

「住まいは人生観の一つの表現である」という。今まであまりそういう風に考えたことはなかった。一つには常に仮住まいというような意識があったと思う。しかし「仮」と思っているうちに一生は終わってしまう。

また一つには、住まいを工夫するなどは、現代の東京ではごく一部の特権階級の贅沢だという気もしていたかもしれない。確かに、この本に書いてあるようなレベルの暮らしはずいぶん贅沢なもので、そういう観点からの批判も可能だろう。しかし、ふさわしい範囲でやれることがあるのも事実である。

しかし、これは家の建て方やインテリアの工夫の仕方を解説した本ではない。それらを題材にした自由できわめて知的なエッセイ集である。こういう「知」のあり方は、たとえば伊丹十三を連想させる。さらには吉田直哉とか辻静雄。40代のうちに、いい家を作りたいと思う。建築というより住まい学（家政学の一分野だろうか）を少し勉強してみようか、という気にさせる。

國井利泰「パックス・ジャポニカ」（プレジデント社）

國井さんらしいといえはいえるが、こういう本がビジネス書として出たこと自体が面白い。何しろ出版元がプレジデント社である。ライターがいて手軽に作られた本だが（しかしライターの名前をちゃんと出しているのは良心的）、自分の生い立ち、奥さんのことなど、私的なことも述べられていて、そういうところが案外面白い。それと、國井さんの性格から、思想的には右よりで、タカ派体質でははないかと思っていたが、

「アジアからの留学生が多いのは、私に負い目があるからだ。日本は古代から、これらの国々から豊かな文化をいただいていた。それなのに、私が直接手を下したわけではないが、日本はアジアを侵略

した。8歳のとき、真実を知ってから、日本は金以外のものでも罪ほろぼしをすべきだ、と思い続けてきた。」(p.244)
などとあり、この点も見直した。

パックス・ジャポニカなどと吹いているところは賛同できないが、大学人のあり方など、今後考えるべき問題も出されている。

渡辺武信「住まい方の思想」（中公新書）

こちらが「正」で、この間読んだ「住まい方の演出」の方が「続」である。大体同じような構成、発想だが、十分楽しめた。難をいえば載っている写真のプリントの悪さである。ほとんどよく見えない。新書だとこのくらい質を落とすのか。

谷崎潤一郎「陰翳礼賛」（中公文庫）

冒頭にこうある。

「今日、普請道楽の人が純日本風の家屋を建てて住まおうとすると、電気や瓦斯や水道等の取付け方に苦心を払い、何とかしてそれらの施設が日本座敷と調和するように工夫を凝らす風があるのは、・・・」

この前に渡辺の本を読んだのは偶然だが、ちょうどよいタイミングとなった。現在、この谷崎のごとく昔の日本を懐かしむような気風が、時代にやや受け入れられつつある。それでこの作品について触れている文章を目にする機会も増えている。

かなり奇怪な意見も出てくる。たとえば日本人にも肌の白い者はかなりいるが、白人と比べればどんなに白くても白い中に微かな翳りがある。それで西洋人の中に一人でも混ざっていると、遠くからでもすぐ分る。だから日本人の先祖は、家の上下四方を仕切ってまず陰影の世界を作り、その闇の奥に女人を籠もらせて、それをこの世で一番色の白い人間と思い込んでいたのであろう、という。

あるいは、われわれ日本人は性生活において甚だ淡白な、あくどい娯楽に堪えられない人種である。その理由は日本の風土に湿気が多いからだという。

それはともかく、陰翳を尊とんだ日本の文化も、今やヨーロッパより夜の明かりを都会に限らず煌々とつけるようになってしまった、と嘆く谷崎の気持ちには共感を覚える。しかし、谷崎がこういうことを言っていた時代から、さらにまた遠く隔たってしまった。

1987年

立花隆「脳死」（中央公論社）

とても感心した。脳死についての見事な科学的解説と、脳死問題についての強い主張があり、その主張を論証する透徹した論理がある。そしてそれらを描く文章が一級品である。中央公論に掲載されているときから感心して読んでいたが、毎月買うわけではないので、早く本にならないかと思っていた。その状況は「宇宙からの帰還」と同じである。

しかし、立花が取りあげなければ、脳死などというテーマの本をあえて読む気も起こさなかったろう。

Elmore Leonard, “Glitz”

1985年にロスアンゼルスに行ったとき、行きの飛行機の中で読んだ中央公論の海外の評判ミステリ紹介の欄で、この本が1985年上半期の最大収穫として挙げられていた。それで向こうの本屋で探したが、見つからなかった。それが昨年、翻訳が出て、もとのペーパーバックも日本の本屋に置かれるようになったので、日本で買ったものだ。

歯切れのよい独特の文体である。評では Chandler とか Hemingway とかが引き合いに出されている。もっとも言語の壁で、スピード感

についていけないところがある。たとえば PR というのが Puerto Rican のことだと、ずいぶん終わりのほうで気づく始末だ。

D. キーン「碧い眼の太郎冠者」（中公文庫）

昭和30年頃、主に中央公論に載った軽い随想を集めたものである。表題が面白い。キーンの眼は碧くないのに、日本人、とくに新聞記者は、思い込みでキーンのことを「碧い眼の日本文学者」のように表現するという。そういう誤解の別の例としては、欧米でのパンは日本の米に相当するものだと思って、欧米人はパンをたくさん食べるものだと思い込んでいることなどが、挙げられている。

この間読んだ司馬とキーンの対談の文庫本は、いつ行われた対談で、いつ最初に活字になったのかまったく分からなかったが、この本は、初めに谷崎による序、終わりにキーンによる初版、再版、再々版のあとがきがあり、いずれも年が明記されていて、年代の移り変わりがよく分る。さらに丸谷の解説がつく。

この作品はキーン自身が日本語で書いている。われわれよりはるかに大量の日本文学を読んでいる人だが、時々日本語としてはおかしい表現がある。そのような例を集めると、日本語の特性を明らかにする一つの手がかりとなるかもしれない。一方、そのような表現が新しい日本語の可能性を広げるかもしれない。

著者自身が昭和47年のあとがきに書いているように、この間の日本は変わった。その47年からも15年経った。しかし、変わっていないことも多い。面白いのはたとえば、観光地の土産物屋にまったくいい面を見出せなくて嫌気がさしている心理状態の時に、しかし一般に人は過去を振り返って昔のことを決して悪く言わないから、これも30年後ならたとえばこう書くだらうと想像して、いい面を数え上げている文章である。こういう発想自身にまったく感心したが、さらに驚いたのは、その文章が書かれたまさに30年後の今読むと、きわめてもっともらしく共感を誘う点である。

とにかくキーンは鋭い観察者であるとともに、上質のユーモア感覚をもった人だ。

Tom Clancy, “The Hunt of Red October”

評判になっただけあって、よくできている。しかし船舶用語や軍事用語が分りにくく、Glitz と別の意味で読みにくかった。

坂本賢三「先端技術のゆくえ」（岩波新書）

おざなりの技術論ではない。たとえば

「歴史的存在としての技術は科学を発達させた母胎だったのであり、その逆ではなかった。」

「大学に工学部を設置したのは日本が世界で最初なのである。」

「20世紀後半以降は、日本語の「科学技術」にあたる英語として

「テクノロジー」という語が定着した。だから「ハイ・テクノロジー

ー」は実は、「高度科学技術」と訳した方が適切なのである。」

といった引用から、その非凡さがうかがえよう。牧野さんの技術論とは一味違う。なおここで、科学技術は「科学を応用した技術」ではなくて、科学と技術が一体となった現代的な概念だとしている。

3章の「技術と社会」以降は、章の表題とはややずれて一種の技術史である。グラスゴー大学と明治維新後の工学寮との関係など、歴史的事実の紹介はそれだけでも興味深い。しかし著者はここで一つの大きなパラダイム変遷観を提出している。すなわち、

「宗教、国家、経済、技術は、その順で主導権を握り、他を従として利用してきた。ただし、現在は経済が主の時代の末期であり、技術が主となるというのは予測である。」

というものである。これはかなり説得力がある。ただし、技術が主となるであろう今後の描き方は、あまり明確でない。著者としては技術が主となるのを幸福だとは考えない、むしろ人間が主となるべきだといっている。しかし技術が主人の社会がどういうもので、どういう問題があり、それに対しどうすべきかというところは、十分に論じられていない。そもそも2章の終わりで「技術は何をしないかが最大の問題」という問題意識を提出し、3章の初めを「何のための技術か」という問いで始めていながら、その後はこのパラダイムに従った技術史が中心になってやや肩透かしの感がある。

しかし、いろいろな意味で刺激を受けた。たとえば、個々の技術はまず性能の急速な向上競争の時期があり、続いて価格と信頼性の競

争になるが、それが限界に来ると次は意匠だけの問題となる。衣食住はすでに古い時期にこの段階に達し、家庭機械や自動車は今この段階にあるという。このとき、設計と意匠という本来同一の語 design が、本来の総合的な意味を取り戻すという。なるほど。ではソフトウェアは今、どの段階か。

吉田秀和「セザンヌ物語 I, II」 (中央公論社)

セザンヌはこれまでとくに好んだ画家ではない。子供の頃、親父が持っていたセザンヌの画集を見た印象は強く残っているが、美しいとか好ましいとかいう印象ではない。マルセイユに行ったとき、あの土色の山や家、陽の光を見て、セザンヌを思い出した、

吉田の文章は、かなりいい加減なところがある。たとえば

「だが、私には、近いものが小さく、遠いものが大きい、つまり、ここでは、遠近法の光学が無視され、逆手にとられていることと同じくらい重要なのは、この緑のリズムが、一つだけ奥にあることの意味である。」 (II, p.104)

もっと明らかにおかしい文例もあったはずだが、探すのが大変だ。とにかく、このように思いついたことを無造作にどんどん表現するという文体である。小林秀雄とは対照的。

全体の構成もいきあたりばったりという感じがある。もともと雑誌「海」への連載ということもあろう。初めうちはゴーギャン、ド

ガ、ゴッホの話などで、どこへ行くのだろうと戸惑う。ただ、特徴は絵を鑑るという立場に徹していることだ。人としてのセザンヌには僅かしか触れていない。これは、堀田善衛の「ゴヤ」との違いである。ゴヤがまた波乱に富んだ一生を送ったのに対し、セザンヌは比較的平坦な道を辿ったということもあろう。あるいは音楽評論家と小説家の視点の違いと見ることもできよう。著者には「調和の幻想」「トゥールーズ・ロートレック」という前作があるようで、自分が感じたままを前面に出した美術論というのが一貫したアプローチであるらしい。

セザンヌの風景画や静物画の美しさに、改めて眼を開かれたのが大きな収穫である。人物画、とくに一連の水浴図は相変わらずいいと思わないが、吉田もこれはややもてあまし気味である。

夏目漱石「それから」（中央公論「日本の文学 13」）

映画化された「それから」の一部をTVで観た。藤谷美和子が三千代をやった。

それがきっかけで昔の本を引っ張り出して読んでみた。映画で先にイメージが作られたせいもあるが、藤谷は三千代にぴったりに思える。

典型的な非行動型のインテリが、愛から行動を起こすという話である。もちろん、その行動は勇ましく華やかなものではない。むしろ

見通しの暗いものである。かといって自暴自棄とも違う。だからその結末は救いなのか絶望なのか、

読む人間によって見方が分かれよう。

海老沢泰「F1 地上の夢」（朝日新聞社）

マンションの車庫に空きができて、クルマを買えることになった。それでホンダのプレリウドの出たばかりのモデルを買うことにしたが、それに多分に影響されて、この本を買いすぐに読んだ。

われわれも分類からすればエンジニアかもしれないが、クルマのエンジニアとはまったく人種が違うという感想をもった。本田宗一郎の個性のためか、ホンダの技術者はとくに型破りだ。

われわれの仕事との連想で面白いと思ったことの一つは、エンジンの設計は一人か二三人の少人数でやることで、それもホテルや旅館に1-2週間こもって書き上げる、ということである。会社、あるいは産業の若さということで、時代の違いを感じたのは、久米（今のホンダの社長）も川本も、それぞれ若い頃、無断で1-2ヶ月会社に来なかったことがあった、ということである。「メディアの興亡」でも、日経の園城寺が30代で部長になるなど、今と違う若さと活力に満ちた時代であったことを感じさせたが。

猪瀬直樹「ミカドの肖像」（小学館）

600ページの力作である。まず、調べて書くことへの情熱に敬服する。文献考証の手法を、天皇制という政治的、社会的テーマに適用したというべきか。立花隆にしても杉山隆男にしても、現在の文筆における知的活力は、小説にではなくてノンフィクションにあるようだ。

プリンス、ミカド、天皇というキーワードで、堤康次郎、オペレッタ・ミカド、キョソーネ、志賀重昂などを徹底的に調べあげ、謎解きのスリルさえ味わせながら、恐るべき情熱で書き進む。派生するテーマにどんどんのめりこむので、全体のテーマが何であるのか見えなくしてしまう印象も与える。エピローグとその後に付けられた中村雄二郎との対話で、改めてかなり直接的に天皇制について論じている。しかし、必ずしも論点は明確に伝わってこない。立花隆のように主張をストレートに言うタイプとは、違う資質らしい。

日本人にとって、天皇制とはそれほど重要なテーマか。自己のアイデンティティに関わる問題か。知性を傾けて論ずべきチャレンジな課題か。自分にはピンとこない。自分はもし天皇制について聞かれたら、無用で廃止すればよいと答えるのみだろう。しかし、現在明らかに、天皇、皇室のタブー性は高まり、禁忌性という尺度では戦前に戻りつつある方向だろう。一方で、芸能週刊誌の格好な材料であり、その存在はタレントと同格である。ただし、芸能人はたたかれるが、皇室は常に、いやますます神聖化されている。

佐和隆光「文化としての技術」（岩波書店）

魅力的な題である。内容にはやや失望した。

坂本賢三の「先端技術のゆくえ」と一緒に買った本だが、坂本の本にはずいぶん感心したのに、この本の佐和の議論は十分深められていない、と物足りなく感じた。とくにここでの「文化」が何をイメージしているのか不明確で、議論を浅くする原因になっていると思う。最終章（「7 さて何処に」）に、

「いうまでもなく『文化』は、さまざまな側面から成りたっている。多面的な『文化』を網羅的に論ずるだけの技量も才覚も、遺憾ながらわたしは持ちあわせない。そこでわたしは、『文化』という潮の流れの方向を見定めるためのコンパス役を、経済学なり経済思想なりにゆだねることにした。」

とやや言い訳じみたことを書いている。この立場で、70年代半ばから80年代へかけての変化を、次のように捉える。

製造業 → サービス業

ケインズ主義 → 市場万能主義

進歩主義 → 保守主義

機械の論理 → 生命の論理

大きな政府 → 小さな政府

ハードな技術 → ソフトな技術

エネルギー → 情報

しかし、経済の視点での捉え方なら、この本でも引用される宮崎義一の「世界経済をどう見るか」の方がはるかに鋭く、説得力があった。しかもこれで「文化」と称するのは、やはり無理ではないか。

どうもこの本は、テーマを設定した後、著者がいろいろな本を読んで勉強した、その勉強ノートという感じを受けてしまう。とくに星野芳郎、吉川弘之、宮崎義一、など、引用されている文章の方が面白い。佐和の「経済学とは何だろうか」は昔面白く読んだ。本書はタイトルに引かれて期待しすぎたかもしれない。

T. Winograd and F. Flores, "Understanding Computers and Cognition"

序の第二段落に

"All new technologies develop within the background of tacit understanding of human nature and human work. The use of technology in turn leads to fundamental changes in what we do, and ultimately in what it is to be human. We encounter the deep questions of design when we recognize that in designing tools we are designing ways of being. By confronting these questions directly, we can develop a new background for understanding computer technology – one that can lead to important advances in the design and use of computers."

とある。テーマとて、「文化としての技術」に親和する。しかし、取り組みはずっと真剣である。

この書は単純に言えばAI批判の書である． Eliza を作った Weizenbaum が Computer Power and Human Reason を書き， Shrdlu を作った Winograd がこの本を書いた，という図式的な見方も一面可能である． かなり歯ごたえを感じたが，結論部分は今一つ迫力に欠ける気もする．

(“心にのこる1冊”，「科学」，岩波書店，Vol.76, No.5, May 2006 は別掲)

田中優子「江戸の想像力ー18世紀のメディアと表徴」(筑摩書房)

面白い本だった．とくに第2章の「連」の話がよかった．俳諧のネットワーク，源内が組織した本草学のネットワーク，狂歌連と落語，といった連である．なんと今はやりのネットワーキングという概念に見事に当てはまる．前に，山崎正和の「室町記」を読んで，今の時代にまた連歌が見直されるのではないか，という予想を書いたことがある．それが思い出された．

司馬遼太郎「菜の花の沖 (一) ～ (六) 」 (文春文庫)

さすがにクライマックスの(六)は見事である．初めは少し退屈なところもあったが，(五)あたりから俄然面白くなった．その(五)は「ロシア事情」「続・ロシア事情」という章に典型的に見られるように，小説というスタイルからはみ出している．また全体

の流れとしても、高田屋嘉兵衛を中心とする物語として進めてきたのが、視点を変えている。そのあたりから急に面白くなる。

読み初めのうちも、作品のテーマに対して小説という形式が合わないという違和感を持った。たとえばおふさとの恋は、文学的味つけとしては悪くはない。

しかし、おそらくフィクションだろうと割り切って読むと、他の部分はどうかという不確かな気持ちが湧く。森鷗外以来の問題だが、去年「渋江抽斎」などを読んだから、史伝の形式にしてくれたほうがよかったのに、という感想をもった。

五～六が著者として書きたい構想の中心で、一～四はそれまでの導入、としてしまうと導入があまりにも長すぎる。この小説全体としてのテーマは、商業、そして鎖国の時代の海運のあり方だ、と見ることもできる。その辺はやはり司馬らしく、知的興味を喚起する。さらに、松右衛門、最上徳内、近藤重蔵など魅力的な男達が描かれる。伊能忠敬、間宮林蔵なども顔を出す。

アイヌとの関係、ロシアとの関係を通して見た、日本論、日本人論としても読める。そこでの司馬の目は、実によくものが見えるところに、暖かい目でもある。

児玉幸多「日本の歴史 16 元禄時代」（中公文庫）

中央公論の「世界の歴史」が出てもう30年近くになると思うが、ソフトカバー版や文庫版を出して、いまだに売れている。「日本の歴史」はそれよりだいぶ後に出たが、これも息が長い。スタイルは同じで、一人が1冊を受けもつ。日頃地味な歴史家が、この印税でずいぶん潤ったという話もあった。「世界の歴史」など、新しい顔ぶれによる新シリーズの企画があってもよさそうだが、まだ聞かない。

この児玉の本も面白く読める。元禄文化は豪奢だが、火事と犬公方にはご免こうむりたいという印象だ。図版が多いのも楽しい。惜しむらくは図が小さい。

奈良本辰也「日本の歴史 17 町人の実力」（中公文庫）

面白いが、通史というのはどうしても明確なテーマがなく、広く浅くなる。吉宗、白石から田沼の時代で、後半は田中優子の本と時代的にまったく重なる。

一つの感想は、われわれは当然のことながら、現代の経済理解の眼で見、評価するということである。過去に田沼意次がひどく評判が悪く、現代では評価が高いのも、当然のことであろう。

それにしても、安藤昌益とか三浦梅園とか、ユニークな人がいたものだ。

山下竹二「株式市場の科学」（中公新書）

仕事の関連（証券会社のプロジェクト）で読んでみたのだが、よく書かれた本である。株価理論の変遷、日米株式市場の違いなど、改めて認識を深めた。

下田博次「霞ヶ関のハイテク国家戦略」(PHP)

郵政省、通産省の情報政策の話である。どちらかというとも郵政省に焦点を当て急速に政策官庁化したもと二流官庁と、それに対抗する通産の動きを追う。

下田は、同じ情報関係を追いかけているジャーナリストの栗田昭平や那野比古などと比べ、批判精神があるのがよい。この本でもその特徴は出ている。最後に「柳川掘割物語」を取り上げ、柳川の掘割をつぶしてコンクリートでふたをする計画が市当局で実行されそうになった寸前に、一市職員の努力でその計画が破棄された話（の映画化）を書いている。それまでの話の流れとは異なり、やや唐突な感があったが、四全総が列島改造と同じ哲学でやられようとしてることへの批判のまくらとなっている。この辺の着眼がよいところである。

しかし、全体には取材の突込みが不足している感がある。もっとこのような批判論に徹するか、逆に官庁の内幕（とくに省間のどろどろした争い）に集中するかした方が、面白かったろう。

神坂次郎「縛られた巨人」(新潮社)

南方熊楠の伝記であるが、とにかく面白かった。熊楠についてのこれまでの知識はきわめて少ない。安野光雅の対談集「ロジックの詩人たち」に、熊楠をテーマにした鶴見和子との対談が載っていたが、これを読んだのがこの人物の存在を知ったおそらく最初だろう。

朝日文左衛門の日記で当てた神坂は、またまた格好な題材を掘り出した。なにしろ学者としての業績の偉大さの上に、その破天荒な行動は、大衆文学から出発しているらしいこの作家にとって、実にぴったりのテーマである。しかも同じ和歌山の出らしい。

熊楠の無類に痛快な行動を追って、神坂の筆はしばしば通俗に陥る間際まで走る。しかし、これは熊楠本人が自ら書き残したものの書きぶりの反映でもあるらしい。めちゃくちゃに酒を呑んでの行動は文左衛門と共通するところもあるが、むしろ昨年読んだフラインマンの自伝をしばしば連想した。

司馬遼太郎の「坂の上の雲」は、少なくとも当初の構想としては、同級生である秋山真之と正岡子規の人生を対比させるという意図があった。この本を読んで、大学予備門で、熊楠が子規、漱石、さらに山田美妙と同級であったことを知った。天才が集まっていたものだ。もっとも熊楠は中退しているが。

現在、熊楠の名はそう一般に知られていないから、生前は無名であったのかと思うとそうでもない。孫文、柳田国男などともつきあい

がある。今の天皇も話を聞きにわざわざ和歌山まで行って、熊楠を感激させている。

熊楠の書くものは性的な話題も多く、猥雑さへの忌避感がない。ところが本人の性生活は、あれだけ奔放に米、欧で行動してきたのに、40で結婚するまで女を知らなかったという。奇跡のようだ。しかもそれを正直に書いているところがおかしい。さらに一発で子供ができたという。

神社分祀令のことも、これで初めて知った（例の対談にも出ていたが、まったく忘れていた）。明治初めの廃仏毀釈といい、ずいぶんめちゃくちゃなことをやってきたものだ。これが現在の無計画な伝統破壊、環境破壊につながっているのだ。

椎名誠「活字のサーカス」（岩波新書）

岩波の「図書」に連載されたときの第1回をたまたま読んでいて、それが旅に出るときにどんな本を持っていくかを決める楽しみという、実に共感できる話だったので好い印象をもっていた。だから、新書になってすぐ買ってみた。

椎名は、軽薄体のスタイルという見かけによらず、骨太のものをもっている人だということが分った。たとえば、インドの話、日本人のおせっかいと役人の危険回避の話など。

しかし、この本は一種の読書論だが、ここに登場する本でこれはずいぶん読みたいという気にさせられたものは、案外少ない。

野田正彰「コンピュータ新人類の研究」（文芸春秋）

金子郁容がネットワーキングとやらで「エコノミスト」に連載するが、半分は野田という人と交替でやると昔言っていた。その野田氏の書いた分が評判になって本にもなり、ついに大宅壮一賞まで取った。

ハッカー達をフィールド調査の手法で生態観測し、新人類ぶりを研究しようとするもので、意図は面白いし、インタビューの結果はよくまとめてある。しかも著者は精神分析医で、そういう観点から面白い見方が出されているところもある。しかし思ったほどには感心しなかった。

取りあげられたハッカー達が偏っているからか、アナログとデジタルという概念を、著者がきわめて観念的に理解していると感じられるからか。女性プログラマだけはいわゆるハッカーでなく富士通の人たちを取り上げ、このタイプは20年前からいるのに、その違いを性別に帰そうとしているように見えるのも気に入らない。

しかし、調査方法として、今われわれがやっている日本語プログラミング調査の刺激とはなった。

船橋洋一「日米経済摩擦」（岩波新書）

特徴の一は、経済屋（エコノミスト）でなくジャーナリストが、ジャーナリストらしい視点で書いたということ。その二は、経済より政治に焦点が当てられていることである。もともとが「世界」に別々に載った7つの論文を経年的にまとめたもので、その間の日本と米国の政治の内幕を、かなり突っ込んで取材して書いている。その取材内容の正確さは、自分には分らない。著者の眼を信用するしかないが、かなり自信をもって書かれている。

もちろん、単に取材結果をレポートしただけのものではなく、論理的な分析がされている。これより前に、同じ岩波新書で R. ドーアの「貿易摩擦の社会学」というのを買っているが、何となく読みにくくて、読みさしにしてある。

しかし、現在の自分がこういう本を読む意味はどこにあるのか、と考えてしまう。単なる知的興味か、現代社会に生き、米国とも比較的接する機会があり、まがりなりにもビジネス社会に籍を置く身として、気にかけておくべきことか。

しかし、政治的には何らかの影響力を与える立場ではない。経済的にも影響を与えることはまずなく、影響を受けることも間接的で弱い。

まあ、そういうことを言えば、自分の読んでいる本はほとんど皆そうだ。

本間千代子「父のいる食卓」（文芸春秋）

朝日でも日経でも書評で取り上げられて、やけに褒められていた。ということでもなければ、女性が書いた食卓を巡る本など買って読みそうにない。しかも保守的な雰囲気の高い内容で（朝日の書評で褒めていたのが西部邁である）、そういう意味でもあまり進んで読みたいタイプではない。

戦前の昭和の東京の中産階級には、束の間の充実があったというのが、この本の強いメッセージで、2つの書評ともその点についての共感から書かれていた。

最近顕著な流れとして、戦後における戦前のものすべての否定に対しての反発、ということがありそうだ。あるいは単純な懐古趣味といってもよいのかもしれない。

しかし、この本では政治的、イデオロギー的な主張はまったくない。単純な戦前礼賛でももちろんなく、女中という存在に関連して、戦後の「民主化」により、そのような隷属関係におかれるものがなくなったことを喜ぶ、というくだりがある。ただし、戦前の女中についての記述は懐かしさに溢れていて、その制度にも肯定的であるかのような印象すら与えるが。

ここに描かれる中産階級の家庭は、まさに自分の父や母の家庭であったろうし、自分の子供時代にもその名残が色濃く残っていたと思

う。著者は母より少し後の世代の人である。著者のような観察眼と筆力があれば、母を含めた多くの人が、似たようなしかし独自の記録を残せるはずだ。それをたとえば自分が記録係として代わって書くのも面白いかもしれない。平凡な家の、しかし失われていく記録。そんな気にさせるのも本書のよさだろう。

全体に私小説の雰囲気がある。構成はとくに考えられておらず、脈絡のない話が続く。祖母と母の奔放な恋愛などは実に小説的なテーマだが、深くは追求されない。文章はなかなか美しい。

司馬遼太郎「アメリカ素描」（読売新聞社）

司馬が自分のテリトリーではないと思っているアメリカへ、新聞社（読売）の企画に乗って、一大決意をしていく。そして司馬流の視点で、自由にアメリカを見、論じるというところが、この本の面白さである。行ったのが昭和60年で、それが司馬にとって初めてのアメリカだったというのが驚きである。ただし、さすがというべきか、アメリカの小説やアメリカについての本は、結構読んでいるようだ。しかし、「アメリカの小説というのは、まず文章がいい」と司馬が言うとき、司馬はそれを翻訳で読んでいるのである。この旅でも、アメリカ人とのコミュニケーションは、常に通訳を介してのものである。というより、会う人が、日本や日本文学の研究者が中心で、日本語を話せない人たちは、そういう日本をよく知る人たちの紹介によって、一緒に会っている。この辺は、かえって堂々とした割り切った態度かもしれない。

前半がカリフォルニアで、後半が東海岸である。前半では、合理的な文明と不合理な文化、文化ではなく文明のアメリカと、文化のある/文化に縛られている日本やヨーロッパなどの国、という論点が主題となる。

後半には、文明・文化という論が正面には出てこないものの、前半と同様に司馬の目はアメリカにいる諸民族、たとえば黒人、ユダヤ人などに向かう。もちろん、対比としての WASP についての記述も多い。東部だからか経済的な話題も結構出てくる。

紀行文といった趣きでないところが、司馬らしい。新聞の連載だったということもあろうが、季節がいつなのかすらほとんど分らない。風景の描写も皆無に近い。いわゆる名所見物といった部分はほとんどない。意識的に人が中心なのである。

ポーツマスを訪れたところの描写は、とくに印象的である。これは日本人に向けて書かれた書だが、司馬のような立場の人間が、アメリカに対しても直接語ってくれるといいのではないだろうか。

1986年

エイミス「酒について」（講談社文庫）

この年の最初の読書がこの本だったのに、その後、慢性肝炎がはつきりして酒が飲めなくなったのは皮肉である。

森本哲郎「読書の旅 愛書家に捧ぐ」（講談社）

独歩の「武蔵野」のことが出てくる（「一冊の本」）。森本が中野で育ったため、愛着があるという。その引用中に、江戸時代の地図に「武蔵野の俤は今わづかに入間郡に残れり」と書かれたものがあり、それが独歩の探索のきっかけとなったとある。しかし、独歩は渋谷村に住み、渋谷、世田谷、中野、小金井あたりの森（!）に武蔵野を見つけているのである。そこで中学時代以来読んでいない武蔵野を読んでみた。

しかし、森本も嘆くように、東京の、日本の自然の破壊は無茶苦茶である。同書には、蘆花の「自然と人生」の逗子の記述の引用もある。そういえば「武蔵野」にも「たき火」という逗子を舞台にした小品があった。逗子はまだ変化が少ないほうかもしれない。

D. キーン、金関寿夫 訳「百代の過客 日記にみる日本人（上・下）」（朝日選書）

日本の平安から江戸までの日記を紹介，評論したものである．日記が文学としてこれほど重要な位置づけを与えられている国は他にないという．キーンの著作にはいつも感心するが，博学だけでなく日本文化の理解の仕方に暖かさがある．われわれ現代の日本人が日本の古典に接する立場は外国人のそれと共通点が多いので，分りやすいということもあるかもしれない．しかし，戦争中の日本の兵士が残した日記についての言及など，著者ならではの面白い視点がある．

少し前に，中村真一郎「色好みの構造」（岩波新書）を読んだが，平安時代の女流の日記はもちろん，鎌倉にかけての「右京大夫集」や「とはずがたり」など，本書と共通のものが取り上げられている．どちらの紹介を見ても，この2つの作品は魅力のある部分がありそうだが，まだ読んだことがない．

キーンのこの本は，英語からの翻訳であるのも面白い．翻訳と言っても，英語で出版されている形跡はない．もともと朝日新聞に掲載されたもので，連載時に英語で書いて金関が訳すという形をとっている．やはり母国語の方が書きやすいのだろうが，翻訳は当人がしっかり見ているに違いない．あるいは，こう訳されるだろうなどと想定しながら原文を書いていたのではないだろうか．しかし，日本の英文学者が英米国の読者を相手に，英文学の評論を日本語で書いて，英語に訳されて出版されるなどということがあるだろうか．

NHK特集で、中国の五台山を訪れたドキュメンタリーをやっていた。唐代に日本から渡った僧、靈仙の足跡を辿るという構成を取っている。靈仙は空海、最澄とともに遣唐使として入唐したが、他の二人が一、二年で帰国したのに対して、そのまま留まり、仏典の漢訳(!)の功績により、三蔵法師という最高位の称号を得たという。その後、仏教迫害などにより長安から五台山に移り、金閣寺、靈境寺で修行したが、謎の理由により扼殺されたという話である。テレビでは、現在その跡も分らなくなっている靈境寺を探し、それを見つけるというミステリ仕立てで、面白く見せる。

この靈仙が五台山で死ぬあたりの経緯は円仁の日記によっているが、その日記「入唐求法巡礼行記」は、本書で最初に取りあげられているものである。円仁が五台山を訪れたのは、靈仙の20年後である。

本書にはまた、「成尋阿闍梨母集」が紹介されている。これは成尋阿闍梨が五台山に行くと言い出したのを、その母が心配して世の中を恨むという話らしい。その母は実に80歳を超えており、息子はそのとき61だというのだ。

キーンは、日本では母と息子の話が多いが、ヨーロッパでは父と娘の話が圧倒的に多いという。この指摘は面白い。

山崎正和「室町記」（朝日選書）

これを読んで、連歌が復活するかもしれないと思った。タモリの「笑っていい友」は、毎回ゲストが次のゲストを決めて順繰りに呼び出すという形式にまず類似性があり、即興性、社交性、言葉の遊びという点でも共通点がある。糸井重里の萬流道場は、俳諧だろうか。

日本では芸術は孤独ではなくて、相手を意識した共同演技だという指摘は、なるほどという気もする。しかし、西行や芭蕉はどうなのか。

R. ファインマン、大貫昌子 訳「ご冗談でしょう、ファインマンさん」 (岩波書店)

実に面白い。まるで小説のような話が次から次へと出てくる。ファインマンは PSSC という物理の教科書で名前を知っているくらいだったが、Hofstadter の本に、その魅力的な横顔がときどき出てきて、興味をもっていた。しかし、これほど型破りな人物とは。

自分のこれまでの人生を、いくら面白おかしく語ったとしても、当たり前だがこの足元にも及ばない。つまり語り口の面白さも抜群だが、作り話に思えるくらい突拍子もないことを精一杯にやってきているのだ。たとえば、ブラジルでサンバ・チームに入ったり、画を描いて個展をやったり、ドラムをたたいてバレーの伴奏をしたり、ラスベガスやLAのクラブ、バーに通いつめて女の子をいろいろくどいたり、マヤの数学、天文学を解明したり、高校の教科書の審査を

したり、幻視の実験をしたり。これらを恐るべき徹底さでやる。読みながら思わず爆笑するような本は、このところ他に記憶がない。

今日は広島の実験の日。ところでファインマンはロスアラモスの実験開発に相当深く関わっている。それに対する反省は物足りない。当初乗り気でなかったとの記述がある。成功したときに、そもそもファインマンをこの計画に引きずり込んだボブ・ウィルソンが一人ふさぎこんで、「僕らはとんでもないものを造っちゃったんだ」と言った。そして、自分たちが考えるという機能をまったく停止してしまっていたのに気づいた、という記述はある。しかし広島・長崎については言及していない。この本全体のトーンとは合わないことはあるだろうが。

秋葉忠利が、広島の問題をアメリカ人がどう捉えているかという本を出したらしい。読んでみたい。

梅原猛「水底の歌（上・下）」（新潮文庫）

思ったほど楽しい本ではない。斎藤茂吉の説の痛烈な批判から始まっているが、独善的だとする茂吉説に対する自らの論証が、また独善的にみえる。大体、方法論が茂吉と同じであるばかりでなく、豊富に引用される茂吉の文体にまで、梅原の文体自体が大きな影響を受けている。本人もはしなく認めているように、強烈な茂吉の個性に大いに影響を受けて、それを武器に茂吉の学説に立ち向かっているという奇妙な図になる。茂吉が過去の人で反論しようがないだけ

に、客観的に見てアンフェアな感じを与える。さらに、茂吉だけでなく、他の学者に対する批判の言辞がやけに感情的、挑戦的である。梅原は他で、独創的な説は日本ではどうも評判が悪いというようなことを言っているが、これだけ自らが挑戦的であれば、反発も出るのは当然であろう。

文庫本で上下合わせて800ページを超えるが、かなり冗長。未整理のまま勢いに任せて書いたという本である。きれいに整理して書けば1/4ぐらいの量で十分のはずだ。

歴史上の事件の怨霊的新解釈という点では、たとえば去年読んだ、丸谷才一「忠臣蔵とは何か」に共通する。梅原のこの論が書かれたのが昭和47-48年で、48年に1冊の本として刊行されている。丸谷は当然この本や、その他一連の梅原ものを読んでいると思われるが、「忠臣蔵」では確かまったく触れていない。

丸谷の本は、文章はもちろんよく練れているが、構成、語り口ともよく整理され、簡潔である。「水底の歌」も内容的には「忠臣蔵とは何か」ぐらいの大きさの本で十分であったはずだ。文章もどちらかといえば、悪文に属する。

冗長さの大きな一因は、重複にある。たとえば引用がやたらに多いが、同じものを何度も引用する。もとが連載という事情があるだろうが。ただ、これらの引用はほとんどすべて原典を今まで読んだことがないので、僕にとっては面白いことは面白かったが。理科系の

著述では、こんなおびただしい引用は考えられないが（そもそもこんな未整理なものは出せないだろうが）、面白いことに、これらの引用文がこの本の魅力を作っているのは確かだ。

著者自身の論証も、重複して何度も繰り返される。初めは思わせぶりにチョコチョコ出し、段々ボリュームを上げ、多少の変奏を加えて、長大に繰り返す。

冗長さの別の原因として、議論が脇道に入って、それが熱を帯びて延々と続いてしまうところがある。とくに第二部の天孫降臨の話や、崇道天皇のたたりの話など。もちろん筋道として関係はあるのだが、読んでいると独立の話としてどんどん進むように見える。しかしそういう話の方が、かえって面白い。一つには茂吉や真淵批判を言うときのような力みがないからであろう。猿丸の話も面白い。

これは脇道というわけではないが、別に面白かったことに一つに、持統天皇の度重なる吉野行幸に関する話で、懐風藻にある不比等らの漢詩と、人麻呂の長歌、短歌を並べて見せたところがある。比較は内容ではなく、表記、字面である。漢詩と比べ万葉仮名表記は、確かに滑稽でみっともなく、字面としてさえない。これでは知識人が馬鹿にするのも宜なるかなという感がある。してみると、仮名というのは偉大な発明であった。もっとも人麻呂などの時代に、どういうタイミングで歌を記録したのか、やはり朗詠が主であったはずだが、文字はどの程度の役割を果たしていたのか。そこで連想だ

が、コンピュータの文字の表記、プログラムの注釈や識別子名を英語にするかローマ字表記の日本語にするか、少し昔は議論になったものである。ローマ字表記は読みにくい、洗練されていない、しかし下手な英語だとさらにまずい場合もある。そこで漢字かな入出力の発明は大きなインパクトがあった。

長大な論証が繰り返される割には、肝心なところが言い足りていないようだ。たとえば人麻呂は水刑にあったという。しかしそういう刑が存在したのか、他に例があるのか、どういう形を取るのか、ほとんど触れられていない。この死に場所と死に方が第一部のテーマであるのに、判断の主材料は、人麻呂の辞世の歌、依羅娘子の2首、丹比真人の1首、読人知らずの1首、の5首の歌である。斎藤茂吉が、これらから、とくに初めの3首から（後の2首は軽視して）、場所は大きな川の近くの岩がちな山として、かなり強引にその場所を特定した。梅原はそれを批判して、伝承通り、今は海に没した、益田市近くのもと鴨島だと言う。人麻呂の歌は山、依羅娘子の歌は川、丹比真人の歌は海、読人知らずのものは野を連想させる。茂吉は山のイメージ（とそこを流れる川）を強調し、梅原は海のイメージを強調する。山や川はどうなるのか？説明としては海に流れ込む川、その先の島としての山、ということだが、イメージ的にはどうもこれらの歌がよくつながらない。

と、この本にけしかけられて、こちらも議論を始めそうになるが、知りたいのは、この本に対する批判、論争といったその後の経過で

ある。

批判しようと思えば、このように論点はいろいろありそうである。
しかも、確かに新しい面白い着想が提出されていると思われる。

「文庫本へのあとがき」によれば、この論は一般読者に歓迎されたが、学界からは無視されたとある。そうだとすれば、面白くないことだ。これだけ好戦的に論を仕掛けられたのだから、堂々と応じる人がなかったものか。歴史、万葉学の専門家で、しかも幅広い知識を持ち文を書ける人の、これに対する批判なり自分の論なりを読みたいものだ。

言い足りていない点としてさらに重要なのは、本人も認めているが、茂吉、賀茂真淵の批判に莫大なエネルギーを費やしておきながら、新しい人麻呂像が描かれていないところである。

とにかくごちゃごちゃした本ではあったが、いろいろ刺激になるところが多く、面白い本であった。

日本経済新聞社編「ゼミナール日本経済入門」（日本経済新聞社）

去年出て、評判になった本である。

各章が、それぞれ解説、理論・歴史、統計の3つから構成されている。試みとして面白い。実際はこれらを分担して執筆しているよう

で、重複もありきれいには分かれていない。しかし、その重複は気にならず、むしろ繰り返し頭に入るという効果を生む。

井上ひさしが褒めたのでも、だいが売れたのではないだろうか。その井上の評を、しっかり宣伝に使ってモいるが。

ディネーセン「アフリカの日々」（晶文社）

Newsweek の日本語版が出だして、その創刊号だったか第2号だったかに、映画 Out of Africa の評が載っていた。そこで初めてアイザック・ディネーセンの名前を知った。記事自体、映画評というよりディネーセンの紹介的な部分が多かった。ヘミングウェイが自分がノーベル賞を取るくらいなら、別にもっとふさわしい人がいるとして、ディネーセンの名を挙げたというような話が載っていた。別のところでは、ヘミングウェイでなくフォークナーか誰かになっていた。

それで興味をもって著作を探したら、晶文社からディネーセン・コレクションとして4冊本が出ているのが分った。「アフリカ」は見つからなかったが、「七つのゴシック物語」のうちの3篇を入れた「夢見る人々」を買って読んだ。おとぎ話のような話だが、なかなか面白かった。横山貞子という人の翻訳もいいと思った。

そのうち、日本でも映画が公開されて評判になった。その割には、「アフリカの日々」の再版が書店に出るのは、かなり遅れた。晶文

社はあまり商売上手ではないとみえる。しかし、さすがにしばらくしてから、映画のスチールをカバーにあしらって再版が出た。早速買ったが積んであった。それを入院するのに持ってきた。映画の方は見損なった。

この映画の邦題が「愛と哀しみの果て」とはひどい。最近の洋画はほとんどが原題をそのまま意味不明のカタカナにしたものである。ちょっと前に、日に2本の映画を見たことがあったが、それがストレンジャー・ザン・パラダイスとスパイ・ライク・アスであった。ただし、後者の原題は Spies like us である。カタカナ化の際に、複数形は単数化するらしい。そしてたまに日本語の題名がついているかと思うと、「愛と哀しみのXXX」で、XXXのところに適当な言葉を代入するという類のものになる。邦題をつける人の思考停止としか思えない。それと比べると、Out of Africa を「アフリカの日々」としたのはうまい訳だ。

この本は、アフリカの原住民を差別する視点から書かれているのではないし、逆に植民地政策を批判するという立場から書かれているわけでもない。しかし、植民地主義がいかにアフリカの住民に対し不公正なことを行ってきたかが、かえってよく分る。作者は、冷静に黒人の立場を理解し、同情している。その同情もセンチメンタリズムを感じさせるような類のものではないところは望ましい。しかし、作者はやはり白人の立場にいる。老キナンジェイの死の間際の

頼みを断る場面，作者はその苦しみを抑制して伝えているだけに，その桎梏はよく分るが，結局白人側の論理に従うのだ．

ところどころに，本当にオヤツと思うような植民地政府による勝手な法の押しつけ（たとえば踊りの禁止といったようなもの）について述べられている．それがあまりにさりげなく書かれているので，作者はもしかするとそれらに違和感を感じていないのかとすら思えるぐらいだが，わざわざ書いているのは，一種の抗議なのだろうと思う．

動物に対する態度も，われわれの眼から見ると，原住民に対する態度と並行して，矛盾に満ちているように見える．作者が動物そしてアフリカの自然を愛していること，それが徐々に失われていくことに悲しみをもっていること，それは確かである．しかし，ライオンや野生のネコを撃つ楽しみを書いているところ，苦しみを助けるために牛やカメレオンを殺すところなどは，自分には素直に受け入れられない．

Hofstadter の Metamagical Themas にあった囚人のジレンマの cooperate と defect の話が思い出される．善意の白人達の手でアフリカの自然は破壊されたということか．

中野好夫「司馬江漢考」（新潮社）

読み始めたら面白くてやめられなくなった。一方で、読了するのが惜しいような感じを久しぶりに与える本だった。

江漢の書簡を解説したものだが、原書簡の写真や関連する画のコピーも載っており、本としての質も高い。慣れぬ候文をゆっくり読むだけでも面白い（もちろん、読めるのは活字のほうで、自筆のものは対照して眺めるだけ）。さらに中野好夫の歯切れのよい文章が、興をそそる。周到な調査と考察に基づきながら、慎重できわめて控えめな中野の物言いは、先般読んだ梅原猛とは実に対照的である。いずれも学者が自分の本来の専門外の分野における著作という共通点があるのに。

面白いことに気づいた。江漢の手紙に、しばしば相手の何月何日付の手紙をいつ受け取ったという記述がある。これが大体1-2ヶ月、長いときには半年後になっている。郵便制度のない時代だから当然なのであろう。ところで、ダーウィンは、最近何かで読んだが、出した手紙の返事を翌日もらったりしている。というのはその頃の英国における郵便は、今よりはるかにサービスがよく（人件費も安かった）、一日5-6回配達したというのである。C. Darwin, 1809-82, 司馬江漢 1747-1818。同時代人とは言えぬが。

気になるのは、最後のほうで馬詰権之助について、ふとした偶然から正体に分り、本にまとめるときにそれを書くとしながら、自分の見た限りどこにもその記述がないことである。中野としては手ぬか

りではないか。本にするときに書き加えたのは、山領宛新発見の書簡一通についてのみのように思われる。

John Irving, “Hotel New Hampshire”

入院中に外泊許可が出て、孝子と渋谷で映画 Hotel New Hampshire を見た。本はその前に買っていたが読んでいなかった。映画を見た後、原作を読んだ。

映画は原作にずいぶん忠実だった。面白いことに、本の中で、Lily の本、ということは実質的にこの小説の内容を、映画化する話が出てくる。そして Franny 自身は自分で出演する。他の役者が、モデルにちっとも合わない、などという感想を、H. N. H. の話者の John が述べる。Hofstadter が喜びそうな、自己言及の図式である。作者 John Irving も、この小説を書いているときに、おそらく映画化を意識していたろう。

小説の終わり方はちょっとおかしい。作者は明らかに、Susie を熊の恰好で誤って撃たれるようにしようとしている。しかし最後の最後で、そのような unhappy ending にするのをやめてしまった。小説の中ごろで、unhappy ending に関する話が出てくる。それがやはり自己言及的になっているのかもしれないが、中途半端な終わり方という印象はある。

外泊許可が出たときに、恵比寿を通った。地下鉄の駅を上がった角に、古本屋がある。そのシャッターに電話番号が大書してある。464-4646.

この小説で皆がウィーンに行くことになり、Frank を中心にウィーンの研究が始まる。シュニッツラーが愛人と1年間に何回セックスをしたか。464回！この数字を最初の Hotel New Hampshire にいた Max という男が覚え、それ以来、何度も小説の中で出てくる。

中野好夫の「司馬江漢考」を買ったのは、この古本屋である。

吉田直哉「夢うつつの図鑑」（文芸春秋）

文芸春秋に連載されているときに、たまに読んで感心していた。文章がうまい上に、とにかく面白い話を次々と繰り出してくる。本となったので早速買ったが、あっという間に読んでしまった。

今西錦司「ダーウィン論－土着思想からのレジスタンス」（中公新書）

病院から散歩に出て、日比谷通りを虎ノ門方面に歩いていき、どこかに本屋はないかと探した。コーヒーを飲んだところで教えてもらった所に行ってみると、小さな店で新刊と雑誌だけ、文庫すら置いていない。しかしどういうわけだか、中公新書と岩波新書だけがかかりそろっている。そこでこれを買った。

2年前に「ダーウィンに消された男」を読み、その後、スティーブン・J・グールドの「ダーウィン以来」を読んだ。しかし、進化論、とくに自然淘汰の考え方には、どうも十分に納得できない点が残る。

本書は今西が、自分の進化論の原点を「種の起源」に探すべく、原典を読んでみたということをきっかけに書かれた本である。まとめにもあるように、その目論見は当て外れに終わった。そのせいか、ダーウィンの紹介か自分の進化論の解説か、どっちつかずでどちらも不十分という感じの本である。しかしよきにつけ悪しきにつけ、今西らしさの出ている本なのだろう。もっとも今西の著作は他に読んだことがないので、想像で言うのだが。

丸谷才一「挨拶はむづかしい」（朝日新聞社）

親父が買っていたのを読んだ。丸谷が自分でしたスピーチを集めた本である。

スピーチがどうして残ったかというと、丸谷はいつの頃からかスピーチをすべて原稿用紙にあらかじめ書いて、読むことにしたからである。

自分もまねをして、今回堀君の結婚式の挨拶を、試しにノートに書いて、何回か音読してから臨んだ。時間がちょうど5分ぐらいになるのが分ってよかった。

記録して残るのも意味があろう。

丸谷才一「雁のたより」（朝日文庫）

楽しんで読んだ。これは朝日新聞に2年間（1973年から74年）に渡って書いた文芸時評を本にしたものである。1回で2篇の作品を取りあげ、2年分で48篇が対象となっている。そのうち、自分が読んだものは、安部公房の「箱男」と大江健三郎の「洪水はわが魂に及び」ぐらいである。野呂邦暢の「鳥たちの河口」は、確か芥川賞を取ったはずで、それなら読んでいると思うがあやしい。

文芸時評は、読者がむしろまだ読んでいないことを仮定しているから、このことはこの本を楽しむのに何の障碍でもない。しかし疑問に思うのは、ここに取りあげられたもので、現在文庫などで手軽に入手できるものがどのくらいあるか、ということである。おそらくきわめて少ないだろう。

この中で、中野好夫の「蘆花徳富健次郎」が評してあって、中野はさまざまな形式に優れるが、自分の才能をまるごと盛る形式を見つけていなかったのに、ついにそれを伝記という形に見つけたとある。正確には、ありあまる才能がふさわしい形式をみつけなかった例として、まず折口信夫を挙げ、小型版として神西清を挙げ、それに続けて、「いささか唐突だが」としながら中野好夫を挙げているのである。

森鷗外「渋江抽斎」（中央公論社「日本の文学 3」）

中野好夫の「司馬江漢考」がきっかけとなって、これを読んだ。中野もそのスタイルを鷗外の史伝から得ているであろう。

思いつくままの印象を書く。

この時代は、若死にが多い。抽斎が54歳で死んだとき、先に死んでいた子供が8人、残った子供が6人である。妻は二人が死別していて、五百は4人目である。幼児の死が多いが、20歳前後でも死ぬ例が結構ある。医者抽斎の家にして。

風俗で現代と最も違うのは、結婚であろう。抽斎の場合でも、離別や死別の後、次の妻を娶るまでの期間が数ヶ月ときわめて短い。見合いというより、周囲からの機械的な割り当てという感じである。比良野貞固が後添いをもらうときのエピソード。見に行った人の話で美人だということで、婚礼の日、家で待っていたらひどい不美人。見に行った男が別の女と間違えた。という話などがその典型。

しかし、概してわれわれよりもむしろ自由なのではないか、と思うくらいのところがある。いろいろな師を選んでそれにつくばかりか（現代の固定的な教育制度と比べてみよ）、藩もかなり自由に変わる。明治になってからは、保や優などが、職を変え、家を変えることの頻度たるや驚くべきものがある（維新後の社会に、維新政府外の士族の末裔として適応することの困難さの現われ、という面もあるが）。

抽斎の人間的な面は、それほど多くは語られない。むしろ生彩を放つのは五百である。

巻の真ん中を過ぎたあたりで、抽斎は死んでしまって、後は経年的にその遺族のその後が語られる。それも事実の列記という部分が多い。とにかく、全体に登場する人名の数は膨大。データベース化してみると面白かろう。偏執的なまでに、各人の生没年その他の履歴の正確な記載に努めている。

中に、時々フランス語の語句が、あまり必要性もなく現れるのはなぜだろう。鴎外がドイツ語でなくなぜフランス語を、という疑問と、漢文脈をひく簡素な口語体の文章に、なぜ異質の語をとくに意味があるとも思われないところで挿入するのか、という疑問である。

丸谷才一「食通知ったかぶり」（文春文庫）

石川淳の序がすごい。

本体の方はいつもの丸谷の筆で、とくにエッセイなどで得意のくだけた文体で、面白く読ませる。ただ、今ひとつの物足りなさもある。どだいこういうものは、本人が「カンピ」でいい目を見ているので、どうしたって読者はしゃくにさわる。それを文章力だけで読ませるには限界がある（本人は恰好の文章の練習台として書いたといっている）。

丸谷は明らかに料理に詳しくはない。だから、文芸時評のようなわけにはいかない。山本益博とは違う。それはそれでよい。しかしこの種の本は、第一に情報に価値が求められよう。つまりこちらが店を選ぶ上での参考資料として役に立つか、ということである。その点が心もとない。まあ、ここに載っているような高級店に行く可能性が乏しいということで、むしろこっちの問題か。

しかし、何よりの不満は酒への批評である。丸谷も相当な呑ん兵衛らしく、どこへ行っても必ず酒に触れているのはよいが（現在の禁酒の身では、実は苦行でもあるが）、価値基準は単純に甘いのはダメ、辛いのがいいの一辺倒で、菊正などで悦にいつているのは情けない。料理への鑑賞眼もそんなものなのではないか、と疑われる。酒田というところに生まれながら「上喜元」などのよい酒を知らないのだろうか。

山崎正和「鷗外 闘う家長」（新潮文庫）

「・・・なのであって」といった山崎正和調も、慣れてくると違和感は薄れる。

主題は「父」という概念で捉えられた鷗外である。「父」の一つは国家あるいは政治との関係で、その点が漱石や荷風と対比される。もう一つはもちろん、家における立場である。

論証は鋭い。一見、かっちりしたロジックの積み上げで構成されているようだ。たとえば丸谷の批評などと比べても、レトリックに頼る部分は少ない。しかし、もちろん純粹のロジックではない。論理のあやを一つ一つ解きほぐせば、抽象論理学とはかけ離れてしまう。実際、同じ論法で逆の結論が出せそうなところはいくらもある。たとえば、p.173あたり。鷗外は健康であったがゆえに、肉体には無関心で、だから外界に対してあれだけ視覚的に鋭くありえた、というロジック。すぐあとの、ものを選びとれない人間は、またものを容易に捨てられない人間になる、というロジック。運動神経がよかったから、会話能力もたけていた、というロジック、など。いずれも話の流れによっては、逆の結論を出しうるものであろう。そこを納得させてしまうのが文章の力といえは力だが、自然科学の人間から見れば、怖いところでもある。

しかし、このあたりの視覚と聴覚の対比、運動神経といった話は、演劇畑の山崎の得意とするところがよく現れている。そういえば「演技する精神」は2/3ほど読んだが、上に挙げた類のロジックの山で、かなり晦渋。うっちゃっている。

途中で、作者が鷗外をかなり突き放して見ている。鷗外に傾倒しきって論じているのとは明らかに異なる、シニカルな眼を感じた。たとえば吉野其（銀行家の）の鷗外論は、読んだことはないが、想像するに一辺倒にのめりこんでいる立場から書いているのではないか。

しかし、最後のほうで、少し印象が変わり、暖かい理解の眼を感じた。そしてあとがきを読んで、やはり山崎自身の思考、経験すなわち人生を投影して書いているのだということに、改めて気づいた。

丸谷才一「裏声で歌へ君が代」（新潮社）

昭和57年の初版第7刷という古本を恵比寿で買った。この間、古い雑誌を整理したとき、昭和57年の文芸春秋12月号が出てきて、そこに1年の書評欄総まとめとして、いろいろな人にベスト5を挙げさせているのを見た。この年は、矢野暢の「劇場国家日本」とこの丸谷の本が出た年で、どちらかを挙げている人が何人かいたが、大げさに言えば国家論のはやった年ということになる（と2冊だけで判断するのも変だが、当時そう思った）。矢野の本はすぐ買って読んだが、丸谷の方は何となく様子を見ていた。そのうちに文庫になるだろうと思っていたが、出版社の政策かなかなか文庫にならない。かといって重版も見ない、と思っているうち、古本屋で見つけたというわけである。

さすがによくできている。文章のうまさはもちろん、話の展開も巧みで、夢の描写をシナリオ風に構成したり、手紙を入れるなど、遊びと文体の工夫がある。

しかし、箱に著者の言葉で、

「つまりこれは非政治的人間の書いた政治小説である。蝶の嫌いな男は蝶類図鑑は編まないけれど、小説家にはそんな態度は許されな

いの中から仕方がない。」

とあって、どうもその「仕方がない」という雰囲気を感じてしまう。この言はもちろん後ろ向きなものではなくて、国家というテーマを小説として消化しようという気負いのこもった、つまりアンチ私小説の気分がよく出た表明であるのだが。

長谷川慶太郎「日本はこう変わるーデフレ時代の開幕と経営戦略」(徳間書店)

テーマは、宮崎義一の「世界経済をどう見るか」と共通点が多く、それを統計的裏づけや分析なしに、一般向けに述べたという感じの本である。キーワードは、デフレ(ただし不況ではないデフレ)。

言うまでもなく宮崎の本のほうが、内容と論証で圧倒的に優れるが、ソ連や共産圏の経済の果たす役割への言及が、宮崎の本にはない部分か。

しかし、長谷川という人は勘がよい人みたいで、だから石油ショック以来急にマスコミで売れるようになったのだろう。6年前に第3次石油ショックは来ない、石油は値下がりすると予測したことを、得意げに述べているが、そういう勘のよさはこの本の中でも、現れている。たとえば、86年中に公定歩合は3%にまで下がるだろうと言って予測を的中させている部分が結構ある(これが書かれたのは、あとがきが4月だからせいぜいその時点。もっとも買ったのは9月の56刷で(よく売れていること)多少の修正をしているかもしれない

い)。ただし、土地の値上がりは東京都心部だけに限定されるという予想はどうだろうか。

牧野昇、大前研一、長谷川慶太郎と、もともと工学畑の人間が経済評論で活躍している。大来佐武郎もそうだろう。非常に現実的、タカ派的といったあたりが共通点か。

驚くのは巻末にある著書リストで、78年から本を出し始めたらしいが（その時51歳）、毎年5～6冊のペースで出している。

この本の最後に、例の「知は力なり」を、なんとデカルトの言として挙げている。

D. キーン、吉田健一 訳「日本の文学」（中公文庫）

中公文庫で300円の本だが、吉田健一訳、三島由紀夫解説という豪華なもの。昭和28年に出された「日本の文学」の他に、昭和30年前後に書かれたいくつかの短い評論が収められている。短いものの多くは、キーンが日本語で書いたもので、読み終わった解説の最後を見るまで、そのことに気づかなかったが、とくに後の2編は文体の違いを感じてしまった。しかし、それほど大きな違いではない。

「日本の文学」については、三島の言う

「詩人の魂を以って書かれた日本文学入門で、（中略）これ以上美しい本がでることはちょっと考えられない」

という言葉に尽きてしまう。この解説が、また三島らしい面白い文章である。

杉山隆男「メディアの興亡」（文芸春秋）

大宅壮一賞を取ったノンフィクションで、選考委員全員がベタ褒めしていた。700ページ近いものだが、一気に読ませる。

日経のコンピュータによる紙面作りという大プロジェクトを第一主題に、毎日の経営問題を第二主題にして、新聞業界のとくに記者以外の世界を描いている。日経、IBM、毎日というだけでも、仕事上あるいは個人的になじみのある対象である。また、ノンフィクションというジャンルは、われわれの調査ものの仕事と類似する面があり、その料理の仕方もとくと見たいというところがある。さらに、壮大なコンピュータ応用システムの開発プロセスは、当然のことながら大きな関心事である。

三島事件を枕にした書き出しからして、実に巧み。ただ、全体の構成力のある委員がずいぶん褒めていたが、もう少しすっきりできるのではないかという感想も、自分にはある。

日経と毎日とは、ある意味で成功と失敗の対比になっているわけだが、毎日がどうして泥沼に落ちこんでいったのか、そのプロセスが今ひとつよく分らない。文章も少し物足らない。俗すぎるし、9階

建てのビルの、5階のペントハウスといった言葉の誤用が気になる.

書評などで掲載されたもの

ダグラス・R・ホフスタッター／野崎昭弘，はやしはじめ，柳瀬尚紀 訳「ゲーデル,エッシャー,バッハあるいは不思議の環」（白揚社，1985）

東京大学出版会『UP』編集部 編，「東大教師が新入生にすすめる本」，東京大学出版会，2012年，p.16.

哲学や文学ならいざしらず，情報科学の分野で新入生にすすめる本として，原著が30年以上前の1979年に出版されたもの挙げるのは，やや意外に感じられるかもしれない．しかし，これは情報科学というような分野の領域をはるかに越える稀有の書である．出版当時のホフスタッターはまだ34歳で無名だったが，本書がピュリッツァー賞を一般ノンフィクション部門で受賞し，一躍スターとなった．

駒場の図書館では，これは数学一般の分類ラベルを貼られている．確かにゲーデルは数学者であり，また現代の計算機科学の基盤となる原理，概念を用意した人といえる．しかし，GEBと略称されるタイトルが示すように，美術のエッシャー，音楽のバッハが三つ巴で語られる．原著の副題は“An Eternal Golden Braid”「永遠の金の組みひも」で，ひもが三つ編みにされているイメージだが，その頭文字がEGBとなっている企みがあるので，訳書ではその語呂合わせまで含めた副題を付けるのを諦めたらしい．

三つ巴の中心を貫く概念は、「自己言及」「自己複製」「再帰」「奇妙なループ」である。バッハのカノンやフーガも、エッシャーのだまし絵も、ゲーデルの不完全性定理と同じ構造をもつものとして論じられる。全体は20章の本文と、章の間に間奏として挟まれるアキレスと亀の対話編という凝った構成である。対話編すべてにバッハの作品をもじった機智にあふれるタイトルが付けられている。

原著も翻訳も800ページ近い大著だが、無類に面白いので一気に読めるだろう。UP誌に紹介したときは「なるべくなら英語で読むとよい」と書いたが、正直に告白すると名訳として知られる日本語版をこれまで直接見たことがなかった。図書館でこれを借りてみて、その翻訳の妙にも感じ入ったところである。

トーマス・マン、高橋義孝 訳「魔の山 I, II」（新潮社版 世界文学全集 29）

「青春の一冊」（東大新聞2010年7月27日）

東京大学新聞社編，「東大教師 青春の一冊」，信山社，2013, pp. 168-170. に再録

青春時代に読んだ本の多くは小説であり、またそのかなりの部分が翻訳小説だった。もちろん、漱石、鴎外を始めとする明治以降の日本の小説も多く読んだが、当時の10代20代の人間は、おそらく現代の学生よりはるかに多く「世界文学」を読んでいたはずである。ここでいう世界文学とは、トルストイ、ドストエフスキー、スタンダ

ール、バルザック、ロマン・ロラン、プルースト、トーマス・マン、ヘルマン・ヘッセなどの19世紀から20世紀にかけての、主として西欧文学の翻訳である。

当時は各出版社が競って世界文学全集を出していた。たとえば中央公論社の「世界の文学」は、1963年から1967年にかけて刊行された。これはちょうど筆者の高校から大学の駒場時代、つまりまさに青春を過ごした時期に重なる。

それ以前から新潮社や河出書房などが、同じような翻訳全集を出しているが、これらは大正末から昭和にかけての「円本」の流れを汲むものである。つまり昭和40年代ぐらいまでは、大正以来の教養主義の流れが生きていた。その流れのせいかヨーロッパ文学が主だったが、その後、ラテンアメリカ、アジア、東欧などの翻訳も増えた。

現在、このような「世界文学全集」の出版は目立たないが、多くは文庫本で読めるはずだし、光文社がこのような「古典」の新訳を文庫本として出して話題になっているのを見ても、一定の需要はあるのだろう。

前置きが長くなったが、わが青春の一冊として挙げたいのは、トーマス・マン著、高橋義孝訳「魔の山」である。若き日にこれを読んで、とにかく圧倒された。ドイツの青年ハンス・カストルプが、いところが結核療養をしているスイスのサナトリウムを訪ね、そこに自

らも囚われの身となるとともに、謎めいた弁舌家のゼテムブリーニとか狂信的な思想家のレオ・ナフタとか、不思議なほどにハンスを魅了するショーシャ夫人とかに会い、精神の彷徨を経験する。

20世紀前半の結核は青春を襲う恐ろしい病気だったが、閉ざされたサナトリウムという日常社会とは隔絶された空間で、めくるめく体験をするのである。その舞台が、現在では世界経済フォーラムが年次総会を開くことで知られるダボスであるのも、面白い。

今読み返してみると、改めて、ヨーロッパの超一級の知性のすごさを感じる。ゼテムブリーニの口を借りて、アジアの後進性がたびたび侮蔑され、現代の目から見るとすべてがヨーロッパ中心に考えられているという限界は明白だが、この強烈な物語展開と描写を前にすると、それらの限界はむしろ作者が意図的に企んだもののようにも思えてしまう。ただ、激しく対立するゼテムブリーニとナフタも、同じヨーロッパという土俵の上で戦っているという感は強い。

物語の最後ではハンス・カストルプが戦争に行くという劇的な場面転換が起こる。ここで読者は、ハンスがダボスに入ってから後、第一次世界大戦が勃発していたことを知る。ハンスの精神の彷徨も、20世紀のヨーロッパという時代の流れから孤立したものではなかったのである。

T. Winograd and F. Flores, "Understanding Computers and Cognition"

心にのこる1冊, 「科学」, 岩波書店, Vol. 76, No. 5, May 2006, pp.541-542.

「科学」編集部編, 「科学者の本棚」, 岩波書店, 2011, pp.155-158. に再録.

俗にAI（人工知能）論争と呼ばれる論議が数十年来続いている。図式的に言えば、機械が知能を持つことは可能だとするAI派と、不可能だとするアンチAI派との争いである。AI派をさらに、機械が意識に相当するものを持ちうるとする「強いAI」の立場と、それは否定する「弱いAI」の立場とに分けることもある。

アンチAI派の代表は哲学者 H. ドレイファスである。それに対し、ほとんどのAI研究者は当然のことながらAI派であり、哲学者の一部にもAI派がいる。その中で、Eliza という有名な AI プログラムを1960年代に作った J. ワイゼンバウムがその後「転向」し、アンチAI派となって“Computer Power and Human Reason”という AI 批判の書を1976年に出したことは、この論争にさらに大きく火をつけるものとなった。

ウィノグラードとフローレスによる本書が出たのは、そのちょうど10年後の1986年、今から20年前である。本書の与えた衝撃の種類はワイゼンバウムそれと類似し、その強さははるかに上回ったと言えるかもしれない。AI研究者にとってフローレスは未知の人物であったかもしれないが、ウィノグラードはスターだった。彼が1970年代に作った研究用のAIプログラム SHRDLU は、ロボットが積み木を積

むという限定された対象領域ながら、それまでとはレベルの違う自然言語理解システムとして著名である。AIと計算機科学のメッカともいえる米国スタンフォード大学の花形教授として、“Understanding Natural Language”や“Language as a Cognitive Process: Syntax”といった自然言語処理を体系的に論じた大著も著している。しかも、本書が出版された1980年代の世の中は、「AIブーム」のさなかだった。

「心にのこる1冊」というテーマの趣旨から、多少とも私事にわたることは許されよう。当時筆者は、民間のいわゆるシンクタンクと呼ばれる企業に勤務していた。そこで折からのAIブームに乗り、マルチクライアント型のAI技術・産業調査とツール開発のプロジェクトを企画運営し、50社のクライアントを集めるという成功に恵まれた。また、国家プロジェクトとしての「第五世代コンピュータ」が1982年から10年計画でスタートし、それにも各種委員会の委員として、また開発の発注を受ける委託先として参画していた。本書の第10章は「AIの現在の動向」と題してこのAIブームに批判的な議論を展開しているだけでなく、「第五世代コンピュータシステム」という節を設けて、その記述に10ページを割いている。さらに時代背景を示せば、日本の人工知能学会が設立されたのが、本書が出版されたのと同じ1986年である。

しかし、本書は単純なAI批判の書ではない。副題が示すように、キーとなる概念の一つは、設計、デザインである。素朴なアンチAI派

はコンピュータそのものも過小評価するから、コンピュータ技術を
念頭においたシステムの設計などという行為に重点をおかないはず
である。それだけでも単純なAI批判でないことが分かる。

ただ、ここでいうデザインは、情報システムの設計よりはかなり広い
概念である。たとえば初めのほうで「設計とは理解と創造の相互
作用である」という表現がある。また、最後の結論の章では、建築
家のクリストファー・アレクサンダーの「形の合成に関するノート」
を引いて、ここでいう設計は人工物を製作する特定の方法論と
いう狭い意味ではなく、設計の理論とも言うべきものを指している
という。

そのような設計について、従来の伝統的な立場は、合理主義的なも
のであったとする。合理主義的とは、状況を明確に定義された対象
物の集まりとして表現し、その対象物の間に成り立つ法則を見つ
け、その法則を論理的に適用して取るべき手段を定めるというもの
である。合理主義に基づく方法として具体的に挙げられるのが、言
語を記号と論理に帰着させて理解する言語理論、代替的な戦略を列
挙しそれらがもたらす予想結果を比較評価する意思決定理論、外界
の認知を記号による表現と処理で説明する認知科学の3つである。
本書の中心部では、これらの伝統的な立場に対する批判が展開され
る。

批判のために動員するのが、まずハイデガーの哲学、それからマトゥラーナのオートポイエーシス、そしてサルやオースチンの言語行為論である。多くの計算機屋は、いきなりハイデガーが出てくるのでびっくりしてしまう。本書では他にも、フッサール、ウィトゲンシュタイン、ハーバーマスといった哲学者の名前が頻出する。そこがこの本の魅力であるとともに、計算機科学者にはとっつきにくさを与えるもとにもなっている。

しかし、これらを説明する本書の記述はきわめて丁寧で分かりやすい。お恥ずかしいことに、筆者はオートポイエーシスという概念を本書で初めて知ったが、よく分かった気になった。その後、マトゥラーナとヴァレラが書いたオートポイエーシスに関する本を翻訳で読んでみたが、そちらの方はかなり手ごわい。

これらの批判の上で、新たな設計についての考え方を提案している。そこでの鍵は論理としての言語でなく、行為として言語である。ウィノグラードは計算言語学を専門としたが、その立場は記号処理と論理に基づくものであった。その意味では自分自身のそれまでの研究への決別を宣言しているともいえよう。

ハイデガーの存在論やマトゥラーナのオートポイエーシスを援用して展開する議論と提言を、ここで詳しく紹介する余裕はない。最終章から若干の引用をして、気分を伝えることにしよう。

「コミュニケーションとは情報や記号を伝達するプロセスではな

く、約束 (commitment) と解釈のプロセスである。」

「設計によって創造される領域は、人々がその中で生きていく領域である。」

「われわれの行為は変化の引き金を引くが、その変化の性質はわれわれの予測や制御の及ぶ範囲にない。」

「世界はわれわれが何をなせるかを定め、またわれわれのなすことが世界を定める。」

最後になったが、共著者のフローレスについて簡単に紹介しておく。フローレスは南米のチリ人で、1970-73年のサルバドル・アジェンデ政権の下で、国営企業の重役、経済省大臣、財務省大臣を歴任した人物である。一方で、大規模プロジェクトの実際的な管理問題にサイバネティックス理論を適用して成功させるなど、理論の現実への適用に関心をもってきたという。そのような経歴のフローレスとウィノグラードという異色の組み合わせが互いの共通点を見出し、長い討議を続けてまとめたのが本書であった。出版されて20年後の今読み返してみても、その問いかけの重さは薄れていない。

Frederick P. Brooks, Jr., "Mythical Man-Months," Addison-Wesley

“20世紀の名著名論：Frederick P. Brooks, Jr.: The Mythical Man-Month: Essays on Software Engineering, 情報処理, Vol. 43, No. 12(2002), p.1394.

Frederick P. Brooks, Jr.の The Mythical Man-Month の初版は1975年に出版された。それ以来広く読み継がれ、1995年には20周年記念版が出された。今読むならこれが手に入りやすい上、元の版の15章全体を再録しただけでなく、新たに4章が加えられていてお徳用である。もちろん、元の15章に対して、現時点で省みて直接手を入れるという愚は犯していない。

加えられた4章のうちの1つは、1986年にIFIPの論文として出されこれまた大変有名になった、No Silver Bullet である。しかし、The Mythical Man-Month（以下では Brooks に倣ってMM-Mと略記）にしても No Silver Bullet（同じくNSBと略記）にしても、題名のつけ方が実にうまい。そのインパクトがあまりに強いために、とくにNSBなど中身をろくろく読まないで反論する向きもあったくらいである。MM-M は Man-Month に Mammoth がかけてあるらしい。ただ本文では、大規模ソフトウェア開発を直接マンモスになぞらえているわけではなく、その第1章ではむしろマンモスなどの巨獣ですらはまると脱け出せないタール坑を、巨大開発プロジェクトが陥る泥沼にたとえている。

MM-Mが出版されたのは1975年であるが、その内容はさらに遡ること10年、1960年代中頃のIBMにおけるOS/360の開発をプロジェクトリーダーとして取り仕切った Brooks の経験に基づいている。50年のコンピュータの歴史の中では比較的初期のプロジェクト開発の経

験から生まれた本書が、なぜこれほど息の長い読まれ方をしているのだろうか。

Brooks 自身はそれについて、技術でなくチームや組織という人間関係を題材とした話なので、不変性があるのだろうと解釈している。確かに

「遅れているソフトウェア開発に人を追加投入すると、さらに遅れる」

とか

「人が2番目に設計を担当するシステム開発は、過剰設計に陥る危険がもっとも高い」

といった本書を有名にした箴言の数々は、技術よりも組織や人間的要素に関するものである。これらの教訓がいまだに有効であるということは、実際にはそれらが活かされていない開発組織やプロジェクトが今でも多いということでもある。

優れた思想は時代に先行し、予見的である。

「初めの設計は捨てるつもりで計画を立てよ。どうせ捨てることになるのだから」

という教訓は、1980年代前半に大きな話題となったラピッド・プロトタイピングを先取りしている。

重要な用語としてしばしば登場する「アーキテクチャ」は、それから20年以上経た1990年代後半に、ソフトウェア工学の世界で改めて強調され多くの論文が書かれた。MM-Mにおけるアーキテクチャ

は要求仕様に近い概念で、現在言われるソフトウェア・アーキテクチャとはその意味づけに若干のずれがあるとしても、MM-Mにおける用法を現在の文脈においてみてもそれほど違和感はない。あるいはハードウェアとソフトウェアの設計、またソフトウェアのアーキテクチャ設計と実装はかなりの部分並行に進めることができるという主張も、その後の「並行開発 (concurrent engineering)」を先取りするものである。

さらに「小さくシャープなチームが最善である」、「2人チームで一方がリーダーという形が能力を最高に発揮させることが多い」などは、最近の「極端プログラミング (extreme programming)」につながるものであろう。

実証的なデータで、しかも無味乾燥なものでなく面白い数値がたくさん挙げられているのも、MM-Mの大きな特徴である。きちんとした計測データがない場合には見当をつけてみよというのが Brooks の主張で、たとえば同じ機能のプログラムを大きなシステムのコンポーネントとするには3倍の労力が要り、さらに製品にするにはその3倍の労力がかかるという「推測」は、その後多くの人に引用された。

しかし本書の魅力は何といっても、その知性にあふれた文章にある。聖書やヨーロッパの古典的教養を踏まえつつ、質のよいユーモアを湛えた文章を読む楽しみを味わわせてくれる。

Richard P. Gabriel, Patterns of Software: Tales from the Software Community, Oxford University Press, 1996.

”書評 “Patterns of Software: Tales from Software Community””, コンピュータソフトウェア, Vol.17, No.1 (2000), pp.95-96.

1980年代前半にAIがブームとなった。本書の著者 Richard Gabriel が Lucid という Lisp の会社を作ったのが1984年で、まさにブームが頂点に達しようという時である。評者は Gabriel に面識があるとは言えないが、1984年にテキサス州オースチンで開かれた AAAI とそれに先行する Lisp Conference に出席しており、そこでの彼の活躍振りは印象に残っている。また、1985年には AI 状況を調査するために米国を訪れ、Lucid も訪問した。その時、多分 Gabriel に会っているはずだが、あまり記憶に残っていない。

その Gabriel が魅力的な本を出した。といっても2～3年前だが、日本ではこれまであまり話題になっていないようなので、書評で取り上げるのも意味があるかもしれない。

本書はもともと Journal of Object-Oriented Programming に連載されたエッセイを集めたもので、それを5つの章に編んでいる。しかし第3章はきわめて短く、4章と5章は連続しているので、全体は大きく3つの部分からなると考えてよい。1つ目はパターンの話、2つ

目は Lisp を初めとする言語の話で、最後が自らの半生を振り返る伝記的な部分である。

本の表題ともなっているパターンの話は、もちろんソフトウェアにおけるパターンを対象としたものだが、Gabrielによる Christopher Alexander の徹底的な紹介ともいえる。Alexander は今や、計算機科学者の中でもっとも有名な建築家である。オブジェクト指向の設計パターンを推進する人たちが大いに持ち上げたが、それ以前にもたとえば Tom DeMarco が Peopleware (1987) で取り上げている。ここでは

「建築家であり哲学者でもある Christopher Alexander は設計プロセスについての深い考察でよく知られる。その概念は建築学の言葉で語られるが、その思想は建築分野をはるかに超えて広く影響を与えている。」

と紹介されている。ところが面白いことに、DeMarco はソフトウェアの設計プロセスの話で Alexander を引き合いに出しているのではない。ソフトウェア開発者の作業場の設計というまさに建築の土俵で Alexander の著作から縦横に引用し、写真まで転載している。おそらく DeMarco とてソフトウェア設計との類比を意識しなかったわけではなかろうが、あえて控えたものであろう。

このように Alexander は有名ではあるが、ソフトウェアをやっている人たちでその本をちゃんと読んだことがあるのはどのくらいいるのだろうか。恥ずかしながら、評者もほとんどまともには読んでい

ない。パターン屋さん達が書いたものから得る間接的で断片的な知識では、Alexander のすごさは今一つピンと来なかった。Gabriel は Alexander を徹底的に読み込んで、丁寧に紹介してくれるので、初めてある程度分かった気になった。普通、ソフトウェアの世界で参照されるのは、A Pattern Language や The Timeless Way of Building などの Alexander の70年代後半の著作であり思想である。Gabriel はさらに進んで、現実の建築でこれらの方法があまりうまくいかなかったことを Alexander が認め、失敗の要因を色々と考察している80年代の著作にまで及ぶ。さらに1993年に出た絨毯の模様に関する本まで詳しく論じている。

しかし、この本の序として Alexander 自身が書いていることを読むと、さらに驚く。Alexander は Gabriel と面識がない。しかし、Journal of Object-Oriented Programming に載った Gabriel のエッセイを人から勧められて読んで、建築家仲間よりはるかに進んだ理解をしていることにまず驚いたという。しかし、本当にすごいのはこの後である。Gabriel がこの本で紹介した時代よりさらに後で、Alexander は自分の考えに基づく建築に「成功」してきており、問題は解決されたというのである。そして、そのことは間もなく出版されるNotes of Orderという本に詳述されるという。（この本は本稿執筆の時点（1999年3月）にはまだ出版されていないが、The Nature of Order と改題されて Oxford University Press から、何と4巻本として1999年中に出版予定である。原稿を読んだ人の書評を見ると、今世紀の掉尾を飾る重要な書という。宣伝臭も感じられない

ではないが、Christopher Alexander の思想を集大成した哲学的な著述のようである。) しかし、同じような解決がプログラミングでも可能であろうかという疑問を提出し、素人でよくは分からないとしながらも、かなり自信ある口ぶりで、否定的な意見を述べるのである。

次の言語の話では、Lisp と C の比較などが取り上げられる。Lisp の雄と思っていた Gabriel は、ここであっさりと Lisp の失敗を認める。Lisp の処理系を売るビジネスの失敗の経緯はもっとあとの方で詳しく出てくるし、想像もつく。しかし、ここでは言語仕様としての失敗が論じられている。議論は単に Common Lisp の言語仕様が大きくなりすぎたという単純なものではないが、言語が広く受け入れられるためには、動作モデルが単純で数学的な面倒臭さを利用者に求めない方がよいと言っている。

プログラミングだけでなく、文章術や詩作の話もある。Gabriel は自ら詩を書き、文章力を鍛錬する意識的な著述家なのである。そして詩人や作家の集まるワークショップや朗読会に出て、自らの作品を朗読したり文学談義を交わしたりしている。実際、本書の裏表紙に著者の近影が載っているが、黒い山高帽を被り、豊かな髭をたくわえ、眼鏡の奥からこちらを見ている風貌は、哲学者然としている。

最後の自伝的な話は、赤裸々で生々しく実に面白い。高校での教師による迫害、大学での遠回り、いかにスタンフォードで Ph.D をと

ったか、結婚と離婚、そして何より Lucid の設立と失敗の10年間の話はスリリングである。Gabriel のあくの強さもよく出ていて、関係者が書けばきっとまた違う話になるのではないかと想像される。実名入りでこれだけあけすけに語られると迷惑な人は多いだろうが、読む側からすれば小説のように楽しめる。

という訳で、本書はこれまで「コンピュータソフトウェア」誌の書評で取り上げられたような学術的な書物ではないが、ソフトウェアに関心のある多くの人に読まれてよい本だと思う。

今野浩「カーマーカー特許とソフトウェア」（中公新書）

（書評「今野浩著:カーマーカー特許とソフトウェアー数学は特許になるかー」, オペレーションズ・リサーチ, Vol. 41, No.6 (1996), p. 355.)

カーマーカーの出現は二重の衝撃を与えた。第一に線形計画法に革新的な解法をもたらし、単体法が40年に及んで支配した牙城を震撼させた。第二に、その解法を米国で特許申請しそれが認められたことで、アルゴリズムそのものやそれに基づくソフトウェアが特許になりうることを、世間に知らしめた。まさに、カーマーカー「事件」と呼ぶにふさわしいが、この二つの衝撃のどちらをもって事件と呼ぶかは、立場による。ORの研究界には、前者が大地震で後者は余震かも知れない。世間一般では、後者の方が大ニュースだろう。

中公新書として出版された本書は、主として後者の特許の問題を取り上げる。しかし、ニューヨークタイムズの第一面に「線形計画法の画期的な解法出現」という記事が掲載されたという書き出しに始まり、一般読者向けの線形計画法のやさしい解説を経て、カーマーカー法の登場とその後の内点法開発の研究競争という歴史ドラマの記述にも、十分な紙幅を割いている。

著者の今野浩氏は、本誌の読者には馴染み深いであろう。数理計画法分野での赫々たる業績はもちろん、「大学教授の株ゲーム」(新潮社、1989)、「キャンパスのOR」(朝倉書店、1992)など、軟らかい著作でもつとに著名である。しかし、今度は中公新書である。読者層は格段に幅広い。著者もその点を十分意識して、楽しい読み物に仕上げている。試しに小見出しをいくつか拾ってみると、「カーマーカー法登場」「もう一つのノーベル賞か」「バイカル湖の怪人ディキン」「小島軍団と主・双対内点法」「カーマーカー法上陸」「エンジニアの冒険」など。実にワクワクさせるではないか。なお、ここに登場する小島軍団とは東工大小島政和氏の率いる研究グループであり、その活躍ぶりを紹介する筆も力強い。

これを見て、どこかで目にしたことがあるぞと思われる方も多いだろう。そう、本誌38巻(1993年)の第8号から12号にかけて同じ著者が連載した「アルゴリズムと特許」が、まさにこの本のもととなっているのである。本誌の読者には、連載版と新書版とを読み比べて

みるという、いささか意地の悪い楽しみ方も可能である。もとの話の組み立てと文章の相当部分は、そのまま生かされている。

しかしもちろん、一般向けの本とするに当たり、大幅に加筆されているし、書き直されてもいる。中には、学会誌の表現の方が過激で、よりおとなしいものに変えられている例もある。例えば小見出しで、「アルゴリズム特許でK氏は金持ちになれるか」が「アルゴリズムの特許は発明者に富をもたらすか」に、「恫喝の材料に使用される危険度」が「中小ソフトウェア企業の危機」という具合に。とはいうものの、読者としてはやはり一冊の本としての独立性を尊重すべきであり、実際、改めて通読することにより得られるものは大きい。

これまで読み物としての楽しさばかり強調してきたが、この本が提起している問題はきわめて重要である。数学的方法が特許の対象でないことは世界共通の合意事項といえるのに、アルゴリズムやソフトウェアが特許の対象となりうるのか。あるいは、コンピュータが発達し普及した現代にあっては、アルゴリズムやソフトウェアがそのまま産業的な価値を持つから、特許制度や特許性の判断基準を、それに合わせて変更すべきなのか。

著者はアルゴリズム特許の是非をめぐる議論を客観的に紹介しながらも、自身の旗幟を鮮明にしている。すなわち、数学アルゴリズムを特許の対象とすることには反対という立場である。実際著者は、

日本におけるカーマーカー特許の公告（1993年9月）に対して，新規性に対する疑問などを理由に異議申立てを行なっている（本書刊行後の後日談となるが，この異議申し立ては却下された）．

また1995年3月には日米の法律家と技術者を集めて，アルゴリズムとソフトウェアの特許をめぐるシンポジウムを主催し，議論を盛り上げた．ここに集まり講演や討論を行なった人々には，アルゴリズム特許に賛成の立場のものも反対のものもいたが，法律家だけでなく技術者が多く参加したことにより，幅広い議論となったし，これまで開かれた多くの類似の会議より，特許の問題点を指摘する声が高かったと思う．このシンポジウムの顛末についても，本書の終りの方で紹介されている．

このように，一見アルゴリズム特許にまつわるドラマをノンフィクション風に語ったと見える本書は，実は真摯な問題提起の書であり，著者の熱い思いが伝わってくる書でもある．小冊であるが味読に値する．

武市正人「プログラミング言語」(岩波講座ソフトウェア科学 4)

ぶっくす「武市正人 著: プログラミング言語」, bit, Vol. 27, No.6(1995), pp. 130-131.)

なにもbitに限ったことではないが，日本の書評は概して甘口である．たまに批判めいたことを書く場合も，その表現は婉曲をきわめ

る。しかし、この本についてはそのような余分な配慮をせずともよいのは、評者にとって幸いである。文句なしに素晴らしいし、およそ情報科学を志す人、ソフトウェアに関心のある人なら、誰にでも薦められる。

この本は表題通り「プログラミング言語」を扱ったものだが、このテーマでまとまりのある1冊の本を書くのは、難題のはずである。ある特定のプログラミング言語についてなら、すでにいくらでも本がある。多様なプログラミング言語を集めて横並びに論じてみても、寄せ集めのゴツタ煮になりかねない。それらの共通項を一般化した抽象言語で議論しようにも、どのような言語要素を取り込み、どのような記法を用いるかが大きな問題だし、一方で具体的なプログラミングとの結びつきが弱くならざるをえない。

著者は見事な工夫でこの問題を解決し、一貫性のある書をなした。その方針は次のようである。プログラミング言語について説明するためのメタ言語として、プログラミング言語を用いる。これは循環的な状況を生む恐れがあるが、メタ言語として数学的に性質が明快な関数型プログラミング言語（具体的にはGofer）を採用することにより、その可能性を最小限とする。言語の説明とはその構文と意味であり、それをプログラミング言語で記述することにより、形式的で厳密な議論ができるとともに、処理系によって具体的な動作の確認もできる。これを著者は言語プログラミングと名付けてい

る。つまり抽象的な言語機能を取り扱いながら、具体的なプログラミングも学べるというわけだ。

着想はよい。それをどう実現するかが、さらに著者の腕の見せどころだ。まず、第2章で「言語プログラミング」のための言語としての Gofer を紹介している。これが簡にして要をえた解説で、関数型プログラミングには門外漢の評者にも、以降の章を理解するのに十分な基礎を与えてくれる。この説明は非形式的で、次章以降の形式的議論と対照をなし、それだけでも本書の構成を面白くしている。

第3章で、プログラミング言語を定義するとはどういうことかを、これまた簡明に、しかし適切な例によって具体的に記述した上で、構文規則と意味の定義に関数型プログラミング言語をどう用いていくかを示して、以降の記述の基本路線を明確に提示している。

第4章以降で、典型的な構文要素を順に取り上げて、構文を与え、その意味を表示的意味論に従って定めていく。取り上げられるのは、式と値、環境、代入、記憶域と変数、制御構造、継続、手続き、型づけ、データ構造（リスト、配列、直積、直和、ポインタ、関数）、型検査、閉包、単一化機構、多様型関数などである。これを一覧するだけでも、簡単なところだけで済ませてお茶を濁そうなどという意図はまったくないことが、よく分かるだろう。

とにかく表示的意味論というのとつつきにくい。しかし、本書はその難解な部分を巧みに避けている。一方で、意味論の入門書によくあるような、適用対象を式と簡単な制御文だけですませるというつまらなさからも、見事に免れている。方法としては、これらの構文要素を含む統一的な仮想的言語の仕様全体をいきなりを与えるというやり方をとっていない。それぞれの構文要素はそのつど導入定義され、説明される。評者にはこの方法も、とても読み易くてよい工夫と感じられた。

最後の第9章で、プログラムの翻訳実行までを同じ枠組みで説明している。そしてこれだけの内容をわずか220ページほどにまとめていることも、読者としてはありがたい。しかもこの短さは、面倒なところを端折ったり、形式化に徹して骨だけに削りあげたことからくるものではない。

Gofer の処理系や、本書にでてくるプログラムの入手方法まで、親切に示してある。書評の常道としては、「処理系を入手してプログラムを試してみると、さらに理解が深まろう」などというところであろうが、評者は自分でそれを実行していないので言う資格がない。むしろ Gofer を知らなかった評者でも、処理系に頼らずともプログラムがみなよく読めたということを強調しておきたい。

A. Bahrami, "Designing artificial intelligence based software," Sigma Press, Wilmslow, UK (1988) 271pp

Bookreview "Orthodox AI techniques with well chosen examples, Information and Software Technology, Vol.31, No.8 (October), 1989, p.453.

Many good textbooks on AI programming are already available, e.g., Charniak et al.'s Artificial Intelligence Programming or Abelson et al.'s Structure and interpretation of computer programs for programming and Winston's Lisp for LISP language. This book belongs to this genre, but it is unique in that the author is not an academic researcher but a practitioner (according to the profile given on the back cover) and the intended readers are PC users, not sophisticated AI machine or even Unix workstation users.

The above facts and the rather cheap appearance of this softcover book are somewhat deceptive, however, because the book describes orthodox fundamental AI technologies using well chosen examples. Covered technologies include knowledge representation (especially production systems and frames), search, inference strategies, and generate-and-test problem solving. Examples for illustrating these technologies are geometric shape recognition, intelligent database retrieval, the travelling salesman problem, and others. The examples are neither too complicated nor too simple and for each of them a full source code is given.

One of the unique features is its treatment of the fuzzy set theory, which is rarely found in mainstream AI textbooks. This book spends a whole chapter of 40 pages on the explanation of fuzzy sets and even introduces the concept of fuzzy matching in another chapter. But in the chapter of inference mechanism, Mycin-type certainty factor is introduced and its relation (or nonrelation) with fuzzy logic is not mentioned. Construction of 'fuzzy inference engine' is left to the reader as an exercise, but the reader might be bewildered.

The book is also intended as an introduction to LISP (a specific dialect, LISP 86, being used), but for inexperienced readers this tutorial chapter will be too brief, and basic concepts of LISP such as the relation of Eval and Quote or variable binding may not be well understood.

As a whole, you will find the book worth reading and it will be most effective if you can try out the example programs on your PC. But beware of misprints.

Enid Mumford & W. Bruce MacDonald, XSEL's Progress: the Journey of an Expert System, John Wiley & Sons, 1989.

書評「XSEL's Progress: The Journey of an Expert System」, 日経AI別冊, 1990年1月, pp.166-169.

デジタルエキップメント社（以下 DEC）で開発され使用されているエキスパートシステム XSEL の開発から運用に至るまでの経緯を、そのプロジェクトリーダーと、外部にあってプロジェクト・マネジメントの方法につき支援した学者とが、詳しく述べた書である。

XSEL は XCON と並び、実用的なエキスパートシステムとして名高い。その主な機能は、DEC の製品である VAX シリーズのコンピュータの販売に際し、営業担当者が顧客のニーズにあった製品の構成を決め、正しいデバイスや部品を組み合わせ、さらには顧客が予定している設置場所に合わせたレイアウトを決定する、という作業を支援するものである。その結果は見積書及び製造部門への発注書となる。従来、この発注書にミスが多発していたのを、XSEL の支援によって正確なものとすることにより、顧客への納入に手戻りがなくなるなどのサービス向上をもたらすと共に、営業員の作業負担を減らすという効果を狙っている。

XSEL に先行して開発された XCON も、やはり VAX のシステム構成を定めるものであったが（その名前も the eXpert CONfigurer からきている。なお XSEL は the eXpert SELLing assistant）、その対象は製造部門であった。顧客からの注文が営業を通して製造部門にきたところで、その組合せに問題がないかチェックし、可能な範囲で修正するというものである。したがって XSEL は XCON の前段階の処

理であり、構成に関する知識の多くは XCON のものを流用している。

本書は技術書ではない。プロジェクト・マネジメントの具体的な事例を紹介したものである。それもエキスパートシステムの開発のマネジメントというよりは（その点についてももちろん触れているが）、それをいかにユーザに受け入れさせていくかというプロセスのマネジメントと言った方がよい。

そういう視点の本というだけでも比較的珍しいが、本書をさらにユニークなものとしているのは、2人の著者の立場である。Mumford は元マンチェスタ大学のビジネススクールの教授（現名誉教授）で、現在は研究とコンサルタントとしての仕事に専念している女性研究者である。システム開発の方法論としてユーザ参加型の手法を提唱し、ETHICS と名付けて英国の企業を中心に実践も進めていると言う。DEC の部長でこのETHICSに関心をもった人があり、DEC に Mumford を呼んで話を聴いたりした後、実際のプロジェクトで実践することとなった。その1つが XSEL だった訳である。

もう1人の著者 MacDonald は、XSEL のプロジェクト・リーダーとなった人だが、その経歴が変わっている。DEC に入る前は学校の校長だったと言う。XSEL の設計は1980年に始められているが、MacDonald が XSEL のプロジェクト・マネージャとして入社したのは1981年8月で、その時点ですでに、カーネギー・メロン大学

の John McDermott のもとで進められてきた XSEL の最初のパイロットシステムは完成して、DEC に引き渡されている。MacDonald はコンピュータ科学についてもAIについてもまったくの素人であり、DECやコンピュータ・ビジネスについての知識も経験もない。そういう人間をいきなり大きなAIシステム開発のプロジェクト責任者にするのは、「（DECの）Dennis O'Connor によって始められたAI分野の斬新なリクルート戦略」の結果だと書かれているが、人材不足からきた苦肉の策といえないこともない。実際本書に率直に述べられているように、MacDonald だけでなくAIチームの他の多くのメンバーが、それまでにAIはおろかコンピュータについての経験もないまま採用されている。このような人事戦略は、日本の企業でも社内の人事としてなら珍しくないかもしれないが、後にAIで名をあげたDEC でこのような採用が行われたことは、1980年代の初頭AIがようやく産業界に浸透し始めた頃、いかに適切な人材が不足していたかを物語るものであろう。

しかし、本書の魅力の多くは、このような経歴の MacDonald が、不慣れな仕事に真剣に取り組み、その経過を自らの成長も含めて実に率直に語っているところにある。その目はなまじ長い経験を積んでいるプロジェクト・マネージャよりも新鮮であり、元学校の先生らしいきまじめなパーソナリティを自ら自然に描きだした点が共感を呼ぶ。

さらに本書に彩りを添えているのは、章毎に引用されているバニヤンの天路歷程である。XSEL開発の過程を巡礼の旅にたとえ、章の内容にふさわしい詩句を引いて単調になりがちな記述に工夫を加えている。

全体は4部14章の構成である。

第1部は“設計，参加，文化”と題され，一般論としてのシステム設計のあり方と難しさ，著者が提唱する参加型のシステム設計手法 ETHICS の概要，XSEL 開発の背景としての DEC の企業文化，が述べられている。

参加型システム設計とは，新しく開発するシステムの設計に，そのシステムの最終ユーザを参加させるという方式である。参加によってユーザはシステムへの関心を強め，完成したシステムに自分のものだと言う所有感や愛着を感じて，システムの利用度が大いに増す。また設計開発過程自身の手戻りが小さくなり，開発の生産性が上がる。その進め方を具体的な方法・手順にしたのがETHICSである。設計グループと運営委員会の設置，現状の問題分析，解決案の設定，その評価，関係する組織の変更についての判断，人の労働意欲への影響評価，などがその課題である。

この辺は常識的と言えきわめて常識的な話であるが，よく整理はされている。

第2部は“米国における XSEL の開発”と題され、おもに MacDonald 着任後の1982年以降の XSEL プロジェクトの米国での経緯を、年代記風に記している。正直なところ一般論でやや退屈であった第1部と比べ、この部に入ると俄然面白くなる。MacDonald の書きぶりが、率直だからである。たとえば XSEL のユーザ設計グループの最初の会議（1981年11月）の前日の心境を次のように書く。

「Bruce（本書で著者は自分に言及する時、常に呼び名を使っているので、本稿でも以下ではそれにしたがう）は、混乱、不安、非現実感と言った気持ちを強く抱いた。自分自身未だ XSEL がなんであるかすらよく知らないのである。（中略）翌日になっても、不安は去らなかった。営業の連中は、XSEL をセールスにはまったく役にたたないものとして拒否するかも知れない・・・」

Bruce の不安にもかかわらず、ユーザとなる営業員たちは総じて XSEL に大きな関心を示し、活発な討議が行われてプロジェクトは首尾よく滑り出す。このユーザたちが示した熱意はその後も持続し、XSEL プロジェクトを進める上での大いなる推進力となるのである。

この時点を振り返って Bruce は、熱意と期待が高かったあまり、XSEL の開発と運用の見通しが実際よりもはるかに楽観的であったことを問題点として指摘している。これは、プロジェクトを推進する熱意と裏腹の関係にある。ある程度の楽観視は必要だが、現実から遊離するのも危険である。実際、1982年2月に開かれた第2回のユー

ザ設計グループ会議の後、XSEL を全米各地の13箇所の営業所に、1982年の秋から1983年の秋にかけて配布し、運用を始めることが計画されたが、現実には1985年になって初めてワシントンとシカゴの2箇所に配備され、1986年にサンタクララに導入される、といったペースだったのである。

技術的な話題は余り登場しないが、わずかな例の1つが実行速度の問題である。1982年の初めの時点で、ユーザによるテストで指摘された大きな問題は、応答が遅すぎることであった。LISPベースのOPS5が遅いことは明らかだった。この問題は、BLISS版のOPS5の開発が成功したことでかなり改善される。

1982年の7月に、当事者たちにとっては深刻な、しかし外部からみれば喜劇的な事件が起こる。米国の営業担当副社長が、突然 XSEL をクリスマスまでに使えるようにできないかと言い出したのである。この時すでに Bruce 等は、以前の楽観的な見通しが誤りであったことに気づいており、クリスマスまでというのはとても無理だと感じる。しかし、この副社長は XSEL のスポンサーである。その場でできませんとはとても言えず、気弱く約束させられる羽目になる。

ETHICS ではプロジェクトの“チャンピオン”の存在が重要であると説いている。チャンピオンとは、金を出すだけでなく、プロジェクトを自分のものとして関心を持続し、かつプロジェクトの進捗状況

を正しく理解するような、経営者である。この副社長は資金は出したが、忙しすぎてXSELプロジェクトの進捗には関与していないため、チャンピオンの役割を果たしているとは言えない。それが突然関心を示すと、このように担当者にとっては有難迷惑な行動に出る。

XSEL の運用開始が遅れていることの原因はいくつかあるが、その1つが営業所に XSEL を運用するためのハードウェア（VAX）が設置されていないこと、またその導入の意思決定と実施に時間がかかっていることであるのは、DEC が VAX を売っている会社であるだけに面白い。結局クリスマスまでの導入という計画は実行されずに終わるが、Bruce たちはハードウェアが間に合わないことを何とか言い訳にする。Bruce は、「ソフトウェアの開発もはるかに遅れていたもので、ハードウェアが間に合わないことはかえって助かった。」とこれまた正直に述べている。そのうちに伴の副社長は別の会社に移り、この事件も1つのエピソードとして終わってしまう。

このような上司の行動に苦勞させられた経験をもつ人は、きっと多いに違いない。しかし著者も述べているように、こうした外からの目標設定が、プロジェクトを捗らせるのもまた事実である。プロジェクトの状況を理解しながら、しかも高目の目標設定をして、速やかな進捗を誘導できる指導者がいるのに越したことはない。XSEL に関しては、そのような“チャンピオン”の不在にその後ずっと Bruce は頭を悩ませることになる。

その後もいくつかの紆余曲折を経る。たとえば、DEC の別の部署で、XSEL と類似の目的の、異なるアプローチによるシステム開発が進行していることが分かったりする。しかしともかく1985年頃には、XSEL も完成の域に達し、徐々にユーザに受け入れられていく。また、そのコストダウンなどの効果も実証される。

第3部は XSEL のヨーロッパへの移植を扱っている。すでに第2部でも Bruce がヨーロッパに何度か足を運び、移植の方法についていろいろな部門と討議している経過が記されている。しかし、ヨーロッパの経過は米国と比べてはるかに障害に悩まされるものとなる。

第1に、参加型のシステム開発の裏の面が現れてくる。XSELは米国のユーザが参加するチームによって開発されたが、ヨーロッパのユーザはその時点で関与していない。この問題は参加型でなければ解決するというものではないから、参加型開発の問題点というわけではないが、参加していないグループにシステムをどう移転していくかは、常に問題である。

第2に、米国の文化とヨーロッパ文化との違いという問題がある。これは問題の分野によらず、多国籍企業に共通する課題であろう。また、文化というほどの話ではないが、同じVAXという製品に対しても米国とヨーロッパで部品の多少の違いや名称の違いなどがあり、これらも実際にはかなり大きな障害となった。

第3に、すでにヨーロッパで意思決定がされていた業務戦略との兼ね合いの問題がある。ヨーロッパでは顧客から注文を受けて営業が作成するシステム構成の誤りを訂正するために、そのチェックを専門に行う職務を独立させ、それを CTS (Configuring Technical Specialist) と呼んで営業員20人当りに1名配属する計画を進めていた。CTS の役割は XSEL と重なるために、ヨーロッパでは XSEL を営業が直接使う道具ではなく、CTS が使うものという位置づけで実験を始めた。しかし、もともと XSEL は営業の担当者が直接のユーザであることを前提に設計されている。そこに、齟齬が生じる。

このような原因により、英国で1985年に始められた実験がいったん中断されるなど、XSEL のヨーロッパへの巡礼は苦難の路を歩む。しかし、この頃すでに全世界的なAIブームになっており、XCON や XSEL は DEC の看板として有名になっている。ヨーロッパの顧客の中にも関心をもつところがあり、実は使っていませんというのでは格好がつかないという判断も働く。そこで、1986年に実験は再開され、徐々に評価されるようになる。

なお同じヨーロッパの経緯を、9-10章では Bruce が、11-12章では Enid が別々に書いている（署名はないが、内容からそう想定される）。一見重複のようだが、事実関係の記述としても補い合うところがあり、同じ事実も両者で視点が多少異なるところがあったりして面白い。

最後の第4部は、“旅から学んだもの”と題されたまとめの部分である。ここでも Bruce と Enid がそれぞれ書いている。Bruce は体験を元に、マネジメントのあり方について要領のよいまとめをしている。Enid が書いたと思われるところでは、マネジメントに関する研究書などもふんだんに引用して考察を加えている。評者の好みからいえば、Bruce の書いたものの方に真実味を感じる。

第3部までに述べられてきた後の XSEL の状況についても少し触れている。ヨーロッパでは1988年時点でまだフィールドテスト段階である。一方米国では、全ての営業所で XSEL にアクセス可能であり、4000人の営業員が使える体制ができている。しかし、そのうちの多くは使っておらず、使われている場合もかなり限定された使い方に限られているという、びっくりするほど正直な報告もされている。その理由として、教育の不足と、正確なシステム構成を作成するのがセールスの役割なのかその支援部隊の役割なのかが明確でないことをあげている。

まとめとして印象に残るのは、次の2点である。1つは、革新的な開発努力が成功するのは、対象としている問題が重大で、現状では大きな業務上の障害になっている場合だというものである。この意味で著者達は、小規模の実験的なエキスパートシステムの開発は余り高く評価していない。

もう1つは、最初のシステム稼働がかなりうまくいくことが重要だというものである。そこで次のようにいう。

「最も強力なコミュニケーション手段である噂話にとって、事故、期待はずれ、失敗という話ほど魅力的なものはないのである。」

このように、本書はシステム開発と実働化のプロセスのマネジメントについて語ったものである。それがエキスパートシステムであることによる特性はそれほど顕著ではないが、システムの利用主体や影響が及ぶ範囲が、社内のかかなり上層の力をもったレベルであること、革新的な技術開発に基づくために、先の見通しがたてにくいこと、AIということで社の内外から注目を浴びること、等が一般のシステム開発と異なる点であろう。

全体に読み易く、ケーススタディとして面白い。DEC という特定の企業の事例であるが、企業の宣伝臭がほとんど感じられないのも好感がもてる。

日本の読者としては、日本に関する記述がまったくないのが物足りない。たとえば参加型のプロジェクトの精神は、ある意味でボトムアップの意思決定や TQC のような小集団活動とつながる面があるが、それに少し触れてはいても、とくに日本型経営を引合いに出して論じたりはしていない。

XSEL にしても、ヨーロッパへの導入は論じられても日本ではどうなっているのかまったく記述がない。わずかに一般国際営業地域 (GIA, General International Sales Area) として欧米以外の地域に言及している部分があるが、それも具体的な国名としてはカナダが挙げられているのみである。

K. D. ワイズ, K. チェン, R. E. ヨークリー著, 有澤誠, 有澤博 訳「マイクロコンピュータの将来」

書評「マイコン将来像の具体的考察」 エコノミスト, 毎日新聞社, 1981年8月4日号, pp.107-108.

本書の題名からマイクロコンピュータの将来について啓蒙的に解説したものだと想像した読者は、そのかなりの歯ごたえにやや戸惑うかもしれない。本書の特徴として、第一に、マイクロコンピュータの将来を考えるのに、技術予測および技術アセスメント（訳書では技術見積もりという語をあてている）の手法を駆使するという方法をとっていること、第二に、マイクロコンピュータの適用分野として、米国の航空システムへの応用を想定するという明確な目標をおいていることの二点をあげることができる。

本書は決して専門書というわけではないが、もともと米国連邦航空管理局が民間に委託したマイクロコンピュータの米国航空システムへのインパクトを評価するという調査レポートに基づいているので、一般向けの本としてはかなり素っ気ないところがある。しかし逆に、このように具体的な視点からの分析を与えていることにより、

漠然としたマイクロコンピュータの将来像の考察より、はるかに有益な材料を読者に提供しているといえよう。

今のマイコン・ブームで関心を集めているのは、オフィス・オートメーションという語に代表されるように、マイクロコンピュータの事務処理・データ処理への適用、それも個人情報処理とでもいうべき使い方が主体であろう。航空システムへの応用となると、もちろん、空港でのデータ処理というような部分も重要ではあるが、飛行中の機上における計測制御や航空管制のような、制御用システムとしての使い方に重点がおかれる。

このように制御用にマイクロコンピュータ技術を応用する例として、われわれにより身近なものは自動車であろう。すでに、現在の自動車には相当量の小さい中規模集積回路 (SSI, MSI) からさらにマイクロコンピュータが、たとえば燃料噴射や点火の制御、あるいはドライバーへの警報システムなどに用いられている。本書でも、マイクロコンピュータを、自動車とテレビに続く二〇世紀の三大発明とする見方が紹介されているが、これもマイクロコンピュータの応用分野が、単に情報処理のみでなく計測制御等の広い分野にわたることを意識してのことであろう。

ただし、自動車への応用は、現在のところ多分にアクセサリー的な面もあるのに対し、航空機への適用はより制御の本質にかかわることが想定される。

【多岐にわたる話題】

本書は、まず第一章で、技術予測とアセスメントの方法論を簡単に紹介したあと、第二章で集積電子工学の現状について概観を与え、つづく第三章から五章で、マイクロコンピュータ・ハードウェア、周辺機器（AD-アナログ/デジタル変換器、DA変換器、センサー、ディスプレイなど）、計算機アーキテクチャーとソフトウェアそれぞれについての技術予測を行っている。

ここまでは、一般的なマイクロコンピュータ技術の予測であるが、第六章では、航空システムへの応用を前提としたうえで、計測制御分野とデータ処理分野に分けて、マイクロコンピュータ・システムの予測を行っている。以上の予測は、社会経済上の環境条件を考慮しないものであるが、第七章では米国の社会経済上の未来モデルを、成長停止型のモデルからきわめて楽観的な拡大成長型のモデルまで五通りを設定し、それらの条件下で、マイクロコンピュータ技術の進展の予測がどのような影響を受けるかが論じられる。

第八章では、この五つのうちでは中庸の資源割り当てモデルと名づけられたモデルを中心に、より客観的な条件と、より悲観的な条件をも考慮しつつ、マイクロコンピュータ技術の社会一般に及ぼすインパクトを論じ、第九章では、同じ条件下で米国航空システムへのインパクトを論じている。この第八～九章が本書の白眉といってよ

いであろう。第一〇章は、マイクロコンピュータ技術の発展に関して考えられるべき政策につき、簡潔にまとめている。

以上の簡単な内容紹介から分かるように、二四〇ページという厚みのなかで、話題は半導体、集積回路、マイクロコンピュータ、センサーや周辺機器、ソフトウェア、さらに経済社会モデルや航空学と著しく多岐にわたる。各々の記述が簡潔なだけに、索引のほかに巻末に設けられた技術用語集という工夫があっても、すべてについて細部まで追うことはなかなか困難かもしれない。しかし、訳者もすすめているように、読者それぞれの興味に応じて、その人なりの読み方ができる本であろう。

このように、話題が広範囲にわたること、また、技師予測という本書の性格から訳書の出版が遅れては意味が薄れるため、訳業が急がれたであろうこと（原書は一九八〇年出版）を考えると、訳者の苦労は十分に想像できる。全体によい訳と思われるが、比較的簡単な誤植に類するミスが散見されるのは、ただでさえあまり読みやすいとはいえない本書にとって、多少気になるところである。